

斜里町

カモイベツ遺跡

—一般国道334号斜里町日の出事故対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和元年度

公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター



1 遺跡全景



2 調査状況(オホーツク文化期)



1 焼土と周辺の遺物(F-61付近・続縄文時代)



2 貝・骨ブロック(SB-4・アイヌ文化期)



1 竪穴住居跡群 (オホーツク文化期)



2 土坑墓 (GP-3・続縄文時代)



3 土坑墓上層の人骨 (GP-4・続縄文時代)



4 石組炉 (SF-7・続縄文時代)



5 集石土坑 (PS-26・続縄文時代)



1 土器（縄文・続縄文・オホーツク式）



2 土坑墓出土のガラス玉(GP-4)



3 骨角器（貝・骨ブロック）



4 金属製品

例 言

1. 本書は、国土交通省北海道開発局網走開発建設部が行う国道改良事業に伴う斜里町カモイベツ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。調査は、公益財団法人北海道埋蔵文化財センターが平成29（2017）年に測量調査、平成30（2018）年に発掘調査を実施した。また斜里町教育委員会が平成20・21・23・24（2008・2009・2011・2012）年に発掘調査を実施した。本報告は、斜里町教育委員会が実施した分を含め、当センターがまとめて作成した。
 2. 整理作業の担当は、笠原興・阿部明義・山中文雄・直江康雄である。
 3. 本書の執筆は、笠原・影浦覚・阿部・直江が行い、編集は阿部が担当した。また斜里町教育委員会調査分については、調査概要報告書や図面・写真などをもとに阿部が記載した。
 4. 現場写真撮影は笠原・阿部・直江、遺物写真撮影は第1調査部第1調査課 中山昭大が行った。
 5. 石器などの石材鑑定は直江が行い、第1調査部普及活用課 立田理の助言・協力を得た。また木製品・材・金属製品（一部除く）の保存処理は第1調査部第1調査課 三浦正人が行い、田口尚の協力を得た。非鉄金属製品の蛍光X線分析について、第1調査部普及活用課 柳瀬由佳の協力を得た。動物遺存体・骨角器の分類は、東海大学 内山幸子氏の指導の下行い、第1調査部第2調査課 土肥研晶・福井淳一の助言・協力を得た。
 6. 各種分析・鑑定・保存処理は下記に委託・依頼した。
 - 黒曜石原材産地分析：(株)パレオ・ラボ（2018年）
 - 金属製品保存処理：パリノ・サーヴェイ株式会社（2018年）
 - ガラス玉・石製品分析：函館工業高等専門学校 竹内孝・中村和之（2011年）
 - 動物遺存体同定：東海大学 内山幸子（2019年）
 - 国立歴史民俗博物館 上奈穂美、北海道大学総合博物館 江田真毅（2008年）
 - 炭化木片樹種同定：(株)加速器分析研究所（2018年）
 - 炭化種実同定：パリノ・サーヴェイ株式会社（2019年）
 - 放射性炭素¹⁴C年代測定：(株)パレオ・ラボ（2008～2012年）、(株)加速器分析研究所（2018年）
 - 火山灰同定：(株)アースサイエンス（2018年）
 - 地形・地質解析：(株)アースサイエンス（2012年）※Ⅱ章に成果を反映して記載
 7. 赤色顔料分析について、地方独立行政法人北海道立総合研究機構 環境・地質研究本部地質研究所より分析データの提供を受けた。
 8. 調査にあたって、下記の諸機関および個人よりご指導、ご協力をいただいた（順不同・敬称略）。
 - 北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課
 - 斜里町教育委員会 松田功、平河内毅、斜里町 金盛典夫、合地信生
 - 羅臼町教育委員会 天方博章、根室市教育委員会 猪熊樹人
 - 北海道博物館 右代啓視、鈴木琢也、北海道大学 箕島栄紀、
 - 東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究所実習施設 熊木俊朗
- ※そのほか2008年調査時の協力者（斜里町教育委員会2009より記載）
- 石田肇、池田永寿、宇田川洋、加藤春雄、北野博司、国木田大、榊田朋広、佐藤孝雄、佐藤宏之、ジェイムス・テイラー、角達之助、瀬下直人、高橋健、高橋光永、武田修、福田正宏、福田岬子、松村愉文、本吉春雄、涌坂周一

記号等の説明

1. 遺構は、以下の記号によって表記し、発掘調査順に番号を付した。なお2008～2012年調査における遺構名（**号址、PIT**など）を新遺構名に変換した上で、それに続く番号を2018年度の遺構名に付した。

「H」：住居跡

「HP」：住居跡の土坑・柱穴状小土坑 「HF」：住居跡の炉・焼土

「HS」：住居跡の礫集中

「GP」：土坑墓 「P」：土坑 「PS」：集石を伴う土坑（集石土坑）

「SP」：柱穴状小土坑 「F」：焼土 「SB」：貝・骨ブロック

「FC」：フレイクチップ集中 「S」：礫集中

2. 遺構図には方位記号を付した。2018年発掘区の基線（北-南、数字のライン）は真北に対し26°12'西偏している。レベルは標高（単位m）を示す。
3. 遺構の規模は、「確認面での長軸×短軸/底面での長軸×短軸/厚さ（深さ）」の順で記した。一部破壊されているものや不明確なものについては、現存長を「()」で、不明のものは「-」で示した。
4. 掲載した遺構図等の縮尺は原則的に以下のとおりとした。また変則的なものについても随時スケールを入れている。

遺構実測図 1：40

遺物出土分布図 1：100 遺物出土詳細図 1：20

土器実測図・拓影図 1：4

剥片石器実測図 1：2 礫石器実測図 1：4（一部の大型石器等は1：6）

土製品・石製品・骨角器等 1：2 鉄製品 1：4～1：2

5. 石器実測図中で、敲打痕は∨_∨、すり痕は|←———|で範囲を表した。
6. 遺物写真の縮尺は原則的に以下のとおりである。

土器・礫石器 約1：4 鉄製品 約1：3 剥片石器・石製品・骨角器等 約1：2

7. 出土遺物分布図等での表示は、遺物の種類別に略記号やシンボルマークで示した。

●：土器（・貝-アイヌ文化期） ▲：剥片石器 ■：礫・礫石器

★：金属製品 ×：骨

8. 土層の混合状態を表現するために、以下のように表記してある。

A+B：AとBが同量混じる。 A≐B：AとBの土層が類似する。

A>B：AにBが少量混じる。 A≫B：AにBが微量混じる。

9. 土層の色調には『新版標準土色帖』30版（小山・竹原2008）を使用し、カラーチャートの番号を付したものがあ。また、土層の記述には下記の記号・略称を用いた場合がある。

T a - a：樽前 a 降下火山灰

K o - c₂：駒ヶ岳 c₂降下火山灰

M a - b 5：摩周 b 5 テフラ

目 次

口絵

例言・記号等の説明

目次・挿図目次・表目次・写真図版目次

I 章 緒 言

1	調査要項	1
2	調査体制	1
3	調査に至る経緯	4
4	遺構・遺物の分類・名称	5
	(1) 遺構 (2) 土器等 (3) 石器等 (4) その他の遺物	
5	調査結果の概要	7

II 章 遺跡の環境

1	遺跡の立地と環境	9
	(1) 遺跡の位置と地名 (2) 地形と地質 (3) 自然環境	
2	調査区の土層と砂丘列	11
	(1) カモイバツ周辺の砂丘列と基本土層 (2) 各砂丘列の土層堆積状況	
3	歴史的環境	17
	(1) 概要 (2) 周辺の遺跡	

III 章 2017・2018年の調査と出土遺物

1	調査の概要	21
	(1) 調査の方法と経過 (2) 発掘区の設定 (3) 土層 (4) 整理作業の方法 (5) 調査結果の概要	
2	遺構の調査とその遺物	31
a	縄文時代の遺構	31
	(1) 住居跡 (2) 土坑 (3) 柱穴状小土坑 (4) 焼土 (5) フレイクチップ集中	
b	オホーツク文化期の遺構	43
	(1) 竪穴跡 (2) 集石土坑 (3) 礫集中 (4) フレイクチップ集中	
c	アイヌ文化期の遺構	52
	(1) 貝・骨ブロック (2) 柱穴状小土坑 (3) 礫集中	
3	包含層出土の遺物	66
	(1) 遺物出土状況 (2) 土器 (3) 石器等 (4) 鉄製品 (5) 加工痕ある骨片 (6) その他	

IV 章 2008年の調査と出土遺物

1	調査の概要	97
	(1) 調査の方法と経過 (2) 発掘区の設定 (3) 土層 (4) 調査結果の概要	
2	遺構の調査とその遺物	104
a	縄文時代の遺構	104
	(1) 竪穴住居跡	

b	続縄文時代の遺構	108
	(1) 竪穴住居跡 (2) 柱穴列 (3) 土坑墓 (4) 土坑 (5) 集石を伴う土坑 (6) 石組炉 (7) 礫集中 (8) ベンガラ製作址	
c	オホーツク文化期の遺構	132
	(1) 竪穴住居跡 (2) 土坑墓 (3) 集石を伴う土坑 (4) 石組炉 (5) 焼土	
3	包含層出土の遺物	164
	(1) 土器 (2) 石器等	
V章 2009年の調査と出土遺物		
1	調査の概要	185
	(1) 調査の方法と経過 (2) 発掘区の設定 (3) 土層 (4) 調査結果の概要	
2	遺構の調査とその遺物	190
a	縄文時代の遺構	190
	(1) 焼土	
b	続縄文時代の遺構	190
	(1) 石組炉	
3	包含層出土の遺物	192
	(1) 土器 (2) 石器等	
VI章 2011年の調査と出土遺物		
1	A地区の調査の概要	199
	(1) 調査の方法と経過 (2) 発掘区の設定 (3) 土層 (4) 調査結果の概要	
2	A地区の遺構の調査	205
a	縄文時代の遺構	205
	(1) 土坑 (2) 柱穴状小土坑 (3) フレイクチップ集中	
3	A地区の包含層出土の遺物	205
	(1) 土器 (2) 石器等 (3) 金属製品・木製品	
4	B地区の調査の概要	210
	(1) 調査の方法と経過 (2) 発掘区の設定 (3) 土層 (4) 調査結果の概要	
5	B地区の遺構の調査とその遺物	215
a	続縄文時代の遺構	215
	(1) 土坑墓 (2) 土坑 (3) 集石土坑 (4) 小土坑 (5) 石組炉 (6) 焼土 (7) 礫集中 (8) フレイクチップ集中 (9) 土器埋設遺構 (10) ベンガラ集中 (11) 「廃棄場」	
b	アイヌ文化期の遺構	239
	(1) 柱穴状小土坑	
6	B地区の包含層出土の遺物	240
	(1) 土器 (2) 石器等	
VII章 2012年の調査と出土遺物		
1	調査の概要	253
	(1) 調査の方法と経過 (2) 発掘区の設定 (3) 土層 (4) 調査結果の概要	
2	遺構の調査とその遺物	259
a	続縄文時代の遺構	259
	(1) 土坑 (2) 集石を伴う土坑 (3) 柱穴状小土坑 (4) 石組炉 (5) 焼土	

(6) 礫集中 (7) フレイクチップ集中 (8) 土器埋設遺構 (9) ベンガラ集中	
b オホーツク文化期の遺構	282
(1) 土坑 (2) 柱穴状小土坑 (3) 焼土	
3 包含層出土の遺物	285
(1) 土器等 (2) 石器等 (3) 骨角器 (4) 旧河道出土の材・木片	
Ⅷ章 自然科学的分析・鑑定	
1 カモイベツ遺跡出土黒曜石製石器の産地推定	321
2 斜里町カモイベツ遺跡ガラス玉・石製品分析	325
3 カモイベツ遺跡(2008年調査)出土の魚類・哺乳類遺体	327
4 カモイベツ遺跡(2008年調査)出土の鳥類遺体について	341
5 カモイベツ遺跡(2018年調査)の動物遺体	346
6 カモイベツ遺跡出土炭化木片の樹種	361
7 カモイベツ遺跡の炭化種実同定	365
8 放射性炭素年代測定(1)2008~2012年	373
9 カモイベツ遺跡における放射性炭素年代(2)2018年	380
10 火山灰同定	388
11 赤色顔料について	393
Ⅸ章 まとめ	
1 主な遺構群の特徴	397
(1) 続縄文時代の特徴的な遺構 (2) オホーツク文化刻文期における竪穴群	
(3) アイヌ文化期のカモイベツと松浦武四郎	
2 遺物の特徴	401
(1) 土器 (2) 石器 (3) 金属製品 (4) 動物遺存体・骨角器	
引用・参考文献	406
写真図版	409
・現地調査状況	
・出土遺物	
報告書抄録	

挿図目次

図 I - 1	カモイベツ遺跡の位置……………	3	図 III - 39	包含層出土の土器 (2) ……………	74
図 I - 2	年度別調査範囲……………	3	図 III - 40	包含層出土の土器 (3) ……………	75
図 I - 3	カモイベツ遺跡遺構位置図……………	8	図 III - 41	包含層出土の土器 (4) ……………	76
図 II - 1	遺跡の範囲と周辺の地形……………	10	図 III - 42	包含層出土の石器 (1) ……………	79
図 II - 2	基本土層……………	11	図 III - 43	包含層出土の石器 (2) ……………	80
図 II - 3	カモイベツ遺跡および周辺地形概念図 ……………	12	図 III - 44	包含層出土の石器 (3) ……………	81
図 II - 4	砂丘の形成過程……………	13	図 III - 45	包含層出土の石器 (4) ……………	82
図 II - 5	周辺の遺跡……………	19	図 III - 46	包含層出土の石器 (5) ……………	83
図 III - 1	2018年発掘区設定図……………	23	図 III - 47	包含層出土の石器 (6) ……………	84
図 III - 2	調査区土層断面 (1) ……………	24	図 III - 48	包含層出土の鉄製品 (1) ……………	85
図 III - 3	調査区土層断面 (2) ……………	25	図 III - 49	包含層出土の鉄製品 (2) ……………	86
図 III - 4	調査区土層断面 (3) ……………	26	図 III - 50	包含層出土の加工痕ある骨片……………	87
図 III - 5	調査区土層断面 (4) ……………	27	図 IV - 1	2008年発掘区設定図・土層断面位置 ……………	98
図 III - 6	2018年調査区遺構位置図……………	30	図 IV - 2	調査区土層断面 (1) ……………	99
図 III - 7	H - 22……………	32	図 IV - 3	調査区土層断面 (2) ……………	100
図 III - 8	H - 22出土の遺物……………	33	図 IV - 4	調査区土層断面 (3) ……………	101
図 III - 9	P - 29……………	34	図 IV - 5	2008年調査区遺構位置図……………	103
図 III - 10	S P - 22~31……………	35	図 IV - 6	H - 15 (37c号址) ……………	104
図 III - 11	F - 56~59……………	37	図 IV - 7	H - 15 (37c号址) 出土の遺物……………	105
図 III - 12	F - 60~63……………	38	図 IV - 8	H - 17 (51号址) ……………	106
図 III - 13	F - 64~71……………	40	図 IV - 9	H - 17 (51号址) 出土の遺物……………	107
図 III - 14	F C - 12~16……………	42	図 IV - 10	H - 16 (25号址) ……………	108
図 III - 15	H - 19・20 (1) ……………	44	図 IV - 11	H - 16 (25号址) 出土の遺物……………	109
図 III - 16	H - 19・20 (2) ……………	45	図 IV - 12	H - 18 (24a号址)・B H - 2 (3号址) ……………	110
図 III - 17	H - 19・20出土の遺物……………	46	図 IV - 13	G P - 2 (38号址) ……………	111
図 III - 18	H - 21……………	48	図 IV - 14	G P - 3 (44号址) ……………	112
図 III - 19	P S - 31……………	49	図 IV - 15	G P - 3 (44号址) 出土の遺物……………	113
図 III - 20	S - 11・12・F C - 11……………	51	図 IV - 16	P - 1・2 (24b・34号址) ……………	115
図 III - 21	S B - 1・2……………	52	図 IV - 17	P - 3・4 (27・26号址) ……………	116
図 III - 22	S B - 3……………	54	図 IV - 18	P - 5・6 (28・47号址) ……………	117
図 III - 23	S B - 3 出土の遺物……………	55	図 IV - 19	P - 7 (43号址) ……………	118
図 III - 24	S B - 4 (1) ……………	56	図 IV - 20	P S - 5・6 (37a b・39号址) ……	119
図 III - 25	S B - 4 (2) ……………	57	図 IV - 21	P S - 7 (23号址) ……………	120
図 III - 26	S B - 4 出土の遺物……………	58	図 IV - 22	P S - 8・9 (40・48号址) ……………	121
図 III - 27	S B - 5……………	59	図 IV - 23	P S - 10 (49号址) ……………	122
図 III - 28	S B - 5 出土の遺物……………	60	図 IV - 24	P S - 11・12 (46・50号址) ……………	124
図 III - 29	S B - 6・7……………	61	図 IV - 25	P S - 12出土の遺物・P S - 13 (41・45号址)……………	125
図 III - 30	S B - 8・9……………	63	図 IV - 26	P S - 14・15 (31b・35号址) ……	126
図 III - 31	S B - 10……………	64	図 IV - 27	P S - 16・17・18 (36・53・54号址)……………	127
図 III - 32	S P - 32~34・S - 13・14……………	65	図 IV - 28	P S - 19・20 (30・33号址) ……………	128
図 III - 33	VII b層遺物分布 (1) ……………	67	図 IV - 29	P S - 21 (42号址)・S F - 4 (31a号址)・ S - 1 (52号址) ……………	129
図 III - 34	VII b層遺物分布 (2) ……………	68	図 IV - 30	R - 1 (29号址) ……………	131
図 III - 35	VII b層 (3)・VII a層遺物分布 ……	69	図 IV - 31	H - 1 (2号址) ……………	132
図 III - 36	VII b層一括土器出土状況……………	70			
図 III - 37	I~II層遺物分布・出土状況……………	71			
図 III - 38	包含層出土の土器 (1) ……………	73			

図Ⅳ-32	H-3・4 (4・55号址) ……………	133	図Ⅵ-1	2011年A地区発掘区設定図・ 土層断面位置……………	199
図Ⅳ-33	H-3 (4号址) 出土の遺物……………	134	図Ⅵ-2	A地区土層断面 (1) ……………	200
図Ⅳ-34	H-5・6 (20・19号址) (1)……………	136	図Ⅵ-3	A地区土層断面 (2) ……………	201
図Ⅳ-35	H-5・6 (20・19号址) (2)……………	137	図Ⅵ-4	2011年A地区遺構位置図……………	202
図Ⅳ-36	H-7 (5号址) (1)……………	138	図Ⅵ-5	P-8・SP-1~10 (1) ……………	203
図Ⅳ-37	H-7 (5号址) (2)……………	139	図Ⅵ-6	P-8・SP-1~10 (2)・ FC-1 ……………	204
図Ⅳ-38	H-7 (5号址) 出土の遺物 (1) ……	140	図Ⅵ-7	A地区包含層出土の土器……………	205
図Ⅳ-39	H-7 (5号址) 出土の遺物 (2) ……	141	図Ⅵ-8	A地区包含層出土の石器 (1) ……	207
図Ⅳ-40	H-8 (6号址) (1)……………	142	図Ⅵ-9	A地区包含層出土の石器 (2) ……	208
図Ⅳ-41	H-8 (6号址) (2)……………	143	図Ⅵ-10	A地区包含層出土の石器 (3)・キセル ……………	209
図Ⅳ-42	H-8 (6号址) 出土の遺物 (1) ……	144	図Ⅵ-11	2011年B地区発掘設定図・地形測量図 ……………	211
図Ⅳ-43	H-8 (6号址) 出土の遺物 (2) ……	145	図Ⅵ-12	B地区土層断面……………	212
図Ⅳ-44	H-9・10・11 (15a・b・21号址) (1) ……………	146	図Ⅵ-13	2011年B地区遺構位置図……………	214
図Ⅳ-45	H-9・10・11 (15a・b・21号址) (2) ……………	147	図Ⅵ-14	GP-4 (1号墓墳) (1)……………	215
図Ⅳ-46	H-9・10・11 (15a・15b・21号址) 出土の遺物 (1) ……………	148	図Ⅵ-15	GP-4 (1号墓墳) (2)……………	216
図Ⅳ-47	H-9・10・11 (15a・15b・21号址) 出土の遺物 (2) ……………	149	図Ⅵ-16	P-9・10・11・12 (PIT13・2・5・25) ……………	218
図Ⅳ-48	H-12 (8号址) ……………	152	図Ⅵ-17	P-13・30 (PIT8・21) ……………	219
図Ⅳ-49	H-12 (8号址) 出土の遺物……………	153	図Ⅵ-18	PS-22 (PIT7) ……………	220
図Ⅳ-50	H-13 (7号址) ……………	154	図Ⅵ-19	PS-22 (PIT7) 出土の遺物 ……	221
図Ⅳ-51	H-13 (7号址) 出土の遺物……………	155	図Ⅵ-20	PS-23・24 (PIT17・15) ……	222
図Ⅳ-52	H-14 (9号址) (1)……………	156	図Ⅵ-21	PS-23・24出土の遺物・ SP-13 (PIT10) ……………	223
図Ⅳ-53	H-14 (9号址) (2)……………	157	図Ⅵ-22	SF-6・7 (PIT16・12) ……	225
図Ⅳ-54	GP-1 (1号址) ……………	158	図Ⅵ-23	F-6・7 (PIT23・22) ……	226
図Ⅳ-55	PS-1・2 (32・17号址) ……	159	図Ⅵ-24	S-2・3 (PIT9・集石) ……	228
図Ⅳ-56	PS-3・4 (14・18号址) ……	160	図Ⅵ-25	S-4・5 (PIT20・14) ……	229
図Ⅳ-57	SF-1~3・F-1~3 (10~13・16・22号址)……………	162	図Ⅵ-26	S-3・4・5 出土の遺物……………	230
図Ⅳ-58	SF・F 出土の遺物……………	163	図Ⅵ-27	S-6・7 (集石1・PIT6) ……	231
図Ⅳ-59	包含層出土の土器 (1) ……………	166	図Ⅵ-28	FC-2・3・17 (石器集中)・ 埋設土器1 ……………	232
図Ⅳ-60	包含層出土の土器 (2) ……………	167	図Ⅵ-29	R-2・3・4 (PIT11・24・18) ……	233
図Ⅳ-61	包含層出土の土器 (3) ……………	168	図Ⅵ-30	R-5 ……………	234
図Ⅳ-62	包含層出土の土器 (4) ……………	169	図Ⅵ-31	「廃棄場」……………	236
図Ⅳ-63	包含層出土の石器 (1) ……………	171	図Ⅵ-32	「廃棄場」出土の土器 ……	237
図Ⅳ-64	包含層出土の石器 (2) ……………	172	図Ⅵ-33	「廃棄場」出土の石器 ……	238
図Ⅳ-65	包含層出土の石器 (3) ……………	173	図Ⅵ-34	SP-11・12 (PIT3・4) ……	239
図Ⅴ-1	2009年発掘区設定図・土層断面位置 ……………	185	図Ⅵ-35	B地区包含層出土の土器 (1) ……	240
図Ⅴ-2	調査区土層断面 (1) ……………	187	図Ⅵ-36	B地区包含層出土の土器 (2) ……	241
図Ⅴ-3	調査区土層断面 (2) ……………	188	図Ⅵ-37	B地区包含層出土の石器 (1) ……	243
図Ⅴ-4	調査区土層断面 (3) ……………	189	図Ⅵ-38	B地区包含層出土の石器 (2) ……	244
図Ⅴ-5	2009年調査区遺構位置図……………	190	図Ⅵ-39	B地区包含層出土の石器 (3) ……	245
図Ⅴ-6	F-4・5 (PIT1・2)・ SF-5 (石囲い炉) ……………	191	図Ⅶ-1	2012年発掘区設定図・土層断面位置 ……………	254
図Ⅴ-7	包含層出土の土器……………	193	図Ⅶ-2	調査区土層断面 (1) ……………	255
図Ⅴ-8	包含層出土の石器 (1) ……………	194	図Ⅶ-3	調査区土層断面 (2) ……………	256
図Ⅴ-9	包含層出土の石器 (2) ……………	195	図Ⅶ-4	2012年調査区遺構位置図……………	258
図Ⅴ-10	包含層出土の石器 (3) ……………	196			

図Ⅶ-5	P-14・15・16 (PIT53・27・28)	260	図Ⅶ-40	包含層出土の石器 (6)	302
図Ⅶ-6	P-17・18 (PIT47・29)	261	図Ⅶ-41	包含層出土の石器 (7)	303
図Ⅶ-7	P-19・20・21・22 (PIT45・65・63・61)	262	図Ⅶ-42	包含層出土の石器 (8)	304
図Ⅶ-8	P-23・24・27・28 (PIT30A・31・50・69)	263	図Ⅶ-43	包含層出土の石器 (9)	305
図Ⅶ-9	PS-25・26 (配石1・3)	264	図Ⅶ-44	包含層出土の石器 (10)	306
図Ⅶ-10	PS-27 (PIT64)	265	図Ⅶ-45	包含層出土の石器 (11)	307
図Ⅶ-11	PS-28・29・30 (PIT70・68・67) SP-20・21 (柱穴)	266	図Ⅶ-46	包含層出土の石器 (12)・骨角器	308
図Ⅶ-12	SF-8・9 (PIT30B・35)	268	図Ⅶ-47	旧河道出土の材・木片	309
図Ⅶ-13	F-9~15 (PIT46・48ほか)	269			
図Ⅶ-14	F-16~21 (PIT66ほか)	270	[Ⅶ章-1]		
図Ⅶ-15	F-22~25 (焼土・木炭)	271	図1	黒曜石産地分布図 (東日本)	321
図Ⅶ-16	F-26・28~30 (PIT34・36・37・39) ……………	272	図2	黒曜石産地推定判別図 (1)	324
図Ⅶ-17	F-31・33・35・38~40 (PIT40ほか) ……………	273	図3	黒曜石産地推定判別図 (2)	324
図Ⅶ-18	F-41~44 (PIT55・45・56・52) ……………	274	図4	黒曜石産地推定判別図 (3)	324
図Ⅶ-19	F-45~51 (PIT75ほか)	275	[Ⅶ章-3]		
図Ⅶ-20	F-50~55 (PIT73ほか)	276	第1図	動物遺体の出土位置	333
図Ⅶ-21	S-8~10 (集石・配石)	278	第2図	遺跡全体の種構成	337
図Ⅶ-22	FC-4~10 (石器集中)	279	第3図	遺構別種構成 (魚類・鳥獣類)	337
図Ⅶ-23	FC-18~20 (石器集中)・埋設土器2・ R-13 (ベンガラ集中)	280	第4図	遺構別種構成 (哺乳類)	337
図Ⅶ-24	R-6~12 (ベンガラ範囲)	281	[Ⅶ章-8]		
図Ⅶ-25	P-25・26 (PIT42・43)	282	図1-1	暦年較正結果	378
図Ⅶ-26	SP-14~17 (PIT41・44・62)	283	図1-2	暦年較正結果	379
図Ⅶ-27	SP-18・19 (PIT57・49)・ F-32・34・36・37 (PIT40ほか)	284	[Ⅶ章-9]		
図Ⅶ-28	包含層出土の土器 (1)	287	図1	暦年較正結果 (cal BC/AD)	385
図Ⅶ-29	包含層出土の土器 (2)	288	図2	暦年較正年代グラフ (マルチプロット図、 cal BC/AD)	387
図Ⅶ-30	包含層出土の土器 (3)	289	[Ⅶ章-10]		
図Ⅶ-31	包含層出土の土器 (4)	290	図1	カモイベツ遺跡No.1・2・3・4の火山ガラス 屈折率	390
図Ⅶ-32	包含層出土の土器 (5)	291	図2	カモイベツ遺跡No.1・2・3・4の斜方輝石 屈折率	390
図Ⅶ-33	包含層出土の土器 (6)	292	[Ⅶ章-11]		
図Ⅶ-34	包含層出土の土器 (7)	293	図1	赤色顔料X線粉末回折法分析結果	396
図Ⅶ-35	包含層出土の石器 (1)	297	図Ⅸ-1	オホーツク文化期 (刻文期) の竪穴	399
図Ⅶ-36	包含層出土の石器 (2)	298	図Ⅸ-2	カモイベツ遺跡周辺のアイヌ文化期の 遺跡とコタン	400
図Ⅶ-37	包含層出土の石器 (3)	299	図Ⅸ-3	主な出土土器	402
図Ⅶ-38	包含層出土の石器 (4)	300	図Ⅸ-4	時期別石器一覧	403
図Ⅶ-39	包含層出土の石器 (5)	301	図Ⅸ-5	オンネベツ川西側台地遺跡出土の鉄製品 (鉄鍋・鉄斧・鉄鎌)	405

表目次

表Ⅰ-1	遺構名対照表	5	表Ⅱ-1	調査年別土層対比表	15
表Ⅰ-2	遺構数一覧	7	表Ⅱ-2	周辺の遺跡	20
表Ⅰ-3	遺物点数一覧	7			
			表Ⅲ-1	2018年調査遺構一覧	88

表Ⅲ-2	2018年調査遺物集計	89	[Ⅷ章-1]	
表Ⅲ-3	2018年調査掲載土器一覧(1)	90	表1	分析対象
表Ⅲ-4	2018年調査掲載土器一覧(2)	91	表2	東日本黒曜石産地の判別群
表Ⅲ-5	2018年調査掲載石器一覧(1)	92	表3	測定値および産地推定結果
表Ⅲ-6	2018年調査掲載石器一覧(2)	93	表4	時期および器種別の産地
表Ⅲ-7	2018年調査掲載金属製品一覧	94	[Ⅷ章-2]	
表Ⅲ-8	2018年調査掲載骨角器等一覧	95	表1	半定量分析値
表Ⅲ-9	フローテーション結果	95	表2	破面の成分比率
表Ⅲ-10	動物遺存体ほか水洗選別結果	96	[Ⅷ章-3]	
			表1	種名一覧(魚類・哺乳類)
表Ⅳ-1	2008年調査遺構一覧	174	表2	出土内容(魚類)
表Ⅳ-2	2008年調査遺物集計(1)	175	表3	出土内容(哺乳類)
表Ⅳ-3	2008年調査遺物集計(2)	176	表4	遺構別集計
表Ⅳ-4	2008年調査掲載土器一覧(1)	177	[Ⅷ章-4]	
表Ⅳ-5	2008年調査掲載土器一覧(2)	178	表1	カモイベツ遺跡から出土した鳥類遺体の一覧
表Ⅳ-6	2008年調査掲載土器一覧(3)	179		344
表Ⅳ-7	2008年調査掲載土器一覧(4)	180	表2	カモイベツ遺跡の各遺構から出土した鳥類遺体
表Ⅳ-8	2008年調査掲載土器一覧(5)	181		344
表Ⅳ-9	2008年調査掲載土器一覧(6)	182	[Ⅷ章-5]	
表Ⅳ-10	2008年調査掲載石器一覧(1)	182	表1	出土動物一覧
表Ⅳ-11	2008年調査掲載石器一覧(2)	183	表2	軟体動物門(腹足綱・斧足綱)・節足動物門・棘皮動物門
表Ⅳ-12	2008年調査掲載石器一覧(3)	184	表3	魚綱
			表4	マダラとみられるタラ科の耳石と推定体長
表Ⅴ-1	2009年調査遺構一覧	197		357
表Ⅴ-2	2009年調査遺物集計	197	表5	魚綱
表Ⅴ-3	2009年調査掲載土器一覧	197	表6	哺乳綱
表Ⅴ-4	2009年調査掲載石器一覧	198	[Ⅷ章-6]	
			表1	カモイベツ遺跡の樹種同定結果
表Ⅵ-1	2011年調査遺構一覧	246	[Ⅷ章-7]	
表Ⅵ-2	2011年調査遺物集計	247	表1	炭化種実同定結果
表Ⅵ-3	2011年調査掲載土器一覧(1)	248	表2	炭化鱗茎の計測値
表Ⅵ-4	2011年調査掲載土器一覧(2)	249	[Ⅷ章-8]	
表Ⅵ-5	2011年調査掲載石器等一覧(1)	250	表1	測定試料及び処理
表Ⅵ-6	2011年調査掲載石器等一覧(2)	251	表2	放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果
表Ⅵ-7	2011年調査掲載石器等一覧(3)	252		377
表Ⅵ-8	2011年調査掲載ガラス製品一覧	252	[Ⅷ章-9]	
			表1	放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)
表Ⅶ-1	2012年調査遺構一覧(1)	310		383
表Ⅶ-2	2012年調査遺構一覧(2)	311	表2	放射性炭素年代測定結果($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BC/AD)
表Ⅶ-3	2012年調査遺物集計	312		383
表Ⅶ-4	2012年調査掲載土器一覧(1)	313	[Ⅷ章-10]	
表Ⅶ-5	2012年調査掲載土器一覧(2)	314	表	火山灰同定試料一覧
表Ⅶ-6	2012年調査掲載土器一覧(3)	315	表1	カモイベツ遺跡テフラの粒子粗製分析結果
表Ⅶ-7	2012年調査掲載土器一覧(4)	316		389
表Ⅶ-8	2012年調査掲載石器一覧(1)	317	[Ⅷ章-11]	
表Ⅶ-9	2012年調査掲載石器一覧(2)	318	表1	カモイベツ遺跡赤色顔料(ベンガラ)出土遺構
表Ⅶ-10	2012年調査掲載石器一覧(3)	319		394
表Ⅶ-11	2012年調査掲載石器一覧(4)	320	表2	赤色顔料X線回折法分析試料
表Ⅶ-12	2012年調査掲載骨角器一覧	320		395
			表Ⅸ-1	刻文期竪穴調査遺跡
				399

写真図版目次

●口絵

口絵 1 2017・2018年

- 1 遺跡全景
- 2 調査状況（オホーツク文化期）

口絵 2 2018年

- 1 焼土と周辺の遺物（F-61付近・続縄文時代）
- 2 貝・骨ブロック（S B-4・アイヌ文化期）

口絵 3 2008～2012年 斜里町教育委員会調査

- 1 竪穴住居跡群（オホーツク文化期）
- 2 土坑墓（G P-3・続縄文時代）
- 3 土坑墓上層の人骨（G P-4・続縄文時代）
- 4 石組炉（S F-7・続縄文時代）
- 5 集石土坑（P S-26・続縄文時代）

口絵 4

- 1 土器（縄文・続縄文・オホーツク式）
- 2 土坑墓出土のガラス玉（G P-4）
- 3 骨角器（アイヌ文化期）
- 4 金属製品（アイヌ文化期）

●Ⅷ章 自然科学的分析・鑑定

〔Ⅷ章-2〕

図 1 ガラス玉資料

〔Ⅷ章-3〕

図版 1 魚類

図版 2 哺乳類（陸獣）

図版 3 哺乳類（海獣）

〔Ⅷ章-4〕

図版 1 カモイベツ遺跡出土の鳥類遺体

〔Ⅷ章-6〕

図版 1 カモイベツ遺跡の炭化木片（1）

図版 2 カモイベツ遺跡の炭化木片（2）

〔Ⅷ章-7〕

図版 1 炭化種実

図版 2 炭化鱗茎

〔Ⅷ章-11〕

図版 1 赤色顔料X線回折法分析試料

●図版

〔カラー写真〕

図版 1 調査状況と基本土層

- 1 調査状況（2018年・調査区中央部）
- 2 基本土層（2018年・I 105区）
- 3 調査部北壁土層（2018年・J 82区）
- 4 礫浜と土層（2018年・J 53区付近）
- 5 調査部北壁（2018年・J 35区）
- 6 アイヌ文化期調査状況（2018年・調査区東部）

図版 2 調査状況と基本土層

- 1 調査状況（2008年・調査区中央部 西から）

- 2 調査区土層（2008年・中央東部）
- 3 調査状況（2009年・調査区中央部 東から）
- 4 調査区土層（2009年・a 147区）
- 5 調査状況（2011年A・K 152区 北西から）
- 6 礫層検出（2011年A・南部）

図版 3 調査状況と基本土層

- 1 基本土層（2011年B・D 140区 西から）
- 2 調査状況（2011年B・IX層 北西から）
- 3 調査状況（2012年・Ⅷ層下 東から）
- 4 湿地部土層（2012年・E 108区 西から）
- 5 砂丘部土層（2012年・E 91区 南から）

図版 4 住居跡炉ほか

- 1 H-1（2号址）石組炉（南から）
- 2 H-8（6号址）炉・貼床（南から）
- 3 H-12（8号址）集石（北から）
- 4 H-17（51号址）石組炉（南から）
- 5 H-19 H F-1 土層断面（南から）
- 6 H-19 H F-2 土層断面（南から）
- 7 H-21 H F-1 土層断面（西から）
- 8 H-22 H F-1 土層断面（西から）

図版 5 石組炉

- 1 S F-1（13号址）検出（南から）
- 2 S F-2（10号址）検出（南東から）
- 3 S F-4（31 a号址）検出（東から）
- 4 S F-5（石組炉）検出（東から）
- 5 S F-6（PIT16）検出（北から）
- 6 S F-7（PIT12）火床面検出（南から）
- 7 S F-8（PIT30B）検出（南西から）
- 8 S F-9（PIT35）検出（北から）

図版 6 焼土

- 1 F-1（22号址）検出（南から）
- 2 F-4（PIT1）検出（北から）
- 3 F-7（PIT22）焼砂検出（北から）
- 4 F-21（PIT66）検出（東から）
- 5 F-26（PIT34）検出（東から）
- 6 F-29（PIT39）検出（東から）
- 7 F-33（焼土1）検出（北東から）
- 8 F-39（焼土6）土層断面（南西から）

図版 7 焼土

- 1 F-42（PIT45）検出（西から）
- 2 F-45（焼砂）検出（北から）
- 3 F-55（PIT73）土層断面（西から）
- 4 F-60土層断面（北西から）
- 5 F-61土層断面（西から）
- 6 F-62・63土層断面（北西から）
- 7 F-64～66検出・土層断面（西から）
- 8 F-67～70検出・土層断面（北から）

図版 8 ベンガラ関連

- 1 R-1（29号址）検出（南から）

- 2 R-2 (PIT11) ベンガラ土層断面 (南から)
- 3 ベンガラ層検出 (E 122区 東から)
- 4 R-10 (ベンガラ範囲) ほか検出 (北から)
- 5 ベンガラ関連遺物 (2008・2011・2012年)

[モノクロ写真]

●現地調査状況

図版9 2017・2018年

- 1 遺跡遠景 (上空西から)
- 2 H-19付近調査状況 (東から)
- 3 縄文時代遺物出土状況 (西から)

図版10 2018年

- 1 H-22検出・遺物出土状況 (北から)
- 2 H-22土器出土状況 (南から)
- 3 H-22HF-1検出 (北から)
- 4 H-22HP-6メノウ埋設
- 5 H-22完掘 (北西から)

図版11 2018年

- 1 P-29土層断面 (南西から)
- 2 P-29遺物出土状況 (南から)
- 3 SP-22~25完掘 (北西から)
- 4 SP-28礫出土状況
- 5 F-56検出・土層断面 (西から)
- 6 F-57検出・土層断面 (北から)
- 7 F-58検出・土層断面 (北から)
- 8 F-59検出・土層断面 (北から)

図版12 2018年

- 1 F-62・63検出 (西から)
- 2 F-64~66検出 (北西から)
- 3 F-67~70検出 (北東から)
- 4 F-67土層断面 (北から)
- 5 F-71土層断面 (北から)

図版13 2018年

- 1 FC-12検出 (北西から)
- 2 FC-14検出 (北西から)
- 3 FC-15検出 (南から)
- 4 FC-16検出 (北西から)
- 5 石核出土状況 (北東から)
- 6 土器出土状況 (後北C₁式 北西から)
- 7 土器出土状況 (後北C₂・D式 北東から)
- 8 小型注口土器出土状況 (東から)

図版14 2018年

- 1 H-19覆土遺物出土状況
- 2 H-19東西土層断面 (南西から)
- 3 H-19南北土層断面 (東から)
- 4 H-19HF-1完掘 (南東から)
- 5 H-19・20完掘 (南東から)

図版15 2018年

- 1 H-20南北土層断面 (東から)
- 2 H-20床面検出 (南東から)
- 3 H-21検出 (北東から)
- 4 H-21土層断面 (北東から)

- 5 H-21完掘 (北から)

図版16 2018年

- 1 PS-31検出1 (南西から)
- 2 PS-31検出2 (南東から)
- 3 PS-31検出3 (南西から)
- 4 PS-31土層断面 (南東から)
- 5 PS-31炭化材出土状況 (南東から)
- 6 S-11検出 (南東から)
- 7 S-12検出 (南から)
- 8 FC-11検出 (北東から)

図版17 2018年

- 1 貝・骨ブロック調査状況 (西から)
- 2 SB-1検出 (南東から)
- 3 SB-2検出 (南西から)
- 4 SB-3検出 (南東から)
- 5 SB-3骨角器出土状況
- 6 SB-3下位灰層検出 (南東から)
- 7 SB-3下位灰層断面 (東から)

図版18 2018年

- 1 SB-4検出 (西から)
- 2 SB-4海獣頭骸骨出土状況
- 3 SB-4灰層断面 (西から)
- 4 SB-4シカ顎骨出土状況
- 5 SB-5検出 (北東から)
- 6 SB-5樹皮出土状況
- 7 SB-5土層断面 (南西から)
- 8 SB-5鹿角加工品出土状況

図版19 2018年

- 1 SB-6検出 (南東から)
- 2 SB-6灰層断面 (北から)
- 3 SB-8検出 (南東から)
- 4 SB-8灰層断面 (南から)
- 5 SB-9検出 (北東から)
- 6 SB-9灰層獣骨出土状況 (南西から)
- 7 SB-10検出 (北から)
- 8 SB-10土層断面 (北から)

図版20 2018年

- 1 SP-32~34検出 (南西から)
- 2 SP-32土層断面 (南から)
- 3 S-13検出 (北西から)
- 4 S-14検出 (南西から)
- 5 II層鉄斧出土状況 (西から)
- 6 II層鎌出土状況 (北から)
- 7 貝・骨等水洗乾燥作業
- 8 水洗後の魚骨等

図版21 2008年

- 1 調査状況 (東から)
- 2 H-17 (51号址) 検出 (北から)
- 3 H-16 (25号址) 検出 (北から)
- 4 同 倒立土器出土状況
- 5 H-18 (24号址) 完掘 (北から)
- 6 柱穴列H-2 (3号址) 検出

図版22 2008年

- 1 GP-2 (38号址) 検出 (北から)
- 2 GP-3 (44号址) 検出 (南から)
- 3 GP-3 (44号址) 遺体層 (南から)
- 4 GP-3 (44号址) 坑底 (北から)
- 5 P-4 (26号址) 完掘 (北から)
- 6 P-5 (28号址) 検出 (北から)
- 7 P-6 (47号址) 検出 (東から)
- 8 P-7 (43号址) 検出 (北から)

図版23 2008年

- 1 PS-5 上位 (37a号址) 検出 (北から)
- 2 PS-5 下位 (37b号址) 検出 (北から)
- 3 PS-7 (23号址) 検出 (南東から)
- 4 PS-8 (40号址) 検出 (南東から)
- 5 PS-9 (48号址) 検出 (南東から)
- 6 PS-10 (49号址) 検出 (南東から)
- 7 PS-11 (46号址) 検出 (南から)
- 8 PS-12 (50号址) 検出 (北から)

図版24 2008年

- 1 PS-13 (45号址) 断面 (南から)
- 2 PS-14 (31b号址) 検出 (北から)
- 3 PS-15 (35号址) 検出 (北から)
- 4 PS-17 (53号址) 断面 (南から)
- 5 PS-18 (54号址) 断面 (南から)
- 6 PS-20 (33号址) 検出 (北から)
- 7 PS-21 (42号址) 検出 (南から)
- 8 S-1 (52号址) 検出 (南から)

図版25 2008年

- 1 H-1 (2号址) 検出 (北から)
- 2 H-3 (4号址) 検出 (南から)
- 3 H-5 (20号址) 検出 (北東から)
- 4 H-6 (19号址) 検出 (南から)

図版26 2008年

- 1 H-7 (5号址) 検出 (西から)
- 2 H-8 (6号址) 検出 (南から)
- 3 H-9・10 (15a・b号址) 検出 (南から)
- 4 同 遺物出土状況 (東から)

図版27 2008年

- 1 H-12 (8号址) 検出 (北西から)
- 2 同 集石下位 (西から)
- 3 H-13 (7号址) 検出 (西から)
- 4 同 土坑下位 (北から)
- 5 H-14 (9号址) 検出 (北から)
- 6 同 土坑 (南から)

図版28 2008年

- 1 GP-1 (1号址) 土器出土状況 (南から)
- 2 GP-1 (1号址) 完掘 (北から)
- 3 PS-1 (32号址) 検出 (南から)
- 4 PS-2 (17号址) 検出 (南西から)
- 5 PS-3 (14号址) 検出 (南東から)
- 6 PS-4 (18号址) 検出 (西から)
- 7 調査区西部手稲式土器出土状況

- 8 調査区西部礫層検出 (西から)

図版29 2009・2011年A地区

- 1 調査状況 (北から)
- 2 SF-5 (石組炉) 検出 (東から)
- 3 F-5 (PIT2) 検出 (北から)
- 4 北筒式土器出土状況 (南から)
- 5 南端部調査状況 (北西から)
- 6 SP-1 (PIT11) 土層断面
- 7 P-8 (PIT14) 検出 (南から)
- 8 FC-1 泥岩片集中 (西から)

図版30 2011年B地区

- 1 調査状況 (「廃棄場」PIT1 付近 西から)
- 2 「廃棄場」土層断面 (PIT1 付近)
- 3 GP-4 (1号墓坑) 蓋石出土状況
- 4 同 上層人骨出土状況 (北から)
- 5 同 土層断面 (南から)
- 6 同 下位人骨出土状況 (南東から)
- 7 同 下層人骨顎骨出土状況 (南から)
- 8 同 完掘 (南東から)

図版31 2011年B地区

- 1 P-9 (13号址) 完掘 (北から)
- 2 P-10 (2号址) 完掘 (西から)
- 3 P-11 (5号址) 完掘 (南から)
- 4 P-12 (25号址) 完掘 (南から)
- 5 P-13 (8号址) 完掘 (北から)
- 6 PS-22 (7号址) 検出 (南東から)
- 7 PS-23 (17号址) 検出 (西から)
- 8 PS-24 (15号址) 検出 (東から)

図版32 2011年B地区

- 1 P-30 (PIT21) 検出 (南から)
- 2 S-5 (PIT14) 検出 (北から)
- 3 S-6 (集石1) 検出 (西から)
- 4 S-7 (PIT6) 検出 (北東から)
- 5 「廃棄場」(PIT1) 石製品出土状況
- 6 樹皮出土状況 (F124区 西から)
- 7 SP-11 (PIT3) 完掘 (東から)
- 8 SP-12 (PIT4) 土層断面 (東から)

図版33 2012年

- 1 調査状況 (東から)
- 2 調査状況 (西から)
- 3 P-14 (PIT53) 完掘 (北から)
- 4 P-15 (PIT27) 完掘 (東から)
- 5 P-16 (PIT28) 完掘 (北から)
- 6 同 土器出土状況 (北から)
- 7 P-17 (PIT47) 完掘 (北から)
- 8 P-18 (PIT29) 遺物出土状況 (西から)

図版34 2012年

- 1 P-19 (PIT45) 完掘 (東から)
- 2 P-20 (PIT65) 土層断面 (北から)
- 3 P-21 (PIT63) 完掘 (北から)
- 4 P-22 (PIT61) 完掘 (北から)
- 5 P-23 (PIT30A) 完掘 (南から)

- 6 P - 24 (PIT31) 完掘 (南から)
- 7 P - 27 (PIT50) 遺物出土状況 (南東から)
- 8 P - 28 (PIT69) 完掘 (東から)

図版35 2012年

- 1 P S - 25 (配石 1) 検出 (北から)
- 2 P S - 26 (配石 3) 検出 (南から)
- 3 P S - 27 (PIT64) 土層断面 (北から)
- 4 P S - 28 (PIT70) 検出 (南から)
- 5 P S - 29・30 (PIT68・67) 土層断面 (北から)
- 6 F - 14 (焼土 2) 検出 (北から)
- 7 F - 16 (焼土 1) 検出 (北から)
- 8 F - 17 (焼土 2) 検出 (北から)

図版36 2012年

- 1 F - 20 (焼土 3) 検出 (東から)
- 2 F - 22 (焼土木炭範囲 2) 検出 (北から)
- 3 F - 23 (焼土木炭範囲 1) 検出 (西から)
- 4 F - 24 (骨・木炭範囲 2) 検出 (北から)
- 5 F - 35 (焼土 4) 検出 (南東から)
- 6 F - 40 (PIT54) 検出 (南から)
- 7 F - 41 (PIT55) 検出 (南から)
- 8 F - 43 (PIT56) 検出 (東から)

図版37 2012年

- 1 F - 44 (PIT52) 検出 (南東から)
- 2 F - 46 (PIT60) 検出 (東から)
- 3 F - 47 (PIT59) 検出 (北から)
- 4 F - 50 (PIT75) 検出 (南から)
- 5 S - 8 (集石) 検出 (北東から)
- 6 S - 9 (配石 2) 検出 (北から)
- 7 S - 10 (鯨骨・集石) 検出 (西から)

図版38 2012年

- 1 F C - 5 (石器集中) 検出 (南から)
- 2 F C - 6 (石器集中) 検出 (南から)
- 3 F C - 8 (石器集中) 検出 (東から)
- 4 F C - 9 (石器集中) 検出 (西から)
- 5 埋設土器 2 (埋設土器) 検出 (西から)
- 6 土器出土状況 (宇津内Ⅱb式 南から)
- 7 シカ歯列出土状況 (F 111区 南東から)
- 8 鯨骨・樹皮出土状況 (F 91区 北から)

図版39 2012年

- 1 P - 25 (PIT42) 礫出土状況 (北から)
- 2 P - 26 (PIT43) 木炭検出 (東から)
- 3 S P - 14 (PIT41) 土層断面
- 4 S P - 16 (PIT62) 土層断面
- 5 S P - 15 (PIT44) 柱材・土層断面 (北から)
- 6 S P - 17 (柱穴) 検出 (北から)
- 7 S P - 18 (PIT57) 土層断面 (東から)

図版40 2012年ほか

- 1 S P - 19 (PIT49) 完掘 (北から)
- 2 F - 34 (PIT40) 土層断面 (南から)
- 3 低地部調査状況 (南から)
- 4 低地部材出土状況 (南から)
- 5 殖民軌道のレール (2018年)

- 6 完掘 (2011年 西から)

●出土遺物

図版41 2018年

- 1 H - 22 出土の遺物
- 2 F - 60 出土の遺物
- 3 F - 67・70 出土の遺物
- 4 F C - 14・15 出土の遺物
- 5 H - 19・20 出土の遺物

図版42 2018年

- 1 H - 21 出土の遺物
- 2 P S - 31 出土の遺物
- 3 S - 11 出土の遺物
- 4 S - 11・12、F C - 11 出土の遺物
- 5 S B - 3 出土の遺物

図版43 2018年

- 1 S B - 4 出土の遺物
- 2 S B - 5 出土の遺物
- 3 S B - 6・8・9 出土の遺物
- 4 S B - 10 出土の遺物

図版44 2018年

- 1 包含層出土の土器 (1)

図版45 2018年

- 1 包含層出土の土器 (2)

図版46 2018年

- 1 包含層出土の土器 (3)
- 2 包含層出土の石器 (1)

図版47 2018年

- 1 包含層出土の石器 (2)

図版48 2018年

- 1 包含層出土の骨角器等
- 2 包含層出土の鉄製品 (1)

図版49 2018年

- 1 包含層出土の鉄製品 (2)

図版50 2008年

- 1 H - 15 (37c号址) 出土の遺物
- 2 H - 17 (51号址) 出土の遺物
- 3 H - 16 (25号址) 出土の遺物
- 4 H - 18 (24号址) 出土の遺物
- 5 G P - 2 (38号址) 出土の遺物

図版51 2008年

- 1 G P - 3 (44号址) 出土の遺物
- 2 P - 3・4 (27・26号址) 出土の遺物
- 3 P - 5 (28号址) 出土の遺物
- 4 P S - 5・7・10・11・12 出土の遺物

図版52 2008年

- 1 P S - 14 (31b号址) 出土の遺物
- 2 P S - 15・16・19、R - 1 出土の遺物
- 3 H - 1 (2号址) 出土の遺物
- 4 H - 5 (19号址) 出土の遺物
- 5 H - 3 (4号址) 出土の遺物
- 6 H - 6 (20号址) 出土の遺物

- 図版53 2008年
1 H-7 (5号址) 出土の遺物
- 図版54 2008年
1 H-8 (6号址) 出土の遺物
- 図版55 2008年
1 H-9・10 (15 a・b号址) 出土の遺物 (1)
- 図版56 2008年
1 H-9・10 (15 a・b号址) 出土の遺物 (2)
2 H-11 (21号址) 出土の遺物
3 H-12 (8号址) 出土の遺物
- 図版57 2008年
1 H-13 (7号址) 出土の遺物
2 H-14 (9号址) 出土の遺物
3 GP-1、PS-2、SF-1、F-1~3
出土の遺物
- 図版58 2008年
1 包含層出土の土器 (1)
- 図版59 2008年
1 包含層出土の土器 (2)
- 図版60 2008年
1 包含層出土の土器 (3)
2 包含層出土の石器
- 図版61 2009年
1 包含層出土の土器
2 包含層出土の石器 (1)
- 図版62 2009年・2011年A地区
1 包含層出土の石器 (2)
2 SP-7 (PIT18) 出土の遺物
3 SP-9 (PIT21) 出土の遺物
4 A地区包含層出土の土器
- 図版63 2011年A地区
1 A地区包含層出土の石器
- 図版64 2011年B地区
1 P-10・13・30、PS-22~24 出土の遺物
- 図版65 2011年B地区
1 SF-6・7、F-7、S-2~5 出土の遺物
- 図版66 2011年B地区
1 S-7、埋設土器、R-4・5 出土の遺物
2 「廃棄場」出土の遺物 (1)
- 図版67 2011年B地区
1 「廃棄場」出土の遺物 (2)
- 図版68 2011年B地区
1 B地区包含層出土の土器
- 図版69 2011年B地区
1 B地区包含層出土の石器
- 図版70 2012年
1 P-14・16・18・21・23、PS-27・28
出土の遺物
- 図版71 2012年
1 SF-8・9、F-26・29・41・43・44・
50・51・53・54・55、FC-5、P-26、
埋設土器、SP-18・19 出土の遺物
- 図版72 2012年
1 包含層出土の土器 (1)
- 図版73 2012年
1 包含層出土の土器 (2)
- 図版74 2012年
1 包含層出土の土器 (3)
- 図版75 2012年
1 包含層出土の土器 (4)
- 図版76 2012年
1 包含層出土の石器 (1)
- 図版77 2012年
1 包含層出土の石器 (2)
- 図版78 2012年
1 包含層出土の石器 (3)
- 図版79 2012年
1 包含層出土の石器 (4)・骨角器
- 図版80 2012年ほか
1 SP-15 (PIT44) 出土の木柱
2 旧河道出土の加工痕ある材
3 2008年H-12 (8号址) 出土の繊維
4 各年度出土の樹皮
5 2011年A地区出土のキセル

I 章 緒 言

1 調査要項

〔平成29・30年度、令和元年度〕

事業名：一般国道334号斜里町峰浜中央帯設置工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成29年度）
一般国道334号斜里町日の出事故対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
（平成30年度・令和元年度）

委託者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部

受託者：公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター

所在地：斜里郡斜里町峰浜311, 312

調査面積：1,695㎡

調査期間：平成29年10月1日～令和2年3月23日

（現地調査：平成29年11月4日～11月13日・平成30年5月15日～10月18日）

〔平成20・21・23・24年度〕

事業名：一般国道334号斜里町峰浜道路工事（交通安全対策事業）に伴う埋蔵文化財発掘調査
（平成20・21年度）
一般国道334号斜里町峰浜道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査（平成23・24年度）

委託者：国土交通省北海道開発局網走開発建設部

受託者：斜里町教育委員会

所在地：斜里郡斜里町峰浜国道敷地内

調査面積：7,282㎡（平成20年度2,200㎡、平成21年度2,560㎡、平成23年度1,170㎡、
平成24年度1,352㎡）

調査期間：平成20年7月1日～平成21年3月31日、平成21年8月1日～平成22年3月31日、
平成23年9月1日～平成24年3月30日、平成24年6月1日～平成25年3月29日

（現地調査：平成20年7月1日～10月31日、平成21年8月1日～9月30日、
平成23年9月1日～11月5日、平成24年6月1日～8月31日）

2 調査体制

〔平成29・30年度〕（公財）北海道埋蔵文化財センター

理事長 越田 賢一郎（～令和元年6月21日）

副理事長 中田 仁（～令和元年6月21日）

専務理事 山田 寿雄（事務局長兼務）

常務理事 長沼 孝（～令和元年6月21日、第1調査部長兼務、平成29年度調査担当者）

第2調査部長 鈴木 信（～令和元年6月21日、平成29年度調査担当者）

○平成30年度

第2調査課 課長 笠原 興（発掘担当者）

主査 阿部 明義（発掘担当者）

主査 直江 康雄（発掘担当者）

〔令和元年度〕（公財）北海道埋蔵文化財センター

理 事 長 長沼 孝 （令和元年6月21日～）
専 務 理 事 山田 寿雄（事務局長兼務）
常 務 理 事 鈴木 信 （令和元年6月21日～、第1調査部長兼務）
第2調査部長 村田 大 （令和元年10月1日～）
第2調査課 課長 笠原 興
主査 影浦 覚
主査 阿部 明義
主査 山中 文雄
第1調査部第1調査課 課長 中山 昭大
主任 三浦 正人
主任 田口 尚

〔平成20・21・23・24年度〕斜里町教育委員会

調査主体者 教 育 長 川名 賢洋（～平成20年9月30日）
金田 清見（平成20年10月1日～平成23年10月1日）
村田 良介（平成23年10月2日～）
事 務 局 知床博物館 館 長 石下 孝行（平成23年度担当）
山中 正実（平成24年度担当）
総務課長 中川 元 （平成20・21年度担当）
臨時職員 高橋 葵 （平成20・21・24年度）
溝端 ゆりか（平成21年度）
佐藤 トモ子（平成23・24年度）

○平成20年度

担 当 者 知床博物館 学芸係長 松田 功
文化財サポート有限会社 豊原 熙司
調 査 員 文化財サポート有限会社 豊原 熙司
坂井 通子
整理補助員 文化財サポート有限会社 宮夫 靖夫
因幡 勝雄

○平成21年度

担 当 者 知床博物館 学芸係長 松田 功
調 査 員 斜里町埋蔵文化財センター 臨時職員 村本 周三
調査補助員 斜里町埋蔵文化財センター 臨時職員 門間 勇
臨時職員 原 靖寿

○平成23・24年度

担 当 者 知床博物館 学芸主幹 松田 功
調 査 員 斜里町埋蔵文化財センター 臨時職員 村本 周三
臨時職員 田代 雄介

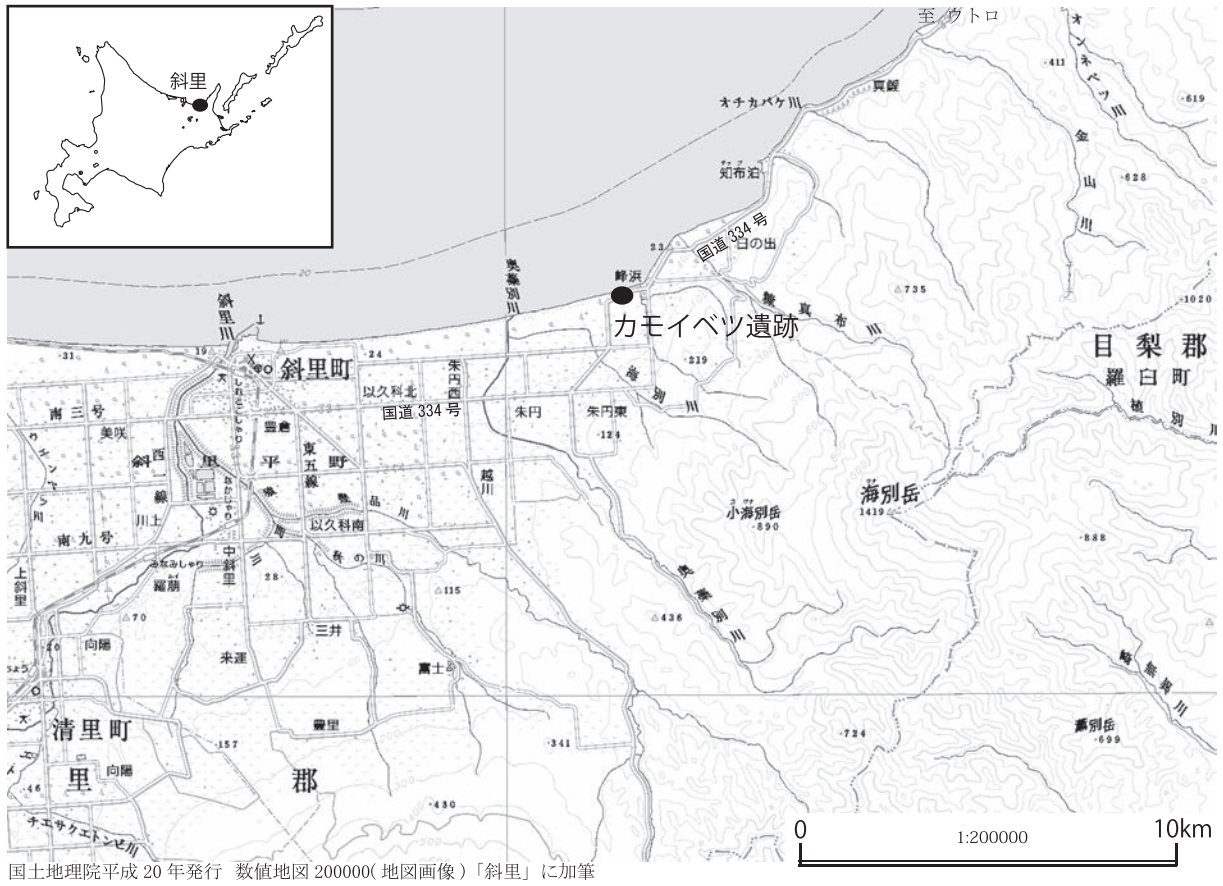


図 I - 1 カモイベツ遺跡の位置

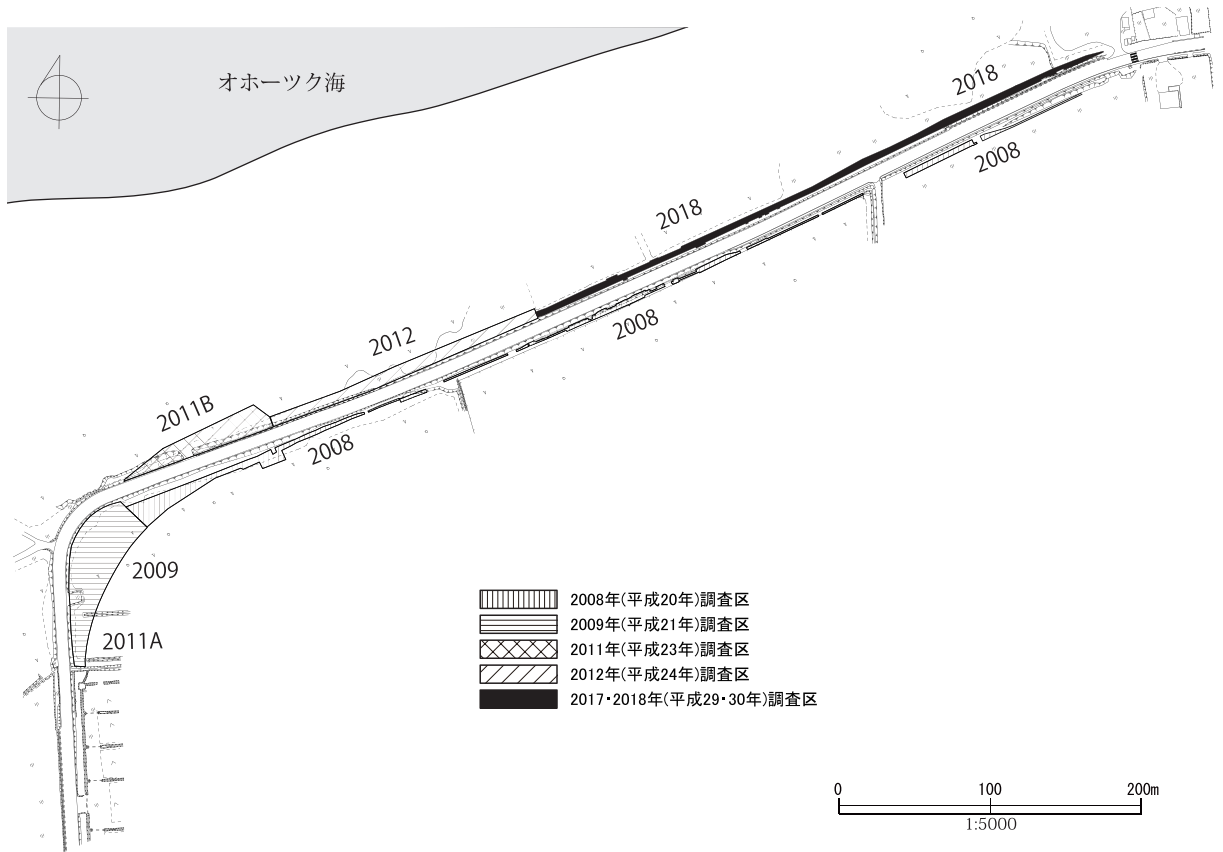


図 I - 2 年度別調査範囲

3 調査に至る経緯

北海道開発局網走開発建設部は、^{しれとこ}知床半島に通じる一般国道334号線の整備・改良、交通安全対策事業の一環として、「一般国道334号斜里町峰浜道路改良工事」を計画した。これに伴い、網走開発建設部長から北海道教育委員会教育長あてに埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。協議を受けた北海道教育委員会（以下、道教委）は昭和63年（1988年）6月に路線内の埋蔵文化財包蔵地の所在確認調査を実施した。その結果、「カモイベツ遺跡」（登載番号 I-08-30）（当該地）について試掘調査が必要との回答がなされた。その後、当該区域の工事が具体的となった平成11年（1999年）8月に道教委による範囲確認調査（試掘調査）が実施された。その結果、オホーツク文化期の住居跡と考えられる遺構や遺物が確認されたことから、事前協議に対して工事計画の変更が困難な場合は発掘調査を行い記録保存が必要である、との回答がなされた。それを受けて網走開発建設部は、道教委と用地内に係る埋蔵文化財包蔵地の保護に関する協議を行った結果、工事計画の変更は困難と判断され、網走開発建設部から斜里町教育委員会（以下、斜里町教委）に発掘調査の業務依頼があった。平成20年（2008年）から斜里町立知床博物館を調査主体として委託契約が結ばれ、発掘調査が実施されることになった。

発掘調査は平成20年から着手され、21年、23年、24年の4次にわたって行われた。調査総面積は7,282㎡である。平成20年度は国道南東側の延長約700mの狭小な範囲（図 I-2）で、重機の進入や土砂の仮置き場、道路法面の養生などについて十分な配慮を行った。調査を進めると、竪穴住居跡群など予想を大幅に超える遺構が検出されたことから、調査範囲が一部拡張された（IV章1、斜里町教委2009）。平成21年度は国道南側の急カーブ緩和のための工事用地（図 I-2）を対象とした（V章1、斜里町教委2010）。平成23年度は21年度の続きのA地区と国道北西側のB地区（図 I-2）の両地区の調査を行った。B地区では、攪乱や土層の堆積状況などから最終掘削面を2段階に設定している（VI章4、斜里町教委2012）。平成24年度は23年度B地区の東側延長部分（図 I-2）の調査を行った。中央部に旧河道が確認され、その東西で土層や遺構・遺物の出土状況が異なるものの、続縄文時代～オホーツク文化期の各時期の遺構・遺物を層位的に検出した（VII章1、斜里町教委2013）。各年度の調査状況について、発掘調査概要報告書が刊行されている（斜里町教委2009・2010・2012・2013）。

平成24年の調査後も国道334号線の交通安全対策整備事業は継続され、「峰浜中央帯整備事業」の区間について、平成29年度は発掘調査に先駆けた予備的な調査を実施した（III章1）。発掘調査は、道教委、網走開発建設部、斜里町教委を交えた協議の結果、当センターが行うこととなった。

平成30年（2018年）の調査区は、現在の国道334号線の北側に位置し（III章1）、平成24年度の東側延長部分にあたる。「峰浜中央帯整備事業」の残事業区間、幅約4m、延長460mの範囲で、林野庁の旧所有地である。この調査区と接する北側（オホーツク海側）は、網走南部森林管理署管轄の潮害防備保安林および保険保安林となっており、この林野庁用地内の樹木の保護も視野に入れての調査となった。特に重機が稼働する表土除去や残土処理時には、樹木に損壊を与えぬように注意を払う必要があった。また、調査区の南側は国道334号線の路肩となっており、電柱や道路標識などの構築物や埋設物があり、これらの周囲は崩落の危険性があるため掘削せずにクリアランスを確保して調査を行った。

（笠原 興）

4 遺構・遺物の分類・名称

(1) 遺構

過年度は、遺構検出順に連続番号を付した。

【2008年】「1号址」～「55号址」

【2009年～2011年A地区】「PIT1」～「PIT23」、石組炉、泥岩集中など

【2011年B地区～2012年】「PIT1」～「PIT75」、石器集中、埋設土器、ベンガラ範囲など

これらを以下（2018年）の記号を用い変換した（表I-1）。2018年はこれに続く番号を付した。

【2018年】例：住居跡はH-19～

H：住居跡・建物跡 BH：柱穴列 GP：土坑墓 P：土坑 PS：集石を伴う土坑

SP：柱穴状（小）土坑 SF：石組炉 F：焼土 S：集石 FC：フレイクチップ集中（石器集中） R：ベンガラ製作址・ベンガラ集中 SB：貝・骨ブロック

表I-1 遺構名対照表（旧→新）

旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名	旧遺構名	新遺構名
2008年		2008年		2009年		2011年B地区		2012年		2012年		2012年	
1号址	GP-1	29号址	R-1	屋外炉	SF-5	PIT13	P-9	PIT35	SF-9	PIT64	PS-27	F119焼土1	F-19
2号址	H-1	30号址	PS-19	PIT1	F-4	PIT14	S-5	PIT36	F-30	PIT65	P-20	F119焼土2	F-17
3号址	H-2	31a号址	SF-4	PIT2	F-5	PIT15	PS-24	PIT37	F-28	PIT66	F-21	F119石器集中	FC-6
4号址	H-3	31b号址	PS-14	2011年A地区		PIT16	SF-6	PIT38	(欠)	PIT67	PS-30	F117メノウ集中	FC-7
5号址	H-7	32号址	PS-1	PIT11	SP-1	PIT17	PS-23	PIT39	F-29	PIT68	PS-29	F116焼土木炭2	F-22
6号址	H-8	33号址	PS-20	PIT12	SP-2	PIT18	R-4	PIT40	F-34	PIT69	P-28	F116焼土	F-23
7号址	H-13	34号址	P-2	PIT13	SP-3	PIT19	(欠)	PIT41	SP-14	PIT70	PS-28	F111石器集中	FC-7
8号址	H-12	35号址	PS-15	PIT14	P-8	PIT20	S-4	PIT42	P-25	PIT71	F-49	F111焼土木炭	F-25
9号址	H-14	36号址	PS-16	PIT15	SP-4	PIT21	P-30	PIT43	P-26	PIT72	F-53	F111炭骨2	F-24
10号址	SF-2	37a号址	PS-5	PIT16	SP-5	PIT22	F-7	PIT44	SP-15	PIT73	F-55	F111埋設土器	埋設土器2
11号址	F-2	37b号址		PIT17	SP-6	PIT23	F-6	PIT45	F-42	PIT74	(欠)	F109焼土1	F-31
12号址	F-3	37c号址	H-15	PIT18	SP-7	PIT24	R-3	PIT45②	P-19	PIT75	F-50	E99焼土1	F-32
13号址	SF-1	38号址	GP-2	PIT20	SP-8	PIT25	P-12	PIT46	F-11	PIT76	(欠)	F98籾音・集石	S-10
14号址	PS-3	39号址	PS-6	PIT21	SP-9	PIT26	R-5	PIT47	P-17	PIT77	F-51	F94石器集中	FC-8
15a号址	H-9	40号址	PS-8	PIT23	SP-10	D134石器集中		PIT48	F-13	PIT78	F-54	F94焼土1	F-33
15b号址	H-10	41号址	PS-13	泥岩集中		FC-1	D132石器集中	PIT49	SP-19	E122焼土	F-9	E92焼土6	F-39
16号址	SF-3	42号址	PS-21	2011年B地区			集石遺構1	PIT50	P-27	E122焼土1	F-10	E92焼土7	F-38
17号址	PS-2	43号址	P-7	1号墓壇	GP-4		集石	PIT51	(欠)	E122石器集中1	FC-4	F92木炭1	F-37
18号址	PS-4	44号址	GP-3	PIT1	「廃棄場」		埋設土器遺構	PIT52	F-44	E122集石	S-8	F92焼土4	F-35
19号址	H-6	45号址	PS-13	PIT2	P-10		DE124石器集中1	PIT53	P-14	E120焼土1	F-12	F92焼砂	F-36
20号址	H-5	46号址	PS-11	PIT3	SP-11	2012年		PIT54	F-40	F119焼土1	F-16	F91柱穴	SP-17
21号址	H-11	47号址	P-6	PIT4	SP-12	PIT27	P-15	PIT55	F-41	F120焼土1	F-15	F91石器集中	FC-9
22号址	F-1	48号址	PS-9	PIT5	P-11	PIT28	P-16	PIT56	F-43	F120焼土2	F-14	F91石器集中	FC-10
23号址	PS-7	49号址	PS-10	PIT6	S-7	PIT29	P-18	PIT57	SP-18	F120配石1	PS-25	F91石器集中	FC-20
24号址	H-18	50号址	PS-12	PIT7	PS-22	PIT30A	P-23	PIT58	(欠)	F120配石2	S-9	F90焼砂	F-45
24b号址	P-1	51号址	H-17	PIT8	P-13	PIT30B	SF-8	PIT59	F-47	F120配石3	PS-26	F89焼砂	F-48
25号址	H-16	52号址	S-1	PIT9	S-2	PIT31	P-24	PIT60	F-46	E119焼土3	F-20	E88柱穴	SP-20
26号址	P-4	53号址	PS-17	PIT10	SP-13	PIT32	(欠)	PIT61	P-22	E119石器集中	FC-5	E88柱穴	SP-21
27号址	P-3	54号址	PS-18	PIT11	R-2	PIT33	(欠)	PIT62	SP-16	F119石器集中	FC-18	E88焼土	F-52
28号址	P-5	55号址	H-4	PIT12	SF-7	PIT34	F-26	PIT63	P-21	F119焼土1	F-18		

(2) 土器等

【斜里町教育委員会による2008～2012年カモイベツ遺跡の遺物台帳掲載の仮記号】

J：縄文土器 - JD：縄文後期、JE：縄文晩期

Z：続縄文土器 - ZUA：宇津内Ⅱa式、ZUB：宇津内Ⅱb式、ZKD：後北C₂・D式

O：オホーツク式土器 - OK：刻文土器、OH：貼付文土器（大部分は擬縄貼付文）

【当センターによる2018年調査の分類】

I群 縄文時代早期の土器群。II群 縄文時代前期の土器群。当遺跡では出土していない。

III群 縄文時代中期に属する土器群。（過年度出土）

IV群 縄文時代後期に属する土器群。（過年度出土）

a類：初頭～前葉の土器群。北筒Ⅱ式（新）・Ⅲ式・Ⅳ式・Ⅴ式に相当するもの。

羅臼式・細岡式・「ウトロ型」・「シャリ型」に相当するものを含む。

b類：中葉の土器群。手稻式・鮎潤式・エリモB式などに相当するもの。

c類：後葉の土器群。堂林式・栗沢式などに相当するもの。

V群 縄文時代晩期に属する土器群。(過年度出土)

a類：前葉のもの。**b類**：内藤式など。**c類**：幣舞式、緑ヶ岡式などに相当するもの。

VI群 続縄文時代に属する土器群。

a類：初頭～前葉のもの。フシココタン下層式、元町2式など。

b類：宇津内Ⅱa式・Ⅱb式のほか、下田ノ沢式、後北A式・B式などを含む。

c類：後北C₁式、後北C₂・D式に相当するもの。

d類：北大Ⅰ式・Ⅱ式などに相当するもの。

VII群 擦文文化期に属する土器群。当遺跡では出土していない。

VIII群 オホーツク文化期・トビニタイ期に属する土器群。

a類：十和田式に相当するもの。

b類：刻文期（・沈線文期）に相当するもの。

c類：貼付文期に相当するもの。

d類：トビニタイ式に相当するもの。

土製品 円盤状土製品がある。

(3) 石器等

下記の分類を使用した。点数には破片を含む。なお、斜里町教育委員会で調査した2008～2012年度分の分類はすでに行われ台帳化されていたため、基本的にはそれを踏襲した。同様の遺物について別な呼称が用いられている場合は、集計を行う上で名称を統一した。なおカッコ内には町教委の略称を記し、名称が異なる場合のみ日本語名も付記した。

【器種】

剥片石器等：石鏃（AH）、石槍（PO）、ナイフ（削器KN）、石錐（DR）、スクレイパー（搔器ES）、楔形石器、Rフレイク（RF）、Uフレイク（UF）、フレイク（FF、※CCチップ含む）、石核（CO）

礫石器等：石斧（AX）、石のみ、石錘、浮子、火打石、たたき石（HU）、くぼみ石（CA）、すり石（GR）、砥石（WS）、台石（SD）、板状加工礫、加工痕のある礫、破碎礫、礫（※GAベンガラ付き礫含む）

石製品：環状、棒状などがある。

【石材】

黒曜石（OB）、頁岩（硬質頁岩HS）、チャート（CH）、メノウ（AG）、蛇紋岩（MS）、緑色片岩（G-SCH）、流紋岩（RH）、安山岩（AND）、砂岩（SS）、泥岩（MS）、凝灰岩（TF）、軽石（PU）

(4) その他の遺物

金属製品 〔鉄製品〕 刀子、斧（鉞）、鎌、鍋、釘、鉤状製品など 〔銅製品〕 環状製品など

木製品 杭

ガラス製品 玉

自然遺物 貝類、獣骨片、魚骨片、炭化材、炭化種実、褐鉄鉱

5 調査結果の概要 (図I-3 表I-2・3)

カモイベツ遺跡では、2008～2018年に断続的に6次にわたる調査を行った。面積は合計で8,977㎡である。その結果、主に縄文時代宇津内Ⅱa式期～後北C₂・D式期の土坑墓や多数の焼土を含む遺構群、オホーツク文化刻文期の竪穴住居跡群、アイヌ文化期の貝・骨ブロックなどを検出し、縄文時代・縄文時代・オホーツク文化期・アイヌ文化期の遺物が出土した。

遺構は総数259件で、竪穴住居跡・竪穴等21軒、柱穴列1か所、土坑墓4基、土坑61基(うち集石を伴う土坑31基)、柱穴状土坑31基、石組炉9か所、焼土69か所、集石12か所、フレイクチップ集中20か所、埋設土器2か所、ベンガラ集中13か所、貝・骨ブロック10か所がある。ほかに炭化木片や骨片の分布範囲を多数検出した。時期別・調査年度別の遺構数は、下表(表I-2)のとおりで、各時期の特徴はⅨ章でまとめる。

遺物は総点数73,485点である(表I-3)。内訳は、土器が15,213点、石器等48,583点、礫9,482点、金属製品146点、ガラス玉5点、木製品2点、骨角器・加工痕ある骨片54点である。ほかに褐鉄鉱およびベンガラ、貝、骨片、炭化木片をそれぞれコンテナ数箱分回収し、さらに木片、炭化種子(堅果類が主体)、樹皮、陶磁器片などがある。土器は、縄文時代では中期～後期の北筒Ⅱ～Ⅴ式、後期の手稲式・鮎潤式・エリモB式・堂林式、晩期の緑ヶ岡式、縄文時代では宇津内Ⅱa式・宇津内Ⅱb式・後北C₁式・後北C₂・D式のほか鈴谷式・北大式(少数)、オホーツク式では刻文・擬縄貼付文土器がある。石器等はフレイクチップ類(約97%)を除くと、石鏃・スクレイパー・ナイフ・すり石・台石の点数が多い。ほかに石製品が7点出土している。金属製品は、斧(鉞)・鎌・鍋・釘類・装飾品などがある。骨角器等は、銚頭・中柄・装飾品のほかは加工痕がみられるものである。

(阿部 明義)

表I-2 遺構数一覧

		2008年	2009年	2011年	2012年	2018年	計	
縄文時代	H 竪穴住居跡	2					2	
	P 土坑			1			1	
	SP 柱穴状小土坑			10			10	
	FC フレイクチップ集中			1			1	
縄文時代	H 竪穴住居跡・住居跡	2				1	3	
	BH 柱穴列	1					1	
	GP 土坑墓	2	1				3	
	P 土坑	7		6	13	1	27	
	PS 集石を伴う土坑	17		3	6		26	
	SP 柱穴状小土坑			3		10	13	
	SF 石組炉	1	1	2	2		6	
	F 焼土		2	2	42	16	62	
	S 集石	1		6	3		10	
	FC フレイクチップ集中			3	10	5	18	
		土器埋設遺構			1	1		2
	R ベンガラ集中	1		4	8		13	
		「廃棄場」			1			1
	オホーツク文化期	H 竪穴住居跡・竪穴	13				3	16
		GP 土坑墓	1					1
P 土坑					2		2	
PS 集石を伴う土坑		4				1	5	
SP 柱穴状小土坑					6		6	
SF 石組炉		3					3	
F 焼土		3			4		7	
S 集石						2	2	
FC フレイクチップ集中						1	1	
		貝・骨ブロック					10	10
アイヌ文化期	SP 柱穴状小土坑			2		3	5	
	S 集石					2	2	
	計	58	3	46	97	55	259	

表I-3 遺物点数一覧

		2008年	2009年	2011年	2012年	2018年	計	
土器	J 縄文土器	61	1393	139			1593	
	Z 続縄文土器	746	577	1335	2506	2511	7675	
	O オホーツク式土器	3940		6	1252	642	5840	
		不明・その他	61	7	9	5	13	95
		土製品					10	10
		計	4808	1977	1489	3763	3176	15213
石器等	AH 石鏃	79	7	30	93	64	273	
	PO 石槍	5	2	2	1	4	14	
	DR 石錐	1	3	2	2	21	29	
	KN (削器・)ナイフ	34	25	37	58	14	168	
	ES (搔器・)スクレイパー	37	5	43	56	83	224	
		楔形石器	1			1	40	42
	RF R・Uフレイク	34	10	88	87	83	302	
	FF・CC フレイク・チップ	7775	1074	10135	18879	9005	46868	
	CO 石核	7	3	4	14	22	50	
	AX 石斧・石のみ	2		2	8	1	13	
	WS 砥石	1		25	27	3	56	
	HU たたき石	2		8	10	5	25	
	CA くぼみ石	2		2	14	1	19	
	GR すり石	7	5	22	161	4	199	
	SD 台石			37	68	90	195	
		加工礫			1		78	79
		その他	2		9	2	7	20
		石製品			2	1	4	7
		計	7989	1134	10449	19482	9529	48583
礫		39	7	942	1903	6591	9482	
金属製品				1	1	144	146	
ガラス製品				5			5	
木製品				1	1		2	
骨角器等					1	53	54	
計		12836	3118	12887	25151	19493	73485	

* ()内は斜里町教委の呼称

II章 遺跡の環境

1 遺跡の立地と環境 (図II-1)

(1) 遺跡の位置と地名

遺跡が所在する斜里町は北海道東部、網走地方の東端に位置する。北はオホーツク海に面しており、海岸線は西端の^{とうつる}涛釣沼から東端の知床岬まで約100kmに及ぶ。南東部に隣接する羅臼町とは知床連山の稜線を境にして知床半島を二分している。南は標津町および清里町、西は小清水町に接する。町域の約4分の3が山林で、同約4分の1の平野部に畑地・牧場・原野・市街地等がある。

カモイベツ遺跡は、中心市街地から半島方向へ海岸沿いに約10km、オホーツク海に面した峰浜地区の海岸砂丘上に立地する。アイヌ語でカモイは神・神霊でベツは川の意に解される。幕末期に当地を訪れた松浦武四郎の知床日誌に「カモイヲベツ」「神霊のある川という義」と記載されている。なお、現在の峰浜はその昔、シュマトウカリと呼ばれていた地域であるが、これはシュマトウカリベツ (suma-tukari-pet 石の・こちら・川)、すなわち斜里市街地側からの砂浜が途切れて、半島側の礫浜へと切り替わる地点であることに由来した地名である。明治期に和人の入植が進んで地名がつけられた際には、このシュマトウカリから朱円村となった。シュ・マドカの当て字と考えられるもので、シュマトカリと振り仮名がつけられたが、いつしか「しゅえん」と呼ばれるようになった。その後、シュマトウカリ川口付近について、朱円と分離して新たに峰浜と改称されたものである。峰浜の集落は当遺跡から海岸沿いに約2km東側へ離れたところにある。

(2) 地形と地質

【知床連山】

知床半島の中軸部には南西基部から北東端の知床岬に向かって、斜里岳 (1544.8m)、^{うなべつ}海別岳 (1419.4m)、^{おんねべつ}遠音別岳 (1330.5m)、羅臼岳 (1660.7m) など標高1,000m級の第四紀火山が並ぶ。これらはいずれも約90万年前から現在までの火山活動で形成されたものである。

【火山活動】

道東地方には屈斜路火山と摩周火山の大型カルデラがあり、いずれも過去複数回の大規模噴火が発生した。これらの大噴火に伴って生じた膨大な量の火山灰や火砕流の流入が斜里平野の形成に大きく影響している。後期更新世以降の主な火山活動として、まず約12万年前に発生した屈斜路火山の最初の大噴火が挙げられる。斜里平野一面を火砕流が覆い、それまでに形成されていた地形の起伏を埋めたことで、現在の斜里平野の基礎となる平坦地形が形成された。層厚は約20～30m。次に約7万年前に屈斜路火砕流が2度発生しており、それぞれ層厚10mほど堆積した。その後、約3万年前に発生した火砕流が屈斜路火山の起源としては最後のものとなっている。一方、摩周起源の火山灰は約14,000年前の江南軽石層 (kop) を形成した噴火と現在の摩周湖 (カルデラ) を形成した7,600年前ころの噴火に伴うものが大規模である。後者にともなう噴火では、下部から順にM a - j、i、h、g、fの各火山灰が断続的に降灰したが、斜里平野ではこのうちのM a - fと称される青灰色の細粒火山灰が10～15cmほど堆積している。町内における縄文時代早期の竪穴遺構には、この摩周火山灰を含んだ再堆積物層が覆っている。その後、約1,000年前には摩周カルデラ外輪山の最高峰、摩周岳 (カムイヌプリ) を給源とする火山灰が降灰した。平野部では10～15cm、砂丘地で1～2cm堆積しており、時代判別の鍵層にもなっている。色調は淡黄色でM a - b 5と命名されている。さらに上位では、樽前 a

火山灰（T a - a、A.D.1739）や駒ヶ岳 c₂火山灰（K o - c₂、A.D.1697）の薄層も観察される。

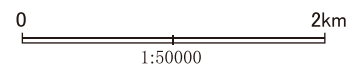
【平野部の形成】

斜里平野は山側から海側へ向かって順に河成段丘、扇状地、沖積面（過去の潟湖跡）、砂丘の各地形が発達している。まず、約20,000年前に氷河期の最寒冷期を迎えた際に海水面が現在より約120m下がったことから、それに連動して河口付近も大きく下刻した。一方、山間部では寒冷地化のために植物があまり育たず、河川浸食による土砂の堆積が進んだ。上流域の河床は土砂の流入で上昇し、下流域および河口部周辺の河床が海水面の低下に伴って下刻したため全体に地形が急傾斜となり、上流部から押し出された多量の土砂の堆積によって、山麓部にはそれまで以上に扇状地が広く発達した。

約6,000年前には温暖化にともなって海水面が上昇に転じた。現在より平均5mほども海水面が高くなったため、海水が流入して内湾が形成され、多くの汽水湖も形成された。いわゆる縄文海進である。海岸域で浸食基準面が上昇したため古い溪谷が土砂で埋没し、地形の傾斜も緩やかになった。



国土地理院平成 17 年発行 数値地図 50000(地図画像) 「峰浜」に加筆



図Ⅱ－1 遺跡の範囲と周辺の地形

その後、気温が寒冷化に転じ、約4,000年前（縄文時代後期初頭）に海水準はほぼ現在の高さと同程度になった。西から東へと流れるオホーツク海沿岸流によって運ばれてきた砂礫や海風で吹き寄せられた砂の堆積により現在の海岸線に、西から東に向かって徐々に沿岸州ならびに砂丘が形成されて内湾が閉じ、現在のサロマ湖や風蓮湖のようなラグーン（潟湖）ができあがった。このラグーンはその後、河川が運搬する土砂の堆積や泥炭の形成によって陸地化が進み、現在あるような斜里平野が徐々に形成されていったものの、縄文時代後期以降、長期にわたって砂丘上に遺跡が集中していることから、ラグーン縮小後も居住に適さない湿地が長らく続いていたと考えられる。

(3) 自然環境

当遺跡は海岸線に沿って形成された砂丘列上に位置する。遺跡がある砂丘の頂部は高いところで標高6.8m。主な植生は砂丘上に形成された海岸砂丘林と林床植物、海側に向けて砂地に点在する海浜植物から構成されている。砂丘林はアカエゾマツやカシワ、イタヤカエデ等を主体とする針広混交林である。これらの樹木は海からの風を受けて内陸側へと樹形を傾けている（風衝作用）。風当たりが強いもともと海側の砂丘頂部で灌木化し、それより海側ではほとんど生育していない。

林床にはオオイタドリ、トクサ、クマイザサが群生している。ほかエゾイラクサ、エゾオオヤマハコベ、チシママンテマ、シロザ、カラマツソウ、ナワシロイチゴ、チシマフウロ、ミツバフウロ、キツリフネ、オオヨモギ、ノゲシ等が見られる。外来植物として、セイヨウアブラナ、コゴメハギ、コメツブツメクサ、オオマツヨイグサの侵入が認められた。

海浜植物は、砂丘林の周辺にテンキグサ、オカヒジキ、ハマハタザオ、ハマナス、ハマボウフウ、ナミキソウ、ハマニガナ、シロヨモギ、エゾノコウボウムギなどが自生している。

鳥類はハシボソミズナギドリ、オオセグロカモメ、ウミネコ等の海鳥が多い。

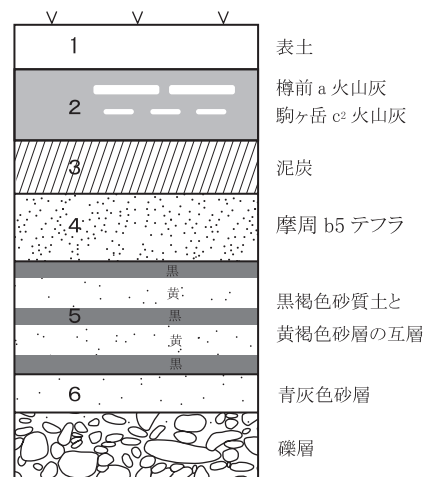
昆虫はキバネハサミムシが多く目についた。蝶類ではモンシロチョウ、モンキチョウなどシロチョウ科の蝶を多く見かけたが、セイヨウアブラナ等の吸蜜が目的であろう。 (影浦 覚)

2 調査区の土層と砂丘列 (図II-2~4、表II-1)

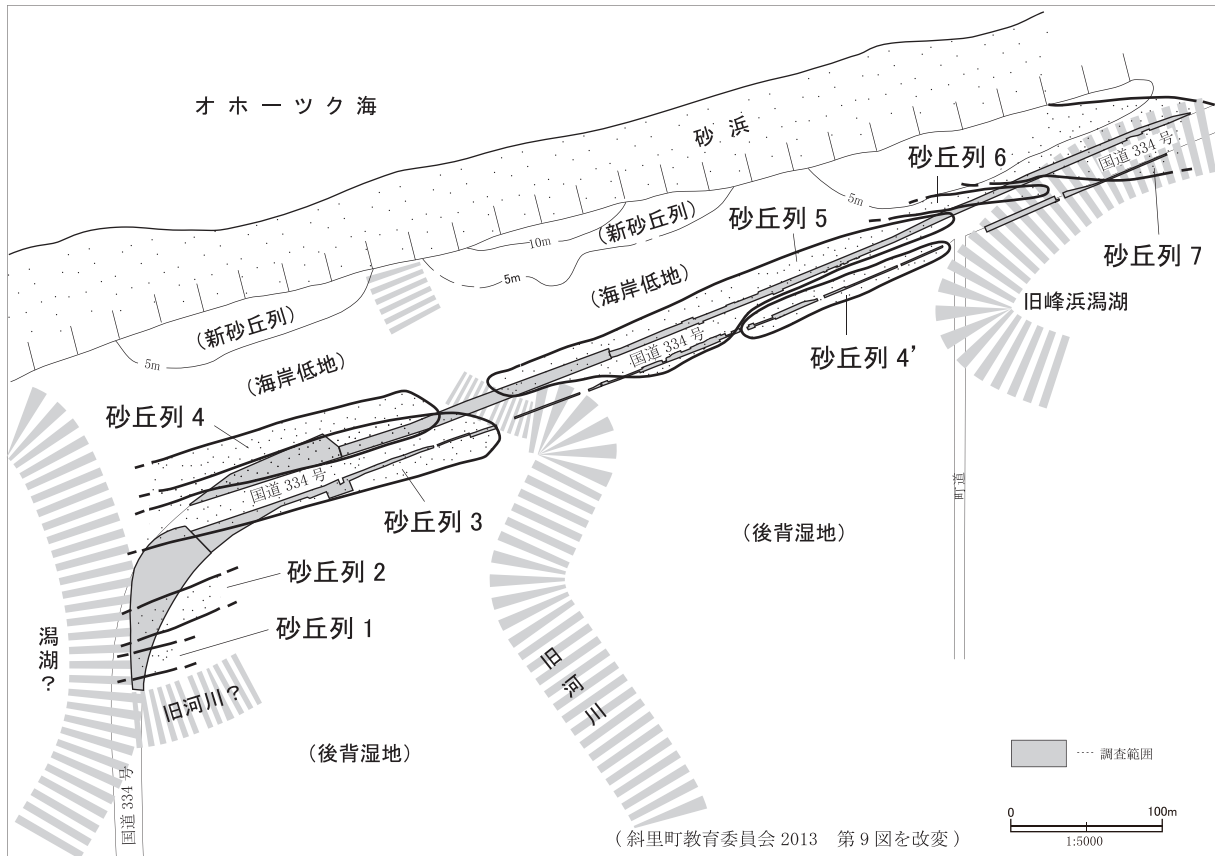
(1) カモイベツ周辺の砂丘列と基本土層

遺跡は砂丘列上に立地していることから、基本土層(図II-2、表II-1)を説明するにあたって、まず砂丘列の全体的な状況と形成過程について述べる。

砂丘列の形成は縄文海進以降のイベントである。当遺跡のこれまでの調査所見と、国土地理院の空中写真の判読から、少なくとも7本の砂丘列の存在が確認され、内陸側から海側に向かって順に、砂丘列1、砂丘列2、砂丘列3・・・とした。現況の海岸線とほぼ並行するように砂丘列が発達し、現海岸部付近ほど砂丘の高低差が大きい。砂丘列の形成は内陸側ほど早く形成し、時期を追うごとに海岸方面の北側と知床半島方面の東側に砂州状に発達していったとみられる(図II-3)。



図II-2 基本土層



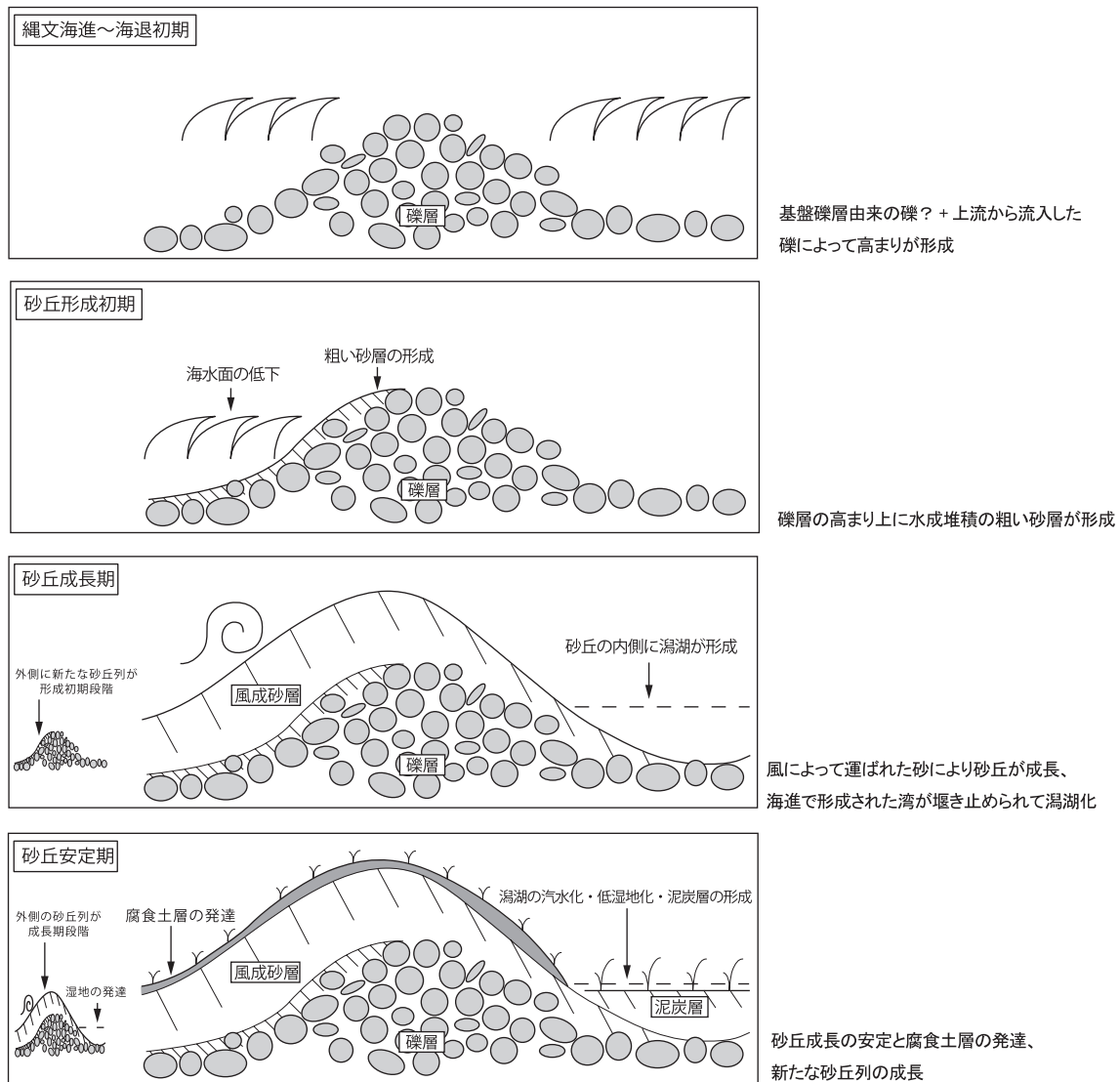
図Ⅱ-3 カモイベツ遺跡および周辺地形概念図

発掘調査の結果と2012年度にアースサイエンス社に委託して行った海岸低地から砂丘にかけてのトレンチ調査の結果も踏まえると、砂丘形成過程については以下のように推定される（図Ⅱ-4）。

砂丘形成の最初期は、礫層の高まりが形成される時期である。礫の主体は安山岩であることから、供給源は海別岳周辺である可能性が高い。峰浜地区においては江南軽石層（kop摩周火山起源 14,000¹⁴CBP頃）より下層でも同様の礫層がある。現・海別川流域で同様の礫層がみられ、海別川、シマトッカリ川、マクシベツ川等の各河口付近には波に洗われて円磨が進行した火山岩礫の堆積もみられる。海岸部への礫の広がりについては、打ち寄せる波浪によるものと思われ、河口周辺では砂丘列の上部付近にまで打ち上げられている例もある。前述の地名の項でも述べた通り、斜里市街からこの付近まで続いた砂浜が半島にかけて礫浜に変わるの、このような安山岩礫供給状況による影響が大きい。また、礫層の上位には粒度の粗い青灰色砂層（6層）が堆積している場所もあり、礫同様に海流によって波で打ち寄せられた小礫や粗砂が堆積した可能性が高い。

礫層や6層（＝主にⅧ層・Ⅹ層）の上層になると細かい風成砂層が厚く堆積する（5層）。本層は基本的に①黒色・黒褐色・暗褐色砂質土と②黄褐色・オリブ褐色砂土との互層となっているが、砂丘列によってそれぞれ異なる。基本的に遺物が含まれる層は前者①であり、後者②は砂丘の発達期に堆積した風成砂とみられる。前者①は砂丘停滞期にあたり、植物類が生育し砂地にやや腐植が発達するような環境で、人間活動の活発な時期と考えられる。風成砂の供給が弱まる理由としては、海退が進み、海側に新しい砂丘列が形成され始めたことなどが挙げられよう。また、部分的に河川の流路となり、5層の大半が河川堆積物となっている場所も確認している。

5層（＝主にⅦ層）の文化層の時期は、縄文時代中期からオホーツク文化期までである。砂丘列によって時期は異なるが、砂丘列の新旧に対応して包含される遺物の時期が新しいものが主体となる。このことは、当時の人々が周辺の砂丘列全体を広く利用していたのではなく、その時期に最も海岸に近い砂丘列上で主に活動を行っていたことが考えられる。各砂丘列の最も古い時期の遺物を挙げると、砂丘列1・2では、縄文時代中期末の北筒Ⅱ式（トコロ6類）土器のほか、押型ないしは絡条体回転施文を地文とする土器が出土した。なお、同じく砂丘上の遺跡であるウナベツ川遺跡の調査でも、古い砂丘列から縄文時代前期後半期の押型文土器の破片やシュブノツナイ式土器が出土している。砂丘列3は国道334号線の直下に位置する。縄文時代後期後葉の堂林式土器が出土した。砂層中から採取した木炭の年代測定結果は3,300±25 BP（PLD-14950）であり（Ⅷ章8）、該期の他の遺跡例と対比すると堂林式期の年代値として整合的である。砂丘列4では宇津内Ⅱa・b式期、砂丘列5では後北C₂・D式期の遺物と共にオホーツク文化期の遺物も多く見られた。砂丘列6ではオホーツク文化期の遺物が出土している。なお、これ以降の新しい砂丘列では5層が礫層以下となっており、オホーツク文化期の砂丘列7地点はまだ海中であったと考えられる。



図Ⅱ-4 砂丘の形成過程

また、砂丘列全体を通して比較すると、続縄文時代は砂丘の形成期と安定期の周期が短い。特にその時点で砂の供給が多くなる海側の新しい砂丘では、黄色砂と黒色砂の複数の互層がみられる。遺物包含層は無遺物層のオリブ褐色砂にパックされることから、包含層の堆積時期が限定的な状況となっている。対照的に内陸側の砂丘になると砂の供給が少なくなり、5層ではほとんど互層が発達せず、一つの遺物包含層に多時期の遺物が含まれる状況であった。

4層（＝主にⅥ層）は黄～白色を呈する摩周b5火山灰である（Ma-b5）。約1,000年前に降下した火山灰であり、調査区内のほとんどの範囲で10～20cm前後の堆積が確認された。

3層は茶褐色を呈する腐植質・泥炭質の層である。海側に砂丘列が発達したことにより、内陸側に広がったラグーン（潟湖）に関連する土層とみられる。

2層（＝主にⅡ～Ⅳ層）は黒褐色の砂質土である。上位に駒ヶ岳c₂火山灰（1694年）、樽前a火山灰（1739年）がそれぞれ一部分断された状態で確認できる地点がある。風性の砂を母材としながら腐植の発達が強い土層で、最も新しい砂丘列7では二つの火山灰の上位に近世アイヌ文化期の包含層が確認された。

1層（＝主にⅠ層）は表土・ボサとなっている。 （影浦・直江）

（2）各砂丘列の土層堆積状況

前述のとおり各砂丘列によって異なる堆積状況であったため、各年度や地点の土層名は統一したのではなく、それぞれの状況に合わせて付したものとなっている。以下、各地点の基本土層について対比表（表Ⅱ-1）を参照しながら遺物包含層の土層と遺物を中心として、連続する砂丘列を含む調査年度をまとめて古い砂丘列順に説明していく。

2008年調査区は東西方向に細長く、調査区内には砂丘列3（C地点）・4'（B地点旧33～60ライン）・5（B地点旧61～80ライン）・7（A地点）が含まれ、砂丘列7以外で遺物が出土している。その他にB地点の旧81ライン付近では旧河川の流路痕が認められた。これは後述する2012年調査区の砂丘部と低地部間に確認された河道跡とつながる可能性がある。基本土層は砂丘列と対応するようにA～C地点で異なり、さらにB地点は3つに細分できた。C地点（砂丘列3）の基本土層は、最下位のⅨ層（礫層）、Ⅷ層（黄色砂）の上に黒色砂土のⅦ層が堆積し、続縄文時代宇津内Ⅱa期を中心に縄文時代後・晩期からオホーツク文化刻文期までの遺物が含まれている。上位のⅥ層（黄色砂）、Ⅴ層（暗褐色砂）には主にⅤ層に続縄文時代宇津内Ⅱb期・後北期を中心として宇津内Ⅱa式期からオホーツク文化刻文期までの遺物が含まれている。B地点旧33～60ラインは最下位の遺物包含層の内容が西側の砂丘列4と類似するため、ほぼ同時期に発達した砂丘列と考えられる。しかし、両者は離れた位置にあり連続した状況が確認できていないことから砂丘列4'とした。基本土層は、無遺物のⅩ～Ⅷ層の上位に黒色土のⅦ層が堆積し、続縄文時代後北期を中心として宇津内Ⅱb期の遺物が含まれている。B地点旧61～80ライン（砂丘列5）の基本土層は、無遺物のⅩ～Ⅷ層の上位に黒色土のⅦ層と黒灰砂土のⅥ層が堆積し、主にⅦ層にホーツク文化刻文期を中心とした遺物が含まれている。A地点（砂丘列7）では遺物が出土していないが、摩周b5火山灰の上位に礫層が見られるため、2018年調査区の1～35ラインと同様に11世紀以降に形成・発達した砂丘と考えられる。

2009年調査区と2011年度A地区は遺跡の西部にあたり、範囲内には、砂丘列1（旧l・m・n・oライン）・2（旧d・e・f・g・hライン）と砂丘列3（旧X・Yライン）の裾野部が含まれている。また、砂丘列2の北側には近接した範囲（旧a・b143区付近）に高まりが認められた。層位が連続していることから、この北側の高まりは砂丘列2とほぼ同時期に発達した小砂丘と認識することがで

表II-1 調査年別土層対比表

調査年	←東					←西					東→					
	国道南側					国道北側					東→					
	2008		2009		2011	2011		2012		2018		2018		2018		
A地点 旧1~27㍍	B地点 旧33~60㍍	B地点 旧61~80㍍	B地点 旧81㍍付近	C地点 旧96~139㍍	A地区	B地区		砂丘部	低地部	砂丘部		低地部		砂丘部		
砂丘列	7?	4'	5	3	1	4	4	4	5	5	4	4	5	5	6	7
表土・ボサ	I: 黒色土 II: 茶褐色土 III: 茶褐色土(粗砂含) IV: 灰褐色土 V上: 白色粘土 V下: 黒色粘土	I: 黒色土 II: 黒色土	I: 黒色土 II: 黒色土	I: 黒色土 II: 黒色砂土	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I	I
近世アイヌ文化期	VI VII: 白黒粘土互層 VIII: 灰黒色砂 IX: 灰色砂 X: 灰黒色砂 XI: 灰白色砂 XII: 礫層	II III: 茶褐色土 IV: 黒色砂 V: 黒色砂	II III: 黒色土 IV V: 黒色土	II III: 黒色土 IV V: 黒色土	II III: 黒色土 IV V: 黒色土	II III: 黒色砂 IV V: 黒色砂	II III: 黒色砂 IV V: 黒色砂	II III: 黒色砂 IV V: 黒色砂	II III: 黒色砂 IV V: 泥炭	II III: 黒色砂 IV V: 泥炭	II III: 黒色砂 IV V: 黒色砂	II III: 黒色砂 IV V: 黒色砂	II III: 黒色砂 IV V: 黒色砂	II III: 黒色砂 IV V: 黒色砂	II III: 黒色砂 IV V: 黒色砂	II III: 黒色砂 IV V: 黒色砂
樽前a					II	II	II	II	II	II	II	II	II	II	II	II
駒ヶ岳C2					III: 灰黒色砂 IV: 灰色砂 V: 灰黒色砂 VI: 礫層	III: 灰褐色土 IV: 黒色砂 V: 茶褐色土 VI: 黒灰砂	III: 黒色土 IV V: 黒色土	III: 黒色土 IV V: 黒色土	III: 黒褐色砂 IV V: 泥炭	III: 黒褐色砂 IV V: 泥炭	III: 黒褐色砂 IV V: 黒色砂	III: 黒褐色砂 IV V: 黒色砂	III: 黒褐色砂 IV V: 黒色砂	III: 黒褐色砂 IV V: 黒色砂	III: 黒褐色砂 IV V: 黒色砂	III: 黒褐色砂 IV V: 黒色砂
摩周b5					VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI	VI
オホーツク刻文					IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層	IV: 暗褐色砂土 V: 茶褐色砂土 VI: 黄色砂 VII: 礫層
北大					IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層
後北C2・D					VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体	VII: 黒色土 ※後北主体
後北C1					IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層	IX: 礫層
宇津内IIb					VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層	VIII: 黒白砂 IX: 黒色砂 X: 黄色砂 礫層
宇津内IIa					VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体	VIIa: 黒褐色砂土 VIIb: 暗褐色砂土 ※後北主体
縄文晩期					VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層
縄文後期					VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層
縄文中期					VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層	VIII: 黄褐色砂 IX: 黒褐色砂五層 礫層

↑ 旧河道
↑ 旧河道? 旧河道

き、この部分を砂丘2'と呼称する。ただし2009年調査区の基本土層は、複数の砂丘列を含んだ遺跡全体を平均化したものとなっている。実際の遺物包含層であるⅦ層の細分は、場所ごとに上位から土壌質の砂土（Ⅶa・Ⅶc・Ⅶe）と互層となる風成の砂土（Ⅶb・Ⅶd）に対して命名しており、同一層名が地点間で対応する状況ではない。砂丘列ごとに包含層を対比すると、砂丘列1～2及び2'は発生から移り変わりが急速だったためか、いずれも最下位の礫層上位に縄文時代中期～後期前葉の北筒式土器を多く含む。この内砂丘2'ではⅦc層の下部に北筒式土器、中部にエリモB式土器、晩期の土器、中～上部に続縄文時代の土器がおおよそ時間的な矛盾なく出土した。また、上位のⅦa層からは北大式土器が1点出土している。砂丘列3は砂丘列2のⅦc層下部が堆積していた時期に礫浜であったとみられ、礫層直上のⅦe層から主に晩期の土器がまとまって出土している。また、2011年A地区の範囲内には砂丘列1が含まれており、礫層上位のⅦb～d層にかけて縄文時代中期～晩期の遺物が出土している。

2011年B地区・2012・2018年調査区は東西方向に細長く連続しており、まとめて説明する。範囲内には砂丘列3（2011年B地区の一部）・4（2011年B地区・2012年砂丘部）・5（2012年低地部・2018年55～110ライン）・6（2018年35～55ライン）・7（2018年1～35ライン）がある。砂丘列3・4は裾野部が不整合に重なって観察されており（図Ⅳ-13）、砂丘列3からは遺物は出土せず、基本土層には含まれていない。

2011年B地区と2012年砂丘部（砂丘列4）の基本土層は、礫層の上位にあたるⅨ層は1～5cm程の薄層群が厚く堆積するもので、特徴的な薄層のまとまりを単位として上からⅨa～Ⅸe層に細分している。Ⅸ層中には宇津内Ⅱa式期を中心として後北式期までの遺物が含まれている。上位のⅧ層（黄褐色砂）は2012年調査区で遺物が多く、宇津内Ⅱb式期の遺物を主体としている。Ⅷ層（黒褐～暗褐色砂土）はオホーツク文化刻文期から後北式期を主体とする遺物包含層で、Ⅶ層は上からⅦs・Ⅶa・Ⅶb層に細分している。両年調査区ともⅦ層中に間層となる風成の無遺物層があまり発達しなかったため、それぞれの層位に時期の異なる多様な遺物が出土する状況となっている。しかし、おおむね下位（Ⅶb層）に宇津内Ⅱb式期、下位から中位（Ⅶa・b層）に後北式期、鈴谷式土器、上位（Ⅶs層）にオホーツク文化刻文期の遺物が出土する傾向がみられた。

2012年低地部と2018年55～110ライン（砂丘列5）は、前述の砂丘列4Ⅷ層堆積期（宇津内Ⅱb期）に礫浜となっていた範囲である。礫層上位に黒褐色砂土（2012年低地部Ⅷ層、2018年Ⅶb層）があり、主に後北式期の遺物が出土している。さらに上位には風成の無遺物層を挟んで暗褐色砂土（2012年低地部Ⅶ層、2018年Ⅶa層）があり、オホーツク文化刻文期の遺物が出土している。これは砂丘列4のⅦs層から連続する土層と認識できる。時期の限定的な2枚の遺物包含層が分離して堆積していることが大きな特徴である。

2018年35～55ライン（砂丘列6）は、前述の砂丘列5Ⅶb層堆積期（後北式期）に礫浜となっていた範囲である。表面的には砂丘列5から起伏なく連続するものの、礫層の位置の相違から砂丘列6と認識した。礫層から間層を挟んだ上位に暗褐色砂土のⅦa層があり、オホーツク文化刻文土器が少量出土している。これは前述の砂丘列5のⅦa層から連続する土層である。

2018年1～35ライン（砂丘列7）は、調査区内で最も東側にあたる。摩周b5火山灰を含めてⅡ層の下部まで礫層となっている。Ⅱ層は黒色砂土で、場所によっては上部に駒ヶ岳c₂火山灰や樽前a火山灰が一部分断された形で堆積している。これらの火山灰の上位となるⅡ層上部に貝・魚骨ブロックが広がっており、近世アイヌ文化期の骨角器や鉄製品などが出土している。（直江 康雄）

3 歴史的環境

(1) 概要

斜里町内では平成31年4月1日現在で379か所の遺跡が登録されており、遺跡数は道内の市町村の中でも3番目に多く、遺跡の分布密度も高い。遺跡分布は、縄文海進やその後のラグーンの形成を反映したものになっている。

時系列に概観すると、縄文時代早期の遺跡分布は平野縁辺の比較的高地に分布し、海岸付近や平坦部においては見られない。その理由としては縄文時代前期前半に起こった縄文海進、その後の海退による当時の海岸の浸食作用、湿潤温暖化による河川の発達と平野部の不安定化が挙げられる。この時期の遺跡が仮に海岸域や現在の平坦部に存在していたとしても、こうした自然の営為により消滅している可能性が考えられる。前期後半から中期にかけては海岸部に形成された砂州に遺跡分布が認められるが、平野部中央は大きな空白地帯となっている。ラグーンが広がっていたためと考えられる。

続く縄文時代後期・晩期では砂州の南縁辺部の微高地に遺跡分布がみられるようになるが、これはラグーンが縮小化したためであろう。河川の流域部にも遺跡が分布している。縄文時代後期は中期に比べて確認されている遺跡数が少ない。その原因としては、調査が行われた遺跡による偏りも考えられるが、人口自体が減少した可能性も考えられている。後期前半期は北筒Ⅲ式からⅤ式に相当する。北筒Ⅳ式・Ⅴ式段階は斜里地方ではウトロ型、シャリ型という在地色の強い土器が展開する。幌別川口遺跡（斜里町教委1980）の調査成果により設定されたもので、ウトロ型は頸部に太い隆帯が巡るのを大きな特徴とし、シャリ型は口縁に丸みを帯びた山形突起が4カ所あり、全面に斜行縄文を施した土器である。一方、後期後半期は一転して手稲式、鮎濶式、堂林式、御殿山式等、道内に広がる土器型式が展開する。この時期の遺跡として海岸沿いの砂丘南端縁において環状列石を検出したオクシベツ川遺跡（斜里町教委1980）、それからオクシベツ川とアッカベツ川に挟まれた標高16～17mの緩斜面上に立地する朱円周堤墓（宇田川洋編1981ほか）が特に有名である。環状列石は最大径が約11mで、5～10個の礫からなる立石を伴う小さな環状列石が連鎖状に巡って構成していると報告された。また、環状列石の中心部が浅く掘りこまれ、その底から大きな石が焼土とともに出土した（配石遺構）。朱円周堤墓はA号およびB号の2つからなり、周堤部の内側に配石あるいは積石された土坑墓がある。全面調査がなされていないことから正確な墓の数は不明であるが、斜里町史によればA号で20基以上、B号で1基があると記載され、これらのうち7基が調査されている。土坑墓からは、ヒスイを含む玉類、漆製品片等、多彩な副葬品が出土した。なお平成22・23年（2010・2011年）には、北海道立埋蔵文化財センターが「重要遺跡確認調査」として詳細分布調査を行った。内容は、3次元レーザースキャナを用いた測量調査、遺物・写真その他記録類の資料調査、トレンチによる発掘調査などで、現周堤下に縄文時代の周堤を確認するなどの成果を得た。

縄文時代早期から中期は堅穴住居跡が多く検出されている。一方、縄文時代後期・晩期は墓を多く検出しているものの堅穴住居跡がほとんど確認されていない。あるいはこの時期、堅穴住居から平地住居等へと住居構造が変換していたのかもしれない。

続縄文時代はこれまでに町内で発掘調査が行われた中で、もっとも多くの資料が出土している時期である。砂丘列が安定化し、海岸林が形成された段階であり、そのことを反映して砂丘上および縁辺部に遺跡が集中する。逆に、河川の支流域での遺跡分布は続縄文時代を境にして減少に転じている。

オホーツク文化を含む擦文文化期、アイヌ文化期も海岸砂丘上に集落を形成する傾向は継続する。これは、生活基盤が河口部あるいは海岸に置かれていたことの反映でもある。オホーツク文化ならば擦文文化の堅穴住居跡は、比較的新しいため今なお埋まり切らないくぼみとして多くが砂丘上に点

在し、その数は町域全体で優に1,000軒以上が数えられている。これらは海岸砂丘林、防潮保安林内に位置することから保存状態は極めて良好である反面、調査が行われなかったため詳しいことはわかっていない。なお、北方から渡道してきた集団であるオホーツク文化と在来集団の擦文文化は時期が重なる上に居住地域も重なるため、斜里町内では共存していた可能性が高いとみられている。

アイヌ文化期は知床半島沿岸域に多くのチャシが点在する。当遺跡周辺にも、西側の砂丘列に広がる朱円竪穴住居跡群遺跡の範囲内にウナベツチャシが存在する（分布図外）。また、当遺跡の西にウナベツコタンが存在し、幕末期に松浦武四郎が訪れている。当遺跡では元文4（1739）年降灰の樽前a火山灰より上位において貝・骨ブロック10か所等を検出した。

（2）周辺の遺跡（図Ⅱ-5、表Ⅱ-2）

峰浜地区において発掘調査が行われた遺跡につき、調査結果の概要を略記する。（「（ ）」内番号は、北海道教育委員会遺跡台帳掲載番号）

【峰浜海岸1遺跡】（10）

竪穴住居跡は縄文時代前期の朱円式期が6軒、前期と考えられるもの1軒、中期の北筒式期が3軒検出された。前期の住居跡のうち1軒は焼失家屋であり、この中から石斧や石鋸が多数出土した。住居跡の特徴は隣接するポンシュマトカリベツ9遺跡とほぼ同内容であるが、多くは近接する竪穴同士で重なり切り合っていた。土坑墓は前期と考えられるもの4基を検出した。土坑墓は平面形が円形で、住居内あるいは住居に近接している。長軸2mを超える大型のものもある。底面からベンガラは検出されていないが、焼土や炭化物が伴うものがある。竪穴住居跡から出土した木炭を試料とする炭素同位体年代測定の結果は、補正值で $5,080 \pm 70$ yBPである。

【峰浜8線遺跡】（31）

縄文時代中期末～後期初頭（北筒Ⅱ式～Ⅲ式期）の竪穴住居跡9軒、土坑16基を検出した。竪穴住居跡は大型2軒と小型7軒からなる。ほかに北筒Ⅱ式期の焼土群1基、後期初頭北筒Ⅲ式期の盛土状遺構1基、時期不明の集石遺構1基を検出している。盛土状遺構は上下2枚に大別され、下部から焼土群や土坑を検出した。

【ポンシュマトカリベツ1遺跡】（105）

縄文時代中期末～後期初頭（北筒Ⅱ式・Ⅲ式期）の竪穴住居跡3軒、竪穴状遺構2基、屋外炉1基、土坑14基を検出した。土坑のうち4基は墓の可能性はある。ほかに縄文時代晩期の屋外炉1基、オホーツク文化期の焼土跡1か所を検出している。オホーツク文化期の焼土跡には近接して無文の倒置土器1個体と台石が伴っている。

【ポンシュマトカリベツ9遺跡】（113）

竪穴住居跡は縄文時代早期が7軒、前期が6軒、中期が7軒検出された。早期の住居跡はいずれも大型で、配置関係や調査範囲から10軒を超える集落があったと推測されている。早期中頃の沈線文を主体とした土器が出土し、住居跡から貝殻文を特徴とする沼尻式土器も出土した。前期の竪穴住居跡は朱円式土器を伴う。平面形が隈丸多角形のものや楕円形のものがあり、最大長は3～10mを超えるものまである。竪穴の深度は、小規模のものでは浅く、大型のものは概して深い。この傾向は縄文時代早期同様である。朱円式期の竪穴住居跡から出土した木炭を試料とする炭素同位体年代測定の結果は補正值で $5,190 \pm 80$ yBPであった。縄文時代中期末（北筒式期）の住居跡は平面形が様々であるが竪穴の掘り込みは概して浅めで、規模は縄文時代早期・前期より小型のものが多い。比較的大型の住居は床面中央に炉を有し、壁際に沿って柱穴が巡るものが多い。ほか、縄文時代晩期の土坑墓3基を検

出した。うち2基は土坑上部に配石を伴う。配石は径30cm以上の大型礫が多く、中には台石も含まれていた。また配石下部からは木炭等が見られ、土坑内で火を焚いたか、あるいは付近で火を焚き、その土を入れた可能性も考えられている。副葬品は土器や石器のほかに、蛇紋岩性の飾り玉もある。

【ボンシュマトカリベツ13遺跡】(117)

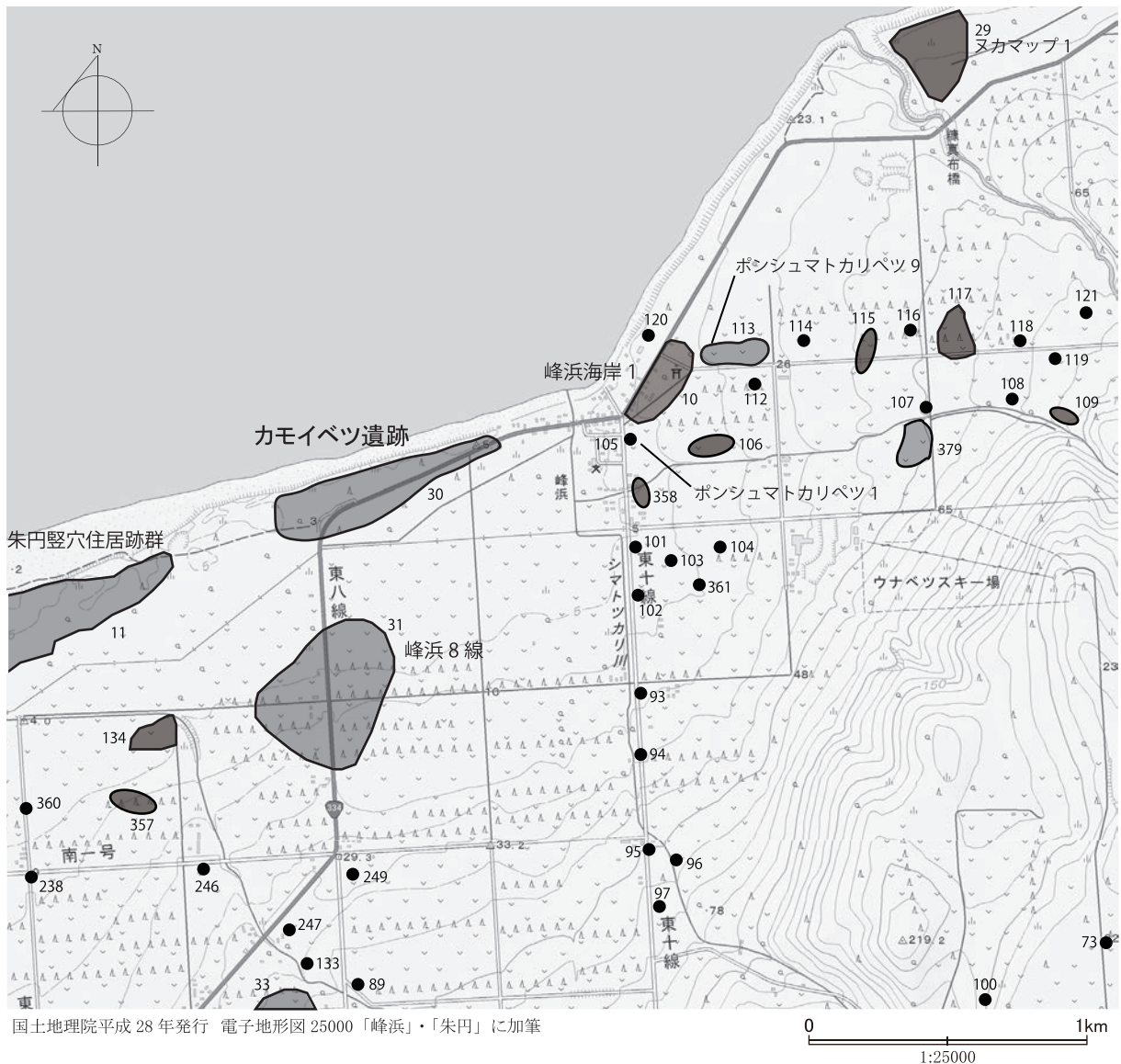
縄文時代中期末北筒式期の竪穴住居跡1軒、土坑3基、焼土49か所を検出した。土坑3基のうち2基は集石を伴っている。

【シュマトカリベツ9遺跡】(101)

竪穴住居跡は縄文時代早期3軒、中期末北筒式期5軒を検出した。早期の竪穴住居跡は大型で、出土土器片からテンネル式期の可能性が考えられている。中期末の竪穴住居跡は平面形が隈丸多角形、円形、楕円形、不定形と様々であるが、総じて規模は縄文時代早期・前期より小型である。

【ウナベツ24遺跡】(357)

縄文時代晩期の土坑墓1基、土坑2基、焼土遺構5か所を検出した。土坑墓内から土器が1個体分まとまって出土した。(影浦)



図II-5 周辺の遺跡

表Ⅱ-2 周辺の遺跡

登録No.	遺跡名	種別	時代時期	立地	標高	調査履歴(刊行年)
10	峰浜海岸1遺跡	集落跡	縄文(前・中・後・晩期)、 続縄文、アイヌ	シマトカリ川右岸の砂丘	10m	1998(1999)・2006(2007)町教委
11	朱円堅穴住居跡群遺跡	集落跡	縄文(中・後・晩期)、続縄文、 オホーツク、擦文	海岸砂丘	10~15m	
29	スカマップ1遺跡	集落跡	縄文	スカマップ川河口右岸段丘	25m	
30	カモイベツ遺跡	集落跡	縄文(後期)、続縄文、 オホーツク、アイヌ	海岸砂丘	5m	2008・09・11・12 町教委 2017・18(2020)本報告
31	峰浜8線遺跡	集落跡	縄文(中・晩期)、続縄文、擦文	砂丘裏側の低湿地沿い	5m	2010・12(2013)町教委
33	ウナベツ2遺跡	遺物包蔵地	縄文(中・晩期)	海別川左岸段丘	30~40m	
89	ウナベツ3遺跡	遺物包蔵地	縄文	ウナベツ川右岸 丘陵緩斜面	45m	
93	シュマトカリベツ1遺跡	遺物包蔵地	縄文(中期)	シマトカリ川右岸 丘陵緩斜面	20m	
94	シュマトカリベツ2遺跡	遺物包蔵地	縄文(中期)	シマトカリ川右岸 丘陵緩斜面	30m	
95	シュマトカリベツ3遺跡	遺物包蔵地	縄文(中期)	シマトカリ川左岸 丘陵斜面	50m	
96	シュマトカリベツ4遺跡	遺物包蔵地	縄文(中期)	シマトカリ川右岸 丘陵斜面	60m	
97	シュマトカリベツ5遺跡	遺物包蔵地	縄文(中期)	シマトカリ川左岸 丘陵斜面	65m	
99	シュマトカリベツ7遺跡	遺物包蔵地	縄文	シマトカリ川右岸 丘陵斜面	200m	
101	シュマトカリベツ9遺跡	集落跡	縄文(早・前・中・晩期)	シマトカリ川右岸 沖積低地	8~9m	1993(1994)町教委
102	シュマトカリベツ10遺跡	遺物包蔵地	縄文(早・中・晩期)	シマトカリ川右岸 沖積低地	10m	
103	シュマトカリベツ11遺跡	遺物包蔵地	縄文(中・晩期)	シマトカリ川右岸 沖積低地	10m	
104	シュマトカリベツ12遺跡	遺物包蔵地	縄文(中・晩期)	シマトカリ川支流右岸、丘陵裾	25m	2007(2008)町教委
105	ボンシュマトカリベツ1遺跡	集落跡	縄文(早・前・中・晩期)、 オホーツク	マクンベツ川右岸 沖積低地	8m	2010(2011)町教委
106	ボンシュマトカリベツ2遺跡	遺物包蔵地	縄文(中期)	マクンベツ川右岸 丘陵裾	20m	
107	ボンシュマトカリベツ3遺跡	遺物包蔵地	縄文(中・晩期)	マクンベツ川右岸 丘陵斜面	50m	
108	ボンシュマトカリベツ4遺跡	遺物包蔵地	縄文(中期)	マクンベツ川右岸 丘陵斜面	70m	
109	ボンシュマトカリベツ5遺跡	遺物包蔵地	縄文	マクンベツ川右岸 丘陵斜面	80m	
112	ボンシュマトカリベツ8遺跡	遺物包蔵地	縄文(中・晩期)	2本の小流に区切られた丘陵裾	25m	
113	ボンシュマトカリベツ9遺跡	集落跡	縄文(早・前・中)、擦文	小流右岸 段丘裾	25m	1997・98(1999)町教委
114	ボンシュマトカリベツ10遺跡	遺物包蔵地	縄文(中・晩期)	小流右岸 丘陵緩斜面	30m	
115	ボンシュマトカリベツ11遺跡	焼土群	縄文(中・晩期)	小流右岸 丘陵緩斜面	40m	1996(1999)町教委
116	ボンシュマトカリベツ12遺跡	遺物包蔵地	縄文	小流右岸 丘陵緩斜面	45m	
117	ボンシュマトカリベツ13遺跡	集落跡	縄文(早・中・晩期)	小流右岸 丘陵緩斜面	55m	1995(1999)町教委
118	ボンシュマトカリベツ14遺跡	遺物包蔵地	縄文	小流右岸 丘陵緩斜面	70m	
119	ボンシュマトカリベツ15遺跡	遺物包蔵地	縄文	丘陵斜面	80m	
120	峰浜海岸2遺跡	遺物包蔵地	縄文(晩期)	海岸砂丘	10m	
121	スカマップ2遺跡	遺物包蔵地	縄文	スカマップ川左岸 丘陵斜面	80m	
131	ウナベツ7遺跡	遺物包蔵地	縄文(中期)	ウナベツ川右岸 丘陵緩斜面	35m	
134	ウナベツ8遺跡	遺物包蔵地	縄文	ウナベツ川左岸 丘陵裾	5m	
238	朱円22遺跡	遺物包蔵地	縄文(中期)	旧河川右岸	7.5~10m	
246	ウナベツ19遺跡	遺物包蔵地	縄文	海別川左岸	22.5~25m	
247	ウナベツ20遺跡	遺物包蔵地	縄文(中・晩期)	海別川右岸	325~335m	
249	ウナベツ22遺跡	遺物包蔵地	縄文	海別川右岸	32m	
357	ウナベツ24遺跡	遺物包蔵地	縄文(晩期)	ウナベツ川左岸 緩斜面段丘上	15m	2007(2008)町教委
358	ボンシュマトカリベツ16遺跡	遺物包蔵地	縄文(中・晩期)	マクンベツ川の両岸、 旧ボンシュマトカリベツ川の左岸	8m	2011(2012)町教委
360	朱円47遺跡	遺物包蔵地	縄文	河川堆積物により形成された低位台地	5~7m	
361	シュマトカリベツ13遺跡	遺物包蔵地	縄文(早・前・中期)	無名の小川(シュマトカリ川の支流)の左岸台地	10~20m	2007(2008)町教委
379	ボンシュマトカリベツ17遺跡	遺物包蔵地	縄文(早・中・晩期)	マクンベツ川左岸緩斜面	40~50m	

Ⅲ章 2017・2018年の調査と出土遺物

1 調査の概要

(1) 調査の方法と経過

【2017年】

次年度の発掘調査に向けた予備的な測量調査で、調査予定区域の草刈りとドローンを活用した空中撮影および写真測量を行った。

草刈りを行った結果、調査区東部では砂採取などの後世の攪乱とみられる大規模な窪地が連続していた。しかし、調査区中央部には多角形とみられる深さ80cmほどのくぼみが1か所確認でき、竪穴住居跡の可能性があるものとみられていた（2018年調査で攪乱と判明）。

空中撮影は、調査区全景および遠景の撮影を多方向から行った。写真測量は、調査区の真上から一部が重複するよう連続撮影し、オルソ画像を作成して地形図に変換した。3D画像の作成も行った。

【2018年】

同調査区の本発掘である。調査区が細長いことや、排土場が調査区内と西側調査区外の一部のみであったことから調査区を4回に分け、排土通路を確保するため各回ともさらに分割しながら調査を行った。第1回目は調査区西部の110～83ラインで5月15日～6月22日、第2回目は調査区西部～中央部の83～58ラインで6月26日～8月24日（盆休み1週間を挟む）、第3回目は調査区中央部～東部の58～32ラインで8月28日～9月27日、第4回目は調査区東部の32～5ラインで10月1日～10月17日に調査を行った。

表土除去については過年度の調査結果から、第1～3回目はⅥ層（摩周b5降下軽石層）上面までを重機により除去し、Ⅶ層を調査対象とした。遺物を包含するⅦa層・Ⅶb層は手掘り、間層（Ⅶ層）はスコップを併用し、調査区境に設定したトレンチ調査の状況からⅦb層下面を最終掘削面とした。第3回目後半でⅥ層以下が礫層に移行し遺物が出土しない一方、Ⅱ層相当の土壌から貝が出土したことから近世貝塚の検出を想定し、第4回目はⅡ層上面までを重機により除去し樽前a火山灰の面までを調査対象とした。

検出された遺構は、土層観察用のベルトを設けトレンチ調査を初め随時調査を行った。出土した遺物は、遺構出土のものや集中出土のものについて選択的に出土状況の図化や地点計測を行った（「点上げ」）。それ以外は発掘区ごと・層位ごとに取り上げた。また遺物分布範囲の広いⅦb層については、分布状況を視覚的にとらえられるよう極力遺物分布図を作成した。

焼土など、微細な遺物が含まれることが見込まれる土壌についてサンプリングを行いフローテーション作業を行った。

記録類

地形測量図・土層断面図・遺構平面図・遺構断面図・遺物出土状況図などを作成した。地形測量は調査区内において2mごとに標高を測量し、コンター図を作成した。

写真撮影は、リバーサル6×7判、デジタルカメラを用いた。6×7判は広域を対象とした撮影や主要遺構・遺物など選択的に使用した。デジタルカメラは高画質一眼レフカメラとコンパクトデジタルカメラを用い、全撮影対象に使用した。

(2) 発掘区の設定 (図Ⅲ-1)

2017年の測量調査の際に、改めて発掘区を設定した。現地において過年度の基準点が不明であったことや、過年度を含めた全調査区の設定を行うことによる。なお発掘区の単位は、過年度は5mメッシュであったが、今回は4mメッシュとした。

発掘区の基準点は、国道334号のセンターライン、起点(羅臼町本町36-1)から57.4kmポイント(57,400)と57.5kmポイント(57,500)を用い、これを結ぶ線を基軸のMラインとした。57,400ポイントに直交する線を50ラインとし、交点を「M50」とした。これを基軸として4mメッシュでラインを設定し、北から南へアルファベット、東から西へ算用数字を付した。調査区内のそれぞれの交点に杭を打ち、4mごとに方形区画された範囲の北東側(海側、ウトロ側)の杭を発掘区の呼称とした。

基準点の座標値は、以下のとおりである。座標系は、世界測地系平面直角座標系第XⅢ系である。なお設定に当たっては、周辺の四等三角点「峰浜」・「島戸狩」、3級基準点「H19-網道-01」、二等水準点第10052号(峰浜164番地2)を使用し、基準点等を設置し利用した。

〔調査区基準点〕

57,400 (M50) X = -7,721.447 Y = 43,349.742

57,500 (M75) X = -7,765.583 Y = 43,260.009

〔3級基準点〕

H19-網道-01 X = -7,633.004 Y = 43,523.7954 H = 5.381m

北緯43°55' 48.0384" 東経144°47' 31.4445"

(3) 土層

基本土層(2018年)は以下の通りである。

I層：表土～近年の砂丘等。

II層：暗褐色砂壤土。

層中に樽前 a (1739年降下) および駒ヶ岳 c₂ (1694年降下) 火山灰を含む。

III層：褐色泥炭

IV層：灰白色粘土層。摩周 b 5 降下火山灰と粘土が混じる再堆積層。

V層：黒褐色砂層。

VI層：摩周 b 5 降下軽石層(10世紀ころ)

明瞭な鍵層。調査区全域に10～15cm堆積する。

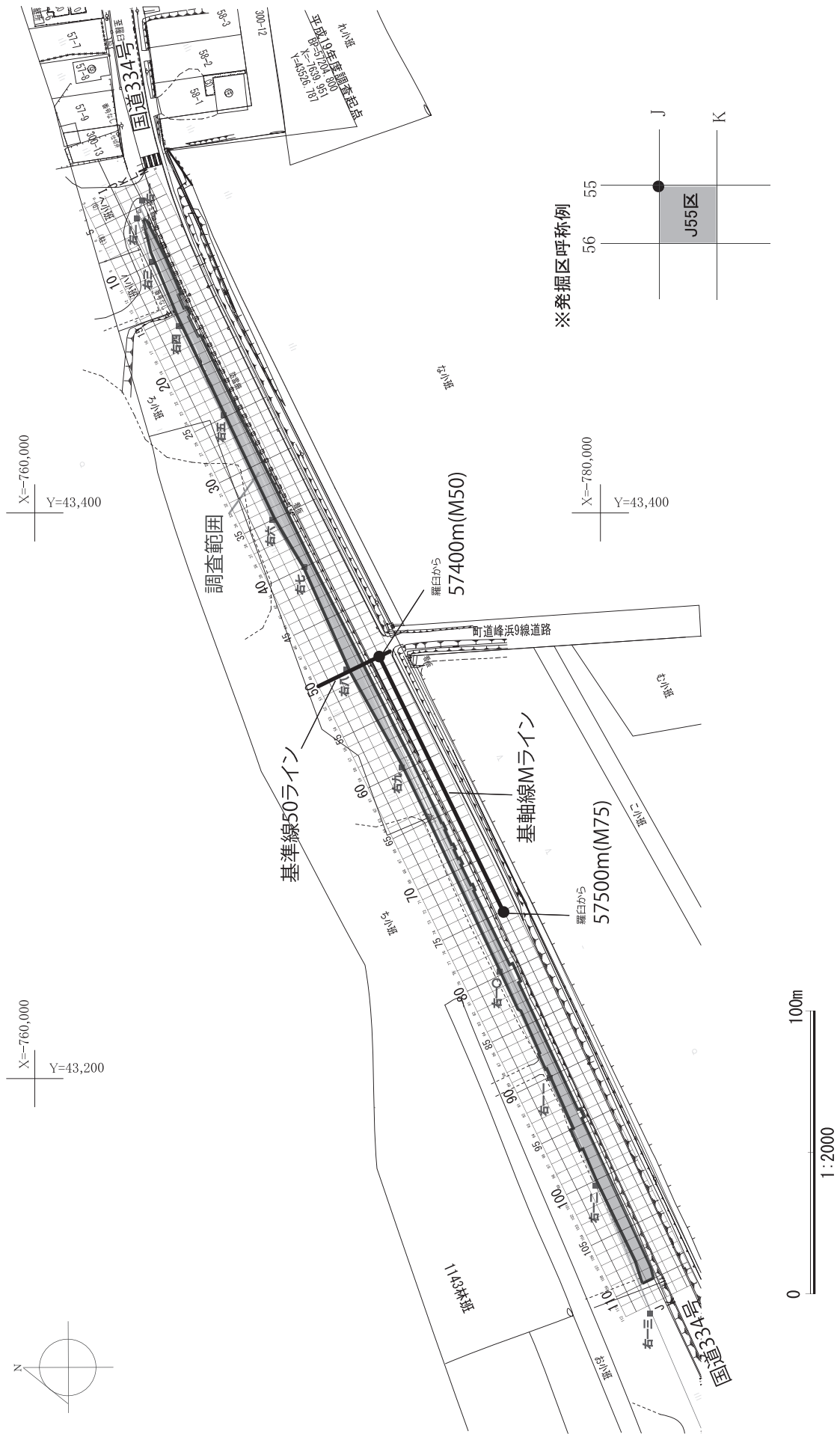
VII層：砂層……黄褐色砂と黒褐色砂の互層。

VII a 層：VI層下の黒褐色砂層。オホーツク文化期の遺物を含む。

VII b 層：黄褐色砂層間にある黒褐色砂の薄層。続縄文時代後半期の遺物を含む。

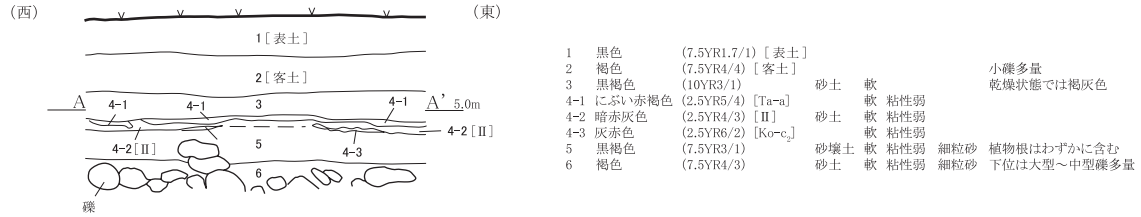
VIII層：砂層……青灰色砂・黄褐色砂。無遺物。

また調査区を横断するトレンチや境界壁面で土層断面図を作成した(図Ⅲ-2～5)。

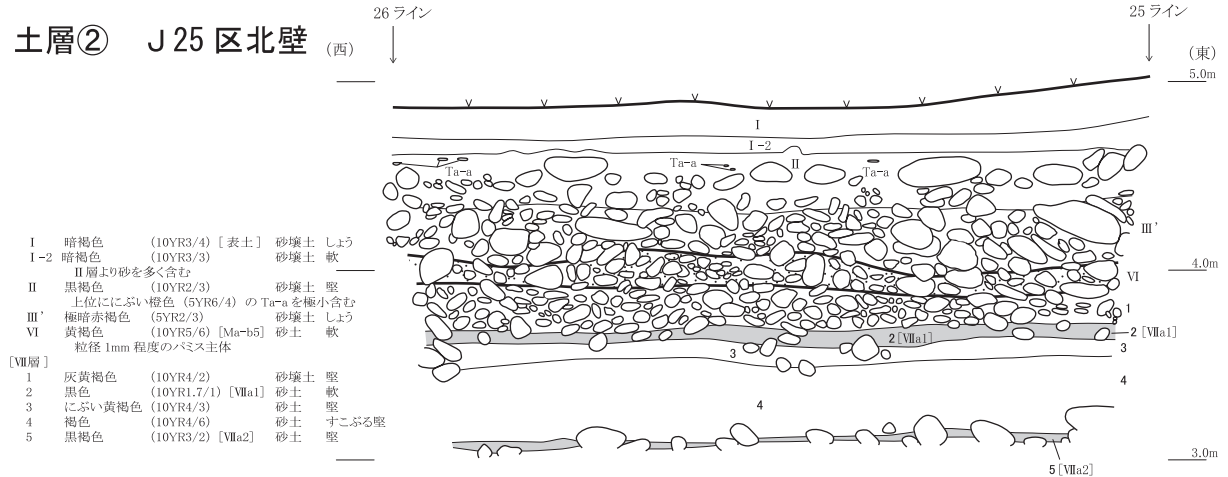


図III-1 2018年発掘区設定図

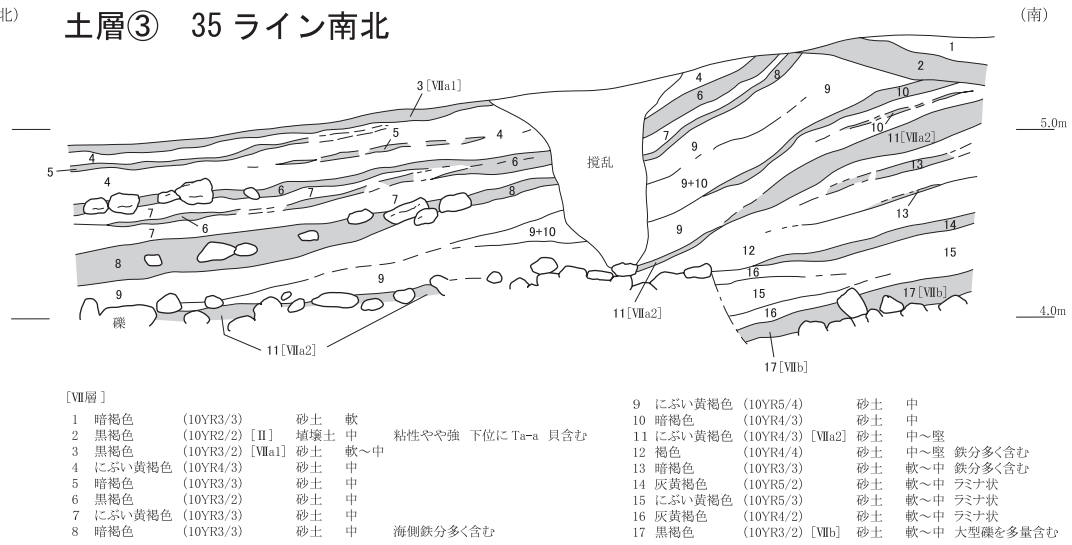
土層① J 21 区北壁



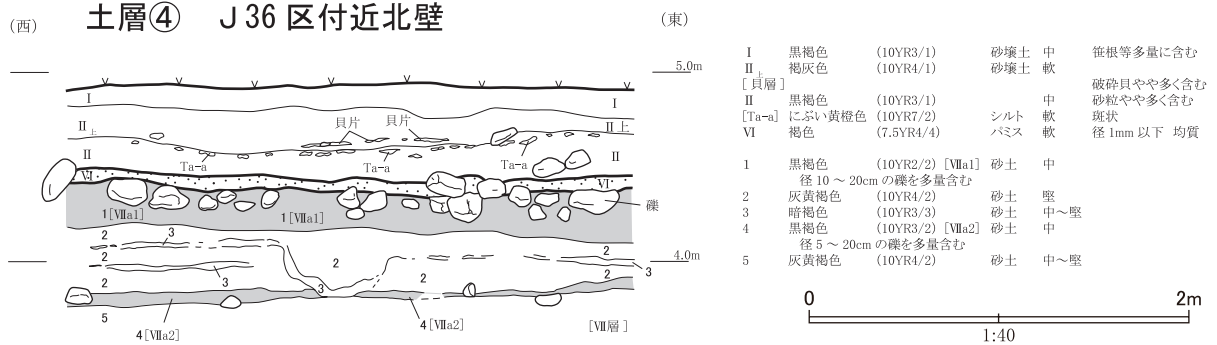
土層② J 25 区北壁



土層③ 35 ライン南北

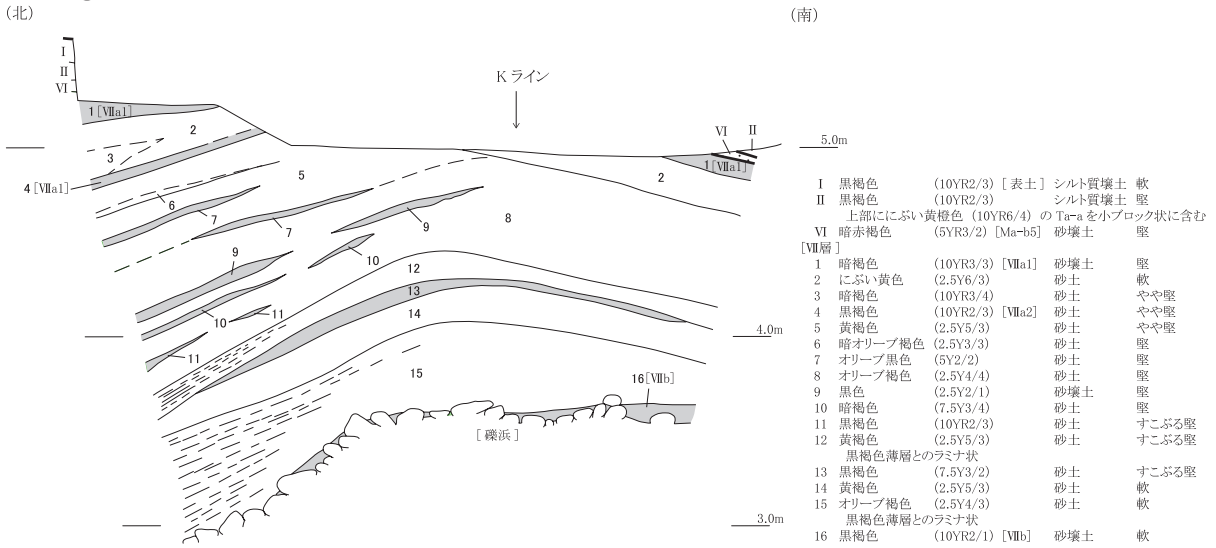


土層④ J 36 区付近北壁

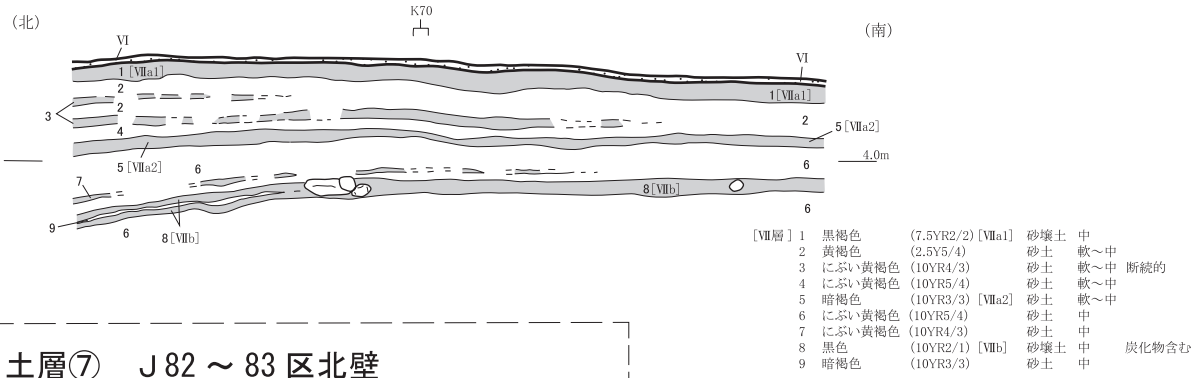


図Ⅲ-2 調査区土層断面 (1)

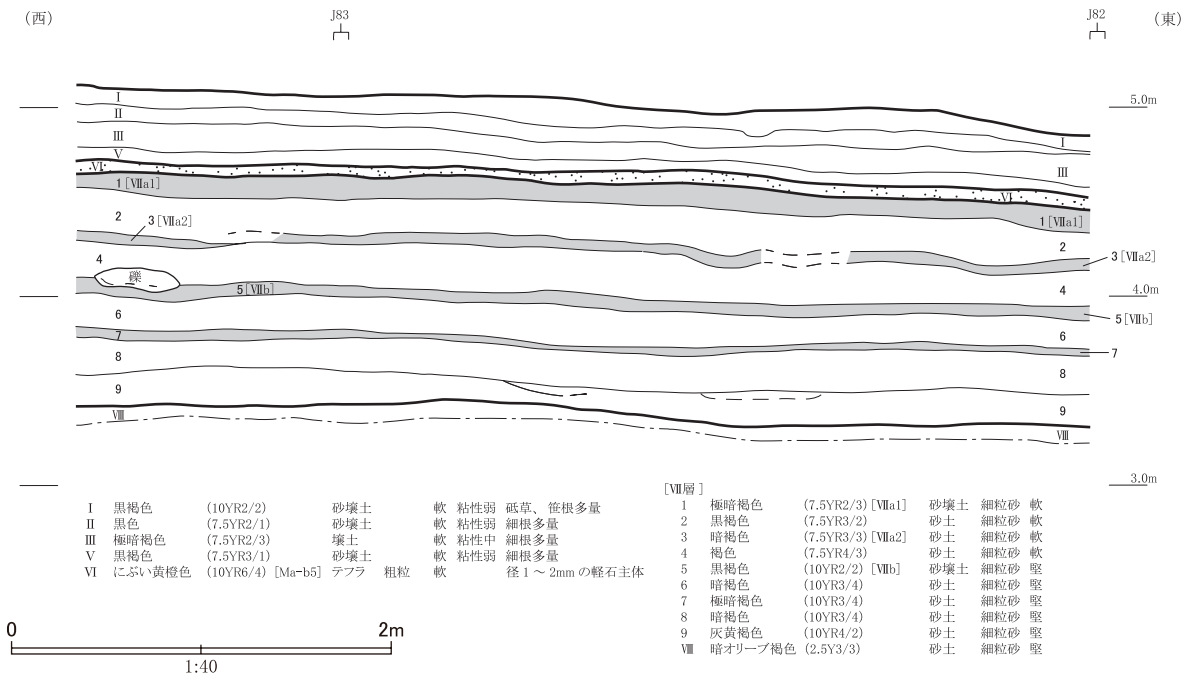
土層⑤ 40.5 ライン南北



土層⑥ 70 ライン南北

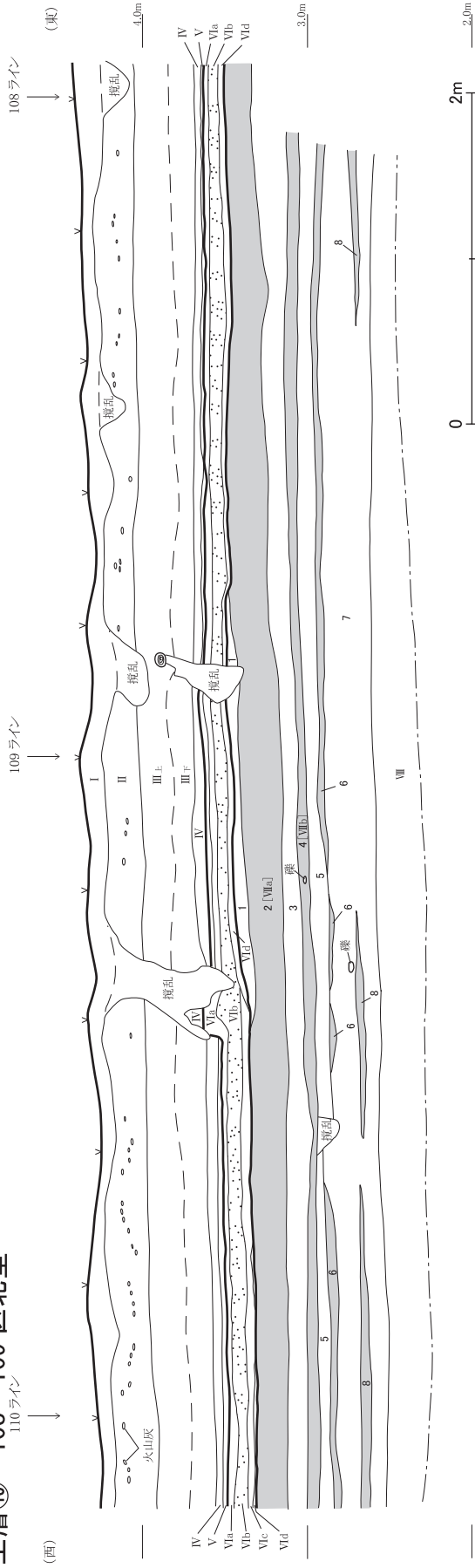


土層⑦ J82～83 区北壁



図III-3 調査区土層断面(2)

土層⑩ 108・109区北壁



- 【土層】
- I 黒褐色 (10YR2/2) 〔表土〕 埴壌土 堅
 - II 黒褐色 (10YR2/3) 埴壌土 軟
 - III 暗褐色 (10YR3/3) 埴土 硬
 - III F 暗褐色 (10YR2/3) 埴土 硬
 - IV 灰白色 (7.5YR8/1) 埴土 硬
 - V 黒褐色 (10YR2/3) 埴土 硬
 - Va 明褐色 (7.5YR7/2) 〔M1-15〕 埴壌土 堅
 - Vb にぶい黒褐色 (10YR7/5) 〔M1-15〕 砂土 堅
 - Vc 暗灰色 (5YR6/1) 〔M1-15〕 埴土 堅
 - Vid 黒褐色 (10YR3/1) 埴土 堅
- 【VII層】
- 1 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂土 軟～堅
 - 2 黒褐色 (10YR3/1) 〔VIIa〕 砂土 軟～堅
 - 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂土 軟～堅
 - 4 黒褐色 (10YR2/2) 〔VIIb〕 砂土 軟～堅
 - 5 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂土 軟～堅
 - 6 黒褐色 (10YR2/3) 砂土 軟～堅
 - 7 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂土 軟～堅
 - 8 暗褐色 (10YR3/4) 砂土 軟～堅
 - VII 暗灰色 (N1.5/3) 砂土 堅
- 灰黄褐色 (10YR6/2)、灰白色 (10YR7/1) の火山灰を列点状に含む。1mm 前後の炭化物粒 1%。埴土粒 0.5%。1mm 前後の炭化物粒 0.5%。中央部に炭の薄層を部分的に含む。下部ほど粒度が大きく砂質が強まる。1～2mm 前後のメス玉体。遊脚全体に広がる層。下位に炭の薄層を部分的に含む。粒度極小の火山灰。中～下部に炭の薄層を含む。

〔土層断面図位置〕

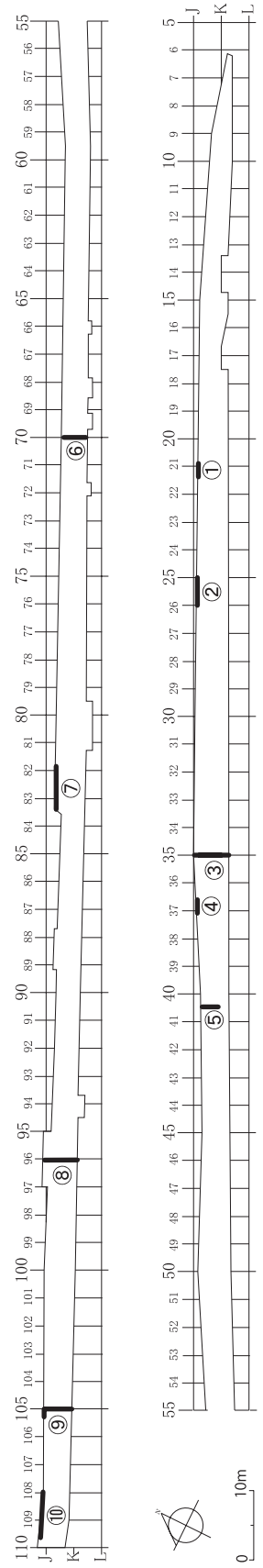


図 III-5 調査区土層断面 (4)

(4) 整理作業の方法

一次整理

現地での整理作業は、主に雨天等で発掘作業が困難な日を利用しながら行った。遺物については、水洗・乾燥・分類・計量・遺物台帳作成・仮収納などを行った。採取した土壌サンプルについて、フローテーション法により水洗選別した。また土壌ごとに取り上げた貝・骨等の自然遺物については、1mmメッシュのふるいを用いてシャワー水洗を行った。そのほか遺構図の点検・写真フィルム整理などを行った。

注記は主に土器・石器について、江別市の北海道埋蔵文化財センター整理作業棟で行った。

※遺物注記内容

「遺跡名」. 「遺構名」または「発掘区」. 「層位」(. 「遺物番号」)

例； (遺構) MK B. H-19. フク土 2. 15

(包含層) MK B. K85. VII b

※「MK B」……「峰浜・カモイ・ベツ」、斜里町教育委員会に準拠

二次整理

北海道埋蔵文化財センター整理作業棟で行った。遺物整理について、土器は接合・復元作業を行い、19個体の土器を復元し、実測・トレースを行った。また70点あまりについて拓本作業を行った。それらを取りまとめ、図版作成・一覧表作成・写真撮影を行った。石器は一部礫石器の接合作業を行った。また分類を見直し、報告書掲載石器を抽出した。実測・トレースを進め、図版作成・一覧表作成・写真撮影を行った。

木製品・金属製品は、観察・簡易的なクリーニング等事前の作業後、第1調査部第1調査課が保存処理を行った。一部の金属製品について保存処理を外部委託した。保存処理後、実測・トレース、写真撮影を行った。

貝・骨ブロックの水洗試料は、貝・魚骨・獣骨の別のほか炭化木片・微細な石器剥片・礫片などを区分した。貝は、調査区に近い峰浜海岸で採取した現生標本などをもとに分類・計量・計数を行い一覧表にまとめた。魚骨・獣骨は、分類可能とみられるものと分類が困難とみられるもの(フレイク)とを分けた。その後の詳細な同定作業は、東海大学国際文化学部内山幸子氏の指導のもと行った。なお一部の獣骨片・骨角器について、接合作業、B72塗布を行ったものがある。

フローテーション法による水洗選別資料は、まず微細な土器・石器ほかについて、肉眼による選別により回収した。浮遊物について拡大鏡等を用いて種子など微細な遺物を選別回収した。炭化種実について、同定を委託した。

遺構挿図は、素図作成後Adobe Illustratorを用いてデジタルトレースを行った。遺物実測図は、ロットリング等でトレースした図をスキャナーでデジタル化することを基本としたが、拓本土器断面図についてはデジタルトレースを行った。遺物挿図はAdobe Illustratorを用いて、版面にレイアウトし作成した。また遺構・遺物写真図版作成ではデジタル写真を使用し、Adobe InDesignを用いて版面にレイアウトし作成した。

そのほか表作成、原稿執筆を行い、報告書編集作業を行った。

遺物・記録類の保管

整理終了後の遺物は「報告書掲載遺物」と「非掲載遺物」に区分してダンボール箱(復元土器)およびコンテナに収め、「遺物収納台帳」に記載した。本報告書刊行後、北海道教育委員会の指示により移管予定である。写真・図面等の記録類は、当センターで保管される。

(5) 調査結果の概要 (図Ⅲ-6)

調査の結果、続縄文時代後半とオホーツク文化期の中ころ、そしてアイヌ文化期の遺構・遺物を検出した。遺物は約19,500点を数えた(自然遺物除く)。

【続縄文時代】

調査区西部(斜里側)～中央部にかけてのⅦb層で、後北C₂・D式期の住居跡1軒、土坑1基、柱穴状小土坑10基、焼土(「焼砂」)16か所、フレイクチップ集中5か所を検出した。なお調査区中央部～東部方面は徐々に標高を下げ3m以下となり、礫浜が広がり遺物は皆無であった。

遺物出土状況の特徴として、焼土と大小の礫を中心とし黒曜石の微細な剥片や土器片(後北C₂・D式)などが広い範囲から出土するという傾向にある。また時折一個体や半個体のまとまった土器が出土している。焼土は標高4m前後の砂丘肩部付近に列するものが多い。径50～100cm・被熱層の厚さ5～10cmほどの規模で、上面に微細な骨片を含み周囲に炭化木片が散在するものがある。「住居跡」としたものは、掘り込みはなく4mほどの範囲に焼土と柱穴状小土坑で構成される。

【オホーツク文化期】

調査区西部(斜里側)のⅦa層で、刻文期の堅穴3軒、集石土坑1基、集石2か所、フレイクチップ集中1か所を検出した。なお調査区中央部は集石1か所とわずかな遺物が出土するのみで、調査区東部方面は徐々に標高を下げ、礫浜が広がり遺物は皆無であった。

今回特筆すべき遺構として、検出例が少ない刻文期の「小型堅穴」が挙げられる。典型的な大型多角形の堅穴住居跡と異なり、径2.2～3.1mの方形(1軒は多角形)である。貼床・溝・柱穴・骨塚(祭壇跡)などの施設を欠くが、方形に配された石組炉が明瞭に残る(1軒除く)。堅穴1軒(H-21)の覆土には上層遺構として集石があり、刻文土器が出土している。集石土坑は円形土坑に一部油脂の付着した焼け礫が密に詰まっており、坑底には太い燃焼材が残存する。

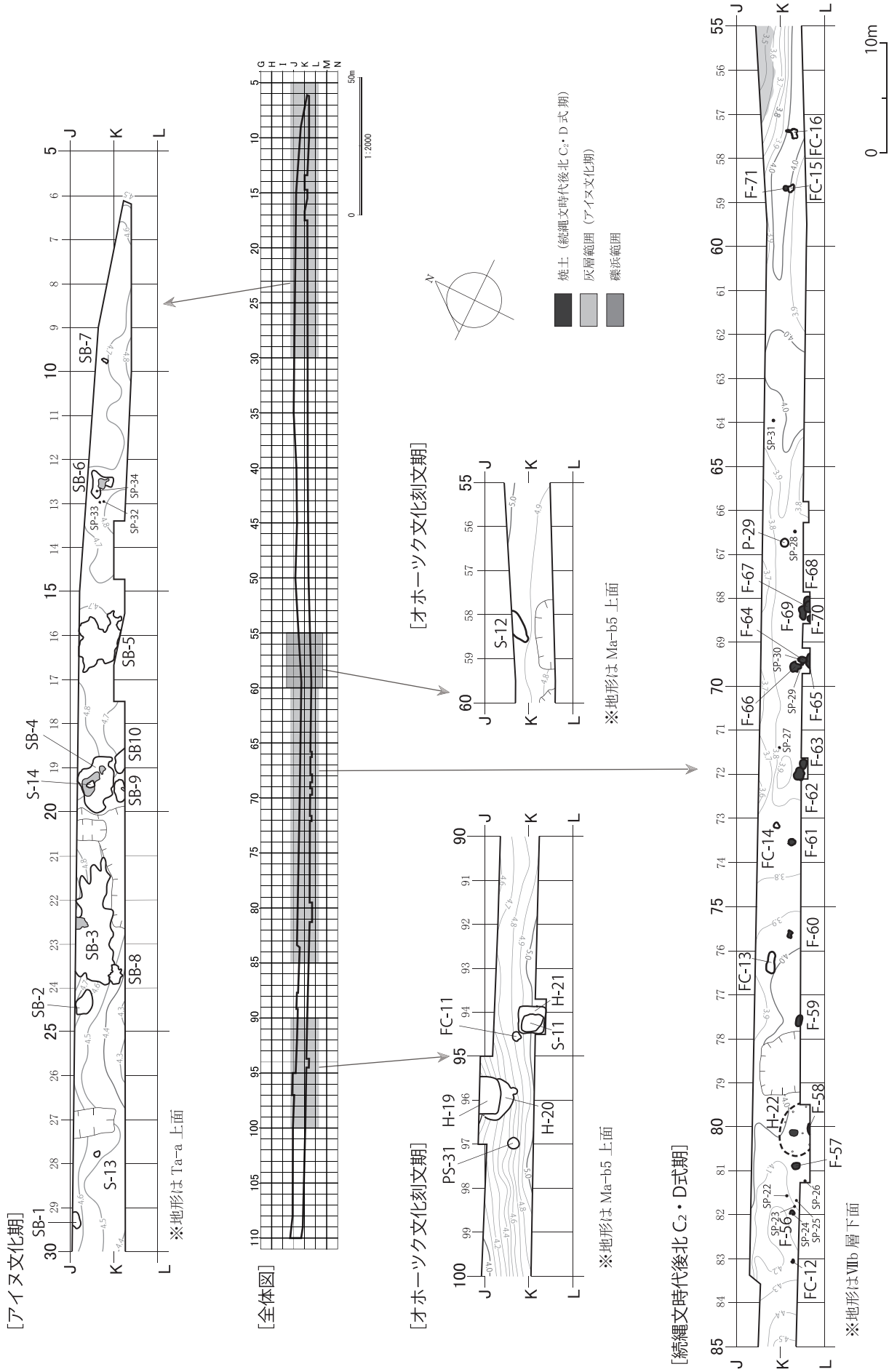
【(近世)アイヌ文化期】

調査区東部(ウトロ側)のⅡ層、樽前a火山灰より上位において、貝・骨ブロック10か所、柱穴状小土坑3基、集石2か所を検出した。

貝・骨ブロックは、Ⅱ層中の樽前a火山灰より上位にあり、面的に薄く広がる。ただし一部は灰層を伴い、魚骨を主体に最大10cm程度の厚みをもつ。貝はピノスガイ・ウバガイを主体とし、ホタテガイ、サラガイなど扁平な二枚貝のほか巻貝も少数みられ、現在の峰浜海岸に打ちあがる貝殻の構成に近似する。魚骨はサケ科、カジカ科、タラ科、ヒラメ・カレイ類、カサゴ類ほか、獣骨はシカ・イヌなどの陸獣やアザラシなどの海獣類が少数確認できる。

遺物は、金属製品では鉄鍋(攪乱出土)・鎌・斧・刀子・釘類、銅製(または真鍮)の環状製品などが出土している。骨角器では、銛先(3点のうち1点は銅銛基部が残る)、刺突具、その他獣骨加工品などがある。また樹皮が複数出土しており、灯火用の素材の可能性もある。そのほか、いわゆる「棒状礫」に近似する集石が貝・骨ブロックの内外から2か所検出されており、立地から魚網の錘石などの利用が考えられる。

(阿部)



図III-6 2018年調査区遺構位置図

2 遺構の調査とその遺物

a 続縄文時代の遺構

(1) 住居跡

1軒(H-22)を検出した。時期は、構築面や周辺の出土遺物から続縄文時代後半の後北C₂・D式土器の時期である。

H-22 (図Ⅲ-7・8 表Ⅲ-1・2 図版4・10・41)

確認・調査：Ⅶb層を調査中に焼土とそれを取り囲むような柱穴状小土坑を複数確認した。柱穴状小土坑は焼土の東側に3基、西側に2基の計5基検出し、南側の調査区外にも続くと思われる。また、焼土の南側にメノウの石核を埋設した小土坑も見られた。住居跡を想定し周辺を精査しながら調査を進めたが、明確な掘り込みは確認できなかった。これらの付属遺構の存在と位置関係から簡易的な平地式住居跡と認定し、柱穴状小土坑の配置を元に楕円形の住居の範囲を想定した。構築面はⅦb層である。

付属遺構：焼土1か所、土坑1基、柱穴5基を検出した。

〔炉〕H-22HF-1

柱穴から想定した平面形のうち、中央やや北西寄りにある長径72cmの地床炉。被熱層はⅦb層にあたる。炉内の土層は中央に炭化木片・骨片を少量含む極暗赤褐色土の被熱層、その上位に炭化木片を多く含む黒色土がリング状に広がっている。遺物は上面からスクレイパー1点が出土した。

焼土を採取してフローテーション作業を行った(表Ⅲ-9)。また、同焼土で採取した炭化物を試料とした¹⁴C年代測定では、1,790±20yBP(δ¹³C補正あり)という結果であった(Ⅷ章9)。

〔土坑〕H-22HP-6

柱穴から想定される平面形のうち、ほぼ中央から検出した小型の土坑。土坑内にメノウの石核が立石の状態で埋設されていた。坑底面はほぼ平坦で、壁は開き気味に立ち上がる。埋土はⅦb層由来と思われる暗褐色土である。

〔柱穴〕H-22HP-1~5

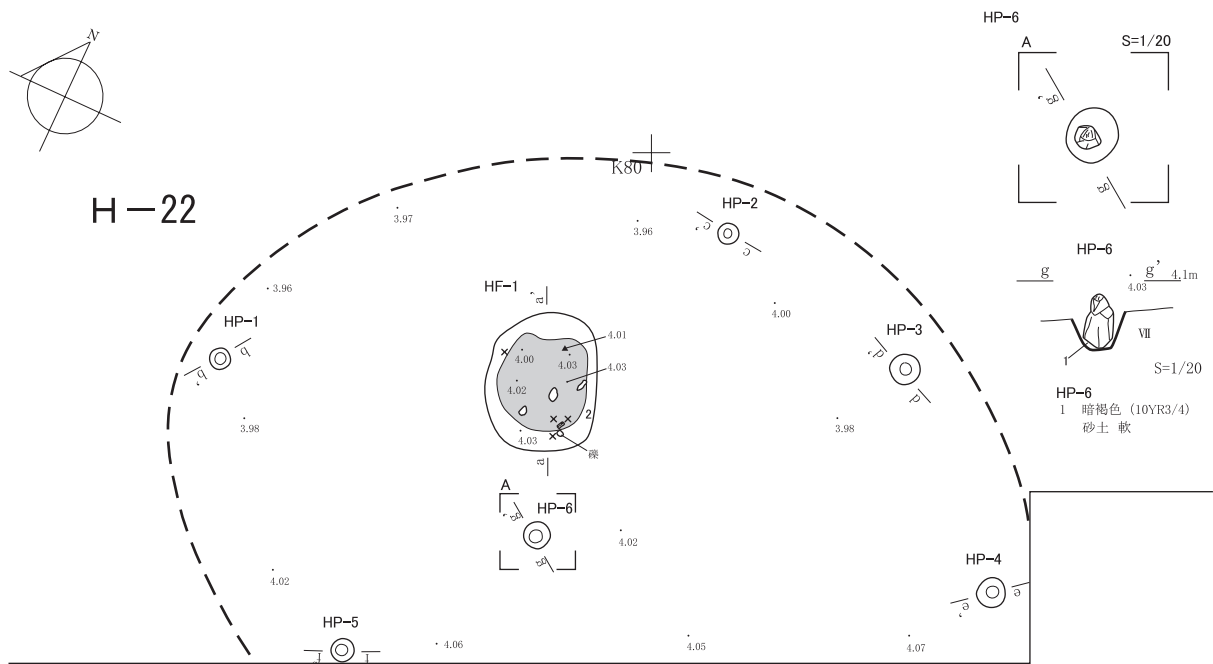
HF-1を取り囲むように周辺から小型の柱穴状土坑が検出された。炉の東側で3基、西側に2基あり、間隔はやや不規則で1~1.6mである。いずれも径15cm前後で、深さは10cm程度の浅いものが主体となっている。埋土はⅦb層由来と思われる黒~黒褐色土が観察された。

遺物出土状況：大まかな傾向として炉の南側に石器類が多く、特にHP-5の周囲にメノウ製のチップが集中して見られた。北側には10~20cm大の礫が散在し、同範囲中から白色粘土のまとまりを検出した。また、北側の縁辺部から注口土器が一括出土している。

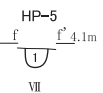
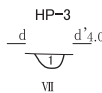
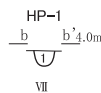
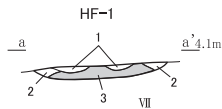
出土遺物の総数は146点で、土器が25点、石器等が121点である。土器はすべて後北C₂・D式、石器は石鏃1点、スクレイパー6点、Rフレイク2点、フレイクチップ83点、石核2点、礫27点がある。またHF-1上面からスクレイパー1点、HP-6から石核2点(1個体)出土した。

掲載遺物：1・2は後北C₂・D式。1は小型鉢形の注口土器。口縁端に注口部がある。地文はやや不規則に縄文が施文されており、口縁部には擬縄貼付文が注口部まで続く。2は深鉢胴下部。内面にスス状の炭化物が付着している。

3は石鏃。平基で細身の二等辺三角形である。裏面の加工はわずかで、素材面が大きく残っている。4~7はスクレイパー。4は原石面打面で加工が周縁に及ぶ。5の側縁には錯交状の加工が施されている。6・7は撥形の形状で、いずれも比較的平坦な加工が施されている。8はメノウ製の石核。剥離は少なく、長軸横方向の剥離が主体的である。(直江)



調査区境



HF-1

- 1 黒褐色 (7.5YR2/2) 砂壤土 すこぶる堅
- 2 黒色 (10YR1.7/1) 砂壤土 すこぶる堅
- 3 極暗赤褐色 (2.5YR2/2) 砂土 すこぶる堅 [焼土]

HP-1

- 1 黒色 (10YR1.7/1) 砂壤土 すこぶる堅 灰黄褐色 (10YR4/2) の砂が斑状に入る

HP-2

- 1 黒色 (10YR1.7/1) 壤土 軟

HP-3

- 1 黒色 (7.5YR1.7/1) 壤土 軟

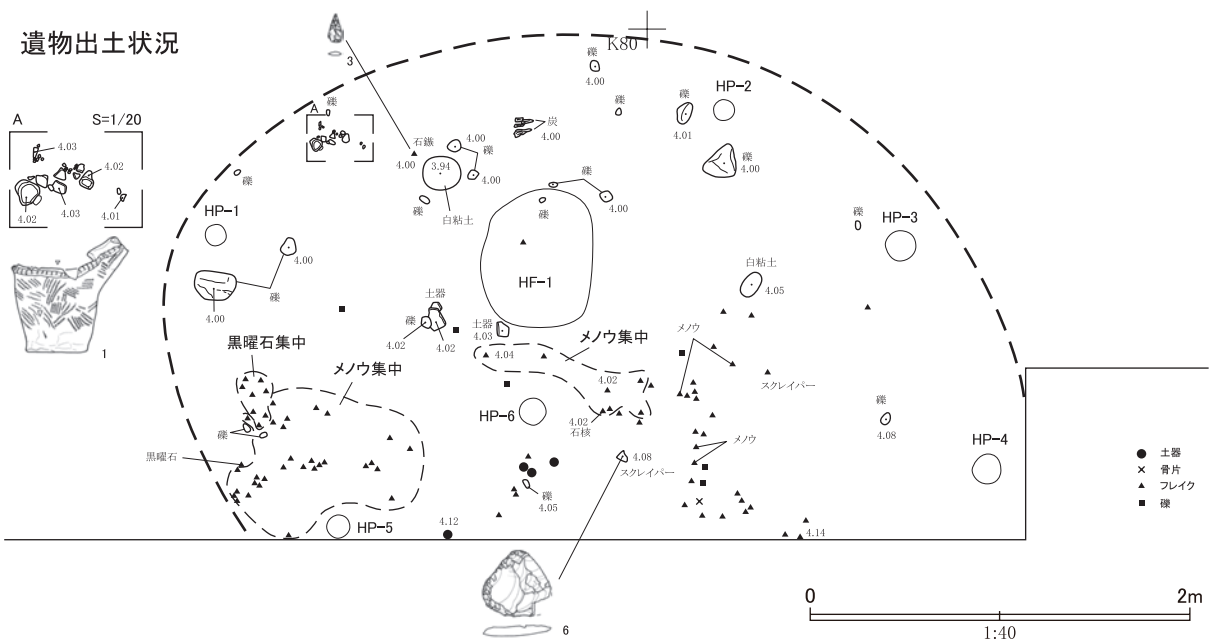
HP-4

- 1 黒褐色 (10YR2/2) 砂壤土 堅

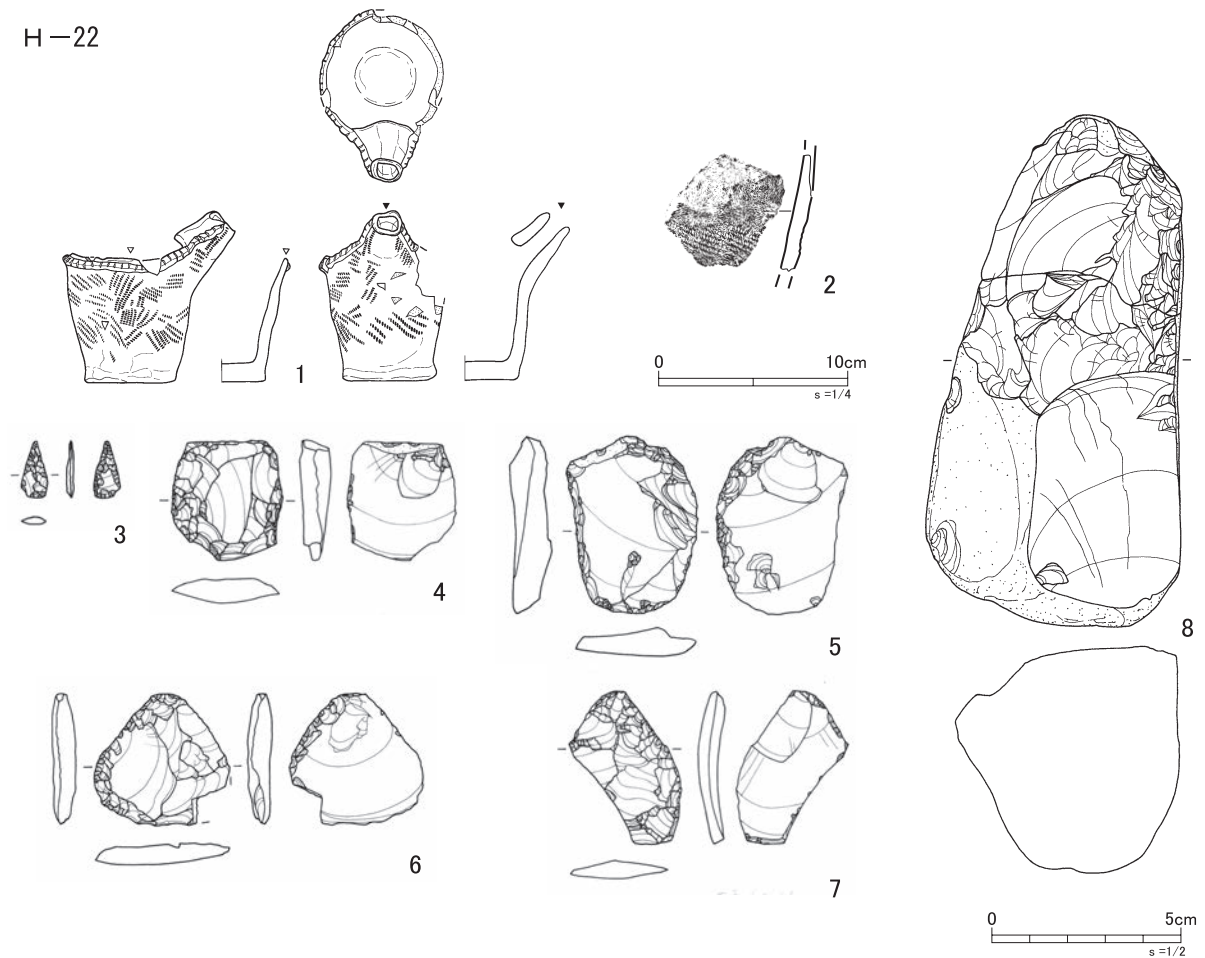
HP-5

- 1 黒褐色 (10YR2/2) 砂壤土 軟～堅

遺物出土状況



図Ⅲ-7 H-22



図Ⅲ－8 H-22出土の遺物

(2) 土坑

1基（P-29）を検出した。時期は、構築面や周辺の出土遺物から縄文時代後半の後北C₂・D式土器の時期である。

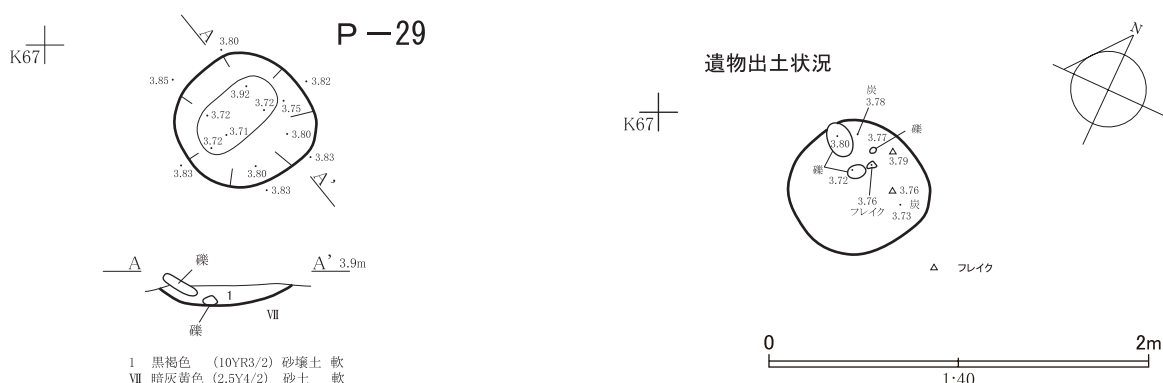
P-29（図Ⅲ-9 表Ⅲ-1・2 図版11）

確認・調査：Ⅶb層調査後に、周辺が暗灰黄色の砂層となった時点で、黒褐色の円形の落ち込みを検出した。中心に向かって傾いて包含される礫も存在したことから、短軸方向で半截を行い、底面と壁の立ち上がりを確認した。

覆土：掘り込み面はⅦb層中と思われる。覆土は炭化物を少量含むⅦb層由来の黒褐色土のみであった。なお覆土中の炭化物を試料とした¹⁴C年代測定では、1,910±20yBP（δ¹³C補正あり）という結果であった（Ⅷ章9）。

坑底・壁：底面はやや平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。

遺物出土状況：遺物はいずれも覆土下部から、Rフレイク1点、フレイクチップ3点、礫が3点出土した。出土遺物の総数は7点である。（直江）



図Ⅲ－9 P－29

(3) 柱穴状小土坑

10基（SP-22～31）を検出した。時期は、いずれも構築面と周辺の出土遺物から縄文時代後半の後北C₂・D式土器の時期とみられる。

SP-22～26（図Ⅲ-10 表Ⅲ-1・2 図版11）

調査・特徴：Ⅶb層およびF-56の調査後、周辺が暗灰黄色の砂層となった時点で、2m四方の範囲に直径10cm程度の黒褐色の円形のひろがりを4か所検出し、さらに1.8mほど東側から1か所検出した。半截したところいずれも類似した形状で、丸みのある底面とやや開き気味の壁の立ち上がりを確認した。覆土はⅦb層由来とみられる黒褐色土で、いずれも堅密度が高い。SP-24の覆土に炭化物粒が少量含まれている。またSP-26の底面付近から小型の礫が2点出土した。構築面はSP-22・23・25・26がⅦb層中、SP-24がⅦb層下部でF-56形成前とみられる。（直江）

SP-27（図Ⅲ-10 表Ⅲ-1）

調査・特徴：Ⅶb層の調査中、10cm大の板状礫が立石の状態で出土した。精査したところ、礫周囲に黒褐色のひろがりを検出した。半截したところ、先端がやや尖る杭穴状の断面を確認した。礫はこの小土坑中に含まれる。覆土はⅦb層黒褐色土で、構築面はⅦb層中とみられる。（阿部）

SP-28（図Ⅲ-10 表Ⅲ-1・2 図版11）

調査・特徴：Ⅶb層の調査後、周辺が暗灰黄色の砂層となった時点で、直径約10cmの黒褐色の円形のひろがりを検出した。半截したところ、丸みのある底面と垂直に近い壁の立ち上がりを確認した。覆土はⅦb層由来とみられる黒褐色土である。構築面はⅦb層中とみられる。底面付近から10cm大の礫が立石の状態で出土した。（直江）

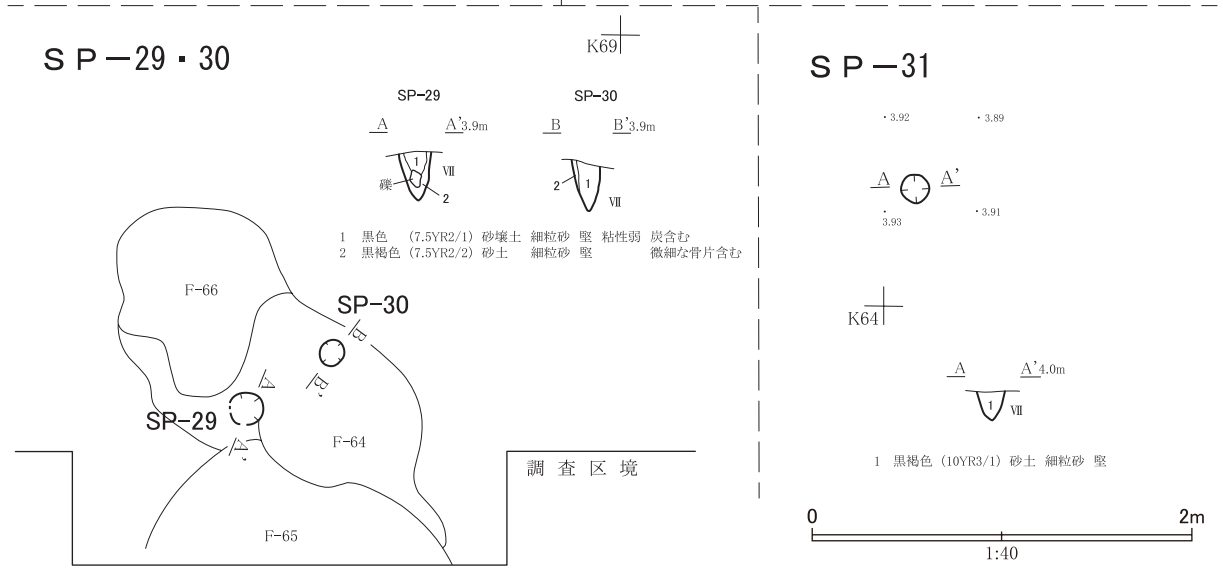
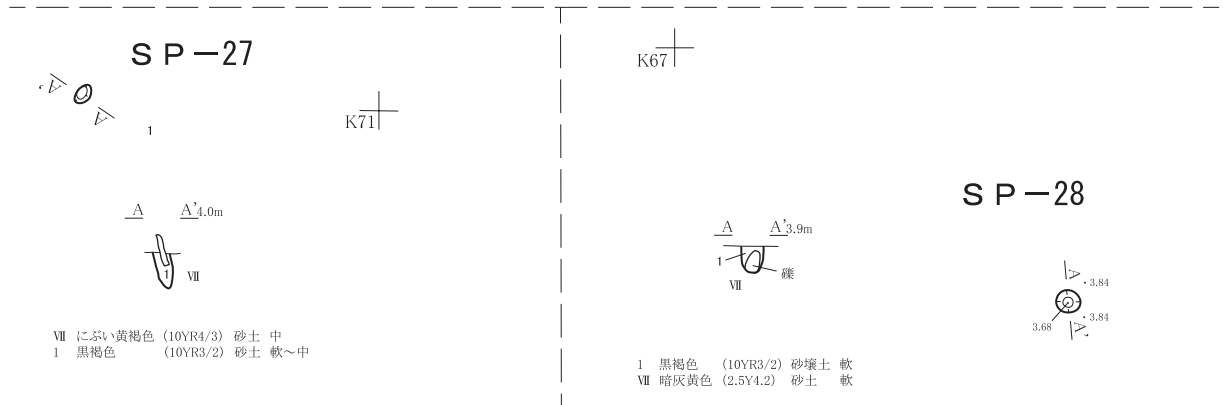
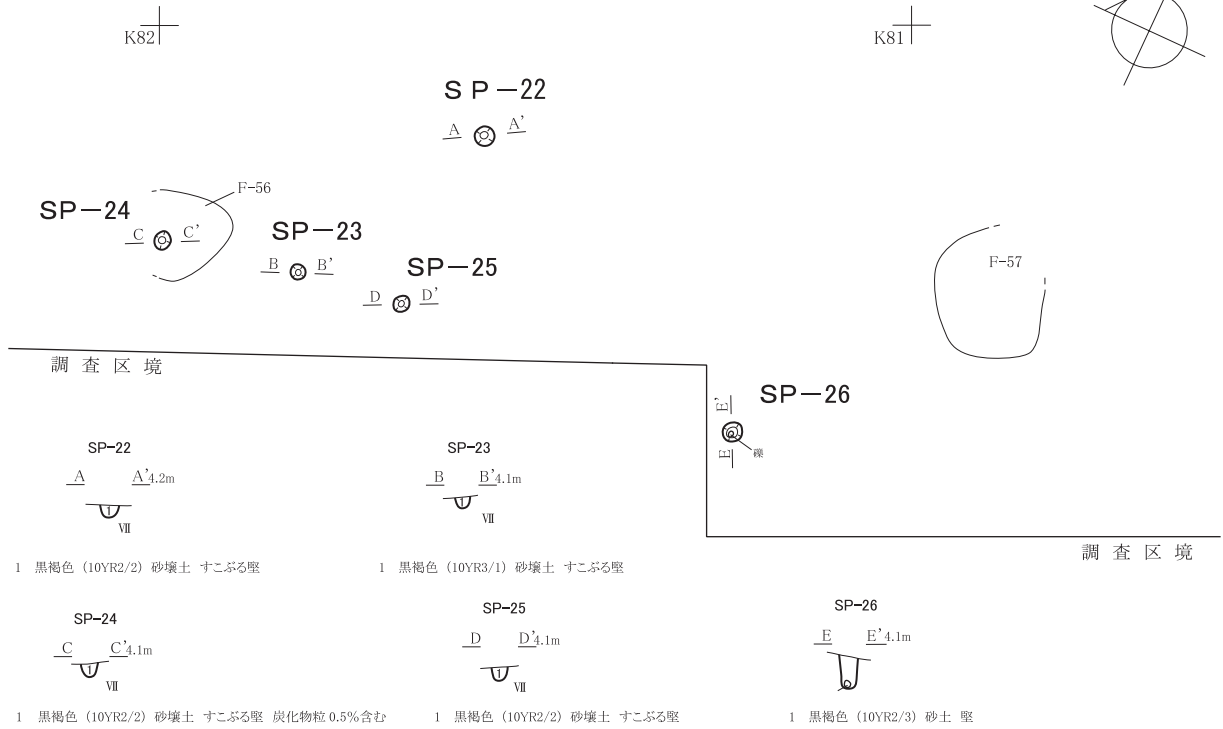
SP-29・30（図Ⅲ-10 表Ⅲ-1・2）

調査・特徴：焼土F-64～66の調査後、砂層上面で黒褐色の小型円形のひろがりを2か所検出した。半截したところ、先端がやや尖る杭穴状小土坑と判断した。覆土はⅦb層とみられる黒褐色土で、構築面はⅦb層中である。SP-29の覆土から礫が1点出土し、微細な骨片も含む。（笠原）

SP-31（図Ⅲ-10 表Ⅲ-1）

調査・特徴：Ⅶb層の調査後、砂層上面で黒褐色の小型円形のひろがりを検出した。半截し、先端がやや尖る杭穴状小土坑と判断した。覆土はⅦb層黒褐色土で、構築面はⅦb層中である。（阿部）

SP-22 ~ 26



図III-10 SP-22~31

(4) 焼土

16か所(F-56~71)を検出した。時期は、いずれも形成面と周囲の遺物から続縄文時代後半の後北C₂・D式土器の時期である。各焼土を採取してフローテーション作業を行った(表Ⅲ-9)。

F-56(図Ⅲ-11 表Ⅲ-1・2 図版11)

調査・特徴: VII b層を調査中、極暗赤褐色の範囲を検出した。半截したところVII b層が厚さ4cmほど被熱し、上部には骨片がわずかに含まれていた。縁辺部は漸遷し、周囲は炭化物粒・焼土ブロックを含む黒色土が落ち込み、焼土下位に続いている。遺物は、焼土上面の縁辺部からフレイクチップが出土している。

F-57(図Ⅲ-11 表Ⅲ-1・2 図版11)

調査・特徴: VII b層を調査中、極暗赤褐色の範囲を検出した。半截したところVII b層が厚さ5cmほど被熱していた。焼土がブロック状に含まれている部分もみられた。縁辺部は漸遷し、周囲は炭化物粒・骨片を含む黒色土が落ち込んでいる。

F-58(図Ⅲ-11 表Ⅲ-1・2 図版11)

調査・特徴: VII b層を調査中、暗赤褐色の範囲を検出した。半截したところVII b層が厚さ6cmほど被熱していた。縁辺部は漸遷し、焼土層下位に炭化物粒を含む暗褐色土が堆積している。時間を置いて複数回利用されていたことが考えられる。(F-56~58:直江)

F-59(図Ⅲ-11 表Ⅲ-1・2 図版11)

調査・特徴: VII b層を調査中、暗赤褐色の範囲を検出した。トレンチ調査を行ったところ、VII b層が被熱している状況を確認した。上部には骨片や炭化物が少量みられた。主体部は強く被熱しているものとみられる。縁辺部は漸遷する。上面から礫が2点出土した。(阿部)

F-60(図Ⅲ-12 表Ⅲ-1・2 図版7・41)

調査・特徴: VII b層を調査中、暗赤褐色の範囲を検出した。トレンチ調査を行ったところ、VII b層が被熱している状況を確認した。上部には骨片や炭化物が少量散在していた。主体部は強く被熱している。焼土上面からVI群c類土器の口縁部破片が2点出土した。

掲載遺物: 1は後北C₂・D式の鉢形注口土器で、口縁端に注口部がある。口縁部には擬縄貼付文が施されている。胴部はやや不規則に帯縄文が施文されている。(笠原)

F-61(図Ⅲ-12 表Ⅲ-1・2 図版7)

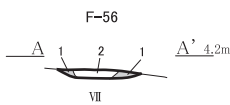
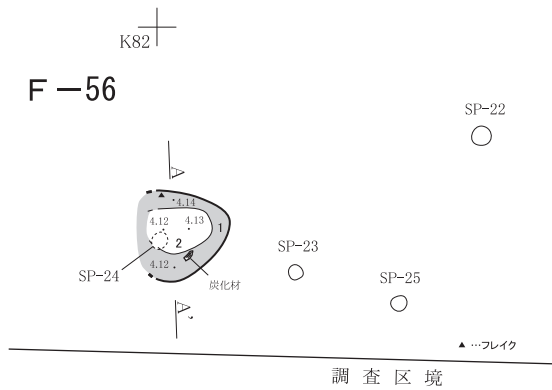
調査・特徴: VII b層を調査中、暗赤褐色の範囲を検出した。トレンチ調査を行ったところ、VII b層が被熱している状況を確認した。上部には炭化物がやや多くみられ、周縁部から炭化材片が出土した。主体部は強く被熱しているものとみられ、骨片がわずかに含まれていた。縁辺部は漸遷する。

F-62(図Ⅲ-12 表Ⅲ-1・2 図版7・12)

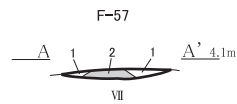
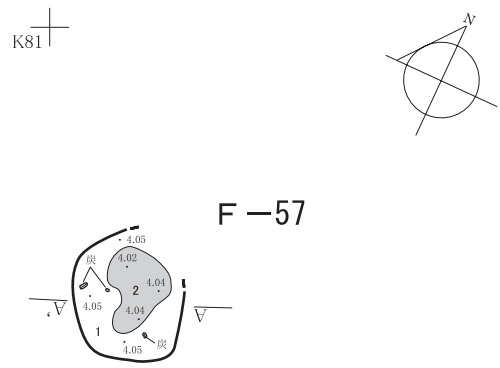
調査・特徴: VII b層を調査中、連続する赤褐色~褐色の範囲を検出した。長軸方向でトレンチ調査を行ったところVII b層が2か所被熱しており、西側をF-62とした。上面は灰を含む薄層があり、主体部は褐色を呈し強く被熱している。縁辺部は漸遷し、端部がF-63に重複し、当遺構が新しい。焼土上面からフレイクチップが15点出土した。

F-63(図Ⅲ-12 表Ⅲ-1 図版7・12)

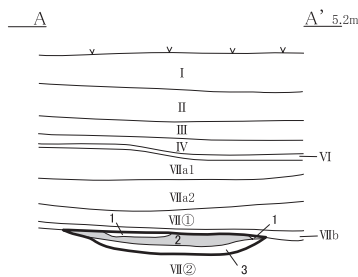
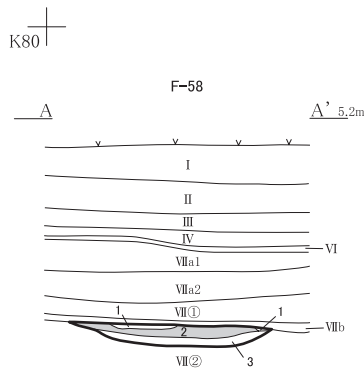
調査・特徴: VII b層を調査中、連続する赤褐色~褐色の範囲を検出した。長軸方向でトレンチ調査を行ったところVII b層が2か所被熱しており、東側をF-63とした。主体部は赤褐色を呈し強く被熱している。縁辺部は漸遷し、端部がF-62に重複し、当遺構の方が古い。(F-61~63:阿部)



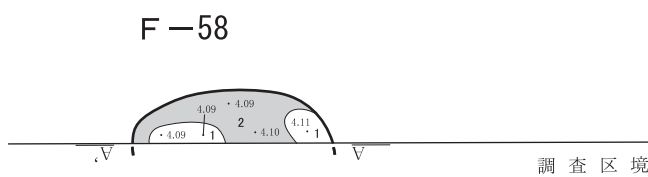
- 1 極暗赤褐色 (5YR2/3) 砂土 すこぶる堅 骨片1% 炭片2%含む [焼土]
- 2 黒色 (10YR1.7/1) 砂壤土 すこぶる堅 焼土ブロック1%含む



- 1 黒色 (10YR1.7/1) 砂壤土 すこぶる堅 骨片1%以下 炭水化物粒5%含む
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 砂土 すこぶる堅 焼土ブロック1%含む [焼土]

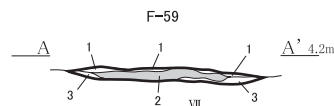
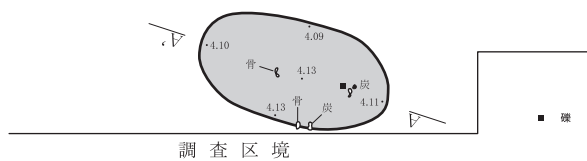


- | | | | | | |
|-------|--------|-------------|-----|---|-------------------------|
| I | 黒褐色 | (10YR2/3) | 壤土 | 軟 | |
| II | 黒褐色 | (10YR2/2) | 壤土 | 堅 | 上部 Ta-a、Ko-c テフラを列点状に含む |
| III | 暗褐色 | (10YR3/4) | 壤壤土 | 軟 | |
| IV | 黒褐色 | (10YR2/3) | 壤土 | 堅 | |
| VI | にぶい黄褐色 | (10YR6/4) | 砂土 | 堅 | 1mm 前後のハミスが主体 |
| VIIa1 | 黒褐色 | (10YR2/2) | 砂壤土 | 堅 | |
| VIIa2 | にぶい黄褐色 | (10YR4/3) | 砂土 | 堅 | |
| VII① | オリーブ褐色 | (2.5Y4/3) | 砂土 | 軟 | |
| VIIb | 黒色 | (10YR1.7/1) | 砂壤土 | 堅 | |
-
- | | | | | | |
|---|------|-----------|-----|---|------------|
| 1 | 黒褐色 | (10YR2/2) | 砂壤土 | 堅 | 炭化物粒1%以下含む |
| 2 | 暗赤褐色 | (5YR3/4) | 砂土 | 堅 | [焼土] |
| 3 | 暗褐色 | (10YR3/4) | 砂土 | 堅 | 炭化物粒1%以下含む |
-
- | | | | | | |
|------|-----|-----------|----|---|--|
| VII② | 黄褐色 | (2.5Y5/3) | 砂土 | 堅 | |
|------|-----|-----------|----|---|--|

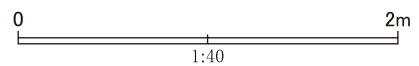


K78

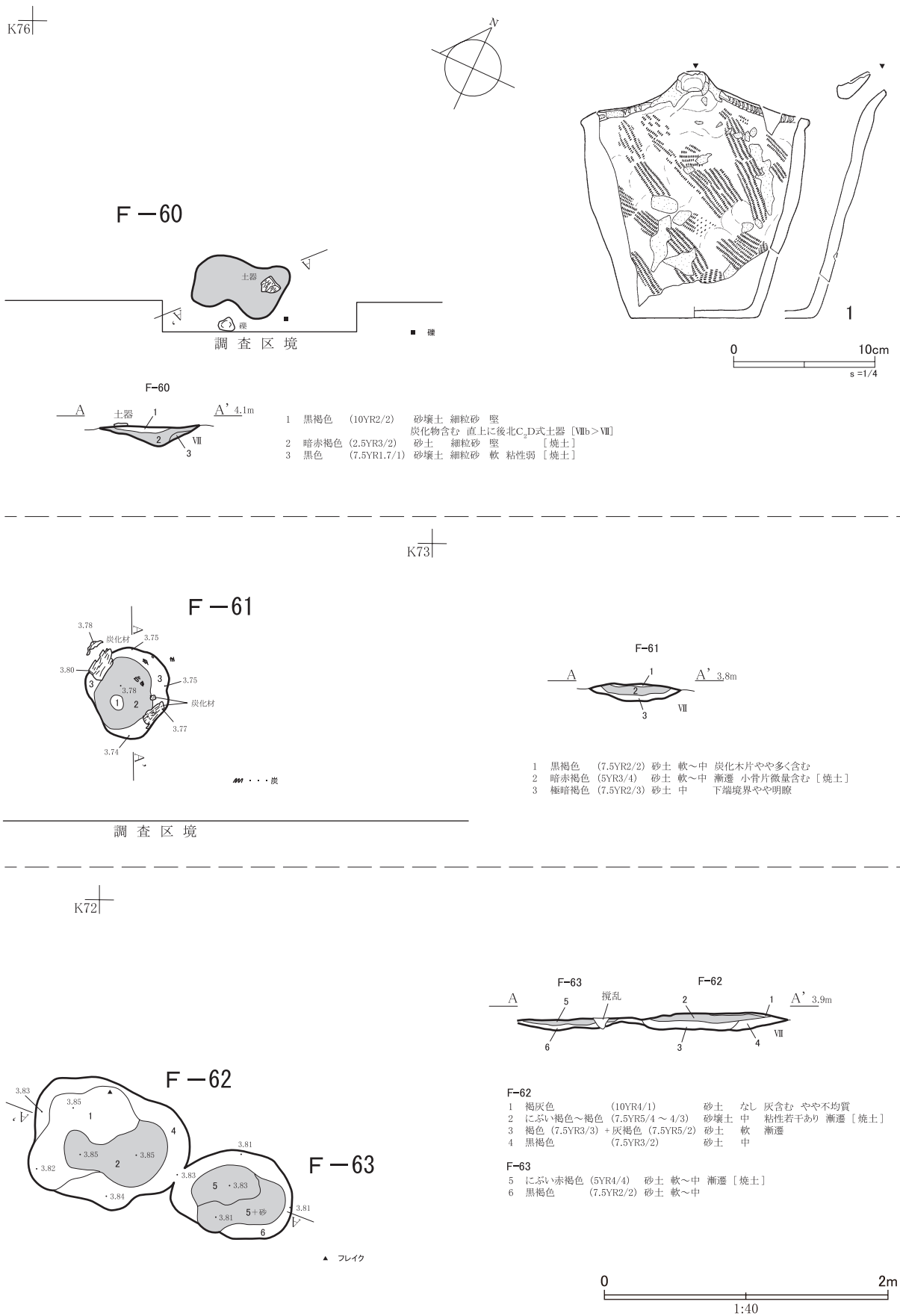
F-59



- 1 黒褐色 (7.5YR2/2) 砂土 軟 炭化物・骨片少量含む
- 2 極暗赤褐色 (5YR2/3) 砂土 軟 境界不明瞭 均質 [焼土]
- 3 極暗褐色 (7.5YR2/3) 砂土 軟～中



図Ⅲ-11 F-56～59



図Ⅲ-12 F-60～63

F-64 (図Ⅲ-13 表Ⅲ-1・2 図版7・12)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、赤褐色～褐色を呈した広がりを検出した。長軸方向でトレンチを設定し調査を行った。その結果、赤褐色を呈し強く被熱している主体部が3か所分布しており、中央部をF-64とした。南東側の上位には、微細な骨片、炭化物、黒曜石のチップが混じる。焼土層の端部がF-66・65と重複する。F-65より古く、F-66より新しい。なお出土した炭化木片の放射性炭素年代測定を行った結果、 $1,950 \pm 20\text{yrBP}$ という測定値を得た(Ⅷ章9)。

F-65 (図Ⅲ-13 表Ⅲ-1・2 図版7・12)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、赤褐色～褐色を呈した広がりを検出した。長軸方向でトレンチを設定し調査を行った。主体部は赤褐色を呈し強く被熱し、調査区域外に広がっている。上位には微細な骨片、炭化物が混じる。北側はF-64と重複する。F-64より新しい。

F-66 (図Ⅲ-13 表Ⅲ-1・2 図版7・12)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、赤褐色～褐色を呈した広がりを検出した。長軸方向でトレンチを設定し調査を行った。主体部は赤褐色を呈し強く被熱し、F-64と重複する。上位には微細な骨片が混じる。F-64より古い。
(F-64～66：笠原)

F-67 (図Ⅲ-13 表Ⅲ-1・2 図版7・12・41)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、重複する暗赤褐色の範囲を検出した。長軸方向で半截したところⅦb層が厚さ6cmほど被熱し、上部には骨片がわずかに含まれていた。縁辺部は漸遷し、周囲は炭化物粒を含む極暗褐色土が落ち込んでいる。焼土層下位には東側にF-68、北西側にF-69が部分的に重複している。遺物は総数102点で、焼土上面から石鏃2点、スクレイパー1点、Rフレイク2点、フレイクチップ5点、礫8点、焼土中からRフレイク1点、フレイクチップ83点が出土した。

掲載遺物：1は石鏃。平基で細身の二等辺三角形である。正裏面とも微細な加工が施されている。2はスクレイパー。下端部が折損している。加工は両側縁に見られる。

F-68 (図Ⅲ-13 表Ⅲ-1・2 図版7・12)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、重複する極暗赤褐色の範囲を検出した。長軸方向でトレンチ調査を行ったところ、Ⅶb層が厚さ6cmほどF-67の下位で被熱していた。縁辺部は漸遷し、周囲は炭化物粒を含む黒褐色土が落ち込み、焼土下位に続く。遺物は17点で、焼土上面および焼土中から出土した。

F-69 (図Ⅲ-13 表Ⅲ-1・2 図版7・12)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、重複する明赤褐色の範囲を検出した。長軸方向でトレンチ調査を行ったところ、Ⅶb層が厚さ13cmほど被熱し、上部に骨片をわずかに含む。縁辺部は漸遷し、周囲は炭化物粒や骨片を含む黒褐色土が落ち込む。焼土層上位には南東側にF-67が重複して形成されている。遺物は総数529点で、焼土上面および焼土中から出土した。

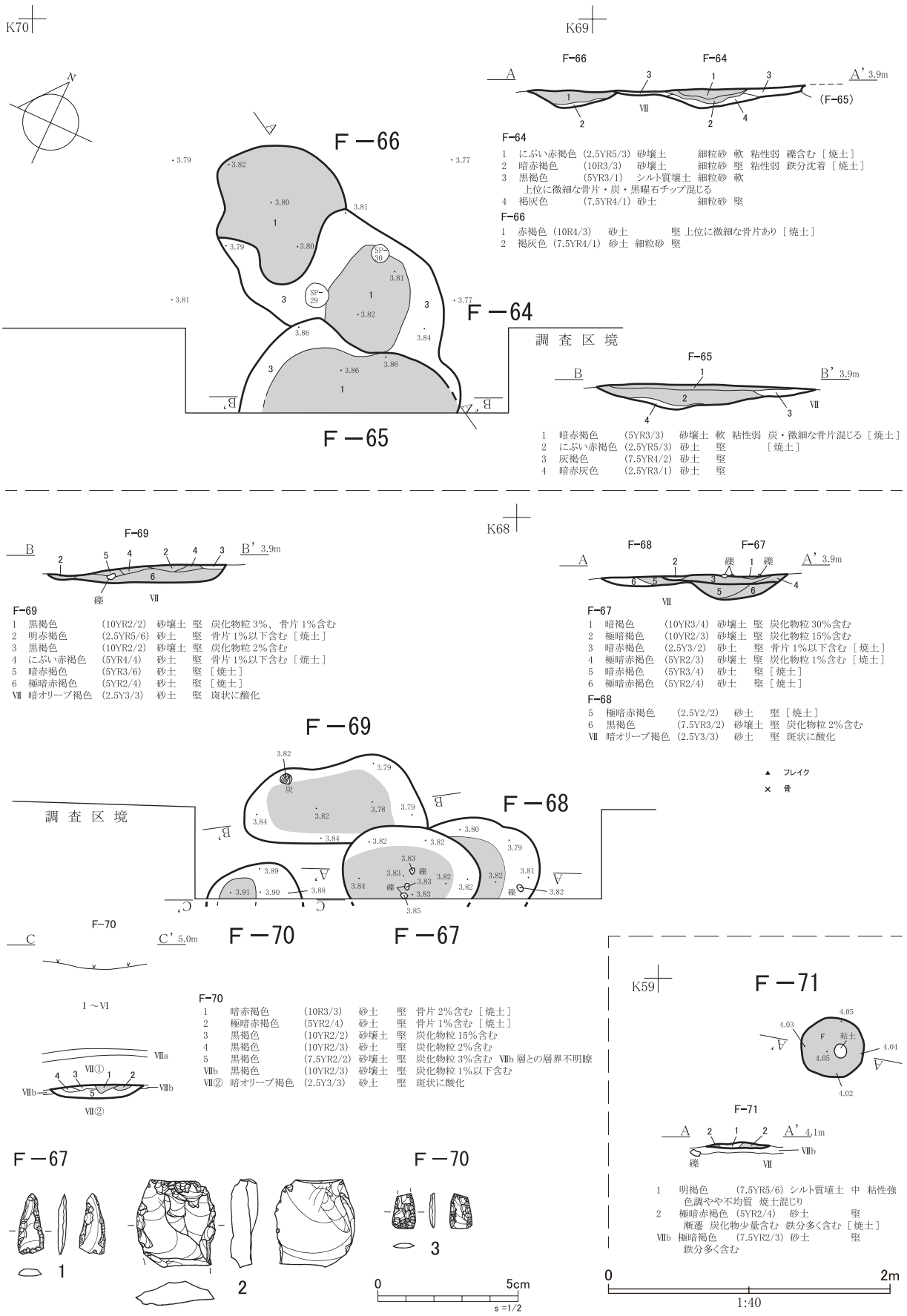
F-70 (図Ⅲ-13 表Ⅲ-1・2 図版7・12・41)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、暗赤褐色の範囲を検出した。調査区境に沿ってトレンチ調査を行ったところ、Ⅶb層が厚さ6cmほど被熱していた。縁辺部は漸遷し、周囲に焼土下位から堆積する炭化物粒を含む黒褐色土が広がっている。遺物は12点で、焼土上面および焼土中から出土した。

掲載遺物：3は石鏃。先端部が折損している。平基で細身、二等辺三角形であったとみられる。裏面の加工はわずかで、素材面が大きく残っている。
(F-67～70：直江)

F-71 (図Ⅲ-13 表Ⅲ-1・2 図版12)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、褐色～暗褐色の範囲を検出した。半截したところ、Ⅶb層が厚さ3cmほど被熱していた。上面に暗灰色の粘土塊がある。焼土の南側にはメノウ片が集中する範囲がある



図Ⅲ-13 F-64~71

(FC-15)。周辺は一部が橙色～暗褐色になった砂層で、酸化した鉄分が付着したと考えられる。

(阿部)

(5) フレイクチップ集中

5か所を検出した。時期は、いずれも検出面と周辺を含めた出土遺物から、続縄文時代後半の後北C₂・D式期とみられる。

FC-12 (図Ⅲ-14 表Ⅲ-1・2 図版13)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、北側にわずかに下がる緩斜面上で、チップを中心とする細かな石器が30cm程度の範囲の中にまとまって出土した。出土遺物の総数は24点で、すべて黒曜石製のフレイクチップである。

FC-13 (図Ⅲ-14 表Ⅲ-1・2)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、北側にわずかに下がる緩斜面上で、チップを中心とする細かな石器が2m程度の範囲の中にややまとまって出土した。出土遺物の総数は290点で、すべて黒曜石製のフレイクチップである。

FC-14 (図Ⅲ-14 表Ⅲ-1・2 図版13)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、ほぼ平坦な地形上でチップを中心とする細かな石器が50cm程度の範囲の中にまとまって出土した。出土遺物の総数は944点で、石鏃3点、スクレイパー1点、Rフレイク2点、フレイクチップ938点である。安山岩製フレイク1点以外はすべて黒曜石製である。

掲載遺物：1は石鏃。上下端が折損しており、全体の形状は不明である。薄手で細かな加工が施されている。
(FC-12～14：直江)

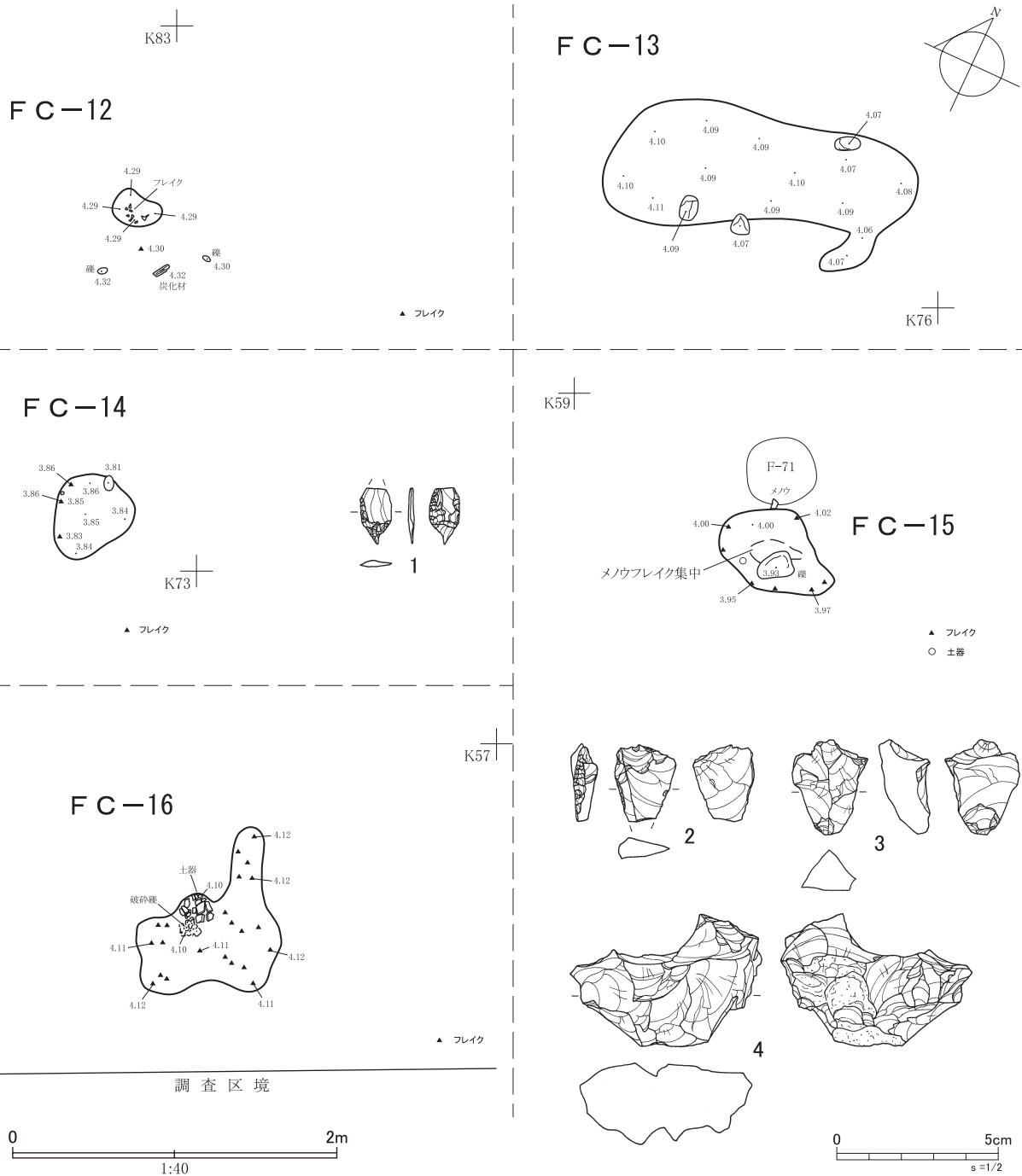
FC-15 (図Ⅲ-14 表Ⅲ-1・2 図版13)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、焼土F-71を検出し、その南側にメノウ片が集中する不整形な範囲を確認した。出土遺物の総数は64点で、スクレイパー1点、楔形石器1点、Rフレイク2点、石核2点、フレイクチップ58点である。石材はすべてメノウである。

掲載遺物：2はスクレイパー。左側縁に急角度の加工が施されている。3は楔形石器の剥片。ウートラパッセを起し器体の大部分を取り込んだものとなっている。4は石核。主に平坦な正裏面で剥離が行われている。

FC-16 (図Ⅲ-14 表Ⅲ-1・2 図版13)

調査・特徴：Ⅶb層を調査中、土器片や破碎礫がややまとまって出土し、その周囲からチップを主体とする細かな石器が不整形な範囲で出土した。出土遺物の総数は797点で、すべて黒曜石のフレイクチップである。大部分は土壌水洗により回収したものである。
(FC-15・16阿部)



図Ⅲ-14 FC-12~16

b オホーツク文化期の遺構

(1) 竪穴跡

3軒(H-19~21)を検出した。時期は、いずれも掘り込み面や出土遺物、年代測定の結果などから、オホーツク文化刻文期である。

H-19 (図Ⅲ-15~17 表Ⅲ-1・2 図版4・14・41)

確認・調査：I~V層を重機で除去する際に、Ⅲ層が落ち込む範囲を確認した。遺構を想定し、Ⅲ層の落ち込みを残し、人力調査において落ち込みの中心部からグリッドラインに沿った南北方向に土層観察用のベルトを設定しⅥ層上面まで掘り下げた。断面を観察したところ、Ⅵ層まで自然堆積が落ち込んでいる点、平面的に長軸4m程の皿状の窪みとなった点から10世紀以前の遺構と判断し、北側の調査範囲を調査区用地まで拡張して前述のベルトと調査区境界に沿った2本のトレンチ調査を行った。その結果、Ⅶa1層下部から掘り込まれた平坦な床面と中央部に石組炉を検出した。また、本遺構は砂丘列間の最も低い位置に構築されている。通常であれば竪穴住居跡と認定するが、本遺構は帰属する時期の住居跡に比べ小型であること、形状が隅丸方形を呈すること、柱穴や明瞭な貼床が見られないことから、「竪穴」跡とする。なお、南側のH-20と重複関係があり、本遺構が新しい。

覆土：掘り込み面はⅦa1層の下部で、遺構上位はⅦa1層に10~20cm程覆われている。遺構内は黒褐色・暗褐色土を主体として堆積しており、中央部ほど薄層となっている。壁際には三角堆積の3・4層がみられた。埋土は自然堆積と考えられる。

床・壁：床面はほぼ平坦だが、堅密度が弱いⅦ層となっている。南西部で貼床の残部の可能性がある白色の粘土が見られた。壁はやや開き気味に立ち上がる。

付属遺構：焼土2か所を検出した。

〔炉〕H-19HF-1

「竪穴」中央部やや西寄りにある石組炉。扁平な円礫と円礫を分割した板状加工礫13点が楕円形に配置されている。炉石は全て安山岩製で、横に立てて並べている。長径は94cm。炉の内側にあたる礫表面は薄く赤色や黒色に変色しているものが多い。南側の炉石列中に楕円形の抜き取り痕を確認した。確認面では東寄りの炉内外に炭化木片が密集してみられた。炉内の土層は中央に炭化木片・骨片を含む赤褐色土の被熱層、その上下に炭化木片を含む黒褐色土が堆積している。炉内を清掃しながら繰り返し利用したものと考えられる。遺物は上面から礫1点が出土した。明瞭な被熱痕は確認できなかった。

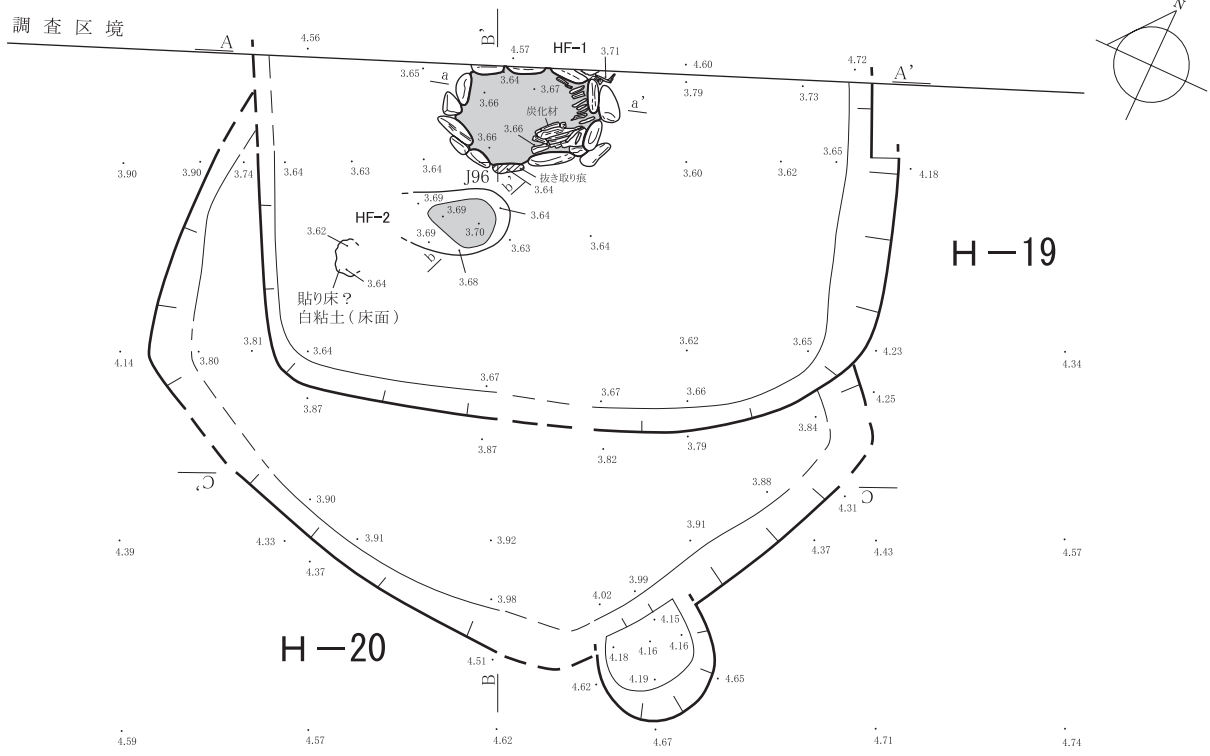
焼土を採取してフローテーション作業を行った(表Ⅲ-9)。また、同焼土で採取した炭化物を試料とした¹⁴C年代測定では、 $1,340 \pm 20\text{yBP}$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正あり)という結果であった(Ⅷ章9)。

〔炉〕H-19HF-2

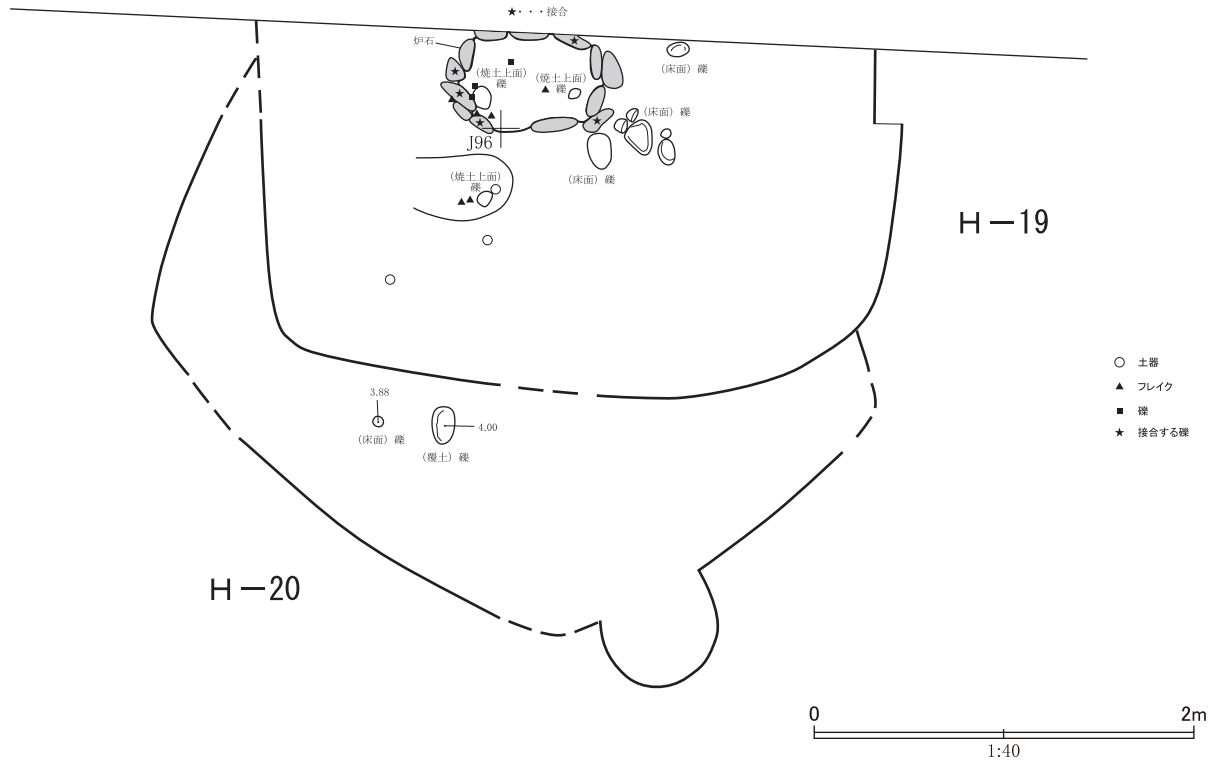
「竪穴」北西部にある床面で検出した小型の地床炉。HF-1と近接した位置にある。被熱面の径は約35cmで、その下位に炭化物粒を含む黒褐色土が見られる。明瞭な被熱痕は確認できなかった。焼土を採取してフローテーション作業を行った(表Ⅲ-9)。また、同焼土で採取した炭化物を試料とした¹⁴C年代測定では、 $1,350 \pm 20\text{yBP}$ ($\delta^{13}\text{C}$ 補正あり)という結果であった(Ⅷ章9)。

遺物出土状況：遺物は炉に近い中心部から多く出土している。こぶし大の礫がHF-1の東側に散在して見られた。

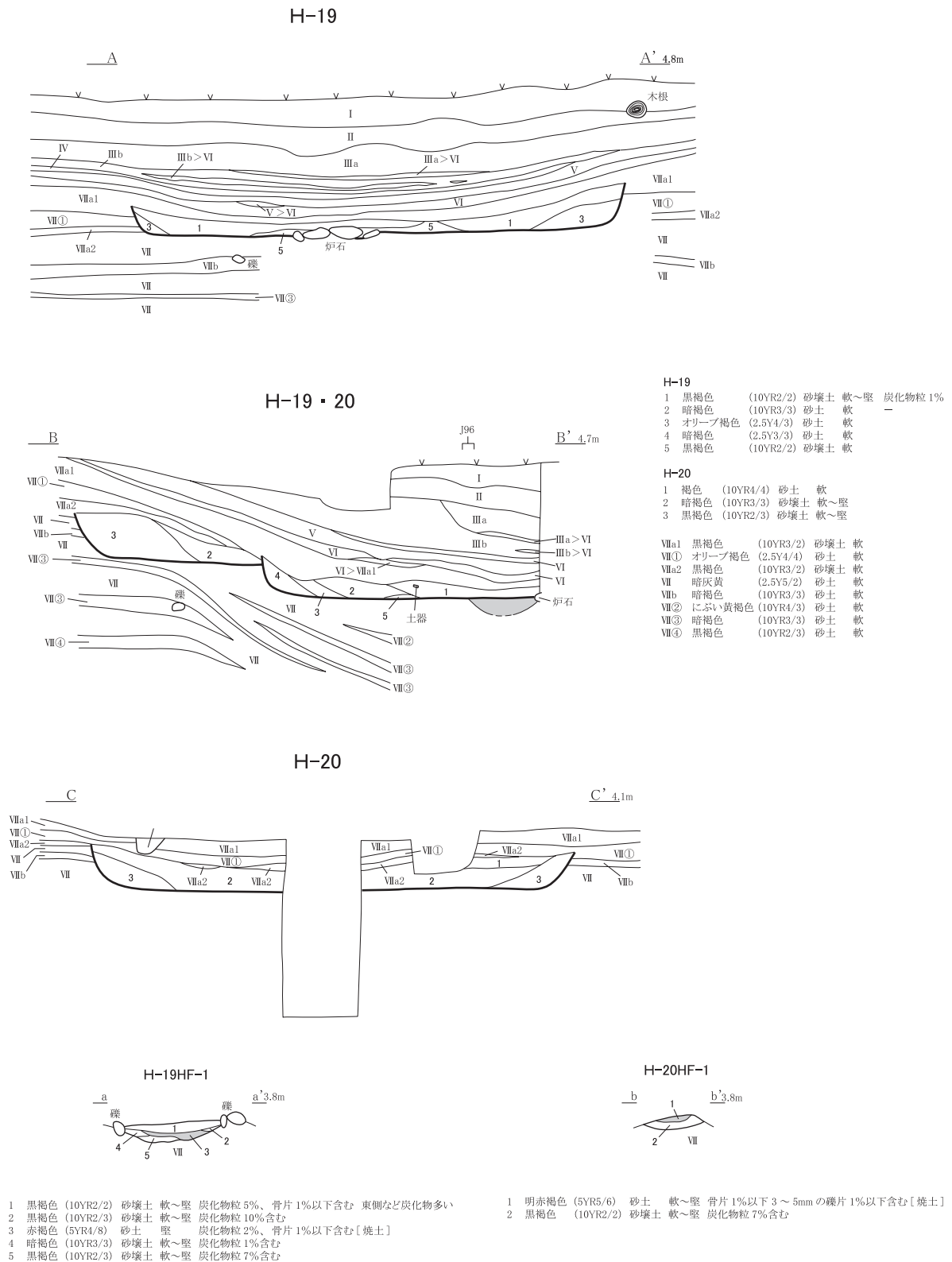
出土遺物の総数は61点で、土器が5点、石器等が26点、礫が30点である。床面からフレイク7点、台石2点、礫9点、覆土からオホーツク刻文土器5点、たたき石1点、台石1点、礫9点が出土した。またHF-1では上述の炉石、HF-2上面からフレイク12点、礫1点が出土した。



遺物出土状況

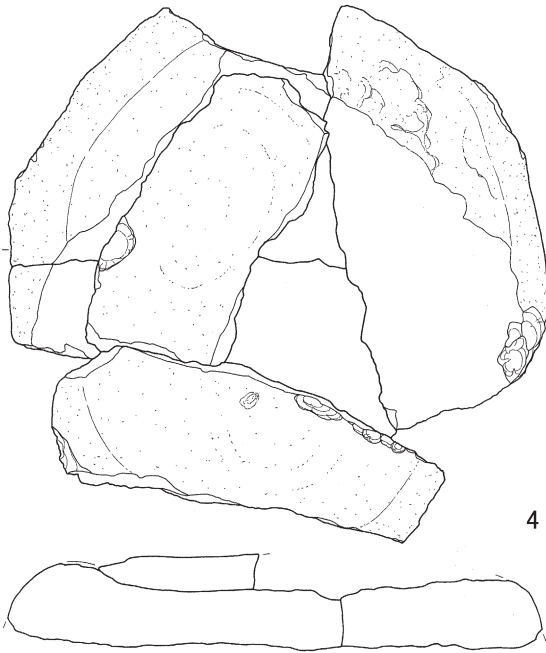
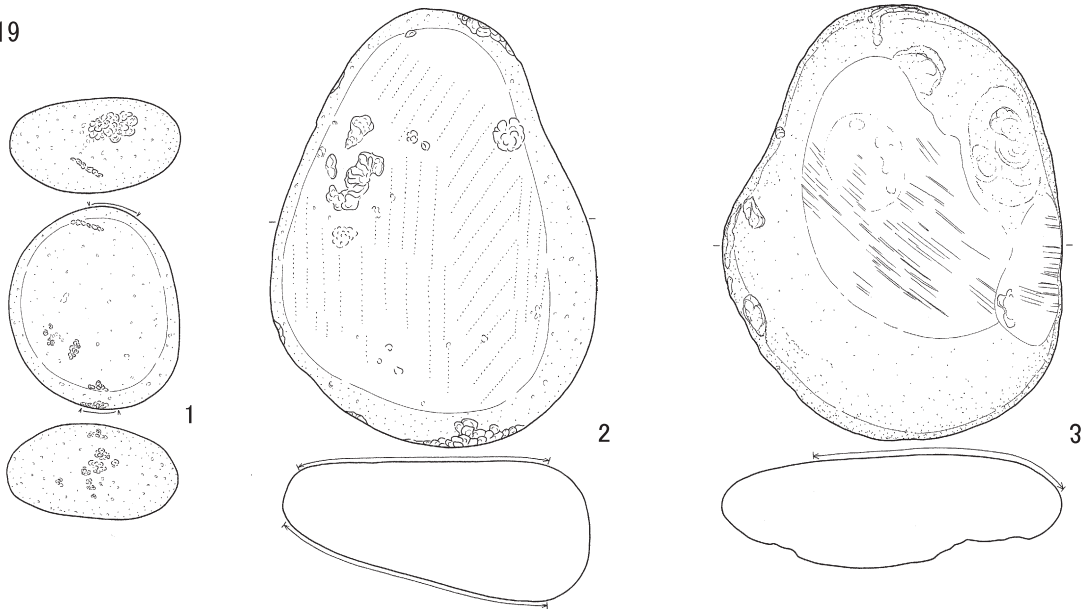


図Ⅲ-15 H-19・20 (1)

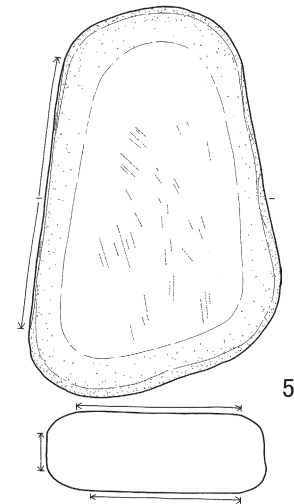


図III-16 H-19・20 (2)

H-19



H-20



図Ⅲ-17 H-19・20出土の遺物

掲載遺物：1はたたき石。扁平な安山岩の上下端に敲打痕が見られる。2・3は台石。4は炉石5点の接合した礫の状態。大型で扁平な安山岩を板状に分割して板状加工礫として炉石に利用している。出土位置は図Ⅲ-16の礫輪郭に星印として記した。
(直江)

H-20 (図Ⅲ-15~17 表Ⅲ-1・2 図版14・15・41)

確認・調査：H-19でトレンチ調査を行った際、その南側でⅦa 2層中からの掘り込みを確認した。やや北側に傾斜する床面とⅦb層を切る壁の立ち上がりを検出した。H-19に切られているため、確認できた平面形の角部は3か所のみであるが、各辺は130度前後で交わることから、平面形は五角形が推定される。通常であれば竪穴住居跡と認定するが、本遺構は帰属する時期の住居跡に比べ小型

であること、柱穴や明瞭な貼床が見られないことから、「竪穴」跡とする。

覆 土：掘り込み面はⅦ a 2層の下部で、遺構上位はⅦ a 2層に部分的に覆われている。遺構内の土層は1～3層に分層した。壁際に黒褐色土の三角堆積が見られ、その上位を広く褐色土が覆っている。最上位の1層は厚さ約10cmで西側のみで確認された。

床 ・ 壁：床面は北側に向かって緩やかに傾斜している。床面は堅密度が弱いⅦ層となっている。壁はやや開き気味に立ち上がる。

付 属 遺 構：土坑1基を検出した。

〔土坑〕 H-20HP-1

「竪穴」南東側に張り出す土坑。長軸50cm、深さは約45cmで平面形はやや不整な円形である。底面はほぼ平坦で、住居内側にやや傾斜し、「竪穴」床面と土坑底面の比高は20cm程度の階段状となっている。

遺物出土状況：南西側で床面と覆土下位から少量の礫・礫石器が出土した。出土遺物の総数は5点で、床面から礫1点、覆土から台石1点、礫3点である。

掲 載 遺 物：1は台石。平坦な正裏面のほか側面の小口面にも平滑面が見られる。 (直江)

H-21 (図Ⅲ-18 表Ⅲ-1・2 図版4・15・42)

確 認 ・ 調 査：Ⅶ a層を調査中に検出たくぼみを調査したところ、礫集中S-11(後述)を確認した。これは当遺構の「上層遺構」にあたる。

S-11の調査後、一部の礫を残しながら十字状のトレンチを延長したうえで掘削したところ、平坦面と壁の立ち上がりを確認した。覆土を掘り下げ、平坦な床面と壁を精査し、炉を検出した。帰属する時期の他の住居跡に比べ径が2.5m以下と小型であることや付属施設が欠落するものが多いことから、「竪穴」の表現とする。掘り込み面はⅦ a層中である。

覆 土：上位(1層)はⅦ a層に相当する暗褐色砂層で、層中に礫集中S-11が形成されている。竪穴中央南側に分布する中位(2層)は、炭化木片を多く含む黒色土が堆積する。壁面付近～下位(3・4層)は暗褐色～黒褐色の砂層で、色調がやや不均質である。

床 ・ 壁：床面はⅦ b層以下の砂層(Ⅶ層)に達し、おおむね平坦である。壁は急に立ち上がる。竪穴は緩斜面に構築されており、掘り込み面と床面の高低差は緩斜面上方の南側が約50cm、下方の北側が約25cmと差がある。

付 属 遺 構：石組炉1か所を検出した。

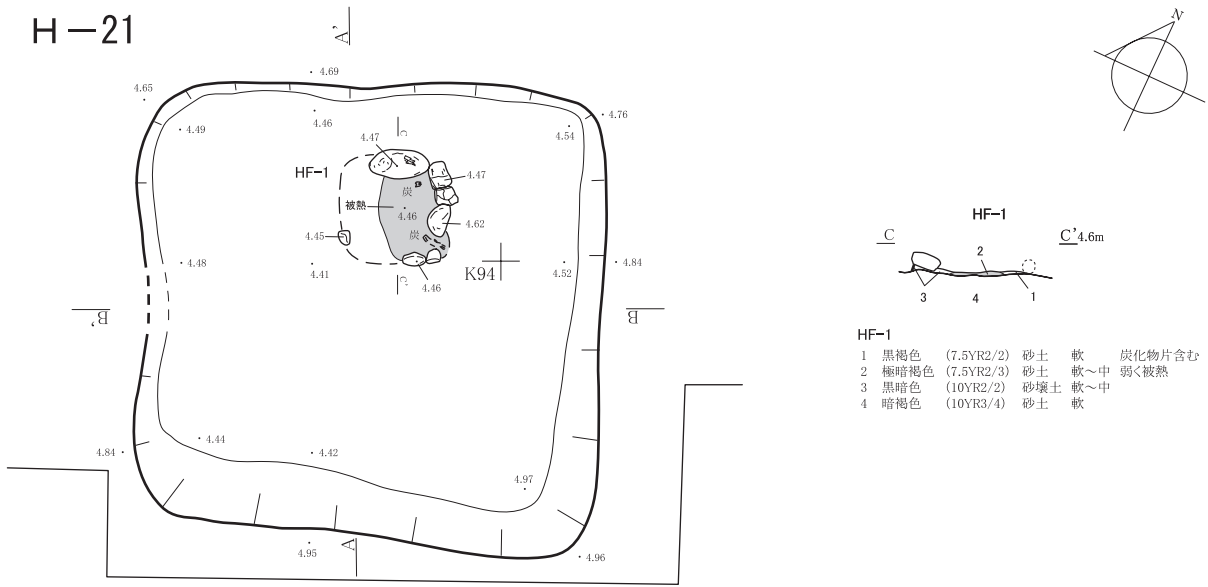
〔炉〕 H-21HF-1

竪穴の中央から北寄りに位置する。方形配置の石組炉とみられ、西半はコの字状に残存するが、東側は大部分を欠いている。礫は北側の1点が径約30cmと大型であるが、それ以外は10～20cmほどの大きさである。炉の周辺から出土した礫片と接合するものがある。炉を構成する礫は、ほとんどが弱く被熱していると観察され、一部にタール状の黒色物質が付着している。炉内の砂層は極暗褐色を呈し、被熱している。被熱層上面から炭化木片が少数出土している。

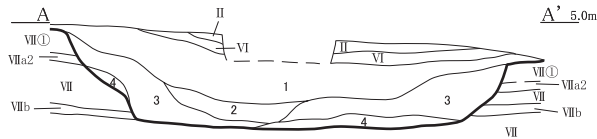
遺物出土状況：遺物は炉の周辺～竪穴北西部の覆土から出土した。炉の周辺では、礫や炭化物が散在していた。竪穴北西部の覆土では、炭化物のほか土器がまとまって出土した。また前述のとおり、竪穴南側の覆土では微細な炭化木片がやや多く出土した。

出土遺物の総数は104点で、土器が81点、石器等が2点、礫が21点である。床面からすり石1点、礫7点、覆土からオホーツク刻文土器81点、台石1点、礫6点が出土した。またHF-1からは炉石

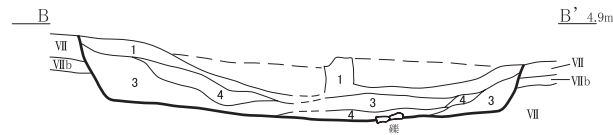
H-21



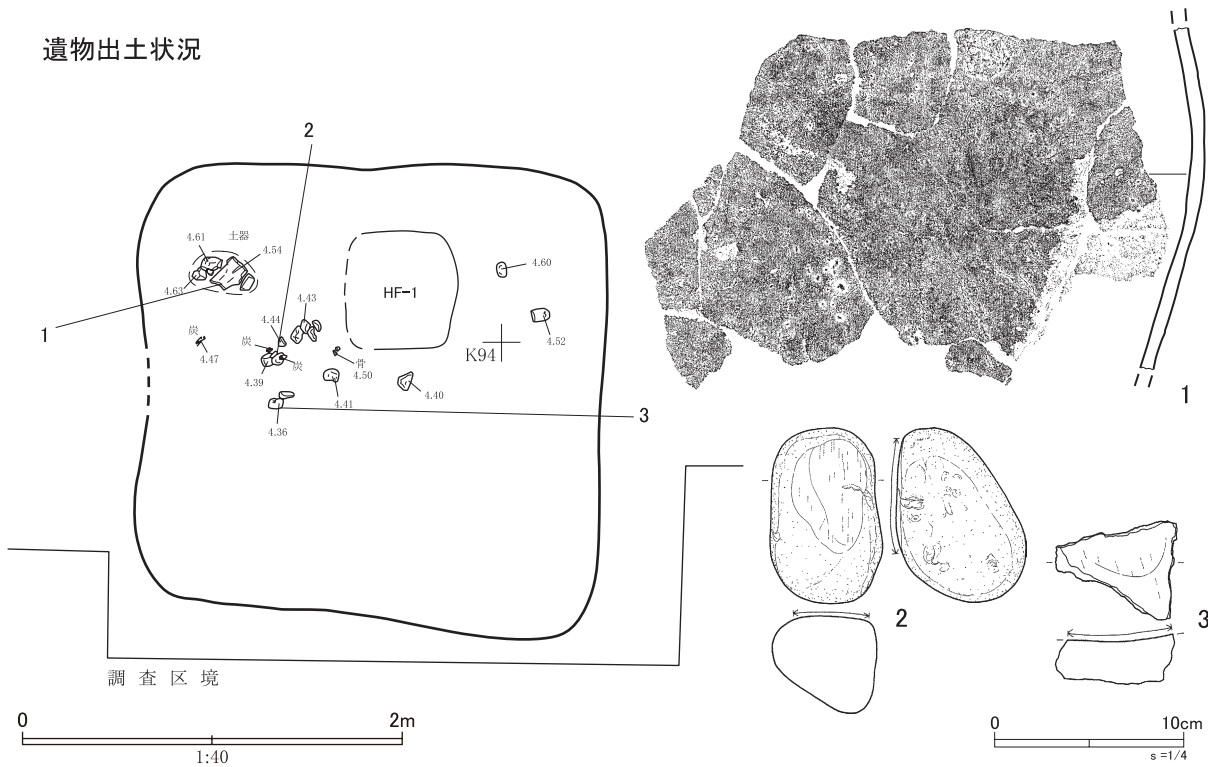
- HF-1
- | | | | | |
|---|-----------------|-----|-----|--------|
| 1 | 黒褐色 (7.5YR2/2) | 砂土 | 軟 | 炭化物片含む |
| 2 | 極暗褐色 (7.5YR2/3) | 砂土 | 軟~中 | 弱く被熱 |
| 3 | 黒暗色 (10YR2/2) | 砂壤土 | 軟~中 | |
| 4 | 暗褐色 (10YR3/4) | 砂土 | 軟 | |



- | | | | | |
|------|-----------------|-----|---|---------------|
| 1 | 黒褐色 (10YR2/2) | 砂土 | 軟 | |
| 2 | 黒色 (7.5YR1.7/1) | 砂壤土 | 中 | 炭化木片やや多く含む |
| 3 | 暗褐色 (7.5YR3/3) | 砂土 | 軟 | 色調やや不均質 赤みがかる |
| 4 | 黒暗色 (7.5YR2/2) | 砂土 | 軟 | 色調やや不均質 |
| VII① | 暗褐色 (10YR3/4) | 砂土 | 軟 | |
| VII | 褐色 (10YR6/4) | 砂土 | 軟 | |



遺物出土状況



図Ⅲ-18 H-21

を含め礫が8点出土した。

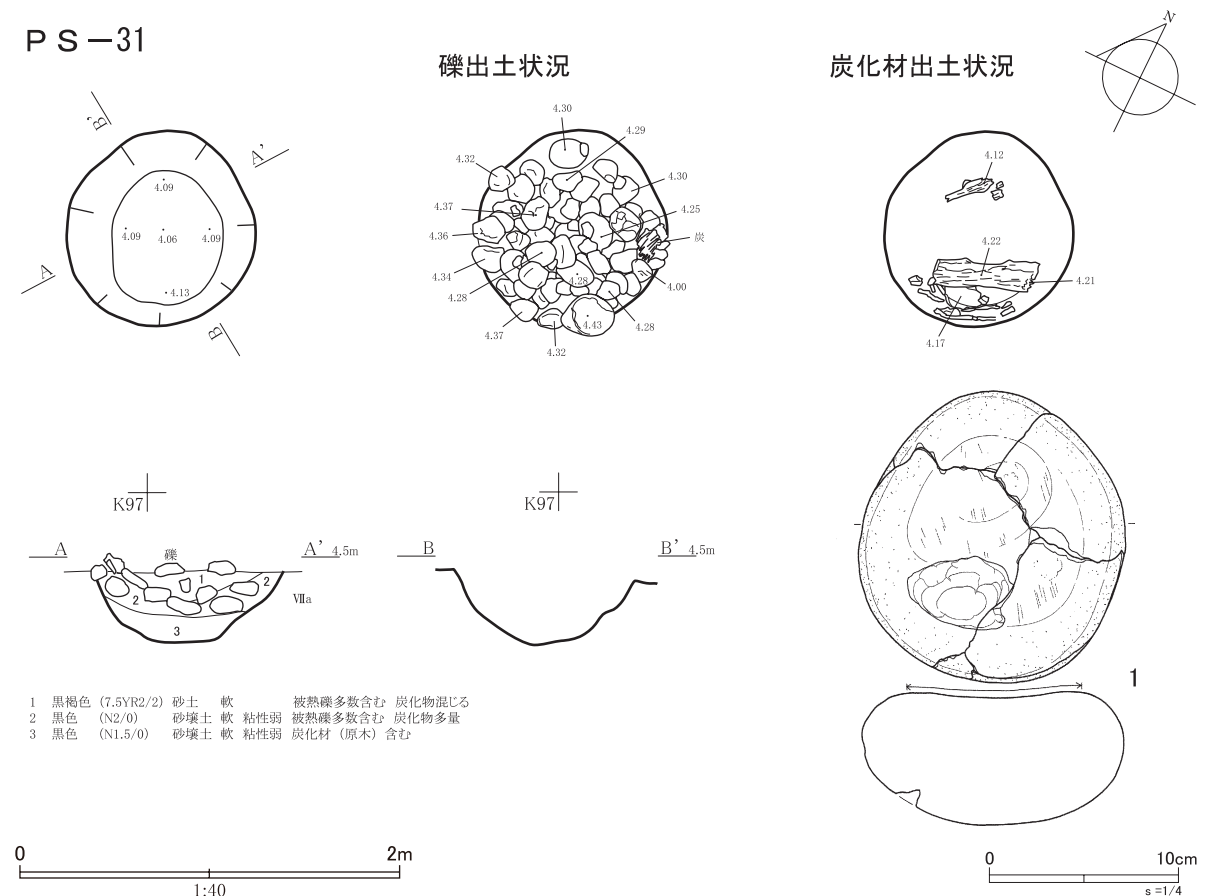
掲載遺物：1はオホーツク刻文土器。覆土3層中からまとまって出土した。甕の胴部で、無文である。2はすり石。小口面に擦り面が見られる。3は台石の破損品である。 (阿部)

(2) 集石土坑

1基 (PS-31) を検出した。時期は、検出層位と周辺から出土した遺構や遺物等から、オホーツク文化刻文期である。

PS-31 (図Ⅲ-19 表Ⅲ-1・2 図版16・42)

確認・調査：Ⅶa層の上面を精査中に、J96・97区で円礫がやや環状に散在し、その外周には炭化物が一部弧を描くように包含された範囲を確認した。集石土坑を想定し調査を行った。その結果、径約1.0mを測る概ね円形を呈した落ち込みで、その中には円礫等が密に充填されていた。集石は中央部に向かってやや凹んでいる。集石の表面は酸化や被熱の影響等により赤色化したものや、ひび割れているもの、油脂が付着したようなものもある。平面観での記録終了後、南西から北東方向で半截を行った。礫は覆土中層まで詰められていた。また、坑底からは燃料材と考えられる炭化材も出土した。覆土下層から出土した炭化材の放射性炭素年代測定を行った結果、 $1,540 \pm 20\text{yrBP}$ という測定値を得た (Ⅷ章9)。



図Ⅲ-19 PS-31

覆土：黒色の砂壤土で、3層に分けた。覆土の2層から3層にはやや粘性があり、砂全体に油脂がしみ込んだような様相を呈する。覆土中には炭化物は多く含まれるが、焼骨等はない。

坑底・壁：底面はやや狭く凹んでおり、壁は緩やかに立ち上がる。坑底の立ち上がりから壁面全体が赤色化している。

遺物出土状況：出土遺物の総数は148点で、覆土から台石が9点、礫が139点出土した。また上述のとおり、覆土下位からは長さ約55cm、太さ約15cmの炭化材（原木）も出土した。

掲載遺物：1は台石。正面の平滑面が皿状に浅く窪んでいる。（笠原）

（3）礫集中

2か所（S-11・12）を検出した。時期はいずれも検出層位と周辺を含めた出土遺物から、オホーツク文化刻文期と推察される。

S-11（図Ⅲ-20 表Ⅲ-1・2 図版16・42）

調査・特徴：Ⅶa層上面を精査中、K94区杭付近でⅥ層（Ma-b5）が環状に分布する範囲を検出した。土層観察用の十字のベルトを設定しトレンチ調査を行ったところ、Ma-b5が落ち込み、その下から礫が多数出土することがわかった。ベルトを残して掘削し、すり鉢状に落ち込むMa-b5を検出した。さらに掘削したところ、落ち込みの中央において礫がおむね楕円形の範囲で密にまとまって出土し、礫集中とした。礫は径10～20cm（大礫）の垂円礫が多い。また礫群の隙間や近接した位置から土器破片が多数出土した。

出土遺物の総数は165点で、内訳はオホーツク刻文土器71点、台石1点、礫93点である。

なお当遺構は、下位の竪穴遺構H-21の覆土上に形成された「上層遺構」にあたる。

掲載遺物：1はオホーツク刻文土器。甕の胴～底部で、無文である。下位の遺構H-21出土土器と同一個体の可能性がある。2は台石の破損品である。

S-12（図Ⅲ-20 表Ⅲ-1・2 図版16・42）

調査・特徴：Ⅶa層を調査中、礫がまとまって出土する長楕円形の範囲を確認した。調査区境の1点は径30cm超の巨礫であるが、それ以外は径10～20cmほどの大礫である。一部に直線的なブロックがみられる。出土遺物の総数は20点で、内訳は板状加工礫1点、礫19点である。

掲載遺物：3は板状加工礫。小型で正裏面に分割面がある。（阿部）

（4）フレイクチップ集中

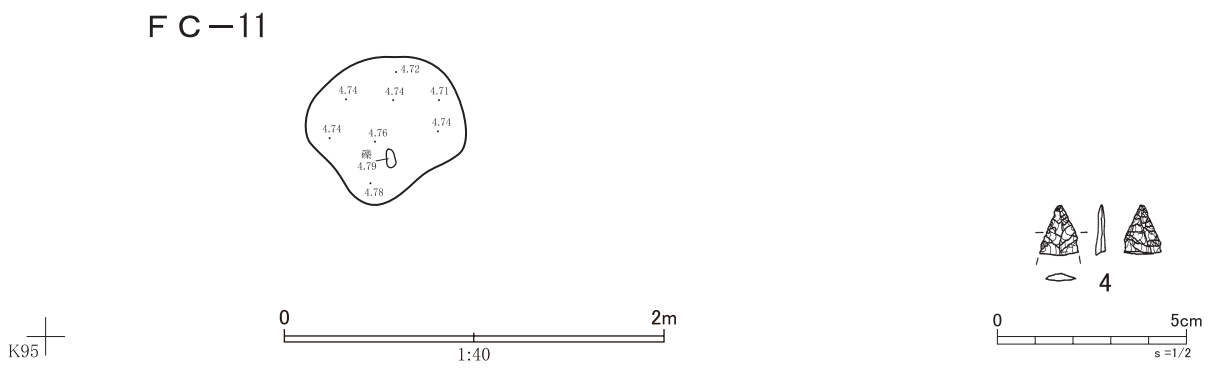
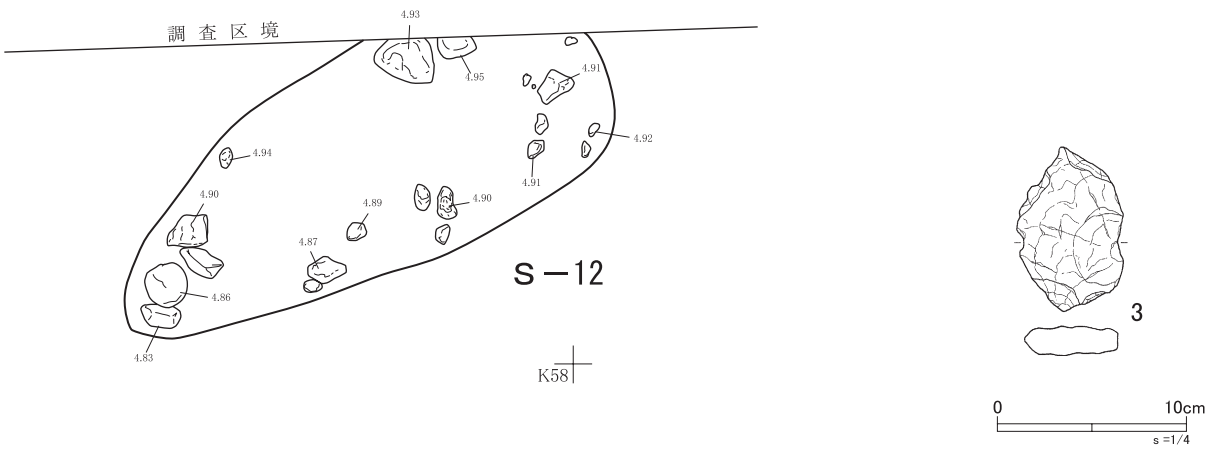
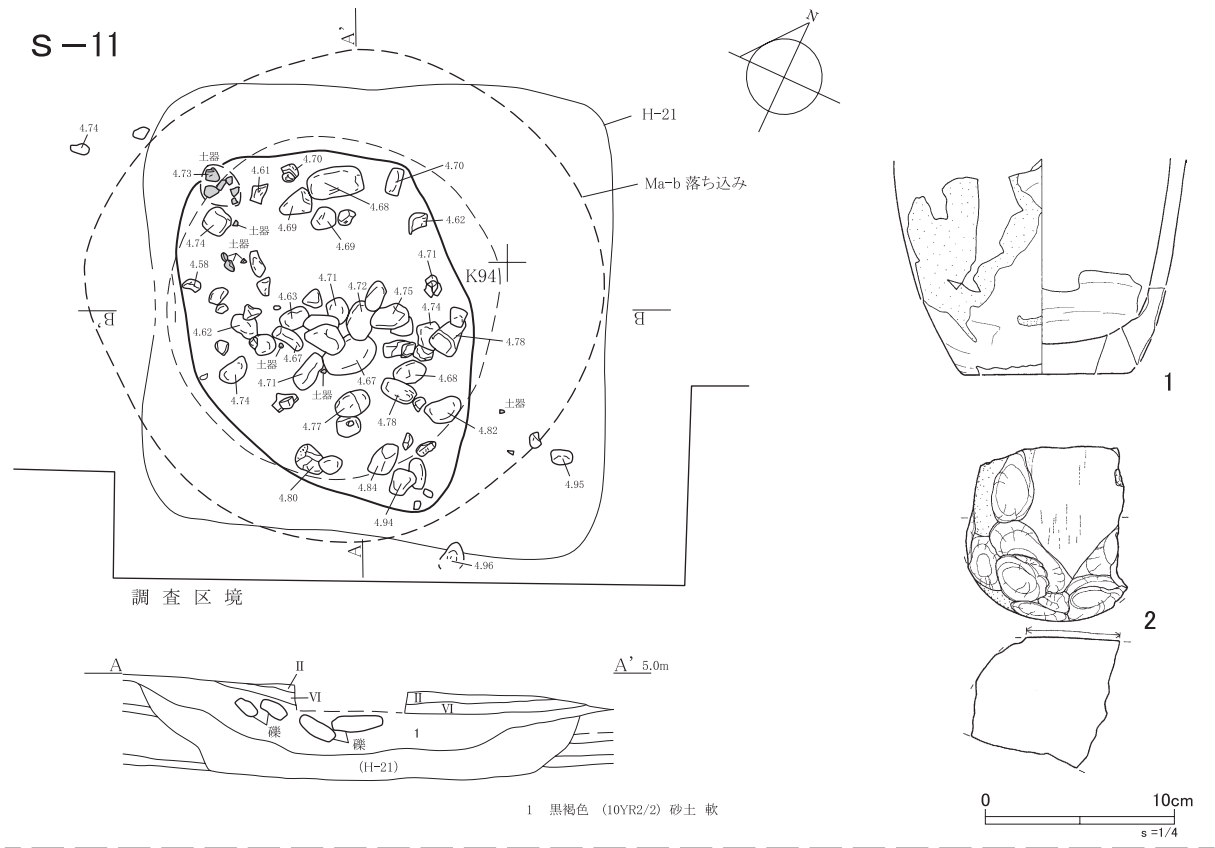
1か所（FC-11）を検出した。時期は、検出層位と周辺を含めた出土遺物から、オホーツク文化刻文期と推察される。

FC-11（図Ⅲ-20 表Ⅲ-1・2 図版16・42）

調査・特徴：Ⅶa1層を調査中、H-21の北西側に近接する緩斜面上でチップを中心とする細かな石器が80cm程度の範囲の中にややまとまって出土した。

出土遺物の総数は4,187点で、内訳は石鏃1点、フレイク4,185点、礫1点である。なおフレイクの多くは水洗選別により回収したものである。

掲載遺物：4は石鏃。下端が破損している。両面に平坦剥離が施されている。（直江）



図III-20 S-11・12・FC-11

SB-3 (図Ⅲ-22・23 表Ⅲ-1・2 図版17・42)

調査・特徴: 表土を除去し、Ⅱ層上面を精査して周辺を含めた範囲を掘り下げたところ、貝や骨片が東西方向に広がる集中範囲を検出した。標高4.7m前後、やや南側に傾斜する地形で、T a - a火山灰より上位のⅡ層上位に分布する。また北側の調査区外にも広がっている。貝・魚骨ブロックとして調査を行った。動物遺存体は魚骨・貝を中心に、獣骨片も散在していた。貝類ではビノスガイ、ウバガイが多く占める。獣骨ではシカが大半を占めるが、範囲中央付近では犬と考えられる下顎骨等も見られた。また骨角器等や金属製品が広い範囲に分布していた。

土層断面は南北23ラインの東側と灰層範囲に設定した。貝・骨類は大部分が層をなさず、Ⅱ層上に面的に出土した。また当ブロックの上位と下位から、黒褐色の砂層をはさみ二種類の火山灰も分布している。火山灰の分析結果では、上位が樽前 a 降下火山灰 (1739年)、下位は駒ヶ岳 c₂火山灰 (1694年) であることが報告されている (Ⅷ章 9)。

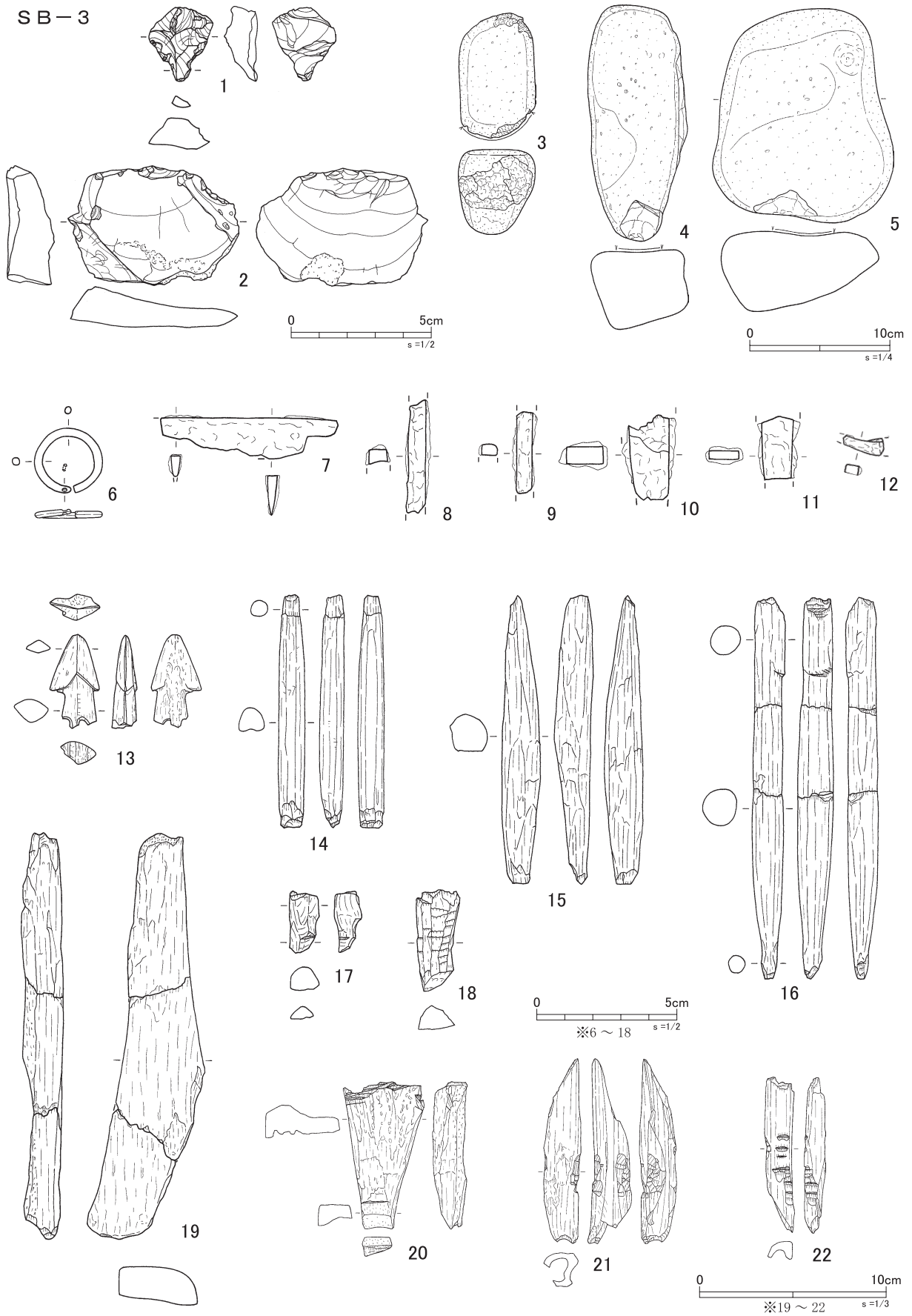
出土遺物: 人工遺物の総数は48点で、石器等が19点、金属製品13点、骨角器等16点である。石器は石錐1点、Rフレイク2点、フレイク11点、たたき石2点、台石1点があり、金属製品は刀子、釘などの鉄製品のほか、真鍮製の環状製品がある。骨角器は中柄およびその未成品、ヤス未成品のほか、各種加工残片がある。そのほか、礫13点、樹皮2点などが出土した。

水洗選別により、貝類約9kgのほか魚骨約100g、獣骨約1kgが回収できた。また下位灰層からは炭化木片を約16g回収した (表Ⅲ-10)。貝類はビノスガイ (最小個体数46)、ウバガイ (最小個体数30)、サラガイ (アラスジサラガイ含む)、ヌノメアサリ、ホタテガイ、エゾタマキガイなどの二枚貝のほか、エゾボラ、エゾタマガイなどの巻貝が少数ある。他のブロックに比較して種類が多く、ウバガイの比率が高い点の特徴である。魚骨はサケ科・タラ科・カジカ科が多く、ヒラメ・カレイ類、アイナメ・ウグイなどがある。鳥類ではウミスズメ科・カモメ科などがある。また獣骨が他のブロックに比べて多く、シカ・イヌが主体をなし、キタキツネ、アザラシなどがある。

掲載遺物: 1~5は石器。1は石錐。メノウ製剥片の鋭い角部を利用して刃部を作成している。2はRフレイク。正面右側縁にわずかに加工が施されている。3・4はたたき石。長軸上の端部に敲打痕が見られる。4は敲打の衝撃により、下端部の一部が剥落している。5は台石。中央の一部に平滑面が見られる。6~12は金属製品。6は真鍮製の耳輪と考えられる。孔が1か所あけられ、一方は先端が欠損している。7は平棟平造りの刀子で切先を欠失する。8・9は釘の一部。10・11は断面が長方形で下方がややすぼまり、楔と思われる。12は鉤状製品 (マレク) の端部の可能性がある。

13~22は骨角器および加工残片等。13は鹿角製の銚頭。かえしが作り出されている。断面は三角形に近いひし形で、表面中央の稜が明瞭である。裏面は鹿角の海面質が露出する。14は中柄。シカの中手中骨が用いられ、再加工中に放棄した可能性がある。15は中柄の未成品。16は一見中柄にも見えるが、かえしの加工があり、ヤスなどの刺突具の未成品と考えられる。17は何らかの加工品、18・21・22は骨角器制作時の残片。19は海獣骨片で骨角器の原材となるもの。20は銚頭などの原材となるもので、上端に切断痕、下端に加工痕がある。 (笠原)

6について非破壊での材質分析を行った。委託先によるクリーニング・保存処理後の資料表面をエタノールで清拭し分析に供した。分析装置は日本電子製エネルギー分散型蛍光X線分析装置JSX-3220を使用し、定性分析およびFP法による標準試料を用いない半定量分析を行った。装置の仕様は、管球: Rh、検出器: Si(Li)半導体検出器、測定条件は、管電圧: 30.0kV、管電流: 自動設定、雰囲気: 真空、照射径: 7mm、測定時間: 300秒。分析は図版42-5に示した3か所で行った。検出された主要元素の平均値(重量%)は、銅90.2%、亜鉛4.7%で、6の材質は銅-亜鉛合金の真鍮である。(柳瀬由佳)

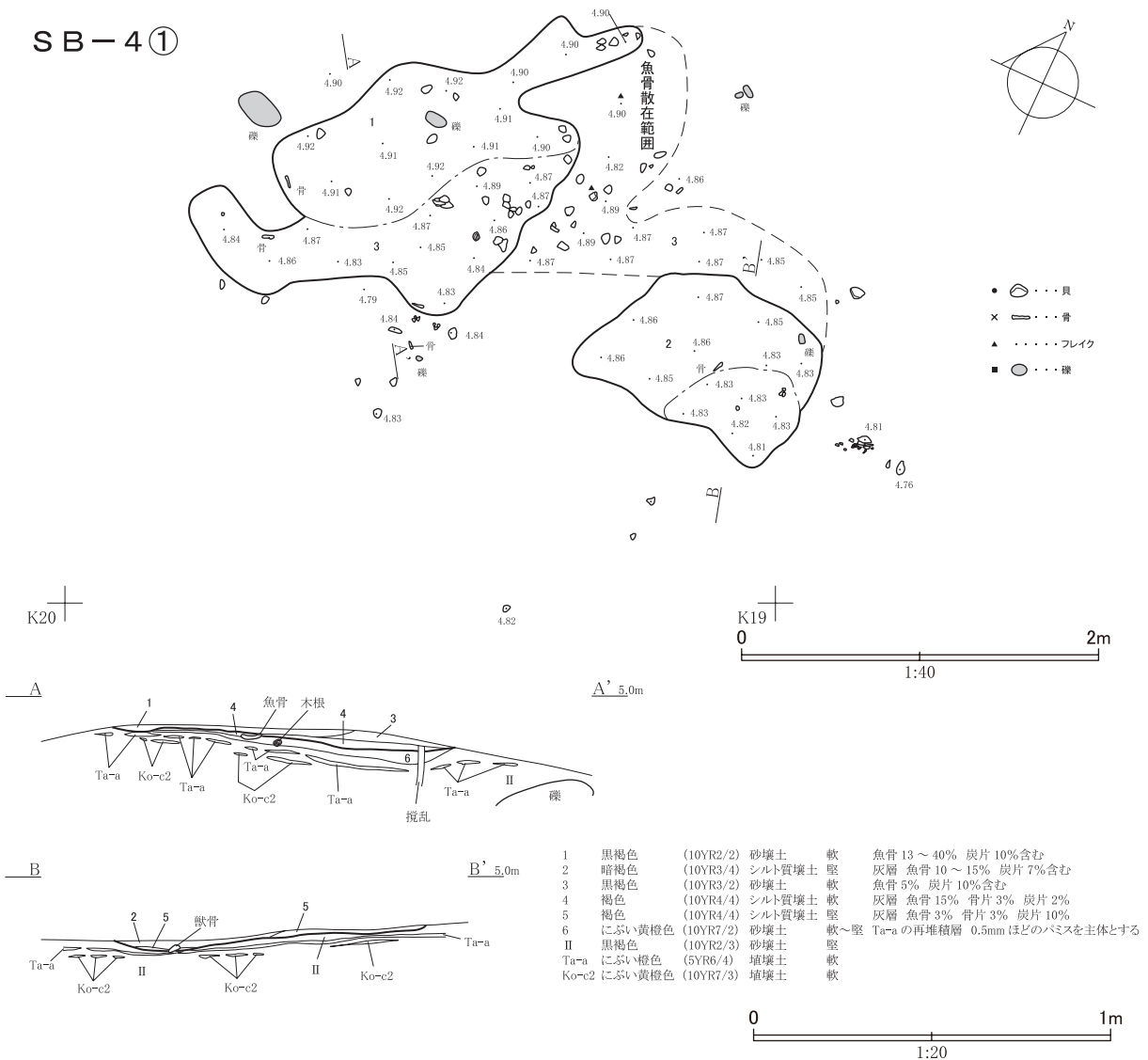


図III-23 SB-3出土の遺物

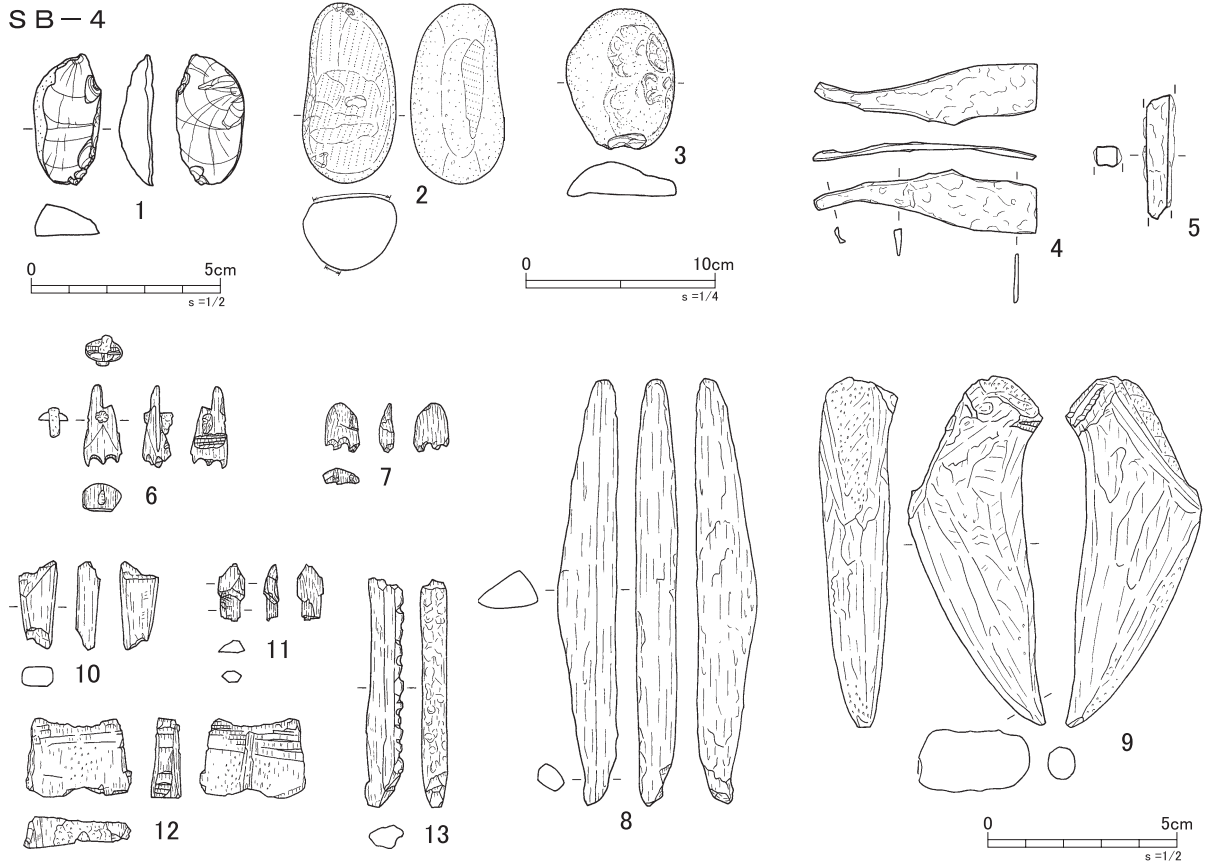
SB-4 (図Ⅲ-24~28 表Ⅲ-1・2 口絵2 図版18・43)

調査・特徴: 表土を除去しⅡ層上面を精査した段階で、魚骨と貝を中心とした近接する2か所の濃密な集中を東西に検出し、両者を合わせ貝・骨ブロックとした(図Ⅲ-25、SB-4①)。南側にわずかに下がる緩斜面上に立地する。それぞれ南北方向にトレンチを入れ、断面の観察を行った。その結果、両者とも下位に魚骨を非常に多く含む灰層がみられた。平面的に掘り下げたところ、貝・骨ブロックの範囲は約5m、下位の灰層の範囲は東西方向に約3m広がり、上面で確認した集中は繋がり大きな一つの範囲となる(図Ⅲ-26、SB-4②)。動物遺存体は魚骨・貝を中心に、獣骨も一定程度みられた。獣骨ではシカが大半を占めるが、灰層5の上面ではアザラシの頭蓋骨が潰れた状態で一個体分出土した。その他にシカの下顎骨が灰層周辺に散在している。その後調査を進めると、範囲が縮小し(図Ⅲ-26、SB-4③)獣骨類の出土率が高い傾向がみられた。また、灰層4中に70cm程の範囲に小礫の集中がみられ、S-14として別途記録し取り上げた。また灰層で採取した炭化物を試料とした¹⁴C年代測定では、190±20yBP(δ¹³C補正あり)という結果であった(Ⅷ章9)。

出土遺物: 人工遺物の総数は36点で、石器等が19点、金属製品7点、骨角器等10点である。石器等はRフレイク1点、すり石1点などがある。金属製品は鉄釘、不明鉄片、銅製品各1点がある。骨



図Ⅲ-24 SB-4 (1)



図Ⅲ-26 SB-4出土の遺物

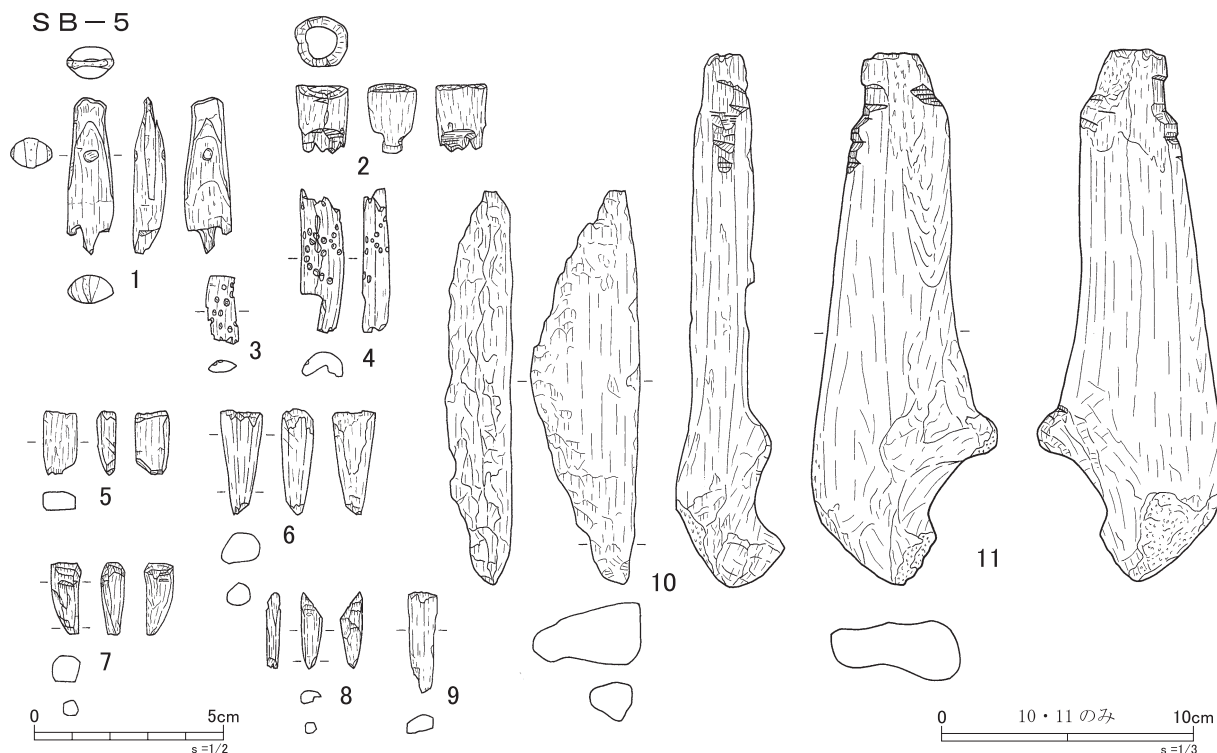
角器等は銚頭2点、鉤状製品のほか、未成品や残片が複数ある。ほかに礫が37点出土した。

水洗選別により、貝類約6.7kgのほか魚骨約3.8kg、獣骨約1kgが回収できた。また炭化木片を約580g回収した(表Ⅲ-10)。他のブロックに比べ、魚骨の比率が高い。貝類はビノスガイ(最小個体数93)が主体で、ウバガイ(最小個体数5)、サラガイ、ホタテガイ、バカガイなどの二枚貝のほか、巻貝、フジツボが少数ある。魚骨はサケ科、カジカ科、ヒラメ・カレイ類、タラ科が多く、アイナメ、ウグイ、ニシンなどがある。特に、オオカミウオは注目すべきである。鳥類は、ウミスズメ科、アホウドリ科などがある。獣骨は、上記のアザラシの頭蓋骨のほか、シカの顎骨や四肢骨などがある。

掲載遺物：1～3は石器等。1はRフレイク。横長剥片を素材として右側縁の一部に加工が施されている。2はすり石。正面を中心に擦り痕が認められる。3は加工痕ある礫。下端に小型の加工が施されている。4は銅製品で、薄い板状のもの。5は鉄釘。6～13は骨角器等。6・7は銚頭で、6は目釘(鉄)が残存する。被熱し白色化している。表面は目釘の位置から左右斜方向に細い筋状の沈線がみられ、裏面には金属部分を外すためと考えられる切込みがある。7は作り出しによるものとみられる。8は中柄の未成品。両端部に加工痕がある。9は鹿角の先端に近い部分を利用した鉤状製品。切断痕が明瞭である。10は刺突具等、何らかの骨角器片で、面取加工がみられる。11は未成品。12・13は残片で、加工痕が明瞭に残る。(直江)

SB-5 (図Ⅲ-27・28 表Ⅲ-1・2 図版18・43)

調査・特徴：表土を除去しⅡ層上面を精査した段階で、貝がまとまって出土する地点を確認した。周辺を含めた範囲を掘り下げたところ、貝や骨片が集中する範囲を検出し、貝・魚骨ブロックとした。標高4.8m前後のほぼ平坦なⅡ層中に不整形な範囲で分布する。その中でも特に貝類・魚骨等が濃密



図Ⅲ-28 SB-5出土の遺物

に分布する範囲をそれぞれ貝集中①・②・③、魚骨集中②・③（①は欠番）とした。貝集中①はピノスガイの貝殻が原形を保っているものが多い。貝集中②は魚骨集中②と重複し、碎片が多い。貝集中③はやや密度が低い。貝集中周辺も含め、シカの各部位が良好に残存していた。魚骨集中②・③は薄い灰層を伴い、魚骨が多量に含まれている。

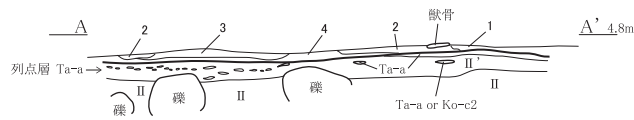
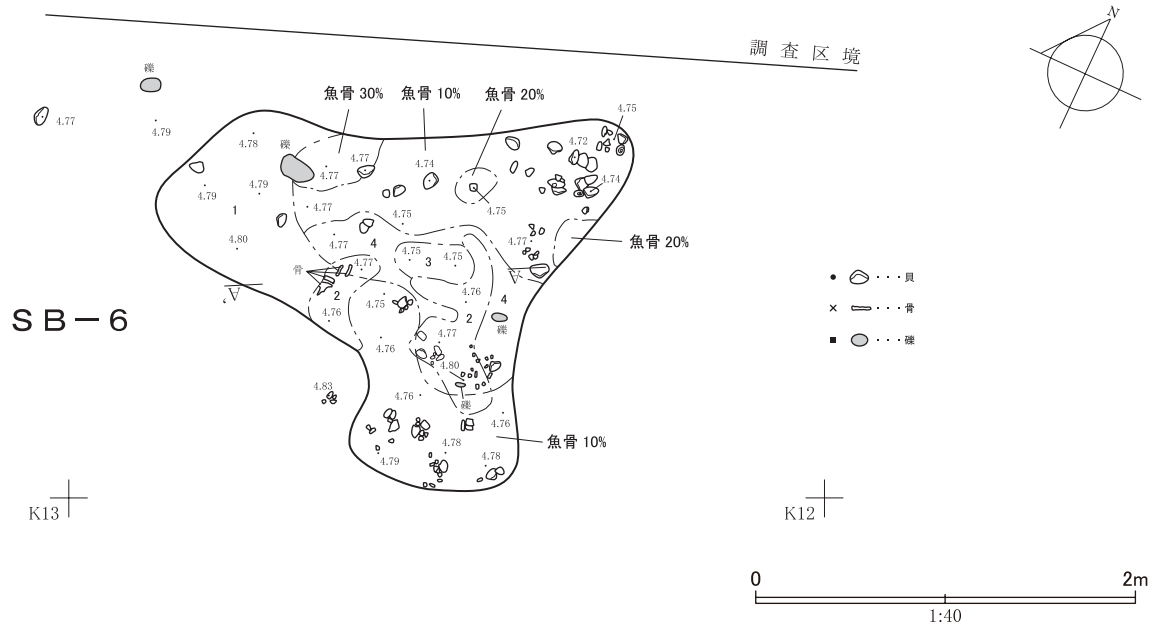
土層断面は南北16ライン付近で確認した。貝類は大部分が層をなさず、Ⅱ層中に面的に含まれていることが確認できた。ただし魚骨集中②付近には薄い灰層がみられる。また当ブロックの下位から、それぞれ薄層をはさみ2層の火山灰層を検出した。火山灰の分析を委託したところ、上位はT a - a、下位はT a - aとK o - c₂が混合した可能性がある、との結果が報告された（Ⅷ章10）。

なお、魚骨集中②で採取した炭化物を試料とした¹⁴C年代測定は、170±20y.B.P.（ $\delta^{13}\text{C}$ 補正あり）という結果であった（Ⅷ章9）。

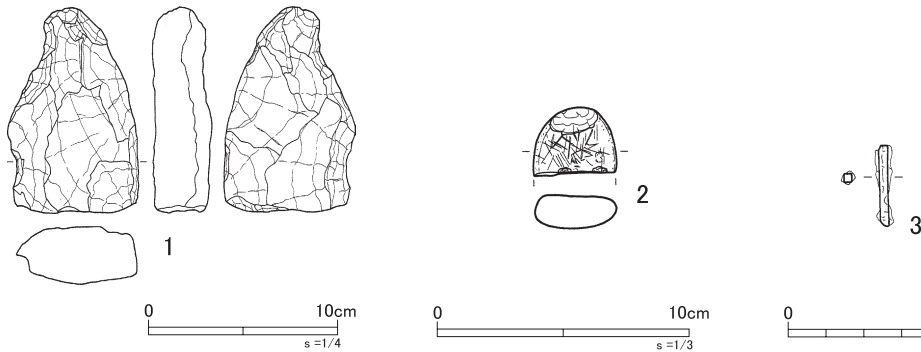
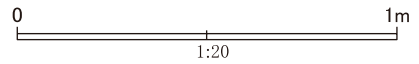
出土遺物：人工遺物の総数は37点で、石器等が12点、鉄製品6点、骨角器等が19点である。ほかに礫28点、樹皮4点などが出土した。骨角器は銚頭1点、装飾品1点、弓筈状1点のほか、未成品、残片、原材がある。

水洗選別により、貝類約13.5kgのほか魚骨約0.9kg、獣骨約0.7kgが回収できた。また炭化木片を約370g回収した（表Ⅲ-10）。貝類は全ブロックの中で最も多い。ピノスガイ（最小個体数177）の比率が特に高く、バカガイ（最小個体数28）、ウバガイ、サラガイなどの二枚貝のほか、エゾタマガイなどの巻貝、フジツボが少数ある。魚骨はカレイ類、カジカ科、タラ科が多く、カサゴ類、アイナメ、ウグイなどがある。サケが少数である点の特徴である。獣骨は、シカの顎骨や四肢骨、踵骨などが良好な状態で残存していたほか、ヒグマの尺骨が1点出土した。

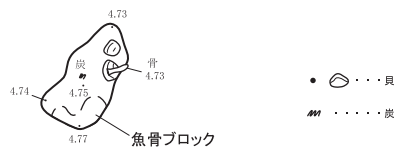
掲載遺物：1～11は骨角器等。2～4・7・9は白色化しており、被熱によるものとみられる。1は海獣骨製の銚頭で、銅鏃の基部が目釘とともに残存している。装着部分以外の銅鏃を裁断し、残



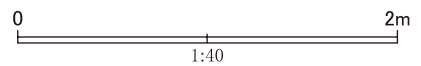
- | | | | |
|------|------------------|---------|-----------------------------------|
| 1 | 黒褐色 (10YR2/3) | 壤土 軟 | 魚骨・骨片 5% 炭片 3%含む |
| 2 | 褐色 (7.5YR4/4) | 埴壤土 軟 | 魚骨・骨片 15% 炭片 10%含む [灰層] |
| 3 | 灰褐色 (5YR4/2) | 埴壤土 軟 | 魚骨・骨片 10% 炭片 20%含む [灰層] |
| 4 | 黒褐色 (10YR2/3) | 壤土 軟 | 魚骨・骨片 30% 炭片 15%含む 東側ほど魚骨少量 10%程度 |
| Ta-a | にぶい黄褐色 (10YR6/3) | 砂土 堅~軟 | |
| II | にぶい黄褐色 (10YR4/3) | 砂壤土 堅~軟 | |
| II' | 暗褐色 (10YR3/3) | 砂壤土 堅~軟 | |



SB-7



K10



図III-29 SB-6・7

存部の左右両側を叩き潰し、銅鏃部とともに再利用したと考えられる。2は鹿角製の「弓筈」状の製品。下端に切込みがみられる。3・4は陸獣骨を利用した装飾品。円形刺突列が曲線状に連続する。5は中柄の未成品と考えられる。全面面取りされている。6～9は先端が尖り、刺突具等の製品・未成品・残片と考えられるもの。7は切込み、9は面取りがみられる。 (阿部)

SB-6 (図Ⅲ-29 表Ⅲ-1・2 図版19・43)

調査・特徴：表土を除去しⅡ層上面を精査した段階で、貝を中心とするまとまりと魚骨を多く含む帯状の灰層を検出し、貝・骨ブロックとした。北側にわずかに下がる緩斜面上に立地する。他のブロックに比べ小さい範囲で集中の濃淡が大きく変化していることが特徴である。東西方向にトレンチを入れ、断面の観察を行った。その結果、灰層は上部のみ部分的にみられ、下部には魚骨を多く含む黒褐色土が広がっている。全体的に炭化木片の含有量が高い。

出土遺物：人工遺物の総数は36点で、石器等ではフレイク28点、線刻礫1点、加工痕ある礫1点火打石?1点がある。ほかに鉄製品が5点あり、釘などを含む。水洗選別により、貝類約2.3kgのほか魚骨約1kg、獣骨約0.2kgが回収できた。また炭化木片を約240g回収した(表Ⅲ-10)。比較的魚骨の割合が高い。貝類はビノスガイ(最小個体数22、ウバガイ(最小個体数7)、サラガイ、エゾバカガイなどの二枚貝のほか、巻貝が少数ある。魚骨はタラ科、カジカ科、ヒラメ・カレイ類が多く、サケ科がほとんど見られない。獣骨はシカ、アザラシなどがある。

掲載遺物：1・2は石器等。1は加工痕ある礫。全面的に粗い加工に覆われている。2は線刻礫。小型で扁平な泥岩の平坦面に細い線刻が多方向から刻まれている。3は鉄釘の下端付近。 (直江)

SB-7 (図Ⅲ-29 表Ⅲ-1・2)

調査・特徴：調査区東端部方面のⅡ層上部を調査中、貝類がややまとまって出土した。周辺をT a-a上面まで掘り下げ平面的な広がり把握し、貝・骨ブロックとした。最も小規模なブロックである。魚骨がやや密に含まれる範囲が部分的にある。

出土遺物：水洗選別により、貝類約80gのほか魚骨約15g、獣骨約10gが回収できた。また炭化木片を約10g回収した(表Ⅲ-10)。貝類はエゾバカカガイ、ビノスガイ、ウバガイ片が少数ある。獣骨はイヌのほか小動物が含まれている。 (阿部)

SB-8 (図Ⅲ-30 表Ⅲ-1・2 図版19・43)

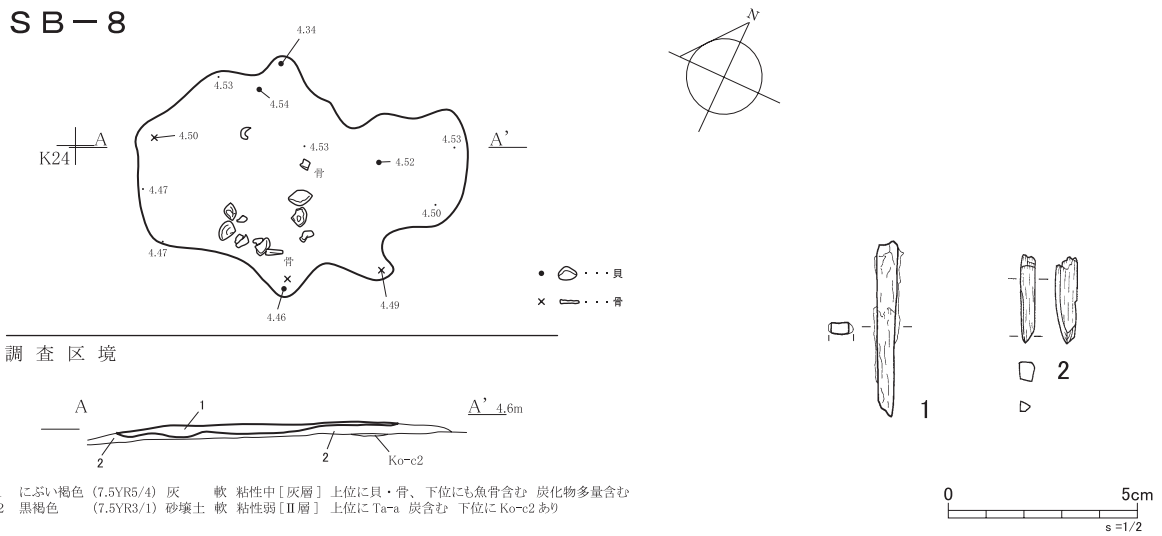
調査・特徴：J・K24区の南側Ⅱ層上面を精査中に、貝や骨がややまとまっている灰層を確認した。周囲にはT a-a火山灰と考えられるものも見られる。主体部を掘り下げ、平面的な広がり把握し、貝・骨ブロックとした。概ね東西方向で半截し、土層断面を記録した。魚骨がやや密に含まれる部分もある。下位にはK o-c₂火山灰も確認した。

出土遺物：水洗選別により、フレイク3点、鉄製品6点と骨角器等2点を回収した。鉄製品は釘2点、不明鉄片4点、骨角器等は未成品や残片である。また灰層のサンプルから、人の歯を1点回収した。下顎の第一乳臼歯または成人であれば上顎の第二小臼歯とみられる。

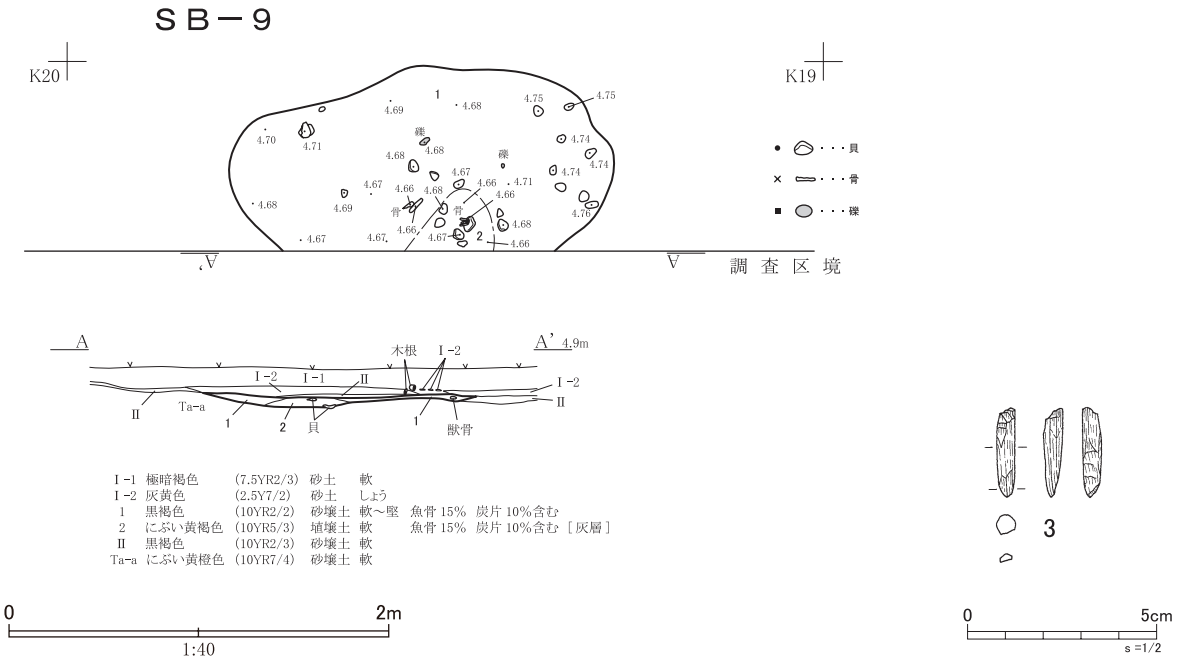
自然遺物は貝類約0.8kgのほか魚骨約400g、獣骨約40gが回収できた。また炭化木片を約80g回収した(表Ⅲ-10)。貝類はビノスガイ(最小個体数7)、ウバガイ(最小個体数2)のほか、サラガイ、ホタテガイ、エゾキンチャクガイ、オオミゾガイ、エゾバカガイなどの二枚貝、エゾボラ、エゾタマガイなどの巻貝が少数ある。比較的種類が多い。魚骨はサケ科を主体とし、ヒラメ・カレイ類、カジカ科、タラ科などがある。獣骨はシカの四肢骨片などのほか、イヌの歯がある。鳥骨はウミスズメ科など少量含まれる。

掲載遺物：1は鉄釘。2は骨角器未成品で、先端部が加工されている。 (笠原)

SB-8



SB-9



図III-30 SB-8・9

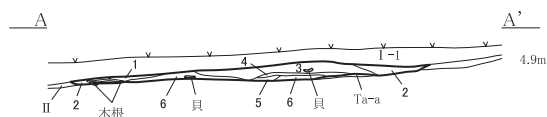
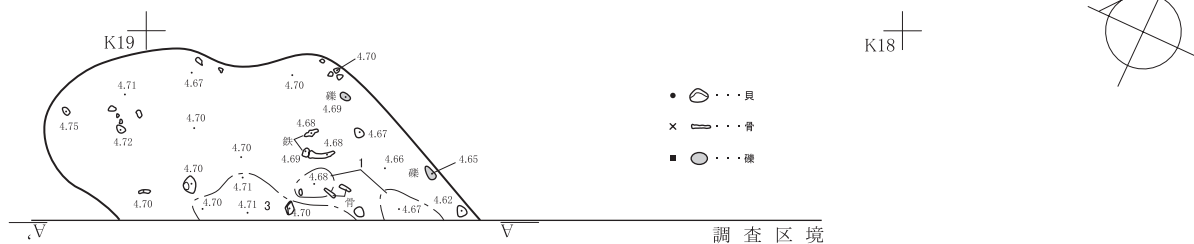
SB-9 (図III-30 表III-1・2 図版19・43)

調査・特徴: II層上部を調査中、南側にわずかに下がる緩斜面上で、ピノスガイを中心とした貝類が2m程の範囲の中でまとまって出土した。SB-4・10と隣接する。周辺をTa-a上面まで掘り下げ平面的な広がりを把握し、調査区境で断面を記録した。中心部ほど魚骨の含有量が高くなり、下位には灰層がみられた。

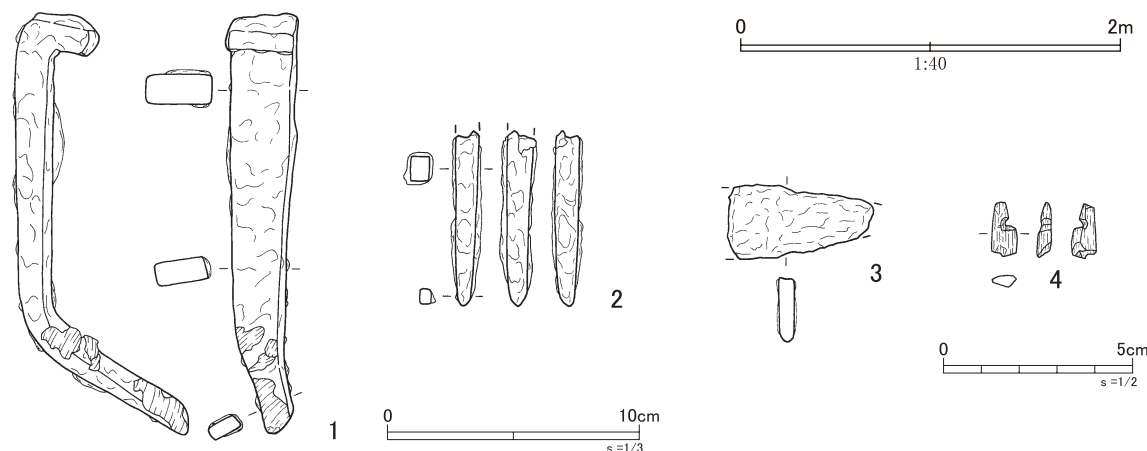
出土遺物: 2点出土し、鉄製品が1点、骨角器1点がある。ほかに碟1点を回収した。

水洗選別により、貝類約600gのほか魚骨約200g、獣骨約20gが回収できた。また炭化木片を約70g回収した(表III-10)。貝類はピノスガイ(最小個体数11)、ウバガイ(最小個体数1)のみが確認できた。魚骨はサケ科、カジカ科、ヒラメ・カレイ類が多く、ほかにタラ科、アイナメ、ニシンなどがある。獣骨はシカの肩甲骨片などがある。

SB-10



I-1	極暗褐色 (7.5YR2/3)	砂土	軟	
1	褐色 (7.5YR4/6)	埴壤土	軟	魚骨 3% 炭片 10% 含む [灰層]
2	黒褐色 (10YR2/3)	砂壤土	軟	魚骨 15% 炭片 10% 含む
3	にぶい黄褐色 (10YR4/3)	埴壤土	軟	魚骨 7% 炭片 10% 含む [灰層]
4	黒色 (10YR1.7/1)			(炭片)
5	にぶい黄褐色 (10YR5/4)	砂壤土	軟	魚骨・貝片 3% 炭片 2% 1層をブロック状に 1% 含む
6	暗褐色 (10YR3/3)	埴壤土	軟	魚骨 15% 炭片 10% 3層との層界不明瞭
Ta-a	にぶい黄褐色 (10YR7/4)	砂壤土	軟	
II	黒褐色 (10YR2/3)	砂壤土	軟	



図Ⅲ-31 SB-10

掲載遺物：3は骨角器。鹿角製の中柄未成品で、刺突具の可能性もある。被熱している。

(直江)

SB-10 (図Ⅲ-31 表Ⅲ-1・2 図版19・43)

調査・特徴：II層上部を調査中、南側にわずかに下がる緩斜面上で、ピノスガイを中心とした貝類の2m程のまとまりを検出し、その中央には灰層もみられた。周辺をTa-a上面まで掘り下げ平面的な広がり把握し、調査区境で断面を記録した。周縁の一部と中央下部に多くの魚骨が含有されている。2点の鉄製品は近接して中央からやや北側の黒褐色土から出土した。

出土遺物：人工遺物は4点で、金属製品が3点、骨角器1点である。ほかに礫4点を回収した。

水洗選別により、貝類約200gのほか魚骨約300g、獣骨約20gが回収できた。また炭化木片を約120g回収した(表Ⅲ-10)。貝類はピノスガイ(最小個体数3)、ウバガイ(最小個体数1)、エゾバカガイが確認できた。魚骨はヒラメ・カレイ類、タラ科が多く、サケ科、カサゴ類、カジカ科などがある。鳥骨はカモメ科が同定された。

掲載遺物：1～3は鉄製品、4は骨角器。1は折釘で、脚部が屈曲している。2は角釘の下端部。3は刀子片。刃部ではなく、柄とみられる。4は銚頭。SB-4出土の銚頭(図Ⅲ-26-7)と形状が近似する。目釘穴に鉄錆が残存する。

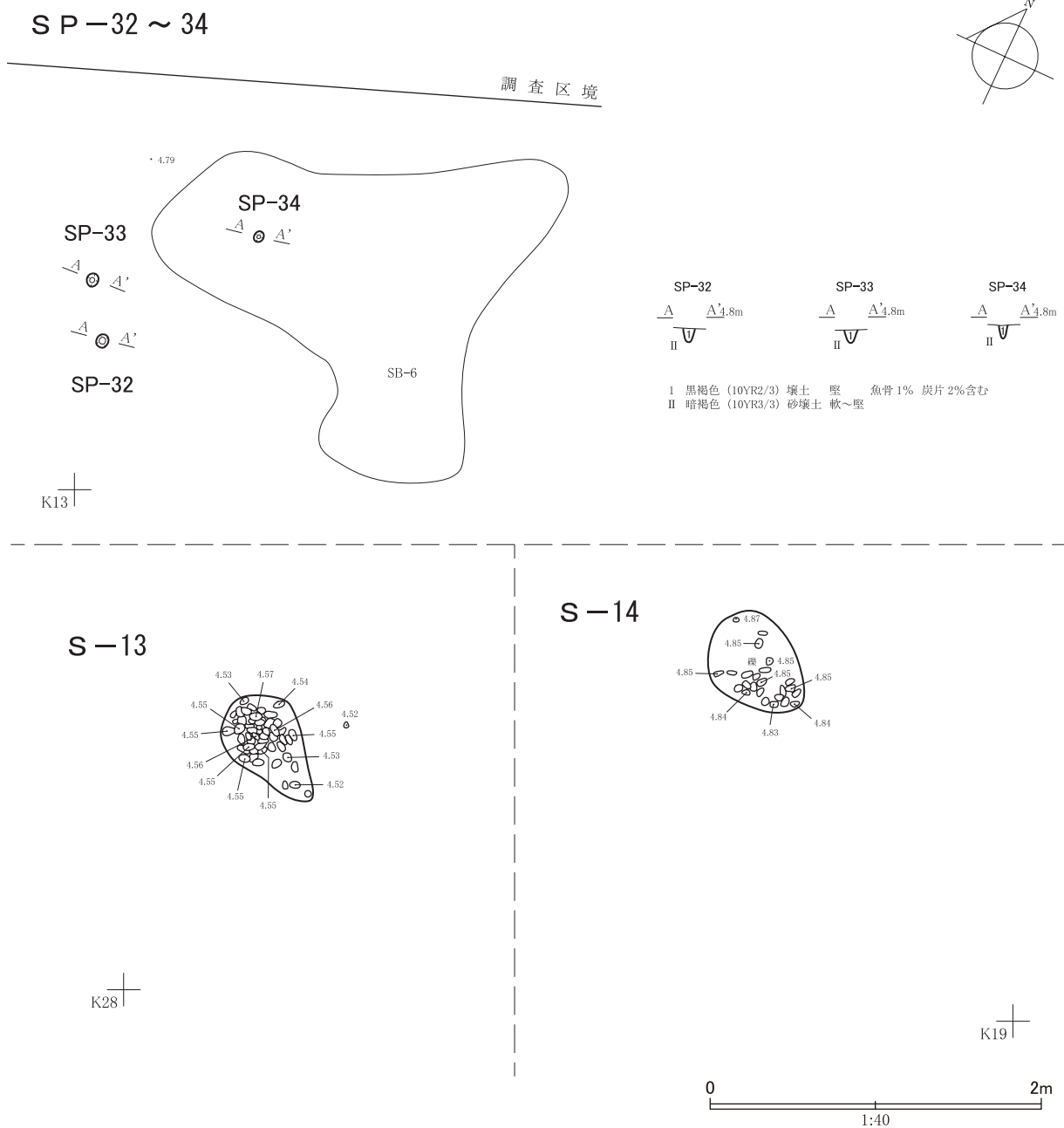
(直江)

(2) 柱穴状小土坑

3基 (SP-32~34) を検出した。時期はいずれも構築面と周辺の出土遺物から近世アイヌ文化期と推察される。

SP-32~34 (図Ⅲ-32 表Ⅲ-1 図版20)

調査・特徴: SB-6を調査し、周辺のⅡ層をT a-a上面まで掘り下げたところ、径1m程の範囲から直径8cm程の黒褐色の円形のひろがりを3か所検出した。半截したところ、やや尖った底面とやや開き気味の壁の立ち上がりを確認した。いずれも類似した形状である。覆土はⅡ層由来とみられる黒褐色土で、いずれも堅密度が高い。構築面はいずれもⅡ層上部とみられる。 (直江)



図Ⅲ-32 SP-32~34・S-13・14

(3) 礫集中

2か所(S-13・14)を検出した。時期は形成面と周辺の出土遺物から、いずれも近世アイヌ文化期と推察される。

S-13 (図Ⅲ-32 表Ⅲ-1・2 図版20)

調査・特徴:Ⅱ層上部を調査中、南側にわずかに下がる緩斜面上で、50cm程の範囲に小礫の集中を検出した。北西-南東方向に広がる分布のうち、北西側の集中度が高い。礫の大きさは5~8cm程度のもので選択されている。

出土遺物の総数は礫が55点で、1点の石英岩を除きすべて安山岩である。(直江)

S-14 (図Ⅲ-32 表Ⅲ-1・2 図版20)

調査・特徴:南側にわずかに下がる緩斜面上に立地する。SB-4を調査中、最下部で50cm程の範囲に小礫の集中を検出した。北西-南東方向に広がる分布のうち、南東側の集中度が高い。礫の大きさは5~8cm程度のもので選択されている。

出土遺物の総数は礫が25点で、すべて安山岩である。(直江)

3 包含層出土の遺物

(1) 遺物出土状況 (図Ⅲ-33~40)

Ⅶb層 (図Ⅲ-33~36)

調査区中央部~西部(51~110ライン)に連綿と遺物が分布し、今回調査区の遺物包含層の主体をなす。時期は続縄文時代後北C₂・D式期にほぼ限られる。

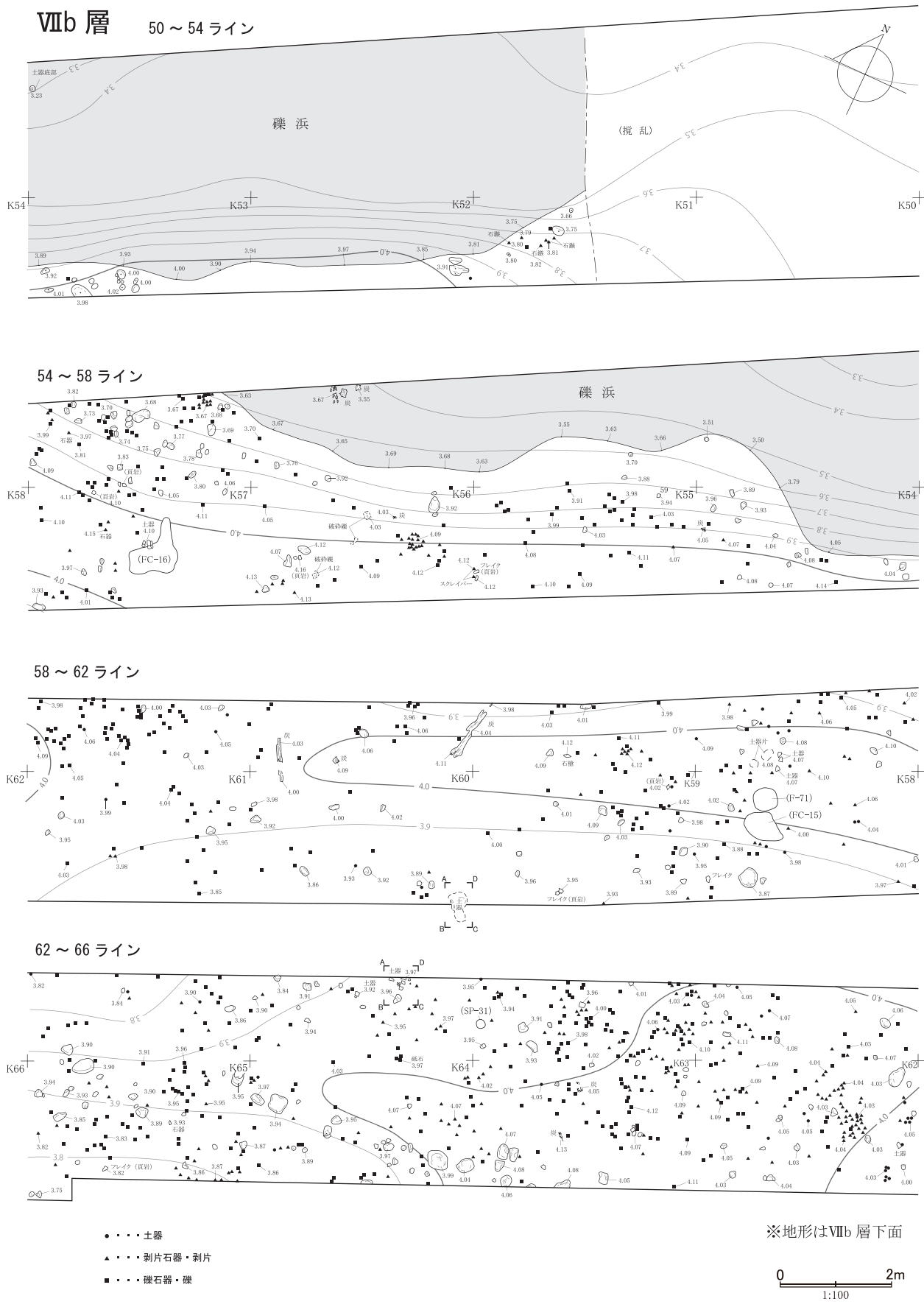
調査区東部、標高約3.7mの51ライン以東は礫浜が続き、東方ほど標高が下がる。40ライン付近では国道側が標高約3.5m、海側が3m以下に礫浜が確認できる。51~57ラインでは、調査区内に礫浜の境界が東西に現れ、その境界近くまで遺物が分布する。57~62ラインでは、特に焼土(F-71)周辺に遺物が目立ち、フレイクチップ集中(FC-15)もみられる。62~78ラインは最も遺物密度が高い範囲である。やはり各焼土の周辺から多数の遺物がみられる。特にK73区では、焼土(F-61)およびその周辺に板状の炭化木片が広がり、礫とともに多数のフレイクチップ類が分布していた(FC-14含む)。さらにJ69~75区では、北側への傾斜の肩部に沿って大型礫が列する状態が観察された。81ライン付近では住居跡の周辺に遺物が多いが、以西では遺物密度を減ずる。ただし単独個体出土の土器が目立つようになる(図Ⅲ-36)。95~110ラインは再び遺物密度を増し、北側に下る緩斜面上にまとまって出土する範囲がある。

Ⅶa層 (図Ⅲ-35)

調査区西部(83~110ライン)に遺物が断続的に分布し、特に竪穴跡H-19~21周辺から多く出土している。また調査区中央部(54~57ライン)にも礫を主体とした分布域がわずかにある。遺物の時期は、オホーツク文化刻文期~擬縄貼付文期である。さらに間層を複数はさんだ下位の「Ⅶa2層」からも、後北C₂・D式期やオホーツク文化刻文期の遺物がわずかに出土する(66ライン付近など)。

I~Ⅱ層 (図Ⅲ-37)

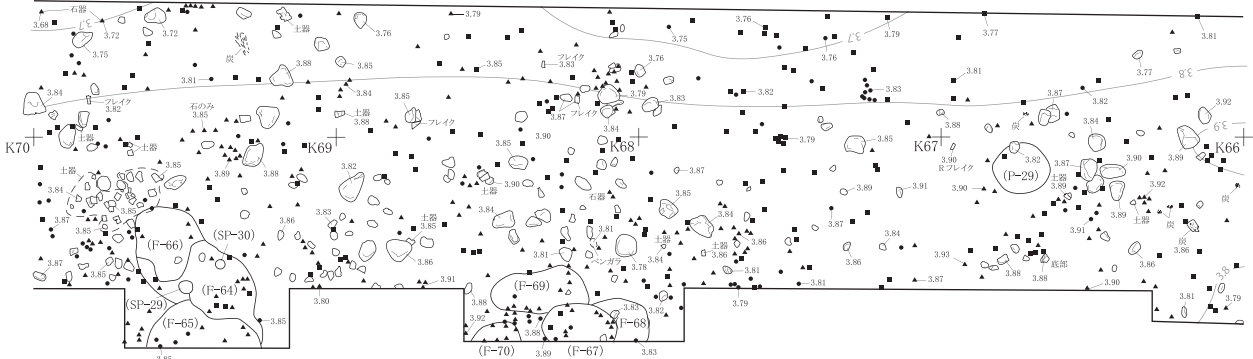
調査区東部(7~39ライン)に貝・骨片が連綿と分布し、集中域はブロックとした(SB-1~10)。遺物の時期は近世アイヌ文化期である。ブロック周辺以外では、K33~39区の斜面上位側にややまとまった範囲がある。ほかに42ライン付近の攪乱坑の底部から同一個体とみられる鉄鍋片が散在していた。



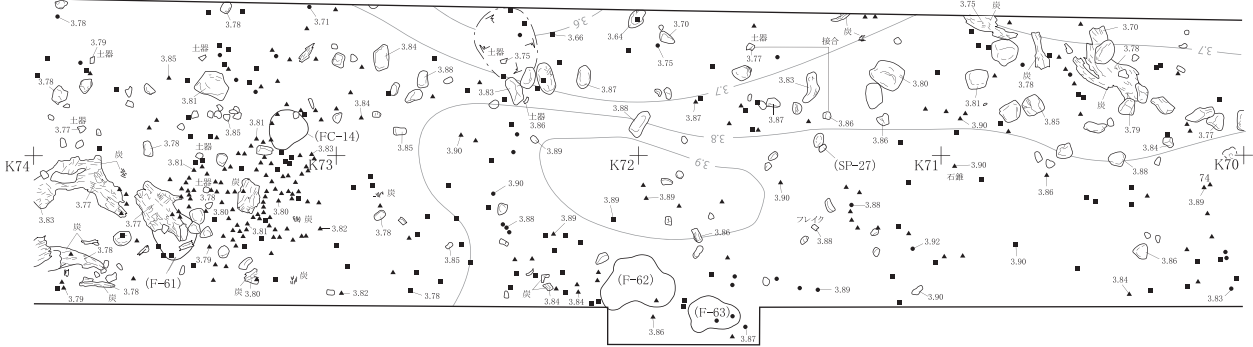
図Ⅲ-33 VIIb層遺物分布(1)

VIIb 層

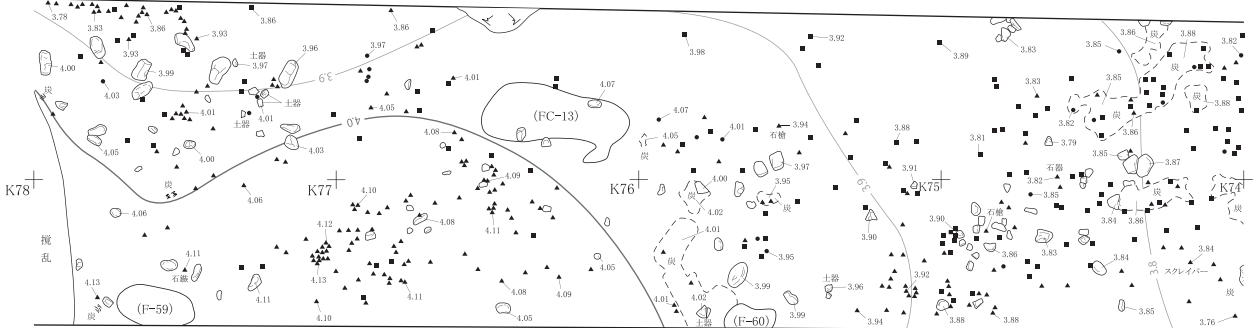
66 ~ 70 ライン



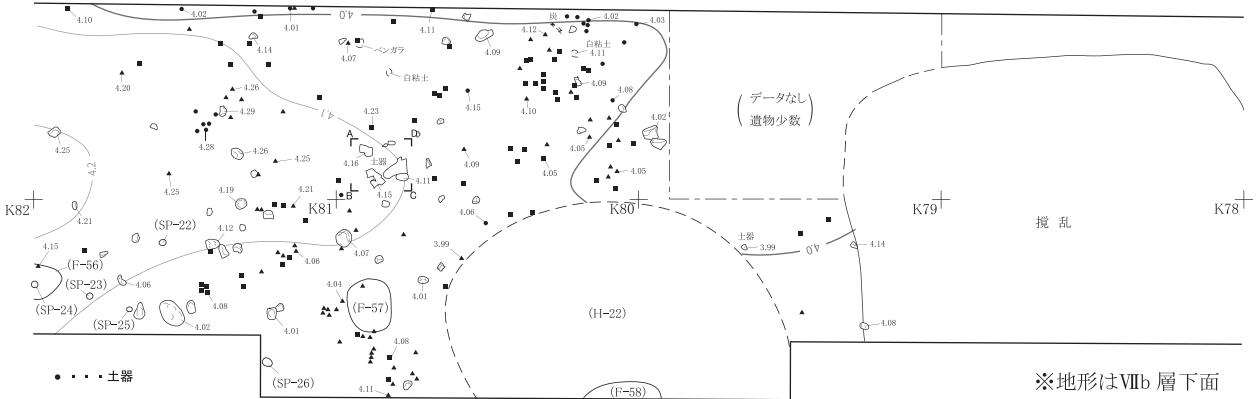
70 ~ 74 ライン



74 ~ 78 ライン

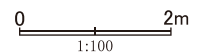


78 ~ 82 ライン



- ● ● 土器
- ▲ ● ● 剥片石器・剥片
- ● ● 礫石器・礫

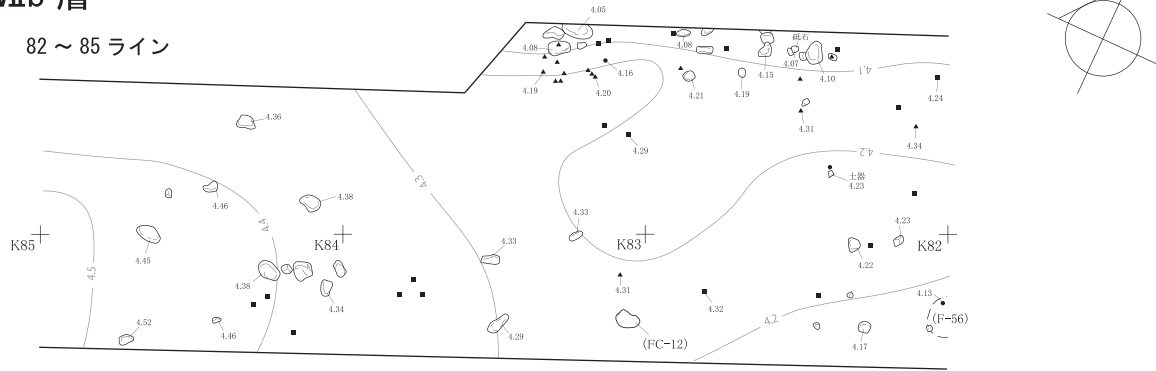
※地形はVIIb層下面



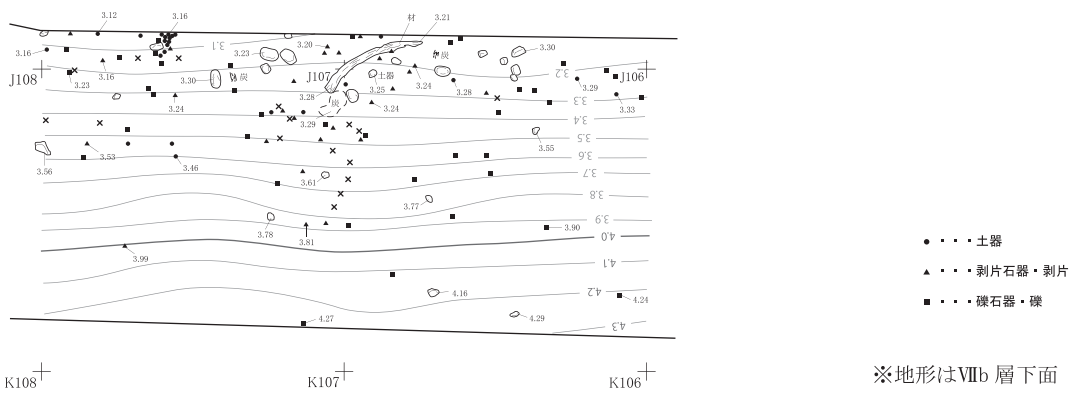
図Ⅲ-34 VIIb層遺物分布(2)

Ⅶb 層

82～85ライン

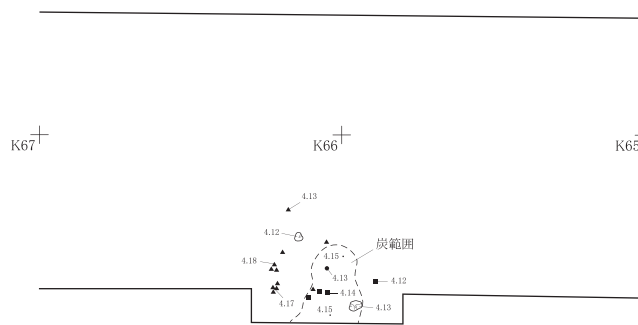


106～108ライン

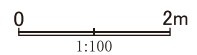
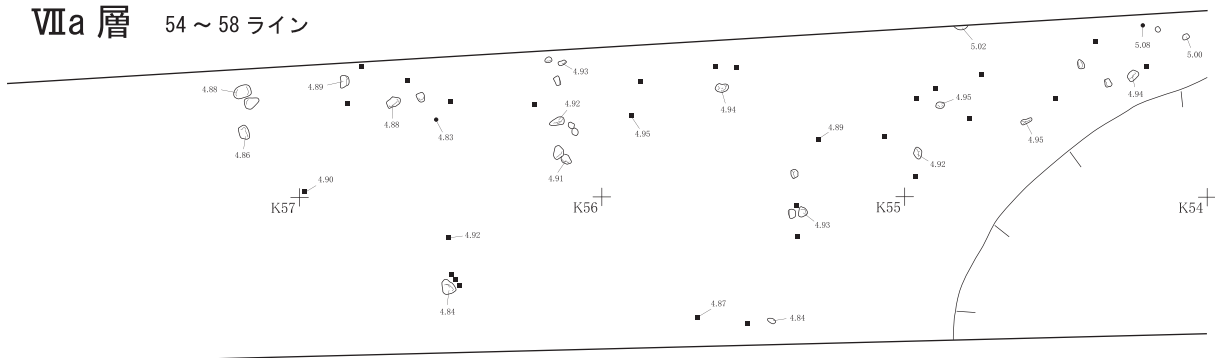


Ⅶa2 層

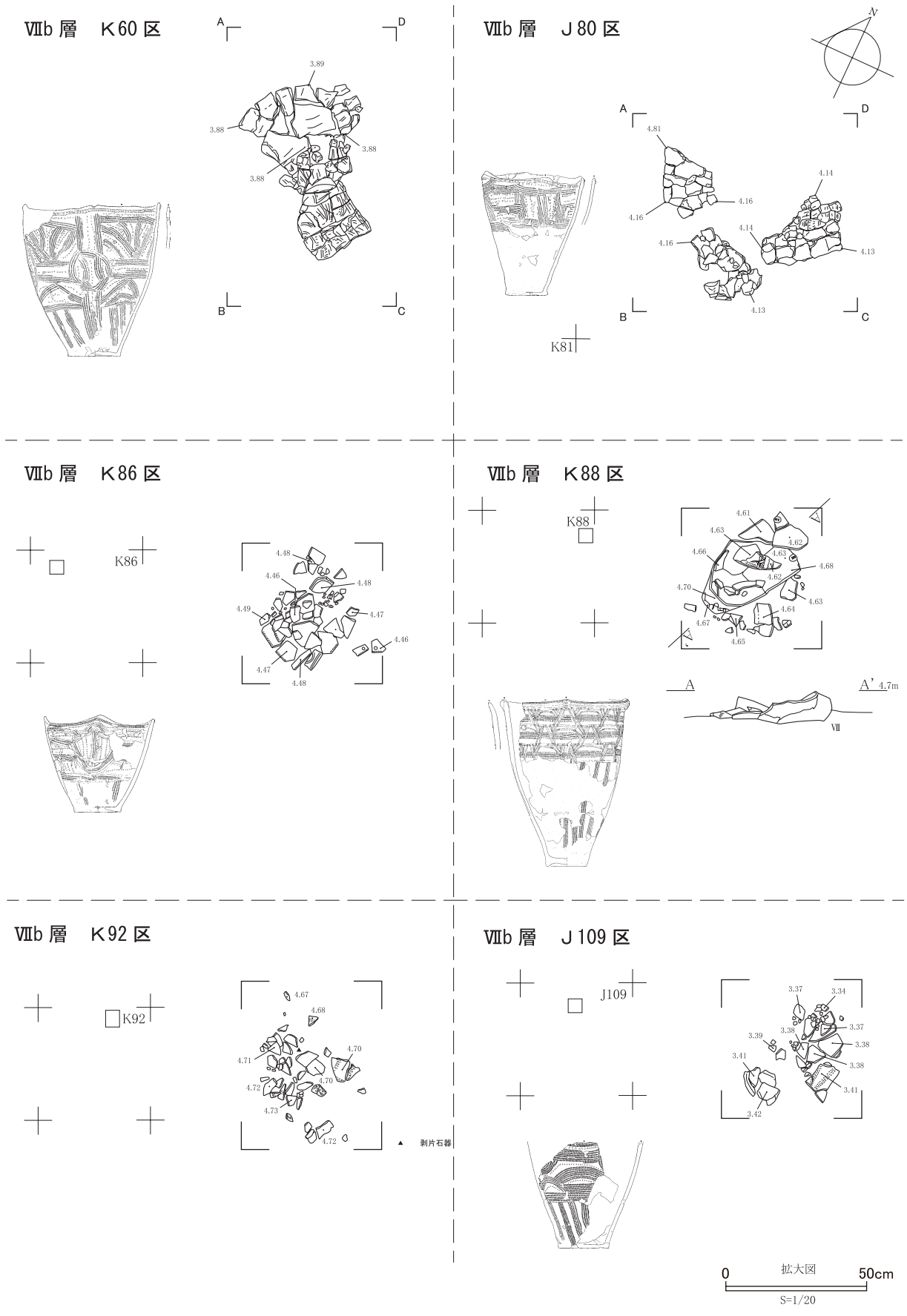
66ライン付近



Ⅶa 層 54～58ライン

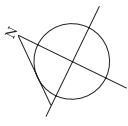


図Ⅲ-35 Ⅶb層(3)・Ⅶa層遺物分布

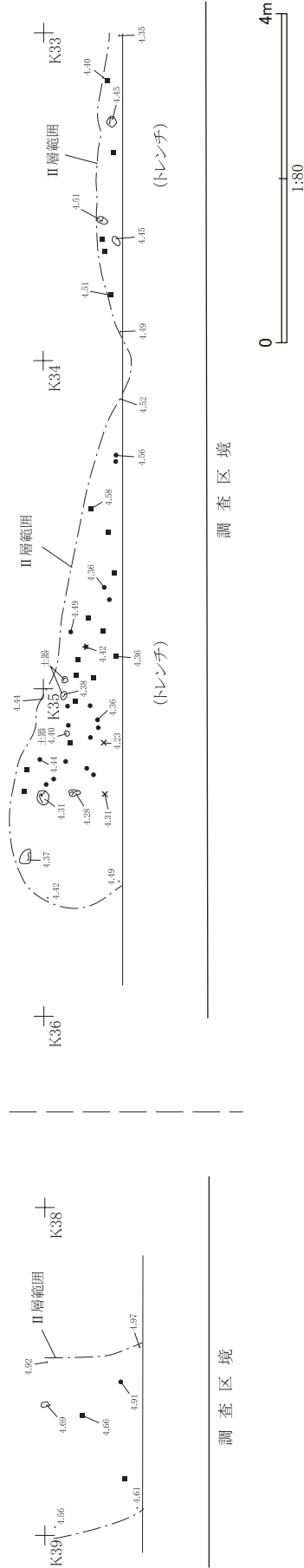


図Ⅲ-36 VIIb層一括土器出土状況

I層下位～II層 33～39ライン・K42区付近

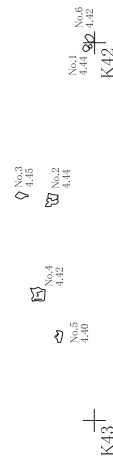


- 土器
- ▲ 剥片石器・剥片
- 燧石器・礫
- × 骨



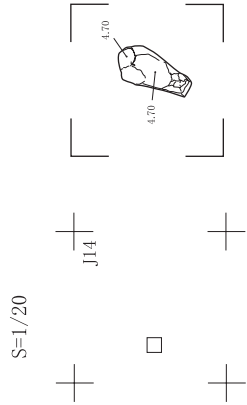
I層下位

J42区 鉄鍋片出土状況

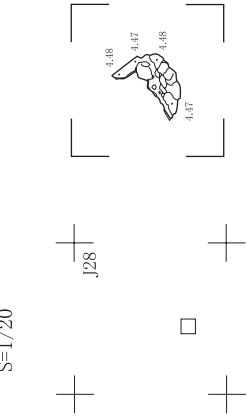


II層上位

J14区 斧出土状況



J28区 鎌出土状況



図III-37 I～II層遺物分布・出土状況

(2) 土器 (図Ⅲ-38~41 表Ⅲ-3・4 図版44~46)

続縄文時代の土器 (1~50)

後北C₁式 (1)

1は復元個体土器としては当遺跡唯一の後北C₁式。4単位の波頂部突起を基準に縦8単位、横3段の文様構成をとる。施文は、胴下部の縦位の帯縄文→上部の横位の帯縄文→帯縄文に沿う列点文→微隆起線(横走・山形・弧線)→結節点に円形刺突/突起・口唇刻み、の順に施されている。全体的に表面が風化し赤黒くサビついたように観察される。微隆起線の結節点への円形刺突は独特である。

後北C₂・D式 (2~50)

後北C₂・D式の中葉、「道東3式」(熊本2001)に相当するものがほとんどである。

2~16は復元個体。2は縦4単位の「主文様」+「副文様」が割り付けられている。微隆起線に沿って赤彩が施されている。国道向いの2008年調査区で出土した土器片と接合した。3は小型鉢で、底径が小さい。2単位の主・副の文様構成である。4は帯縄文が顕著にみられる。5は上面観が楕円形を呈し、焼成前に大きくゆがんだようである。内外面とも炭化物が多量に付着している。一方、6は上面観が正円に近い。縦4単位で横は2段構成をとるが線対称ではない。「道東2式」に近い「道東3式」と思われる。8は縦4単位(・横3単位)だが、縦1単位は間隔の狭い2個組の波頂部の直下に区画文様を施している。3~4本単位の縦横の条痕による文様構成である。9~11は無文の平底。12~16は注口や片口付きの土器。12・13は注口付きの小型鉢。波頂部下に小型の注口がある。14は片口付き。無文で、片口・底部以外は粗雑な成形である。15は口唇が平坦に成形されている。16は底部が瘤状の五脚とみられる。小型ながら深鉢同様の文様構成をなす。

17~29は微隆起線が施されているもの。17~23は深鉢・鉢形土器で、弧線文を基調とした文様が配されている。21・22は同一個体。24~29は注口付きや浅鉢土器など。24は注口の裾部。25は浅鉢で、上面観が楕円もしくは舟形を呈すると思われる。底面にも文様がおよぶ。26は片口付近に縦位の微隆起線が列する。28・29は注口部。28は屈曲し上方に開く。

30~46・48~50は擬縄貼付文・帯縄文・三角列点などで文様が構成されるもの。31・36は擬縄貼付文が2列施されている。31は口唇上に刻みではなく刺突列が施されている。37は細沈線により円文などを模倣してえがいたと思われる。38~40・43は底部。39は小型ながら三角列点が底部付近に施されている。41は環状の把手部。45・46は同一個体。48~50は注口部。

47は無文で、口唇上に刺突が連続する。

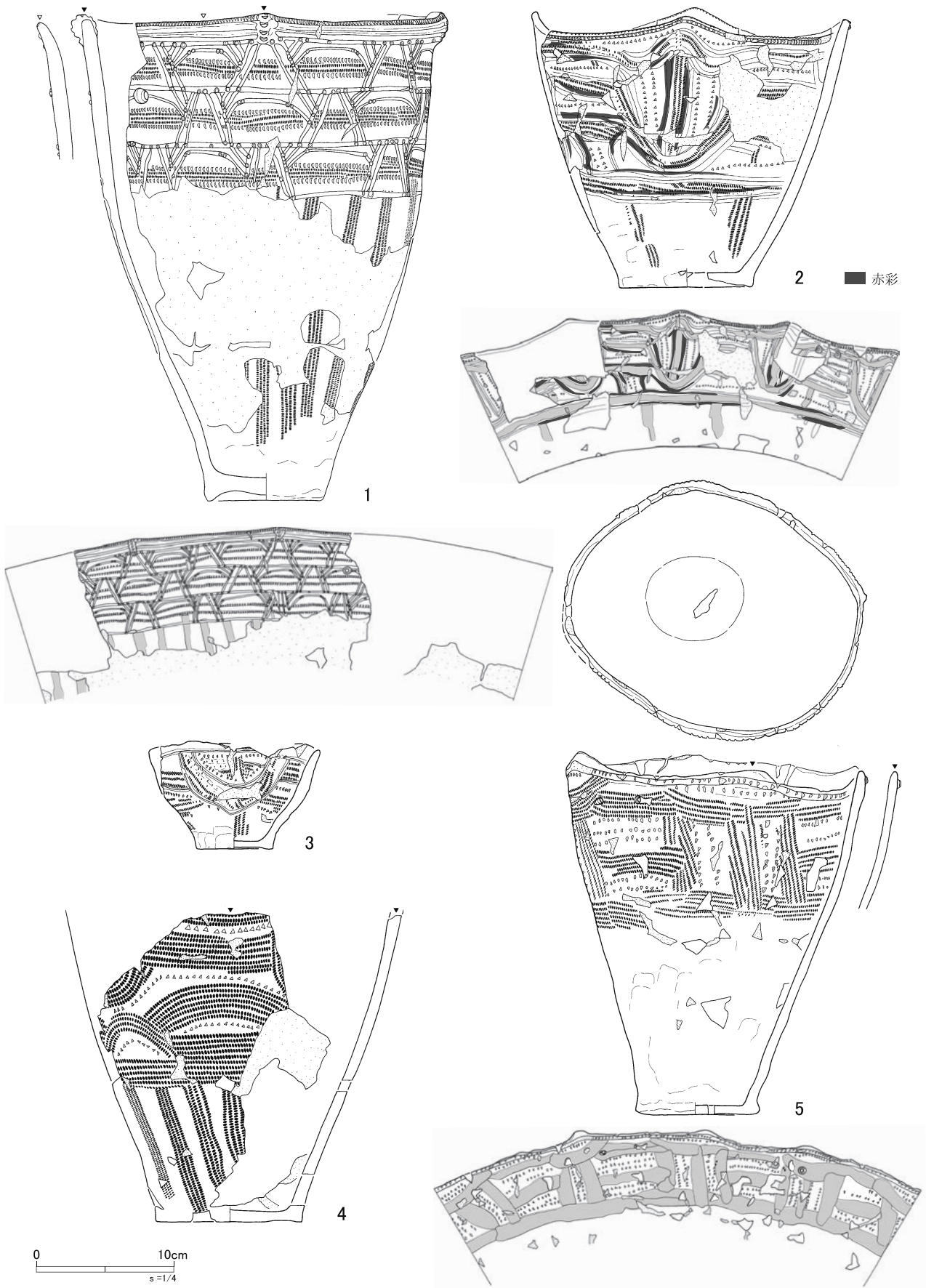
オホーツク文化期の土器 (51~71)

刻文土器 (51~70)

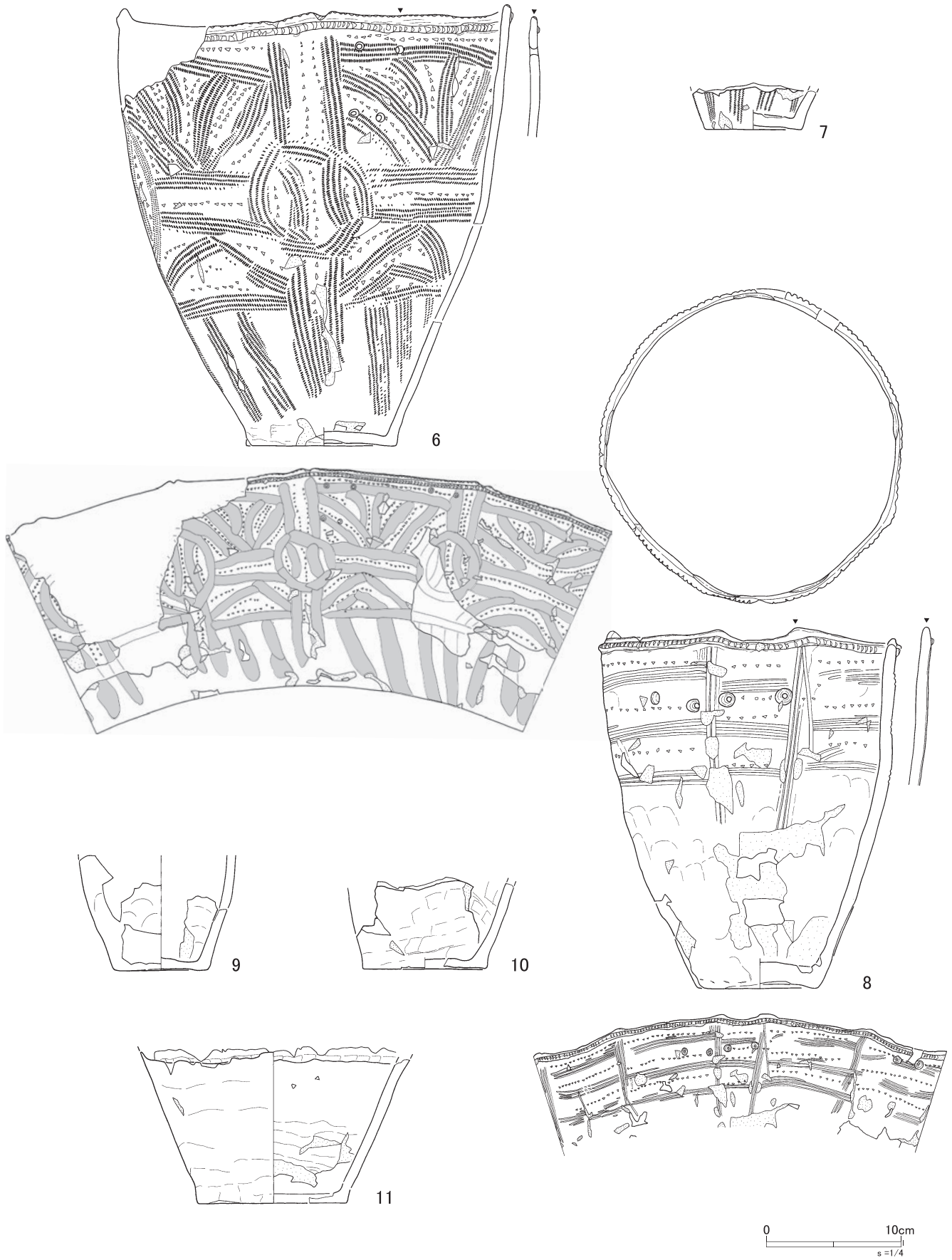
51~56は櫛歯文が施されているもの。51は2列の櫛歯文がみられる。53は上1列下2列の刻文による带状区画内に縦位の櫛歯文が連続する。54・55は2列の刻文間に櫛歯文が施されている。55は表面・断面とも褐色を呈し明るい色調である。56は刻文・沈線文土器。斜位の刻文・2条の細沈線による2段の带状区画内に斜位の櫛歯文が連続する。57~62は肥厚する口縁部の下端に刻文が施されている。うち59~62は爪形文とつまみ出した粘土が残り(指圧式浮文)、62には2段施されている。63~67は刺突列や短刻文がみられるもの。64・65は間隔の狭い2列の刻文がみられる。66はやや太めの刺突列が3列施されている。67は多段の刺突列の下に弧状の貼付文がみられる。68・69は無文で、68は口縁部が肥厚する。70は底面が比較的薄い。

擬縄貼付文土器 (71)

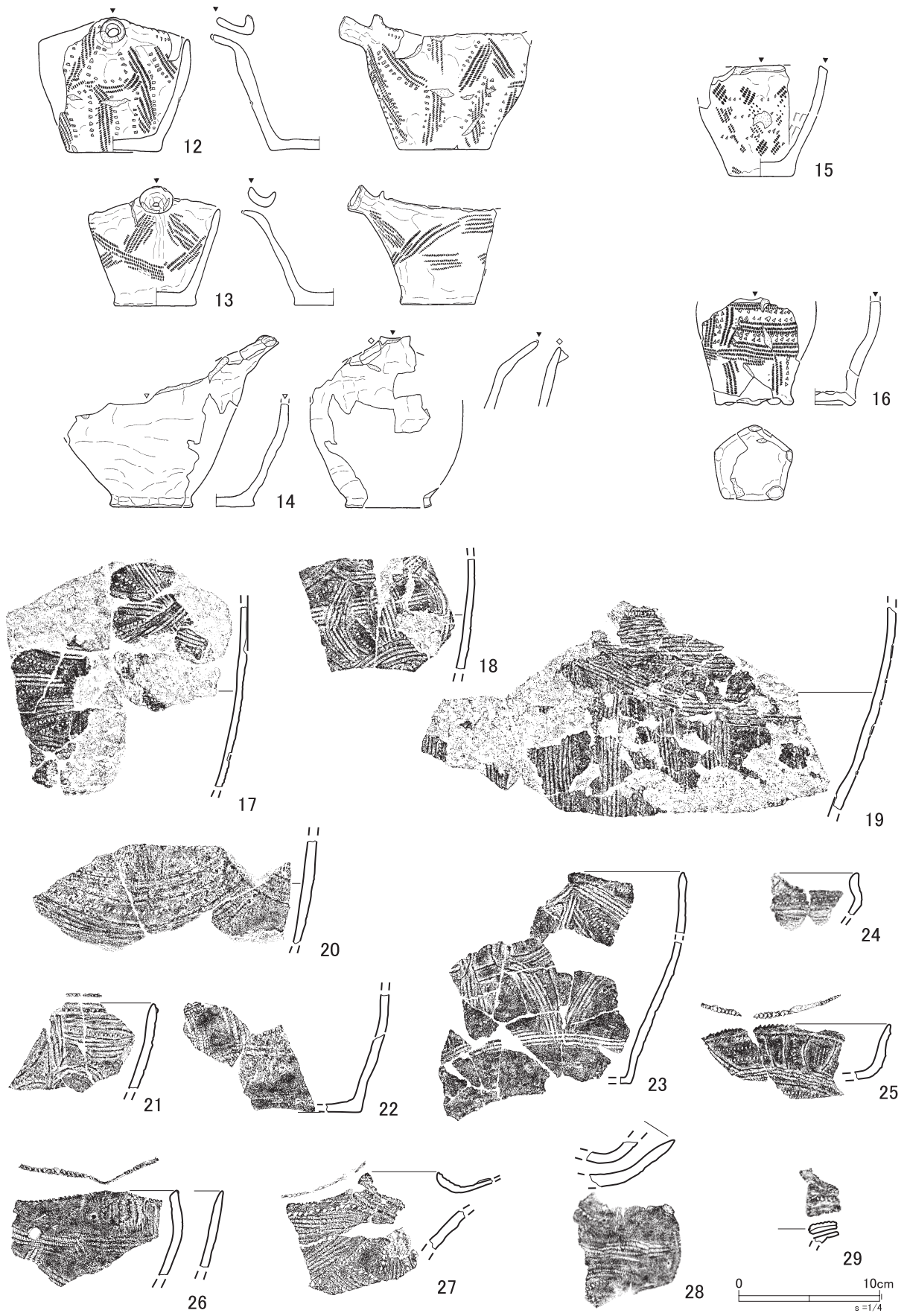
71は罅穴H-19の周囲から出土した。細い粘土紐による擬縄貼付文が2列施されている。(阿部)



図Ⅲ-38 包含層出土の土器（1）



図Ⅲ-39 包含層出土の土器（2）



図Ⅲ-40 包含層出土の土器（3）



図Ⅲ-41 包含層出土の土器（4）

(3) 石器等 (図Ⅲ-42~47 表Ⅲ-5・6 図版46・47)

層位によって続縄文時代後半の後北C₂・D式期とオホーツク文化刻文期に明瞭に時期区分できるため、層位ごとに報告する。

Ⅶb 層出土の遺物 (1~93)

1~93は続縄文時代後半期に属し、主に後北C₂・D式土器期のものが主体となっている。

石鏃 (1~21)

1~16が平基、17が凹基、18が凸基、19・20が有茎、21が下端部の折損により形状不明である。平基の石鏃は、全般的に小型・薄手で正裏いずれかの面に素材面を残すものが大半を占める。この内11は細長く、両側縁がほぼ直線的で、加工が前面に及ぶもので、他の平基の石鏃とは異なる。12~16は先端部が欠損しているが、いずれも両側縁が左右非対称である。製作途中の未成品の可能性がある。17は内湾する下端部形状で、正裏面の中央に素材面が残存する。18は丸みのある下端部形状で、正裏面全体に加工が施されている。20の茎部は逆三角形で明瞭なカエシが見られる。

石槍またはナイフ (22~30)

22~26は加工が両面のほぼ全体に及ぶもの。22は細身の形状で尖頭形である。縁辺中央部に小さなカエシがあり、ほぼ平行する太い茎部となっている。23は両端が尖る細身の木葉形である。24は細身で下端部が尖頭形である。25は左右非対称で下端部が欠損している。26はやや粗い加工による厚手の器体で、未成品とみられる。

27~30は主に片側ないし縁辺に加工が見られるもの。27・28は下端が尖る。29・30は撥形に近い形状で、片側の角部が鋭角となっている。スクレイパーの中にも類似した形状のものが存在する。

スクレイパー (31~54)

31~34は撥形に近い形状で、片側の角部が鋭角となっている。ナイフの中にも同様の形状のものが存在するが、スクレイパーの方がより小型で、縁辺の加工が急角度である。ナイフの刃部再生の結果、相似形的に小型化し、刃部が急角度のスクレイパーに器種転換したと考えられる。

35~42は縁辺を中心とした加工が施されるものである。35・36は縦長剥片を素材としている。37は下端の一部に不規則な両面加工が見られる。38は左側縁に両面加工が施されている。39~42は端部を尖らせるような加工が見られる。42は急角度加工が施されている。

43~54は下端部に加工が施されるものである。刃部はほぼ円弧状に作出されている。素材の打面側が刃部となっているのは43・44・48である。加工が側縁にも連続して全体的に及ぶのは43~45・47・48・50・51・53・54で、この内、44・47・51は両側縁に加工が施されている。54は錯交状の加工により先端部が尖頭形となっている。

石錐 (55~66)

65・66は黒曜石製、それ以外はメノウ製である。メノウ製の方が概して小型である。55~57は素材・刃部ともに薄手のもので、刃部の加工もごくわずかである。55は錯交状の加工が施されている。56は左側縁と上縁との角部にも刃部が作出されている。

58~66は厚手の刃部のものである。58・61は裏面の対向する加工により刃部が作出されている。60の刃部は剥片の折損部が利用されている。65・66は縁辺にも加工が及んでいる。

楔形石器 (67~76)

基本的に相対する縁辺に対向する剥離が見られ、一部が潰れている。67・70は薄手の剥片を素材としている。縁辺の角度を観察すると、片側が鋭く反対の縁辺が急角度となるものが主体的だが、70は上下端とも鋭い縁辺となっている。73・75は横方向にも対向する剥離が見られる。

Rフレイク (77・78)

77・78は、いずれも縁辺の一部に細かな加工が施されている。

石核 (79～84)

79は正面の上端にやや潰れたような剥離が見られる。大きさや断面形状が69と類似しており、楔形石器として使用されたが、痕跡が現れなかった可能性がある。80は素材剥片の腹面を主要剥離面として求心状の剥離が行われている。81は原石面を打面として正裏面で剥離が行われている。82は主に正面上からと下面裏からの剥離が行われている。83は扁平な原石の正裏面で求心状の剥離が行われ、主に横長剥片が剥離されている。84は長軸方向の剥離が各面で上下から行われている。

石のみ (85)

85は、両面への研磨により両刃の刃部が作成されている。裏面上部には衝撃剥離の可能性がある上からの剥離が見られる。

くぼみ石 (86)

86は、正裏面に窪んだ痕跡が見られるほか、上下端にわずかな敲打痕が存在する。

砥石 (87・88)

87は後北C₂・D式期に特徴的な軽石製の有溝砥石である。表裏面に溝が見られる。88は砂岩製で表裏面に浅い溝状の擦痕が見られる。

台石 (89～92)

89～92は、いずれも安山岩製で正面中央に平滑面が見られる。

板状加工礫 (93)

93は、正裏面とも大型の剥離がなされ、板状に成形されたものである。

Ⅶ a 層出土の遺物 (94～108)

94～108は、オホーツク文化刻文期に属するものが主体となっている。

石鏃 (94～97)

94・95は凹基、96は両端が尖る柳葉形、97はその折損品。いずれも両面に平坦加工が施されている。94は裏面に横方向の素材面が残存している。95は長さ5.1cmと長大で、95・96とも斜平行剥離が両側縁とも斜め下に向かって施されている。

石槍 (98)

98は、両面加工が施され太い柄部があり、縁辺中央にわずかなカエシが作出されている。

スクレイパー (99)

99は、両側縁に急角度の加工が施されている。

楔形石器 (100～103)

100の縦断面形は上下端とも鋭角となっている。101は下端が鋸歯状の剥離となっている。102は上端が急角度、対向する下端が鋭角で縁辺が潰れている。103は主に裏面に対向する剥離が見られる。

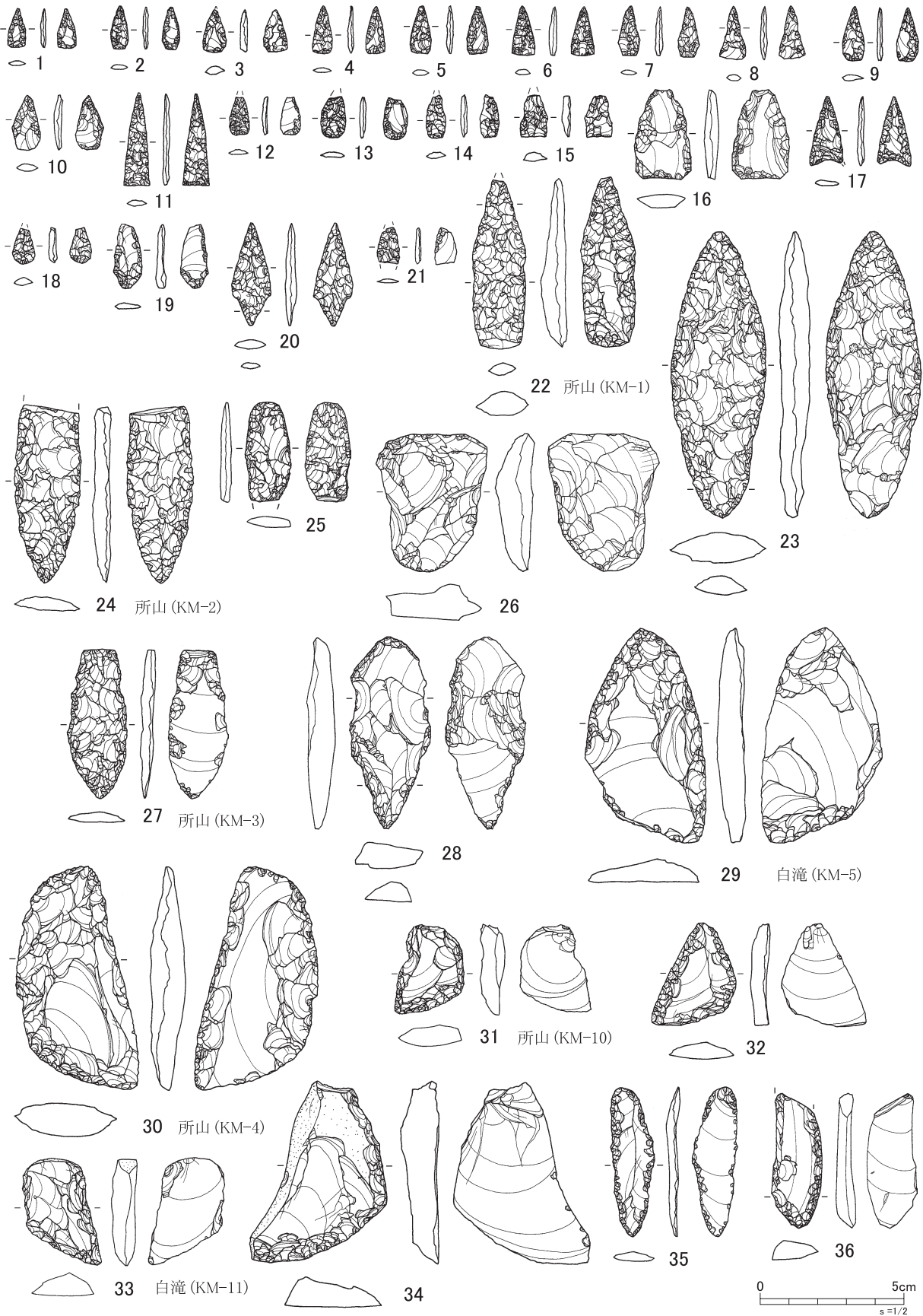
石核 (104)

104は剥片素材と考えられるもので、主に裏面で長軸方向の剥離の後に横方向の細かな加工が施されている。

たたき石 (105)

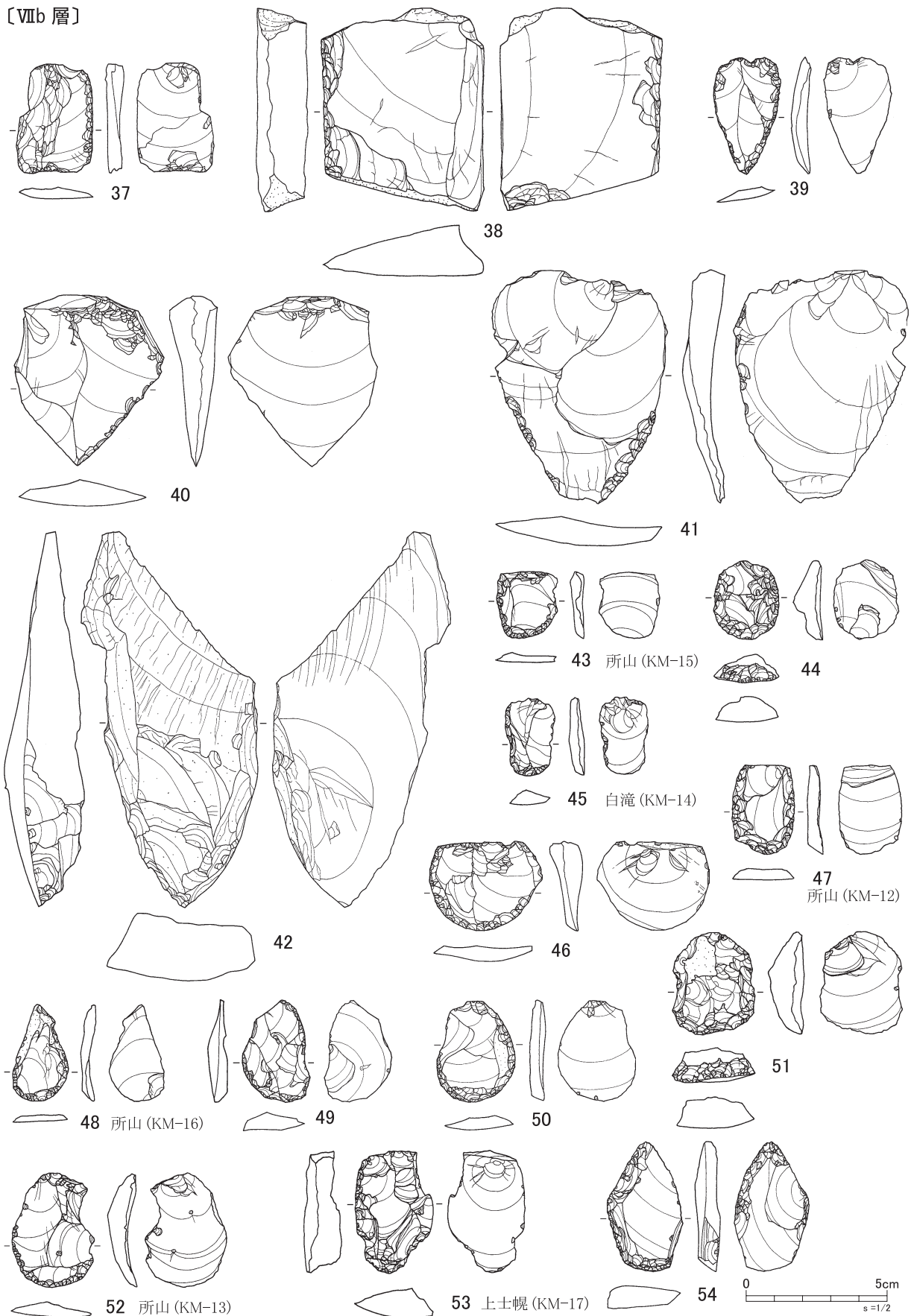
105は、上下端と右側縁に敲打痕があり、下端と裏面に敲打による剥離が見られる。

〔Ⅶb層〕



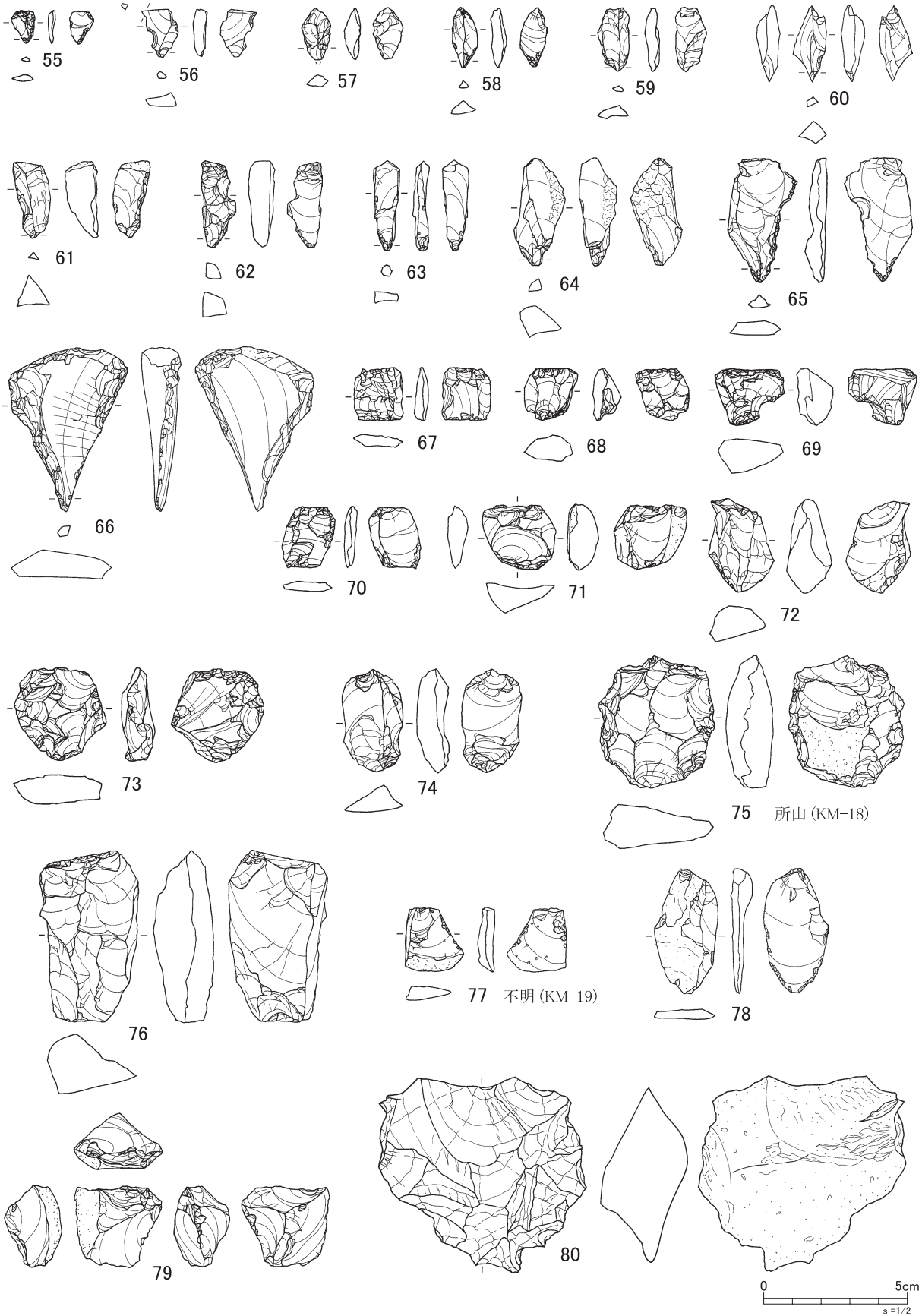
図Ⅲ-42 包含層出土の石器（1）

〔VIIb 層〕



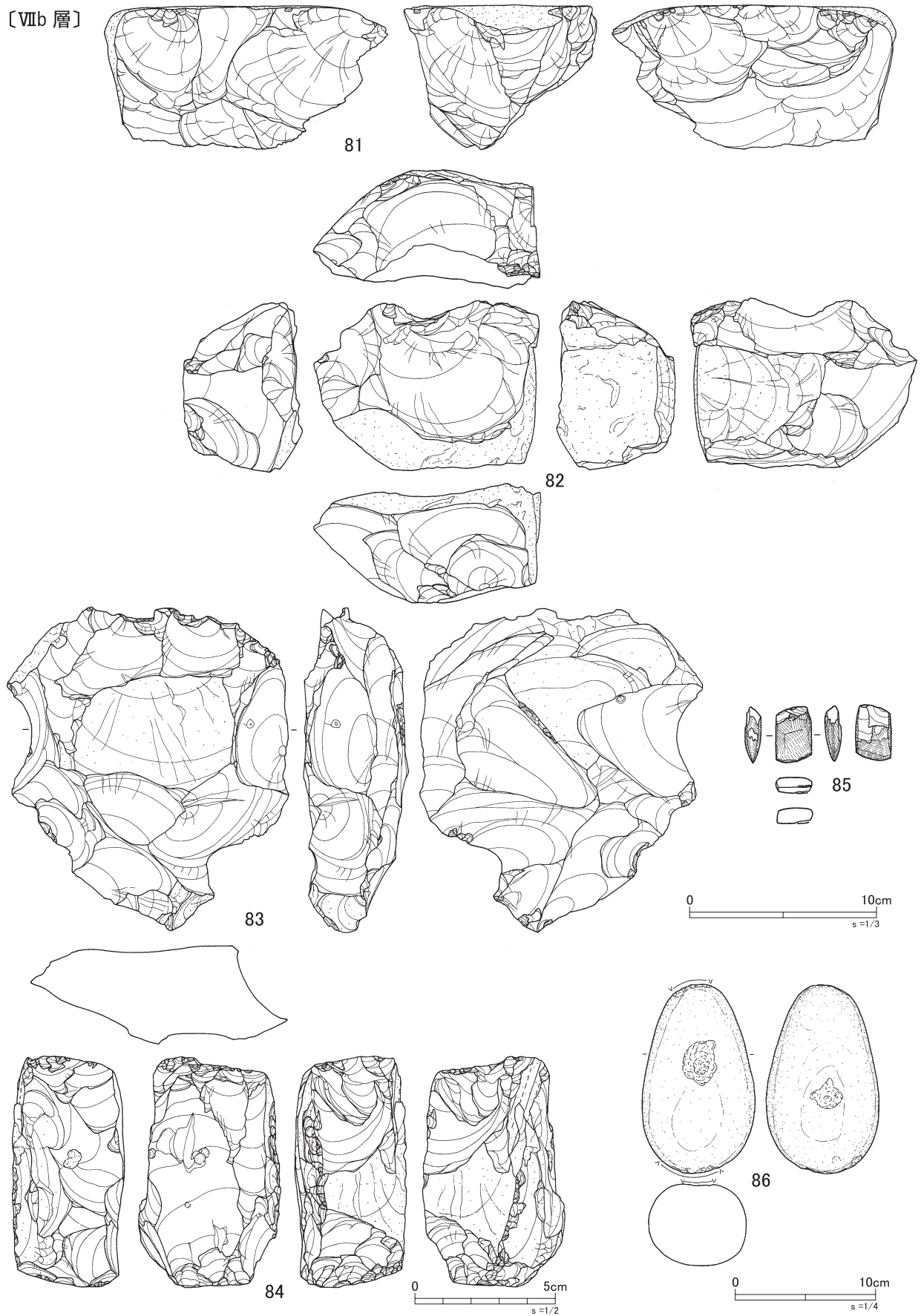
図Ⅲ-43 包含層出土の石器 (2)

〔VIIb層〕



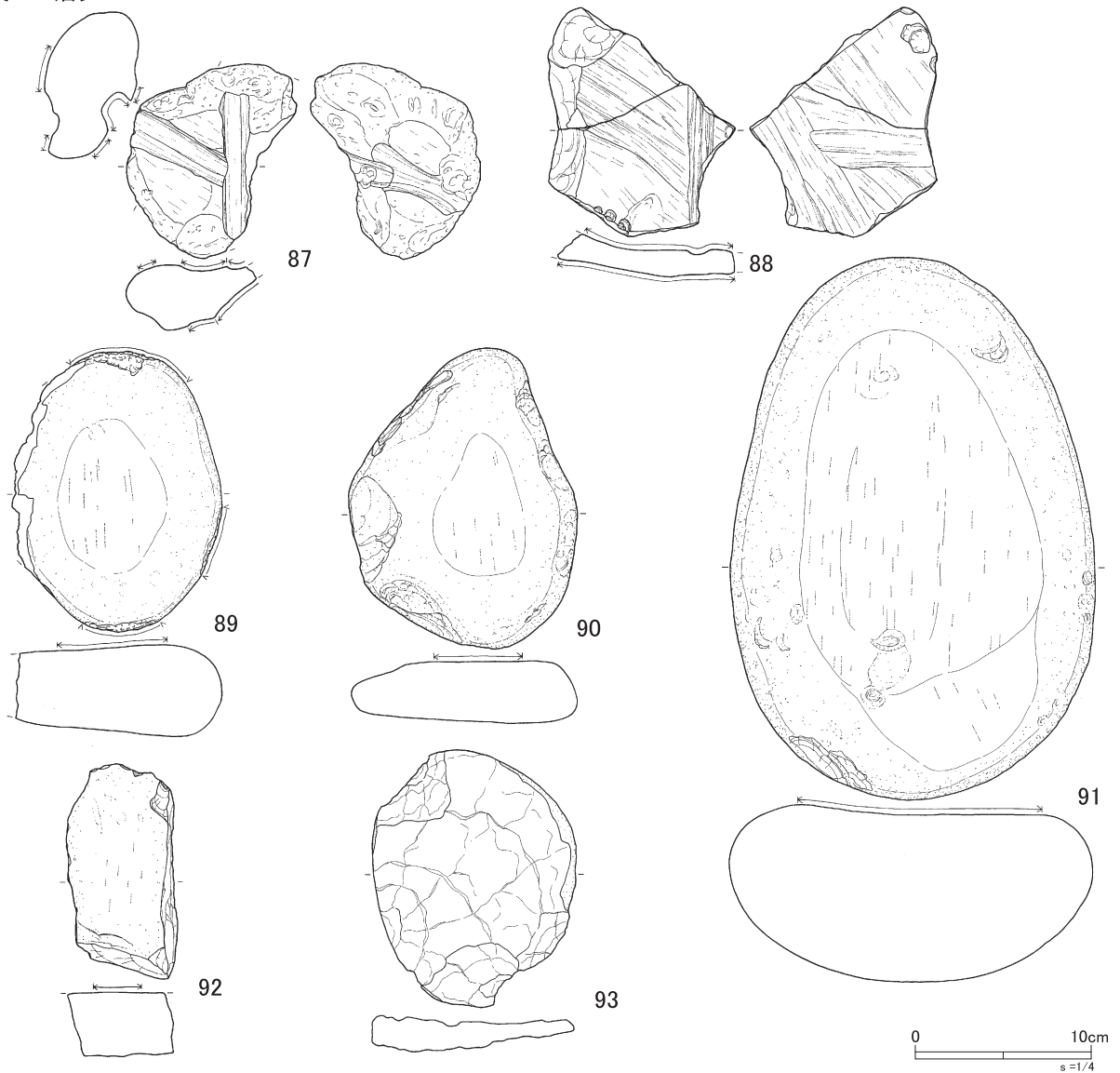
図Ⅲ-44 包含層出土の石器（3）

〔VIIb層〕



図Ⅲ-45 包含層出土の石器（4）

〔Ⅶb層〕



図Ⅲ-46 包含層出土の石器（5）

すり石（106）

106は、正面全体にすり面が広がっている。

台石（107）

107は、正面中央に平滑面が見られる。

板状加工礫（108）

108は、厚さ3cmの板状に分割された後、形状を整える加工が周縁から施されている。

Ⅱ層出土の遺物（109）

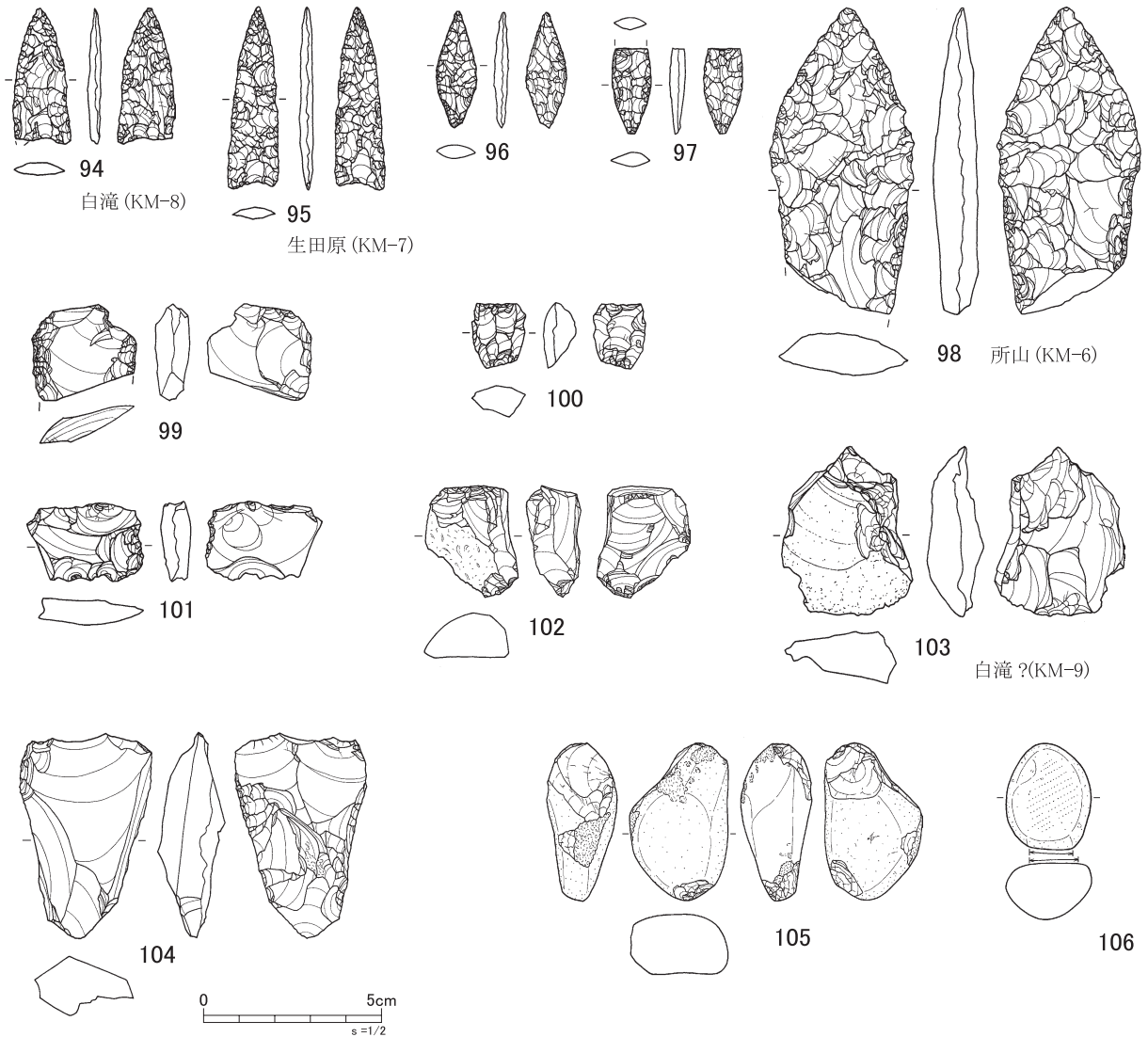
109は近世アイヌ文化期に属するものである。

石製品（109）

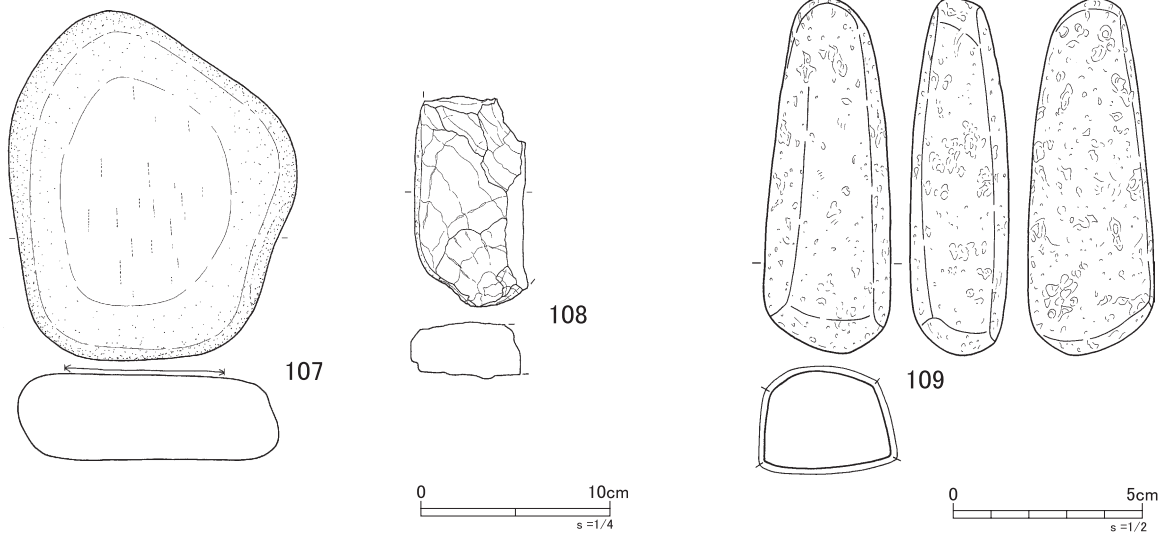
109は全面が研磨された軽石製の石製品である。

（直江）

〔Ⅶa層〕



〔Ⅱ層〕

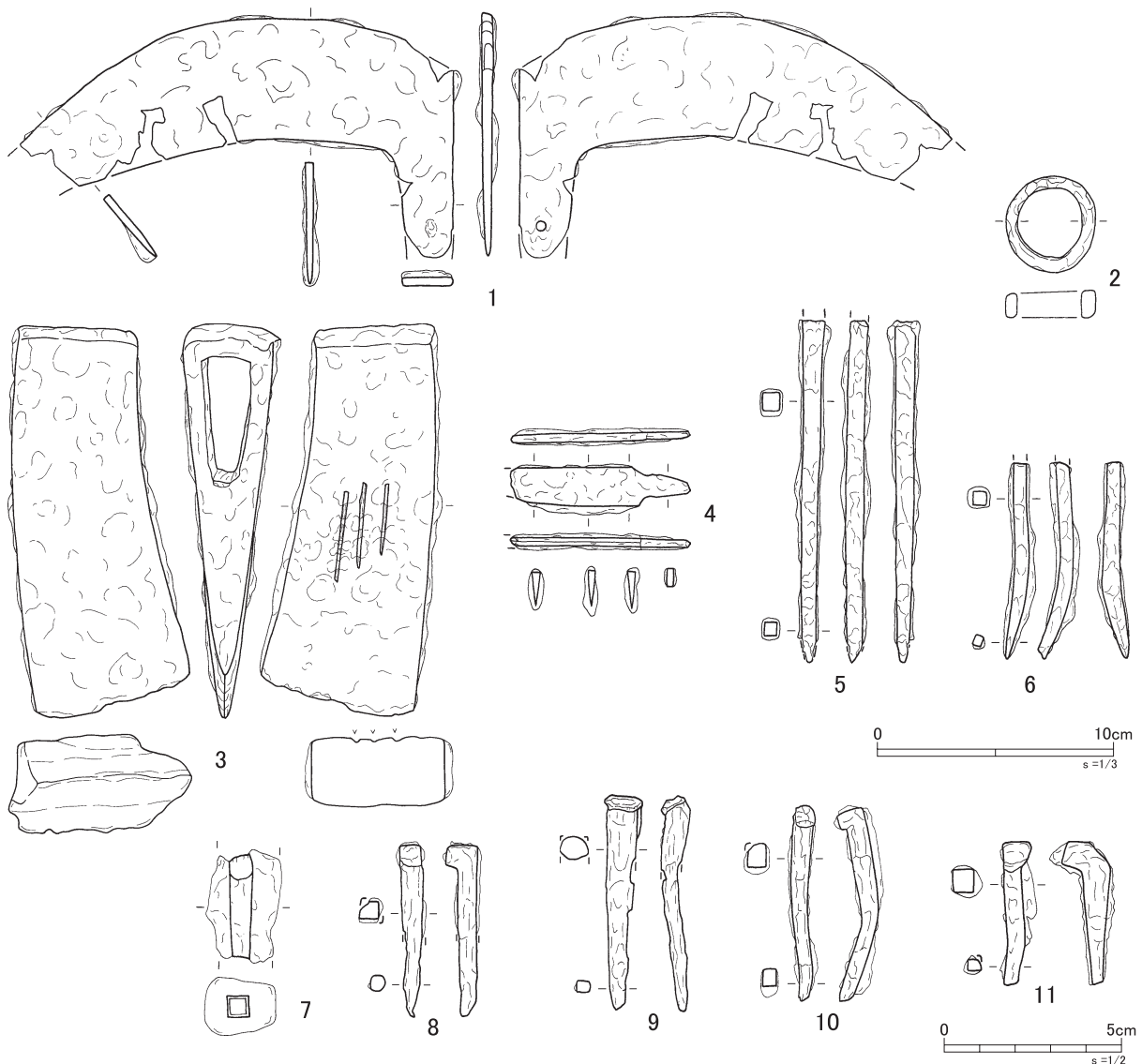


図Ⅲ-47 包含層出土の石器(6)

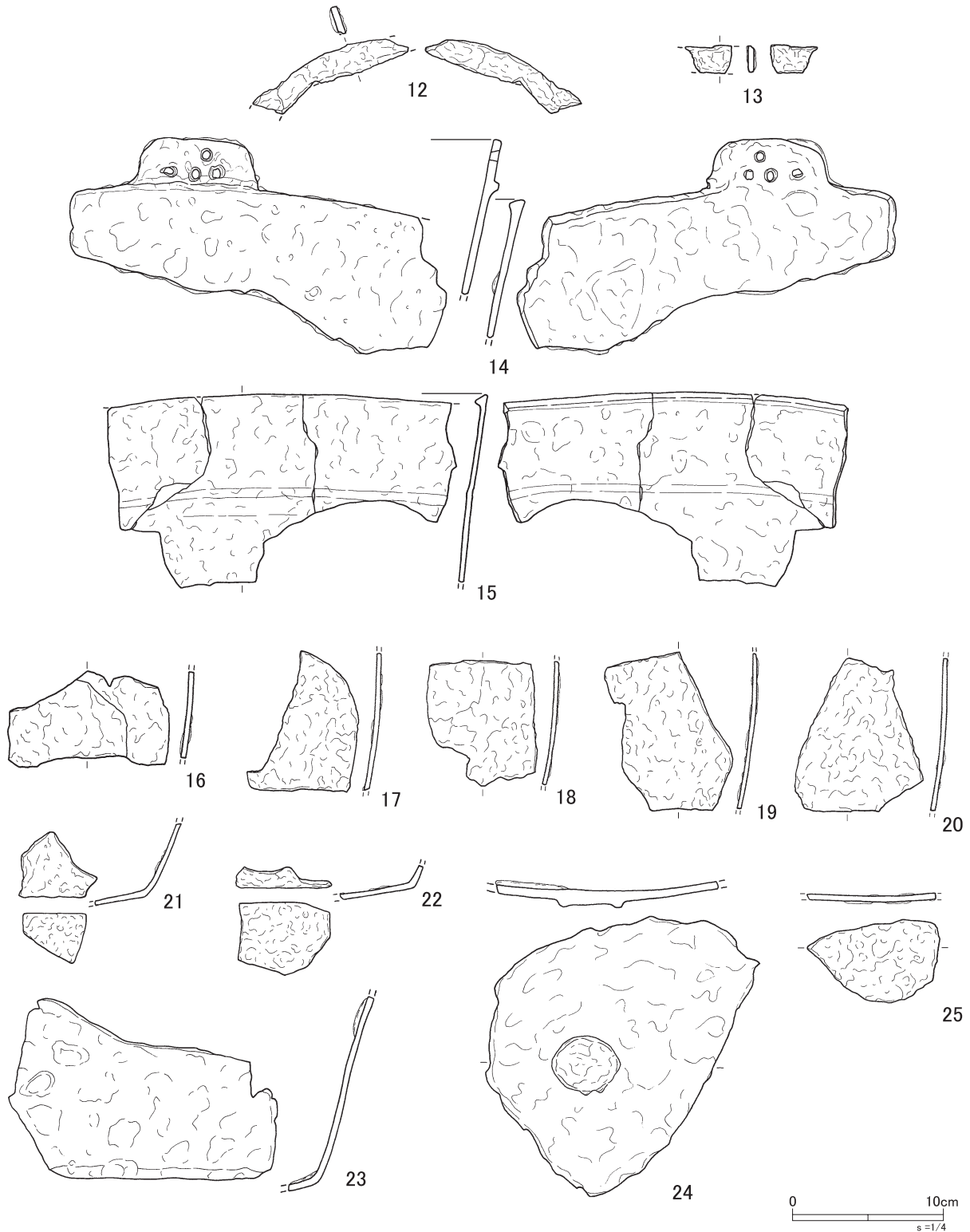
(4) 鉄製品 (図Ⅲ-48・49 表Ⅲ-7 図版48・49)

調査区の東側、樽前 a 降下火山灰 (1739年) の上位から金属製品が出土した。時期は出土層位からアイヌ文化期である。内訳は鉄鍋片が23点、刀子5点、鉄斧1点、鉄鎌1点、環状鉄製品2点、釘15点、不明9点である。このうちの鉄鍋片14点、鉄鎌1点、環状鉄製品1点、鉄斧1点、刀子1点、釘7点について図示した。

1は有茎タイプの鉄鎌で、茎部から刃部にかけてほぼ直角に近い形状を呈する。刃部は曲刃で、刃の先端部が失われている。目釘孔はX線撮影により確認した。2はK34区のⅡ層から出土した環状の鉄製品で、鉄鎌(1)の口金の可能性がある。3は鉄斧で立木を切り倒す斧(鉞)である。平面形は短冊型、斧頭から刃部にかけてゆるやかに湾曲し、刃部幅が広い。刃部は両刃で、刃こぼれが見られる。側面の形状は楔形で、柄の装着部(秘)は斧頭側が広い台形の孔があけられている。また、斧身の一方には縦に三本の筋目が刻まれている。この三本の筋目についてはⅨ章2(3)に記載した。4は平棟平造の刀子で、切先を欠失する。目釘孔はない。5~11は鉄製の和釘である。5・6は頭が欠失している。基部から脚部にかけて断面の形態は方形である。7は和釘の基部が欠失し、錆瘤だけが



図Ⅲ-48 包含層出土の鉄製品(1)



図Ⅲ-49 包含層出土の鉄製品（2）

残ったものと思われる。断面の形態は方形である。8～11は折釘で断面の形態は概ね方形である。9は頭が潰れている。

12～25は吊耳鉄鍋の破片である。12・13は鉉の部分で、断面の形態は扁平である。12はわずかにねじりが認められる。耳孔に差し込む先端部は出土していない。14・15は口縁部から胴部にかけての破

片で、口縁部（外帯）と胴部が一続きとなっている。14の上端には山形で鉉を掛けるための耳金具が付き、4つの耳孔があげられている。口縁部と耳金具の接合部は外側に張り出しがある。15の内面には、口縁部と胴部の境に蓋が落ちないように作られた浅い段差がある。14・15とも口唇部断面が内側に鋭角に張りだす。16～20は胴部片でやや丸みを帯びる。21～23は底部から胴部にかけての破片で、胴部は60°前後の角度で立ち上がると思われる。24・25は底部の破片。24には径約3cmの丸型湯口の跡が残る。脚を示すものは出土していない。口縁部と底部から推定される大きさは、口径が約36～37cm、底径約27～28cmと考えられる。（笠原）

（5）加工痕ある骨片（図Ⅲ-50 表Ⅲ-8 図版49）

貝・骨ブロック周辺の包含層から獣骨片が出土した中で、加工痕等があるものを掲載した。

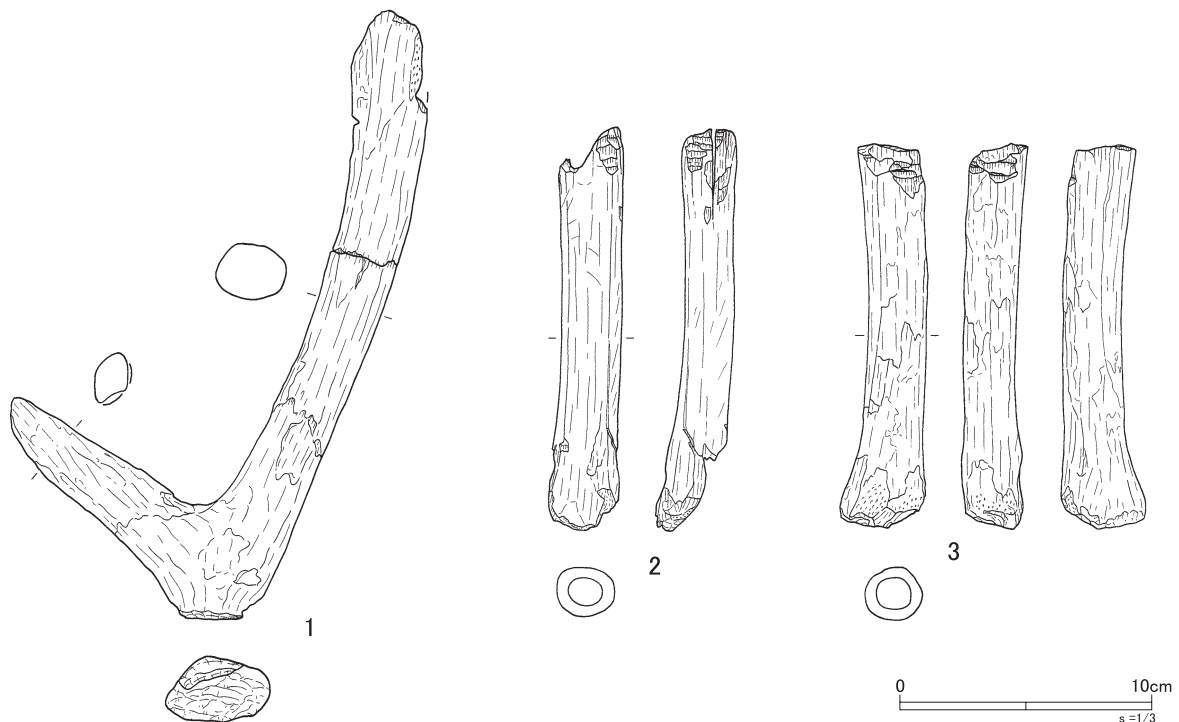
1は鹿角。形状から基部は角座に近く、先端は磨滅して切断痕・加工痕が不明瞭であるが、まだ先に続いていたものと思われる。鉤状の道具または掘り具として用いた可能性がある。2・3はシカの脛骨（L・R）で、切断痕が明瞭に残っている。

（6）その他

貝・骨ブロック周辺から出土した陶磁器の小片のほか、ビン・缶・釘などの近現代遺物がある。

植民軌道のレール（図版40）

2011・2012・2018年調査において、表土除去前の調査区および周辺の防風林に、鉄道のレールが残存していた。これは植民軌道斜里線（斜里～知布泊、1932～1952年）で使用されていたもので、6kg/m（現行30～60kg/m）と簡易な規格である。カモイバツ遺跡付近では現国道より内陸側（約500m）に路線があったが、廃止後に防風林の若木の支柱などとして利用されたようである（斜里町金盛典夫氏 談）。現に調査区内には柱穴状の攪乱が列をなしていた。なお、レールは付近の峰浜小学校（廃校）のグラウンドのバックネットにも使用されていた。（阿部）



図Ⅲ-50 包含層出土の加工痕ある骨片

表Ⅲ-1 2018年調査遺構一覧

種別	遺構名	掲載		検出位置		平面形	規模(m)					時期	備考
		挿図	写真図版	発掘区	層位		検出面		底面		深さ		
							長径	短径	長径	短径			
竪穴	H-19	Ⅲ-15~17	14	I・J95・96	VIIa層	隅丸方形	(3.38)	(1.90)	(3.00)	(1.76)	0.24	オホーツク文化刻文期	
	HF-1		4	I・J95	床面	楕円形	9.68	(0.50)	—	—	0.12		
	HF-2			J96	床面	楕円形?	(0.44)	0.32	—	—	—		
住居跡	H-20	Ⅲ-15~17	14・15	J95・96	VIIa層	五角形?	(3.60)	(2.44)	(3.21)	(2.08)	(0.28)	オホーツク文化刻文期	
	H-21	Ⅲ-18	15	J・K93・94	VIIa層	隅丸方形	2.48	2.48	2.24	2.16	0.47	オホーツク文化刻文期	
	HF-1		4	J94	床面	隅丸方形	0.31	(0.30)	—	—	0.02		
	H-22	Ⅲ-7・8	10	K79・80	VIIb層	長楕円形	(45.6)	(2.68)	—	—	—	続縄文時代 後北C ₂ ・D式期	
	HF-1		4	K80	VIIb層	円形	0.76	0.59	—	—	0.09		
	HP-1			K80	VIIb層	円形	0.11	0.11	0.06	0.06	0.08		
	HP-2			K79	VIIb層	円形	0.10	0.10	0.04	0.04	0.09		
	HP-3			K79	VIIb層	円形	0.15	0.15	0.06	0.06	0.06		
	HP-4			K79	VIIb層	円形	0.16	0.16	0.06	0.06	0.08		
	HP-5			K80	VIIb層	円形	0.12	0.12	0.06	0.06	0.10		
HP-6		10	K80	VIIb層	円形	0.15	0.14	0.06	0.06	0.10			
PS-31	Ⅲ-19	16	J96・97	VIIa層	円形	1.08	1.04	0.68	0.58	0.39	オホーツク文化刻文期		
土坑	P-29	Ⅲ-9	11	K66	VIIb層	円形	0.68	0.68	0.46	0.25	0.12	後北C ₂ ・D式期	
柱穴状小土坑	SP-22	Ⅲ-10	11	K81	VIIb層	円形	0.07	0.07	0.04	0.04	0.05	後北C ₂ ・D式期	
	SP-23			K81	VIIb層	円形	0.05	0.05	0.02	0.02	0.04	後北C ₂ ・D式期	
	SP-24			K81	VIIb層	円形	0.07	0.06	0.04	0.04	0.05	後北C ₂ ・D式期	
	SP-25			K81・82	VIIb層	円形	0.05	0.05	0.04	0.02	0.05	後北C ₂ ・D式期	
	SP-26			K81	VIIb層	円形	0.08	0.08	0.04	0.03	0.20	後北C ₂ ・D式期	
	SP-27			J71	VIIb層	楕円形	0.08	0.06	0.08	0.05	0.20	後北C ₂ ・D式期	
	SP-28			K66	VIIb層	円形	0.12	0.11	0.06	0.06	0.13	後北C ₂ ・D式期	
	SP-29			K69	VIIb層	円形	0.20	0.20	—	—	0.24	後北C ₂ ・D式期	
	SP-30			K69	VIIb層	楕円形	0.14	0.12	—	—	0.27	後北C ₂ ・D式期	
	SP-31			J63	VIIb層	楕円形	0.16	0.16	—	—	0.17	後北C ₂ ・D式期	
	SP-32	Ⅲ-32	20	J12	Ⅱ層	円形	0.08	0.07	0.04	0.04	0.08	アイヌ文化期	
	SP-33			J12	Ⅱ層	楕円形	0.08	0.06	0.03	0.03	0.08	アイヌ文化期	
	SP-34			J12	Ⅱ層	円形	0.05	0.05	0.02	0.02	0.07	アイヌ文化期	
焼土	F-56	Ⅲ-11	11	K81・82	VIIb層	円形?	(0.40)	0.46	—	—	0.04	後北C ₂ ・D式期	
	F-57			K80	VIIb層	不整円形	(0.68)	0.62	—	—	0.04	後北C ₂ ・D式期	
	F-58			K80・81	VIIb層	楕円形?	(1.04)	(0.24)	—	—	(0.10)	後北C ₂ ・D式期	
	F-59			K77	VIIb層	楕円形	1.01	0.52	—	—	0.08	後北C ₂ ・D式期	
	F-60	Ⅲ-12	7	K75	VIIb層	不定形	0.66	0.36	—	—	0.12	後北C ₂ ・D式期	
	F-61		7・12	K73	VIIb層	不整円形	0.60	0.60	—	—	0.14	後北C ₂ ・D式期	
	F-62			K71・72	VIIb層	不整楕円形	1.16	0.86	—	—	0.12	後北C ₂ ・D式期	
	F-63			K71・72	VIIb層	不整楕円形	0.81	0.62	—	—	0.08	後北C ₂ ・D式期	
	F-64	Ⅲ-13		K69	VIIb層	不定形	(2.08)	(0.92)	—	—	0.12	後北C ₂ ・D式期	
	F-65			K69	VIIb層	不定形	(1.48)	(0.64)	—	—	0.20	後北C ₂ ・D式期	
	F-66			K69	VIIb層	不定形	0.96	0.88	—	—	0.12	後北C ₂ ・D式期	
	F-67			K68	VIIb層	楕円形?	0.96	(0.48)	—	—	0.17	後北C ₂ ・D式期	
	F-68			K68	VIIb層	—	(0.79)	0.56	—	—	0.05	後北C ₂ ・D式期	
	F-69			K68	VIIb層	不定形	1.28	(0.58)	—	—	0.15	後北C ₂ ・D式期	
	F-70			K68	VIIb層	—	(0.64)	(0.25)	—	—	0.08	後北C ₂ ・D式期	
F-71		12	K58	VIIb層	円形	0.40	0.40	—	—	0.03	後北C ₂ ・D式期		
フレイクチップ集中	FC-11	Ⅲ-20	16	J94	VIIa層	不整円形	0.82	0.78	—	—	—	オホーツク文化刻文期	
	FC-12	Ⅲ-14		K83	VIIb層	不整楕円形	0.32	0.20	—	—	—	後北C ₂ ・D式期	
	FC-13			J75	VIIb層	不整楕円形	1.96	0.84	—	—	—	後北C ₂ ・D式期	
	FC-14		13	J73	VIIb層	不整円形	0.55	0.49	—	—	—	後北C ₂ ・D式期	
	FC-15			K58	VIIb層	不定形	0.76	0.52	—	—	—	後北C ₂ ・D式期	
	FC-16			K57	VIIb層	不定形	1.02	0.92	—	—	—	後北C ₂ ・D式期	
礫集中	S-11	Ⅲ-20	16	J・K94	VIIb層	不整楕円形	2.12	2.52	—	—	—	オホーツク文化刻文期	
	S-12			J57・58	VIIb層	不整楕円形	2.84	1.20	—	—	—	オホーツク文化刻文期	
	S-13	Ⅲ-32	20	J28	Ⅱ層	不整楕円形	0.80	0.48	—	—	—	アイヌ文化期	
	S-14			J19	Ⅱ層	楕円形	0.68	0.52	—	—	—	アイヌ文化期	
貝・骨ブロック	SB-1	Ⅲ-21	17	J29	Ⅱ層	楕円形?	1.48	(0.79)	—	—	—	アイヌ文化期	
	SB-2			J24	Ⅱ層	不定形	2.42	1.42	—	—	—	アイヌ文化期	
	SB-3	Ⅲ-22・23		J21~23	Ⅱ層	不定形	11.28	(3.91)	—	—	0.04	アイヌ文化期	
	SB-4	Ⅲ-24~26	18	J18・19	Ⅱ層	不定形	4.92	1.68	—	—	—	アイヌ文化期	
	SB-5	Ⅲ-27・28		J・K15・16	Ⅱ層	不定形	(5.44)	(3.72)	—	—	—	アイヌ文化期	
	SB-6	Ⅲ-29	19	J12	Ⅱ層	不定形	2.48	1.96	—	—	0.06	アイヌ文化期	
	SB-7			J9	Ⅱ層	不定形	0.59	0.28	—	—	—	アイヌ文化期	
	SB-8	Ⅲ-30	19	J・K24	Ⅱ層	不定形	1.76	1.24	—	—	0.07	アイヌ文化期	
	SB-9			K19	Ⅱ層	不整楕円形	2.00	(1.00)	—	—	—	アイヌ文化期	
	SB-10	Ⅲ-31		K18・19	Ⅱ層	—	2.32	0.84	—	—	—	アイヌ文化期	

表Ⅲ-3 2018年調査掲載土器一覧(1)

挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	遺構/ (発掘区)	層位	遺物 No.	点数		分類	器種	部位	文様等/計測値	備考	個体番号
						破片	計						
図Ⅲ-8	1	41-1	H-22/K80	VIIb		13	13	VIc	小型鉢形注口	口～底	擬縄貼付文、縄文 /口径(6.5)cm 底径4.8cm 器高8.9cm	約80%残存	18-11
図Ⅲ-8	2	41-1	H-22/K80	VIIb		1	1	VIc	深鉢	胴	帯縄文		18-220
図Ⅲ-12	1	41-2	F-60	焼土上		2	7	VIc	深鉢形注口	口～胴	擬縄貼付文、縄文 /口径(16.0)cm 底径(9.0)cm 器高(17.5)cm	約30%残存	18-12
			K75	VIIb		5							
図Ⅲ-18	1	42-1	H-21	覆土3		20	21	VIIb	甕	胴	無文		18-101
			S-11	覆土1		1							
図Ⅲ-20	1	42-1	S-11	覆土1		27	27	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径(8.7)cm 器高(11.3)cm		18-15
図Ⅲ-38	1	44-1	K88	VIIb		52	52	VIc (後北C1式)	深鉢	口～底	口唇刻み、小突起、 微隆起線による幾何学的文様、結 節点に円形刺突、列点、帯縄文 /口径27.3cm 底径8.4cm 器高 35.4cm	約70%残存	18-1
図Ⅲ-38	2	44-1	K86	VIIb		111	112	VIc	深鉢	口～胴	擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、 帯縄文 微隆起線に沿って赤彩あり /08年出土土器と接合 /口径23.3cm 底径9.8cm 器高 20.5cm	赤彩 2008年出土 土器片と接合	18-2
			08MKB59e		14	1							
図Ⅲ-38	3	44-1	J77	VIIb		6	6	VIc	鉢	口～底	微隆起線、三角列点、帯縄文 /口径(12.4)cm 底径5.5cm 器高 7.8cm	約60%残存	18-7
図Ⅲ-38	4	44-1	J109	VIIb		23	23	VIc	深鉢	胴～底	三角列点、帯縄文 /底径10.6cm 器高(22.5)cm		18-6
図Ⅲ-38	5	44-1	J80	VIIb		157	157	VIc	深鉢	口～底	擬縄貼付文、列点、帯縄文 上面觀橢円形大きく歪む /口径21.9cm 底径9.0cm 器高 26.3cm		18-5
図Ⅲ-39	6	44-1	K60	VIIb		81	81	VIc	深鉢	口～底	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、 帯縄文 /口径(28.9)cm 底径(11.0)cm 器高32.8cm		18-3
図Ⅲ-39	7	44-1	J53	VIIb		5	5	VIc	深鉢	底	帯縄文 /底径(7.1)cm 器高(3.4)cm		18-53
図Ⅲ-39	8	44-1	K69	VIIb		93	93	VIc	深鉢	口～底	擬縄貼付文、三角列点、条痕、 補修孔 /口径23.3cm 底径(8.8)cm 器高 26.7cm		18-4
図Ⅲ-39	9	44-1	K66	VIIb		8	10	VIc	鉢	胴～底	無文 /底径6.9cm 器高(8.5)cm		18-51
			K67	VIIb		2							
図Ⅲ-39	10	44-1	I106	VIIb		2	3	VIc	深鉢	胴～底	無文 /底径(9.0)cm 器高(6.8)cm		18-52
			J106	VIIb		1							
図Ⅲ-39	11	44-1	J64	VIIb		39	39	VIc	深鉢	胴～底	無文 /底径(11.0)cm 器高(11.5)cm		18-16
図Ⅲ-40	12	45-1	K68	VIIb		7	7	VIc	注口付き小型鉢	口～底	口唇刻み、列点、帯縄文 /口径(11.0)cm 底径6.4cm 器高 9.5cm	約60%残存	18-8
図Ⅲ-40	13	45-1	J71	VIIb		3	3	VIc	注口付き小型鉢	口～底	帯縄文 /口径9.3cm 底径5.6cm 器高8.4cm	約90%残存	18-9
図Ⅲ-40	14	45-1	J69	VIIb		20	20	VIc	片口付き鉢	胴～底	無文、片口 底部張出 /口径(14.8)cm 底径6.0cm 器高 12.1cm		18-14
図Ⅲ-40	15	45-1	K73	VIIb		4	4	VIc	(注口付き)小型鉢	口～底	三角列点、帯縄文 /底径4.5cm 器高(7.8)cm	約70%残存	18-10
図Ⅲ-40	16	45-1	J106	VIIb		24	24	VIc	小型鉢	胴～底	三角列点、帯縄文、五脚 /底径(5.5)cm 器高(7.3)cm	五脚	18-13
図Ⅲ-40	17	45-1	K62	VIIb		11	11	VIc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		18-106①
図Ⅲ-40	18	45-1	K62	VIIb		4	4	VIc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		18-106②
図Ⅲ-40	19	45-1	J88	VIIb		21	21	VIc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		18-113
図Ⅲ-40	20	45-1	K86	VIIb		3	3	VIc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		18-114
図Ⅲ-40	21	45-1	J80	VIIb		4	4	VIc	鉢	口	擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、 帯縄文		18-111①
図Ⅲ-40	22	45-1	J77	VIIb		2	2	VIc	鉢	底	三角列点、帯縄文		18-111②
図Ⅲ-40	23	45-1	J67	VIIb		9	17	VIc	注口付き鉢	胴～底	擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、 帯縄文		18-107①
			K67	VIIb		7							
			K68	VIIb		1							
図Ⅲ-40	24	45-1	J66	VIIb		1	2	VIc	注口付き小型鉢	注口	微隆起線、三角列点、帯縄文		18-107②
			K67	VIIb		1							
図Ⅲ-40	25	45-1	J81	VIIb		2	2	VIc	浅鉢	口～底	微隆起線、三角列点、帯縄文		18-223
図Ⅲ-40	26	45-1	K63	VIIa2		1	1	VIc	片口付き鉢	片口	口唇刻み、微隆起線、帯縄文、 補修孔		18-222
図Ⅲ-40	27	45-1	K88	VIIb		5	5	VIc	注口付き鉢	胴	口唇刻み、微隆起線、三角列点、 帯縄文		18-115

表Ⅲ-4 2018年調査掲載土器一覧(2)

挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	遺構/ (発掘区)	層位	遺物 No.	点数		分類	器種	部位	文様等/計測値	備考	個体番号
						破片	計						
図Ⅲ-40	28	45-1	J72	VIIb		1	1	VIc	注口	注口	三角列点、帯縄文		18-230
図Ⅲ-40	29	45-1	J62	VIIb		1	1	VIc	注口	注口	擬縄貼付文		18-231
図Ⅲ-41	30	45-1	J77	VIIb		1	1	VIc	深鉢	口	擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		18-225
図Ⅲ-41	31	45-1	K75	VIIb		3	3	VIc	深鉢	口	口唇刺突、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		18-112
図Ⅲ-41	32	45-1	J97	VIIb		10	10	VIc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		18-108
図Ⅲ-41	33	45-1	J81	VIIb		8	8	VIc	深鉢	口～胴	口唇刻み、擬縄貼付文、列点、帯縄文		18-109
図Ⅲ-41	34	45-1	K68	VIIb		1	1	VIc	深鉢	口	擬縄貼付文、三角列点、帯縄文、補修孔		18-221
図Ⅲ-41	35	45-1	K66	VIIb		1	1	VIc	鉢	口	口唇刻み、三角列点、帯縄文		18-226
図Ⅲ-41	36	45-1	K72	VIIb		1	1	VIc	鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文		18-232
図Ⅲ-41	37	45-1	J63	VIIb		2	2	VIc	鉢	胴	沈線		18-227
図Ⅲ-41	38	45-1	K79	VIIb		1	1	VIc	鉢	底	帯縄文		18-235
図Ⅲ-41	39	45-1	J90	VIIb		1	1	VIc	鉢	底	三角列点、帯縄文		18-236
図Ⅲ-41	40	45-1	J73	VIIb		1	1	VIc	鉢	底	帯縄文		18-234
図Ⅲ-41	41	45-1	I107	VIIb		1	1	VIc	把手付鉢	口	吊り手、三角列点、帯縄文		18-110①
図Ⅲ-41	42	45-1	I107	VIIb		7	7	VIc	把手付鉢	胴	三角列点、帯縄文		18-110②
図Ⅲ-41	43	45-1	I107	VIIb		3	3	VIc	把手付鉢	底	無文		18-110③
図Ⅲ-41	44	45-1	K72	VIIb		1	1	VIc	鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		18-224
図Ⅲ-41	45	45-1	J73	VIIb		1	1	VIc	鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		18-116①
図Ⅲ-41	46	45-1	J73	VIIb		2	2	VIc	鉢	口	三角列点、帯縄文		18-116②
図Ⅲ-41	47	45-1	K74	VIIb		1	1	VIc	鉢	口	口唇刺突		18-207
図Ⅲ-41	48	45-1	J62	VIIb		1	1	VIc	注口	口	擬縄貼付文、三角列点		18-233
図Ⅲ-41	49	45-1	K74	VIIb		1	1	VIc	注口	注口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		18-228
図Ⅲ-41	50	45-1	X69	VIIb		1	1	VIc	注口	注口	擬縄貼付文、三角列点		18-229
図Ⅲ-41	51	46-1	J90	VIIa		1	1	VIIIb	甕	胴	櫛歯文		18-211
図Ⅲ-41	52	46-1	J108	VIIa		1	1	VIIIb	甕	胴	櫛歯文、刻文		18-210
図Ⅲ-41	53	46-1	J108	VIIa		3	3	VIIIb	甕	胴	櫛歯文、刻文		18-208
図Ⅲ-41	54	46-1	I96	VIIa2		1	1	VIIIb	甕	胴	櫛歯文、刻文		18-209
図Ⅲ-41	55	46-1	I107	VIIa		1	1	VIIIb	甕	胴	櫛歯文、刻文		18-217
図Ⅲ-41	56	46-1	I96	VIIa2		1	1	VIIIb	甕	胴	櫛歯文、刻文、横走沈線		18-212
図Ⅲ-41	57	46-1	J99	VIIa		3	3	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		18-103
図Ⅲ-41	58	46-1	J108	VIIa		1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		18-202
図Ⅲ-41	59	46-1	I108	VIIa		1	2	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		18-204
			J107	VIIa		1							
図Ⅲ-41	60	46-1	K81	VIIa1		1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		18-203
図Ⅲ-41	61	46-1	I109	VIIa		1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		18-201
図Ⅲ-41	62	46-1	I105	VIIa		1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		18-205
図Ⅲ-41	63	46-1	K93	VIIa1		1	1	VIIIb	甕	胴	刻文		18-206
図Ⅲ-41	64	46-1	I102	VIIa		1	1	VIIIb	甕	胴	刻文		18-215
図Ⅲ-41	65	46-1	J108	VIIa		1	1	VIIIb	甕	胴	刻文		18-216
図Ⅲ-41	66	46-1	J108	VIIa		1	1	VIIIb	甕	胴	刺突文		18-213
図Ⅲ-41	67	46-1	J98	VIIa1		1	1	VIIIb	甕	胴	刺突文、弧状貼付文		18-214
図Ⅲ-41	68	46-1	J104	VIIa		10	10	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯		18-102①
図Ⅲ-41	69	46-1	I96	VIIa		1	5	VIIIb	甕	口～胴	無文		18-102②
			I96	VIIa2		3							
			I98	VIIa		1							
図Ⅲ-41	70	46-1	I96	VIIa2		1	1	VIIIb	甕	底	無文		18-219
図Ⅲ-41	71	46-1	J96	VIIa2		1	1	VIIIc	甕	胴	擬縄貼付文		18-218

表Ⅲ-5 2018年調査掲載石器一覧(1)

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	遺構/発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	産地分析	備考	実測番号
図Ⅲ-8	3	41-1	H-22/K80	VIIb		石鏃	黒曜石	1.5	0.7	0.2	0.2			115
図Ⅲ-8	4	41-1	H-22/K79	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.1	2.9	0.9	7.7			119
図Ⅲ-8	5	41-1	H-22/K79	VIIb		スクレイパー	黒曜石	4.7	3.5	1.2	12.6			117
図Ⅲ-8	6	41-1	H-22/K79	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.5	3.5	0.6	(7.0)			118
図Ⅲ-8	7	41-1	H-22/K79	VIIb		スクレイパー	黒曜石	(4.0)	(3.0)	0.7	(4.0)			120
図Ⅲ-8	8	41-1	H-22HP-6	坑底面		石核	メノウ	6.8	13.5	6.6	738.0			112
図Ⅲ-13	1	41-3	F-67	焼土上面		石鏃	黒曜石	2.1	0.9	0.3	0.3			121
図Ⅲ-13	2	41-3	F-67	焼土上面		スクレイパー	黒曜石	(3.1)	2.8	1.0	8.8			116
図Ⅲ-13	3	41-3	F-70	焼土上面		石鏃	黒曜石	(1.2)	0.8	0.2	(0.2)			122
図Ⅲ-14	1	41-4	FC-14	VIIb		石鏃	黒曜石	(1.7)	1.0	0.2	(0.2)			137
図Ⅲ-14	2	41-4	FC-15	VIIb		スクレイパー	メノウ	(2.4)	1.9	0.8	(2.5)			124
図Ⅲ-14	3	41-4	FC-15	VIIb		楔形石器	メノウ	2.9	2.3	1.6	6.6			125
図Ⅲ-14	4	41-4	FC-15	VIIb		石核	メノウ	4.1	5.9	2.5	50.5			126
図Ⅲ-17	1	41-5	H-19	覆土		たたき石	安山岩	10.7	8.9	5.0	708.0			131
図Ⅲ-17	2	41-5	H-19	床面	18	台石	安山岩	23.0	17.1	7.4	4200.0			132
図Ⅲ-17	3	41-5	H-19	覆土	17	台石	安山岩	22.9	17.9	6.4	3440.0			133
図Ⅲ-17	4	41-5	H-19HF-1	床面	3・4・8・12・14	板状加工礫	安山岩	28.3	28.4	5.0	4800.0		接合	
図Ⅲ-17	5	41-5	H-20	覆土下位	1	台石	安山岩	20.5	13.3	4.3	2055.0			127
図Ⅲ-18	2	42-1	H-21	床面	9	すり石	安山岩	9.2	5.9	6.8	503.0			129
図Ⅲ-18	3	42-1	H-21	覆土4層	3	台石	安山岩	(5.1)	(6.3)	(2.4)	(82.1)			130
図Ⅲ-19	1	42-2	PS-31	覆土		台石	安山岩	15.2	14.0	7.0	1973.0			134
図Ⅲ-20	2	42-3	S-11	覆土1層		台石	安山岩	(9.2)	(8.5)	(7.8)	(774.0)			141
図Ⅲ-20	3	42-4	S-12	VIIa1		板状加工礫	安山岩	8.7	5.6	1.6	99.5			113
図Ⅲ-20	4	42-4	FC-11	VIIa1		石鏃	黒曜石	(1.3)	(1.0)	(0.2)	(0.2)			123
図Ⅲ-23	1	42-5	SB-3/J22d	II		石錐	メノウ	2.7	2.2	1.2	4.6			106
図Ⅲ-23	2	42-5	SB-3/J23d	II		Rフレイク	メノウ	6.1	4.2	1.7	39.8			108
図Ⅲ-23	3	42-5	SB-3/J23b	II		たたき石	安山岩	8.8	5.4	6.0	412.0			110
図Ⅲ-23	4	42-5	SB-3/J23b	II		たたき石	安山岩	16.7	7.0	5.5	960.0			111
図Ⅲ-23	5	42-5	SB-3/J23b	II		台石	安山岩	15.2	12.8	5.6	1415.0			109
図Ⅲ-26	1	43-2	SB-4	II		Rフレイク	メノウ	3.4	1.8	0.9	5.5			107
図Ⅲ-26	2	43-2	SB-4	II		すり石	泥岩	9.5	4.9	3.8	186.1			105
図Ⅲ-26	3	43-2	SB-4	II		加工痕ある礫	安山岩	7.4	5.7	1.7	83.1			103
図Ⅲ-29	1	43-4	SB-6	II		加工痕ある礫	安山岩	10.7	6.9	3.2	293.8			104
図Ⅲ-29	2	43-4	SB-6	II		線刻礫	凝灰岩	(2.7)	3.3	(1.3)	(13.4)			135
図Ⅲ-42	1	46-2	K69	VIIb		石鏃	黒曜石	1.3	0.6	0.2	0.1			6
図Ⅲ-42	2	46-2	K65	VIIb		石鏃	黒曜石	1.5	0.6	0.2	0.1			33
図Ⅲ-42	3	46-2	K68	VIIb		石鏃	黒曜石	(1.4)	0.8	0.2	(0.2)			45
図Ⅲ-42	4	46-2	J70	VIIb		石鏃	黒曜石	1.6	0.6	0.2	0.2			37
図Ⅲ-42	5	46-2	J73	VIIb		石鏃	黒曜石	1.7	0.7	0.3	0.2			34
図Ⅲ-42	6	46-2	K68	VIIb		石鏃	黒曜石	1.7	0.8	0.3	0.2			39
図Ⅲ-42	7	46-2	K52	VIIb		石鏃	黒曜石	1.7	0.8	0.3	0.2			32
図Ⅲ-42	8	46-2	J84	VIIb		石鏃	黒曜石	1.8	0.9	0.2	0.2			42
図Ⅲ-42	9	46-2	K66	VIIb		石鏃	黒曜石	1.8	0.7	0.2	0.2			5
図Ⅲ-42	10	46-2	K52	VIIb		石鏃	黒曜石	1.9	1.0	0.3	0.4			31
図Ⅲ-42	11	46-2	K77	VIIb		石鏃	黒曜石	3.2	0.8	0.2	0.5			3
図Ⅲ-42	12	46-2	J64	VIIb		石鏃	黒曜石	(1.3)	0.7	0.2	(0.1)			41
図Ⅲ-42	13	46-2	J63	VIIb		石鏃	黒曜石	(1.4)	0.8	0.2	(0.2)			40
図Ⅲ-42	14	46-2	J80	VIIb		石鏃	黒曜石	(1.4)	0.7	0.2	(0.2)			43
図Ⅲ-42	15	46-2	K77	VIIb		石鏃	黒曜石	(1.4)	1.0	0.3	(0.3)			136
図Ⅲ-42	16	46-2	K79	VIIb		石鏃	黒曜石	3.1	2.0	0.5	2.9		未成品	35
図Ⅲ-42	17	46-2	J63	VIIb		石鏃	黒曜石	(2.3)	(1.1)	0.2	(0.4)			4
図Ⅲ-42	18	46-2	K73	VIIb		石鏃	黒曜石	(1.2)	0.7	0.3	(0.2)			44
図Ⅲ-42	19	46-2	J100	VIIb		石鏃	黒曜石	2.2	1.0	0.3	0.6			38
図Ⅲ-42	20	46-2	I102	VIIb		石鏃	硬質頁岩	3.5	1.3	0.4	1.3			2
図Ⅲ-42	21	46-2	K76	VIIb		石鏃	黒曜石	(1.2)	0.7	0.2	(0.1)			46
図Ⅲ-42	22	46-2	K74	VIIb		石槍	黒曜石	(5.8)	1.8	0.9	(9.1)	所山		10
図Ⅲ-42	23	46-2	J59	VIIb		石槍	黒曜石	9.9	3.2	1.1	31.6			1
図Ⅲ-42	24	46-2	K69	VIIb		石槍	黒曜石	(6.1)	2.2	0.6	(9.1)	所山		11
図Ⅲ-42	25	46-2	J70	VIIb		ナイフ	黒曜石	(3.4)	1.6	0.4	2.1		キズ多	62
図Ⅲ-42	26	46-2	K68	VIIb		ナイフ	黒曜石	4.7	3.8	13.5	20.1			36
図Ⅲ-42	27	46-2	I109	VIIb		ナイフ	黒曜石	5.1	2.1	0.5	4.7	所山		12
図Ⅲ-42	28	46-2	K57	VIIb		ナイフ	黒曜石	6.6	2.8	1.0	14.9			67
図Ⅲ-42	29	46-2	J69	VIIb		ナイフ	黒曜石	7.5	4.2	1.0	29.4	白滝2		17
図Ⅲ-42	30	46-2	K65	VIIb		ナイフ	黒曜石	7.7	4.3	1.2	33.0	所山		13
図Ⅲ-42	31	46-2	K65	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.2	2.8	0.9	5.5	所山		57
図Ⅲ-42	32	46-2	J70	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.5	2.9	0.6	5.6			19
図Ⅲ-42	33	46-2	K69	VIIb		スクレイパー	黒曜石	4.1	2.7	0.8	7.8	白滝2		60
図Ⅲ-42	34	46-2	J87	VIIb		スクレイパー	黒曜石	6.3	4.7	1.4	26.2			16
図Ⅲ-42	35	46-2	J71	VIIb		スクレイパー	黒曜石	5.2	1.5	0.5	2.4			58
図Ⅲ-42	36	46-2	J69	VIIb		スクレイパー	黒曜石	(4.7)	1.7	0.7	(4.5)			64
図Ⅲ-43	37	46-2	I105	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.8	2.7	0.7	5.2			68
図Ⅲ-43	38	46-2	J63	VIIb		スクレイパー	安山岩	7.2	5.8	1.8	92.6			73

表Ⅲ-6 2018年調査掲載石器一覧(2)

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	遺構/発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	産地分析	備考	実測番号
図Ⅲ-43	39	46-2	K55	VIIb		スクレイパー	黒曜石	4.1	2.4	0.7	3.3			66
図Ⅲ-43	40	46-2	K57	VIIb		スクレイパー	硬質頁岩	6.0	5.3	2.0	35.5			72
図Ⅲ-43	41	46-2	K58	VIIb		スクレイパー	硬質頁岩	8.2	6.2	1.5	45.8			15
図Ⅲ-43	42	46-2	J69	VIIb		スクレイパー	硬質頁岩	13.3	6.3	2.8	154.7			56
図Ⅲ-43	43	46-2	K71	VIIb		スクレイパー	黒曜石	2.4	2.2	0.5	2.3	所山		71
図Ⅲ-43	44	46-2	K79	VIIb		スクレイパー	黒曜石	2.8	2.3	1.0	5.2			20
図Ⅲ-43	45	46-2	J107	VIIb		スクレイパー	黒曜石	2.7	1.8	0.6	2.2	白滝2		70
図Ⅲ-43	46	46-2	K68	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.1	4.0	1.2	8.2			59
図Ⅲ-43	47	46-2	J82	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.2	2.2	0.5	4.2	所山		61
図Ⅲ-43	48	46-2	K73	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.4	1.9	0.5	2.2	所山		75
図Ⅲ-43	49	46-2	K73	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.6	2.4	0.7	4.1			65
図Ⅲ-43	50	46-2	K69	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.5	2.8	0.6	5.2			74
図Ⅲ-43	51	46-2	J87	VIIb		スクレイパー	黒曜石	3.6	2.9	1.2	12.2			18
図Ⅲ-43	52	46-2	K68	VIIb		スクレイパー	黒曜石	4.0	2.9	1.0	6.4	所山		69
図Ⅲ-43	53	46-2	K69	VIIb		スクレイパー	黒曜石	4.3	2.7	1.3	13.8	上土幌		76
図Ⅲ-43	54	46-2	K73	VIIb		スクレイパー	黒曜石	4.6	2.6	9.1	9.3			63
図Ⅲ-44	55	47-1	J71	VIIb		石錐	黒曜石	1.1	0.8	0.2	0.2			50
図Ⅲ-44	56	47-1	K56	VIIb		石錐	メノウ	1.7	1.3	0.5	0.7			55
図Ⅲ-44	57	47-1	K63	VIIb		石錐	メノウ	(1.7)	1.0	0.6	(0.7)			7
図Ⅲ-44	58	47-1	K81	VIIb		石錐	メノウ	2.0	0.8	0.5	0.7			48
図Ⅲ-44	59	47-1	K67	VIIb		石錐	メノウ	2.2	1.1	0.5	0.9			49
図Ⅲ-44	60	47-1	K56	VIIb		石錐	メノウ	2.6	1.1	0.8	1.4			52
図Ⅲ-44	61	47-1	J80	VIIb		石錐	メノウ	2.6	1.3	1.2	3.1			9
図Ⅲ-44	62	47-1	J63	VIIb		石錐	メノウ	3.0	1.2	0.9	2.7			54
図Ⅲ-44	63	47-1	K73	VIIb		石錐	メノウ	3.1	0.9	0.6	1.4			47
図Ⅲ-44	64	47-1	J80	VIIb		石錐	メノウ	3.7	1.8	1.3	4.8			53
図Ⅲ-44	65	47-1	K67	VIIb		石錐	メノウ	4.3	2.4	0.8	5.0			8
図Ⅲ-44	66	47-1	J73	VIIb		石錐	黒曜石	5.7	4.1	1.4	19.0			51
図Ⅲ-44	67	47-1	K74	VIIb		楔形石器	黒曜石	1.8	1.7	0.5	1.5			81
図Ⅲ-44	68	47-1	K61	VIIb		楔形石器	黒曜石	1.8	1.9	1.0	2.6			86
図Ⅲ-44	69	47-1	K81	VIIb		楔形石器	黒曜石	1.9	2.4	1.3	4.0			87
図Ⅲ-44	70	47-1	K57	VIIb		楔形石器	黒曜石	2.1	1.8	0.4	1.5			82
図Ⅲ-44	71	47-1	K74	VIIb		楔形石器	黒曜石	2.2	2.5	1.1	4.9			83
図Ⅲ-44	72	47-1	K66	VIIb		楔形石器	メノウ	3.2	2.3	1.6	8.5			84
図Ⅲ-44	73	47-1	J63	VIIb		楔形石器	黒曜石	3.2	3.2	1.2	9.7			79
図Ⅲ-44	74	47-1	J110	VIIb		楔形石器	黒曜石	3.5	2.1	1.1	6.0			14
図Ⅲ-44	75	47-1	J73	VIIb		楔形石器	黒曜石	4.6	4.1	1.6	27.7	所山		85
図Ⅲ-44	76	47-1	K69	VIIb		楔形石器	メノウ	6.0	3.4	2.1	40.4			80
図Ⅲ-44	77	47-1	K67	VIIb		Rフレイク	黒曜石	2.2	2.0	0.6	2.4	不明		88
図Ⅲ-44	78	47-1	K67	VIIb		Rフレイク	黒曜石	4.3	2.2	0.7	4.0			89
図Ⅲ-44	79	47-1	K77	VIIb		石核	黒曜石	2.8	3.0	2.0	11.6			91
図Ⅲ-44	80	47-1	J85	VIIb		石核	安山岩	6.8	7.2	3.0	124.9			96
図Ⅲ-45	81	47-1	K81	VIIb		石核	安山岩	5.0	10.0	6.8	348.0			95
図Ⅲ-45	82	47-1	J101	VIIb		石核	安山岩	6.1	8.0	4.2	230.4			98
図Ⅲ-45	83	47-1	K65	VIIb		石核	硬質頁岩	11.4	10.1	3.7	384.0			97
図Ⅲ-45	84	47-1	J69	VIIb		石核	硬質頁岩	8.2	5.0	4.0	182.3			90
図Ⅲ-45	85	47-1	J69	VIIb		石のみ	緑色片岩	3.0	1.9	0.9	7.6			100
図Ⅲ-45	86	47-1	J98	VIIb		くぼみ石	安山岩	13.4	8.0	5.7	903.0			99
図Ⅲ-46	87	47-1	J57	VIIb		砥石	軽石	11.0	(9.6)	5.5	(67.6)			93
図Ⅲ-46	88	47-1	K74	VIIb		砥石	砂岩	(12.9)	(10.6)	(2.6)	(234.3)			92
図Ⅲ-46	89	47-1	K60	VIIb		台石	安山岩	15.8	(11.8)	5.3	(1432.0)			139
図Ⅲ-46	90	47-1	K81	VIIb		台石	安山岩	17.0	12.9	3.4	1112.0			138
図Ⅲ-46	91	47-1	J83	VIIb		台石	安山岩	30.7	20.6	10.0	8800.0			142
図Ⅲ-46	92	47-1	K67	VIIb		台石	砂岩	(12.1)	(6.3)	(3.7)	(322.0)			143
図Ⅲ-46	93	47-1	J68	VIIb下		板状加工礫	安山岩	14.5	11.5	2.0	343.0			101
図Ⅲ-47	94	47-1	J38	VIIa1		石鏃	黒曜石	(3.8)	1.6	0.4	(1.8)	白滝2		23
図Ⅲ-47	95	47-1	J66	VIIa1		石鏃	黒曜石	5.1	1.4	0.4	2.4	生田原		22
図Ⅲ-47	96	47-1	J109	VIIa		石鏃	硬質頁岩	3.2	1.2	0.5	1.1			24
図Ⅲ-47	97	47-1	J108	VIIa		石鏃	硬質頁岩	(2.5)	1.1	0.4	(1.0)			25
図Ⅲ-47	98	47-1	J102	VIIa		石槍	黒曜石	(8.6)	4.1	1.2	(39.1)	所山		21
図Ⅲ-47	99	47-1	J94	VIIa		スクレイパー	黒曜石	(2.7)	2.9	1.0	6.1			26
図Ⅲ-47	100	47-1	K66	VIIa2		楔形石器	メノウ	1.8	1.5	1.0	2.3			78
図Ⅲ-47	101	47-1	K66	VIIa2		楔形石器	黒曜石	2.2	3.3	0.9	6.0			77
図Ⅲ-47	102	47-1	J109	VIIa		楔形石器	黒曜石	3.1	2.6	1.5	9.3			27
図Ⅲ-47	103	47-1	J107	VIIa		楔形石器	黒曜石	4.7	3.7	1.6	21.3	白滝2?		28
図Ⅲ-47	104	47-1	J109	VIIa		石核	硬質頁岩	5.7	3.7	1.9	23.4			29
図Ⅲ-47	105	47-1	J107	VIIa		たたき石	硬質頁岩	8.7	5.5	4.0	202.5			30
図Ⅲ-47	106	47-1	K93	VIIa1		すり石	安山岩	5.9	4.7	3.2	133.3			128
図Ⅲ-47	107	47-1	J58	VIIa1		台石	安山岩	18.3	15.2	4.5	2170.0			140
図Ⅲ-47	108	47-1	J82	VIIa1		板状加工礫	安山岩	(11.0)	(6.0)	3.0	(246)			102
図Ⅲ-47	109	47-1	J28	II		石製品	軽石	9.4	3.3	2.6	23.1			

表Ⅲ-7 2018年調査掲載金属製品一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	遺構/発掘区	遺物番号	層位	点数	種別	分類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	実測番号
図Ⅲ-23	6	42-5	SB-3/J21d	1	Ⅱ	1	銅製品	環状	2.3	2.4	0.2	2.1	耳輪?	1
図Ⅲ-23	7	42-5	SB-3/J22a	1	Ⅱ	1	鉄製品	刀子	6.3	1.5	0.4	6.0		12
図Ⅲ-23	8	42-5	SB-3/J23d	1	Ⅱ	1	鉄製品	釘	4.0	0.9	0.7	5.0		14
図Ⅲ-23	9	42-5	SB-3/J23b		Ⅱ	1	鉄製品	釘	2.9	0.9	0.4	2.0		15
図Ⅲ-23	10	42-5	SB-3/J21d	2	Ⅱ	2	鉄製品	楔	2.2	1.5	0.6	2.5		21
図Ⅲ-23	11	42-5	SB-3/J22a	1	Ⅱ	4	鉄製品	楔	3.0	1.9	1.0	10.5		22
図Ⅲ-23	12	42-5	SB-3/J23c	1	Ⅱ	2	鉄製品	鉤状	1.5	1.7	0.6	0.5	端部	25
図Ⅲ-26	4	43-2	SB-4		Ⅱ	1	銅製品	不明	5.8	1.6	0.2	2.0	板状	2
図Ⅲ-26	5	43-2	SB-4		Ⅱ	1	鉄製品	釘	3.2	0.7	0.5	4.0		16
図Ⅲ-29	3	43-4	SB-6	ksb-30	Ⅱ	1	鉄製品	釘	2.1	0.5	0.4	0.5		37
図Ⅲ-30	1	43-4	SB-8	ksb-33	灰	2	鉄製品	釘	4.6	0.8	0.3	2.5		38
図Ⅲ-31	1	43-4	SB-10		Ⅱ	1	鉄製品	平釘	16.5	2.9	1.9	270.0		5
図Ⅲ-31	2	43-4	SB-10		Ⅱ	1	鉄製品	角釘	6.9	1.2	1.4	22.8		6
図Ⅲ-31	3	43-4	SB-10	ksb-36	Ⅱ	1	鉄製品	刀子	3.8	2.0	0.5	4.0	柄	39
図Ⅲ-48	1	48-2	J28		Ⅱ	12	鉄製品	鎌	18.1	10.2	0.7	90.2	接合	4
図Ⅲ-48	2	48-2	K34		Ⅱ	1	鉄製品	環状	2.7	2.6	0.8	3.0	口金	10
図Ⅲ-48	3	48-2	J14		Ⅱ	1	鉄製品	斧	16.5	7.7	4.1	975.0	鉞	3
図Ⅲ-48	4	48-2	J13		Ⅱ	3	鉄製品	刀子	7.5	2.1	0.7	11.9		9
図Ⅲ-48	5	48-2	J17		Ⅱ	1	鉄製品	角釘	14.3	1.4	1.3	32.9		7
図Ⅲ-48	6	48-2	K28		Ⅱ	1	鉄製品	角釘	8.2	1.4	1.1	17.0		8
図Ⅲ-48	7	48-2	J17		Ⅱ	1	鉄製品	角釘	2.9	0.7	0.7	12.4	サビ多量、中空	13
図Ⅲ-48	8	48-2	J14		Ⅱ	2	鉄製品	釘	4.9	1.1	0.8	3.0	接合	17
図Ⅲ-48	9	48-2	J14		Ⅱ	2	鉄製品	釘	6.0	1.1	0.8	3.5	接合	18
図Ⅲ-48	10	48-2	J14		Ⅱ	2	鉄製品	釘	5.5	1.4	0.8	5.0	接合	19
図Ⅲ-48	11	48-2	J14		Ⅱ	1	鉄製品	釘	4.0	1.8	1.0	4.0		20
図Ⅲ-49	12	49-1	J41		I下位	3	鉄製品	鍋	10.9	2.0	0.9	27.7	吊手(弦)	11-35
図Ⅲ-49	13	49-1	J41		I下位	1	鉄製品	鍋	3.1	1.9	0.6	5.0	吊手(弦)	11-36
図Ⅲ-49	14	49-1	J41		I下位	1	鉄製品	鍋	25.0	10.3	1.0	520.0	口縁・吊耳	11-1
図Ⅲ-49	15	49-1	J42		I下位	1	鉄製品	鍋	23.1	12.4	0.6	329.9	3点接合	11-17
			J42		I下位	1								11-37
			J42		I下位	1								11-38
図Ⅲ-49	16	49-1	J42	1	I下位	3	鉄製品	鍋	10.6	6.3	0.6	79.4		11-4
図Ⅲ-49	17	49-1	J42	1	I下位	3	鉄製品	鍋	9.3	7.3	0.5	66.5		11-24
図Ⅲ-49	18	49-1	J42	2	I下位	3	鉄製品	鍋	8.3	7.2	0.4	70.5		11-31
図Ⅲ-49	19	49-1	J42	6	I下位	1	鉄製品	鍋	12.4	7.5	0.8	92.6		11-39
図Ⅲ-49	20	49-1	J41		I下位	1	鉄製品	鍋	10.1	8.5	0.5	90.2		11-41
図Ⅲ-49	21	49-1	J42		I下位	1	鉄製品	鍋	4.3	5.2	0.4	44.3	胴～底	11-18
図Ⅲ-49	22	49-1	J42		I下位	1	鉄製品	鍋	1.4	6.3	0.4	46.3	胴～底	11-20
図Ⅲ-49	23	49-1	J41		I下位	1	鉄製品	鍋	11.8	17.8	0.5	361.5	胴～底	11-2
図Ⅲ-49	24	49-1	J41		I下位	1	鉄製品	鍋	19.5	15.1	1.3	680.0	底・丸型湯口	11-3
図Ⅲ-49	25	49-1	J41		I下位	1	鉄製品	鍋	8.7	5.5	0.5	68.6	底	11-5

表Ⅲ-8 2018年調査掲載骨角器等一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	遺構/発掘区	層位	点数	種別	分類	材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	実測番号
図Ⅲ-23	13	42-5	SB-3	下位灰	1	骨角器	銚頭	鹿角	3.3	1.8	0.9	1.9	水洗	BT-1
図Ⅲ-23	14	42-5	SB-3/J22a	Ⅱ	1	骨角器	中柄	鹿・中手中足骨	8.2	1.0	0.9	4.9		BT-6
図Ⅲ-23	15	42-5	SB-3/J23d	Ⅱ	1	骨角器	中柄(未成品)	鯨骨	10.2	1.4	1.4	9.2		BT-7
図Ⅲ-23	16	42-5	SB-3/J22d	Ⅱ	3	骨角器	ヤス未成品	鯨骨	13.6	1.2	1.3	10.7	接合、骨鏃?	BT-10
図Ⅲ-23	17	42-5	SB-3/J23d	Ⅱ	1	骨角器等	骨角器片	鹿骨	2.2	1.0	1.0	1.0	片	BT-21
図Ⅲ-23	18	42-5	SB-3/J23d	Ⅱ	1	骨角器等	残片	鯨骨	3.6	1.6	0.9	3.2	面取り、切込	BT-29
図Ⅲ-23	19	42-5	SB-3/J23b	Ⅱ	3	骨角器等	原材(未成品)	海獣(トド?)	21.5	6.2	2.3	88.6	接合	BT-16
図Ⅲ-23	20	42-5	SB-3/J23a	Ⅱ	1	骨角器等	銚頭原材	鹿角	7.9	4.3	1.9	17.9	切断痕ほか	BT-18
図Ⅲ-23	21	42-5	SB-3/J22b	Ⅱ	2	骨角器等	残片(スパイラル剥片)	鹿骨	9.8	2.0	2.3	10.6	接合、切込	BT-28
図Ⅲ-23	22	42-5	SB-3/J22a	Ⅱ	1	骨角器等	残片	鹿骨	8.3	1.7	1.1	5.9	切込	BT-27
図Ⅲ-26	6	43-1	SB-4	Ⅱ	1	骨角器	銚頭		2.1	1.0	0.8	0.6	目釘(鉄)残	BT-3
図Ⅲ-26	7	43-1	SB-4	Ⅱ	1	骨角器	銚頭		1.3	0.9	0.4	0.3	片、作り出し	BT-4
図Ⅲ-26	8	43-1	SB-4	Ⅱ	1	骨角器	中柄(未成品)	鯨骨	11.2	1.6	1.1	8.4		BT-8
図Ⅲ-26	9	43-1	SB-4	Ⅱ	1	骨角器	鉤状製品	鹿角	9.2	3.6	2.1	22.5	切断痕ほか	BT-14
図Ⅲ-26	10	43-1	SB-4	Ⅱ	1	骨角器等	骨角器片	鹿骨	2.3	1.0	0.6	0.7	面取り	BT-20
図Ⅲ-26	11	43-1	SB-4	Ⅱ	1	骨角器等	未成品		1.5	0.7	0.4	0.3		BT-23
図Ⅲ-26	12	43-1	SB-4 魚骨具範囲1	Ⅱ	1	骨角器等	残片	鹿角	2.1	2.8	0.8	2.8	平板状、切込	BT-31
図Ⅲ-26	13	43-1	SB-4	Ⅱ	1	骨角器等	残片	鹿角	6.0	1.0	0.7	2.4	切断痕	BT-30
図Ⅲ-28	1	43-2	SB-5	Ⅱ	1	骨角器	銚頭	海獣骨	4.1	1.2	0.9	5.0	銅鏃残存	BT-2
図Ⅲ-28	2	43-2	SB-5 貝集中③	Ⅱ	3	骨角器	弓矢状製品	鹿角	1.8	1.4	1.3	2.2	接合、切込	BT-12
図Ⅲ-28	3	43-2	SB-5 魚骨集中②	Ⅱ	1	骨角器	装飾品	陸獣骨	1.8	1.3	0.3	0.3	刺突列	BT-11
図Ⅲ-28	4	43-2	SB-5 魚骨集中②	Ⅱ	1	骨角器	装飾品	陸獣骨	3.8	1.2	0.7	1.2	3点接合、刺突列	BT-11
図Ⅲ-28	5	43-2	SB-5	Ⅱ	1	骨角器	中柄未成品		1.7	0.9	0.5	0.6	全面面取り	BT-24
図Ⅲ-28	6	43-2	SB-5 貝集中③	Ⅱ	1	骨角器	骨角器片	鹿骨端部	2.8	1.1	0.9	0.9		BT-22
図Ⅲ-28	7	43-2	SB-5 魚骨集中②	Ⅱ	1	骨角器等	骨角器片	陸獣骨	1.9	0.8	0.7	0.8	切込、ケズリ	BT-13
図Ⅲ-28	8	43-2	SB-5 貝集中②	Ⅱ	1	骨角器	未成品	鹿角	2.0	0.6	0.4	0.2	先端部加工	BT-25
図Ⅲ-28	9	43-2	SB-5 魚骨集中③	Ⅱ	1	骨角器等	残片	鹿角	2.7	0.8	0.5	0.7	面取り	BT-32
図Ⅲ-28	10	43-2	SB-5	Ⅱ	1	骨角器等	原材(未成品)	鯨骨	11.0	2.9	1.8	19.9		BT-19
図Ⅲ-28	11	43-2	SB-5	Ⅱ	1	骨角器等	残片	ヒグマ尺骨	20.1	7.3	4.3	140.9	解体痕、切断痕	BT-17
図Ⅲ-30	2	43-3	SB-8	Ⅱ	1	骨角器等	未成品		2.3	0.4	0.6	0.4	先端部加工	BT-26
図Ⅲ-30	3	43-3	SB-9	Ⅱ	1	骨角器	中柄(未成品)	鹿骨	2.3	0.5	0.5	0.4	刺突具?	BT-9
図Ⅲ-31	4	43-4	SB-10	Ⅱ	1	骨角器	銚頭		1.4	0.7	0.4	0.2	片、目釘穴あり	BT-5
図Ⅲ-50	1	48-1	J15	Ⅱ	2	骨角器	掘り具?	鹿角	24.0	16.3	2.6	73.8	接合	BT-15
図Ⅲ-50	2	48-1	K15	Ⅱ	1	骨角器等	残片		15.8	2.7	2.9	32.1		BT-42
図Ⅲ-50	3	48-1	K18	Ⅱ	1	骨角器等	残片		15.1	3.4	2.5	42.6		BT-43

表Ⅲ-9 フローテーション結果

試料番号	遺構/発掘区	層位	体積(ml)	乾燥重量(g)	残渣(g)	浮遊物(g)		回収遺物							備考	
						2mm	0.425mm	石器(点)	メノウ(g)	鉄片(g)	礫(g)	骨片(g)	貝(g)	炭化物(g)		炭化種子(粒)
カモ-1	H-19HF-1	焼土	8,900	10,650	37.0	18.2	7.5			0.0	9.0	0.0		28.5	18	
カモ-2	H-19HF-2	焼土	4,150	5,520	6.0	0.2	0.8				2.0	0.1		0.5		
カモ-3	H-21HF-1	焼土	850	1,070	4.4	0.9	0.0				0.9	0.1		3.9		
カモ-4	H-22HF-1	焼土	6,550	8,710	15.9	3.7	1.2				11.9	0.1		4.9	9	
カモ-5	K88	VIIb	750	980	1.1	0.0	0.0				1.1					一括土器内
カモ-6	F-56	焼土	6,200	7,470	16.9	0.1	0.7	1			16.3	0.0	0.0	1.0	0	
カモ-7	F-57	焼土	5,850	7,750	4.8	0.4	0.5	6			3.1	0.0		0.7		
カモ-8	F-58	焼土	7,150	9,540	0.7	0.0	0.2	5			0.5			0.0		
カモ-9	F-59	焼土上面	1,700	2,300	1.6	0.2	0.1				1.3		0.1	0.4		
カモ-10	F-60	焼土	3,800	4,950	14.9	5.3	1.3				5.4			11.9	0	
カモ-11	F-61	焼土上面	2,350	2,970	3.5	0.1	0.1	2	0.0		1.5	0.0		1.7	0	
カモ-12	F-62	焼土上面	3,100	3,630	3.8	0.1	0.5	13			2.3	0.0		0.8		
カモ-13	F-62	焼土中	1,250	1,400	0.6	0.0	0.0				0.2	0.6		0.0		
カモ-14	F-63	焼土上面	1,200	1,600	0.5	0.0	0.0				0.5		0.0	0.0		
カモ-15	F-64	焼土	13,600	16,430	19.2	3.1	0.6	29			8.6	0.0	0.0	7.0	5	
カモ-16	F-65	焼土	6,200	7,090	23.5	0.0	0.1	5			13.1		0.6	0.6		
カモ-17	F-66	焼土	1,700	2,390	1.1	0.6	0.1				0.9			1.4		
カモ-18	F-67	焼土上位	150	250	0.4	0.0	0.0				0.4			0.2		
カモ-19	F-67	焼土	41,900	51,040	38.6	8.0	5.1	94			26.3	0.1		9.1	3	
カモ-20	F-68	焼土上位	5,100	6,810	28.8	5.1	0.5	3	0.0		8.6	0.0		6.3		
カモ-21	F-68	焼土	10,000	12,240	7.1	1.6	0.6	13			5.7			3.7		
カモ-22	F-69	焼土	34,900	43,530	13.8	8.4	3.2	560			2.7		0.0	12.6		
カモ-23	F-70	焼土	7,500	9,570	6.6	0.1	0.0	11			3.4	0.0		3.2		
カモ-24	F-71	焼土上面	150	200	0.3	0.0	0.0				2.0			0.1		
カモ-25	SP-29	覆土	250	270	2.8	0.0	0.0				0.0	0.0		0.2		
カモ-26	SP-30	覆土下位	50	60	0.0	0.0	-				0.2	0.0		0.3		
合計			175,300	218,420	253.9	56.1	23.1	742	0.0	0.2	128.3	0.4	0.7	99.0	35	

表Ⅲ-10 動物遺存体ほか水洗選別結果

試料番号	採取位置等		動物遺存体			他の自然遺物			その他	残	計(g)
	遺構/発掘区	層位	貝	魚骨	獣骨	炭	根	礫			
ksb-1	SB-1	II	1,339.3	1.8	0.1						1,341.2
ksb-2	SB-2	II	579.3	1.3	3.8			0.1		1.5	586.0
ksb-3	SB-3/J21a	II	41.6		18.0						59.6
ksb-4	SB-3/J21b	II	12.6								12.6
ksb-5	SB-3/J21c	II	116.8		3.2						120.0
ksb-6	SB-3/J21d	II	545.8	1.7							547.5
ksb-7	SB-3/J22a	II	435.5	6.2	269.7					18.2	729.6
ksb-8	SB-3/J22b	II	157.3	1.3	15.3					10.5	184.4
ksb-9	SB-3/J22c	II	290.1	0.7	52.8						343.6
ksb-10	SB-3/J22d	II	495.1	0.9	8.8					10.7	515.5
ksb-11	SB-3/J23a	II	970.4	0.7	99.5					17.8	1,088.4
ksb-12	SB-3/J23b	II	1,561.8	16.6	157.2					88.6	1,824.2
ksb-13	SB-3/J23c	II	530.7	4.2	46.0						580.9
ksb-14	SB-3/J23d	II	873.3		194.5					13.4	1,081.2
ksb-15	SB-3/トレンチ	下位灰	152.9	15.0	14.1	3.5		31.4		86.8	303.7
ksb-16	SB-3	下位灰	213.1	56.8	95.3	13.2		145.0	18.9	158.8	701.1
ksb-17	SB-4/トレンチ1	II	93.3	202.0	3.2	16.5		75.5		87.6	478.1
ksb-18	SB-4/トレンチ2	II	1.3	26.3	4.4	8.9		5.3			46.2
ksb-19	SB-4	II	4,800.6	692.0	725.0	171.8		270.8	46.4	495.0	7,201.6
ksb-20	SB-4	獣骨範囲			150.0						150.0
ksb-21	SB-4	灰	1,607.7	1,826.5	75.6	284.6	69.5	1,152.8	4.4	1,335.0	6,356.1
ksb-22	SB-4	魚骨・貝範囲1	147.8	882.3	14.2	67.8	21.0	200.3	4.6	435.0	1,773.0
ksb-23	SB-4	魚骨・貝範囲2	14.9	155.4	36.1	29.1	3.3	22.6	0.1	171.4	432.9
ksb-24	SB-5	II	2,007.3	270.3	360.3	36.7	7.9	142.4	174.5	223.6	3,223.0
ksb-25	SB-5貝集中①	II	8,482.9	58.4	103.5	9.8	6.3	10.9		104.6	8,776.4
ksb-26	SB-5貝集中②	II	1,743.6	22.3	72.0	1.0			0.2	21.5	1,860.6
ksb-27	SB-5貝集中③	II	856.6	689.4	133.4	49.1	8.7	38.5	3.2		1,778.9
ksb-28	SB-5魚骨集中②	II	333.1	726.9	7.1	157.8	8.5	99.5	2.2	361.7	1,696.8
ksb-29	SB-5魚骨集中③	II	32.6	873.7	44.0	119.4	24.3	82.6	4.8	490.0	1,671.4
ksb-30	SB-6	II	1,754.7	590.2	125.5	137.4	25.5	209.5	5.8	450.0	3,298.6
ksb-31	SB-6	灰	556.7	428.1	53.9	103.7		113.4		238.9	1,494.7
ksb-32	SB-7	II	79.0	15.4	10.3	12.2		4.9		19.3	141.1
ksb-33	SB-8	灰	800.5	387.7	41.7	93.3		171.9	16.6	389.0	1,900.7
ksb-34	SB-9	II	616.9	180.0	22.2	77.9		63.9	2.2	228.6	1,191.7
ksb-35	SB-9	灰		6.7		1.9		4.2		5.8	18.6
ksb-36	SB-10	II	150.7	200.0	12.2	47.3		41.7	5.0	135.0	591.9
ksb-37	SB-10	灰1	2.3	31.8	0.3	17.9		23.9		40.5	116.7
ksb-38	SB-10	灰2	19.2	63.6	5.4	50.6		118.6		106.9	364.3
ksb-39	J13	II	5.7		0.9						6.6
ksb-40	J14	II	7.3		40.2						47.5
ksb-41	J15	II	922.6	1.0	38.3	0.3			73.8	5.1	1,041.1
ksb-42	J16	II	464.1	8.4	43.5	0.8				14.0	530.8
ksb-43	J18	II	1.4								1.4
ksb-44	J20	II	7.5								7.5
ksb-45	J21	II	21.1		13.7						34.8
ksb-46	J23	II	44.5								44.5
ksb-47	J24	II	46.4								46.4
ksb-48	J25	II	3.3		0.2						3.5
ksb-49	J26	攪乱	110.0							0.3	110.3
ksb-50	J26	II	16.9								16.9
ksb-51	J27	攪乱	17.3								17.3
ksb-52	J28	II	3.4								3.4
ksb-53	J29	II	11.1								11.1
ksb-54	J35	II	3.1								3.1
ksb-55	K13	II	1.5								1.5
ksb-56	K14	II	35.1								35.1
ksb-57	K15	II	25.0	1.0	52.8	0.1			32.1	0.2	111.2
ksb-58	K18	II							49.9		49.9
ksb-59	K19	II	7.1								7.1
ksb-60	K21	II	6.7						2.4		9.1
ksb-61	K22	II	46.5							0.1	46.6
ksb-62	K23	II	1,051.4	9.4	59.0					6.2	1,126.0
ksb-63	K24	II	31.7								31.7
ksb-64	K25	I下	9.0								9.0
ksb-65	K34	II	45.7								45.7
ksb-66	K35	II	69.7	0.0	0.2					1.8	71.7
ksb-67	K37	II	31.1								31.1
ksb-68	K38	II	6.5								6.5
ksb-69	K39	II	8.5								8.5
合計(g)			35,478.5	8,456.0	3,227.4	1,512.6	175.0	3,029.7	606.3	5,614.2	58,099.7

IV章 2008年の調査と出土遺物

1 調査の概要

(1) 調査の方法と経過

調査区は国道334号の南側に沿う範囲で、北側は海岸砂丘が東西にのびており、南東側は低湿地が広がる。調査区内の標高は4.5～5.5mである。調査範囲は延長689.3mと長い一方、幅は西部を除き0.3～3mの狭い部分が続く。幅0.3mでは調査が困難なため、掘削最小幅を1mとした。また堆積土が砂であり崩落防止のため用地境界から50cm離して調査区を設定した。さらに電柱や用地杭などの構造物や埋設物の周囲は掘削を行っていない。なお調査範囲が細長いため、便宜的に町道や構造物を境に東側からA地点（1～27ライン）・B地点（33～94ライン）・C地点（96～139ライン）と呼称した。

表土除去および埋め戻しは、当初計画では重機で行う予定であったが、幅や段差、構造物や仮置き場といった制約から、C地点低位箇所（117～139ライン）を除き人力作業で行ったところが多い。調査中に北海道教育委員会による試掘調査の位置を3か所確認した（33f・67e・108c区）。うち67e区では、オホーツク文化期の竪穴住居跡の貼床以下に達している。

調査は東側のA地点から行った。同地区では遺構・遺物とも皆無であった。一方B地点では、当初予想よりも多数の遺構・遺物が検出された。中央部（60～76ライン）では、竪穴住居跡をはじめ遺構が密に検出され道路側にも広がることから、協議の上、道路法面中まで拡張した範囲がある。またC地点東部でも遺構が密に検出され、当初予定の範囲を延長した部分がある（96～101ライン）。C地点西部では旧河道ないし海浜の礫層が広がり、この面までを調査対象とし終了した。

遺構名は検出順に「○○号址」を付した（2018年調査の際に統一を図るため、共通の遺構種別記号への変換を行った。概要報告書や図面類などをもとに担当者（阿部）の認識で判断した。そのため、遺構種別の変更が生じたものがある）。

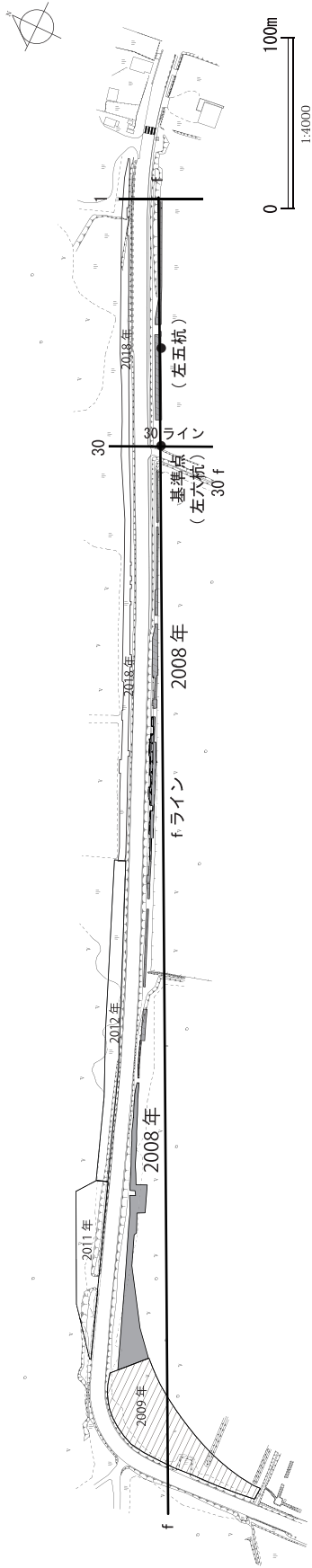
記録類について、調査範囲図・遺構平面図などは平板測量により作図した。また土層断面図・詳細遺物分布図などを作成した。遺物の取り上げは、表土・攪乱等を除いてNo.1から連続で通し番号を付し、台帳を作成した。写真撮影はリバーサル35mm・ネガカラー35mmフィルムを使用した。

(2) 発掘区の設定

発掘区の基準点は、国道334号と林野庁との用地境界杭のうち「左六」(→L6)と「左五」(→L5)とし、それを結んだ東西方向ラインを基準線の「fライン」とした。基準点L6に直交する線を「30ライン」とし、交点を「30f」とした。これを基準として5m間隔でグリッド杭を設定し、北から南へアルファベット、東から西へ算用数字を付し、これらの組み合わせで交点を呼称した。5mごとに方形区画された範囲の南東側（山側、ウトロ側）の杭を発掘区の呼称とした（他の調査年と南北方向の呼称が反対であり注意が必要）。また調査区が細長いため、南北方向はさらに1m間隔に細分した。例えば基準点のL6から南方向にg1・g2、北方向にf4・f3・f2・f1・eといったように補助的に細分している（30f4、30f3など、細分の数字は北から付されているので注意が必要）。

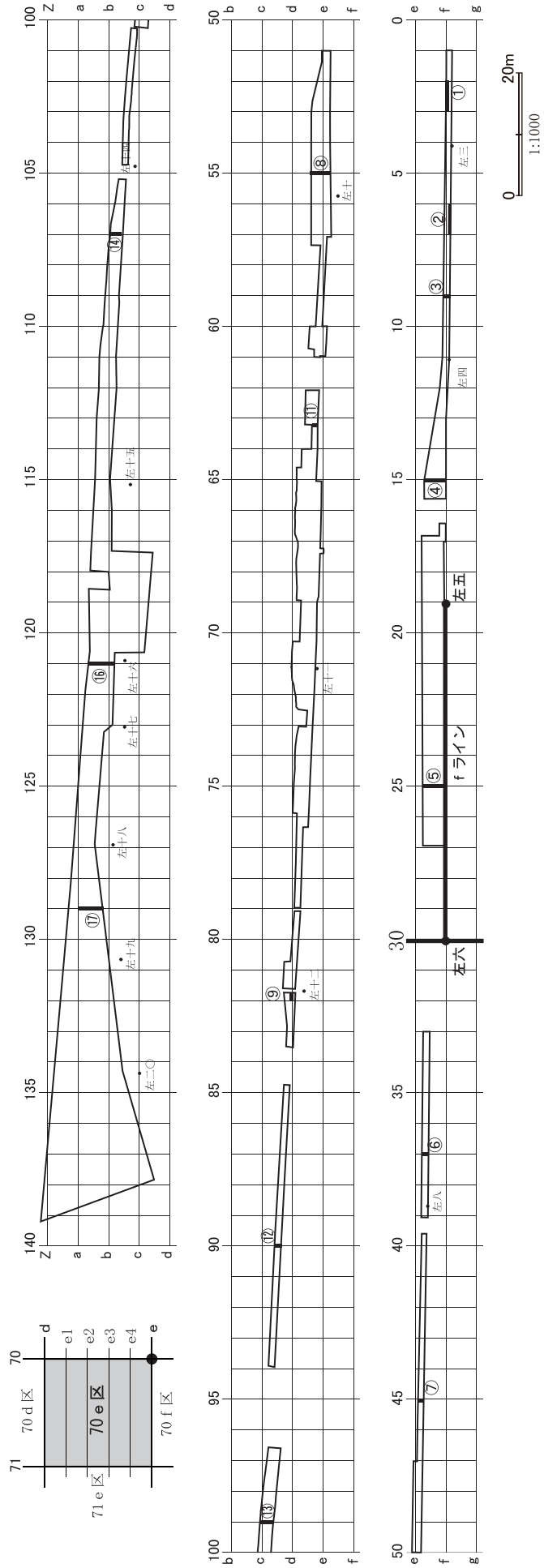
基準点の座標は、以下のとおりである。座標系は、世界測地系平面直角座標系第XⅢ系である。

〔調査区基準点〕	左六 L6 (30f)	X = -7,730.592	Y = 43,360.198
	左五 L5	X = -7,705.971	Y = 43,409.113



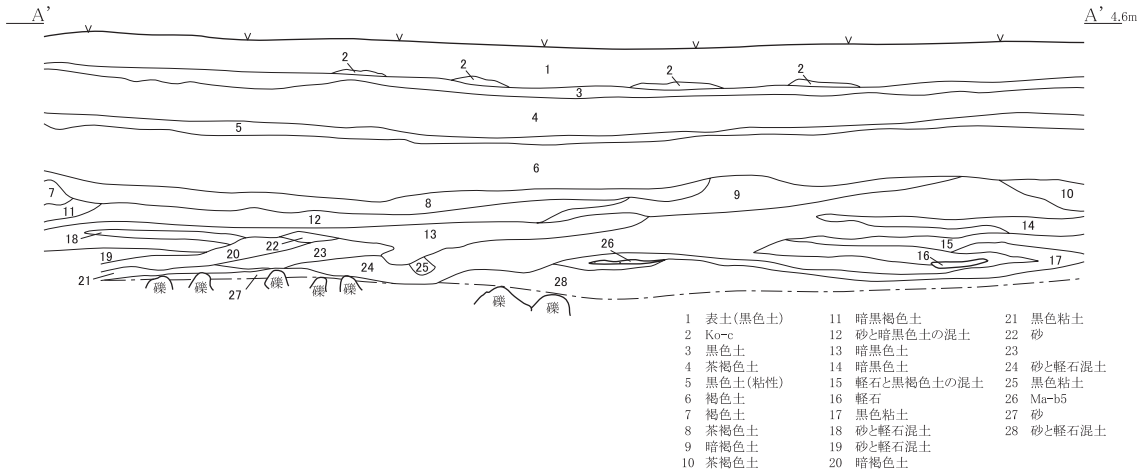
発掘区設定図

発掘区呼称

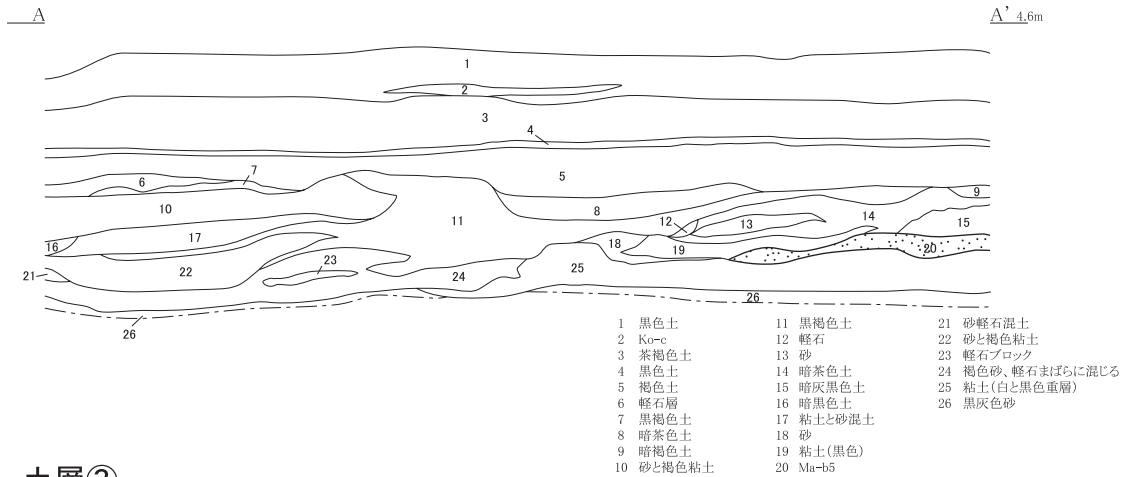


図IV-1 2008年発掘区設定図・土層断面位置

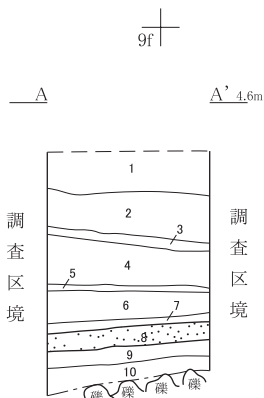
土層① (西) 3f | | 2f | (東)



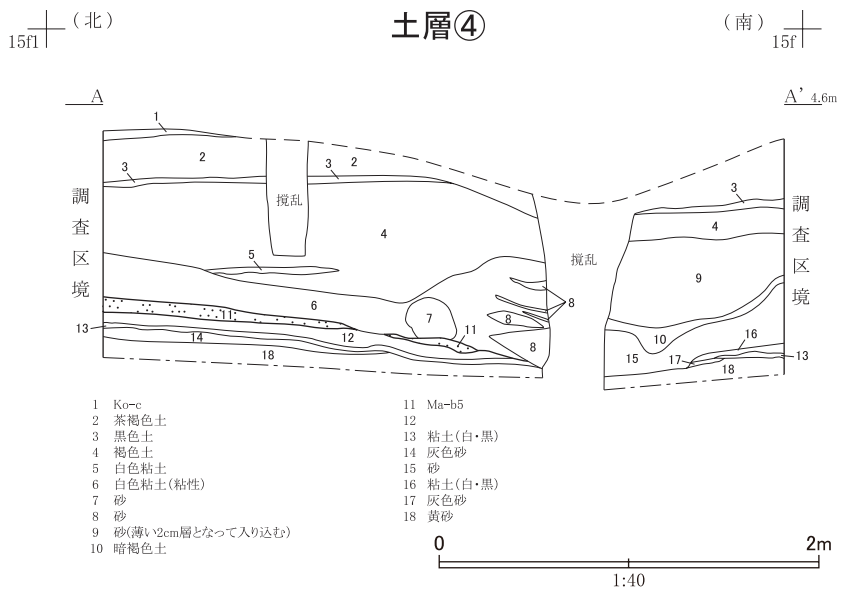
土層② (東) 6f | | 7f | (西)



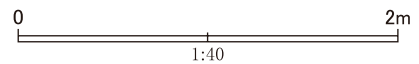
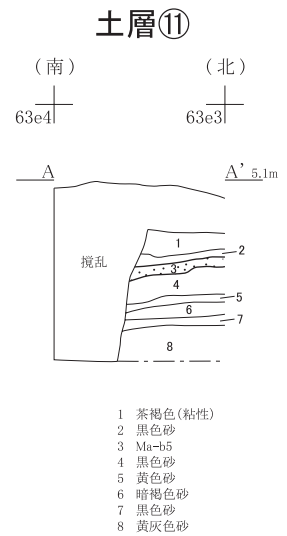
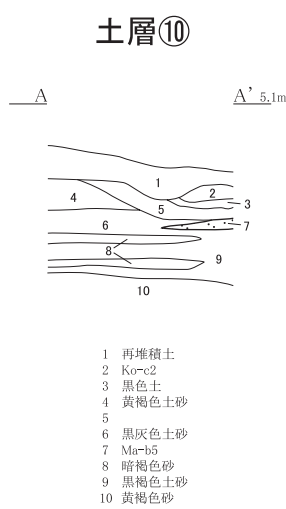
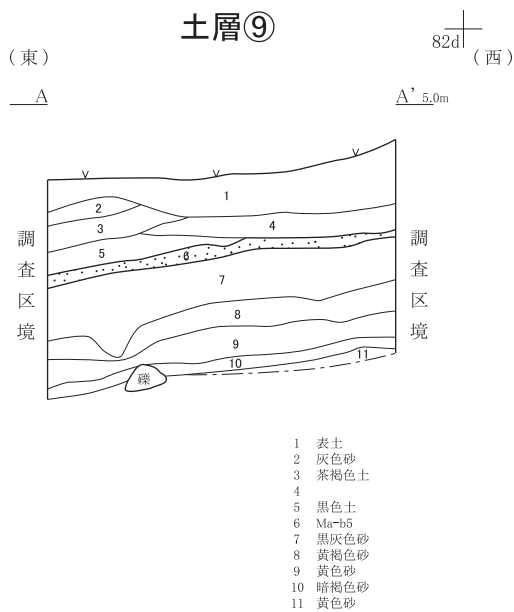
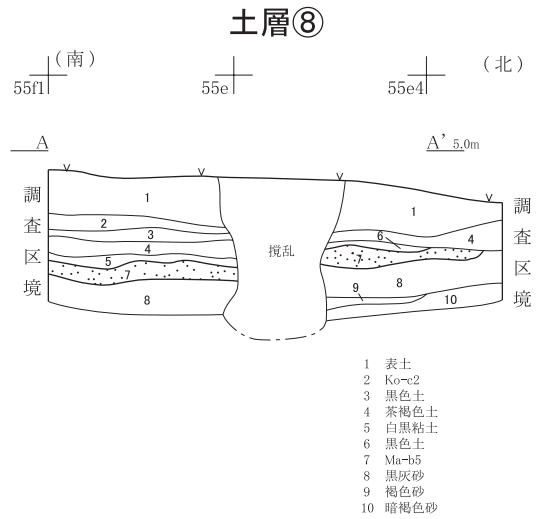
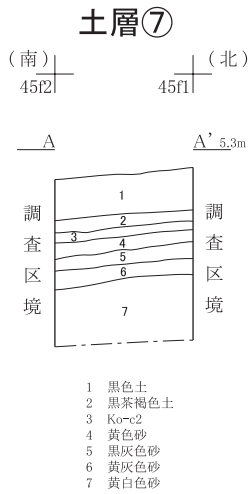
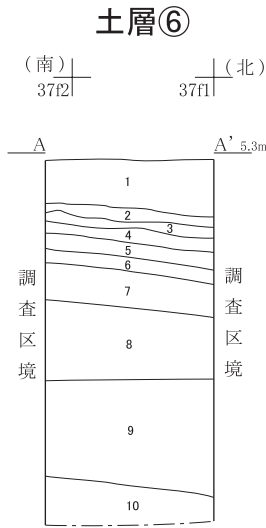
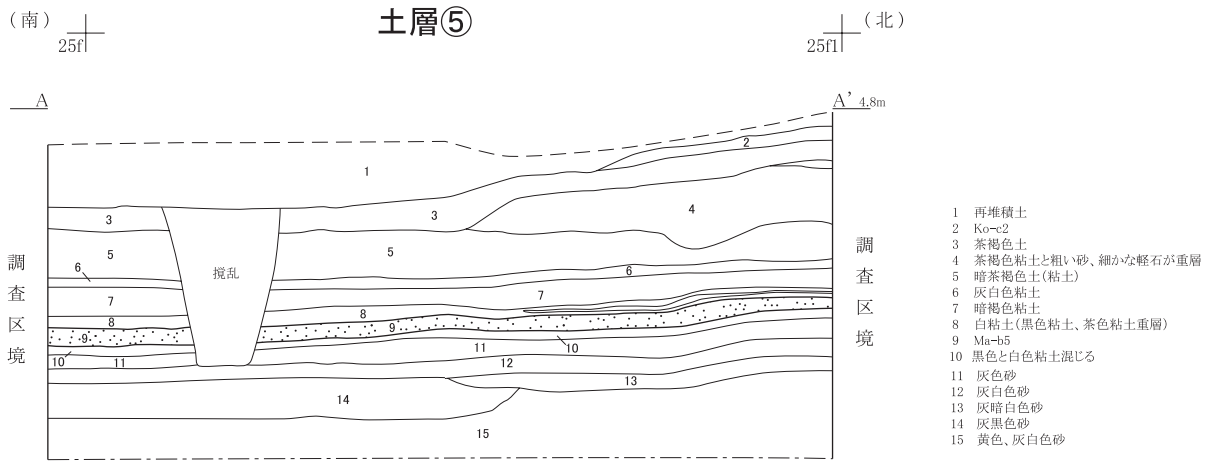
土層③



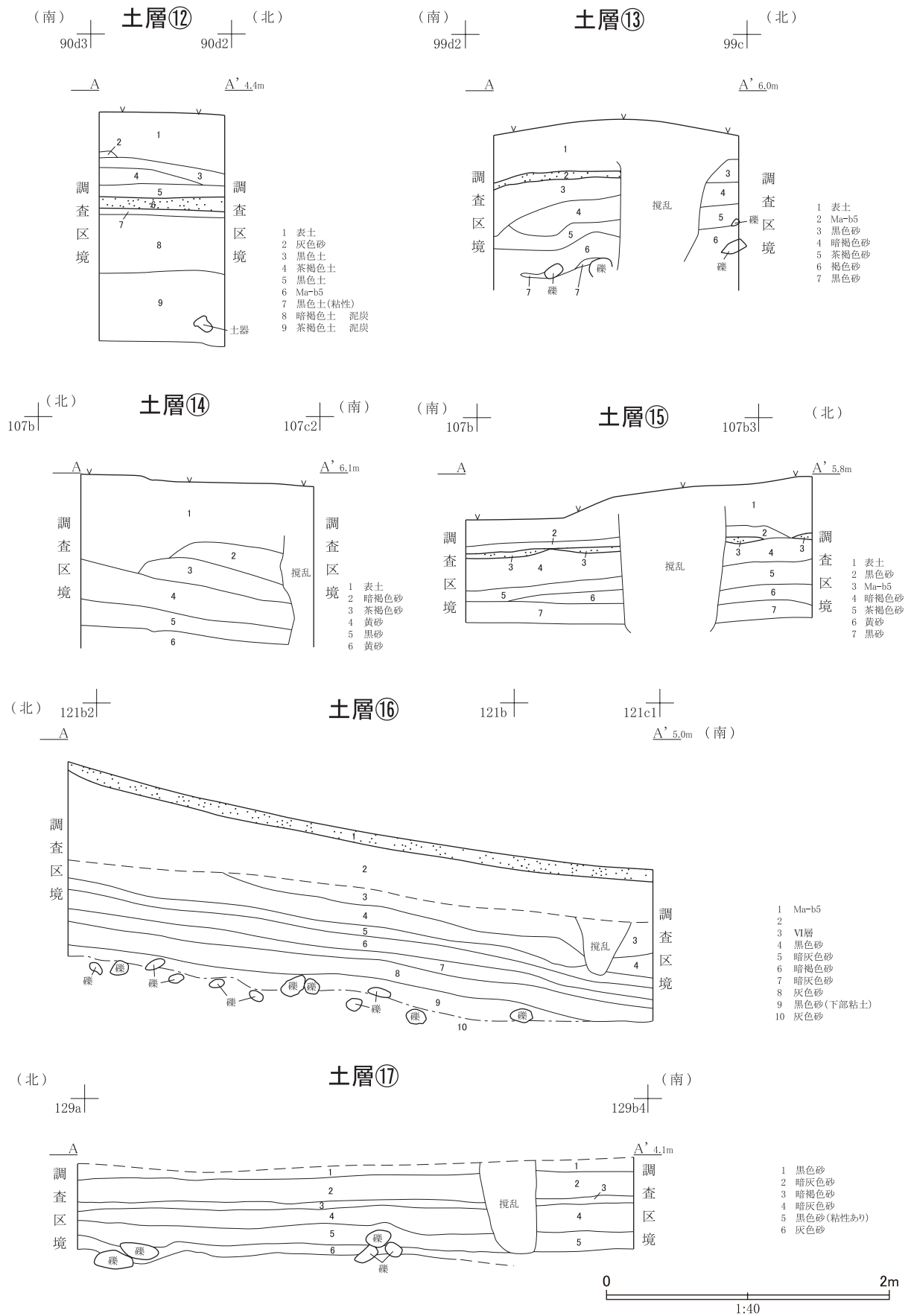
土層④



図IV-2 調査区土層断面 (1)



図IV-3 調査区土層断面(2)



図IV-4 調査区土層断面(3)

(3) 土層

II章2で記載した通り、土層の堆積が地点により異なっている。鍵層となる摩周b5火山灰の層名も地点により異なる点に注意が必要である(表II-1参照)。各地点の土層断面図を図IV-2~4に示した(A地点:土層①~⑤、B地点:土層⑥~⑫、C地点:土層⑬~⑰)。

【A地点】	【B地点】	【B地点(81付近)】	【C地点】
I層:表土	I層:表土	I層:表土	I層:表土
II層:茶褐色土	II層:樽前a火山灰	II層:樽前a火山灰	II層:黒色砂
III層:茶褐色土(砂含む)	III層:茶褐色粘質土	III層:灰色砂	III層:Ma-b5
IV層:灰褐色粘質土	IV層:黒色砂	IV層:黒色土	IV層:暗褐色砂
V層:粘土	V層:Ma-b5	V層:茶褐色土	V層:茶褐色砂
VI層:樽前a火山灰	VI層:黒灰砂	VI層:黒色砂	VI層:黄色砂
VII層:粘土(白・黒互層)	VII層:黒色土	VII層:Ma-b5	VII層:黒色砂
VIII層:灰黒砂	VIII層:黒白砂	VIII層:泥炭	VIII層:黄色砂
IX層:灰色砂	IX層:黒色砂	IX層:礫層	IX層:礫層
X層:灰黒砂	X層:黄色砂		
XI層:灰白色砂			
XII層:礫層			

(4) 調査結果の概要

調査の結果、続縄文時代宇津内II式期の墓や集石土坑を含む遺構・遺物群、オホーツク文化刻文期の集落跡を確認した。遺構を60基以上検出し、遺物は約12,800点が出土した。

【縄文時代】

調査区中央西部(C地点)で晩期緑ヶ岡式期の竪穴住居跡2軒を検出した。調査区西部の礫群では、手稲式と晩期の土器片が出土した。

【続縄文時代】

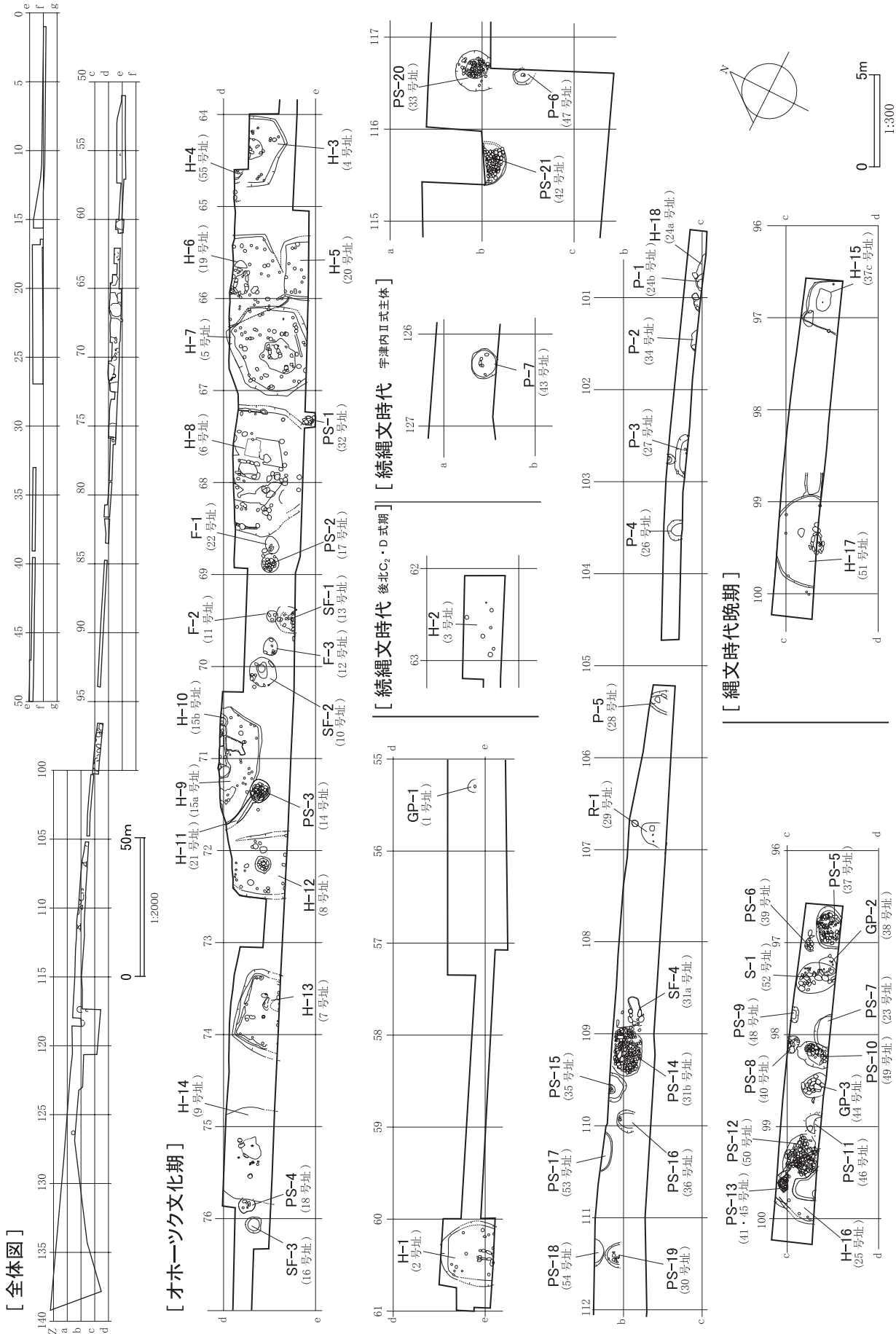
調査区中央~西部(C地点)に遺構が主体的に分布する。竪穴住居跡2軒、柱穴列1か所、土坑墓2基、土坑7基、集石土坑17基、石組炉1基、集石1か所、ベンガラ製作址1か所を検出した。土坑墓はベンガラが撒かれ糊状の人骨が残存するものや、大型土器が倒立するものがある。

出土土器は、点数では宇津内IIb式、後北C₂・D式が多いが、完形・復元個体では宇津内IIa式が目立つ。

【オホーツク文化期】

調査区中央部(B地点)に遺構が集中する。竪穴住居跡13軒(建て替え等の重複含む)、土坑墓1基、集石土坑4基、石組炉3基、焼土3か所を検出した。竪穴住居跡は、大型(7m以上)で五・六角形を呈し貼床・溝などの構造がある典型的なものがある一方、やや小型(4~5m)で多角形のほか方形に近い形状とみられるものもある。前者には石組炉があるのに対し、後者には床面中央付近に集石土坑があるものが目立つ。また、炉からはサケ科を主体とした魚骨が多く検出されており、海獣類のみに依拠しない生業の一端を示す好資料となっている。

遺物は、竪穴住居跡および周辺からの出土が多い。土器は刻文土器が大部分であるが、擬縄貼付文土器も含まれている。



図IV-5 2008年調査区遺構位置図

2 遺構の調査とその遺物

遺構の記載内容は、概要報告書（斜里町教育委員会2009）をもとに、図・写真等から加筆した。

a 縄文時代の遺構

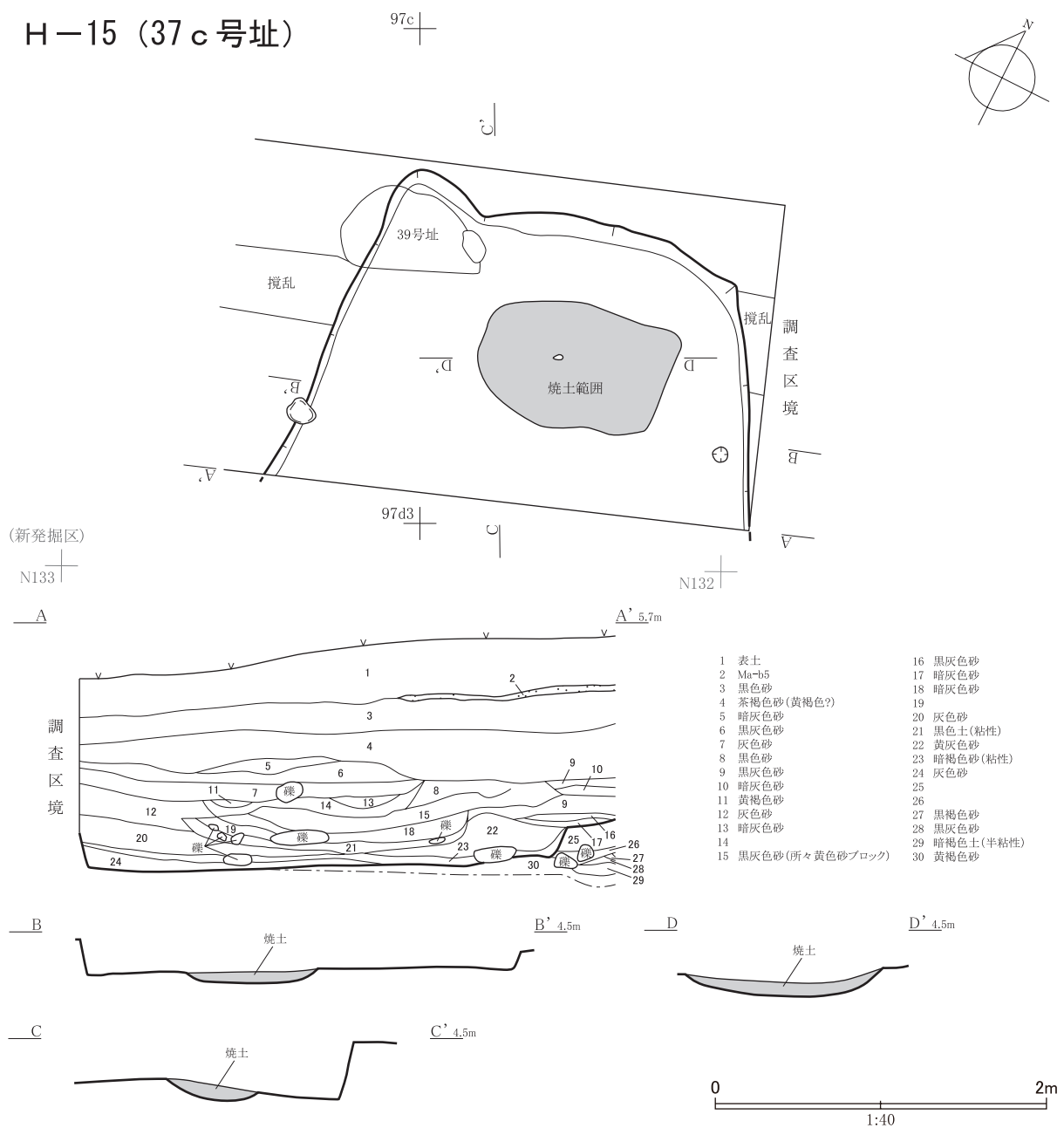
(1) 竪穴住居跡

2軒（H-15・17）を検出した。時期は、構築面や出土遺物から縄文時代晩期後葉～続縄文時代初頭である。

H-15 (37c号址) (図IV-6・7 表IV-1・2 図版50)

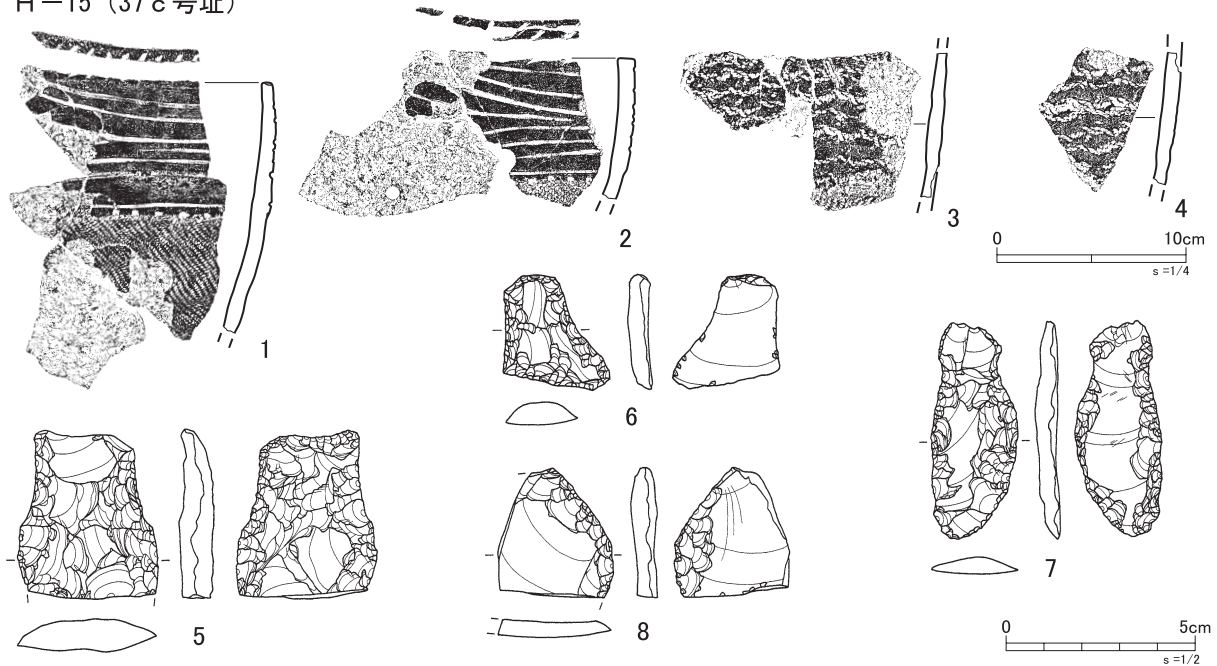
不整形を呈すると推測される。床面の下は礫層で、砂で覆って床面を構築している。柱穴は検出できなかった。床面北寄りに1.2×0.7m、厚さ0.08mの楕円形の焼土を検出した。当遺構の北西にPS-6 (39号址)、中央にPS-5 (37号址) が上位に重複する。

H-15 (37c号址)



図IV-6 H-15 (37c号址)

H-15 (37c号址)



図IV-7 H-15 (37c号址) 出土の遺物

掲載遺物：1～4は縄文時代晩期後葉～続縄文時代初頭の緑ヶ岡式併行。1・2は口縁部が無文地で、波頂部に向かう弧線と横走沈線が多条に施されている。縄端による刺突列以下にRL縄文が施文されている。3・4は口縁部文様帯に綾線文が間隔をあけて施され、弱い段以下にLR縄文がみられる。

5～8はナイフ。5は両面全体に加工が施されるもので、矩形の柄部が作出されている。6は側縁からのやや平坦な加工により靴形に成形されている。7はつまみ付きナイフで、半両面加工が施され素材面を大きく残している。8は破損品で、右側縁で短い平坦加工が両面に施されている。

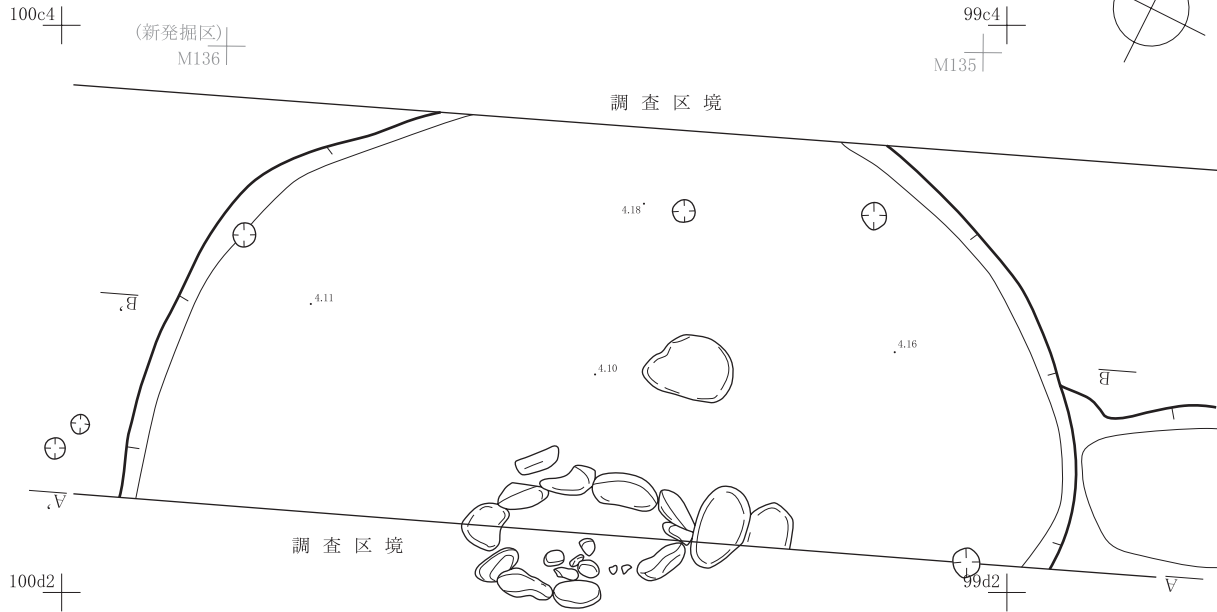
H-17 (51号址) (図IV-8・9 表IV-1・2 図版4・21・50)

隅丸方形を呈すると考えられる。住居址中央付近で、1.7×0.9mの石組炉を検出した。縄文晩期の緑ヶ岡式土器が出土している。柱穴は4基確認された。東側の一部はN T Tのケーブルの埋設によって攪乱している。上部にH-16 (25c号址)、P S-12 (50号址) が検出されている。

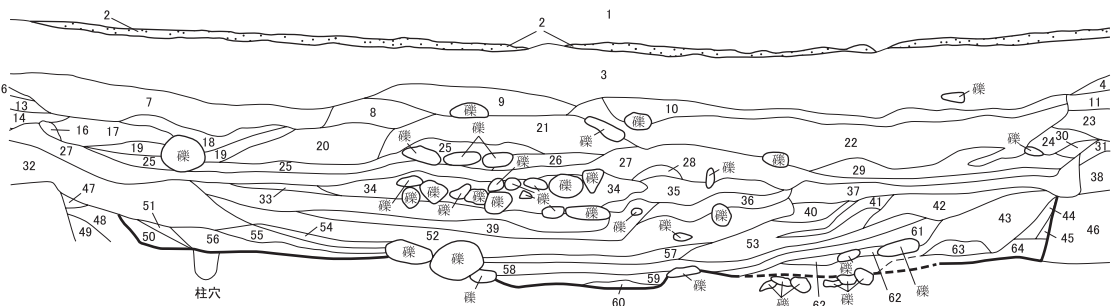
掲載遺物：1～4は晩期後葉の土器。1は平底で、底面にも縄文が施文されている。2は口唇上に刻み、口縁部に横走沈線がみられる。3は(縄端)刺突列がみられる。4は底部片。

5は石鏃。凹基で縁辺を中心とした加工が施されている。6はナイフ。左側縁に刃部加工がなされ、素材のバルブの高まりを除去するような平坦剥離が裏面上部に施されている。7～9はスクレイパー。7・8は両側縁の加工により下端が尖る形状となっている。9は縁辺全体に短い加工が見られ、下縁は裏面側に加工が施されている。10～12はRフレイク。いずれも縁辺の一部に細かな加工が施されている。13は石槍。柳葉形を呈するが、厚みが非常に大きい。正面に原石面を残す。両側縁の加工で中央の稜を超えるものは少ない。そのため加工の度に厚みが減少せず、最終的な加工は縁辺が鈍角化するほど執拗に行われ、激しい摩耗がみられる。

H-17 (51号址)



A' 5.70m



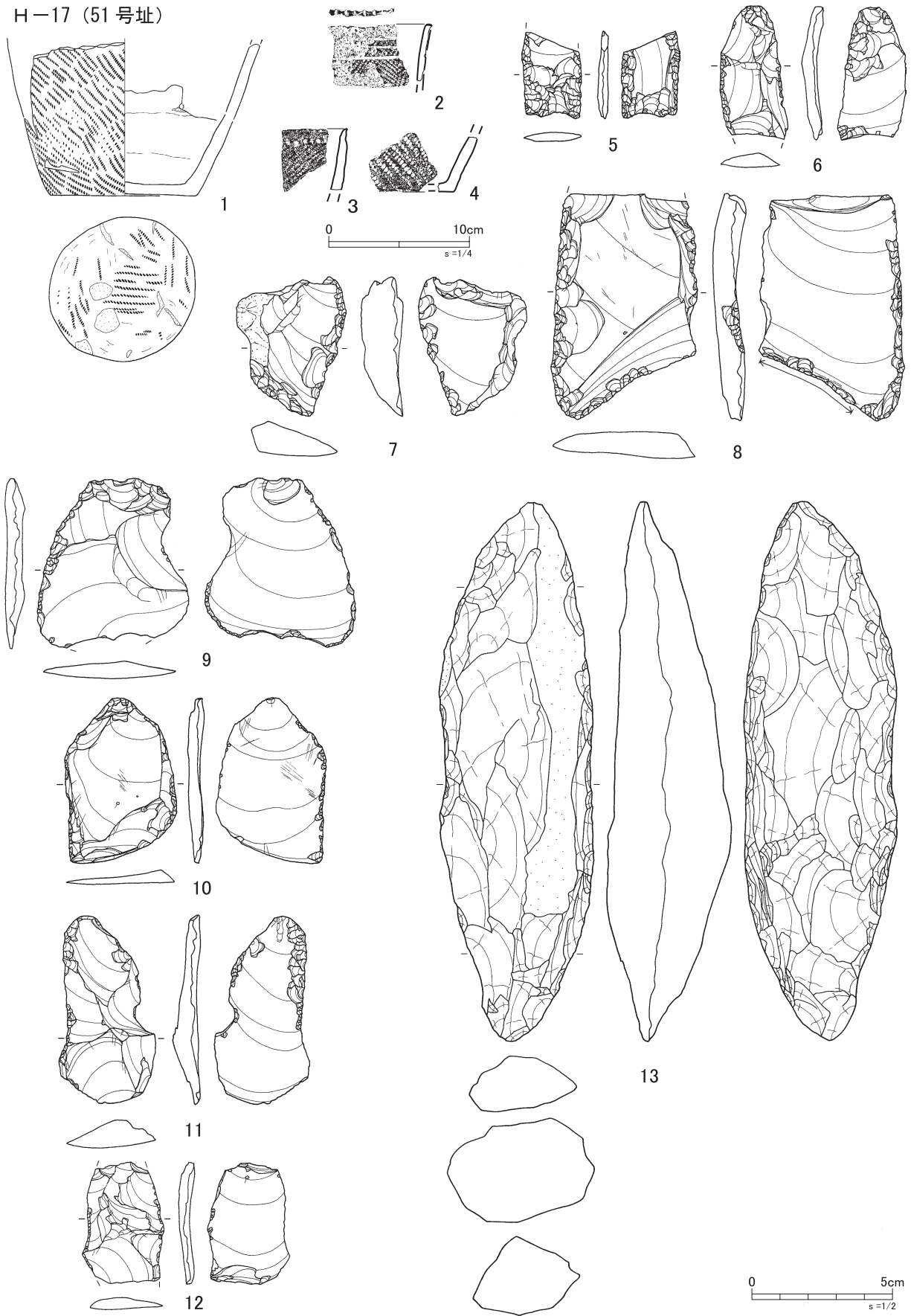
- [H-17]
- | | | | | | |
|---------|---------|-----------------------|----------|-----------------|----------|
| 1 表土 | 4 黒褐色砂 | 16 黒褐色砂(木炭粒多量) | 31 暗灰色砂 | 46 灰色砂 | 61 灰色砂 |
| 2 Ma-b5 | 5 暗茶褐色砂 | 17 暗褐色砂 | 32 茶褐色砂 | 47 暗褐色砂 | 62 黒褐色粘土 |
| 3 黒色砂 | 6 黒灰色砂 | 18 黒色砂 | 33 黒色砂 | 48 暗灰色砂 | 63 黒褐色粘土 |
| | 7 茶褐色砂 | 19 暗灰色砂 | 34 木炭 | 49 汚れた灰色砂 | 64 灰色砂 |
| | 8 黒褐色砂 | 20 灰色砂 | 35 黒灰色砂 | 50 黒色砂 | |
| | 9 | 21 茶褐色砂 | 36 暗灰色砂 | 51 黒褐色砂 | |
| | 10 | 22 黒褐色砂(1~2cm大の木炭混じる) | 37 黒暗灰色砂 | 52 黒褐色砂 | |
| | 11 黒灰色砂 | 23 暗褐色砂 | 38 | 53 暗褐色砂 | |
| | 12 暗灰色砂 | 24 | 39 暗褐色砂 | 54 黒色砂 | |
| | 13 暗褐色砂 | 25 黒褐色砂(木炭粒多量) | 40 灰色砂 | 55 黒色砂 | |
| | 14 黒灰色砂 | 26 木炭 | 41 黒色砂 | 56 黒色砂 | |
| | 15 黒色砂 | 27 茶褐色砂(木炭少ないが混じる) | 42 茶褐色砂 | 57 暗灰色砂 | |
| | | 28 | 43 暗灰色砂 | 58 黒色砂(木炭、骨) | |
| | | 29 暗灰色砂 | 44 | 59 灰色砂、伊(汚れている) | |
| | | 30 黒褐色砂 | 45 | 60 木炭 | |



0 2m
1:40

図IV-8 H-17 (51号址)

H-17 (51号址)



図IV-9 H-17 (51号址) 出土の遺物

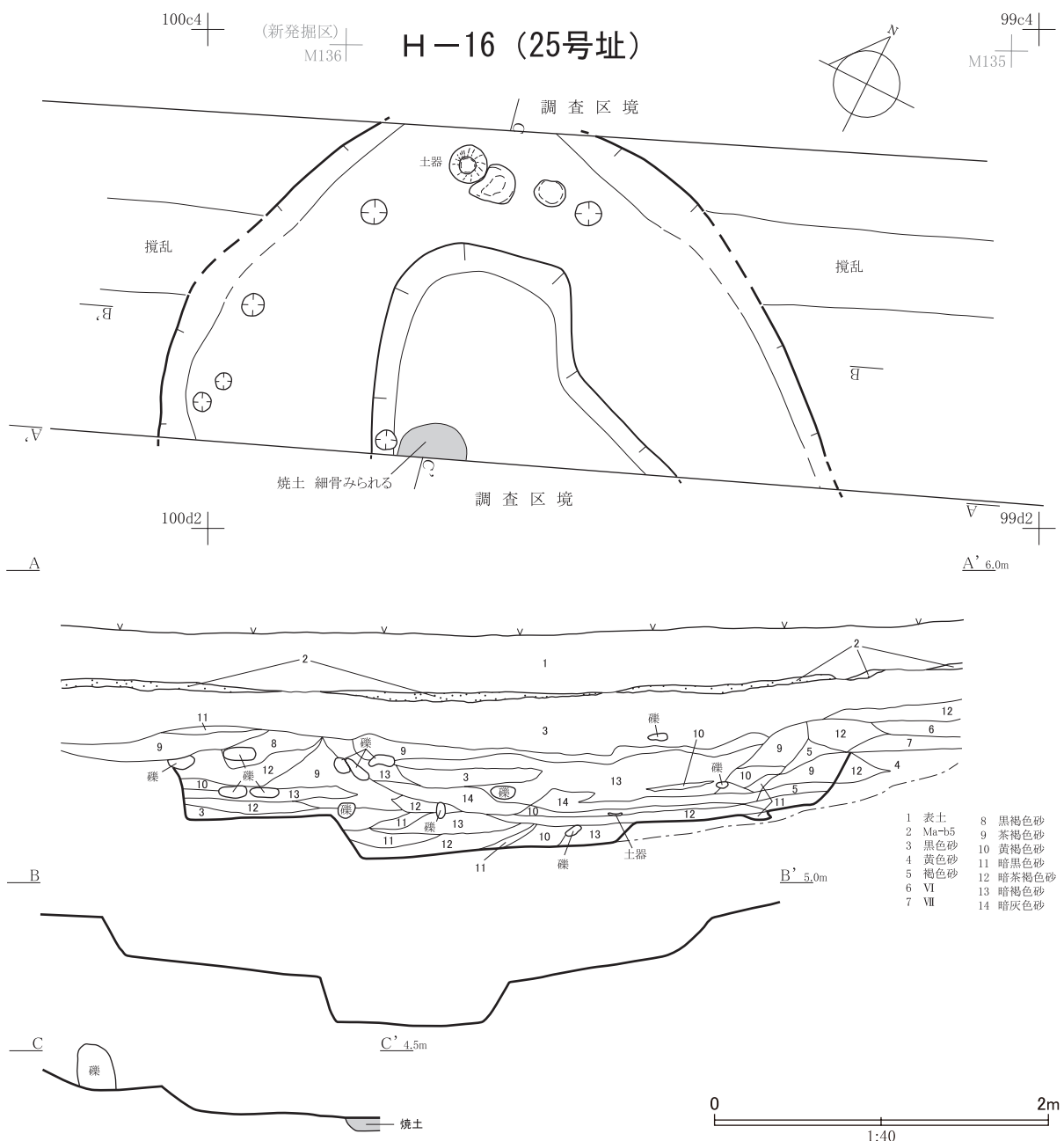
b 続縄文時代の遺構

(1) 竪穴住居跡

2軒（H-16・18）を検出した。時期は、構築面や出土遺物から宇津内Ⅱ a 式期である。

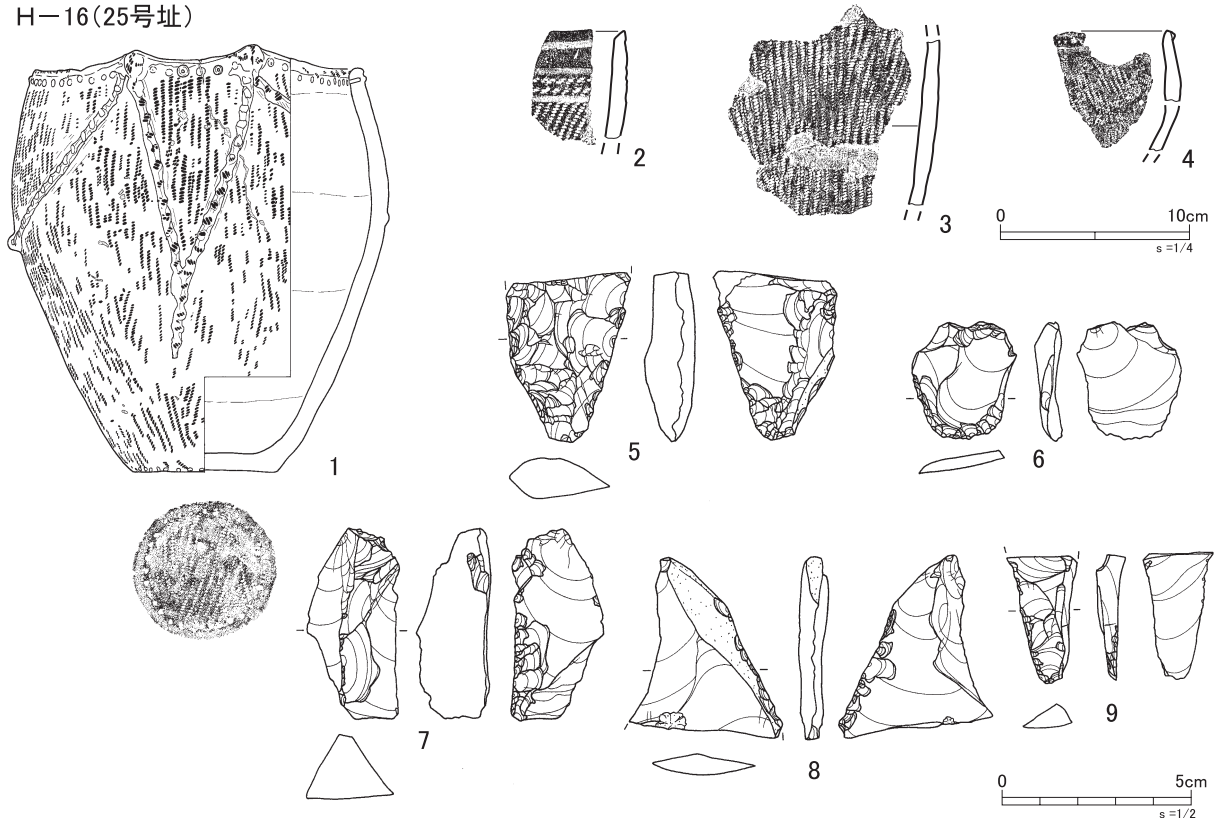
H-16 (25号址) (図IV-10・11 表IV-1・2 図版21・50)

不整形円形を呈すると考えられ、南・北方向に延びる。中央部が不整形に窪み、周囲がテラス状の構造になっている。中央部のやや西側に0.4×0.3mの焼土を検出し、骨片が数点出土している。また北西側のテラス状の床面から、大型の礫に隣接して宇津内Ⅱ a 式土器が倒立した状態で出土した。上位のPS-12 (50号址)、下位のH-17 (51号址)とは西側で切り合う。また北側の上部にはPS-13 (45号址)が検出されている。柱穴は東側が不明であるが、西・北側では壁に沿って巡っている。



図IV-10 H-16 (25号址)

H-16(25号址)



図IV-11 H-16 (25号址) 出土の遺物

掲載遺物：1は上記の倒立出土の宇津内Ⅱa式。亀裂入りだが完形である。2個一對の貼瘤状の突起が対面する。突起を起点に擬縄貼付文がV字をえがく。口縁部に径の小さな突瘤文がめぐる。底面にも自縄自巻の縄文が施文されている。内面上半部に黑色物質が多量付着している。2～3は続縄文時代前半の土器。2は3本の凹線が横走り、一部地文にかかる。4は擬縄貼付文がみられる。

5はナイフ。上半部が欠損している。半両面加工が施され、裏面に大きく素材面を残す。6はスクレイパー。下端部に円弧状の加工がある。7～9はRフレイク。7は裏面にやや長い平坦加工が施されている。8は右側縁に細かな両面加工が施されている。9は下端部付近の両側縁に加工がある。

H-18 (24a号址) (図IV-12 表IV-1・2 図版21・50)

調査区内では北側の0.4m幅しか検出しておらず、主体部は南側の調査区外とみられる。住居址としたが、用途は異なるかもしれない。また円形の土抗が重複し、別の遺構とした(P-1・24b号址)。

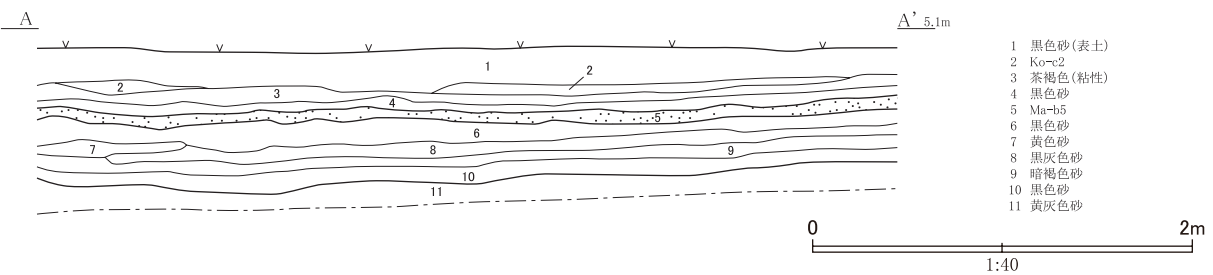
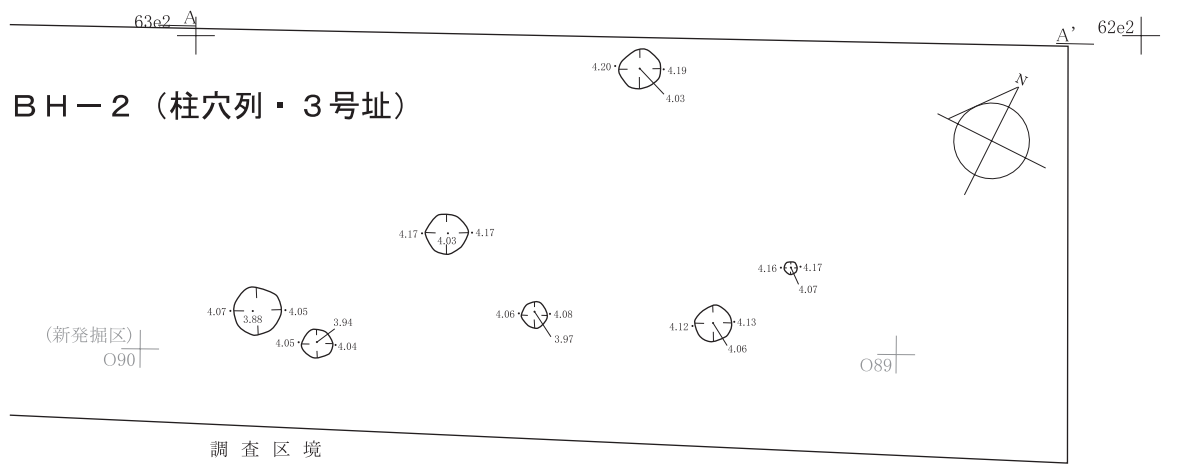
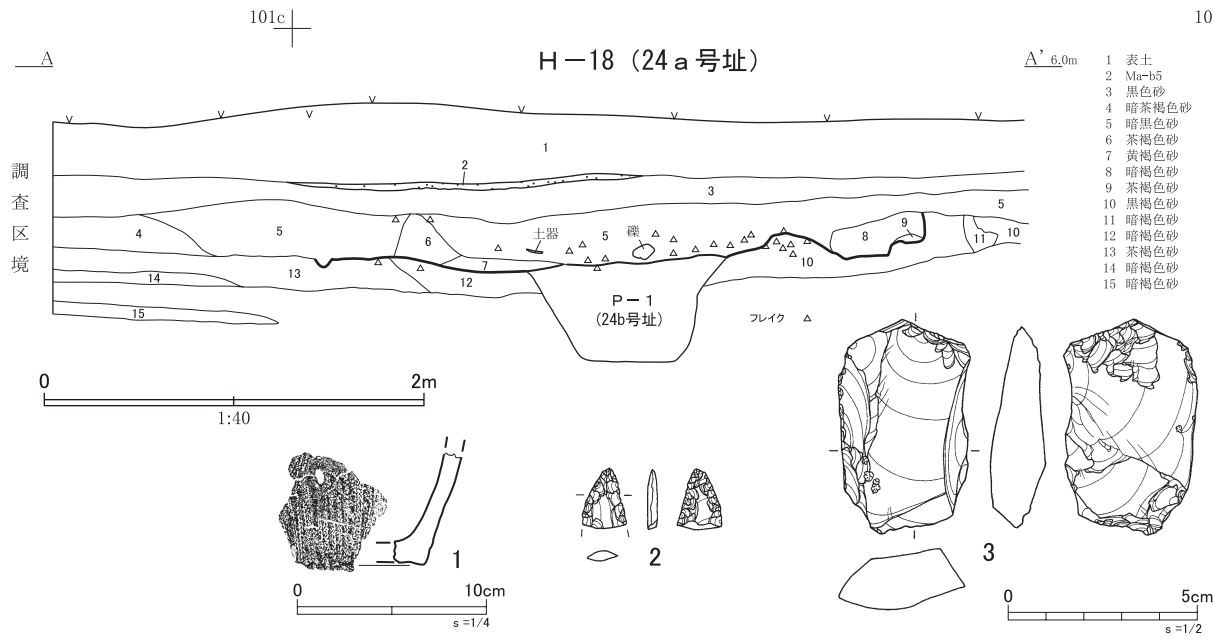
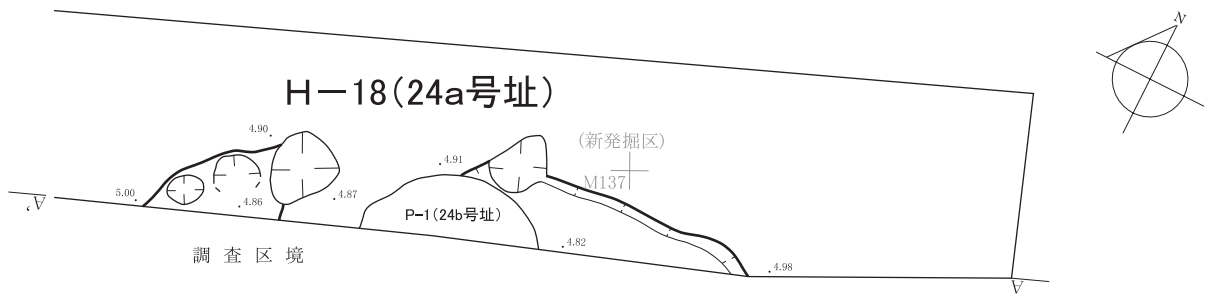
掲載遺物：1は宇津内Ⅱ式の底部。上げ底で、文様は異方向の撚糸が組み合わせられている。

2は石鏃。下半部が欠損している。縁辺を中心に細かな加工が施されている。3は石核。正面で縦長剥片が剥離されている。裏面は横方向の石核調整により平坦化している。

(2) 柱穴列

BH-2 (3号址) (図IV-12 表IV-1・2 図版21)

3×1.8m範囲に、7個の柱穴が検出された。柱穴は3基ずつ直列するがやや不規則な並びで、用途は不明である。柱穴の確認面で後北C₂・D式土器が出土している。



図IV-12 H-18 (24a号址)・BH-2 (3号址)

(3) 土坑墓

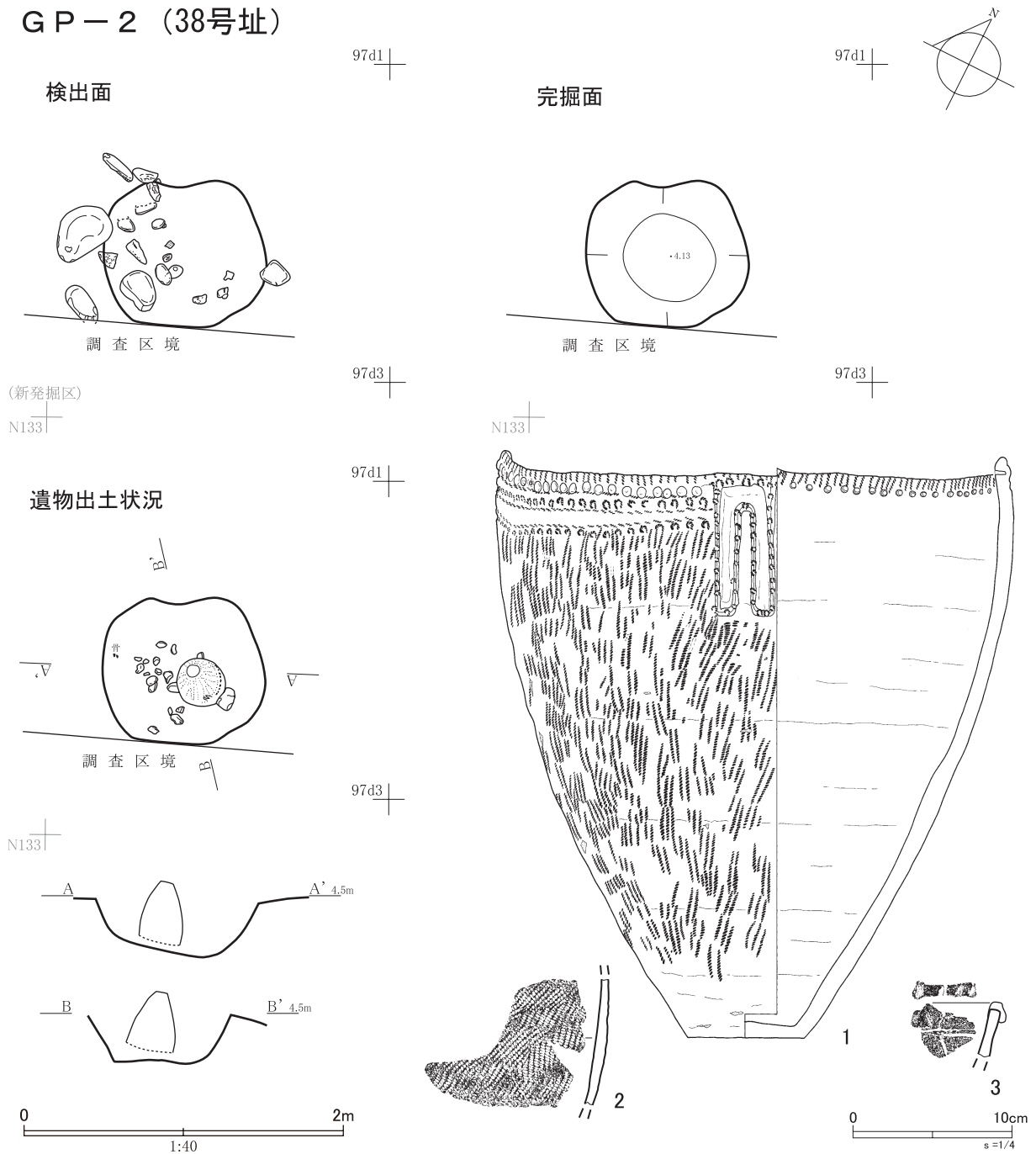
2基 (GP-2・3) を検出した。時期は、構築面や出土遺物から宇津内Ⅱ a 式期である。

GP-2 (38号址) (図IV-13 表IV-1・2 図版22・50)

おおむね円形を呈している。上位にはやや大型の礫がまとまっていた。坑底付近からは、東側に完形の宇津内式土器が倒立して出土し、西側隅で骨片を検出した (取り上げ困難)。

掲載遺物: 1は宇津内Ⅱ a 式の大型深鉢。亀裂入りだが完形である。大2+小2単位で、逆U字状の擬縄貼付文のある面と波頂部のみのある面がある。縄刻文・突瘤文・縄端刺突がめぐる。2は胴部片。3は縄文晩期のものか。

GP-2 (38号址)

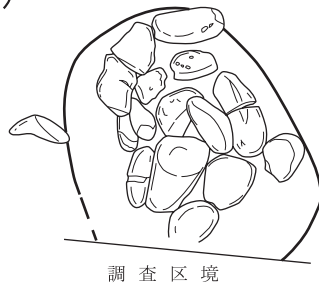


図IV-13 GP-2 (38号址)

GP-3 (44号址)

99d1

検出面①



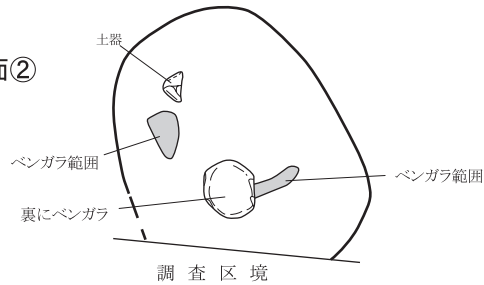
99d2

(新発掘区)

N135

99d1

検出面②

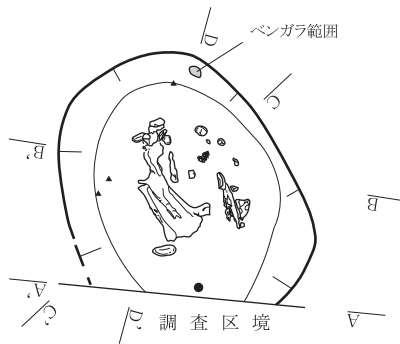


99d2

N135

99d1

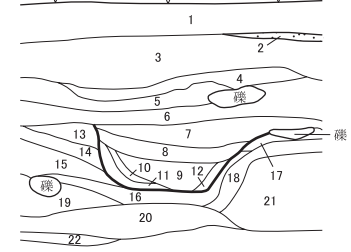
完掘面



99d2

N135

A A' 5.5m



[GP-3]

- | | | |
|---------|---------|---------|
| 1 表土 | 13 暗褐色砂 | 7 暗灰色砂 |
| 2 Ma-b5 | 14 暗灰色砂 | 8 黒色砂 |
| 3 黒色砂 | 15 黄褐色砂 | 9 茶褐色砂 |
| 4 暗茶褐色砂 | 16 黒灰色砂 | 10 暗灰色砂 |
| 5 茶褐色砂 | 17 暗褐色砂 | 11 黒灰色砂 |
| 6 黒灰色砂 | 18 黒色砂 | 12 暗灰色砂 |
| | 19 暗灰色砂 | |
| | 20 茶灰色砂 | |
| | 21 茶褐色砂 | |
| | 22 黒色砂 | |

N134

B B' 5.0m



C C' 5.0m



D D' 5.0m



N134

拡大図 1/20



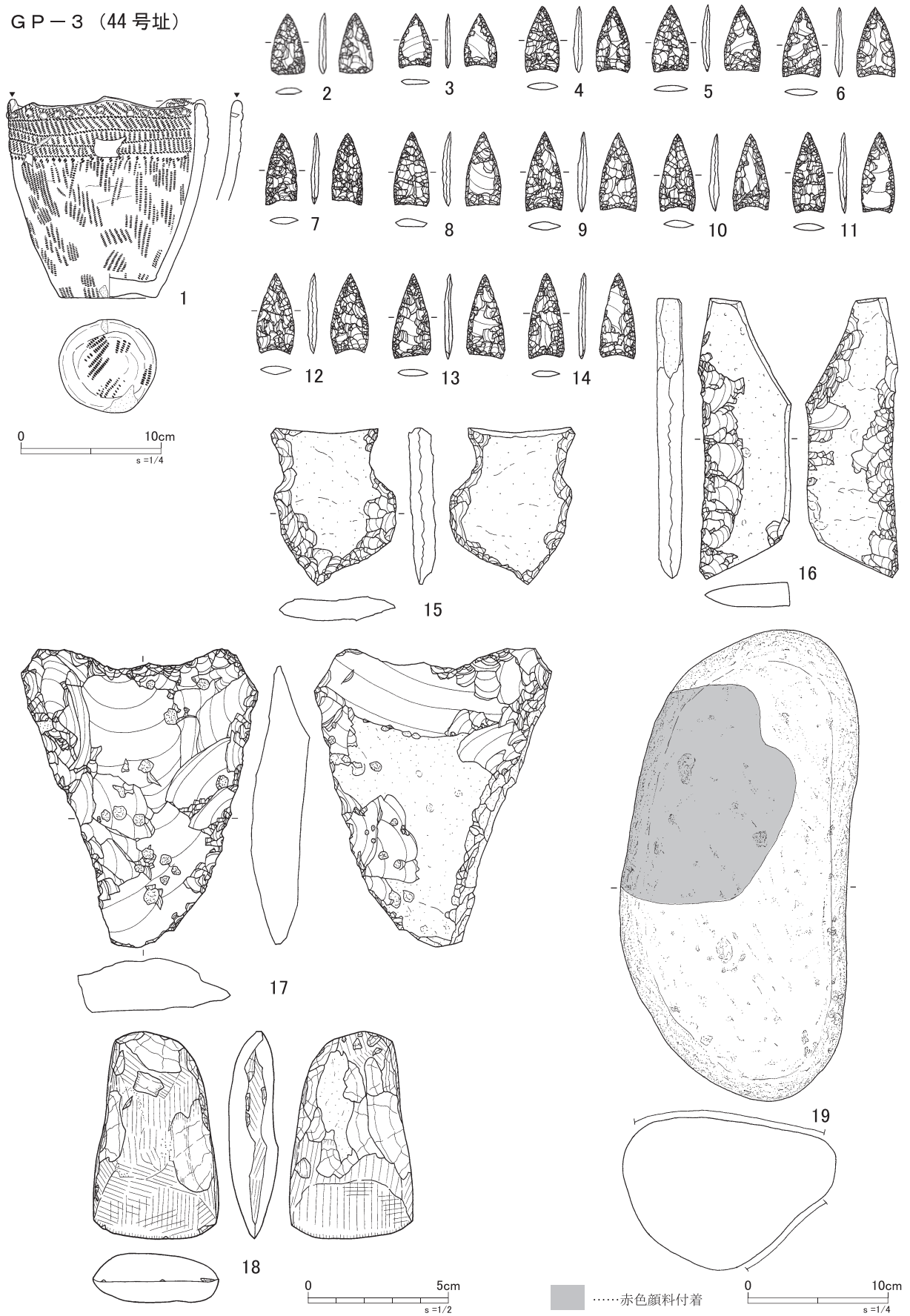
0 1m (S=1/20)

N134

0 2m 1:40

図IV-14 GP-3 (44号址)

GP-3 (44号址)



図IV-15 GP-3 (44号址) 出土の遺物

GP-3 (44号址) (図Ⅳ-14・15 表Ⅳ-1・2 口絵3、図版22・51)

楕円形の暗灰色のまとまりを検出した。掘り下げたところ、掘込み面の下部から大型礫の集石が出土した。これを取り上げたところ、西側隅からベンガラのまとまりを検出した。この面で宇津内式土器片が出土した。土器を取り上げた段階で人骨(糊状主体)が検出され、東側から石鏃、珪藻土のかたまり、剥片が出土した。また坑底面からサメ類の歯が1点出土した(Ⅷ章3)。ベンガラは、ほぼ全面に撒布されている。長軸は北西-南東方向で、頭位は北西である。

掲載遺物: 1は宇津内Ⅱa式のやや小型の深鉢形土器。口縁の一部を欠くものの、完形に近い。大4+小4の波頂部がある。突瘤文・縄線文・縄刺突がめぐる。やや上げ底の底面にも縄文が施文されている。内外面上部に炭化物が多量に付着し、突瘤の刺突が被覆する部分がある。

2~14は石鏃。2は平基で、それ以外はいずれも凹基。縁辺はやや湾曲するものが大半である。素材面が残存するものが多く、加工が全面に及ぶものは7・9・12のみである。15・16はナイフ。いずれも薄手の原石の縁辺部のみを加工したものである。15は上部の両側縁にノッチ状の加工が施され、つまみ部を作出している。16は左側縁に両面加工が施され、鋭い縁辺となっている。17は石核。剥片素材で、素材腹面を主要剥離面として横長剥片を剥離している。18は石斧。剥離による粗い成形の後、全面的な研磨により成形し両刃の刃部が作出されている。19はすり石。正面全体と裏面の一部に擦り面が見られる。正面左側にベンガラが付着している。

(4) 土坑

7基(P-1~7)検出した。時期は、構築面や出土遺物から宇津内Ⅱa~Ⅱb式期とみられるが、一部後北C₂・D式期が含まれているかもしれない。

P-1 (24b号址) (図Ⅳ-16 表Ⅳ-1)

H-18(24a号址)において、推定0.8mほどで深さ0.6mの円形(約半分は調査区外)の掘込みが検出されている。住居址とは別な遺構の可能性あることから、土坑とした。

P-2 (34号址) (図Ⅳ-16 表Ⅳ-1)

楕円形と推測される土坑の一部を検出した。深さは0.3mである。

P-3 (27号址) (図Ⅳ-17 表Ⅳ-1・2 図版51)

楕円形と推測される土坑の一部を検出した。深さは0.5m。また北側に落ち込みを検出した。遺物は主に覆土から出土しており、土器が3点、石器等が11点ある。

掲載遺物: 1は楔形石器。原石面を大きく残す剥片を素材としている。上下端の他に横方向の対向する剥離も見られる。2はたたき石。下端部に敲打痕が見られる。

P-4 (26号址) (図Ⅳ-17 表Ⅳ-1・2 図版22・51)

円形と推測される。深さは0.20mで、炭化物が検出されている。遺物は主に覆土から出土しており、土器が2点(宇津内Ⅱb式)、石器等が9点ある。

掲載遺物: 3は石鏃。凹基で細身の三角形、両側縁が直線的な形状である。裏面に素材面が残る。4・5はRフレイク。2点とも両面の一部に細かな加工が施されている。

P-5 (28号址) (図Ⅳ-18 表Ⅳ-1・3 図版22・51)

楕円形と推測され、深さは0.25mである。253点の遺物が出土しており、特に坑底から黒曜石の細片が233点出土した。また遺構の西側からベンガラが付着した長さ25cm、幅15cmほどの長楕円形の礫が出土している。土器は坑底付近に縄文晩期のものがあるが、埋土からは宇津内Ⅱ式も少数出土している。

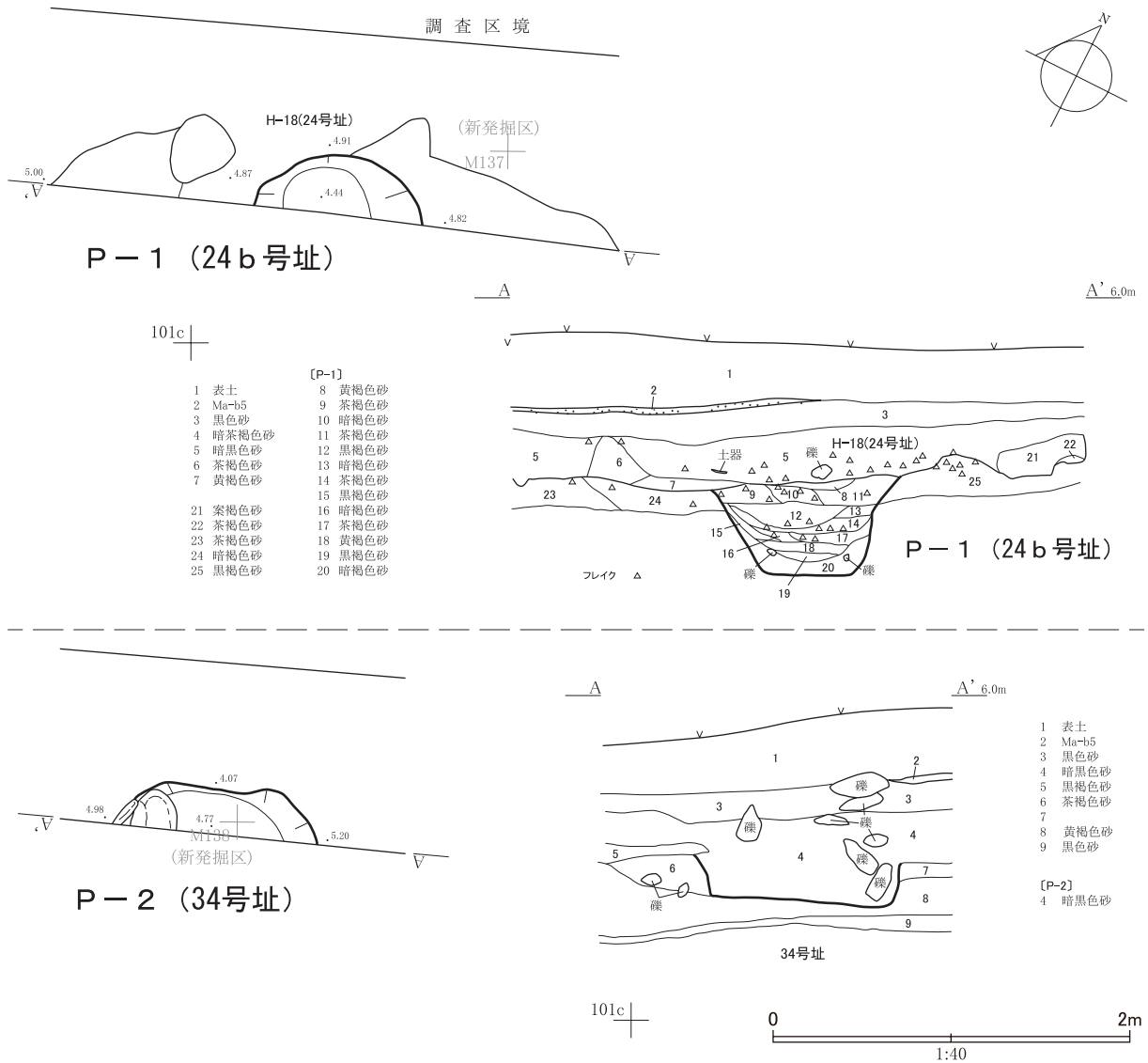
掲載遺物：1・2は宇津内Ⅱb式とみられる。1は口唇直下に擬縄貼付文、口縁部に貼瘤状の貼付文がある。2は上げ底。3はナイフ。両端が尖るように両面加工が施されているが、形状のバランスが整っていない。4・5はRフレイク。4は両面の一部に細かな加工が施されている。5は左側縁の下半部に細かな加工が施されている。6はベンガラ付着礫。表裏面とも多量のベンガラが付着している。

P-6 (47号址) (図IV-18 表IV-1・3 図版22)

楕円形を呈すると推測され、深さは0.2mほどである。中央部の覆土中から、やや大型の礫が2個出土し、周囲は炭化物が密に詰まっている。

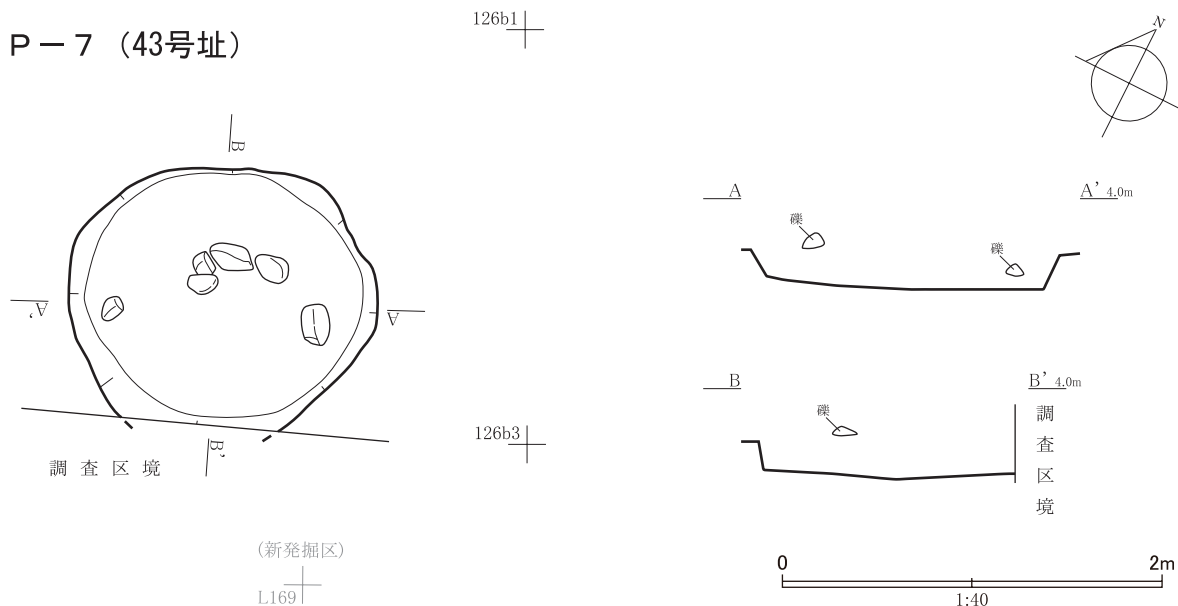
P-7 (43号址) (図IV-19 表IV-1・3 図版22)

ほぼ円形を呈し、深さは0.2m。土抗中から礫6点、黒曜石の細片が3点出土している。また炭化物も検出した。



図IV-16 P-1・2 (24b・34号址)

P-7 (43号址)



図IV-19 P-7 (43号址)

(5) 集石を伴う土坑

礫集中を含む土坑・集石土坑・集石炉とみられる土坑を17基 (P S - 5 ~ 21) 検出した。時期は、構築面や出土遺物から宇津内Ⅱ a ~ Ⅱ b 式期が主体で、一部後北 C₂・D 式期が含まれるかもしれない。

P S - 5 (37 a・b号址) (図IV-20 表IV-1・3 図版23・51)

不整楕円形を呈している。上位は37 a 号址、下位は37 b 号址として調査した。集石の表面には、炭化物がタール状に付着している。また、被熱によって亀裂が入っている礫も見られ、集石中から炭化物が多量に出土している。遺物は主に集石下から出土しており、土器が10点 (宇津内Ⅱ a・Ⅱ b 式)、石器等が7点ある。

掲載遺物: 1はナイフ。両面全体に加工が施されるもので、尖頭形に成形されている。

P S - 6 (39号址) (図IV-20 表IV-1・3)

P S - 5 (37 a・b号址)、H-15 (37 c号址) の北西で検出された遺構である。円形を呈していると推測される。集石の表面には、炭化物がタール状に付着していた。また、被熱によって亀裂の入った礫も見られ、集石中からは炭化物が多量に出土した。南側は攪乱により不明である。

P S - 7 (23号址) (図IV-21 表IV-1・3 図版23)

土坑の上位に集石を検出した。土坑は東西2 m、南北0.85 mの円形を呈すると考えられる。集石は調査区外となる南側にも延びていることから、南北2 m程と推測される。東側で検出した集石は表面がきれいな状態であったが、土坑上面や土坑中の石は、表面に炭化物がタール状に付着し、煤けた状態である。また被熱によって亀裂の入った礫も見られ、集石中からは炭化物が多量に出土している。なお、東側の集石は西側の土坑内の集石とは連続していない。東側の集石は使用された痕跡がないことから、調査担当者は西側の集石土坑を使用する際の予備的な石と判断している。

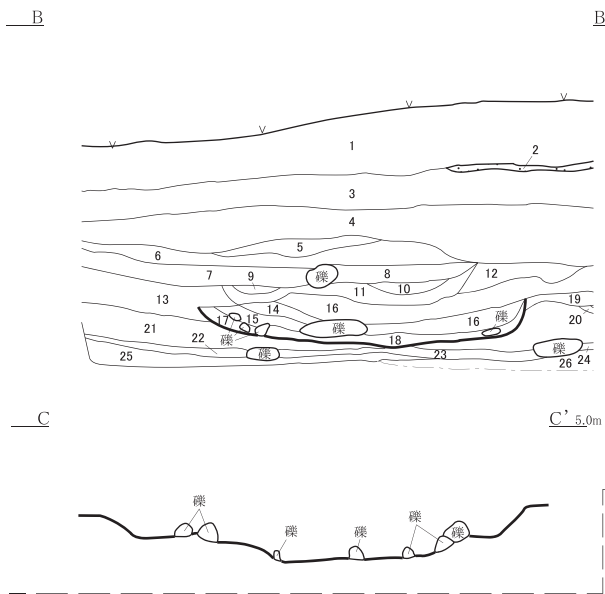
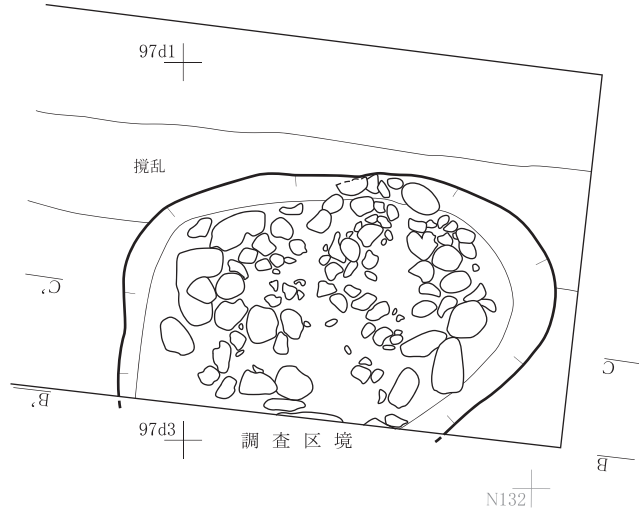
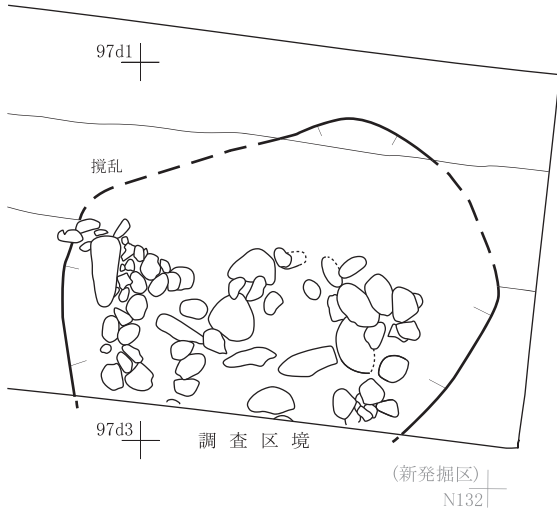
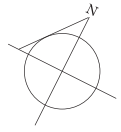
遺物は主に集石中から出土しており、土器が10点 (宇津内Ⅱ b 式)、石器等が3点ある。

掲載遺物: 1は宇津内Ⅱ 式の大型深鉢片。2列の擬縄貼付文がV字状に配されているとみられる。2は石鏃。上半部が欠損している。凹基で両側縁がほぼ平行する形状である。両面に平坦加工が施されている。3はナイフ。両面全体に加工が施されている。裏面には表面に一部が見られる。

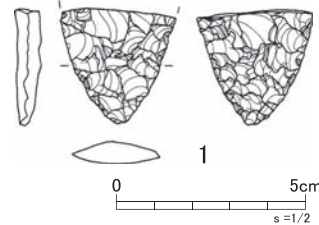
PS-5 (37a・b号址)

検出面(上位・37a号址)

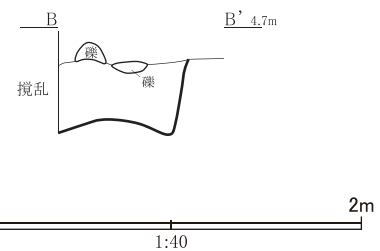
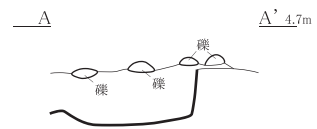
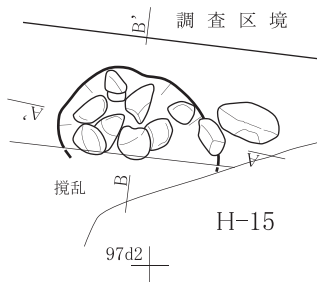
完掘面(下位・37b号址)



- [PS-5]
- 1 表土
 - 2 Ma-b5
 - 3 黒色砂
 - 4 茶褐色砂(黄褐色?)
 - 5 暗灰色砂
 - 6 黒灰色砂
 - 7 灰色砂
 - 8 灰色砂
 - 9 黄褐色砂
 - 10 黒灰色砂
 - 11 黒色砂
 - 12 黒色砂
 - 13 黒灰色砂
 - 14 暗灰色砂
 - 15 黒色砂
 - 16 黒灰色砂(所々黄色砂ブロック)
 - 17 黒色砂(粘性あり、真黒)
 - 18 黒色砂(粘性あり、真黒)
 - 19 黒灰色砂
 - 20 黄灰色砂
 - 21 灰色砂
 - 22 暗褐色砂(粘性)
 - 23 暗褐色砂(粘性)
 - 24 暗褐色砂(粘性)
 - 25 灰色砂
 - 26 黄褐色砂



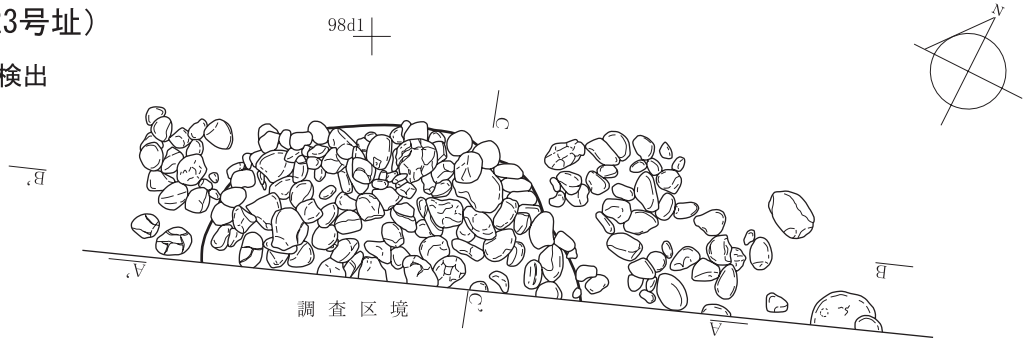
PS-6 (39号址)



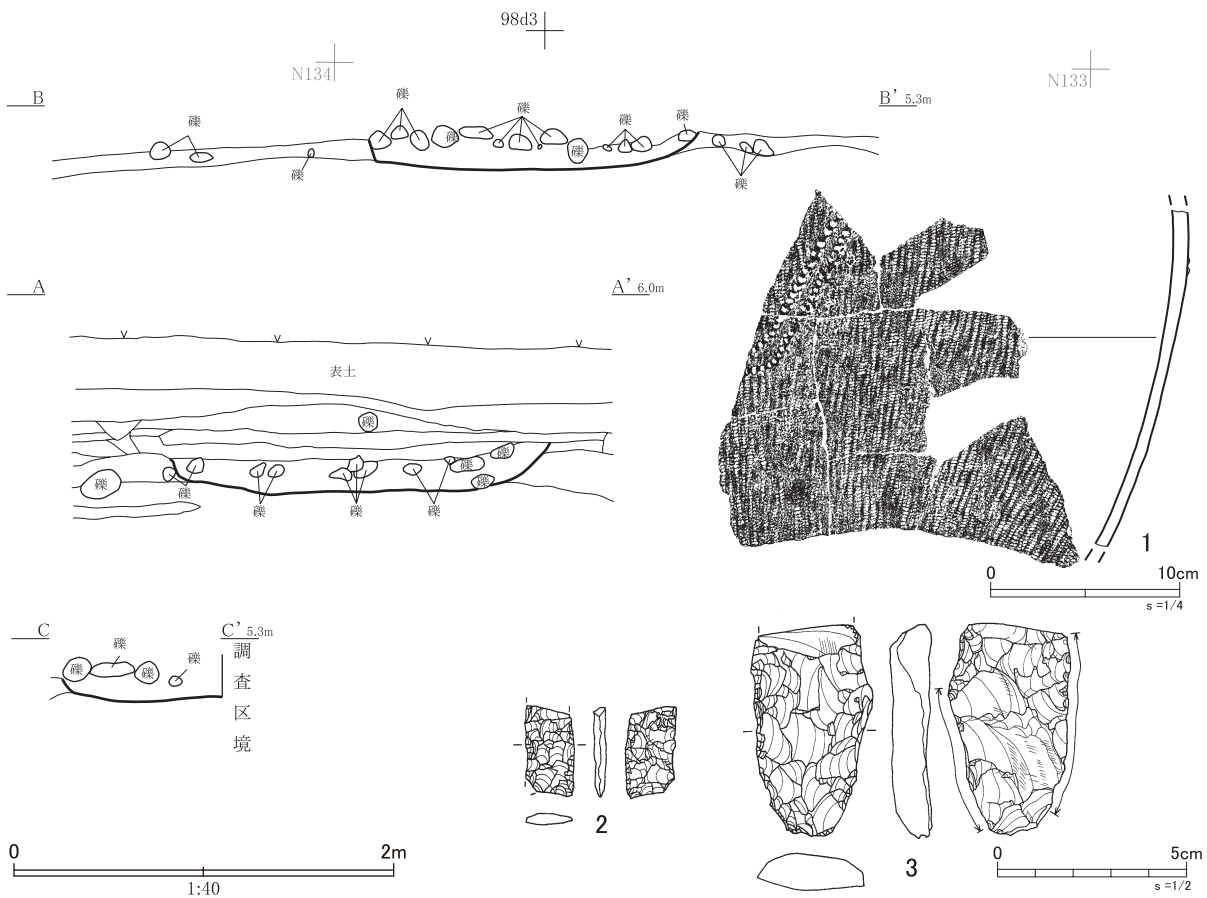
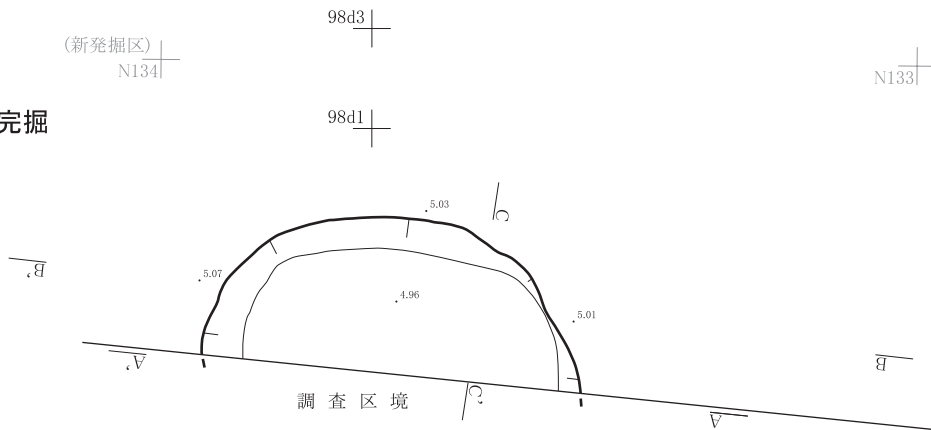
図IV-20 PS-5・6 (37a・b・39号址)

PS-7 (23号址)

検出

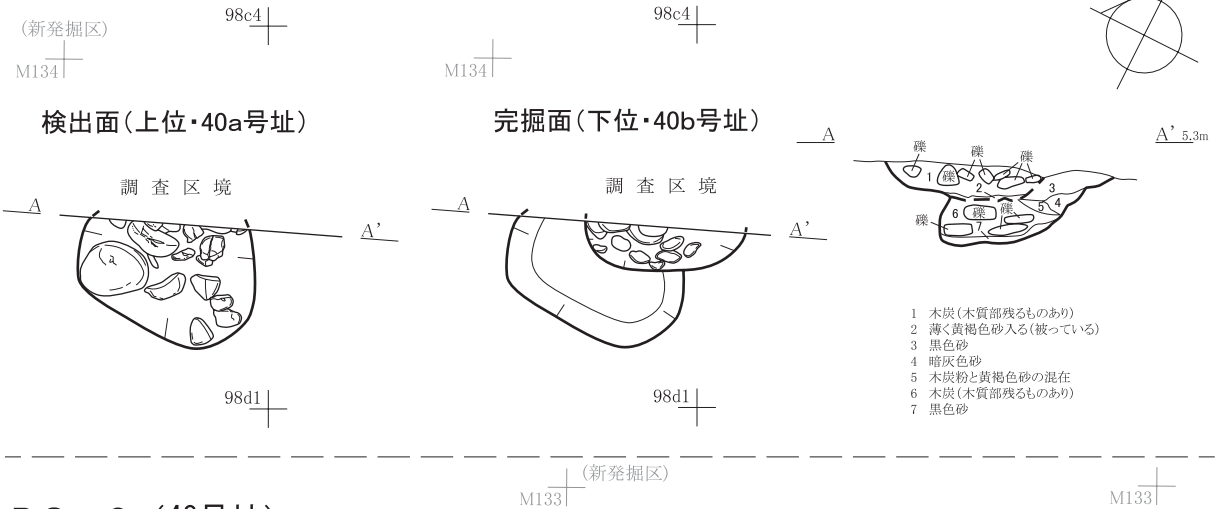


完掘

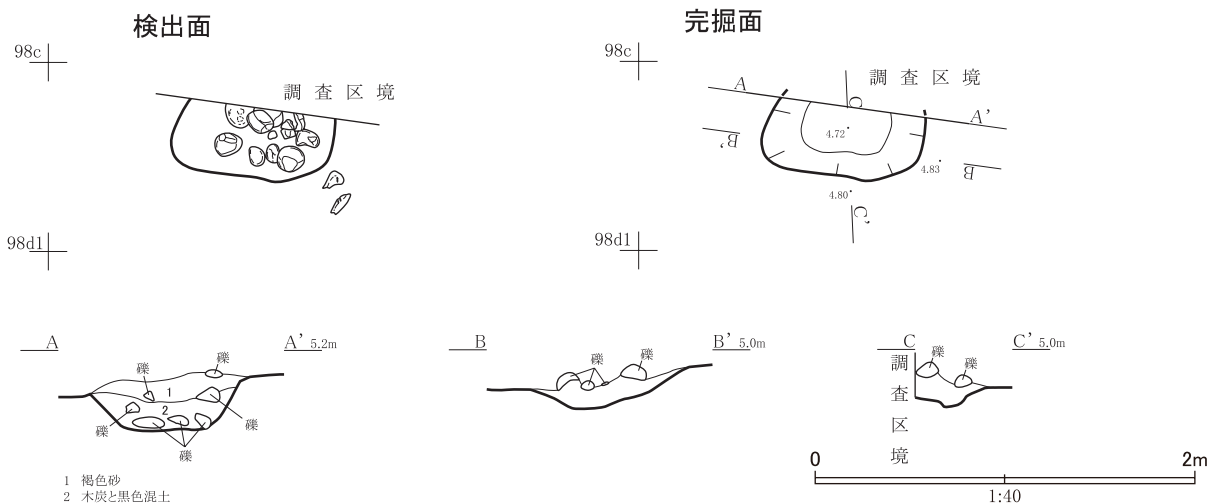


図IV-21 PS-7 (23号址)

PS-8 (40号址)



PS-9 (48号址)



図IV-22 PS-8・9 (40・48号址)

PS-8 (40号址) (図IV-22 表IV-1 図版23)

不整形を呈すると考えられる。上位を40 a 号址、下位を40 b 号址として調査を行った。上位・下位とも集石の表面には、炭化物がタール状に付着していた。また被熱によって亀裂の入った礫も見られ、集石中からは炭化物が多量に出土した。

PS-9 (48号址) (図IV-22 表IV-1 図版23)

不整形を呈すると考えられる。集石の表面には、炭化物がタール状に付着していた。また、被熱によって亀裂の入った礫も見られ、集石中から炭化物が多量に出土した。

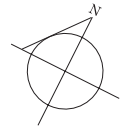
PS-10 (49号址) (図IV-23 表IV-1 図版23)

長楕円形を呈すると考えられる。焼けた礫や炭化物が多数みられる。遺物は土器が23点(縄文晩期～続縄文初頭18点、宇津内II a 式5点)、石器等が27点出土した。

掲載遺物：1～3は緑ヶ岡式併行。口唇は刻まれ、口縁部は無文地に2本組の平行沈線が上下に配され、以下LR縄文が施文されている。4はナイフ。下半部が欠損している。柄部とみられ、わずかに内湾する縁辺が成形されている。5はスクレイパー。右側縁に円弧状の刃部が形成されている。

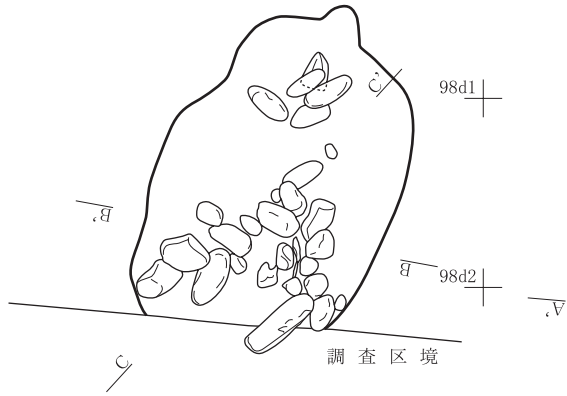
(新発掘区)
M134

M134

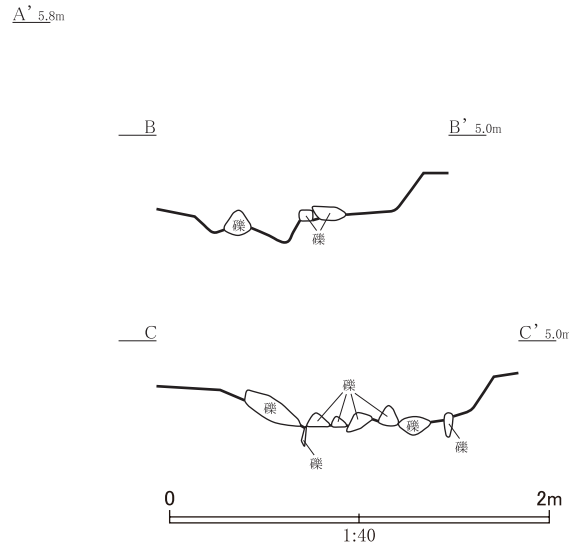
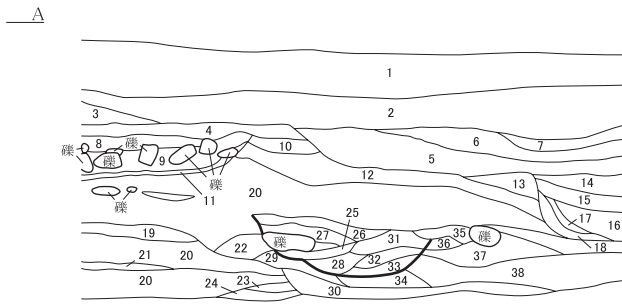
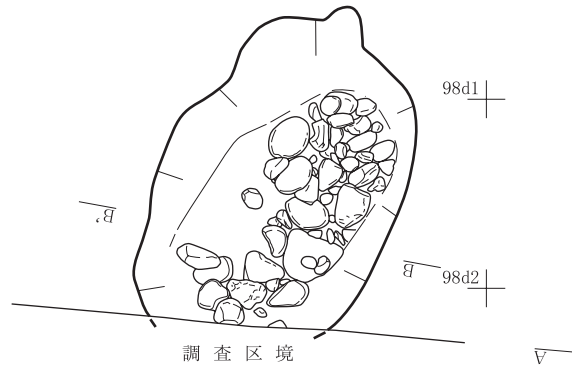


PS-10 (49号址)

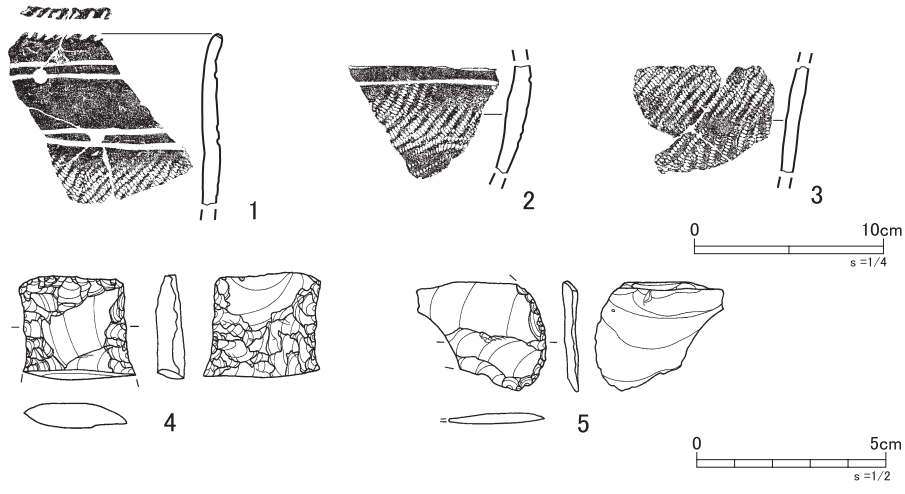
検出面



坑底面



- | | | | |
|-------------------|---------|---------|---------|
| 1 黑色土 | 11 褐鉄鉱 | 21 黒色砂 | 25 灰色砂 |
| 2 黒色砂 | 12 暗灰色砂 | 22 黒灰色砂 | 26 黒灰色砂 |
| 3 茶褐色砂 | 13 暗褐色砂 | 23 灰色砂 | 27 暗灰色砂 |
| 4 茶褐色砂(木炭混じる) | 14 暗灰色砂 | 24 黒褐色砂 | 28 褐色砂 |
| 5 黒灰色砂 | 15 黒色砂 | 29 暗灰色砂 | 31 暗褐色砂 |
| 6 暗茶褐色砂 | 16 茶褐色砂 | 30 黒色砂 | 32 黒灰色砂 |
| 7 暗茶褐色砂 | 17 暗灰色砂 | 34 黒褐色砂 | 33 茶灰色砂 |
| 8 木炭(粒状、木質部残っている) | 18 黒灰色砂 | 35 黒色砂 | |
| 9 木炭(粒状、木質部残っている) | 19 灰色砂 | 36 灰色砂 | |
| 10 黒色砂 | 20 黄褐色砂 | 37 暗灰色砂 | |
| | | 38 茶灰色砂 | |



図IV-23 PS-10 (49号址)

PS-11 (46号址) (図IV-24 表IV-1・3 図版23・51)

東西1.5m、南北1.5mで円形を呈する。掘込み面の下部から集石が検出されたことから土坑墓の可能性も考えられたが、最終的には土坑(集石土坑)とした。遺物は土器4点(宇津内Ⅱb式4点)、石器等8点が出土した。

掲載遺物：1は宇津内Ⅱ式の胴部片。擬縄貼付文がある。2は石鏃。両端が尖る柳葉形の形状で両面全体に加工が見られる。3はスクレイパー。左側縁に直線的な急角度の加工が施されている。

PS-12 (50号址) (図IV-24・25 表IV-1・3 図版23)

楕円形を呈すると考えられる。覆土下位から坑底付近にかけて大小の礫が密集して検出された。集石の表面には、炭化物がタール状に付着している。また、被熱によって亀裂の入る礫も見られ、集石中から炭化物が多量に出土した。坑底に径70cmほどの楕円形の落ち込みがある。下位にH-16(25号址)を検出した。遺物は土器が3点、石器等が11点出土した。

掲載遺物：1は宇津内Ⅱb式の口縁部片。内面口縁部にも縄線が施されている。2は石鏃。凹基で両側縁がやや湾曲する形状である。両面全体に加工が施されている。3はRフレイク。左側縁下半に細かな加工が施されている。

PS-13 (41号址・45号址) (図IV-25 表IV-1・3 図版24)

上位を41号址、下部を45号址として調査した。楕円形を呈すると考えられる。上部は中程度の大きさの礫が密集し、下位は比較的大型の礫が多く、坑底付近まで充填されていた。集石の表面には、炭化物がタール状に付着している。また被熱により亀裂の入る礫も見られ、集石中から炭化物が多量に出土している。下位にH-16(25号址)、さらにPS-12(50号址)が重複している。またPS-12(50号址)とは西側で一部切り合っている。遺物は土器5点(宇津内Ⅱb式4点)、石鏃1点、フレイク1点が出土した。

掲載遺物：4は石鏃。下半部が欠損している。両面全体に加工が施され側縁が湾曲する形状である。

PS-14 (31b号址) (図IV-26 表IV-1・3 図版24・52)

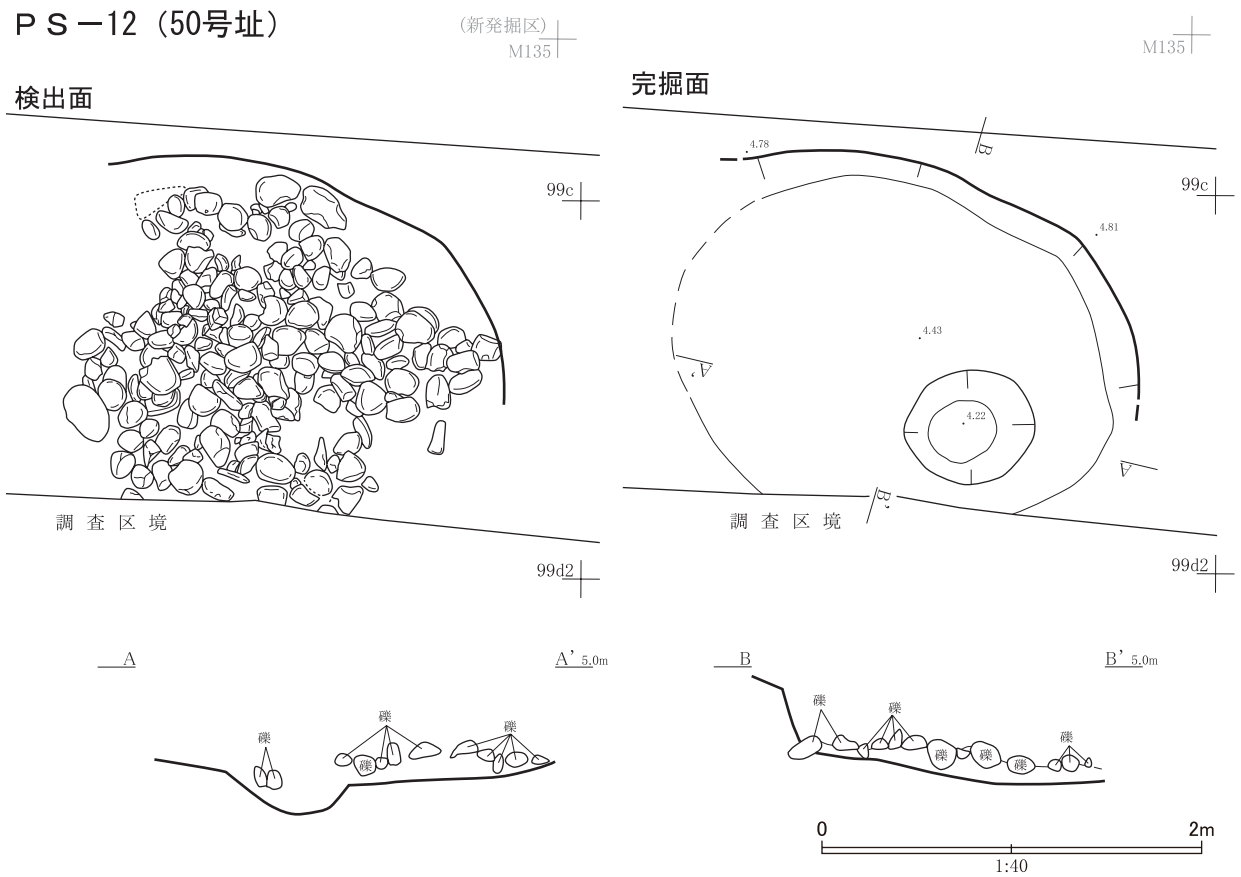
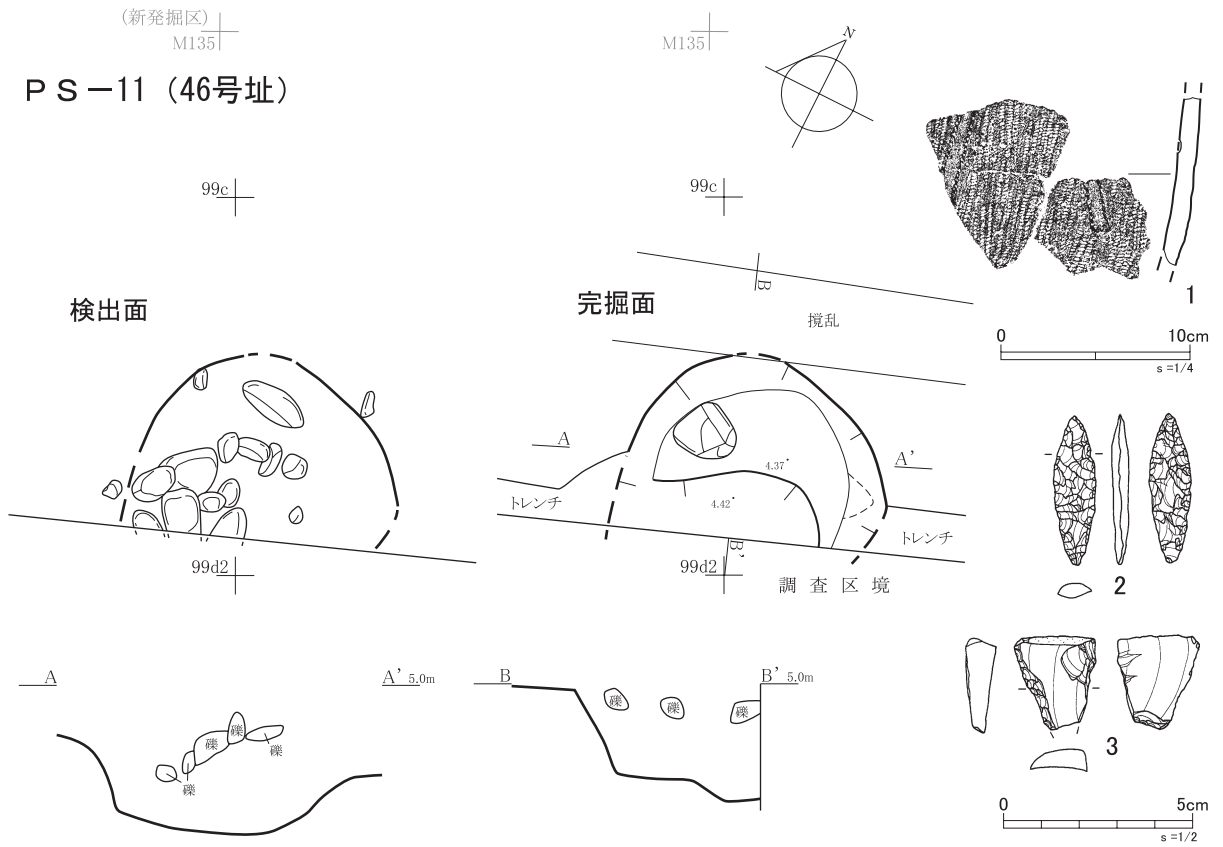
SF-4(31a号址)の西側に隣接して検出した。掘込みは20cmほどで、長楕円形を呈している。北側は調査区外に広がる。集石の表面には炭化物がタール状に付着し、被熱によってひび割れている礫も見られる。炭化物は集石内から多量に出土している。また調査区北壁から集石までの約0.8mは、土器も含めて酸化鉄が厚く付着している。遺物は土器が17点、石器等が89点出土した。北東隅付近の集石中から、宇津内Ⅱa式土器が出土している。

掲載遺物：1は宇津内Ⅱa式。約半分ほどが残存する。大2+小2の単位と思われる。波頂部下に貼瘤状の貼付文があり、貫通孔が横方向に穿たれている。突瘤文・縄線・縄端刺突がめぐり、波頂部下には擬縄貼付文が3本垂下する。2は埋土中から出土した緑ヶ岡式併行。口縁部は無文地に鋸歯状・横位の沈線がえがかれている。弱い段以下にLR縄文が施文されている。3はスクレイパー。縦長剥片を素材として正面の両側縁に平坦剥離が施されている。また、素材打面側にあたる上端にも加工が施され打面とバルブの高まりを除去している。4は石核。剥片素材で、主に素材腹面で横長剥片を剥離している。

PS-15 (35号址) (図IV-26 表IV-1・3 図版24・52)

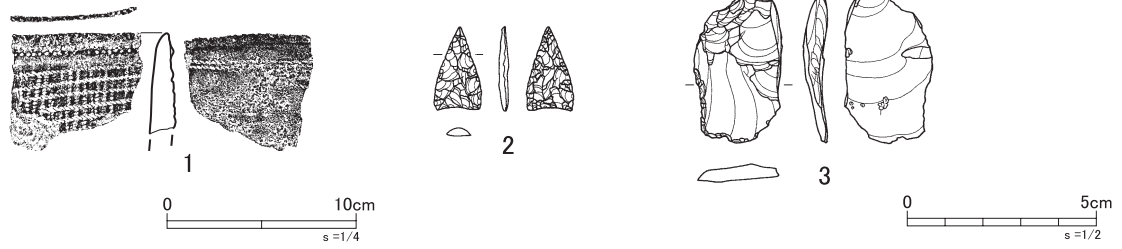
おおむね円形をなす。0.13mほど掘り込まれており、坑底中央部分に東西0.5m、深さ0.2mの炉とみられる落ち込みを検出した。炭化物が多量に含まれている。北側の調査区外に続いている。遺物は石器等3点が出土した。

掲載遺物：5はスクレイパー。左側縁を中心に加工が施され、端部に円弧状の刃部を作出している。



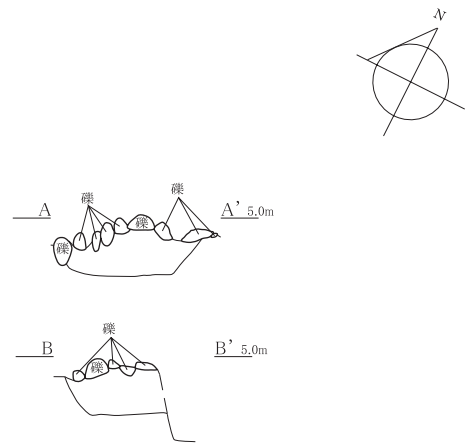
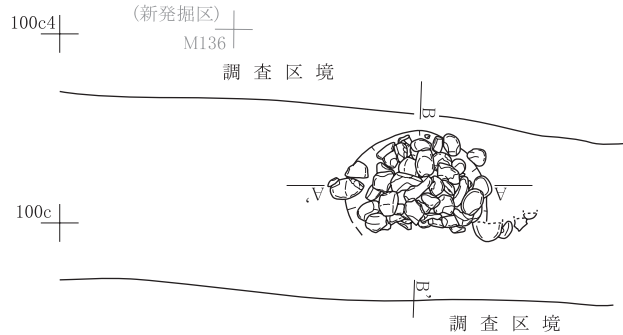
図IV-24 PS-11・12 (46・50号址)

PS-12 (50号址)

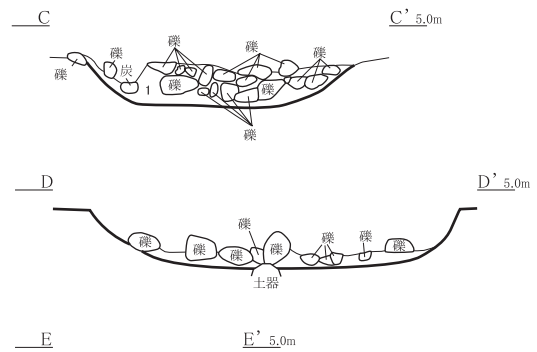
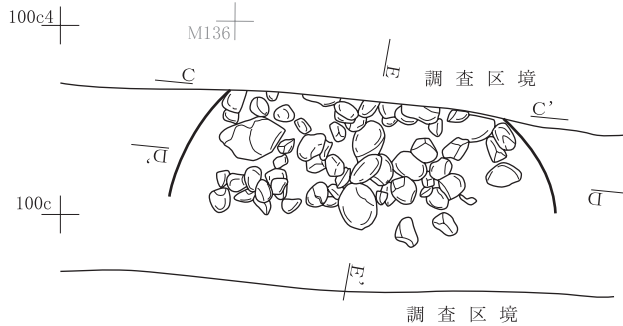


PS-13 (41・45号址)

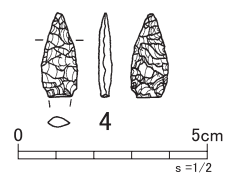
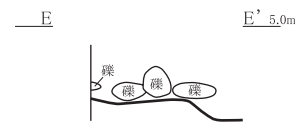
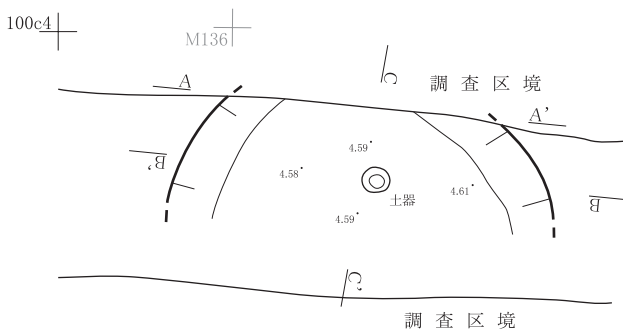
上部(41号址)検出面



下部(45号址)検出面

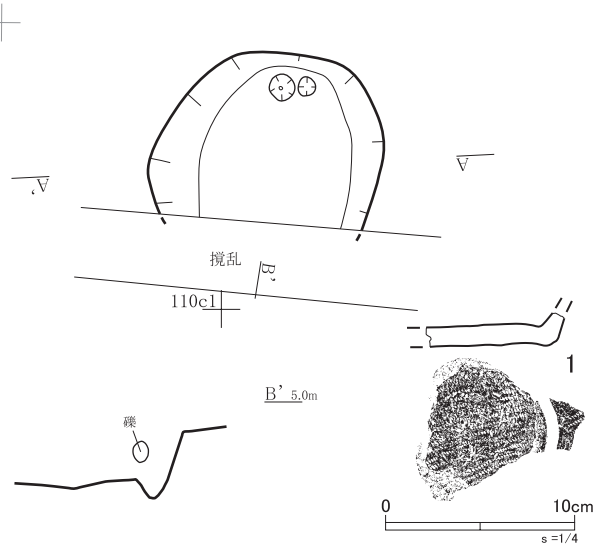
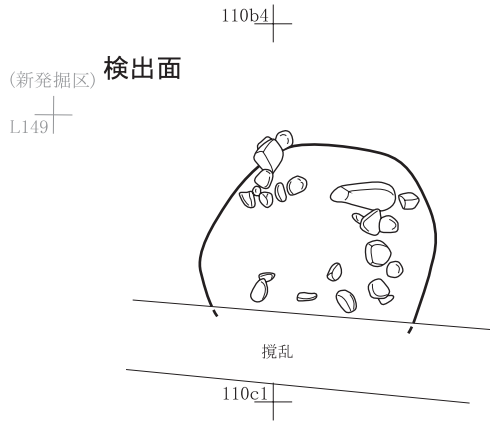


完掘面

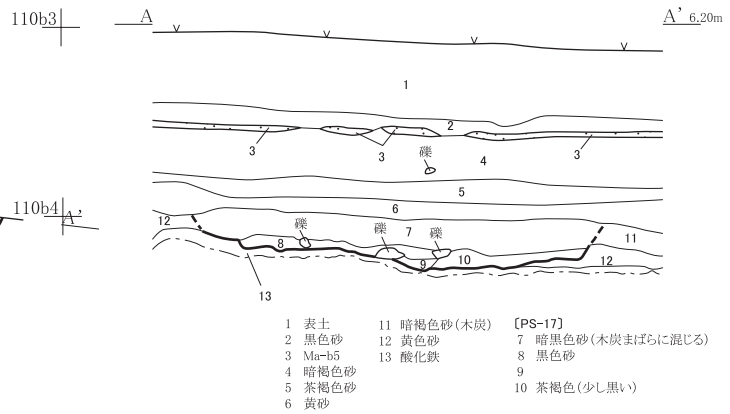
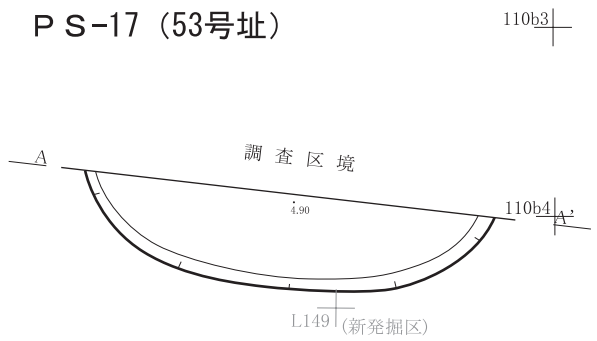


図IV-25 PS-12出土の遺物・PS-13 (41・45号址)

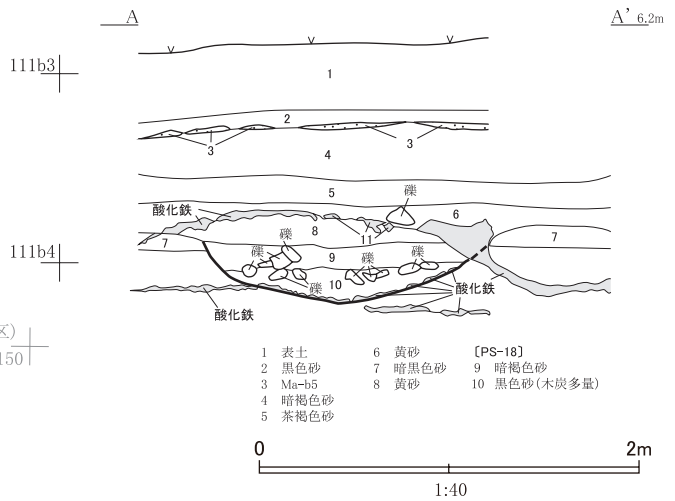
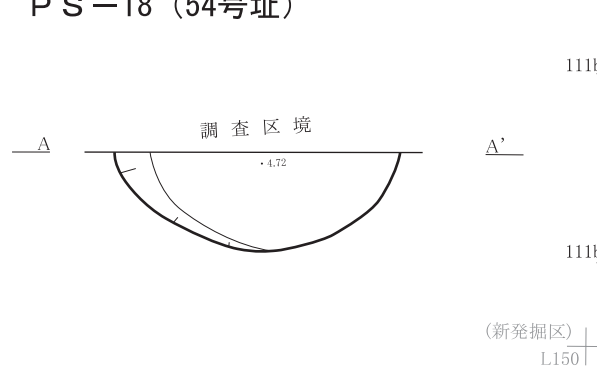
PS-16 (36号址)



PS-17 (53号址)

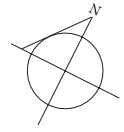


PS-18 (54号址)



図IV-27 PS-16・17・18 (36・53・54号址)

P S - 19 (30号址)

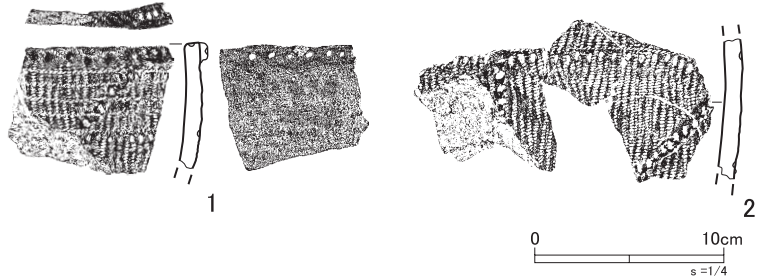
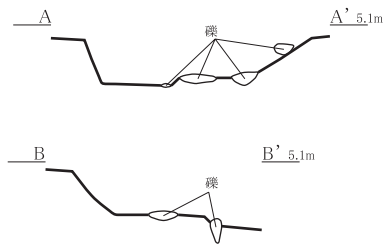
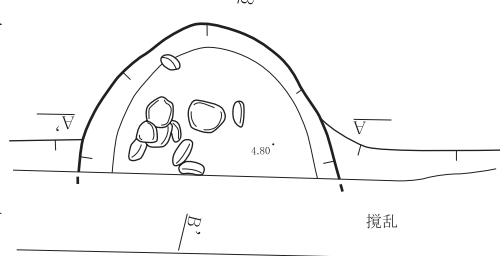
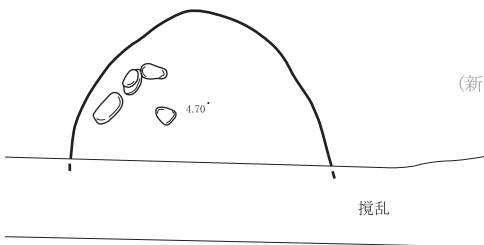


調査区境

調査区境

検出状況

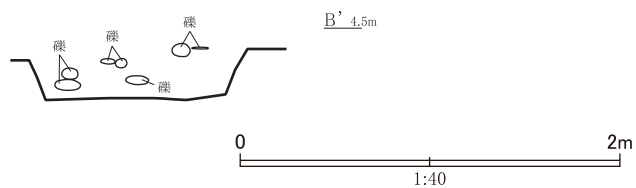
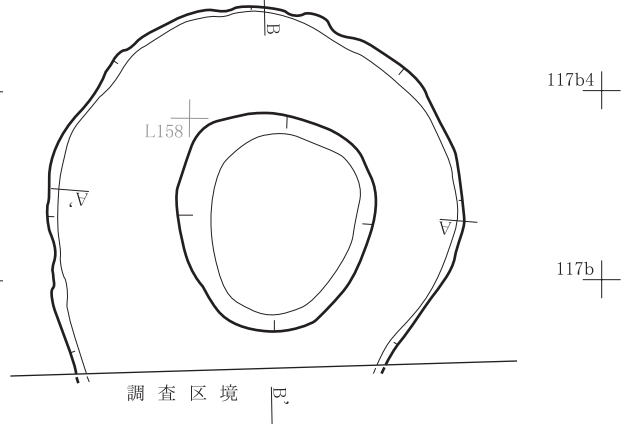
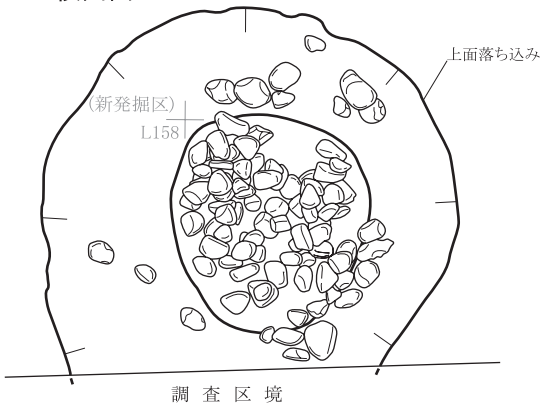
完掘状況



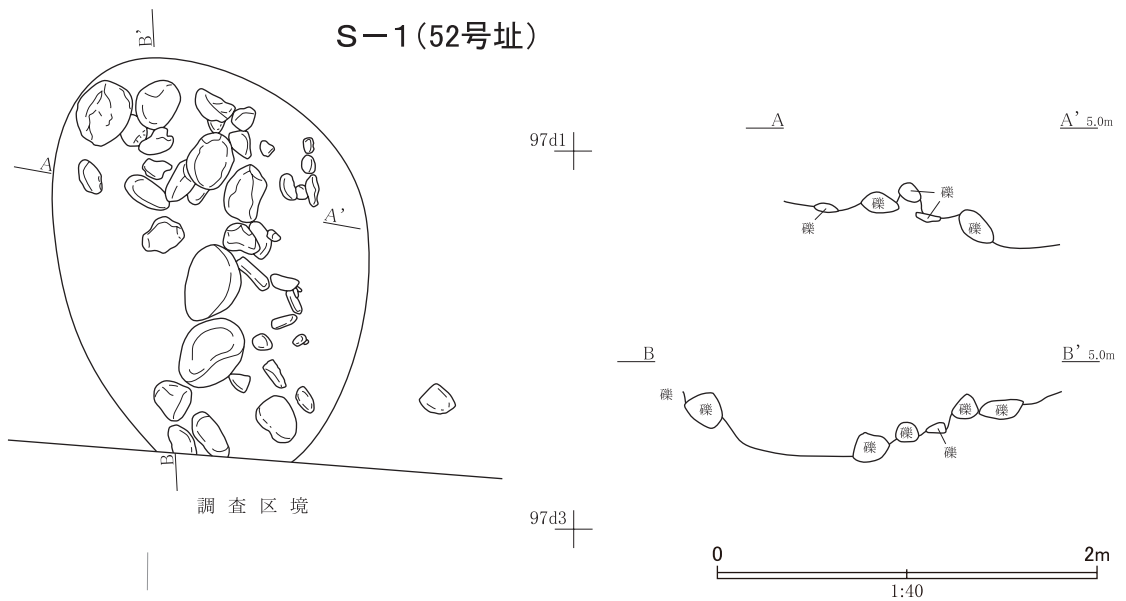
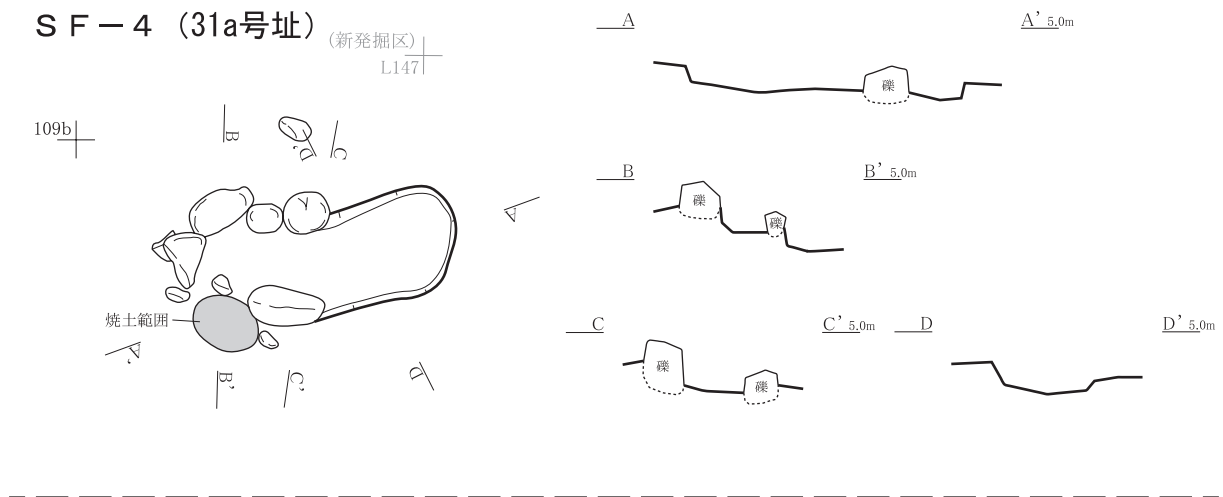
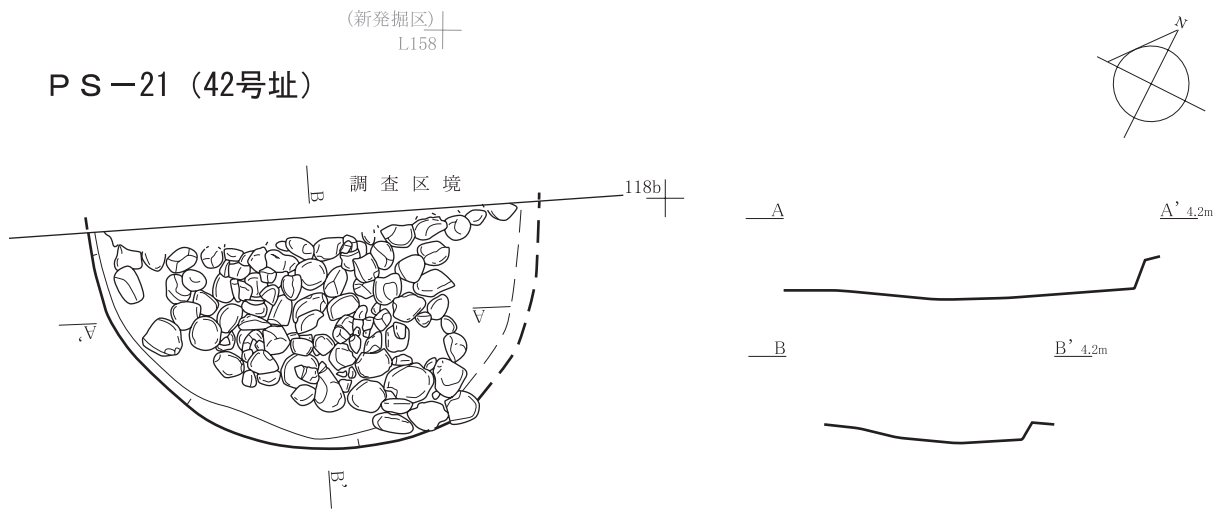
P S - 20 (33号址)

検出面

完掘面



図IV-28 P S - 19・20 (30・33号址)



図IV-29 PS-21 (42号址)・SF-4 (31a号址)・S-1 (52号址)

PS-16 (36号址) (図IV-27 表IV-1・3 図版52)

不整形円形を呈する。上面に集石があり、下面には炭化物が堆積している。掘込みの深さは0.2mである。南側は攪乱により不明である。

掲載遺物：1は宇津内Ⅱ式の底部。上げ底で、底面全面に縄文が施文されている。

PS-17 (53号址) (図IV-27 表IV-1 図版24)

全形は楕円形と思われる。調査区内では東西2.1m、南北0.5m、掘込みの深さは0.2mである。都合により集石の平面図は作成できなかった。集石は坑底付近に分布し、表面は炭化物がタール状に付着していた。また被熱によってひび割れしている礫も見られ、集石下部から炭化物が多量に出土した。

PS-18 (54号址) (図IV-27 表IV-1)

全形は楕円形と思われる。都合により集石の平面図は作成できなかった。集石は埋土中位～下位に分布し、集石の表面は、炭化物がタール状に付着している。また被熱によってひび割れしている礫も見られる。集石下部から坑底まで、炭化物が多量に出土した。

PS-19 (30号址) (図IV-28 表IV-1・3 図版52)

楕円形を呈すると考えられる。深さ0.3mの掘込みで、中央から西側に礫がまとまって検出された。南側はN T Tのケーブル埋設によって攪乱している。炭化物が多量に出土している。遺物は宇津内Ⅱ a式土器が11点出土した。

掲載遺物：1・2は宇津内Ⅱ a式で同一個体と思われる。口唇上の文様は、擬縄貼付文を伴う台形状の突起上に刺突、それ以外は縄文が押捺されている。

PS-20 (33号址) (図IV-28 表IV-1 図版24)

径約2mの浅い落ち込みの中央に、ほぼ円形の深さ0.2mほどの掘り込みがある。集石は土坑埋土中に密集し、一部上面の浅い落ち込みに広がる。集石の表面には炭化物がタール状に付着していた。また被熱によってひび割れしている礫も見られ、集石中から炭化物が多量に出土した。

PS-21 (42号址) (図IV-29 表IV-1 図版24)

楕円形を呈すると考えられ、径2mを超え、深さは0.25m掘り込まれている。土坑中に礫が密集して検出された。集石の表面には、炭化物がタール状に付着していた。また被熱によってひび割れしている礫も見られ、集石中から炭化物が多量に出土した。北側には電柱が設けられておりアース線が露呈し、拡張することができなかった。

(6) 石組炉

1基(SF-4)検出した。時期は出土遺物から宇津内Ⅱ b式期とみられる。

SF-4 (31a号址) (図IV-29 表IV-1・3 図版5・24)

浅い長楕円形を呈する土坑の周囲に大型礫が配されていた。南西に隣接して径約0.3mの焼土も検出されている。炉の中からは、炭化物のほかに燃焼しきれしていない木質部が出土している。遺物は宇津内Ⅱ b式土器が1点、石器剥片等が23点出土した。

(7) 礫集中

1か所(S-1)検出した。時期は構築面から宇津内Ⅱ a～Ⅱ b式期とみられる。

S-1 (52号址) (図IV-29 表IV-1 図版24)

97d区において、北西部から傾斜しながらGP-2(38号址)近くまで連なっている集石である。比較的大型の礫が多い。

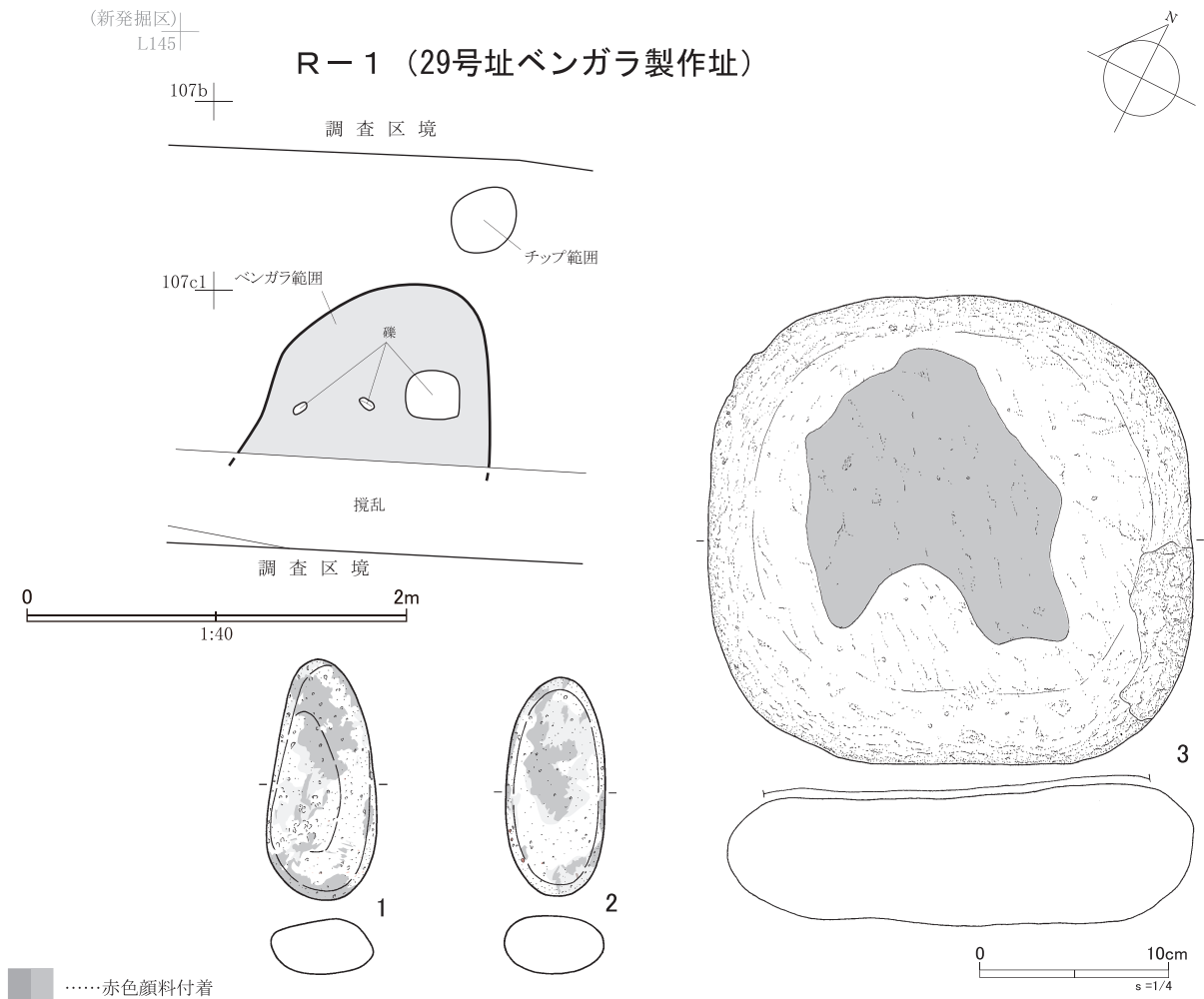
(8) ベンガラ製作址

1か所(R-1)検出した。時期は構築面や周辺出土遺物から宇津内II a 式期とみられる。

R-1 (29号址) (図IV-30 表IV-1・3 図版8・52)

東西2.2m、南北3m前後(推定)の範囲にベンガラが分布している。東側において、ベンガラが厚く付着した礫が出土した。礫は30cm程の大きさで、隅丸方形を呈し上面が平坦である。この礫から0.2mほど西側に離れた位置から、片面にベンガラが付着した礫が2か所で出土している。これらのことから、ベンガラ製作址と判断した。また0.3m北側に、0.3mの範囲で細片(黒曜石)の集中箇所が検出されている。

掲載遺物: 1・2はベンガラ付着礫。3はすり石。正面にすり面があり、中央部にベンガラが付着している。

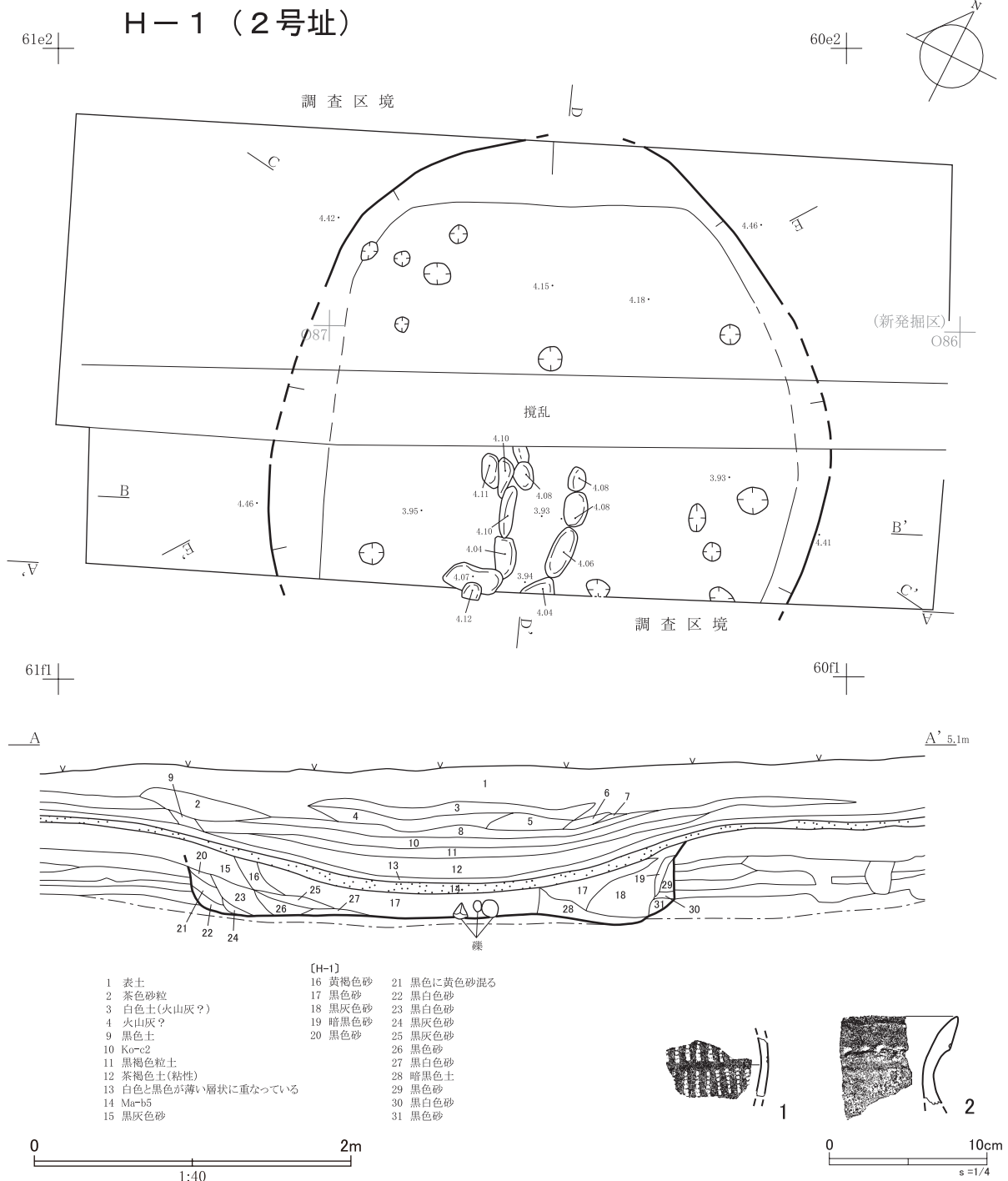


図IV-30 R-1 (29号址)

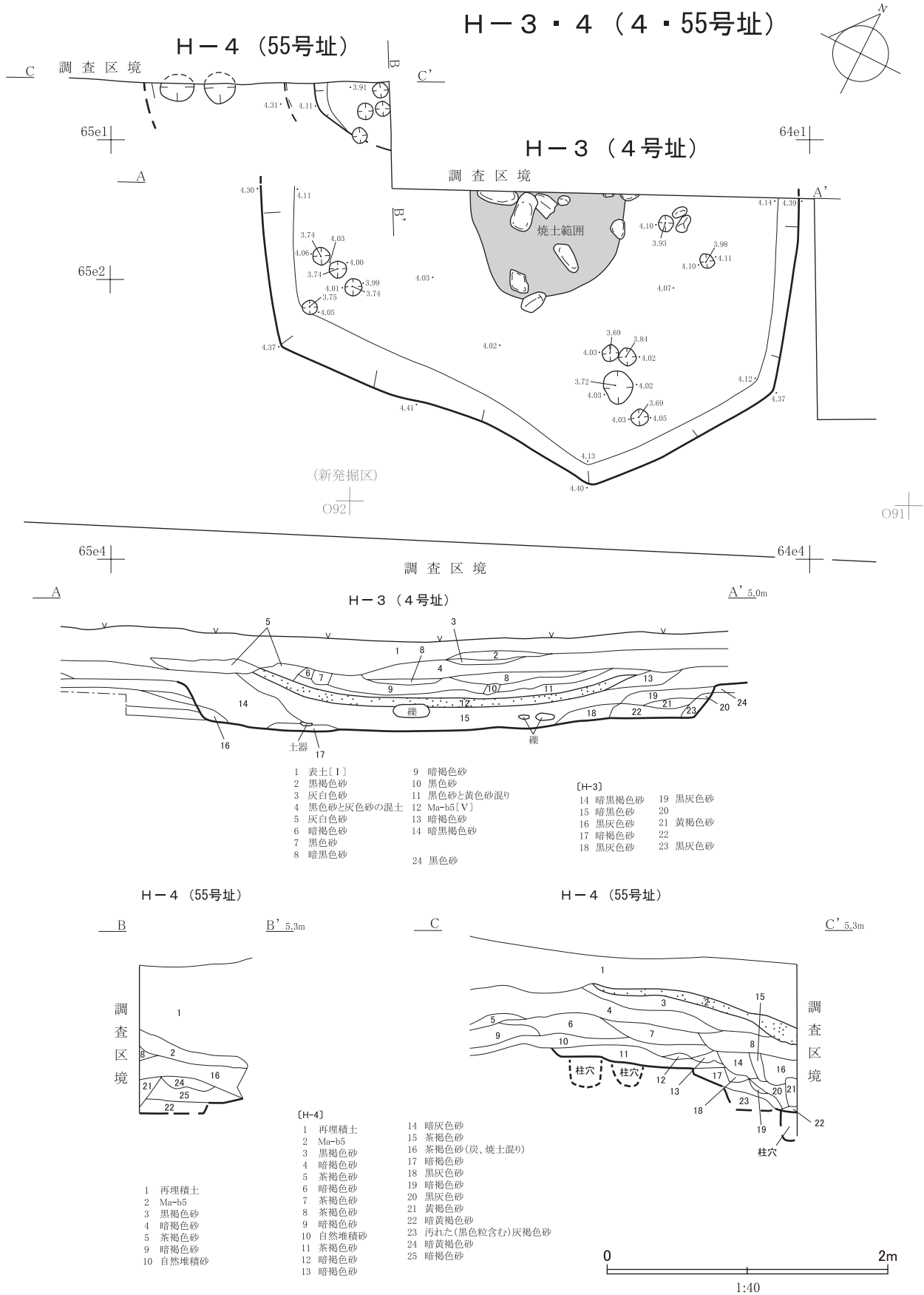
c オホーツク文化期の遺構

(1) 竪穴住居跡

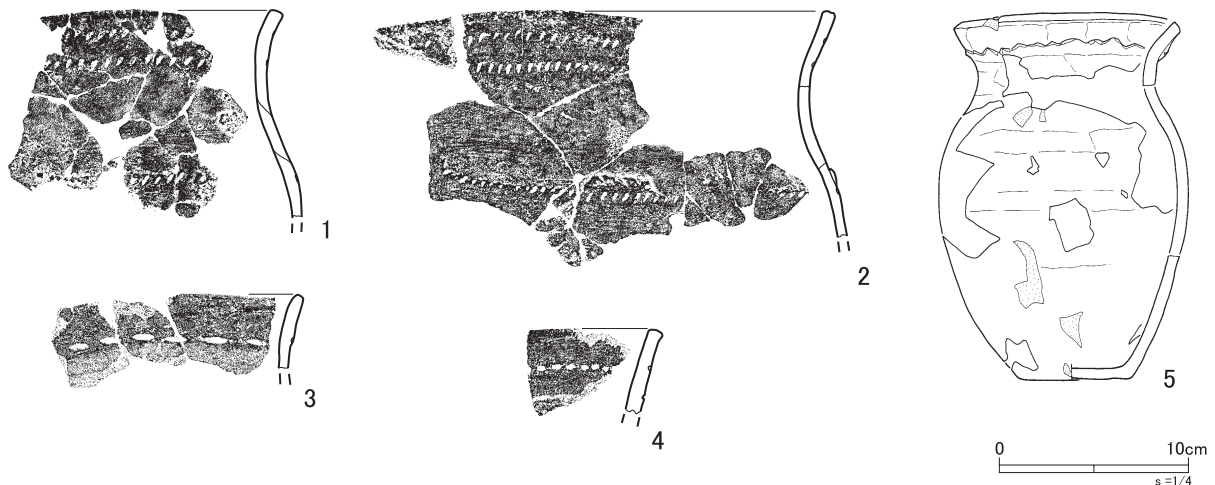
調査区中央部（B地点）の60～76ラインの間で、13軒（H-1・3～14）を検出した。ただし同一地点で検出された、建て替えを想定できるものを含んでいる（H-9・10・11など）。時期は刻文期を主体とし、一部擬縄貼付文土器の時期に差しかかるものがある（H-8）。



図IV-31 H-1 (2号址)



図IV-32 H-3・4 (4・55号址)



図IV-33 H-3 (4号址) 出土の遺物

H-1 (2号址) (図IV-31 表IV-1・2 図版4・25・52)

Ma-b 5テフラの面が落ち込み、くぼみとして確認できる。中央部東西方向にNTTケーブル埋設による攪乱がある。南側は調査区外に広がるが、竪穴の全形は多角形を呈すると考えられる。床面中央南側で石組炉を検出した。炉石は2列平行またはコの字状に配されている。炉の焼土からは魚骨(サケ科主体)が多数出土した。柱穴状小土坑は13か所検出されている。遺物は埋土・「盛土」・床・炉からそれぞれ少数出土した。

掲載遺物: 1・2は刻文期の土器。1は縦位の櫛歯文が2段列する。2は爪形文に近い斜位の刻文が肥厚帯下端に連続する。

H-3 (4号址) (図IV-32・33 表IV-1・2 図版25・52)

Ma-b 5テフラの面が落ち込み、くぼみとして確認できる。北側は調査区外に広がる。竪穴の全形は五角形を呈すると推測される。床面中央付近と思われる位置に炉址が検出された。焼土は径約1mの範囲に分布し、大型礫が複数出土しており、石組炉をなしていた可能性がある。焼土からは多量の魚骨(サケ科主体)が出土している。柱穴状小土坑は不規則な配置で10か所検出された。遺物は埋土・床から167点出土し、そのほとんどが刻文土器である。

掲載遺物: 1~5は刻文期の土器。1・2は同一個体と思われる。大型の甕で、口縁部は肥厚しない。口縁部に2列の刻文、肩部には幅広の薄い貼付帯に2列の刻文が施されている。3は薄い肥厚帯下端に舟形刻文が連続する。4は刺突文と横走沈線がみられる。5は小型の壺形で、肥厚帯下部にハの字形刻文が連続する。

H-4 (55号址) (図IV-32 表IV-1)

H-3 (4号址) 北西側で検出した。国道法面の途中となっているために崩落が夥しく、一部の検出にとどまった。テラス状の段構造をなしているとみられる。柱穴状小土坑は6か所検出されている。H-3 (4号址) と重複すると考えられるが、道路側溝による攪乱のため切り合い関係は掌握できなかった。H-4 (55号址) がH-3 (4号址) を切って構築していると推測される。

H-5 (20号址) (図IV-34・35 表IV-1・2 図版25・52)

H-7 (5号)の東側で竪穴住居跡を連続して検出し、南側を20号址とした。さらに南側の調査区外に広がる。竪穴の全形は方形または多角形を呈する。柱穴状小土坑は不規則な配置で14か所検出された。北西側のH-5 (19号址)と重複し、当遺構が新しい。遺物は埋土・床から50点出土し、そのほとんどが刻文土器である。

掲載遺物: 1・2は刻文期の土器。1は弱い肥厚帯下端に刻文が施されている。

H-6 (19号址) (図IV-34・35 表IV-1 図版25)

H-7 (5号)の東側で竪穴住居跡を連続して検出し、北側を19号址とした。さらに北側の調査区外に広がる。竪穴の全形は多角形を呈すると推測される。床面中央付近で石組炉が検出され、焼土からは多量の魚骨(サケ科ほか)が出土している。また炉の下位において、2基の土坑を検出した。うち1基は、東西1m、南北0.9mのやや不整形な落ち込みで、焼土が検出されている。この焼土からもサケ科と思われる魚骨が出土している。もう1基からは多量の木炭が出土した。表面が焼け、中は生木の状態のものがみられる。柱穴状小土坑は26か所検出されており、東・東南側では壁に沿っているが、他では不規則な状態である。南西隅に周溝がある。竪穴南側にはH-5 (20号址)、西側にはH-7 (5号址)がそれぞれ一部重複し、いずれも当遺構の方が古い。遺物は埋土・床・炉下から100点出土し、そのほとんどが刻文土器である。

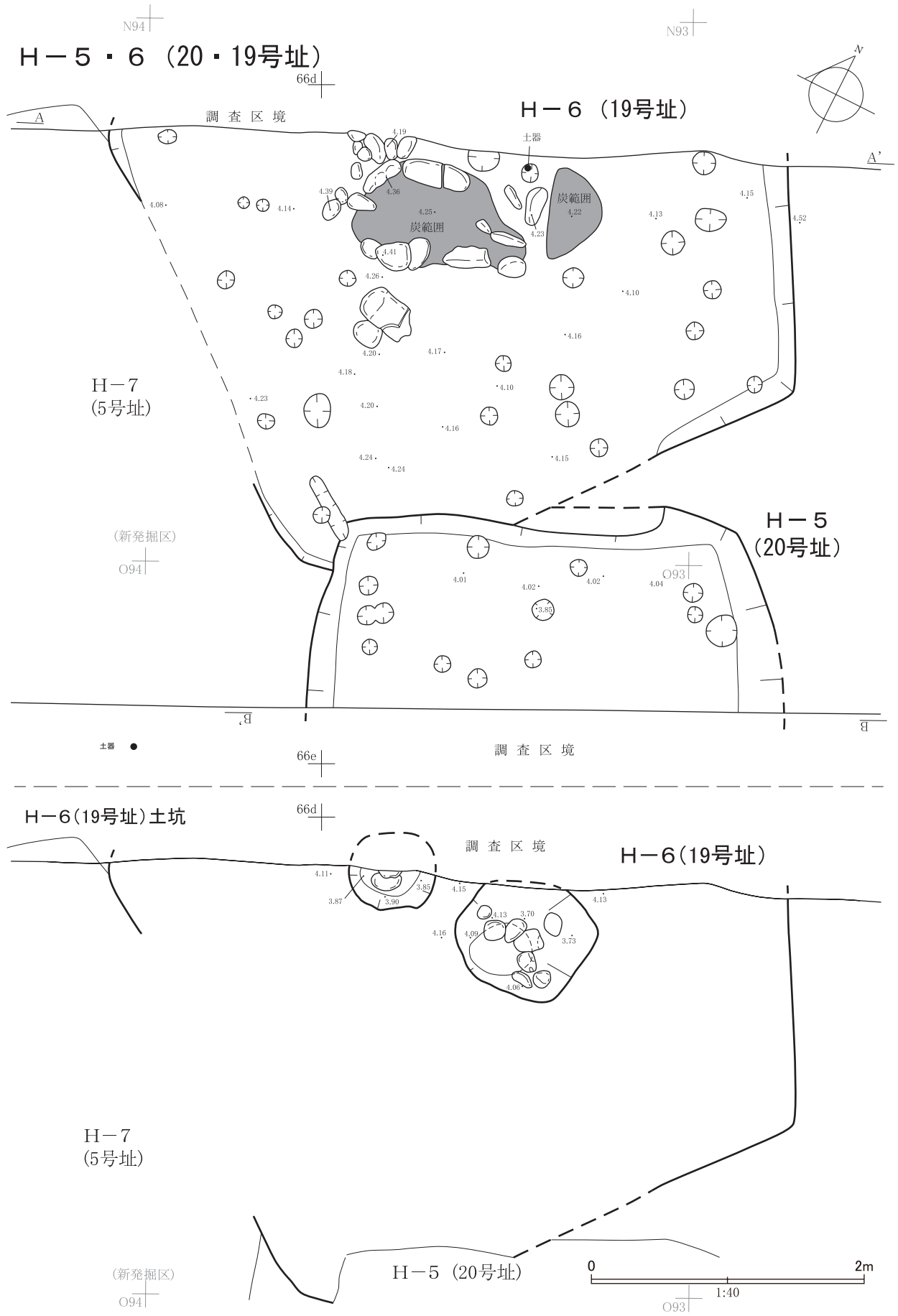
掲載遺物: 3~8は刻文期の土器。3は弱い肥厚帯下端に刻文(爪形文)が、4は横位の刻文が施されている。5は横位と斜位の刻文が平行する。6は頸部に貼瘤状の貼付文がある。7は小型の甕で、頸部に横位の刻文が列し、胴部に貼瘤が貼付されている。

H-7 (5号址) (図IV-36~39 表IV-1・2 口絵3 図版26・53)

Ma-b5テフラの面が落ち込み、くぼみとして確認できる。南側の一部は調査区外に広がる。竪穴の全形は六角形を呈する。ほぼ中央に石組炉が構築され、周囲の広い範囲で木炭を検出した。焼土からは、多量の魚骨(サケ科主体)が出土している。柱穴状小土坑は35か所ほどが検出され、壁に沿うものもみられるが不規則な配列である。床面の下部からは、柱穴や小規模な焼土が検出されたが、いずれも0.1mほどの砂で覆われている。南西隅で周溝が検出された。竪穴東側にはH-6 (19号址)が一部重複し、当遺構の方が新しい。遺物は埋土・床・炉下から497点出土した。その大部分が刻文土器で、石器等はフレイク類を主体に30点出土した。

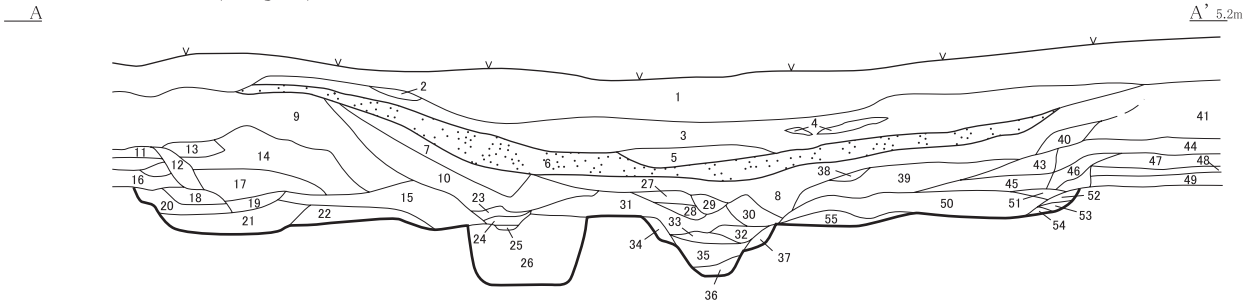
掲載遺物: 1は後北C₂・D式。埋土に含まれていた。2~17・23~25は刻文期・沈線文期の土器。2はやや小型の壺で、胴部に櫛歯文がある。3~8は肥厚する口縁下部に、9は胴部に斜位の刻文が施されている(8は爪形文)。10~12は口縁部の弱い肥厚帯に横位の刻文が施されている。12はハの字形刻文が連続する。13は横位の短い貼付文上に刻文が施されている。14は口縁上部に2列の横位の刻文があり、スス状の炭化物で覆われている。15は沈線文土器で、梯子状の文様が施されている。斜里町ウトロ遺跡PIT108出土土器(斜里町教育委員会2011、第208図12)に類似する。16は肥厚する口縁部が凹線で段状になっている。17は口唇・口縁に指頭押捺が連続する。23は口縁部に斜位(爪形文)、胴部に横位の刻文がめぐる。24・25はやや小型の甕で、24は胴部に列点に近い刻文が連続する。25は口縁部に刻文のほか、胴部に2列縦位の貼付文が4か所付され、横位の貼付文もみられる。

18~21、26~30は無文の口縁・底部で、20・21は小型甕である。22は擬縄貼付文土器。口縁部・胴部に擬縄貼付文が施されている。



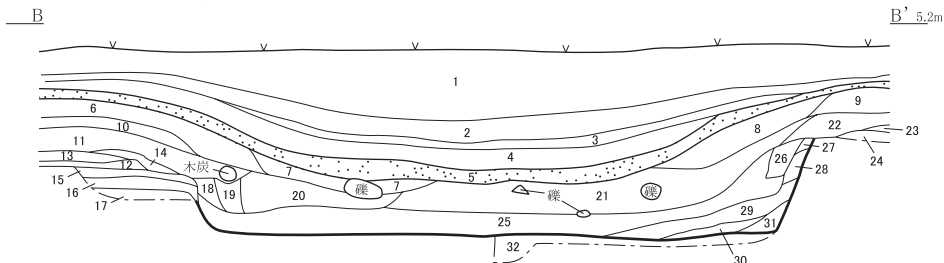
図IV-34 H-5・6 (20・19号址) (1)

H-6 (19号址)



- [H-6]
- | | | | | | | |
|---------------|---------|---------------|------------------|---------------------|-------------------|---------|
| 1 表土〔I〕 | 41 暗褐色砂 | 7 暗茶褐色砂 | 11 暗褐色砂 | 21 黒暗茶褐色砂 | 31 黒褐色砂 | 42 茶褐色砂 |
| 2 暗褐色土 | 44 黒灰色砂 | 8 黒褐色砂(木炭含む) | 12 褐色砂 | 22 黄褐色砂(黒色土混じる) | 32 茶褐色砂 | 43 黒色砂 |
| 3 暗茶褐色土(粘性あり) | 45 黒褐色砂 | 9 暗茶褐色砂 | 13 暗褐色砂 | 23 黒褐色砂 | 33 黄褐色砂(汚れて黒色混じる) | 44 黒灰色砂 |
| 4 灰色砂 | 46 暗褐色砂 | 10 黒褐色砂(木炭含む) | 14 汚れた茶褐色砂 | 24 木炭(石の真上は砂) | 34 赤化した砂 | 45 黒褐色砂 |
| 5 灰褐色砂(粘性あり) | 47 暗褐色砂 | | 15 暗褐色砂 | 25 | 35 暗褐色(木炭) | 46 暗褐色砂 |
| 6 Ma-b5〔V〕 | 48 黒色砂 | | 16 暗褐色砂に黒色の土が混じる | 26 木炭(表面離けて内は生木の状態) | 36 赤化した砂(赤灰色砂) | 47 黒色砂 |
| 9 暗茶褐色砂 | 49 黄褐色砂 | | 17 暗褐色砂(木炭) | 27 黄褐色砂 | 37 赤化した砂 | 51 黄褐色砂 |
| | | | 18 黒褐色砂 | 28 | 38 茶褐色砂 | 52 暗褐色砂 |
| | | | 19 黒褐色砂 | 29 木炭 | 39 黒灰色砂(木炭含む) | 53 黒色砂 |
| | | | 20 暗褐色砂 | 30 黄色砂 | 40 暗褐色砂 | |

H-5 (20号址)



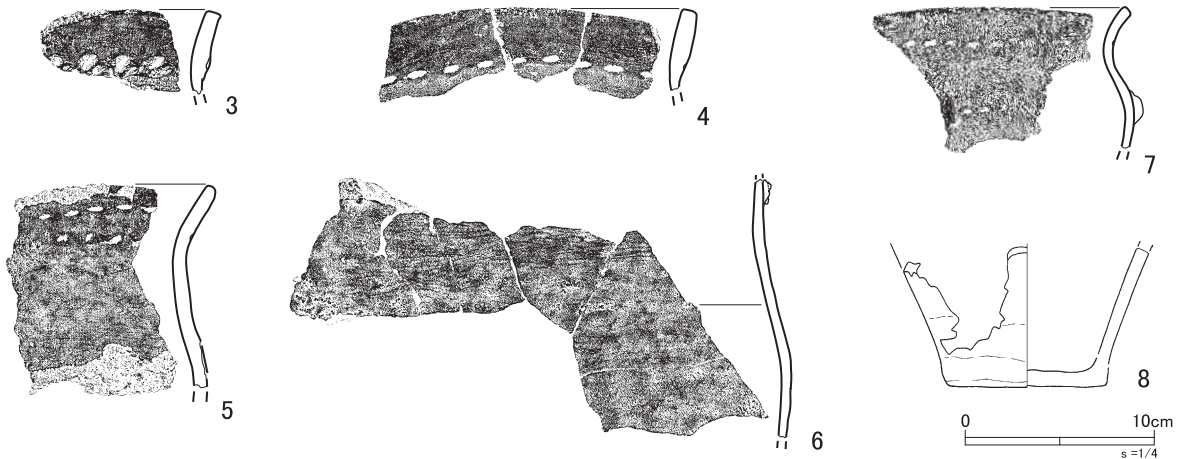
0 2m
1:40

- [H-5]
- | | | |
|---------------|---------|---------------|
| 1 表土〔I〕 | 11 褐色砂 | 18 黒褐色砂 |
| 2 Ta-a〔II〕 | 12 褐色砂 | 19 黒灰褐色砂 |
| 3 灰白色砂 | 13 黒色砂 | 20 黒褐色砂、木炭 |
| 4 粘土 | 14 黄色砂 | 21 黒灰色砂 |
| 5 Ma-b5〔V〕 | 15 | 22 暗褐色砂 |
| 6 茶褐色砂 | 16 褐色砂 | 25 黄褐色砂 |
| 7 暗褐色砂 | 17 暗褐色砂 | 26 黄褐色砂 |
| 8 暗褐色砂に灰白色混じる | 22 暗褐色砂 | 27 黒褐色砂 |
| 9 褐色砂(盛土) | 23 黒灰色砂 | 28 黒色砂 |
| 10 褐色砂 | 24 黒色砂 | 29 黒灰色砂(ボソボソ) |
| | | 30 黒褐色砂 |
| | | 31 黄褐色砂 |

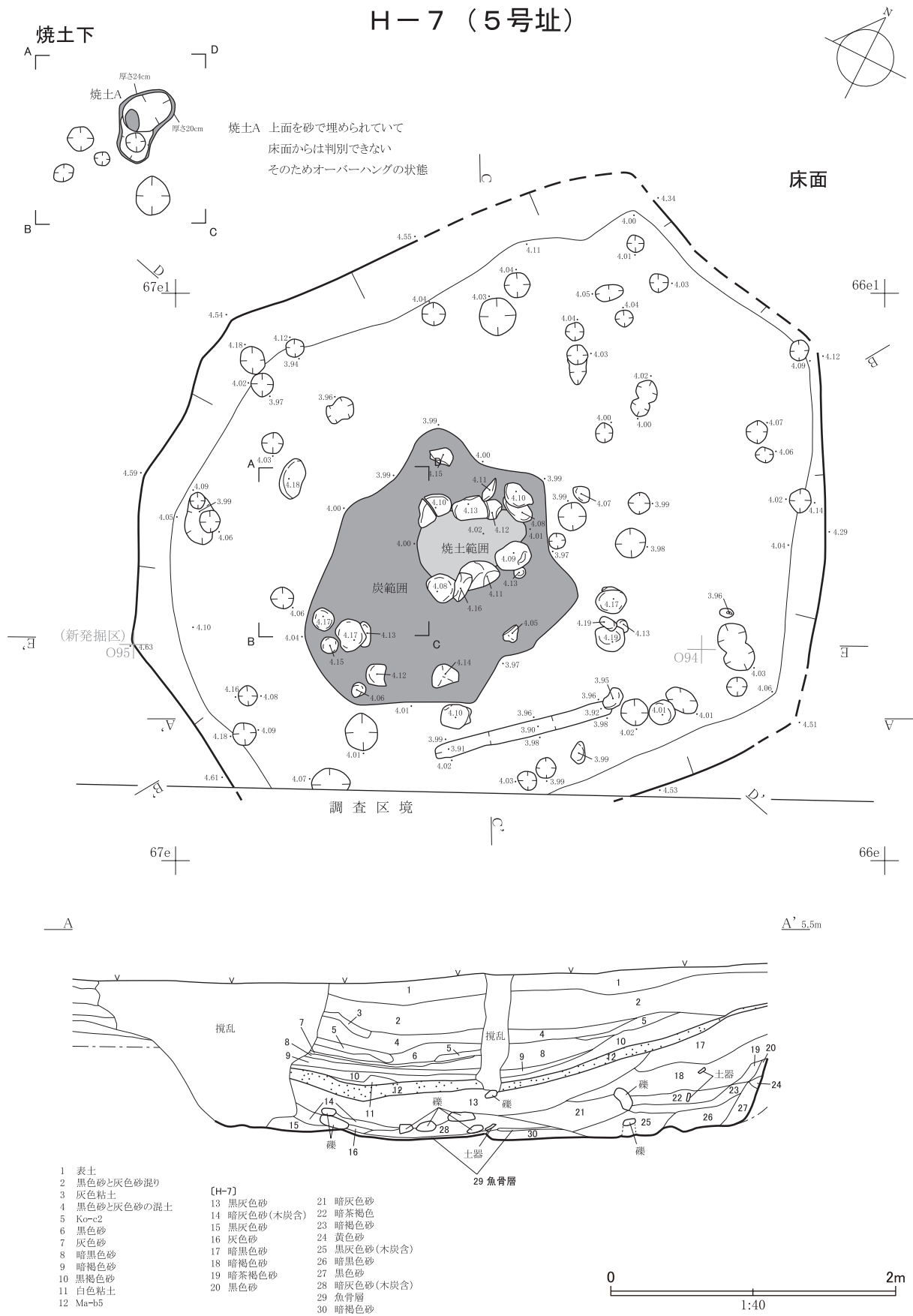
H-5 (20号址)



H-6 (19号址)



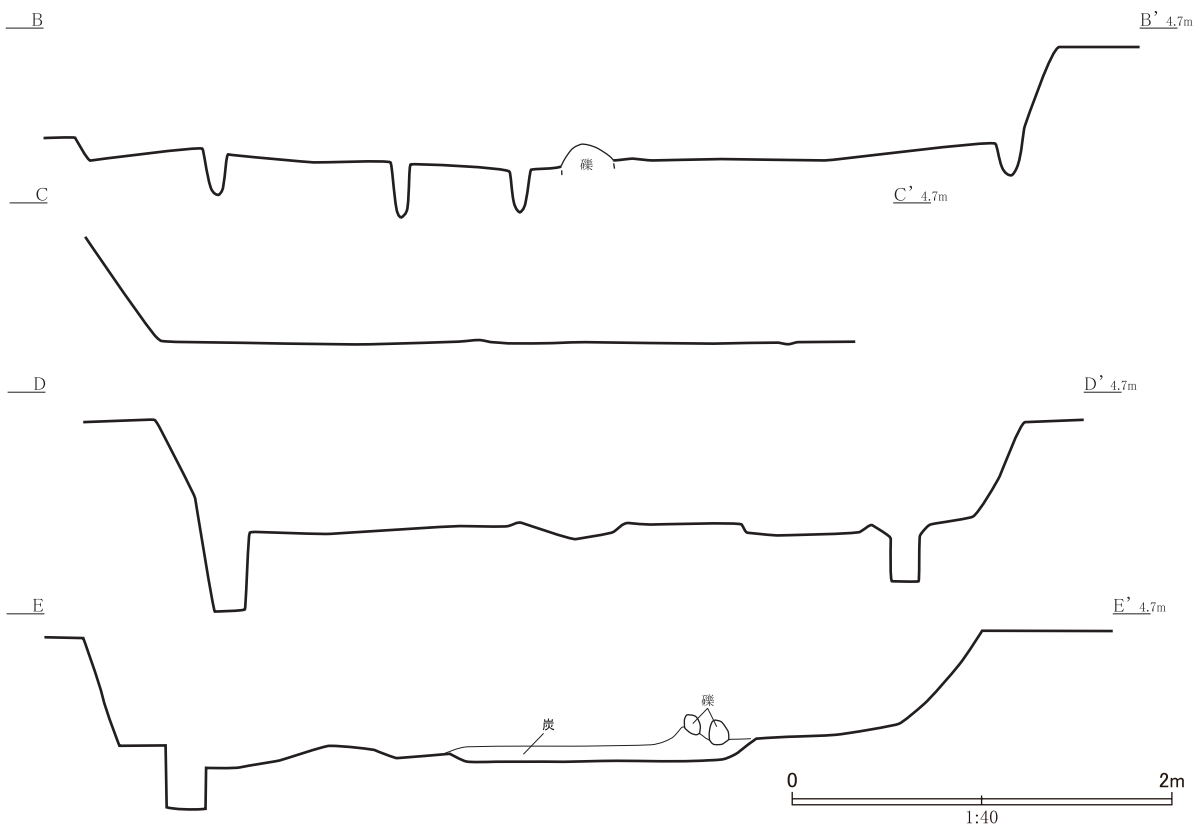
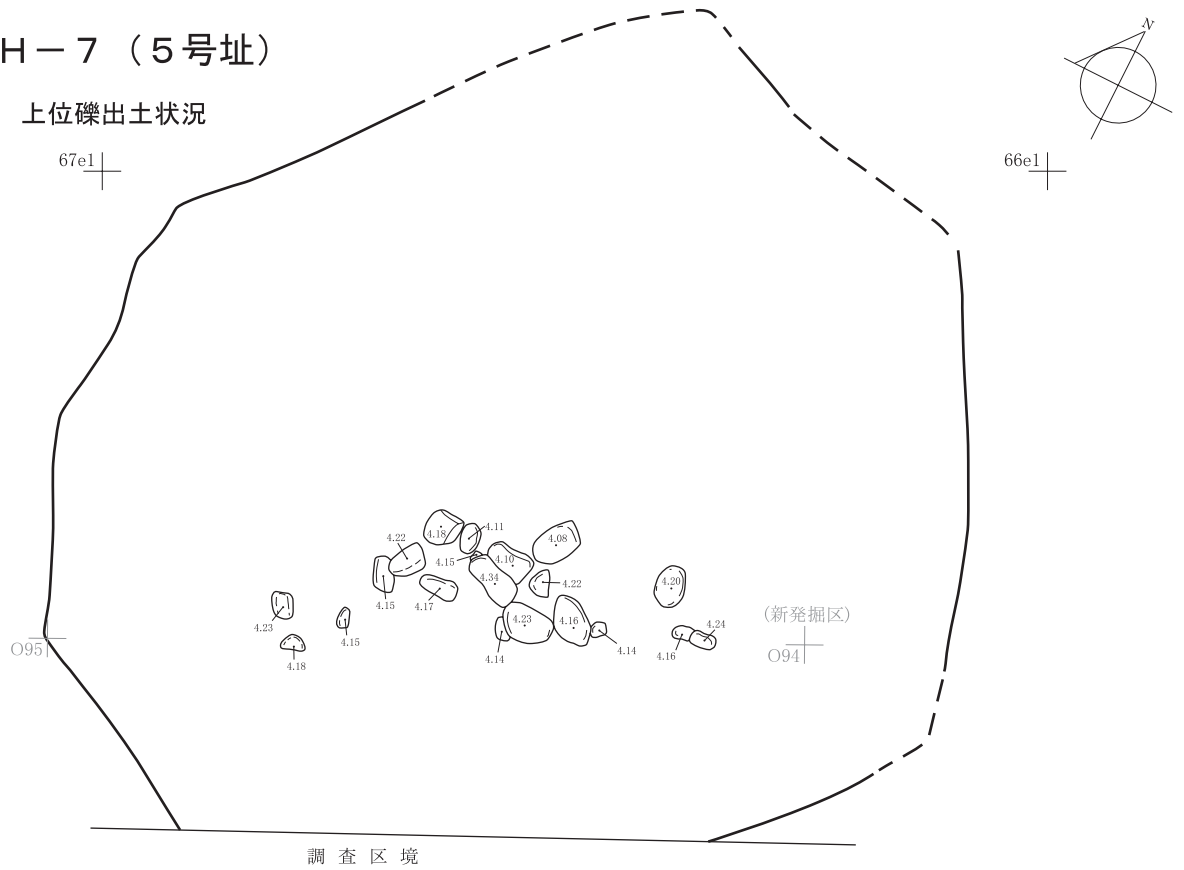
図IV-35 H-5・6 (20・19号址) (2)



図IV-36 H-7 (5号址) (1)

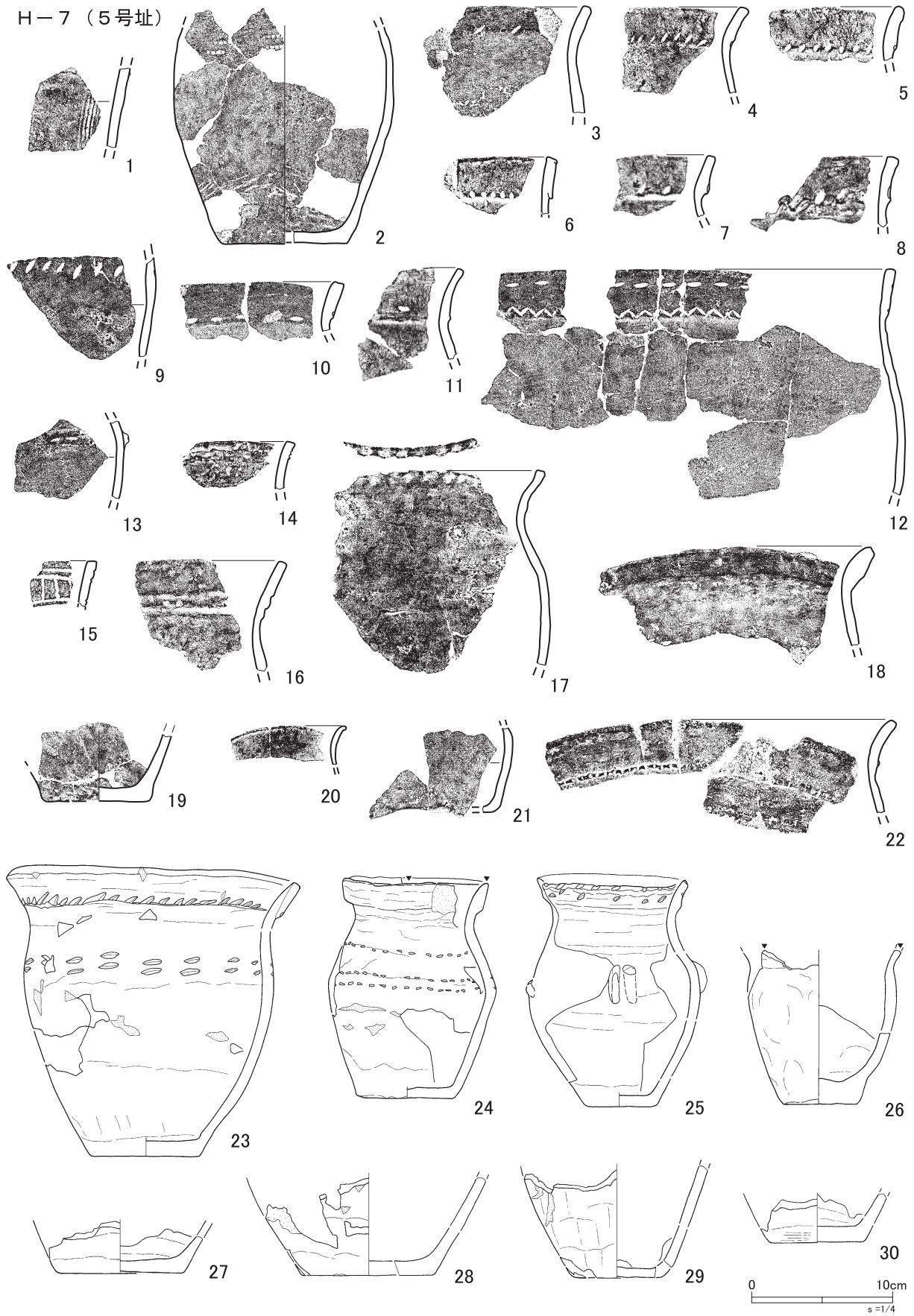
H-7 (5号址)

上位礫出土状況



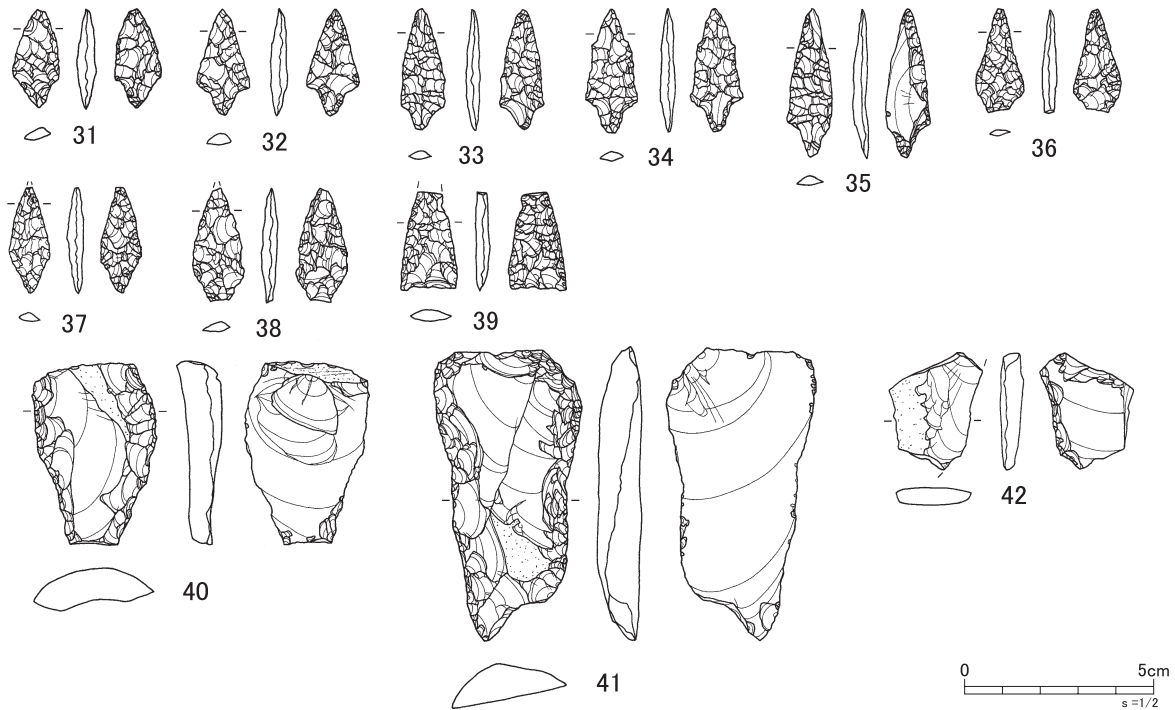
図IV-37 H-7 (5号址) (2)

H-7 (5号址)



図IV-38 H-7 (5号址) 出土の遺物 (1)

H-7 (5号址)



図IV-39 H-7 (5号址) 出土の遺物 (2)

31～39は石鏃。31～38は有茎、39は平基である。有茎のものはいずれも茎部が収斂する形状で、明瞭なカエシがあるものは32・34・35のみである。側縁はほぼ直線的で、さらに34のみ上部に明瞭な屈曲部が見られる。両面全体を覆う加工が施されるものが大半だが、35のみ素材面を大きく残している。40・41はスクレイパー。いずれも両側縁からやや平坦な加工が縁辺全体に施されている。42はRフレイク。裏面の左側縁に細かな加工が施されている。

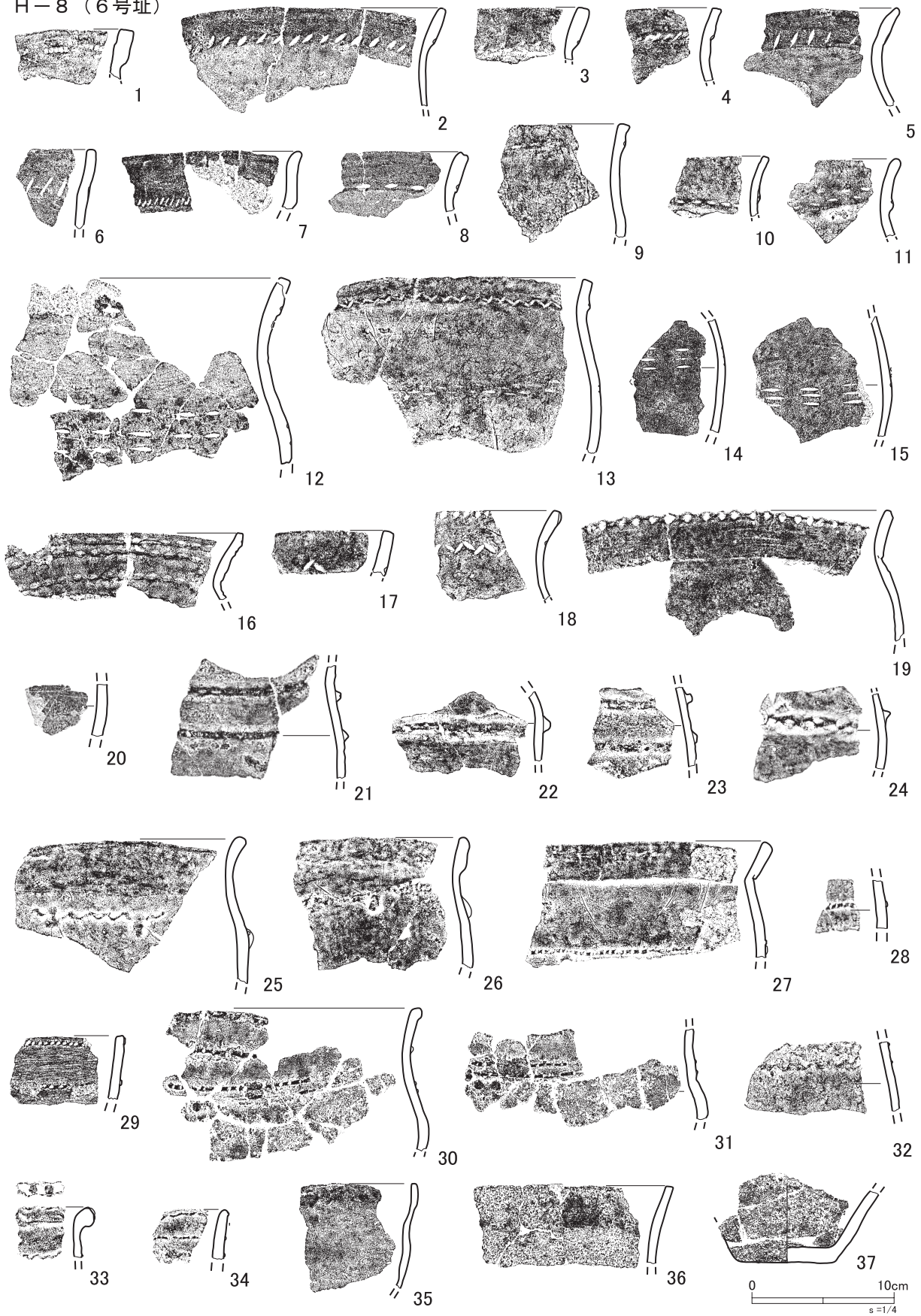
H-8 (6号址) (図IV-40～43 表IV-1・2 図版4・26・54)

Ma-b 5テフラの面が落ち込み、くぼみとして確認できる。南北とも調査区外に広がり全形は不明ながら多角形を呈し、確認できた最大幅は7mを超える。中央部に南北を長軸とする石組炉があり、焼土からは多量の魚骨(サケ科主体)が出土した。炉の東西に厚さ4～5cmの貼床が構築されている(東側の一部は試掘調査により欠落)。周溝は東西の壁際の一部で検出された。支柱穴は壁際で検出し、その内側からも柱穴状土坑が数多く見られる。さらに貼床下から柱穴状小土坑が多数検出され遺物が出土したことから、調査担当者は、床面を再構築し貼床を施した可能性が高いとみている。

遺物は「盛土」・埋土・床(貼床含む)・炉・柱穴から650点余り出土した。土器は刻文土器のほか擬縄貼付文土器も多く出土し、石器等はフレイク類を主体に石鏃や搔器など計69点出土した。また埋土中から礫がまとまって出土し、西側の広い範囲から魚骨(サケ科主体)・小獣骨が出土した。

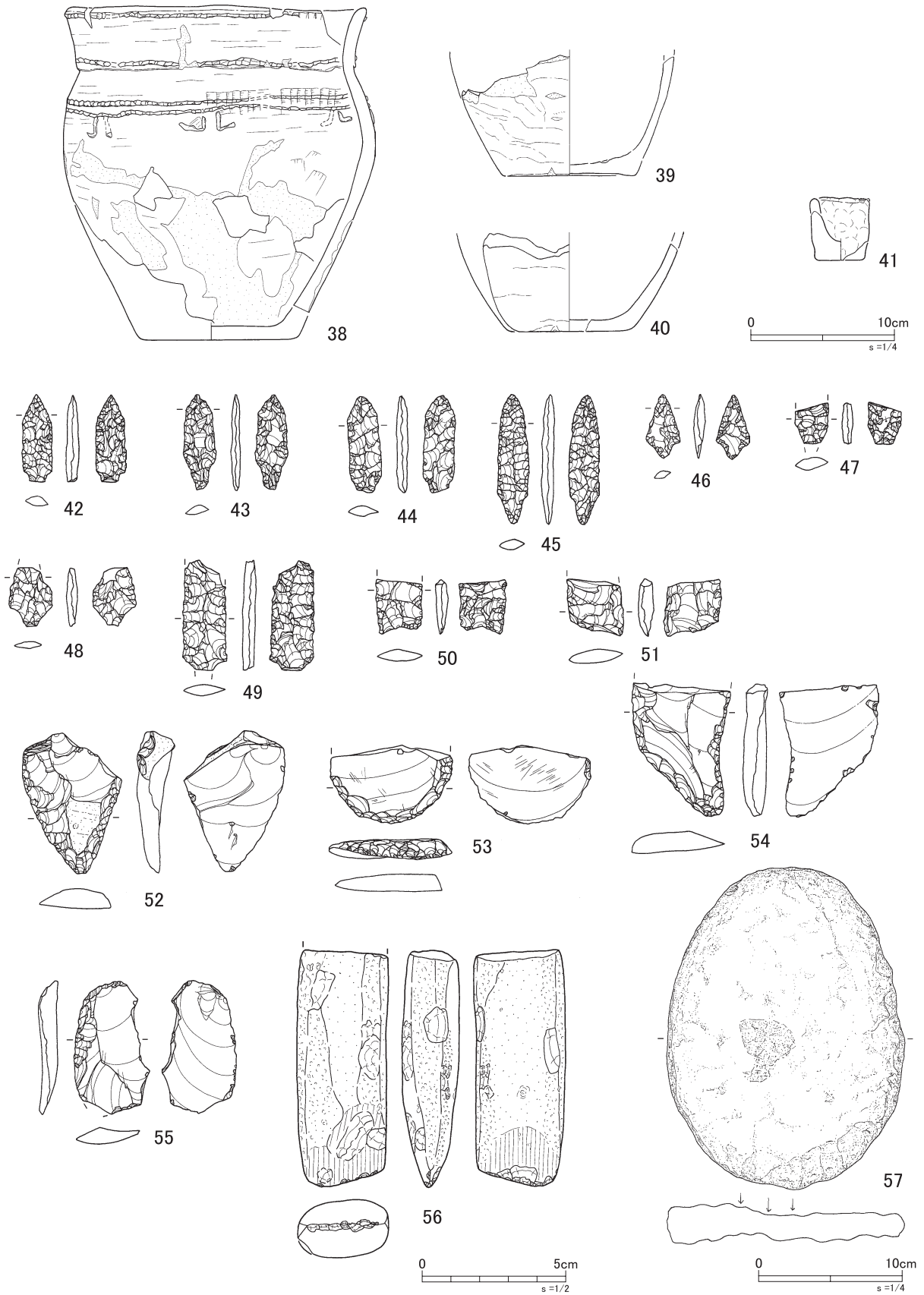
掲載遺物: 1～26は刻文期の土器。1は口縁部に櫛歯文がある。2～7は斜位の刻文、8～16は横位の刻文が施されている。13・17・18は肥厚する口縁下部にハの字形刻文が連続する。16は口縁部に弱い段が3段あり、それぞれ横位の刻文が施されている。18・19は口唇直下に刻み列がある。20は細沈線による文様がえがかれている。21～24は肩部に隆帯が1・2本貼付され、24は弱い波状をなす。25・26は波状の貼付文に付随して貼瘤文が付されている。27～34・38は擬縄貼付文土器。27・30・31

H-8 (6号址)

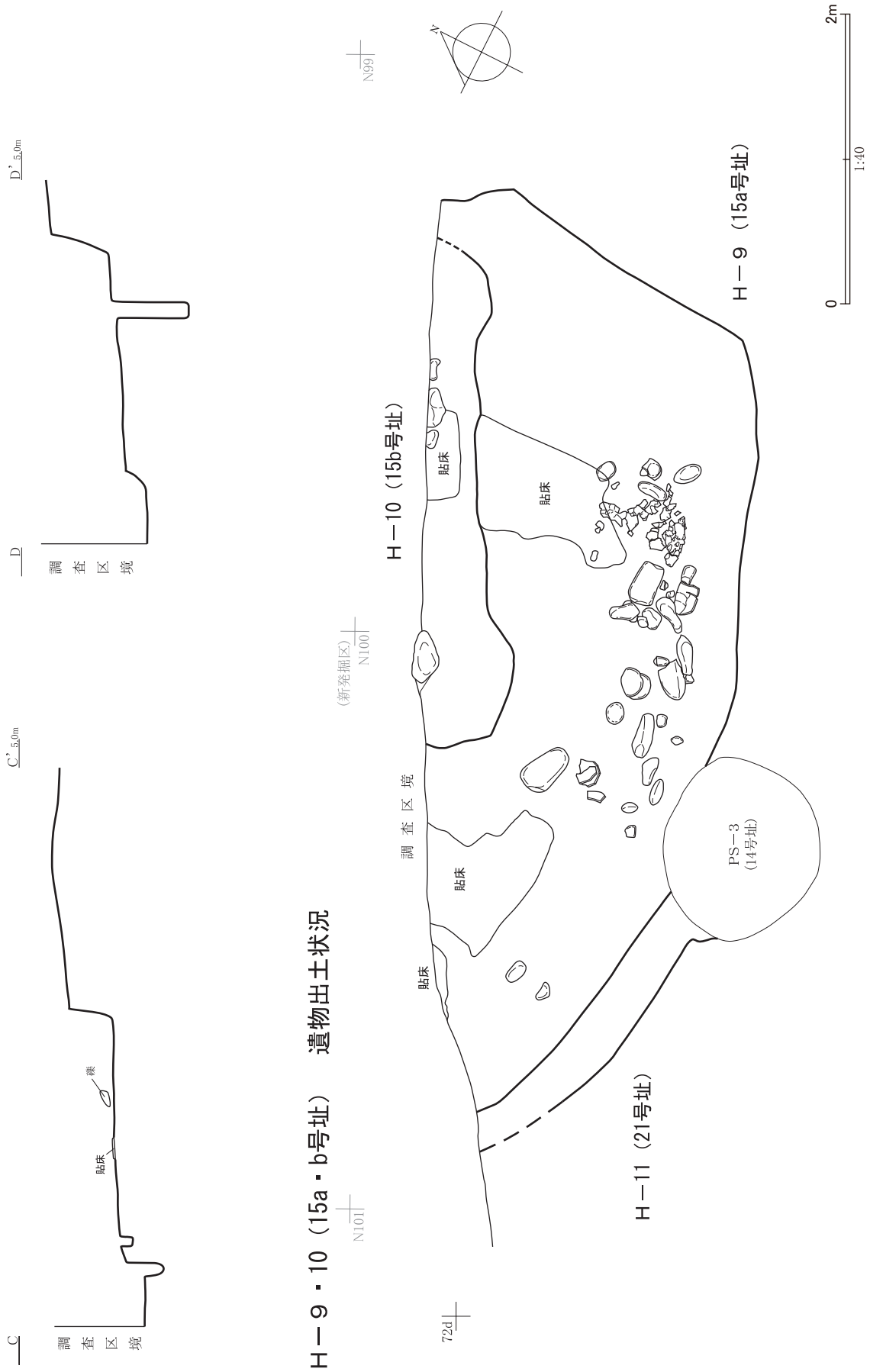


図IV-42 H-8 (6号址) 出土の遺物 (1)

H-8 (6号址)



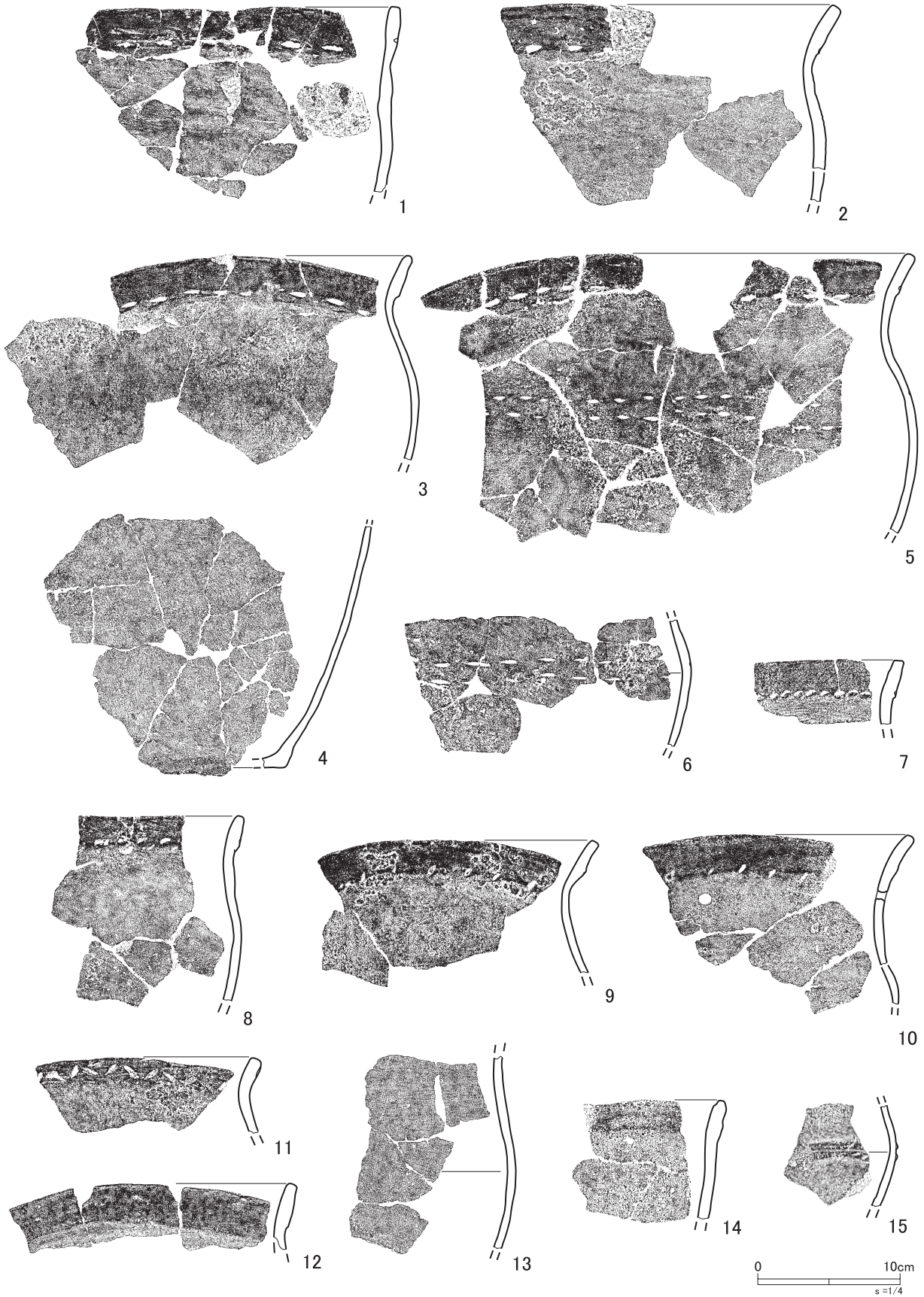
図IV-43 H-8 (6号址) 出土の遺物 (2)



H-9・10 (15a・b号址) 遺物出土状況

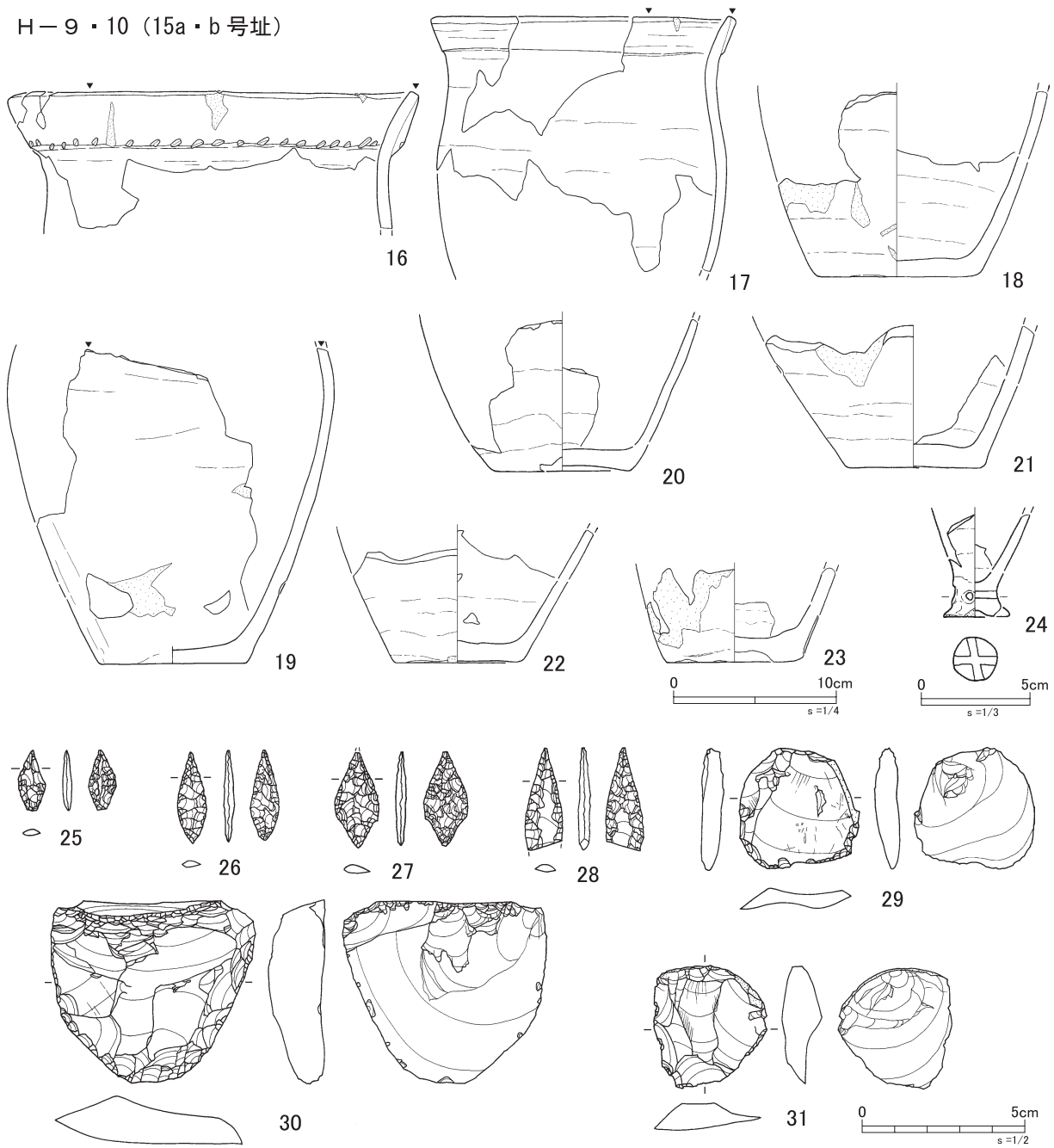
図IV-45 H-9・10・11 (15a・b・21号址) (2)

H-9・10 (15号址)

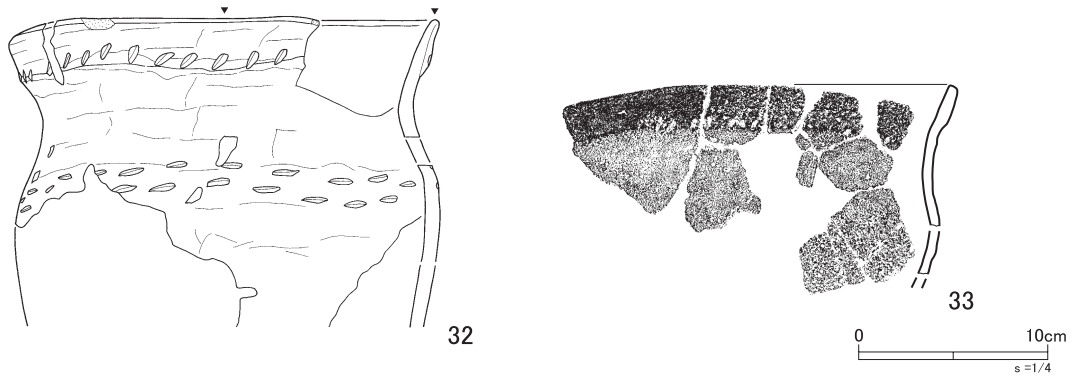


図IV-46 H-9・10・11 (15a・15b・21号址) 出土の遺物 (1)

H-9・10 (15a・b号址)



H-11 (21号址)



図IV-47 H-9・10・11 (15a・15b・21号址) 出土の遺物 (2)

には擬縄貼付文下に小型のボタン状貼付文が付されている。32～34はソーメン文に類似する細い波状の貼付文が施され、33には口唇上に小型のボタン状貼付文が付されている。38は口縁～底部まで復元できた。肥厚する口縁部の上下端、および肩部に2列の擬縄貼付文がめぐり、肩部にはL字状に屈曲する貼付文が垂下し鏝（かすがい）文をなす。35～37・39・40は無文の口縁・底部。36は角形口唇で、口縁部は肥厚しない。41はミニチュア土器。指頭および爪の押捺痕が残る。

42～51は石鏝。42～49は有茎、50は凹基、51は平基である。有茎のものはいずれも茎部が収斂する形状で、明瞭なカエシがあるのは48・49のみである。側縁はほぼ直線的で、特に42～45・49～51は両側縁が平行する部分が高い。さらに、42～44は上部に明瞭な屈曲部が見られる。両面全体を覆う加工が施されるものが大半だが、43・46・47には素材面が残存している。52はナイフ。両側縁全体の平坦な加工により端部が尖るように成形されている。53・54はスクレイパー。53は下端部に円弧状の刃部が作出されている。54は両側縁全体に短い平坦加工が施されている。55はRフレイク。左側縁に加工が見られる。56は石斧。刃部のみ研磨されている。57はくぼみ石。正面中央に凹みが見られる。

H-9・10・11 (15a・15b・21号址) (図IV-44～47 表IV-1・2 図版26・55・56)

70～72ラインで大型の竪穴住居跡を検出した。北側は調査区外に広がる。調査途中までは1軒の住居址(15a号址)としてとらえていたが、北側の道路法面下場の側溝まで拡張した際に、竪穴住居跡H-10(15b号址)に切られていることが判明した。このため切り合いが確認できるまでは、出土遺物のすべてを「15号址」として取り上げた。さらに南西側にもう1軒の竪穴住居跡H-11(21号址)の立ち上がりを検出した。さらに集石土坑PS-3(14号址)と重複し、H-11→H-9→H-10・PS-3の順に新しくなる。

H-9(15a号址)は多角形を呈すると推測される。東西に貼床、南側に周溝を検出した。柱穴状小土坑は25か所ほど検出しており、配列は不規則である。H-10(15b号址)は、H-9(15a号址)の貼床を切って落ち込みとなり、床を形成している。貼床と柱穴状小土坑を検出した。H-11はわずか0.3m幅しか確認できなかったことから、詳細については不明である。

遺物は、H-9・10では埋土・床(貼床含む)・柱穴から465点出土した。特に埋土からは、周辺包含層に連続して多量の遺物が出土した。土器は刻文土器主体で後北C₂・D式が少数ある。石器等はフレイク類を主体に石鏝など計59点出土した。H-11では19点出土し、ほとんどが刻文土器である。

掲載遺物：1～31はH-9またはH-10から出土したもので、大部分はH-9に属する。

1～24は刻文期の土器。大型の甕が目立つ。1～6は横位の刻文が施されているもの。1～5は薄く肥厚する口縁下部に、5・6は胴部に刻文が2列みられる。3・4は同一個体。7・8は口縁部肥厚帯下部に爪形文が、9・10・16は斜位の刻文が連続する。11は口縁部にやや太いハの字形刻文が施されている。12～14・17～23は無文および無文部の口縁・胴・底部。15は胴部の一部に刻み入りの貼付帯があり、擬縄貼付文に類似する。24は小型の台付鉢と思われる。上げ底で、台部に十字に貫通孔が穿たれている。

25～28は石鏝。25・26は両端が尖る形状で、27は有茎、28は下半部が欠損している。25は正面に素材面を残す。26は平坦で精緻な加工が両面全体に施されている。27の基部は収斂する形状で、カエシの突出はわずかである。28は正裏面とも素材面を大きく残している。29・30はスクレイパー。両者とも湾曲する縁辺に加工されている。30は素材打面とバルブの厚みを除去する加工も行われている。31はRフレイク。左側縁の一部に細かな加工が施されている。

32・33はH-11(21号址)から出土した刻文土器。肥厚する口縁下部に斜位の刻文が連続し、32は

胴部に横位の刻文が2列施されている。33は表面が剥落し、文様が不鮮明である。

H-12 (8号址) (図IV-48・49 表IV-1・2 図版4・27・56)

H-9 (15号址) の西側、72ライン付近で検出した。Ma-b 5テフラの面が落ち込み、くぼみとして確認できる。覆土から礫がまとまって出土した(図IV-48上段)。竪穴は南北とも調査区外に広がり、また南側に幅0.6mほどの攪乱があり、全形は不明だが多角形を呈すると推測される。竪穴中央部付近から円形の炉址を検出した。支柱穴は炉址を囲むように設けられている。ほかに柱穴状小土坑を多数検出した。炉址の下部には1.3m×1m、深さ0.6mの不整形の土坑が掘込まれ、集石が詰まっている。土坑中には炭化物が多量に残され、炭化していない木質部も残されている。集石には炭化物がタール状に付着し、煤けた状態を呈している。また被熱によってひび割れしている礫も見られる。

調査担当者はこのことから、竪穴底面下部に集石土坑が掘り込まれ、その後これを砂で覆って炉を設けていると考えている。したがって竪穴の構築時は住居としての用途ではなく別の目的であったが、その後集石土坑を廃棄し住居あるいは小屋として使用した、と推測している。

遺物は「盛土」・埋土・床・炉・柱穴から270点余り出土した。土器は刻文土器を主体とし擬縄貼付文土器が少数出土し、石器等はフレイク類を主体に石鏃や搔器など計30点出土した。

掲載遺物：1～17は刻文期の土器。1は肥厚する口縁下端に斜位の刻文、1・2は胴部に縦位の櫛歯文が連続する。3は肥厚する口縁の上下部に横位の刻文が施されている。4～6は肥厚する口縁下部に斜位の刻文があるが、5は肥厚帯から下にはみ出している。7～9は肩部に刻みのある貼付文が施されており、擬縄貼付文に近い。いずれも口縁部は肥厚しない。7は口縁部に刻み列に近い刻文と刺突列が施されている。8は鏃文^{かすがい}。9もそれに近い。10は無文の口縁部。11は小型の甕で、肥厚する口縁下端に斜位の刻文のほか、口縁部と胴部に横位の刻文がめぐる。12～17は無文部の胴～底部。13はやや丸みのある立ち上がりである。

18は石鏃。有茎で基部が収斂する形状である。カエシの突出はわずかで、裏面に素材面を残す。19はスクレイパー。下端にかけて錯交状の加工が施されている。20・21はすり石。正面にすり面が見られる。22はくぼみ石。正面に二か所の凹みが見られる。

H-13 (7号址) (図IV-50・51 表IV-1・2 図版27・57)

Ma-b 5テフラの面が落ち込み、上位には白色火山灰が堆積する。竪穴の南側は調査区外に広がり、また南側に幅0.6mほどの攪乱がある。平面形は隅丸方形を呈しているが、全形は不明である。竪穴の中央部東寄りに炉址が検出されている。攪乱部分を除いて壁際に0.04～0.08mの深さの周溝が確認できる。柱穴は壁際の要所にあり、それ以外は不規則に見られる。

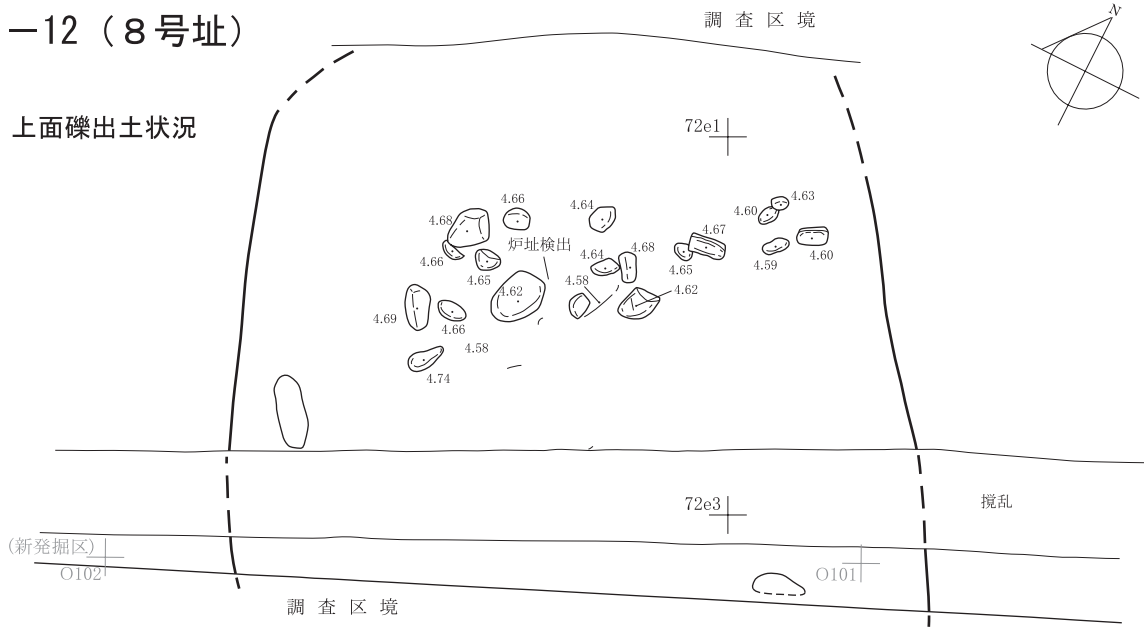
遺物は「盛土」・埋土・床・炉・柱穴から228点出土した。土器は刻文土器を主体とし擬縄貼付文土器が少数出土し、石器等は石鏃とフレイク類が計36点出土した。

掲載遺物：1～12は刻文期の土器。1は横位の刻文と縦位の櫛歯文が間隔をあけて施文されている。2～4は肥厚する口縁に横位の刻文が施されるが、3・4はやや斜位である。5は1列、6は2列の斜位の刻文が肥厚する口縁に施されている。7は小型の壺で、口縁部の断面が湾曲する。頸部に細い貼付文がめぐり刻みが施されている。8・9は同一個体で、肥厚する口縁部の上下端、胴部に擬縄貼付文に近い貼付帯がめぐる。10も胴部に同様の文様がある。11・12は底部。

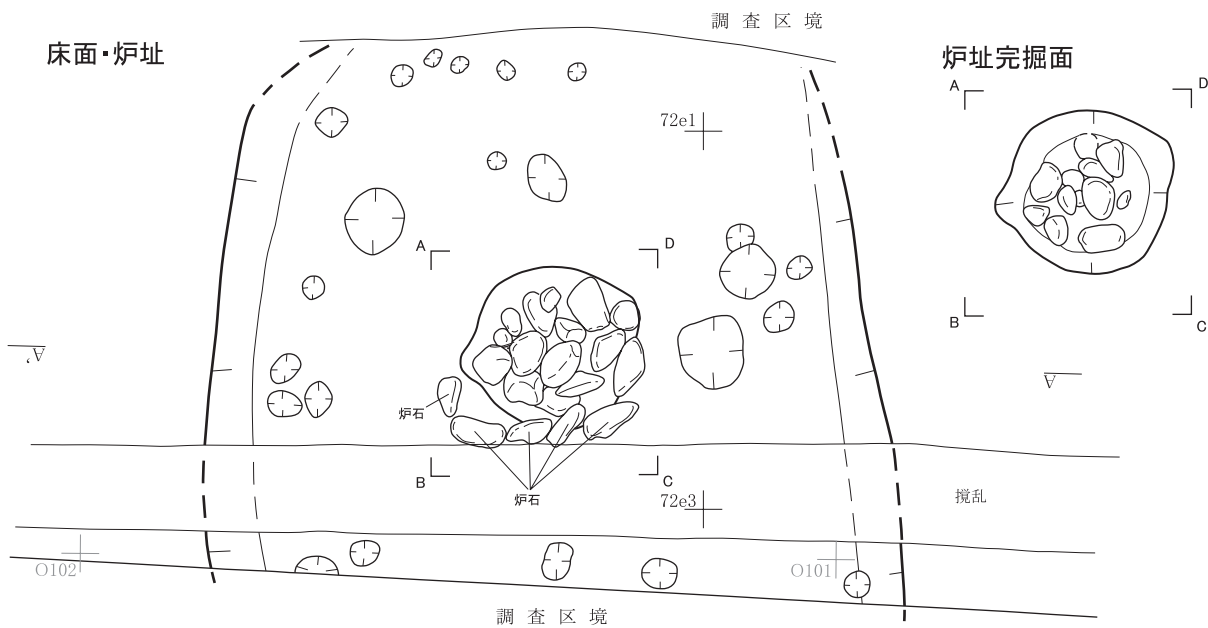
13～16は石鏃。13・14が凹基、15が平基、16が有茎である。15は加工が不安定で、不均一な形状となっている。

H-12 (8号址)

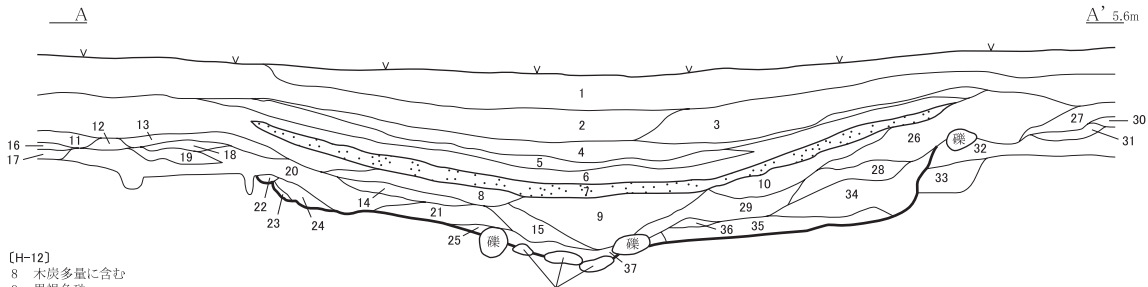
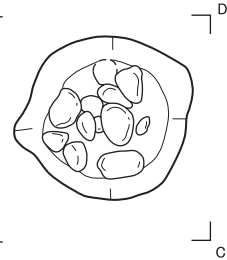
上面礫出土状況



床面・炉址



炉址完掘面

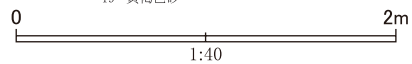


[H-12]

- 8 木炭多量に含む
- 9 黒褐色砂
- 10 黒色砂と黄褐色砂の混土
- 14 黄褐色砂
- 15 暗褐色砂
- 20 暗褐色砂
- 21 暗褐色砂
- 22 暗褐色砂
- 23 黄褐色砂
- 24 黒褐色砂
- 25 黒褐色砂
- 26 黒褐色砂
- 28 黄褐色砂に木炭含有
- 29 黒灰色砂に木炭多量
- 34 暗褐色砂
- 35 暗褐色砂(黒色砂と黄褐色砂の混土)
- 36 黄褐色砂に木炭多量
- 37 黒色砂と黄褐色砂の混土 木炭多量

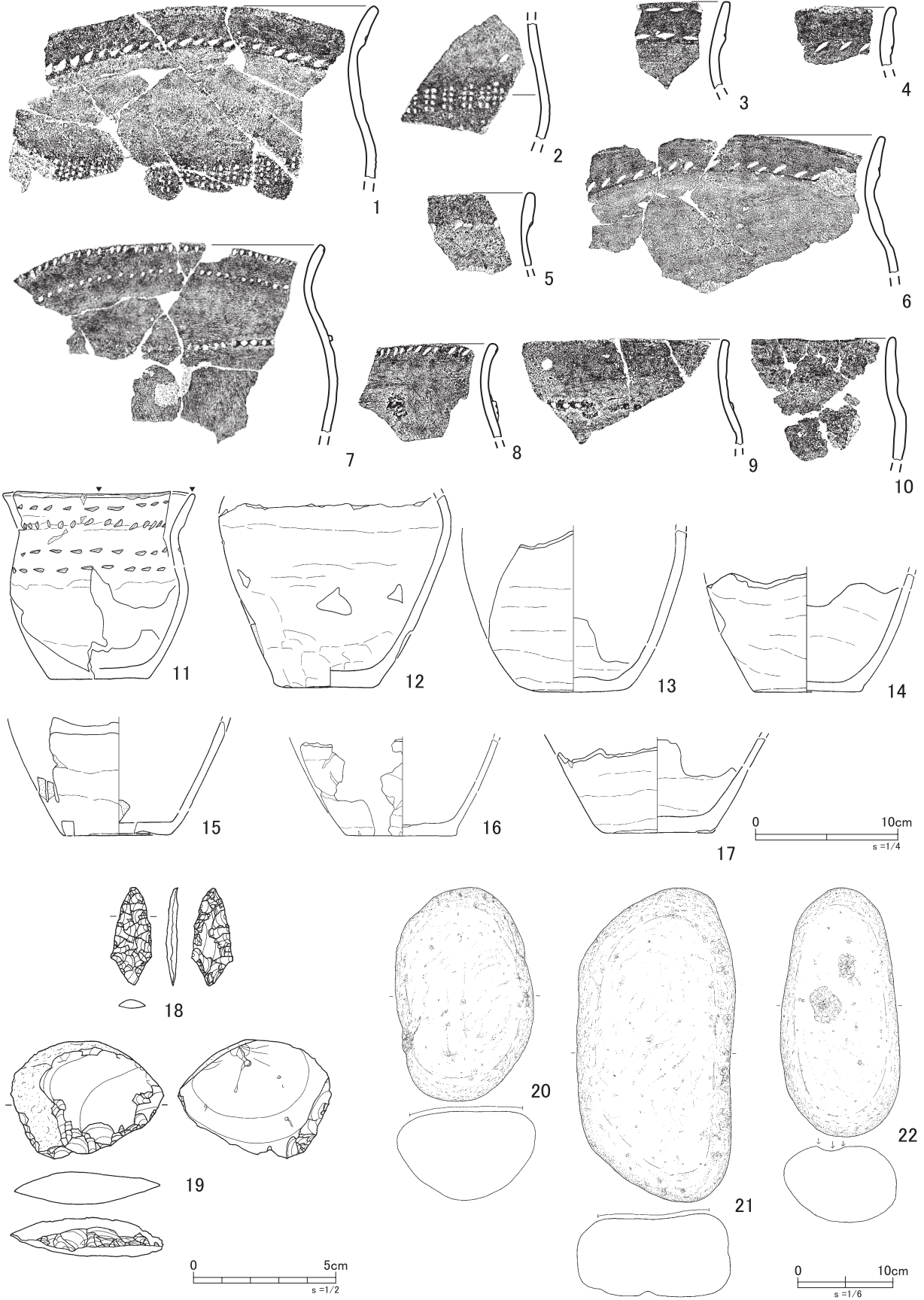
- 1 表土
- 2 黒色土(砂混じり)
- 3 暗褐色砂に黒色砂がブロック状に混じる
- 4 Ko-c
- 5 灰色砂
- 6 黒褐色砂(+)
- 7 Ma-b5

- 11 暗黒色砂
- 12 黄褐色砂
- 13 黒色砂
- 16 黄褐色砂
- 17 暗黒色砂
- 18 暗褐色砂
- 19 黄褐色砂
- 27 黒褐色砂
- 30 黄褐色砂
- 31 暗褐色砂
- 32 暗褐色砂
- 33 暗黒褐色砂



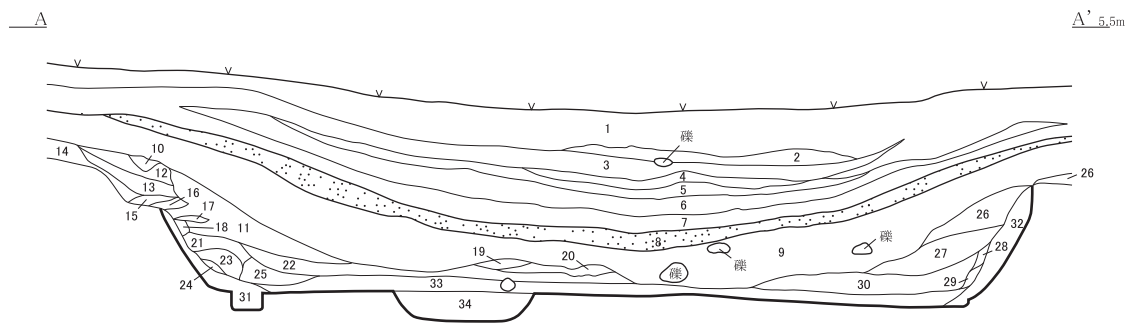
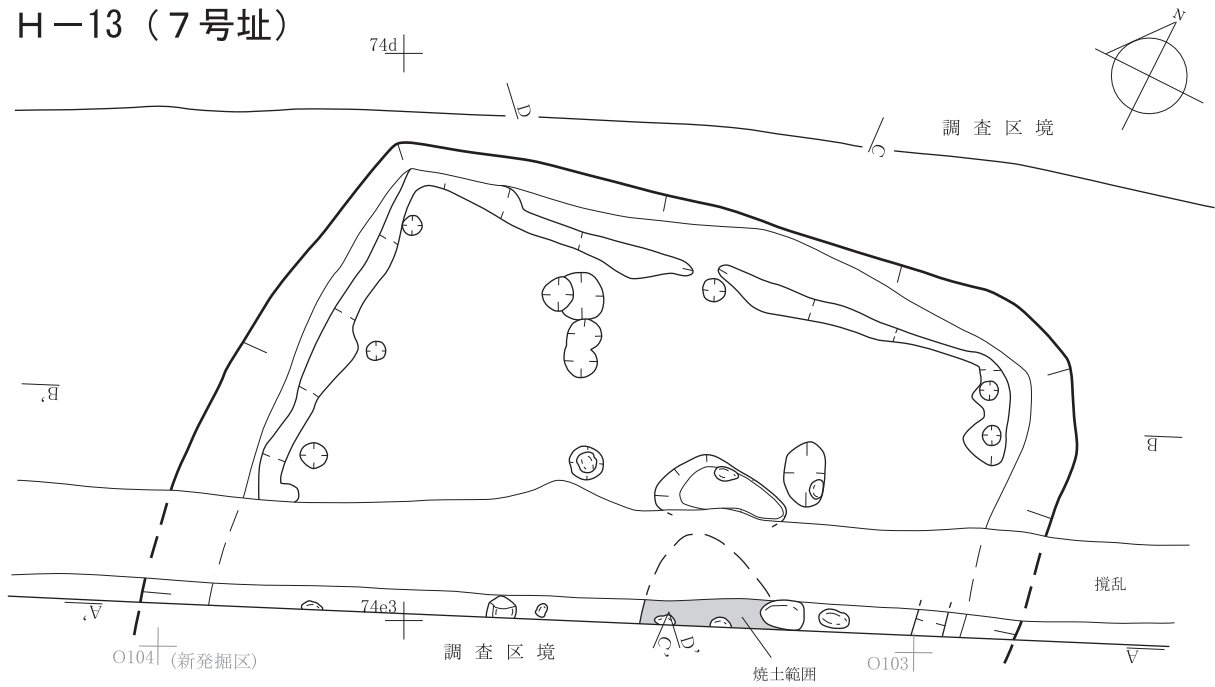
図IV-48 H-12 (8号址)

H-12 (8号址)

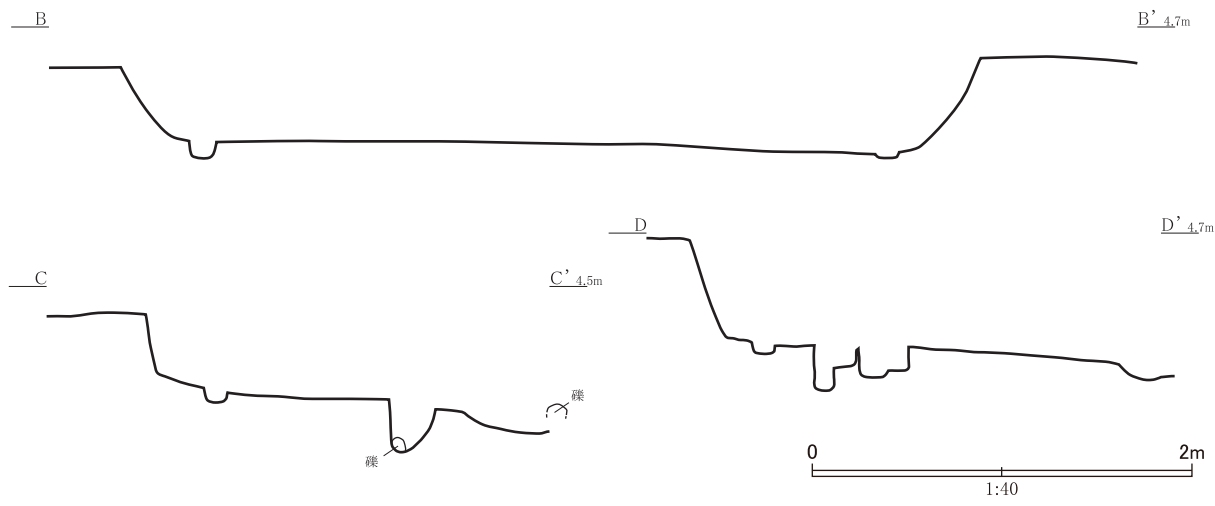


図IV-49 H-12 (8号址) 出土の遺物

H-13 (7号址)

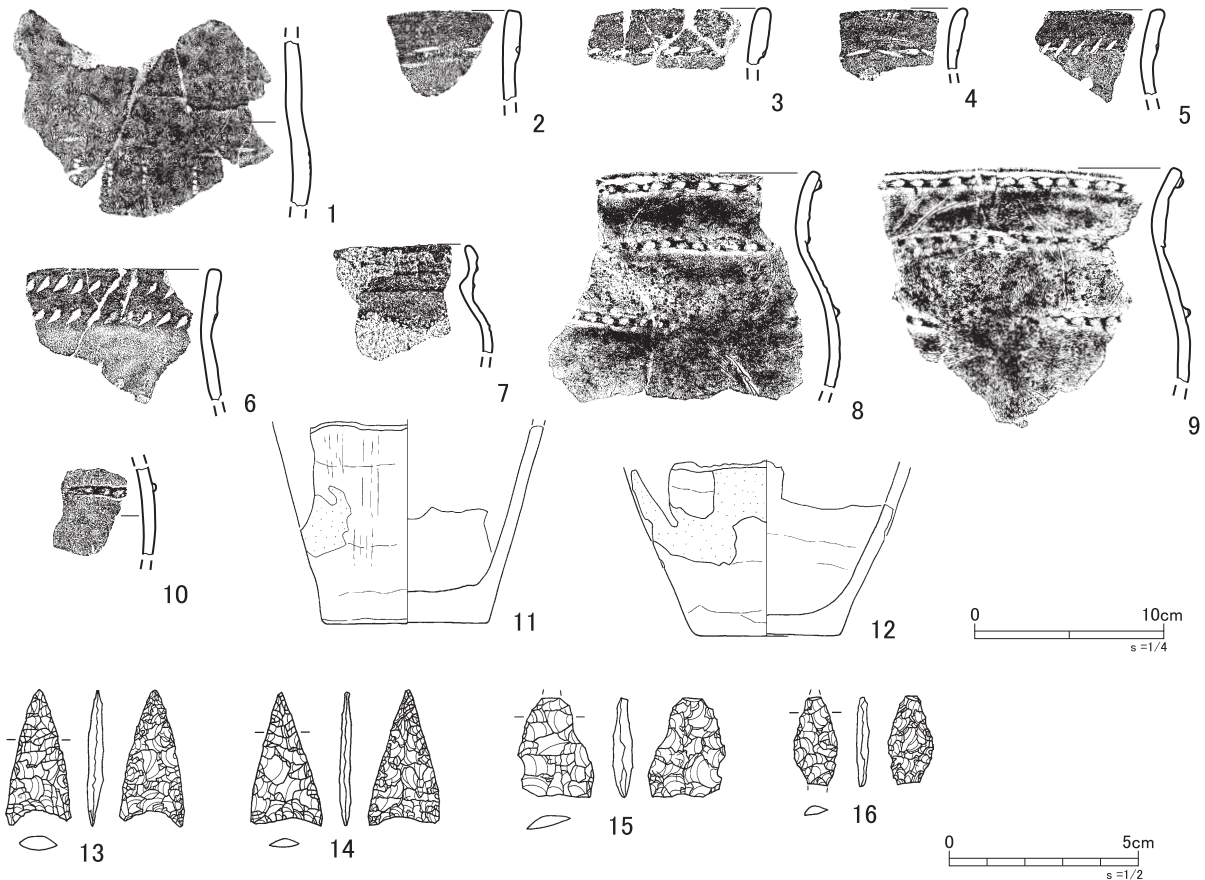


- | | | |
|------------------|----------------|-----------|
| 1 表土 | 10 黄褐色砂 | 21 黒黄色砂 |
| 2 黒褐色土(粘性) | 11 黄褐色砂 | 23 黒灰色 |
| 3 暗茶褐色砂(黒色土と混ざる) | 12 黒色砂 | 24 汚れた黄砂 |
| 5 Ko-c2 | 13 木褐色砂(木炭粒含む) | 25 黒灰色砂 |
| 6 灰色砂 | 16 黄褐色砂 | 26 暗褐色砂 |
| 8 暗茶色粘土 | 17 黄褐色砂 | 27 汚れた褐色土 |
| 9 Ma-b5 | 18 黒色細砂 | 30 黒灰色砂 |
| 9 黒暗灰色砂 | 19 黒色・黄色砂混土 | 34 焼土 |
| 14 黒褐色土 | 20 黒色砂(木炭入り) | |



図IV-50 H-13 (7号址)

H-13 (7号址)

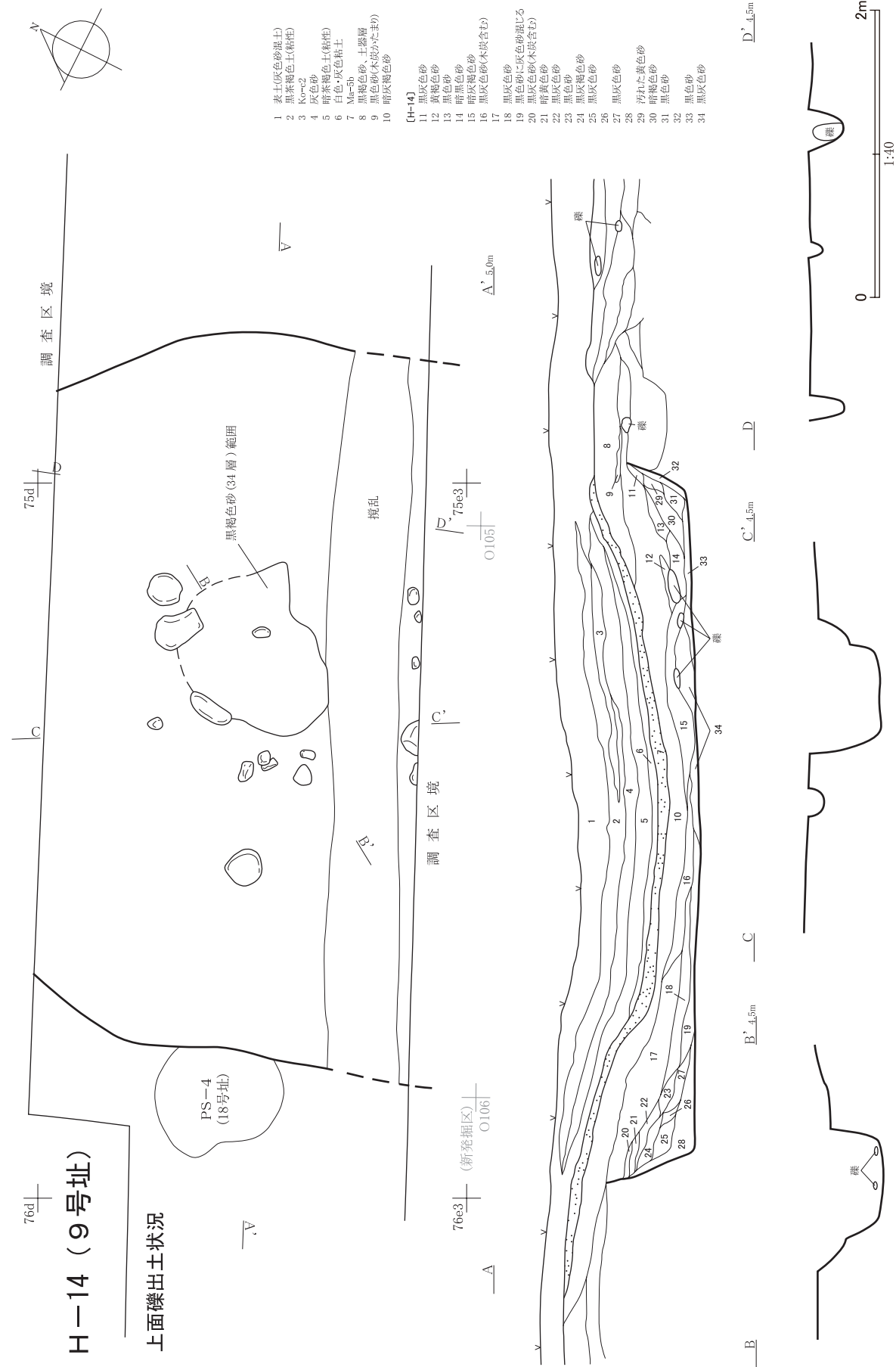


図IV-51 H-13 (7号址) 出土の遺物

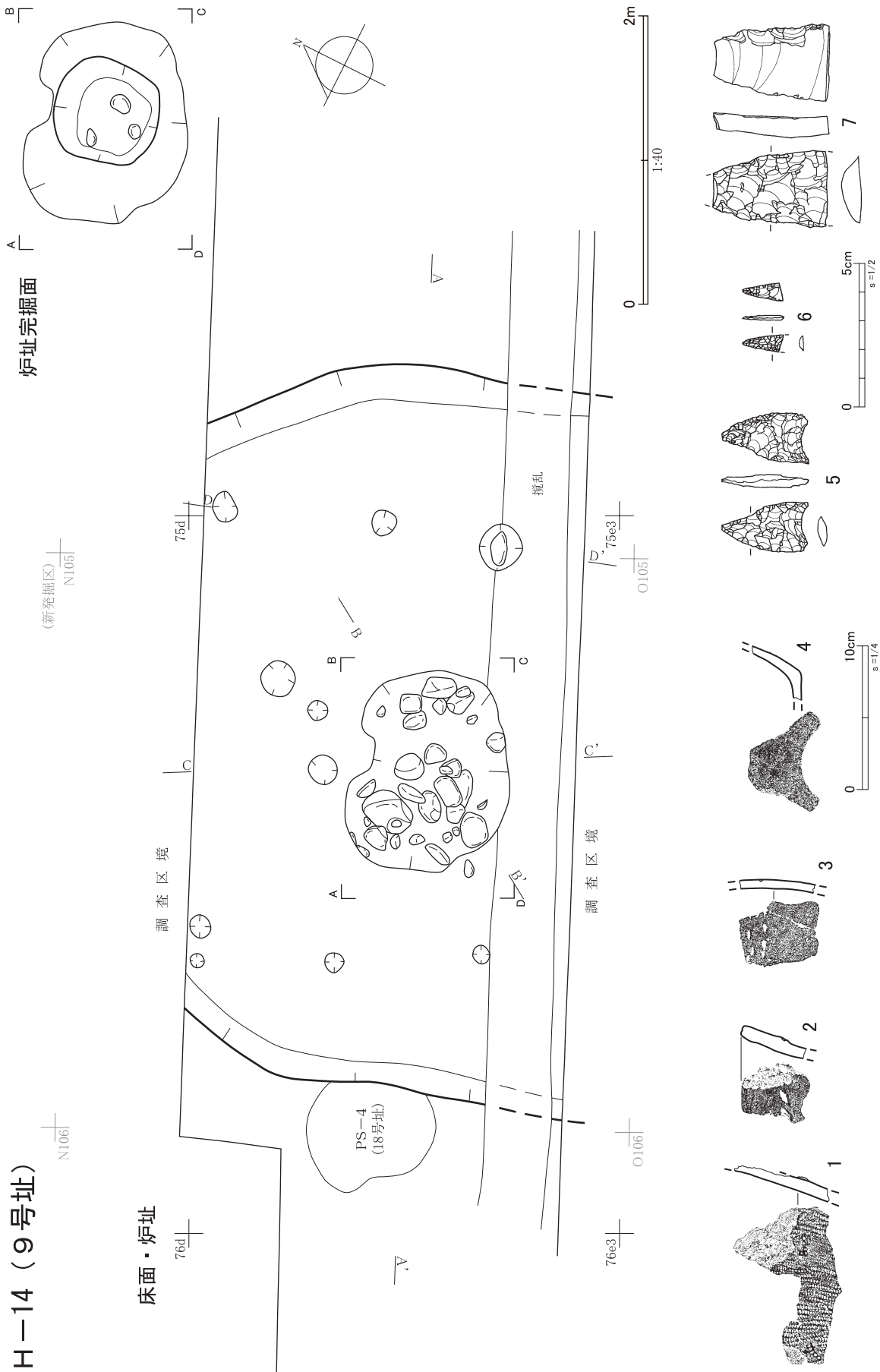
Ma-b 5テフラの面が落ち込み、上位には白色火山灰が堆積する。竪穴は南北とも調査区外に広がり、また南側に幅0.6mほどの攪乱があり、全形は不明だが五～六角形を呈すると推測される。竪穴中央からやや東側の位置で炉を検出した。炉は1m前後の大きさで不整形であり、石囲いの礫は北側で2個残存するのみである。柱穴は、東側では壁から1m、西側では0.85m壁から離れて南北にはほぼ直線状に並んでいる。炉の下部には、中央部から西側に延びる落ち込みがある。東西1.35m、南北1.1mで、深さ0.5mの集石土坑である。土坑中には礫が詰め込まれ、炭化物が多量に残されている。また炭化していない木質部も残されている。この土坑の下部は、下位に堆積している礫浜の層（表面に筋状に鉄分が付着している）まで掘り込まれている。土坑の礫は一部を除いて持ち込まれたと考えられるが、下位の礫も使用されていると思われる。

調査担当者はこのことから、竪穴下部で集石土坑が掘り込まれ、その後にこれを砂で覆って焼土を設けている、と理解している。当初の目的はH-12 (8号址)と同様に住居以外として構築され、その後に住居あるいは小屋などに転用されたものと推測している。

掲載遺物：1は宇津内Ⅱb式。擬縄貼付文の一部が残る。2～4は刻文土器。2は肥厚する口縁部に斜位の、3は胴部に2列の横位の刻文が施されている。5・6は石鏃。5は凹基、6は下半部が欠損している。7はナイフ。上下端が欠損している。両側からの平坦加工が施されている。



図IV-52 H-14 (9号址) (1)



図IV-53 H-14 (9号址) (2)

(2) 土坑墓

墓とみられる土坑1基（GP-1）を検出した。時期は、出土土器から刻文期である。

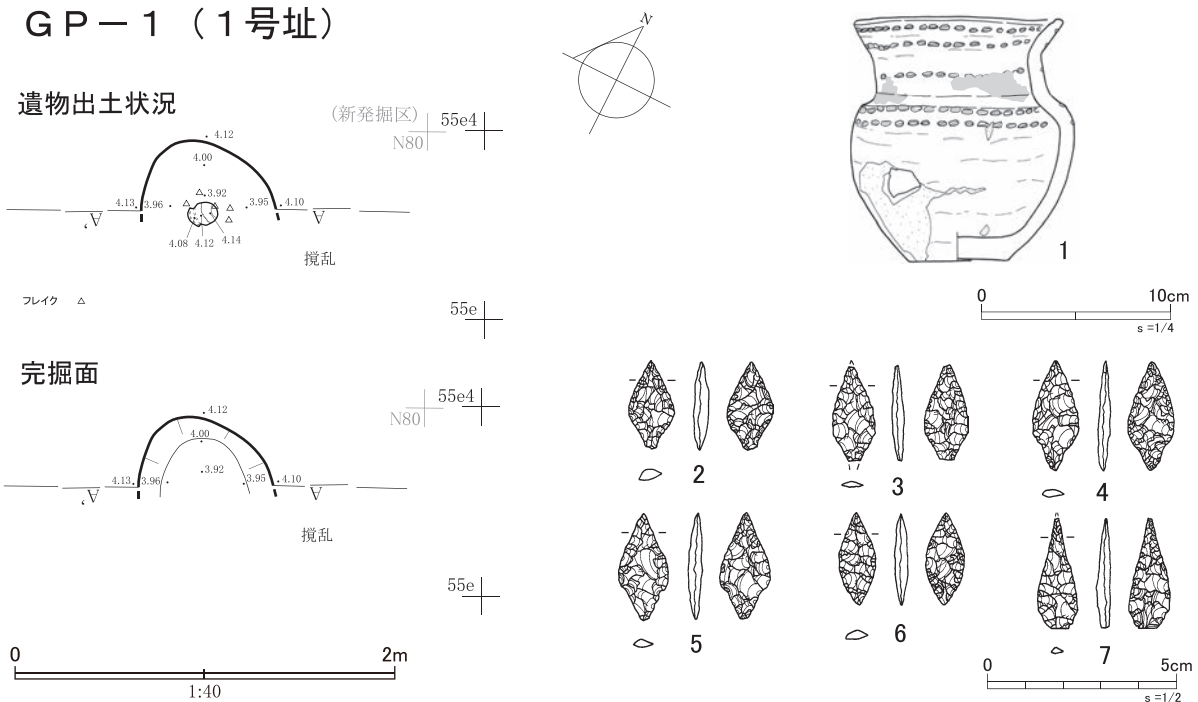
GP-1（1号址）（図IV-54 表IV-1・2 図版28・57）

竪穴住居跡群から25m以上東側に離れて土坑を検出した。周囲は遺構・遺物とも希薄である。土坑の南側半分ほどは、ケーブル埋設による攪乱を受けている。長軸方向は北北西-南南東で、規模は推定1m×0.7m、深さは検出面から0.2mほどである。完形のオホツク土器が横倒しで出土し、その周囲から石鏃が5点出土した。

掲載遺物：1は刻文土器。小型の甕で、頸部はすぼまり口縁は肥厚しない。文様は横位の刻文が口縁～頸部に3列、肩部に2列めぐる。炭化物が内外面とも多量に付着している。ほぼ完形であるが、胴下部に2×1.5cmほどの欠損部があり周囲が剥落しひび割れが走っている。意図的な破壊行為の可能性はある。

2～7は石鏃。2～5は有茎、6は両端が尖る木葉形、7は凸基である。茎部は収斂する形状で、4・5のみにわずかなカエシが見られる。6は平坦で精緻な加工が全面的に施されている。7は先端部が非常に細身に成形されている。石錐の可能性もある。

GP-1（1号址）



図IV-54 GP-1（1号址）

(3) 集石を伴う土坑

集石土坑・集石炉を含む、礫集中を伴う土坑を4基（PS-1～4）検出した。時期は、検出面や出土遺物から刻文期とみられる。

PS-1（32号址）（図IV-55 表IV-1・3）

H-8（6号址）の南東側に隣接して検出した。覆土下位と推定できる位置には0.7m×0.5mの範囲に集石があり、坑底中央部にやや大型の礫が1個出土した。炭化物が多量に含まれている。小規模な集石土坑とみられる。

PS-2 (17号址) (図IV-55 表IV-1・3 図版28・57)

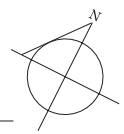
H-8 (6号址)の西側、F-1 (22号址)に隣接して検出した集石土坑である。土坑はほぼ円形を呈し、深さは検出面から0.36mである。土坑中央部を中心に礫が積み重なっている。集石中には炭化物が密集し、板状の材も出土している。集石は炭化物がタール状に付着し煤けた状態を呈している。また被熱によってひび割れしている礫も見られる。遺物は刻文土器を主体に73点出土した。

掲載遺物: 1・3・4は刻文期の土器。1はやや肥厚する口縁に横位の刻文が2列施されている。3は壺形に近い。肥厚する口縁下部に爪形状の刻文、肩部には太い隆帯がめぐり刻みが施されている。

PS-1 (32号址)

(新発掘区) N95

N95

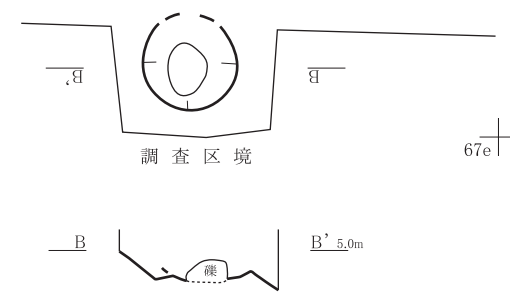
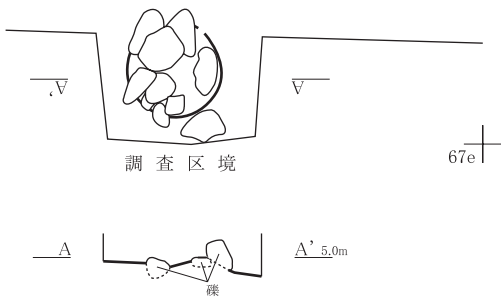


検出面

67e4

完掘面

67e4

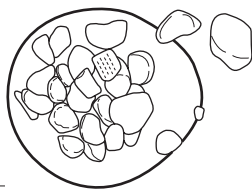


PS-2 (17号址)

69e2

検出面

69e3



(新発掘区) O97

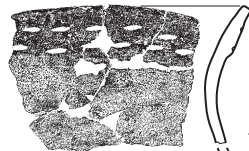
69e2

完掘面

69e3



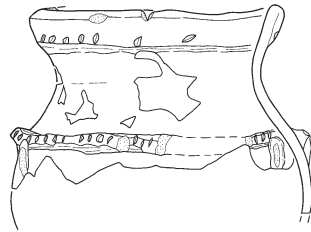
O97



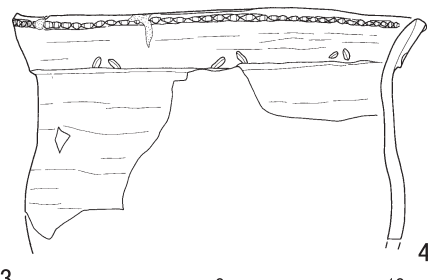
1



2

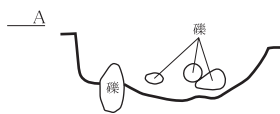


3

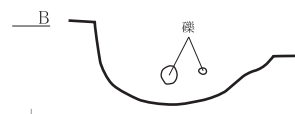


4

0 10cm
s=1/4



A' 4.8m



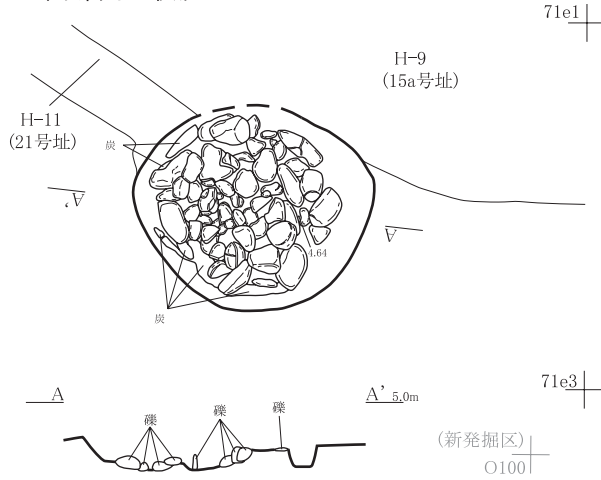
B' 4.8m

0 2m
1:40

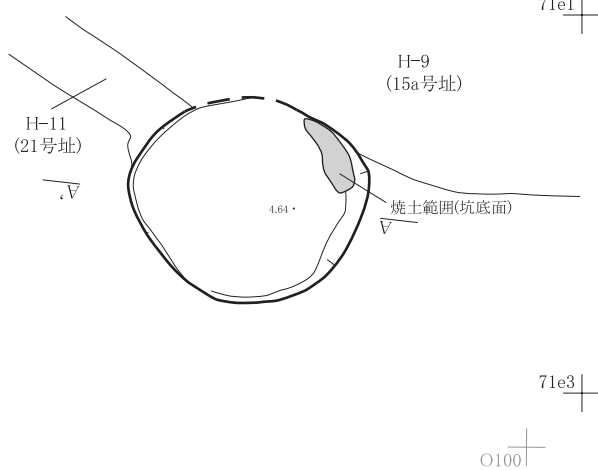
図IV-55 PS-1・2 (32・17号址)

PS-3 (14号址)

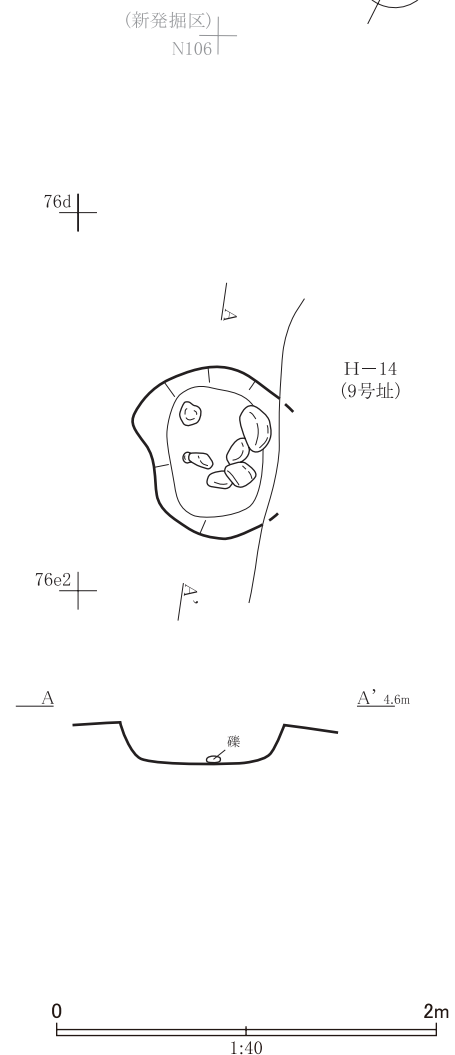
上面礫出土状況



完掘面



PS-4 (18号址)



図IV-56 PS-3・4 (14・18号址)

隆帯から垂下する貼付文があるが、剥落して不明である。4は口唇直下に刻みの施された貼付文がめぐり、口縁下部にハの字状の刻文が間隔をあけて施文されている。2は擬縄貼付文土器。器面がにぶい黄褐色を呈する。

PS-3 (14号址) (図IV-56 表IV-1 図版28)

H-9 (15a号址)とH-11 (21号址)を切って構築された集石土坑である。おおむね楕円形を呈している。坑底付近から大小の礫が平面的に密集して出土した。集石には炭化物がタール状に付着し、煤けた状態である。また被熱によってひび割れしている礫も見られ、集石中から炭化物や燃え切っていない木質部が多量に出土した。坑底面に焼土ブロックがみられる。

PS-4 (18号址) (図IV-56 表IV-1 図版28)

H-14 (9号址)の西側に隣接して検出した。同遺構によって切られている。土坑は不整形を呈する。坑底付近から礫がややまとまって出土した。炭化物が多量に含まれていた。

(4) 石組炉

3か所(SF-1~3)検出した。H-8(6号址)とH-9(15号址)との間が約10m離れており、その間で2か所(SF-1・2)を検出し、竪穴住居跡群の西縁で1か所(SF-3)を検出した。時期は、検出面や出土遺物から刻文期である。

SF-1 (13号址) (図IV-57・58 表IV-1・3 図版5・57)

長楕円形とみられる浅いくぼみに炭化物混じりの砂が堆積しており、その周囲に礫が並んでいる。南側では灰のブロックを数か所検出した。さらに南側は調査区外へ続く。刻文土器が2点出土した。

掲載遺物：1は刻文期の土器。口縁は肥厚せず、胴部に2列の刺突列が2段施されている。2は底部。

SF-2 (10号址) (図IV-57 表IV-1・3 図版5)

不整楕円形を呈する皿状のくぼみの中央部に焼土、周囲には木炭が多量に含まれていた。焼土からは魚骨(サケ科主体)や炭化物、小陸獣の骨片が出土している。焼土・木炭範囲の周囲を取り巻くように礫が配されている。遺物は刻文土器を主体に24点出土した。

SF-3 (16号址) (図IV-57 表IV-1)

おおむね円形を呈するが、南側の一部に攪乱がある。浅い落ち込み中には炭化物が堆積し、ブロック状の焼土も見られる。炭化物範囲の周囲から、やや不規則な配列の礫群を検出した。礫は炭化物がタール状に付着し煤けた状態である。また被熱によってひび割れている礫も見られた。

(5) 焼土

前述のH-8(6号址)とH-9(15号址)との間で3か所(F-1~3)検出した。時期は、検出面や出土遺物から刻文期である。

F-1 (22号址) (図IV-57・58 表IV-1・3 図版6・57)

H-8(6号址)の西、PS-2(17号址)に隣接して検出した。楕円形を呈している。焼土の北西側から焼けた礫が出土した。魚骨(サケ科主体)が出土している。焼土および周辺から計123点の遺物が出土している。土器は刻文土器がほとんどであるが、宇津内II b式が少数混じる。石器等はフレイク類5点が出土した。

掲載遺物：3~6は刻文期の土器。3は肥厚する口縁下端に粘土がめくれ上がる爪形文が連続する(指圧式浮文)。4~6は肩部に貼付帯がありその上に刻みが施されるもの。4にはさらに短い横位の貼付帯、5・6には貼瘤状の縦位の貼付文が付されている。7は底部で、底面が厚い。

F-2 (11号址) (図IV-57・58 表IV-1・3 図版57)

SF-1(13号址)の北側に隣接している。0.6mの範囲に焼土が分布する。やや大型の被熱礫が3点出土した。

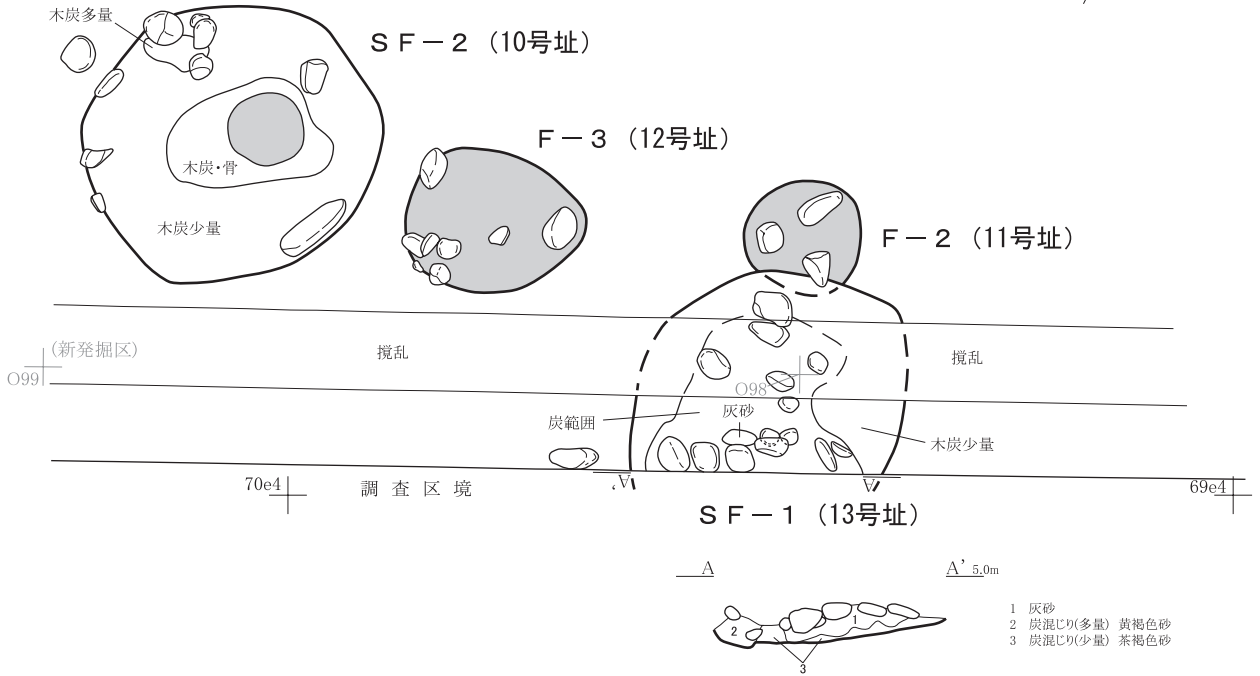
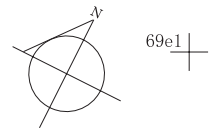
掲載遺物：8・9は刻文期の土器。8は薄く肥厚する口縁の上端に刻み状、下端に横位の刻文(爪形状)が施されている。9は波状の貼付文に近い貼付帯が付されている。

F-3 (12号址) (図IV-57・58 表IV-1・3 図版57)

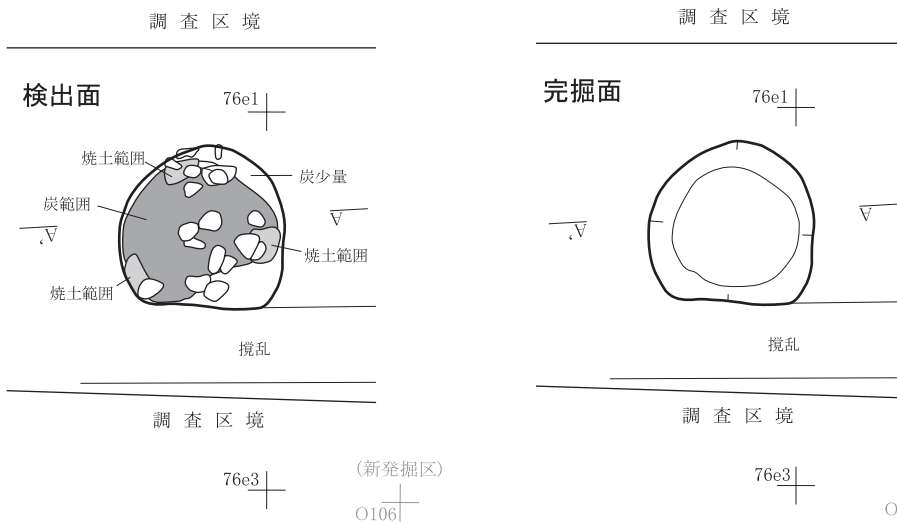
SF-1(13号址)とSF-2(10号址)の間にある。東西0.95m、南北0.75mの範囲に焼土が分布する。被熱礫が出土している。

掲載遺物：10・11は刻文期の土器。10は幅の狭い口縁部肥厚帯に斜位の刻文が施されている。11は胴部に刻み入りの貼付帯が付されている。12は石核。円礫を素材として、上面からの剥離のみ行われている。

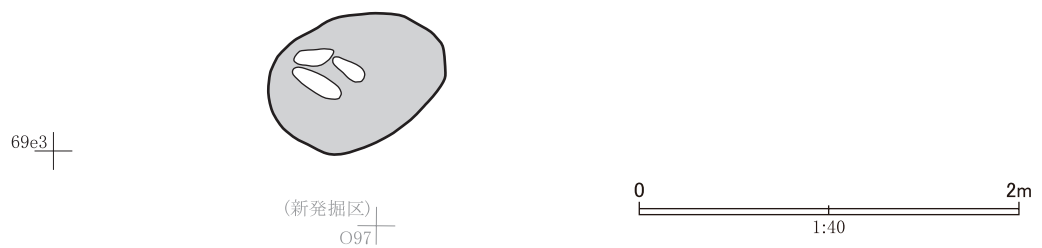
S F - 1・2 (13・10号址)
F - 2・3 (11・12号址)



S F - 3 (16号址)

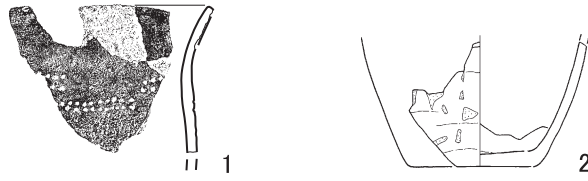


F - 1 (22号址)

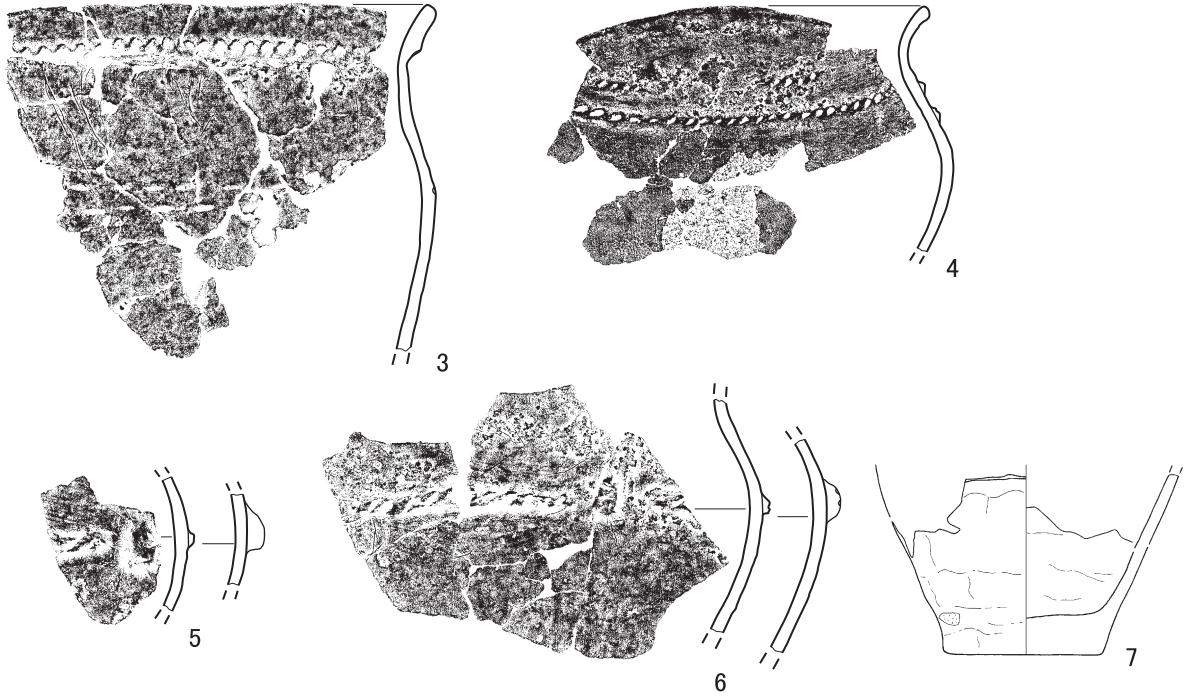


図IV-57 S F - 1 ~ 3・F - 1 ~ 3 (10~13・16・22号址)

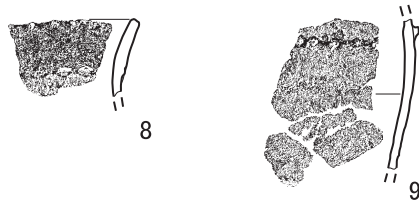
S F - 1 (13号址)



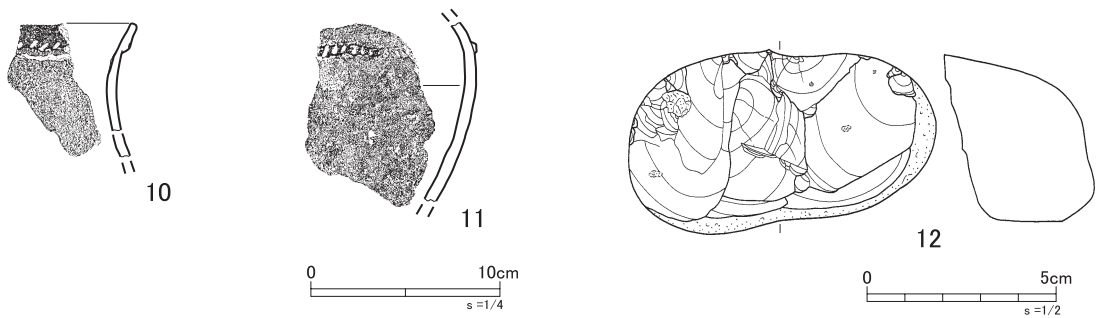
F-1 (22号址)



F-2 (11号址)



F-3 (12号址)



図IV-58 S F・F出土の遺物

3 包含層出土の遺物

(1) 土器

縄文時代の土器 (1~7)

後期~晩期の土器が12点出土した。このうち後期の土器は、調査区西部(C地区)、Ⅶ層に広がる礫層の上から出土した。

手稲式 (1)

1は口径約35cmの大型深鉢。LR縄文の地文を太沈線で区画し、口縁部無文帯を設けている。ていねいに磨かれている。

鯨潤式 (2~4)

2~4は大型深鉢の口縁・胴部で、同一個体。緩やかな波状口縁で外反し、胴部は強く屈曲する。口唇直下と胴屈曲部に太い刻み列がそれぞれ1列施され、太沈線による幅広の曲線带状文を組み合わせた文様がえがかれている。透明・白色鉱物を多量含み、器面がザラついている。該期の道央部の土器にも類似する胎土がある。

堂林式 (5~7)

5・6は器壁が薄く、小型の鉢と思われる。口唇直下に細沈線による痕跡的な刻み列とその下に突瘤文が施され、胴部に2本組の曲沈線がえがかれている。7は切出形口唇。羽状縄文地に突瘤文が施されている。

続縄文時代の土器 (8~49)

590点出土した。初頭の土器は調査区中央西部(C地区)、H-15(37c号址)付近から出土した。宇津内Ⅱa式は、C地区の98~111ラインを主体に、116ライン付近、137ラインの礫上からも出土した。宇津内Ⅱb式はC地区の97~112ラインを主体に、115ライン付近のほかB地区からもわずかに出土した。後北C₂・Dは全体数が少ないが、C地区の99~115ラインを主体に、128ライン付近のほかB地区の54・59ライン付近からもややまとまって出土した。

(栄浦第二・第一遺跡の土器群相当) (8)

8は無文地の口縁部に変形工字文が施されている。

宇津内Ⅱa式 (9~20)

9~17は深鉢で、胴部がふくらみ口縁がやや内湾する。縦走する縄文を地文とし、口縁部に突瘤文(9・12~17)、5~6本の縄線(9・11~17)、その下に縄端刺突列(9・11~14・16・17)がめぐる。また擬縄貼付文が施され(9~14)、9は台形状の突起下、12は波頂部下に縦位の文様が配されている。口唇はやや丸みをもって内傾し、口唇上にも縄文が施文される(9・12~16)。17の口唇は外・内両側から交互に刻みが施されている。18は上記のうち、縄線・縄端刺突列を欠く。19は口縁波頂部にある環状の把手。上面に5本の縄線文が施文されている。20は完形に近い小型の鉢。R-1(29号址)付近から出土した。大2+小2の単位で構成され、口縁部に波頂部と環状の把手がそれぞれ対向する。口縁部には突瘤文・5本の縄線文・縄端刺突列がめぐり、擬縄貼付文が波頂部下で縦位に下り、斜行して把手下まで続き連絡する。また底面縁辺部に縄端刺突が周回する。

宇津内Ⅱb式 (21~35)

21~28は細い貼付文による文様があるもの。21は楕円の細い貼付文付きの波頂部。22は5本の縄線・縄端刺突列など宇津内Ⅱa式の要素が残る。波頂部突起下以外の貼付文上に、細かい刻みが施されている。23は突起下に細い貼付文が垂下する。24・25は同心円文に近い二重楕円文と連絡する貼付文が

ある。26は地文のRL縄文→突起下の楕円文→口縁部の縄線→そのほかの縦位・横位・楕円の細かい貼付文、の順に施文されている。27は波頂部付近がやや外に張り出す。28はV字状の貼付文上に細かい縄端刺突が施されている。29～31は底部。29・31は上げ底。32～35はミニチュア土器。32・34は同一個体と思われ、33も近似する。地文のRL縄文および縄線施文後、細かい貼付文による文様が施されている。底面に縄端刺突列が周回する。35は突起に貫通孔がある。

後北C₂・D式 (36～49)

36～40は微隆起線による文様のあるもの。36は注口付きの深鉢。注口は比較的大型である。器面が明褐色を呈し、その上に微隆起線およびそれに沿って灰白色粘土（化粧粘土）を用いて文様が配されており、彩色が行われているような視覚的効果がある。37は大型の深鉢。口縁に2本の擬縄貼付文、突起下に縦位と胴下部に横位の区画帯縄文を配し、弧線を主体とした帯縄文・微隆起線・三角列点による文様を密に充填している。38・39も弧線を主体とした文様がみられる。40は帯縄文に沿う擬縄貼付文から斜位に微隆起線が施されている。41～43は擬縄貼付文、帯縄文、三角列点がみられ、44は三角列点を欠く。45は大型の深鉢。当遺跡の該期の土器では数少ない無文地で、口縁部に2本の擬縄貼付文がめぐる。46～48は底部。46・47は縦走する帯縄文が底面付近まで施されている。49はミニチュア土器。弧線の帯縄文による文様が施文されている。

オホーツク文化期の土器 (50～75)

824点出土した。刻文土器を主体に、擬縄貼付文土器が少数ある。刻文土器は調査区中央部(B地区)の竪穴住居跡群のある62～72ラインを主体に、調査区中央部～西部(B地区西部・C地区)からわずかに出土した。擬縄貼付文土器は、H-8(6号址)付近の68～69ラインで出土した。

刻文期の土器 (50～70)

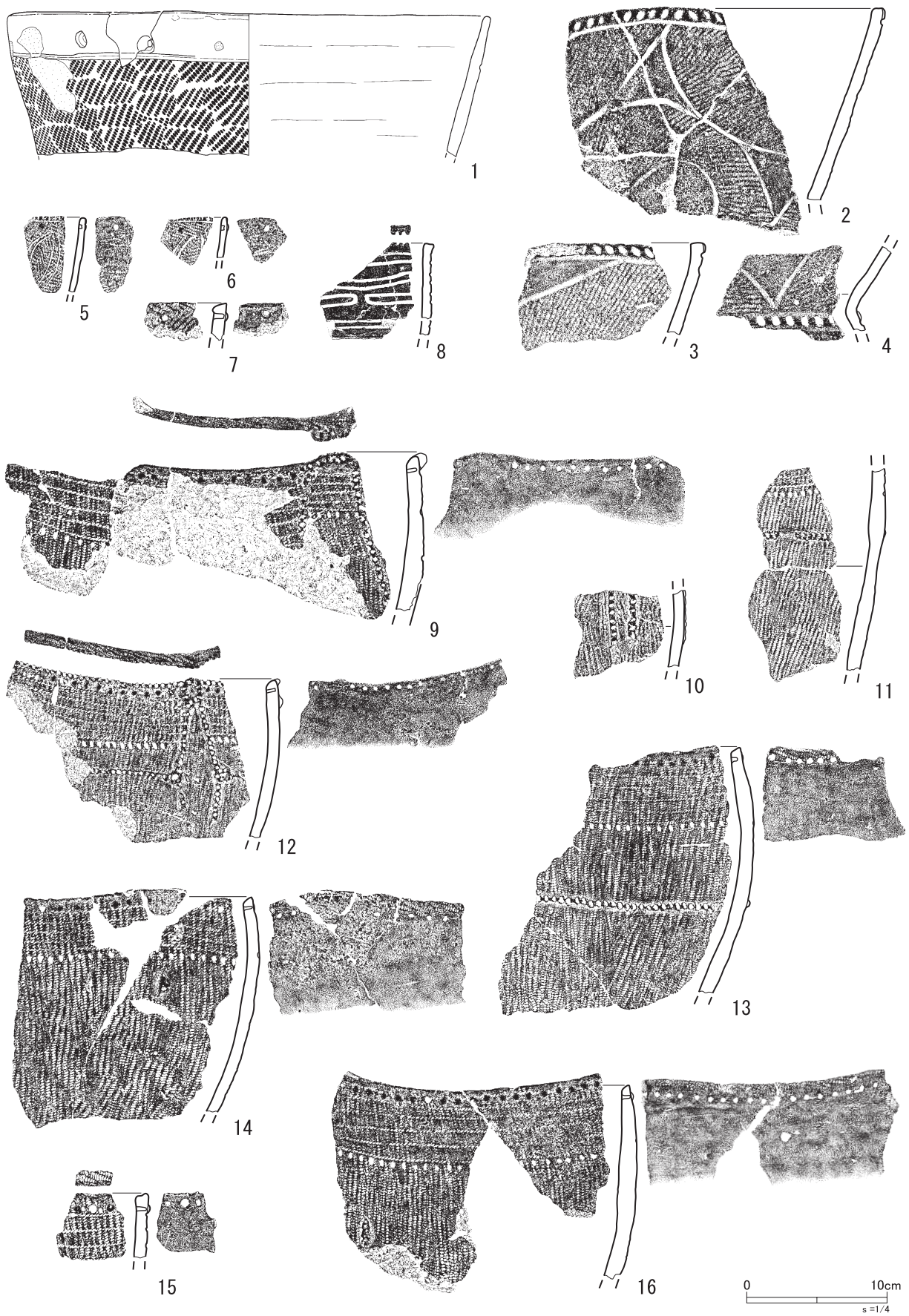
50・70は櫛歯文のあるもの。縦位の櫛歯文の上下に沿って横位の刻文が施されている。70は口唇部付近がやや丸みをもって肥厚する。50～54・67はやや弱く肥厚する口縁部下端に斜位の刻文、55～58は同じく爪形文、59～64は横位の刻文が施されている。52には多量の炭化物が付着している。62は口縁部の上下部に刻文がみられる。61・63・64は胴部に2または3列の横位の刻文が列する。65は沈線文土器。H-7(5号址)出土の土器(図IV-8-15)に類似する。梯子状の沈線による区画文内に刺突がある。66は肥厚する口縁部に刻み列とハの字形刻文が付されている。67～69は肩部に刻み入りの太い貼付帯があるもの(67は剥落)。

擬縄貼付文土器 (71)

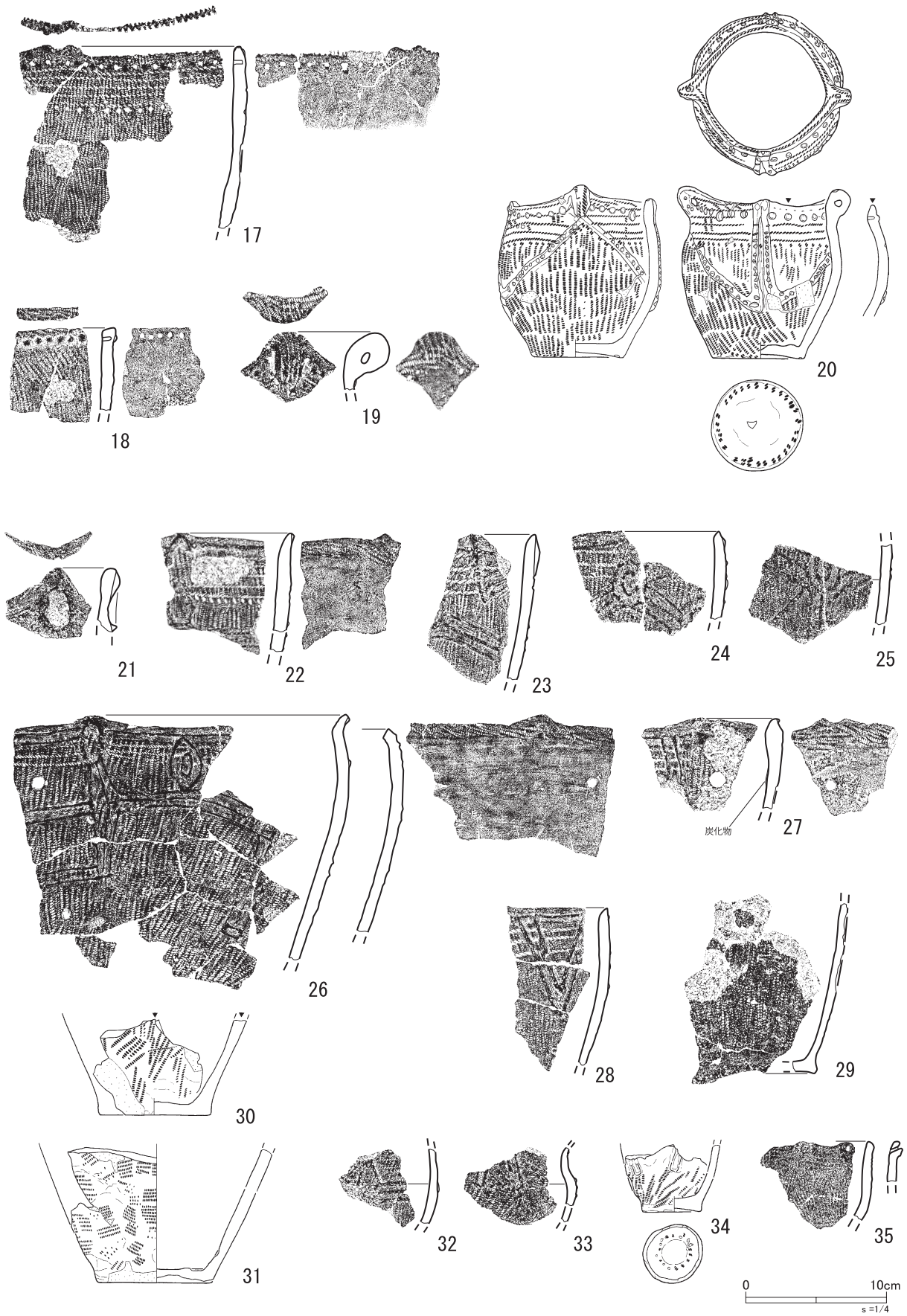
71は口縁部が肥厚せず、肩部に擬縄貼付文がめぐる。

無文の土器 (72～75)

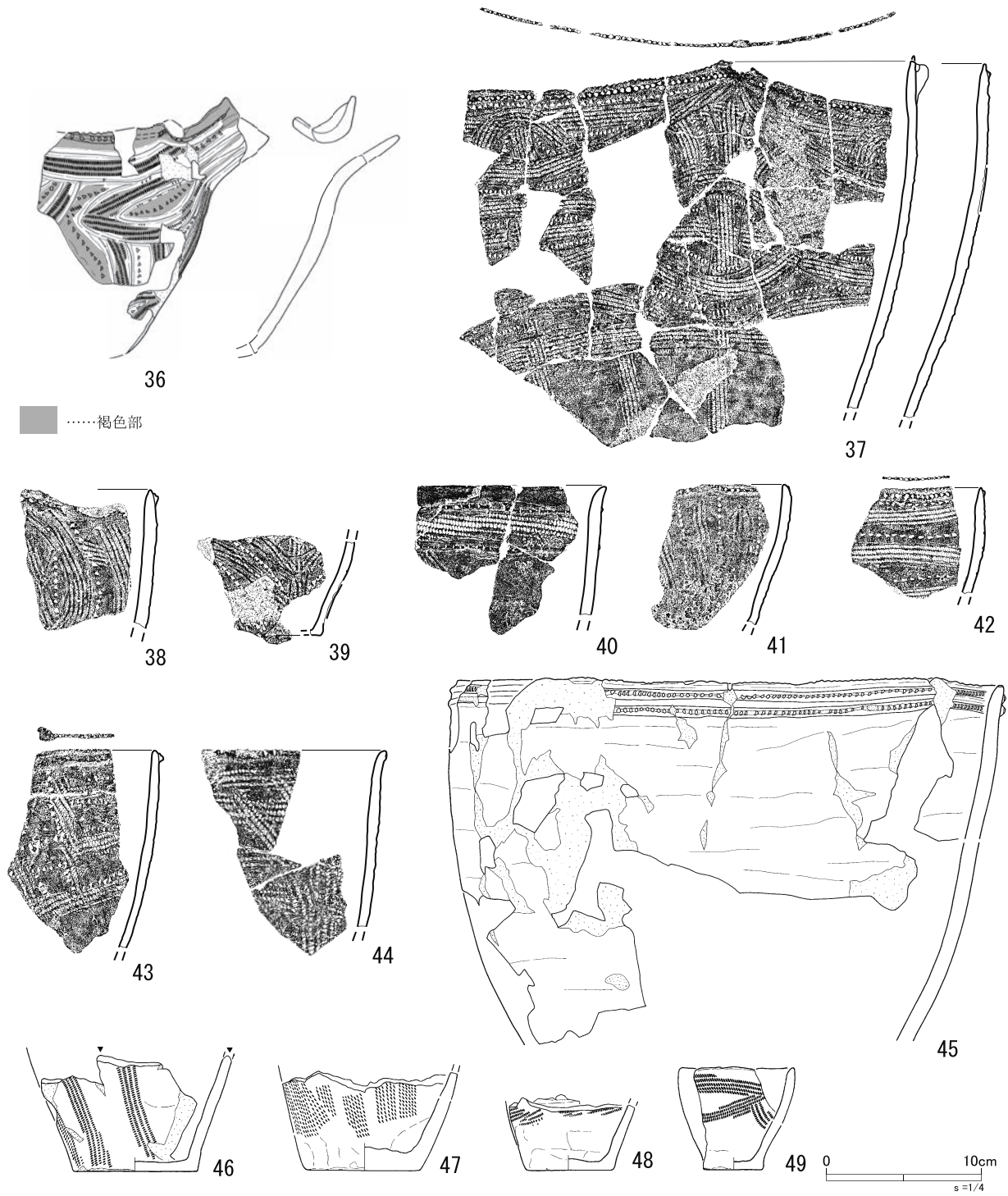
出土地点や形状から、刻文期のものが多いと思われる。72は口縁がわずかに肥厚する。口縁～肩部にかけて炭化物が多量に付着している。73～75は底部。73は上げ底ぎみである。75は胎土に砂粒を多く含む。
(阿部)



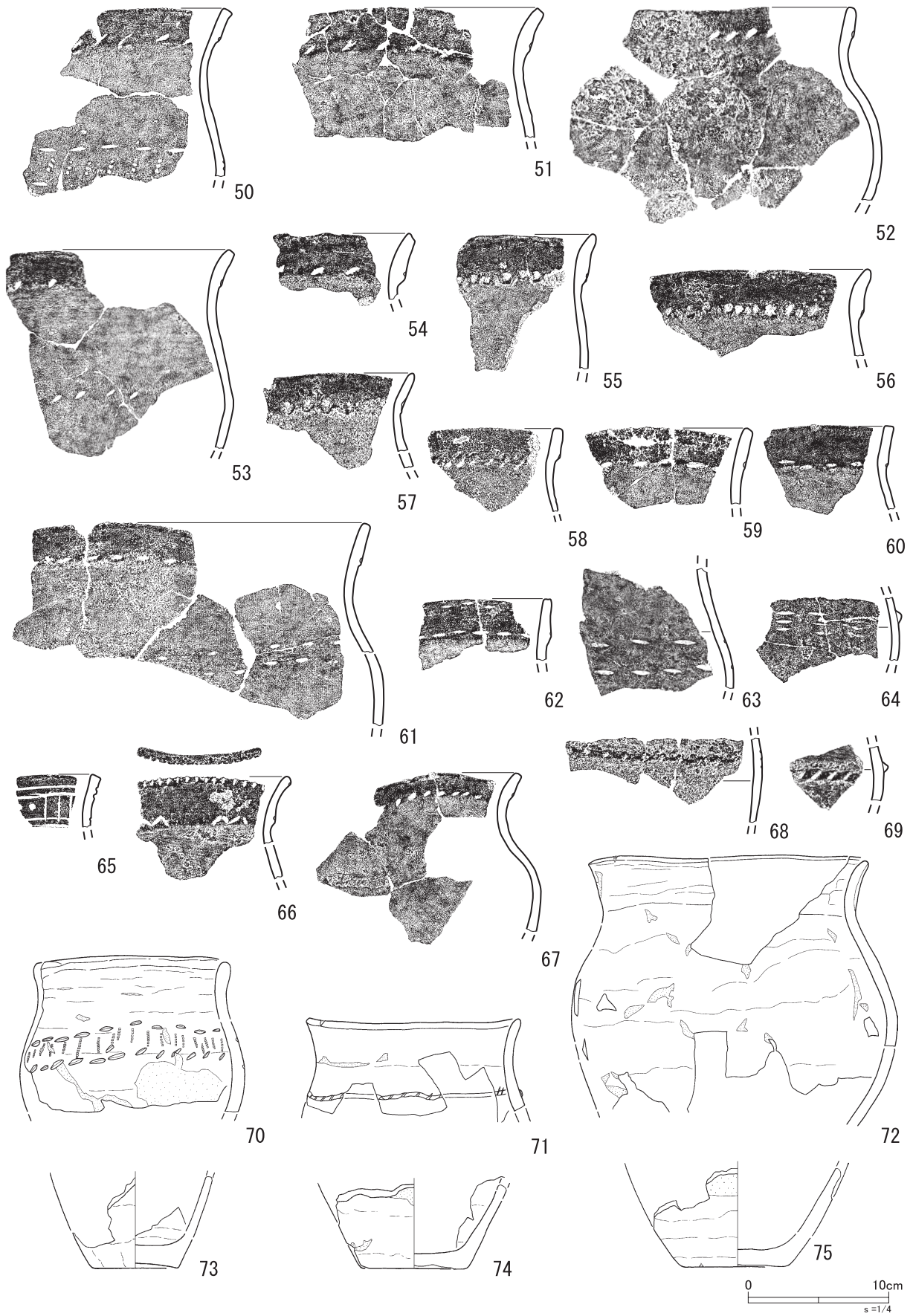
図IV-59 包含層出土の土器（1）



図IV-60 包含層出土の土器(2)



図IV-61 包含層出土の土器(3)



図IV-62 包含層出土の土器（4）

(2) 石器等 (図Ⅳ-63~65 表Ⅳ-11・12 図版60)

地区によって遺構の種類が大まかに分かれるため、二つの地区に分離して報告する。

旧96ライン以西 (C地点) 出土の遺物 (1~50)

1~50は周辺の検出遺構から主に続縄文時代前半期の宇津内式期のものが主体と考えられる。

石鏃 (1~12)

1~3は凹基のもの。2は先端部付近に錯交状の加工が施されるのみで、未成品とみられる。4・5は平基のもので、先端部が欠損している。6~10は有茎のもの。6・10の茎部は端部まで太い形状となっている。11は両端が尖る木葉形のもので、縁辺中央部にわずかにカエシがみられる。12は下半部が欠損している。

石槍またはナイフ (13~31)

13~15は上端が尖り、茎部のある石槍で、下半部は茎端部まで太い形状となっている。いずれも右側にのみやや明瞭なカエシが見られる。16~20は柄部のあるナイフで、反対端部は尖らず、半両面加工の16・19、両面加工の17、縁辺加工の18・20が見られる。21・22はその他の完形品である。いずれも縁辺を中心とした両面加工が施されているが、整った形状ではない。22の裏面には対向する剥離が見られる。23~31は折損品である。この内、端部が尖るように成形されているものは23・26・28、柄部とみられる矩形に成形されているものは29・30である。

スクレイパー (32~43)

32~39は縁辺ないし端部に円弧状の刃部が作出されている。40~43は側縁を中心にやや直線的な加工が施されているものである。

Rフレイク (44~47)

44~47はいずれも縁辺の一部に細かな加工が施されている。

原石 (48)

48は黒曜石製の棒状原石である。

砥石 (49)

49は安山岩製で、各面に擦り痕が見られる。

石錘 (50)

50は安山岩製で、正面中央から背面中央上部に帯状の凹みを巡らせている。攪乱から出土した。

旧49~80ライン (B地点) 出土の遺物 (51~63)

51~63は、周辺の検出遺構から主にオホーツク文化刻文期のものが主体と考えられる。

石鏃 (51~58)

51~53が平基のもの。51には上端からの衝撃剥離が見られる。54・55が凹基のもの。55は細身で両側縁の平行する部位が長い。56~58が有茎のもの。56には明瞭なカエシが見られる。57の加工には鋸歯状の部分が見られる。58は未成品で、先端部とカエシの一部が作出されている。

ナイフ (59)

59は正面を中心とした半両面加工が施されている。

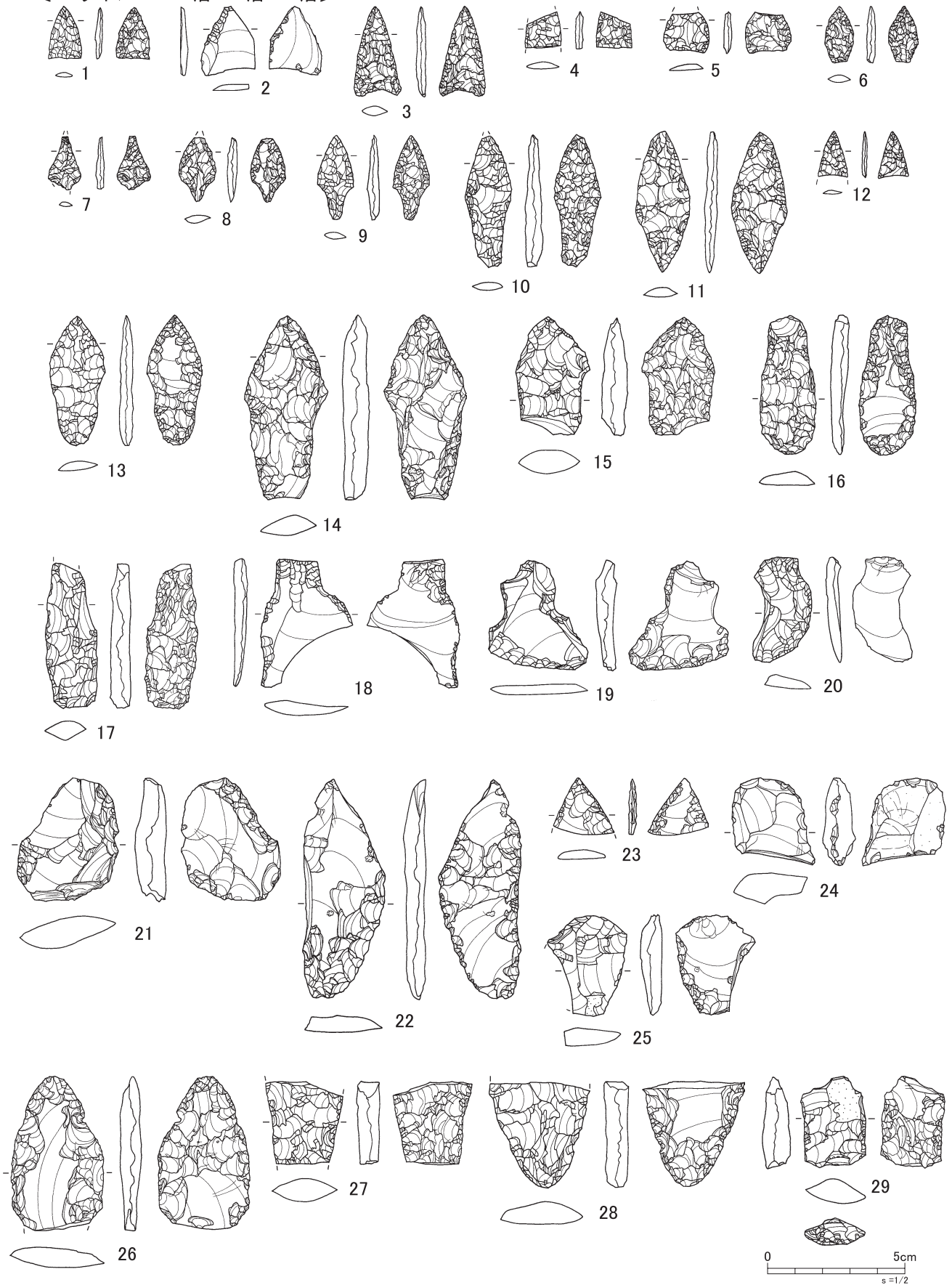
スクレイパー (60~62)

60は縦長剥片を素材として、左側縁にやや平坦な加工が施されている。61・62はいずれも端部に加工が施され、61が円弧状、62が直線的な刃部が作出されている。

Rフレイク (63)

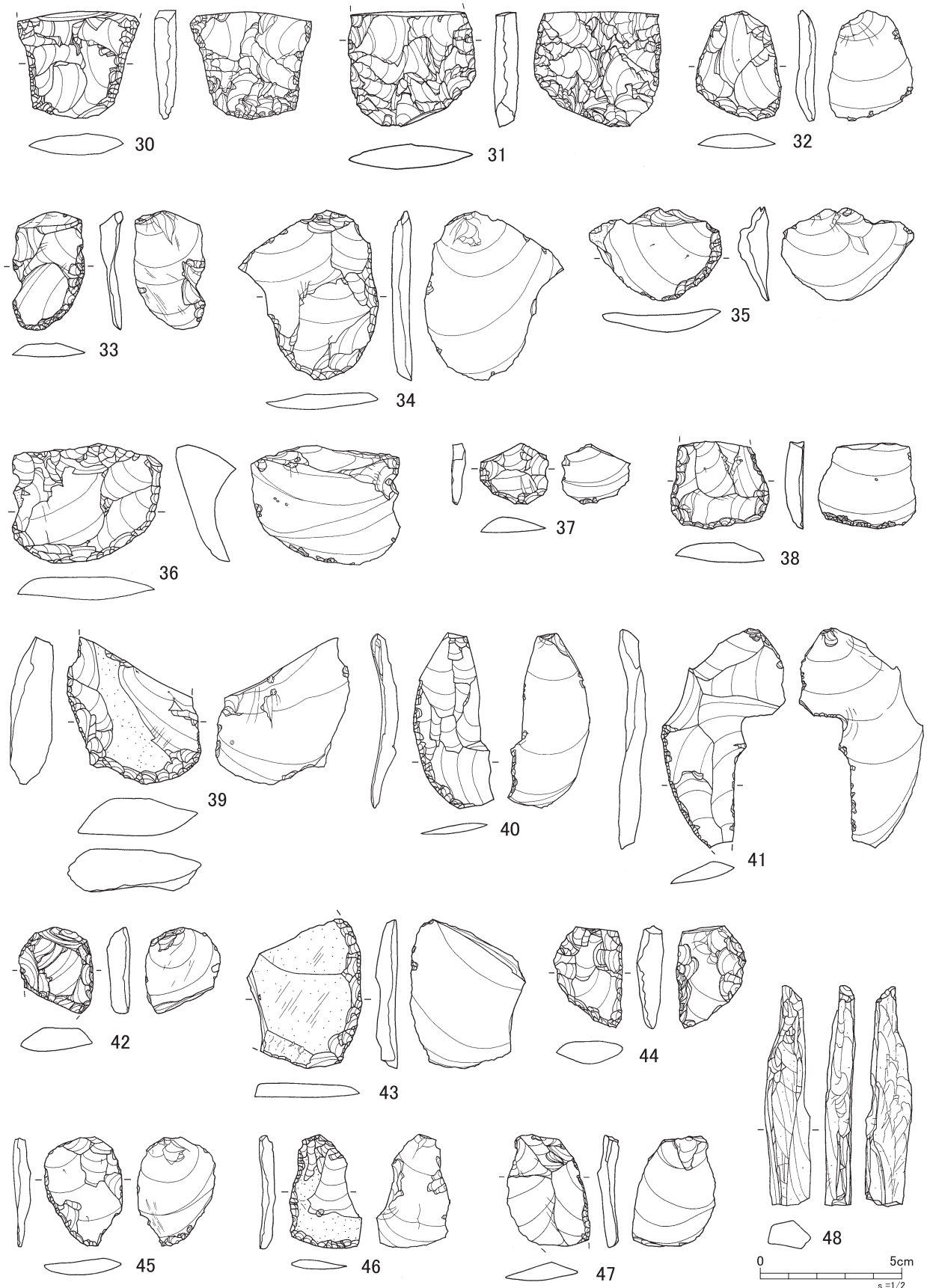
63は上端部の両側縁を中心に細かな加工が施されている。 (直江)

[96ライン～ V層・VI層・VII層]



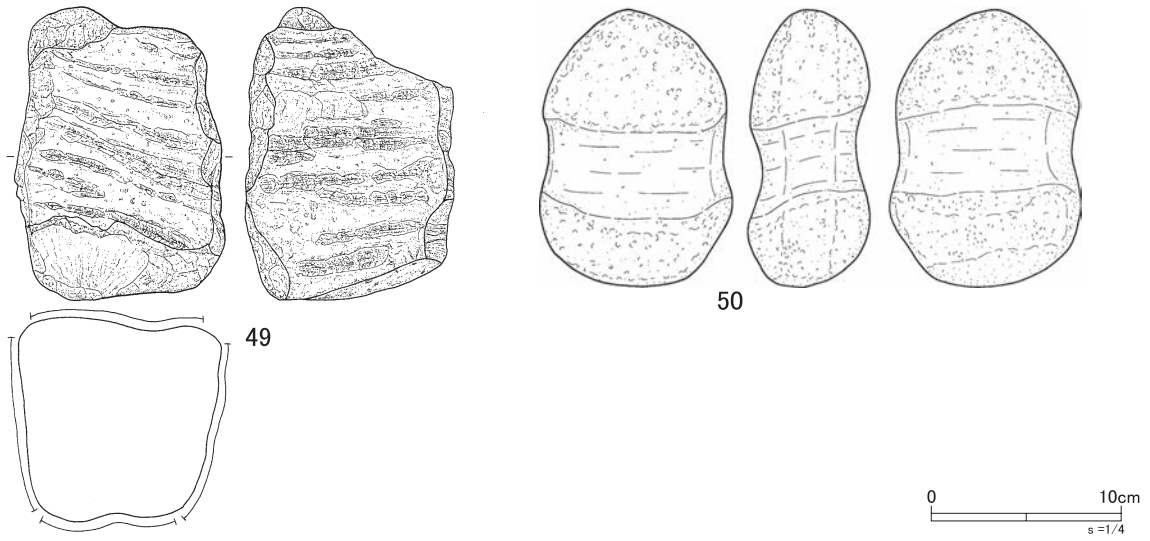
図IV-63 包含層出土の石器(1)

[96ライン～ V層・VI層・VII層]

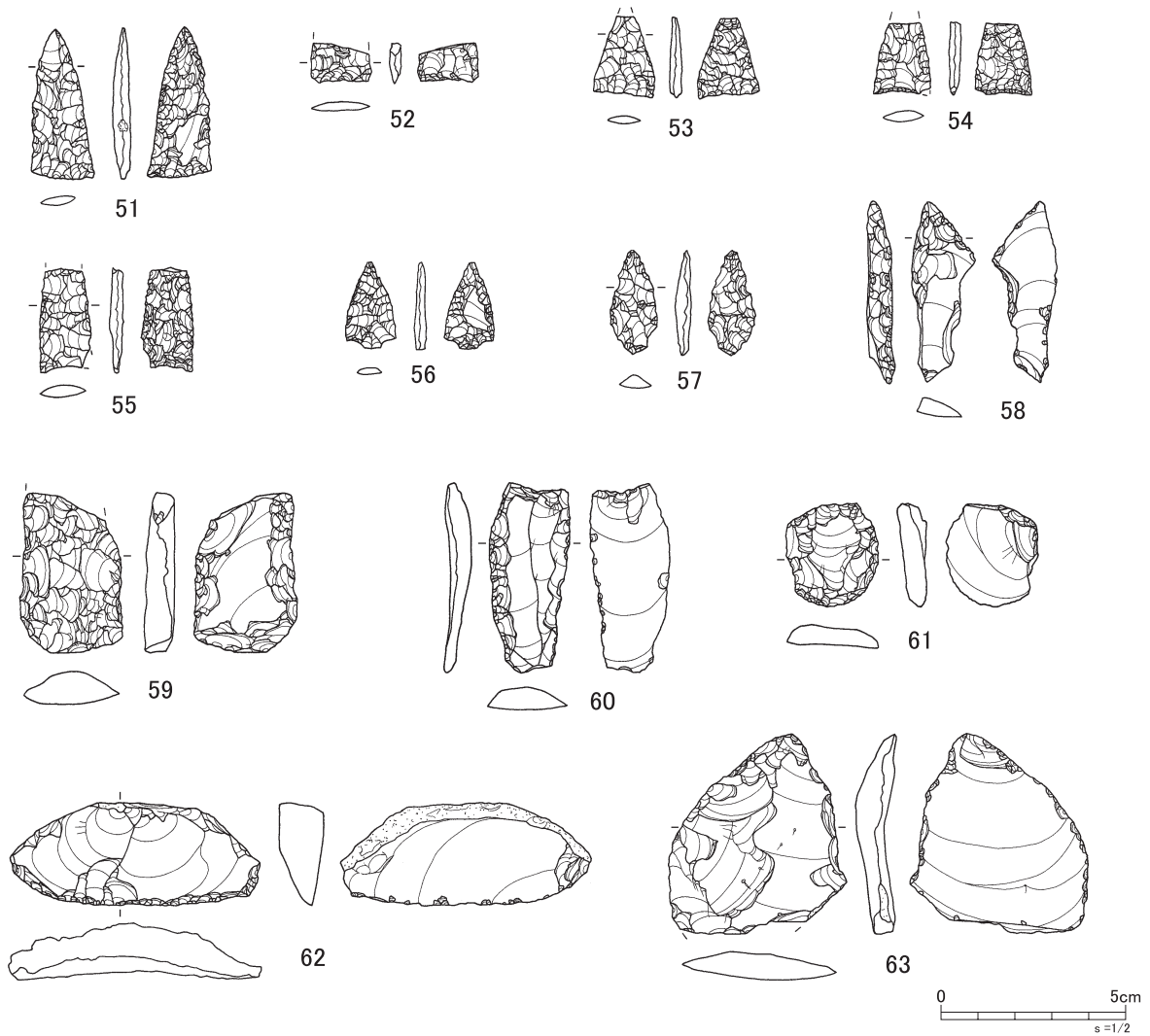


図IV-64 包含層出土の石器(2)

[96ライン～ V層・VI層・VII層]



[61～80ライン～ VI層・VII層]



図IV-65 包含層出土の石器 (3)

表Ⅳ-1 2008年調査遺構一覧

種別	新遺構名	旧遺構名	掲載		検出位置			平面形	規模(m)					時期	備考
			挿図	写真図版	新発掘区	旧発掘区	層位		検出面		底面		深さ		
									長径	短径	長径	短径			
堅六住居跡等	H-1	2号址	IV-31	4?	N.086.87	60e.f		多角形?	(3.60)	(2.86)	(3.0)	(2.44)	0.50	オホーツク文化刻文期	
	H-3	4号址	IV-32	25	N91.92	64e		五角形?	(3.88)	(2.88)	(2.56)	(2.24)	0.36	オホーツク文化刻文期	
	H-4	55号址	IV-33		N91.92	64e		—	(1.76)	(0.60)	(1.72)	(0.60)	(0.68)	オホーツク文化刻文期	
	H-5	20号址	IV-34・35	25	N.092.93	65e		隈丸方形?	(3.52)	(1.52)	(0.30)	(1.21)	(0.56)	オホーツク文化刻文期	
	H-6	19号址			N.092.93	65.66e		多角形?	(4.56)	(3.92)	(4.32)	(3.76)	(0.64)	オホーツク文化刻文期	
	H-7	5号址	IV-36~39	口絵3、25	N.093.94	66.67e		不整六角形	4.88	4.40	(4.40)	(3.92)	0.70	オホーツク文化刻文期	
	H-8	6号址	IV-40~43	6・26	N.095.96	67.68e		六角形?	7.16	(3.84)	6.48	—	0.52	オホーツク文化刻文期	貼床あり
	H-9	15a号址	IV-44~47	26	N99.100	70.71e		多角形?	(6.40)	(2.36)	(6.14)	(2.12)	(0.38)	オホーツク文化刻文期	
	H-10	15b号址			N99.100	70.71d.e		—	(3.52)	(0.68)	(3.48)	(0.36)	(0.32)	オホーツク文化刻文期	
	H-11	21号址			N100	71e		—	(2.3)	(1.8)	(1.8)	(1.4)	(0.12)	オホーツク文化刻文期	
	H-12	8号址	IV-48・49	4・27	N.0100.101	71.72e		多角形?	(3.72)	(3.04)	(3.24)	—	(0.56)	オホーツク文化刻文期	
	H-13	7号址	IV-50・51	27	N102.103	73.74e		隈丸方形?	(5.0)	(2.56)	(4.36)	(2.28)	(0.64)	オホーツク文化刻文期	
	H-14	9号址	IV-52・53		N104.105	74.75e		多角形?	(5.24)	(2.84)	(4.76)	—	(0.68)	オホーツク文化刻文期	
	H-15	37c号址	IV-6・7		M.N131.132	96.97d		不整方形?	(2.96)	(2.00)	(2.88)	(1.94)	(0.56)	縄文晩期~続縄文	
	H-16	25号址	IV-10・11	21	M135.136	99.100c.d		不整円形?	(4.12)	(2.20)	(3.80)	(2.10)	(0.64)	続縄文時代前期	
	H-17	51号址	IV-8・9	4・21	M135.136	98.99c.d		隅丸方形?	(5.00)	(2.16)	(4.92)	(2.16)	(0.72)	縄文晩期後葉	楕円形?
	H-18	24号址	IV-12	21	L.M136.137	100.101c		—	(3.24)	(0.60)	(3.12)	(0.40)	(0.35)	続縄文時代前期	
	土坑墓	BH-2	3号址	IV-12		N.089	62e		—	(2.62)	(1.54)	—	—	—	続縄文後北式期?
GP-1		1号址	IV-54	28	55e	O80		円形?	(0.70)	(0.36)	(0.44)	(0.22)	(0.20)	オホーツク文化刻文期	
GP-2		38号址	IV-13	22	97d	M132		おおむね円形	1.04	0.92	0.59	0.56	(0.36)	続縄文時代前期	
土坑	GP-3	44号址	IV-14・15	口絵3、22	98d	M134		楕円形	(1.48)	(1.24)	(1.24)	(0.97)	(0.32)	続縄文時代前期	
	P-1	24b号址	IV-16		L.M136.137	100c		円形?	(0.96)	(0.33)	(0.52)	(0.26)	(0.60)	続縄文時代前期	
	P-2	34号址			L.M137.138	101c		楕円形?	(1.20)	(0.28)	(0.96)	(0.22)	(0.24)	続縄文時代	
	P-3	27号址	IV-17		L139	102c		楕円形?	(2.32)	(0.60)	(1.94)	(0.38)	(0.50)	続縄文時代	
	P-4	26号址		22	L140	103c		円形?	(1.12)	(0.80)	(0.64)	(0.58)	(0.39)	続縄文時代前期	
	P-5	28号址	IV-18		L142.143	105c		楕円形?	(1.22)	(0.96)	(0.64)	(0.96)	(0.21)	続縄文時代前期	
	P-6	47号址			L157.158	117c		楕円形?	(1.04)	(0.96)	(0.96)	(0.70)	(0.44)	続縄文時代	
集石土坑	P-7	43号址	IV-19		K168.169	126b		ほぼ円形	1.64	(1.36)	1.48	1.28	(0.20)	続縄文時代	
	PS-1	32号址	IV-55	28	O95	67e		円形	(0.52)	0.27	0.52	0.20	(0.12)	オホーツク文化刻文期	
	PS-2	17号址	IV-55		N97	68e		不整円形	1.04	0.80	0.92	0.60	0.40	オホーツク文化刻文期	
	PS-3	14号址	IV-56		N100	71e		おおむね楕円形	1.30	(1.20)	1.28	(1.08)	0.16	オホーツク文化刻文期	
	PS-4	18号址	IV-56		N105.106	75e		不正楕円形	0.92	(0.76)	0.70	(0.52)	0.20	オホーツク文化刻文期	
	PS-5	37a・b号址	IV-20	23	M.N132	96.97d		不整楕円形	(2.32)	(1.48)	(2.00)	(1.21)	(0.32)	続縄文時代前期	
	PS-6	39号址	IV-20		M132	96.97d		円形?	(0.88)	(0.48)	—	—	(0.40)	続縄文時代前期	
	PS-7	23号址	IV-21	23	M133	97.98d		円形?	(2.07)	(0.80)	(1.68)	(0.64)	(0.26)	続縄文時代前期	
	PS-8	40号址	IV-22		M133	98d		不整円形?	(1.00)	(0.60)	(0.80)	(0.48)	(0.48)	続縄文時代	
	PS-9	48号址	IV-22		M133	97d		不整形	(0.87)	(0.68)	(0.36)	(0.24)	(0.30)	続縄文時代	
	PS-10	49号址	IV-23		M133.134	98d		長楕円形?	(1.92)	(1.28)	(1.29)	(0.92)	(0.32)	続縄文時代前期	縄文晩期?
	PS-11	46号址	IV-24		M134	98.99d		円形?	(1.36)	(1.19)	(1.08)	(1.12)	(0.06)	続縄文時代前期	
	PS-12	50号址	IV-24・25		M134.135	99d		楕円形?	(2.48)	(2.40)	(2.00)	(1.84)	(0.56)	続縄文時代前期	
	PS-13	41・45号址	IV-25	24	M135	99d		楕円形?	(0.80)	(0.62)	(0.60)	(0.49)	(0.24)	続縄文時代前期	
	PS-14	31b号址	IV-26		L147	108.109b.c		長楕円形?	(2.72)	(1.56)	—	—	(0.20)	続縄文時代前期	
	PS-15	35号址	IV-26		K.L147.148	109b		不整円形?	(1.60)	(0.96)	(1.24)	(0.80)	(0.36)	続縄文時代	「炬」
	PS-16	36号址	IV-27		L148	109.110b.c		不整円形?	(1.24)	(0.96)	(0.80)	(0.84)	(0.32)	続縄文時代前期	
	PS-17	53号址	IV-27	24	K148.149	110b		楕円形?	(2.19)	(0.48)	(2.08)	(0.43)	(0.28)	続縄文時代	
	PS-18	54号址	IV-27		K150	111b		楕円形?	(1.52)	(0.52)	(1.32)	(0.52)	(4.8)	続縄文時代	
	PS-19	30号址	IV-28		K.L150	111b		楕円形?	(1.40)	(0.80)	(1.08)	(0.67)	0.28	続縄文時代前期	
	PS-20	33号址	IV-28	24	K.L157.158	117b.c		ほぼ円形?	2.20	(2.00)	2.14	(1.98)	0.24	続縄文時代	
PS-21	42号址	IV-29		L158.159	118c		楕円形?	(2.40)	(1.24)	(2.24)	(1.16)	(0.20)	続縄文時代		
石組炉	SF-1	13号址	IV-57・58	5	N.097.98	69e		楕円形?	1.40	(1.08)	—	—	0.20	オホーツク文化刻文期	浅い土坑
	SF-2	10号址	IV-57		N98	69e		不整楕円形	1.52	1.46	—	—	—	オホーツク文化刻文期	浅い土坑
	SF-3	16号址	IV-57		N106	75.76e		不整円形	0.88	0.68	0.88	0.64	0.20	オホーツク文化刻文期	
	SF-4	31a号址	IV-29	5	L146.147	108c		不整楕円形	(1.48)	(0.56)	(1.45)	(0.44)	(0.18)	続縄文時代前期	
焼土	F-1	22号址	IV-57・58	6	N96.97	68e		楕円形	0.96	0.68	—	—	—	オホーツク文化刻文期	
	F-2	11号址	IV-57・58		N97.98	69e		円形	(0.6)	(0.6)	—	—	—	オホーツク文化刻文期	
	F-3	12号址	IV-57・58		N98	69e		不整円形	0.96	0.76	—	—	—	オホーツク文化刻文期	
磔	S-1	52号址	IV-29		M132	97d		楕円形?	(2.24)	(1.64)	—	—	0.34	続縄文時代	
	R-1	29号址	IV-30	8	L144	106c		楕円形?	(1.35)	(0.96)	—	—	—	続縄文時代前期	ベンガラ製作址

表IV-3 2008年調査遺物集計(2)

種別	遺構/包含層	層位	土器											石器等													礫	計	合計	自然遺物																
			IV群	V群	VI群	VI群b1類	VI群b2類	VI群c類	VII群	VIII群b類	VIII群c類	不明	計	石鏃	石槍	石錐	ナイフ	スクレイパー	楔形石器	Rフレイク	フレイク	チップ	石核	石斧	砥石	たたき石				くぼみ石	すり石	石錘	不明	計	礫	計	合計	赤鉄鉱	木炭	種子	骨	食土	計			
P-3 (27号址)	埋土			1				1				1	3					1	2	5											8		11													
	坑底																		2							1					3		3													
P-4 (26号址)	埋土			1										2	1				1	4	1										11		14													
	坑底																			1	1										2		2													
P-5 (28号址)	埋土			1		1							3						2	9											11		14													
	坑底			1		1							2				1		2	17	217										237	1	1	240												
PS-1 (32号址)	埋土											8																																		
	計											8																																		
PS-2 (17号址)	埋土											19	17																																	
	坑底											20	3	4						2	1																									
PS-5 (37号址)	埋土											44	22	4																																
	計											44	22	4																																
PS-6 (39号址)	埋土																																													
	計																																													
PS-7 (23号址)	埋土																																													
	坑底																																													
PS-10 (49号址)	埋土		4	4		1						9								10	6										18	1	1													
	坑底											14									6	4										10														
PS-11 (46号址)	埋土			2			2					4								3	1										5	1	1													
	坑底											1								1	1											3														
PS-12 (50号址)	埋土			2			2					4	1							4	2										8	1	1													
	計											4	1							4	2										8	1	1													
PS-13 (41・45号址)	埋土			1		1	1					3	1							1	5	5									12															
	集石内											1									1																									
PS-14 (31号址)	埋土																																													
	計																																													
PS-15 (35号址)	埋土																																													
	坑底																																													
PS-16 (36号址)	埋土																																													
	計																																													
PS-19 (30号址)	埋土																																													
	計																																													
SF-1 (13号址)	埋土																																													
	計																																													
SF-2 (10号址)	埋土																																													
	計																																													
SF-4 (31号址)	埋土																																													
	計																																													
F-1 (22号址)	埋土																																													
	坑底																																													
F-2 (11号址)	埋土																																													
	計																																													
F-3 (12号址)	埋土																																													
	計																																													
R-1 (29号址)	埋土																																													
	計																																													
遺構	合計		49	70	1	19	47	19	1935	518	83	48	2789	56	1	16	16	1	17	385	1071	3	2		2	2	2			1574																

表IV-4 2008年調査掲載土器一覽(1)

挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	新遺構名	旧遺構名/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数		分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号
							破片	計						
図IV-7	1	50-1	H-15	37c号址	床	2962	6	9	Vc	深鉢	口～胴	口唇刻み、横走沈線、縄端刺突、RL縄文		08-146①
							3							08-310
図IV-7	2	50-1	H-15	37c号址	床	2964	5	10	Vc	深鉢	口	口唇刻み、横走沈線、縄端刺突、RL縄文、補修孔		08-146②
							5							
図IV-7	3	50-1	H-15	37c号址	床	2967	7	8	Vc	深鉢	胴	綾線文、LR縄文		08-167①
							1							
図IV-7	4	50-1	H-15	37c号址	床	2969	1	1	Vc	深鉢	胴	綾線文		08-167②
図IV-9	1	50-2	H-17	51号址	床	3141・3267・3301・3421	7	18	Vc	深鉢	胴～底	RL縄文(外・底面) /底径10.3cm、器高(10.8)cm		08-86
							11							
図IV-9	2	50-2	H-17	51号址	床	3268	1	1	Vc	深鉢	口	口唇上刻み、横走沈線、LR縄文		08-281
図IV-9	3	50-2	H-17	51号址	床	3304	1	1	Vc	Ⅷ	口	刺突列、RL縄文		08-282
図IV-9	4	50-2	H-17	51号址	床	3428	1	1	Vc	深鉢	底	RL縄文		08-283
図IV-11	1	50-3	H-16	25号址	床	3182	1	1	VIb1	深鉢	全	2×2単位突起、突瘤、擬縄貼付文(V字状)、縄端刺突(底面付近・底面)、縄文(外・底面)/口径17.3cm、底径7.5cm、器高22.5cm	約100%残存	08-21
図IV-11	2	50-3	H-16	25号址	床	3110	1	1	VIb	深鉢	口	沈線(凹線)、縄文、内面炭化物多量付着		08-271
図IV-11	3	50-3	H-16	25号址	床	3140	1	1	VIb	深鉢	胴	縄文		08-272
図IV-11	4	50-3	H-16	25号址	床	2290	1	1	VIb	小型鉢	口	擬縄貼付文、縄文		08-273
図IV-12	1	50-4	H-18	24号址	埋土	2898	1	1	VIb	深鉢	底	捺糸文		08-270
図IV-13	1	50-5	GP-2	38号址/97d	坑底	3137	1	1	VIb1	深鉢	全	4単位突起、口唇刻文(外・内)、突起下に擬縄貼付文(逆U字状)、突瘤、縄端刺突、縄文(外・内面口唇)/口径31.5cm、底径7.4cm、器高36.8cm	約100%残存	08-22
図IV-13	2	50-5	GP-2	38号址	埋土	3047・3165・3166	5	5	VIb	深鉢	胴	縄文		08-277
図IV-13	3	50-5	GP-2	38号址	坑底	3125・3126	4	4	VIb	深鉢	口	突起、口唇刻み、隆帯、沈線		08-278
図IV-15	1	51-1	GP-3	44号址/98d	坑底	3057	9	9	VIb1	小型深鉢	全	突瘤、縄線、縄端刺突、縄文(外・底面)、内外面炭化物多量付着/口径(14.0)cm、底径6.9cm、器高14.3cm	約95%残存	08-23
図IV-18	1	51-3	P-5	28号址	埋土	2483	1	2	VIb	深鉢	口	擬縄貼付文 貼瘤、縄文		08-274
							1							
図IV-18	2	51-3	P-5	28号址	埋土	2478	1	3	VIb	深鉢	底	縄文、上げ底 /底径(6.8)cm、器高(7.3)cm		08-78
							2							
図IV-21	1	51-4	PS-7	23号址	集石中	2069・2070	5	8	VIb1	深鉢	胴	擬縄貼付文、縄文		08-144
							3							
図IV-23	1	51-4	PS-10	49号址	埋土	3229	4	5	Vc	深鉢	口	口唇刻み、横走沈線、LR縄文、補修孔		08-168①
							1							
図IV-23	2	51-4	PS-10	49号址	坑底	3195	1	1	Vc	深鉢	胴	横走沈線、LR縄文		08-168②
図IV-23	3	51-4	PS-10	49号址	坑底	3303	2	3	Vc	深鉢	胴	LR縄文		08-279
							1							
図IV-24	1	51-4	PS-11	46号址	埋土	3040	2	3	VIb	深鉢	胴	擬縄貼付文、縄文		08-159
							1							
図IV-25	1	51-4	PS-12	50号址	埋土	3186	1	1	VIb	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、縄線、縄文		08-280
図IV-26	1	52-1	PS-14	31b号址/108c	集石内	2752	5	5	VIb1	深鉢(甕)	口～底	突起下隆帯、突瘤、擬縄貼付文、縄線(口唇上もあり)、縄端刺突、縄文/口径(12.5)cm、底径5.8cm、器高19.8cm		08-25
図IV-26	2	52-1	PS-14	31号址	埋土	2539	3	3	Vc	深鉢	口	横走・鋸歯状沈線、LR縄文		08-275
図IV-27	1	52-2	PS-16	36号址	埋土	1761	2	3	VI	深鉢	底	縄文(外・底面)		08-276
							1							
図IV-28	1	52-2	PS-19	30号址/111c	埋土	2533	1	1	VIb1	深鉢	口	口唇刻み、刺突、突瘤、擬縄貼付文、縄線、縄端刺突、縄文		08-145①
図IV-28	2	52-2	PS-19	30号址/111c	埋土	2524・2529	5	5	VIb1	深鉢	口～胴	擬縄貼付文、縄線、縄端刺突、縄文		08-145②
図IV-31	1	52-3	H-1	2号址	埋土	1268	1	1	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文		08-202
図IV-31	2	52-3	H-1	2号址	埋土	1267	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-201
図IV-33	1	52-5	H-3	4号址	埋土	481	21	21	Ⅷb	甕	口～胴	刻文		08-101
図IV-33	2	52-5	H-3	4号址/64e	床	624	7	11	Ⅷb	甕	口～胴	刻文、擬縄貼付文		08-102
							4							
図IV-33	3	52-5	H-3	4号址	埋土	332・542	2	3	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-122
							1							
図IV-33	4	52-5	H-3	4号址	埋土	2419	1	1	Ⅷb	甕	口	刻文(列点)、沈線		08-203
図IV-33	5	52-5	H-3	4号址	覆土	119・781	53	53	Ⅷb	甕	口～底	口縁部肥厚帯、鋸歯状沈線/口径11.9cm、底径5.9cm、器高19.4cm	約70%残存	08-2
図IV-35	1	52-4	H-5	20号址	埋土	1913	3	3	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-257
図IV-35	2	52-4	H-5	20号址/65e	埋土	1915	10	10	Ⅷb	甕	底	無文 /底径7.3cm、器高(5.0)cm		08-73
図IV-35	3	52-6	H-6	19号址	埋土	1855	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(舟窩状)		08-258
図IV-35	4	52-6	H-6	19号址	埋土	1861・1903	3	4	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-139
							1							
図IV-35	5	52-6	H-6	19号址	埋土	1921	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-259
図IV-35	6	52-6	H-6	19号址	埋土	1804・1821・1837・1856・1857	7	7	Ⅷb	甕	口～胴	貼瘤?		08-103②
図IV-35	7	52-6	H-6	19号址	埋土K	—	1	1	Ⅷb	甕	口	刻文、貼瘤		08-260
図IV-35	8	52-6	H-6	19号址	埋土	1860	24	24	Ⅷb	甕	底	無文 /底径8.2cm、器高(7.3)cm		08-72

表Ⅳ-5 2008年調査掲載土器一覽(2)

挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	新遺構名	旧遺構名/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数		分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号
							破片	計						
図Ⅳ-38	1	53-1	H-7	5号址	埋土	478	1	1	Ⅵc	深鉢	胴	微隆起線、帯縄文		08-215
図Ⅳ-38	2	53-1	H-7	5号址/66e	埋土	153・1069・ 1108・1117	5	6	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文 /底径9.0cm、器高(15.6)cm		08-105
			H-7	5号址	埋土	1892	1							
			H-8	6号址	埋土	307	1							
図Ⅳ-38	3	53-1	H-7	5号址	床	1181	3	3	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-208
図Ⅳ-38	4	53-1	H-7	5号址	埋土	316	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-205
図Ⅳ-38	5	53-1	H-7	5号址	埋土	1693	2	2	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-211
図Ⅳ-38	6	53-1	H-7	5号址	埋土	1118	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-216
図Ⅳ-38	7	53-1	H-7	5号址	床	1041	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-210
図Ⅳ-38	8	53-1	H-7	5号址	埋土	1750	2	2	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		08-206
図Ⅳ-38	9	53-1	H-7	5号址	埋土	455	1	1	Ⅷb	甕	胴	刻文		08-219
図Ⅳ-38	10	53-1	H-7	5号址/66e	埋土	1789	1	2	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-121①
			H-7	5号址/66e	床	1791	1							
図Ⅳ-38	11	53-1	H-7	5号址	埋土	1262	2	2	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-207
図Ⅳ-38	12	53-1	H-7	5号址/66e	床	1129・1792	5	12	Ⅷb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、ハの字形刻文		08-103①
			H-7	5号址/66e	埋土	164・480・ 1232・1234・ 1822	7							
図Ⅳ-38	13	53-1	H-7	5号址	埋土	1184	1	1	Ⅷb	甕	胴	貼付帯上刻文		08-217
図Ⅳ-38	14	53-1	H-7	5号址	床	1114	1	1	Ⅷb	甕	口	刻文		08-209
図Ⅳ-38	15	53-1	H-7	5号址	埋土	205	1	1	Ⅷb	甕	口	沈線(横位・縦位)		08-218
図Ⅳ-38	16	53-1	H-7	5号址	埋土	1025	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯(段)		08-214
図Ⅳ-38	17	53-1	H-7	5号址/66e	埋土	153	1	1	Ⅷb	甕	口～胴	口唇連続指頭押捺、刻文		08-108
図Ⅳ-38	18	53-1	H-7	5号址/66f	埋土	1237	1	1	Ⅷb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯		08-107
図Ⅳ-38	19	53-1	H-7	5号址	埋土	1742	6	6	Ⅷb	甕	底	無文 /底径7.4cm、器高(5.0)cm		08-109②
図Ⅳ-38	20	53-1	H-7	5号址	埋土	608	1	2	Ⅷb	小型甕	口	無文		08-213
			H-7	5号址	床	1811	1							
図Ⅳ-38	21	53-1	H-7	5号址/66e	床	1092	1	2	Ⅷb	小型甕	胴～底	無文		08-106②
			H-7	5号址/66e	埋土	456	1							
図Ⅳ-38	22	53-1	H-7	5号址/66e	埋土	984・987・ 1047・1069	4	4	Ⅷc	甕	口縁	口縁部肥厚帯、擬縄貼付文		08-104
図Ⅳ-38	23	53-1	H-7	5号址/66e	床	1727・1740・ 1743	22	24	Ⅷb	甕	口～底	口縁部肥厚帯、刻文 /口径(20.7)cm、底径7.7cm、器高 20.6cm	約90%残存	08-6
			H-7	5号址/66e	覆土	1747	2							
図Ⅳ-38	24	53-1	H-7	5号址/66e	埋土	1183・1239・ 1264	10	10	Ⅷb	甕	口～底	口縁部肥厚帯、刻文 /口径(10.3)cm、底径(6.8)cm、器 高15.7cm	約30%残存	08-4
図Ⅳ-38	25	53-1	H-7	5号址	埋土	1135・1148・ 1238・1264・ 1266・1752・ 1772	8	8	Ⅷb	甕	口～底	口縁部肥厚帯、口唇刻み、刻文、 縦位の2本貼付文 /口径(10.6)cm、底径5.0cm、器高 16.0cm	約70%残存	08-3
図Ⅳ-38	26	53-1	H-7	5号址	埋土	926	1	2	Ⅷb	甕	胴～底	無文 /底径5.1cm、器高(10.9)cm	約50%残存	08-5
			H-8	6号址	埋土	893	1							
図Ⅳ-38	27	53-1	H-7	5号址	床	1075	1	1	Ⅷb	甕	底	無文 /底径(8.8)cm、器高(3.7)cm		08-53
図Ⅳ-38	28	53-1	H-7	5号址/66e	床	1092	12	12	Ⅷb	甕	底	無文 /底径(9.3)cm、器高(6.8)cm		08-52
図Ⅳ-38	29	53-1	H-7	5号址/66e	床	611	19	19	Ⅷb	甕	底	無文 /底径(6.2)cm、器高(7.8)cm		08-51
図Ⅳ-38	30	53-1	H-7	5号址	床	973	1	1	Ⅷb	甕	底	無文 /底径(6.7)cm、器高(3.4)cm		08-54
図Ⅳ-42	1	54-1	H-8	6号址	埋土	952	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、櫛歯文		08-222
図Ⅳ-42	2	54-1	H-8	6号址	埋土	96・369	2	3	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-113
													Ⅶ	
図Ⅳ-42	3	54-1	H-8	6号址	埋土	95	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-224
図Ⅳ-42	4	54-1	H-8	6号址	埋土	591	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-223
図Ⅳ-42	5	54-1	H-8	6号址	床	620	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-212
図Ⅳ-42	6	54-1	H-8	6号址	柱穴	2005	1	1	Ⅷb	甕	口	刻文		08-232
図Ⅳ-42	7	54-1	H-8	6号址	埋土	366・494	4	4	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-111
図Ⅳ-42	8	54-1	H-8	6号址	埋土	1709	3	3	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-121②
図Ⅳ-42	9	54-1	H-8	6号址	埋土	2264	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-220
図Ⅳ-42	10	54-1	H-8	6号址	床	1240	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-225
図Ⅳ-42	11	54-1	H-8	6号址	埋土	1806	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-221
図Ⅳ-42	12	54-1	H-8	6号址/67e	埋土	1056	18	18	Ⅷb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-109①
図Ⅳ-42	13	54-1	H-8	6号址	盛土	994	3	3	Ⅷb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、ハの字形刻文		08-117
図Ⅳ-42	14	54-1	H-8	6号址	床	1963	1	1	Ⅷb	甕	胴	刻文		08-233
図Ⅳ-42	15	54-1	H-8	6号址	埋土	1128	1	1	Ⅷb	甕	胴	刻文		08-234
図Ⅳ-42	16	54-1	H-8	6号址	埋土	107・157	3	3	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯(段)、刻文		08-114
図Ⅳ-42	17	54-1	H-8	6号址	埋土	296	1	1	Ⅷb	甕	口	鋸歯文		08-226
図Ⅳ-42	18	54-1	H-8	6号址	埋土	373	1	1	Ⅷb	甕	口	刻文、鋸歯文		08-227
図Ⅳ-42	19	54-1	H-8	6号址/67f	埋土	965	3	4	Ⅷb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-116
													H-8	
図Ⅳ-42	20	54-1	H-8	6号址	埋土	862	1	1	Ⅷc	甕	胴	細沈線		08-238
図Ⅳ-42	21	54-1	H-8	6号址/67e	埋土	1101・1072	3	3	Ⅷb3	甕	胴	貼付帯上刻文		08-115
図Ⅳ-42	22	54-1	H-8	6号址	埋土	1052	1	2	Ⅷb	甕	胴	貼付帯		08-228
													H-8	
図Ⅳ-42	23	54-1	H-8	6号址	埋土	1984	1	1	Ⅷb	甕	胴	貼付帯		08-230
図Ⅳ-42	24	54-1	H-8	6号址	埋土	1012	1	1	Ⅷb	甕	胴	貼付帯(指圧式)		08-229
図Ⅳ-42	25	54-1	H-8	6号址/68e	床・柱穴	1854	1	1	Ⅷc	甕	口～胴	貼付文(波状)、貼瘤		08-119

表IV-6 2008年調査掲載土器一覽(3)

挿入 番号	掲載 番号	写真版 番号	新遺構名	旧遺構名/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数 破片 計	分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号
図IV-42	26	54-1	H-8	6号址/67e	埋土	262	5 5	VIIIc	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、擬縄貼付文、貼瘤		08-120
図IV-42	27	54-1	H-8	6号址/68e	埋土	530	1 1	VIIIc	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、擬縄貼付文、貼瘤		08-118
図IV-42	28	54-1	H-8	6号址	床	1841	2 2	VIIIc	甕	胴	擬縄貼付文		08-231
図IV-42	29	54-1	H-8	6号址	埋土	1808	1 1	VIIIc	甕	口	擬縄貼付文		08-204
図IV-42	30	54-1	H-8	6号址	床	623	11 11	VIIIc	甕	口	口縁部肥厚帯、擬縄貼付文、貼瘤		08-110①
図IV-42	31	54-1	H-8	6号址	床	623	14 14	VIIIc	甕	胴	口縁部肥厚帯、擬縄貼付文、貼瘤		08-110②
図IV-42	32	54-1	H-8	6号址	埋土	538	1 1	VIIIc	甕	胴	貼付文(波状)		08-237
図IV-42	33	54-1	H-8	6号址	埋土	1652	1 1	VIIIc	甕	口	貼付文(波状)、貼瘤		08-235
図IV-42	34	54-1	H-8	6号址	埋土	408	1 1	VIIIc	甕	口	貼付文		08-236
図IV-42	35	54-1	H-8	6号址	盛土	1038	1 1	VIIIb	小型甕	口～胴	無文		08-106①
図IV-42	36	54-1	H-8	6号址/68f	埋土	95・749	3 3	VIIIb	甕	口	無文		08-112
図IV-42	37	54-1	H-8	6号址	床	623	8 8	VIIIc	甕	底	無文		08-110③
図IV-43	38	54-1	H-8	6号址/67e	床	612・614・ 619・620・ 1158	39 43	VIIIc	甕	口～底	擬縄貼付文 胴部にも2列、L字状に垂下(鋸文) /口径20.9cm、底径(10.9)cm、器 高23.3cm		08-7
図IV-43	39	54-1	H-8	6号址/68e	埋土	970	4						
				69e	VII	634・666 2411	5 6 1	VIIIb	甕	胴～底	無文、ミガキ /底径(9.2)cm、器高(8.3)cm		08-55
図IV-43	40	54-1	H-8	6号址	埋土	953・954	3 3	VIIIb	甕	底	無文 /底径(8.6)cm、器高(6.8)cm		08-56
図IV-43	41	54-1	H-8	6号址/68e	柱穴	1958	1 1	VIIIb	ミニチュア	口～底	手づね /口径(4.1)cm、底径(3.1)cm、器高 4.3cm	約75%残存	08-8
図IV-46	1	55-1	H-9(.10)	15号址/70e	床	1593	25 25	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-136
図IV-46	2	55-1	H-9(.10)	15号址/71e	床	1634・1847	7 8	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-137
		55-1	H-9(.10)	15号址/71e	埋土	2101	1						
図IV-46	3	55-1	H-9(.10)	15号址/70e	床	1592・1976・ 1978	7 7	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-131①
図IV-46	4	55-1	H-9(.10)	15号址/70e	床	15921593	17 17	VIIIb	甕	胴～底	無文		08-131③
図IV-46	5	55-1	H-9(.10)	15号址/71e	床	1599・1636・ 1718	27 27	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-133
図IV-46	6	55-1	H-9(.10)	15号址/70e	床	1414・1735	8 8	VIIIb	甕	胴	刻文		08-138
図IV-46	7	55-1	H-9(.10)	15号址	埋土	1475	1 2	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		08-265
				15号址	埋土	1476	1						
図IV-46	8	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1701	4 4	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		08-130
図IV-46	9	55-1	H-9(.10)	15号址	埋土	2088・2114	3 3	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、炭化物多量 付着		08-135
図IV-46	10	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1735	5 5	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-134
図IV-46	11	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1622	1 1	VIIIb	甕	口	ハの字形刻文		08-266
図IV-46	12	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1412	1 3	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯		08-132①
				H-9(.10)	埋土	1478・1500	2						
図IV-46	13	55-1	H-9(.10)	15号址	埋土	1409	1 5	VIIIb	甕	胴	無文		08-132②
				H-9(.10)	床	1570・1699・ 1817	4						
図IV-46	14	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1618	3 3	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯		08-264
図IV-46	15	55-1	H-9(.10)	15号址	埋土	2098	1 1	VIIIb	甕	胴	貼付帯上刻み		08-263
図IV-47	16	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1621・1707・ 1770	12 14	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-11
				H-9(.10)	埋土	1492	2				/口径(25.2)cm、器高(8.4)cm		
図IV-47	17	55-1	H-9(.10)	15号址/70e	埋土	1700	2 10	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯 /口径18.6cm、器高(15.6)cm		08-27
				H-9(.10)	床	1730・1897	6						
				H-9(.10)	床	不明	1						
				H-9(.10)	70e	VII	1395	1					
図IV-47	18	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1590	6 7	VIIIb	甕	底	無文 /底径(9.9)cm、器高(11.3)cm		08-67
				H-9(.10)	埋土	1765	1						
図IV-47	19	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1418・1559	2 12	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径9.0cm、器高(14.3)cm		08-18
				H-9(.10)	埋土	1406	1						
				H-9(.10)	70e	VII	1398	9					
図IV-47	20	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1640・1735・ 1819	5 5	VIIIb	甕	底	無文 /底径(8.4)cm、器高(9.2)cm		08-68
図IV-47	21	55-1	H-9(.10)	15号址/71e	床	1847	3 3	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径8.3cm、器高(8.7)cm		08-69
図IV-47	22	55-1	H-9(.10)	15号址/70e	床	1591	6 6	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径7.7cm、器高(8.1)cm		08-70
図IV-47	23	55-1	H-9(.10)	15号址/70e	床	1598	15 15	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径8.3cm、器高(5.7)cm		08-71
図IV-47	24	55-1	H-9(.10)	15号址	床	1568・1571	2 2	VIIIb	台付鉢?	台	脚部に十字の貫通孔、上げ底 /底径3.0cm、器高5.0cm		08-66
図IV-47	32	56-2	H-11	21号址	埋土	1900	16 16	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文 /口径(22.8)cm、器高(16.2)cm		08-13
図IV-47	33	56-2	H-11	21号址/71e	埋土	1900	15 15	VIIIb	甕	口～胴	ハの字形刻文		08-140
図IV-49	1	56-3		70e	VII	360・231	15 15	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、櫛歯文		08-126①
図IV-49	2	56-3	H-12	8号址	埋土	649	1 1	VIIIb	甕	口～胴	櫛歯文		08-126②
図IV-49	3	56-3	H-12	8号址	盛土	1368	1 1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-250
図IV-49	4	56-3	H-12	8号址	埋土	1358	1 1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-249
図IV-49	5	56-3	H-12	8号址	埋土	755	1 1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯		08-248
図IV-49	6	56-3	H-12	8号址/72e	埋土	1344・1374	3 6	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-127
				71e	攪乱	—	3						
図IV-49	7	56-3	H-12	8号址/72e	埋土	219	9 9	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、擬縄貼付文		08-128
図IV-49	8	56-3	H-12	8号址	埋土	344	1 1	VIIIb	甕	口	刻文、貼付帯(鋸文)上刻み		08-246
図IV-49	9	56-3	H-12	8号址	埋土	1314	2 3	VIIIc	甕	口	擬縄貼付文、補修孔		08-247
				H-12	埋土	1315	1						

表Ⅳ-7 2008年調査掲載土器一覽(4)

挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	新遺構名	旧遺構名/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数 破片	計	分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号
図Ⅳ-49	10	56-3	H-12	8号址	埋土	570	12	12	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯		08-245
図Ⅳ-49	11	56-3	H-12	8号址	埋土	215・445・ 568・651	6	7	VIIIb	甕	口～底	口縁部肥厚帯、刻文 /口径(13.4)cm、底径(6.9)cm、器高 13.2cm		08-9
			H-12	8号址	炉	1410	1							
図Ⅳ-49	12	56-3	H-12	8号址	埋土	397	8	8	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径7.4cm、器高(12.8)cm		08-10
図Ⅳ-49	13	56-3	H-12	8号址/71e	埋土	417	2	2	VIIIb	甕	底	無文 /底径7.5cm、器高(11.2)cm		08-59
図Ⅳ-49	14	56-3	H-12	8号址	埋土	510	1	1	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径7.6cm、器高(8.3)cm		08-60
図Ⅳ-49	15	56-3	H-12	8号址/71e	盛土	1346・1355	16	16	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径7.5cm、器高(8.2)cm		08-64
図Ⅳ-49	16	56-3	H-12	8号址/72e	埋土	341	15	15	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径10.3cm、器高(9.0)cm		08-61
図Ⅳ-49	17	56-3	H-12	8号址/72e	埋土	206	6	6	VIIIb	甕	底	無文 /底径(7.7)cm、器高(6.5)cm		08-62
図Ⅳ-51	1	57-1	H-13	7号址	盛土	641	10	10	VIIIb	甕	胴	刻文、櫛歯文		08-124
図Ⅳ-51	2	57-1	H-13	7号址	埋土	1600	1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-239
図Ⅳ-51	3	57-1	H-13	7号址	壁	1848	4	4	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-242
図Ⅳ-51	4	57-1	H-13	7号址	床	1423	1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-243
図Ⅳ-51	5	57-1	H-13	7号址	床	1465	1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-241
図Ⅳ-51	6	57-1	H-13	7号址	埋土	325	2	3	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-125
			H-13	7号址	盛土攪乱	—	1							
図Ⅳ-51	7	57-1	H-13	7号址	埋土	1601	1	1	VIIIc	小型壺	口	口縁部肥厚帯(段)、刻文、擬縄貼 付文		08-240
図Ⅳ-51	8	57-1	H-13	7号址/73e	床	1426	3	3	VIIIc	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、貼付帯上連続指頭 押捺		08-123①
図Ⅳ-51	9	57-1	H-13	7号址/73e	床	1512・1513	4	4	VIIIc	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、貼付帯上連続指頭 押捺		08-123②
図Ⅳ-51	10	57-1	H-13	7号址	床	1515	1	1	VIIIb	甕	胴	貼付帯上連続指頭押捺		08-244
図Ⅳ-51	11	57-1	H-13	7号址	埋土	455・461・ 600	3	3	VIIIb	甕	底	無文 /底径8.7cm、器高(10.6)cm		08-58
図Ⅳ-51	12	57-1	H-13	7号址	埋土	1580	12	12	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径7.6cm、器高(9.3)cm		08-57
図Ⅳ-53	1	57-2	H-14	9号址	炉(竈上)	2007	3	3	VIb	小型壺	胴	擬縄貼付文、縄文		08-254
図Ⅳ-53	2	57-2	H-14	9号址	床	939	1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-251
図Ⅳ-53	3	57-2	H-14	9号址	床	1152	2	2	VIIIb	甕	胴	刻文		08-252
図Ⅳ-53	4	57-2	H-14	9号址	埋土	1667	1	1	VIIIb	甕	底	無文		08-253
図Ⅳ-54	1	57-3	GP-1	1号址/55e	覆土	39	1	1	VIIIb	甕	口～底	口縁部肥厚帯、刻文、炭化物多量 付着 /口径11.0cm、底径5.3cm、器高 12.9cm	約95%残存	08-1
図Ⅳ-55	1	57-3	PS-2	17号址	盛土	2347	6	6	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-262
図Ⅳ-55	2	57-3	PS-2	17号址	K	—	2	2	VIIIc	甕	口	擬縄貼付文		08-261
図Ⅳ-55	3	57-3	PS-2	17号址	盛土	2340・2349・ 2354・2355	16	22	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、貼付帯上刻 み、炭化物多量付着 /口径13.5cm、器高(11.2)cm		08-14
			F-1	22号址	埋土	2280	5							
				69e	VII	2360	1							
図Ⅳ-55	4	57-3	PS-2	17号址	埋土	1688	4	8	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、擬縄貼付文、ハの 字状刻文 /口径22.0cm、器高(12.3)cm		08-12
			PS-2	17号址	攪乱	—	2							
				69e	VII	2368	2							
図Ⅳ-58	1	57-3	SF-1	13号址	炉	1321	1	1	VIIIb	甕	口	刺突列		08-267
図Ⅳ-58	2	57-3	SF-1	13号址	炉	1321	1	8	VIIIb	甕	底	無文 /底径(6.7)cm、器高(6.5)cm		08-65
			SF-1	13号址	攪乱	—	7							
図Ⅳ-58	3	57-3	F-1	22号址	埋土	2283	43	43	VIIIb3	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-143
図Ⅳ-58	4	57-3	F-1	22号址/68e	炉	1991	14	14	VIIIb3	甕	口～胴	貼付帯上刻み		08-142
図Ⅳ-58	5	57-3	H-8	6号址/68e	炉	1128	1	1	VIIIb3	甕	胴	貼付帯および貼瘤上刻み		08-141②
図Ⅳ-58	6	57-3	F-1	22号址	炉	1989・2000	8	8	VIIIb3	甕	胴	貼付帯および貼瘤上刻み		08-141①
図Ⅳ-58	7	57-3	F-1	22号址	炉	1995	8	8	VIIIb	甕	胴～底	無文 /底径8.3cm、器高(9.5)cm		08-74
図Ⅳ-58	8	57-3	F-2	11号址	炉	843	1	1	VIIIb	深鉢	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-255
図Ⅳ-58	9	57-3	F-2	11号址	炉	843	6	6	VIIIb	甕	胴	貼付帯(波状押捺)		08-256
図Ⅳ-58	10	57-3	F-3	12号址	炉	912	1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-269
図Ⅳ-58	11	57-3	F-3	12号址	炉	1301	1	1	VIIIb	甕	胴	貼付隆帯上刻み		08-268
図Ⅳ-59	1	58-1		130～135 ライン付近	VII層 礫上	3220・3221・ 3446	5	5	IVb	深鉢	口	口縁部無文帯、横走区画沈線、LR 縄文、補修孔 /口径34.5cm、器高(10.2)cm		08-26
図Ⅳ-59	2	58-1		(137付近)	VII層上	3384・3385・ 3386・3441	4	4	IVb	深鉢	口～胴	刻み列、曲線帯状文(磨消縄文)、 RL縄文		08-169①
図Ⅳ-59	3	58-1		(137付近)	VII層上	3439	1	1	IVb	深鉢	口	刻み列、曲線帯状文(磨消縄文)、 RL縄文		08-169②
図Ⅳ-59	4	58-1		137c	VII	3086	1	1	IVb	深鉢	胴	刻み列、曲線帯状文(磨消縄文)、 RL縄文		08-169③
図Ⅳ-59	5	58-1		136c	VII	3065	1	1	IVb	小型鉢	口	刻み列、突瘤、細沈線、LR縄文		08-313
図Ⅳ-59	6	58-1		136c	VII	3065	1	1	IVb	小型鉢	口	刻み列、突瘤、細沈線、LR縄文		08-314
図Ⅳ-59	7	58-1		礫上	VII	3154	1	1	IVc	深鉢	口	突瘤、羽状縄文		08-312
図Ⅳ-59	8	58-1		98d	VII	3249	2	2	Vc	深鉢	口	口唇刻み、沈線		08-311
図Ⅳ-59	9	58-1		107c	VII	2903	7	7	VIb1	深鉢	口～胴	突起、突瘤、擬縄貼付文、縄端刺 突、縄線、縄文		08-161
図Ⅳ-59	10	58-1		107c	VII	2902	1	1	VIb	深鉢	胴	擬縄貼付文、縄文		08-307
図Ⅳ-59	11	58-1		105c	VII	2743	2	3	VIb	深鉢	胴	擬縄貼付文、縄端刺突、縄線、縄文		08-306
				105c	VII	2875	1							

表IV-8 2008年調査掲載土器一覽(5)

挿図 番号	掲載 番号	写真版 番号	新遺構名	旧遺構名/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数		分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号
							破片	計						
図IV-59	12	58-1		101c?	V	2301	1	2	VIb1	深鉢	口～胴	突起、突瘤、擬縄貼付文(横位・縦位・楕円)、縄端刺突、縄文(外・口唇)		08-160
				111c	攪乱	—	1							
図IV-59	13	58-1		106c	VII上	2980	4	4	VIb1	深鉢	口～胴	突瘤、擬縄貼付文、縄端刺突、縄文(外・口唇)		08-162②
図IV-59	14	58-1		108c	VII	2512	6	6	VIb2	深鉢	口～胴	突瘤、貼瘤、縄端刺突、縄文、縄端刺突、縄文(外・口唇)		08-163
図IV-59	15	58-1		116b	V上	2664	1	1	VIb1	深鉢	口	突瘤、縄文(外・口唇)		08-309
図IV-59	16	58-1		106d		—	1	3	VIb1	深鉢	口～胴	突瘤、貼瘤、縄文、縄端刺突、縄文(外・口唇)		08-164
				107c	攪乱	—	2							
図IV-60	17	58-1		108c	VII	2512	7	7	VIb1	深鉢	口～胴	突起、口唇刻文、突瘤、縄文、縄端刺突、縄文		08-165
図IV-60	18	58-1		107c	VII	2903	2	2	VIb1	深鉢	口	突瘤、縄文(外・口唇)		08-308
図IV-60	19	58-1		106c	VII	2983	1	1	VIb1	深鉢	突起	把手、突瘤、擬縄貼付文、縄文(把手上もあり)、縄文(外・内面)		08-315
図IV-60	20	58-1		106c	VII	2722	15	15	VIb1	小型甕	全	2×2単位突起、把手、突瘤、擬縄貼付文(縦位・斜位)、縄文(口唇・把手上もあり)、縄端刺突(底面付近及び底面周縁もあり)、縄文/口径12.3cm、底径6.4cm、器高12.2cm	約100%残存	08-24
図IV-60	21	58-1		106c	V	2186	1	1	VIb2	深鉢	突起	突起、微隆起線、縄文		08-316
図IV-60	22	58-1		103c	V	2062	1	1	VIb2	深鉢	口	突起、擬縄貼付文(縦位・横位)、縄文、縄端刺突、縄文(外・内面口唇)		08-317
図IV-60	23	58-1		97d	V	2076	1	1	VIb2	深鉢	口	突起、擬縄貼付文、縄文、縄文		08-305
図IV-60	24	58-1		97d	攪乱	—	2	2	VIb2	深鉢	口	突起、微隆起線、縄文、擬縄貼付文、縄文、縄文		08-158①
図IV-60	25	58-1		97d	V	2081	2	2	VIb2	深鉢	胴	微隆起線、縄文、擬縄貼付文、縄文、縄文		08-158②
図IV-60	26	58-1		115c	V	2400	10	10	VIb2	深鉢	口～胴	突起、微隆起線(縦位・横位・楕円文)、縄文、縄文(外・内面口唇)、補修孔		08-157
図IV-60	27	58-1		115c	V	2599	1	1	VIb2	深鉢	口	微隆起線、縄文、縄文(外・内面口唇)、補修孔		08-304
図IV-60	28	58-1		108c	攪乱	—	3	3	VIb2	深鉢	口	擬縄貼付文、縄文、縄文、内面炭化物多量付着		08-303
図IV-60	29	58-1		41f	VII	1935	6	6	VIc	深鉢	胴～底	縄文		08-154
図IV-60	30	58-1		33f	VII	5	1	1	VI	深鉢	胴～底	縄文/底径(7.8)cm、器高(6.7)cm		08-81
図IV-60	31	58-1		107c	VII	2943	8	8	VI	深鉢	底	縄文/底径(8.0)cm、器高(9.5)cm		08-83
図IV-60	32	58-1		112c	VII	2454	1	1	VIb	小型壺	胴～底	擬縄貼付文、縄文		08-80③
図IV-60	33	58-1		112c	V	2395	2	2	VIb	小型壺	胴～底	擬縄貼付文、縄文、縄文		08-80②
図IV-60	34	58-1		112c	V	2396	1	1	VIb	小型壺	胴～底	擬縄貼付文、縄文、底面縄端刺突/底径4.2cm、器高(4.7)cm		08-80
図IV-60	35	58-1		103c	VII	2954	4	4	VIb	小型深鉢	口～胴	突起・貫通孔、縄文(口唇上あり)、縄文		08-166
図IV-61	36	59-1		59e	VII	15・17・18・19・20・47	12	12	VIc	注口	口～胴	注口、口唇上刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文/器高(16.9)cm	微隆起線に沿う化粧粘土	08-19
図IV-61	37	59-1		54e	攪乱	—	21	24	VIc	深鉢	口～胴	突起、口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線(円弧文あり)、三角列点、帯縄文		08-153
				54f	VII	1202・1203・1204	3							
図IV-61	38	59-1		113c	VII	2476	1	1	VIc	深鉢	口～胴	擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文		08-299
図IV-61	39	59-1		54e	VII	1207	1	1	VIc	深鉢	胴～底	微隆起線、三角列点、帯縄文		08-301
図IV-61	40	59-1		128b	V	3071	3	3	VIc	深鉢	口	擬縄貼付文、微隆起線、帯縄文		08-155
図IV-61	41	59-1		115c	V	2327	1	1	VIc	深鉢	口～胴	擬縄貼付文、微隆起線、列点、帯縄文、炭化物多量付着		08-302
図IV-61	42	59-1		107c	攪乱	—	1	1	VIc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		08-300
図IV-61	43	59-1		114c	VII	2398	2	2	VIc	深鉢	口～胴	擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		08-298
図IV-61	44	59-1		99d	V	2028・2030	3	3	VIc	深鉢	口～胴	擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		08-156
図IV-61	45	59-1		102c	V	2042・2044・2046・2049・2052・2053・2054・2055・2059	38	54	VIc	甕	口～胴	口唇刻み、擬縄貼付文/口径(35.2)cm、器高(23.6)cm		08-20
				102c	V	2044・2046	8							
				102c	V	2046・2228	2							
				102c	V	2046・2840	2							
図IV-61	46	59-1		112c	VII	2391	7	7	VIc	深鉢	底	帯縄文/底径(7.9)cm、器高(7.4)cm		08-85
図IV-61	47	59-1		110c	VII	2729	4	4	VI	深鉢	底	擦糸帯縄文/底径7.3cm、器高(6.3)cm		08-84
図IV-61	48	59-1		49f	VII	10	5	5	VI	小型深鉢	底	縄文/底径5.5cm、器高(4.8)cm		08-82
図IV-61	49	59-1		107c	V	2249	1	1	VIc	小型深鉢	胴～底	帯縄文/底径3.7cm、器高6.5cm		08-79
図IV-62	50	59-1		70e	VII	715	4	4	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、櫛歯文		08-150
図IV-62	51	59-1		63e	VI	29	11	11	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-147
図IV-62	52	59-1		89d	泥炭	1541	9	9	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、炭化物多量付着		08-151
図IV-62	53	59-1		68e	VII	2344	5	5	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-148
図IV-62	54	59-1		64e	VII	2365	1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-284
図IV-62	55	59-1		70e	VII	1283	1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		08-297
図IV-62	56	59-1		71e	VII	1371	1	1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		08-296

表Ⅳ-9 2008年調査掲載土器一覽(6)

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数 破片 計	分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号
図IV-62	57	59-1		71e	VII	1802	1 1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		08-295
図IV-62	58	59-1		80e	VII	1311	1 1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		08-292
図IV-62	59	59-1		70e	VII	514	3 3	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-293
図IV-62	60	59-1		71e	攪乱	—	1 1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-294
図IV-62	61	59-1		69e	VII	519	4 8	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文		08-149
				70e	VII	586	4						
図IV-62	62	59-1		69e	VII	1170	1 2	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		08-291
				69e	攪乱	—	1						
図IV-62	63	59-1		67e	攪乱	—	1 1	VIIIb	甕	胴	刻文		08-287
図IV-62	64	59-1		68e	VI	66	4 4	VIIIb	甕	胴	刻文		08-289
図IV-62	65	59-1		67e	攪乱	—	1 1	VIIIb	甕	口	沈線(横位・縦位)、刺突		08-285
図IV-62	66	59-1		67e	攪乱	—	1 1	VIIIb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文、ハの字形刻文		08-286
図IV-62	67	59-1		71e	VII	1391	4 4	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、貼付文		08-152
図IV-62	68	59-1		69e	VII	81	1 3	VIIIb	甕	胴	貼付帯上刻み		08-290
				69e	VII	160	2						
図IV-62	69	59-1		68e	VI	835	1 1	VIIIb	甕	胴	貼付帯上刻み		08-288
図IV-62	70	60-1		70e	VII	184・441・ 1227・1261	6 6	VIIIb	甕	口～胴	刻文、櫛歯文 /口径(14.0)cm、器高(12.4)cm		08-17
図IV-62	71	60-1		69e	VII	768・810・ 875	8 8	VIIIc	甕	口～胴	擬縄貼付文/口径15.2cm、器高(7.3)cm		08-16
図IV-62	72	60-1		69e	VII	82・812	38 38	VIIIb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、無文 /口径19.8cm、器高(18.5)cm		08-15
図IV-62	73	60-1		70e	VII	1393	2 2	VIIIb	甕	底	無文 /底径6.0cm、器高(6.4)cm		08-77
図IV-62	74	60-1		69e	VII	245・721・ 722	3 4	VIIIb	甕	底	無文		08-76
				69e	攪乱	—	1				/底径(7.4)cm、器高(6.5)cm		
図IV-62	75	60-1		70e	VII	171・184・ 225	10 10	VIIIb	甕	底	無文 /底径7.4cm、器高(6.9)cm		08-63

表Ⅳ-10 2008年調査掲載石器一覽(1)

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/ (発掘区)	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	産地 分析	備考	実測 番号
図IV-7	5	50-1	H-15	37号址/97d	床	2963	ナイフ	黒曜石	(4.5)	(3.7)	(0.9)	(17.7)	㉓		71
図IV-7	6	50-1	H-15	37号址/97d	床	2965	ナイフ	黒曜石	3.0	2.8	0.6	3.9	㉔		72
図IV-7	7	50-1	H-15	37号址/97d	床	2968	ナイフ	黒曜石	5.7	2.3	0.6	6.8	㉕		73
図IV-7	8	50-1	H-15	37号址/96d	床	2936	ナイフ	黒曜石	(3.4)	(3.1)	0.7	(6.2)	㉖		70
図IV-9	5	50-2	H-17	51号址/99d	床	3252	石鏃	黒曜石	(3.0)	2.2	0.3	(2.7)	㉗		81
図IV-9	6	50-2	H-17	51号址/99d	床	3426	ナイフ	黒曜石	(4.7)	2.5	0.8	(5.6)	㉘		84
図IV-9	7	50-2	H-17	51号址	-	-	スクレイパー	黒曜石	4.9	3.9	1.5	20.9	㉙		87
図IV-9	8	50-2	H-17	51号址/99d	埋土	-	スクレイパー	黒曜石	(8.0)	5.1	1.2	(46.7)			86
図IV-9	9	50-2	H-17	51号址	-	-	スクレイパー	黒曜石	6.0	5.4	0.7	17.9			88
図IV-9	10	50-2	H-17	51号址/99d	床	3300	Rフレイク	黒曜石	5.8	3.9	0.6	9.9	㉚		82
図IV-9	11	50-2	H-17	51号址/99d	床	3337	Rフレイク	黒曜石	6.7	3.4	1.0	13.3	㉛		83
図IV-9	12	50-2	H-17	51号址/99d	埋土	-	Rフレイク	黒曜石	(4.3)	2.9	0.6	(5.6)			85
図IV-9	13	50-2	H-17	51号址	床	3416	石槍	安山岩	19.1	5.5	4.5	448.0			
図IV-11	5	50-3	H-16	25号址/99d	埋土	2914	ナイフ	黒曜石	(4.5)	(3.3)	1.3	17.2	㉜		54
図IV-11	6	50-3	H-16	25号址/99d	床	3206	スクレイパー	黒曜石	3.1	2.8	0.7	4.3	㉝		58
図IV-11	7	50-3	H-16	25号址/99d	埋土	3109	Rフレイク	黒曜石	5.1	2.3	1.9	16.3			57
図IV-11	8	50-3	H-16	25号址/99d	埋土	3009	Rフレイク	黒曜石	(4.8)	(4.0)	0.8	(8.1)			56
図IV-11	9	50-3	H-16	25号址/99d	埋土	3008	Rフレイク	黒曜石	(3.3)	(1.8)	(0.7)	(2.6)			55
図IV-12	2	50-4	H-18	24号址/100c	埋土	2216	石鏃	黒曜石	(1.6)	(1.2)	(0.3)	(0.5)	㉞		52
図IV-12	3	50-4	H-18	24号址/100c	埋土	2218	石核	黒曜石	5.7	3.5	1.5	28.7	㉟		53
図IV-15	2	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.1	1.2	0.2	0.6	石鏃群5		171
図IV-15	3	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.2	0.3	石鏃群11		177
図IV-15	4	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.3	1.2	0.3	0.6	石鏃群2		168
図IV-15	5	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.4	1.3	0.2	0.6	石鏃群8		174
図IV-15	6	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.4	1.4	0.3	0.7	石鏃群9		175
図IV-15	7	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.5	1.1	0.2	0.6	石鏃群10		176
図IV-15	8	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.6	1.3	0.3	0.8	石鏃群3		169
図IV-15	9	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.8	1.3	0.3	0.9	石鏃群7		173
図IV-15	10	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.7	1.3	0.3	0.8	石鏃群6		172
図IV-15	11	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.9	1.2	0.3	0.7	石鏃群13		179
図IV-15	12	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	2.9	1.3	0.3	1.0	石鏃群1		167
図IV-15	13	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	3.0	1.3	0.3	0.9	石鏃群4		170
図IV-15	14	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3286	石鏃	黒曜石	3.0	1.3	0.2	0.8	石鏃群12		178
図IV-15	15	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3289	ナイフ	メノウ	5.6	4.5	0.9	23.5			180
図IV-15	16	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3280	ナイフ	黒曜石	10.0	3.3	0.9	35.1			181
図IV-15	17	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3272	石核	黒曜石	10.6	8.5	1.9	151.8			183
図IV-15	18	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3287	石斧	青色片岩	7.4	4.5	1.8	85.4			182
図IV-15	19	51-1	GP-3	44号址/98d	床	3058	礫	安山岩	33.7	17.1	11.3	9000		ベンガラ付着	160
図IV-17	1	51-2	P-3	27号址/102c	埋土	2462	楔形石器	メノウ	5.3	5.2	1.5	40.8			62
図IV-17	2	51-2	P-3	27号址/102c	床	2637	敲石	安山岩	20.9	6.8	5.7	1300			159
図IV-17	3	51-2	P-4	26号址/103c	埋土	2638	石鏃	黒曜石	(2.7)	1.0	0.3	(0.6)	㊲		61

表IV-11 2008年調査掲載石器一覧(2)

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	産地分析	備考	実測番号
図IV-17	4	51-2	P-4	26号址/103c	床	2316	Rフレイク	黒曜石	3.2	1.9	0.7	2.9	㉔		60
図IV-17	5	51-2	P-4	26号址/103c	埋土	2297	Rフレイク	黒曜石	4.2	3.9	0.4	6.6			59
図IV-18	3	51-3	P-5	28号址/105c	床	2721	ナイフ	黒曜石	5.1	3.0	1.0	12.3	㉕		65
図IV-18	4	51-3	P-5	28号址/105c	床	2673	Rフレイク	安山岩	(4.8)	3.5	0.6	(8.7)			63
図IV-18	5	51-3	P-5	28号址/105c	床	2691	Rフレイク	黒曜石	5.7	4.5	1.7	25.7	㉖		64
図IV-18	6	51-3	P-5	28号址	床	2623	礫	安山岩	12.6	8.1	4.7	674.0		ベンガラ付着	
図IV-20	1	51-4	PS-5	37号址/96d	集石下	2844	ナイフ	黒曜石	(3.1)	(3.0)	(0.7)	(5.8)	㉗		69
図IV-21	2	51-4	PS-7	23号址/97d	床	2952	石鏃	黒曜石	(2.4)	(1.3)	(0.3)	(1.1)	㉘		51
図IV-21	3	51-4	PS-7	23号址/98d	集石中	2066	ナイフ	黒曜石	(5.5)	(3.3)	(1.1)	(22.8)			50
図IV-23	4	51-4	PS-10	49号址/98d	埋土	3138	ナイフ	黒曜石	(2.8)	(3.1)	(0.8)	(7.1)	㉙		77
図IV-23	5	51-4	PS-10	49号址/98d	埋土	3231	スクレイパー	黒曜石	(2.9)	(3.4)	0.4	(3.0)	㉚		78
図IV-24	2	51-4	PS-11	46号址/99d	床	3200	石鏃	黒曜石	3.9	1.1	0.4	1.7	㉛		76
図IV-24	3	51-4	PS-11	46号址/99d	埋土	3054	スクレイパー	黒曜石	(2.5)	2.2	0.7	(3.6)			75
図IV-25	2	51-4	PS-12	50号址/99d	埋土	3187	石鏃	黒曜石	2.2	1.2	0.3	0.5	㉜		79
図IV-25	3	51-4	PS-12	50号址/99d	埋土	3207	Rフレイク	黒曜石	4.2	2.3	0.7	5.1	㉝		80
図IV-25	4	PS-13	45号址/66e	埋土	193	石鏃	硬質頁岩	(2.2)	1.0	0.4	(0.8)			74	
図IV-26	3	52-1	PS-14	31号址/108c	埋土	2566	スクレイパー	硬質頁岩	(3.3)	(1.6)	1.0	(4.7)			66
図IV-26	4	52-1	PS-14	31号址/109c	集石内	2706	石核	黒曜石	3.7	3.1	1.5	16.2	㉞		67
図IV-26	5	52-2	PS-15	35号址/109c	床	2713	スクレイパー	黒曜石	3.6	3.1	0.9	7.1	㉟		68
図IV-30	1	52-2	R-1	29号址/106c	Ⅶ	3055	礫	安山岩	12.7	5.8	2.9	288.1		ベンガラ付着	
図IV-30	2	52-2	R-1	29号址/106c	Ⅶ	3056	礫	安山岩	11.5	5.2	3.1	281.9		ベンガラ付着	
図IV-30	3	52-2	R-1	29号址/106c	Ⅶ上面	2982	すり石	安山岩	25.0	25.7	9.1	9200		ベンガラ付着	162
図IV-39	31	53-1	H-7	5号址	攪乱		石鏃	硬質頁岩	2.6	1.3	0.5	0.8			18
図IV-39	32	53-1	H-7	5号址/66e	埋土	195	石鏃	安山岩	2.7	1.4	0.5	1.1			8
図IV-39	33	53-1	H-7	5号址/66e	床	1073	石鏃	硬質頁岩	3.1	1.1	0.4	1.2			15
図IV-39	34	53-1	H-7	5号址/66e	床	1018	石鏃	硬質頁岩	3.2	1.4	0.4	1.3			14
図IV-39	35	53-1	H-7	5号址/66e	床	975	石鏃	安山岩	3.9	1.2	0.5	1.3			12
図IV-39	36	53-1	H-7	5号址/66e	床	1810	石鏃	黒曜石	2.7	1.3	0.4	1.0	④		17
図IV-39	37	53-1	H-7	5号址/66e	床	974	石鏃	硬質頁岩	(2.7)	1.1	0.4	(0.8)			11
図IV-39	38	53-1	H-7	5号址/66e	床	1716	石鏃	黒曜石	(3.0)	1.4	0.4	(1.4)	③		16
図IV-39	39	53-1	H-7	5号址/66e	埋土	659	石鏃	黒曜石	(2.6)	1.5	0.4	(1.1)			10
図IV-39	40	53-1	H-7	5号址/66e	埋土	982	スクレイパー	黒曜石	4.8	3.3	1.2	16.2			13
図IV-39	41	53-1	H-7	5号址	攪乱		スクレイパー	黒曜石	7.7	4.0	1.2	30.0			19
図IV-39	42	53-1	H-7	5号址/66e	埋土	384	Rフレイク	黒曜石	(3.1)	(2.5)	(0.6)	(4.6)			9
図IV-43	42	54-1	H-8	6号址/68e	埋土	109	石鏃	黒曜石	3.0	1.1	0.4	1.3			21
図IV-43	43	54-1	H-8	6号址/68e	埋土	430	石鏃	黒曜石	3.3	1.1	0.3	1.1			24
図IV-43	44	54-1	H-8	6号址/68e	床	1658	石鏃	黒曜石	3.4	1.2	0.4	1.6	⑩		30
図IV-43	45	54-1	H-8	6号址/67e	埋土	305	石鏃	黒曜石	4.5	1.1	0.4	1.9			23
図IV-43	46	54-1	H-8	6号址/68e	床	1843	石鏃	黒曜石	2.2	1.2	0.4	0.7	⑮		33
図IV-43	47	54-1	H-8	6号址/68e	埋土	106	石鏃	黒曜石	(1.4)	(1.2)	(0.4)	(0.6)			20
図IV-43	48	54-1	H-8	6号址/67e	床	1711	石鏃	黒曜石	(2.0)	1.5	0.4	(0.9)	⑰		31
図IV-43	49	54-1	H-8	6号址/68e	埋土	534	石鏃	黒曜石	(3.8)	1.5	(0.4)	(2.7)			25
図IV-43	50	54-1	H-8	6号址/68e	盛土	1035	石鏃	黒曜石	(1.9)	(1.6)	(0.4)	(1.2)			27
図IV-43	51	54-1	H-8	6号址/67e	埋土	111	石鏃	黒曜石	(2.0)	2.0	0.5	(2.0)			22
図IV-43	52	54-1	H-8	6号址/67e	床	1123	ナイフ	黒曜石	4.9	3.5	1.3	13.6	⑱		29
図IV-43	53	54-1	H-8	6号址/67e	柱穴	1833	スクレイパー	黒曜石	(2.8)	(4.2)	(0.7)	(8.7)	⑭		32
図IV-43	54	54-1	H-8	6号址/67f	埋土	955	スクレイパー	黒曜石	(4.6)	3.5	0.8	(11.3)			26
図IV-43	55	54-1	H-8	6号址/67e	床	1122	Rフレイク	黒曜石	(4.6)	2.6	0.7	5.8	⑯		28
図IV-43	56	54-1	H-8	6号址	埋土	1726	石斧	砂岩	(16.4)	6.3	4.0	(663.5)			
図IV-43	57	54-1	H-8	6号址/68e	床	1888	くぼみ石	安山岩	22.5	16.4	3.9	1116.9			165
図IV-47	25	56-1	H-9	15号址/71e	柱穴	1895	石鏃	硬質頁岩	1.8	0.8	0.3	0.4			49
図IV-47	26	56-1	H-9	15号址/71e	床	1617	石鏃	硬質頁岩	2.7	0.9	0.3	0.5			44
図IV-47	27	56-1	H-9	15号址/71e	床	1758	石鏃	黒曜石	(2.9)	1.3	0.3	(0.8)	⑨		46
図IV-47	28	56-1	H-9	15号址/71e	床	1561	石鏃	硬質頁岩	(3.1)	1.1	0.3	(1.0)			43
図IV-47	29	56-1	H-9	15号址/71e	床	1818	スクレイパー	黒曜石	3.7	3.7	0.7	6.5	⑩		48
図IV-47	30	56-1	H-9	15号址/70e	床	1767	スクレイパー	黒曜石	5.6	6.3	1.7	49.3	⑦		47
図IV-47	31	56-1	H-9	15号址/70e	床	1635	Rフレイク	黒曜石	3.7	3.5	1.2	13.1	⑧		45
図IV-49	18	56-3	H-12	8号址/72e	炉	1382	石鏃	黒曜石	3.4	1.4	0.4	1.3	⑪		39
図IV-49	19	56-3	H-12	8号址/71e	盛土	1318	スクレイパー	黒曜石	4.2	5.4	1.4	27.7			38
図IV-49	20	56-3	H-12	8号址/72e	床	763	磨石	安山岩	22.5	14.7	10.7	4400			166
図IV-49	21	56-3	H-12	8号址/72e	床	764	磨石	安山岩	33.2	16.7	10.3	9300			164
図IV-49	22	56-3	H-12	8号址/72e	床	762	くぼみ石	安山岩	26.3	12.6	9.1	4400			163
図IV-51	13	57-1	H-13	7号址/73e	床	745	石鏃	黒曜石	3.5	1.7	0.4	1.6	⑤		34
図IV-51	14	57-1	H-13	7号址/74e	壁	1676	石鏃	黒曜石	3.5	1.9	0.3	1.5			37
図IV-51	15	57-1	H-13	7号址/73e	埋土	1605	石鏃	黒曜石	(2.6)	2.0	0.5	(2.3)			36
図IV-51	16	57-1	H-13	7号址/73e	床	792	石鏃	黒曜石	(2.3)	1.1	0.3	(0.7)	⑥		35
図IV-53	5	57-2	H-14	9号址/75e	床	1865	石鏃	黒曜石	3.0	1.8	0.4	1.7	⑫		42
図IV-53	6	57-2	H-14	9号址/75e	埋土	789	石鏃	黒曜石	(1.4)	(0.6)	(0.1)	(0.1)			40
図IV-53	7	57-2	H-14	9号址/75e	床	824	ナイフ	黒曜石	(4.0)	(2.6)	(0.8)	(9.0)	⑬		41
図IV-54	2	57-3	GP-1	1号址/55e	覆土	37	石鏃	硬質頁岩	2.3	1.2	0.4	0.9			5
図IV-54	3	57-3	GP-1	1号址/55e	覆土	34	石鏃	硬質頁岩	(2.4)	1.1	0.3	(0.7)			2
図IV-54	4	57-3	GP-1	1号址/55e	覆土	33	石鏃	黒曜石	2.8	1.2	0.3	0.8	⑲		1

表Ⅳ-12 2008年調査掲載石器一覧(3)

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	産地分析	備考	実測番号
図IV-54	5	57-3	GP-1	1号址/55e	覆土	35	石鏃	黒曜石	2.8	1.3	0.3	0.8	①		3
図IV-54	6	57-3	GP-1	1号址/55e	覆土	36	石鏃	硬質頁岩	2.3	0.9	0.3	0.6			4
図IV-54	7	57-3	GP-1	1号址/55e	覆土	38	石鏃	硬質頁岩	(2.9)	1.1	0.4	(0.9)			6
図IV-58	12	57-3	F-3	12号址	炉	915	石核	黒曜石	4.9	8.1	4.4	178.5			
図IV-63	1	60-2		98d	VII	3006	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.3	0.5			132
図IV-63	2	60-2		117b	VII	2668	石鏃	黒曜石	2.5	1.9	0.3	1.0			121
図IV-63	3	60-2		97d	V	2080	石鏃	黒曜石	3.2	1.7	0.4	1.6			90
図IV-63	4	60-2		98d	VII	3357	石鏃	黒曜石	(1.3)	(1.3)	(0.3)	(0.5)			138
図IV-63	5	60-2		105c	VII	2763	石鏃	黒曜石	(1.5)	1.7	0.3	(0.7)			127
図IV-63	6	60-2		99d	V	2023	石鏃	黒曜石	2.0	1.1	0.3	0.6			89
図IV-63	7	60-2		137c	VII	3087	石鏃	黒曜石	(1.9)	1.2	0.3	(0.5)	⑦	C地点 西側	155
図IV-63	8	60-2		111c	V	2304	石鏃	黒曜石	(2.3)	1.4	0.4	(0.9)			95
図IV-63	9	60-2		98d	VII	3313	石鏃	黒曜石	3.0	1.3	0.4	1.1			136
図IV-63	10	60-2		110c	VII	2631	石鏃	黒曜石	(4.8)	1.7	0.7	(4.0)			119
図IV-63	11	60-2		101c	V	2148	石鏃	黒曜石	(5.1)	2.0	0.5	(4.0)			91
図IV-63	12	60-2		103c	V	2423	石鏃	黒曜石	(1.7)	(1.1)	(0.2)	(0.3)			97
図IV-63	13	60-2		98d	VII	3015	石槍	黒曜石	4.7	2.0	0.5	3.9			133
図IV-63	14	60-2		110c	V	2322	石槍	黒曜石	6.7	3.0	1.0	19.3			96
図IV-63	15	60-2		112c	VII	2393	石槍	黒曜石	4.3	2.7	1.0	9.2			114
図IV-63	16	60-2		96d	VI	2083	ナイフ	黒曜石	5.0	2.1	0.6	5.9			103
図IV-63	17	60-2		102c	VII	2769	ナイフ	黒曜石	(5.3)	1.9	0.8	(8.2)			128
図IV-63	18	60-2		97d	VII	3097	ナイフ	黒曜石	(4.6)	(3.3)	0.6	(4.6)			134
図IV-63	19	60-2		100d	VII	3191	ナイフ	黒曜石	3.9	3.7	0.8	7.6			135
図IV-63	20	60-2		98d	VII	3391	ナイフ	黒曜石	3.8	2.1	0.6	3.9			140
図IV-63	21	60-2		104c	V	2167	ナイフ	黒曜石	4.5	3.7	1.2	16.7			92
図IV-63	22	60-2		107c	VI	2318	ナイフ	黒曜石	7.9	3.0	0.9	17.1			105
図IV-63	23	60-2		98d	VII	3356	ナイフ	黒曜石	(2.0)	(2.2)	(0.3)	(1.0)			137
図IV-63	24	60-2		105c	VII	2760	ナイフ	チャート	3.1	3.0	1.2	11.0		基部?	126
図IV-63	25	60-2		106c	VII上面	2977	ナイフ	黒曜石	3.6	(2.9)	0.8	(6.9)			130
図IV-63	26	60-2		98d	表土・攪乱	3482	ナイフ	メノウ	(5.6)	3.4	0.8	(14.1)			147
図IV-63	27	60-2		108e	VII	2521	ナイフ	黒曜石	(3.0)	(2.8)	(0.9)	(8.0)			117
図IV-63	28	60-2		103c	VII	2548	ナイフ	黒曜石	(3.8)	(3.7)	(0.9)	(11.5)			118
図IV-63	29	60-2		97d	V	3177	ナイフ	黒曜石	3.3	2.3	1.0	7.3			101
図IV-64	30	60-2		105c	VII	2759	ナイフ	黒曜石	(3.8)	(4.3)	(0.8)	(13.3)			125
図IV-64	31	60-2		96d	VI	2086	ナイフ	黒曜石	(4.1)	4.5	0.9	(18.6)			104
図IV-64	32	60-2		100d	VII	3404	スクレイパー	黒曜石	3.9	3.0	0.7	6.8			141
図IV-64	33	60-2		99d	V	2198	スクレイパー	黒曜石	4.2	2.5	0.8	5.0			93
図IV-64	34	60-2		98d	VII	2990	スクレイパー	黒曜石	5.9	4.9	0.7	15.3			131
図IV-64	35	60-2		117d	表土・攪乱	3486	スクレイパー	メノウ	3.3	4.7	1.1	8.9			151
図IV-64	36	60-2		116b	VII	2696	スクレイパー	黒曜石	4.2	5.2	2.0	31.8			122
図IV-64	37	60-2		98d	VII	3390	スクレイパー	黒曜石	2.1	2.4	0.5	2.4			139
図IV-64	38	60-2		97d	表土・攪乱	3484	スクレイパー	メノウ	(3.1)	3.5	0.7	8.3			149
図IV-64	39	60-2		108c	VII	2509	スクレイパー	黒曜石	(5.2)	4.7	1.5	31.4			116
図IV-64	40	60-2		110c	VII	2751	スクレイパー	黒曜石	6.1	2.8	1.0	74			124
図IV-64	41	60-2		98d	VII	3444	スクレイパー	黒曜石	(7.7)	4.3	1.0	14.8			142
図IV-64	42	60-2		100c	V	2223	スクレイパー	黒曜石	(3.0)	2.6	0.8	(7.0)			94
図IV-64	43	60-2		128b	V	3072	スクレイパー	黒曜石	(5.2)	(4.1)	0.8	(16.8)			100
図IV-64	44	60-2		117b	VII	2667	Rフレイク	黒曜石	3.5	2.4	1.0	7.0			120
図IV-64	45	60-2		107c	VII	2919	Rフレイク	黒曜石	3.8	2.8	0.6	4.2			129
図IV-64	46	60-2		110c	VII	2739	Rフレイク	黒曜石	4.0	2.5	0.6	3.6			123
図IV-64	47	60-2		109c	V	2624	Rフレイク	黒曜石	(3.9)	2.9	0.8	(5.1)			98
図IV-64	48	60-2		132b	V	3061	棒状原石	黒曜石	7.7	1.6	1.1	12.8			99
図IV-65	49	60-2		132b	VII礫上	3073	砥石	安山岩	15.4	11.0	11.0	2900			161
図IV-65	50			110c	表土・攪乱	3510	石錘	安山岩	14.5	10.0	6.4	1220			200
図IV-65	51	60-2		69e	VII	1136	石鏃	黒曜石	4.1	1.7	0.5	2.8		B地点	111
図IV-65	52	60-2		67e	攪乱	3478	石鏃	黒曜石	(1.1)	1.7	(0.3)	(0.6)			143
図IV-65	53	60-2		63e	VI	27	石鏃	黒曜石	(2.2)	1.6	0.3	(1.0)			102
図IV-65	54	60-2		69e	表土・攪乱	3479	石鏃	黒曜石	(1.9)	(1.5)	(0.3)	(1.0)			144
図IV-65	55	60-2		70e	VII	1194	石鏃	黒曜石	(2.8)	(1.4)	(0.4)	(1.5)		B地点	113
図IV-65	56	60-2		63e	VII下	122	石鏃	黒曜石	2.3	1.4	0.3	0.8		B地点	110
図IV-65	57	60-2		68e	VII	2417	石鏃	黒曜石	2.8	1.3	0.4	1.1		B地点	115
図IV-65	58	60-2		53e	VII	13	石錐	黒曜石	4.9	1.6	0.7	4.4		B地点	106
図IV-65	59	60-2		49f	VII下	45	ナイフ	黒曜石	(4.3)	(2.8)	(0.8)	(12.2)		B地点	109
図IV-65	60	60-2		55f	VII	40	スクレイパー	黒曜石	5.1	2.2	0.7	6.3		B地点	107
図IV-65	61	60-2		67e	攪乱	3485	スクレイパー	メノウ	2.8	2.5	0.8	4.3			150
図IV-65	62	60-2		55f	VII	41	スクレイパー	黒曜石	2.8	6.8	1.5	22.6		B地点	108
図IV-65	63	60-2		69e	VII	1191	Rフレイク	黒曜石	(5.4)	4.8	1.1	17.6		B地点	112

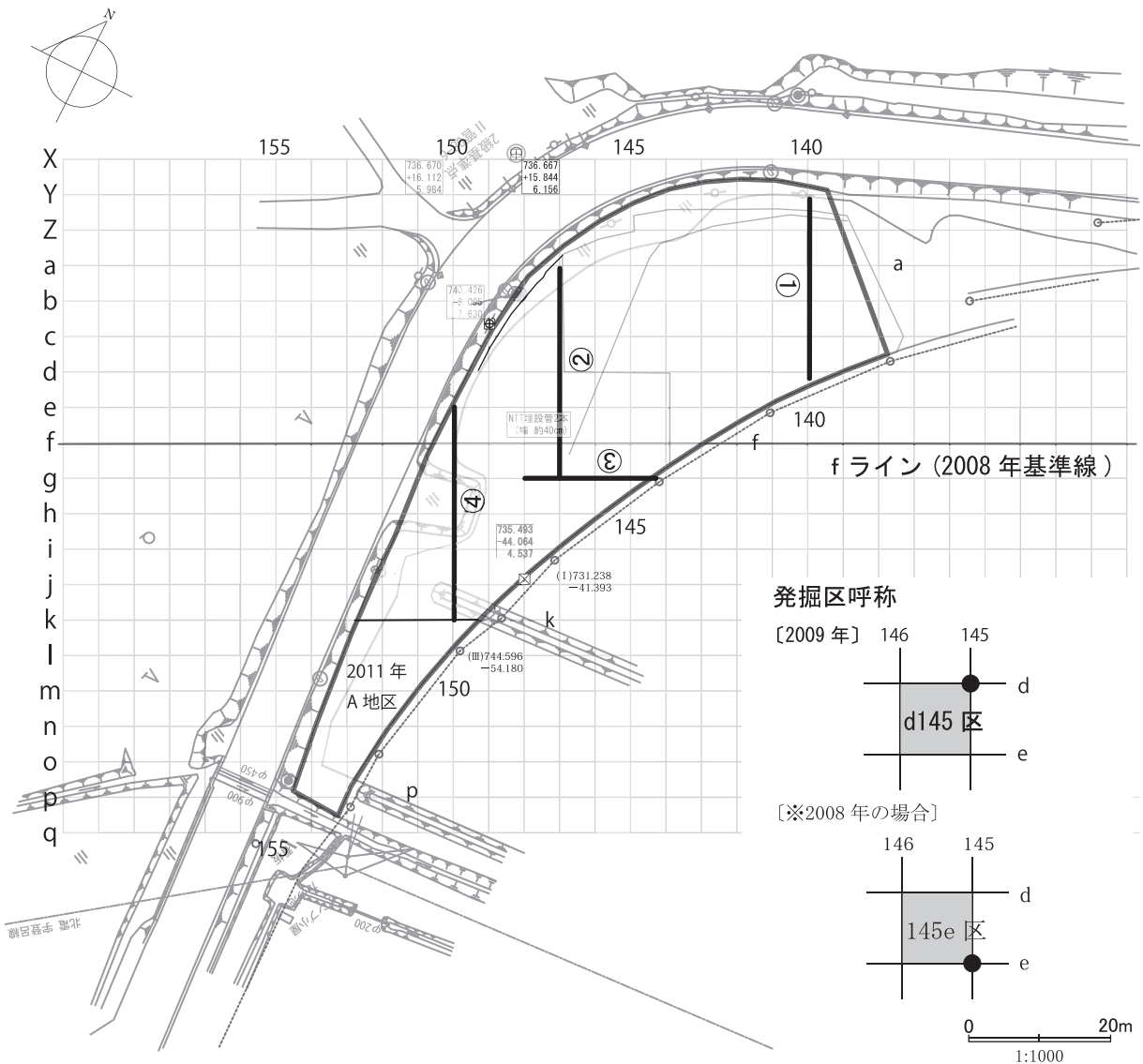
V章 2009年の調査と出土遺物

1 調査の概要

(1) 調査の方法と経過

調査区は国道334号の南東側で、急カーブを緩やかにし中央帯を設置するための道路用地にあたる。そのため、他の調査区よりも幅が広い（最大約35m）。調査以前は植林地で、樹木による攪乱が一部にみられる。北側は国道をはさみ海岸砂丘が伸びており、南～南東側は低地が広がる。調査区内の標高は、4～6mである。

調査は、草木類を重機で除去した後、表土から人力により掘削した。まず調査区を縦断するトレンチ調査を行い、土層堆積や遺構・遺物の出土状況を把握することに努めた。その後、各発掘区・層位ごとに掘削を進めた。発掘区境において土層断面図を多数作成した。なお河川堆積層の一部は重機を使用した。Ⅷ層とした礫層上面（およびそれに相当する面）を完掘面とした。なお調査区南部のkラ



図V-1 2009年発掘区設定図・土層断面位置

イン以南は、調査の都合上トレンチ調査にとどめ、次年度以降に全面掘削を行うこととなった。

遺構名は検出順に「PIT」を冠し1から番号を付した（2018年調査の際に、概要報告書や図面類などをもとに共通の遺構種別記号への変換を行った）。遺物の出土位置は、トータルステーションを用いて点記録を行った。そのほか遺構断面の測量基準点や調査範囲の設定などにもトータルステーションを使用した。写真撮影は、デジタルカメラを使用した。

（2）発掘区の設定（図V-1）

グリッドラインは、2008年調査時の5m単位を延長して設定し、ラインの名称も同様に使用した（137～155ライン、X～Z・a～qライン）。ただし発掘区名は、「数字-アルファベット」から「アルファベット-数字」とした上に、「発掘区の南東交点名」から「発掘区の北東交点名」に変更している（例：2008年「145e区」→2009年「d145区」、図V-1右下参照）。

なおトータルステーションを使用する際に、基準点（X=0.000 Y=0.000）を「a1」とし、東西（数字）をX軸（西が正方向）、南北（アルファベット）をY軸（北が正）とする座標値を使用した（例：d145杭 X=720.000 Y=-15.000）。

（3）土層（図V-2～4）

基本土層は以下の通り分層した。調査区の土層断面について、南北方向（土層①・②・④）・東西方向（土層③）の一部を図示した。

I層：表土

II層：白色火山灰層〔樽前a火山灰〕

III層：黒色土c層 最大厚1cm程度。調査区南部では泥炭化。

IV層：白色火山灰層〔駒ヶ岳c₂火山灰〕

V層：黒色土層等 最大厚20cm程度。調査区南部では泥炭化。

VI層：灰白色軽石層〔摩周b5軽石〕 粒径数mm程度。

VII層：砂層等

VII a層：黒色砂質層 続縄文時代の遺物を含む。

VII b層：砂層

※層中で3～4層の黒色帯を確認。縄文時代中期～続縄文時代の遺物を含む。

VII c層：砂礫～礫層。

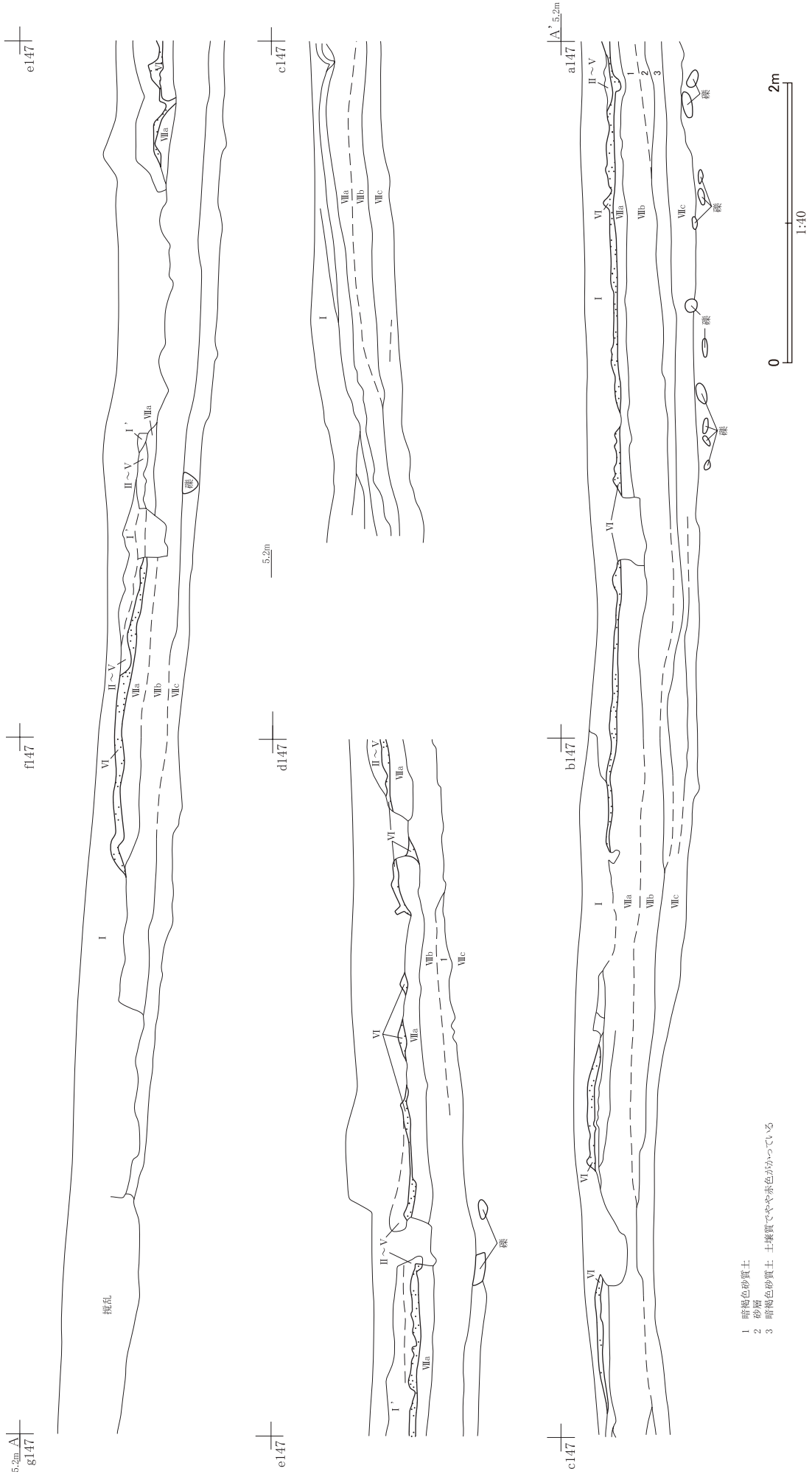
VIII層：礫層 拳大～人頭大の礫。

（4）調査結果の概要（図V-5 表V-1・2）

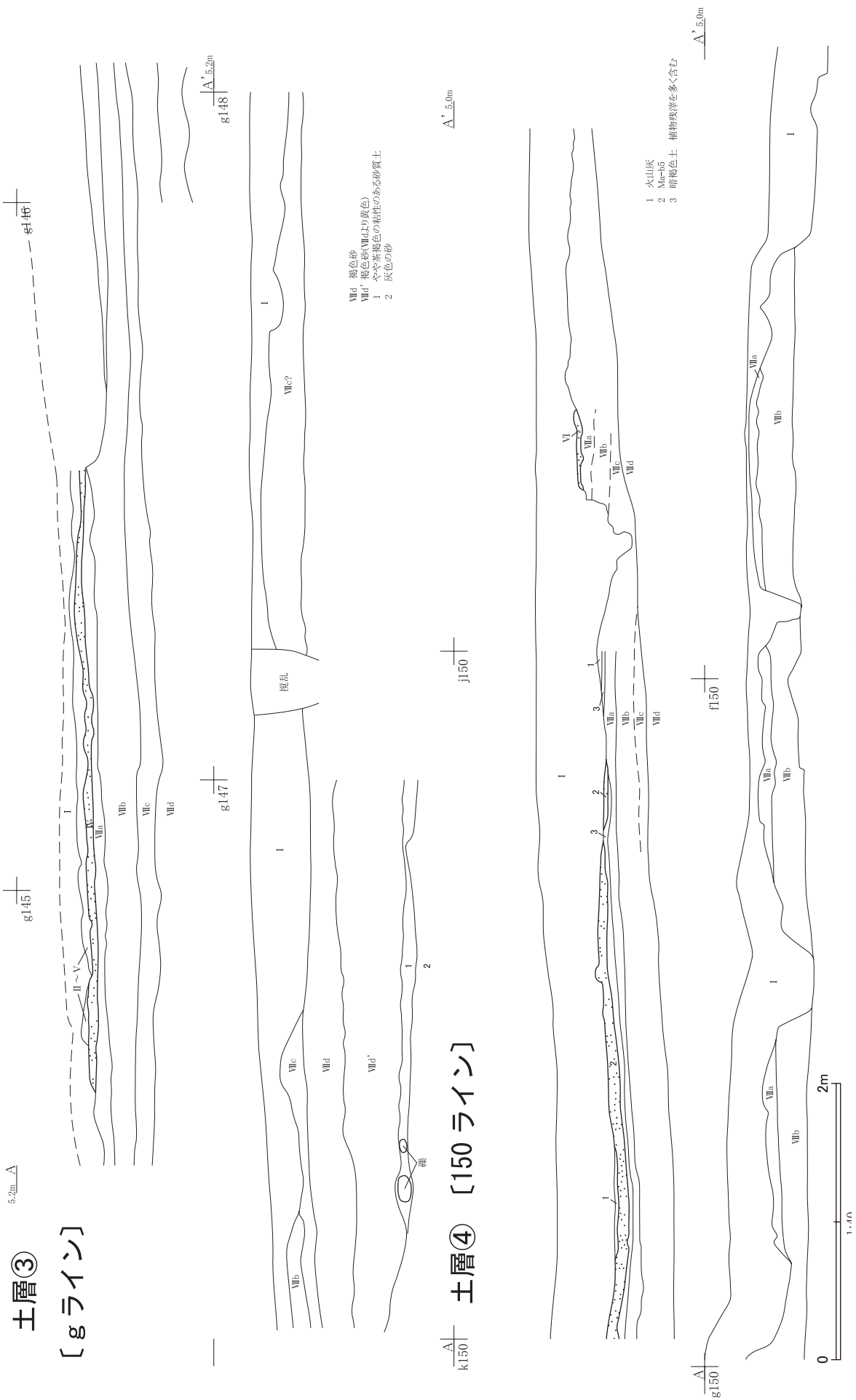
石組炉1基と焼土2か所を検出した。このほかにトレンチ調査で焼土を検出した。検出層位や出土遺物から、石組炉は続縄文時代宇津内Ⅱ式期、2か所の焼土は縄文時代中期末～後期前葉とみられる。遺物は計3,118点で、土器1,977点・石器等1,134点を数えた。土器は縄文時代後期前葉・晩期と続縄文時代宇津内Ⅱa式が多い。石器はフレイクチップを主体に、石鏃・石槍・ナイフ（削器）・スクレイパー（搔器）・すり石などが出土している。また骨片のほか、ベンガラ粒・木炭・樹皮がわずかに出土している。

また地形について、調査区内で3つの微高地を確認した。後に周辺地形を考察するうえで、南から「砂丘1」・「砂丘2」・「砂丘3」の名称を付した（図Ⅱ-2、斜里町教育委員会2013第9図）。

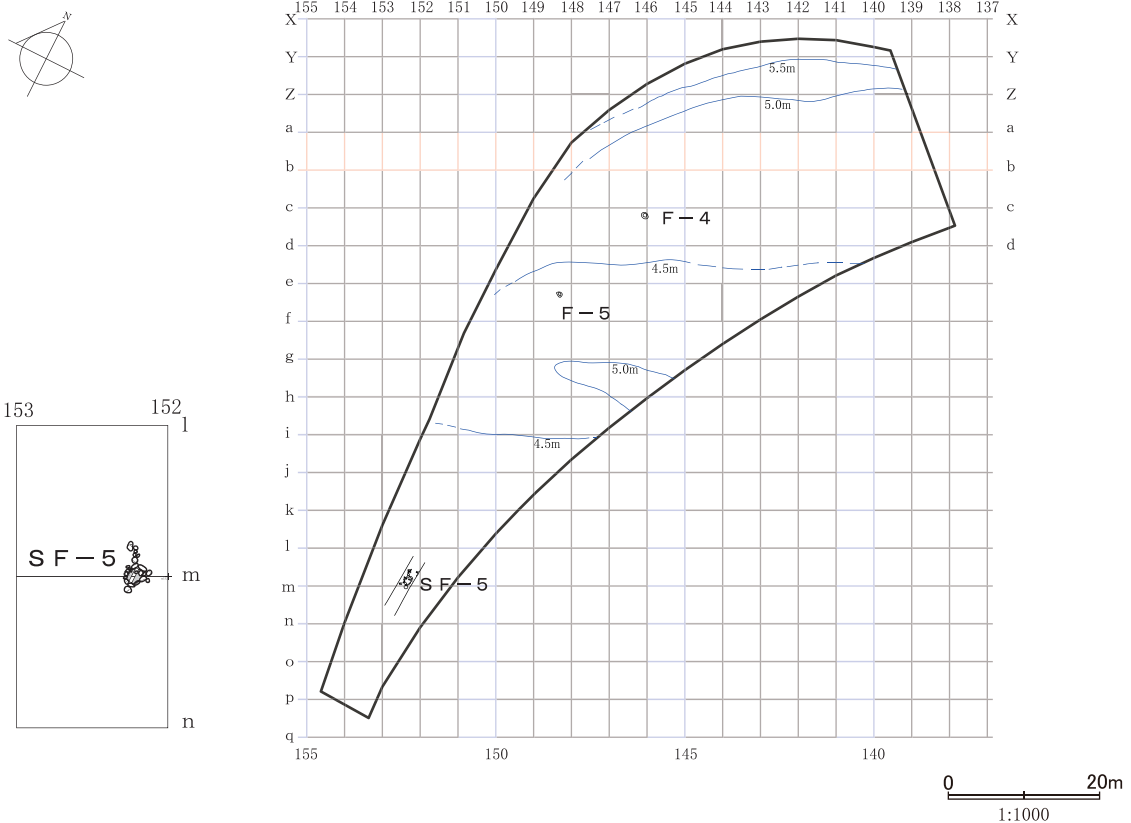
土層② [147ライン]



図V-3 調査区土層断面 (2)



図V-4 調査区土層断面 (3)



図V-5 2009年調査区遺構位置図

2 遺構の調査とその遺物

遺構の記載内容は、概要報告書（斜里町教育委員会2010）をもとに、図・写真等から編者（阿部）が記述した。

a 縄文時代の遺構

(1) 焼土

F-4 (PIT 1) (図V-6 表V-1 図版6)

調査区中央北部のⅦb層で検出した。縄文時代中期～後期のものと考えられる。被熱層とみられる褐色の砂質土が小規模にみられる。

F-5 (PIT 2) (図V-6 表V-1 図版29)

Ⅶ調査区中央部のⅦb層で検出した。縄文時代中期～後期のものと考えられる。

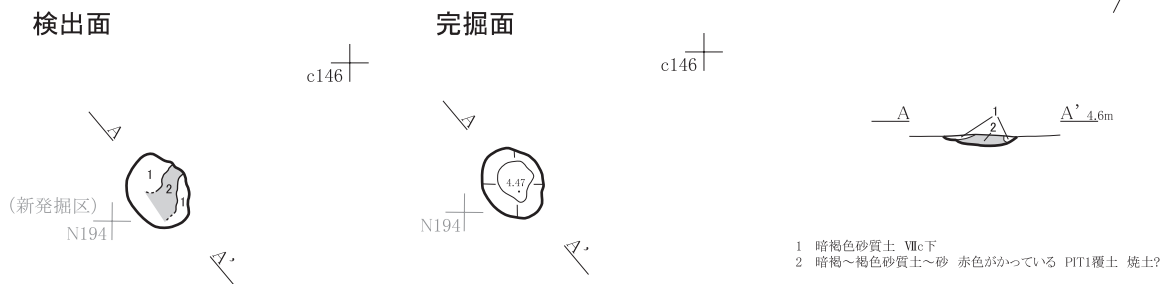
b 続縄文時代の遺構

(1) 石組炉

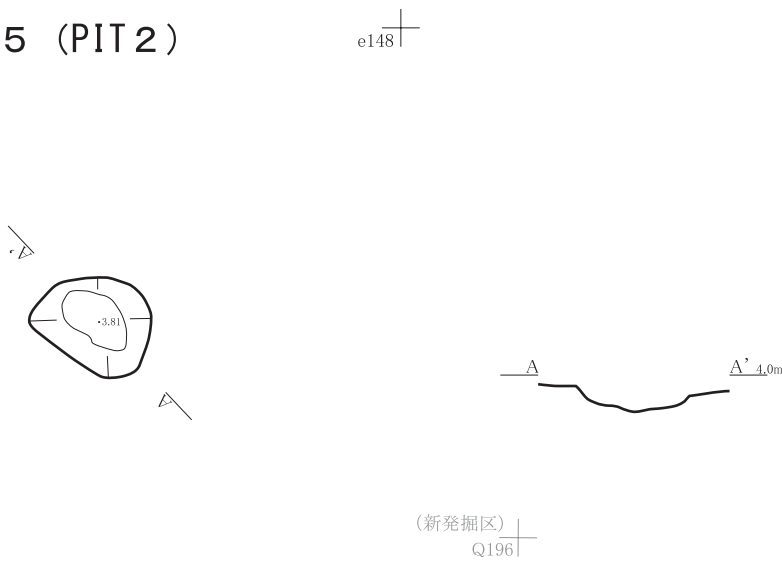
SF-5 (石囲い炉) (図V-6 表V-1・2 図版5・29)

トレンチ調査中、Ⅶa層で検出した。2011年に全体を検出した。火床面は約50×40cmの楕円形でやくぼみ、周囲にやや大型の礫が楕円形～隅丸長方形に配置されている。さらに北西側に80cmほど礫が列している。時期は検出面や周辺出土遺物から、宇津内Ⅱa～Ⅱb式期とみられる。

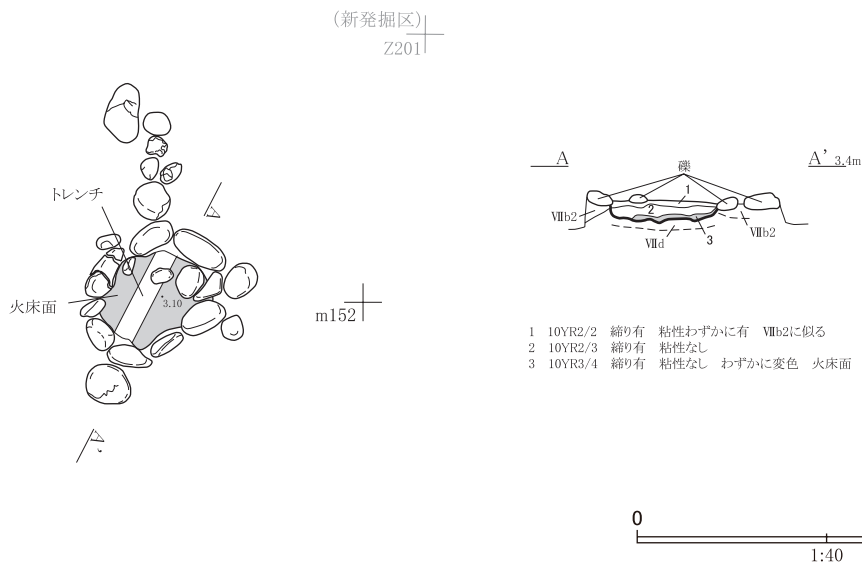
F-4 (PIT 1)



F-5 (PIT 2)



SF-5 (石囲い炉)



図V-6 F-4・5 (PIT 1・2)・SF-5 (石囲い炉)

3 包含層出土の遺物

(1) 土器 (図V-7 表V-3 図版61)

縄文時代の土器 (1~21)

中期末~晩期の土器1,393点が出土した。このうち後期前葉の土器は、主にⅦc下層に分布していた。後期中葉~後葉は2008年調査区寄りのⅦc層からわずかに出土した。晩期は、調査区北東部のほか中央南部からもまとまって出土した。

後期の土器 (1~15)

1~10は北筒式の後半期に相当する。1は複節縄文が施文され、胎土に透明鉱物・砂粒を多く含み、羅臼式にある特徴がみられる。2~4は同一個体と思われる。口縁部に隆帯、その上から地文のRL縄文が施文されている。「ウトロ型」(斜里町教育委員会1980)の特徴を有する。5~9は「シャリ型」(同)の特徴があるもの。全面に斜行縄文を施し(5・7~9)、多段の帯状構成とみられるもの(6)もある。7は出土例の少ない、斜格子状の沈線が施されたもの。10は胴部がふくらみ口縁部がわずかに外反する。口唇直下および頸部下端に縄線が施され、口縁部に円形刺突が連続する。

11~14は後期中葉。11は器壁が厚い無文の鉢。12~14は手稲式。口縁無文部はみがかれている。

15はエリモB式または堂林式。全面縄文地で、口縁部に刻み列と突瘤文が施されている。

晩期後葉の土器 (16~21)

16・17は大型の鉢とみられる。内面上部にも縄文が施文されている。18は口縁部に縄線が多条平行する。19~21は同一個体で、内面および底面に縄線による文様がえがかれている。

続縄文時代の土器 (22~25)

577点出土した。調査区北部のⅦa層~Ⅶc上層に分布する。

前半期の土器 (22・23)

22は口縁部に斜行縄文、胴部に帯縄文の一部がみられる。23は宇津内Ⅱa式。平底で、底面付近に縄端刺突列がめぐり、底面に十字の縄線が押捺されている。

北大Ⅰ式 (24・25)

24・25は同一個体と思われる。多条の微隆起線が横位・縦位に平行し、口縁部に円形刺突文(O→Iの突瘤文)が施されている。胴部の区画内に縄文が充填されている部分がある。(阿部)

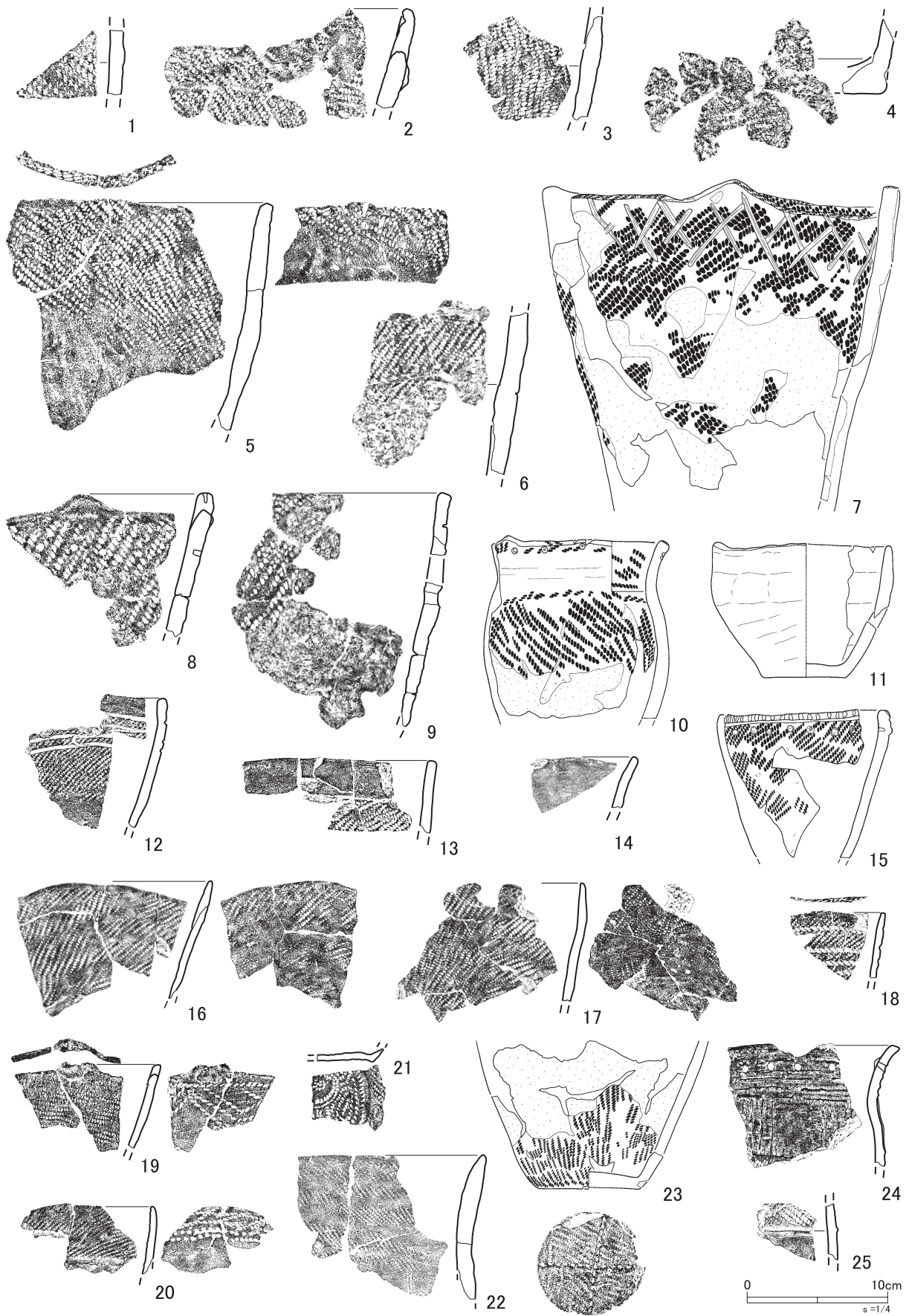
(2) 石器等 (図V-8~10 表V-4 図版61・62)

石鏃 (1~6)

1は凹基のもの。2~6は有茎のもの。茎部は2・3が端部まで太い形状、4・5が収斂する形状、6が細長い形状となっている。カエシは4・5・6が非常に明瞭に作出されている。

石槍・ナイフ (7~34)

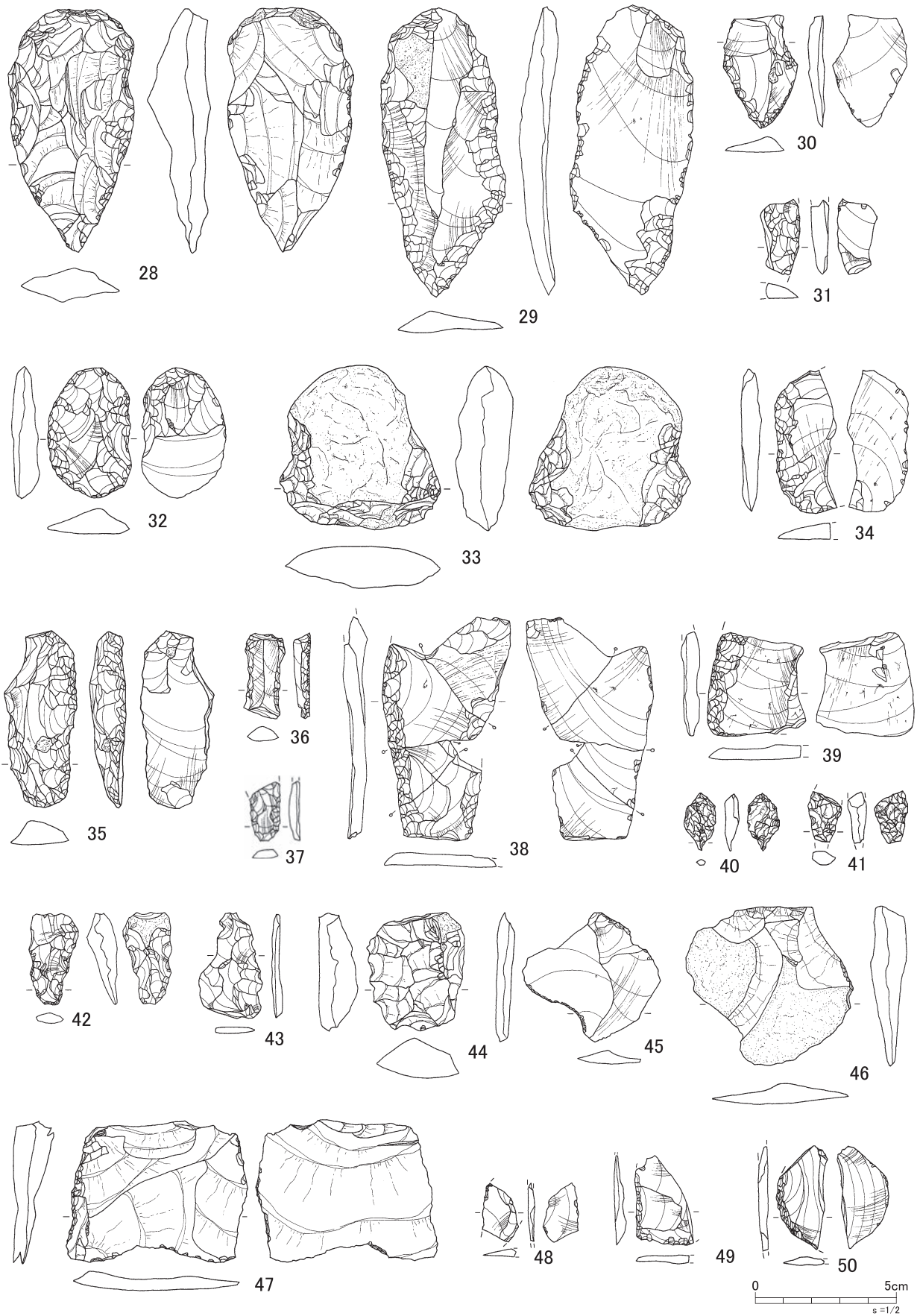
7~15は両面加工が器面全体に及ぶもので、7は茎部のある石槍で、右側に明瞭なカエシが見られる。8は両端が尖る木葉形の石槍である。9~15は破損品である。この内、端部が尖る形状に成形されているものは9・10・15、柄部とみられる矩形に成形されているものは11である。16~26はつまみ付きナイフないし柄部をもつナイフで、縦長剥片素材の16・17、両面加工の21・22、正面全体を覆う加工が施される23などがある。27~30は端部が尖がる形状のもので、主に片面加工によって調整されている。31・32はその他の完形品、33・34は形状不明な破損品である。



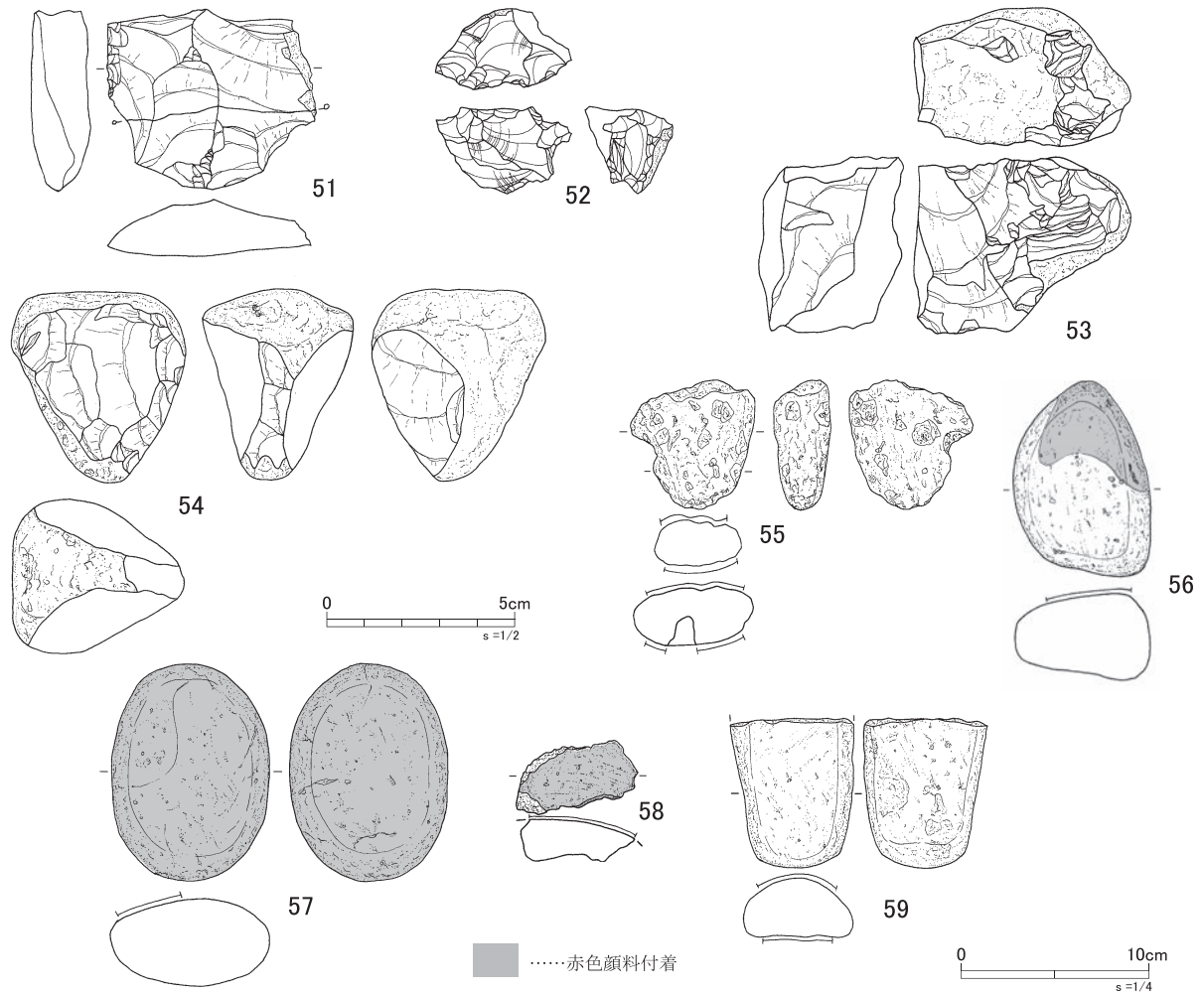
図V-7 包含層出土の土器



図V-8 包含層出土の石器(1)



図V-9 包含層出土の石器(2)



図V-10 包含層出土の石器（3）

スクレイパー（35～39）

35～37は縦長剥片を素材としている。36は両側縁にやや内湾する加工が施されている。38・39は縁辺全体に平坦剥離が施されている。

石錐（40・41）

40～41は石錐である。いずれも両面加工により突出する刃部が作出されている。

Rフレイク（43～45）

43～45はRフレイクである。43・44は比較的長い平坦剥離が施されている。45～47は縁辺の一部に細かな加工が施されている。

石核（52～54）

52～54は石核である。52は正面と上面との交互剥離がなされている。53は主に正面上からの剥離が行われている。54は正面で横方向、裏面で上からの剥離が行われている。

すり石（55～59）

55～59はいずれも正面にすり面があり、55・59には裏面にも存在する。55の裏面にはやや深い穴がみられる。穴の内部には明確な横方向の擦痕がなく、角度もやや斜めなことから、人為的なものではない可能性がある。また、56～58にはベンガラが付着、特に57には全面的な付着が認められる。

（直江）

表V-4 2009年調査掲載石器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	産地分析	備考	実測番号
図V-8	1	61-2	c140	VIIc	10	石鏃	黒曜石	(1.9)	1.2	0.3	(0.4)			1
図V-8	2	61-2	a143	VIIc下	11	石鏃	黒曜石	2.0	1.1	0.3	0.5			2
図V-8	3	61-2	c144	VIIc下	12	石鏃	黒曜石	2.1	1.0	0.4	0.6			3
図V-8	4	61-2	b145	VIIc下	5	石鏃	黒曜石	(2.2)	1.5	0.3	(0.7)			4
図V-8	5	61-2	c143	表土		石鏃	黒曜石	2.9	1.5	0.3	0.7			5
図V-8	6	61-2	e145	VIIc下	6	石鏃	黒曜石	3.9	1.4	0.5	1.7			6
図V-8	7	61-2	o153	VIIc下	81	石槍	黒曜石	4.1	2.2	0.5	4.1			7
図V-8	8	61-2	a145	VIIc下	10	石槍	黒曜石	8.0	2.8	1.0	17.3			8
図V-8	9	61-2	i148	VIIc下	5	石槍	黒曜石	4.1	2.3	0.7	6.1			9
図V-8	10	61-2	a145	VIIc下	8	ナイフ	黒曜石	(3.1)	2.3	0.7	(3.9)			10
図V-8	11	61-2	c141	VIIc下	6	ナイフ	黒曜石	(3.5)	2.6	1.1	(9.1)			11
図V-8	12	61-2	o153	VIIc	100	ナイフ	黒曜石	(1.9)	1.6	0.5	(1.2)		トレンチ内	12
図V-8	13	61-2	g145	VIIc	5	ナイフ	黒曜石	(2.0)	(2.7)	1.1	(3.1)			13
図V-8	14	61-2	k151	VIIc下	10	ナイフ	黒曜石	(2.2)	3.8	0.9	(8.2)			14
図V-8	15	61-2	表探	表探		ナイフ	黒曜石	(2.6)	2.2	0.8	4.0			15
図V-8	16	61-2	d145	VIIc下	28	ナイフ	黒曜石	(3.1)	1.6	0.6	(2.3)			16
図V-8	17	61-2	b143	VIIc下	5	ナイフ	メノウ	5.6	1.7	0.7	5.7			17
図V-8	18	61-2	b143	VIIc下	10	ナイフ	硬質頁岩	7.6	3.6	1.4	26.9			18
図V-8	19	61-2	a146	VIIc下	10	ナイフ	安山岩	3.0	2.8	0.5	2.8			19
図V-8	20	61-2	f147	VIIc	14	ナイフ	黒曜石	3.9	2.0	0.4	2.8			20
図V-8	21	61-2	Z140	VII	5	ナイフ	メノウ	5.9	3.2	0.8	13.1			21
図V-8	22	61-2	a145	VIIc下	7	ナイフ	メノウ	5.4	3.9	1.3	21.1			22
図V-8	23	61-2	c144	VIIc下	30	ナイフ	黒曜石	6.0	3.1	0.9	10.8			23
図V-8	24	61-2	b146	VIIc下	17	ナイフ	硬質頁岩	5.2	5.0	0.9	16.5			24
図V-8	25	62-1	Z141	VIIc下	7	ナイフ	黒曜石	2.3	1.8	0.6	1.9			25
図V-8	26	62-1	c145	VIIc下	19	ナイフ	黒曜石	(2.6)	3.0	0.9	(4.6)			26
図V-8	27	62-1	c145	VIIc下	20	ナイフ	メノウ	6.9	3.8	0.9	18.1			27
図V-9	28	62-1	o153	VIIc下	79	ナイフ	頁岩	8.6	4.5	2.2	58.5		トレンチ内	28
図V-9	29	62-1	o153	VIIc下	88	ナイフ	黒曜石	10.2	4.4	1.4	40.2		トレンチ内	29
図V-9	30	62-1	c140	VII	7	ナイフ	黒曜石	4.0	2.6	0.6	4.4			30
図V-9	31	62-1	k151	VIIc下	6	ナイフ	黒曜石	(2.6)	(0.9)	0.7	(2.2)		トレンチ内	31
図V-9	32	62-1	o153	VIIc下	76	ナイフ	黒曜石	4.6	3.0	1.0	12.6			32
図V-9	33	62-1	Z142	VIIc下	6	ナイフ	メノウ	5.8	5.7	2.0	69.0			33
図V-9	34	62-1	a138	VIIc	6	ナイフ	黒曜石	5.0	(2.2)	0.7	(6.5)			34
図V-9	35	62-1	a143	VIIa	5	スクレイパー	黒曜石	6.3	2.6	1.3	18.4			35
図V-9	36	62-1	g146	VIIc下	11	スクレイパー	黒曜石	(3.0)	1.3	0.6	(2.5)			36
図V-9	37	62-1	d145	VIIc下	27	スクレイパー	黒曜石	(2.1)	1.1	0.4	(0.9)			37
図V-9	38	62-1	Y141	VIIe	5	スクレイパー	黒曜石	(7.9)	(4.5)	0.9	(20.5)			38
図V-9	39	62-1	a138	VIIc下	11	スクレイパー	黒曜石	(3.6)	(4.0)	6.0	(8.5)			39
図V-9	40	62-1	Y140	VIIe下	9	石錐	メノウ	2.0	1.1	0.5	1.0			40
図V-9	41	62-1	Y140	VIIe下	8	石錐	メノウ	(1.8)	1.2	0.7	1.2			41
図V-9	42	62-1	m152	VIIc下	39	石錐	黒曜石	3.2	1.7	1.0	4.2		トレンチ内	42
図V-9	43	62-1	o153	VIIc下	73	Rフレイク	黒曜石	3.7	2.2	0.4	1.9		トレンチ内	43
図V-9	44	62-1	a140	VII	5	Rフレイク	硬質頁岩	4.2	3.5	1.4	19.4			44
図V-9	45	62-1	m152	VIIc下	38	Rフレイク	黒曜石	5.1	4.8	0.7	6.7		トレンチ内	45
図V-9	46	62-1	c146	VIIc下	34	Rフレイク	安山岩	5.6	5.9	1.3	28.4			46
図V-9	47	62-1	a141	VIIc下	6	Rフレイク	硬質頁岩	5.0	6.4	0.9	28.3			47
図V-9	48	62-1	b142	VIIc下	7	Rフレイク	黒曜石	(2.1)	(1.2)	0.2	(0.5)			48
図V-9	49	62-1	e144	VIIc下	5	Rフレイク	黒曜石	3.2	(2.1)	0.4	(2.2)			49
図V-9	50	62-1	a141	VIIc下	7	Rフレイク	黒曜石	(3.7)	(1.8)	0.3	1.9			50
図V-10	51	62-1	b146	VIIc上	5	Rフレイク	硬質頁岩	4.9	5.6	1.6	41.2			51
図V-10	52	62-1	d148	VIIc下	5	石核	黒曜石	2.3	3.6	2.3	12.8			52
図V-10	53	62-1	f149	VIIc下	8	石核	メノウ	4.7	5.7	3.8	112.4			53
図V-10	54	62-1	Z143	VII	7	石核	メノウ	5.1	4.6	4.0	98.9			54
図V-10	55	62-1	f146	VIIe	6	すり石	軽石	6.8	6.6	3.0	17.5			55
図V-10	56	62-1	表探	表探		すり石	安山岩	10.2	7.3	5.5	515.5		ベンガラ付着	56
図V-10	57	62-1	Y140	VIIe下	27	すり石	安山岩	11.6	8.4	4.6	688.6		ベンガラ付着	57
図V-10	58	62-1	表探	表探		すり石	安山岩	(3.9)	(6.4)	(2.2)	(55.8)		ベンガラ付着	58
図V-10	59	62-1	m152	VIIc下	42	すり石	安山岩	(8.0)	6.5	3.1	(253.5)		トレンチ内	59

VI章 2011年の調査と出土遺物

1 A地区の調査の概要

(1) 調査の方法と経過

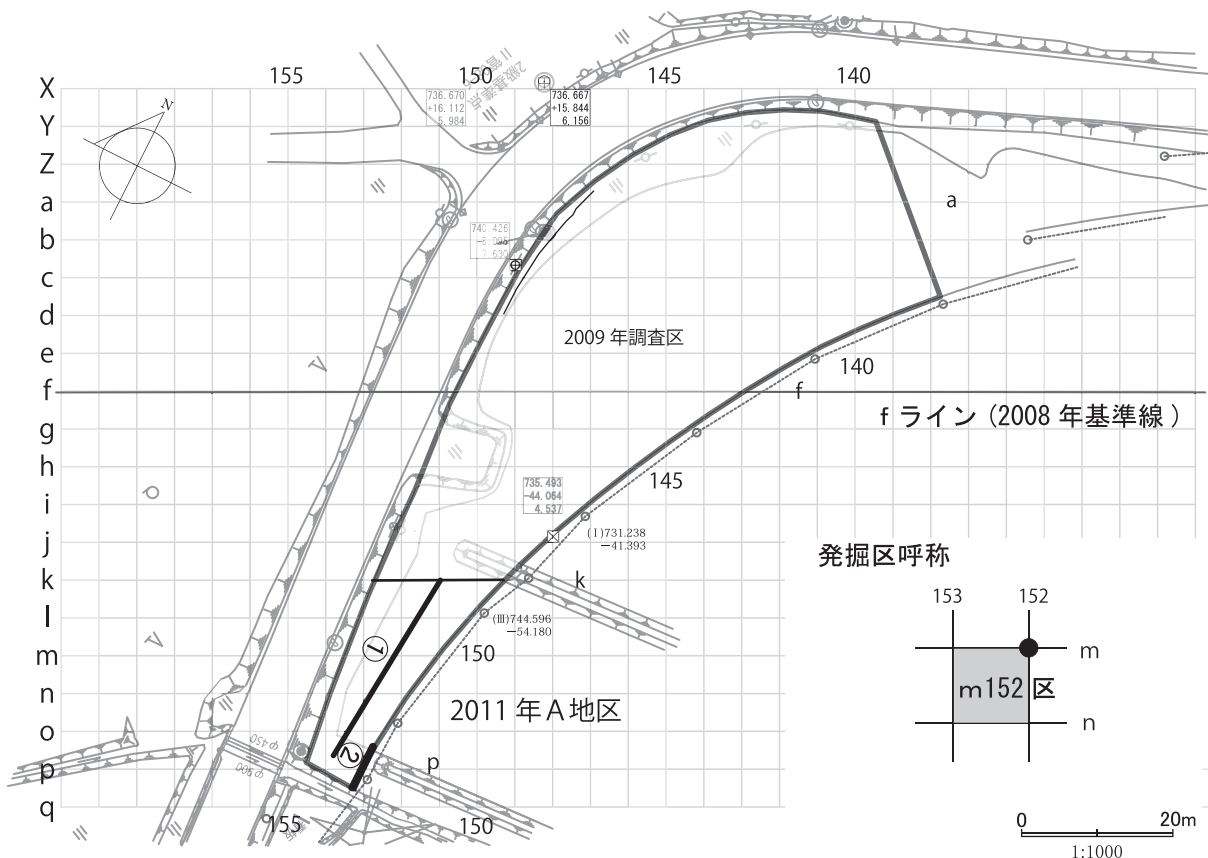
調査区は2009年（図V-1）のkライン以南の範囲で、全調査範囲の南端部にあたる。標高は、4～5mである。9月初頭に調査を開始し、途中B地区と併行し、10月中旬に調査を終了した。

調査は、草木類を除去し、表土から人力により各発掘区・層位ごとに掘削を進めた。なお2009年に調査区を縦断するトレンチ調査を行っているが、当年度さらに精査し断面図を編集している（図VI-2・3）。Ⅷ層とした礫層上面（およびそれに相当する面）を完掘面とした。

遺構名は検出順に「PIT」を冠し、「11」から番号を付した（2018年調査の際に、概要報告書や図面類などをもとに共通の遺構種別記号への変換を行った。）。遺物の出土位置は、トータルステーションを用いて点記録を行った。そのほか遺構断面の測量基準点や調査範囲の設定などにもトータルステーションを使用した。写真撮影は、2009年を踏襲しデジタルカメラのみを使用した。

(2) 発掘区の設定

2009年調査区の5m単位の設定（図V-1、VI-1）のとおりである（149～155ライン、k～qライン）。発掘区の北東交点名をその発掘区名としている。

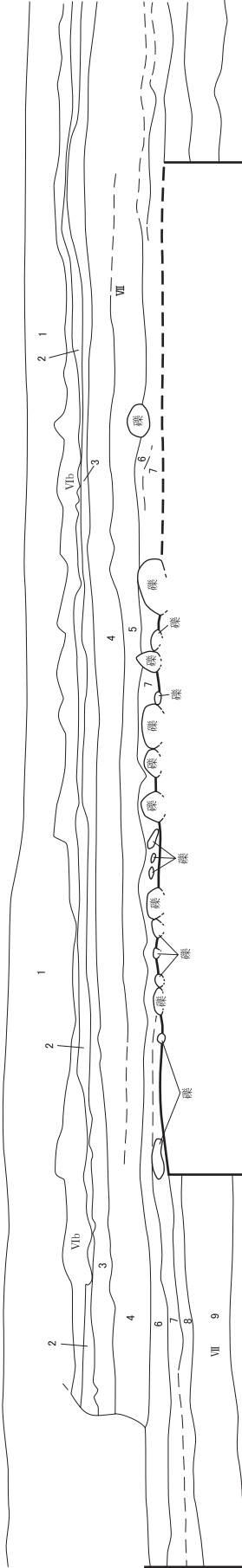


図VI-1 2011年A地区発掘区設定図・土層断面位置

土層①-1

4.5m Δ

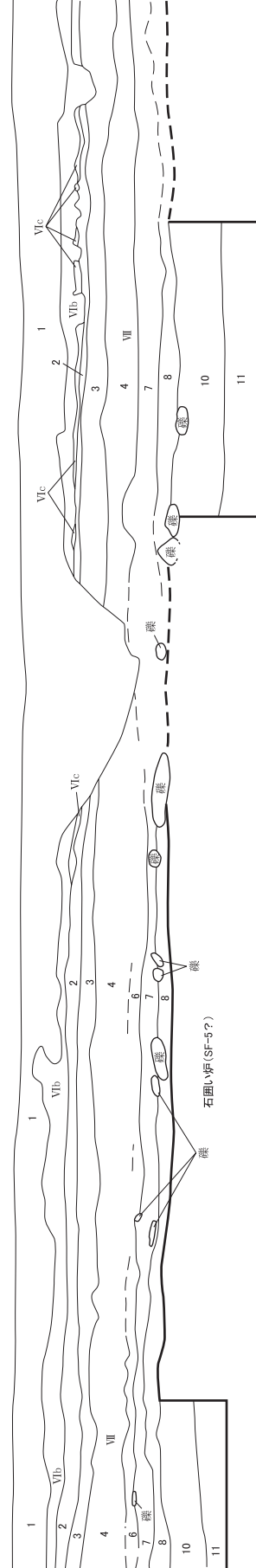
4.5m



- 1 2009年調査時に掘出した可能性高 区右側より2mほどの場所からMa-b6が獲っていたが今年度掘削時に削平
- 2 褐色のヒート層 全体に直下の黒色粘岩質土は薄く分層できなかった
- 3 10VR3.7/1 黒色粘岩質土 細砂有 粘性强すかに有 黄く灰色砂が目立つ b2)に比べ砂層か?
- 4 10VR2.7/1 細砂有 粘性强すや有 VI-c2)に比べ土層に分層可能で、下層(VIb?)とした方が良さ
- 5 10VR1.7/1 細砂有 粘性强すや有 VI-c2)に比べ土層に分層可能で、下層(VIb?)とした方が良さ
- 6 10VR3.3/3 細砂有 粘性强すや有 調査区東縁でも観察されたが、VIb2)の下層に明色の層層が入る およそ、微品部状の砂丘になつている(ライン付近では不明瞭で、その両側で明瞭)
- 7 10VR2.3/3 細砂有 粘性强すや有 VI-c2)とVI-cの補移層VI01としたものと同じ層ある可能性有
- 8 10VR3.3/3 細砂有 粘性强すや有 VI-c2)とVI-cの補移層VI01としたものと同じ層ある可能性有
- 9 10VR4.6/6 細砂有 粘性强すや有 明色の砂層
- 10 10VR2.3/3 細砂有 粘性强すや有 砂層
- 11 10VR3.4/4 砂層
- 12 10VR2.3/3 やや土壌質の砂層 炭化物粒(φ3mm)1%以下

4.5m

4.5m



0 2m
1:40

図VI-2 A地区土層断面(1)

(3) 土層

基本土層は2009年のとおりである。ただしⅦ層の細分層を追加し、Ⅶa～Ⅶe層としている。また土層断面では、Ⅶb層・Ⅶc層・Ⅶe層をさらに細分している。

Ⅶ層：砂層等

Ⅶa層：黒色砂質土

Ⅶb層：砂層

縄文時代晩期の遺物を含む。

Ⅶc層：黒褐色砂質土

縄文時代中期～晩期の遺物を含む。

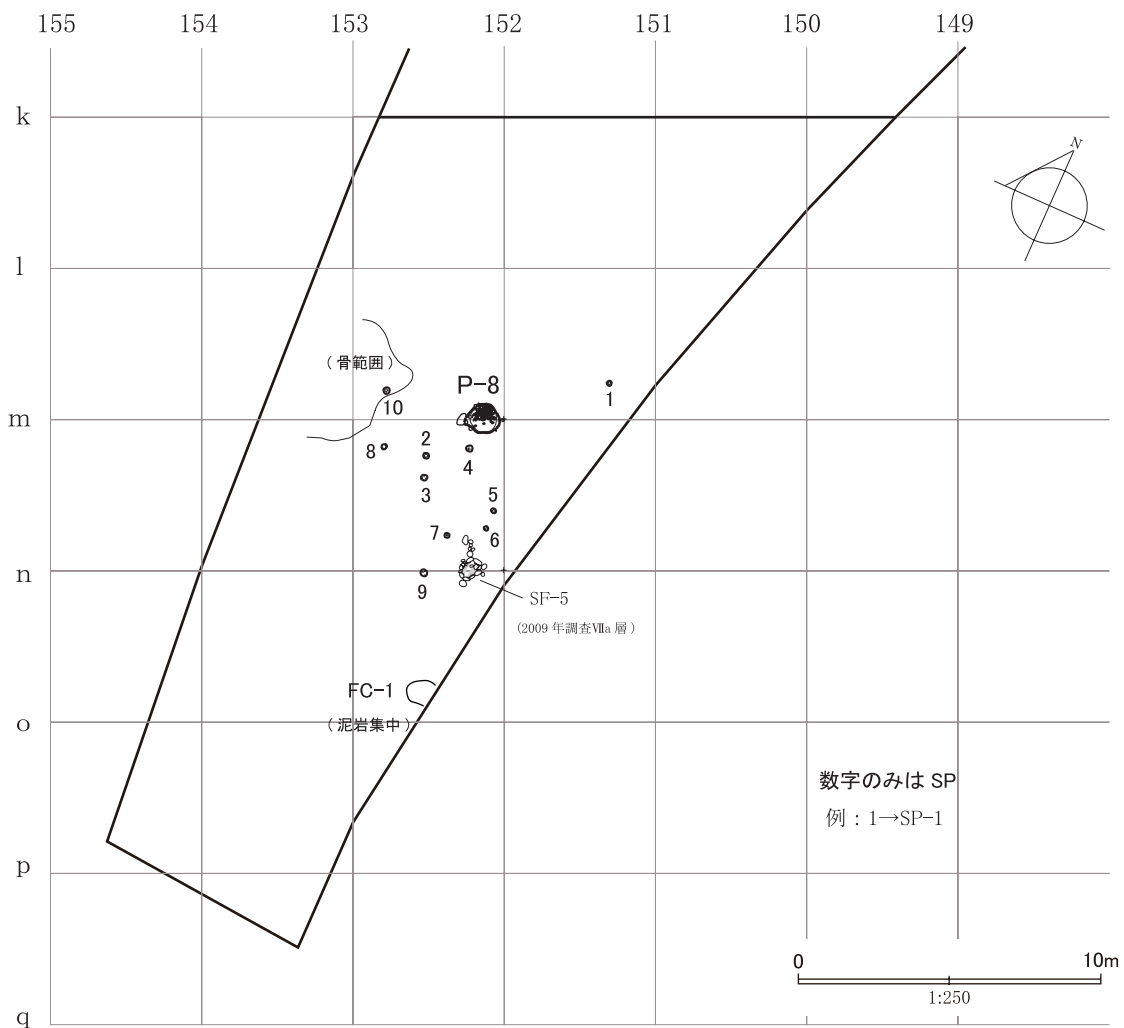
Ⅶd層：明色の砂層

縄文時代中期～後期の遺物を含む。

Ⅶe層：黒褐色砂質土

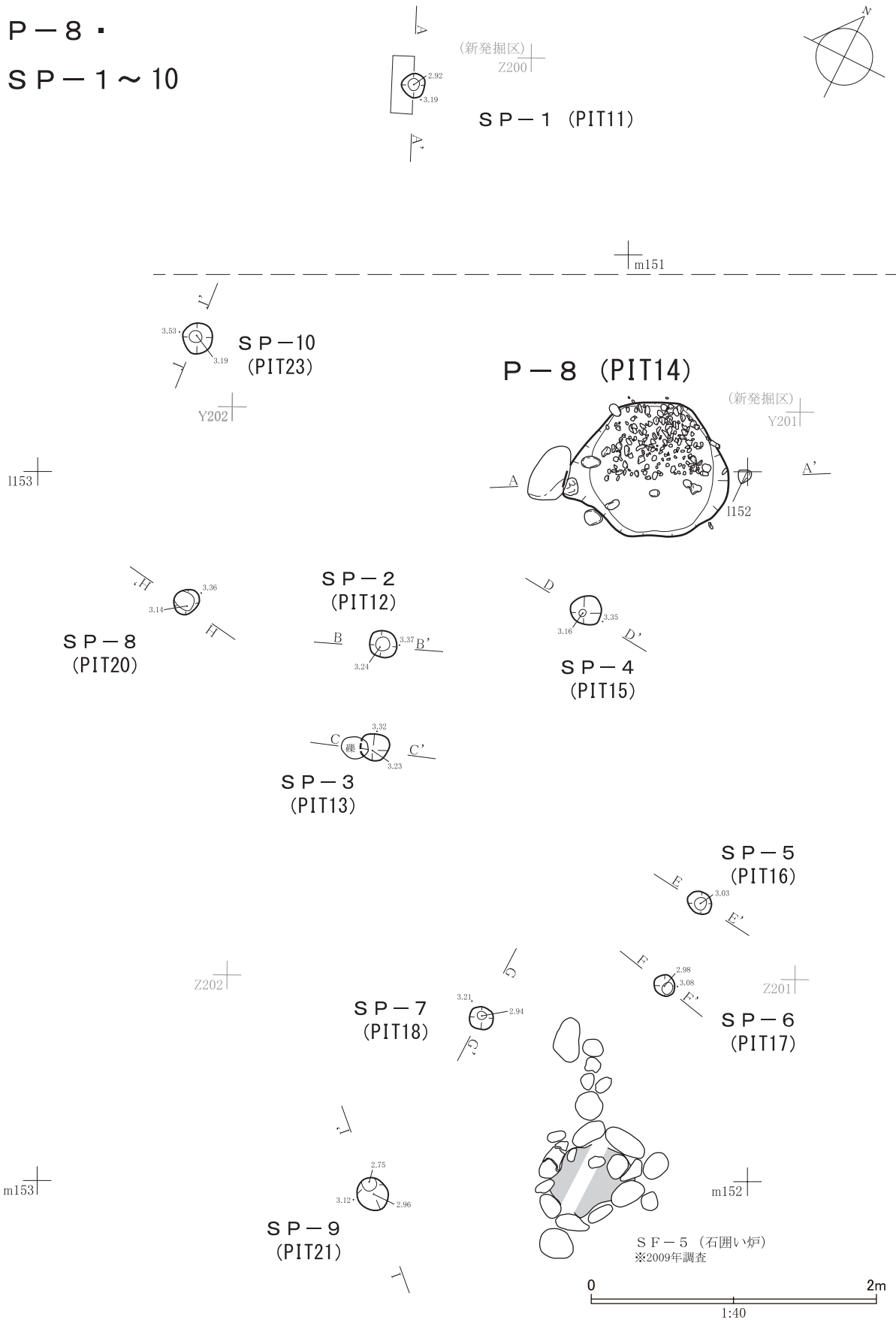
(4) 調査結果の概要

調査範囲の中央付近のⅦc層で土坑1基と柱穴状小土坑10基を検出した。また南部で泥岩フレイクの集中域1か所、西部で骨片の広がる範囲を1か所検出した。いずれも縄文時代後期～晩期のものとみられる。なお今回の調査区南東部には、2009年調査で検出した石組炉（SF-5）がある。

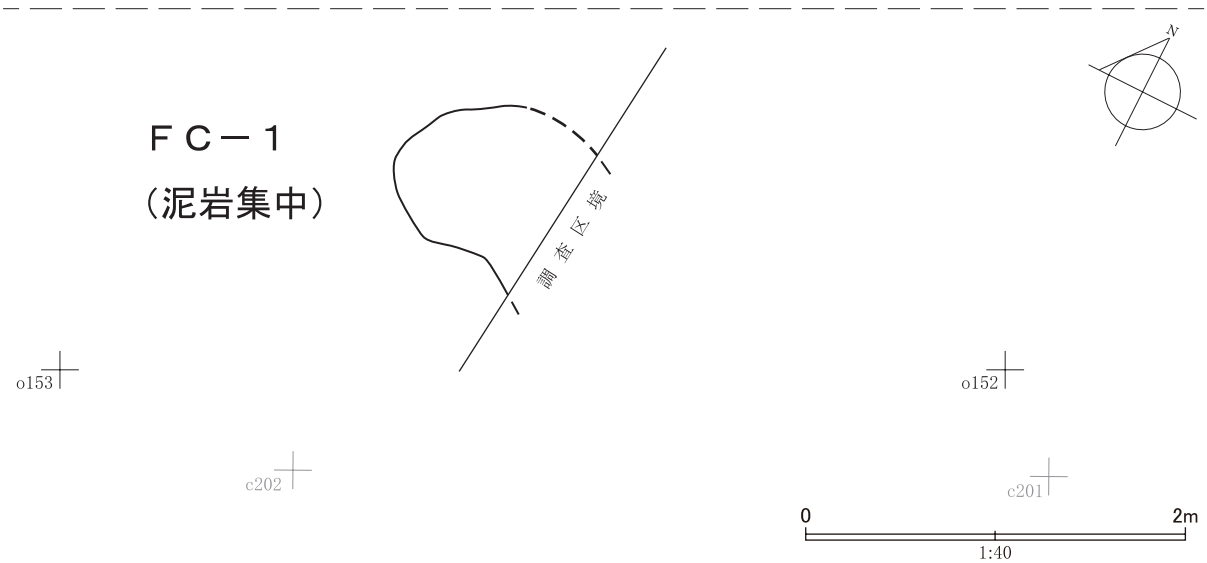
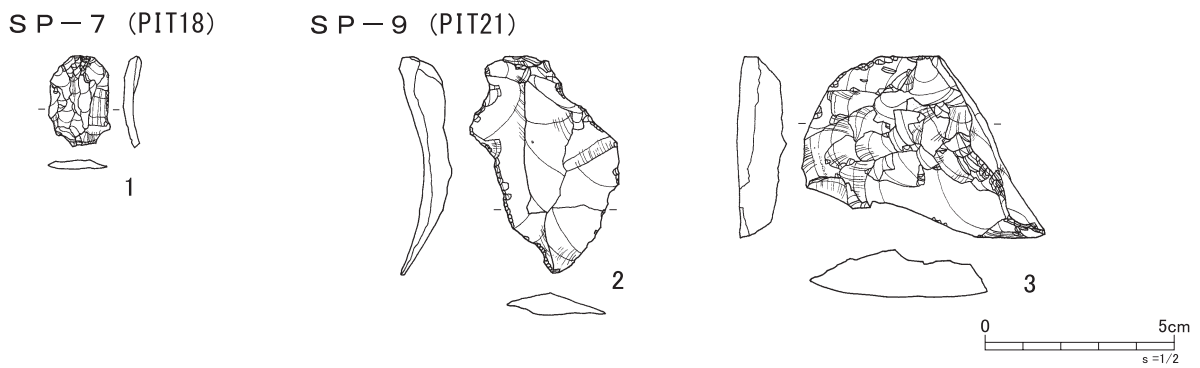
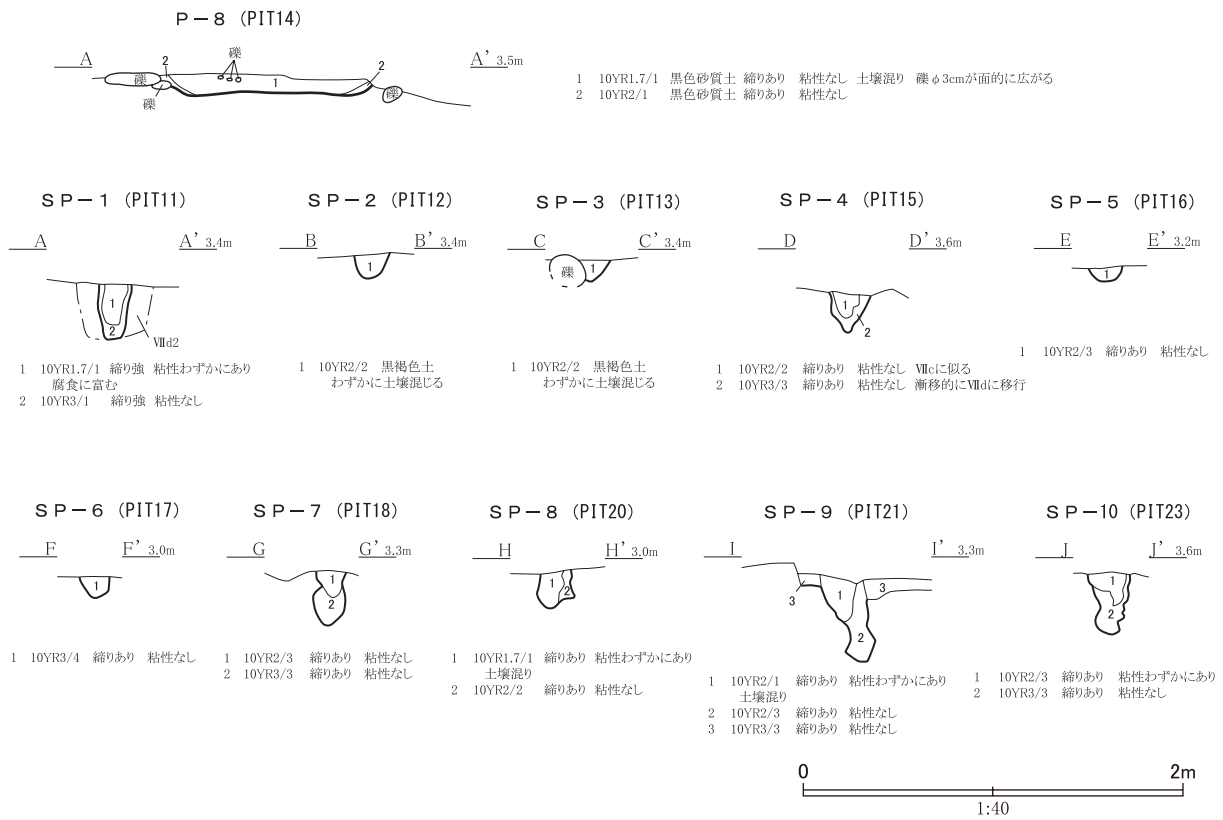


図Ⅵ-4 2011年A地区遺構位置図

P-8・
SP-1~10



図VI-5 P-8・SP-1~10 (1)



図VI-6 P-8・SP-1~10(2)・FC-1

2 A地区の遺構の調査

遺構の記載内容は、図・写真等から編者が記述した。

a 縄文時代の遺構

(1) 土坑

1基(P-8)を検出した。時期は、検出層位や周辺出土遺物から縄文時代後期～晩期とみられる。

P-8 (PIT14) (図VI-5・6 表VI-1・2 図版29)

おおむね楕円形を呈し、坑底はほぼ平坦である。覆土中に径3cm前後の小礫が面的に広がっていた。遺物は、覆土中からフレイクチップが42点出土した。

(2) 柱穴状小土坑 (図VI-5・6 表VI-1・2 図版29・62)

P-8 (PIT14) の南～西側から10基(S P-1～10)を検出した。配置は不規則で、2基近接するものもある。径はいずれも20cm前後で、深さは10～50cm程度と差がある。時期は、検出層位や周辺出土遺物から縄文時代後期～晩期とみられる。他に、根穴など自然と思われる小穴を多数検出した。

掲載遺物

S P-7 (PIT18) : 1はUフレイク。右側縁に微細な剥離が見られる。

S P-9 (PIT21) : 2はRフレイク。左側縁に細かな加工が施されている。3はフレイク。正面に横方向の剥離痕が見られることから打面転移を行ったものと思われる。

(3) フレイクチップ集中

FC-1 (泥岩集中) (図VI-6 表VI-1 図版29)

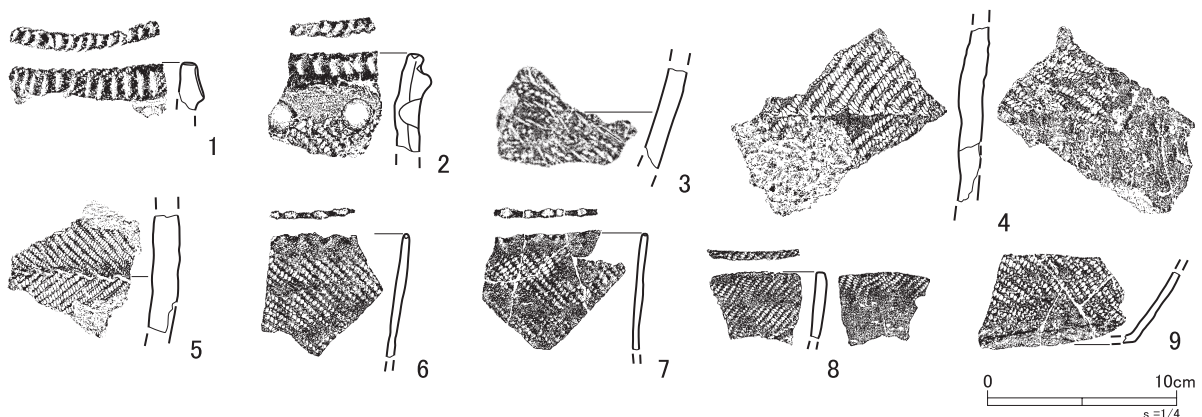
調査区南部で、泥岩の小片約500gがまとまって出土した。

3 A地区の包含層出土の遺物

(1) 土器 (図VI-7 表VI-3 図版62)

縄文時代の土器 (1～9)

中期末～晩期の土器が137点出土した。このうち中期末～後期前葉の土器は、k～nラインのVII c層に分布していた。晩期は、主にk・mラインのVII b層から出土した。



図VI-7 A地区包含層出土の土器

1～5は縄文中期末～後期初頭の土器。1・2は北筒Ⅱ式（トコロ6類）。口唇上および断面三角形をなす口縁部肥厚帯上に、ヘラ状工具（1）または半截管状工具（2）により刻みが施されている。肥厚帯下には大型の円形刺突がある。3はほどけた逆撚りの縄が用いられていると思われる。4・5は多段の帯状構成で、うち5は結束羽状縄文が施文されている。6～9は晩期後葉の土器。6・7は口唇上を刻む。8は口唇上・内面口縁部にも縄文が施されている。9は浅鉢の底部付近。（阿部）

（2）石器等（図Ⅵ-8～10 表Ⅵ-5 図版63）

石鏃（1～7）

1～4は有茎のもの。1・2の茎部は収斂する形状で特に2は下端部が尖る。3・4の茎部は逆台形で、カエシはやや明瞭である。5～7は下半部が欠損する。7は両端が尖る木葉形の可能性がある。

ナイフ（8～28）

8～21は両面全体に加工が施されるもの。8は有茎の石槍で、茎部は逆台形、わずかにカエシが見られる。9は細身の柳葉形。10は細身で中央付近に屈曲部があり、茎部と刃部に分かれる。11～21は破損品である。端部の形状が丸みのあるものは11・12・16、矩形ないし逆台形で角のあるものは13～15である。17～21は両端部が欠損している。21は細身の柳葉形である。22～25はつまみ付きナイフ。いずれも縁辺の一部に刃部の加工が施されている。つまみ部は23以外太く、わずかなノッチ状の加工により作出されている。26～28はそれ以外の部分的な加工が施されるもの。

スクレイパー（29～34）

29は矩形の柄部があり、縁辺が急角度加工で、下端部が尖る形状である。ナイフを再加工して、縮小したものと思われる。30～34は下端部に円弧状の刃部を作出するものである。

Rフレイク（35～40）

35～40は、縁辺の一部に細かな加工が施されている。35は直線的、36は屈曲部、37・38は鋸歯状、39は内湾する縁辺に連続する加工が見られる。

フレイク（41・42）

41・42はいずれもポイントフレイクとみられ、下端に本体部の反対側縁を取り込むウートラパッセとなっている。

石核（43）

43は頁岩製で、主に正面で粗い剥離が行われている。

石斧（44）

44は刃部側が欠損している。全面的な研磨により側面が多面的に成形されている。

たたき石（45）

45は上下端に敲打痕が見られる。

すり石（46～48）

46は棒状の原石を素材とし、上下端にもわずかに敲打痕が見られる。47は正面にすり面が見られる。48は破損品で、正裏面にすり面があり、正面にはベンガラも付着している。

砥石（49）

49は正面と右側面にすり痕が見られる。

台石（50～53）

50～52が完形、53が破損品である。平滑面は50・52が正面のみ、51・53が両面に観察される。

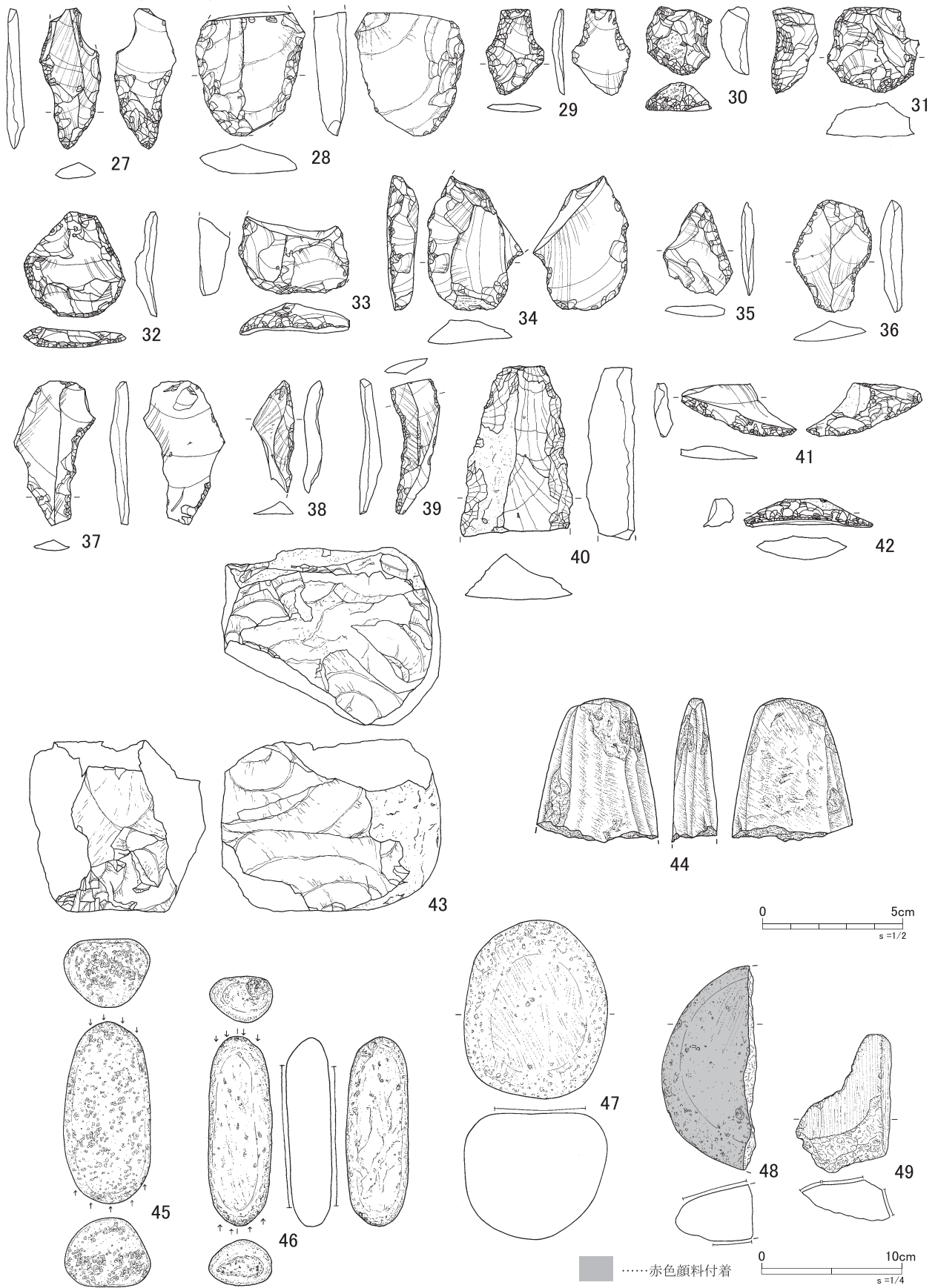
（直江）

[VIIb層・VIIc層・VII d層]



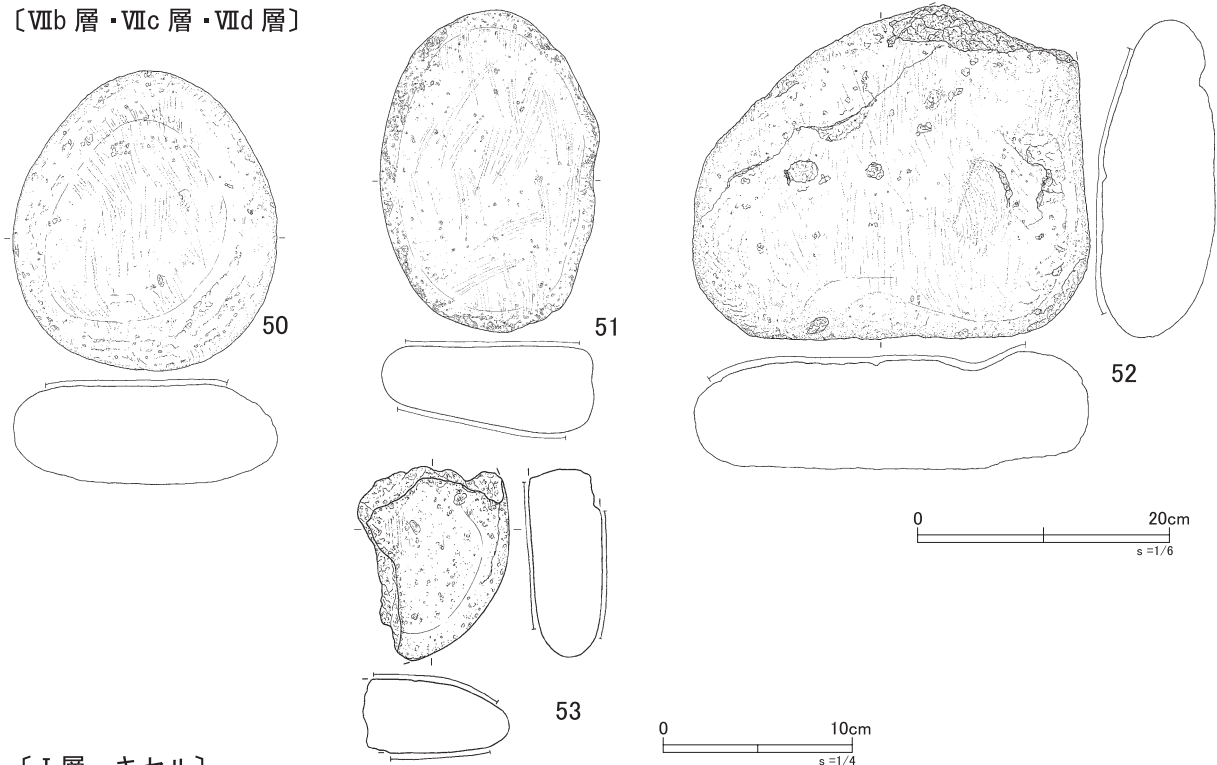
図VI-8 A地区包含層出土の石器(1)

[VIIb層・VIIc層・VIId層]

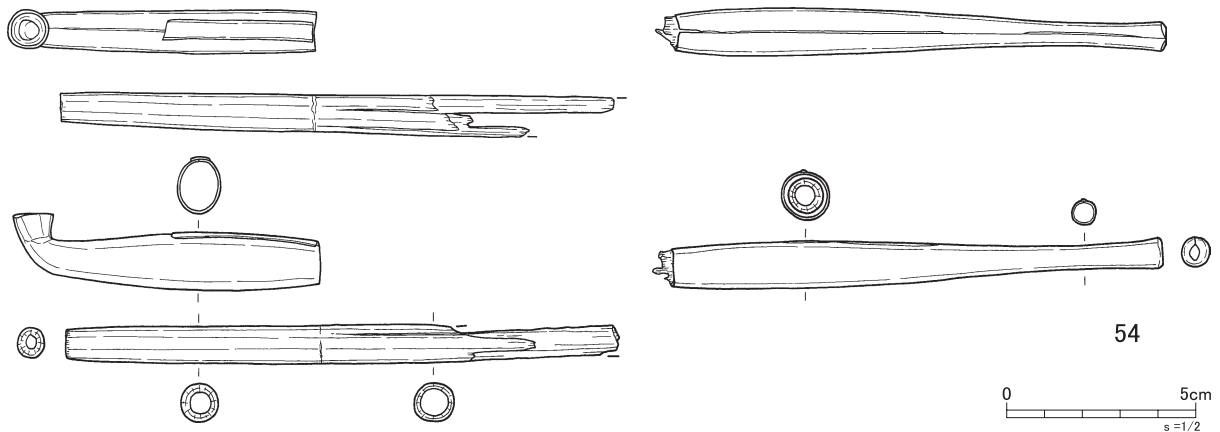


図VI-9 A地区包含層出土の石器(2)

〔VIIb層・VIIc層・VIId層〕



〔I層 キセル〕



図VI-10 A地区包含層出土の石器(3)・キセル

(3) 金属製品・木製品 (図VI-10 図版80)

キセル (54)

54は調査区南部の表土から出土したキセル。羅宇の吸い口側で折損しており、羅宇が挿入されたままの雁首および吸口が残存していた。このうち雁首側の羅宇は引き抜くことができた。吸い口、雁首とも「肩」がなく、雁首は脂返しと羅宇挿入部が一体となっている。雁首の羅宇挿入部上部には、補修の跡がある。形状から、古泉弘氏の分類で「V」(第5段階)または「VI」(第6段階)にあたり、18世紀後半～19世紀前半に製造されたものとみられる(古泉1983)。(阿部)

4 B地区の調査の概要

(1) 調査の方法と経過

B地区は全調査範囲の西部、国道334号の北側で、延長105m・最大幅約18mの範囲である。調査区内は砂丘の頂部～裾部にあたり、標高は3.6～6.8mである。調査以前は旧国道の建設や以前の開拓活動による攪乱が多く、砂丘の上位の一部と下位において遺構がよく残っていた。

調査は、草木類を重機で除去した後、表土から人力により掘削した。まずテストピット調査（TP-1～10）、続いて調査区西部においてトレンチ調査を行い（図VI-13下段）、土層堆積状況を把握することに努めた。その結果、各層を把握するとともに砂丘列が不整合に重なる様子が観察された（D140区、図VI-12）。その後、各発掘区・層位ごとに掘削を進めた。調査区境や発掘区境において土層断面図を多数作成した。攪乱および土層の堆積状況により、VII層の面で終了した範囲とIX層下の礫層上面を完掘面とした範囲がある（図VI-13）。

遺構名は検出順に「PIT」を冠し、新たに1から番号を付した（2018年調査の際に、概要報告書や図面類などをもとに共通の遺構種別記号への変換を行った）。遺物の出土位置は、トータルステーションを用いて点記録を行った。そのほか遺構断面の測量基準点や調査範囲の設定などにもトータルステーションを使用した。写真撮影は、リバーサルおよびネガカラー35mm判、ネガカラー6×7判、デジタルカメラを使用した。

(2) 発掘区の設定（図VI-11）

国道北側の次年度以降（2012・2018年）を含む全調査範囲を対象とする発掘区を新たに設定した。北海道開発局網走開発建設部から提供された設計図に基づき、道路センターラインに平行する一辺5mの発掘区を設定した。基準点は、林野庁との用地境界杭のうち「右二〇」（E145）とし、「右十九」・「右十八」・「右十七」などの杭の座標値から原点（A0）を与えた。発掘区の名称は、北から南へアルファベット（A～J）、東から西へ算用数字（0～145）を付した。2011年の範囲は、B～F、124～144である。各方形区画の北東交点（杭）名が発掘区名である。

基準点の座標値は、以下のとおりである。座標系は、世界測地系平面直角座標系第XⅢ系である。

〔調査区基準点〕

原点（A0） X = -7,614.560 Y = 43,515.840（計算値）

「右二〇」（E145） X = -7,930.435 Y = 42,856.926

なおトータルステーションを使用する際に、基準点（X = 0.000 Y = 0.000）を「A・-1」とし、東西（数字）をX軸（西が正方向）、南北（アルファベット）をY軸（北が正）とする座標値を使用した（例：E130杭 X = 655.000 Y = -20.000）

(3) 土層（図VI-12）

基本土層について、これまでの層位を見直し、降下火山灰層（樽前a、駒ヶ岳c₂、摩周b5）を指標に新たに設定した。

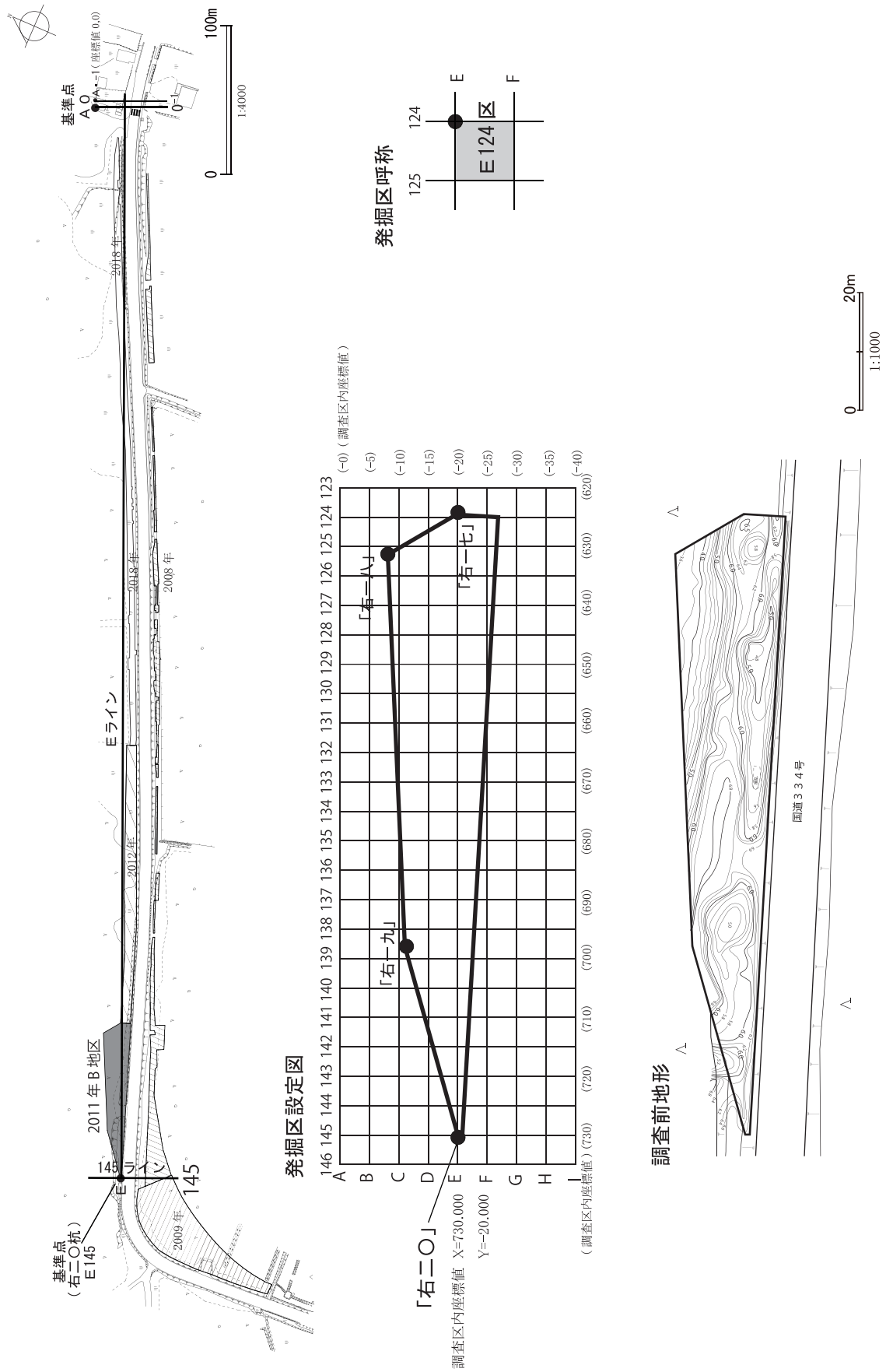
I層：表土層 近代～現代の盛土・整地層。

II層：灰白色火山灰層〔樽前a（1739年降下）〕 調査区東部で斑状に確認。

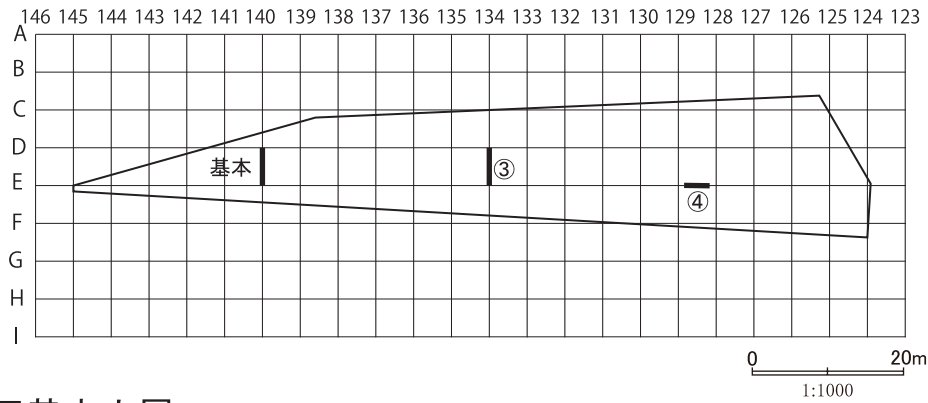
III層：（II層とIV層の間層）

IV層：白色火山灰層〔駒ヶ岳c₂（1694年降下）〕

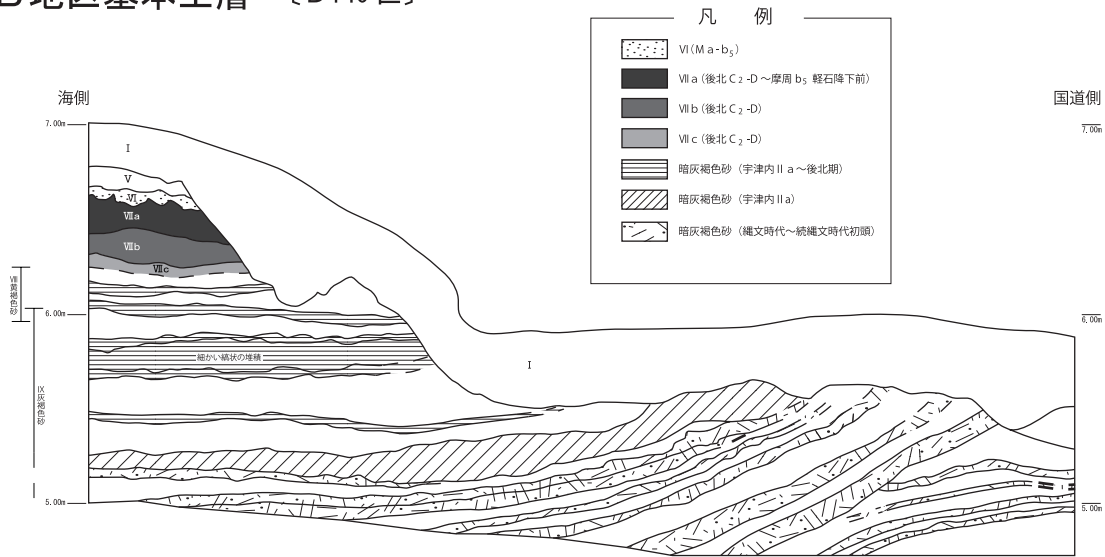
V層：黒色砂層 土壌質に富む。



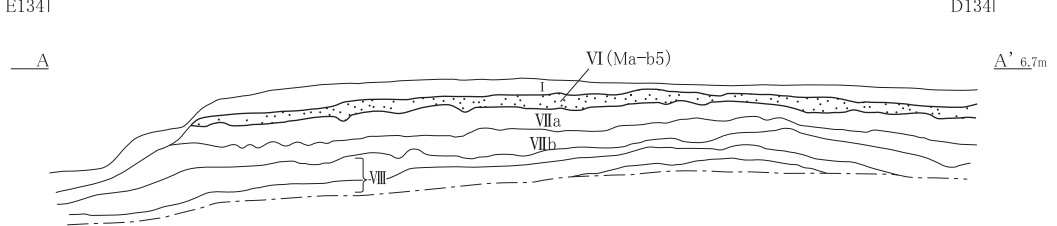
調査区土層断面図位置



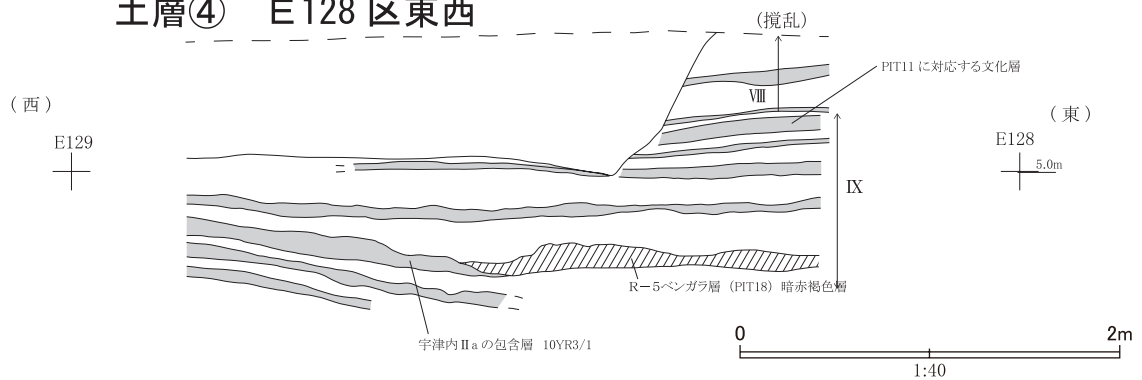
B地区基本土層 [D140区]



(南) 土層③ 134 ライン (北)



土層④ E128 区東西



図VI-12 B地区土層断面

- VI層：黄白色軽石層〔摩周b5降下軽石層（10世紀降下）〕
- VII層：黒色～暗褐色砂層 砂丘の頂部で確認した。攪乱の著しい国道沿いや砂丘の北側斜面では確認できない。VII a・VII b・VII cに細分した。続縄文時代後期の遺構・遺物を含む。
- VII a層：黒褐色砂層 土壌質に富む。後北C₂・D式期を主体に、オホーツク文化期の遺物を含む。
- VII b層：暗褐色砂層 後北C₂・D式期の遺物を含む。
- VII c層：にぶい黄褐色砂層 後北C₂・D式期の遺物を含む。砂丘頂部付近では層厚10cm程度で遺物は少数だが、調査区南東部のくぼみ（「廃棄場」）では層が厚く多量の遺物が出土した。
- VIII層：黄褐色砂層 調査区南東部のくぼみ（「廃棄場」）で遺物が多く、周辺で遺構を検出した。
- IX層：灰褐色砂層 層厚1～5cmの薄層が幾重にも堆積する。そのため薄層のすべてに番号を付して調査を行うことは困難であり、大きく2枚の遺物包含層と3枚の無遺物層に分けた。続縄文時代前期～後期の遺物を含む。また続縄文時代前期の確認面から遺構が検出された。
- IX a層：黄褐色～灰褐色砂層と黒褐色砂層の互層 無遺物層。
- IX b層：灰褐色砂層と暗褐色砂層の互層 ごく少数の遺物を含む。R-2（PIT11）を検出した。
- IX c層：灰褐色砂層と黒褐色砂層の互層 無遺物層。
- IX d層：暗褐色砂層 宇津内II a式期の遺物包含層。同期の遺構検出面である。
- IX e層：灰褐色砂層と黒褐色砂層の互層 無遺物層。

調査区内の一部の土層断面図を図VI-12に示した。このうち基本土層（D140区）では、砂丘列の重複が観察され、調査区の南側に形成された砂丘の上に、より新しい時代の砂丘が形成されている。どちらの砂丘も南側から北側に緩やかに傾斜して堆積しており、海に近づくほど新しい砂丘であることが想定できる。「土層③」は調査区中央部のもので、主にVII層の堆積状況を示したものである。「土層④」は調査区西部、主にIX層の堆積状況を示したものである。

（4）調査結果の概要（図VI-13）

続縄文時代前期～後期およびアイヌ文化期の遺構・遺物を検出した。遺物は土器・石器等約10,300点を数えた。土器は宇津内II a式・II b式、後北C₂・D式のほか、鈴谷式、オホーツク刻文土器が少数出土した。石器等は各種剥片石器・礫石器のほか、石製品（平玉）がある。ほかにガラス玉、ベンガラ、褐鉄鉱、樹皮、炭化木片、骨片が出土した。

【続縄文時代前期】

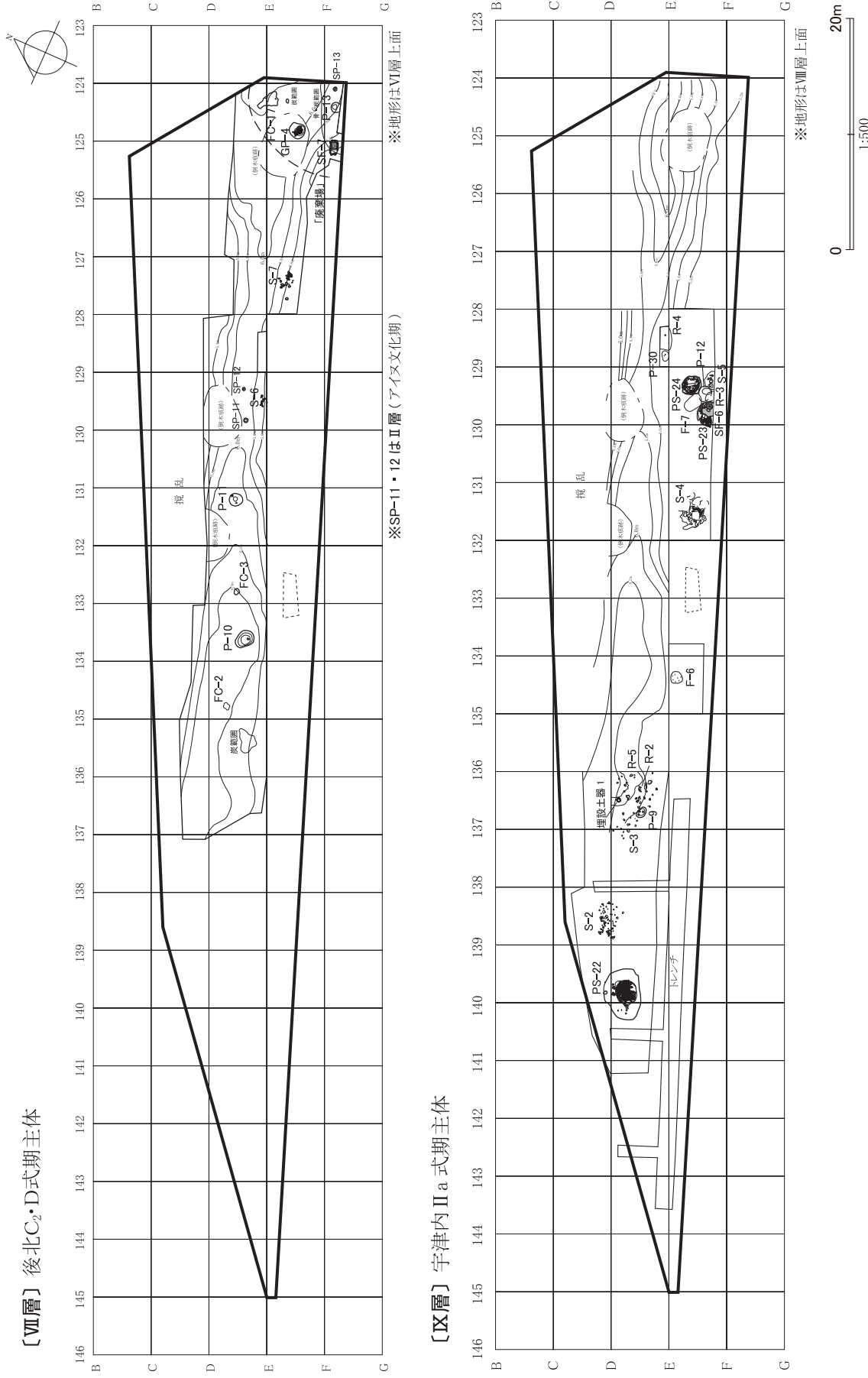
IX層～VIII層で検出した。このうちVIII層宇津内II b式期では、石組炉1基を検出した。IX層宇津内II a式期では、土坑3基、集石を伴う土坑（集石土坑）3基、石組炉1基、焼土2か所、集石4か所、土器埋設遺構1か所、ベンガラ範囲4か所を検出した。特にE129区付近では集石土坑や焼土、ベンガラ範囲などが近接しており、関連があるものとみられる。

【続縄文時代後期】

VII層で検出した。遺構は後北C₂・D式期で、土坑墓1基、土坑3基、柱穴状小土坑1基、集石2か所、フレイクチップ集中3か所、「廃棄場」1か所を検出した。土坑墓は検出状況から再葬または追葬と考えられるもので、ガラス玉が副葬されていた。

【アイヌ文化期】

遺構は柱穴状小土坑2基を検出した。伴う遺物はないが、A地区表土からキセルを回収した。



図Ⅵ-13 2011年B地区遺構位置図

5 B地区の遺構の調査とその遺物

遺構の記載内容は、概要報告書（斜里町教育委員会2012）や図・写真から編者が記述した。

a 続縄文時代の遺構

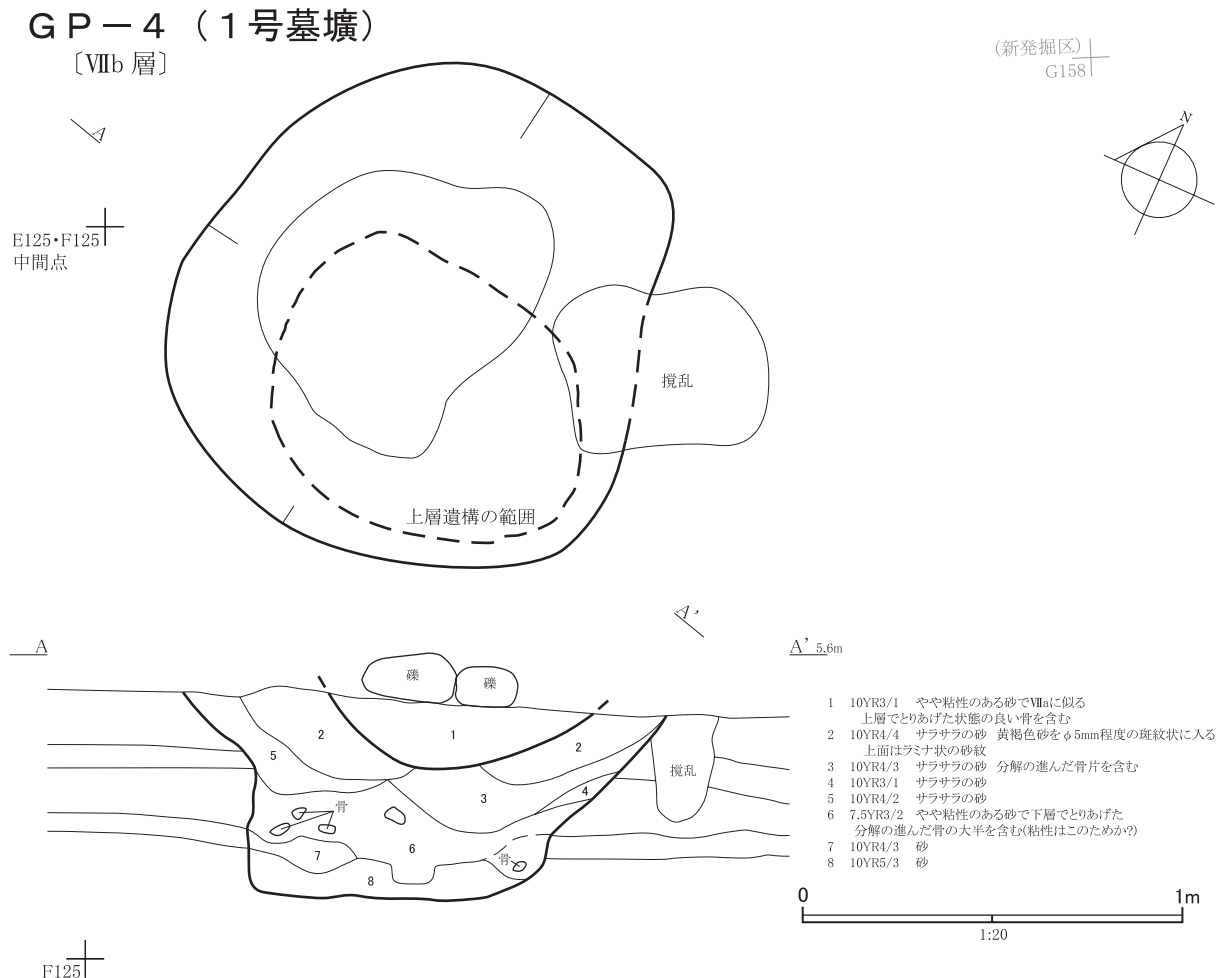
(1) 土坑墓

1基（GP-4）を検出した。時期は、検出層位や出土遺物から後北C₂・D式期である。

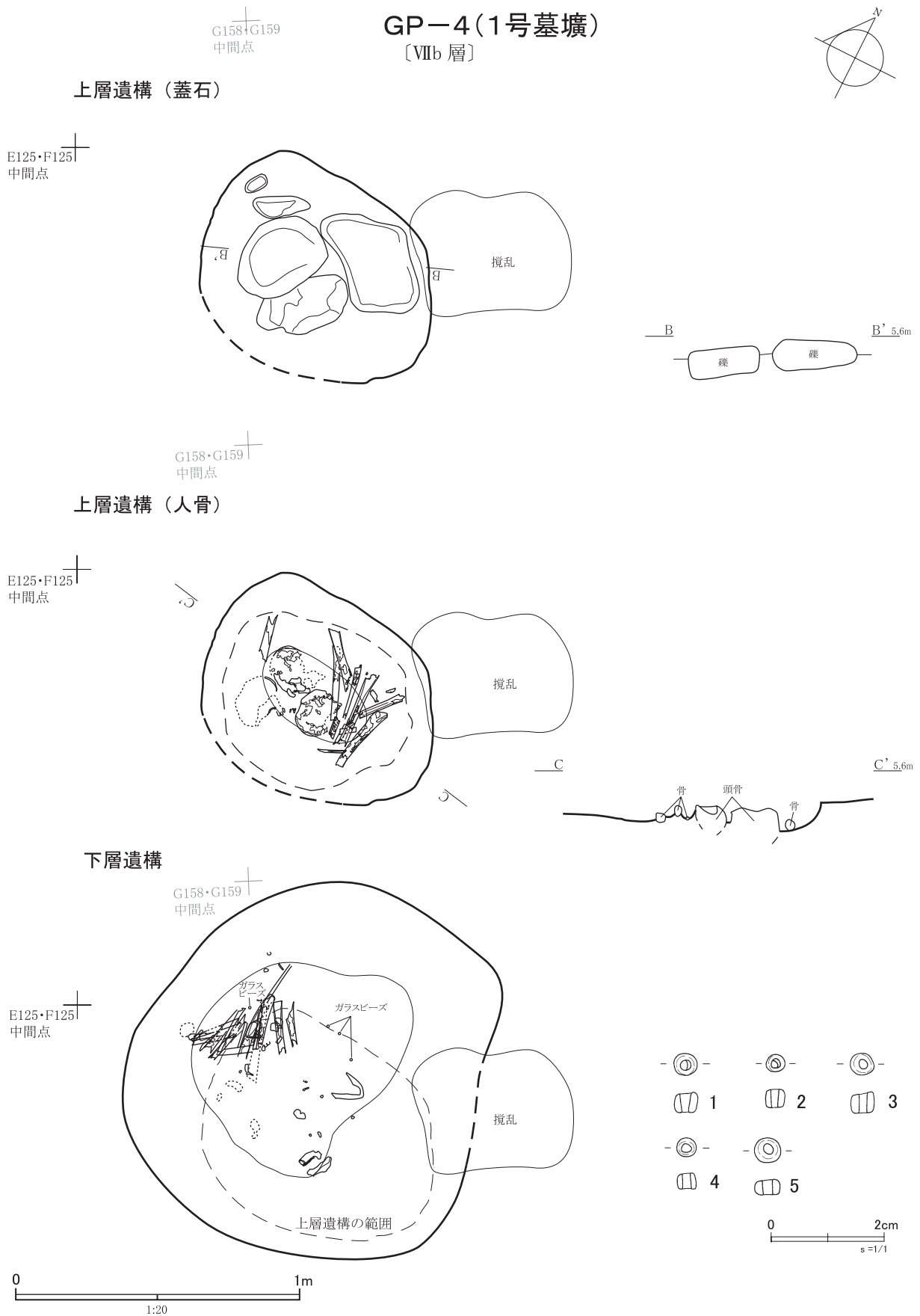
GP-4（1号墓墳）（図VI-14・15 表VI-1・2 口絵3・4、図版30）

調査区南東部のくぼみ（「廃棄場」）で検出した。掘り込み面はVIIb層である。樹木による攪乱が一部深部にまで及んでいる。土層断面の観察の結果、一度埋めた土坑の上位を再度掘り込み改めて埋葬を行った、再葬または追葬と考えられる痕跡を確認した（調査担当者は「再葬墓」と考えている）。

「下層遺構」は、ろうと状の掘り込みである。覆土中層に不均質な粘性の強い砂層があり、その中から多数の人骨片とガラス玉5個が散逸した状態で出土した。人骨は土中への分解が進み、腰骨・脊椎の一部、四肢骨の一部、下顎骨2個体、歯などが確認できるが、体位を復元できる状態ではなかった。覆土中から後北C₂・D式土器の小片がわずかに出土した。「上層遺構」は浅く掘り込んだくぼみで、頭蓋骨3個体と四肢骨が集約して検出された。人骨は土中への分解が進み、非常に脆弱である。頭蓋骨は正面を向き合って横置きされていたようである。いずれも下顎骨が失われた状態で、1個体は上顎のみ残存していた。四肢骨はいずれも端部が失われている。なお、土坑上面には30cm大の安山岩の礫が並べられており、「蓋石」に相当する。



図VI-14 GP-4（1号墓墳）（1）



図VI-15 GP-4 (1号墓墳) (2)

掲載遺物：1～5はガラス玉。いずれもやや透明性をもつ青色を基調としている。ガラス中の気泡が同方向に延びていることから引き延ばし法によって製作されたものと考えられる。上下の面がほぼ平行する1・2と片側が傾斜する3～5が見られる。後者の傾斜面にも他と同様の光沢が見られることから、玉ずれによる傾斜ではないと考えられる（Ⅷ章2）。

（2）土坑

6基（P-9～13・30）を検出した。時期は、Ⅸ層のP-9・12が宇津内Ⅱa式期、P-30が宇津内ⅡaまたはⅡb式期、Ⅶ層のP-10・11・13が後北C₂・D式期である。

P-9 (PIT13) (図VI-16 表VI-1 図版31)

調査区西部のⅨ層で検出した。不整楕円形の浅い土坑で、覆土の下位にしまりの強い黒色土が堆積していた。

P-10 (PIT2) (図VI-16 表VI-1・2 図版31・64)

調査区中央部のⅦb層で検出した。深さは40cmほどあり、坑底はやや丸みをおびる。中位に段があり上位が広がる。覆土中から後北C₂・D式2点、石鏃1点、フレイクチップ10点が出土した。また坑底付近からやや大型の礫が出土した。

掲載遺物：1は石鏃。平基で、側縁はわずかに湾曲する形状である。先端部が欠損している。

P-11 (PIT5) (図VI-16 表VI-1・2 図版31)

調査区中央東部のⅦb層で検出した。おおむね円形で、湾状にくぼむ。礫が少数出土した。

P-12 (PIT25) (図VI-16 表VI-1・2 図版31)

調査区東部のⅨ層で検出した。おおむね楕円形で、坑底の立ち上がりは丸みをおびる。F-7 (PIT22)・S-5 (PIT14)・R-3 (PIT24)と重複し、いずれも当遺構が古いが、大きな時間差はないものと思われる。覆土中からフレイク4点が出土した。

P-13 (PIT8) (図VI-17 表VI-1・2 図版31・64)

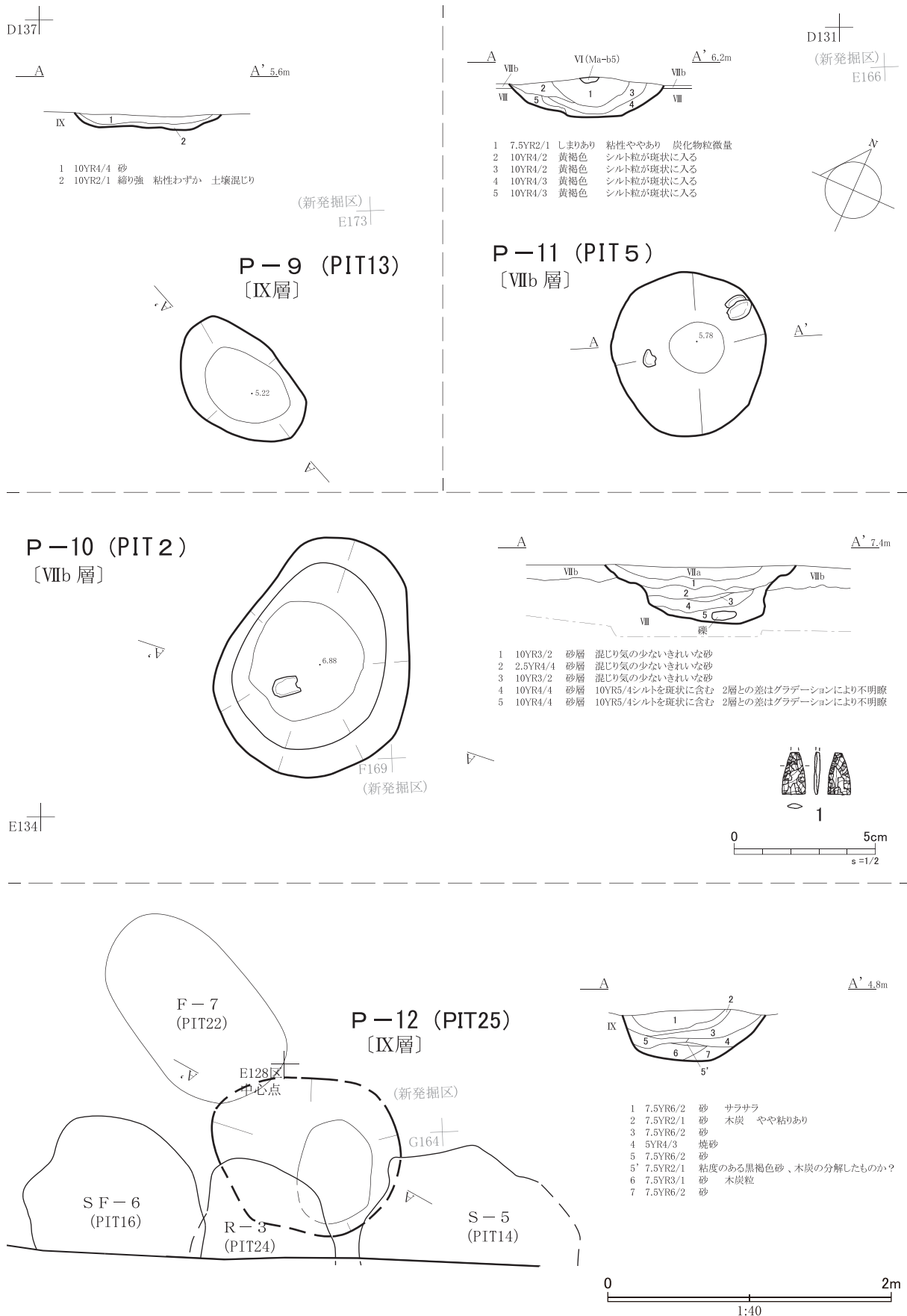
調査区南東端のⅦb層で確認した。おおむね円形で、坑底は丸みをおびる。覆土中から後北C₂・D式11点、石鏃・搔器・Rフレイク各1点、フレイクチップ13点、台石2点が出土した。また覆土の最下層から焼骨片を回収した。

掲載遺物：1は後北C₂・D式。弧状の帯縄文に沿う微隆起線と三角列点が施文されている。2は石鏃。わずかに凹基となっており、正面を中心に加工が施され、裏面には素材面が大きく残っている。3はスクレイパー。下端部を中心にやや平坦な加工が施されている。4はRフレイク。左側縁に加工が施されている。5・6は台石。両者とも正裏面に平滑面があり、5は全面的にベンガラが付着している。

P-30 (PIT21) (図VI-17 表VI-1・2 図版32・64)

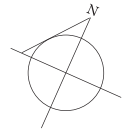
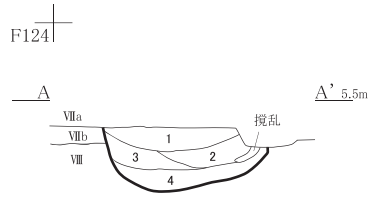
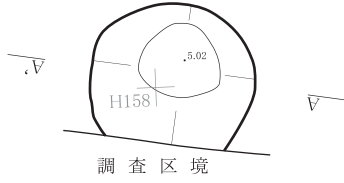
調査区中央南部のⅨ層を掘削中、一個体の大型土器片がまとまって出土した。周囲を精査したところ、Ⅸd層上面で黒褐色砂層の楕円形まとまりを検出した。黒褐色砂層を掘り下げたところ、平坦面と壁の立ち上がりを検出し、土坑とした。掘り込み面はⅨb層またはⅧ層と推測され、大型深鉢は覆土中からの出土とみられる。また覆土下位からベンガラが少量検出された。

掲載遺物：7は宇津内Ⅱ式の大型深鉢。大2+小2個一組の突起を起点に擬縄貼付文などにより文様が割り付けられている。地文縄文→細沈線による割り付けの下書き→突起部の貼瘤→擬縄貼付文→7～8条の縄線→縄端刺突列、の順に施文されたと観察できる。宇津内Ⅱa式とⅡb式の過渡期の様相を呈している。8は後北C₂・D式。何らかの影響による混入と考えられる。

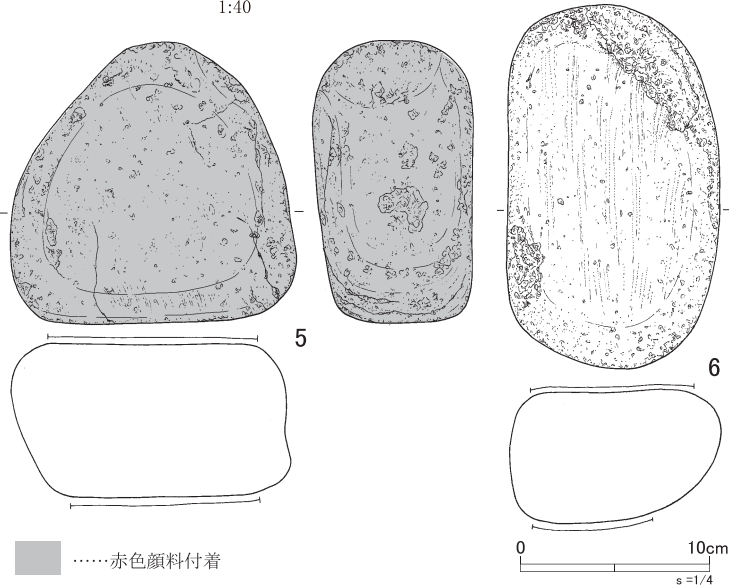
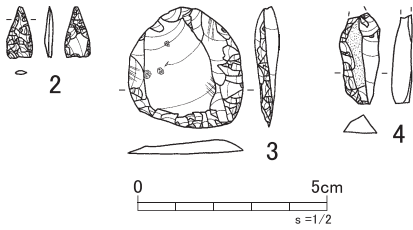
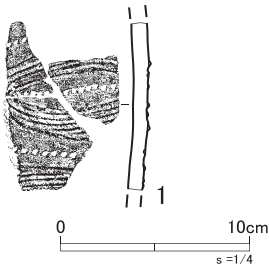
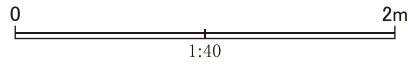


図VI-16 P-9・10・11・12 (PIT13・2・5・25)

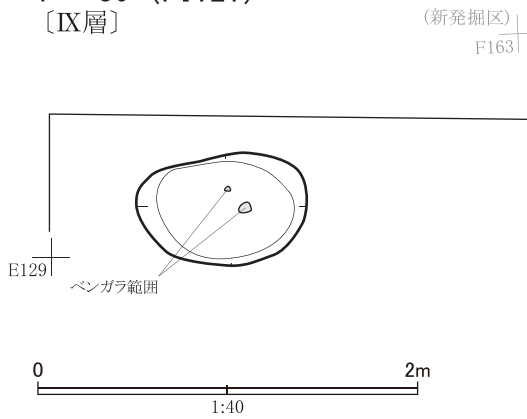
P-13 (PIT8)
〔VIIb層〕



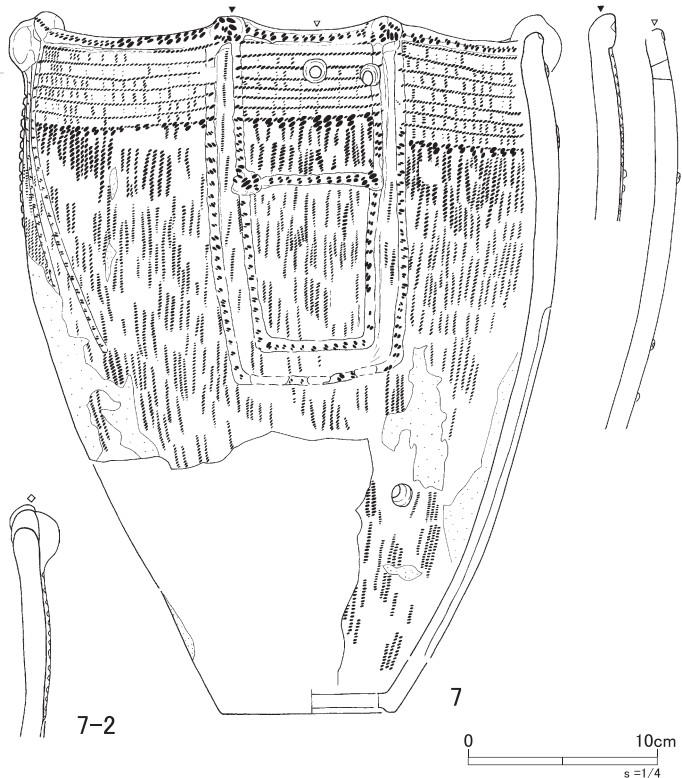
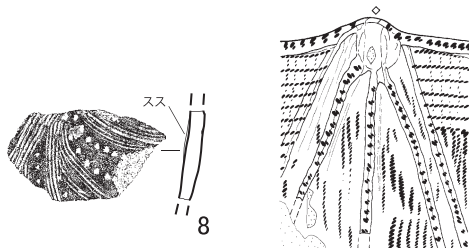
- 1 7.5YR2/1 VIIaに似る やや粘りあり 焼骨片木炭を含む
- 2 7.5YR3/2 サラサラの砂 木炭を含む
- 3 7.5YR3/1 サラサラの砂
- 4 2.5YR4/1 粘りある 焼骨片含む



P-30 (PIT21)
〔IX層〕



(新発掘区)
F163



図VI-17 P-13・30 (PIT8・21)

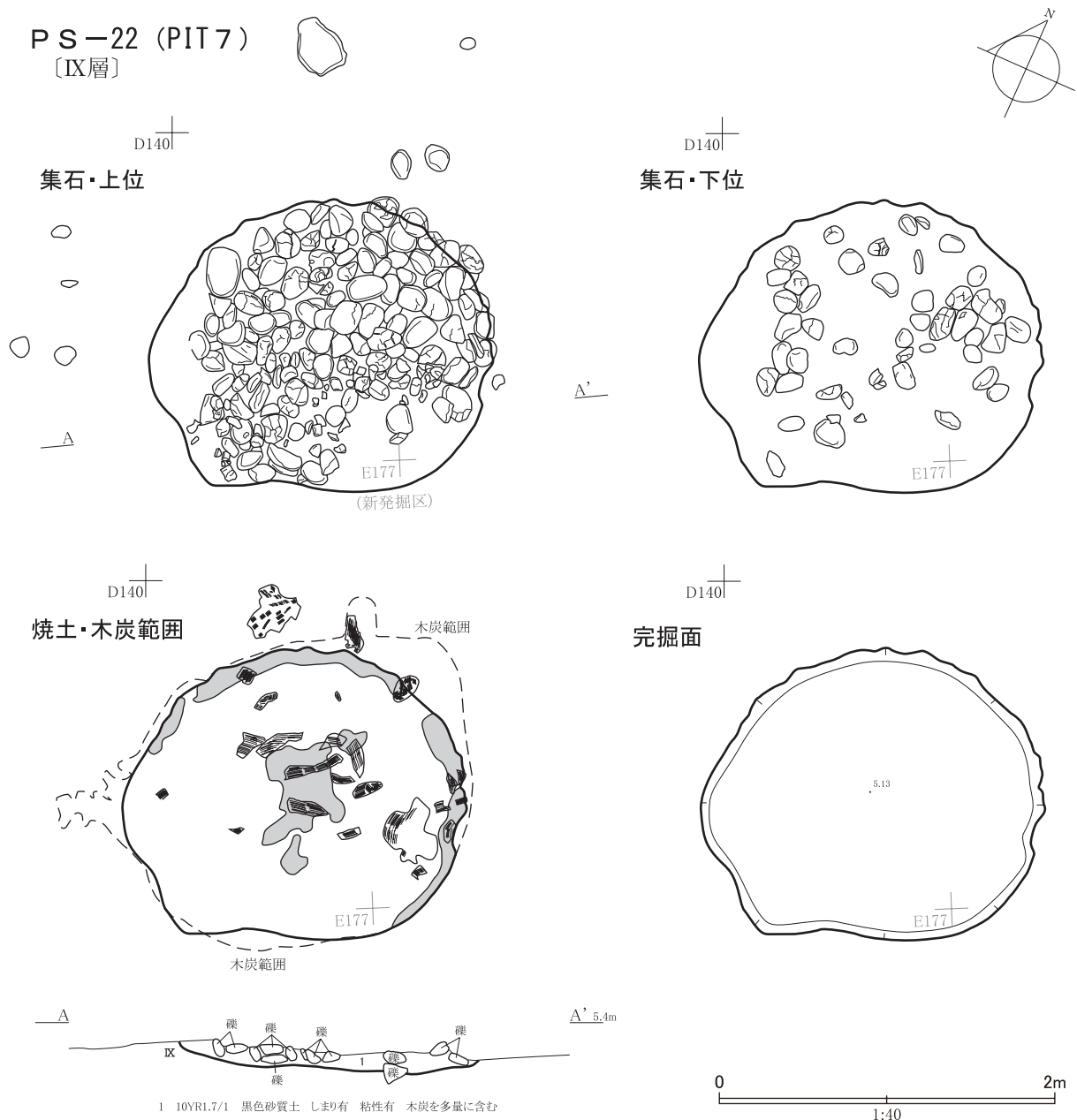
(3) 集石土坑

3基(P-9~13)をいずれもIX層で検出した。時期は、検出層位から宇津内II a式期である。

PS-22 (PIT 7) (図VI-18・19 表VI-1・2 図版31・64)

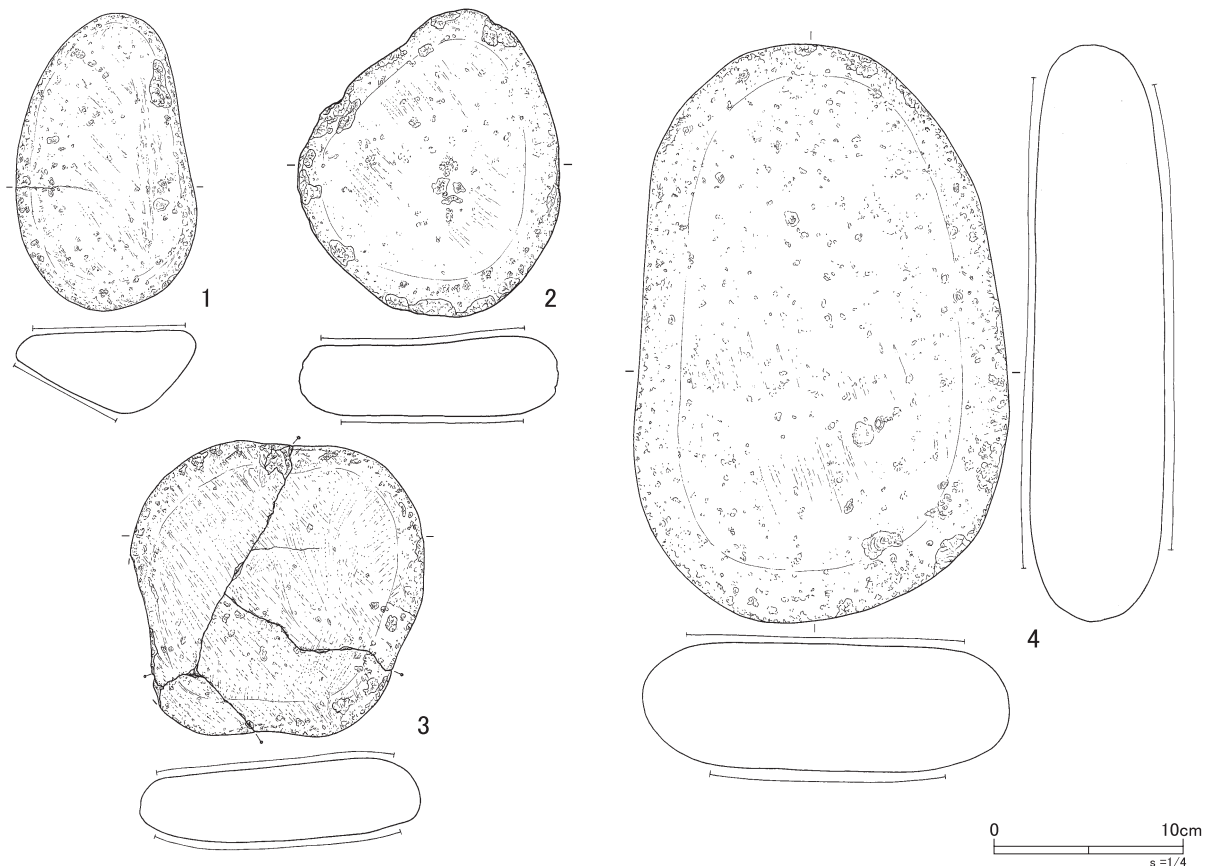
調査区西部のIX層で検出した。不整楕円形の浅い土坑に、礫が平面的に密集して出土した。覆土はしまりのある黒色砂層で、礫の下位から炭化材や炭化木片が多量に出土した。また坑底中央付近や周縁部に、褐色に被熱した跡がみられた。遺物は、覆土中からフレイクチップ45点のほか、台石が出土した。

掲載遺物：1はすり石。正面全体と裏面右側にすり面が見られる。2~4は台石。いずれも正裏面に平滑面が見られる。



図VI-18 PS-22 (PIT 7)

P S-22 (PIT 7)



図VI-19 P S-22 (PIT 7) 出土の遺物

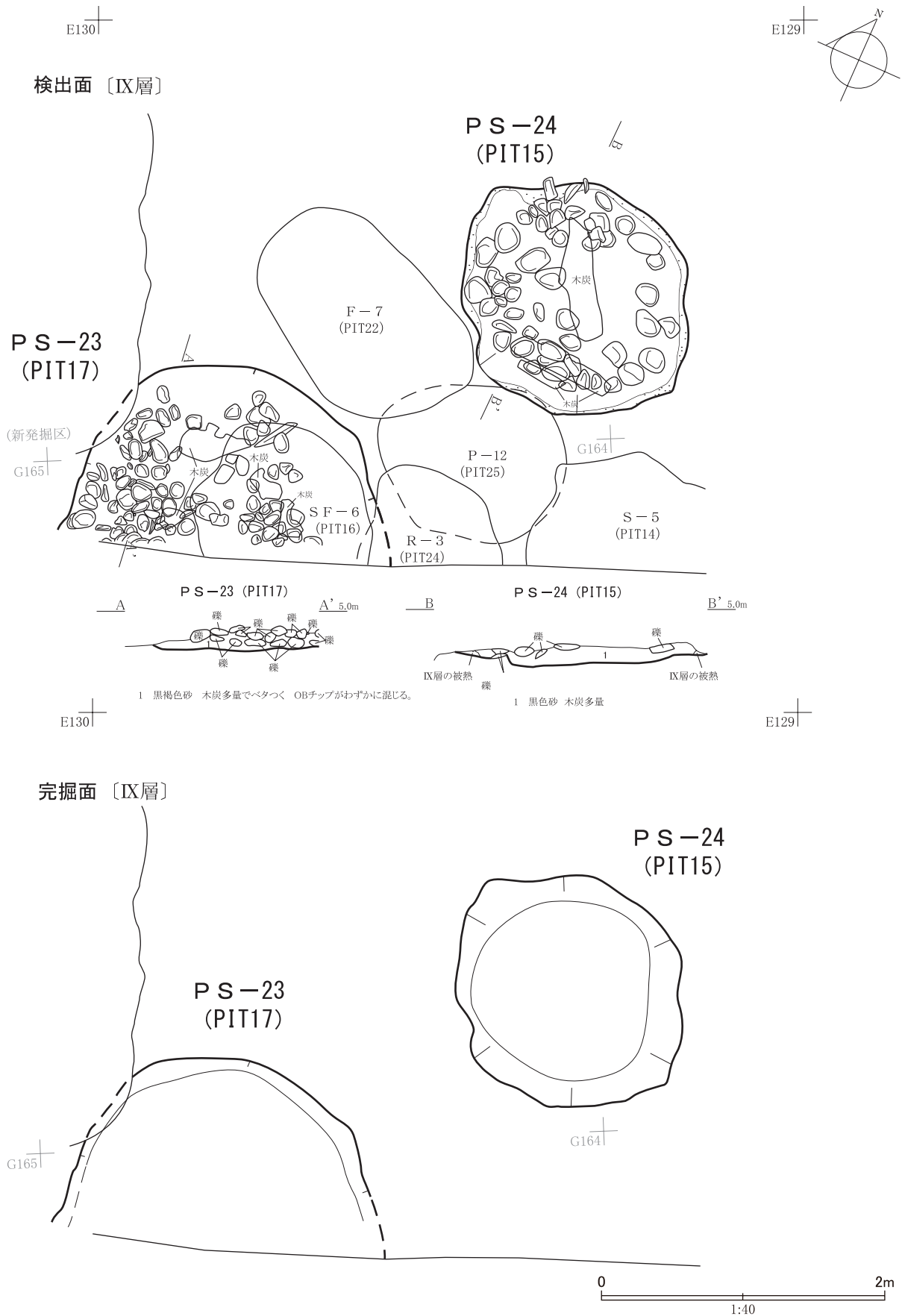
P S-23 (PIT17) (図VI-20・21 表VI-1・2 図版31・64)

調査区中央南部のⅨ層で検出した。南側は調査区外に広がる。楕円形と推定する浅い土坑に、礫が平面的に密集して出土したが、ややすき間がある。覆土は黒色砂層で、礫の下位から炭化木片が多量に出土した。遺物は、覆土中から石器等12点が出土した。削器、フレイクチップ、石斧、砥石、すり石、台石がある。S F-6 (PIT16)・R-3 (PIT24) と重複し、当遺構が古いものの大きな時期差はないとみられる。またP S-24 (PIT15)・P-12 (PIT25)・F-7 (PIT22)・S-5 (PIT14) が近接し、関連があるものと思われる。

掲載遺物：1はナイフ。左側縁全体に加工が施されている。2は石斧。上半部が欠損している。左側縁に粗い両面加工を施した後、全面的な研磨により両刃の刃部が作出されている。3～5はすり石。いずれも扁平な原石が利用され、正面の他に3は側面、4・5は裏面にすり面が見られる。5はベンガラが付着している。6は台石。正裏面に平滑面が見られる。

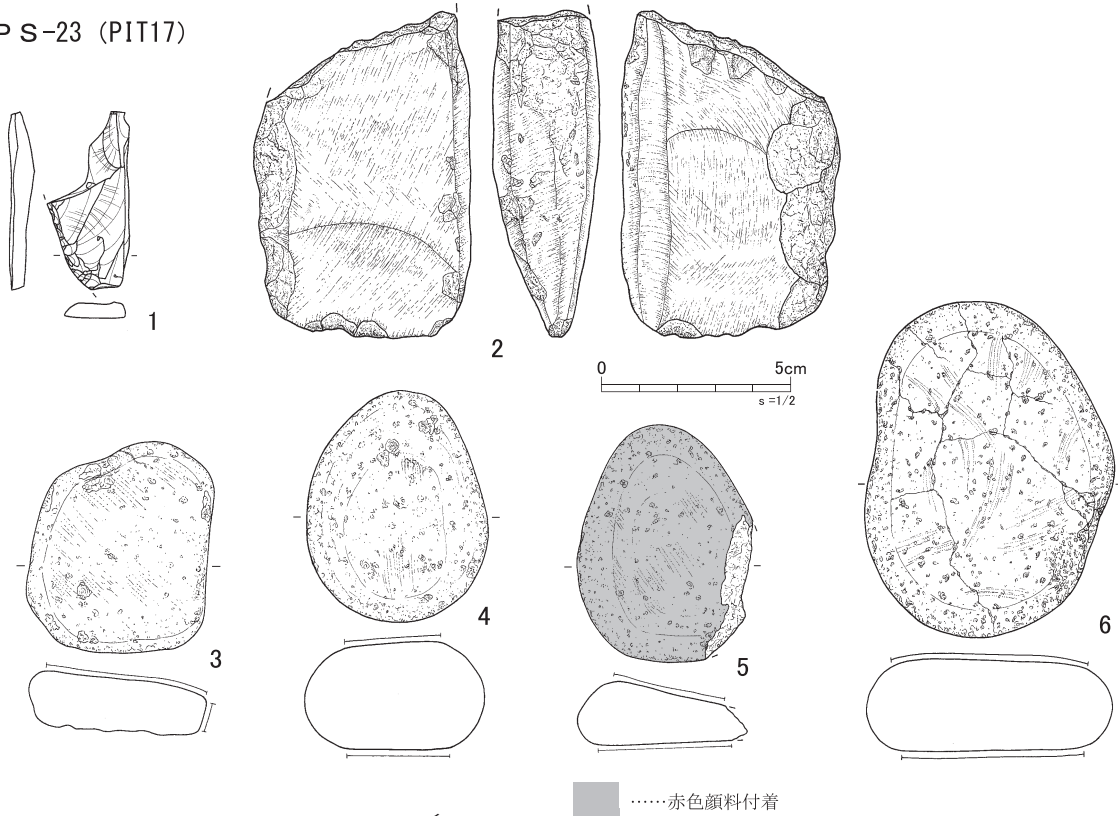
P S-24 (PIT15) (図VI-20・21 表VI-1・2 図版31・64)

調査区中央南部のⅨ層で、上記のP S-23付近で検出した。不整楕円形の浅い土坑に、礫が平面的に密集して出土した。中央部にすき間がある。覆土は黒色砂層で、礫の下位から炭化木片が多量に出土した。大型の炭化材が複数残されている。また土坑周縁部に一部被熱した跡がみられる。遺物は、覆土中から石器等がわずかに出土し、フレイクチップ、すり石、台石がある。またP S-23記載の遺構群との関連があるものと思われる。

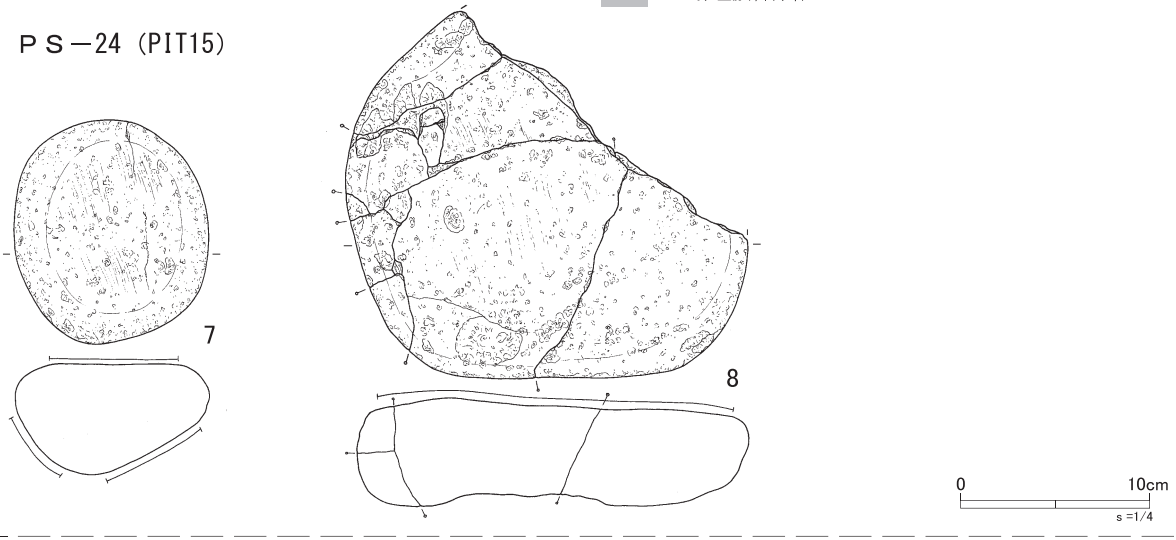


図VI-20 PS-23・24 (PIT17・15)

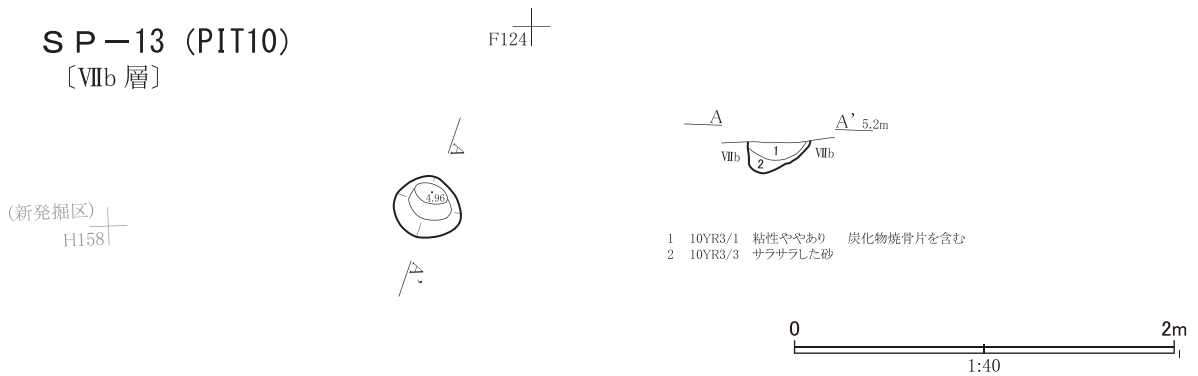
PS-23 (PIT17)



PS-24 (PIT15)



SP-13 (PIT10)
[VIIb層]



図VI-21 PS-23・24出土の遺物・SP-13 (PIT10)

掲載遺物：7はすり石。裏面が山形に盛り上がる原石が利用され、稜付近を除く全面にすり面が見られる。8は台石。扁平な原石の正面に平滑面が見られる。

(4) 小土坑

1基(S P-13)を検出した。時期は、検出層位から後北C₂・D式期である。

S P-13 (PIT10) (図VI-21 表VI-1・2)

調査区南東隅のⅦ層で検出した。覆土に炭化物や焼骨を含む。周辺は「廃棄場」にあたる。

(5) 石組炉

3基(S F-6・7)を検出した。時期は、Ⅸ層のS F-6が宇津内Ⅱ a式期で、Ⅷ層のS F-7が宇津内Ⅱ b式期である。

S F-6 (PIT16) (図VI-22 表VI-1・2 図版5・65)

調査区中央南部のⅨ層で検出した。火床面(焼土)はおおむね楕円形で明褐色を呈し、強く被熱している。その周囲の北～東に大型礫が残るが、やや不規則な配置で検出された。さらに周囲には焼骨片が分布する。P S-23(PIT17)と重複し、当遺構が新しい。

掲載遺物：1は宇津内Ⅱ a式。口唇直下に小型の突瘤文が連続する。内面に炭化物が付着する。2・3は石鏃。2は凹基、3は平基でいずれも先端部が欠損している。3の裏面には素材面が残存する。

S F-7 (PIT12) (図VI-22 表VI-1・2 図版5・65)

調査区南東部で検出した。調査時はⅦ層としていたが、2012年調査区の土層確認により、Ⅷ層に訂正している。石組みの平面形はおおむね長方形で、安山岩製の垂円礫で囲み、その内側を窪ませている。石組内の中央から東寄りに被熱層があり、火床面から魚類・鳥類・小動物の焼骨を回収した。特に魚骨は多く、サケなどの歯・顎・椎骨などが確認できた。ほかに覆土から宇津内Ⅱ b式土器片とチップがわずかに出土した。

掲載遺物：4・5は台石。いずれも正面の平坦面が平滑となっている。

(6) 焼土

2か所(F-6・7)検出した。時期は、検出層位からいずれも宇津内Ⅱ a式期である。

F-6 (PIT23) (図VI-23 表VI-1)

調査区中央南部のⅨ層で、単独検出した「焼砂」範囲である。おおむね円形を呈する。

F-7 (PIT22) (図VI-23 表VI-1・2 図版6・65)

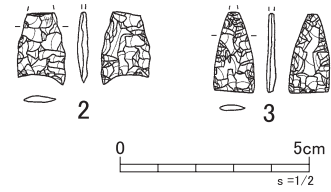
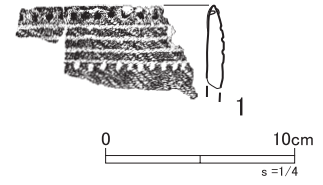
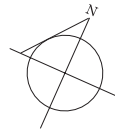
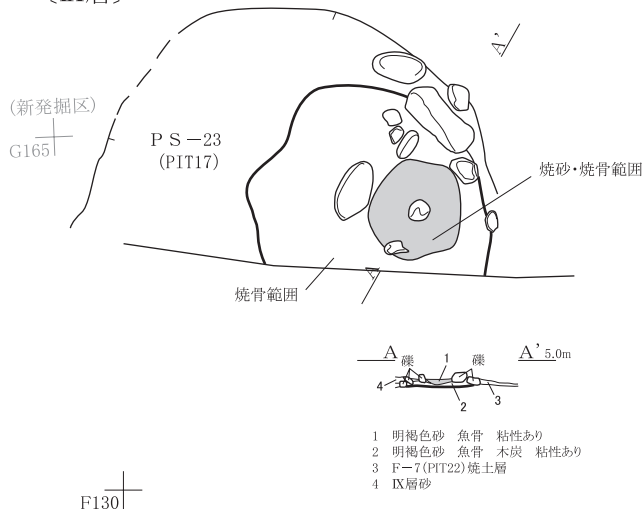
調査区中央南部のⅨ層で検出した。木炭粒を少量含む。またメノウチップのほか、赤色顔料の付着したすり石やベンガラ・褐鉄鉱が出土した。ベンガラ製作にかかわる焼土の可能性はある。P-12(PIT25)と重複し、当遺構が新しい。またP S-23(PIT17)・P S-24(PIT15)、S F-6(PIT16)、R-3(PIT14)が近接し、関連があるものと思われる。

掲載遺物：1は赤色顔料が付着したすり石。棒状の原石が利用され、両側面の稜線を除く全体的にすり面が見られる。

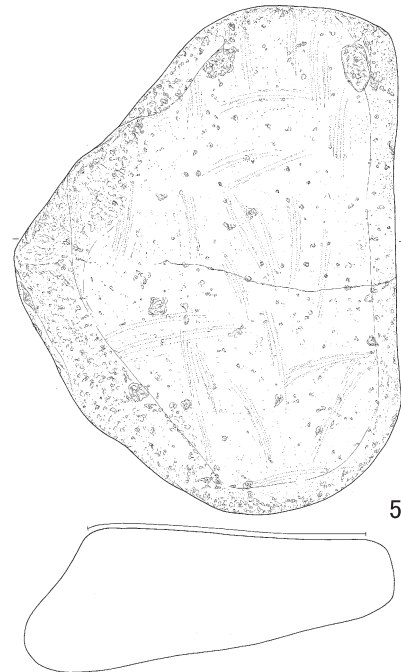
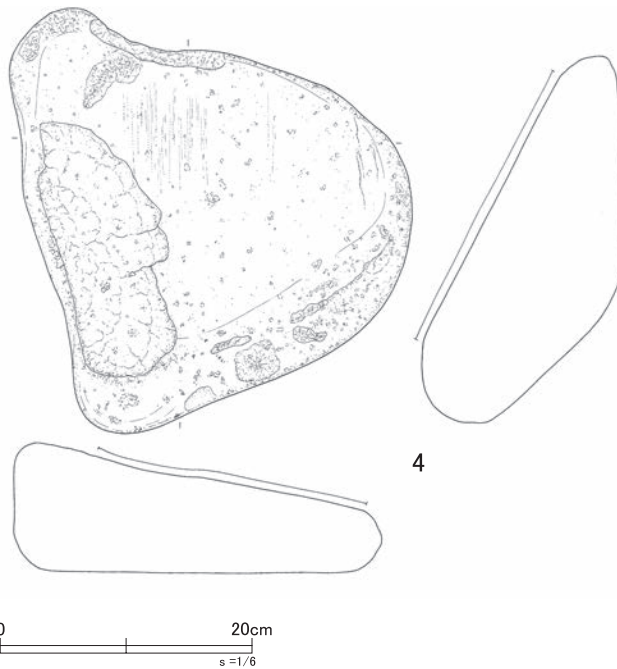
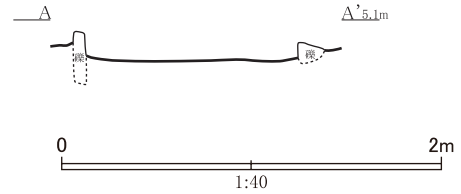
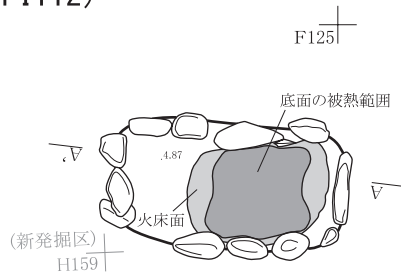
(7) 礫集中

6か所(S-2～7)を検出した。時期は、Ⅸ層のS-2～5が宇津内Ⅱ a式期で、Ⅶ層のS-6・7が後北C₂・D式期である。

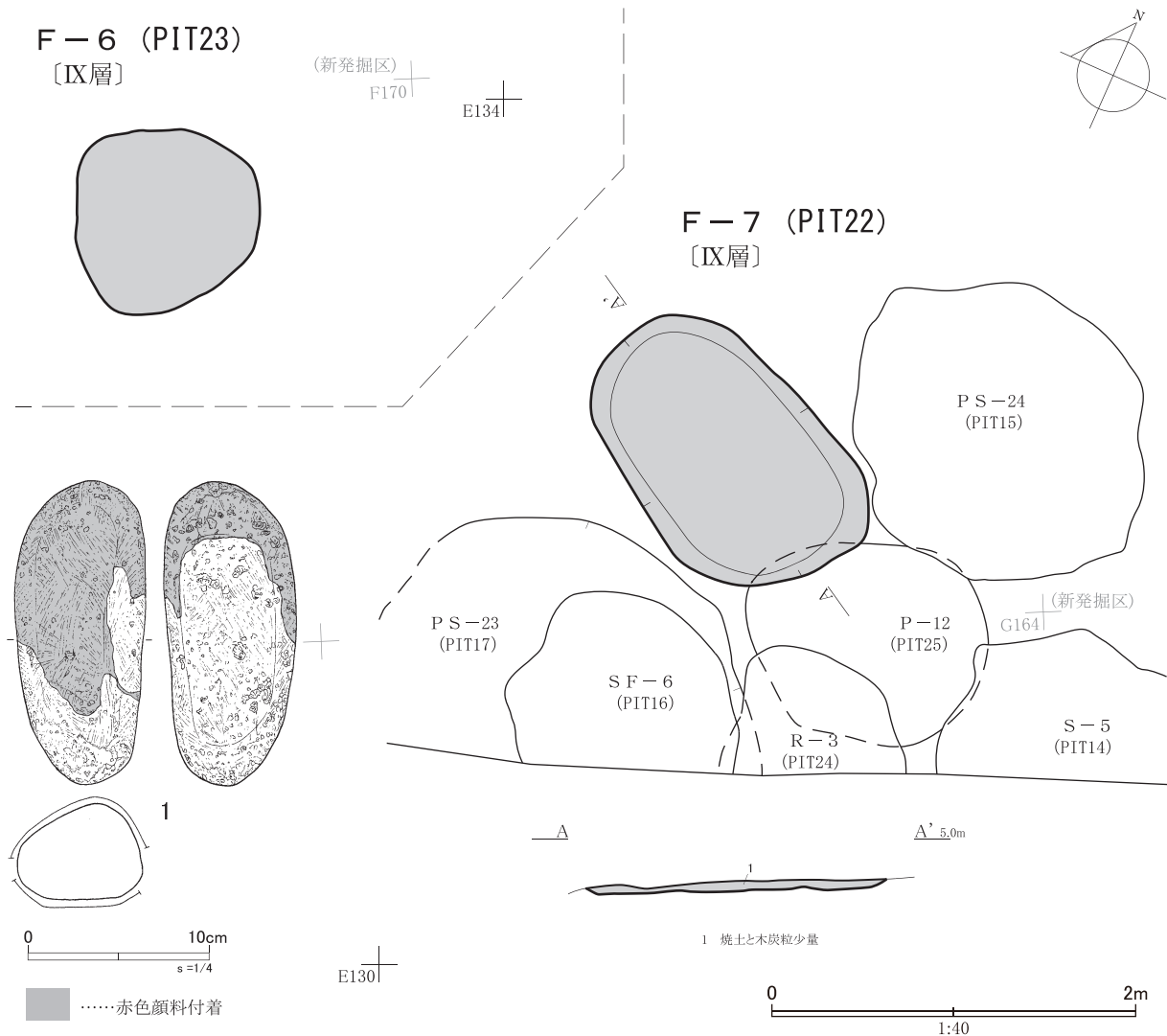
S F - 6 (PIT16)
〔IX層〕



S F - 7 (PIT12)
〔VIII層〕



図VI-22 S F - 6・7 (PIT16・12)



図VI-23 F-6・7 (PIT23・22)

S-2 (PIT9) (図VI-24 表VI-1)

調査区北西部のIX層で検出した。大小の礫が3.4mほどの範囲からややまとまって出土した。

S-3 (集石) (図VI-24・26 表VI-1・2 図版65)

調査区中央西部のIX層で検出した。約6mにわたり帯状に礫が分布する。大型礫が多く、やや間隔があき分布密度は小さい。北側にベンガラ範囲R-5が広がり、赤色顔料が付着した台石などが当集石にも含まれている。

掲載遺物：1～3は台石である。いずれも扁平な原石が利用され、正面に平滑面が見られる。1は裏面にも平滑面が存在する。

S-4 (PIT20) (図VI-25・26 表VI-1・2 図版65)

調査区中央南部のIX層で検出した。約1.1mの範囲に礫が密集して出土した。周辺は攪乱が多く、当遺構も東側及び西側の一部を欠く。集石の西側にはブロック状の焼土が複数あり、周囲にベンガラや木炭が広がっている。これらを含めてS-4とした(2018年)。遺物はフレイクチップ類5点のほか、宇津内II a式3点、台石1点が出土した。またベンガラや骨片も多く出土している。

掲載遺物：4・5は宇津内Ⅱa式土器。4は地文のRL斜行縄文と突瘤文のみが施されている。一方5は縄線や縄端刺突が施されている。6はRフレイク。両側縁に部分的に細かな加工が施されている。7は台石。扁平な原石の正面に平滑面が見られる。

S-5 (PIT14) (図VI-25・26 表VI-1・2 図版32・65)

調査区中央南部のⅨ層で検出した。台石を含む大型礫が平面的にまとまって出土した。P-12 (PIT25)と重複し、当遺構が新しい。またPS-23 (PIT17)・PS-24 (PIT15)、SF-6 (PIT16)、F-7 (PIT22)、R-3 (PIT14)が近接し、関連があるものと思われる。

掲載遺物：8~11は台石。大きさにばらつきが見られるが、いずれも正面に平滑面が見られる。

S-6 (集石遺構1) (図VI-27 表VI-1・2 図版32・65)

調査区中央部のⅦ層で単独で検出した。礫石器を含む亜円礫が不整形なまとまりで検出された。

掲載遺物：1はたたき石。やや扁平な楕円形の原石の広い小口面に敲打痕が見られる。2は台石。正裏面に平滑面が見られ、正面から側面にかけてベンガラが付着している。

S-7 (PIT6) (図VI-27 表VI-1・2 図版32・66)

調査区中央東部のⅦ層で単独で検出した。礫石器を含む亜円礫が不整形なまとまりで検出された。遺物は後北C₂・D式13点、フレイクチップ類21点のほか、削器、搔器、台石が出土した。

掲載遺物：3~6は後北C₂・D式。3~5は同一個体の大型深鉢。弧状の帯縄文を主体とする文様が配されている。微隆起線は見られない。5は平底。底部付近まで帯縄文が施されている。6は胴下部で、帯縄文ではなく条痕文が施され、以下は底部まで無文である。7・8はナイフ。いずれも両面全体に平坦加工が施されている。7の下端は尖るように成形されている。8は上下端が欠損している。9はスクレイパー。下端部に円弧状の刃部が作出されている。10はRフレイク。左側縁にやや平坦な加工が施されている。11は台石。扁平な原石の正裏面に平滑面が見られる。

(8) フレイクチップ集中 (図VI-28 表VI-1・2)

3か所 (FC-2・3・17)をⅦ層で検出した。FC-2・3は調査区中央部の砂丘上、FC-17は調査区東部の斜面上にある。各発掘区の「石器集中」として調査を行っていた。黒曜石のチップを主体とする。時期は、いずれも後北C₂・D式期である。

(9) 土器埋設遺構 (図VI-28 表VI-1 図版66)

1か所 (埋設土器1)を調査区中央西部のⅨ層で検出した。土器は口縁部~胴部が倒立した状態で出土した。ベンガラ範囲R-3の薄層を切っている。

掲載遺物：1は宇津内Ⅱa式の深鉢。胴下部は剥落が多い。2+2単位の文様構成で、突起を起点に擬縄貼付文などによりH状や山形の文様が割り付けられている。各突起内面側にも縄線が施され、口唇は縄端刺突が連続する。

(10) ベンガラ集中

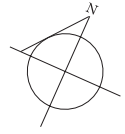
4か所 (R-2~5)を検出した。時期は、検出層位から宇津内ⅡaまたはⅡb式期、R-3~5が宇津内Ⅱa式期である。

R-2 (PIT11) (図VI-29 表VI-1・2 図版8)

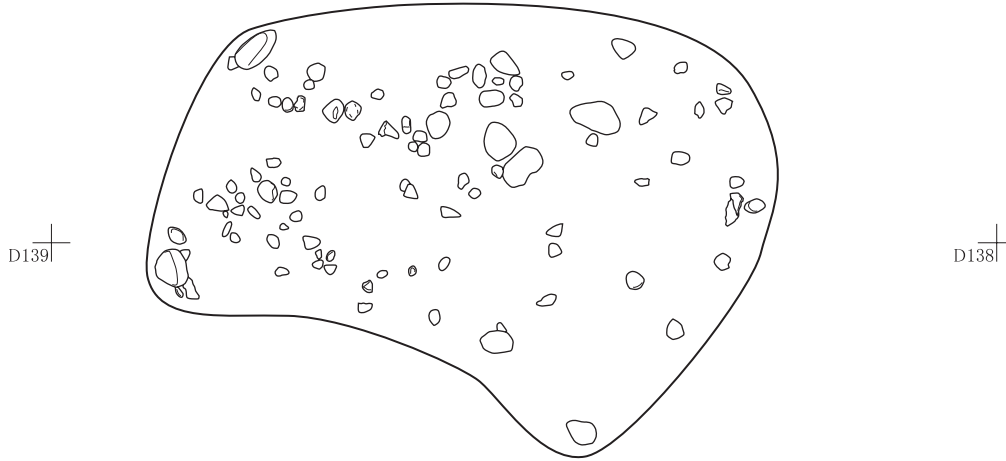
調査区西部のⅨb層中で検出した。小規模な範囲ながら、最大12cmの厚さでベンガラが濃集していた。採取した土壌は、2mm・1mm・0.425mm目のふるいをかけて褐鉄鉱や粒径の大きいベンガラ等を

(新発掘区)
D176

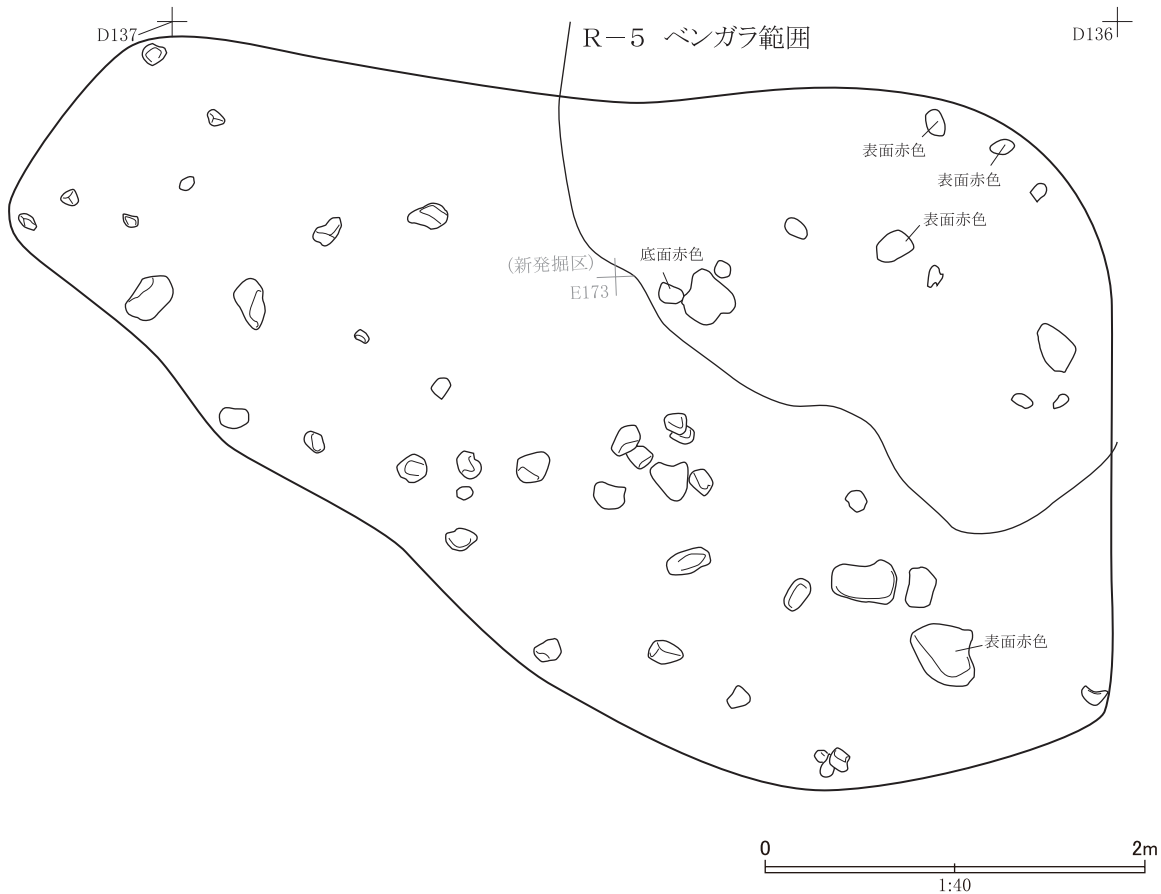
D175



S-2 (PIT 9)
〔IX層〕

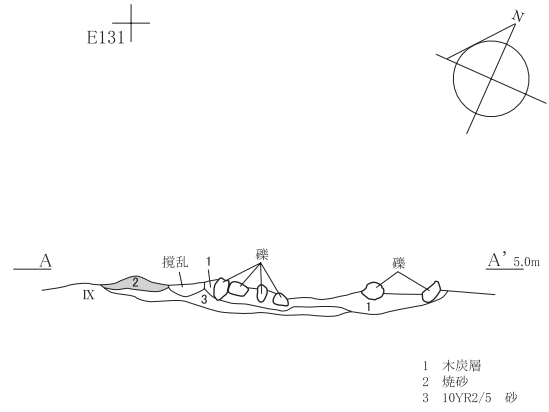
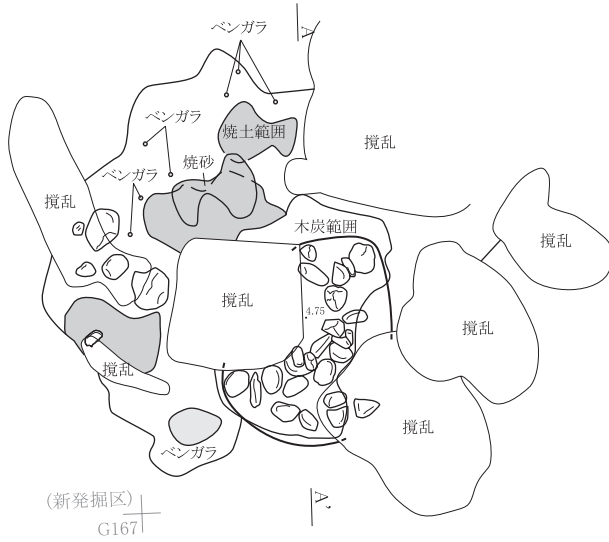


S-3 (集石)
〔IX層〕



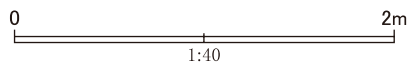
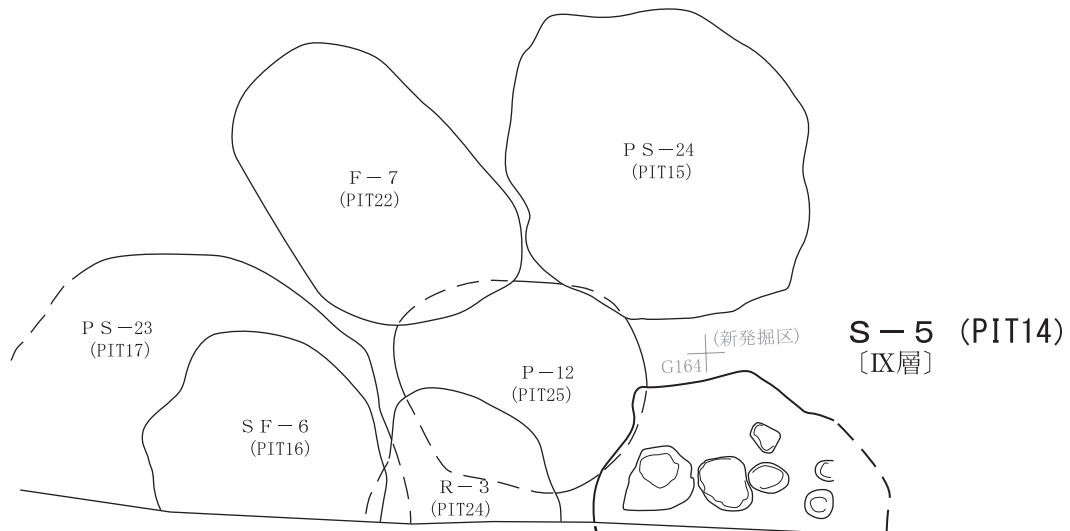
図VI-24 S-2・3 (PIT 9・集石)

S-4 (PIT20)
〔IX層〕



(新発掘区)
G167

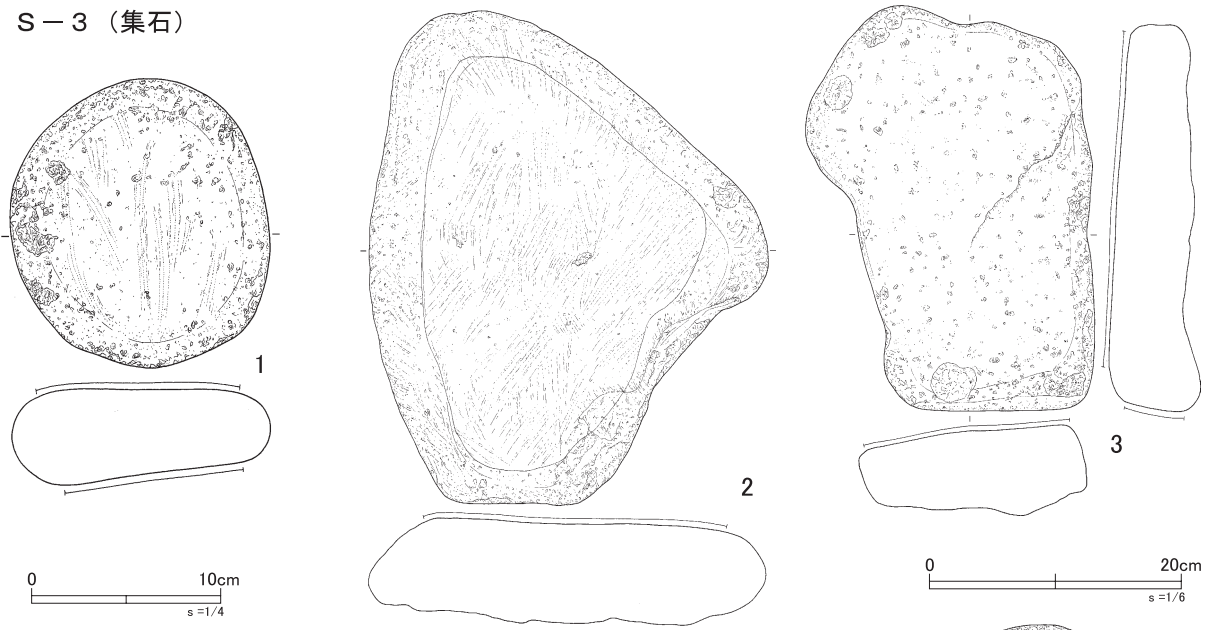
G166



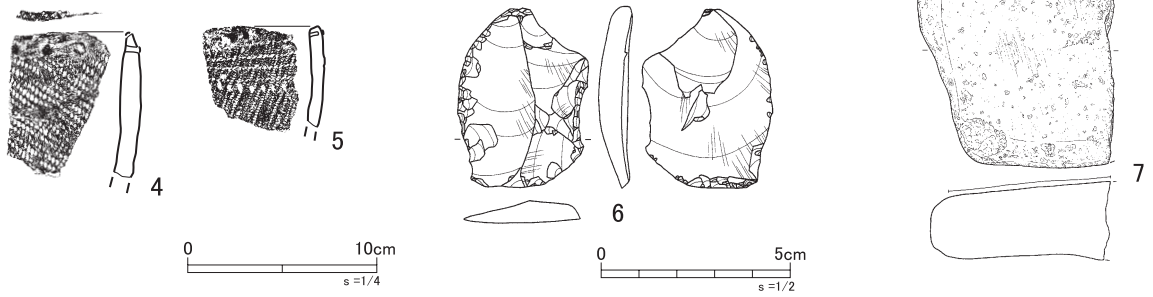
F129

図VI-25 S-4・5 (PIT20・14)

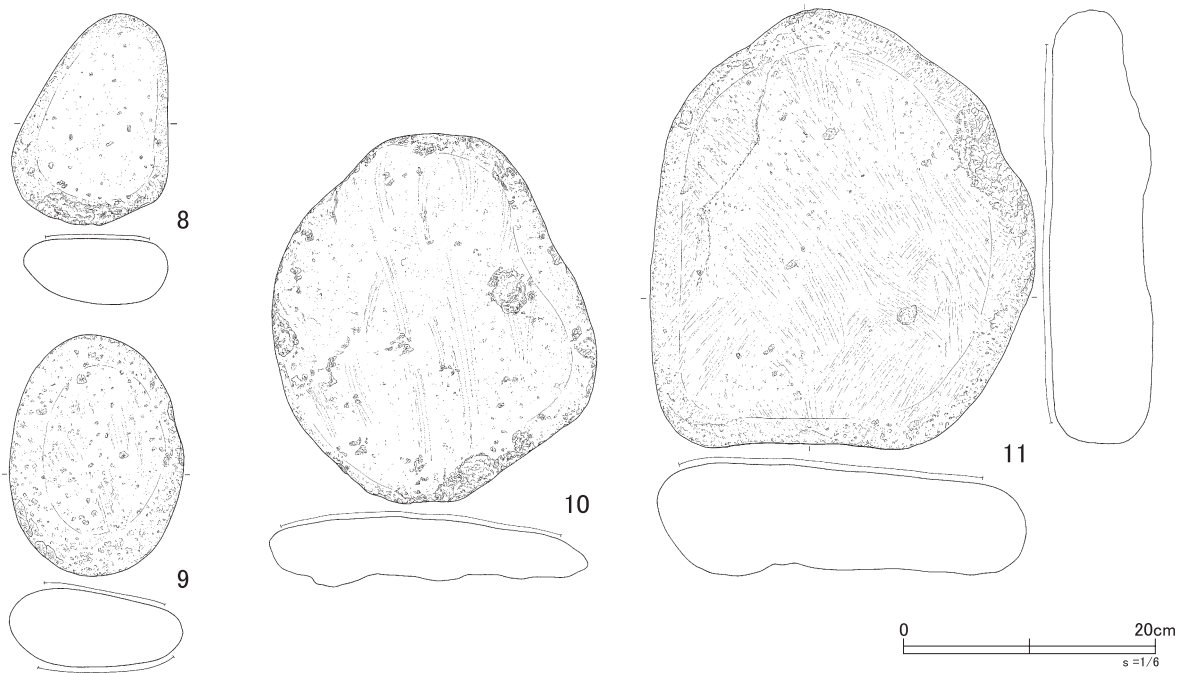
S-3 (集石)



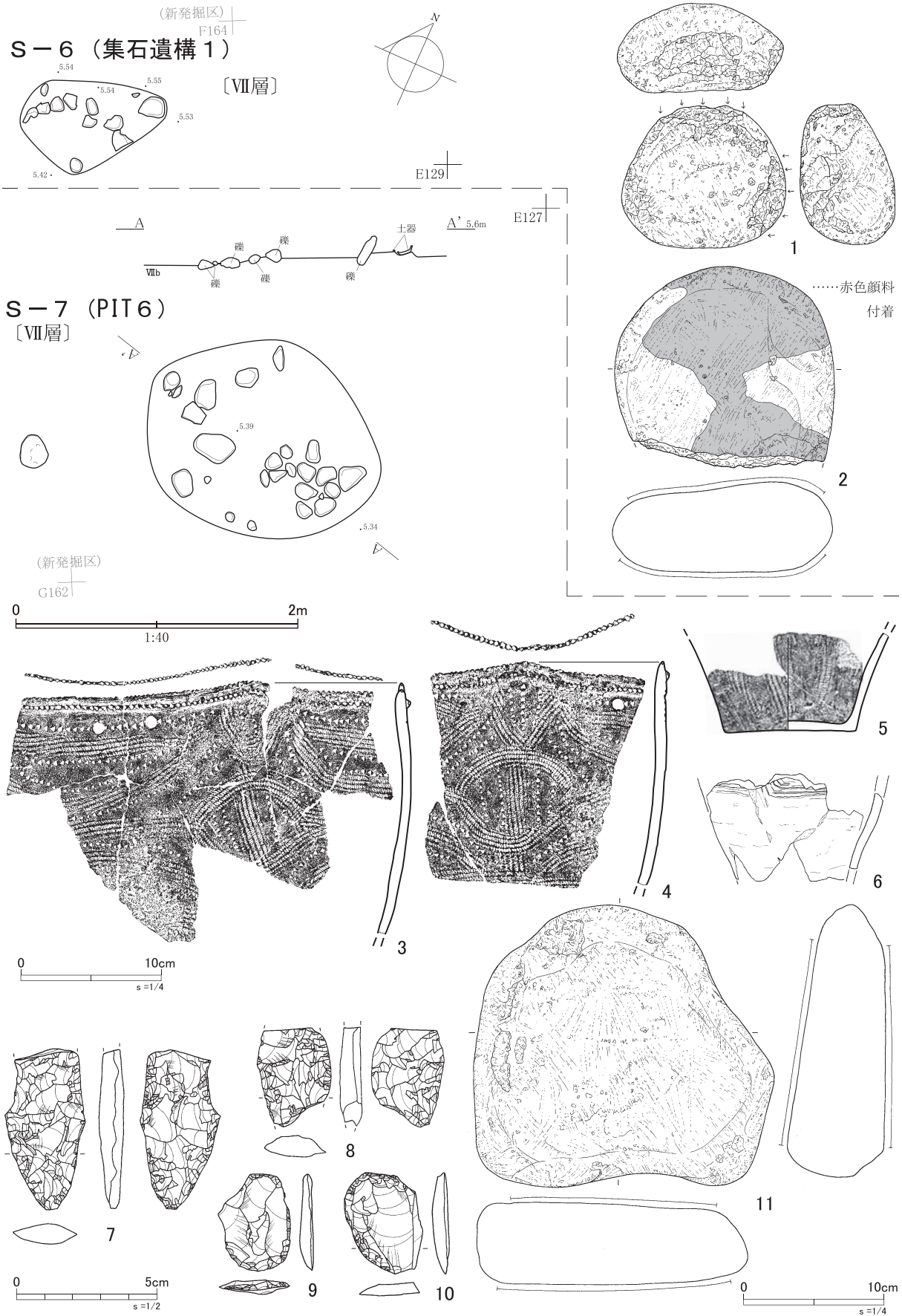
S-4 (PIT20)



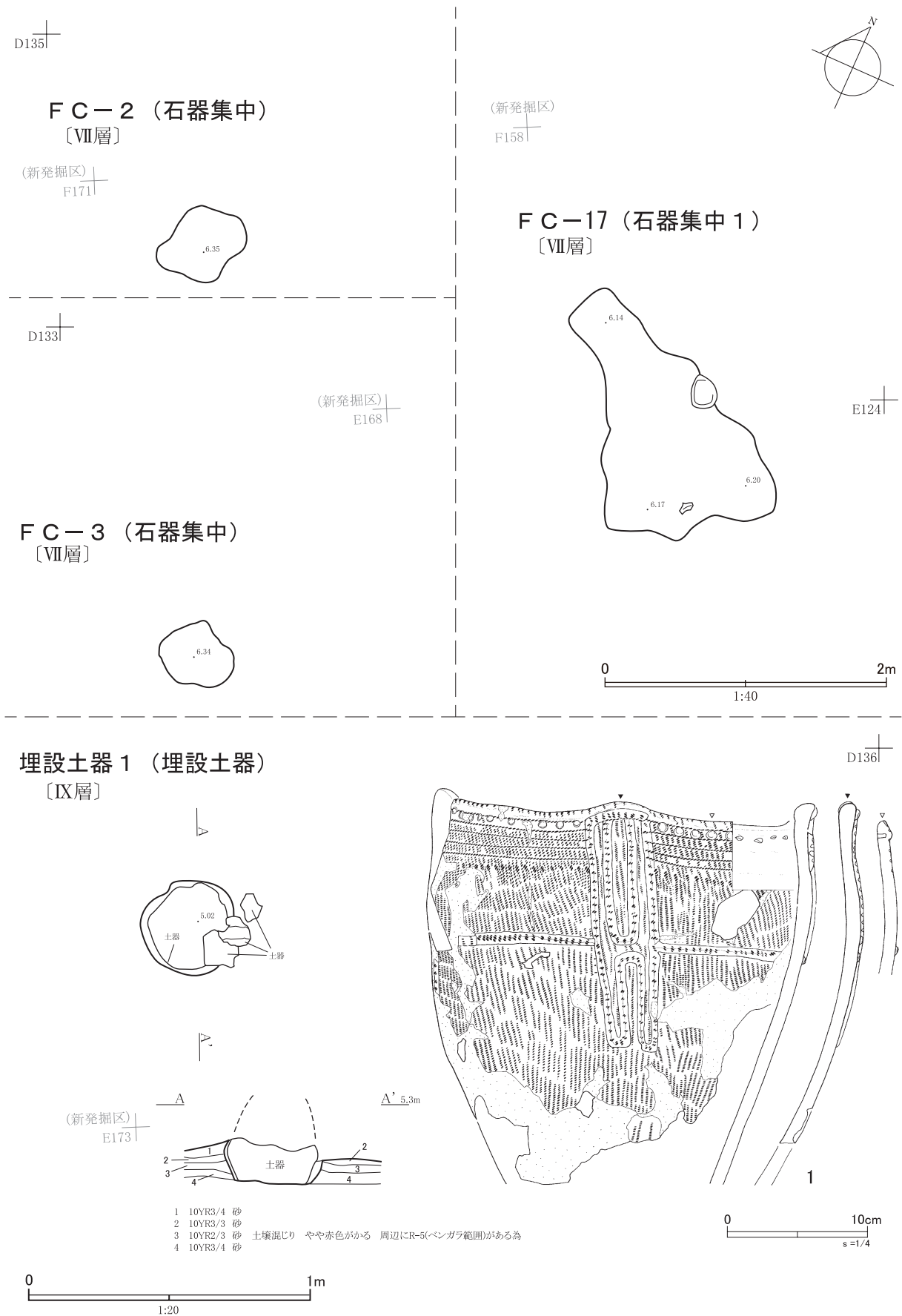
S-5 (PIT14)



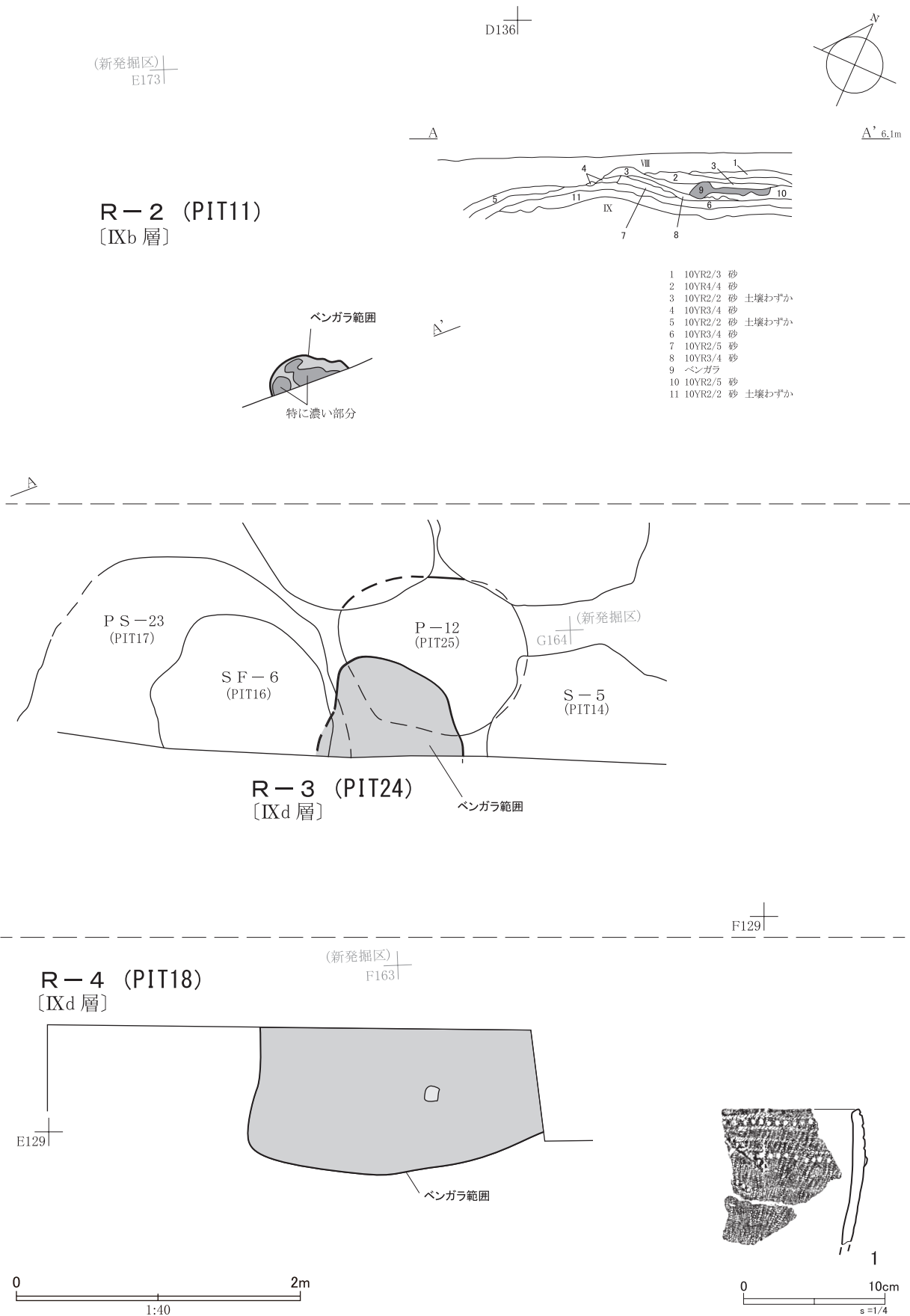
図VI-26 S-3・4・5出土の遺物



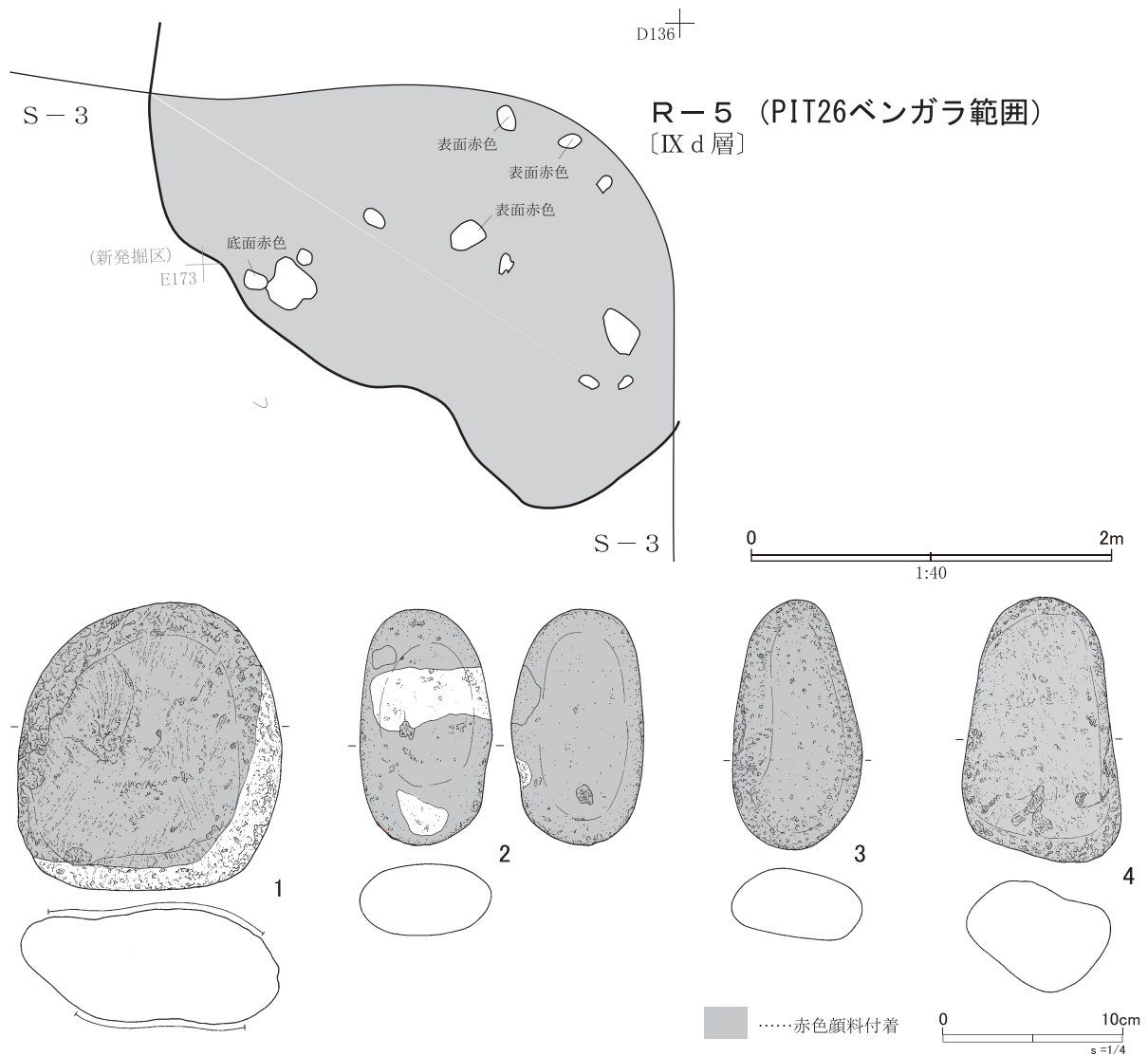
図VI-27 S-6・7 (集石1・PIT6)



図VI-28 FC-2・3・17 (石器集中)・埋設土器1



図VI-29 R-2・3・4 (PIT11・24・18)



図VI-30 R-5 (PIT26)

回収した。

R-3 (PIT24) (図VI-29 表VI-1)

調査区中央南部のIX層で検出した。一定範囲に分布するが、周辺にもベンガラがみられる。P S-23 (PIT17)・P-12 (PIT25) と重複し、当遺構が新しいものの、大きな時間差はないと思われる。S F-6 (PIT16)・S-5 (PIT14) ほかが隣接し、関連する。

R-4 (PIT18) (図VI-29 表VI-1・2)

調査区中央部、R-3の北西のIX層で検出した。約2×1mの範囲に赤みを帯びた砂層が広がっていた。土嚢袋9袋の土壌を採取し、2mm・1mm・0.425mm目のふるいをかけて褐鉄鉱や粒径の大きいベンガラ等を回収した。

掲載遺物：1は宇津内II式。斜行する擬縄貼付文、縄線、縄端刺突列が施されている。さらに宇津内II a式では突瘤文が施される位置に、縄端刺突が連続する。宇津内II a式とII b式の要素があり、過渡期の様相を呈している。内面に炭化物が多量に付着している。

R-5 (PIT26ベンガラ範囲) (図VI-30 表VI-1 図版8・66)

調査区中央西部のIX層で検出した。S-3 (集石) の北側に約3mの範囲に分布する。北側ほど赤色がかっている。赤色顔料の付着した礫石器や礫が多く出土した。

掲載遺物: 1はすり石。正裏面にすり面が見られる。また正面にはベンガラが付着している。2~4はベンガラの付着する礫である。いずれもやや細長い原石である。

(11) 「廃棄場」 (図VI-31~33 表VI-1・2 図版30・32・66・67)

調査区南東部の表土において、径5m以上の隅丸形状のくぼみが確認できた。当初竪穴住居跡を想定してトレンチ調査などを行ったが、調査の結果、大型の倒木痕や攪乱であることがわかった。しかし周辺のVII層からは個体土器を含む遺物が多量に出土しており、砂丘の斜面を利用した「廃棄場遺構」と判断している。範囲は約8mで、北側の砂丘肩部から南・南西側の裾部におよび、標高差は約1mである。なお範囲内のくぼみで検出したGP-4 (1号墓壙) は、一部倒木痕・攪乱が及ぶ。

遺物は土器540点、石器等476点、礫107点のほか、褐鉄鉱、木炭、樹皮、堅果類、骨片などが出土した。土器は後北C₂・D式が大部分で、ほかに宇津内II b式が22点、オホーツク刻文土器が1点ある。石器はフレイクチップ類が多く、石鏃、石錐、削器、搔器、砥石、たたき石、くぼみ石、すり石、台石のほか、石製品がある。

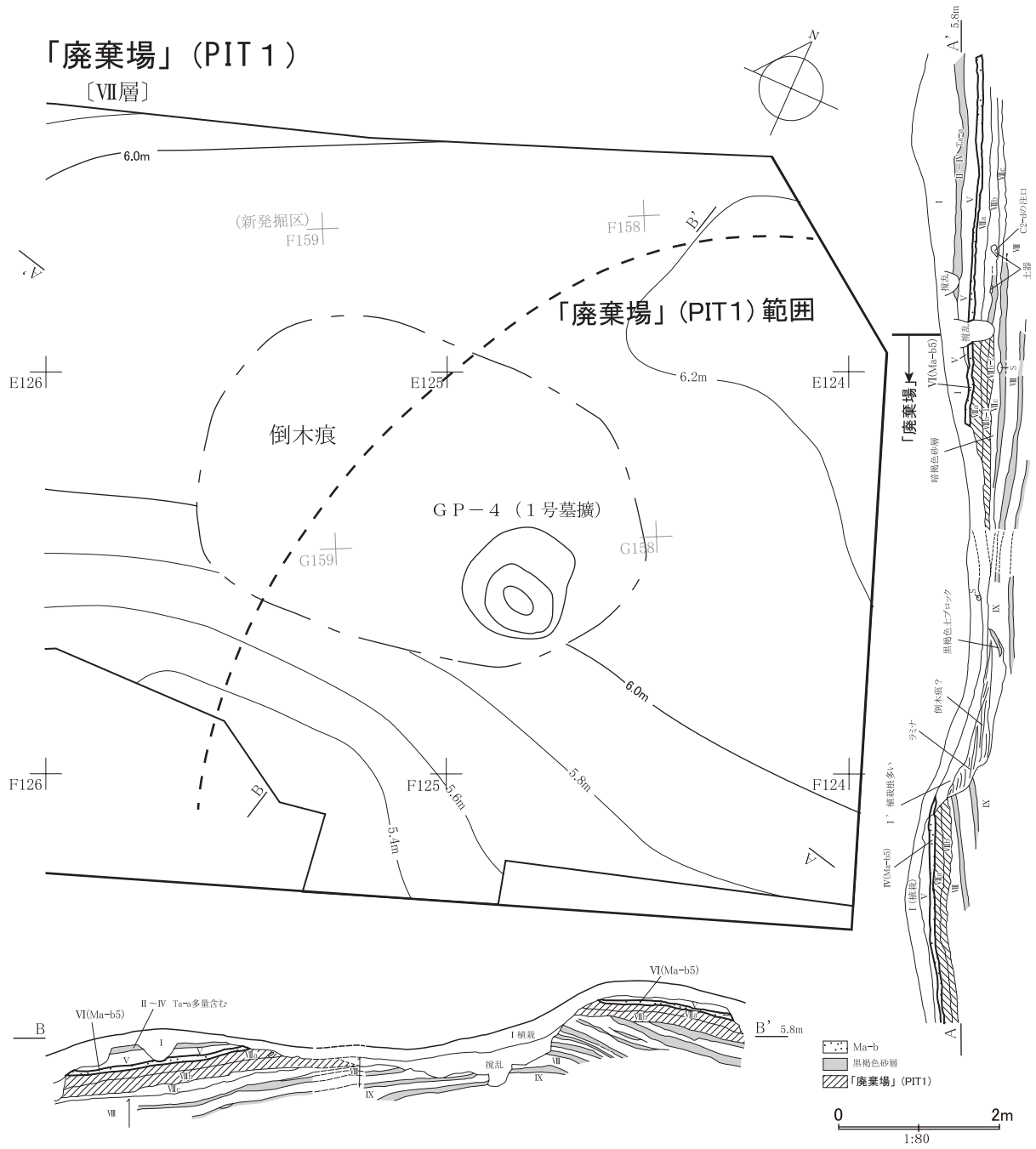
掲載遺物:**土器** (図VI-32)

1~4は宇津内II b式。1~3は同一個体と思われる。刻みの付された細い貼付文により、同心円文と連携する3本組の直線文様が配されている。4は上げ底で、底部付近の外面に縄端刺突列がめぐり、底面に刺突列が並列する。

5~21は後北C₂・D式。5~12は帯縄文に沿う微隆起線が施されているもの。5は帯縄文のかわりに条痕文が施文されている。7は口縁部がやや湾曲し、注口または片口付きと思われる。9は帯縄文最下部の微隆起線がみられない。10は大型深鉢で、突起下に貼瘤状の貼付文があり、楕円の帯縄文などが配されている。11・12は注口付き鉢。ともに、注口上部にも擬縄貼付文が施されている。11は帯縄文による変形した2+2単位の文様が配されている。12は大型で、胎土に砂粒を多量含む。13~21は帯縄文に沿う微隆起線がみられない。13は併行する3段の帯縄文で区画されている。14~16は帯縄文がやや不規則に施文されている。17は底部付近で、細かい撚りの縄文が短く多方向に施文されている。18は平底。19は注口付きの小型深鉢。帯縄文による文様がやや間隔があいており、鋭角の三角列点が目立つ。底部は張り出し、底面にも帯縄文が施文されている。20は片口付きの小型深鉢。全体的に歪んでいる。指頭押捺痕が多く残るなど成形がていねいに行われておらず、ケズリ調整痕が残る。底部は張り出し、底面は丸みがある。無文で、片口付近や対面する突起側の口縁部に擬縄貼付文が部分的にみられる。片口には楕円形の貫通孔のある把手状の隆帯があり、刻みが施されている。補修孔が4組あり、破損後も用いられたことがわかる。内面上部に炭化物が多量に付着している。21は浅鉢。平底で急に立ち上がる。口縁は突起部で大きく波状をなす。帯縄文により、外面から底面に連続する文様が施されている。 (阿部)

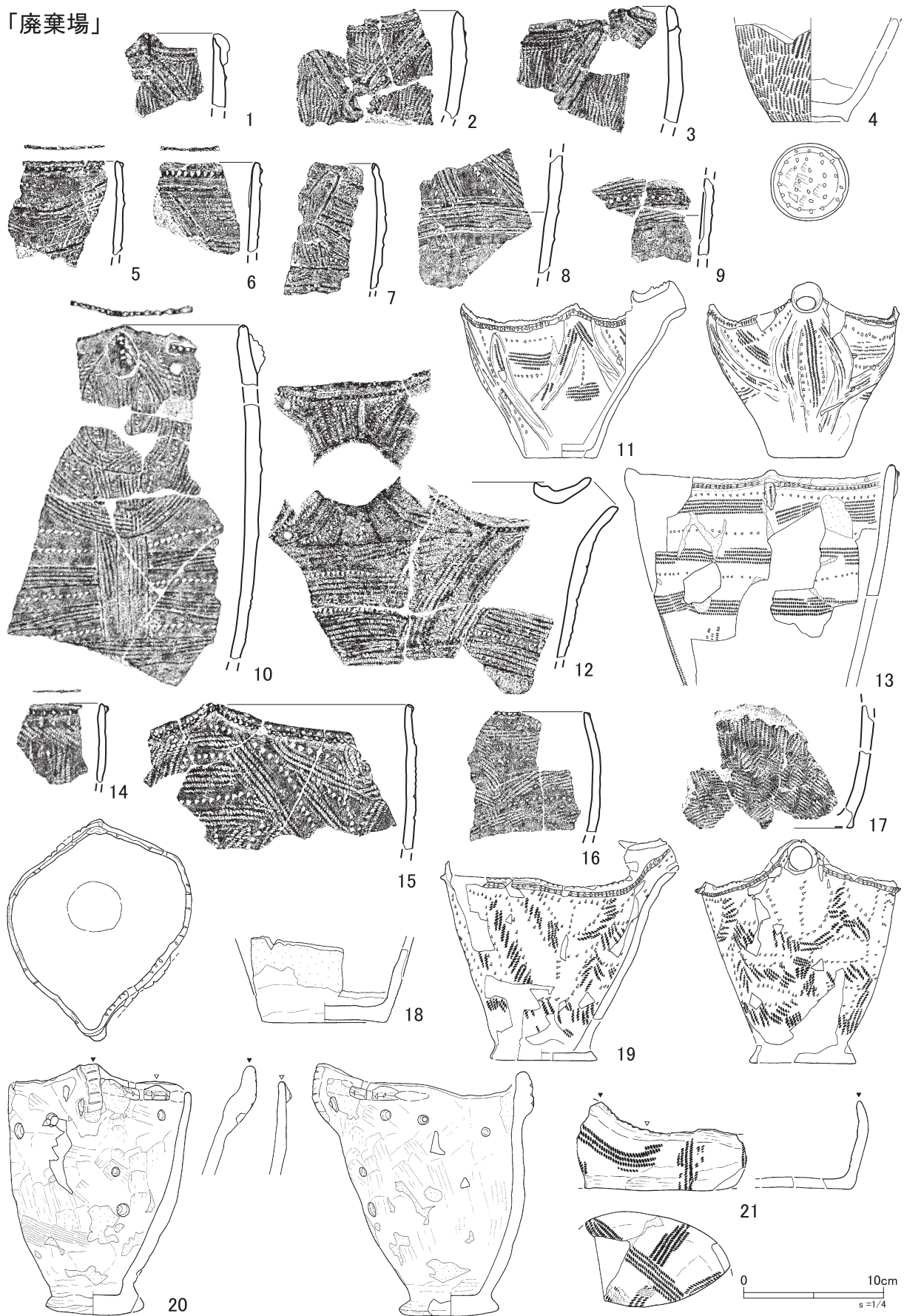
石器等 (図VI-33)

1~6は石鏃。1~4は平基で両側縁が湾曲・屈曲する形状である。5は有茎で下端部が収斂し、明瞭なカエシがある。6は下半部が欠損している。7・8はナイフ。7は両面全体に加工が施されている。下半部が欠損する。8はつまみ部があり両面に入念な加工が施されている。刃部の加工は微弱



図VI-31 「廃棄場」(PIT 1)

「廃棄場」



図VI-32 「廃棄場」出土の土器

「廃棄場」



図VI-33 「廃棄場」出土の石器・石製品

である。9～19はスクレイパー。9～12は側縁を中心に湾曲するように加工が施されている。13～16は下端部に円弧状の刃部が作出されている。17～19は下端部に直線状の刃部が作出されている。20は石錐。正面を中心に半両面加工が施され、裏面に素材面が残存する。21はRフレイク。裏面の右側縁に連続する加工が施されている。22・23はUフレイク。縁辺の一部に微細な加工が見られる。24～26はたたき石。24・25は楕円形、26は棒状の原石を利用し、下端部に敲打痕が見られる。27・28はすり石。正裏面とも丸みのある原石を利用し、前者の正面、後者の正裏面にすり痕が見られる。29はくぼみ石。安山岩製で正面中央にくぼみがみられる。30・31は砥石。いずれも扁平な砂岩製で、30には浅い溝状の擦痕が見られる。31にはすり痕により一部に段差が生じている。32は台石。扁平な原石の正裏面に平滑面が見られる。

33は環状石製品である。全面的な研磨により円形で薄手の扁平に成形され、中央に1.5cmほどの穿孔がある。穿孔の周縁は両面からの面取りが行われている。(直江)

b アイヌ文化期の遺構

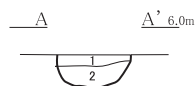
(1) 柱穴状小土坑 (図VI-34 表VI-1 図版32)

2基 (SP-11・12) を調査区中央東部のVII層で検出した。小土坑で、底面は丸みがある。さらに上位からの掘り込みであり、時期はアイヌ文化期とみられる。

SP-11 (PIT 3)



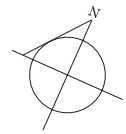
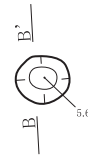
(新発掘区)
F165



- 1 7.5YR2/1 暗褐色砂 Ta-a斑状に含む30% しまりやや弱い 粘性あり
- 2 7.5YR2/1 暗褐色砂 Ta-a斑状に含む50% しまりやや弱い 粘性あり

E130

SP-12 (PIT 4)

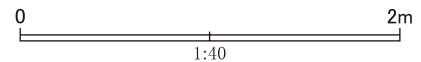


F164



- 1 7.5YR2/1 暗褐色砂 Ta-a斑状に含む30% しまりやや弱い 粘性あり

E129



図VI-34 SP-11・12 (PIT 3・4)

6 B地区の包含層出土の遺物

(1) 土器 (図VI-35・36 表VI-3・4 図版68)

縄文時代の土器 (1~32)

初期を除いた前半期～後半期の土器が731点出土した。宇津内Ⅱ a 式はⅨ層から、宇津内Ⅱ b 式は調査区南東部のⅦ～Ⅷ層から少数出土した。後北C₂・DはⅦ層を主体に、調査区の広範囲に分布する。

宇津内Ⅱ a 式 (1~3)

1・2は小型の突瘤文が連続する。3は縄線下の縄端刺突列がみられる。

後北C₂・D式 (4~31)

4~16は微隆起線による文様のあるもの。4は大型の深鉢。縦4単位横2段のやや乱れた線対称の文様構成をとり、弧線や楕円、斜位の帯縄文などが施されている。4・7は口縁部に擬縄貼付文が2列貼付されている。9~11は微隆起線上とその裾部に沿って赤彩が施されている。胎土が黒褐色だが表面がにぶい黄褐色であることから、化粧粘土が施されていたとみられる。12は弧線文主体、13は5段の平行する帯縄文をハの字状に縦断する文様が配されている。15・16は注口付きの鉢。15は双口注口で、希少な例である。16は把手付きの注口部。把手上に上方から穿たれた貫通孔がある。

17~31は帯縄文に沿う微隆起線がみられない。17~20は口縁部に擬縄貼付文が2列施されている。17は4段の平行する帯縄文を基本とし、突起下に縦位と弧線の帯縄文が配されている。20は帯縄文の代わりに条痕文が施文されている。24は口唇角に刻みが施されている。25~27は口縁部に擬縄貼付文がみられない。29・30は底部で、29は底部付近まで帯縄文がある。31は把手付きの注口部。把手上に縦長の貫通孔がある。

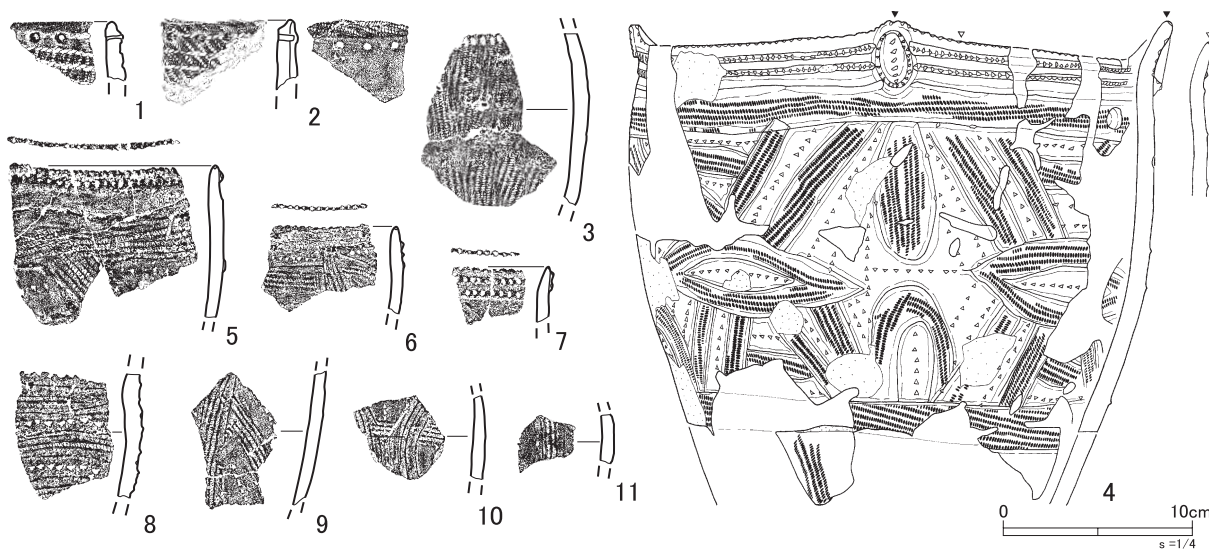
鈴谷式 (32)

32は調査区中央部のⅦ層で出土した数少ない鈴谷式で、交互異方向の3本組撚糸による縄線が2条施されている。

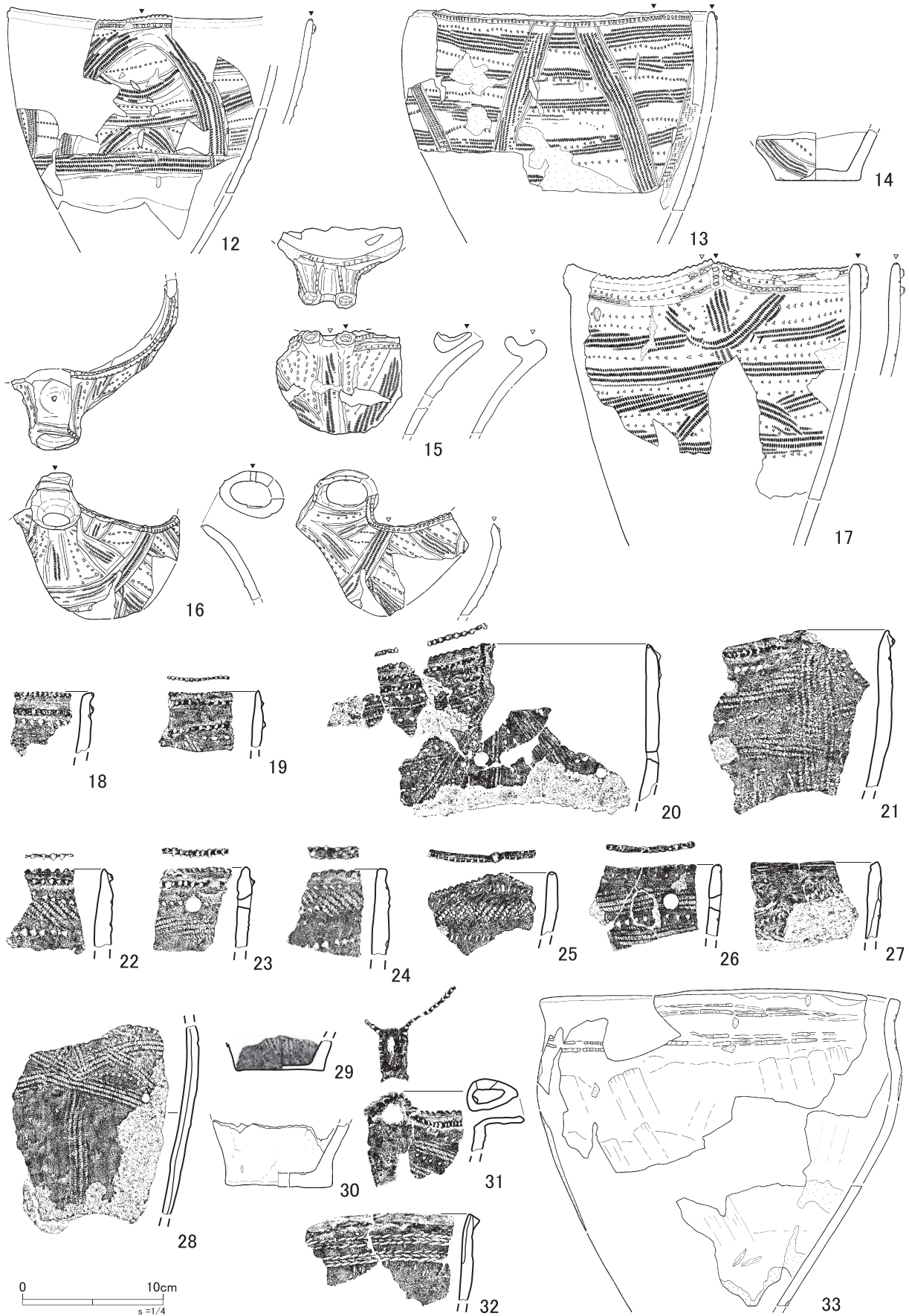
オホーツク文化期の土器 (33)

調査区南東部のⅦ層に少数分布する。33はやや大型の甕で、口縁部および頸部に2本組沈線に近い刻文が浅く施されている。

(阿部)



図VI-35 B地区包含層出土の土器 (1)



図VI-36 B地区包含層出土の土器(2)

(2) 石器等 (図VI-37~39 表VI-5~7 図版69)

層位によっておおよその時期に区分できるため、いくつかの層位ごとに二つに分けて報告する。

VIII・Ⅹ層出土の遺物 (1~21)

1~21は縄文時代前半期に属し、主に宇津内Ⅱ式期のものが主体と考えられる。

石鏃 (1)

1は凹基で側縁がやや湾曲している。両面全体に平坦加工が施されている。

ナイフ (2)

2は上半部に太い柄部があり、下端部が尖る形状である。器体中央部にやや明瞭なカエシが見られる。両面全体にやや粗い加工が施されている。

スクレイパー (3~7)

3は矩形の柄部があり、縁辺に急角度加工を施して下端部がゆるやかに尖る形状である。ナイフを再加工して大きさが縮小したものと思われる。4~6は縁辺全体に加工が施され、下端部に円弧状の刃部が作出されている。7は下端部に急角度の加工が施され、直線状の刃部が作出されている。

石錐 (8)

8は両面加工により細く突出する刃部が作出されている。

Rフレイク (9)

9は両側縁に細かな加工が施されている。

石核 (10)

10は主に正面と右側面との交互剥離が行われている。

すり石 (11~15)

12・13・14は正面、11・15は正裏面にすり面が見られる。

砥石 (16~18)

16・17は軽石製で、前者には一部に溝状の擦痕、後者には全面的に擦痕が見られ丸い形状となっている。18は扁平な砂岩製で、擦痕により一部に段差が生じている。

台石 (19~21)

19~21はいずれも扁平な原石が利用され、正面に平滑面が見られる。21は裏面にも平滑面がある。

VII・VII a・VII b層出土の遺物 (22~71)

22~71は縄文時代後半期に属し、主に後北C₂・D式期のものが主体と考えられる。

石鏃 (22~28)

22~25が平基のもの。側縁は22・23が屈曲、24・25がほぼ直線的な形状である。素材面は23・25の裏面に残存している。26は有茎で、下端部が収斂する形状である。27・28は下半部が欠損している。

ナイフ (29~36)

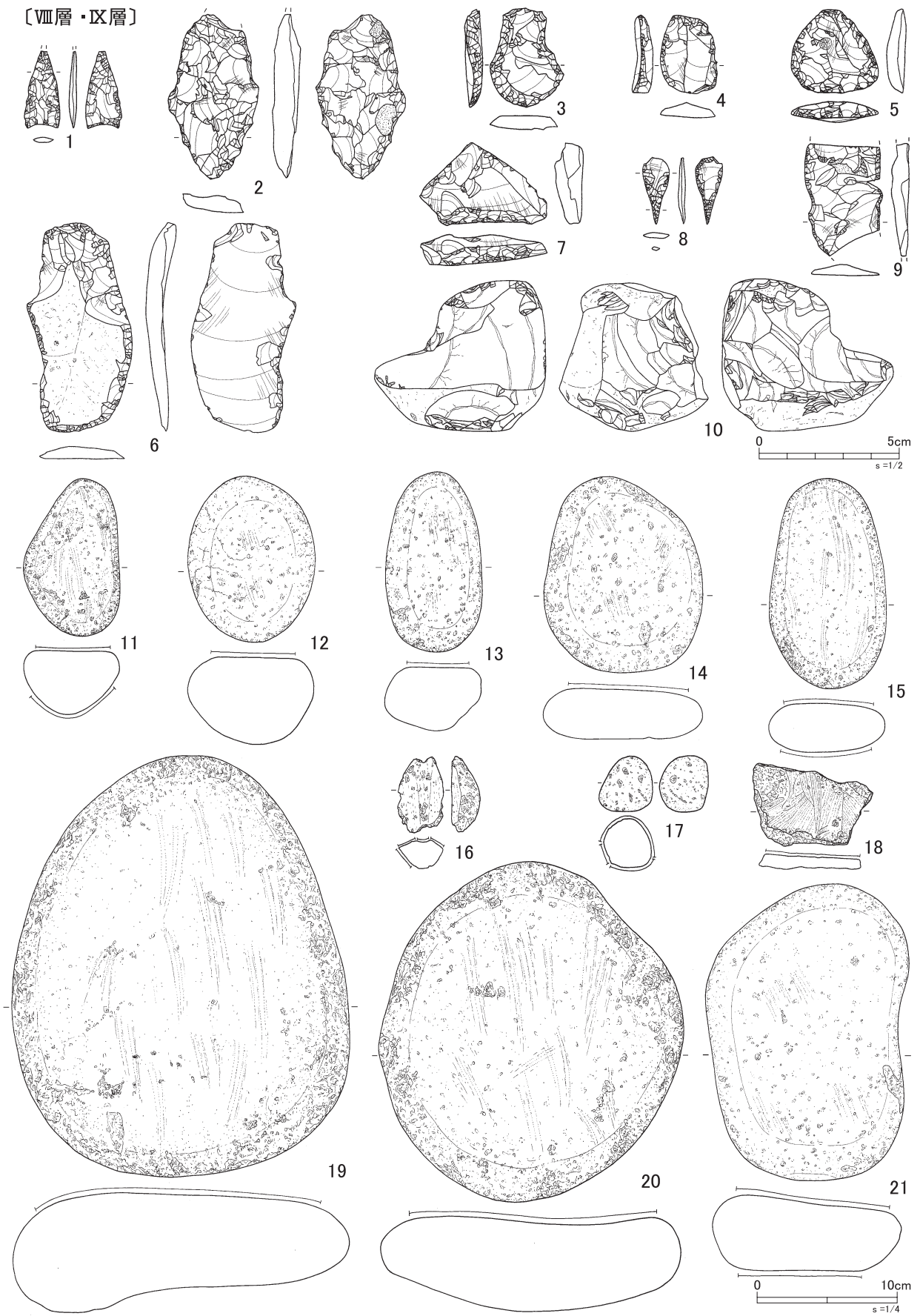
29~33は下端が尖る形状のもの。29・30は完形でいずれも縁辺全体に半両面加工が施されている。31~33は上半部が欠損している。31は片面加工、32・33は両面加工により非常に細長い形状に成形されている。34~36は下半部が欠損している。いずれもやや粗い両面加工が全面的に施されている。

スクレイパー (37~49)

37~47は端部に円弧状の刃部が作出されている。38・40・41・43~47の加工は縁辺全体に及んでいる。48・49は側縁に湾曲する刃部が作出されている。いずれも正面に原石面が残存している。

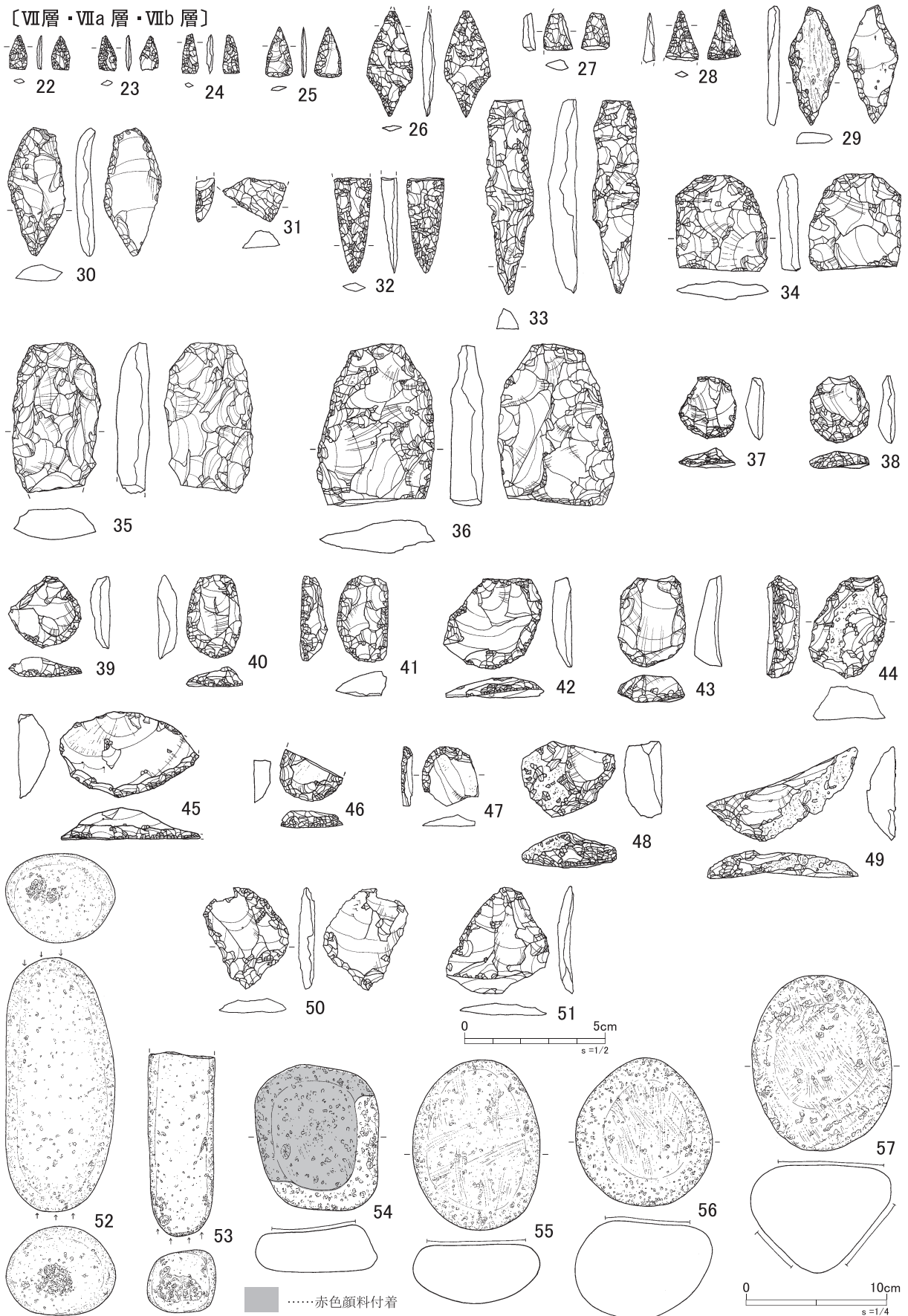
Rフレイク (50・51)

50は正裏面にやや不規則な加工が連続的に施され、51は両側縁に細かな加工が施されている。



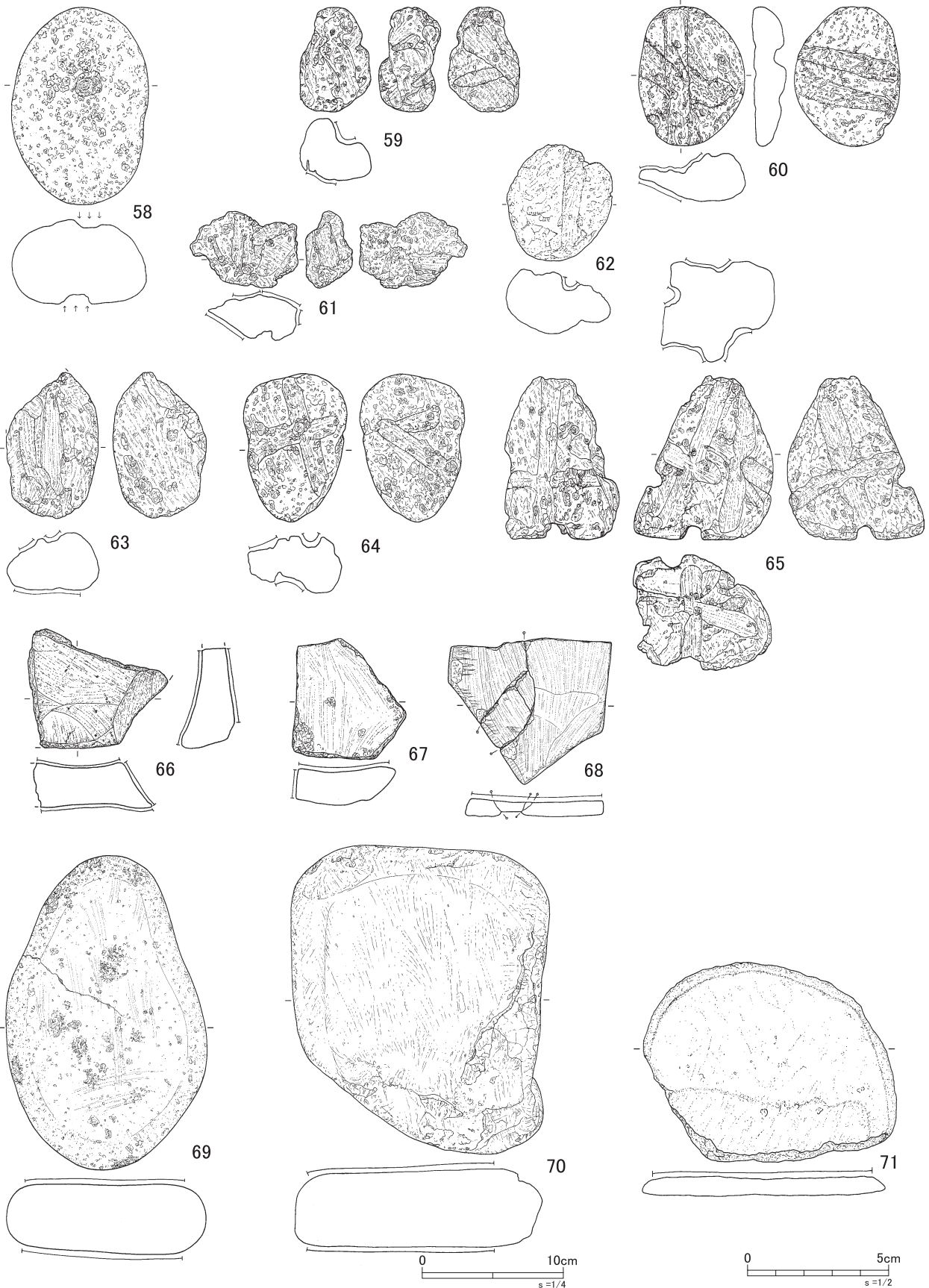
図VI-37 B地区包含層出土の石器(1)

〔Ⅶ層・Ⅶa層・Ⅶb層〕



図Ⅵ-38 B地区包含層出土の石器(2)

[VII層・VIIa層・VIIb層]



図VI-39 B地区包含層出土の石器(3)

たたき石 (52・53)

52・53はいずれも棒状の原石が利用され、52は両端に敲打痕が見られる。53の上半部は欠損する。

すり石 (54~57)

54・55は扁平な原石、56・57は厚みのある原石が利用されている。57のみ正裏面にすり面がある。

くぼみ石 (58)

58はやや厚みのある扁平な原石が利用され、正面中央部と裏面にくぼみが見られる。

砥石 (59~68)

59~65は軽石製で、器面に溝状の擦痕が残る有溝砥石。正面に一条擦痕がある59・62・63、他の面にわたって複数条の擦痕がある61、交差する擦痕がある60・64・65が見られる。特に65は交差する擦痕が5か所存在する。66~68は扁平な砂岩製で、66は正面と右側面に擦痕が見られる。

台石 (69・70)

69・70はいずれも扁平な原石が利用され、正裏面に平滑面が見られる。

板状加工礫 (71)

71は裏面に分割面があり、正面は原石面に覆われている。正面全体に平滑面が見られる。(直江)

表VI-1 2011年調査遺構一覧

地区	種別	新遺構名	旧遺構名	掲載		検出位置			平面形	規模(m)					時期	備考
				挿図	写真図版	新発掘区	旧発掘区	層位		検出面		底面		深さ		
										長径	短径	長径	短径			
A地区	柱穴状小土坑	P-8	PIT14	VI-5・6	29	X.Y201	l152		不整円形	1.19	0.95	0.86	0.90	0.12	縄文時代後期~晩期	
		SP-1	PIT11	VI-5・6	29	Z200	l152	VIIc	不整円形	0.19	0.18	0.09	0.09	0.30	縄文時代後期~晩期	
		SP-2	PIT12			Y201	m151	VIIc	不整円形	0.22	0.20	0.11	0.10	0.12	縄文時代後期~晩期	
		SP-3	PIT13			Y201	l152	VIIc	不整円形	0.20	0.19	—	—	0.12	縄文時代後期~晩期	
		SP-4	PIT15			Y201	l152	VIIc	不整円形	0.22	0.21	0.04	0.04	0.23	縄文時代後期~晩期	
		SP-5	PIT16			Y201	l152	VIIc	楕円形	0.19	0.13	0.12	0.12	0.09	縄文時代後期~晩期	
		SP-6	PIT17			Z201	l152	VIIc	円形	0.17	0.16	0.10	0.07	0.11	縄文時代後期~晩期	
		SP-7	PIT18			Z201	l152	VIIc	不整円形	0.18	0.16	0.07	0.06	0.30	縄文時代後期~晩期	
		SP-8	PIT20			Y202	l152	VIIc	不整円形	0.20	0.19	0.14	0.13	0.21	縄文時代後期~晩期	
		SP-9	PIT21			Z201	l152	VIIc	不整円形	0.25	0.22	0.10	0.10	0.48	縄文時代後期~晩期	
		SP-10	PIT23			X202	k152	VIIc	不整円形	0.21	0.21	0.10	0.09	0.35	縄文時代後期~晩期	
	FC-1	泥岩集中	VI-6	29	b201	n152	VIIc	不定形	(0.96)	(0.93)	—	—	—	縄文時代後期~晩期		
B地区	墓土坑	GP-4	1号墓墳	VI-14・15	口絵3、30	G158	E124	VII	不整円形	1.28	1.26	0.89	0.72	0.56	縄文時代後期	後北C2・D
		P-9	PIT13	VI-16	31	E173	D136	IX	不整楕円形	1.07	0.70	0.67	0.44	0.10	縄文時代前期	浅い
		P-10	PIT2			E169	D133	VII	不整楕円形	1.75	1.36	0.84	0.76	0.40	縄文時代後期	後北C2・D
		P-11	PIT5			E166	D131	VII	不整円形	1.16	0.36	1.14	0.40	0.28	縄文時代後期	
		P-12	PIT25			F.G164	E129	IX	不整円形	1.39	1.15	0.50	0.73	0.40	縄文時代前期	宇津内II
		P-13	PIT8	VI-17		G.H157.158	F124	VII	不整円形	0.88	(0.80)	0.44	0.39	0.32	縄文時代後期	
		P-30	PIT21		32	F163	D128	IX	不整楕円形	0.92	0.63	0.73	0.52	—	縄文時代前期	「土坑」
		PS-23	PIT7	VI-18・19	31	D.E176.177	C.D139.140	IX	不整楕円形	2.04	1.80	1.92	1.61	0.20	縄文時代前期	焼砂、木炭
		PS-22	PIT17	VI-20		F.G164	E129.130	IX	不整円形	(2.40)	(2.12)	(1.41)	(1.32)	(0.20)	縄文時代前期	
		PS-24	PIT15			F163.164	F129	IX	不整円形	1.91	1.63	1.32	1.30	0.17	縄文時代前期	木炭、宇津内IIa
集石土坑	SP-11	PIT3	VI-34	32	E164	D129	VII(V)	円形	0.40	0.37	0.24	0.18	0.18	アイヌ文化期		
	SP-12	PIT4			E163.164	D129	VII(V)	楕円形	0.27	0.24	0.16	0.12	0.13	アイヌ文化期		
	SP-13	PIT10	VI-21		G.H157	F124	VII	不整円形	0.40	0.32	0.25	0.18	0.18	縄文時代後期		
石組炬	SF-6	PIT16	VI-22	5・	G164	E129	IX	不整円形?	1.30	0.99	—	—	0.08	縄文時代前期	焼砂、魚骨	
	SF-7	PIT12		口絵3、5	G.H158	F125	VII	限丸長方形	1.36	0.80	—	—	0.16	縄文時代前期	宇津内IIb式土器	
焼土	F-6	PIT23	VI-23		F170	E134	IX	不整円形	1.04	1.04	—	—	—	縄文時代前期	「焼砂跡」	
	F-7	PIT22		6	F164	E129	IX	楕円形	1.74	1.10	1.52	0.89	0.07	縄文時代前期	「土坑」、焼砂、魚骨	
礫集中	S-2	PIT9	VI-24		D175	C.D138	IX	不定形	3.40	2.40	—	—	—	縄文時代前期		
	S-3	集石	VI-24・26		D.E173.174	E136・137	IX	不定形	5.87	4.00	—	—	—	縄文時代前期		
	S-4	PIT20	VI-25・26		F166.167	E131	IX	不定形	(2.42)	(2.05)	—	—	(0.40)	縄文時代前期	焼砂、木炭、ベニガラ	
	S-5	PIT14		32	G163.164	E129	IX	不定形	(1.53)	(0.83)	—	—	—	縄文時代前期	浅い土坑?	
	S-6	集石遺構1	VI-27		F164	D129	VII	不整楕円形	1.06	0.72	—	—	—	縄文時代後期		
	S-7	PIT6			F161	E127	VII	不整楕円形	1.76	1.40	—	—	—	縄文時代後期		
	FC	FC-2	石器集中	VI-28		E170	D134	VII	不定形	0.69	0.57	—	—	—	縄文時代後期	
	FC-3	石器集中			E168	D132	VII	不整円形	0.55	0.48	—	—	—	縄文時代後期		
	FC-17	石器集中1			F157	D.E124	VII	不定形	2.01	1.26	—	—	—	縄文時代後期		
シガラ	埋設土器1	埋設土器遺構	VI-28		D172	D136	IX	不整円形	0.36	0.40	0.32	0.27	0.17	縄文時代前期		
	R-2	PIT11	VI-29	8	E172	D136	IXb	不定形	(0.58)	(0.21)	—	—	0.12	縄文時代前期		
	R-3	PIT24			G164	E129	IXd	不定形	(1.07)	(0.72)	—	—	—	縄文時代前期		
	R-4	PIT18			F162.163	D.E128	IX	不定形	(2.12)	(1.00)	—	—	—	縄文時代前期		
	R-5	PIT26	VI-30		D.E172.173	D136	IX	不定形	(3.64)	(0.96)	—	—	—	縄文時代前期		
	「廃棄場」	PIT1	VI-31~33	30	F.G158.159	D.E124.125	VII	不明		—	—	—	—	縄文時代後期		

表Ⅵ-3 2011年調査掲載土器一覽(1)

地区	挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	新遺構名	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数 破片 計	分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号	
A地区	図VI-7	1	62-4		k149	VIIc2	68・70	3 3	IIIb	深鉢	口	口縁部肥厚帯上押引文		11-201	
	図VI-7	2	62-4		m152	VIIc	53	1 1	IIIb	深鉢	口	口縁部肥厚帯上押引文、円形刺突、RL縄文		11-202	
	図VI-7	3	62-4		m152	VIIc	34	1 1	IIIb	深鉢	胴	付加条縄文?		11-203	
	図VI-7	4	62-4		p153	VIIc	1	1 1	IVa	深鉢	胴	LR縄文(外・内)		11-205	
	図VI-7	5	62-4		n152	VIIc	26	1 1	IVa	深鉢	胴	結束羽状縄文		11-204	
	図VI-7	6	62-4		k150	VIIb	83	1 1	Vc	深鉢	口	RL縄文、口唇刻み		11-208	
	図VI-7	7	62-4		l151	VIIb	57・58	6 6	Vc	深鉢	口	LR縄文、口唇刻み		11-207	
	図VI-7	8	62-4		k151	VIIb2	6	1 1	Vc	鉢	口	縄線、RL縄文(外・内・口唇)		11-206	
	図VI-7	9	62-4		k151	VIIc	11	3 4	Vc	鉢	胴~底	RL縄文		09-103	
B地区	図VI-17	1	64-1	P-13 (廃棄場)	PIT8/F124 PIT1/F124	覆土1 VII	325・327 201	2 3 1	Vlc	深鉢	口~胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		11-102②	
	図VI-17	7	64-1	P-30 P-30 R-4	PIT21/D128 PIT21/D128 PIT18/D128		28 30 24	20 1 1 1 4	VIb	深鉢	口~底	4単位突起、擬縄貼付文(H状文、山形文)、縄線、縄端刺突、縄文/口径28.2cm、底径(9.2)cm、器高37.2cm	約80%	11-12	
	図VI-17	8	64-1	P-30	PIT21/D128	覆土	27	1 1	Vlc	深鉢	胴	条痕文、三角列点		11-220	
	図VI-22	1	65-1	SF-6	PIT16/E129	覆土	35・113	2 2	VIb1	深鉢	口	突瘤、縄線、縄端圧痕、縄文		11-215	
	図VI-26	4	65-1	S-4	PIT20/E131	覆土	71	1 1	VIb1	深鉢	口	突瘤、RL縄文(外・口唇)		11-218	
	図VI-26	5	65-1	S-4	PIT20/E131	覆土	90	1 1	VIb1	深鉢	口	突瘤、縄線、縄端刺突、縄文		11-219	
	図VI-27	3	66-1	S-7	PIT6/E127	覆土	48・84・85・133・137	7 12	VIIc	深鉢	口~胴	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		11-101①	
	図VI-27	4	66-1	S-7	PIT6/E127	覆土1	51・52・60・83・88	5	2	VIIc	深鉢	口~胴	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文、補修孔		11-101②
	図VI-27	5	66-1	S-7	PIT6/E127	覆土1	148	2 2	VIIc	深鉢	底	帯縄文/底径9.7cm		11-101③	
	図VI-27	6	66-1	S-7	PIT6	覆土	134・135	2 6	Vlc	深鉢	胴	条痕文/器高(7.6)cm		11-55	
	図VI-28	1	66-1	埋設土器1	D136	IX	160・200・223	37 37	VIb1	深鉢	口~胴	4単位突起、口唇刻み、突瘤、擬縄貼付文(H状文・山形文あり)、縄線、縄端刺突、縄文/口径(27.0)cm、器高(27.4)cm		11-13	
	図VI-29	1	66-1	R-4	PIT18/D128	覆土	20~22	3 3	VIb2	深鉢	口	擬縄貼付文、縄線、縄端刺突、縄文		11-217	
	図VI-32	1	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	80・126	2 2	VIb2	深鉢	口~胴	突起、擬縄貼付文、綾杉状縄線、縄文		11-108③	
	図VI-32	2	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	21・129・130	4 4	VIb2	深鉢	口~胴	擬縄貼付文(円弧文あり)、綾杉状縄線、縄端刺突、縄文		11-108②	
	図VI-32	3	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	70・87・127・149	4 4	VIb2	深鉢	口~胴	擬縄貼付文、綾杉状縄線、縄端刺突、縄文		11-108①	
	図VI-32	4	67-1	(廃棄場)	PIT1/F124	VII	210	8 8	VIb	深鉢	胴~底	縄文、底部付近縄端刺突、上げ底、底面刺突/底径5.4cm、器高(7.3)cm		11-54	
	図VI-32	5	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	164	1 2	Vlc	深鉢	口	擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、条痕文		11-210	
	図VI-32	6	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	219	1							
	図VI-32	6	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	85	1 1	Vlc	深鉢	口	擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文		11-213	
	図VI-32	7	67-1	(廃棄場)	PIT1/F125	VII	49・64	2 2	Vlc	深鉢	口	微隆起線、三角列点、帯縄文		11-209	
	図VI-32	8	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	477	2 2	Vlc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		11-214	
	図VI-32	9	67-1	(廃棄場)	PIT1/D124	VII	1	3 3	Vlc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		11-211	
	図VI-32	10	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	175・371	4 8	Vlc	深鉢	口~胴	口唇刻み、突起下貼付文、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文		11-102①	
	図VI-32	11	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	24・49	4							
	図VI-32	11	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	197・240・387・390・406・423・424・439	12	19	Vlc	注口	口~底	4単位突起、口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文/口径13.8cm、底径5.1cm、器高12.6cm	約95%	11-9
	図VI-32	12	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	185・186	7							
	図VI-32	12	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	455	4 5	Vlc	注口	口~胴	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文		11-104	
図VI-32	13	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	覆土1	503	1								
図VI-32	13	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	10・13・67・101・106・108・124・128・169・222・249・269・不明	16	23	Vlc	深鉢	口~胴	推定4単位突起、口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文(横位・縦位)/口径(19.6)cm、器高(15.7)cm		11-4	
図VI-32	13	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	207・378・447	5								
図VI-32	14	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	表土	1	2								
図VI-32	14	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	258	1 1	Vlc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		11-212		
図VI-32	15	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	83・256・286	4 4	Vlc	深鉢	口~胴	擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		11-107		
図VI-32	16	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	38	3 3	Vlc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		11-216		
図VI-32	17	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	77	2 3	Vlc	深鉢	胴	縄文		11-103		
図VI-32	17	67-1	(廃棄場)	PIT1/E126	VII	75	1								
図VI-32	18	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	212・224	3 4	Vlc	深鉢	底	無文/底径8.9cm、器高(6.1)cm		11-51		
図VI-32	18	67-1	(廃棄場)	GP-4	1号墓	覆土	500	1							
図VI-32	19	67-1	(廃棄場)	PIT1/E125	VII	245	131		Vlc	注口	口~底	注口・突起、口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文、底面縄文/口径16.6cm、底径7.6cm、器高15.9cm		11-6	
図VI-32	20	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	108	40 40	Vlc	片口深鉢	口~底	片口・突起、片口部隆帯上刻み、貫通孔、擬縄貼付文、補修孔4組/口径(13.1)cm、底径(7.0)cm、器高18.9cm	約95%	11-2		
図VI-32	21	67-1	(廃棄場)	PIT1/E124	VII	224・290・349・351	4 4	Vlc	浅鉢	口~底	口唇刻み、帯縄文(外・底)/口径(18.2)cm、底径(18.0)cm、器高(5.2)cm		11-11		

表VI-4 2011年調査掲載土器一覽(2)

地区	挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	新遺構名	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数 破片 計	分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号	
B地区	図VI-35	1	68-1		D136	IX	248	1 1	VIb1	深鉢	口	突瘤、縄線、縄文		11-242	
	図VI-35	2	68-1		D136	IX	177	1 1	VIb1	深鉢	口	突瘤、縄線、縄文		11-241	
	図VI-35	3	68-1		PIT26/E131	覆土	9・52	2 2	VIb	深鉢	胴	縄端刺突、縄文		11-221	
	図VI-35	4	68-1		D135	VII	11	75 75	VIc	深鉢	口～胴	4単位突起、口唇刻み、擬縄貼付文(円弧文あり)、微隆起線、三角列点、帯縄文/口径(28.6)cm、器高(25.6)cm		11-8	
	図VI-35	5	68-1		F124	VII	6	7 7	VIc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文		11-237	
	図VI-35	6	68-1		E130	IX	12	1 1	VIc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文		11-240	
	図VI-35	7	68-1		E126	VII	30・46	2 2	VIc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、帯縄文		11-234	
	図VI-35	8	68-1		E124	VII	393	3 3	VIc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		11-244	
	図VI-35	9	68-1		E124	表土	1	1 1	VIc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文	赤彩	11-225	
	図VI-35	10	68-1		F124	表土	1	1 1	VIc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文	赤彩	11-226	
	図VI-35	11	68-1		F124	VIII	1・166	2 2	VIc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文	赤彩	11-224	
	図VI-36	12	68-1		D136	VIIa	9・10・11・29	10 36	VIc	注口	口～胴	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文/器高(16.9)cm		11-7	
					D136	VIIb	40・44・50・56・60・63・65・67～70・89・90・不明	26							
	図VI-36	13	68-1		D136	VIIa	13・17・21	4 27	VIc	深鉢	口～胴	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文(横位・山形)/口径(21.7)cm、器高(16.5)cm		11-3	
					D136	VIIb	18・30・38・60・61・64・78・93・95・116～119	19							
					D135	VII	200	4							
	図VI-36	14	68-1		D135	VII	62・97	6 6	VIc	深鉢	底	微隆起線、三角列点、帯縄文/底径5.9cm、器高(3.6)cm		11-53	
	図VI-36	15	68-1		E134	表土	1	6 6	VIc	注口	口	双口注口、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文		11-105	
	図VI-36	16	68-1		D132	VII	46・50・51	4 7	VIc	注口	口	把手付き注口、口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文/器高(10.4)cm		11-10	
					D132	表土	1	1							
					D134	VII	47・62	2							
	図VI-36	17	68-1		D129	VII	49・105・149・151・183	5 15	VIc	深鉢	口～胴	突起、口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文/口径(21.7)cm、器高(20.8)cm		11-5	
					D130	VII	22・37・50	10							
	図VI-36	18	68-1		D136	VIIb	36	1 1	VIc	深鉢	口	擬縄貼付文、三角列点		11-233	
	図VI-36	19	68-1		D129	VII	109	1 1	VIc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、朱痕文		11-227	
	図VI-36	20	68-1		D134	VII	39	12 12	IVc	深鉢	口～胴	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、朱痕文、補修孔		11-106	
	図VI-36	21	68-1		D129	VII	234	1 1	VIc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		11-238	
	図VI-36	22	68-1		D134	VII	50	1 1	VIc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		11-228	
	図VI-36	23	68-1		D131	VII	47	1 1	VIc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文、補修孔		11-229	
	図VI-36	24	68-1		C135	VII	21	1 1	VIc	深鉢	口	擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		11-230	
	図VI-36	25	68-1		E126	VII	48	1 1	VIc	深鉢	口	口唇刻み、三角列点、帯縄文		11-231	
	図VI-36	26	68-1		D135	VIIa	163	1 1	VIc	深鉢	口	三角列点、帯縄文、補修孔		11-232	
図VI-36	27	68-1		E134	表土	1	3 3	VIc	深鉢	口	三角列点、帯縄文、補修孔		11-243		
図VI-36	28	68-1		D135	VII	29	1 1	VIc	深鉢	胴	帯縄文、補修孔		11-239		
図VI-36	29	68-1		D135	表土	1	1 1	VIc	小型深鉢	底	帯縄文		11-236		
図VI-36	30	68-1		D130	VII	30・59	3 4	VIc	深鉢	底	無文/底径7.5cm、器高(4.8)cm		11-52		
				E126	VII	21	1								
図VI-36	31	68-1		E126	VII	54・55	2 2	VIc	注口	注口	把手付き注口、貫通孔、口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、帯縄文		11-223		
図VI-36	32	68-1		D130	VII	11・60	2 2	VIc	深鉢	口	綾杉状縄線		11-222		
図VI-36	33	68-1		(PIT1)/E124	VII	35・39・103・212・253・312・347・353・357・378・430・444・463	29 39	VIIIb	甕	口～胴	櫛歯による刻文/口径(25.6)cm、器高(22.5)cm		11-1		
				(PIT1)/E125	VII	184	1								
				GP-4	1号墓	覆土	501	1							
				GP-4	1号墓	覆土下	530	1							
				E123			38	2							
				E126	VII	19・85・94	3								
				不明	—	—	—	2							

表Ⅵ-5 2011年調査掲載石器等一覧(1)

地区	挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	実測番号
A地区	図VI-6	1	67-2	SP-7	PIT18/1152	覆土	261	Uフレイク	黒曜石	2.4	1.6	0.4	1.3		ア
	図VI-6	2	67-3	SP-9	PIT21/m152	覆土	125	Rフレイク	黒曜石	5.8	3.9	1.4	12.6		ア
	図VI-6	3	67-3	SP-9	PIT21/m152	覆土	126	フレイク	黒曜石	4.8	6.4	1.3	29.2		イ
	図VI-8	1	63-1		k151	VIIb2	70	石鏃	黒曜石	1.5	1.0	0.3	0.2		1
	図VI-8	2	63-1		1152	VIIc	27	石鏃	黒曜石	2.5	1.1	0.3	0.5		2
	図VI-8	3	63-1		k152	VIIc	26	石鏃	黒曜石	2.9	1.2	0.5	1.1		3
	図VI-8	4	63-1		1152	VIIc	143	石鏃	黒曜石	4.2	2.2	0.6	2.8		4
	図VI-8	5	63-1		k151	VIIb2	69	石鏃	黒曜石	(1.7)	(1.4)	0.4	(0.7)		5
	図VI-8	6	63-1		表採	表採		石鏃	黒曜石	(1.5)	0.9	0.4	(0.4)		6
	図VI-8	7	63-1		EX-1	VIIc	159	石鏃	黒曜石	(2.0)	1.2	0.3	(0.7)		7
	図VI-8	8	63-1		m153	VIIc	36	石槍	黒曜石	5.7	2.8	1.2	12.6		8
	図VI-8	9	63-1		1153	VIIc	37	ナイフ	黒曜石	8.6	2.5	1.1	23.8		9
	図VI-8	10	63-1		EX-1	VIIc	40	ナイフ	黒曜石	9.2	3.1	1.0	25.9		10
	図VI-8	11	63-1		n153	VIIc	75	ナイフ	黒曜石	(1.7)	1.7	0.6	(1.4)		11
	図VI-8	12	63-1		o153	VIIc	82	ナイフ	黒曜石	(1.7)	2.5	0.8	(3.0)		12
	図VI-8	13	63-1		k150	VIIc	38	ナイフ	黒曜石	(3.0)	2.3	0.9	(6.2)		13
	図VI-8	14	63-1		n152	VIIc	133	ナイフ	黒曜石	(2.5)	3.2	1.1	(9.7)		14
	図VI-8	15	63-1		o153	表土		ナイフ	黒曜石	(4.1)	3.7	1.0	(16.5)		15
	図VI-8	16	63-1		EX-1	VIIc	38	ナイフ	黒曜石	(6.6)	4.2	1.0	(25.2)		16
	図VI-8	17	63-1		n152	VIIc	60	ナイフ	黒曜石	(5.5)	2.8	1.2	(18.3)		17
	図VI-8	18	63-1		o153	VIIc	70	ナイフ	黒曜石	(2.7)	2.5	0.6	(4.8)		18
	図VI-8	19	63-1		k151	VIIb2	16	ナイフ	黒曜石	(3.2)	(3.6)	1.1	11.8		19
	図VI-8	20	63-1		1152	VIIc	43	ナイフ	黒曜石	(5.0)	4.5	1.1	(26.6)		20
	図VI-8	21	63-1		EX-1	VIIc	243	ナイフ	黒曜石	(11.0)	3.0	1.3	(36.5)		21
	図VI-8	22	63-1		1152	VIIc	63	ナイフ	黒曜石	(2.5)	1.7	0.6	(2.4)		22
	図VI-8	23	63-1		k152	VIIc2	176	ナイフ	黒曜石	4.7	2.7	0.5	3.4		23
	図VI-8	24	63-1		1152	VIIc	234	ナイフ	メノウ	4.8	3.4	1.0	15.3		24
	図VI-8	25	63-1		1151	VIIb	6	ナイフ	安山岩	6.5	3.5	1.3	29.2		25
	図VI-8	26	63-1		1152	VIIc	217	ナイフ	黒曜石	4.4	2.4	1.1	9.3		26
	図VI-9	27	63-1		m153	VIIc	62	ナイフ	黒曜石	(5.0)	2.2	0.6	(4.7)		27
	図VI-9	28	63-1		EX-1	VIIc	146	ナイフ	メノウ	(4.5)	4.0	1.2	(21.8)		28
	図VI-9	29	63-1		n152	VIIc	134	スクレイパー	黒曜石	3.1	2.0	0.4	1.5		29
	図VI-9	30	63-1		1151	VIIc	65	スクレイパー	黒曜石	2.4	2.3	1.0	4.5		30
	図VI-9	31	63-1		1151	VIIc	80	スクレイパー	黒曜石	3.1	3.3	1.7	14.4		31
	図VI-9	32	63-1		m153	表土		スクレイパー	黒曜石	3.8	3.6	0.8	6.3		32
	図VI-9	33	63-1		m153	VIIc	51	スクレイパー	黒曜石	(2.8)	3.9	1.1	(8.7)		33
	図VI-9	34	63-1		m152	VIIc	20	スクレイパー	黒曜石	(4.8)	(3.4)	1.1	(16.1)		34
	図VI-9	35	63-1		EX-1	VIIc	147	Rフレイク	黒曜石	3.3	2.5	0.5	2.2		35
	図VI-9	36	63-1		m151	VIIc	139	Rフレイク	黒曜石	4.0	2.8	0.8	6.1		36
	図VI-9	37	63-1		o153	表土		Rフレイク	黒曜石	5.1	2.9	0.7	5.7		37
	図VI-9	38	63-1		m151	VIIc	159	Rフレイク	黒曜石	(4.0)	(1.5)	0.6	(2.1)		38
	図VI-9	39	63-1		k152	VIIc	104	Rフレイク	黒曜石	4.8	1.7	0.8	3.3		39
	図VI-9	40	63-1		m151	VIIb	7	Rフレイク	安山岩	(6.2)	4.0	1.7	(45.1)		40
	図VI-9	41	63-1		1151	VIIc	16	フレイク	黒曜石	1.9	4.1	0.7	2.5		41
	図VI-9	42	63-1		k152	VIIc2	122	フレイク	黒曜石	1.0	4.6	1.1	3.1		42
	図VI-9	43	63-1		1151	VIIc	88	石核	硬質頁岩	6.1	7.9	6.3	396.2		43
	図VI-9	44	63-1		1151	VIIc	98	石斧	緑色片岩	(5.1)	4.3	1.6	(45.7)		44
	図VI-9	45	63-1		m152	VIIc	116	たたき石	安山岩	13.0	6.2	5.0	562.1		45
	図VI-9	46	63-1		o154	表土		すり石	安山岩	13.6	4.5	3.3	332.7		46
	図VI-9	47	63-1		k151	VIIc2	154	すり石	安山岩	12.6	10.1	8.9	1800.0		47
	図VI-9	48	63-1		o154	VIIc	8	すり石	安山岩	(14.5)	(6.8)	4.9	598.8	ベンガラ付着	48
	図VI-9	49	63-1		k150	VIIc2	223	砥石	砂岩	9.8	6.7	3.1	121.8		49
	図VI-10	50	63-1		o154	VII		台石	安山岩	23.7	20.7	7.0	5700.0	トレンチ内	50
図VI-10	51	63-1		m153	VIIc	70	台石	安山岩	26.0	17.2	6.9	4600.0		51	
図VI-10	52	63-1		o154	VII		台石	安山岩	(26.7)	31.6	9.1	11900.0	トレンチ内	52	
図VI-10	53	63-1		o154	VIIc	11	台石	安山岩	(10.4)	(8.1)	4.0	(452.3)		53	
B地区	図VI-16	1	64-1	P-10	PIT2/D133	覆土	57	石鏃	黒曜石	(1.5)	0.8	0.2	(0.2)		ア
	図VI-17	2	64-1	P-13	PIT8/F124	覆土	242	石鏃	黒曜石	1.3	0.7	0.2	0.1		ア
	図VI-17	3	64-1	P-13	PIT8/F124	覆土	282	スクレイパー	黒曜石	3.2	3.0	0.5	4.9		イ
	図VI-17	4	64-1	P-13	PIT8/F124	覆土	236	Rフレイク	黒曜石	(2.4)	1.0	0.5	1.1		ウ
	図VI-17	5	64-1	P-13	PIT8/F124	覆土	283	台石	安山岩	14.8	15.1	8.4	3100.0	ベンガラ付着	エ
	図VI-17	6	64-1	P-13	PIT8/F124	覆土	320	台石	安山岩	19.2	11.2	7.6	2400.0		オ
	図VI-19	1	64-1	PS-22	PIT7/D139	覆土	224	すり石	安山岩	15.7		4.6	907.6		ア
	図VI-19	2	64-1	PS-22	PIT7/D139	覆土	136	台石	安山岩	16.2	13.9	4.3	1400.0		イ
	図VI-19	3	64-1	PS-22	PIT7/D139	覆土	54	台石	安山岩	15.5	(15.5)	5.2	(1900)		ウ
	図VI-19	4	64-1	PS-22	PIT7/D139	覆土	52	台石	安山岩	30.6	19.7	7.1	7700.0		エ
	図VI-21	1	64-1	PS-23	PIT17/E129	覆土	225	ナイフ	黒曜石	(4.7)	(2.2)	0.7	(4.3)		ア
	図VI-21	2	64-1	PS-23	PIT17/E129	覆土	249	石斧	安山岩	(8.6)	5.8	2.8	(214.4)		イ
	図VI-21	3	64-1	PS-23	PIT17/E129	覆土	313	すり石	安山岩	11.1	9.8	3.4	575.7		ウ
	図VI-21	4	64-1	PS-23	PIT17/E129	覆土	316	すり石	安山岩	12.1	9.6	6.6	1049.8		エ
図VI-21	5	64-1	PS-23	PIT17/E129	覆土	306	すり石	安山岩	12.4	9.2	3.6	609.7	ベンガラ付着	オ	
図VI-21	6	64-1	PS-23	PIT17/E129	覆土	287	台石	安山岩	17.6	13.1	5.4	1800.0		カ	
図VI-21	7	64-1	PS-24	PIT15/E129	覆土	171	すり石	安山岩	11.8	10.2	6.0	1025.9		ア	

表Ⅵ-6 2011年調査掲載石器等一覧(2)

地区	挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	実測番号	
B地区	図VI-21	8	64-1	PS-24	PIT15/E129	覆土	84	台石	安山岩	(19.4)	21.1	5.8	(3000)		イ	
	図VI-22	2	64-1	SF-6	PIT16/E129	覆土	117	石鏃	黒曜石	(1.9)	1.3	0.3	(0.6)		ア	
	図VI-22	3	64-1	SF-6	PIT16/E129	覆土	129	石鏃	黒曜石	(2.1)	1.1	0.2	(0.5)		イ	
	図VI-22	4	64-1	SF-7	PIT12/F125		260	台石	安山岩	33.5	31.9	15.9	16500.0	炉石	ア	
	図VI-22	5	64-1	SF-7	PIT12/F125		250	台石	安山岩	40.1	30.4	10.8	18000.0	炉石	イ	
	図VI-23	1	65-1	F-7	PIT22/E129	覆土	277	すり石	安山岩	16.7	7.2	5.6	917.4	ベンガラ付着	ア	
	図VI-26	1	65-1	S-3	D136		IX	198	台石	安山岩	15.2	13.8	5.1	1600.0		22
	図VI-26	2	65-1	S-3	D136		IX	194	台石	安山岩	38.7	31.5	8.3	14100.0	ベンガラ付着	25
	図VI-26	3	65-1	S-3	D136		IX	195	台石	安山岩	31.7	22.9	8.6	8100.0		24
	図VI-26	6	65-1	S-4	PIT20/E131	覆土	89	Rフレイク	黒曜石	4.8	3.5	0.8	10.7		ア	
	図VI-26	7	65-1	S-4	PIT20/E131	覆土	37	台石	安山岩	20.4	15.7	6.2	3300.0		イ	
	図VI-26	8	65-1	S-5	PIT14/E129	覆土	64	台石	安山岩	16.7	12.3	6.1	1600.0		ア	
	図VI-26	9	65-1	S-5	PIT14/E129	覆土	76	台石	安山岩	19.1	13.7	6.4	2600.0		イ	
	図VI-26	10	65-1	S-5	PIT14/E129	覆土	75	台石	安山岩	29.3	25.6	5.9	4900.0		ウ	
	図VI-26	11	65-1	S-5	PIT14/E129	覆土	74	台石	安山岩	34.9	30.3	9.1	14500.0		エ	
	図VI-27	1	65-1	S-6	D129区集石1		VII	192	たたき石	安山岩	10.1	11.6	6.6	953.7		ア
	図VI-27	2	65-1	S-6	D129区集石1		VII	184	台石	安山岩	14.2	15.7	6.1	2300.0	ベンガラ付着	イ
	図VI-27	7	66-1	S-7	PIT6/E127	覆土	138	ナイフ	黒曜石	(5.7)	2.9	0.9	(13.5)		ア	
	図VI-27	8	66-1	S-7	PIT6/E127	覆土	122	ナイフ	黒曜石	(3.5)	2.6	0.8	(7.5)		イ	
	図VI-27	9	66-1	S-7	PIT6/E127	覆土	116	スクレイパー	黒曜石	3.4	2.5	0.5	3.1		ウ	
	図VI-27	10	66-1	S-7	PIT6/E127	覆土	129	Rフレイク	黒曜石	3.6	2.8	0.6	5.5		エ	
	図VI-27	11	66-1	S-7	PIT6/E127			150	台石	安山岩	20.0	21.4	6.9	4500.0		オ
	図VI-30	1	66-1	R-5	D136		IX	234	すり石	安山岩	15.9	14.7	7.0	2400.0	ベンガラ付着	16
	図VI-30	2	66-1	R-5	D136		IX	220	礫	安山岩	13.1	7.5	4.0	636.9	ベンガラ付着	26
	図VI-30	3	66-1	R-5	D136		IX	232	礫	安山岩	13.9	7.3	4.8	606.3	ベンガラ付着	27
	図VI-30	4	66-1	R-5	D136		IX	233	礫	安山岩	14.6	8.7	6.5	1068.8	ベンガラ付着	28
	図VI-33	1	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	487	石鏃	黒曜石	1.4	0.7	0.2	0.1		ア
	図VI-33	2	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	285	石鏃	黒曜石	1.7	0.7	0.2	0.2		イ
	図VI-33	3	67-1	廃棄場	PIT1/F124		VII	109	石鏃	黒曜石	1.7	0.7	0.3	0.1		ウ
	図VI-33	4	67-1	廃棄場	PIT1/F125		VII	226	石鏃	黒曜石	(1.9)	0.9	0.3	(0.5)		エ
	図VI-33	5	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	403	石鏃	黒曜石	1.9	1.2	0.3	0.6		オ
	図VI-33	6	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	146	石鏃	黒曜石	(1.2)	0.6	0.2	(0.1)		カ
	図VI-33	7	67-1	廃棄場	PIT1/F125		VII	243	ナイフ	黒曜石	(2.5)	3.0	0.7	(4.7)		キ
図VI-33	8	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	481	ナイフ	黒曜石	5.4	3.7	0.8	9.6		ク	
図VI-33	9	67-1	廃棄場	PIT1/F124		VII	138	スクレイパー	黒曜石	2.1	2.2	0.6	2.0		ケ	
図VI-33	10	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	399	スクレイパー	黒曜石	3.0	2.6	0.7	4.3		コ	
図VI-33	11	67-1	廃棄場	PIT1/F125		VII	168	スクレイパー	黒曜石	3.6	2.5	0.7	3.7		サ	
図VI-33	12	67-1	廃棄場	PIT1/F124		VII	107	スクレイパー	黒曜石	3.0	(2.6)	0.5	(4.3)		シ	
図VI-33	13	67-1	廃棄場	PIT1/F124		VII	127	スクレイパー	黒曜石	2.7	3.0	0.8	6.0		ス	
図VI-33	14	67-1	廃棄場	PIT1/F124		VII	225	スクレイパー	黒曜石	3.0	3.0	0.7	5.9		セ	
図VI-33	15	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	235	スクレイパー	黒曜石	3.7	2.9	0.8	5.7		ソ	
図VI-33	16	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	29	スクレイパー	黒曜石	(2.5)	3.2	0.7	(4.9)		タ	
図VI-33	17	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	254	スクレイパー	黒曜石	2.6	1.6	0.4	1.7		チ	
図VI-33	18	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	304	スクレイパー	黒曜石	3.1	3.8	1.0	10.4		ツ	
図VI-33	19	67-1	廃棄場	PIT1/D124		VII	7	スクレイパー	黒曜石	5.0	2.7	0.7	6.6		テ	
図VI-33	20	67-1	廃棄場	PIT1/F124		VII	10	石錐	黒曜石	4.2	1.4	0.6	3.0		ト	
図VI-33	21	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	135	Rフレイク	黒曜石	3.7	2.9	0.6	5.4		ナ	
図VI-33	22	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	233	Uフレイク	硬質頁岩	4.7	6.3	1.2	19.8		ニ	
図VI-33	23	67-1	廃棄場	PIT1/F124		VII	74	Uフレイク	硬質頁岩	7.4	5.8	1.1	24.5		ヌ	
図VI-33	24	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	142	たたき石	安山岩	7.5	6.7	5.8	435.4		ネ	
図VI-33	25	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	279	たたき石	安山岩	11.6	9.6	4.8	799.9		ノ	
図VI-33	26	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	484	たたき石	安山岩	13.3	5.9	5.5	645.3		ハ	
図VI-33	27	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	157	すり石	安山岩	9.1	8.3	5.9	675.5		ヒ	
図VI-33	28	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	497	すり石	安山岩	10.3	6.2	3.5	341.1		フ	
図VI-33	29	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	48	くぼみ石	安山岩	10.5	8.5	4.4	673.9		ヘ	
図VI-33	30	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	204	砥石	砂岩	6.4	(11.2)	2.0	(180.3)		ホ	
図VI-33	31	67-1	廃棄場	PIT1/E124		VII	330	砥石	砂岩	6.2	(8.5)	2.0	(87.9)		マ	
図VI-33	32	67-1	廃棄場	PIT1/E125		VII	256	台石	安山岩	14.0	13.1	5.3	1500.0		ミ	
図VI-33	33	67-1	廃棄場	PIT1/F124		VII	41.79	石製品	不明	4.4	4.4	0.4			ム	
図VI-37	1	69-1		D136		IX	142	石鏃	黒曜石	(2.7)	1.2	0.3	(0.7)	宇津内Ⅱ	1	
図VI-37	2	69-1		D136		IX	126	ナイフ	黒曜石	(5.9)	3.2	1.0	(15.1)	宇津内Ⅱ	2	
図VI-37	3	69-1		E131		IX	5	スクレイパー	黒曜石	3.5	2.6	0.6	5.4	宇津内Ⅱ	3	
図VI-37	4	69-1		E129		IX	9	スクレイパー	黒曜石	2.8	2.0	0.7	3.3	宇津内Ⅱ	4	
図VI-37	5	69-1		E130		IX	16	スクレイパー	黒曜石	3.0	3.1	0.7	5.8	宇津内Ⅱ	5	
図VI-37	6	69-1		E128		IX	9	スクレイパー	黒曜石	7.4	3.7	1.1	16.9	宇津内Ⅱ	6	
図VI-37	7	69-1		E129		IX	51	スクレイパー	黒曜石	2.9	4.5	1.1	11.6	宇津内Ⅱ	7	
図VI-37	8	69-1		F125		VIII	263	石錐	黒曜石	2.4	0.9	0.3	0.4	宇津内Ⅱ	8	
図VI-37	9	69-1		E129		IX	39	Rフレイク	黒曜石	(4.0)	2.7	0.6	(5.4)	宇津内Ⅱ	9	
図VI-37	10	69-1		D136		IX	239	石核	硬質頁岩	5.4	6.1	5.3	160.2	宇津内Ⅱ	10	
図VI-37	11	69-1		E128		IX	40	すり石	安山岩	11.2	6.9	4.2	424.2	宇津内Ⅱ	11	
図VI-37	12	69-1		E128		IX	48	すり石	安山岩	11.7	9.0	6.3	999.1	宇津内Ⅱ	12	
図VI-37	13	69-1		E128		IX	12	すり石	安山岩	12.7	7.0	5.4	653.9	宇津内Ⅱ	13	
図VI-37	14	69-1		E128		IX	24	すり石	安山岩	14.0	11.4	4.0	1013.8	宇津内Ⅱ	14	

表Ⅵ-7 2011年調査掲載石器等一覧(3)

地区	挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	実測番号
B地区	図VI-37	15	69-1		E131	IX	103	すり石	安山岩	15.0	8.3	3.5	676.2		15
	図VI-37	16	69-1		E129	IX	162	砥石	軽石	5.4	3.3	2.1	6.1	有溝砥石	17
	図VI-37	17	69-1		D139	IX	314	砥石	軽石	3.9	3.8	3.5	8.1		18
	図VI-37	18	69-1		E129	IX	32	砥石	砂岩	5.8	8.6	1.3	50.3		19
	図VI-37	19	69-1		E128	IX	91	台石	安山岩	29.8	24.1	8.5	8500.0		20
	図VI-37	20	69-1		E128	IX	92	台石	安山岩	24.3	21.6	7.5	4700.0		21
	図VI-37	21	69-1		C137	IX	10	台石	安山岩	21.2	14.4	5.9	2800.0		23
	図VI-38	22	69-1		D135	VII	140	石鏃	黒曜石	1.2	0.6	0.2	0.1		29
	図VI-38	23	69-1		D135	VII	135	石鏃	黒曜石	1.2	0.7	0.2	0.1		30
	図VI-38	24	69-1		D129	VII	179	石鏃	黒曜石	1.4	0.6	0.2	0.2		31
	図VI-38	25	69-1		D136	VIIb	23	石鏃	黒曜石	1.8	0.9	0.2	0.2		32
	図VI-38	26	69-1		D132	VII	5	石鏃	黒曜石	3.7	1.6	0.5	1.8		33
	図VI-38	27	69-1		D135	VIIb	212	石鏃	黒曜石	(1.3)	(1.0)	0.4	(0.6)		34
	図VI-38	28	69-1		E126	VII	7	石鏃	黒曜石	(1.8)	(1.1)	0.4	(0.6)		35
	図VI-38	29	69-1		D135	VIIb	185	ナイフ	黒曜石	4.2	1.8	0.4	2.7		36
	図VI-38	30	69-1		C136	VIIb	13	ナイフ	黒曜石	4.5	2.1	0.7	4.4		37
	図VI-38	31	69-1		D129	VII	61	ナイフ	黒曜石	(1.5)	2.2	0.7	(1.7)		38
	図VI-38	32	69-1		D131	VII	22	ナイフ	黒曜石	(3.4)	1.3	0.6	1.7		39
	図VI-38	33	69-1		E127	VII	28	ナイフ	黒曜石	(6.9)	1.7	1.0	10.3		40
	図VI-38	34	69-1		D136	VII	123	ナイフ	黒曜石	3.9	3.2	0.8	10.0		41
	図VI-38	35	69-1		D136	VIIb	55	ナイフ	黒曜石	(5.3)	3.2	1.2	22.2		42
	図VI-38	36	69-1		E127	VII	29	ナイフ	黒曜石	5.7	4.2	1.2	30.3		43
	図VI-38	37	69-1		D135	VII	158	スクレイパー	黒曜石	2.2	1.0	0.7	2.3		44
	図VI-38	38	69-1		D135	VIIb	197	スクレイパー	黒曜石	2.4	2.1	0.6	2.4		45
	図VI-38	39	69-1		E126	VII	62	スクレイパー	黒曜石	2.6	2.6	0.7	3.8		46
	図VI-38	40	69-1		C133	VII	20	スクレイパー	黒曜石	3.0	2.0	0.7	4.0		47
	図VI-38	41	69-1		D133	VII	66	スクレイパー	黒曜石	3.0	1.8	0.9	4.8		48
	図VI-38	42	69-1		D132	VII	52	スクレイパー	黒曜石	3.2	3.5	0.7	7.8		49
	図VI-38	43	69-1		D135	VIIb	181	スクレイパー	黒曜石	3.2	2.4	1.0	6.7		50
	図VI-38	44	69-1		D131	VII	11	スクレイパー	黒曜石	3.6	2.8	1.2	13.1		51
	図VI-38	45	69-1		D132	VII	26	スクレイパー	黒曜石	2.0	(4.9)	1.1	13.2		52
	図VI-38	46	69-1		E126	VII	102	スクレイパー	黒曜石	(1.9)	(2.2)	0.5	2.5		53
	図VI-38	47	69-1		E126	VII	69	スクレイパー	黒曜石	2.1	2.0	0.4	1.6		54
	図VI-38	48	69-1		D132	VII	23	スクレイパー	黒曜石	(2.7)	3.3	1.3	(11.0)		55
	図VI-38	49	69-1		D135	VII	160	スクレイパー	黒曜石	3.3	5.4	1.0	8.8		56
	図VI-38	50	69-1		D131	VII	35	Rフレイク	黒曜石	3.6	3.1	0.6	5.2		57
	図VI-38	51	69-1		D134	VII	60	Rフレイク	黒曜石	3.8	3.7	0.6	5.6		58
	図VI-38	52	69-1		E126	VII	59	たたき石	安山岩	18.3	7.7	6.3	1400.0		59
	図VI-38	53	69-1		D127	VII	21	たたき石	安山岩	(13.0)	4.9	4.5	405.2		60
	図VI-38	54	69-1		E127	VII	142	すり石	安山岩	10.3	8.8	3.5	557.1	ベンガラ付着	61
	図VI-38	55	69-1		D135	VIIb	177	すり石	安山岩	12.1	9.0	4.0	685.3		62
	図VI-38	56	69-1		D131	VII	66	すり石	安山岩	10.5	9.7	6.9	1015.8		63
	図VI-38	57	69-1		E126	VII	99	すり石	安山岩	12.4	9.9	7.6	1182.9		64
	図VI-39	58	69-1		D133	VII	38	くぼみ石	安山岩	13.9	9.7	6.3	1085.7		65
	図VI-39	59	69-1		D133	VII	6	砥石	軽石	7.4	5.0	4.4	21.6	有溝砥石	66
	図VI-39	60	69-1		D133	VII	8	砥石	軽石	9.8	7.5	3.9	50.2	有溝砥石	67
	図VI-39	61	69-1		D133	VII	35	砥石	軽石	5.4	7.6	3.3	16.0	有溝砥石	68
	図VI-39	62	69-1		C134	VII	10	砥石	軽石	8.2	7.5	4.7	43.6	有溝砥石	69
	図VI-39	63	69-1		D133	VII	40	砥石	軽石	(10.2)	6.6	4.0	41.9	有溝砥石	70
	図VI-39	64	69-1		D133	VII	5	砥石	軽石	10.4	7.3	4.1	51.1	有溝砥石	71
	図VI-39	65	69-1		D135	VII	21	砥石	軽石	11.5	9.8	8.1	130.2	有溝砥石	72
	図VI-39	66	69-1		E126	VII	112	砥石	安山岩	(8.4)	(9.7)	3.7	(272.6)		73
	図VI-39	67	69-1		D132	VII	36	砥石	砂岩	8.5	7.9	2.9	173.3		74
	図VI-39	68	69-1		D133	VII	81	砥石	砂岩	10.2	11.4	0.9	148.3		75
	図VI-39	69	69-1		D135	VIIb	174	台石	安山岩	22.2	14.1	4.8	2400.0		76
	図VI-39	70	69-1		D134	VII	56	台石	安山岩	22.0	18.2	5.9	4100.0		77
	図VI-39	71	69-1		D132	VII	69	板状加工礫	安山岩	7.1	8.9	0.8	57.3		78

表Ⅵ-8 2011年調査掲載ガラス製品一覧

地区	挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/発掘区	層位	遺物番号	分類	材質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考	実測番号
B地区	図IV-15	1	口絵4	GP-4	1号墓壇/E124	覆土下層	536	ガラス玉	ガラス	0.4	0.5	0.3			ア
	図IV-15	2	口絵4	GP-4	1号墓壇/E124	覆土下層	547	ガラス玉	ガラス	0.3	0.3	0.3			イ
	図IV-15	3	口絵4	GP-4	1号墓壇/E124	覆土下層	548	ガラス玉	ガラス	0.4	0.4	0.3			ウ
	図IV-15	4	口絵4	GP-4	1号墓壇/E124	覆土下層	559	ガラス玉	ガラス	0.3	0.3	0.3			エ
	図IV-15	5	口絵4	GP-4	1号墓壇/E124	覆土下層			ガラス玉	ガラス	0.4	0.4	0.4		篩にて検出

VII章 2012年の調査と出土遺物

1 調査の概要

(1) 調査の方法と経過

調査区は全調査範囲の中央西部、国道334号の北側で、延長190m・最大幅約8mの範囲である。海岸砂丘列とその内側の海岸低地の一部に立地し、中央部（105～109ライン）に砂丘を開析する旧河道があり、それを境に西側は2011年B地区から続く「砂丘部」、東側は「低地部」として調査を行った。「砂丘部」が砂丘列4、「低地部」が砂丘列5にあたる（図Ⅱ-3）。標高は、砂丘部Ⅵ層で4.5～6.0m、旧河道河床で2～2.5m、低地部Ⅵ層で3.0～3.8mである。調査以前は植林地で、砂採取や道路建設時などの攪乱が多い。

調査は、草木類を重機で除去した後、表土から人力により掘削した。トレンチ調査等を行い土層堆積状況を把握することに努めた。その後、各発掘区・層位ごとに掘削を進めた。調査区境や発掘区境において土層断面図を多数作成した。なお90ライン以東は、「拡張区」として調査終盤の8月下旬に調査を行っている。遺構名は検出順に「PIT」を冠し、2011年に続き「27」から番号を付した（2018年調査の際に、概要報告書や図面類などをもとに共通の遺構種別記号への変換を行った）。遺物の出土位置は、トータルステーションを用いて点記録を行った。そのほか遺構断面の測量基準点や調査範囲の設定などにもトータルステーションを使用した。写真撮影は、リバーサルおよびネガカラー35mm判、ネガカラー6×7判、デジタルカメラを使用した。

(2) 発掘区の設定（図Ⅶ-1）

2011年の設定に接続する一辺5mの発掘区を設定した。今回の調査区はD～F、86～124の範囲である。なおトータルステーションを使用する際に、基準点（ $X=0.000$ $Y=0.000$ ）を「A・-1」とし、東西（数字）をX軸（西が正方向）、南北（アルファベット）をY軸（北が正）とする座標値を使用した（例：F120杭 $X=605.000$ $Y=-25.000$ ）

(3) 土層（図Ⅶ-2・3）

調査区中央部の旧河道を境に、様相が異なる。

【砂丘部】（2011年におおむね準ずる）

I層：表土層 II層：灰白色火山灰層〔樽前a〕 III層：（間層） IV層：白色火山灰層〔駒ヶ岳c₂〕

V層：黒色砂層 土壤質に富む。

VI層：黄～白色軽石層〔摩周b5降下軽石層（10世紀降下）〕 径1～2mmの軽石主体。

VII層：黒色～暗褐色砂層 オホーツク文化期と続縄文時代後期の遺構・遺物を含む。

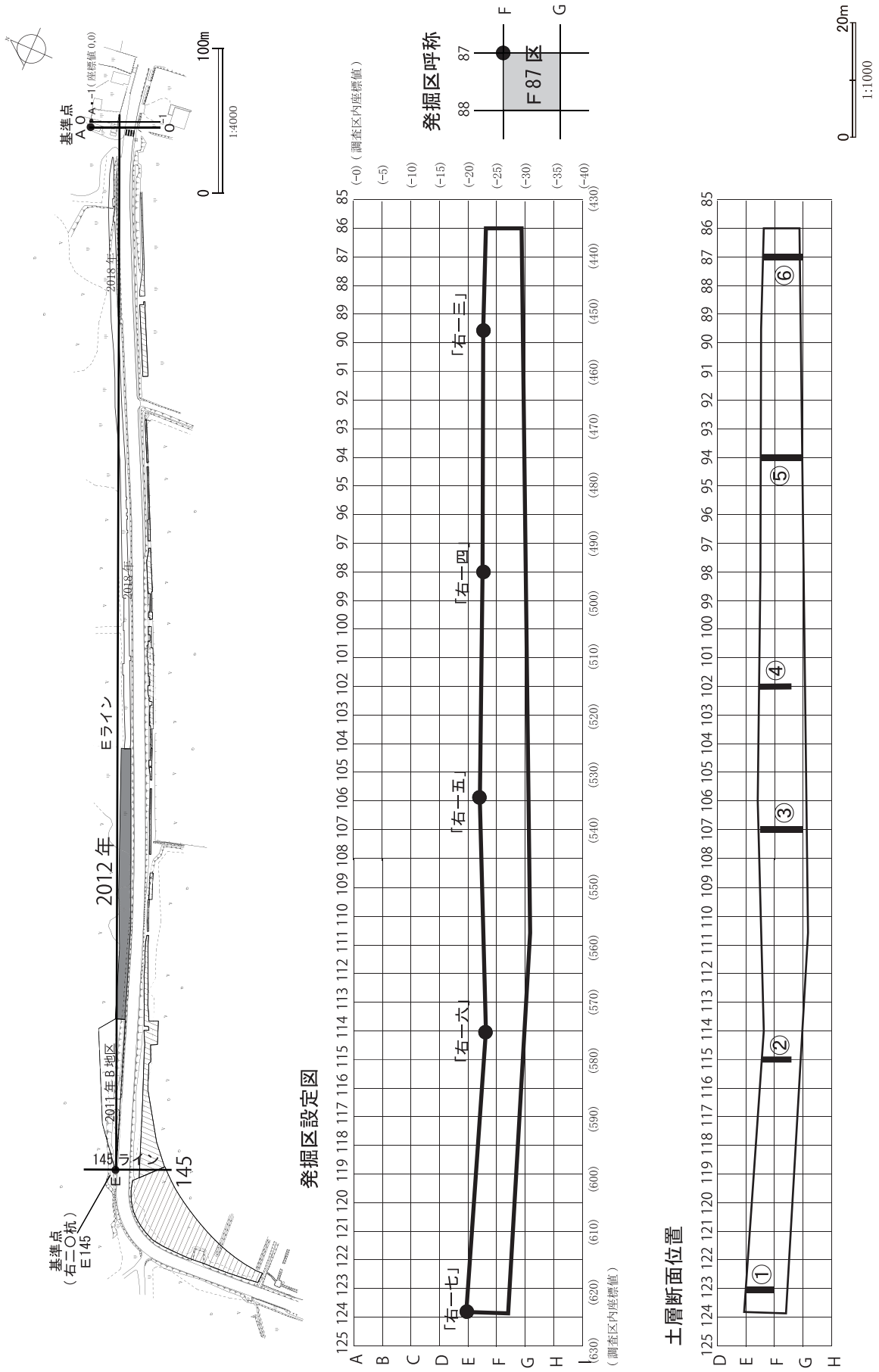
VII s層：暗灰～灰色砂 旧河道の両肩部～低地部に分布する。オホーツク文化期の遺物を含む。

VII a層：黒褐色砂層 土壤質に富む。後北C₂・D式期を主体に、オホーツク文化期の遺物を含む。

VII b層：暗褐色砂層 後北C₂・D式期の遺物を含み、該期の主な遺構確認面である。

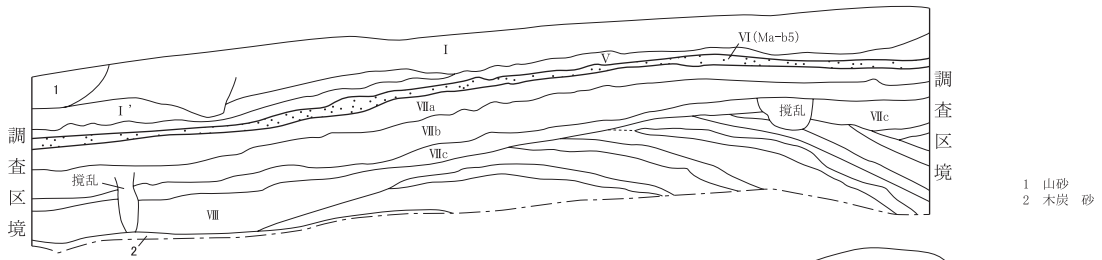
VII c層：にぶい黄褐色砂層 後北C₂・D式期の遺物を含むものの、遺構は検出されなかった。

VIII層：黄褐色砂層 層中に縞状の薄層が複数堆積する。宇津内II b式土器が出土し、該期の主な遺構確認面である。

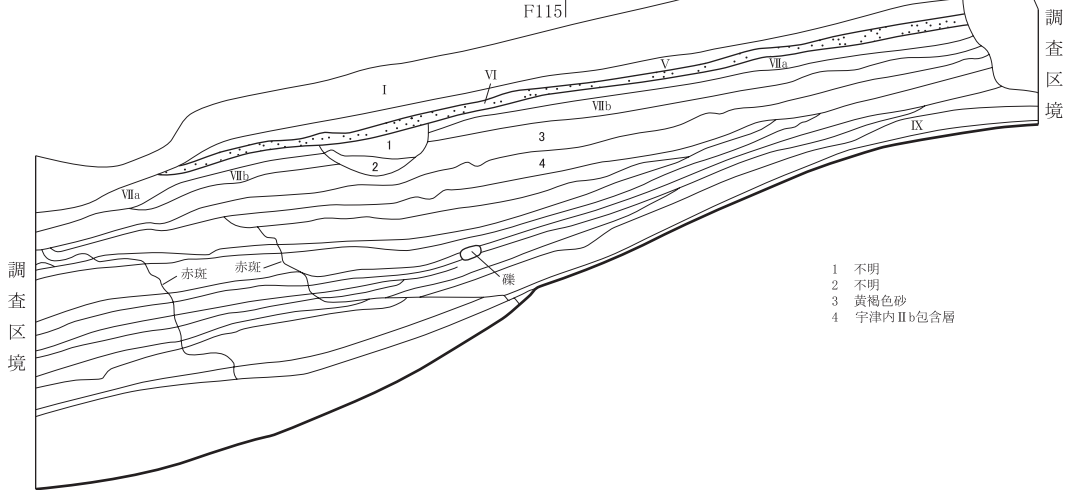


図VII-1 2012年発掘区設定図・土層断面位置

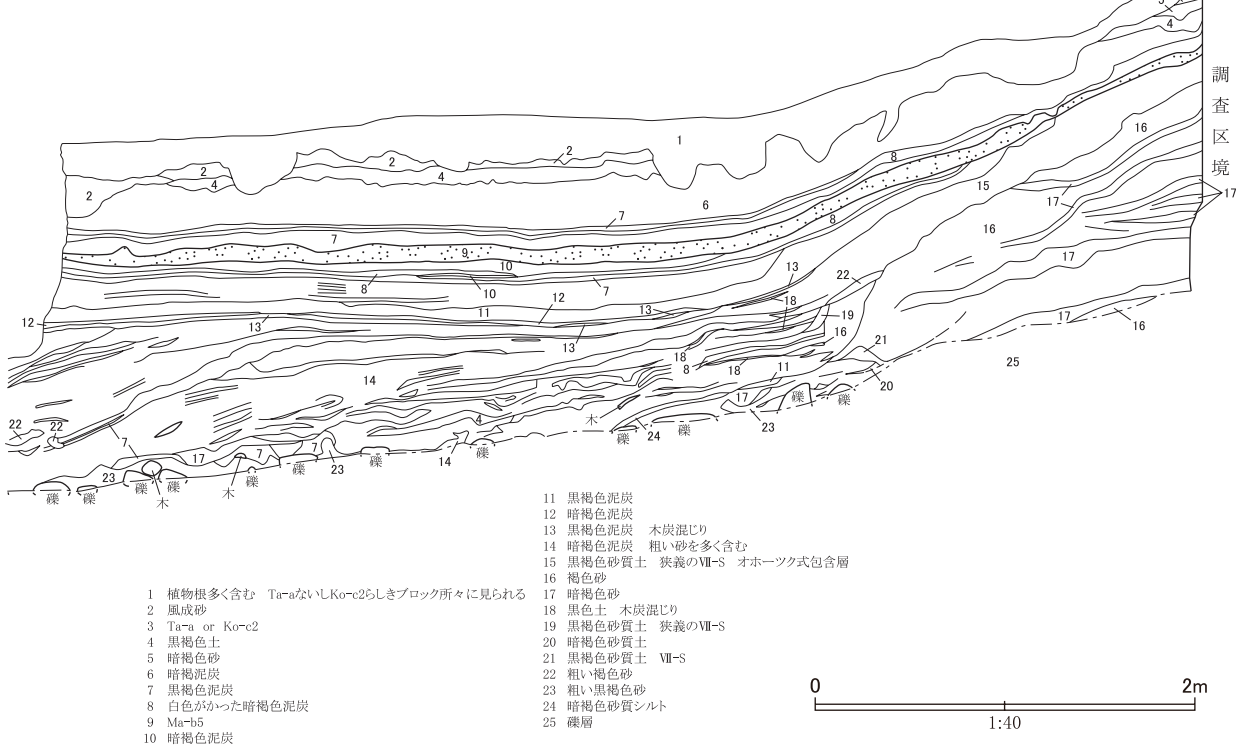
(南) F123 土層① [123ライン] E123 (北)
A A' 6.5m



(南) A 土層② [115ライン] F115 (北) A' 6.0m

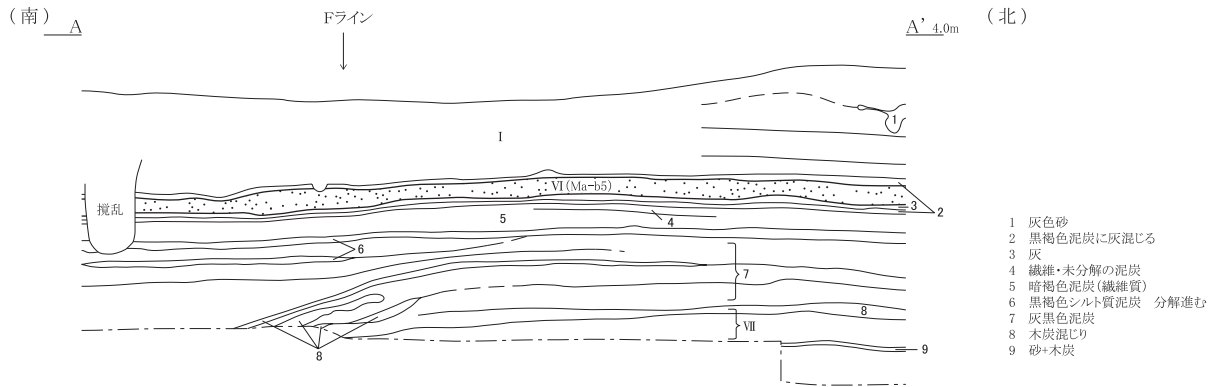


A (南) E107 土層③ [107ライン] (北) F107 A' 4.5m

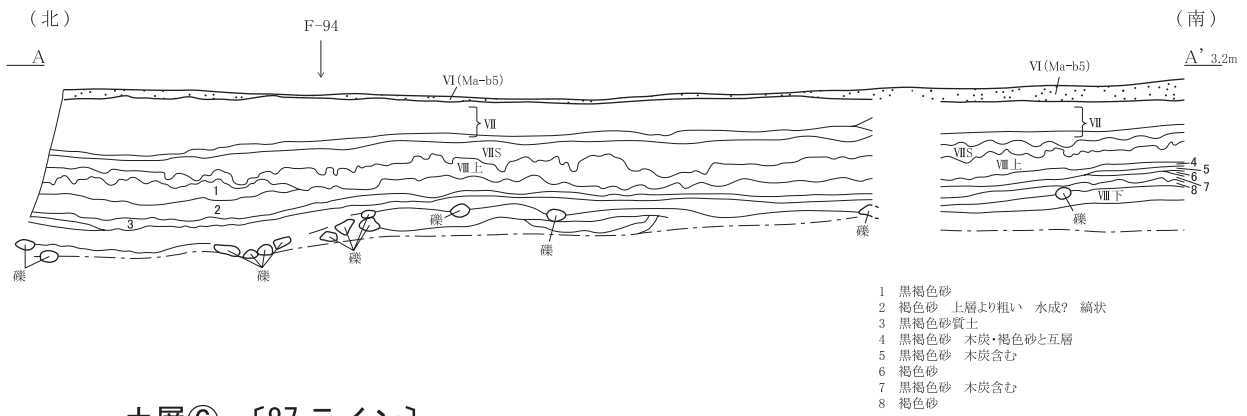


図Ⅶ-2 調査区土層断面 (1)

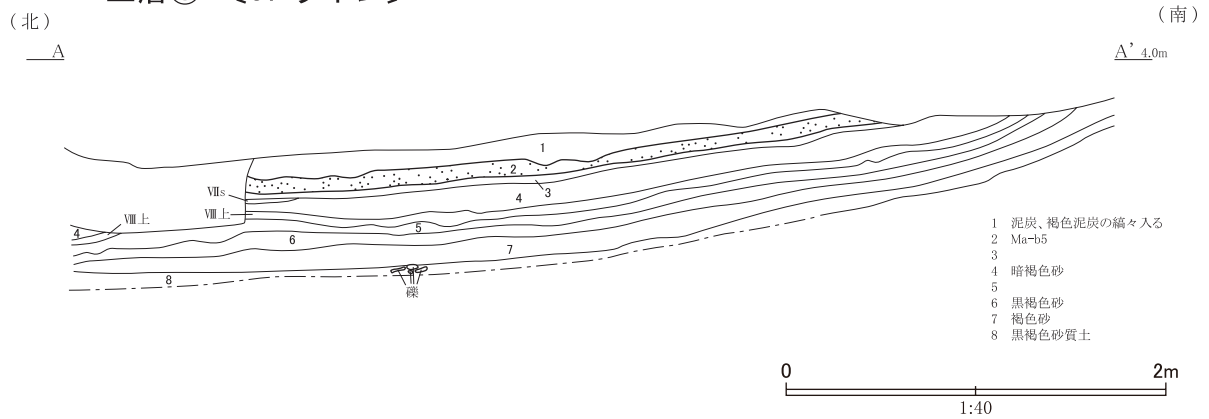
土層④ [102 ライン]



土層⑤ [94 ライン]



土層⑥ [87 ライン]



図Ⅶ-3 調査区土層断面 (2)

- IX層：灰褐色砂層 層厚1～5cmの薄層が幾重にも堆積する。そのため大きく2枚の遺物包含層と3枚の無遺物層に分けた。続縄文時代前期の遺物を含む。
- IX a層：灰褐色砂層と黒褐色砂層の互層 無遺物層。
- IX b層：灰褐色砂層と暗褐色砂層の互層 宇津内II b式土器を含む。
- IX c層：灰褐色砂層と黒褐色砂層の互層 無遺物層。
- IX d層：暗褐色砂層 宇津内II a式期の遺物包含層。同期の遺構検出面である。
- IX e層：灰褐色砂層と黒褐色砂層の互層 無遺物層。

【低地部】

- I層：腐植土層 一部で泥炭を含む。層厚10cm程度。
- II層：灰白色火山灰層〔樽前a〕 III層：(間層) IV層：白色火山灰層〔駒ヶ岳c₂〕
- V層：泥炭層 黒色土層や未同定の火山灰を含む。また部分的に粗砂層があり、小河川の堆積物の可能性がある。II～V層全体の層厚は1m程度ある。
- VI層：黄～白色軽石層〔摩周b 5降下軽石層(10世紀降下)〕 火山灰と軽石に分離している。層厚10～15cm。
- VII層：黒色～暗褐色砂層または砂質土 砂丘部VII s層に比定。オホーツク文化期の遺物を含む。
- VIII層：黒色～暗褐色砂層または砂質土 砂丘部VII a・VII b層に比定。後北C₂・D式期の遺物を含む。VII層との間層である灰褐色砂層と、黒色～暗褐色砂の複数の砂層(「VIII層中間層」など)と間層から成る。下層ほど砂は粗く、下位の砂礫層へ至る。

(4) 調査結果の概要 (図VII-4)

続縄文時代およびオホーツク文化期の遺構・遺物を検出した。遺物は土器・石器等約25,000点を数えた。土器は宇津内II a式・II b式、後北C₂・D式、オホーツク刻文土器が出土した。石器等はフレイク類が多くを占め、定形的な石器では、すり石(161)、石鏟(93)、台石(68)、削器(58)、搔器(56)が多い。ほかに骨角器、ベンガラ、褐鉄鉱、木柱、樹皮、炭化木片、堅果類、骨片が出土した。

【宇津内II a式期】

砂丘部IX層で検出した。遺構は土坑3基、集石を伴う土坑(集石土坑)3基、フレイクチップ集中3か所、ベンガラ範囲7か所を検出した。特にF120区付近ではベンガラ範囲が連綿と続き、集石土坑などが近接しており、ベンガラ製作に関連がある遺構群とみられる。

【宇津内II b式期】

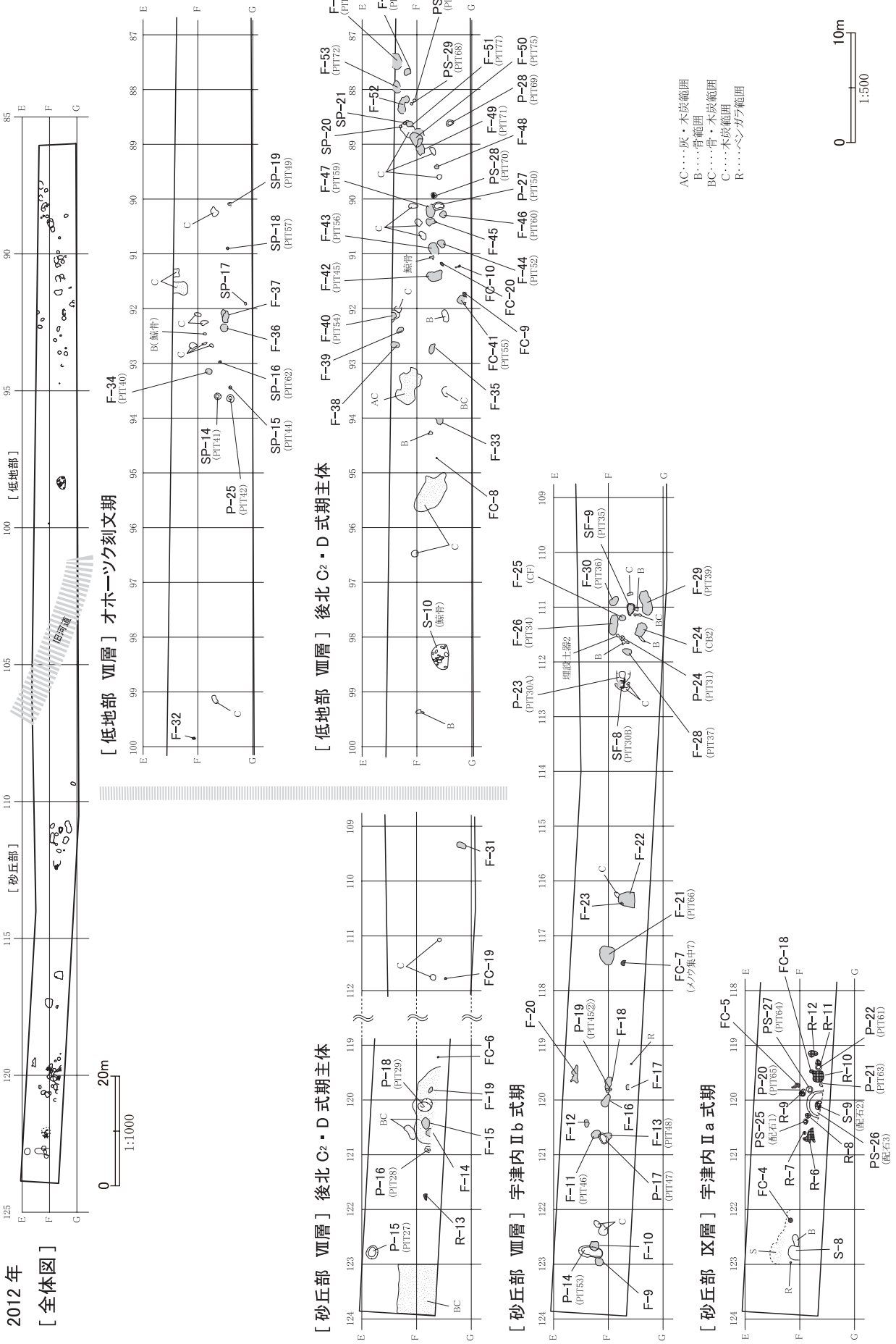
砂丘部IX b層～VIII層で検出した。遺構は土坑5基、石組炉2基、焼土18か所、フレイクチップ集中1か所、土器埋設遺構1か所を検出した。石組炉は単独で検出し、火床面から焼骨片が検出された。

【後北C₂・D式期】

砂丘部VII層、低地部VIII層で検出した。遺構は土坑5基、集石を伴う土坑3基、柱穴状小土坑2基、集石3か所、フレイクチップ集中6か所、ベンガラ範囲1か所を検出した。調査区全体の広い範囲から遺構・遺物が出土した。

【オホーツク文化期】

砂丘部VII s層、低地部VII層で検出した。遺構は土坑2基、柱穴状土坑6基、焼土4か所を検出した。柱穴状土坑の組み合わせは不明瞭で、うち1基で加工痕のある木柱が残存していた。旧河道が砂丘を開析し、流木などが残存していた。



図Ⅷ-4 2012年調査区遺構位置図

2 遺構の調査とその遺物

遺構の記載内容は、概要報告書（斜里町教育委員会2013）や図・写真から編者（阿部）が記述した。

a 続縄文時代の遺構

(1) 土坑

13基（P-14~24・27・28）を検出した。時期は、宇津内Ⅱ a 式期3基（P-20~22）、宇津内Ⅱ b 式期5基（P-14・17・19・23・24）、後北C₂・D式期5基（P-15・16・18・27・28）である。

P-14 (PIT53)（図Ⅶ-5 表Ⅶ-1・3 図版33・70）

Ⅶ層で検出した。F-9・10に隣接する。覆土は3層に分層し、いずれも炭化物を少量含む。

掲載遺物：1は宇津内Ⅱ b 式。口唇は尖り、楕円文の突起がある。縄線の施文後、横位・縦位区画の微隆起線が付されている。

P-15 (PIT27)（図Ⅶ-5 表Ⅶ-1・3 図版33）

Ⅶ b 層で検出した楕円形土坑。

P-16 (PIT28)（図Ⅶ-5 表Ⅶ-1・3 図版33・70）

Ⅶ b 層から掘り込まれている。東半は炭化物層があり、一部攪乱を受けている。覆土下位から、土器が倒立状態で出土した。土器の内面にも炭化物が多量に付着している。

掲載遺物：2は後北C₂・D式の注口付き鉢形土器。注口部など一部を欠くが、約80%が破損なく残存している。文様は主2+副2の単位で、注口部と対面側に弧線文や斜行する区画文があり、側面側は横位多段の区画文を配している。

P-17 (PIT47)（図Ⅶ-6 表Ⅶ-1・3 図版33）

Ⅶ層中間層で検出した。覆土は暗赤褐色を呈し、炭化物や焼骨片が出土し、焼土の可能性はある。

P-18 (PIT29)（図Ⅶ-6 表Ⅶ-1・3 図版33・70）

Ⅶ b 層で検出した。複数の段がある。遺物は覆土から土器・石器等44点のほか、炭化木片、骨片などが出土した。

掲載遺物：1は後北C₂・D式の深鉢形土器の胴~底部。2本組の微隆起線区画内には、帯縄文ではなく条痕文が充填されている。2は無文のミニチュア土器。指頭による成形痕が残る。3はナイフ。正面左側縁と裏面の下縁にやや短い平坦加工が施されている。4は石斧。全面的な研磨により成形される。両刃で器体中央に最大厚があり、太型蛤刃石斧に類似する。

P-19 (PIT45②)（図Ⅶ-7 表Ⅶ-1・3 図版34）

Ⅶ層上位で検出した小型土坑。宇津内Ⅱ式とみられる土器小片3点が出土した。

P-20 (PIT65)（図Ⅶ-7 表Ⅶ-1・3 図版34）

Ⅸ層で検出した小型の円形土坑。覆土は炭化木片がやや多量含まれ、坑底に「焼砂」層がある。

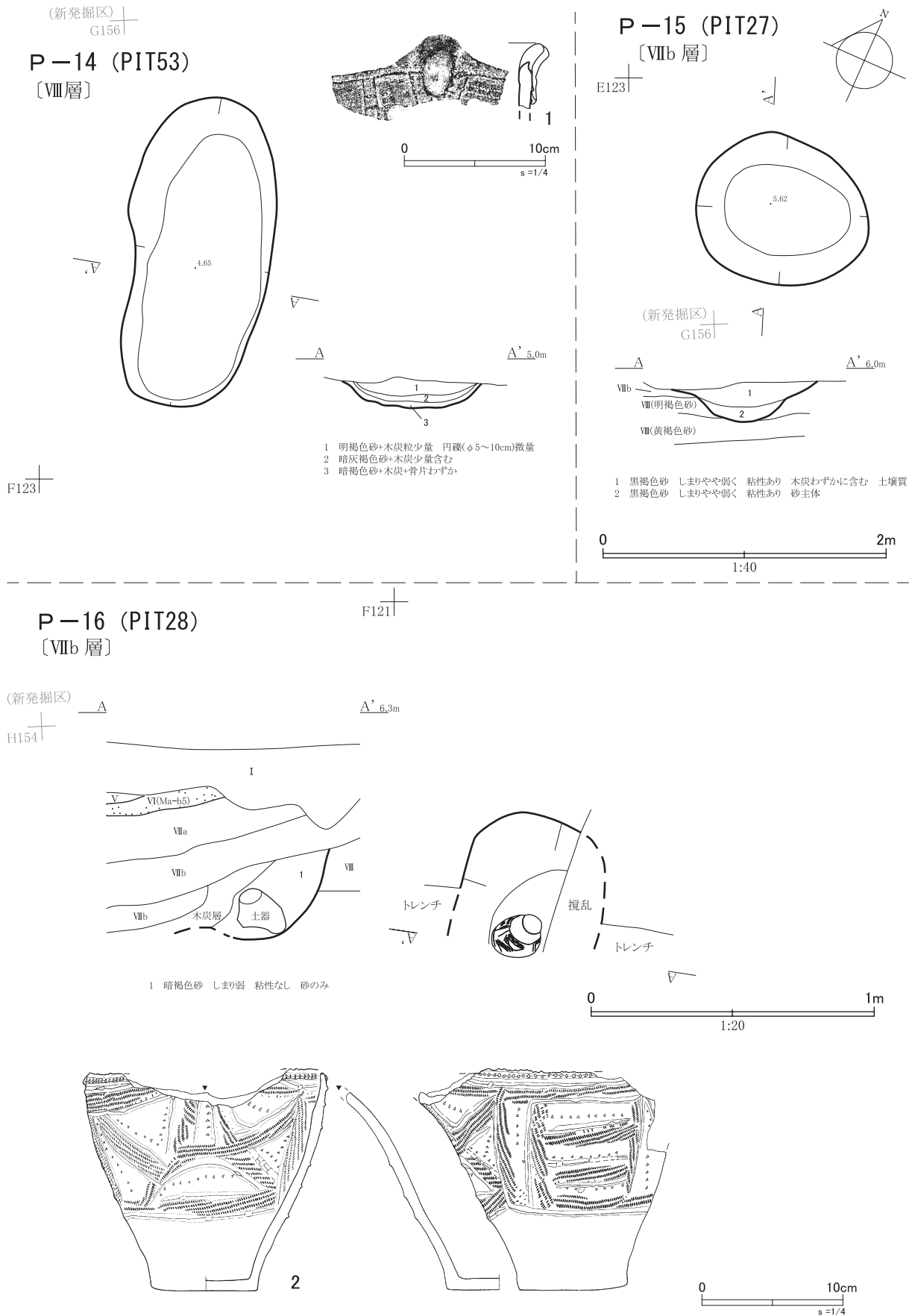
P-21 (PIT63)（図Ⅶ-7 表Ⅶ-1・3 図版34・70）

Ⅸ層で検出したやや小型の楕円形土坑。覆土は炭化木片とベンガラを多く含み、下位からベンガラが付着した大型の台石が出土した。ベンガラ範囲R-10に隣接し、関連する。

掲載遺物：1は台石。扁平な原石が利用され、正裏面に平滑面が見られる。全体的にベンガラが付着している。

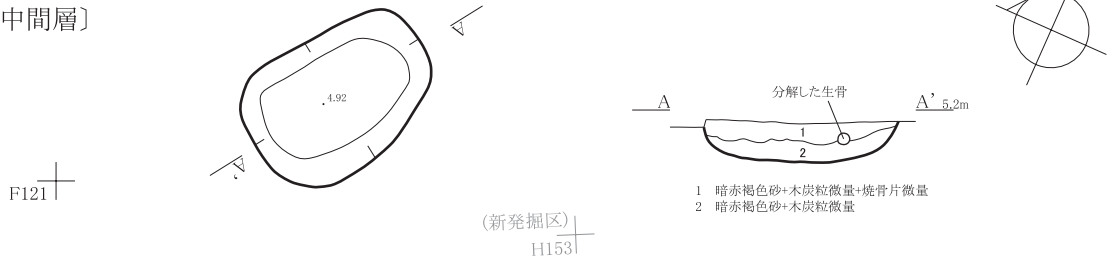
P-22 (PIT61)（図Ⅶ-7 表Ⅶ-1・3 図版34）

Ⅸ層で検出した、やや小型で浅い円形土坑。ベンガラ・炭化木片を少量含む。ベンガラ範囲R-9に一部重複し、関連がある。

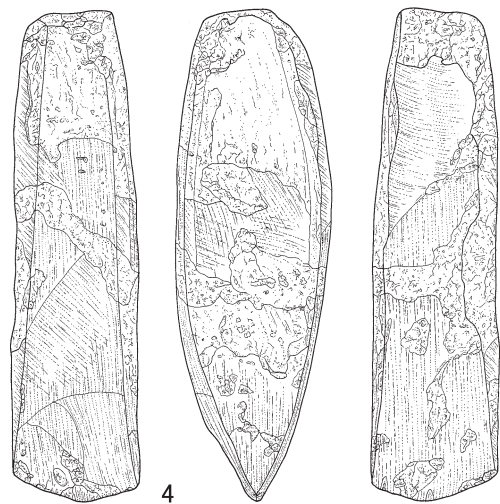
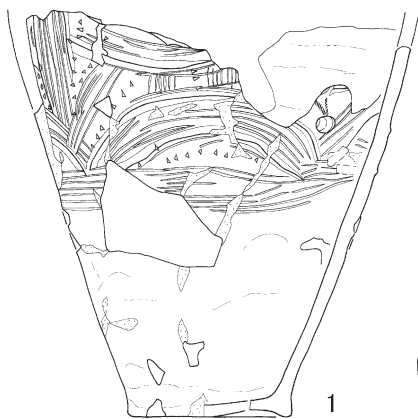
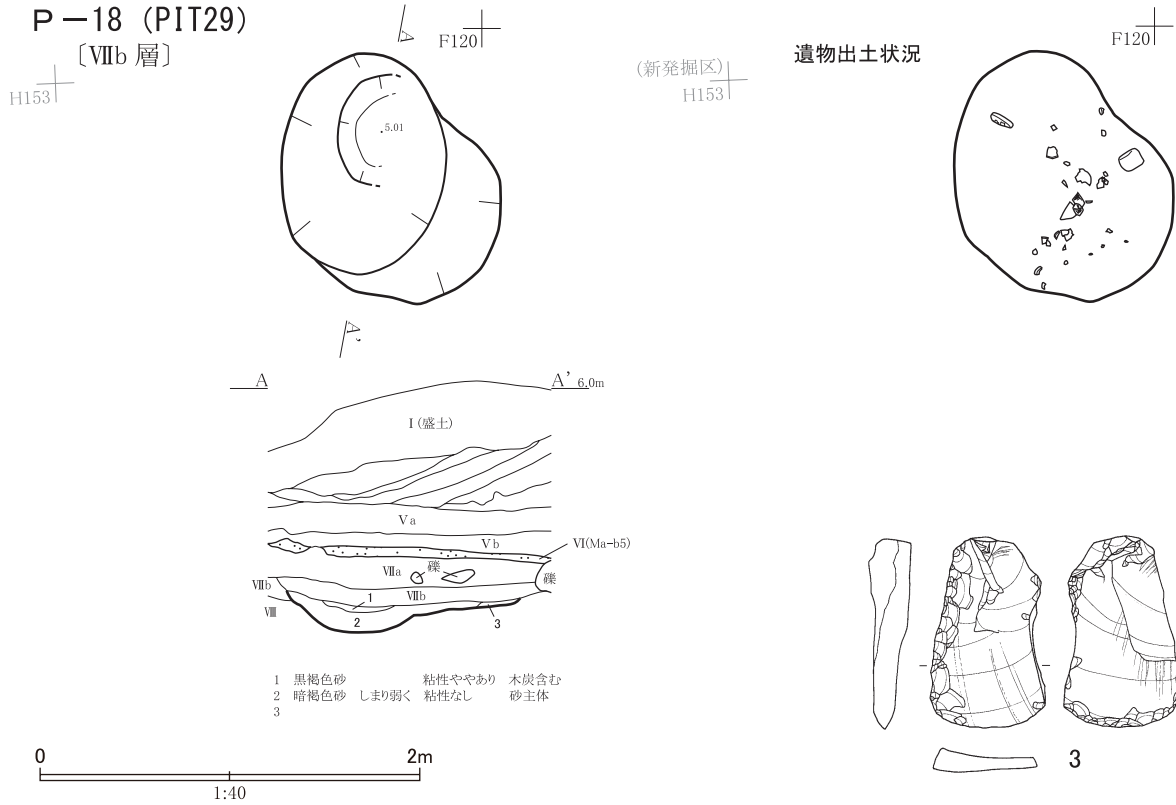


図Ⅶ-5 P-14・15・16 (PIT53・27・28)

P-17 (PIT47)
〔Ⅷ層中間層〕



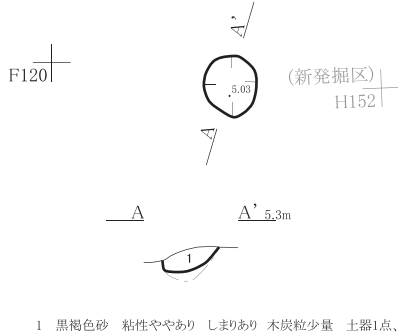
P-18 (PIT29)
〔Ⅶb層〕



図Ⅶ-6 P-17・18 (PIT47・29)

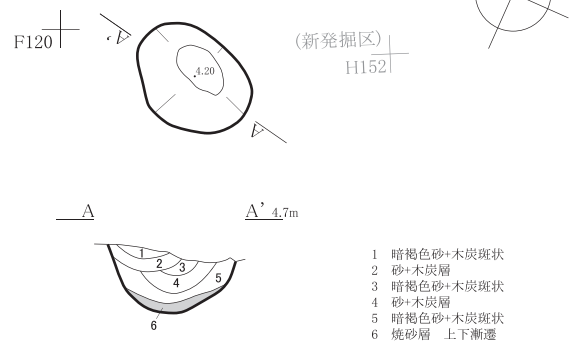
P-19 (PIT45②)

[VIII層中間層]



P-20 (PIT65)

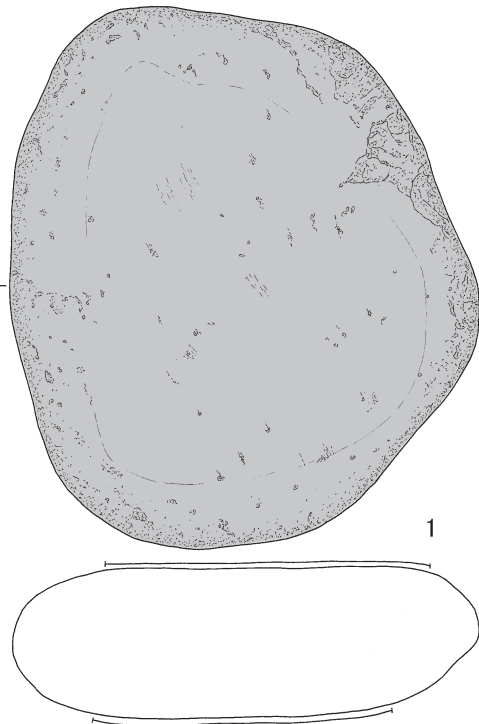
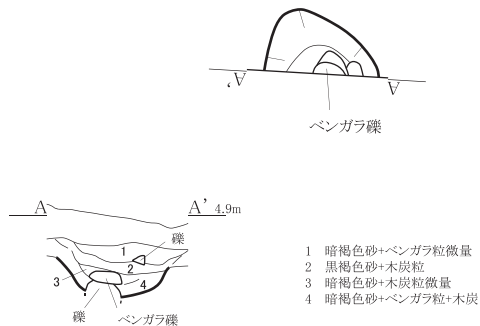
[IX層]



F120 (新発掘区) H152

P-21 (PIT63)

[IX層]



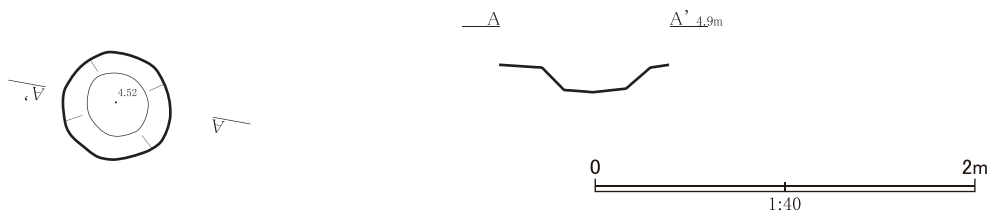
0 10cm s=1/4

(新発掘区) H152

F119 H151

P-22 (PIT61)

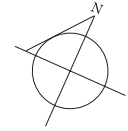
[IX層]



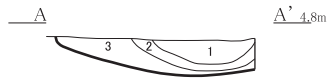
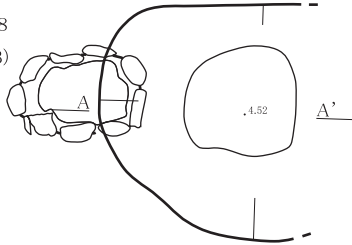
図Ⅵ-7 P-19・20・21・22 (PIT45・65・63・61)

P-23 (PIT30A)
〔Ⅷ層〕

F112

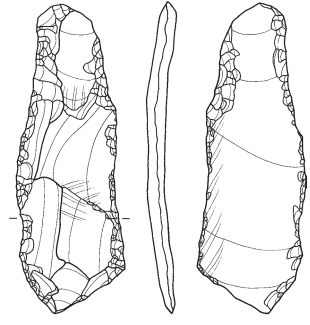


S F-8
(PIT30B)



(新発掘区)
1143

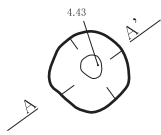
- 1 10VR2/3 黒褐色砂
- 2 10VR2/2 黒褐色砂 腐植に含む
- 3 10VR2/3 黒褐色砂



P-24 (PIT31)
〔Ⅷ層〕

F111

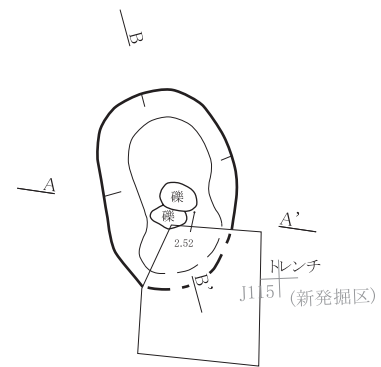
F90



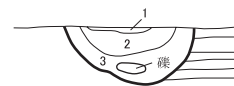
(新発掘区)
1142

- 1 明褐色砂
- 2 黒褐色砂しまりあり 木炭粒
- 3 暗褐色砂 木炭粒

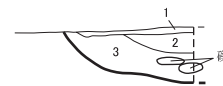
P-27 (PIT50)
〔Ⅷ層〕



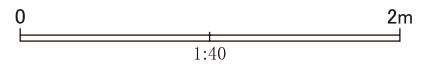
A A' 3.0m



B B' 3.0m



- 1 黒褐色砂 泥炭ブロック(φ1cm)含む
- 2 黒褐色砂 炭粒(φ5mm)含む
- 3 暗褐色砂



P-28 (PIT69)
〔Ⅷ層中間層〕

(新発掘区)
J113



A A' 3.4m



- 1 黒褐色砂

G89

図Ⅶ-8 P-23・24・27・28 (PIT30A・31・50・69)

P-23 (PIT30A) (図Ⅶ-8 表Ⅶ-1・3 図版34・70)

Ⅷ層で検出した、やや浅い大型楕円形土坑。下位には石組炉SF-8がある。覆土には続縄文土器4点、ナイフ1点、フレイク10点のほか、炭化物、焼骨片などが含まれていた。

掲載遺物：1はナイフ。縦長剥片を素材として、縁辺全体に半両面加工が施されている。上部はわずかに柄部状に成形されている。

P-24 (PIT31) (図Ⅶ-8 表Ⅶ-1 図版34)

Ⅷ層で検出した、小型円形土坑。

P-27 (PIT50) (図Ⅶ-8 表Ⅶ-1・3 図版34)

Ⅷ層で検出した、楕円形土坑。

P-28 (PIT69) (図Ⅶ-8 表Ⅶ-1・3 図版34)

Ⅷ層中間層で検出した、浅い楕円形土坑。

PS-25 (配石1)

[IX層]

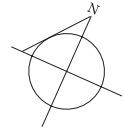
(新発掘区)



F120



1 暗褐色砂+木炭粒



PS-26 (配石3)

[IX層]

F120

(新発掘区)

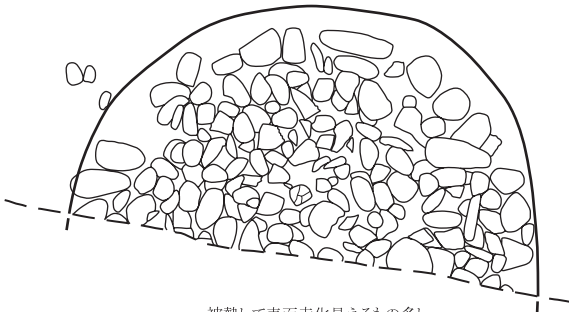
H152

F120

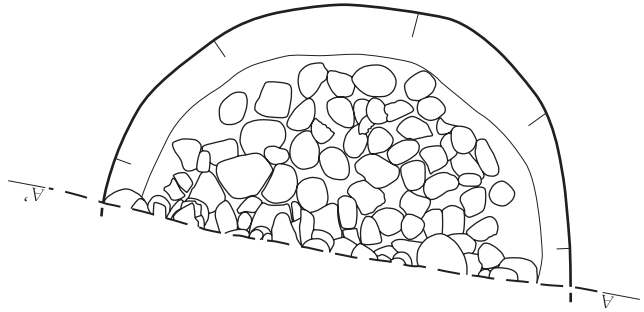
H153

上位

下位

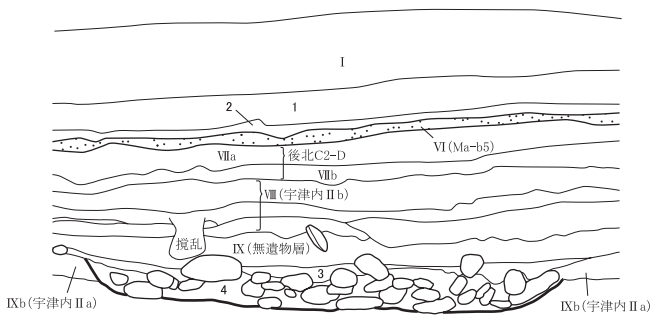


被熱して表面赤化見えるもの多し



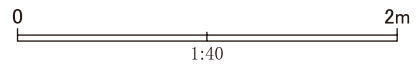
A

A' 6.2m



- 1 土壌質の黒褐色砂
- 2 浮動したVI軽石を斑状に分層 黒褐色砂

- [PS-26]
- 3 暗褐色砂+木炭粒
- 4 黒褐色砂+木炭+礫



図Ⅶ-9 PS-25・26 (配石1・3)

(2) 集石を伴う土坑

6基 (P S - 25~30) を検出した。時期は検出層位から、宇津内Ⅱ a 式期3基 (P S - 25~27)、後北C₂・D式期3基 (P S - 28~30) である。

P S - 25 (配石 1) (図Ⅶ - 9 表Ⅶ - 1 図版35)

Ⅸ層で検出した。小型円形土坑の坑底に20cm大の礫を配置し、その周囲にやや小型の礫を並べている。覆土に木炭粒を含む。

P S - 26 (配石 3) (図Ⅶ - 9 表Ⅶ - 1 口絵3、図版35)

Ⅸ層でS - 9 (配石 2) の下位から検出した。大型の浅い円形 (推定) 土坑に礫が敷き詰められていた。やや大型の丸みを帯びた扁平礫が多く、大きさ・形状が比較的整っている。表面が赤変しているものが多く、被熱したとみられる。集石のすき間の土壌には、炭化木片がやや多く含まれている。

P S - 27 (PIT64) (図Ⅶ - 10 表Ⅶ - 1・3 図版35・70)

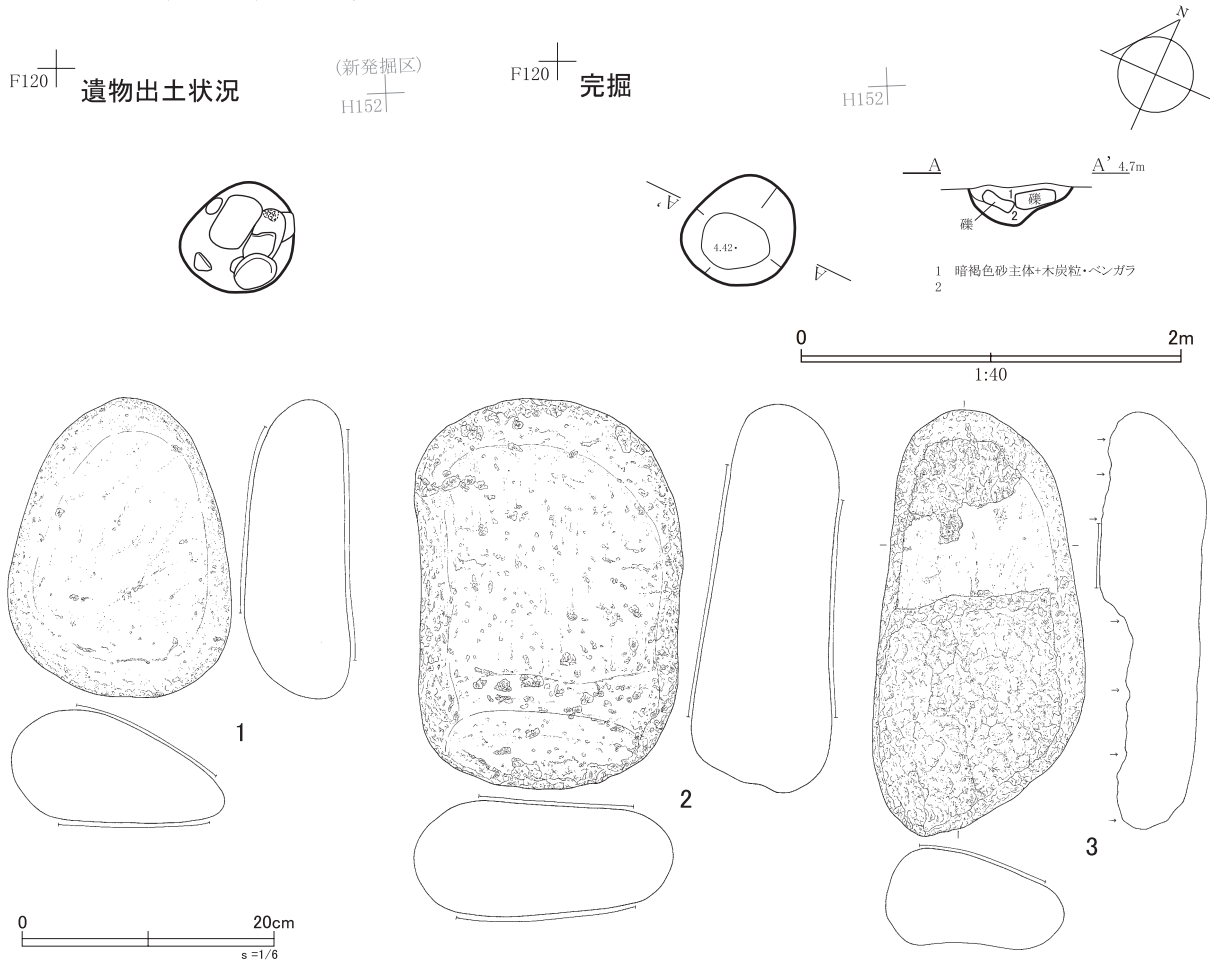
Ⅸ層で検出した。小型円形土坑に台石を含む礫が詰められていた。

掲載遺物: 1~3は台石。1・2は正裏面に平滑面が見られる。3は正面が大きく剥落している。

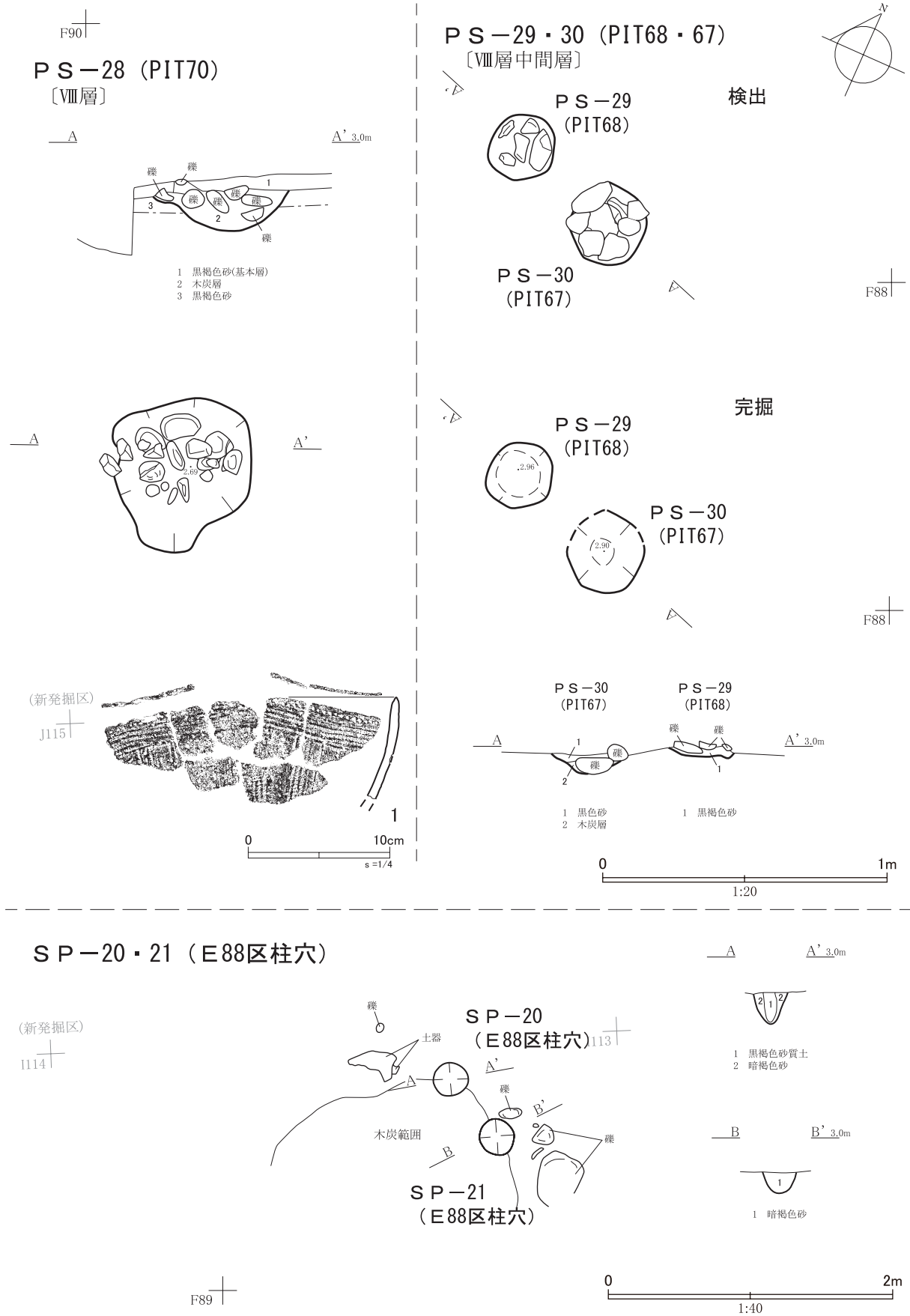
P S - 28 (PIT70) (図Ⅶ - 11 表Ⅶ - 1・3 図版35・70)

Ⅷ層で検出した。不整楕円形の土坑中に礫20点の集石がある。覆土から黒曜石チップ59点が出土した。

P S - 27 (PIT64) [Ⅸ層]



図Ⅶ-10 P S - 27 (PIT64)



図Ⅶ-11 PS-28・29・30 (PIT70・68・67) SP-20・21 (柱穴)

掲載遺物：1は後北C₂・D式。帯縄文に沿う微隆起線により口縁部に横位、胴部に縦位の区画を配し、三角列点を施している。口唇部が磨滅しており、擬口縁の可能性もある。

PS-29・30 (PIT68・67) (図VII-11 表VII-1 図版35)

VIII層中間層で2基隣接して検出した。小型円形土坑から20cm前後の礫が密に検出された。PS-30は覆土下位に木炭層がある。

(3) 柱穴状小土坑 (図VII-11 表VII-1)

2基(SP-20・21、調査時は「柱穴」)が近接して検出された。時期は検出層位から、後北C₂・D式期とみられるが、さらに上位からの掘り込みの可能性もある。周囲からは大型土器片・礫が出土し、木炭が分布する。

(4) 石組炉

2基(SF-8・9)を検出した。時期はいずれも検出層位から、宇津内II b式期である。

SF-8 (PIT30B) (図VII-12 表VII-1・3 図版5・71)

VIII層で土坑P-23(PIT30A)の下位から検出した。火床面を安山岩製の垂円礫で囲んでおり、楕円形に近い方形を呈する。火床面(7層)は赤褐色を呈し強く被熱している。その上面(6層)には灰が分布し焼骨片がみられる。さらに上位には炭化木片が多く含まれる。

掲載遺物：1はナイフ。下半部が欠損している。上部は柄部と見られ、半両面加工により矩形に成形されている。2は台石。扁平な原石が利用され、正裏面に平滑面が見られる。

SF-9 (PIT35) (図VII-12 表VII-1・3 図版5・71)

VIII層で、SF-8の東約6mの位置で検出した。安山岩製の垂円礫で囲んでおり、隅丸三角形(涙形、卵形)を呈する。礫はタール状の炭化物が付着しているものが多い。火床面は暗褐色を呈し、その上位から多量の炭化木片のほか獣骨片が検出された。

掲載遺物：3～5は台石。3・5は扁平、4は裏面に厚みのある原石が利用されている。3・4は正面、5は破損品で、正裏面に平滑面が見られる。

(5) 焼土 (図VII-13～20 表VII-1～3 図版6・36・37・71)

42か所を検出した。検出層位から、宇津内II b式期18か所(F-9～13・16～18・20～26・28～30)、後北C₂・D式期24か所(F-14・15・19・31・33・35・38～55)と推察される。

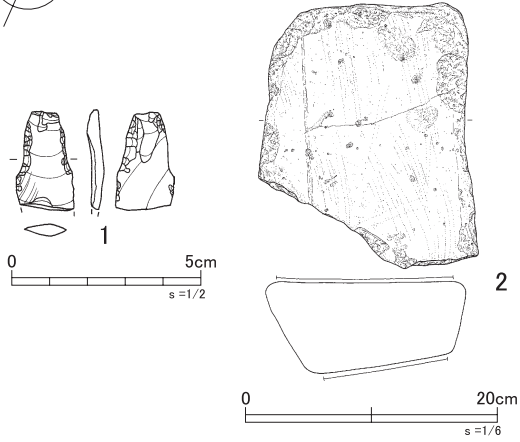
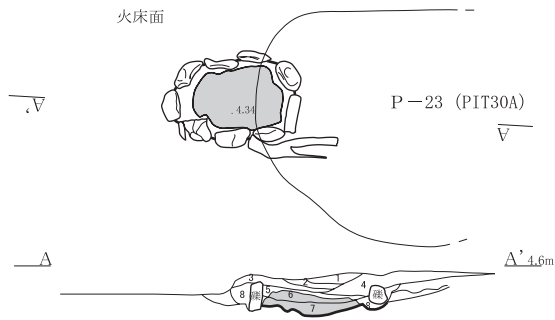
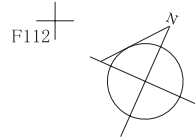
調査時に「PIT」番号を付した焼土は、落ち込み中として検出したもので、F-11・13・21・26～30・34・40～44・46・47・49～51・53～55がこれにあたる。明瞭な被熱層のあるもの以外にも、「焼砂」が分布するものや「火床面」が観察されるものなど、積極的に焼土に含めた。これ以外は平面で検出し、発掘区ごとに焼土番号を付した(例：F120区焼土2)。F-9・10・12・14～20・22・23・25・26・31・33・35・38・39・45・48・52がこれにあたる。また「木炭範囲」・「骨範囲」とした中に「焼砂」があるものも焼土とした(例：F-24、「炭・骨範囲2」)。

なおF-29(PIT39)の周辺(F110・111区、VIII層)はベンガラを含む赤褐色の土壌が広がり、F-29とともにベンガラ製作にかかわる範囲と考えられる。

掲載遺物

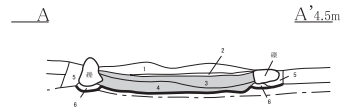
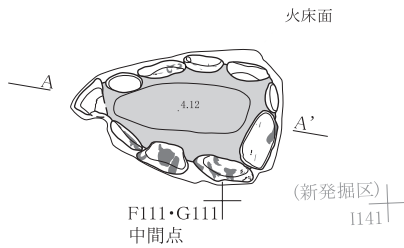
F-26 (PIT34)：1は宇津内II b式。突起部に菱形に近い楕円文、3本単位の微隆起線による横位区画、同心円文、山形文を配している。内外面の口縁部に炭化物がやや多量に付着している。

S F - 8 (PIT30B)
〔Ⅷ層〕



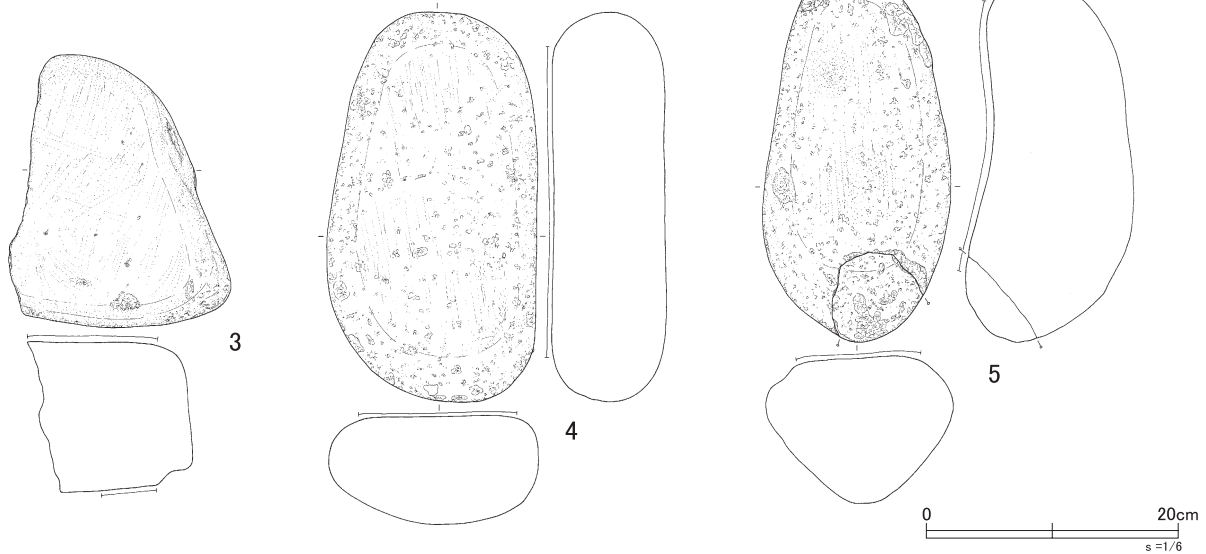
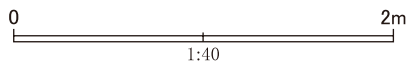
- 1 10YR2/2 黒褐色砂 木炭による着色?
- 2 10YR2/3 黒褐色砂
- 3 10YR2/2 黒褐色砂 木炭による着色?
- 4 10YR3/4 暗褐色砂 Ⅷ層の一部ないしPIT30覆土 底面はPIT30底面近くⅧ層中の黒色砂で、木炭(φ1cm)5% やや赤色化
- 5 10YR2/2 黒褐色砂 木炭による着色
- 6 10YR3/3 黒褐色砂 鉄or焼砂(φ1cm)斑状焼骨片(φ1cm)10% 使用中の堆積土か、粘性ややあり 灰ないし未分解の有機物を含む?
- 7 10YR3/3 赤褐色砂 被熱した砂層 遺物含まない、上面が火床面
- 8 10YR2/2 黒褐色砂 石囲いの礎を設置したくぼみ内の充填土

S F - 9 (PIT35)
〔Ⅷ層〕



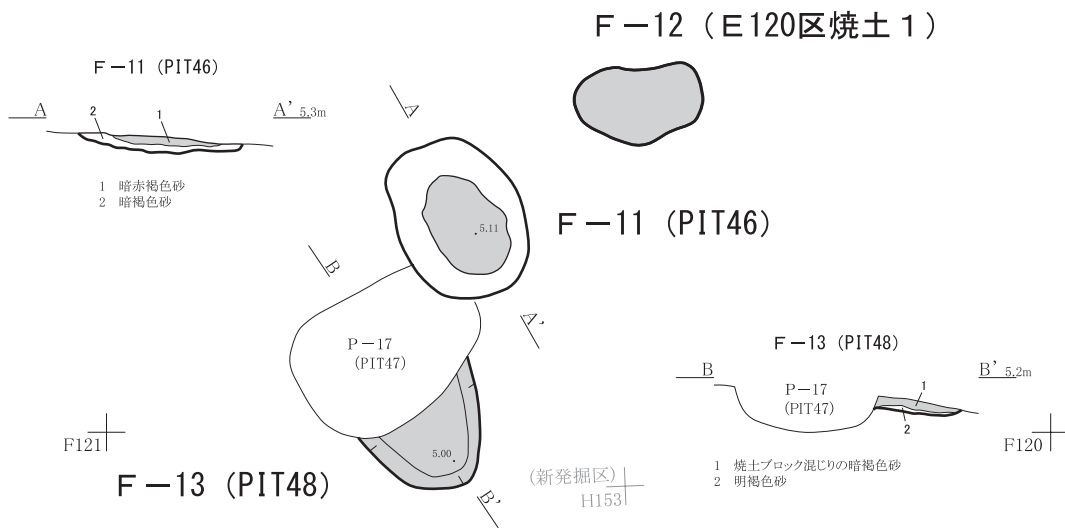
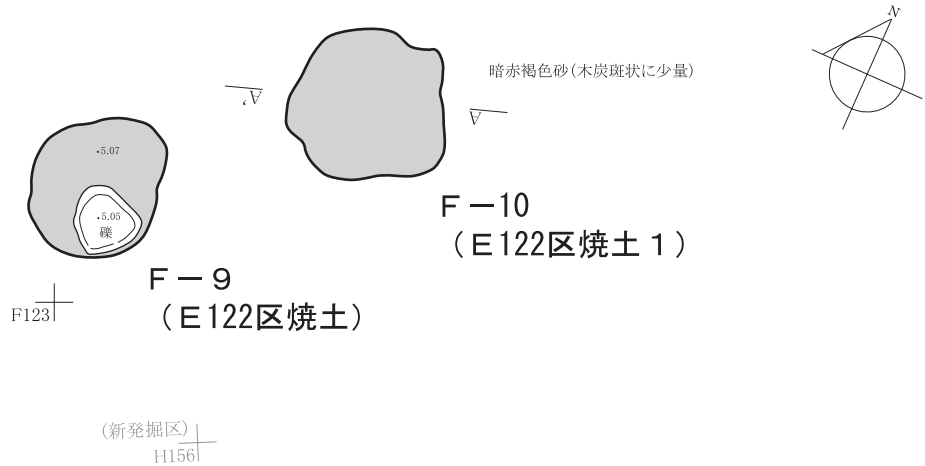
- 1 明褐色砂のみ
- 2 焼骨混じり赤褐色砂 鉄分が沈着して硬い
- 3 焼骨多量に混じる灰褐色砂
- 4 暗褐色砂+焼骨多+木炭
- 5 礎の裏側は暗赤褐色砂 裏込めの砂でまじりなし
- 6 暗灰褐色砂+焼骨片(微量)

■ : タール付着トーン 60%

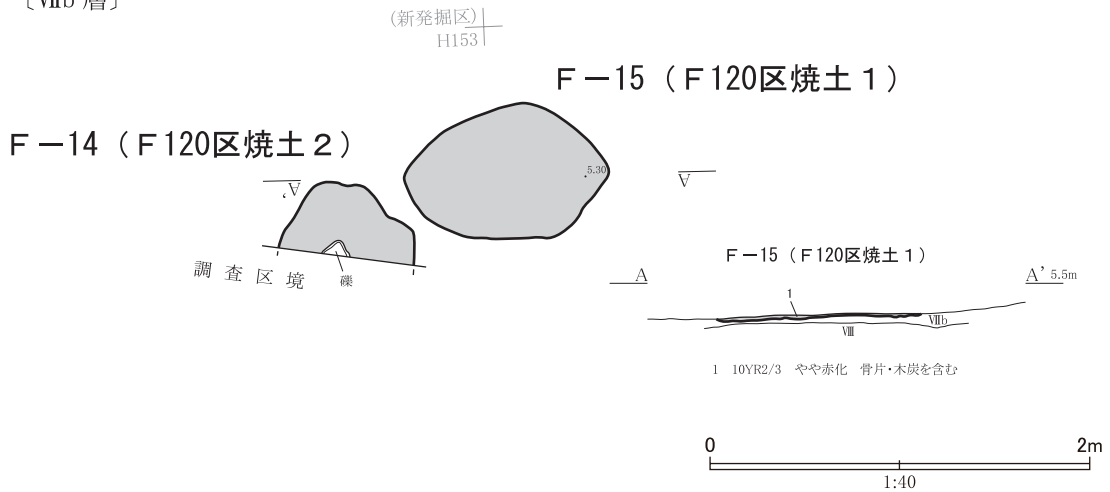


図Ⅵ-12 S F - 8 ・ 9 (PIT30B ・ 35)

F-9 ~ 13
〔Ⅷ層〕

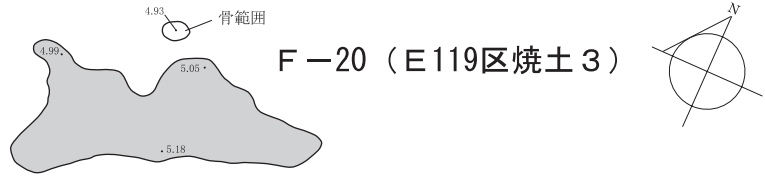


F-14・15
〔Ⅷb層〕



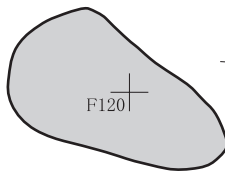
図Ⅶ-13 F-9~15 (PIT46・48ほか)

F-16 ~ 18・20
〔VIII上層〕



暗赤褐色砂+焼骨少量(魚骨か?)、粘性あり。

F-16 (E119 Burned Soil 1)

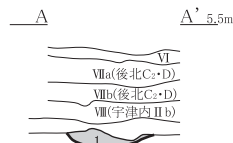


F-18 (F119 Burned Soil 1)



F119

F-17 (F119 Burned Soil 2)



1 焼土 赤褐色砂+木炭(炭化種子含む)少量

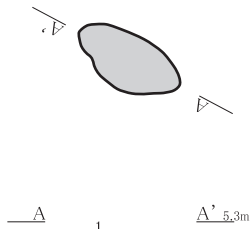
F-17 (F119 Burned Soil 2)



F120

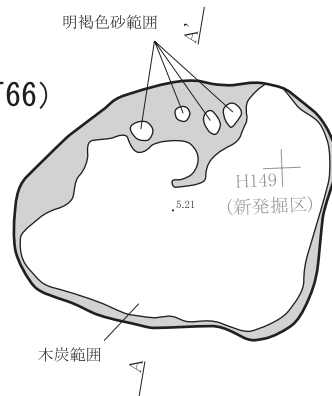
(新発掘区)
H152

F-19 (F119 Burned Soil 1)
〔VIIb層〕

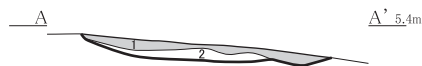


1 赤褐色砂 サラサラ 炭化物微量含む
2 VIIb

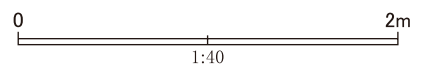
F-21 (PIT66)
〔VIII上層〕



F117



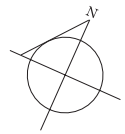
1 黄褐色砂+木炭粒
2 木炭層 黒褐色砂+木炭粒



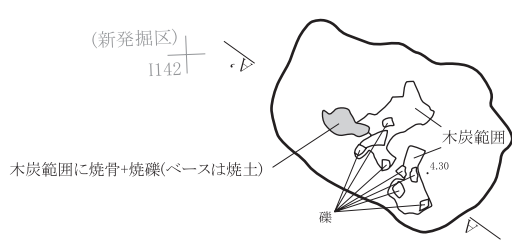
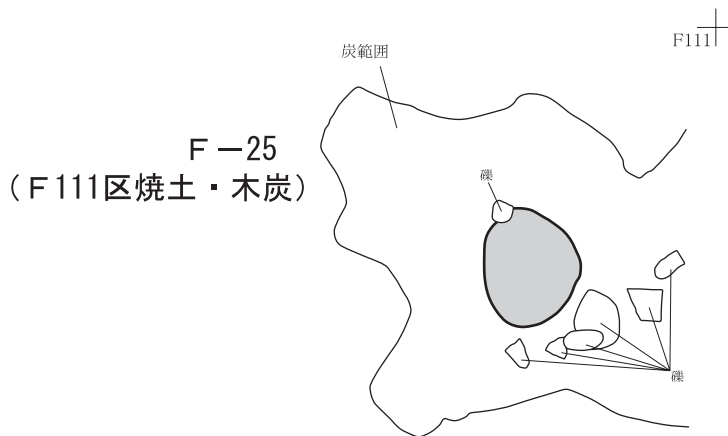
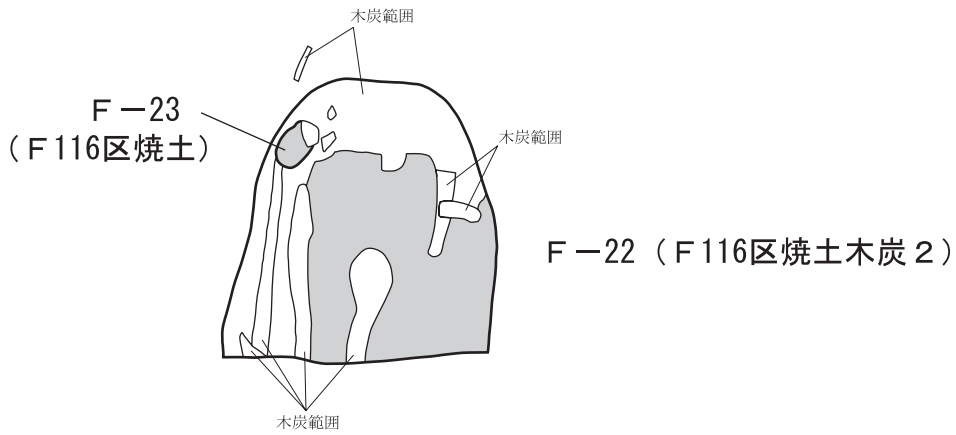
図VII-14 F-16~21 (PIT66ほか)

F-22 ~ 25
〔Ⅷ層〕

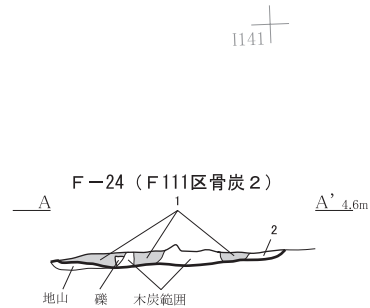
H148 (新発掘区)



F116

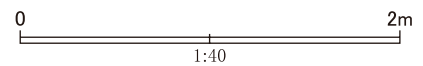


F-24 (F111 zone bone charcoal 2)



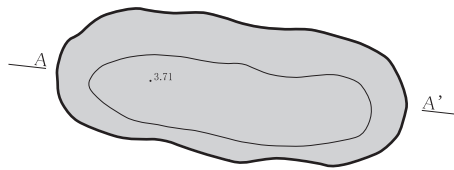
- 1 暗赤褐色砂 粘性あり 焼骨片少量+木炭 焼礫混じる。
- 2 褐色砂 粘性弱い 焼骨片微量

G111

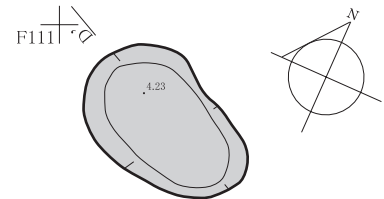


図Ⅶ-15 F-22~25 (焼土・木炭)

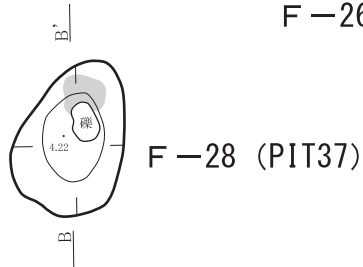
F-26・28～30
〔VIII層〕



F-26 (PIT34)

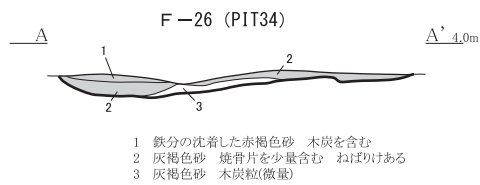


F-30 (PIT36)
〔VIII下層〕

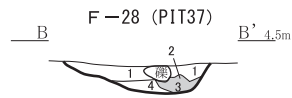


F-28 (PIT37)

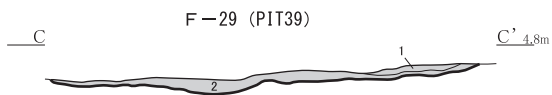
(新発掘区)
1142



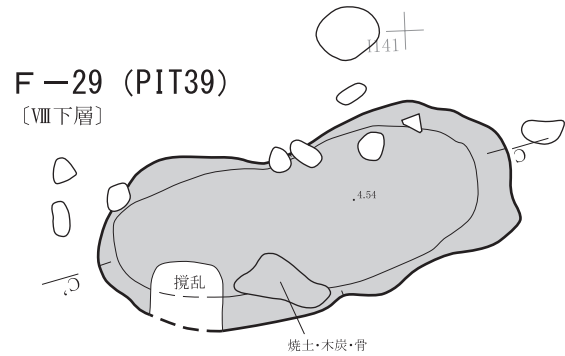
- 1 鉄分の沈着した赤褐色砂 木炭を含む
- 2 灰褐色砂 焼骨片を少量含む ねぼりけある
- 3 灰褐色砂 木炭粒(微量)



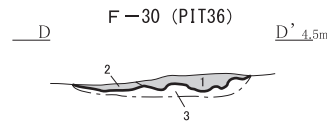
- 1 褐色砂 木炭少量 焼骨微量
- 2 暗褐色砂 粘性あり 焼骨片少量
(2層と3層の境が火床面と考える)
- 3 暗灰褐色砂 粘性あり 砂
- 4 灰色砂 砂



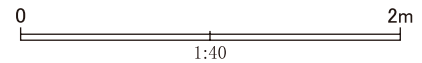
- 1 暗赤褐色砂 粘性あり 焼骨片+木炭
- 2 褐灰色砂 粘性弱 しまりあり 木炭少量+焼骨微量



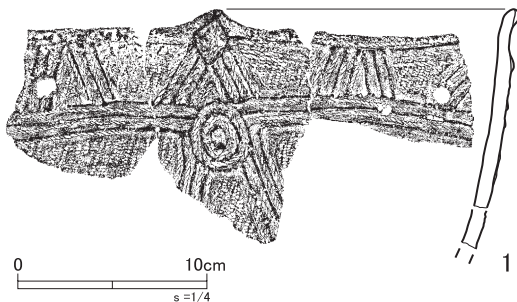
F-29 (PIT39)
〔VIII下層〕



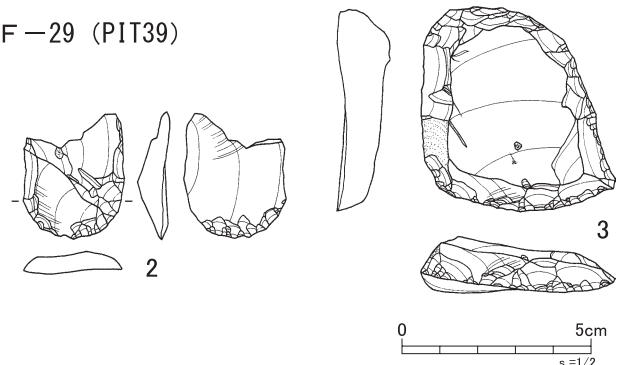
- 1 焼骨片混じりの灰褐色砂 粘性あり
- 2 焼骨片混じりの褐色砂
- 3 地山



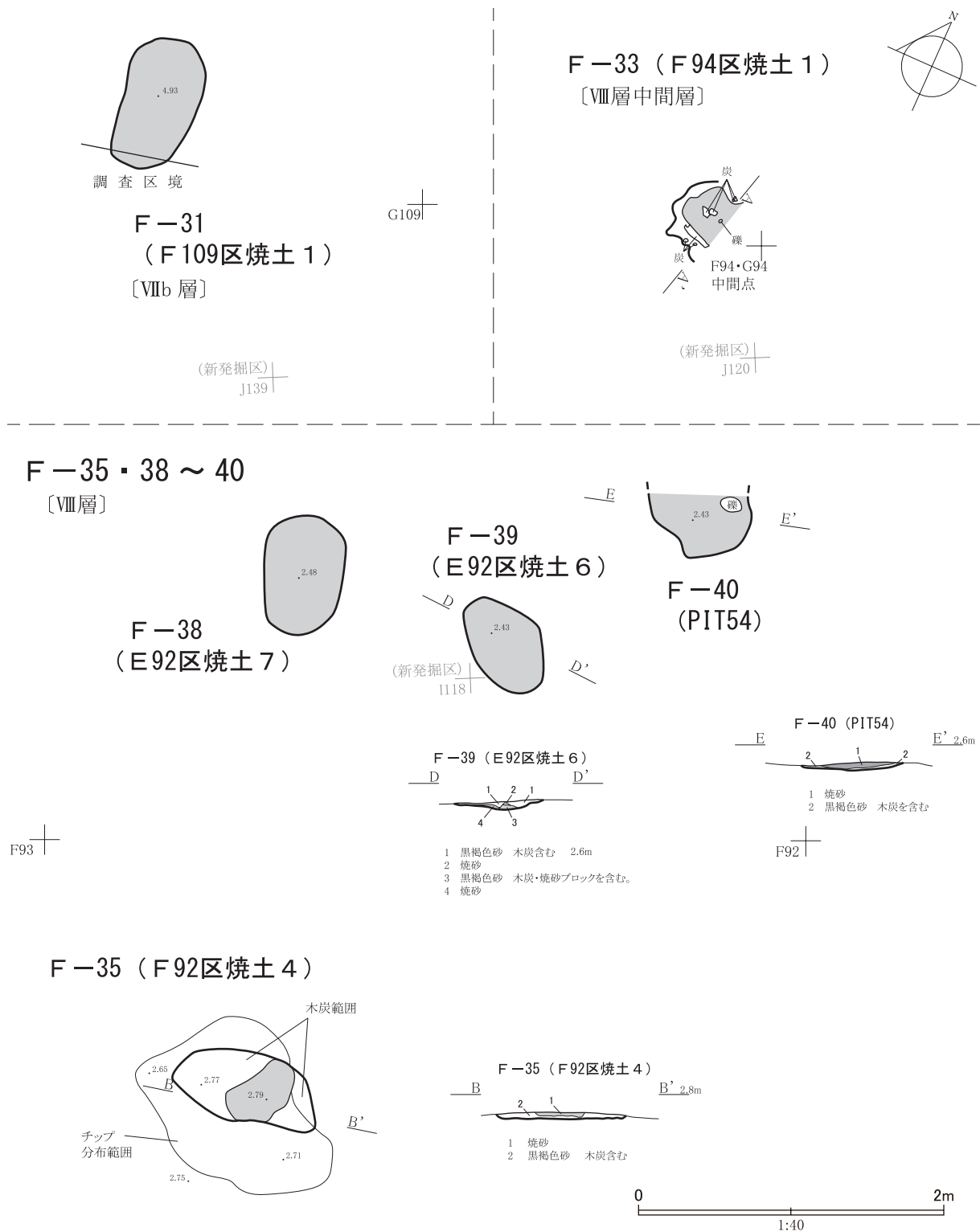
F-26 (PIT34)



F-29 (PIT39)

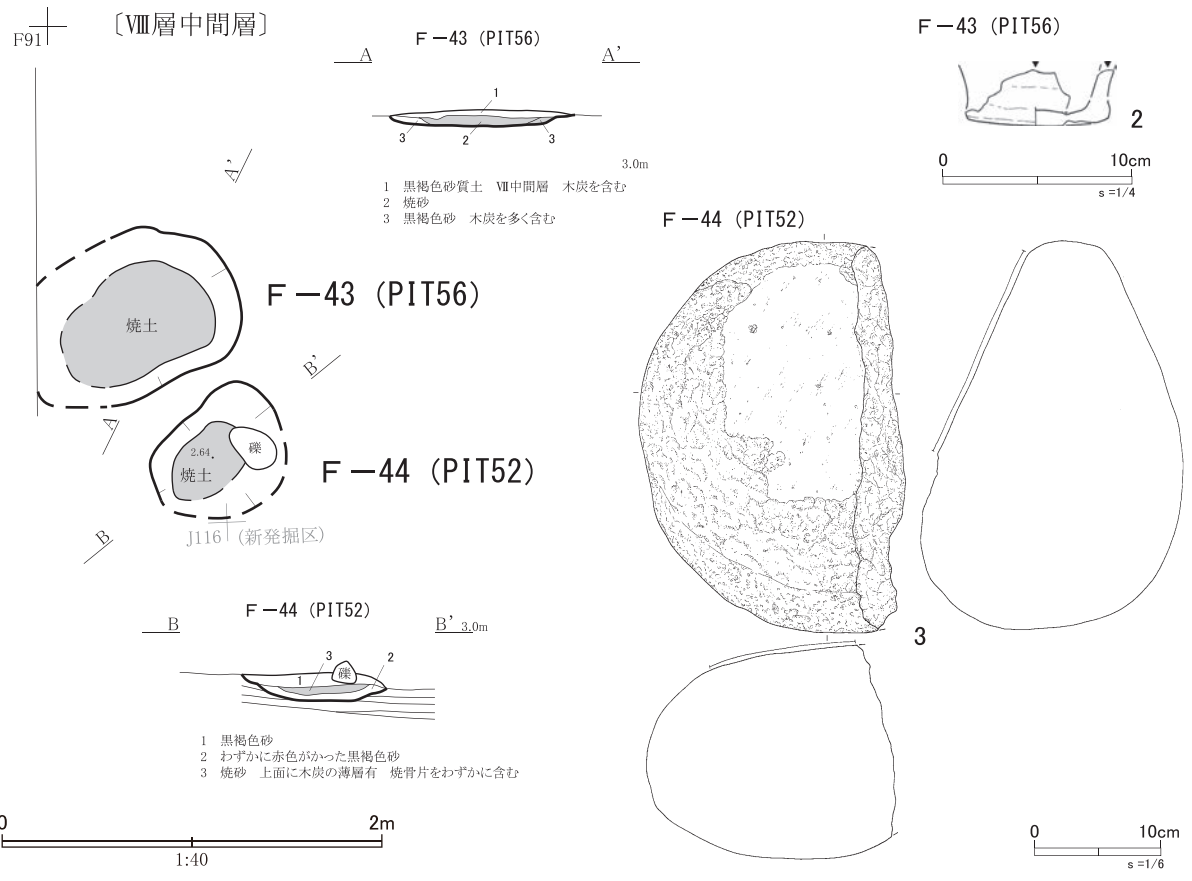
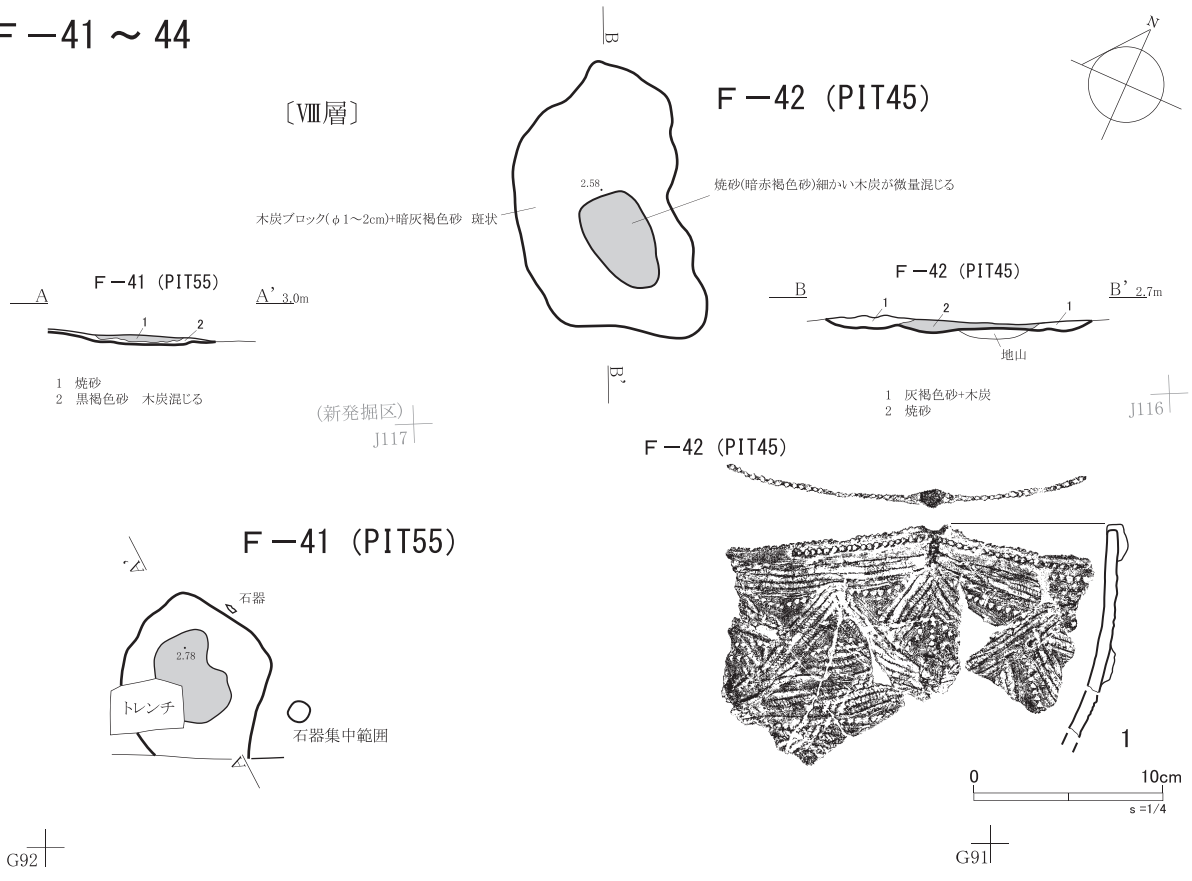


図VII-16 F-26・28～30 (PIT34・36・37・39)



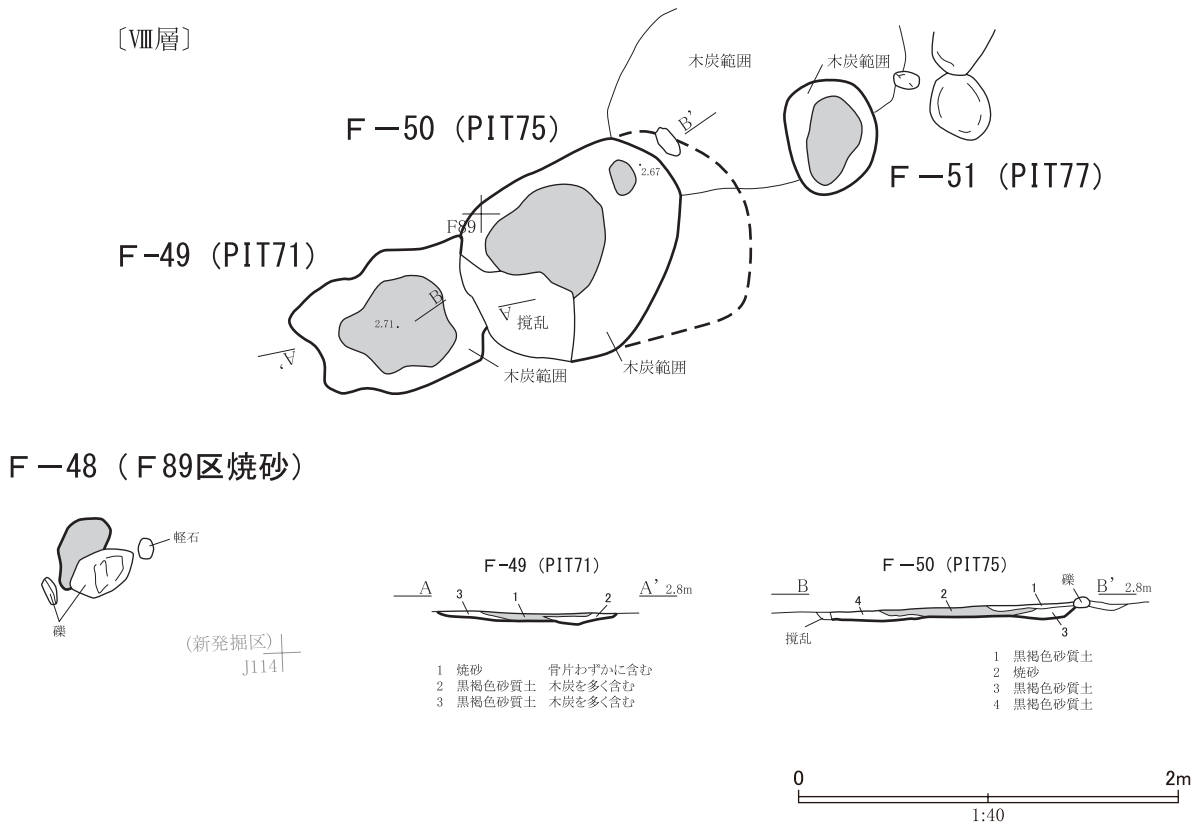
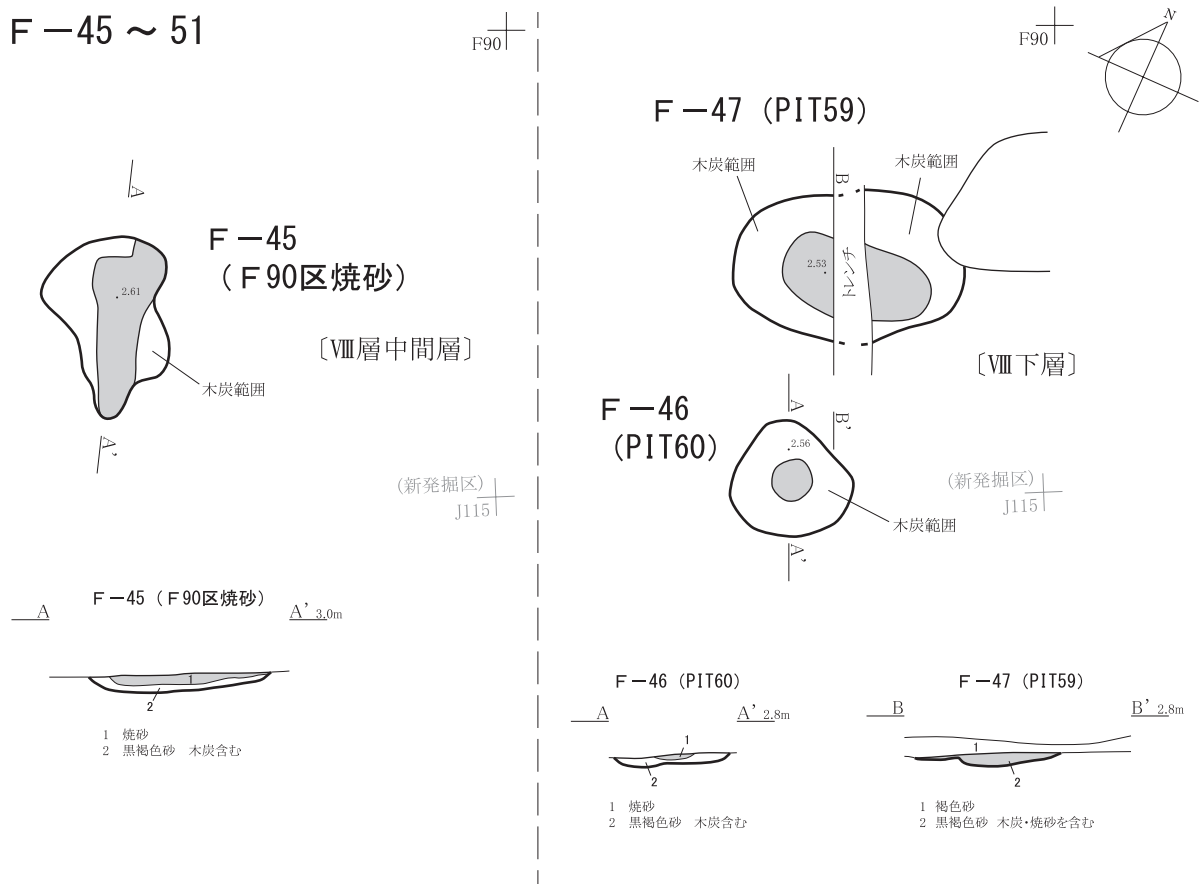
図Ⅶ-17 F-31・33・35・38～40 (PIT40ほか)

F-41 ~ 44



図VII-18 F-41~44 (PIT55・45・56・52)

F-45 ~ 51

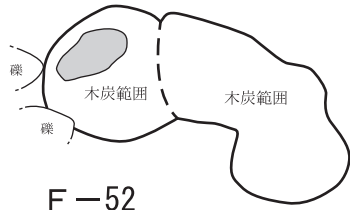


図Ⅶ-19 F-45~51 (PIT75ほか)

F-52 ~ 55
〔Ⅷ層〕

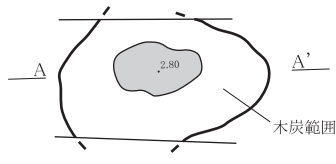
(新発掘区)

1113

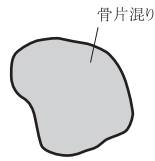
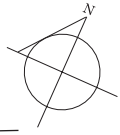
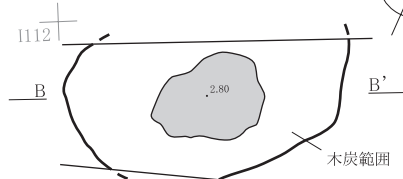


F-52
(E88区焼土)

F-53 (PIT72)

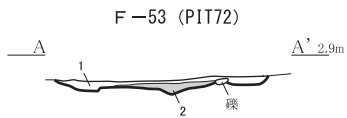


F-55 (PIT73)

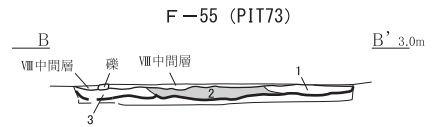


F-54 (PIT78)

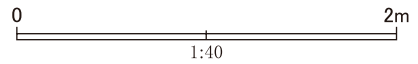
F88



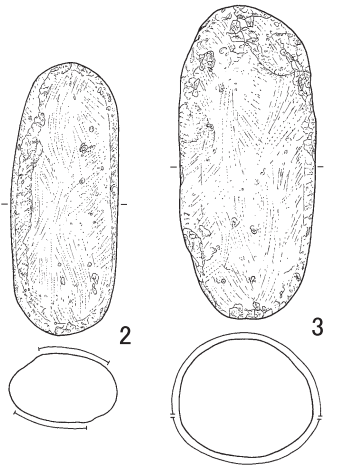
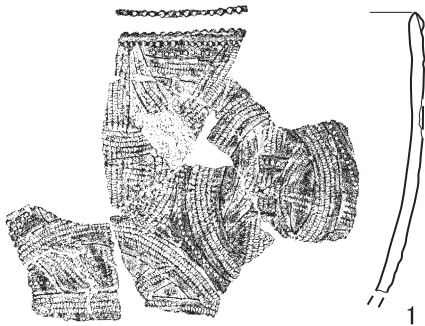
- 1 黒褐色砂質土 木炭を多く含む
- 2 焼砂



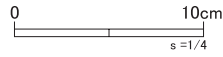
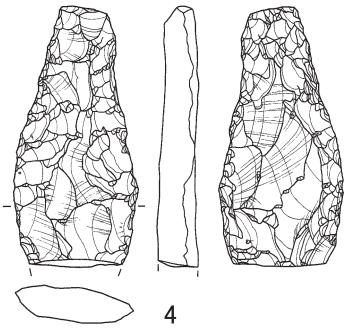
- 1 黒褐色砂質土 木炭を含む
- 2 焼砂
- 3 黒褐色砂質土 木炭を含む



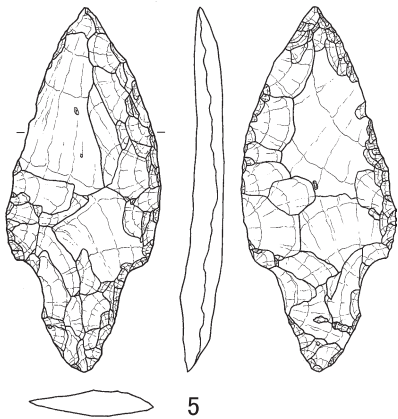
F-50



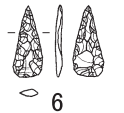
F-51



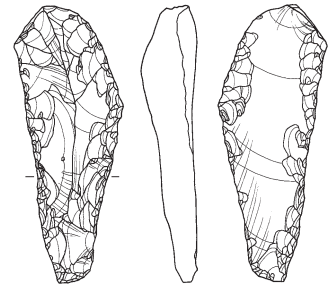
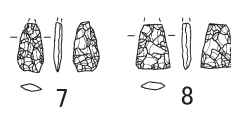
F-53



F-54



F-55



図Ⅶ-20 F-50~55 (PIT73ほか)

F-29 (PIT39)：2はナイフ。上半部が欠損している。下端に平坦な半両面加工が施され、円弧状の刃部が作出されている。3はスクレイパー。急角度加工により主に下端に円弧状の刃部が作出されている。

F-42 (PIT45)：1は後北C₂・D式。口縁突起と胴部の貼瘤を縦軸に、山形の帯縄文など4単位の文様が配置されているとみられる。

F-43 (PIT56)：2は後北C₂・D式の底部。底面はやや丸みを帯びる。

F-44 (PIT52)：3は台石。厚みのある原石が利用され、正面の一部に平滑面が見られる。

F-50 (PIT75)：1は後北C₂・D式。湾曲から大型深鉢とみられる。楕円文・弧線文の組み合わせによる文様が配置されている。2・3はすり石。いずれも棒状の原石が利用され、2は正裏面、3は全面的に擦痕が見られる。

F-51 (PIT77)：4はナイフ。下半部が欠損している。やや粗い両面加工が全面的に施されている。上部は矩形の柄部が作出され、器体中央の縁辺部は緩やかに湾曲している。

F-53 (PIT72)：5は石槍。安山岩製で粗い両面加工が全面的に施されている。基部は緩やかに収斂し、明瞭なカエシが見られる。刃部は右側縁のみ湾曲する形状である。

F-54 (PIT78)：6は石鏃。平基で両側縁は基部付近でややすぼまる。裏面にはわずかに素材面が残存している。

F-55 (PIT73)：7～11は石鏃。7・8は平基、9は凹基、10・11は下半部が欠損している。両側縁は7が基部付近でややすぼまり、8・10が直線的、9・11がやや湾曲する形状である。素材面は9・10の裏面に残存している。12はナイフ。縦長剥片を素材として、縁辺全体に半両面加工が施されている。

(6) 礫集中

3か所(S-8～10)を検出した。時期は検出層位から、S-8・9は宇津内Ⅱa式期、S-10は後北C₂・D式期とみられる。ただしS-10は「Ⅷ層」においても周辺からオホーツク式土器が出土しており、刻文期の可能性がある。

S-8 (E122区集石) (図Ⅶ-21 表Ⅶ-2 図版37)

Ⅷ層で検出した。浅くくぼんだ楕円形とみられる範囲の中央部に礫がまとまって出土した。

S-9 (配石2) (図Ⅶ-21 表Ⅶ-2・3 図版37)

Ⅷ層でP S-26(配石3)より上位から検出した。10～20cmほどの礫群を囲むように30cm前後の大型の亜円礫が配置されている。

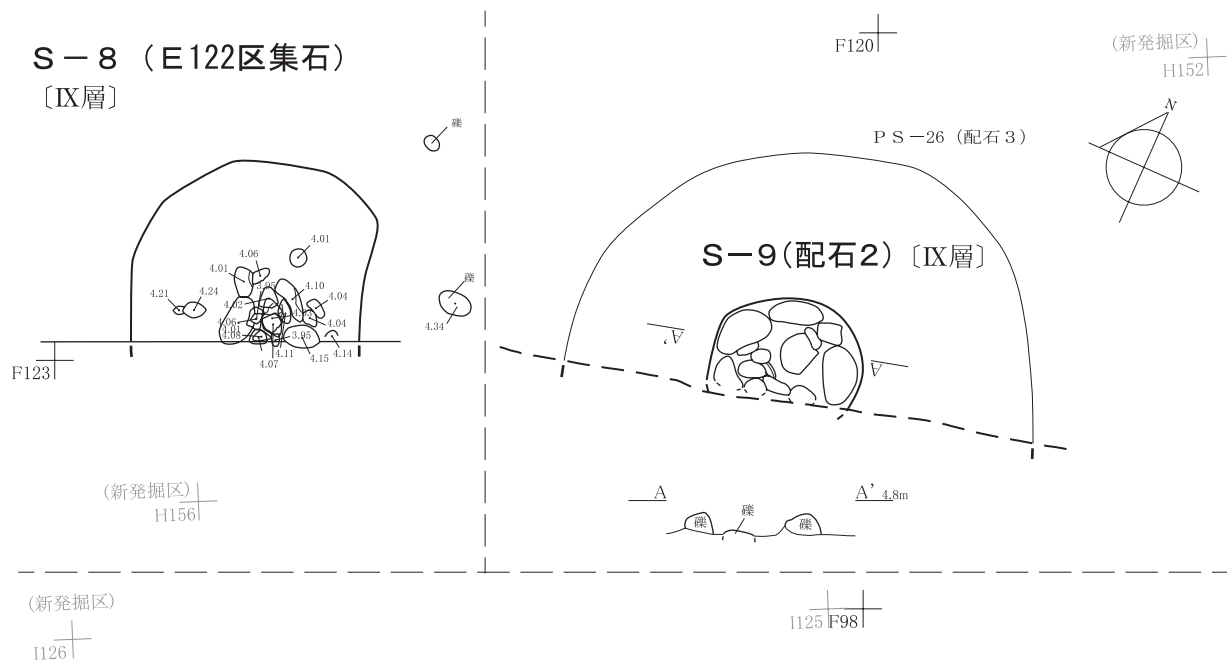
S-10 (鯨骨・集石) (図Ⅶ-21 表Ⅶ-2 図版37)

Ⅷ層で検出した。クジラの椎骨とみられる骨片が検出され、その周囲から30～40cmの大型扁平礫や小型の礫が出土した。鯨骨は痕跡的に糊状に残存している部分が多く、主体部を下層の砂ごと取りあげた。

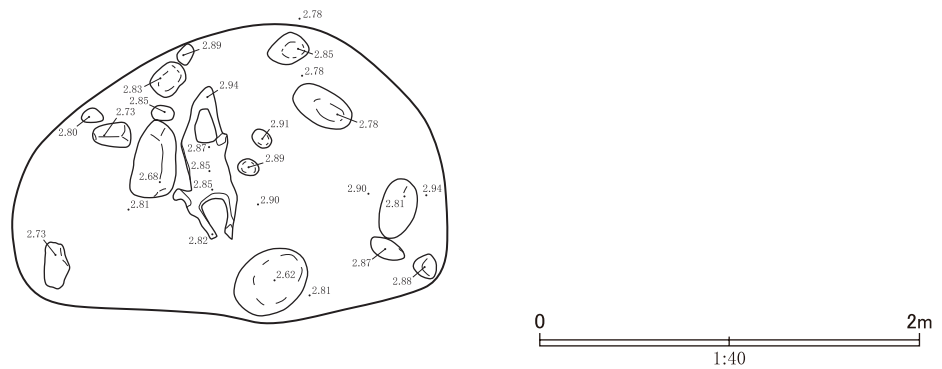
(7) フレイクチップ集中 (図Ⅶ-22・23 表Ⅶ-2・3 図版38・71)

10か所(FC-4～10・18～20)を検出した。時期は検出層位から、宇津内Ⅱa式期3か所(FC-4・5・18)、宇津内Ⅱb式期1か所(FC-7)、後北C₂・D式期6か所(FC-6・8～10・19・20)とみられる。

調査時は、各発掘区の「石器集中」(例：E122区石器集中1)とし、FC-7は「F117区メノウ



S-10 (F98区鯨骨・集石)
〔VIII層〕



図Ⅶ-21 S-8~10 (集石・配石)

集中」として取り上げている。FC-7以外は黒曜石のフレイクチップを主体とする集中域で、石鏃などの剥片石器類が少数含まれている。

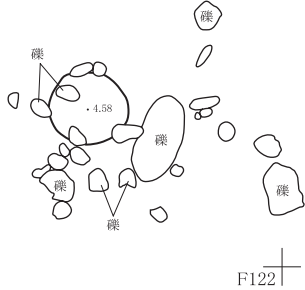
出土点数は、土壌水洗により回収した微細なチップ類を含め、FC-5が2,636点（うち石鏃2点）、FC-7が1,301点（メノウチップが主体）が数えられている。これ以外は「包含層」としてとりあげたものが多い。また「炭範囲」・「骨範囲」とした中にも多数のフレイクチップが含まれている。

掲載遺物

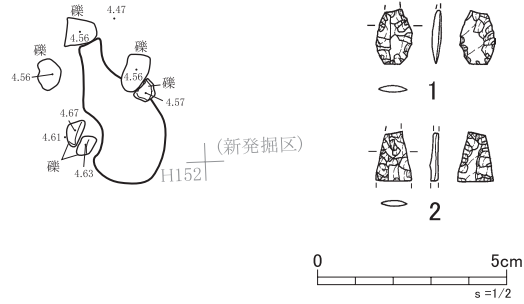
FC-5 (E119区石器集中)：1・2は石鏃。1は平基、2は上下端が欠損している。1の両側縁は大きく湾曲する形状である。いずれも素材面が裏面に残存している。

FC-4 ~ 10

FC-4
(E122区石器集中1)
〔IX層〕



FC-5
(E119区石器集中1)
〔IX層〕



(新発掘区)
H155

(新発掘区)
F119 H151

(新発掘区)
H149

F117

FC-6
(F119区石器集中)
〔VIIb層〕



FC-7
(F117区メノウ集中)
〔VIII層〕



(新発掘区)
I121

(新発掘区)
J117

F95

FC-10
(F91区石器集中) 〔VIII層〕

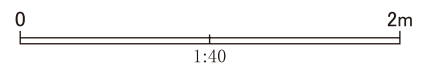
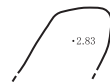


FC-8
(F94区石器集中)
〔VIII層中間層〕



G92

FC-9
(F91区石器集中)



図Ⅶ-22 FC-4 ~ 10 (石器集中)

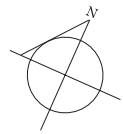
FC-18 ~ 20

(新発掘区)
H152

FC-18 (F119区石器集中)
[IX層]



F112



F119

FC-19
(F111区石器集中)
[VII層]



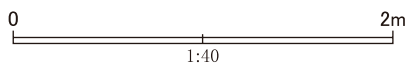
F112・F111
中間点

F91

埋設土器 2
[VIII層]



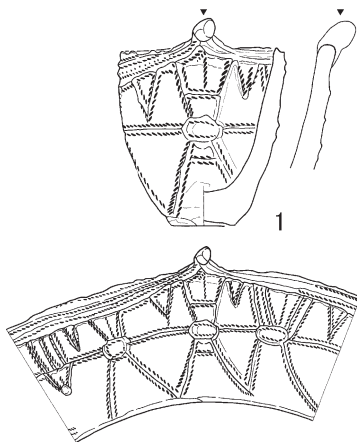
1 灰褐色砂 粘性なし しまりあり 砂のみ



FC-20 [VII層中間層]



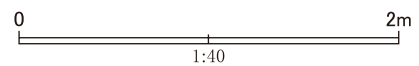
(新発掘区)
J116



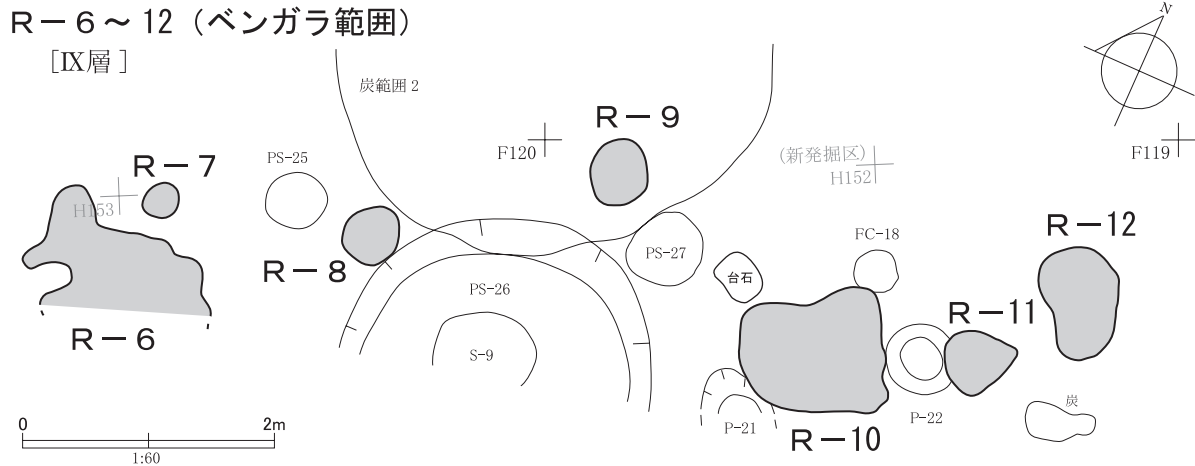
F122

R-13 [VIIb層]

(新発掘区)
H155



図Ⅵ-23 FC-18~20 (石器集中)・埋設土器 2・R-13 (ベンガラ範囲)



図VII-24 R-6~12 (ベンガラ範囲)

(8) 土器埋設遺構

1か所(埋設土器2)検出した。

埋設土器2 (図VII-23 表VII-2 図版38・71)

Ⅷ層で検出した。長軸約60cmの浅い土坑に小型土器が正立して出土した。土器の周囲は灰褐色砂で充填され、しまりがある。周辺には石組炉(SF-8)や焼土(F-26・28・29)のほか炭化物や骨片の分布域もみられ、関連があると考えられる。

掲載遺物：1は宇津内Ⅱb式の小型鉢。ほぼ完形で破損がない。突起は1か所で、対面側はわずかな波頂部がある。上げ底で、胴下部～底部は器壁が厚い。無文地で、文様は微隆起線により楕円文とV字状文などを組み合わせ4単位の割り付けとなっているが、それぞれ単位内の文様が若干異なる。

(9) ベンガラ集中

ベンガラとみられる赤褐色の粒子を多く含む土壌を検出し、特に濃密に分布する範囲8か所を「R」(ベンガラ集中、ベンガラ範囲)とした。Ⅸ層宇津内Ⅱa式期で7か所(R-6~12)、Ⅶ層後北C₂・D式期で1か所(R-13)を数えた。これら以外でも、Ⅷ層F119区・F121区、Ⅸ層122区からベンガラや褐鉄鉱が多数出土した。

R-6~12 (ベンガラ範囲) (図VII-24 表VII-2 図版8)

Ⅸ層F119・120区の2発掘区において、集石土坑PS-25~27や土坑P-20・21の周囲から連続的に検出した。またR-6~12の周囲から、ベンガラが付着したすり石や台石が出土した(「包含層出土の石器」、図VII-40・41の93~96・98・100)。これら一連の遺構(集石土坑や土坑の一部も含む)・遺物は、ベンガラ製作にかかわるものと考えられる。

R-13 (ベンガラ範囲) (図VII-23 表VII-2)

Ⅶb層で検出した。周囲からは、褐鉄鉱やベンガラ粒子が出土した。

b オホーツク文化期の遺構

(1) 土坑

2基 (P-25・26) を検出した。時期はいずれも刻文期である。

P-25 (PIT42) (図VII-25 VII-1・3 図版39)

円形土坑の上位が広がり、浅い不整形円形土坑となっている。木片と礫が出土した。やや太い柱痕の可能性はある。

P-26 (PIT43) (図VII-25 表VII-1・3 図版39・71)

浅い楕円形の土坑の西側に円形の落ち込みがあり、炭化木片を多く含む。

掲載遺物：1は刻文土器で甕の肩部。隆帯上に斜位の細い刻文が連続する。

(2) 柱穴状小土坑 (図VII-26・27 表VII-1・3 図版39・40・71・80)

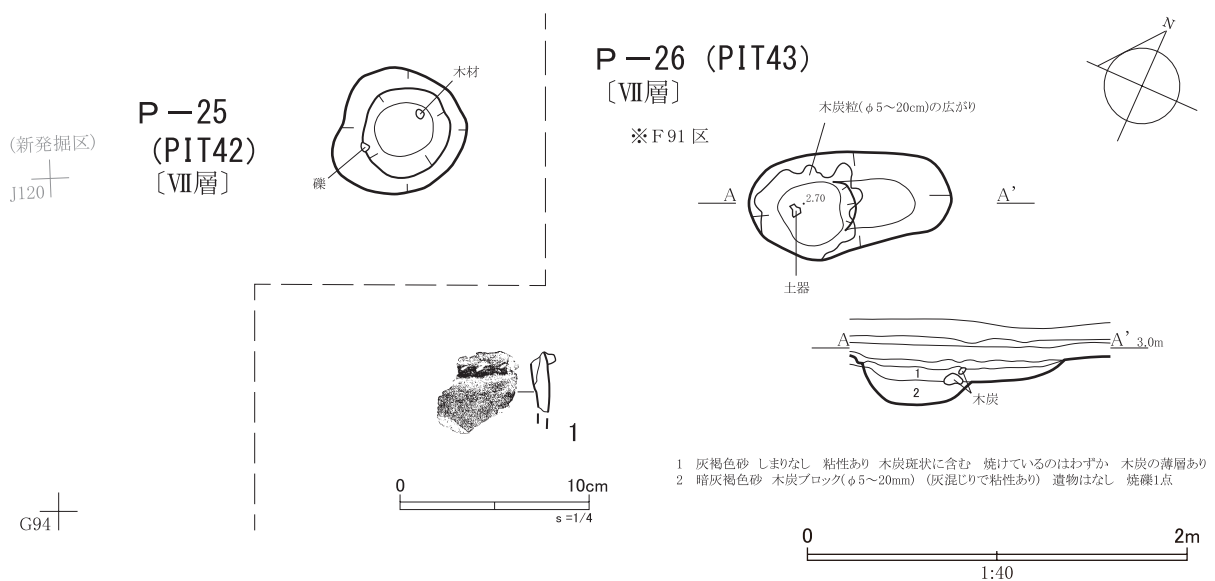
6基 (SP-14~19) を検出した。時期はいずれも刻文期とみられる。SP-16・18・19はⅧ層で検出したが、覆土や形状からⅦ層中から掘り込まれたとみられる。柱穴の配列に規則性は確認できなかった。特記事項として、SP-15 (PIT44) に柱が残存していた点が挙げられる。掘り方の中央に柱が埋め込まれ、周囲をシルトで固めたと観察され、掘立柱構造を呈する。SP-19にも小型の木片が残存していた。またSP-15のほかSP-14・18・19にも掘り方の構造が観察できる。

掲載遺物

SP-15：1は木柱。長さ約63cm、径約14cmが残る。丸棒状を呈するが、これは腐食が進んだためとみられる。下端部は斧などの工具により山形に加工されている。側面は面取りしてあるように見受けられるが、腐食により不明瞭である。炭化部位は見られない。樹種はコナラ属である。

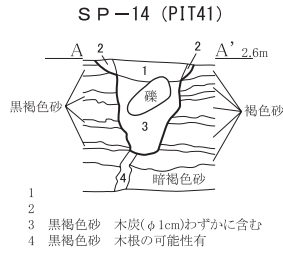
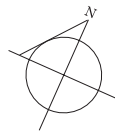
SP-18：1はスクレイパー。左側縁から下端にかけて直線的に急角度の加工が施されている。

SP-19：2は石鏃。有茎で基部は収斂し、やや明瞭なカエシが見られる。やや粗い両面加工が施され正面に原石面、裏面に素材面が残存している。

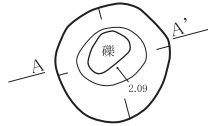


図VII-25 P-25・26 (PIT42・43)

F94 | SP-14 ~ 17
〔Ⅶ層〕



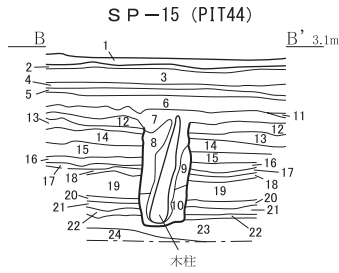
SP-14 (PIT41)



SP-15 (PIT44)

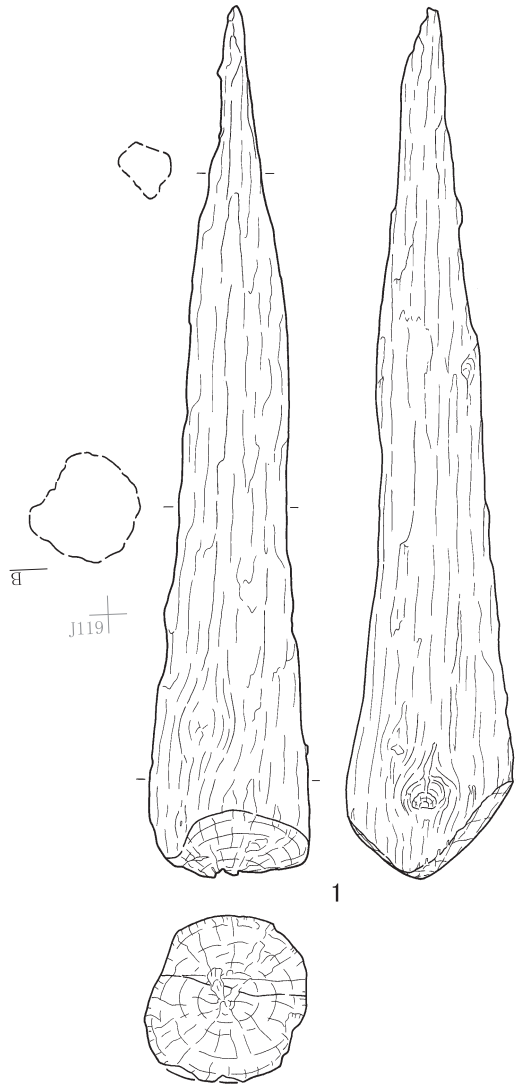
(新発掘区)

J120 |



- 【SP-15】
- 7 黒褐色砂
 - 8 暗褐色砂
 - 9 褐色砂
 - 10 黒褐色砂
- ブロック含む

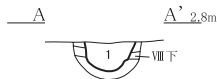
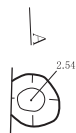
- | | | |
|-----------|---------|----------------|
| 1 Ma-b5 | 15 褐色砂 | |
| 2 灰と泥炭の互層 | 16 黒褐色砂 | 木炭(φ1cm)含む |
| 3 灰と泥炭の互層 | 17 褐色砂 | |
| 4 灰と泥炭の互層 | 18 黒褐色砂 | 木炭(φ1cm)含む |
| 5 灰と泥炭の互層 | 19 褐色砂 | 軽石(φ2cm)わずかに含む |
| 6 暗褐色泥炭 | 20 黒褐色砂 | 木炭(φ1cm)含む |
| 7 黒褐色砂 | 21 褐色砂 | |
| | 22 黒褐色砂 | 木炭(φ1cm)含む |
| 11 灰 | 23 褐色砂 | |
| 12 黒褐色砂 | 24 暗褐色砂 | やや粗い |
| 13 暗褐色砂 | | |
| 14 中間層 | | |



0 20cm
s=1/5

F93 |

SP-16 (PIT62)



- 1 黒褐色砂質土 泥炭混じる
Ⅶ層からの掘り込みと考えられる

(新発掘区)

J119 |

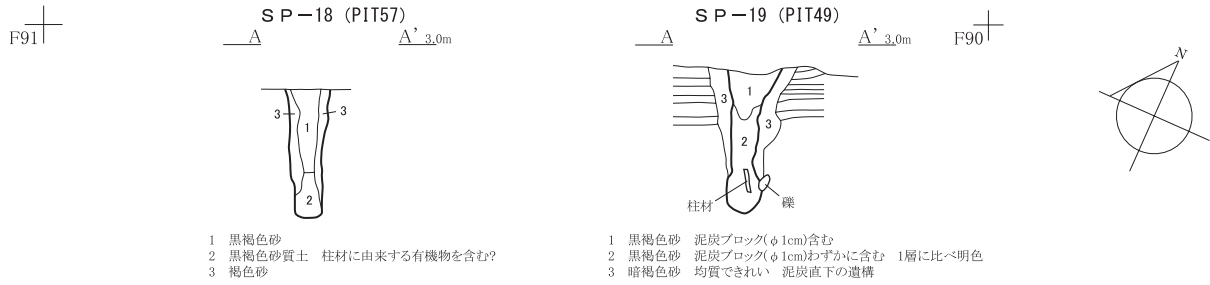
SP-17
(F91区柱穴)



G92 |

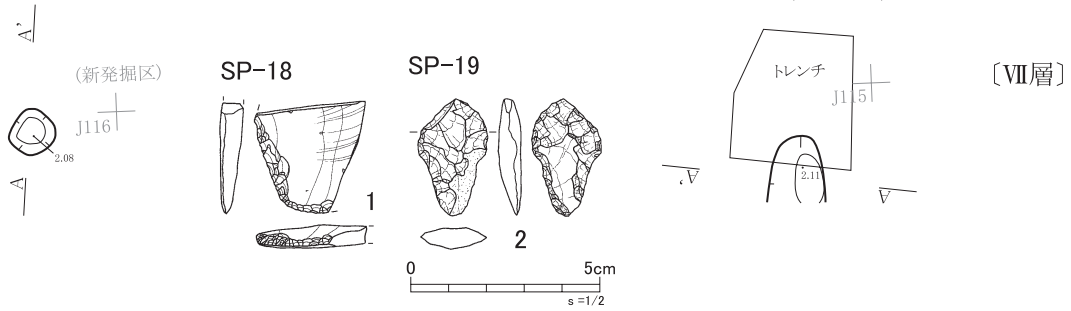
0 2m
1:40

図Ⅶ-26 SP-14~17 (PIT41・44・62)



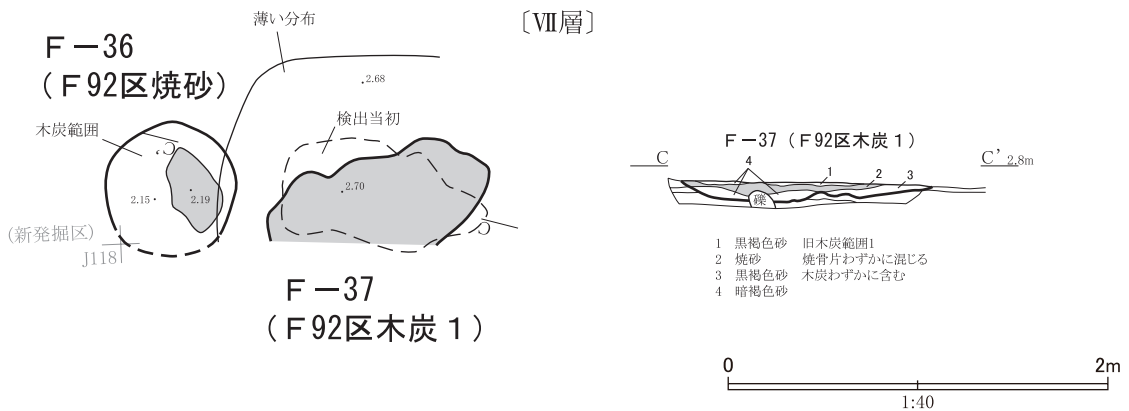
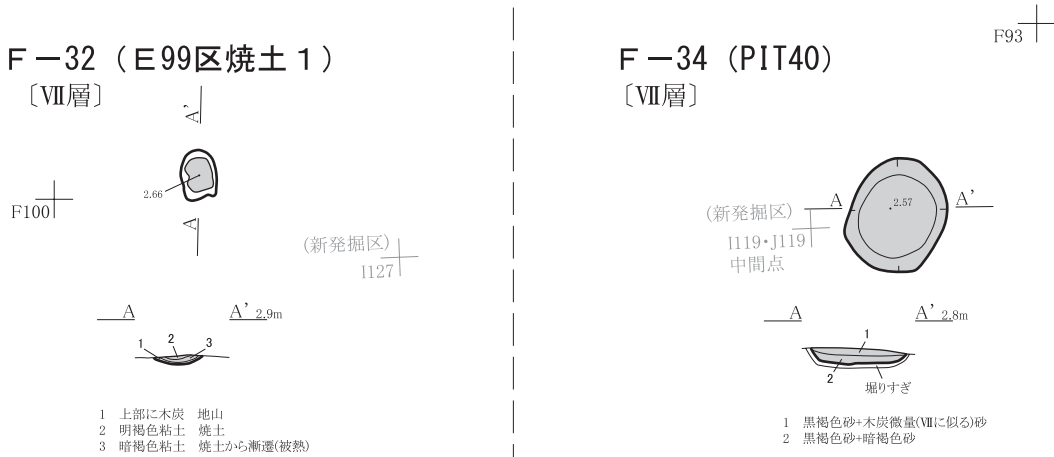
SP-18 (PIT57)

SP-19 (PIT49)



F-32 (E99区焼土 1)
〔VII層〕

F-34 (PIT40)
〔VII層〕



図VII-27 SP-18・19 (PIT57・49)・F-32・34・36・37 (PIT40ほか)

(3) 焼土 (図Ⅶ-27 表Ⅶ-1 図版40)

低地部Ⅶ層で4か所(F-32・34・36・37)を検出した。時期はいずれも刻文期とみられる。落ち込みとして検出したF-34(PIT40)のほかは平面で検出し、調査時は発掘区ごとに焼土番号を付した。「焼砂」や炭化木片が分布する。

3 包含層出土の遺物**(1) 土器等** (図Ⅶ-28~34 表Ⅶ-4~7 図版70~75)**続縄文時代の土器** (1~73)

初期を除いた前半期~後半期の土器が2,426点出土した。宇津内Ⅱa式は調査区西部の「砂丘部」Ⅸ層から少数、宇津内Ⅱb式は「砂丘部」Ⅷ層から約300点が出土した。後北C₂・Dは「砂丘部」Ⅶ層および低地部Ⅷ層を主体に、調査区の広範囲から約1,800点が出土した。

宇津内Ⅱa式 (1~4)

1は口縁波頂部下に逆U字状の擬縄貼付文が貼付されている。2は地文と突瘤のみが施されている。3・4は上げ底。3は底面にも縄文が施文されている。

宇津内Ⅱb式 (5~37)

5~14は復元した土器。5~8は擬縄貼付文または細い貼付文、多条の縄線が施されているもの。なお図は「側面」にあたる大型突起側を正面に示している。5・6は大2+小4個の突起がある。5は突起下に楕円文と多重の楕円文が縦列し、上下とも左右斜方向に帯状の文様が連繋し、人体文を想起させる。6は屈曲する擬縄貼付文が組み合わされた文様が配され、それらを連繋する多条の擬縄貼付文が施されている。7は口縁~胴部が倒立状態で出土した。表面が剥離しその隙間に砂が入り込み浮いた状態の剥離片が多かったため、砂ごとバインダーで固めて取り上げている。突起部の楕円文が前方に張り出す。8は弁状の突起下に擬縄貼付文が垂下する。9は大2+小2個の突起があり、縄線に加えて微隆起線が横位に2条貼付されている。10は4単位の突起下に瘤状の貼付文があり、その上から縄線が施文されている。11は突起部の瘤状の貼付文から微隆起線が斜位に延びる。地文の撚りが細かい。上げ底の底面に縄文押捺が平行する。12~14は底部で、いずれも上げ底。

15~37は拓影により示した。15は口縁部に擬縄貼付文と多条の縄線が施されている。16・17は把手付きの突起部。16は把手に縄端刺突を伴う微隆起線が施され、頂部に小さな突出部がある。17は頂部のみが施文がある。18~22は擬縄貼付文・縄線による文様がみられるもの。突起下の楕円文(18)、胴部の同心円文とそれらを連繋する放射状の直線(19~21)が配されている。22は上げ底で、底部付近に横位に多条の縄線がめぐる。23~35は主に細い貼付文または微隆起線による文様がみられるもの。突起下の楕円文(23・24・32・34)、胴部の同心円文とそれらを連繋する直線(23・25・26・29・31~33)などが配される。胴部の細い貼付文または微隆起線は2本一組が多いが、3本以上もみられる(23・32~34)。23・24・27~29は口縁部に多条の縄線も施文されている。25は貼付文裾部に沿う縄端刺突、26は貼付文上の縄端刺突が顕著である。30は11に類似する地文・文様が施されている。32は大型の深鉢で、大2+小2単位の突起を有するが、文様の単位はやや乱れている。地文が帯縄文に近く、貼付文の頂部がとがる。文様等を含め、後北C₁式の影響を受けたものと考えられる。33は微隆起線による横位区画内に斜位の微隆起線を配する。把手付きの突起は16に近似する。36は地文主体で、口唇下に1条、2個突起下にV字状に隆起線を配している。37は縄文のみがやや不規則方向に密に施文されている。

後北C₂・D式 (38~72)

38~47・72は復元土器。38~41は口唇上刻み、帯縄文に沿う微隆起線、三角列点を伴うもの。38は4単位構成で、突起下に縦位の2組の帯状文で区画し、区画内に山形の帯状文が配されている。補修孔が多い。39は弧線や縦横の文様が配されている。文様帯下端の横位区画帯縄文に微隆起線が伴わない。40・41は注口付きの鉢。ともに注口部が上方に突き出している。40は平底で、周縁部が張り出す。40は楕円文と斜位の帯縄文、41は縦位・横位の帯縄文区画内に弧線文などがやや不規則に施されている。42~47は微隆起線がみられない。42は口縁部に2条の擬縄貼付文がめぐり、突起下に眼鏡状の楕円文が付されている。43・44は4単位構成で、43は弧線や曲線、44は縦横の区画が行われている。45・46は底部で、45は底面近くまで帯縄文が施文されている。47は注口付きの鉢。弧線文主体の文様が施されている。

48~71は拓影により示した。48~58は帯縄文に沿う微隆起線、三角列点を伴うもの。48~50は円文・弧線文を主体とする。52は微隆起線がきわめて細い。53は擬縄貼付文がほぼ口唇に接している。55~57は同一個体。縦横の区画文が密に施されている。58は頂部付近が外反し、片口部と思われる。焼成前の貫通孔が2個近接している。59~70は微隆起線がみられない。59~65は口縁部に擬縄貼付文が施されるもの。59・60は同一個体で、弧線文を主体にやや複雑な文様構成になっている。一方62~64・66は横位と縦位・斜位の直線による文様が組み合わされている。63は2条の擬縄貼付文が口縁部に施されている。65・67は条痕文により弧線文などがえがかれている。70は注口部。上方に大きく屈曲し、中央部は器壁が厚く内径が小さい。71・72はミニチュア土器。

鈴谷式 (73)

73はわずかに出土した鈴谷式。異方向2本組の撚糸文が施文されている。

オホーツク文化期の土器 (74~114)

調査区中央部~東部のⅦs・Ⅶa層を主体に約1,250点出土した。ほぼ刻文期に限られるが、わずかに十和田式とみられる土器が出土している。

円形刺突文土器 (74)

74は口唇直下が外反する。小型の円形刺突がみられる。

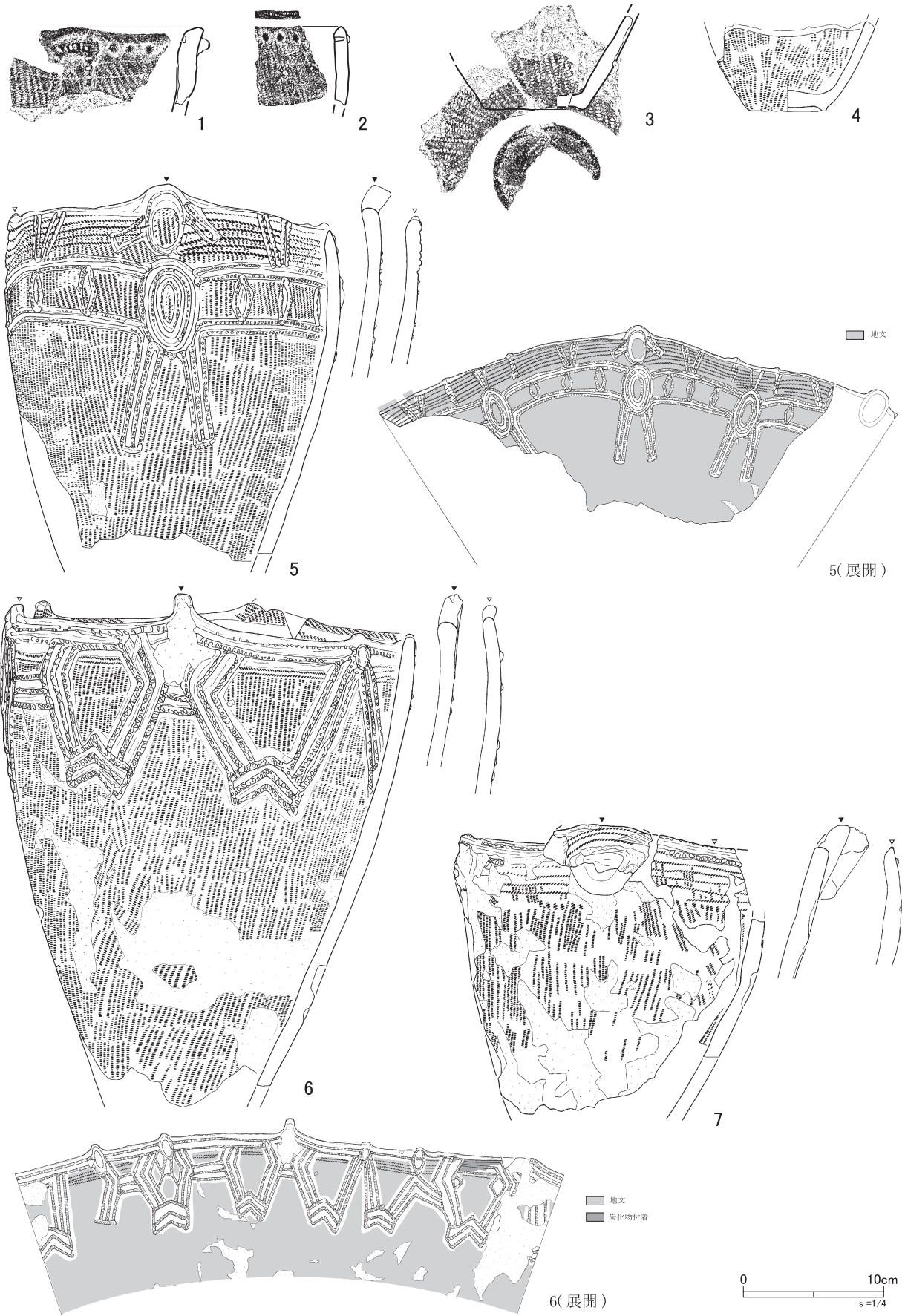
刻文土器 (75~114)

75~91は櫛歯文が施されているもの。75は幅の狭い肥厚帯下に沈線、その下に横位の櫛歯文が付されている。78は櫛歯文を羽状に配置している。80は肥厚する口縁部に刻文(爪形文)、79・81~84は櫛歯文の上下端に刻文が施されている。85~88・90・91は櫛歯文の上下に沈線文も施され、86~89はさらに刻文もみられる。また86~88のハの字文は、86が沈線に近い刻文、87が刻文、88が櫛歯文で表されている。89~91は櫛歯がやや不明瞭で沈線状になっている。92・93は胎土に金雲母とみられる鉱物が含まれ、うち92はハの字形刻文が縦位に施文されている。94~109は刻文が施されているもの。94は肥厚する口縁部が複段になっており、上下端にハの字形刻文が連続する。96は刻みが深い。97~101は爪形文による。104・106・107は肥厚する口縁部断面が台形をなし、上下端に刻文が施されている。108は肥厚する口縁部の幅が狭い。109は斜位の刻文が多段みられる。110~114は無文の土器あるいは無文部。111は顔料が塗布されているようにみられる。112は小型の甕。113・114は平底。

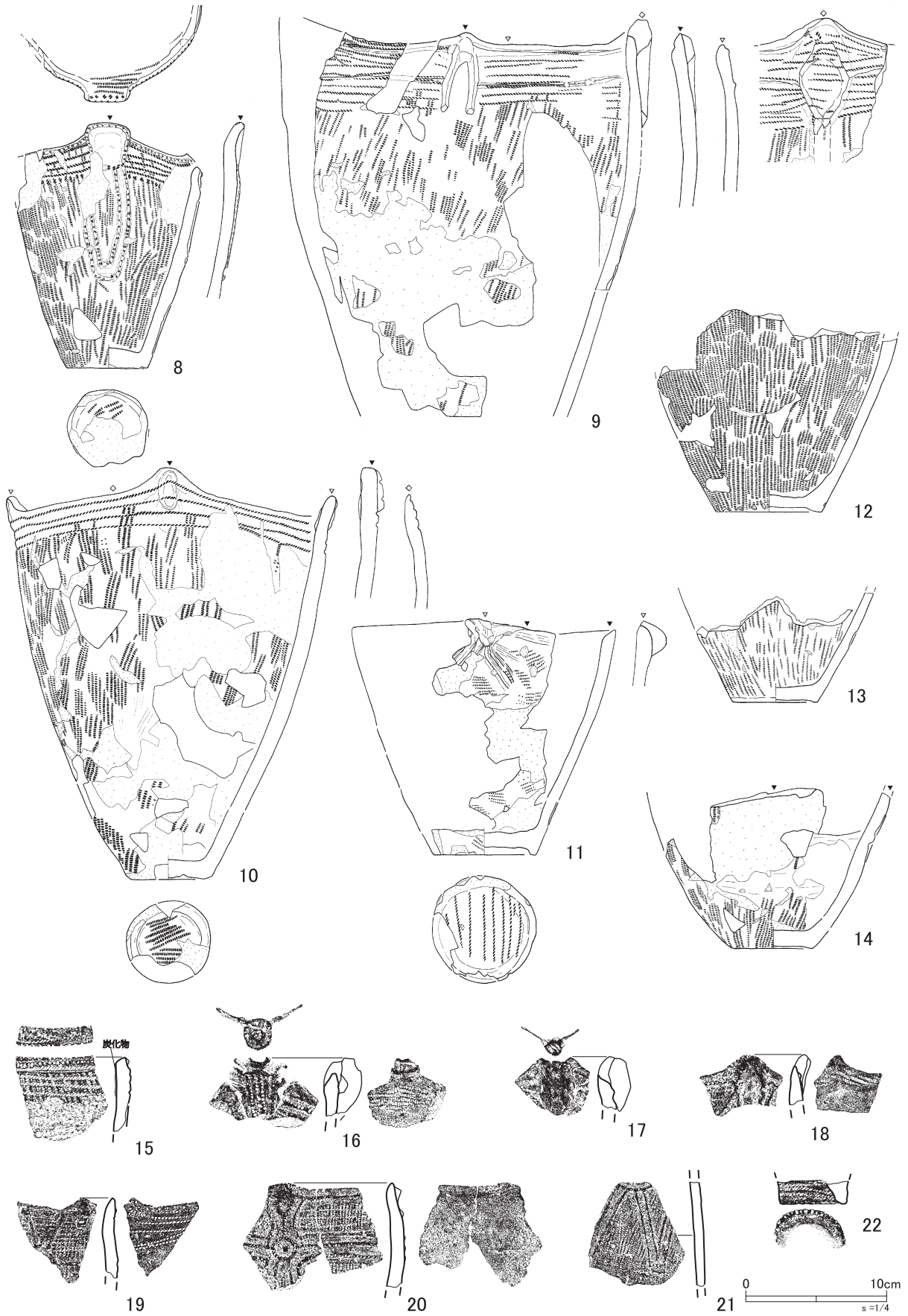
土製品 (115)

円盤状土製品 (115)

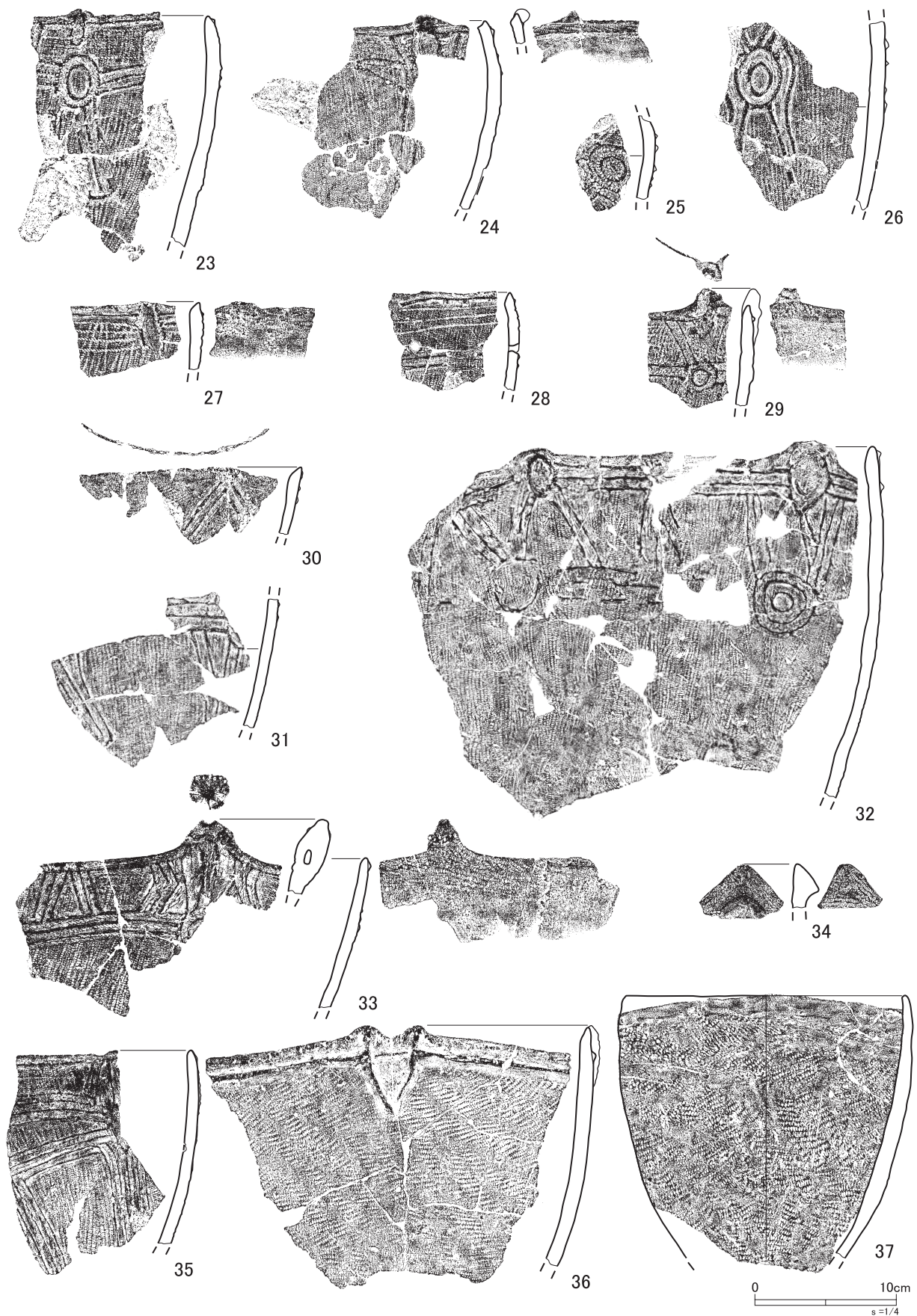
115は表土から出土した、宇津内Ⅱb式の土器片を加工した土製品。楕円形に近い形状で、横断面が湾曲する。側面はていねいにみがかれ、平滑な面になっている。(阿部)



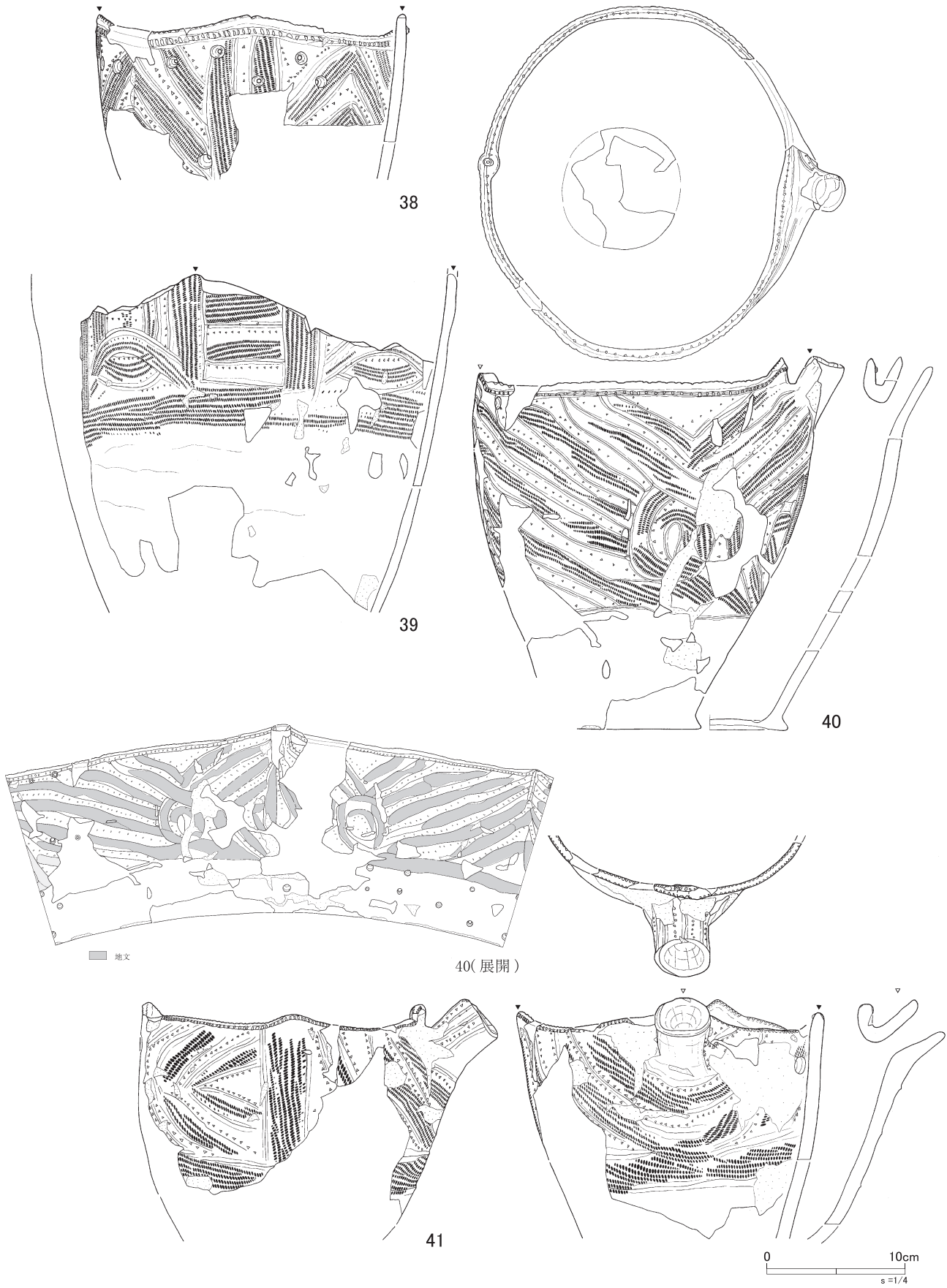
図Ⅶ-28 包含層出土の土器(1)



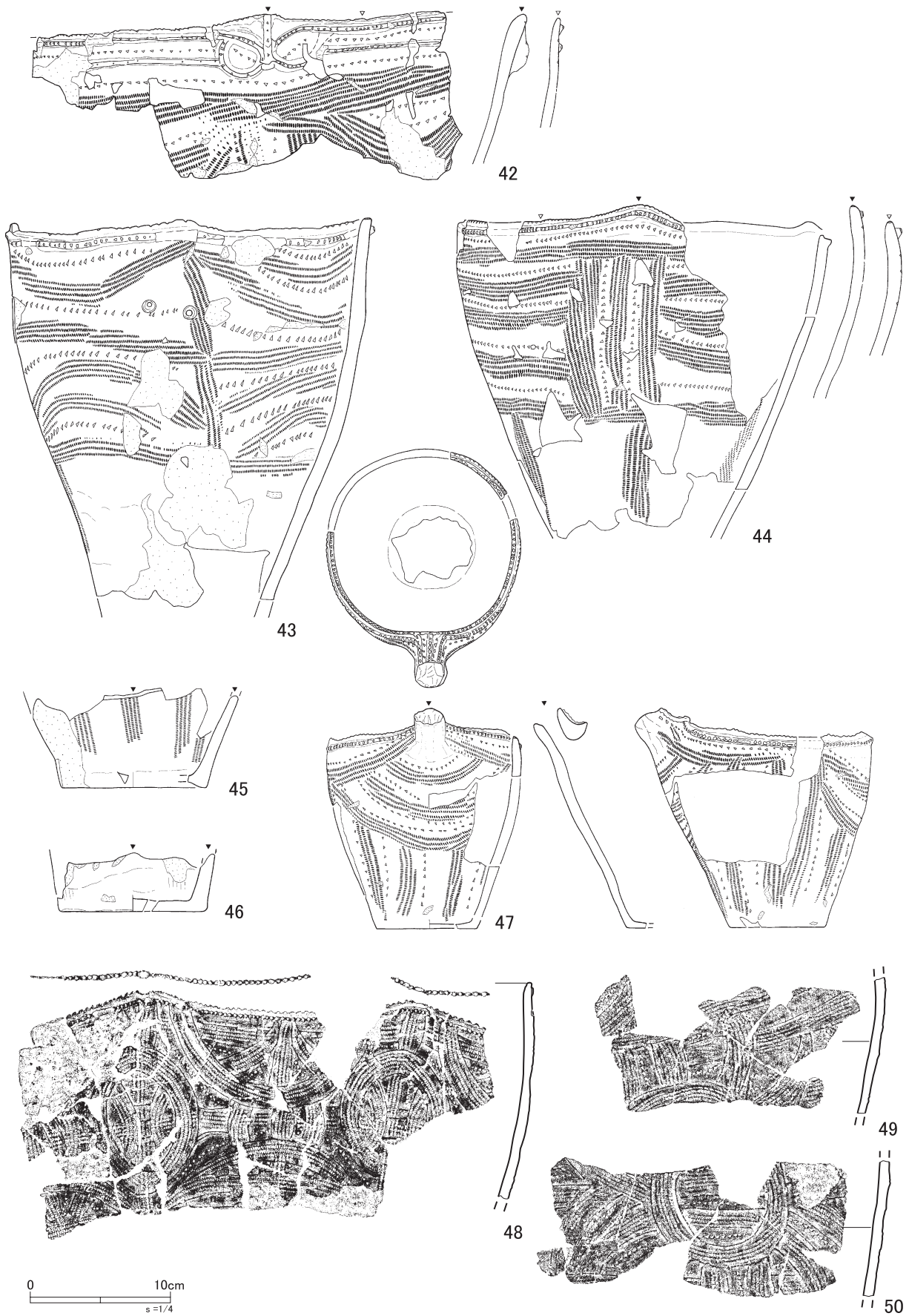
図Ⅶ-29 包含層出土の土器（2）



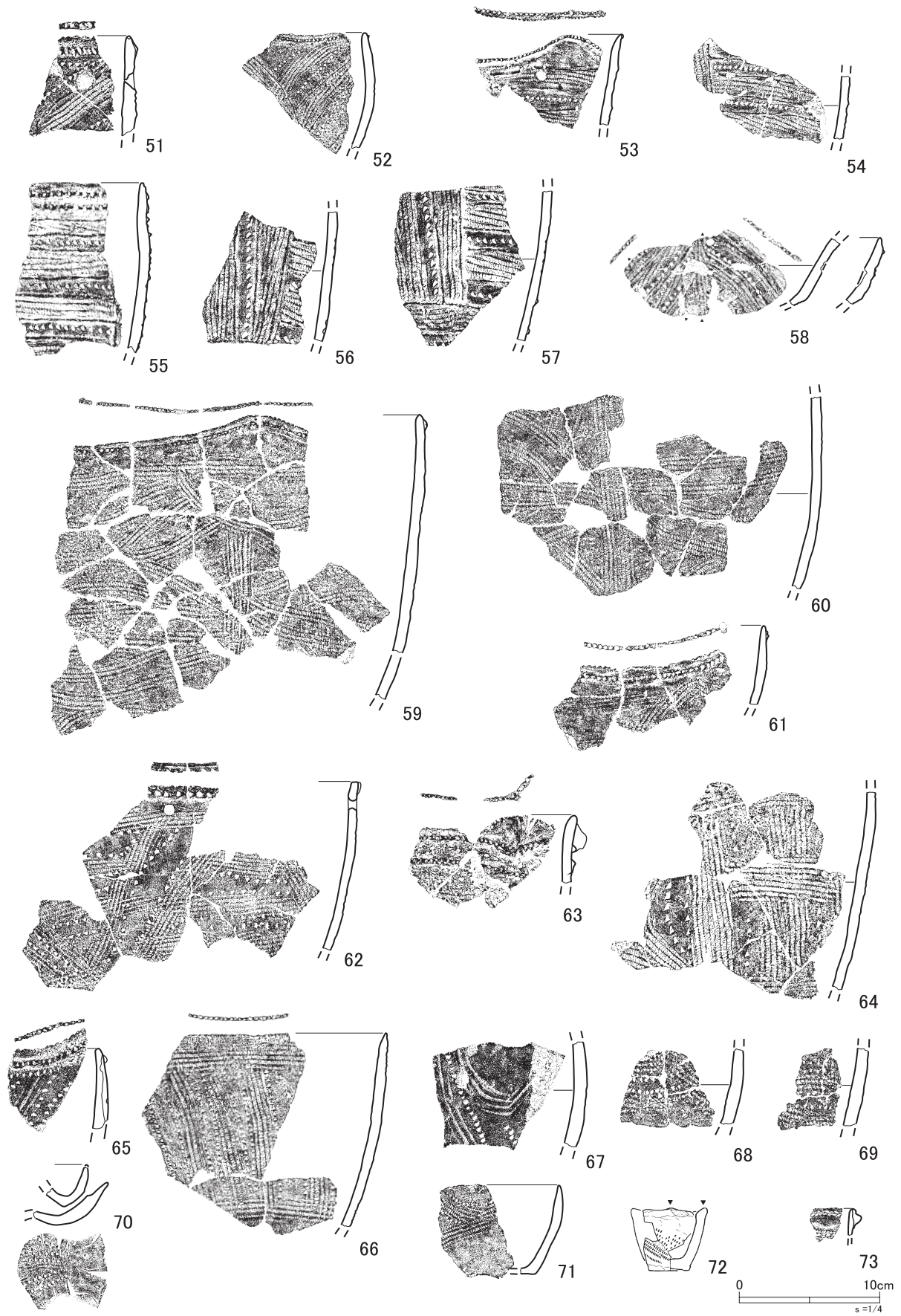
図Ⅶ-30 包含層出土の土器（3）



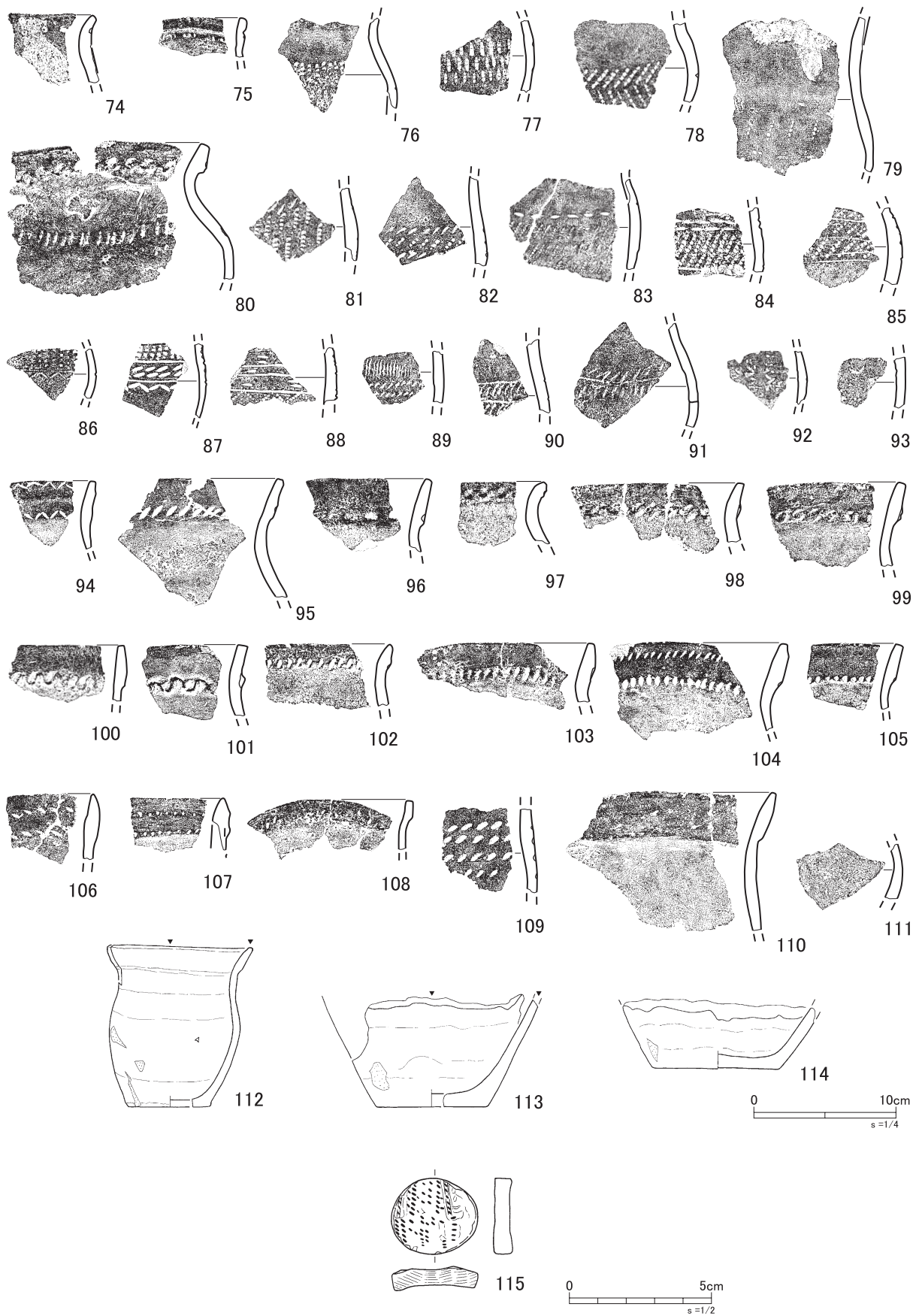
図Ⅶ-31 包含層出土の土器(4)



図Ⅶ-32 包含層出土の土器（5）



図VII-33 包含層出土の土器（6）



図Ⅶ-34 包含層出土の土器（7）・土製品

(2) 石器等 (図Ⅶ-35~46 表Ⅶ-8~11 図版75~79)

地区と層位によっておおよその時期に区分できるため、三つの地区・層位に分離して報告する。

「砂丘部」(砂丘列4)のⅧ・Ⅸ層出土の遺物(1~104)

1~104は統縄文時代前半期に属し、主に宇津内Ⅱ式期のものが主体と考えられる。2011年調査B地区と同様のまとめりである。

石鏃(1~22)

1~4は平基で、1・2が完形、3・4が先端部欠損品である。両側縁は1がやや湾曲し、2~4が直線的である。1は正裏面に素材面が大きく残存している。2の先端部には上からの衝撃剥離が見られる。5~18は凹基で、5~9が完形、10~18が先端部欠損品である。両側縁は直線的なものが大半だが、5・6・13は湾曲している。また、9は器体中央で緩やかに屈曲する形状である。19・20は細身の凸基で、いずれも片側縁の屈曲が強い。21は両端が尖る柳葉形、22は下半部欠損品である。

ナイフ(23~39)

23~27は柄部が作出されるもので、下端部は丸みがある。加工は23~25が半両面加工、26・27は平坦剥離による両面加工が施されている。28・29は撥型の形状のもので、いずれも縁辺を中心とした加工が施されている。30~39は下端が尖がる形状のもので、30~34完形品、35~39が破損品である。加工は31・32・38・39が平坦剥離による両面加工で、それ以外は半両面加工が施されている。

スクレイパー(40~62)

40~45は下端を中心に加工が施されるもの。この内、円弧状の刃部が作出されるものは44・45である。46~62は側縁を中心に加工が施されるもの。48~57・60・62は縦長の剥片を素材としている。加工は片側縁に施されるものが多く、51・52・55・58・61は両側縁への加工が見られる。このうち52・58は加工の種類が異なり、急角度加工と平坦剥離の組み合わせとなっている。また、55では錯交状の加工が施されている。

石錐(63)

63は両面への内湾する短い加工により突出する刃部が作出されている。

Rフレイク(64~72)

64~72はいずれも縁辺の一部に連続する加工が施されている。64~67は縦長剥片を素材としている。68は平坦加工が施されている。70・71は裏面に加工が施されている。

石核(73)

73は頁岩製で原石に近い状態。角部を中心に剥離されるが、有効な大型の剥片は得られていない。

石斧(74)

74は両側縁の一部に敲打と剥離が行われ、その後全面的に研磨され片刃に近い刃部が形成されている。その後、下端部には破損による刃部再生と見られる正面側への急角度加工が行われているが、刃部の形状や角度が大きく崩れたため、遺棄されたものと思われる。

たたき石(75)

75は断面多角形の原石の左側面と下端に敲打痕が見られる。

すり石(76~85)

すり面は78・81・85が正面のみで、その他は平坦な正裏面に見られる。また、85は正面全体にベンガラが付着している。

くぼみ石(86・87)

86は凹面が正面に大きく広がっている。87は正裏面に凹面が見られる。

砥石 (88～91)

88・89は軽石製で、全面的に擦痕が見られる。90は平坦面のある砂岩製で、正裏面の他に左側面にも擦痕が見られる。91は正面を中心に全面的に擦痕が及んでいる。

台石 (92～98)

92～98はいずれも扁平な原石が利用され、正面に平滑面が見られる。また、92～95・98はベンガラが付着するもので、特に93・94は付着量が多い。93～98は、R-6～12周辺から出土した。

礫 (99～104)

99～104はベンガラが付着する礫である。やや細長い原石を主体とし、全面的に付着しているものが多い。

「砂丘部」(砂丘列4)のⅦ・Ⅶa・Ⅶb層及び「低地部」(砂丘列5)Ⅷ層出土の遺物 (105～244)

105～244は縄文時代後半期に属し、主に後北式期のものが主体と考えられる。2018年調査区のⅦb層出土遺物と同様のまとまりである。

石鏃 (105～139)

105～126は平基のもの。小型で1.5～2cm前後、両側縁が緩やかに湾曲するものが大半である。小型で薄手のため、加工はあまり奥までなされず、116・119・125以外は裏面に素材面が大きく残っている。127～129は凹基のもの。両側縁は123が直線的で二辺三角形、128は5.5cmと長大で、下部が平行し中央から湾曲している。130～132は有茎のもの。茎部は130がほぼ平行する矩形、131・132が逆台形状で、いずれもカエシは不明瞭である。133～139は下半部が欠損している。

ナイフ (140～167)

140・141は全面的に両面加工が施されるもの。140は矩形の柄部が作出されている。141は粗い加工で器体中央部に僅かな屈曲部が見られる。142～167は片面加工ないし半両面加工が施されるもの。この内、142～161は縦長の形状となるもので、主に縦長剥片を素材としている。この内、155までは端部が尖頭形に成形されている。

スクレイパー (168～192)

168～177は主に側縁に加工が施されるもの。この内、168～173は完形品で、縦長剥片を素材としている。178～188は主に下端部に円弧状の刃部が作出されるもの。この内、178・179・181・185・187・188は縁辺全体に加工が及んでいる。189～192は破損品で、側縁への加工が施されている。

石錐 (193)

193は厚手の素材に全面的な加工を施し、端部に厚手の突出部を作出している。

Rフレイク (194～218)

194～218はいずれも縁辺の一部に細かな加工が施されている。大半が正面側への加工であるが、207には裏面への加工も見られる。

石核 (219～225)

219・221・222・225は原石に近い状態で、角部を中心に剥離が見られるが、有効な大型の剥片は得られていない。220・223は正面上からの剥離を主体としており、少量の縦長剥片が剥離されている。224は正裏面と右側面で主に横方向の剥離が行われている。

石斧 (226・227)

226は断面形から、板状に分割された礫を素材として全面的に研磨を行い両刃の刃部を作出している。227は上半部が破損している。右側面と裏面に形状を整える剥離を行った後、全面的な研磨を行い、両刃の刃部を作出している。使用によると思われる下端からの剥落が見られる。

たたき石 (228~230)

228~230はいずれも原石長軸上の端部に敲打痕が見られる。229・230は上下両端に敲打痕がある。

すり石 (231~235)

231は厚みのある原石、それ以外は扁平な原石が利用され、いずれも正面にすり面が見られる。なお、234には裏面にもすり面が認められる。

くぼみ石 (236・237)

236・237は扁平な原石が利用され、236は正面に二か所、237は表裏面に凹面が見られる。

砥石 (238~242)

238~240は軽石製で、ほぼ全面的に擦痕が見られ、一部は溝状に内湾する部分が存在する。241・242は砂岩製の板状のもので、241は正面、242は正裏面と下面に擦痕が見られる。

台石 (243・244)

243・244はいずれも細長い形状の原石を利用し、243は正面、244は正裏面に平滑面が見られる。

「低地部」(砂丘列5)のⅦ・Ⅶs層出土の遺物 (245~270)

245~270はオホーツク文化刻文期に属するものが主体と考えられる。2018年調査区のⅦa層出土遺物と同様のまとめりである。

石鏃 (245~262)

245は平基のもの。先端部が破損しており、両側縁は緩やかに湾曲する。両面に平坦加工が施され、裏面の一部に素材面が残存している。246~251は有茎のもの。いずれも下端部に向かって収斂する形状で、特に246・247は下端部が尖頭形となっている。カエシは246~248・250が僅か、249・251が明瞭である。252~262は破損しているもの。252・254・255・260・262は両側縁が湾曲する形状で、元来両端が尖る木葉形であったと考えられる。256~258は幅広の形状で、257・258は粗い加工によって成形されている。259は裏面に素材面が大きく残っている。

スクレイパー (263・264)

263は下端部に円弧状の刃部が作出されている。264は左側縁を中心に急角度加工が施され下端部に角部のある刃部が作出されている。

石核 (265)

265は原石面を打面として正面・下面・右側面で主に横長の剥離が行われている。

すり石 (266)

266は軽石製でほぼ全面的にすり面が見られる。

砥石 (267~269)

267は軽石製で、ほぼ全面的に擦痕が見られ、右側面は内湾する形状となっている。268・269は砂岩製で、扁平な原石が利用され、正裏面に擦痕が見られる。

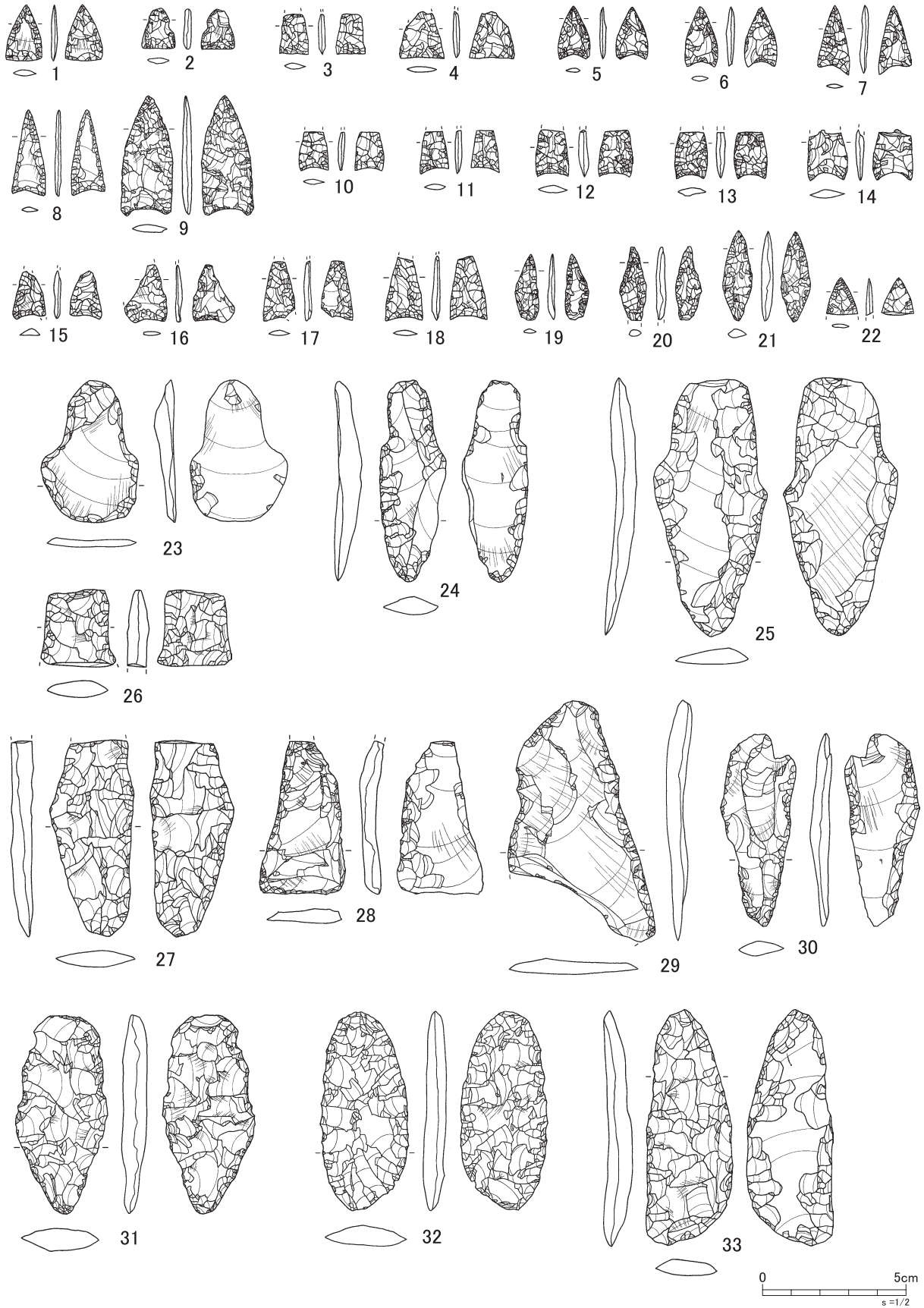
円盤状石製品 (270)

270は正面中央が窪んだ3cm程の円盤状のもので、泥岩を素材としている。裏面は全体的に被熱し、煤状の黒色物が付着している。全体的に平滑面となっている。(直江)

(3) 骨角器 (図Ⅶ-46 表Ⅶ-12 図版79)

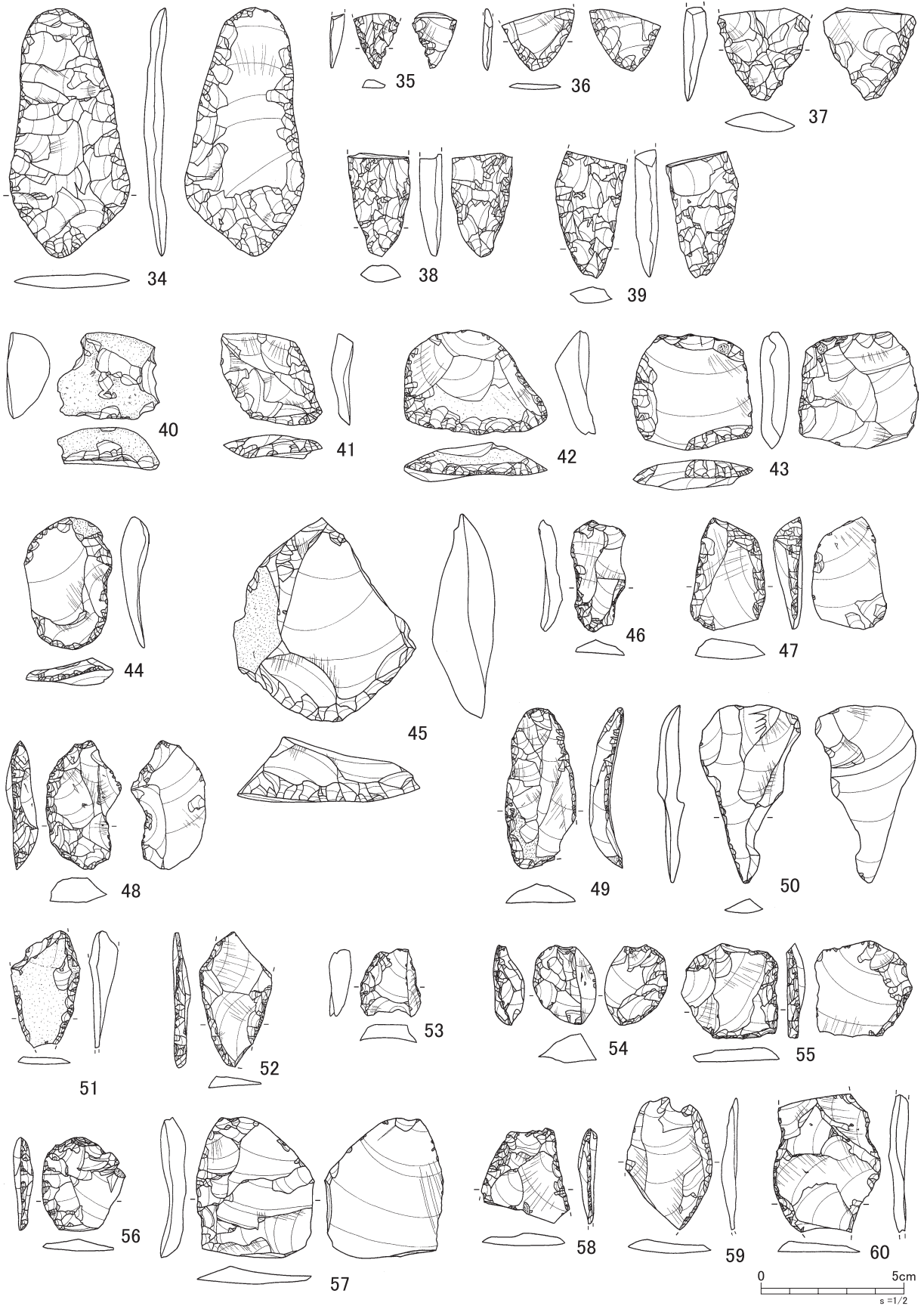
271はⅦ層中間層から出土した。後北C₂・D式期~オホーツク刻文期のもので、形状はアイヌ文化期の骨鏃の基部に類似する。シカの中手中足骨製とみられ、基部底面がていねいに研磨されている。穿孔途中とみられる円形刺突と貫通孔があり、穿孔位置を変更したと思われる。(阿部)

〔砂丘部Ⅷ層・Ⅹ層〕



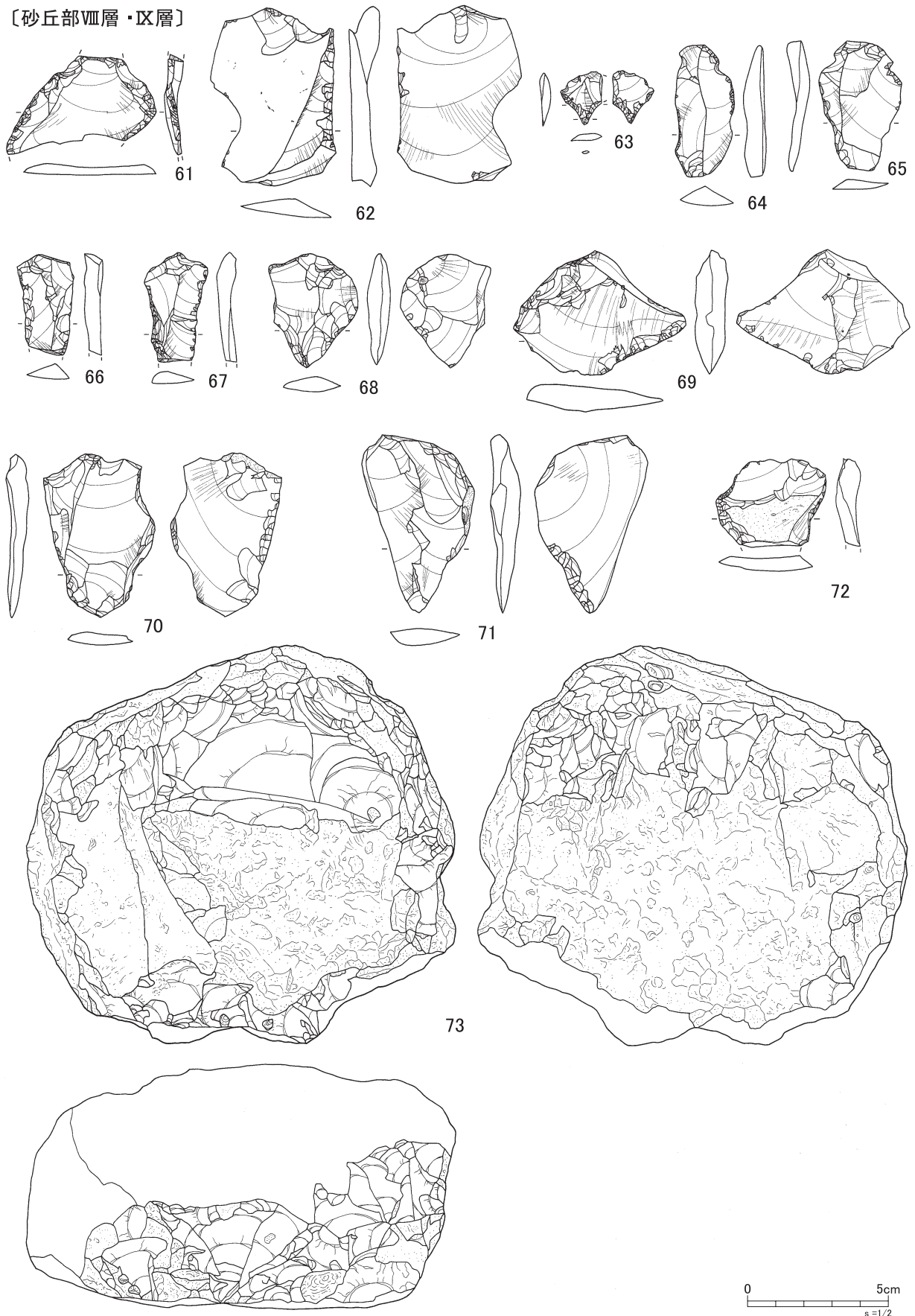
図Ⅶ-35 包含層出土の石器（1）

〔砂丘部Ⅷ層・Ⅸ層〕



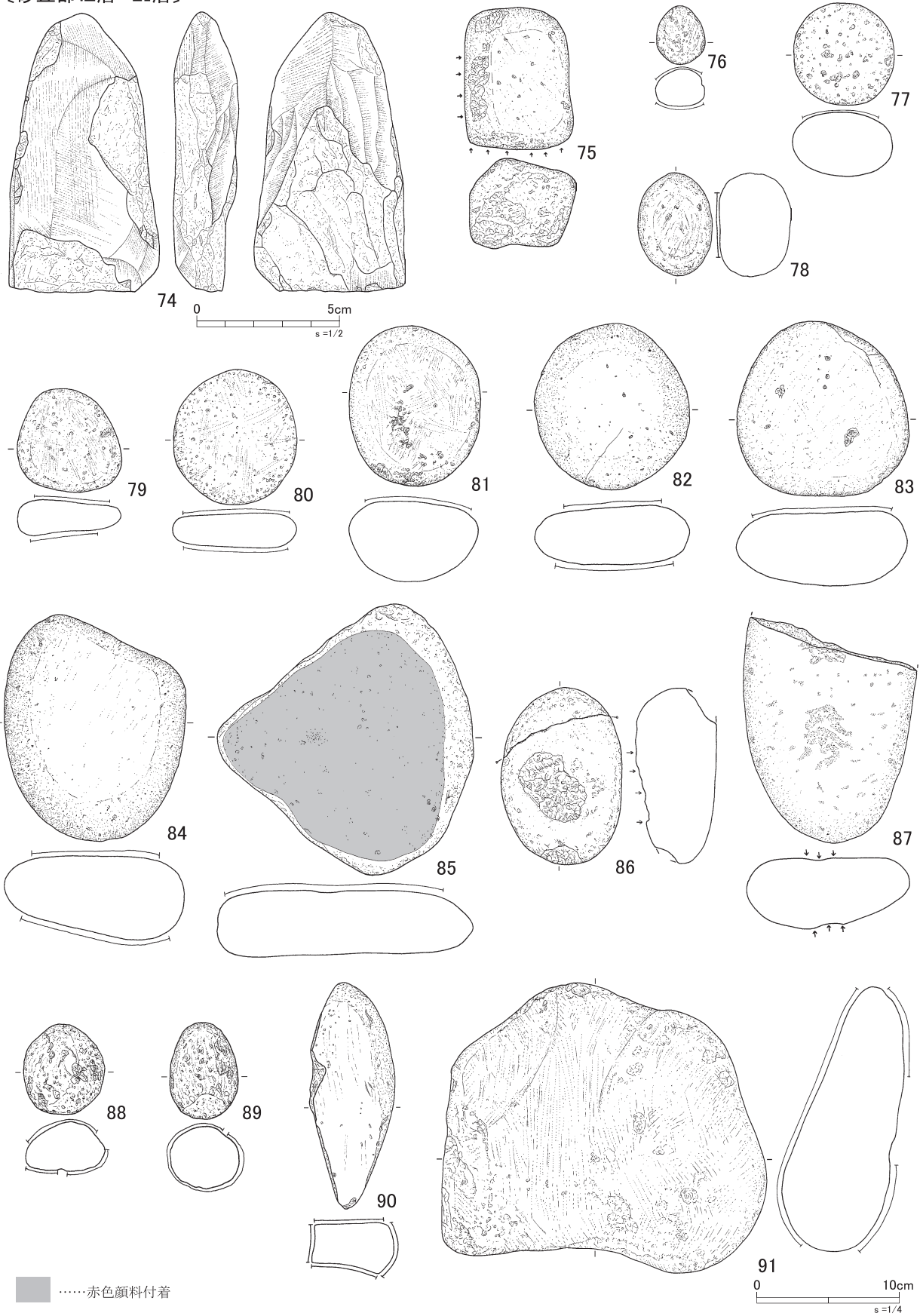
図Ⅶ-36 包含層出土の石器（2）

〔砂丘部Ⅷ層・区層〕



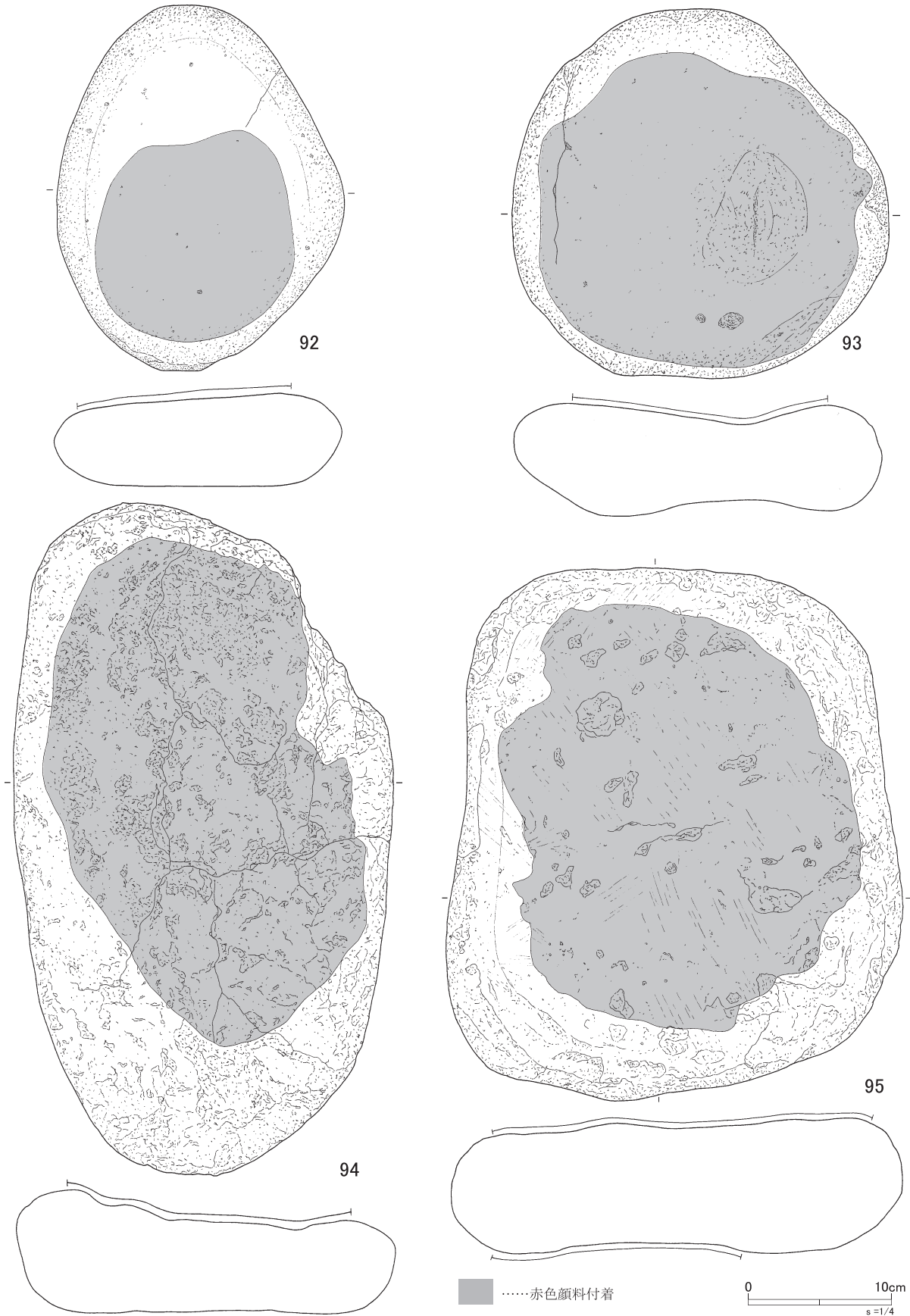
図Ⅶ-37 包含層出土の石器（3）

〔砂丘部Ⅷ層・Ⅸ層〕



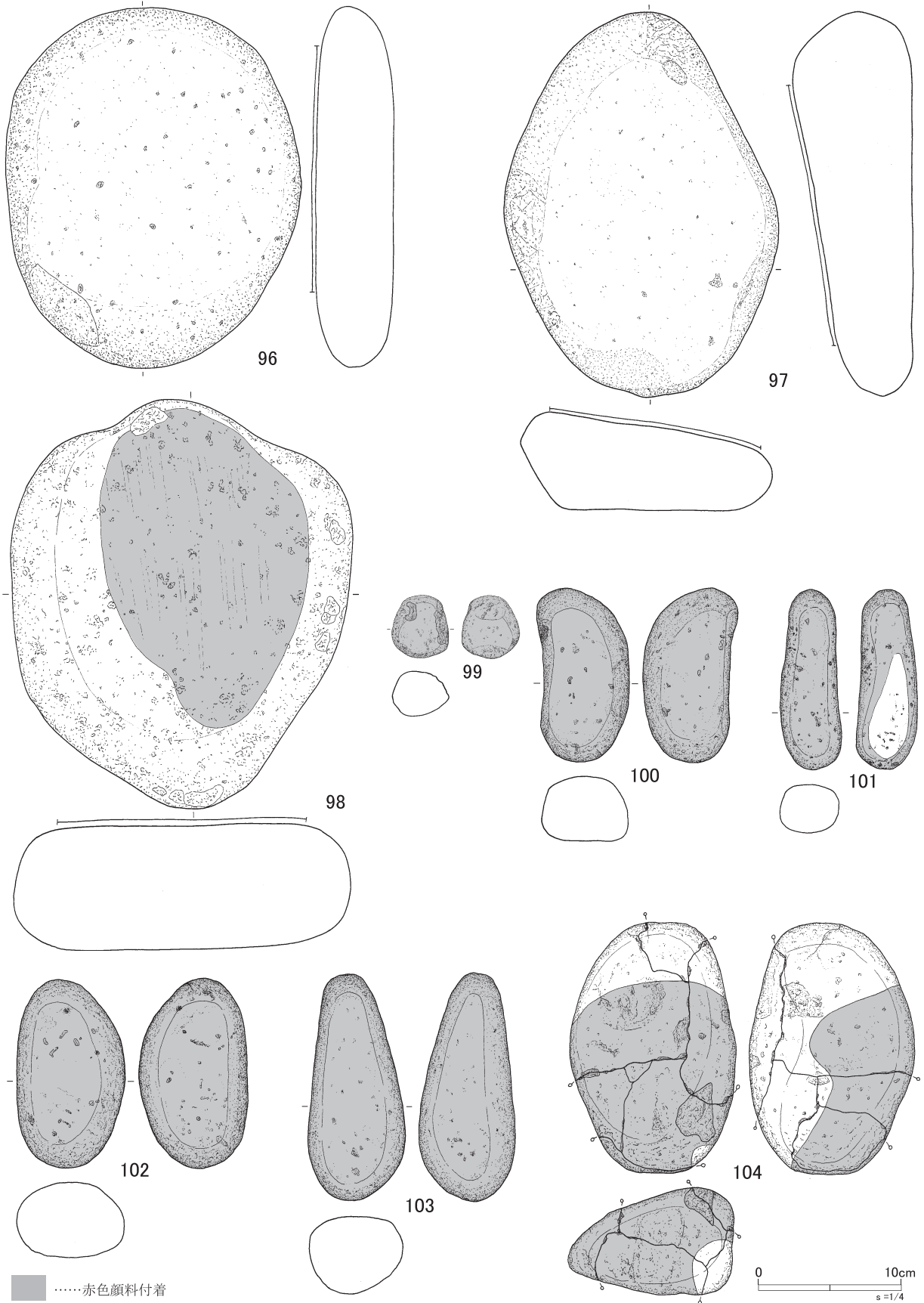
図Ⅶ-38 包含層出土の石器（4）

〔砂丘部Ⅷ層・区層〕



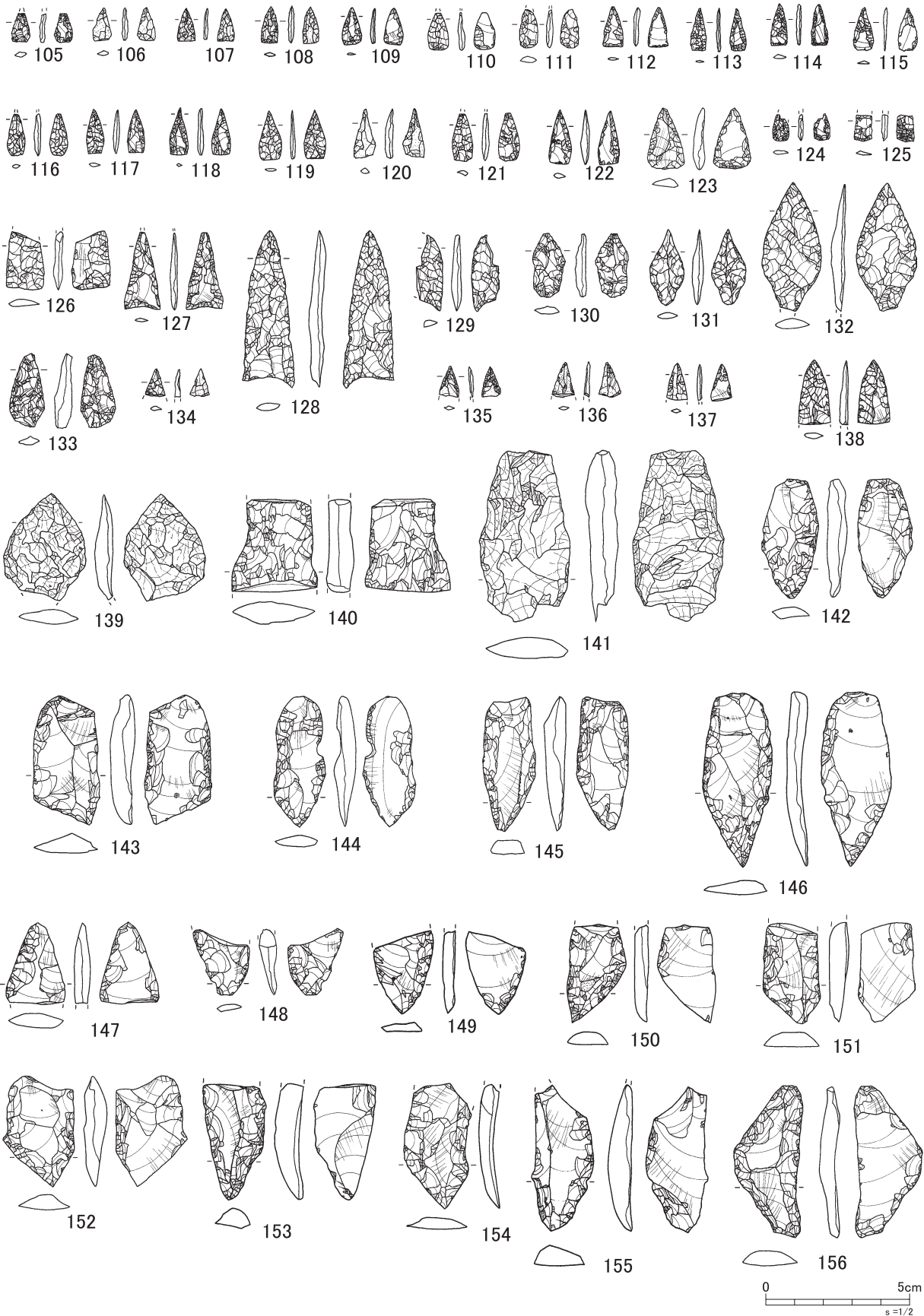
図Ⅶ-39 包含層出土の石器（5）

〔砂丘部Ⅷ層・区層〕



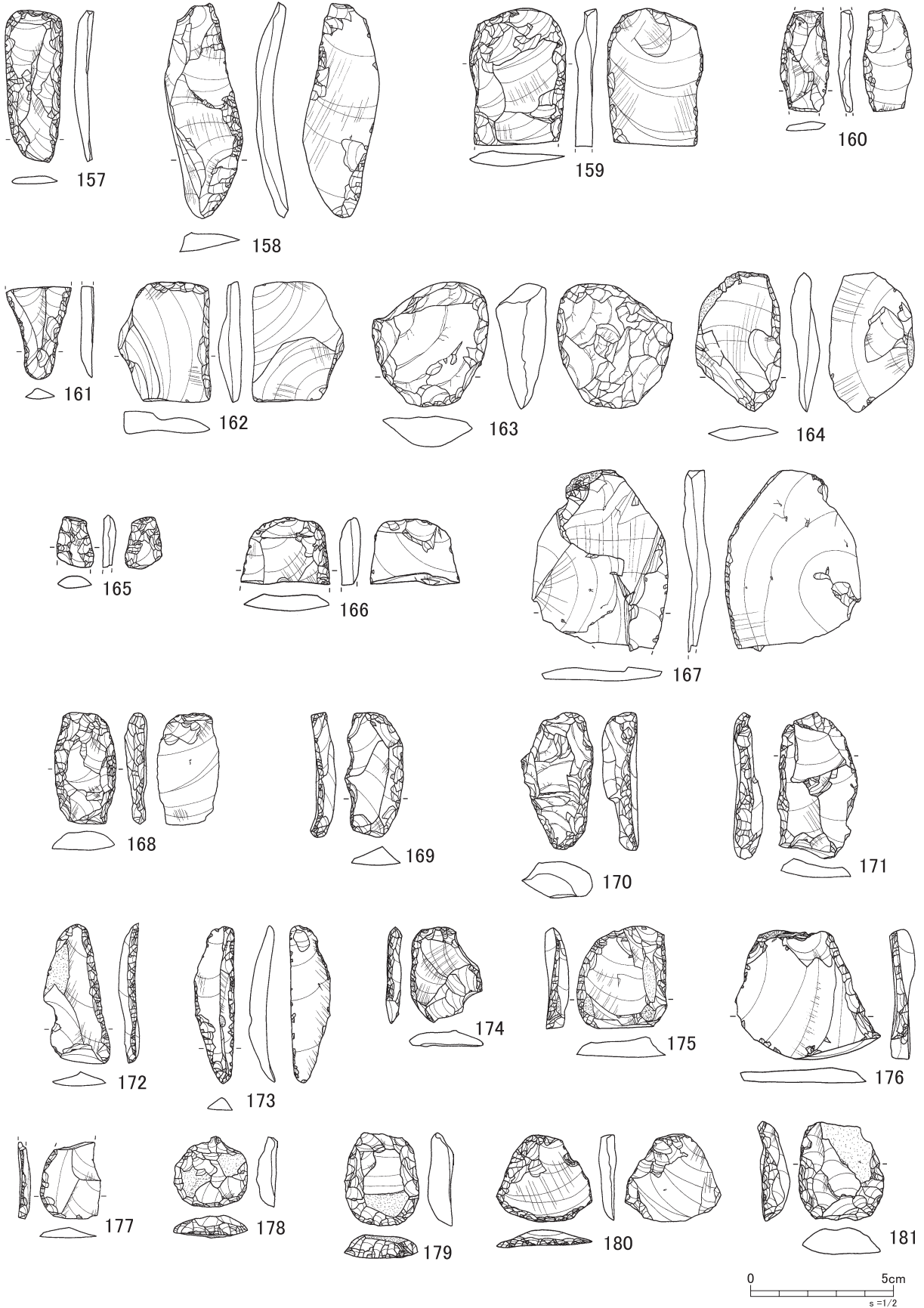
図Ⅶ-40 包含層出土の石器（6）

〔砂丘部Ⅶ層・Ⅶa層・Ⅶb層、低地部Ⅷ層〕



図Ⅶ-41 包含層出土の石器（7）

〔砂丘部Ⅶ層・Ⅶa層・Ⅶb層、低地部Ⅷ層〕



図Ⅶ-42 包含層出土の石器（8）

〔砂丘部Ⅶ層・Ⅶa層・Ⅶb層、低地部Ⅷ層〕



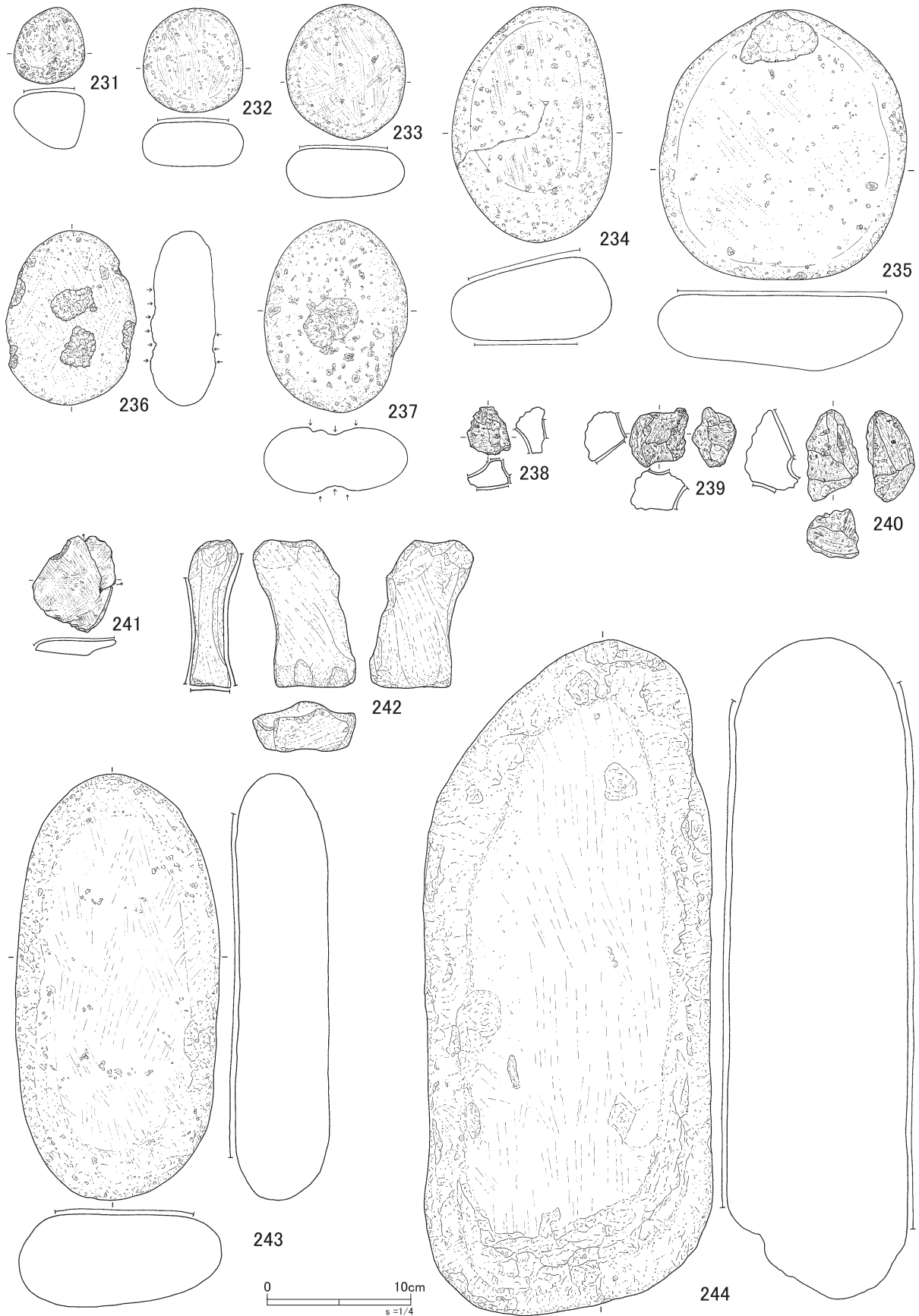
図Ⅶ-43 包含層出土の石器（9）

[砂丘部Ⅶ層・Ⅶa層・Ⅶb層、低地部Ⅷ層]



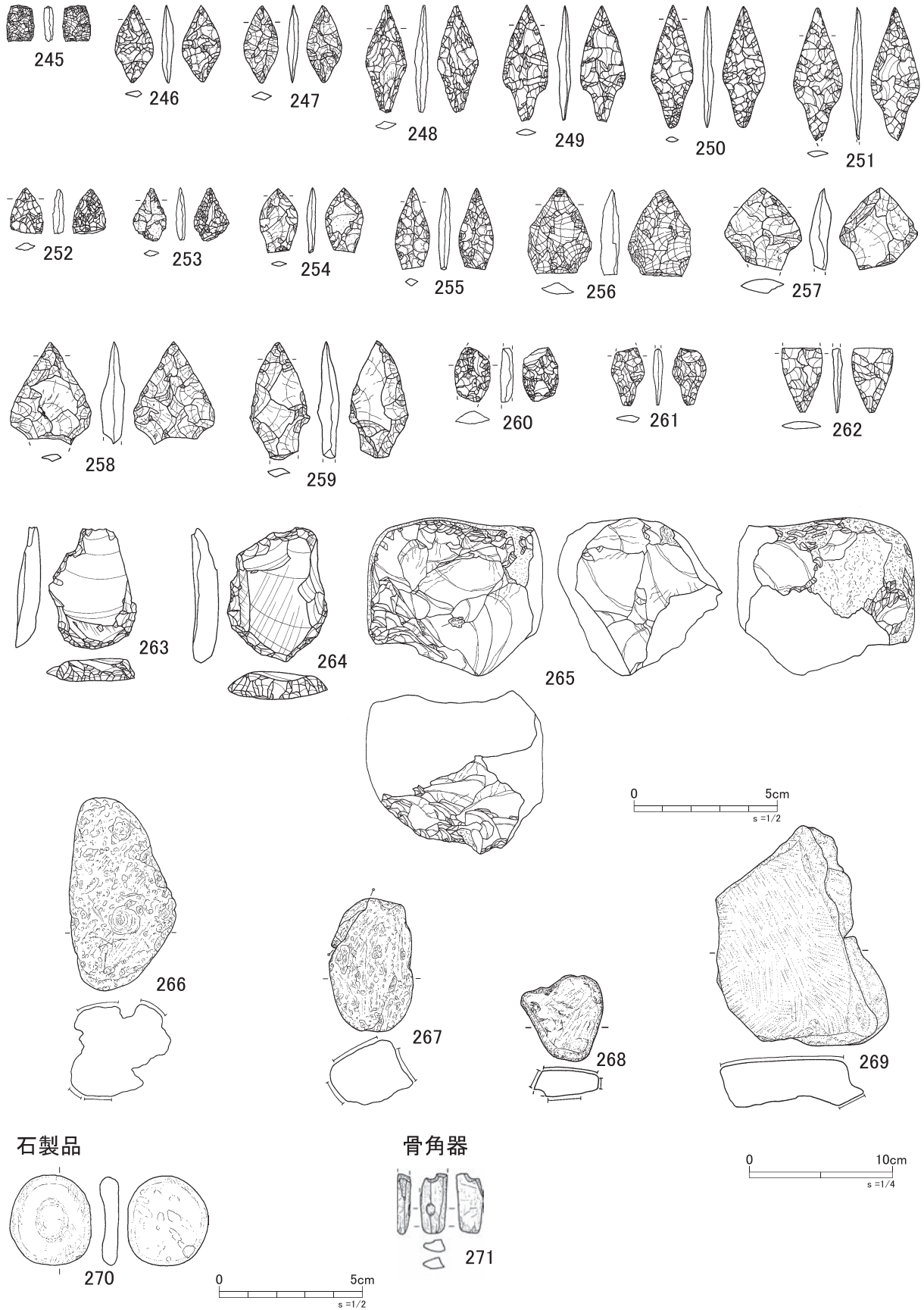
図Ⅶ-44 包含層出土の石器 (10)

〔砂丘部Ⅶ層・Ⅶa層・Ⅶb層、低地部Ⅷ層〕



図Ⅶ-45 包含層出土の石器 (11)

〔低地部Ⅶs層・Ⅶ層〕

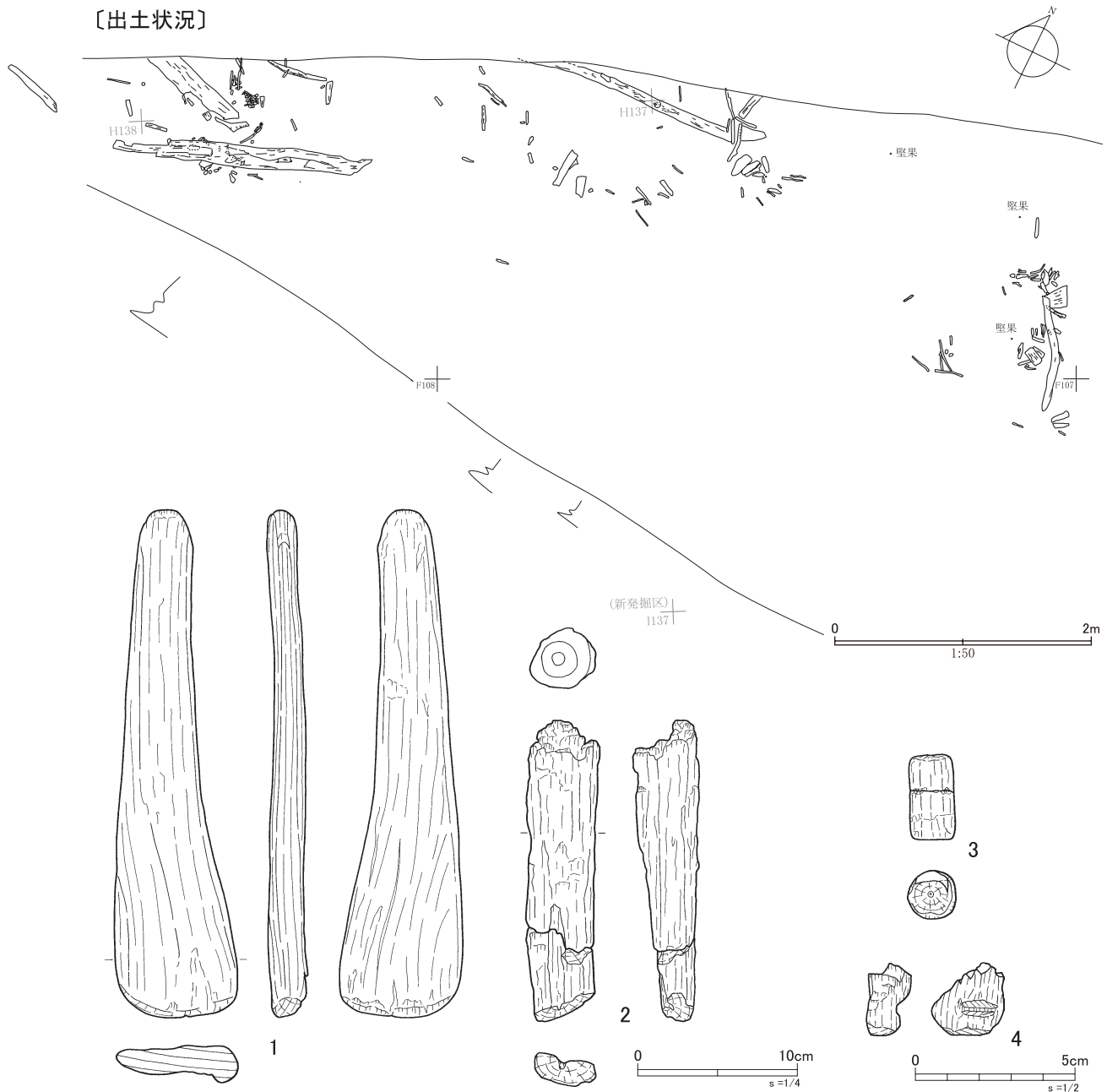


図Ⅶ-46 包含層出土の石器 (12)・骨角器

(4) 旧河道出土の材・木片 (図Ⅶ-47 図版40・80)

調査区中央部、Ⅶ層を開析する旧河道の河床付近から、大小の木片が出土した。取り上げ点数は202点である。大型の板状や棒状のもの、小型で枝状のもの、堅果類などがある。ほとんどが流木など自然のものとみられるが、一部伐採痕や加工痕と思われる面がみられる木片がある。材・木片は通常より簡素にした保存処理を行っている。

掲載遺物：1はへら状の材。明瞭な加工痕は観察できないが、上下端部や背面など形状を整えた可能性がある。2は枝状の木片で、下端部に傾斜した平坦面があり、伐採痕とみられる。3も下端部に平坦面があり、伐採痕の可能性はある。4は側面に刻みがみられる。虫食い穴の可能性もあるが、刻み目が面をなしているように観察され、切込み跡と思われる。(阿部)



図Ⅶ-47 旧河道出土の材・木片

表Ⅶ-1 2012年調査遺構一覧(1)

種別	新遺構名	旧遺構名	掲載		検出位置			平面形	規模(m)					時期	備考		
			挿図	写真図版	新発掘区	旧発掘区	層位		検出面		底面		深さ				
									長径	短径	長径	短径					
土坑	P-14	PIT53	Ⅶ-5	33	G155.156	F122	Ⅶ	不整楕円形	2.20	1.09	1.91	0.82	0.22	続縄文時代前期	宇津内Ⅱb式		
	P-15	PIT27			F155.156	E122	Ⅶb	楕円形	1.25	1.03	0.90	0.62	0.29	続縄文時代後期			
	P-16	PIT28			H153	F120	Ⅶb	—	(0.52)	(0.54)	(0.34)	(0.20)	(0.33)	続縄文時代後期		後北C・D個体土器 焼土?	
	P-17	PIT47	G153	E120	Ⅶ中	楕円形	1.03	0.77	0.81	0.46	0.23	続縄文時代前期					
	P-18	PIT29	Ⅶ-6	34	G.H152	F120	Ⅶb	不整楕円形	1.24	1.20	(0.39)	(0.13)	0.23	続縄文時代後期	坑底に焼土		
	P-19	PIT45②			G.H152	E119	Ⅶ上	円形	0.32	0.28	—	—	0.12	続縄文時代前期			
	P-20	PIT65			G.H152	F119	Ⅸ	不整楕円形	0.69	0.48	0.30	0.18	0.39	続縄文時代前期		ベンガラ付着礫	
	P-21	PIT63	H152	F119	Ⅸ	—	(0.60)	(0.33)	(0.40)	(0.17)	(0.30)	続縄文時代前期					
	P-22	PIT61	Ⅶ-8	34	H151	F119	Ⅸ	円形	0.60	0.58	0.32	0.32	0.14	続縄文時代前期	浅い土坑		
	P-23	PIT30A			H142	F112	Ⅷ	—	(1.10)	1.26	0.60	0.58	0.19	続縄文時代前期			
	P-24	PIT31			H141	F111	Ⅷ	円形	0.40	0.40	0.12	0.10	0.18	続縄文時代前期			
	P-25	PIT42	Ⅶ-25	39	I.J119	F93	Ⅶ	不整円形	0.72	0.69	0.32	0.29	—	オホーツク文化刻文期	底面に木炭		
	P-26	PIT43			II17	F91	Ⅶ	不整楕円形	1.08	0.58	0.72	0.28	0.27	続縄文時代前期			
	P-27	PIT50	Ⅶ-8	34	II15	F90	Ⅷ	楕円形	1.08	0.76	0.80	0.52	0.30	続縄文時代後期			
	P-28	PIT69			J113	F88	Ⅷ中	不整楕円形	0.72	0.55	0.48	0.32	0.15	続縄文時代後期			
	集石土坑	PS-25	配石1	Ⅶ-9	35 口絵3、35	H152	F120	Ⅸ	円形	0.52	0.46	—	—	0.10	続縄文時代前期		
		PS-26	配石3			H152	F120	Ⅸb	円形?	(2.54)	(1.32)	(2.15)	(1.09)	(0.32)	続縄文時代前期		
		PS-27	PIT64	Ⅶ-10	35	H152	F119	Ⅸ	円形	0.59	0.58	0.30	0.38	0.22	続縄文時代前期		
PS-28		PIT70	II15			F89	Ⅷ	不定形	0.55	0.49	—	—	0.15 0.17 (礫込み)	続縄文時代後期			
PS-29		PIT68	II12			E88	Ⅷ中	不整円形	0.25	0.25	0.16	0.16	0.04	続縄文時代後期			
PS-30		PIT67	II12	E88	Ⅷ中	不整円形	0.27	0.26	0.10	0.09	0.07 0.12 (礫込み)	続縄文時代後期					
柱状小土坑	SP-14	PIT41	Ⅶ-26	39	II19	F93	Ⅶ	円形	0.59	0.59	0.35	0.29	0.51	オホーツク文化刻文期			
	SP-15	PIT44			II19	F93	ⅧS	円形	0.28	0.28	0.08	0.08	0.56 0.58 (礫込み)	オホーツク文化刻文期		柱材残存	
	SP-16	PIT62			II18	F92	ⅧS	円形	0.29	(0.26)	0.14	0.15	0.14	オホーツク文化刻文期			
	SP-17	柱穴	Ⅶ-27	40	J117	F91	Ⅶ	楕円形	0.28	0.20	—	—	—	オホーツク文化刻文期			
	SP-18	PIT57			I.J116	F90	Ⅷ(Ⅶ)	不整円形	0.25	0.24	0.14	0.14	0.69	オホーツク文化刻文期			
	SP-19	PIT49			J115	F90	Ⅷ(Ⅶ)	楕円形?	(0.39)	(0.31)	(0.17)	(0.14)	(0.79)	オホーツク文化刻文期			
	SP-20	柱穴			II13	E88	Ⅷ	円形	0.24	0.22	—	—	0.22	続縄文時代後期?			
SP-21	柱穴	II13	E88	Ⅷ	円形	0.29	0.22	—	—	0.15	続縄文時代後期?						
石組炉	SF-8	PIT30B	Ⅶ-12	5	H142.143	F112	Ⅷ	楕円形	0.74	0.57	0.46	0.39	0.14 0.19 (礫込み)	続縄文時代前期	宇津内Ⅱb式期、 下に木炭		
	SF-9	PIT35			H140.141	F110. 111	Ⅶ	隈丸三角形	1.12	0.76	0.90	0.52	0.14 0.21 (礫込み)	続縄文時代前期		宇津内Ⅱb式期	
焼土	F-9	焼土	Ⅶ-13		G156	E122	Ⅷ	不整円形	0.79	0.70	—	—	—	続縄文時代前期			
	F-10	焼土1			E156.157	E122	Ⅷ	不整円形?	0.84	0.81	—	—	—	続縄文時代前期			
	F-11	PIT46			G153	E120	Ⅷ	楕円形	0.90	0.68	0.60	0.40	0.12	続縄文時代前期			
	F-12	焼土1	G152.153	E120	Ⅷ	不整楕円形?	1.38	0.90	—	—	—	続縄文時代前期					
	F-13	PIT48	G153	E120	Ⅷ	楕円形?	(0.70)	(0.58)	(0.53)	(0.42)	(0.12)	続縄文時代前期					
	F-14	焼土2	H153	F120	Ⅶb	—	(0.72)	(0.36)	—	—	—	続縄文時代後期					
	F-15	焼土1	H152.153	F120	Ⅶb	不整楕円形	1.09	0.73	—	—	0.02	続縄文時代後期					
	F-16	焼土1	Ⅶ-14		G.H152	E・F119・ 120	Ⅷ上	不整楕円形	1.20	0.70	—	—	—	続縄文時代前期			
	F-17	焼土2			H152	F119	Ⅷ上	—	(0.50)	(0.30)	—	—	(0.13)	続縄文時代前期			
	F-18	焼土1			G.H151. 152	F119	Ⅷ上	不定形	1.49	0.63	—	—	—	続縄文時代前期			
	F-19	焼土1	H152	F119	Ⅶb	不整楕円形	0.60	0.31	—	—	—	続縄文時代後期					
	F-20	焼土3	36		G151.152	E119	Ⅷ上	不定形	1.68	0.72	—	—	—	続縄文時代前期			
	F-21	PIT66			6	G.H148. 149	F117	Ⅷ上	不定形	1.63	1.40	—	—	0.17		続縄文時代前期	木炭層
	F-22	焼土木炭2	Ⅶ-15	36	H147.148	F116	Ⅷ	半楕円形	1.52	1.41	—	—	—	続縄文時代前期			
	F-23	焼土			H147	F116	Ⅷ	楕円形	0.28	0.18	—	—	—	続縄文時代前期			
	F-24	炭骨2			H.1141	F111	Ⅷ	不定形	1.30	0.88	—	—	0.11	続縄文時代前期			
	F-25	焼土・木炭	H141	F111	Ⅷ	不整楕円形	0.62	0.53	—	—	—	続縄文時代前期					
	F-26	PIT34	Ⅶ-16	6	H141	F111	Ⅷ下	不整楕円形	1.87	0.77	—	—	0.16	続縄文時代前期			
	F-28	PIT37			H142	F111	Ⅷ	不整楕円形	0.83	0.62	0.48	0.32	0.16	続縄文時代前期			土坑?
	F-29	PIT39			6	II40.141	F110	Ⅷ下	不整楕円形	2.25	0.99	1.95	0.75	0.17			
	F-30	PIT36	H140.141	F110	Ⅷ下	不整楕円形	0.97	0.65	0.82	0.42	0.11	続縄文時代前期	焼骨混じり土				
	F-31	焼土1	Ⅶ-17		II39	F109	Ⅶb	楕円形	0.88	0.56	—	—	—	続縄文時代後期			
	F-32	焼土1			II27	E99	Ⅷ	不整楕円形?	0.26	0.19	—	—	0.05	オホーツク文化刻文期			
	F-33	焼土1			6	II20	F94	Ⅷ中	不定形	(0.54)	(0.35)	—	—	—			続縄文時代後期
	F-34	PIT40	Ⅶ-27	40	II18	F93	Ⅶ	楕円形	0.60	0.50	0.43	0.39	0.09	オホーツク文化刻文期			
	F-35	焼土4			II18	F92	Ⅷ	不整楕円形	1.01	0.50	—	—	0.04	続縄文時代後期			
	F-36	焼砂	Ⅶ-27		I.J117.118	F92	Ⅶ	円形	0.70	0.70	—	—	—	オホーツク文化刻文期			
	F-37	木炭1			I.J117	F92	Ⅶ	不定形	1.18	0.60	—	—	0.10	オホーツク文化刻文期			
	F-38	焼土7	Ⅶ-17		II18	E92	Ⅷ	楕円形	0.80	0.54	—	—	—	続縄文時代後期			

表Ⅶ-2 2012年調査遺構一覽(2)

種別	新遺構名	旧遺構名	掲載		検出位置			平面形	規模(m)					時期	備考				
			挿図	写真図版	新発掘区	旧発掘区	層位		検出面		底面		深さ						
									長径	短径	長径	短径							
新	F-39	焼土6	Ⅶ-17	6	H117.118. I117	E92	Ⅶ	不整楕円形	0.70	0.49	—	—	0.06	続縄文時代後期					
	F-40	PIT54	Ⅶ-18	36	H117	E92	Ⅶ	—	(0.69)	(0.42)	—	—	(0.07)	続縄文時代後期					
	F-41	PIT55		J117	F91	Ⅶ上	不定形	(0.88)	(0.80)	—	—	(0.06)	続縄文時代後期						
	F-42	PIT45	Ⅶ-19	6	I116	F91	Ⅶ上	不定形	1.54	0.98	0.55	0.34	0.10	続縄文時代後期					
	F-43	PIT56		36	II15.116	F90	Ⅶ中	楕円形?	(1.19)	(0.86)	(0.83)	(0.56)	(0.09)	続縄文時代後期					
	F-44	PIT52		II15.116	F90	Ⅶ中	楕円形?	(0.80)	(0.60)	(0.45)	(0.31)	(0.16)	続縄文時代後期						
	F-45	焼砂		6	II15	F90	Ⅶ中	不定形	0.96	0.72	—	—	0.09	続縄文時代後期					
	F-46	PIT60		36	I.J115	F90	Ⅶ下	不整円形	0.69	0.60	0.22	0.22	0.09	続縄文時代後期					
	F-47	PIT59		II15	F90	Ⅶ下	楕円形?	1.23	0.82	0.80	0.48	0.09	続縄文時代後期						
	F-48	焼砂		II14	F89	Ⅶ	不整楕円形?	0.42	0.24 0.42 (礫込み)	—	—	—	—	続縄文時代後期					
	F-49	PIT71	II13	F89	Ⅶ	不定形	1.06	0.76	—	—	0.07	続縄文時代後期							
	F-50	PIT75	Ⅶ-19 ・20	37	II13	E・F88	Ⅶ	楕円形?	(1.69)	(1.12)	(1.38)	(1.06)	(0.10) (0.14) (礫込み)	続縄文時代後期					
	F-51	PIT77							II13	E・F88	Ⅶ	楕円形	0.60	0.48	—	—	—	続縄文時代後期	
	F-52	焼土	Ⅶ-20		II12	E88		不定形	1.72	0.79	—	—	—	—	続縄文時代後期				
	F-53	PIT72							H.II12	E87	Ⅶ	不整楕円形?	1.10	(0.63)	—	—	0.09	続縄文時代後期	木炭
F-54	PIT78	II11.112							E87	Ⅶ	不定形	0.71	0.61	—	—	—	続縄文時代後期		
F-55	PIT73	6							II11	E87	Ⅶ	—	(1.53)	(0.73)	—	—	(0.10)	続縄文時代後期	
礫集中	S-8	集石	Ⅶ-21	37	G155.156	E122	IX	楕円形?	(0.96)	(1.30)	(0.69)	(0.70)	—	続縄文時代前期					
	S-9	配石2			H152	F120	IX	円形?	(0.82)	(0.57)	—	—	(0.18)	続縄文時代前期					
	S-10	鯨骨・集石			II25	F98	Ⅶ	楕円形?	2.30	1.60	—	—	—	続縄文時代後期?					
フレイクチップ集中	FC-4	石器集中1	Ⅶ-22	38	G155	E122	IX	—	1.58	1.12	—	—	—	続縄文時代前期					
	FC-5	石器集中			G152	E・F119	IX	不定形	0.96	0.59	—	—	—	続縄文時代前期					
	FC-6	石器集中	38	II20	H151	F119	Ⅶb	楕円形	0.18	0.11	—	—	—	続縄文時代後期					
	FC-7	メノウ集中			H149	F117	Ⅶ	半円形	0.50	0.39	—	—	—	続縄文時代前期					
	FC-8	石器集中	Ⅶ-23		II20	F94	Ⅶ中	—	0.12	0.10	—	—	—	—	続縄文時代後期				
	FC-9	石器集中							J117	F91	Ⅶ	—	(0.49)	(0.34)	—	—	—	続縄文時代後期	
	FC-10	石器集中							J116	F91	Ⅶ	—	0.50	0.19	—	—	—	続縄文時代後期	
	FC-18	石器集中							H151	F119	IX	不整楕円形	0.34	0.32	—	—	—	続縄文時代前期	
	FC-19	石器集中	Ⅶ-23		II42	F111	Ⅶ	—	0.11	0.10	—	—	—	—	続縄文時代後期				
	FC-20	石器集中							J117	F91	Ⅶ中	—	(0.19)	(0.09)	—	—	—	続縄文時代後期	
埋設土器2	埋設土器	Ⅶ-23	38	F111	H141	Ⅶ	楕円形	0.30	0.22	0.24	0.16	0.13	続縄文時代後期	後北C ₂ ・D式					
ベンガラ集中	R-6	ベンガラ範囲1	Ⅶ-24		H153	F120	IX	不整形	(1.56)	(1.10)	—	—	—	続縄文時代前期					
	R-7	ベンガラ範囲2			H153	F120	IX	楕円形	0.30	0.26	—	—	—	続縄文時代前期					
	R-8	ベンガラ範囲3	6	H152	F120	IX	楕円形	0.50	0.43	—	—	—	—	続縄文時代前期					
	R-9	ベンガラ範囲5						H152	F119	IX	楕円形	0.52	0.46	—	—	—	続縄文時代前期		
	R-10	ベンガラ範囲4	Ⅶ-23		H151	F119	IX	不整楕円形	1.05	1.00	—	—	—	—	続縄文時代前期				
	R-11	ベンガラ範囲3							H151	F119	IX	不整楕円形	0.58	0.51	—	—	—	続縄文時代前期	
	R-12	ベンガラ範囲2							H151	F119	IX	不整楕円形	0.88	0.64	—	—	—	続縄文時代前期	
	R-13	ベンガラ範囲	Ⅶ-23		G155	F121	Ⅶ	不整楕円形	0.65	(0.45)	—	—	—	続縄文時代後期					

表Ⅶ-4 2012年調査掲載土器一覽(1)

挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	新遺構名	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数 破片 計	分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号		
図Ⅶ-5	1	70-1	P-14	PIT53/E122	覆土	491	1	2	Ⅵb2	深鉢	口	突起、擬縄貼付文、微隆起線、縄線、補修孔		12-238	
				E122	Ⅷ	316	1								
図Ⅶ-5	2	70-1	P-16	PIT28/F120	覆土	273	1	2	Ⅵc	注口	口～底	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文、内面炭化物多量/底径7.4cm、器高15.7cm	約85%残存	12-8	
			P-16	PIT28/F120	Ⅷb	218	1								
図Ⅶ-6	1	70-1	P-18	PIT29/F120	覆土	267・269・271・337・366～368・376・377・380・381・384・387～389・391	22	37	Ⅵc	深鉢	胴～底	微隆起線、三角列点、条痕文、補修孔、やや上げ底、内面炭化物やや多量/底径8.7cm、器高(21.5)cm		12-10	
				F119	Ⅷa	180	1								
				E120	Ⅷa	25・307	3								
				E120	Ⅷb	230・244	2								
				F120	Ⅷa	123・157	3								
				F120	Ⅷb	230・244	2								
				F124		22	1								
				不明			3								
図Ⅶ-6	2	70-1	P-18	PIT29/F120	覆土	385・403・408	3	3	Ⅵc	ミニチュア	底	無文/底径3.1cm、器高(3.3)cm		12-53	
図Ⅶ-11	1	70-1	PS-28	PIT70	覆土	286	1	7	Ⅵc	深鉢	口	微隆起線、三角列点、帯縄文(横位・縦位)		12-113	
			F-49	PIT71	覆土	580	1								
			F-53	PIT72	覆土	298	1								
			F-53	PIT72	焼土	280	1								
				拡張区	Ⅷ	268・269・379	3								
図Ⅶ-16	1	71-1	F-26	PIT34/F111	Ⅷ	497	1	6	Ⅵb2	深鉢	口～胴	突起、微隆起線(円文・山形文あり)、擦糸縄線、縄文、補修孔		12-118①	
				F109	Ⅷ	79	2								
				F111	Ⅷ	581・584	3								
図Ⅶ-18	1	71-1	F-42	PIT45/F91	焼土	103	1	11	Ⅵc	深鉢	口～胴	突起、口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、帯縄文、貼瘤		12-103	
			F-43	PIT56/F90	焼土	153	1								
				F90	Ⅶ	16	1								
				F91	Ⅷ	89・94・113・118	6								
				F92	Ⅷ	76	1								
				F92骨範囲1	Ⅷ	121	1								
図Ⅶ-18	2	71-1	F-43	PIT56/F90	焼土	153	5	5	Ⅵc	深鉢	底	無文/底径7.6cm、器高(2.9)cm		12-52	
図Ⅶ-20	1	71-1	F-50	PIT75	覆土	449・450	2	10	Ⅵc	深鉢	口～胴	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線(円文あり)、三角列点、帯縄文		12-105②	
				拡張区	Ⅷ	322・380・383・385・387	8								
図Ⅶ-23	1	71-1	埋設土器2	F111	Ⅷ	337	1	1	Ⅵb2	小型深鉢	全	突起、微隆起線(円文・山形文あり)、縄線/口径8.6cm、底径3.3cm、器高10.9cm	約98%残存	12-13	
図Ⅶ-25	1	71-1	P-26	PIT43/F91	覆土	84	1	1	Ⅷb	甕	胴	隆帯上刻み		12-201	
図Ⅶ-28	1	72-1		E120	Ⅸ	194	3	5	Ⅵb1	深鉢	口	突起、擬縄貼付文、縄線、縄文		12-123	
				F120	Ⅸ	194	2								
図Ⅶ-28	2	72-1		F120	Ⅸ	600	1	1	Ⅵb1	深鉢	口	突起、縄文(外・口唇)		12-256	
図Ⅶ-28	3	72-1		F120	Ⅸ	531・624	2	2	Ⅵb	深鉢	胴～底	縄文		12-124	
図Ⅶ-28	4	72-1		E123	Ⅸ	1	1	1	Ⅵb	深鉢	胴～底	縄文/底径5.9cm、器高(6.4)cm		12-59	
図Ⅶ-28	5	72-1		E122	Ⅷ	352・378・399	3	10	Ⅵb2	深鉢	口～胴	6単位突起、擬縄貼付文(円文あり)、縄線、縄文/口径23.1cm、器高(26.6)cm		12-15	
				E123	Ⅷ	532	7								
図Ⅶ-28	6	72-1		E122	Ⅷ	198・279・293	26	48	Ⅵb2	深鉢	口～胴	6単位突起、擬縄貼付文(W字状など)、縄線、縄文(外・内面口唇)/口径(29.2)cm、器高(36.7)cm		12-16	
				不明	不明	不明	22								
図Ⅶ-28	7	72-1		F118	Ⅶ	72・73	不明	不明	Ⅵb2	深鉢	口～胴	大型突起、擬縄貼付文、縄線、縄文/口径(22.0)cm、器高(20.6)cm	剥落多数、砂ごと固める	12-20	
図Ⅶ-29	8	72-1		E122	Ⅷ	300	22	22	Ⅵb2	小型深鉢	口～底	突起(弁状)、擬縄貼付文、縄線、縄線刺突、縄文(外・底面)/口径(13.1)cm、底径5.7cm、器高17.4cm		12-17	
図Ⅶ-29	9	72-1		E166	Ⅷ	41・50・51・53・55・61・68・69・80～82・84	15	15	Ⅵb2	深鉢	口～胴	推定4単位突起、微隆起線、縄線、縄文/口径(26.4)cm、器高(28.2)cm		12-14	
図Ⅶ-29	10	72-1		F110	Ⅷ	313・353・375・397・412・414・456・473・476～479・482～486・540	30	48	Ⅵb2	深鉢	口～底	4単位突起、突起下貼付文、縄線、縄文(外・底面)/口径(23.4)cm、底径6.0cm、器高29.2cm		12-18	
				F111	Ⅷ	94・98・240・244～247・253・255・257・279・294・297・299	14								
				不明	不明	不明	4								
図Ⅶ-29	11	72-1		F111	Ⅷ	63～65・68・70～72・75・83・87～89・107・152・160・183・196・215・218・227・265・268・269	27	31	Ⅵb2	深鉢	口～底	切出形口唇、突起下貼付文、微隆起線、縄線(底面)、縄文/口径(18.7)cm、底径(7.4)cm、器高16.8cm		12-12	
				F112	Ⅷ	104・110	2								
				P-23	PIT30	底面	112・125	2							
図Ⅶ-29	12	72-1		E120	Ⅷ	172・174・180	4	23	Ⅵb	深鉢	胴～底	底部付近縄線刺突、縄文/底径7.5cm、器高(14.8)cm		12-19	
				F120	Ⅷ	446・449・453～455・457・464・471	18								
				F120	Ⅷa	64	1								
図Ⅶ-29	13	72-1		F120	Ⅷ	173・457	4	4	Ⅵb2	深鉢	胴～底	縄文/底径6.0cm、器高(7.4)cm		12-58	
図Ⅶ-29	14	72-1		F112	Ⅷ	47	1	14	Ⅵb2	深鉢	胴～底	縄文/底径5.5cm、器高(11.5)cm		12-57	
				F115	Ⅷ	43・47・53・54・59・66・75・78・79・81・85・92	12								
				F116	Ⅷ	54	1								

表Ⅶ-5 2012年調査掲載土器一覽(2)

挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	新遺構名	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.	点数 破片 計	分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号	
図Ⅶ-29	15	73-1		F118	Ⅷ	158	1 1	Ⅵb2	深鉢	口	擬縄貼付文、縄線、縄文 内面炭化物多量付着		12-254	
図Ⅶ-29	16	73-1		F120	Ⅶb	910	1 1	Ⅵc	深鉢	突起	把手、縄端刺突、微隆起線、縄線、 縄文(内面口唇)		12-243	
図Ⅶ-29	17	73-1		F119	Ⅶb	420	2 2	Ⅵc	深鉢	突起	把手、縄文圧痕		12-244	
図Ⅶ-29	18	73-1		E122	Ⅶb	177	1 1	Ⅵb2	深鉢	突起	突起、微隆起線、縄線		12-245	
図Ⅶ-29	19	73-1		E120	Ⅷ	170	1 1	Ⅵb2	深鉢	口	擬縄貼付文、微隆起線、縄線(外・内)		12-250	
図Ⅶ-29	20	73-1		E122	Ⅷ	351	1 2	Ⅵb2	深鉢	口	突起、擬縄貼付文(円文あり)、縄線、 縄文		12-251	
				E123	Ⅷ	305	1							
図Ⅶ-29	21	73-1		F118	Ⅷ	51	1 1	Ⅵb2	深鉢	胴	微隆起線、縄文		12-249	
図Ⅶ-29	22	73-1		F118	Ⅷ	58	1 1	Ⅵb2	台付鉢?	台?	縄線		12-255	
図Ⅶ-30	23	73-1		E108	ⅧS	22	2 4	Ⅵb2	深鉢	口~胴	突起、擬縄貼付文(円文あり)、縄線、 縄文		12-122	
				F108	ⅧS	22	2							
図Ⅶ-30	24	73-1		E122	Ⅶb	185・235	2	10	Ⅵb2	深鉢	口~胴	突起、擬縄貼付文、微隆起線、縄線、 縄文		12-121
				E122	Ⅷ	397・454	7							
				E123	Ⅷ	522	1							
図Ⅶ-30	25	73-1		F120	Ⅶa	120	1 1	Ⅵb2	深鉢	胴	微隆起線(円弧文あり)、縄端刺突		12-246	
図Ⅶ-30	26	73-1		E123	Ⅷ	531	1 1	Ⅵb2	深鉢	胴	擬縄貼付文(円弧文あり)、縄文		12-260	
図Ⅶ-30	27	73-1		F120	Ⅷ	410	1 1	Ⅵb2	深鉢	口	突起、微隆起線(円弧文あり)、縄線、 縄文		12-253	
図Ⅶ-30	28	73-1		F116	Ⅷ	73・79・80	3 3	Ⅵb2	深鉢	口	微隆起線、縄線、縄文、補修孔		12-252	
図Ⅶ-30	29	73-1		F115	Ⅷ	71~73	3 3	Ⅵb2	深鉢	口	突起、微隆起線(円弧文あり)、縄線、 縄文		12-248	
図Ⅶ-30	30	73-1		F110	Ⅷ	260・337	5 5	Ⅵb2	深鉢	口	突起、微隆起線、縄文		12-117①	
図Ⅶ-30	31	73-1		F110	Ⅷ	343・345・352・592・ 593・599	6 6	Ⅵb2	深鉢	胴	微隆起線(円弧文あり)、縄文		12-117②	
図Ⅶ-30	32	73-1		F111	Ⅷ	297・298・300・323・ 336	31 31	Ⅵb2	深鉢	口~胴	突起、微隆起線(円弧文・山形文あり)、 縄文		12-120	
図Ⅶ-30	33	73-1		F110	Ⅷ	442・601・644・不明	5 5	Ⅵb2	深鉢	口~胴	突起、把手、微隆起線(円弧文・山形 文あり)、縄線、縄文、内面炭化物多 量付着		12-118②	
図Ⅶ-30	34	73-1		F110	Ⅷ	449	1 1	Ⅵb2	深鉢	突起	微隆起線、縄文(内面口唇)		12-247	
図Ⅶ-30	35	73-1		F110	Ⅷ	487	2 2	Ⅵb2	深鉢	口~胴	突起、微隆起線(円弧文・横位・縦位 あり)、縄文		12-116	
図Ⅶ-30	36	73-1		F110	Ⅷ	351・595・601・606・ 628・636・686	7 9	Ⅵb2	深鉢	口~胴	2個突起、微隆起線、縄文		12-115	
				F109	Ⅷ	78	1							
				F111	Ⅷ	494	1							
図Ⅶ-30	37	73-1		F111	Ⅷ	130・169・193	9 9	Ⅵb2	深鉢	口~胴	LR縄文		12-119	
図Ⅶ-31	38	73-1		E119	Ⅶb	15・17・45・48・59・ 72・73・89・174・178	10 19	Ⅵc	深鉢	口~胴	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、 三角列点、補修孔 /口径(22.3)cm、器高(11.9)cm		12-11	
				E118	Ⅶb	27・36・38	4							
				F118	Ⅶb	27	1							
				F119	Ⅶb	362・389	3							
				F119	Ⅶ	470	1							
図Ⅶ-31	39	73-1		F120	Ⅶb	146・167・169・196・ 197・201・211	34 37	Ⅵc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文 /器高(24.4)cm		12-9	
				F120	—	不明	3							
図Ⅶ-31	40	74-1		拡張区	Ⅶ	149	1	46	Ⅵc	注口	口~底	注口・突起、口唇刻み、擬縄貼付文、 微隆起線(円文あり)、三角列点、帯縄 文、補修孔、内面炭化物多量付着 /口径26.3cm、底径11.6cm、器高(27.0)cm		12-7
				拡張区	Ⅷ	79・195・196・381・ 394・396・398・405・ 410・411・413・430・ 432・455・464・471・ 472・474・475	25							
				拡張区	—	477・513・515・517・ 518・545・551	10							
				拡張区	—	不明	4							
				F-49	PIT71	覆土	304	1						
				F-53	PIT72	焼土	282・283	2						
				F-54	PIT78	覆土	565・566	2						
				E90	Ⅷ	135	1							
図Ⅶ-31	41	73-1		F118	Ⅶ	15・19	12	38	Ⅵc	注口	口~胴	注口、口唇刻み、擬縄貼付文、微隆 起線、三角列点、帯縄文、補修孔 /口径22.2cm、器高(17.2)cm		12-6
				F119	Ⅶ	345・354・363・370・ 378・409・415	26							
図Ⅶ-32	42	74-1		E118	Ⅶ	22・23・26・27	20 20	Ⅵc	深鉢	口	突起、擬縄貼付文(眼鏡状有り)、三角 列点、帯縄文 /器高(12.0)cm		12-4	
図Ⅶ-32	43	74-1		E123	Ⅶa	51・243・525	23 30	Ⅵc	深鉢	口~胴	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、 帯縄文、補修孔 /口径25.7cm、器高(28.4)cm		12-2	
				E122	Ⅶa	5・322	7							
図Ⅶ-32	44	74-1		PIT74/E88 付近	覆土	346~348・350~359・ 452・571・不明	30 33	Ⅵc	深鉢	口~胴	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、 帯縄文、 /口径(26.6)cm、器高(22.7)cm	(2018年出土)	12-3	
				J97	Ⅶb	—	3							
図Ⅶ-32	45	74-1		F119	Ⅶa	22	1	8	Ⅵc	深鉢	底付近	帯縄文 /底径(10.3)cm、器高(7.0)cm		12-55
				F119	Ⅶb	336・437	2							
				F120	Ⅶa	50・67・296	3							
				F120	Ⅶb	252・348	2							
図Ⅶ-32	46	74-1		E123	Ⅶa	243	6 6	Ⅵc	深鉢	底	無文 /底径(10.4)cm、器高(4.1)cm		12-54	
図Ⅶ-32	47	74-1		E119	Ⅶb	172・173・333・341	4 22	Ⅵc	注口	口~底	注口、口唇刻み、擬縄貼付文、三角 列点、帯縄文 /口径13.9cm、底径7.1cm、器高 15.6cm		12-5	
				E120	Ⅶa	18・21・22・154	4							
				E120	Ⅶb	74	1							
				F119	Ⅶa	186	1							
				F119	Ⅶb	327・329・330・332	6							
				F119	—	不明	1							
				F120	Ⅶa	47・57・62・280・313	5							

表Ⅶ-6 2012年調査掲載土器一覧(3)

挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	新遺構名	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.		点数		分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号
								破片	計						
図Ⅶ-32	48	74-1		拡張区	Ⅷ	211・213・245・247・ 248・292・384・390・ 393・407・460・470・ 473	22	22	Ⅶc	深鉢	口～胴	突起、口唇刻み、擬縄貼付文、微隆 起線(円弧文あり)、三角列点、帯縄文		12-105①	
図Ⅶ-32	49	74-1		拡張区	Ⅷ	276・484・494・497・ 498・不明	7	8	Ⅶc	深鉢	胴	微隆起線(円弧文あり)、三角列点、帯 縄文		12-108②	
				F91	Ⅷ	104	1								
図Ⅶ-32	50	74-1		拡張区	Ⅷ	482・487・489～491・ 494・495	8	8	Ⅶc	深鉢	胴	微隆起線(円弧文あり)、三角列点、帯 縄文		12-108①	
図Ⅶ-33	51	74-1		E119	Ⅷa	58	1	2	Ⅶc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、 三角列点、帯縄文、補修孔		12-258	
				E119	Ⅷb	86	1								
図Ⅶ-33	52	74-1		E117	Ⅷa	6	1	1	Ⅶc	深鉢	口	擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、 帯縄文		12-241	
図Ⅶ-33	53	74-1		F91	Ⅷ	166	2	2	Ⅶc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、微隆起線、 三角列点、帯縄文、補修孔		12-110①	
図Ⅶ-33	54	74-1		F91	Ⅷ	166	4	4	Ⅶc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		12-110②	
図Ⅶ-33	55	74-1		E123	Ⅷa	8・9	2	2	Ⅶc	深鉢	口	擬縄貼付文、微隆起線、三角列点、 帯縄文		12-104①	
図Ⅶ-33	56	74-1		E124	Ⅷb	120	1	1	Ⅶc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		12-104②	
図Ⅶ-33	57	74-1		PIT1/E124	Ⅶ	114	1	1	Ⅶc	深鉢	胴	微隆起線、三角列点、帯縄文		12-104③	
図Ⅶ-33	58	74-1		E119	Ⅷ	160	5	5	Ⅶc	注口	口	口唇刻み、微隆起線、三角列点、帯 縄文、貫通孔		12-111	
図Ⅶ-33	59	75-1		E121	Ⅷa	53・96・97・100・不明	26	26	Ⅶc	深鉢	口～胴	口唇刻み、擬縄貼付文、帯縄文		12-106①	
図Ⅶ-33	60	75-1		E121	Ⅷa	53・95・不明	15	15	Ⅶc	深鉢	口～胴	帯縄文		12-106②	
図Ⅶ-33	61	74-1		E122	Ⅷb	122・124・129・149	4	4	Ⅶc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、帯縄文		12-114	
図Ⅶ-33	62	74-1		F122	Ⅷb	62・88・93・94・110・ 111・131・189・190	9	10	Ⅶc	深鉢	口～胴	擬縄貼付文、三角列点、帯縄文、補 修孔		12-107	
				F119	表土	1	1								
図Ⅶ-33	63	75-1		E118	Ⅷa	27	4	4	Ⅶc	深鉢	口～胴	突起、擬縄貼付文、三角列点、帯縄 文		12-102①	
図Ⅶ-33	64	75-1		E118	Ⅷa	27	10	10	Ⅶc	深鉢	胴	三角列点、帯縄文		12-102②	
図Ⅶ-33	65	75-1		E123	Ⅷb	167	1	1	Ⅶc	深鉢	口	口唇刻み、擬縄貼付文、三角列点、 条痕文		12-242	
図Ⅶ-33	66	75-1		拡張区	Ⅷ	251・272・288	3	3	Ⅶc	深鉢	胴	口唇刻み、三角列点、条痕文		12-112	
図Ⅶ-33	67	75-1		E123	Ⅷa	195	1	1	Ⅶc	深鉢	胴	三角列点、条痕文		12-259	
図Ⅶ-33	68	75-1		E119	Ⅷa	80	4	4	Ⅶc	深鉢	胴	三角列点、帯縄文		12-109①	
図Ⅶ-33	69	75-1		E119	Ⅷa	80	3	3	Ⅶc	深鉢	胴	三角列点、帯縄文		12-109②	
図Ⅶ-33	70	75-1		拡張区	Ⅷ	265	1	1	Ⅶc	注口	注口	三角列点、帯縄文		12-240	
図Ⅶ-33	71	75-1		E90	Ⅷ	48	1	1	Ⅶc	小型深鉢	胴～底	三角列点、帯縄文		12-257	
図Ⅶ-33	72	75-1		PIT32/F111	覆土	372	1	1	Ⅶ	ミニチュア	口～底	突起、RL縄文 /口径(5.4)cm、底径2.8cm、器高4.4cm		12-21	
				F110	Ⅷ	145・196・302	3	3							
				F109	Ⅷ	130	1								
図Ⅶ-33	73	75-1		E117	Ⅷa	35	1	1	鉢式	深鉢	口	捺糸縄線		12-239	
図Ⅶ-34	74	75-1		F111	Ⅷa	39	1	1	Ⅷa	甕	口	円形刺突文		12-237	
図Ⅶ-34	75	75-1		F97	Ⅶ	7	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(櫛歯)		12-214	
図Ⅶ-34	76	75-1		F110	Ⅷa	7	2	2	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文		12-236	
図Ⅶ-34	77	75-1		F91	Ⅶ	113	1	1	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文		12-219	
図Ⅶ-34	78	75-1		E89	Ⅶ	5	1	1	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文		12-222	
図Ⅶ-34	79	75-1		F99	Ⅶ	12	1	1	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文		12-203	
図Ⅶ-34	80	75-1		E92	Ⅶ	12・14・21	3	3	Ⅷb	甕	口～胴	口縁部肥厚帯、刻文、櫛歯文		12-101	
図Ⅶ-34	81	75-1		F107	ⅧS	9	1	1	Ⅷb	甕	胴	刻文、櫛歯文		12-228	
図Ⅶ-34	82	75-1		E94	Ⅷ	50	1	1	Ⅷb	甕	口	刻文、櫛歯文		12-234	
図Ⅶ-34	83	75-1		E91	Ⅶ	43・50	3	3	Ⅷb	甕	胴	刻文、櫛歯文		12-225	
図Ⅶ-34	84	75-1		F97	Ⅶ	43	1	1	Ⅷb	甕	胴	刻文、櫛歯文		12-223	
図Ⅶ-34	85	75-1		F107	ⅧS	15	1	1	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文、沈線		12-227	
図Ⅶ-34	86	75-1		F92	Ⅶ	114	1	1	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文、ハの字形刻文		12-220	
図Ⅶ-34	87	75-1		F91	Ⅷ	33	1	1	Ⅷb	甕	胴	刻文、櫛歯文、ハの字形刻文		12-217	
図Ⅶ-34	88	75-1		F98	Ⅶ	12	1	1	Ⅷb	甕	胴	刻文、櫛歯文(ハの字)、沈線		12-216	
図Ⅶ-34	89	75-1		E92	Ⅶ	54	1	1	Ⅷb	甕	胴	刻文、櫛歯文		12-218	
図Ⅶ-34	90	75-1		F107	ⅧS	6	1	1	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文、沈線		12-229	
図Ⅶ-34	91	75-1		F92	Ⅶ	113	1	1	Ⅷb	甕	胴	櫛歯文、沈線		12-221	
図Ⅶ-34	92	75-1		F90	Ⅶ	8	1	1	Ⅷb	甕	胴	ハノ字形刻文(縦位)	金雲母入り	12-226a	
図Ⅶ-34	93	75-1		F90	Ⅶ	95	1	1	Ⅷb	甕	胴	無文	金雲母入り	12-226b	
図Ⅶ-34	94	75-1		F95	Ⅶ	35	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、ハの字形刻文		12-212	
図Ⅶ-34	95	75-1		E96	Ⅶ	28・29	4	4	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		12-204	
図Ⅶ-34	96	75-1		E108	ⅧS	19	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		12-230	
図Ⅶ-34	97	75-1		F111	Ⅷa	42	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		12-231	
図Ⅶ-34	98	75-1		E91	Ⅶ	6・8	3	4	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		12-206	
				F93	Ⅶ	32	1								
図Ⅶ-34	99	75-1		F97	Ⅶ	21	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		12-207	
図Ⅶ-34	100	75-1		F112	Ⅷa	17	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		12-210	
図Ⅶ-34	101	75-1		E94	Ⅷ	49	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文(爪形文)		12-233	
図Ⅶ-34	102	75-1		F93	Ⅶ	41	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		12-209	
図Ⅶ-34	103	75-1		E110	Ⅷa	6・9	2	2	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		12-235	
図Ⅶ-34	104	75-1		E101	Ⅶ	9	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文2列		12-205	
図Ⅶ-34	105	75-1		E94	Ⅷ	44	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		12-232	
図Ⅶ-34	106	75-1		E95	Ⅶ	52	3	3	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文2列		12-213	
図Ⅶ-34	107	75-1		F93	Ⅶ	43	1	1	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯、刻文2列		12-211	
図Ⅶ-34	108	75-1		E91	Ⅶ	5	1	3	Ⅷb	小型甕	口	口縁部肥厚帯、刻文		12-208	
				F92	Ⅶ	130・133	2								

表Ⅶ-7 2012年調査掲載土器一覧(4)

挿図 番号	掲載 番号	写真図版 番号	新遺構名	遺構/ (発掘区)	層位	遺物No.		点数		分類	器種	部位	文様等	備考	個体番号
								破片	計						
図Ⅶ-34	109	75-1		E93	Ⅶ	60		1	1	Ⅷb	甕	胴	刻文(爪)		12-224
図Ⅶ-34	110	75-1		F100	Ⅶ	5・11		2	2	Ⅷb	甕	口	口縁部肥厚帯		12-202
図Ⅶ-34	111	75-1		F94	Ⅶ	16		1	1	Ⅷb	甕	胴	無文	赤彩	12-215
図Ⅶ-34	112	75-1		E88	Ⅶ	8		10	10	Ⅷb	小型甕	口～底	無文 /口径(10.2)cm、底径(5.7)cm、器高 11.3cm	約80%残存	12-1
図Ⅶ-34	113	75-1		拡張区	Ⅶ	41		1	1	Ⅷ	深鉢	胴～底	無文 /底径(7.7)cm、器高(7.9)cm		12-60
図Ⅶ-34	114	75-1		拡張区	Ⅶ	5		3	3	Ⅷ	深鉢	底	無文 /底径8.8cm、器高(4.8)cm		12-51
図Ⅶ-34	115	75-1		F120	I			1	1		円盤状土製品	全	擬縄貼付文、縄文	宇津内Ⅱb	12-100

表VI-5 2012年調査掲載石器一覧(1)

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	時期	備考	実測番号
図VII-6	3	70-1	P-18	PIT29/F120	フク土	335	ナイフ	黒曜石	5.1	3.0	1.1	13.0	後北C ₂ ・D		ア
図VII-6	4	70-1	P-18	PIT29/F120	フク土	404	石斧	角閃岩	13.0	3.4	4.1	312.4	後北C ₂ ・D		イ
図VII-7	1	70-1	P-21	PIT63/F119	フク土	1128	台石	安山岩	28.7	24.7	8.1	9300.0	縄文前期	ベンガラ付着	ア
図VII-8	1	70-1	P-23	PIT30/F112	底面	93	ナイフ	黒曜石	8.2	2.8	0.8	12.6	縄文前期		ア
図VII-10	1	70-1	PS-27	PIT64/F119	フク土	1102	台石	安山岩	23.8	17.6	9.0	5200.0	縄文前期		ア
図VII-10	2	70-1	PS-27	PIT64/F119	フク土	1104	台石	安山岩	30.6	21.5	10.6	10200.0	縄文前期		イ
図VII-10	3	70-1	PS-27	PIT64/F119	フク土	1103	台石	安山岩	33.6	16.9	8.2	5900.0	縄文前期		ウ
図VII-12	1	71-1	SF-8	PIT30B/F112	石囲炉	163	ナイフ	黒曜石	(2.6)	1.5	0.5	1.4	縄文前期		ア
図VII-12	2	71-1	SF-8	PIT30B/F112	石囲炉	179	台石	安山岩	21.0	17.2	7.5	4100.0	宇津内IIb	炉石	イ
図VII-12	3	71-1	SF-9	PIT35/F111		512	台石	安山岩	21.6	17.5	14.5	6500.0	宇津内IIb	炉石	ア
図VII-12	4	71-1	SF-9	PIT35/F111		518	台石	安山岩	31.0	16.6	9.1	8200.0	宇津内IIb	炉石	イ
図VII-12	5	71-1	SF-9	PIT35/F111		519	台石	安山岩	29.2	14.9	13.2	6800.0	宇津内IIb	炉石	ウ
図VII-16	2	71-1	F-29	PIT39/F110	焼土	563	ナイフ	黒曜石	3.3	2.7	0.9	5.2	縄文前期		ア
図VII-16	3	71-1	F-29	PIT39/F110	フク土	558	スクレイパー	黒曜石	5.3	5.2	1.5	32.5	縄文前期		イ
図VII-18	3	71-1	F-44	PIT52/F90	フク土	113	台石	安山岩	31.0	(21.0)	19.9	17800.0	後北C ₂ ・D		ア
図VII-20	2	71-1	F-50	PIT75(拡張区)	フク土	461	すり石	安山岩	14.2	5.7	3.7	484.4	後北C ₂ ・D		ア
図VII-20	3	71-1	F-50	PIT75(拡張区)	フク土	462	すり石	安山岩	16.4	7.2	6.5	1184.3	後北C ₂ ・D		イ
図VII-20	4	71-1	F-51	PIT77(拡張区)	フク土	444	ナイフ	黒曜石	(6.9)	3.3	1.1	(24.1)	後北C ₂ ・D		ア
図VII-20	5	71-1	F-53	PIT72(拡張区)	焼土	281	石槍	安山岩	9.6	4.1	1.1	27.1	後北C ₂ ・D	オホーツク	ア
図VII-20	6	71-1	F-54	PIT78(拡張区)	フク土	562	石鏃	黒曜石	1.9	0.8	0.2	0.2	後北C ₂ ・D		ア
図VII-20	7	71-1	F-55	PIT73(拡張区)	フク土	587	石鏃	黒曜石	(1.3)	0.7	0.2	(0.1)	後北C ₂ ・D		ア
図VII-20	8	71-1	F-55	PIT73(拡張区)	フク土	587	石鏃	黒曜石	(1.2)	0.9	0.2	(0.2)	後北C ₂ ・D		イ
図VII-20	9	71-1	F-55	PIT73(拡張区)	フク土	587	石鏃	黒曜石	2.3	1.1	0.3	0.6	後北C ₂ ・D		ウ
図VII-20	10	71-1	F-55	PIT73(拡張区)	フク土	587	石鏃	黒曜石	(1.3)	0.8	0.2	(0.2)	後北C ₂ ・D		エ
図VII-20	11	71-1	F-55	PIT73(拡張区)	フク土	587	ナイフ	黒曜石	(2.3)	1.3	0.6	(1.6)	後北C ₂ ・D		オ
図VII-20	12	71-1	F-55	PIT73(拡張区)	フク土	587	ナイフ	黒曜石	7.3	2.9	1.5	18.8	後北C ₂ ・D		カ
図VII-22	1	71-1	FC-5	F119 石器集中2	IX	1157	石鏃	黒曜石	(1.4)	0.9	0.3	(0.2)	宇津内IIa		ア
図VII-22	2	71-1	FC-5	F119 石器集中2	IX	1157	石鏃	黒曜石	(1.3)	0.9	0.2	(0.2)	宇津内IIa		イ
図VII-27	1	71-1	SP-18	PIT57/F90	フク土	125	スクレイパー	黒曜石	(2.9)	(2.9)	0.6	4.7	オホーツク刻文		ア
図VII-27	2	71-1	SP-19	PIT49/F90	フク土	45	石鏃	安山岩	3.1	1.8	0.6	2.8	オホーツク刻文		ア
図VII-35	1	76-1		E122木炭・ベニガラ層	IX	916	石鏃	黒曜石	2.0	1.3	0.2	0.4	宇津内IIa		1
図VII-35	2	76-1	(R-10)	F119ベニガラ範囲4	IX	855	石鏃	黒曜石	1.4	1.2	0.3	0.4	宇津内IIa		2
図VII-35	3	76-1		F112	VIII	46	石鏃	黒曜石	(1.4)	1.0	0.2	(0.4)	宇津内IIb		3
図VII-35	4	76-1		F109	VIII	125	石鏃	黒曜石	(1.6)	1.6	0.2	(0.6)	宇津内IIb		4
図VII-35	5	76-1		F120	IX	584	石鏃	黒曜石	1.8	1.1	0.2	0.4	宇津内IIa		5
図VII-35	6	76-1		E122木炭・ベニガラ層	IX	916	石鏃	黒曜石	2.0	1.1	0.3	0.5	宇津内IIa		6
図VII-35	7	76-1		F110	VIII	248	石鏃	黒曜石	2.4	1.1	0.3	0.5	宇津内IIb		7
図VII-35	8	76-1	欠	PIT32/F111	フク土	393	石鏃	黒曜石	2.9	1.2	0.2	0.6	宇津内IIb		8
図VII-35	9	76-1		F119	VIII	512	石鏃	黒曜石	4.1	1.8	0.4	2.3	宇津内IIb		9
図VII-35	10	76-1		E123	VIII	529	石鏃	黒曜石	(1.4)	1.0	0.2	(0.3)	宇津内IIb		10
図VII-35	11	76-1		E120	VIII	177	石鏃	黒曜石	(1.5)	1.0	0.3	(0.4)	宇津内IIb		11
図VII-35	12	76-1	(R-11)	F119ベニガラ範囲3	IX	849	石鏃	黒曜石	(1.6)	1.2	0.4	(0.7)	宇津内IIa		12
図VII-35	13	76-1		F119	VIII	624	石鏃	黒曜石	(1.6)	1.2	0.3	(0.5)	宇津内IIb		13
図VII-35	14	76-1		E122木炭・ベニガラ層	IX	916	石鏃	黒曜石	(1.7)	1.4	0.3	(0.6)	宇津内IIa		14
図VII-35	15	76-1		F110	VIII	279	石鏃	黒曜石	(1.7)	1.1	0.3	(0.4)	宇津内IIb		15
図VII-35	16	76-1		E122木炭・ベニガラ層	IX	916	石鏃	黒曜石	(2.0)	1.4	0.2	(0.4)	宇津内IIa		16
図VII-35	17	76-1		E122	VIII	384	石鏃	黒曜石	(2.1)	1.1	0.3	0.6	宇津内IIb		17
図VII-35	18	76-1		F110	VIII	545	石鏃	黒曜石	(2.2)	1.3	0.3	(0.8)	宇津内IIb		18
図VII-35	19	76-1		F119	VIII	467	石鏃	黒曜石	2.3	0.8	0.3	0.4	宇津内IIb		19
図VII-35	20	76-1		F119	IX	958	石鏃	黒曜石	(2.5)	0.9	0.3	(0.7)	宇津内IIa		20
図VII-35	21	76-1		E122	VIII	470	石鏃	黒曜石	3.1	1.0	0.4	1.1	宇津内IIb		21
図VII-35	22	76-1		E122木炭・ベニガラ層	IX	916	石鏃	黒曜石	(1.3)	1.1	0.2	(0.2)	宇津内IIa		22
図VII-35	23	76-1		F112	VIII	238	ナイフ	黒曜石	4.9	3.4	0.7	8.2	宇津内IIb		23
図VII-35	24	76-1		F111	VIII	487	ナイフ	黒曜石	7.0	2.3	1.0	10.3	宇津内IIb		24
図VII-35	25	76-1		F111	VIII	350	ナイフ	黒曜石	9.0	4.0	1.1	23.6	宇津内IIb		25
図VII-35	26	76-1		F110	VIII	130	ナイフ	黒曜石	(2.7)	2.6	0.8	(5.7)	宇津内IIb		26
図VII-35	27	76-1		F111	VIII	445	ナイフ	黒曜石	(6.8)	3.0	0.8	(15.4)	宇津内IIb		27
図VII-35	28	76-1		E122	IX	733	ナイフ	黒曜石	(5.3)	3.0	0.8	(9.3)	宇津内IIa		28
図VII-35	29	76-1		F115	VIII	93	ナイフ	黒曜石	(8.4)	5.1	0.9	(22.3)	宇津内IIb		29
図VII-35	30	76-1		F111	VIII	421	ナイフ	黒曜石	6.7	2.6	0.8	8.6	宇津内IIb		30
図VII-35	31	76-1		F120	VIII	473	ナイフ	黒曜石	6.9	3.2	0.8	18.4	宇津内IIb		31
図VII-35	32	76-1		E122	IX	765	ナイフ	黒曜石	6.9	3.1	0.8	15.2	宇津内IIa		32
図VII-35	33	76-1		F111	VIII	511	ナイフ	黒曜石	8.2	3.0	1.0	24.6	宇津内IIb		33
図VII-36	34	76-1		E123	VIII	528	ナイフ	黒曜石	8.7	4.2	0.8	20.3	宇津内IIb		34
図VII-36	35	76-1		F119木炭範囲2	IX	1140	ナイフ	黒曜石	(1.9)	1.6	0.5	(1.1)	宇津内IIa		35
図VII-36	36	76-1		F110	VIII	490	ナイフ	黒曜石	(2.1)	2.5	0.3	(1.3)	宇津内IIb		36
図VII-36	37	76-1		F110	VIII	80	ナイフ	黒曜石	(3.3)	3.2	0.8	(7.1)	宇津内IIb		37
図VII-36	38	76-1		E122骨範囲	IX	671	ナイフ	黒曜石	(3.6)	2.2	0.8	(5.9)	宇津内IIa		38
図VII-36	39	76-1		E122薬・木炭層	IX	911	ナイフ	黒曜石	(4.4)	2.5	0.8	(8.2)	宇津内IIa		39
図VII-36	40	76-1		F110	VIII	556	スクレイパー	黒曜石	3.0	3.5	1.5	16.7	宇津内IIb		40
図VII-36	41	76-1		F111	VIII	175	スクレイパー	黒曜石	3.2	3.5	0.8	6.8	宇津内IIb		41
図VII-36	42	76-1		F119	VIII	818	スクレイパー	黒曜石	3.6	4.9	1.3	16.0	宇津内IIb		42
図VII-36	43	76-1		E122薬・木炭層	IX	911	スクレイパー	黒曜石	4.1	4.2	1.0	18.5	宇津内IIa		43
図VII-36	44	76-1		F119木炭範囲2	IX	1140	スクレイパー	黒曜石	4.6	3.0	1.0	9.0	宇津内IIa		44
図VII-36	45	76-1		F111	VIII	256	スクレイパー	黒曜石	7.2	6.4	2.3	64.1	宇津内IIb		45
図VII-36	46	76-1		E122ベニガラ範囲	IX	675	スクレイパー	黒曜石	3.9	1.9	0.8	3.4	宇津内IIa		46
図VII-36	47	76-1		E121	VIII	102	スクレイパー	黒曜石	3.9	2.6	1.0	8.1	宇津内IIb		47
図VII-36	48	76-1		F119	VIII	481	スクレイパー	黒曜石	4.5	2.6	1.1	8.9	宇津内IIb		48
図VII-36	49	76-1		F120	VIII	470	スクレイパー	黒曜石	5.6	2.4	1.2	10.0	宇津内IIb		49
図VII-36	50	76-1		F110	VIII	616	スクレイパー	黒曜石	6.2	3.5	1.0	11.1	宇津内IIb		50

表Ⅶ-9 2012年調査掲載石器一覧(2)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版 番号	新遺構名	旧遺構名 /発掘区	層位	遺物 番号	分類	石材	長さ (cm)	幅(cm)	厚さ (cm)	重量(g)	時期	備考	実測 番号
図Ⅶ-36	51	76-1		E122礫・木炭層	IX	911	スクレイパー	黒曜石	(4.0)	2.4	1.0	5.8	宇津内Ⅱa		51
図Ⅶ-36	52	76-1		F119	VIII	585	スクレイパー	黒曜石	(4.7)	2.5	0.6	5.1	宇津内Ⅱb		52
図Ⅶ-36	53	76-1		E122	IX	731	スクレイパー	黒曜石	2.3	2.1	0.8	2.8	宇津内Ⅱa		53
図Ⅶ-36	54	76-1		F119	IX	1056	スクレイパー	黒曜石	2.8	2.2	1.0	5.3	宇津内Ⅱa		54
図Ⅶ-36	55	76-1		E122礫・木炭層	IX	911	スクレイパー	黒曜石	3.3	3.4	0.6	7.6	宇津内Ⅱa		55
図Ⅶ-36	56	76-1		E120	IX	221	スクレイパー	黒曜石	3.2	2.9	0.7	5.4	宇津内Ⅱa		56
図Ⅶ-36	57	76-1		F110	VIII	589	スクレイパー	黒曜石	4.9	4.1	0.9	14.5	宇津内Ⅱb		57
図Ⅶ-36	58	76-1		E122	IX	729	スクレイパー	黒曜石	(3.3)	3.1	0.7	(4.7)	宇津内Ⅱa		58
図Ⅶ-36	59	76-1		E123	VIII	426	スクレイパー	黒曜石	(4.6)	3.0	0.6	4.2	宇津内Ⅱb		59
図Ⅶ-36	60	76-1		F119	VIII	511	スクレイパー	黒曜石	(4.8)	3.7	0.7	(9.6)	宇津内Ⅱb		60
図Ⅶ-37	61	76-1		F119	VIII	525	スクレイパー	黒曜石	(3.5)	5.3	0.7	(5.5)	宇津内Ⅱb		61
図Ⅶ-37	62	76-1		F121	VIII	31	スクレイパー	黒曜石	(6.3)	4.4	1.1	(18.2)	宇津内Ⅱb		62
図Ⅶ-37	63	76-1		E122木炭・ベニガラ層	IX	916	石錐	黒曜石	1.9	1.5	0.4	0.6	宇津内Ⅱa		63
図Ⅶ-37	64	76-1		F111	VIII	450	Rフレイク	黒曜石	4.7	2.1	0.9	6.0	宇津内Ⅱb		64
図Ⅶ-37	65	76-1		F109	VIII	85	Rフレイク	黒曜石	4.6	2.9	0.8	5.4	宇津内Ⅱb		65
図Ⅶ-37	66	76-1		E122	VIII	466	Rフレイク	黒曜石	(3.6)	2.0	0.7	(4.3)	宇津内Ⅱb		66
図Ⅶ-37	67	76-1		F119	VIII	504	Rフレイク	黒曜石	(3.9)	2.2	0.7	(3.8)	宇津内Ⅱb		67
図Ⅶ-37	68	76-1		F112	VIII	304	Rフレイク	黒曜石	4.0	3.2	0.8	8.8	宇津内Ⅱb		68
図Ⅶ-37	69	76-1		F119	VIII	533	Rフレイク	黒曜石	4.4	6.1	1.2	20.2	宇津内Ⅱb		69
図Ⅶ-37	70	76-1		F110	VIII	306	Rフレイク	黒曜石	5.8	4.0	0.8	13.4	宇津内Ⅱb		70
図Ⅶ-37	71	76-1		F110	VIII	672	Rフレイク	黒曜石	6.3	4.0	1.1	20.9	宇津内Ⅱb		71
図Ⅶ-37	72	76-1		F115	VIII	39	Rフレイク	黒曜石	(3.1)	3.9	0.9	(8.1)	宇津内Ⅱb		72
図Ⅶ-37	73	76-1		F119	VIII	485	石核	硬質頁岩	14.1	15.2	8.7	2300.0	宇津内Ⅱb		73
図Ⅶ-38	74	77-1		F109	VIII	93	石斧	黒色片岩	9.8	5.2	2.3	160.8	宇津内Ⅱb		74
図Ⅶ-38	75	77-1		E123	VIII	466	たたき石	安山岩	10.0	7.5	6.3	858.7	宇津内Ⅱb		75
図Ⅶ-38	76	77-1		E116	VIII	23	すり石	軽石	4.0	3.4	2.6	5.4	宇津内Ⅱb		76
図Ⅶ-38	77	77-1		F121	VIII	33	すり石	安山岩	7.1	7.0	4.5	323.2	宇津内Ⅱb		77
図Ⅶ-38	78	77-1		F115	VIII	47	すり石	安山岩	7.3	5.1	5.0	292.5	宇津内Ⅱb		78
図Ⅶ-38	79	77-1		E122	VIII	199	すり石	安山岩	7.2	7.3	2.5	179.4	宇津内Ⅱb		79
図Ⅶ-38	80	77-1		F119	VIII	482	すり石	安山岩	9.4	8.7	2.5	323.2	宇津内Ⅱb		80
図Ⅶ-38	81	77-1		F120	IX	512	すり石	安山岩	11.1	9.3	5.6	721.3	宇津内Ⅱa		81
図Ⅶ-38	82	77-1		E119	IX	273	すり石	安山岩	11.6	10.9	4.2	852.9	宇津内Ⅱa		82
図Ⅶ-38	83	77-1		F119	IX	1070	すり石	安山岩	12.1	12.0	5.2	1088.5	宇津内Ⅱa		83
図Ⅶ-38	84	77-1		F120	IX	824	すり石	安山岩	15.8	12.7	5.8	1800.0	宇津内Ⅱa		84
図Ⅶ-38	85	77-1		E122	IX	669	すり石	安山岩	19.0	17.8	4.7	2100.0	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	85
図Ⅶ-38	86	77-1		F119	IX	1132	くぼみ石	安山岩	12.4	8.5	5.2	800.4	宇津内Ⅱa		86
図Ⅶ-38	87	77-1		F112	VIII	31	くぼみ石	安山岩	(15.7)	12.2	5.0	1400.0	宇津内Ⅱb		87
図Ⅶ-38	88	77-1		E116	VIII	74	砥石	軽石	6.3	5.6	3.5	24.5	宇津内Ⅱb		88
図Ⅶ-38	89	77-1		F115	VIII	68	砥石	軽石	6.8	4.7	4.4	24.0	宇津内Ⅱb		89
図Ⅶ-38	90	77-1		F110	VIII	362	砥石	砂岩	15.7	6.0	4.5	484.9	宇津内Ⅱb		90
図Ⅶ-38	91	77-1		E122	IX	876	砥石	安山岩	20.4	22.7	12.2	6200.0	宇津内Ⅱa		91
図Ⅶ-39	92	77-1		E122	IX	741	台石	安山岩	25.6	20.0	6.5	4800.0	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	92
図Ⅶ-39	93	77-1		F119	IX	1024	台石	安山岩	25.6	26.4	8.5	8100.0	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	93
図Ⅶ-39	94	77-1		F120	IX	783	台石	安山岩	47.1	26.2	9.9	13100.0	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	94
図Ⅶ-39	95	77-1		F119	IX	929	台石	安山岩	37.2	31.6	9.5	19600.0	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	95
図Ⅶ-40	96	77-1		F120	IX	839	台石	安山岩	25.0	20.7	6.0	4900.0	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	96
図Ⅶ-40	97	77-1		E119	IX	263	台石	安山岩	27.0	19.1	8.3	5800.0	宇津内Ⅱa		97
図Ⅶ-40	98	77-1		F119	IX	1137	台石	安山岩	28.7	23.7	11.6	9700.0	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	98
図Ⅶ-40	99	77-1		E122	IX	642	礫	安山岩	4.3	4.0	3.1	74.0	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	99
図Ⅶ-40	100	77-1		F119	IX	1089	礫	安山岩	12.2	6.5	4.5	552.1	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	100
図Ⅶ-40	101	77-1		E122	IX	644	礫	安山岩	12.5	4.3	3.4	286.6	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	101
図Ⅶ-40	102	77-1		E120	IX	263	礫	安山岩	13.1	7.5	5.2	719.9	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	102
図Ⅶ-40	103	77-1		E122	IX	743	礫	安山岩	15.8	6.8	5.3	810.5	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	103
図Ⅶ-40	104	77-1		E122	IX	802	礫	安山岩	17.6	11.5	7.6	2100.0	宇津内Ⅱa	ベンガラ付着	104
図Ⅶ-41	105	78-1		F120骨・炭範囲	VIIb	911	石鏃	黒曜石	(1.0)	0.6	0.2	0.1	後北C ₂ ・D	斜面	105
図Ⅶ-41	106	78-1		F120骨・炭範囲	VIIb	911	石鏃	黒曜石	1.1	0.6	0.2	0.1	後北C ₂ ・D	斜面	106
図Ⅶ-41	107	78-1		F119	VIIa	37	石鏃	黒曜石	1.1	0.6	0.2	0.1	後北C ₂ ・D主体		107
図Ⅶ-41	108	78-1		F120骨・炭範囲	VIIb	911	石鏃	黒曜石	1.3	0.6	0.2	0.1	後北C ₂ ・D	斜面	108
図Ⅶ-41	109	78-1		F120	VIIb	185	石鏃	黒曜石	1.3	0.6	0.2	0.1	後北C ₂ ・D		109
図Ⅶ-41	110	78-1		F120	VIIb	175	石鏃	黒曜石	(1.3)	0.7	0.3	0.1	後北C ₂ ・D		110
図Ⅶ-41	111	78-1	欠	PIT76(拡張区)	フク土	417	石鏃	黒曜石	(1.3)	0.6	0.2	(0.2)	後北C ₂ ・D		111
図Ⅶ-41	112	78-1		E94	VII	67	石鏃	黒曜石	1.4	0.7	0.2	0.1	後北C ₂ ・D		112
図Ⅶ-41	113	78-1		F120骨・炭範囲	VIIb	911	石鏃	黒曜石	1.5	0.6	0.1	0.1	後北C ₂ ・D	斜面	113
図Ⅶ-41	114	78-1		F120骨・炭範囲	VIIb	911	石鏃	黒曜石	1.4	0.6	0.2	0.1	後北C ₂ ・D	斜面	114
図Ⅶ-41	115	78-1		F120骨・炭範囲	VIIb	911	石鏃	黒曜石	1.5	0.7	0.1	0.1	後北C ₂ ・D	斜面	115
図Ⅶ-41	116	78-1		F120	VIIb	240	石鏃	メノウ	(1.4)	0.6	0.2	0.2	後北C ₂ ・D		116
図Ⅶ-41	117	78-1		E95	VII	61	石鏃	黒曜石	1.5	0.6	0.2	0.1	後北C ₂ ・D		117
図Ⅶ-41	118	78-1		E121	VII	70	石鏃	黒曜石	1.6	0.7	0.2	0.2	後北C ₂ ・D、刻文		118
図Ⅶ-41	119	78-1		F119	VIIa	17	石鏃	黒曜石	1.7	0.8	0.2	0.2	後北C ₂ ・D主体		119
図Ⅶ-41	120	78-1		F120骨・炭範囲	VIIb	911	石鏃	黒曜石	1.7	0.8	0.3	0.3	後北C ₂ ・D	斜面	120
図Ⅶ-41	121	78-1		E123	VIIb	346	石鏃	黒曜石	(1.6)	0.7	0.2	0.2	後北C ₂ ・D		121
図Ⅶ-41	122	78-1		(拡張区)	VIII	510	石鏃	黒曜石	1.9	0.8	0.3	0.3	後北C ₂ ・D		122
図Ⅶ-41	123	78-1	欠	PIT76(拡張区)	フク土	418	石鏃	黒曜石	2.1	1.3	0.4	0.8	後北C ₂ ・D		123
図Ⅶ-41	124	78-1		F120骨・炭範囲	VIIb	911	石鏃	黒曜石	(0.9)	0.6	0.2	0.1	後北C ₂ ・D	斜面	124
図Ⅶ-41	125	78-1		F120骨・炭範囲	VIIb	911	石鏃	黒曜石	(0.9)	0.6	0.2	0.1	後北C ₂ ・D	斜面	125
図Ⅶ-41	126	78-1		F115	VIIb	21	石鏃	黒曜石	(2.0)	1.3	0.3	(0.9)	後北C ₂ ・D		126
図Ⅶ-41	127	78-1		E119	VIIb	51	石鏃	黒曜石	(2.7)	1.2	0.3	0.6	後北C ₂ ・D		127
図Ⅶ-41	128	78-1		E115	VIIa	5	石鏃	黒曜石	5.5	1.8	0.6	3.8	後北C ₂ ・D主体		128
図Ⅶ-41	129	78-1		F120	VIIa	91	石鏃	黒曜石	2.6	(1.0)	0.4	(0.7)	後北C ₂ ・D主体		129
図Ⅶ-41	130	78-1		F119	VIIb	394	石鏃	黒曜石	2.2	1.2	0.4	0.9	後北C ₂ ・D		130

表Ⅶ-10 2012年調査掲載石器一覧(3)

挿図 番号	掲載 番号	写真 図版 番号	新遺構名	旧遺構名 /発掘区	層位	遺物 番号	分類	石材	長さ (cm)	幅(cm)	厚さ (cm)	重量(g)	時期	備考	実測 番号
図Ⅶ-41	131	78-1		F119	Ⅶa	51	石鏃	硬質頁岩	2.6	1.2	0.4	0.9	後北C ₂ ・D主体		131
図Ⅶ-41	132	78-1		E117	Ⅶa	34	石鏃	黒曜石	(4.4)	2.1	0.5	(3.5)	後北C ₂ ・D主体		132
図Ⅶ-41	133	78-1		F119	Ⅶb	394	石鏃	黒曜石	2.5	1.2	0.6	1.5	後北C ₂ ・D		133
図Ⅶ-41	134	78-1		F120骨・炭範囲	Ⅶb	911	石鏃	黒曜石	(0.9)	0.7	0.2	0.1	後北C ₂ ・D	斜面	134
図Ⅶ-41	135	78-1		F120骨・炭範囲	Ⅶb	911	石鏃	黒曜石	(1.0)	0.7	0.2	(0.1)	後北C ₂ ・D	斜面	135
図Ⅶ-41	136	78-1		F120骨・炭範囲	Ⅶb	911	石鏃	黒曜石	(1.2)	0.8	0.2	(0.1)	後北C ₂ ・D	斜面	136
図Ⅶ-41	137	78-1		F120	Ⅶb	184	石鏃	黒曜石	(1.3)	0.7	0.2	(0.1)	後北C ₂ ・D		137
図Ⅶ-41	138	78-1		F120	Ⅶa	103	石鏃	黒曜石	(2.2)	1.1	0.3	(0.7)	後北C ₂ ・D主体		138
図Ⅶ-41	139	78-1		F111	Ⅶa	5	石鏃	安山岩	(3.7)	2.8	(0.7)	(5.8)	後北C ₂ ・D主体		139
図Ⅶ-41	140	78-1		(拡張区)	Ⅷ	317	ナイフ	黒曜石	(3.2)	3.0	0.9	9.3	後北C ₂ ・D		140
図Ⅶ-41	141	78-1		E119	Ⅶb	136	ナイフ	安山岩	(6.0)	3.2	1.2	(21.1)	後北C ₂ ・D		141
図Ⅶ-41	142	78-1		F90	Ⅷ	70	ナイフ	黒曜石	4.1	2.0	0.7	4.6	後北C ₂ ・D		142
図Ⅶ-41	143	78-1		F90	Ⅷ	102	ナイフ	黒曜石	4.5	2.4	0.9	8.4	後北C ₂ ・D		143
図Ⅶ-41	144	78-1		F92	Ⅷ	90	ナイフ	黒曜石	4.5	1.8	0.7	4.1	後北C ₂ ・D		144
図Ⅶ-41	145	78-1		F91	Ⅷ	159	ナイフ	黒曜石	4.6	1.8	0.8	6.4	後北C ₂ ・D		145
図Ⅶ-41	146	78-1		F90	Ⅷ	63	ナイフ	黒曜石	6.0	2.4	0.7	8.7	後北C ₂ ・D		146
図Ⅶ-41	147	78-1		F90	Ⅷ	67	ナイフ	黒曜石	(2.8)	2.0	0.6	(2.7)	後北C ₂ ・D		147
図Ⅶ-41	148	78-1		F94	Ⅷ	55	ナイフ	黒曜石	(2.3)	2.0	0.6	(1.6)	後北C ₂ ・D		148
図Ⅶ-41	149	78-1		F91	Ⅷ	158	ナイフ	黒曜石	(2.9)	2.1	0.4	(1.9)	後北C ₂ ・D		149
図Ⅶ-41	150	78-1		F92	Ⅷ	94	ナイフ	黒曜石	(3.4)	2.1	0.5	3.2	後北C ₂ ・D		150
図Ⅶ-41	151	78-1		F90	Ⅷ	146	ナイフ	黒曜石	(3.5)	2.0	0.7	(4.6)	後北C ₂ ・D		151
図Ⅶ-41	152	78-1		F90	Ⅷ	62	ナイフ	黒曜石	3.8	2.5	0.8	6.1	後北C ₂ ・D		152
図Ⅶ-41	153	78-1		F90	Ⅷ	110	ナイフ	黒曜石	(4.0)	2.2	1.0	(6.3)	後北C ₂ ・D		153
図Ⅶ-41	154	78-1		F90	Ⅷ	104	ナイフ	黒曜石	(4.3)	2.3	0.7	5.6	後北C ₂ ・D		154
図Ⅶ-41	155	78-1		F90	Ⅷ	64	ナイフ	黒曜石	(5.1)	2.2	0.8	(6.9)	後北C ₂ ・D		155
図Ⅶ-41	156	78-1		E122	Ⅶa	72	ナイフ	黒曜石	5.2	2.4	0.7	6.9	後北C ₂ ・D主体		156
図Ⅶ-42	157	78-1		F120	Ⅶa	279	ナイフ	黒曜石	5.3	2.0	0.7	6.4	後北C ₂ ・D主体		157
図Ⅶ-42	158	78-1		F91	Ⅷ	88	ナイフ	黒曜石	7.5	2.7	1.1	13.6	後北C ₂ ・D		158
図Ⅶ-42	159	78-1		E119	Ⅶa	99	ナイフ	黒曜石	(4.8)	3.4	0.8	(11.9)	後北C ₂ ・D主体		159
図Ⅶ-42	160	78-1		E120	Ⅶb	76	ナイフ	黒曜石	(3.5)	1.7	0.6	(2.9)	後北C ₂ ・D		160
図Ⅶ-42	161	78-1		F111	Ⅶa	31	ナイフ	黒曜石	(3.3)	2.3	0.5	(2.5)	後北C ₂ ・D主体		161
図Ⅶ-42	162	78-1		F109	Ⅶa	58	ナイフ	黒曜石	4.2	3.2	0.8	9.5	後北C ₂ ・D主体		162
図Ⅶ-42	163	78-1		F117	Ⅶa	6	ナイフ	硬質頁岩	4.3	4.1	1.8	27.6	後北C ₂ ・D主体		163
図Ⅶ-42	164	78-1		E119	Ⅶb	38	ナイフ	黒曜石	4.9	3.0	1.0	11.1	後北C ₂ ・D		164
図Ⅶ-42	165	78-1		F92	Ⅷ	118	ナイフ	黒曜石	(1.8)	1.3	0.5	(1.0)	後北C ₂ ・D		165
図Ⅶ-42	166	78-1		F94	Ⅷ	45	ナイフ	黒曜石	(2.3)	3.1	0.8	5.4	後北C ₂ ・D		166
図Ⅶ-42	167	78-1		F121	Ⅶ	12	ナイフ	黒曜石	(6.2)	4.8	1.0	(25.3)	後北C ₂ ・D、刻文		167
図Ⅶ-42	168	78-1		F111	Ⅶa	23	スクレイパー	黒曜石	3.9	2.2	0.8	7.2	後北C ₂ ・D主体		168
図Ⅶ-42	169	78-1		E122	Ⅶb	128	スクレイパー	黒曜石	4.3	2.0	0.9	6.0	後北C ₂ ・D		169
図Ⅶ-42	170	78-1		E123	Ⅶa	283	スクレイパー	硬質頁岩	4.8	2.5	1.3	12.4	後北C ₂ ・D主体		170
図Ⅶ-42	171	78-1		F120	Ⅶb	405	スクレイパー	黒曜石	5.1	2.8	1.0	11.7	後北C ₂ ・D		171
図Ⅶ-42	172	78-1		F90	Ⅷ	151	スクレイパー	黒曜石	4.9	2.3	0.7	5.1	後北C ₂ ・D		172
図Ⅶ-42	173	78-1		F91	Ⅷ	90	スクレイパー	黒曜石	5.4	1.4	0.9	3.8	後北C ₂ ・D		173
図Ⅶ-42	174	78-1		E123	Ⅶa	256	スクレイパー	黒曜石	3.4	2.5	0.6	4.1	後北C ₂ ・D主体		174
図Ⅶ-42	175	78-1		(拡張区)	Ⅷ	206	スクレイパー	黒曜石	3.5	3.1	0.8	8.9	後北C ₂ ・D		175
図Ⅶ-42	176	78-1		E90	Ⅷ	57	スクレイパー	黒曜石	4.5	5.0	0.9	16.6	後北C ₂ ・D		176
図Ⅶ-42	177	78-1		E90	Ⅷ	66	スクレイパー	黒曜石	(2.7)	2.1	0.4	(2.1)	後北C ₂ ・D		177
図Ⅶ-42	178	78-1		F121	Ⅶ	13	スクレイパー	黒曜石	2.4	2.6	0.8	4.2	後北C ₂ ・D、刻文		178
図Ⅶ-42	179	78-1		F109	Ⅶb	32	スクレイパー	黒曜石	3.3	2.6	0.9	7.4	後北C ₂ ・D		179
図Ⅶ-42	180	78-1		E123	Ⅶa	132	スクレイパー	黒曜石	3.0	3.3	0.6	4.5	後北C ₂ ・D主体		180
図Ⅶ-42	181	78-1		F119	Ⅶa	198	スクレイパー	黒曜石	3.5	3.0	1.2	9.6	後北C ₂ ・D主体		181
図Ⅶ-43	182	78-1		E123	Ⅶb	363	スクレイパー	黒曜石	3.3	4.0	1.3	15.1	後北C ₂ ・D		182
図Ⅶ-43	183	78-1		E120	Ⅶb	90	スクレイパー	黒曜石	3.8	2.3	0.8	5.6	後北C ₂ ・D		183
図Ⅶ-43	184	78-1		E123	Ⅶa	46	スクレイパー	黒曜石	4.3	3.9	0.8	10.5	後北C ₂ ・D主体		184
図Ⅶ-43	185	78-1		E122	Ⅶa	70	スクレイパー	黒曜石	4.2	3.0	0.8	10.3	後北C ₂ ・D主体		185
図Ⅶ-43	186	78-1		F121	Ⅶ	10	スクレイパー	黒曜石	4.6	4.0	1.8	31.2	後北C ₂ ・D、刻文		186
図Ⅶ-43	187	78-1		F120	Ⅶb	339	スクレイパー	黒曜石	3.5	4.8	1.2	18.3	後北C ₂ ・D		187
図Ⅶ-43	188	78-1		(拡張区)	Ⅷ	458	スクレイパー	黒曜石	(2.0)	2.4	0.6	(2.8)	後北C ₂ ・D		188
図Ⅶ-43	189	78-1		E123	Ⅶa	270	スクレイパー	黒曜石	2.9	1.7	0.8	3.8	後北C ₂ ・D主体		189
図Ⅶ-43	190	78-1		E122	Ⅶb	116	スクレイパー	黒曜石	2.9	2.8	0.6	3.5	後北C ₂ ・D		190
図Ⅶ-43	191	78-1		F94	Ⅷ	77	スクレイパー	黒曜石	(3.5)	2.3	0.7	(5.6)	後北C ₂ ・D		191
図Ⅶ-43	192	78-1		F90	Ⅷ	132	スクレイパー	黒曜石	(3.7)	2.6	0.7	(5.1)	後北C ₂ ・D		192
図Ⅶ-43	193	78-1		F119	Ⅶa	11	石錐	メノウ	3.7	1.3	1.2	4.8	後北C ₂ ・D主体		193
図Ⅶ-43	194	78-1		E117	Ⅶa	38	Rフレイク	黒曜石	2.4	1.8	0.5	2.5	後北C ₂ ・D主体		194
図Ⅶ-43	195	78-1		E123	Ⅶa	62	Rフレイク	黒曜石	2.7	1.8	0.5	2.0	後北C ₂ ・D主体		195
図Ⅶ-43	196	78-1		F116	Ⅶa	34	Rフレイク	黒曜石	2.6	2.2	0.4	1.8	後北C ₂ ・D主体		196
図Ⅶ-43	197	78-1		F120	Ⅶb	200	Rフレイク	黒曜石	2.5	2.6	0.8	3.4	後北C ₂ ・D		197
図Ⅶ-43	198	78-1		F120	Ⅶb	221	Rフレイク	黒曜石	2.9	2.0	0.5	2.8	後北C ₂ ・D		198
図Ⅶ-43	199	78-1		E120	Ⅶa	27	Rフレイク	黒曜石	(2.8)	2.3	0.6	(3.4)	後北C ₂ ・D主体		199
図Ⅶ-43	200	78-1		E118	Ⅶ	15	Rフレイク	黒曜石	3.3	2.5	0.6	3.4	後北C ₂ ・D、刻文		200
図Ⅶ-43	201	78-1		E117	Ⅶb	47	Rフレイク	黒曜石	3.0	2.0	0.6	3.2	後北C ₂ ・D		201
図Ⅶ-43	202	78-1		F111	Ⅶa	19	Rフレイク	黒曜石	3.6	2.2	0.5	2.8	後北C ₂ ・D主体		202
図Ⅶ-43	203	78-1		F90	Ⅷ	111	Rフレイク	黒曜石	3.9	2.0	0.6	3.3	後北C ₂ ・D		203
図Ⅶ-43	204	78-1		F117	Ⅶa	97	Rフレイク	黒曜石	3.8	2.8	0.9	6.3	後北C ₂ ・D主体		204
図Ⅶ-43	205	78-1		F119	Ⅶb	443	Rフレイク	黒曜石	3.7	2.5	1.2	7.9	後北C ₂ ・D		205
図Ⅶ-43	206	78-1		F90木炭範囲5	Ⅶ中間	82	Rフレイク	黒曜石	3.7	3.5	0.9	10.8	後北C ₂ ・D		206
図Ⅶ-43	207	78-1		F90	Ⅷ	60	Rフレイク	黒曜石	(5.1)	2.4	0.9	8.6	後北C ₂ ・D		207
図Ⅶ-43	208	78-1		F112	Ⅶ	19	Rフレイク	黒曜石	5.0	3.1	0.8	10.2	刻文・後北		208
図Ⅶ-43	209	78-1		E112	Ⅶ	6	Rフレイク	黒曜石	4.8	3.0	0.7	4.8	刻文・後北		209
図Ⅶ-43	210	78-1		(拡張区)	Ⅷ	367	Rフレイク	黒曜石	5.1	3.2	1.1	8.5	後北C ₂ ・D		210

表Ⅶ-11 2012年調査掲載石器一覧(4)

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/発掘区	層位	遺物番号	分類	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	時期	備考	実測番号
図Ⅶ-43	211	78-1		E118	Ⅶ	30	Rフレイク	黒曜石	5.5	2.7	1.2	12.8	後北C ₂ ・D、刻文		211
図Ⅶ-43	212	78-1		F119	Ⅶb	454	Rフレイク	黒曜石	(2.7)	2.0	0.5	(2.2)	後北C ₂ ・D		212
図Ⅶ-43	213	78-1		F117	Ⅶa	50	Rフレイク	黒曜石	(2.5)	3.0	0.6	(4.1)	後北C ₂ ・D主体		213
図Ⅶ-43	214	78-1		E123	Ⅶa	247	Rフレイク	黒曜石	(3.2)	1.9	0.7	(2.4)	後北C ₂ ・D主体		214
図Ⅶ-43	215	78-1		F119	Ⅶa	104	Rフレイク	黒曜石	(2.9)	2.8	0.4	(2.6)	後北C ₂ ・D主体		215
図Ⅶ-43	216	79-1		E118	Ⅶ	19	Rフレイク	黒曜石	3.6	2.1	0.7	4.3	後北C ₂ ・D、刻文		216
図Ⅶ-43	217	79-1		F116	Ⅶa	19	Rフレイク	硬質頁岩	(3.9)	2.8	0.9	(8.0)	後北C ₂ ・D主体		217
図Ⅶ-43	218	79-1		F120	Ⅶa	127	Rフレイク	黒曜石	(4.1)	4.1	1.3	(13.5)	後北C ₂ ・D主体		218
図Ⅶ-44	219	79-1		E116	Ⅶa	20	石核	メノウ	2.9	3.3	2.1	21.0	後北C ₂ ・D主体		219
図Ⅶ-44	220	79-1		F119	Ⅶa	191	石核	硬質頁岩	3.4	2.6	1.9	15.7	後北C ₂ ・D主体		220
図Ⅶ-44	221	79-1		E119	Ⅶb	33	石核	メノウ	4.0	3.9	3.4	62.2	後北C ₂ ・D		221
図Ⅶ-44	222	79-1		E117	Ⅶb	28	石核	メノウ	4.5	5.6	2.6	82.6	後北C ₂ ・D		222
図Ⅶ-44	223	79-1		F119	Ⅶa	164	石核	安山岩	4.4	5.1	2.3	52.1	後北C ₂ ・D主体		223
図Ⅶ-44	224	79-1		F111	Ⅶa	33	石核	硬質頁岩	4.0	6.2	3.3	70.9	後北C ₂ ・D主体		224
図Ⅶ-44	225	79-1		F119	Ⅶb	280	石核	硬質頁岩	6.4	6.5	5.0	149.7	後北C ₂ ・D		225
図Ⅶ-44	226	79-1		E123	Ⅶa	242	石斧	泥岩	5.6	3.0	1.1	16.0	後北C ₂ ・D主体		226
図Ⅶ-44	227	79-1		E119	Ⅶb	120	石斧	安山岩	(5.8)	4.8	2.5	(78.5)	後北C ₂ ・D		227
図Ⅶ-44	228	79-1	(拡張区)	E119	Ⅶ	539	たたき石	安山岩	10.9	8.9	5.5	658.3	後北C ₂ ・D		228
図Ⅶ-44	229	79-1		E123	Ⅶa	165	たたき石	安山岩	11.8	7.2	5.2	553.8	後北C ₂ ・D主体		229
図Ⅶ-44	230	79-1		F120	Ⅶb	157	たたき石	安山岩	20.5	8.6	7.3	2200.0	後北C ₂ ・D		230
図Ⅶ-45	231	79-1		E122	Ⅶb	182	すり石	軽石	5.3	4.9	4.0	10.7	後北C ₂ ・D		231
図Ⅶ-45	232	79-1		F120	Ⅶb	164	すり石	安山岩	7.2	7.0	3.1	258.0	後北C ₂ ・D		232
図Ⅶ-45	233	79-1		E119	Ⅶa	22	すり石	安山岩	9.4	8.3	3.5	335.4	後北C ₂ ・D主体		233
図Ⅶ-45	234	79-1		F120	Ⅶa	121	すり石	安山岩	16.3	11.2	5.8	1600.0	後北C ₂ ・D		234
図Ⅶ-45	235	79-1		E120	Ⅶa	153	すり石	安山岩	18.7	17.2	5.3	2700.0	後北C ₂ ・D主体		235
図Ⅶ-45	236	79-1		F120	Ⅶa	329	くぼみ石	安山岩	12.0	9.1	4.5	761.3	後北C ₂ ・D主体		236
図Ⅶ-45	237	79-1		F119	Ⅶa	99	くぼみ石	安山岩	13.2	9.9	4.9	873.3	後北C ₂ ・D主体		237
図Ⅶ-45	238	79-1		F90	Ⅶ	119	砥石	軽石	3.3	3.0	2.7	3.9	後北C ₂ ・D		238
図Ⅶ-45	239	79-1		F94	Ⅶ	50	砥石	軽石	4.1	4.1	3.1	6.7	後北C ₂ ・D	有溝砥石	239
図Ⅶ-45	240	79-1		F94	Ⅶ	49	砥石	軽石	6.3	3.7	3.4	11.4	後北C ₂ ・D	有溝砥石	240
図Ⅶ-45	241	79-1		F119	Ⅶa	193	砥石	砂岩	6.6	5.7	1.3	43.9	後北C ₂ ・D主体		241
図Ⅶ-45	242	79-1	(拡張区)	Ⅶ	361	砥石	砂岩	10.4	7.1	3.5	179.7	後北C ₂ ・D		242	
図Ⅶ-45	243	79-1	(拡張区)	Ⅶ	536	台石	安山岩	29.7	14.2	6.5	4400.0	後北C ₂ ・D		243	
図Ⅶ-45	244	79-1		E90	Ⅶ	60	台石	安山岩	46.4	20.3	12.5	22300.0	後北C ₂ ・D		244
図Ⅶ-46	245	79-1	(拡張区)	Ⅶ	133	石鏃	安山岩	1.2	1.0	0.3	0.5	オホーツク刻文		245	
図Ⅶ-46	246	79-1		F102	Ⅶ	5	石鏃	硬質頁岩	2.7	1.3	0.4	1.2	オホーツク刻文		246
図Ⅶ-46	247	79-1		E94	Ⅶ	64	石鏃	安山岩	2.7	1.2	0.4	1.0	オホーツク刻文		247
図Ⅶ-46	248	79-1		F92	Ⅶ	56	石鏃	硬質頁岩	3.7	1.4	0.5	1.5	オホーツク刻文		248
図Ⅶ-46	249	79-1		H-7	Ⅶ	7	石鏃	黒曜石	4.0	1.6	0.5	1.8	縄文・続縄文	杭トレンチ	249
図Ⅶ-46	250	79-1		F99	Ⅶ	44	石鏃	メノウ	4.2	1.5	0.4	1.7	オホーツク刻文		250
図Ⅶ-46	251	79-1		F99	Ⅶ	15	石鏃	黒曜石	4.6	1.7	0.4	2.1	オホーツク刻文		251
図Ⅶ-46	252	79-1		F90	Ⅶ	107	石鏃	硬質頁岩	1.5	1.2	0.4	0.6	オホーツク刻文		252
図Ⅶ-46	253	79-1		F90	Ⅶ	105	石鏃	黒曜石	1.8	1.2	0.3	0.6	オホーツク刻文		253
図Ⅶ-46	254	79-1		E100	Ⅶ	33	石鏃	硬質頁岩	(2.3)	1.3	0.3	(0.8)	オホーツク刻文		254
図Ⅶ-46	255	79-1		F101	Ⅶ	17	石鏃	硬質頁岩	(2.8)	1.2	0.4	(1.1)	オホーツク刻文		255
図Ⅶ-46	256	79-1		F92	Ⅶ	35	石鏃	安山岩	3.0	2.2	0.6	4.8	オホーツク刻文		256
図Ⅶ-46	257	79-1		E92	Ⅶ	59	石鏃	安山岩	(2.9)	2.7	0.7	(4.8)	オホーツク刻文		257
図Ⅶ-46	258	79-1		E92	Ⅶ	42	石鏃	安山岩	(3.6)	2.8	0.8	(6.4)	オホーツク刻文		258
図Ⅶ-46	259	79-1		E93	Ⅶ	21	石鏃	安山岩	(4.1)	2.1	0.7	4.9	オホーツク刻文		259
図Ⅶ-46	260	79-1	(拡張区)	Ⅶ	176	石鏃	黒曜石	(1.9)	1.2	0.5	(1.1)	オホーツク刻文		260	
図Ⅶ-46	261	79-1		F98	Ⅶ	8	石鏃	硬質頁岩	(2.0)	1.2	0.3	(0.7)	オホーツク刻文		261
図Ⅶ-46	262	79-1		F101	Ⅶ	31	石鏃	黒曜石	(2.2)	1.4	0.3	(1.0)	オホーツク刻文		262
図Ⅶ-46	263	79-1		F107	Ⅶs	13	スクレイパー	黒曜石	4.2	3.1	0.8	8.4	オホーツク		263
図Ⅶ-46	264	79-1		E108	Ⅶs	12	スクレイパー	黒曜石	4.7	3.5	0.9	14.8	オホーツク		264
図Ⅶ-46	265	79-1		E93	Ⅶ	61	石核	硬質頁岩	5.5	6.1	5.7	207.0	オホーツク刻文		265
図Ⅶ-46	266	79-1	F92骨範囲1	Ⅶ中間	123	すり石	軽石	13.3	7.4	6.3	126.7	オホーツク刻文		266	
図Ⅶ-46	267	79-1		E99	Ⅶ	20	砥石	軽石	9.2	5.8	4.5	39.0	オホーツク刻文		267
図Ⅶ-46	268	79-1		F92	Ⅶ	12	砥石	泥岩	6.0	5.7	2.2	77.5	オホーツク刻文		268
図Ⅶ-46	269	79-1		E109	Ⅶs	6	砥石	砂岩	15.2	11.8	4.9	627.2	オホーツク		269
図Ⅶ-46	270	79-1		F92	Ⅶ	59	円盤状石製品	泥岩	3.1	2.8	0.7	8.4	オホーツク刻文		270

表Ⅶ-12 2012年調査掲載骨角器一覧

挿図番号	掲載番号	写真図版番号	新遺構名	旧遺構名/発掘区	層位	遺物番号	分類	材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	時期	備考	実測番号
図Ⅶ-46	271	79-1		F92骨範囲1	Ⅶ中間	164	銚頭	シカ四肢骨?	(2.1)	0.9	0.5	1.1	オホーツク刻文		271

Ⅷ章 自然科学的分析・鑑定

1 カモイベツ遺跡出土黒曜石製石器の産地推定

株式会社 パレオ・ラボ

1 はじめに

斜里町字峰浜に所在するカモイベツ遺跡から出土した黒曜石製石器について、エネルギー分散型蛍光X線分析装置による元素分析を行い、産地を推定した。

2 試料と方法

分析対象は、黒曜石製石器19点である（表1）。時期は、試料番号KM-1～5、10～19が統縄文時代後北C₂・D期、試料番号KM-6～9がオホーツク文化刻文期とみられている。試料は、測定前に超音波洗浄器やメラミンフォーム製スポンジを用いて、測定面の表面の洗浄を行った。

分析装置は、エスアイアイ・ナノテクノロジー株式会社製のエネルギー分散型蛍光X線分析計SEA1200VXを使用した。装置の仕様は、X線管ターゲットはロジウム（Rh）、X線検出器はSDD検出器である。測定条件は、測定時間100sec、照射径8mm、電圧50kV、電流1000μA、試料室内雰囲気は真空に設定し、一次フィルタにPb測定用を用いた。

黒曜石の産地推定には、蛍光X線分析によるX線強度を用いた黒曜石産地推定法である判別図法を用いた（望月，1999など）。本方法では、まず各試料を蛍光X線分析装置で測定し、その測定結果のうち、カリウム（K）、マンガン（Mn）、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）、イットリウム（Y）、ジルコニウム（Zr）の合計7元素のX線強度（cps；count per second）について、以下に示す指標値を計算する。

表1 分析対象

試料番号	器種	遺構/発掘区	層位	重量(g)	時期
KM-1	石槍・ナイフ	K74	VIIb	9.1	統縄文時代 後北C ₂ ・D期
KM-2	石槍・ナイフ	K69	VIIb	9.1	
KM-3	石槍・ナイフ	I109	VIIb	4.7	
KM-4	石槍・ナイフ	K65	VIIb	33.0	
KM-5	スクレイパー	J69	VIIb	29.4	
KM-6	石槍・ナイフ	J102	VIIa	39.1	オホーツク文化 刻文期
KM-7	石鏃	J66	VIIa1	2.4	
KM-8	石鏃	J38	VIIa1	1.8	
KM-9	楔形石器	J107	VIIa	21.3	統縄文時代 後北C ₂ ・D期
KM-10	スクレイパー	K65	VIIb	5.5	
KM-11	スクレイパー	K69	VIIb	7.8	
KM-12	スクレイパー	J82	VIIb	4.2	
KM-13	スクレイパー	K68	VIIb	6.4	
KM-14	スクレイパー	J107	VIIb	2.2	
KM-15	スクレイパー	K71	VIIb	2.3	
KM-16	スクレイパー	K73	VIIb	2.2	
KM-17	スクレイパー	K69	VIIb	13.8	
KM-18	楔形石器	J73	VIIb	27.7	
KM-19	Rフレイク	K67	VIIb	2.4	

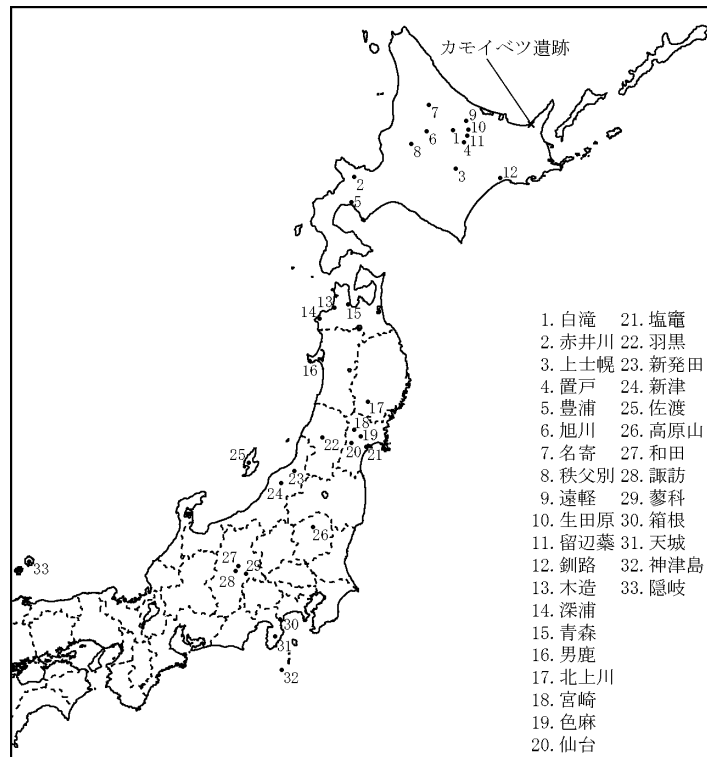


図1 黒曜石産地分布図（東日本）

- 1) $Rb \text{ 分率} = Rb \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 2) $Sr \text{ 分率} = Sr \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$
- 3) $Mn \text{ 強度} \times 100 / Fe \text{ 強度}$
- 4) $\log (Fe \text{ 強度} / K \text{ 強度})$

そして、これらの指標値を用いた2つの判別図(横軸Rb分率-縦軸Mn強度×100/Fe強度の判別図と横軸Sr分率-縦軸log(Fe強度/K強度)の判別図)を作成し、各地の原石データと遺跡出土遺物のデータを照合して、産地を推定する。この方法は、できる限り蛍光X線のエネルギー差が小さい元素同士を組み合わせて指標値を算出するため、形状、厚み等の影響を比較的受けにくく、原則として非破壊分析が望ましい考古遺物の測定に対して非常に有効な方法であるといえる。ただし、風化試料の場合、log(Fe強度/K強度)の値が減少する(望月, 1999)。試料の測定面には、なるべく平滑な面を選んだ。

原石試料は、採取原石を割って新鮮な面を露出させた上で、産地推定対象試料と同様の条件で測定した。表2に判別群一覧とそれぞれの原石の採取地点および点数を、図1に各原石の採取地の分布図を示す。

3 分析結果

表3に石器の測定値および算出した指標値を、図2と図3に黒曜石原石の判別図に石器の指標値をプロットした図を示す。視覚的にわかりやすくするため、図では各判別群を楕円で取り囲んだ。

分析の結果、4点が白滝2群(北海道、白滝エリア)、1点が上士幌群(北海道、上士幌エリア)、11点が所山群(北海道、置戸エリア)、1点が生田原群(北海道、生田原エリア)の範囲にプロットされた。

KM-9は、図2では白滝2群の範囲にプロットされたが、図3では白滝2群の下方にプロットされた。これは、先述したように遺物の風化による影響と考えられ(望月, 1999)、白滝2群に属する可能性が高い。KM-19は、合致する判別群がなく、産地不明であった。

赤井川群と上士幌群の図2、3の判別図では、一部に重複があるため、区別が困難な場合がある。そこで、以下に示すY分率を算出した。

$$Y \text{ 分率} = Y \text{ 強度} \times 100 / (Rb \text{ 強度} + Sr \text{ 強度} + Y \text{ 強度} + Zr \text{ 強度})$$

表2 東日本黒曜石産地の判別群

都道府県	エリア	判別群名	原石採取地
北海道	白滝	白滝1	赤石山山頂(43), 八号沢露頭(15)
		白滝2	7の沢川支流(2), IK露頭(10), 十勝石沢露頭直下河床(11), アジサイの滝露頭(10)
	赤井川	赤井川	曲川・土木川(24)
	上士幌	上士幌	十勝三股(4), タウシュベツ川右岸(42), タウシュベツ川左岸(10), 十三ノ沢(32)
	置戸	置戸山	置戸山(5)
		所山	所山(5)
	豊浦	豊浦	豊泉(10)
	旭川	旭川	近文台(8), 雨紛台(2)
	名寄	名寄	忠烈布川(19)
	秩父別	秩父別1	中山(65)
		秩父別2	
		秩父別3	
	遠軽	遠軽	社名淵川河床(2)
	生田原	生田原	仁田布川河床(10)
留辺蘂	留辺蘂1	ケショマツ川河床(9)	
	留辺蘂2		
釧路	釧路	釧路市宮スキー場(9), 阿寒川右岸(2), 阿寒川左岸(6)	
青森	木造	出来島	出来島海岸(15), 鶴ヶ坂(10)
	深浦	八森山	岡崎浜(7), 八森山公園(8)
	青森	青森	天田内川(6)
秋田	男鹿	金ヶ崎	金ヶ崎温泉(10)
		脇本	脇本海岸(4)
岩手	北上川	北上折居1	北上川(9), 真城(33)
		北上折居2	
		北上折居3	
宮城	宮崎	湯ノ倉	湯ノ倉(40)
	色麻	根岸	根岸(40)
	仙台	秋保1	土蔵(18)
		秋保2	
塩竈	塩竈	塩竈(10)	
山形	羽黒	月山	月山荘前(24), 大越沢(10)
		榊引	たらのき代(19)
新潟	新発田	板山	板山牧場(10)
	新津	金津	金津(7)
	佐渡	真光寺	追分(4)
栃木	高原山	甘湯沢	甘湯沢(22)
		七尋沢	七尋沢(3), 宮川(3), 枝積沢(3)
長野	和田	西餅屋	芙蓉パーライト土砂集積場(30)
		鷹山	鷹山(14), 東餅屋(54)
		小深沢	小深沢(42)
		土屋橋1	土屋橋西(10)
		土屋橋2	新和田トンネル北(20), 土屋橋北西(58), 土屋橋西(1)
		古峠	和田峠トンネル上(28), 古峠(38), 和田峠スキー場(28)
		ブドウ沢	ブドウ沢(20)
		牧ヶ沢	牧ヶ沢下(20)
		高松沢	高松沢(19)
		諏訪	星ヶ台
蓼科	冷山	冷山(20), 麦草峠(20), 麦草峠東(20)	
神奈川	箱根	芦ノ湯	芦ノ湯(20)
		畑宿	畑宿(51)
		鍛冶屋	鍛冶屋(20)
静岡	天城	上多賀	上多賀(20)
		柏峠	柏峠(20)
東京	神津島	恩馳島	恩馳島(27)
		砂糠崎	砂糠崎(20)
島根	隠岐	久見	久見パーライト中(6), 久見採掘現場(5)
		箕浦	箕浦海岸(3), 加茂(4), 岸浜(3)

赤井川群および上土幌群の原石および石器について、横軸Y分率、縦軸Mn強度×100/Fe強度をプロットした判別図を図4に示す。図4において、KM-17は上土幌群と判断できる。

表3に、判別図法により推定された判別群名とエリア名を示す。また、表4に、時期別および器種別の産地を示す。

表3 測定値および産地推定結果

試料番号	K強度 (cps)	Mn強度 (cps)	Fe強度 (cps)	Rb強度 (cps)	Sr強度 (cps)	Y強度 (cps)	Zr強度 (cps)	Rb分率	Mn*100/Fe	Sr分率	log $\frac{Fe}{K}$	Y分率	判別群	エリア	試料番号
KM-1	240.9	71.5	1692.1	643.7	364.2	304.5	754.5	31.14	4.22	17.62	0.85	14.73	所山	置戸	KM-1
KM-2	249.3	74.1	1751.5	679.2	373.0	318.9	788.2	31.45	4.23	17.28	0.85	14.77	所山	置戸	KM-2
KM-3	283.0	86.8	1988.8	798.6	448.5	383.0	957.7	30.86	4.37	17.33	0.85	14.80	所山	置戸	KM-3
KM-4	314.9	94.6	2184.3	859.4	480.0	399.5	1005.3	31.32	4.33	17.49	0.84	14.56	所山	置戸	KM-4
KM-5	313.3	104.9	1996.8	983.3	115.3	466.3	639.6	44.60	5.26	5.23	0.80	21.15	白滝2	白滝	KM-5
KM-6	261.9	78.1	1835.5	712.3	402.4	343.0	851.1	30.85	4.26	17.43	0.85	14.86	所山	置戸	KM-6
KM-7	311.0	73.9	2834.2	841.7	318.5	474.6	1645.1	25.66	2.61	9.71	0.96	14.47	生田原	生田原	KM-7
KM-8	275.5	92.2	1806.0	922.8	102.5	438.9	577.7	45.19	5.10	5.02	0.82	21.49	白滝2	白滝	KM-8
KM-9	287.7	89.9	1626.3	872.5	98.2	417.0	528.4	45.54	5.53	5.12	0.75	21.76	白滝2?	白滝?	KM-9
KM-10	280.0	83.9	1963.9	729.8	412.1	339.1	851.0	31.29	4.27	17.67	0.85	14.54	所山	置戸	KM-10
KM-11	331.0	110.2	2155.0	1033.4	112.5	481.7	610.4	46.18	5.11	5.03	0.81	21.52	白滝2	白滝	KM-11
KM-12	286.2	85.3	2012.1	811.2	456.4	376.6	982.4	30.88	4.24	17.38	0.85	14.34	所山	置戸	KM-12
KM-13	273.6	82.3	1946.7	747.9	425.5	358.0	904.2	30.71	4.23	17.47	0.85	14.70	所山	置戸	KM-13
KM-14	285.7	92.2	1792.7	937.6	108.1	438.6	574.2	45.55	5.14	5.25	0.80	21.31	白滝2	白滝	KM-14
KM-15	268.1	80.6	1875.1	751.2	424.5	354.5	892.2	31.01	4.30	17.53	0.84	14.64	所山	置戸	KM-15
KM-16	179.9	55.6	1285.7	499.9	286.0	239.0	602.1	30.72	4.32	17.58	0.85	14.69	所山	置戸	KM-16
KM-17	242.5	78.3	1609.8	688.1	300.0	366.0	678.4	33.86	4.86	14.76	0.82	18.01	上土幌	上土幌	KM-17
KM-18	285.8	84.8	2032.6	721.4	403.9	338.4	844.8	31.25	4.17	17.50	0.85	14.66	所山	置戸	KM-18
KM-19	183.4	57.7	1242.4	538.3	77.7	249.7	372.9	43.46	4.64	6.28	0.83	20.16	?	不明	KM-19

表4 時期および器種別の産地

時期	層位	器種	白滝	置戸	生田原	上土幌	不明	計
続縄文時代 後北C2・D期	VIIb	石槍・ナイフ		4				4
		スクレイパー	3	5		1		9
		楔形石器		1				1
		Rフレイク					1	1
		計	3	10	0	1	1	15
オホーツク文化 刻文期	VIIa1	石鏃	1		1			2
		計	1	0	1	0	0	2
	VIIa	石槍・ナイフ		1				1
		楔形石器	1					1
		計	1	1	0	0	0	2
		計	2	1	1	0	0	4
		計	5	11	1	1	1	19

4 おわりに

カモイバツ遺跡より出土した黒曜石製石器19点について、蛍光X線分析による産地推定を行った結果、1点は産地不明だったものの、5点が白滝、11点が置戸、1点が生田原、1点が上土幌エリア産と推定された。

(竹原弘展)

引用文献

望月明彦(1999) 上和田城山遺跡出土の黒曜石産地推定. 大和市教育委員会編「埋蔵文化財の保管と活用のための基礎的整理報告書 2—上和田城山遺跡篇—」: 172-179, 大和市教育委員会.

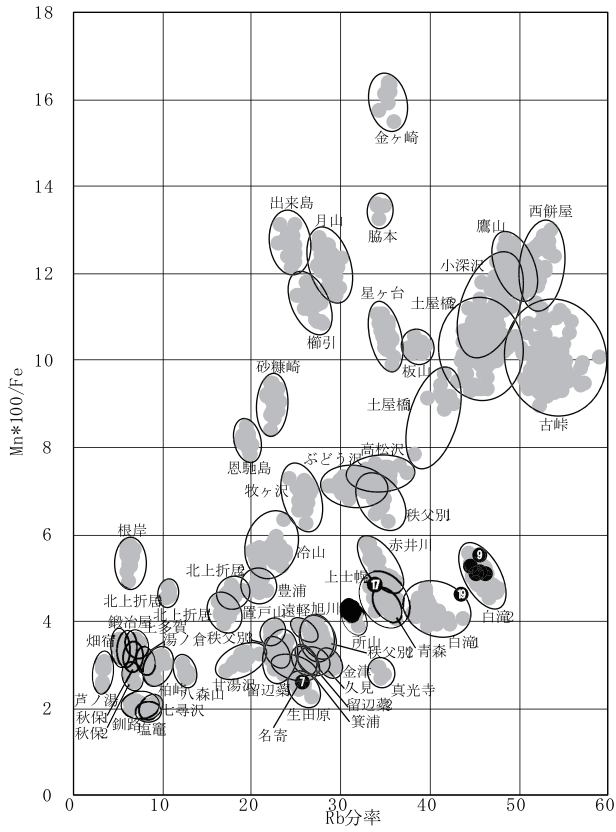


図2 黒曜石産地推定判別図(1)

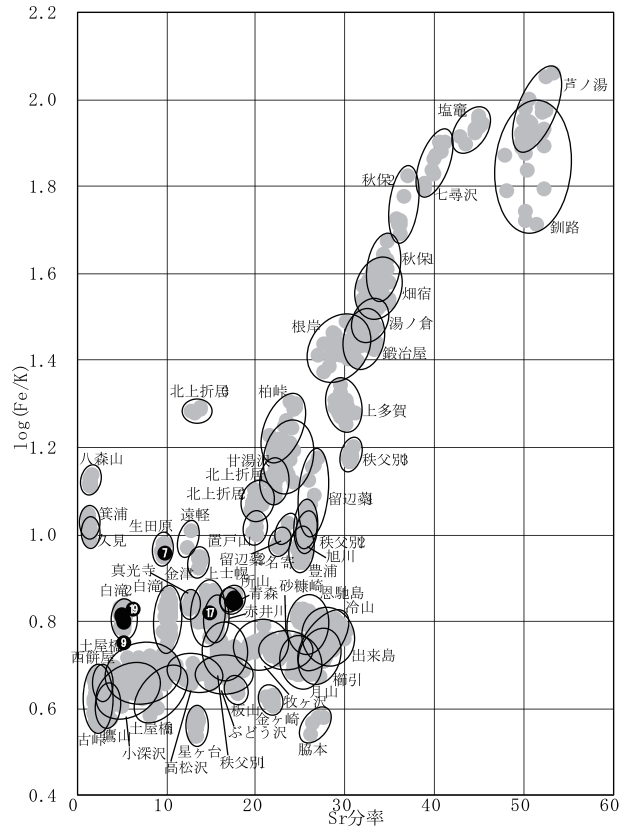


図3 黒曜石産地推定判別図(2)

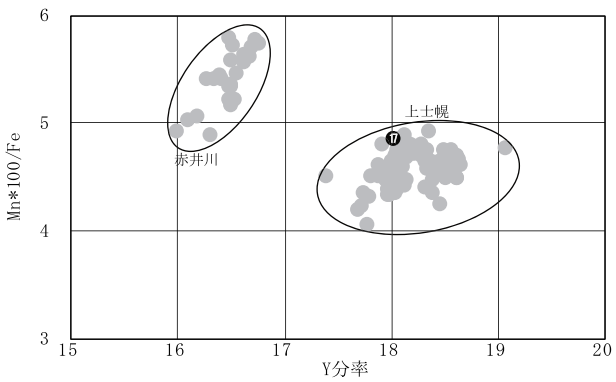


図4 黒曜石産地推定判別図(3)

2 斜里町カモイベツ遺跡ガラス玉・石製品分析

函館工業高等専門学校 竹内 孝・小林淳哉・中村和之
筑波大学 人文社会系 村串まどか

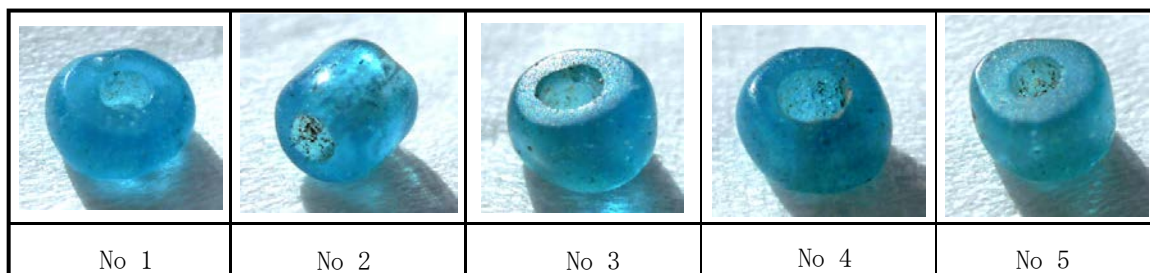
2-1 ガラス玉の分析

1 はじめに

斜里町カモイベツ遺跡より2011年に出土したガラス玉を分析走査電子顕微鏡により半定量分析（酸化物定量）を行ってその化学成分を調べた。

2 分析資料

ガラス玉資料は、GP-4（1号墓墳）の覆土下層より出土した。色はブルー色系（水色・透明）で、形状は管玉形もしくは白玉形である。図版1にガラス玉を示す。



図版1 ガラス玉資料

3 分析方法

分析は、日本電子製JSM-6360LA分析走査電子顕微鏡装置（JED-2300エネルギー分散型X線分析装置 付属）を使用した。本装置は、低真空で使用できるため試料に導電処理膜を施すことなく分析が可能である。測定条件は（20KV、1.1~1.3nA、100sec）で行った。元素分析は、酸化物による簡易定量分析（ZAF補正）である。

4 半定量分析

（質量 %）

No.	試料名	Na ₂ O	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	P ₂ O ₅	Cl	K ₂ O	CaO	TiO ₂	FeO	CuO	BaO	PbO	Total	備考
1	536	0.70	0.32	7.27	81.79	0.03		0.22	4.76	0.50	0.26	1.15	1.87		1.13	100.00	GP-4(1号墓墳)
2	547	0.34	0.38	7.86	81.12	0.20		0.07	5.24	0.62	0.35	0.83	1.88		1.12	100.01	GP-4(1号墓墳)
3	548	0.76	0.37	7.17	81.28	0.20		0.18	4.15	0.91	0.25	0.83	2.02	0.42	1.45	99.99	GP-4(1号墓墳)
4	559	0.93	0.38	7.23	81.10	0.15	0.45	0.13	4.33	0.99	0.29	1.09	1.94	0.14	0.84	99.99	GP-4(1号墓墳)
5	番号なし	0.79	0.29	7.59	80.71	0.18	0.08	0.13	5.74	0.48	0.22	1.08	1.48	0.14	1.10	100.01	GP-4(1号墓墳)

5 成分比率

古代ガラスは化学組成によって数種類に分類できることが知られており、5点のガラス玉は上記の分析の結果から、カリウムを含むカリガラスと呼ばれるガラスタイプであることがわかった。さらにカリガラスは酸化アルミニウムAl₂O₃と酸化カルシウムCaOによって細分類できることが知られており、いずれも酸化アルミニウムAl₂O₃を多く含み、酸化カルシウムCaOが少ないタイプと考えられる。このタイプは銅を着色剤に用いることで水色を呈するガラスが多く、本資料もその特徴が一致した。

6 分析結果

ガラス玉試料の色・形状は、既分析の常呂川河口遺跡のピット709（2個）、ピット994（17個）、ピット998（1個）、ピット1074（1個）出土の管玉形状のガラス玉群に酷似しており、ガラス種別や分析されたCu元素、Fe元素およびそれらの含有比率も同程度である。

2-2 環状石製品の分析

1 分析資料

斜里町カモイベツ遺跡より2011年に出土した環状石製品（「廃棄場」PIT 1、F-124区・Ⅶ層）

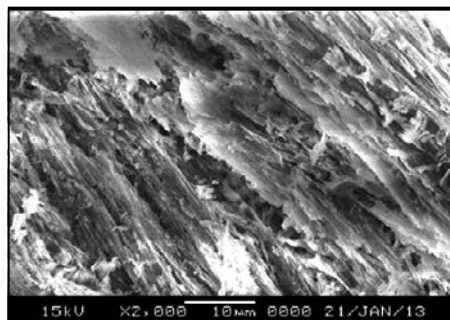
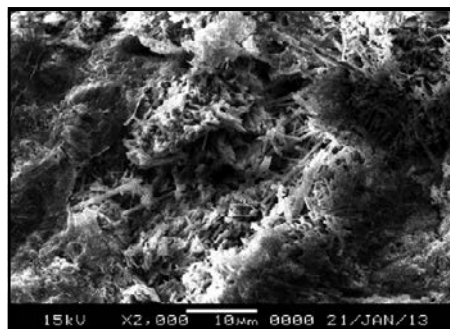
2 分析方法

資料の破面部（碎片）の高倍率2次電子像の観察と成分分析（20KV、1.22nA、100sec、×400）

3 資料写真と破面の観察像



資料写真



破面のSEM像

4 破面の成分分析

(質量 %)

No.	試料名	C	MgO	Al ₂ O ₃	SiO ₂	SO ₃	Cl	CaO	FeO	HgO	Total	備考
6	41・79	14.04	0.26	2.26	74.35	0.51	0.11	0.82	0.46	7.19	100.00	PIT 1 平玉 F-124

5 分析結果

試料破面のSEM画像（上）は細胞壁による導管の特徴である短縦方向に長い構造（繊維状の構造）を有し、（下）ではその繊維状の構造に対し、切削ややすりがけなどの機械的な力が加わったことが原因と推定される破壊が見える。元素組成から、木質の主要成分のセルロースに由来する炭素が検出され、他の元素も木質中に存在する成分である。ただしアルミニウムとケイ素がそれぞれ高濃度で検出されたのは、出土遺物であるため、例えば破断面の隙間などに土質が残存・付着しているためであろう。

なお、破面の成分分析においてHg元素が検出されているが、資料の埋納時に朱顔料（Hg組成系）が入り込んだ可能性が考えられる。

3 カモイベツ遺跡（2008年調査）出土の魚類・哺乳類遺体

国立歴史民俗博物館 上 奈穂美

1 はじめに

北海道斜里町カモイベツ遺跡は、海岸砂丘列に並行するかつての旧河川や後背湿地に面して、標高4.5～5.5mの砂丘上に立地している。平成20（2008）年度実施の発掘調査によって、縄文時代晩期、続縄文時代（後北C₂・D式期）、オホーツク文化期（刻文期）の竪穴住居跡や屋外炉の他、土坑墓などが検出され、17基の遺構から魚類、鳥類、哺乳類を中心とする多量の動物遺体が出土している（図1）。このうち、オホーツク文化刻文期出土分は点数で全体の98%を占める。

本節で報告する資料は、縄文晩期2基、続縄文（後北C₂・D式）期3基、オホーツク文化（刻文）期12基の遺構から出土した合計4,084点の魚類・哺乳類遺体である。鳥類遺体については第VIII章4節で別途報告している。動物遺体は竪穴住居内の炉や床面、屋外炉、集石遺構、これらの遺構に隣接する焼土や炭化物集中に混在し（図1）、骨集中が認められた箇所に対して3mmメッシュのフルイを用い資料回収が図られた。これらは人工遺物などと同様に遺物番号が振られた「点上げ資料」のほか、小グリッド単位で取上げられた「一括資料」である。いずれも資料台帳のほか、図面作成や写真撮影などによって出土位置等が記録されている。各遺構の詳細な出土位置は、第四章と概報（豊原・坂井2009）を参照されたい。

種同定にあたり、千葉県教育振興財団や国立歴史民俗博物館所蔵の現生標本、遺跡出土の比較標本を使用させて頂いた。また、同定作業と併せて加工痕や病変等の骨の損傷に関する観察を行っている。集計にあたっては、出土遺構ごとに最小個体数（MNI）を算出した。

2 魚類・哺乳類遺体の内容

2008年調査区では2綱4目4科1種の魚類（サケ科、ニシン、コイ科（ウグイ類）、カジカ科、軟骨魚綱（サメ類））のほかに、4目5科8種の哺乳類（ユキウサギ、タヌキ、キツネ、クロテン、カワウソ、ゴマフアザラシ、ワモンアザラシ、オットセイ、クジラ目）を確認した（表1）。総点数4,084点中、目科属種及び部位の同定に至ったもの（NISP）は1,627点、未同定資料は40点である。この他に、脊椎動物・哺乳類・陸獣（中・小型）・海獣へ分類した肢端部や胴部骨などが2,447点あり、このうち破損が著しく部位同定が不可能な破片資料は1,802点に上る。本地点の資料には、1点を除きすべての資料に被熱による収縮やひび割れ、破碎、色調変化などを確認した。打撃痕や切断痕を含む人為的損傷を示す資料も僅かであるが含まれているが、食肉類やげっ歯類などによる咬・噛痕を明瞭に示す資料は見つからなかった。

表2、3には遺構ごとの内訳を示し、表4には集計結果を出土点数・NISP・MNI別にまとめた。発掘調査中の所見によると、資料の大部分が魚類遺体で占めるとみられていたものの、図2・3に示すように、種構成比や出土点数自体は遺構ごとに大きく異なることがわかった。哺乳類が魚類を上回る遺構も4基みられ、いずれも出土点数の多い遺構である。魚類遺体の9割をサケ科が占め、哺乳類は図4のように、NISPとMNI比はどちらもアザラシ類を主体とする海獣が哺乳類遺体全体の4割程度に止まり、タヌキとキツネを中心とする陸獣が6割を占める。以下分類群ごとに述べる。

（1）魚類

続縄文期の墓址出土のサメ類の歯を除き、他の魚類は全てオホーツク文化刻文期の遺構出土である。サメ類以外の魚類遺体には全て被熱痕が認められ、激しく収縮し破損している。

サケ科は魚類遺体の9割を占め、ニシンは1割未満、これにウグイ類やカジカ類が続く。各遺構で

種構成比は大きく異なるものの、サケ類は出現頻度も高い（表2・4・図2）。道東のオホーツク文化期の遺跡で頻繁に出土するカレイ類やタラ類等が含まれていない。

サケ類 オホーツク文化刻文期の遺構12基でのみ出土し、その他の時期には見られなかった。計686点に上り、椎骨と歯が大半を占め、若干の頭部骨も含まれる。シロザケの現生標本とほぼ同程度の大きさの椎骨が主体的に見られ、イトウは含まれていない。これらの前上顎骨や歯骨、歯の形状には、産卵期の雄の特徴とされる吻部が鉤状に曲がった状態（加藤1985）のものが多く認められている。中小型の資料についても、屋内炉（H-6/19号址）で左側歯骨を確認した。

ニシン 本種もオホーツク文化刻文期の遺構でのみ出土している。住居址（H-3・7・8・12・14/4・5・6・8・9号址）や屋外炉（SF-2・F-1/10・22号址）から、計51点の椎骨を確認した。被熱による破損の程度、3mmメッシュの篩から落ち資料が未回収となった等の点を考慮すると、頭骨などの椎骨以外の骨が含まれていた可能性が残る。

ウグイ類・カジカ類 ウグイ類もまたオホーツク文化刻文期の住居址（H-3/4号址）と屋外炉（SF-2・F-1/10・22号址）でのみ出土し、計14点の椎骨を確認した。カジカ類も同様に住居址（H-3/4号址）で口蓋骨を1点確認した。

サメ類 続縄文期の遺構でのみ出土している。墓址（GP-3/44号址）底面より、歯が1点出土した。副葬品の一部と考えられており（豊原・坂井2009）、本資料には唯一、被熱の痕跡が認められていない。アオザメ属かシロワニ属、メジロザメのいずれかである可能性が高い。

（2）哺乳類

オホーツク文化期の遺構分が主体となるものの、縄文晩期の住居址の焼土や炉、続縄文期の住居址の焼土及び墓址覆土からも僅かながら出土している。いずれの時期の資料にも被熱痕が認められ、収縮し破損しているものが多く、完存資料は殆ど無い。

クロテン、タヌキ、キツネ、ユキウサギ、カワウソ等の陸獣と、ワモンアザラシ、ゴマフアザラシ、オットセイ、クジラ目等の海獣で構成され、骨端の癒合が未了の若獣はごく僅かであった。各遺構で構成比は異なるが、遺跡全体では、タヌキとキツネを中心とした陸獣が哺乳類遺体の6割を、アザラシ科を主体とした海獣が4割を占める内容となっている（図4）。

部位別の出土傾向は動物ごとに異なる。テン等の小型陸獣は、頭部を欠き肢端部の中手・足骨より先端部の出土が少なく、傾向は各遺構で概ね一致する。ユキウサギ・タヌキ・キツネを中心とした中型陸獣については全身が見られるものの、頭部と肢端部の指・趾骨の出土が少なく、後肢より前肢が多い。アザラシ類は、他の区分の骨格に比べ頭部が多い。利用ないし廃棄部位が動物によってある程度揃っていたことが推測される。

クロテン・小型陸獣 クロテンは、屋内炉（H-7・9・14/5・9・15a号址）や屋外炉（F-1/22号址）、集石遺構（PS-2/17号址）で、頭部を欠き四肢骨を中心に42点確認した。小型陸獣と分類した資料は胴部骨や肢端部が大半を占めている。クロテンの出土遺構とほぼ一致し出土状況も同様であるため、これらの骨はクロテンに由来する可能性が高い。

ユキウサギ・タヌキ・キツネ・カワウソ・中型陸獣 ユキウサギは、屋内炉（H-7・8・9・13/5・6・7・15a号址）や屋外炉（SF-2・F-1/10・22号址）で、四肢骨及び肢端部等28点が出土している。タヌキも、屋内炉（H-6・7・8・9・13/5・6・7・15a・19号址）や屋外炉（F-1/22号址）、集石遺構（PS-2/17号址）で、頭部、四肢、肢端部を中心に、陸獣の中では最多の39点を確認している。キツネは陸獣の中ではタヌキと並んで多く見られた。前述のタヌキと同一の遺構で頭部、四肢、肢端部を34点確認した。この他に、キツネまたはタヌキとした資料がある。

被熱により収縮と破損が激しく、判別が困難だったため種同定を保留した。出土遺構も同2種とほぼ一致し、頭部や四肢骨の破片資料を中心に71点を確認した。カワウソは屋内炉（H-9・13/7・15a号址）から、四肢骨等8点が出土している。

中型陸獣と分類した資料は、頭蓋片や四肢骨片、胴部骨や肢端部が大半を占めており、上記4種に由来する可能性が高い。各種の骨の強度などもある程度影響すると思われるが、ユキウサギとカワウソについては、部位の偏りが考えられ、前2種についてはほぼ全身骨格が揃い、後2種については頭骨を欠いていた可能性がある。

この他、中型陸獣は、縄文晩期の住居址（H-15・17/37c・51号址）の炉や焼土から四肢骨骨幹部破片と指趾骨、続縄文期の墓址（GP-2/38号址）の覆土からも尾椎が各1点出土している。墓址については、隣接する集石遺構など他からの流れ込みである可能性が高いとの所見を得ている。いずれの時期の資料も強く焼け、収縮と破碎が認められる。

オットセイ・アシカ科 オットセイの雌サイズとみられる左側上顎骨と上腕骨が、屋内炉（H-8/6号址）から各1点出土した。歯槽部分や骨端部癒合の観察からどちらも成獣と判断した。また、アシカ科の指ないし趾骨5点も同住居址から出土しており、同一個体の可能性が高い。

ワモンアザラシ・ゴマフアザラシ・その他鰭脚類 ワモンアザラシは、屋内炉（H-6・7・8・9・13/5・6・7・9・15a号址）や屋外炉（SF-2・F-1/10・22号址）、集石（PS-2/17号址）で、哺乳類遺体の中では最も多く、66点を確認した。下顎骨の他に関節結節部分と岩様部、鼓室部周辺部分等の頭骨の破片が確認され、四肢も若干加わる。また、乳歯から永久歯への交換が明らかに中途と判別できた歯槽は無かったものの、標本と比べやや小さめの資料が確認されている。

ゴマフアザラシは屋内炉（H-7・8/5・6号址）で、下顎骨の他、関節結節部分と岩様部、鼓室部周辺部分等の頭骨21点を確認した。形態と大きさからはゼニガタアザラシも含まれる可能性があるものの、同種は根室水道から道東部の太平洋岸にかけて分布し（伊藤・宿野1986）、ゴマフアザラシの可能性が高い。

また、鰭脚目で止めた資料もあり、頭蓋骨破片及び胴部骨や肢端部が大半を占める。上記2種のアザラシの出土傾向と一致し、オホーツク文化期の屋内ないし屋外炉、集石から主に出土している。縄文晩期の住居址（H-17/51号址）焼土からも頭蓋骨破片2点がみつかった。オホーツク文化期出土分と同様に強く火を受けており、収縮と破碎が認められた。鰭脚目もまた、胴部骨や肢端部、四肢骨破片を中心とし、出土傾向はアザラシとほぼ一致する。サイズや出土数比からは、ワモンアザラシに由来する資料が多く含まれると考えている。縄文晩期の住居址（H-15・17/37c・51号址）の炉や焼土からも、肋骨破片4点、椎骨破片5点、末節骨1点が出土している。末節骨以外は、他の資料と同様に強く焼けていた。

クジラ目・海獣 クジラ目の椎間板が屋外炉（F-1/22号址）から1点出土している。また、海獣骨とみられる、海綿質が観察された骨片を189点確認した。サイズと形状からクジラ目に含まれるものも数点は認められたが、多くは小破片であり不明である。これらの資料も被熱により収縮、破損している。

（3） 被熱・加工痕

副葬品の一部と考えられるサメの歯を除きほぼ全ての資料に火を受けた痕跡を確認した。かなり強く焼け、色調の変化は骨の表面に留まらず内部にまで観察でき、灰白色化した資料が殆どであった。また、収縮も著しく、現生標本の約2/3程度の大きさに焼け縮み、ひび割れや破碎が進み資料の大半が小破片になっている。

この中で、2点の資料に加工痕を認めた。1点はオホーツク文化期の住居址（H-7/5号址）焼土からの出土で、鱈脚目の四肢骨骨幹部破片に解体時に付けられたとみられる切痕を観察した。もう1点は同時期の集石遺構（PS-2/17号址）からの種及び部位不明の資料で、切断痕の他に、製作時の研磨痕か使用痕とみられる一定方向に往復させたような擦れ痕を表面に観察した。これらの資料についても前述と同様に強く焼けている。

3 カモイベツ遺跡の狩猟漁労活動とその特徴

(1) 漁労活動と遺跡の性格

本地点のサケ類遺体には、産卵期の雄の特徴である吻部が鉤状に曲がった状態が多く認められた。サケ類の出土数が目立つ遺構としては、住居址（H-3・8・14/4・6・9号址）が挙げられる（図2）。H-14（9号址）は、炉の下面から集石遺構が検出されており、遺構の使用後に同じ場所に上屋を建てたとする屋外炉から屋内炉への転用例（豊原・坂井2009）あるいは、小型住居の建替え（第四章）が指摘されている。この転用例ないし建替えとみられるものは、サケ類加工のための季節的な作業小屋と考えら、遺跡内で数多く検出された炉や集石遺構についても、これらの加工に関連することが指摘されている。

また、シマトツカリ川のかつての流路が遺跡のすぐそばであった可能性についても触れられている（同掲）。椎骨や歯の大きさと形状、吻部の形態、上記の特殊な遺構の存在、遺跡の立地等を考慮すると、本遺跡のサケ類遺体の主体は晩夏～晩秋の産卵期に河川を遡上するカラフトマスやシロザケであった可能性が高い。この時季の遺跡が同2種の大量捕獲を前提とした加工場的な性格を持っていた可能性は動物遺体からも支持される。

(2) 狩猟漁労活動の季節性と動物儀礼の可能性

本地点のオホーツク文化期動物遺体について、季節性や漁・猟場に焦点を絞って狩猟漁労活動の復元を試み、動物儀礼の可能性について考えたい。

魚類遺体については、サケ類とニシン以外にまとまった資料が無い点、道東部のオホーツク文化期の遺跡で出土例の多いカレイ類やタラ類が殆ど見られなかった点が本地点の特徴として挙げられる。晩夏～晩秋の産卵期に河川を遡上するカラフトマスやシロザケのほかに、春先に産卵のため沿岸に寄るニシンの群れが主な漁の対象であった可能性が高い。これらの漁は秋から春先にかけて沿岸域から河口付近を中心にして集中的に行われていたことが推測される。

陸獣はタヌキとキツネが主体を占め、ユキウサギ、カワウソ、テンが加わる。いずれも遺跡周辺の河畔林に見られる中小型の毛皮獣であり、冬毛への換毛完了後、夏毛に変わり始めるまでの期間が主な猟期であった可能性が考えられる。ところで、当地域の現在の動物相や分布密度と比較すると、ヒグマとエゾシカが全く見られないことは特筆に値する。道東部のオホーツク文化期の遺跡では、同2種は住居内の骨塚や住居址覆土の魚骨層等からの出土が主であるのに対し、本遺跡ではそれらが検出されず、炉に由来した焼土や炭化物集中からの出土のみであった。検出されないのは、本地点の調査範囲が細長く、住居全面の発掘例がないことに起因するのかも知れない。しかしながら、いずれの住居でも同様の出土状況である点や、内容についても動物種や部位、漁や猟の場所や時季などが限定的である点などを考慮すると、本遺跡では骨塚とは異なる形で、狩猟儀礼に関わる痕跡が炉の周辺に残されていた可能性が考えられる。火を受けた住居に由来する被熱・破碎資料を扱った論考でも、動物儀礼との関連を検討する上で資料の被熱痕の有無が注目されている(大井1986、内山2006)。本資料も生活残渣を示すだけでなく、狩猟儀礼にも関わるものとして扱うべきかも知れない。いずれにして

も、本遺跡で同2種が全く利用されなかったと結論付けるには、議論の余地が残される。

海獣はほぼアザラシ類で占められており、クジラ類やオットセイ等の出土がごく僅かであり、トドも見られなかった。アザラシ類はワモンアザラシが最多であり、ゴマフアザラシがこれに次ぐ。現在の知床周辺海域での冬季分布によると、食性の違いに基づきゴマフアザラシが流水縁に、クラカケアザラシはやや沖合に位置する（小林2008）。本調査区でクラカケアザラシが確認されなかったのは、この分布域の違いが反映し、より沿岸に近い種が猟の対象になっていた可能性が高い。ワモンアザラシも同じく流水縁に分布する種であるが、現在では確認数が少ない。犬飼（1942）の報告に基づき、1940年以前の千島から根室水道と道東の太平洋沿岸ではゴマフアザラシとワモンアザラシ2種の生息数が卓越していたことが指摘（伊藤・宿野1986）されていることから、恐らく当海域でも同2種の生息数は現在とは異なっていたものと思われる。毛皮や肉質が斜里アイヌに最も好まれ、アザラシ猟の主な対象種と指摘されていたのも同2種である（更科1955）。2018年調査区のアイヌ期の貝層（第三章）やフレトイ（西本1989）やアオシマナイ（諸留2003）等の本遺跡および周辺のアイヌ期の遺跡でも多く認められ、同2種が継続して利用されていたことは出土例からも明らかである。

アザラシの猟法についても検討したい。以前より指摘されるように、出産・授乳期の個体も対象とする氷上での銜猟や、来遊直後や離乳後の繁殖期等の上陸個体を対象とする撲殺等（金子1974）が積極的に行われていた可能性がある。本地点ではアザラシ捕獲用と推測できる骨角器が見つかっていない。以下に、興味深い狩猟法を2例挙げる。今から50～60年ほど前の斜里町の浜では、小学生が晩秋に上陸するアザラシの後頭部を力いっぱい蹴って昏倒させた上で、脚部を担いで毛皮加工業者の所へ売りに行き、お小遣い稼ぎをしていたそうである。上陸時のアザラシ捕獲についての同様の話は礼文島でのトド猟調査^{註1)}の際にも聞くことができた。海際の岩場で寝ているアザラシにそっと近づき、頭頂部に拳を振り下ろして捕殺し、トド猟の不振の代替としてアザラシを捕獲していたそうである。アザラシ科の頭頂骨周辺はアシカ科と違って薄いため、上陸個体であれば、特に捕獲道具がなくとも子供の脚力や大人の腕力でもって比較的容易に昏倒ないし絶命させることが可能であったようである。

上記の様な陸上での捕獲方法の手軽さを考慮すると、沿岸に近いアザラシが主体を占める点、離岸性の強いオットセイの出土が殆ど無かった点から猟期は冬季を中心とし、沖合での猟についてはそれほど積極的に行われなかったことが推測される。

以上、出土内容からみると、漁や猟の場所や時季が非常に限定的であることが明らかとなった。漁・猟場については、河口域を中心としたサケ漁、河畔林や沿岸域での陸・海獣狩猟が主体的に行われたことが考えられ、沖合での漁や猟を示唆されるものは認められていない。鳥類遺体の分析結果からも、沿岸域や海岸域に生息する種が主体を成し、海上での狩猟が積極的には行われなかった可能性が指摘されている（第八章4節）。また、狩猟漁労の時季についても概ね秋から春先に集中していたものと推測され、鳥類の結果とも一致する。また、動物遺体から見る限り、捕獲時季が偏っていた、あるいは遺跡の使用期間が限られたものであった可能性も示唆される。

4 まとめ

2008年調査区の動物遺体の出土状況および内容は、典型的なオホーツク文化期のものとは以下の3点で大きく異なっていた。1) オホーツク文化期の遺跡で通常見られる骨塚や魚骨層はなく、炉に由来する焼土や炭化物集中に混在した住居床面出土分が殆どであった。2) いずれの資料も被熱による灰白色化や収縮が甚だしく、細かく破碎している。3) 内容は、サケ類主体の魚骨の他、タヌキやキツネ主体の中型陸獣骨、アザラシ類主体の海獣骨から成り、同時期に報告例の多いカレイ類やタラ類、

ヒグマやエゾシカが本遺跡では出土していない。

これらの特徴は、他のオホーツク文化期の遺跡とは顕著な相違が認められる一方で、道東のオホーツク文化との融合期（トビニタイ文化）や、道央の続縄文時代後北期、擦文文化期の遺跡の出土傾向に近似する。また、この傾向は斜里町周辺のアイヌ文化期の出土例とも共通点が多く認められ、同地域の生業活動には強い継続性が見出だせる。

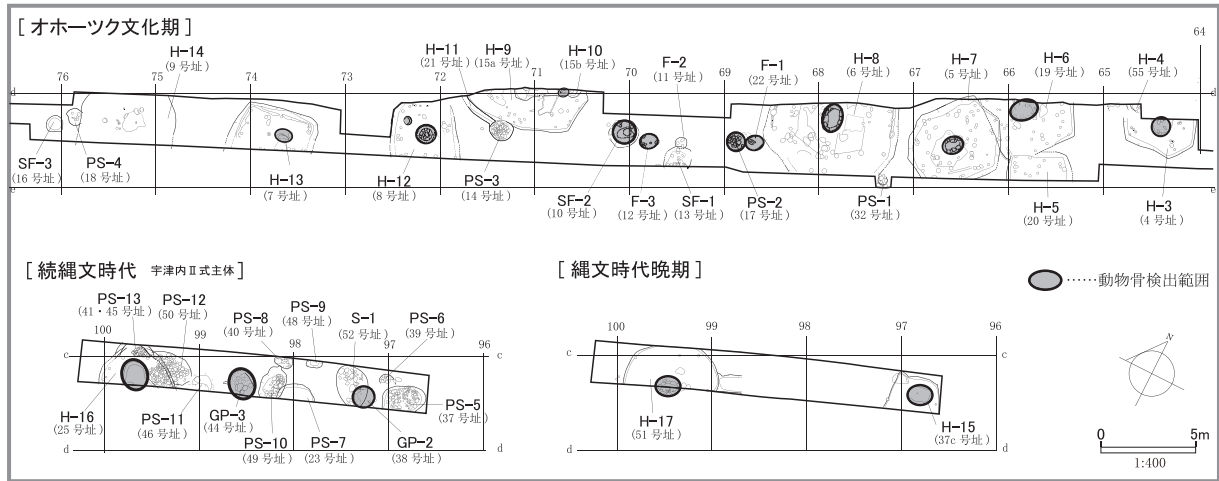
末筆となりましたが、豊原熙司先生（文化財サポート（当時））並びに松田功氏（斜里町教育委員会（当時））、阿部明義氏（（公財）北海道埋蔵文化財センター）には分析と報告の機会や遺跡についてのご教示を賜りました。また、現生標本使用のご承諾や魚類骨同定のご教示、アザラシ捕獲方法のご教示、サケ科現生標本のご提供など、様々なご厚意に深く感謝申し上げます、お名前を記して謝意を表します。

西本豊弘先生（国立歴史民俗博物館（当時））、樋泉岳二先生（早稲田大学）、坂井通子氏（文化財サポート（当時））、涌坂周一氏（羅臼町教育委員会（当時））、白井久美子氏・山口典子氏・小高春雄氏・田島新氏（千葉県教育振興財団（当時））、高橋健氏（横浜市歴史財団）、依静夫氏（礼文町在住）、本間さと子氏・平田陽子氏・石川哲丸氏・畠山一美氏・川村氏（斜里町在住）

【参考文献】

- 伊藤徹魯・宿野部猛 1986「2.ゼニガタアザラシの生息数と生息状況」『ゼニガタアザラシの生態と保護』東海大学出版会,18-58
- 内山幸子 2006「オホーツク文化の動物儀礼」『北海道考古学』42: 75-92
- 大井晴男 1986『環太平洋北部地域における狩猟獣の捕獲配分儀礼』北海道大学文学部
- 大場利夫・大井晴男 1976・1981『香深井遺跡 上・下』東京大学出版会
- 金子浩昌 1974「付編1 オンネモト遺跡出土の動物遺存体および未製骨角器」『オンネモト遺跡』, 117-161
- 加藤暁生 1985「前田耕地遺跡出土の魚類顎歯について」『東京の遺跡』7: 84-85
- 小林万里 2008「3 世界遺産知床半島の海獣類 アザラシ類の実態」『日本の哺乳類学 3 - 水生哺乳類』, 75-98
- 更科源蔵 1955「第二編 第四章 第二節 二、狩猟」『斜里町史』, 202-213
- 高橋健 2003「礼文島における現代のトド猟」『動物考古学』20: 65-83
- 豊原熙司・坂井通子 2009『カモイベツ遺跡 発掘調査概要報告書』斜里町教育委員会
- 西本豊弘 1989「第2節 自然遺物」『フレイトイ貝塚—北海道オホーツク海沿岸におけるアイヌ貝塚の発掘調査報告書』, 43-47
- 諸留佐織 2003「第4章 1 2)貝塚—小貝塚(貝ブロック)と獣骨集中」『小清水町アオシマナイ遺跡発掘調査報告書』, 63-95

¹ トド猟の聞き取り調査（高橋 2003）で、2008年度調査に参加した際に伺った



第1図 動物遺体の出土位置

表1 種名一覧 (魚類・哺乳類)

魚綱	軟骨魚綱	硬骨魚綱	ニシン目	サケ目	コイ目	カサゴ目	計	サメ類	ニシン	サケ類	ウグイ類	カジカ類	計	哺乳綱	ウサギ目	食肉目	蹄脚目	鯨目	計					
			ニシン科	サケ科	コイ科	カジカ科	4目	サメ類	ニシン	サケ類	ウグイ類	カジカ類	1種		ウサギ科	イヌ科	イタチ科	アザラシ科	アシカ科	4目	5科	8種	Chondrichthyes sp. <i>Clupea pallasii</i> Salmonidae sp. Tribolodon sp. Cottidae sp.	
															エゾユキウサギ	エゾタヌキ	キタキツネ	エゾクロテン	カワウソ	ゴマフアザラシ	ワモンアザラシ	オットセイ	クジラ類	<i>Lepus timidus (ainu)</i> <i>Nyctereutes procyonoides (albus)</i> <i>Vulpes vulpes (shrencki)</i> <i>Martes zibellina (brachyura)</i> <i>Lutra lutra</i> <i>Phoca. Largha</i> <i>Phoca. hispita (ochtensis)</i> <i>Callorhinus ursinus</i> Cetacea sp.

表2 出土内容 (魚類)

分類群	部位	左右	各遺構の出土点数													
			オホーツク文化期													
			続縄文期	GP-3 (44号址)	H-3 (4号址)	H-6 (19号址)	H-7 (5号址)	H-8 (6号址)	H-10 (15b号址)	H-12 (8号址)	H-13 (7号址)	H-14 (9号址)	PS-2 (17号址)	SF-2 (10号址)	F-1 (22号址)	F-3 (12号址)
サケ科	前上顎骨	右	-	1									1			
		左				1										
	主上顎骨	右	-				3		1						1	
		左		1		1	1				1					
	歯骨	右	-		1		1	2	1			1				
		左														
	前/主上顎骨/歯骨	-		20		3	2				3	1	4	2		
	遊離歯	-		50		13	11		2		20	1	1	5		
	方骨	右	-				1									
	角骨	右	-							1				1		
主鰓蓋骨	右	-					1									
第一椎骨	右	-														
椎骨	右	-		197	4	58	147	12	6	2	24	7	12	22	1	
サケ科(中小型)	歯骨	左			1											
ニシン	椎骨	左		39		2	1		2		1		5	1		
ウグイ類	椎骨	左		10									3	1		
カジカ類	口蓋骨	左		1												
サメ類	遊離歯	-		1												
未同定魚類	椎骨	左		8		1	8				3			2		
	歯骨	右												1		
	部位不明						1									
総計			1	328	5	81	179	13	13	2	54	10	26	35	1	

表3-1 出土内容(哺乳類)

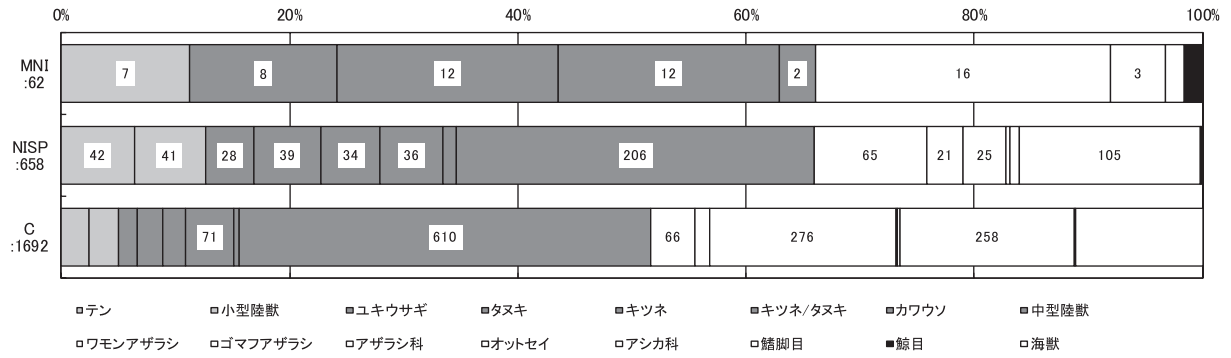
分類群	部位	左右	残存/形状	各遺構の出土点数																			
				縄文晩期				続縄文期				オホーツク文化期											
				H-15 (37c号址)	H-17 (51号址)	H-16 (25号址)	GP-2 (38号址)	H-3 (4号址)	H-6 (19号址)	H-7 (5号址)	H-8 (6号址)	H-10 (15b号址)	H-12 (8号址)	H-13 (7号址)	H-14 (9号址)	PS-2 (17号址)	SF-2 (10号址)	F-1 (22号址)					
クロテン	上腕骨	左	遠位部							1													
	尺骨	右	ほぼ完存							2													
		左	近位部							1													1
	橈骨	左	近位部							4													1
		右	近位部							1													2
	寛骨	右	遠位部								1												
		左	腸骨部																1				1
		左	恥骨部																				1
		左	ほぼ完存																				1
		左	腸骨部																				1
		左	座骨部																				1
	大腿骨	左	遠位部								2												
		右	遠位部								1												1
	脛骨	右	遠位部								1												
腓骨	左	遠位部								1								1					
踵骨	左	遠位部								1												1	
距骨	左	遠位部								3													
	右	遠位部								1												1	
	右	遠位部								1												1	
小型陸獣	四肢骨		骨幹部破片							1											1	1	
	中手・足骨									10													
	指趾骨									22												2	
	胸椎																						
	尾椎																					1	
	椎骨																					3	
	肋骨																					1	
	上顎骨		頰部																				
タヌキ	上顎骨	左																				1	
	下顎骨	左	関節突起								3												
	環椎																						
	軸椎																					1	
	上腕骨	左	遠位部																				
		右	遠位部								1												
		左	遠位部								1												
	尺骨	左	遠位部																				
		右	遠位部								1												
	橈骨	左	近位部																			1	
		右	近位部																				
	腕骨	右	遠位部																				
	脛骨	左	近位部																			1	
		右	近位部																				
	踵骨	右	遠位部																				
	距骨	左	遠位部																			2	
	足根骨	左	遠位部																				
	キツネ	上顎骨	左																				
環椎																							
上腕骨		右	遠位部																				
		左	遠位部																				
尺骨		左	遠位部																				
		右	遠位部								1											1	
橈骨		左	近位部																				
		右	近位部																				
腕骨		右	遠位部																				
脛骨		左	近位部																				
		右	近位部																				
踵骨		右	遠位部																				
距骨		右	遠位部																				
		左	遠位部																				
		左	遠位部																				
キツネ/タヌキ		頭蓋骨	右	岩様部																			
			左	岩様部																			
			右	破片																			
	下顎骨	-	関節突起																				
		-	歯槽部片																				
	軸椎																						
	肩甲骨																					1	
	上腕骨	左	遠位部																				
		右	遠位部																				
	尺骨	右	遠位部																				
		左	遠位部																				
	橈骨	右	遠位部																				
		左	遠位部																				
	腕骨	右	遠位部																				
	寛骨	右	腸骨部																				
		左	座骨部																				
	大腿骨	-	寛骨臼																				
		左	遠位部																				
		右	遠位部																				
		-	骨端部片																				
	脛骨	左	遠位部																				
		右	遠位部																				
		-	遠位部片																				
	踵骨	左	遠位部																				
	右	遠位部																					
	-	遠位部																					
ユキウサギ	肩甲骨	左	近位部																				
		右	近位部																				
	尺骨	左	近位部																				
		右	近位部																				
	橈骨	左	遠位部																				
		右	遠位部																				
	寛骨	左	寛骨臼																				
		右	座骨部																				

表3-2 出土内容 (哺乳類)

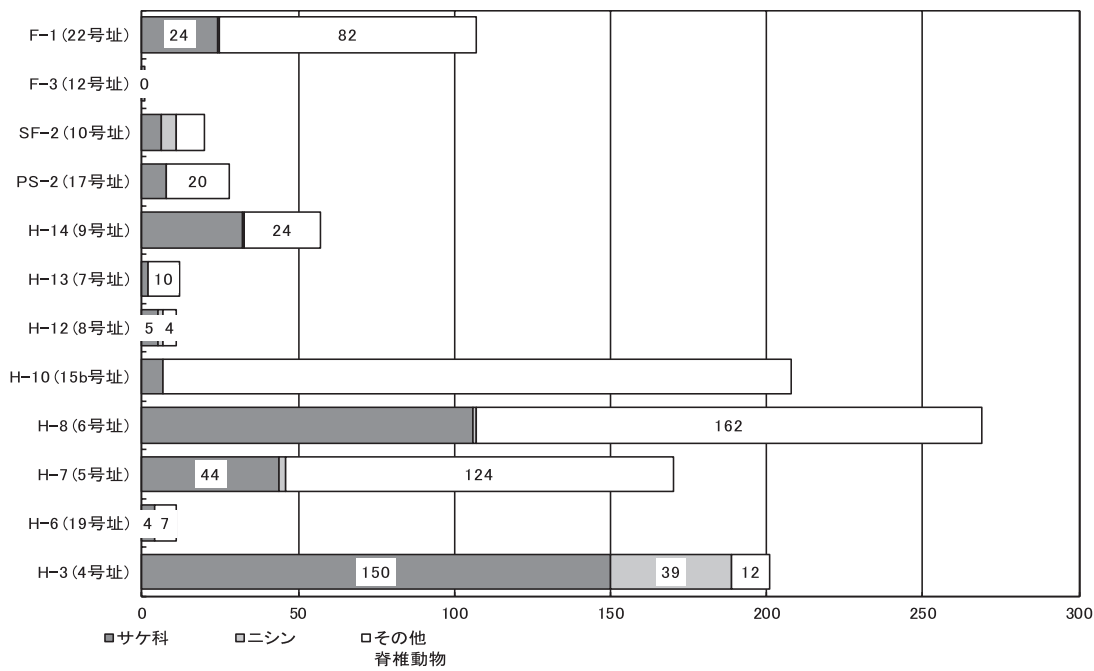
分類群	部位	左右	残存/形状	各遺構の出土点数																
				縄文晩期				続縄文期				オホーツク文化期								
				H-15 (37c号址)	H-17 (51号址)	H-16 (25号址)	GP-2 (38号址)	H-3 (4号址)	H-6 (19号址)	H-7 (5号址)	H-8 (6号址)	H-10 (15b号址)	H-12 (8号址)	H-13 (7号址)	H-14 (9号址)	PS-2 (17号址)	SF-2 (10号址)	F-1 (22号址)		
	脛骨	左	近位部									1	1							
	踵骨	左	近位部									1								
		右	近位部									1								
	距骨	左	近位部									1								
	足根骨	左	近位部									1								
		右	近位部									1				1	1			
	第2中手骨	右	近位部									1								
	第5中足骨	左	近位部									1								
		右	近位部									1								
カワウソ	尺骨	左	近位部									1								
		右	近位部									1								
	橈骨	左	近位部									1								
		右	近位部									1								
		左	遠位部									1								
		右	遠位部									1								
	脛骨	左	近位部									1								
	距骨	左	近位部									1								
中型陸獣	頭蓋骨		破片									36	8	33						
	上・下顎骨		歯槽部片									10		4						
	遊離歯												1	2						
	膝蓋骨		ほぼ完存										1							
	四肢骨		骨幹部破片	1				3	6	36	69	34			2	4				
			骨端									1			4					
			骨端部片					3	14	6	24	3			4	1				
	手・足根骨		ほぼ完存																	
	中手・足骨		遠位部					1	1	3	2									
			破片							8	2	18			2		10			
	指趾骨		破片						2	5	3	29	1		2	2	15			
	頸椎		椎体	1						1	1	3					3			
	胸椎		椎体							1	1	3								
	腰椎		椎体							4	1	7			1					
	尾椎		椎体							5	3	22			1	1	7			
	椎骨		椎体				1			2	3	3					3			
			破片							3	10	2	25		3	5	8			
	胸骨										2									
	肋骨		頸部								1					2	3			
			体部片								2	12	9			5	2			
	基節骨											1								
	中節骨											1								
	末節骨																4			
	－		破片														7			
ワモンアザラシ	頭蓋骨	左	関節結節 他									3	1							
			岩縁部 他									5			1	1				
		右	後頭顆									3								
			関節結節 他									2	6							
			岩縁部 他									1	1							
			後頭顆									6								
		－	上顎骨									1								
			岩縁部									1								
	上顎骨	左										1								
		右										1								
	下顎骨	左	ほぼ完存									2					1			
			歯槽部									2								
			下顎枝									3			1		1			
		右	ほぼ完存									2	3							
			歯槽部									2								
			下顎枝									2								
	上腕骨	左	遠位部										1							
		右	近位部									1								
	尺骨	左	近位部									1								
		右	近位部									1								
	橈骨	左	近位～遠位部														1			
		右	近位部										1							
	寛骨	右	腸骨～寛骨白										1							
	脛骨	左	中間部～遠位部										1							
	腓骨	左	中間部～遠位部										1							
ゴマフアザラシ	頭蓋骨	左	関節結節 他										2							
			岩縁部 他										2							
			その他										1							
		右	関節結節 他										1							
			岩縁部 他										4							
	上顎骨	左										2								
		右										2								
	下顎骨	左	ほぼ完存										1							
			下顎枝									1								
		右	ほぼ完存									1								
			下顎枝									1								
	－		下顎枝片										1							
オットセイ雌?	上顎骨	左																		
	上腕骨	左	近位～遠位部																	
アシカ類	指趾骨												5							
蹄脚類	頭蓋骨		破片				2										10			
	四肢骨		骨幹部破片					1	4	213	10			10	4		10			
			骨端									1			1					
			骨端									3			4					
	手・足根骨		ほぼ完存									3	12	4		1				
	中手・足骨		ほぼ完存									1								
			破片					1				1				1				
			破片										3				2			
	基節骨		ほぼ完存									4								
	中節骨		ほぼ完存									2								
	末節骨		ほぼ完存									1								
	指趾骨		破片					1												
	頸椎		椎体+椎弓片						10							13				
	胸椎		椎体									1								
	尾椎		椎体												1					
	椎骨		椎体										2							
			破片										2							
	胸骨		頸部																	
	肋骨		体部片					5					30		1		6			
クジラ類	椎骨		椎間板					1									1			
海獣			破片					7	3						2		5			
哺乳類			破片					10	20	5	9	59	45		12	10	2			
脊椎動物			破片					1	1	18				5	1		10			
未同定哺乳類			破片					15	26	1	1	388	110	31	19	98	30			
			部位不明					不明	不明	不明	不明	7	2		3	1	1			
合計								29	33	1	12	360	63	691	1002	514	47			

表 4 遺構別集計

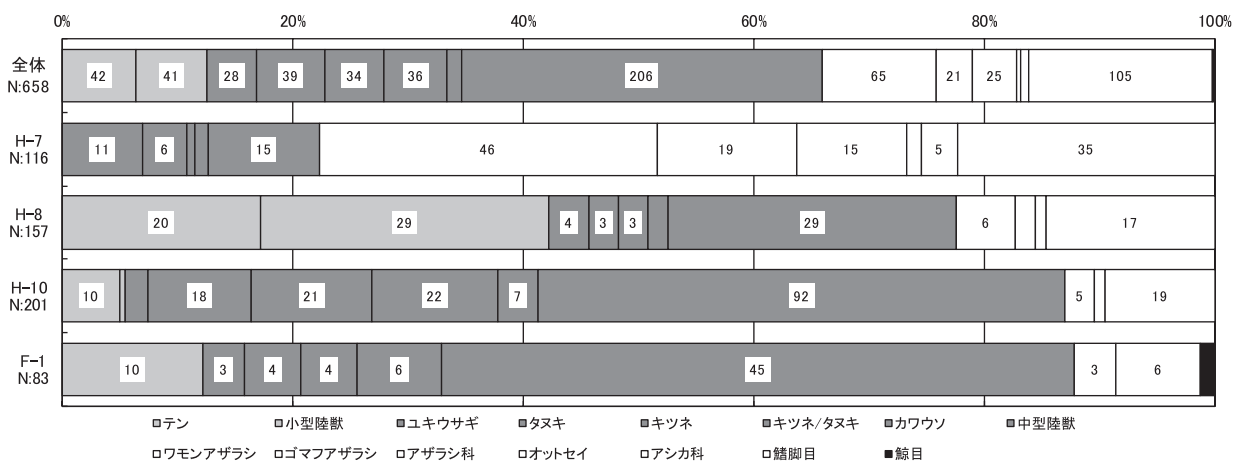
	縄文晩期				続縄文期				オホーツク文化期																
	住居址		墓址		住居址		墓址		住居址		墓址														
	H-10 (15b号址)	H-12 (8号址)	H-13 (7号址)	H-14 (9号址)	PS-2 (17号址)	SF-2 (10号址)	F-3 (12号址)	F-1 (22号址)	H-7 (5号址)	H-6 (19号址)	H-3 (4号址)	H-8 (6号址)													
破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI	破片数 NISP MNI													
サケ科	13	7	1	11	5	1	2	2	1	50	32	1	10	8	1	1	1	1	1	1	1	34	24	1	
ニシン他 その他魚類	10	10	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8	8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
テン	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	8	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
小型陸獣	4	4	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
ユキウサギ	18	18	3	1	1	1	1	1	1	5	5	1	5	5	1	1	1	1	1	1	1	3	3	1	1
タヌキ	21	21	3	1	1	1	1	1	1	3	3	1	3	3	1	1	1	1	1	1	1	4	4	1	1
キツネ	32	22	1	8	1	2	2	2	2	8	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	4	4	3	3
キツネ/タヌキ	7	7	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	10	6	6	6
カワウソ	223	92	1	1	1	10	3	1	1	10	3	1	24	8	1	1	1	1	1	1	1	64	45	45	45
中型陸獣	5	5	2	2	2	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	3	3	3	2
ワモンアザラシ	12	2	1	2	2	13	3	6	2	13	3	6	6	2	6	2	6	2	6	2	6	10	10	10	
ゴマフアザラシ	26	19	1	26	19	29	15	15	15	29	15	15	10	10	10	10	10	10	10	10	10	27	6	6	6
アザラシ科	45	1	1	5	1	12	1	10	10	12	1	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	1	1	1	1
オットセイ	110	31	19	31	19	98	30	30	30	98	30	30	45	45	45	45	45	45	45	45	45	50	50	50	50
アシカ科	2	2	1	2	1	3	1	1	1	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	6	6	6	6
鯨目	529	208	12	60	11	2	38	12	6	223	57	4	91	28	5	94	23	4	1	1	1	237	107	107	107
海獣	2	2	1	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7	7	7	7
哺乳類	29	3	2	33	4	2	1	0	0	12	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	772	170	15	1189
脊椎動物	7	7	1	7	7	10	1	1	1	7	7	7	20	20	20	20	20	20	20	20	20	9	9	9	59
未同定	15	15	1	15	15	1	1	1	1	1	1	1	300	300	300	300	300	300	300	300	300	1	1	1	18
未同定	29	3	2	33	4	2	1	0	0	12	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	429	429	429	388
																						7	7	7	7



第2図 遺跡全体の種構成

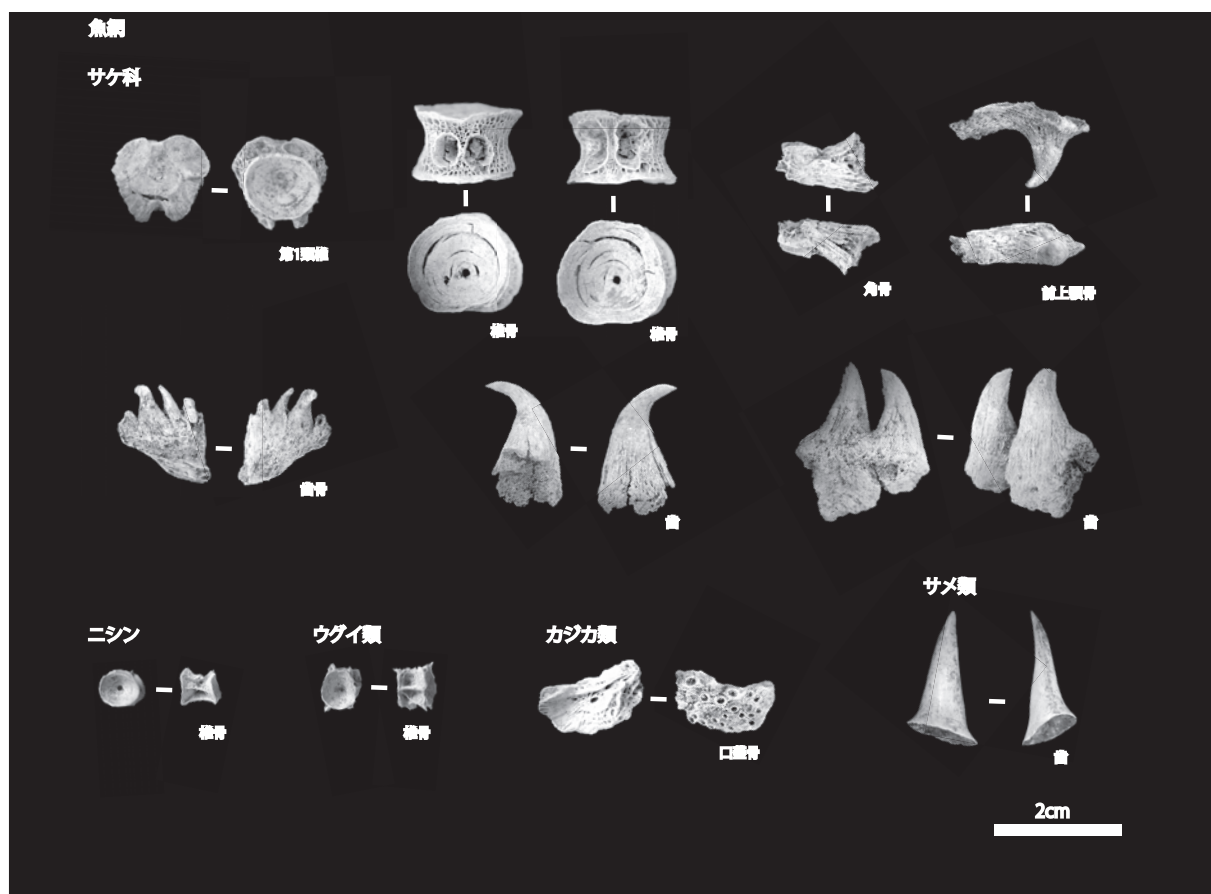


第3図 遺構別種構成 (魚類・鳥獣類)

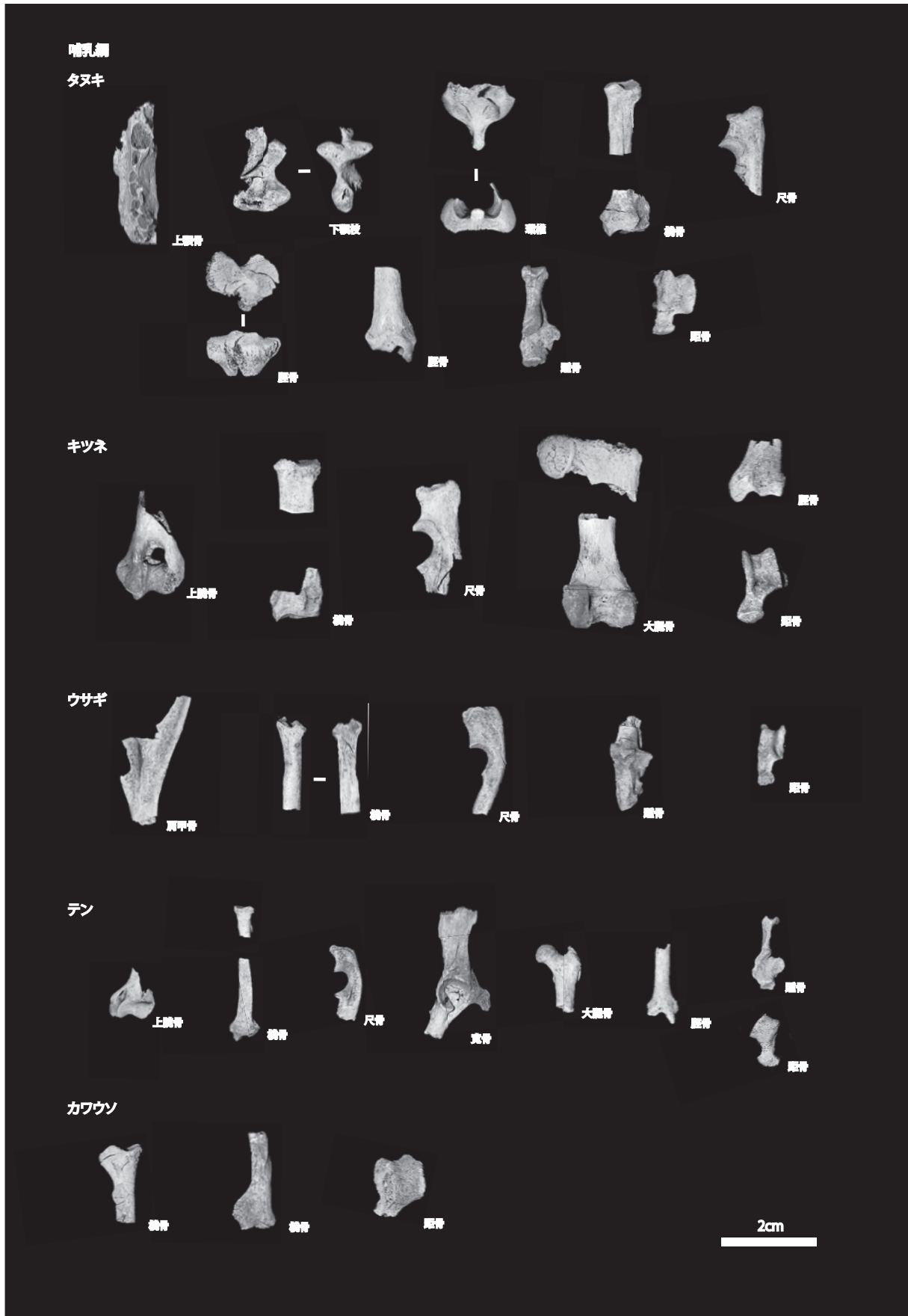


第4図 遺構別種構成 (哺乳類)

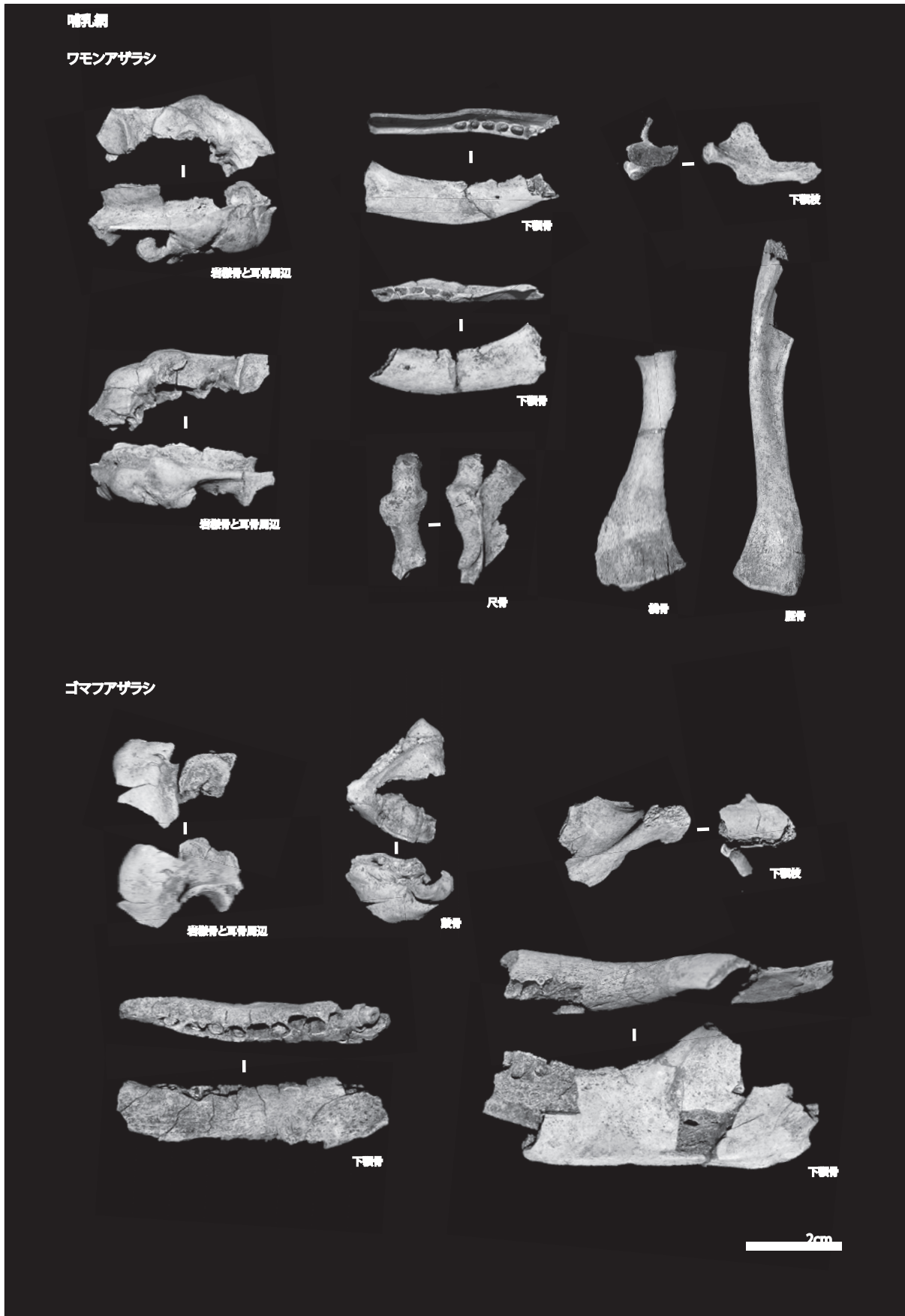
図版1 魚類



図版2 哺乳類（陸獣）



図版3 哺乳類（海獣）



4 カモイベツ遺跡（2008年調査）出土の鳥類遺体について

北海道大学総合博物館 江田 真毅

1 はじめに

カモイベツ遺跡は斜里郡斜里町字峰浜地先に所在する縄文時代晩期からオホーツク文化期までの複合遺跡である。動物遺体は住居址を中心に集石や石囲い炉、墓址などの16遺構で確認されている。時期はオホーツク文化期を中心とし、縄文晩期～続縄文期の遺構も若干含まれる。本稿では2008年調査地点から出土した鳥類遺体について報告する。

2 資料と方法

出土した鳥類遺体は計85点であった。資料は基本的に発掘調査時に採り上げられたものである。骨が集中的に検出された地点では土壌ごと採取され、3mm目の篩で選別されている。時代別にみると、縄文晩期の住居址H-15（37c号址）に伴う資料が1点、オホーツク文化期に比定される資料が7遺構から計84点である。資料は現生骨標本との肉眼比較で同定した。現生標本として筆者（EP）および川上和人氏（森林総合研究所）の所蔵標本（KP）を利用した。骨の部位の名称はBaumel et al（1993）および日本獣医解剖学会（1998）に、分類群名は基本的に日本鳥学会（2012）に従い、同書で言及されていないカモ科の亜科や族の分類についてはAmerican Ornithologist' Union（1983）に従った。椎骨、肋骨、趾骨以外の骨を同定対象とし、現生標本の不足などから鳥綱以下の同定ができなかった資料は種不明とした。また椎骨、肋骨、趾骨は種不明として数を記載した。一方、資料の破損が著しいために同定できなかった資料は同定不能とした。資料の残存状態は、資料にほとんど損傷がないものは完存、近位端や遠位端の関節が半分以上残っているものはそれぞれ近位端、遠位端とした。また、主要四肢骨では骨幹のほぼ中央にある栄養孔が残存している骨は骨体部として記載し、以上の条件に合わない資料は骨体部破片とした。各資料について骨の表面の粗さと骨端の癒合状態に基づく成長段階、同定時に目に付いた解体痕と加工痕を記載した。また、破損して髓腔を観察できた資料について骨髓骨の有無を記載した。

3 結果

出土した85点中40点で目以下を単位とした同定ができた。資料はすべて火を受けて白色を呈し、またほとんどが収縮し、断片化していた。確認された分類群はカモ亜科、アイサ族、アビ科、ミズナギドリ科、ウ科、カモメ科、ウミスズメ科、チドリ目、スズメ目で6目6科以上であった（表1）。趾骨を中心とした種不明は23点、同定不能は22点であった。火を受けた痕跡を除き、明確な解体痕や加工痕は認められなかった。H-9（15号址）から検出されたチドリ目の足根中足骨は骨表面の粗い若鳥の骨であった。骨髓骨を含む骨は認められなかった。以下、時代ごとおよび分類群ごとに記載する。

3.1 時代ごとの記載

縄文晩期 同期の住居址であるH-15（37c号址）からウ科の左手根中手骨が1点検出された。

オホーツク文化期 6遺構からカモ亜科、アイサ族、アビ科、ミズナギドリ科、ウ科、カモメ科、ウミスズメ科、チドリ目、スズメ目が検出された。各遺構の科を単位とした最少個体数は、H-8（6号址）のカモ亜科が3個体、H-14（9号址）のウミスズメ科が2個体であったほかはすべて1個体であった。

3.2. 分類群ごとの記載

カモ亜科（アイサ族を含む）計14点が出土した。オナガガモ（EP-4）程度からコガモ（EP-2）程度の大きさの資料が認められ、とくにキンクロハジロ（EP-5）程度の大きさの資料が多かった。複数の種に由来すると考えられる。H-8（6号址）で検出された右上腕骨の近位端は、三頭筋気孔窩が髓腔に貫通せず、骨体が上腕骨頭の下方に潜り込むものの、knochenlippeは破損しており観察できなかった。江田（2005）の基準に従って、アイサ族と同定した。H-8（6号址）からは他にも三頭筋気孔窩が髓腔に貫通しない右上腕骨が出土しているが、上腕骨頭とknochenlippeの両方が破損していたことから、カモ亜科と同定した。出土した資料のうち13点は上肢の骨であり、とくに烏口骨と肩甲骨からなる上肢帯の骨が10点と多かった。他の骨としては脛足根骨が1点出土したに過ぎない。

ウミスズメ科 計13点が出土した。ウミオウム（EP-24）より小さいものからハシブトウミガラス（EP-158）程度の大きさの資料が認められ、とくにウミオウム（EP-24）より小さい資料が多かった。複数の種に由来すると考えられる。上腕骨（7点）を中心とした上肢の骨が9点、大腿骨や脛足根骨など下肢の骨が4点検出されている。

その他の鳥類 ウ科はヒメウ（EP-95）程度からそれよりも小さい資料が4点、アビ科はアビ（EP-82）程度からそれよりも小さい資料が2点検出されている。ミズナギドリ科の2資料はオオミズナギドリ（EP-92）とハイイロミズナギドリ（EP-132）の中間程度の大きさ、カモメ科の2資料はオオセグロカモメ（EP-11）とほぼ同大の資料であった。チドリ目とした1資料はヤマシギ（EP243-09）とほぼ同じ大きさである。形態上の特徴から、ウミスズメ科とカモメ科以外の同目の科に由来すると考えられる。スズメ目とした資料はセグロセキレイ（EP377-1）とほぼ同じ大きさであった。

4 考察

本遺跡ではカモ亜科、アイサ族、アビ科、ミズナギドリ科、ウ科、カモメ科、ウミスズメ科、チドリ目、スズメ目が確認された。このうちアビ科の各種は冬季にのみ同地域を訪れることから（日本鳥学会2012）、遺跡の形成時期に冬季が含まれることは確実である。他の分類群には周年同地域に生息する種が含まれ、周年採集の対象となった可能性がある。確認された鳥類遺体の主体はカモ亜科とウミスズメ科で、それぞれ約35%を占めた。ウミスズメ科の各種は沿岸域から海洋域に生息する。また、カモ亜科には上腕骨の形態から沿岸域から海岸域に主に生息するアイサ族が含まれており、主に淡水域から汽水域に生息するマガモ属やオシドリ属と確実に同定できる資料は認められていない。他の分類群についてもスズメ目を除いてほとんどの種が沿岸域から海洋域に生息することから、本遺跡の鳥類遺体群は沿岸域や海洋域での遺跡形成者の活動を示すものといえる。一方で、本遺跡の鳥類遺体の特徴のひとつは、アホウドリ科の遺体が認められなかったことである。一般に、浜中2遺跡や目梨泊遺跡、弁天島遺跡など、道北から道東地域のオホーツク土器を伴う遺跡ではアホウドリ科の資料はもっともよく検出されるものの、重衛兵沢2遺跡やオタフク岩遺跡など、擦文土器を伴う遺跡では出土量が少ない（Eda & Higuchi 2004）。これを、海洋狩猟民であるオホーツク文化人と、河川漁労と農耕を主たる生業とする擦文文化人（大井1970）の海上での狩猟の積極性の違いとして解釈するならば、本遺跡の形成者はオホーツク土器を利用していた人々でありながら、鳥類遺体から見出される傾向は擦文文化人に類似する、海上での狩猟を積極的にはおこなわなかった人々と考えることができる。オ

ホーク文化よりむしろ擦文文化の遺体群に近い傾向は、沿岸性のアザラシや小動物に偏る哺乳類遺体、および遡河性のサケ科を主体とする魚類遺体でも一貫して認められる。遺跡形成者の生業を考えるうえで非常に興味深いデータといえる。

末筆ながら資料を分析する機会をいただいた豊原熙司氏（文化財サポート）および骨格標本を閲覧させていただいた川上和人氏（森林総合研究所）に厚く御礼申し上げます次第である。

引用文献

- American Ornithologist' Union 1983 *The A.O.U. Check List of North American Birds*. American Ornithologist' Union.
- Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E., & Berge, J.C.V., 1993 *Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium*. Nuttall Ornithological Club.
- Eda, M. & Higuchi, H. 2004. Distribution of albatross remains in the Far East regions during the Holocene, based on zooarchaeological remains. *Zoological Science* 21: 771-783.
- 江田真毅 2005 「生活復原資料としての鳥類遺体の研究－カモ亜科遺体の同定とその考古学的意義－」海交史研究会考古学論集刊行会編『海と考古学』、387-406、六一書房
- 日本獣医解剖学会 1998 『家禽解剖学用語』日本中央競馬会
- 日本鳥学会 2012 『日本鳥類目録 改訂第7版』日本鳥学会
- 大井晴男 1970 「擦文文化とオホーク文化の関係について」北方文化研究 4: 21-70。

表1 カモイベツ遺跡から出土した鳥類遺体の一覧

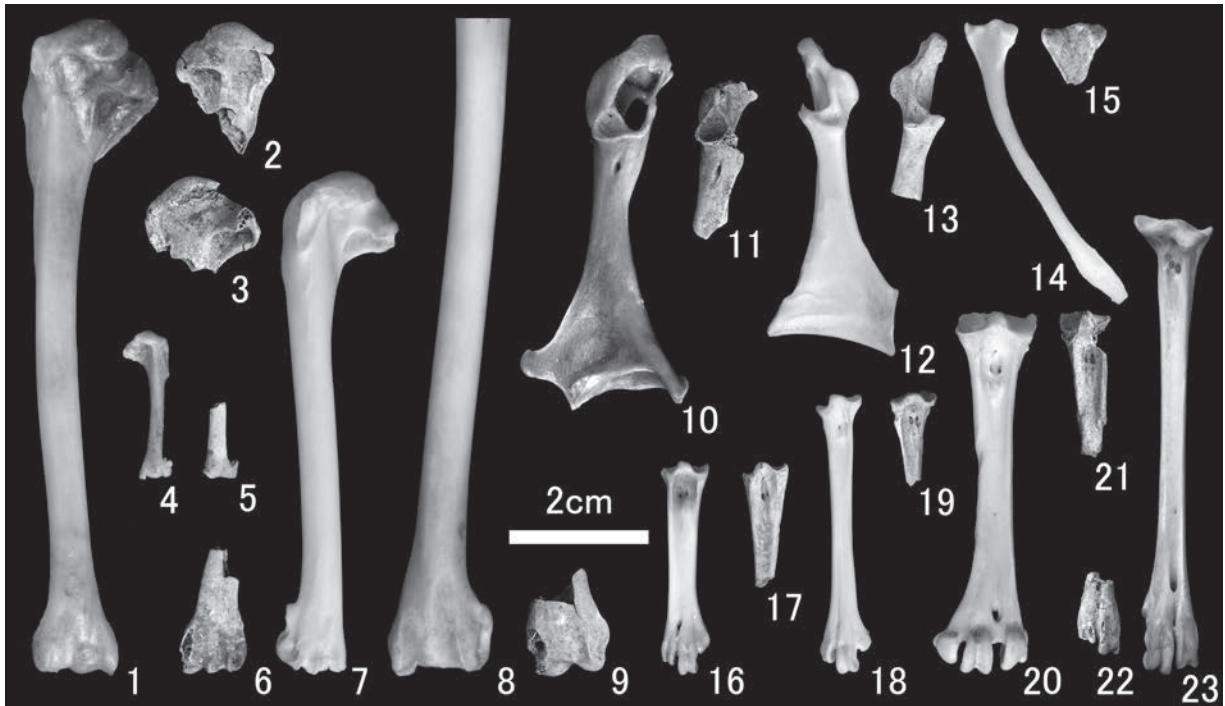
鳥綱	カモ目	カモ科	
		アイサ族	Mergini sp.
		カモ亜科	Anatinae spp.
	アビ目	アビ科	Gaviidae sp.
	ミズナギドリ目	ミズナギドリ科	Procellariidae sp.
	カツオドリ目	ウ科	Phalacrocoracidae sp.
	チドリ目	カモメ科	Laridae sp.
		ウミスズメ科	Alcidae spp.
		科以下不明	Charadriiformes sp.
	スズメ目	科以下不明	Passeriformes sp.
	6目	6科	

表2 カモイベツ遺跡の各遺構から出土した鳥類遺体

時期	遺構種	遺構	出土層位	分科群	部位	残存
縄文晩期 オホーツク 文化期	住居址	H-15(37c号址)	床面	ウ科	手根中手骨	Ld1
	石囲い炉	SF-2(10号址)	埋土	ウ科	関節骨	R1; L1
				種不明	趾骨	w1, d1
	集石	PS-2(17号址)	集石上面	種不明	椎骨	1
	住居址	H-3(4号址)	炉	ミズナギドリ科	足根中足骨	Rp1
				カモ亜科	鳥口骨	Rp1
				ウミスズメ科	脛足根骨	Lp1, Ld1
				種不明	指骨	1
					趾骨	w1, p3, d3
				同定不能	腕骨	mfr1
					脛足根骨	mfr1
					足根中足骨	mfr1
					四肢骨	mfr3
	住居址	H-7(5号址)	焼土	種不明	趾骨	w3, d2
				同定不能	鳥口骨	pfr1
					足根中足骨	dfr1
			炉	ウミスズメ科	尺骨	Rd1
				種不明	頭骨	fr1
			埋土	種不明	椎骨	1
	住居址	H-8(6号址)	床面	アビ科	足根中足骨	Ld1
				ミズナギドリ科	肩甲骨	Rp1
				カモ亜科	尺骨	Rp1
					上腕骨	Lm1
				ウミスズメ科	肩甲骨	Lp1
					上腕骨	Lp1
				種不明	前上顎骨	1
					趾骨	w1
				同定不能	鎖骨	1
					脛足根骨	Lm1
					四肢骨	mfr1
			焼土	ウ科	足根中足骨	Lp1
				カモ亜科	鳥口骨	Rp1
					上腕骨	Rp1
				カモメ科	肩甲骨	L1
				ウミスズメ科	上腕骨	Rp1; Lm1
					足根中足骨	Rp-m1
				スズメ目	上腕骨	Rd1
				種不明	前上顎骨	2
					頸骨	1
					腓骨	1
				同定不能	頭骨	mfr1
			1号炉址	アビ科	上腕骨	Rd1
				アイサ族	上腕骨	Rp1
				カモ亜科	鳥口骨	Rp-m1, Rp1, Rm1; Lm-d1
					肩甲骨	Rp1; Lp-m1
				カモメ科	鳥口骨	Ld1
				ウミスズメ科	上腕骨	Ld1
				種不明	前上顎骨	2
					軸椎	1
					肋骨	1
					趾骨	d1
				同定不能	上腕骨	Rmfr1
					四肢骨	mfr3
	住居址	H-14(9号址)	炉の上面	カモ亜科	上腕骨	Rd1
					脛足根骨	Ld1
				ウミスズメ科	上腕骨	Ld2
					大腿骨	Lp-m1
	住居址	H-9(15a号址)	炉	カモ亜科	鳥口骨	Lm-d1
				ウミスズメ科	上腕骨	Lm1
				チドリ目	足根中足骨	Rp-m1

w : 完存、p : 近位端(鳥口骨では胸端)、d : 遠位端(鳥口骨では肩端)、m : 骨体部、fr : 破片

図版 1



カモイベツ遺跡出土の鳥類遺体（ほぼ原寸）

1-9 上腕骨、10-13 鳥口骨、14, 15 肩甲骨、16-23 足根中足骨。

1 クロガモ (KP117-01)、2 アイサ族、3, 6, 17 ウミスズメ科、4 セグロセキレイ (KP377-1)、5 スズメ目、7, 16
ウトウ (EP-106)、8, 23 アビ (EP-82)、9, 22 アビ科、10 オオセグロカモメ (EP-11)、11 カモメ科、12 キンク
ロハジロ (EP-5)、13 カモ亜科、14 オオミズナギドリ (EP-92)、15 ミズナギドリ科、18 ヤマシギ (KP243-09)、
19 チドリ目、20 ヒメウ (EP-95)、21 ウ科。

1, 4, 7, 8, 10, 12, 14, 16, 18, 20, 23 は現生標本、他は遺跡試料。1, 3, 6, 10, 11, 13, 20-23 は左、他
は右の資料。

5 カモイベツ遺跡（2018年調査）の動物遺体

東海大学 内山 幸子

はじめに

カモイベツ遺跡では、2018年度の発掘調査により、貝類と魚類を中心とする動物遺体が出土した。本遺跡ではこれまでに複数回にわたって行われた発掘調査によって続縄文時代からの利用が確認されているが、2018年度の調査で対象とされた東部地区は近世アイヌ文化期の遺構・包含層が集中する地区であり、動物遺体もこの時期に属する。

動物遺体は、Ⅱ層中に確認された樽前 a 火山灰より上位に形成された、「SB」と称される貝・骨ブロックから多く出土している。SBの配置や詳細については、Ⅲ章を参照されたい。東西に細長く伸びる調査区のため、調査区外に広がるSBが多く、ここで示す動物遺体の出土量以上の遺体が実際には遺存していることが明らかである。平面的に見ると、SB-3のように幅10mを超えるような大規模なブロックも存在するが、遺体の密度はあまりなく、厚みもないため、平面形から想像されるよりも遺体の包含量は少ない。

動物遺体のうちサイズが大きく目につく資料は現地では取り上げられたが、それ以外は土ごと採集され、後日、篩（1mm目）による資料の抽出が行われた。

動物種は表1に示した通り、50種ほどが確認されている。科や属レベルまでしか判明しなかった種類も多く、カジカ科やカレイ科のように遺体の形態の多様性から複数種が含まれることが明らかな種類もあるため、実際に利用された動物の種類数はより多かったことが分かる。

以下、動物遺体の出土内容を概観し、当時の動物利用について考察する。

1 貝類

貝類は、コンテナで6箱分出土した。表2から明らかなように、主体種はビノスガイとウバガイである。特にビノスガイが目立ち、最小個体数でいえば貝類全体の7割強（註1）を本種が占める。ビノスガイは浅海の細砂底に生息する貝で、殻長2cmほどの小型の個体も含まれるものの、多くは殻長8cm前後の成長した個体であった。現代ではそれほど味の評価が高くなく食べられることは稀だが、当時は主要な食用貝として利用されていたのであろう。

ウバガイは全体の1割ほどとビノスガイに比べると数は少ないが、SB-3のようにまとまって出土した地点もある。殻長8cm台のやや小ぶりの個体も含むが、10cmを超える成長した個体を中心である。ウバガイは潮間帯から水深20mほどの海底で細砂底に潜って生息し、潜る深さは夏に浅く冬に深いという（櫻井2003）。水温や当時の採取具などの用具を考えても、夏を中心に捕獲された可能性が高い。ウバガイも属するバカガイ科のうち、種名が特定できなかった資料が全体で30個体ほど見られた。いずれも小型で薄く、ウバガイの幼貝やその他のバカガイ科の可能性が考えられる。これらは大きさからして食用にされたとはみなし難く、他の貝類などの採取の際に無意識的に採取されるに至ったものとみられる。

サラガイやアラスジサラガイといったサラガイ科は、SB-3、4、6を中心に確認されている。この種類もビノスガイやウバガイと同じく、浅海の海底に分布し、食用にされたと考えられる。その他の二枚貝や巻貝はいずれも少なく、今回のデータから見る限り、積極的に捕獲されてはいなかったようである。

2 フジツボ類・カニ類・ウニ類

フジツボ類、カニ類、ウニ類はいずれも出土量のごくわずかである（表2）。このため、利用されていなかったか、利用はごく低調であったと考えられる。

3 魚類

魚類も、貝類と同じくコンテナで6箱分ほどが出土した。動物遺体の分析に係る日数の関係から、魚類ではサメ類とサケ科を除いて椎骨の分析は行えなかった。カジカ科がもっとも多く、これに次いで、タラ科、アイナメ科（アイナメ科？を含む）、カレイ科、サケ科、フサカサゴ科、ヒラメの順に出土が確認されている（表3）。

出土量が魚類全体の3割を超えるカジカ科は、遺跡周辺での生息種数が多く、『オホーツク知床のさかな』（斜里町立博物館1996）には、斜里沿岸で確認されたカジカ科として21種も掲載されている（註2）。出土遺体を見ると、カジカ科のなかでも大型の種・個体が多いようであり、所有する現生標本と比較すると、トゲカジカやギスカジカに似た形態が多く確認できる。しかし、詳細な形態比較は未実施のため、今後、カジカ科の現生標本の収集をより充実させていきながら、種同定の取り組みを進めたい。種が不明なため、捕獲時期などを推測するのは難しいが、例えばトゲカジカは沖合の深み（水深50～300m）に生息し、冬の産卵期に岸寄りするため、現代でも釣期の中心は秋から冬であるという（若林編1997）。これ以外の季節には岸から狙いにくくなり、海に出て深場を狙う漁になる。カジカ科に限ったことではないが、種の特성에応じて、捕獲時期・場所・方法は異なってくるため、当時の漁撈活動についてより具体的に復元するためにも、種の同定に向けた取り組みは欠かせない。なお、カジカ科は、資源量の多さに加えて、美味な種も多いため、食用のために盛んに捕獲されたと考えられる。

カジカ科に次ぐタラ科の出土量は、魚類全体の2割を超える。耳石をはじめとする各骨の形態や大きさからしてマダラが中心とみられるが、スケトウダラの形態に似た資料もわずかに確認されている。マダラとみられる耳石は完形資料や欠損部が僅かな資料については計測し、その値から推定体高（桜井・福田1984、内山2001）を算出した。その結果を示したのが表4である。耳石長の平均値は21.1cm（左）、21.7cm（右）で、推定体長は76.2cm（左の耳石に基づく）、80.5cm（右の耳石に基づく）である。この値からも明らかなように、比較的大きな個体为中心で、成魚を主たる対象とした漁が行われていたことが分かる。タラ科は浅い沿岸域に移動してくる産卵期の冬がもっとも捕獲しやすい時期である。タラ科は体も大きく、味も美味で、出土量の多さからしても当時の重要な食料資源であったことは容易に想像される。

アイナメ科は、断定できずに「アイナメ科？」とした資料を含めれば、1割を超える出土量がある。斜里沿岸に生息するアイナメ科は6種（アイナメ類4種、ホッケ類2種）あり、断定できなかった資料の同定は今後の課題としたい。周辺での資源量の多さや美味な点から、一定程度の利用があったとみられる。

カレイ科も魚類全体の1割を超える出土量がある。斜里沿岸部で確認できるカレイ科はカジカ科と同様に種数が多く、『オホーツク知床のさかな』（斜里町立博物館1996）には、16種が掲載されている。限られた時間内での分析作業となったため、形態による区分はしていないが、例えば主上顎骨ではアサバガレイ、前上顎骨ではマガレイやクロガレイと別にイシガレイ、歯骨ではソウハチ、角骨ではマガレイと別にヌマガレイ、主鰓蓋骨ではクロガレイと別にスナガレイに似た形態が確認されており、形態的多様性から複数の種が含まれることは明らかである。カレイ科では季節を問わず捕れる種類が

あるため、漁期は長い時期にわたっていた可能性がある。

アイヌ文化期に「カムイ・チェプ（神魚）」と呼ばれたサケ科（更科源・更科光1976）は、魚類全体の個体数で見ると1割を割り込むが、大型の種・個体が多く、存在感がある。出土量は地点ごとに偏り、SB-4とSB-8～10で一定程度の出土量がある一方で、SB-5～7ではかなり限定的である。SBの配置図を見ると、サケ科遺体が多いSBは調査区内の中央部西寄りにまとまっており、遺棄場所に傾向が見られた点は興味深い。また、椎骨に限ってのことであるが、他の魚種に比べて焼けた遺体が比較的多い点が目を惹く。サケ科についても詳細な形態分析をしていないため種の特定には至っていないが、回遊魚であるサケ科の多くは夏から秋に捕獲しやすいため、この時期を中心に沿岸部もしくは河川で捕獲されたとみられる。

フサカサゴ科は、SB-4やSB-5を中心に確認されている。水深の浅いところに生息する種が多く、それほど出土量があるわけではないが利用されていたことが分かる。

ヒラメもあまり出土量は多くないが、70cmを優に超える大型の個体を中心であるため（註3）、出土割合以上に食生活に貢献した魚種であったとみなせる。

加えて本遺跡では、出土量はわずかながら、注目される魚種がいくつか確認されている。まずブリ属の資料である。SB-6で前上顎骨1点が出土したが、ブリの現生標本（体長48cm）に比べて先端部の幅は倍近くもあり、かなり大型の個体だったことが分かる。『オホーツク知床のさかな』（斜里町立博物館1996）には、斜里沿岸で確認できるブリ属としてヒラマサが掲載されている。また、オオカミウオの歯骨や歯がSB-4とSB-8で出土している。これらの資料は体長88cmの現生標本よりはるかに大きく、かなり大型の個体であったことが分かる。フグ科はSB-6で前上顎骨1点が見つかった。マフグの現生標本（体長42cm）と同大の成魚である。斜里でみられるフグ科はマフグとシマフグの2種とされ（斜里町立博物館1996）、このうちより北方種のマフグは、斜里周辺では夏から秋ごろに見られるが、幼魚がほとんどで成魚は稀だという。仮にマフグだとすれば、成魚の少なさから、常にはあまり捕獲されることがなかった可能性が考えられる。これら3種はそれぞれ1、2点ずつしか出土していないが、さまざまな魚種が幅広く利用されたことを示す資料として注目される。

4 鳥類

鳥類の出土量はそれほど多くないが（表5）、そのなかではウミスズメ科が主体を占める。ウミスズメ科についてはウミガラス大、ウトウ大、ウミスズメ大に区分し、表にはそれぞれ（大）、（中）、（小）を記した（註4）。ウミガラス大の資料が中心であるが、ウトウ大、ウミスズメ大の資料も少量見られ、少なくとも3種以上が利用されていたと推測される。斜里周辺で10種ほど見られるウミスズメ科はいずれも海上・海岸部に生息するが、種によって出現する季節は異なるため（斜里町立知床博物館1985）、種が同定できない限り捕獲時期の推定は難しい。

ウミスズメ科以外のアホウドリ科、ウ科、カモ科、カモメ科はいずれも数点ずつの出土である。ウ科はヒメウ大、カモ科はマガモ大の資料である。カモメ科では、ウミネコの現生標本よりやや大きい資料やオオセグロカモメ大の資料、オオセグロカモメよりかなり大きい資料があり、数点の出土ではあるものの、複数種が含まれるようである。

今回分析した鳥類遺体では、加工の痕跡が確認されなかった。骨角器（原材含む）のなかにも鳥類は拵がっておらず、鳥骨が素材として利用された証拠は今のところない。寒冷地であるため羽は利用されたかもしれないが、考古学的な証拠を得ることは難しい。

5 陸獣類

陸獣類はあまり多く出土していないが、そのなかで主体を占めるのはエゾシカである（表6）。出土部位を見ると、頭部と四肢骨が確認できる一方で体幹部の少なさが目を惹く。調査区外に遺存しているのかもしれないが、体躯の大きい動物であるため、猟場で解体され、一部のみが持ち帰られた可能性もある。現生標本と比較したところ、関節が癒合した四肢骨では小型の資料が主体で、雌が多いようである。しかし、関節が未癒合の個体では雌雄が判別できておらず、頭蓋骨（角を含む）では雄の資料も複数見つかったことから、雌雄ともに捕獲されていたことが分かる。

エゾシカでは解体されたり加工されたりした痕跡をとどめた資料が見られる。骨角器（原材含む）として報告された資料のなかにもエゾシカ由来のものがあり、角はもちろんのこと、脛骨や中手骨・中足骨が確認されている（Ⅲ章骨角器の項参照）。このようにエゾシカは食料としてだけでなく、素材としてもよく利用されていたことがうかがえる。

エゾシカに次いで多いのはイヌである。ただし、SB-3などの一部の地点に出土は偏り、ほとんどの地点からほぼ満遍なく見られたエゾシカとは出土の仕方が異なる。また、頭部の出土量に対して四肢骨や体幹骨が少なく、アンバランスである。これが出土量の少なさによるものか、当時の人の意図によるものかは判別し難い。年齢段階が判明している資料は全て成獣であり、なかには歯が咬耗した資料も含まれる。このため、生前に猟犬などとして使役された可能性はあるが、埋葬された様子は見られず、最終的には食用にするために解体されたと考えられる。

キタキツネは下顎骨と遊離歯が僅かに出土しているだけである。良質な毛皮を持つため、実際にはより多く利用されていたかもしれないが、出土資料からはそのような証拠はつかめなかった。

トガリネズミ目やネズミ科は、意図的に利用されたとはみなし難く、自然に遺跡内へと入り込んだものとみられる。

なお、本表には含めていないが、ヒグマの出土が骨角器の項（Ⅲ章）で報告されている。SB-5からの出土資料で、左の尺骨に解体痕や切断痕が見られる。大きさからしてきわめて大型の雄の成獣個体である。これ以外にヒグマの遺体は1点も出土しておらず、当時の詳細な利用状況は不明である。

6 海獣類

海獣類の出土量は表6に示した通り、たいへん少ない。この表には骨角器（原材を含む）の素材にされた海獣類を含めていないが、それを含めても、出土量が少なかったという傾向に変わりはない。

注目すべき点は、SB-4（このうちのksb-19・20部分）でアザラシ科の頭蓋骨が最小で3個体分みられたことである。頭蓋骨といっても完形ではない上に下顎骨も伴わず、特別に配置したような状況でもないが、他の地点でも四肢骨はまったく見られないため、アザラシ科の頭蓋骨を特別に扱った可能性は否定できない。

斜里はアザラシ科が流水とともに多く訪れる地域として知られ、アイヌ文化期の記録（更科1952）からもアザラシ猟を重視していた様子が見て取れる。このことから、アザラシ科の出土量が限られる理由として、アザラシ科をあまり利用しなかったと直ちに判断することはできず、遺体の多くが調査区外に遺存している可能性や、アイヌ文化期の記録にもあるように、捕獲したアザラシ科を丁重に扱ったが故に、他の動物と同じ地点ではあまり見つからなかった可能性なども考える必要がある。

まとめ

2018年度の発掘調査によって出土した動物遺体をもとに、動物種ごとの特徴をみてきた。出土内容

からは、貝類の採集と漁撈が生業の核であったことが明らかであり、身近に生息する動物を主体的に利用した暮らしぶりが見て取れる。生息数が多い種に依存した生活を営むことはどの遺跡でも見受けられることであり、本遺跡も同様である。ただし、エゾシカを除いた陸獣類や海獣類の利用は出土量を見る限り低調で、利用された種は、周辺に生息する動物種に比べてかなり少ない印象を受ける。これが実際の状況に近いのか、それとも、調査面積の狭さなどが影響しているのか、判断が難しい。しかし、アイヌ文化期では、前代のオホーツク文化期に比べて海獣狩猟の比重が下がり、エゾシカ猟の比重が増すことは常々指摘されており、今回の出土内容を見る限り、本遺跡も海岸沿いに立地しているものの、そのような時代的特性が反映されているとみなせる。

本調査では、遺跡全体からすれば限られた調査面積ではあったものの一定程度の動物遺体が得られ、別項に掲載された斜里町教育委員会による発掘調査分（2008、2009、2011、2012年度）（上氏や江田氏による報告）も含めて、定量分析の結果が公表された点は重要である。もちろん、時間的制約や現生標本の欠如などにより種名の特定に至らなかった資料は多く、全容の解明には至っていないが、空白部分の多い斜里地方の動物利用史を解明していくための一歩になったといえるだろう。

最後に、今回貴重な資料を分析する機会を与えていただいた、（公財）北海道埋蔵文化財センターの阿部明義氏と、同氏のご指導の下、動物遺体の抽出作業に尽力いただいた同センターの作業員の方々に深く感謝申し上げます。

註

- 1) 表2に示したksbのまとめりにごとくに最小個体数を求め、その総計を全個体数としておおよその割合を導き出している。他の動物も同様である。
- 2) 斜里町立知床博物館のホームページによれば、知床半島沿岸のオホーツク海、および知床半島の河川や湖沼で確認された魚類として、カジカ科の掲載種数は27種（種名不明種1種を含む）にもなる。
- 3) もっとも多く出土した左の前上顎骨8点を体長66cmの現生標本と比較したところ、かなり大きい資料が2点、やや大きい資料が4点、やや小さい資料が2点となった。
- 4) ksb-22から出土したウミスズメ科の鳥口骨はウトウ大だったが、焼けていたため、収縮した可能性を考慮して（大?）とした。

引用文献

- 内山幸子 2001「推定体長に基づいたマダラ漁の復元的研究」『海と考古学』4号 33～44頁
- 櫻井 泉 2003「76.ウバガイ」『新北のさかなたち』北海道新聞社 304～309頁
- 桜井泰憲・福田慎作 1984「陸奥湾に來遊するマダラの年齢と成長」『青森県水産増殖センター研究報告』3 9～14頁
- 更科源蔵 1952「斜里アイヌのアザラシ狩」『北方研究』1 22～25頁
- 更科源蔵・更科 光 1976「サケ」『コタン生物記Ⅱ』法政大学出版局 431～450頁
- 斜里町立知床博物館 1985『知床の鳥』
- 斜里町立知床博物館 1996『オホーツク知床のさかな』
- 若林 隆編 1997『北海道海釣り101』つり人社

表1 出土動物一覽

軟体動物門	Phylum Mollusca	脊椎動物門	Phylum Vertebrata
腹足綱	Class Gastropoda	軟骨魚綱	Class Chondrichthyes
ユキノカサガイ科	Patellidae gen.	ネズミザメ科	Lamnidae gen.
ウミナナ科	Pomatidae gen.	硬骨魚綱	Class Osteichthyes
タマガイ科	Naticidae gen.	ニシン	<i>Clupea pallasii</i>
エゾバイ科	Buccinidae gen.	ウグイ属	Tribolodon sp.
マイマイ目	Stylommatophora fam.	サケ科	Salmonidae gen.
斧足綱	Class Pelycypoda	ブリ属	Seriola sp.
エゾタマキガイ	<i>Glycymeris yessoensis</i>	オオカミウオ	<i>Anarhichas orientalis</i>
ホタテガイ	<i>Mizuhopecten yessoensis</i>	タラ科	Gadidae gen.
エゾキンチャクガイ	<i>Chlamys swifti</i>	マダラ	<i>Gadus macrocephalus</i>
エゾイシカゲガイ	<i>Clinocardium californiense</i>	スケトウダラ	<i>Theragra chalcogramma</i>
エゾワスレガイ	<i>Callista brevisiphonata</i>	フサカサゴ科	Scorpaenidae gen.
ビノスガイ	<i>Mercenaria stimpsoni</i>	アイナメ科	Hexagrammidae gen.
エゾヌノメアサリ	<i>Callithaca adamsi</i>	カジカ科	Cottidae gen.
マルスダレガイ科	Veneridae gen.	ヒラメ	<i>Paralichthys olivaceus</i>
バカガイ	<i>Mactra chinensis</i>	カレイ科	Pleuronectidae gen.
ウバガイ	<i>Spisula sachalinensis</i>	フグ科	Tetraodontidae gen.
エゾイソシジミガイ	<i>Nuttallia ezonis</i>	鳥綱	Class Aves
バカガイ科	Mactridae gen.	アホウドリ科	Diomedidae gen.
サラガイ	<i>Megangulus venulosus</i>	ウ科	Phalacrocoracidae gen.
アラスジサラガイ	<i>Megangulus zyonoensis</i>	カモ科	Anatinae gen.
サラガイ属	Megangulus sp.	カモメ科	Laridae gen.
オオミズガイ	<i>Siliqua alta</i>	ウミスズメ科	Alcidae gen.
キヌマトイガイ科	Hiattellidae gen.	哺乳綱	Class Mammalia
節足動物門	Phylum Arthropoda	トガリネズミ目	Soricomorpha fam.
顎脚綱	Class Maxillopoda	ネズミ科	Muridae gen.
フジツボ類	Balanomorpha fam.	ヒグマ	Ursus arctos
軟甲綱	Class Malacostraca	キタキツネ	<i>Vulpes fulpes schrencki</i>
カニ類	Brachyura fam.	イヌ	<i>Canis familiaris</i>
棘皮動物門	Phylum Echinodermata	エゾシカ	<i>Cervus nippon yessoensis</i>
ウニ綱	Class Echinoidea	アザラシ科	Phocidae gen.
エゾバフンウニ	<i>Strongylocentrotus intermedius</i>	クジラ目	Cetacea fam.

表2-1 軟体動物門 (腹足綱・斧足綱)・節足動物門・棘皮動物門 (1)

遺構	SB-1		SB-2		SB-3		SB-4		SB-5					SB-6		SB-7	SB-8	SB-9	SB-10							
	II	ksb-1	II	ksb-2	II	ksb-3~14	II	ksb-17~19	II	ksb-21	魚骨・貝範囲1	魚骨・貝範囲2	貝集中①	貝集中②	貝集中③	魚骨集中②	魚骨集中③	II	灰	II	灰	II	灰	II	灰	
発掘区					下位 灰集中																					
試料番号					ksb-15 ・16																					
層位																										
軟体動物門 (腹足綱)																										
ユキノカサガイ科																										
ウミミナ科																										
タマガイ科																										
エノバイ科																										
マイマイ目																										
(斧足綱)																										
エノタマキガイ																										
ホタテガイ																										
エノキンチャクガイ																										
エノイシカガイ?																										
エノワスレガイ																										
ピノスガイ																										
エノスノダアサリ																										
マルスダレガイ科																										
バカガイ																										
ウバガイ																										
バカガイ科																										
エノイシシミガイ																										
サラガイ																										
アラスジサラガイ																										
サラガイ属																										
オオミノガイ																										
キスマトイガイ科																										
種不明二枚貝																										
節足動物門																										
フシソボ類																										
カニ類																										
棘皮動物門																										
ウニ類																										

凡例 L: 左側 R: 右側
 fr: 破片 +: 有り
 *: 焼け

表 2-2 軟体動物門 (腹足綱・斧足綱)・節足動物門・棘皮動物門 (2)

遺構	J13	J14	J15	J16	J18	J20	J21	J23	J24	J26	J26	J27	J28	K13	K14	K15	K19	K21	K22	K23	K24	K25	K34	K35	K37	K38	K39
発掘区																											
層位	II	II	II	II	II	II	II	II	II	II	II	攪乱	II	II	II	II	II	II	II	II	II	I 下	II	II	II	II	II
試料番号	ksb-39	ksb-40	ksb-41	ksb-42	ksb-43	ksb-44	ksb-45	ksb-46	ksb-47	ksb-49	ksb-50	ksb-51	ksb-52	ksb-55	ksb-56	ksb-57	ksb-59	ksb-60	ksb-61	ksb-62	ksb-63	ksb-64	ksb-65	ksb-66	ksb-67	ksb-68	ksb-69
軟体動物門 (腹足綱)																											
ユキノカサガイ科																											
ウミエナ科																											
タマガイ科																											
エノバイ科																											
マイマイ目																											
(斧足綱)																											
エノタマキガイ							ft																				
ホタテガイ					ft	ft							ft					ft									
エゾキンチャクガイ																											
エゾイシカガガイ?																											
エゾワスレガイ																											
ピノスガイ	ft	L 15	R 16	L 10	R 4			R 1	R 1	R 1		ft	ft			L 1	ft		L 2	L II	R 14	ft	R 1	R 1	L 1	ft	
エノスノダアサリ																											
マルスダレガイ科																											
バカガイ																											
ウバガイ	ft		R 1	R 1		ft			ft			ft		ft	L 1				ft	L 3	R 1	ft		ft	L 1		
バカガイ科																											
エゾイシジミガイ																											
サラガイ																											
アラスジサラガイ																											
サラガイ属																											
オオミノガイ																				ft							
キヌマトイガイ科																											
種不明二枚貝																											
節足動物門																											
フシソボ類																											
カニ類																											
棘皮動物門																											
ウニ類																											

凡例 L: 左側 R: 右側

ft: 破片 +: 有り

*: 焼け

表3-1 魚綱(1)

遺構 発掘区 層位	SB-1		SB-2		SB-3		SB-4		
	II	II	II	下位灰集中 灰	II	獣骨範囲	灰	魚骨・貝範囲1	魚骨・貝範囲2
試料番号	ksb-1	ksb-2	ksb-6・7・ 9・12・13	ksb-15・16	ksb-17~19	ksb-20	ksb-21	ksb-22	ksb-23
ネズミザメ科 ニシン			椎骨 f 2				椎骨 f 1 耳骨 L 2 R 1 主上顎骨 L 1	耳骨 L 1	
ウグイ属				主鰓蓋骨 R 1				角骨 L 1	
サケ科				歯骨 L 1 腹椎骨 9 (4*) 尾椎骨 3 (1*) 椎骨 1	主上顎骨 R 1 前上顎骨 R 1 歯骨 L 2 角骨 R 2 方骨 L 1 R 2 主鰓蓋骨 L 1 R 1 腹椎骨 1st 2 腹椎骨 116 (19*) 尾椎骨 162 (15*) 椎骨 5		耳石 L 1 歯骨 L 1 R 3 角骨 L 2 R 3 方骨 L 5 R 1 腹椎骨 1st 1 腹椎骨 165 (40*) 尾椎骨 160 (31*) 椎骨 9 (5*)	歯骨 L 1 R 1 角骨 L 3 R 2 方骨 L 2 R 2 主鰓蓋骨 L 1 腹椎骨 1st 1 腹椎骨 58 (2*) 尾椎骨 80 (4*) 椎骨 2	角骨 L 1 R 1 方骨 L 2 R 1 腹椎骨 24 (7*) 尾椎骨 34 (4*)
ブリ属 オオカミウオ									
タラ科			耳石 R 1	耳石 L 1 R 1 歯骨 R 1 角骨 L 1 方骨 R 1	耳石 L 3 R 3 主上顎骨 L 1 前上顎骨 L 3 R 1 歯骨 L 3 R 1 角骨 L 2 R 1		歯骨 LR? 1 歯 8 (5つは歯骨に伴う) 耳石 L 4 R 3 主上顎骨 R 2 前上顎骨 L 1 R 2 歯骨 L 4 R 4 角骨 L 5 R 4 方骨 L 4 R 2 主鰓蓋骨 L 1 R 1	耳石 L 2 R 1 主上顎骨 L 3 前上顎骨 L 4 R 3 歯骨 L 2 R 3 方骨 L 2 R 1	耳石 f 1
タラ科? フサカサゴ科							主鰓蓋骨 R 1 耳石 L 2 主上顎骨 L 1 R 1 前上顎骨 R 1 歯骨 L 1 R 1	前鰓蓋骨 L 1 主鰓蓋骨 L 1	方骨 L 1 前鰓蓋骨 L 2
アイナメ科					主上顎骨 R 3 (1*) 角骨 L 2 R 1 方骨 R 3 主鰓蓋骨 L 1		角骨 L 1 R 2 方骨 L 3 R 3	角骨 L 1 R 1 方骨 R 2	角骨 L 1 R 1 方骨 R 1
アイナメ科?				主上顎骨 L 1	主上顎骨 R 2 前上顎骨 R 3 主鰓蓋骨 R 1		主上顎骨 L 5 (1*) R 5 前上顎骨 L 7 R 5 (1*) 歯骨 L 4 R 4 方骨 R 1 主鰓蓋骨 L 5 R 2	主上顎骨 R 1 歯骨 R 1 主鰓蓋骨 L 1 R 1	主上顎骨 L 1 R 1 歯骨 R 1
カジカ科			前鰓蓋骨 L 1 歯骨 R 1	歯骨 L 1 R 1 方骨 R 1	耳石 R 1 主上顎骨 L 1 主鰓蓋骨 L 3 R 4 前上顎骨 L 1 R 5 歯骨 L 10 R 11 角骨 L 3 方骨 L 7 R 4 前鰓蓋骨 L 5 R 4 主鰓蓋骨 L 2 R 4		耳石 L 3 R 2 主上顎骨 L 7 R 9 前上顎骨 L 16 (1*) R 13 (1*) 歯骨 L 23 (2*) R 22 (2*) 角骨 L 5 R 3 方骨 L 8 (1*) R 3 前鰓蓋骨 L 17 R 17 主鰓蓋骨 L 5 R 6	耳石 L 2 主上顎骨 L 4 R 3 前上顎骨 L 4 R 3 歯骨 L 12 R 9 (1*) 角骨 L 4 R 2 方骨 L 5 R 4 前鰓蓋骨 L 4 R 2 主鰓蓋骨 L 2 R 2	前上顎骨 L 1 歯骨 L 1 R 1 角骨 L 1 方骨 R 1 前鰓蓋骨 L 1
カジカ科? ヒラメ					方骨 L 1 主上顎骨 R 1 前上顎骨 L 2 R 1		主上顎骨 R 2 前上顎骨 L 2 R 1 歯骨 L 2 R 3 角骨 L 2	主上顎骨 L 2 前上顎骨 L 1 R f 1 歯骨 L 1 R 2 角骨 L 1 R 2 方骨 L 2 R 2 主鰓蓋骨 L 1	
ヒラメ? カレイ科			第一血管間棘 1		主上顎骨 L 2 R 2 前上顎骨 R 3 歯骨 R 1 角骨 L 1 主鰓蓋骨 L 1		耳石 L 3 R 1 主上顎骨 R 4 前上顎骨 L 2 歯骨 L 2 R 2 方骨 L 1 R 2 前鰓蓋骨 L 1 主鰓蓋骨 L 1 R 3	耳石 L 1 R 1 主上顎骨 L 2 R 2 前上顎骨 L 1 R 4 歯骨 L 1 R 1	主上顎骨 L 1 角骨 R 1 方骨 L 1
イシガレイ? カレイ科?			石状骨質板 1		石状骨質板 4		石状骨質板 3 主鰓蓋骨 L 1	石状骨質板 1	石状骨質板 1
ヒラメ/カレイ科	+	+	方骨 L 1	前上顎骨 L 1	第一血管間棘 7 (1*) 方骨 L 1		第一血管間棘 8	第一血管間棘 3	
フグ科									
種不明魚類a									
種不明魚類b					角骨 L 1		角骨 R 1	角骨 R 1	
種不明魚類				耳石 f 1*					

凡例 L:左側 R:右側
*:被熱
()内:内数

表3-2 魚綱(2)

遺構 発掘区 層位	SB-5						SB-6			
	貝集中①		貝集中②		貝集中③		魚骨集中②		魚骨集中③	
試料番号	II						II		灰	
	ksb-24	ksb-25	ksb-26	ksb-27	ksb-28	ksb-29	ksb-30	ksb-31		
ネズミザメ科 ニシン							椎骨 fr 3 耳骨 L 1 R 1			
ウグイ属	角骨 R 2			咽頭骨 fr 1 角骨 R 1			咽頭骨 L 1			
サケ科		腹椎骨 1 尾椎骨 1*	腹椎骨 1	腹椎骨 1 椎骨 1	腹椎骨 2 尾椎骨 1		腹椎骨 2	腹椎骨 2		
ブリ属 オオカミウオ							前上顎骨 R 1			
タラ科	耳石 R 3 主上蓋骨 R fr 2 前上顎骨 L 5 R 1 歯骨 L 4 R 4 方骨 R 1 主鰓蓋骨 L 1			耳石 R 1 主上顎骨 L 4 R 5 前上顎骨 L 6 (1*) R 6 歯骨 L 8 R 8 角骨 L 1 R 1	耳石 L 5 R 2 主上顎骨 L 7 R 7 前上顎骨 L 12 R 7 歯骨 L 3 R 7 方骨 R 1 主鰓蓋骨 L 1 R 1	耳石 L 3 R 4 主上顎骨 L 6 R 4 前上顎骨 L 11 R 13 歯骨 L 4 R 6 角骨 L 4 R 2 方骨 L 3 R 1 主鰓蓋骨 R 1	耳石 L 10 R 3 主上顎骨 L 2 R 3 前上顎骨 L 1 R 1 歯骨 R 1 角骨 L 1 方骨 R 1 主鰓蓋骨 L 1	耳石 L 7 R 7 主上顎骨 R 1 前上顎骨 R 2 歯骨 L 1 R 1 角骨 L 1 方骨 L 1 主鰓蓋骨 R 2		
タラ科? フサカサゴ科		前上顎骨 R 1 主上顎骨 L 1 前上顎骨 L 1 R 1 前鰓蓋骨 L 1 主鰓蓋骨 L 2		前上顎骨 R 1	前上顎骨 R 1 前鰓蓋骨 R 1	主上顎骨 L 1 前上顎骨 L 1 R 1 歯骨 L 2 R 3 角骨 L 2 R 1 方骨 R 1 前鰓蓋骨 L 1 R 1 主鰓蓋骨 L 1 R 1				
アイナメ科	角骨 L 1	方骨 L 1		方骨 L 1 R 3		主上顎骨 L 1 R 2 角骨 R 1 方骨 R 1	角骨 L 1 R 1 方骨 L 1	主上顎骨 R 1 前上顎骨 L 1 角骨 L 3 R 1 方骨 L 2 R 6		
アイナメ科?	前上顎骨 L 2 歯骨 R 1		主上顎骨 L 1	主上顎骨 L 4 R 4 前上顎骨 L 4 R 2 歯骨 R 3	主上顎骨 L 2 R 4 前上顎骨 L 3 R 1 歯骨 L 1	前上顎骨 L 1 R 2 歯骨 L 2 R 1 主鰓蓋骨 L 1	主上顎骨 L 1 R 1 前上顎骨 L 4 R 2 歯骨 L 5 R 1	主上顎骨 L 2 (1*) R 5 前上顎骨 L 6 R 3 歯骨 R 1 主鰓蓋骨 L 2 R 5		
カジカ科	耳石 R 1 主上顎骨 R 1 前上顎骨 L 1 歯骨 L 6 R 2 角骨 L 1 R 1 方骨 L 1	前上顎骨 L 1 歯骨 L 1 R 1 方骨 L 1 R 1	歯骨 R 1 方骨 R 1	耳石 L 1 主上顎骨 L 2 R 1 前上顎骨 L 3 (1*) R 4 歯骨 L 4 R 9 角骨 L 1 方骨 L 1 R 1 主鰓蓋骨 L 1	主上顎骨 L 3 R 2 前上顎骨 L 1 R 7 歯骨 L 4 R 3 (1*) 角骨 L 1 方骨 L 2 R 2 主鰓蓋骨 L 1 R 1	主上顎骨 L 8 R 4 前上顎骨 L 5 R 9 歯骨 L 10 R 9 角骨 L 1 R 2 方骨 L 9 R 8 前鰓蓋骨 L 1 主鰓蓋骨 L 1 R 1	主上顎骨 L 1 R 1 前上顎骨 L 3 R 4 歯骨 L 3 R 3 角骨 L 1 方骨 R 2 前鰓蓋骨 L 1 R 1	耳石 L 4 R 1 前上顎骨 L 2 歯骨 L 2 R 2 角骨 L 2 方骨 L 1 R 1 主鰓蓋骨 L 1 R 1		
カジカ科? ヒラメ		主上顎骨 L 1				主上顎骨 R 1 前上顎骨 L 1	前上顎骨 L 1 R 1 歯骨 L 1 R 1 角骨 L 1 方骨 L 1 R 1	歯骨 R 1 角骨 R 1		
ヒラメ?								耳石 L 1		
カレイ科	歯骨 L 1 角骨 R 1 方骨 L 1	主上顎骨 L 1		主上顎骨 L 1 前上顎骨 L 2 R 1* 歯骨 L 2 方骨 L 1 主鰓蓋骨 L 1	主上顎骨 L 1 R 1 前上顎骨 L 1 歯骨 L 1 R 1 角骨 L 1 方骨 L 2 R 3 主鰓蓋骨 R 2	主上顎骨 L 4 R 3 前上顎骨 L 2 R 4 歯骨 L 1 R 4 角骨 R 3 方骨 L 1 R 2 前鰓蓋骨 R 1 主鰓蓋骨 L 2	耳石 L 1 主上顎骨 L 3 R 5 前上顎骨 L 3 R 3 歯骨 L 2 R 3 角骨 L 3 R 1 方骨 L 7 R 5 主鰓蓋骨 L 1	主上顎骨 L 2 R 1 歯骨 R 1 角骨 L 1 方骨 L 1 主鰓蓋骨 R 1		
イシガレイ? カレイ科?	主鰓蓋骨 L 1					石状骨質板 1 主鰓蓋骨 R 1		石状骨質板 1		
ヒラメ/カレイ科	第一血管間棘 1	第一血管間棘 1		第一血管間棘 1	第一血管間棘 3	第一血管間棘 7	第一血管間棘 6	第一血管間棘 6 (1*)		
フグ科							前上顎骨 R 1			
種不明魚類a						歯骨 L 1 R 1	歯骨 L 1			
種不明魚類b	角骨 L 1					角骨 R 1				
種不明魚類			角骨 fr 1		耳石 LR? 1					

凡例 L:左側 R:右側
*:被熱
()内:内数

表3-3 魚綱(3)

遺構	SB-7	SB-8	SB-9		SB-10		J16	K23
発掘区								
層位	II	灰	II	灰	II	灰1・2	II	II
試料番号	ksb-32	ksb-33	ksb-34	ksb-35	ksb-36	ksb-37・38	ksb-42	ksb-62
ネズミザメ科 ニシン			歯骨 L1					椎骨 1
ウグイ属								
サケ科	腹椎骨 3	角骨 R1 方骨 L1 腹椎骨 1st 3 腹椎骨 44 (1*) 尾椎骨 56 (1*) 椎骨 3 (1*)	歯骨 R1 腹椎骨 23 (15*) 尾椎骨 30 (8*)	尾椎骨 1 椎骨 fr 2	腹椎骨 1st 1* 腹椎骨 6 (2*) 尾椎骨 3 (2*)	角骨 R2 方骨 L1 R1 腹椎骨 4 (2*) 尾椎骨 6 椎骨 1		
ブリ属 オオカミウオ		歯 3*						
タラ科		耳石 L3 R2 主上顎骨 L1 歯骨 L2 R1 角骨 R1	前上顎骨 R1		耳石 L1 R1 前上顎骨 L3 R1	耳石 R2 主上顎骨 L1 前上顎骨 L1 歯骨 L1 R1		歯骨 L1 角骨 L1
タラ科? フサカサゴ科		前鰓蓋骨 R1			主上顎骨 L1 R2 前上顎骨 L1 R1 歯骨 L2 R2 角骨 L1 R2 方骨 L1 R2 前鰓蓋骨 R1 主鰓蓋骨 R2			
アイナメ科			主上顎骨 L1 角骨 R1 方骨 L1 R3					
アイナメ科?		主上顎骨 L1 前上顎骨 R1* 歯骨 L1	主上顎骨 R1 前上顎骨 L1 R2 歯骨 L2			歯骨 R1	前上顎骨 R1	
カジカ科	歯骨 R1* 主鰓蓋骨 R1	主上顎骨 L1 R1 前上顎骨 L1 歯骨 R5 (1*) 方骨 L1 R2	前上顎骨 L9 R7 歯骨 L9 (1*) R3 角骨 L2 R1 方骨 L1 R4 前鰓蓋骨 L3 R4 主鰓蓋骨 L1		前上顎骨 R3	主上顎骨 L1 歯骨 R1 前鰓蓋骨 L1		
カジカ科? ヒラメ		主上顎骨 R1 方骨 L2			主上顎骨 L2 前上顎骨 L1 方骨 R2 前鰓蓋骨 R1		角骨 R1	
ヒラメ? カレイ科	前鰓蓋骨 fr 1		歯骨 L fr 1 角骨 L1 R2 方骨 R3 前鰓蓋骨 R1 主鰓蓋骨 L2		歯骨 R1 方骨 L1	耳石 L1 前鰓蓋骨 R1 歯骨 R1 角骨 L1 主鰓蓋骨 L1		
イシガレイ? カレイ科?	石状骨質板 5	石状骨質板 1	石状骨質板 1		石状骨質板 1			
ヒラメ/カレイ科	第一血管間棘 2 (1*)	第一血管間棘 1			第一血管間棘 1			
フグ科								
種不明魚類a								
種不明魚類b								
種不明魚類			主鰓蓋骨 R1		耳石 LR? 1			

凡例 L:左側 R:右側
*:被熱
()内:内数

表4 マダラとみられるタラ科の耳石と推定体長

遺構	試料番号	L/R	耳石長(mm)	推定体長(cm)*	
SB-3	ksb-16	L	24.3	98.9	
SB-4	ksb-17	L	19.4	64.2	
	ksb-19	L	21.7	80.5	
	ksb-21	L	19.3+	63.5+	
	ksb-21	L	21.5	79.1	
SB-5	ksb-28	L	16.8	45.7	
	ksb-28	L	18.9	60.6	
	ksb-28	L	19.7	66.3	
	ksb-28	L	22.3	84.8	
	ksb-29	L	18.2+	55.7+	
	ksb-29	L	18.9	60.6	
	ksb-29	L	23.5	93.3	
SB-6	ksb-30	L	18.2+	55.7+	
	ksb-30	L	19.5+	64.9+	
	ksb-30	L	19.9+	67.7+	
	ksb-30	L	20.1+	69.1+	
	ksb-30	L	20.2+	69.9+	
	ksb-30	L	21.2	77.0	
	ksb-30	L	23.0+	89.7+	
	ksb-31	L	20.9+	74.8+	
	ksb-31	L	21.5	79.1	
	ksb-31	L	21.5	79.1	
	ksb-31	L	22.6	86.9	
	ksb-31	L	23.5	93.3	
	SB-7	ksb-33	L	19.5	64.9
		ksb-33	L	19.8+	67.0+
		ksb-33	L	22.7	87.6
平均			21.1	76.2	

遺構	試料番号	L/R	耳石長(mm)	推定体長(cm)*
SB-3	ksb-12	R	20.3	70.6
	ksb-16	R	20.1	69.1
SB-4	ksb-17	R	23.1	90.4
	ksb-19	R	21.7+	80.5+
	ksb-19	R	23.2+	91.1+
	ksb-21	R	20.7	73.4
	ksb-21	R	20.7+	73.4+
	ksb-21	R	25.1	104.6
	ksb-22	R	21.1	76.2
SB-5	ksb-24	R	21.5	79.1
	ksb-24	R	23.0	89.7
	ksb-27	R	21.6+	79.8+
	ksb-29	R	19.7+	66.3+
	ksb-29	R	19.8	67.0
	ksb-29	R	21.8+	81.2+
	ksb-29	R	22.0	82.6
SB-6	ksb-30	R	21.6	79.8
	ksb-31	R	19.1	62.1
	ksb-31	R	23.0	89.7
	ksb-31	R	25.9	110.3
SB-8	ksb-33	R	20.9	74.8
	ksb-33	R	22.4	85.5
SB-10	ksb-37	R	19.3	63.5
	ksb-38	R	21.5	79.1
平均			21.7	80.5

* マダラと仮定した場合の推定体長
+ 欠損部が僅かにある資料

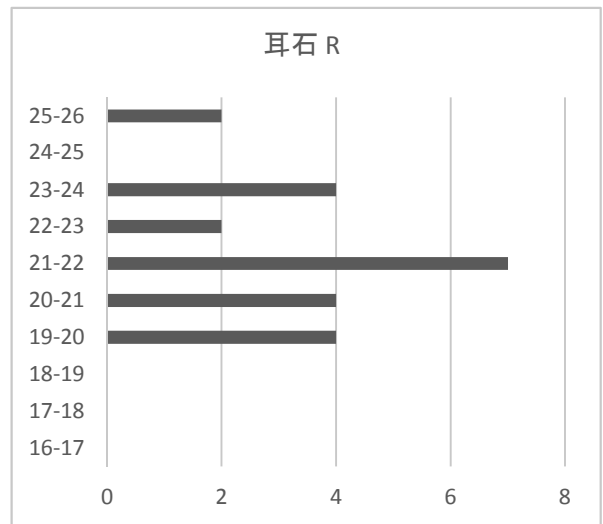
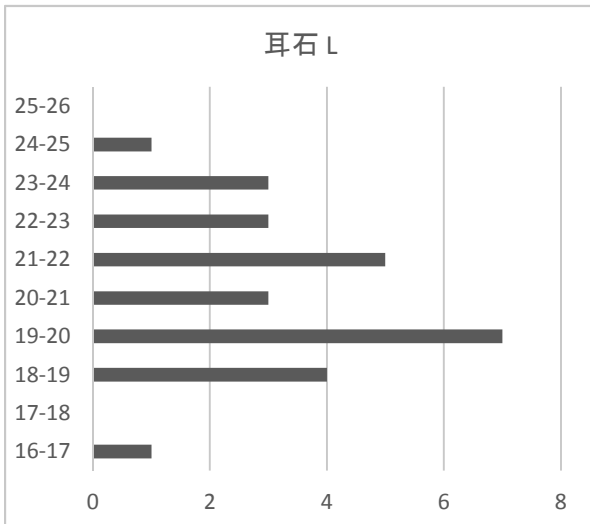


表5 鳥綱

遺構	SB-3		SB-4			
	発掘区	下位灰集中				
層位	II	灰	II	獣骨範囲	灰	魚骨・貝範囲1
試料番号	ksb-3・7・12・14	ksb-15・16	ksb-17・19	ksb-20	ksb-21	ksb-22
アホウドリ科			上腕骨 R p fr 1 脛骨 R p 1		鳥口骨 L p-m 1 鳥口骨 L m 1 肩甲骨 R 1	
ウ科					鳥口骨 R p 1*	
カモ科		尺骨 L p 1	上腕骨 L p-m 1			
カモメ科	尺骨 R m-d 1 中手骨 p-m 1	指骨 I L 1				
ウミスズメ科		鳥口骨 R p (中) 1 肩甲骨 R (大) 1 脛骨 L d (中) 1	肩甲骨 L (中) 1 R (大) 1 上腕骨 R d (大) 1 橈骨 R (大) 1 橈骨 R p-m (大) 1 ①? 橈骨 R d (大) 1 ①? 尺骨 R p (大) 1 ②? 尺骨 R d (大) 1 ②? 中手骨 L d (大) 1 中手骨 R (大) 1 中手骨 R p-m (大) 1 中手骨 R d (中) 1 指骨 I R (大) 1		鳥口骨 L (大) 1 肩甲骨 L (大) 1 上腕骨 L p (大) 1 上腕骨 R p 1 脛骨 L d (小) 1 中足骨 R (中?) 1	鳥口骨 R p (大?) 1* 上腕骨 R m-d (大) 1 尺骨 R (大) 1 脛骨 R m-d (小) 1
ウミスズメ科?						
種不明鳥類	尺骨 m fr 1 四肢骨 m fr 1 fr 2	上顎骨 fr 1 尺骨 L m 1 脛骨 d fr 1 胸峰 fr 1 椎骨 2 四肢骨 m 1	鳥口骨 R p-m 1 脛骨 L m 1 fr 65 (25*)	上腕骨? m 1	方形骨 R 2 鳥口骨 R p 1* 橈骨 R m-d 1 指骨 5 fr 49 (3*)	中足骨 R m 1 fr 14

遺構	SB-5				SB-8	SB-10		J16	K23
	貝集中①	貝集中②	魚骨集中②	魚骨集中③					
層位	II				灰	II	灰2	II	II
試料番号	ksb-25	ksb-26	ksb-28	ksb-29	ksb-33	ksb-36	ksb-38	ksb-42	ksb-62
アホウドリ科								上腕骨 L p fr 1	
ウ科									
カモ科									
カモメ科							橈骨 L p-m 1 尺骨 L 1		
ウミスズメ科				中足骨 L m-d (大?) 1	大腿骨 R d (大) 1 脛骨 L m-d (大?) 1				尺骨 R m-d (大) 1
ウミスズメ科?	胸峰 (中) 1								
種不明鳥類	fr 1	fr 1	方形骨 L 1 胸峰 fr 1 fr 4	方形骨 L 1* R 1* 指骨 3*	脛骨 L m fr 1 椎骨 2 fr 3	脛骨 R m 1		胸峰 fr 1	

凡例 L:左 R:右
p:近位部 m:中間部 d:遠位部
*:被熱
():内数

表6-1-1 哺乳綱 (1)

遺構	SB-2			SB-3			SB-4			SB-5			
	SB-1	II	J21	J22	J23	下位灰集中	II	灰	魚骨・貝類	魚骨・貝類	II	貝集中①	貝集中②
発掘区	II	II	J21	J22	J23	下位灰集中	II	灰	魚骨・貝類	魚骨・貝類	II	貝集中①	貝集中②
層位	II	II	J21	J22	J23	下位灰集中	II	灰	魚骨・貝類	魚骨・貝類	II	貝集中①	貝集中②
試料番号	ksb-1	ksb-2	ksb-3・5・6	ksb-7~10	ksb-11~14	ksb-15・16	ksb-17~19	ksb-21	ksb-22	ksb-23	ksb-24	ksb-25	ksb-26
トガリネズミ目								寛骨 L1					
ネズミ科								遊離歯 下顎 C R1 肩甲骨 L1 上腕骨 Lm-d1 大腿骨 Lp1 大腿骨 Lp2 df1 軸椎 1					
ネズミ科?													
キタキツネ													
イヌ													
エゾシカ													
種不明陸獣類	II 2	II 5	II 16(6)	II 2	II 119(1)	II 28(3)	II 2	II 42(62)	II 2	II 121	II 50	II 13(4)	
アザラシ科													
クジラ目													
種不明海獣類													
種不明哺乳類													

凡例 L:左 R:右
 p:近位部 m:中間部 d:遠位部
 I:切歯 C:犬歯 P:前臼歯 M:後臼歯
 i:乳切歯 c:乳犬歯 m:乳臼歯
 成:成獣 亜成:亜成獣 幼:幼獣
 #:被熱
 ()内:内数

表 6-2 哺乳綱 (2)

遺構	SB-5	SB-6	SB-7	SB-8	SB-9	SB-10	J13	J14	J15	J16	J21	J25	K15	K23	K35
発掘区	貝集中③	灰	II	灰	II	灰1・2	II	II	II	II	II	II	II	II	II
層位	魚骨集中②	灰	II	灰	II	灰1・2	II	II	II	II	II	II	II	II	II
試料番号	ksb-27	ksb-30	ksb-32	ksb-33	ksb-34	ksb-36	ksb-37・38	ksb-40	ksb-41	ksb-42	ksb-45	ksb-48	ksb-57	ksb-62	ksb-66
トガリネズミ目			下顎骨 R1		上腕骨 L1 ⑦ R1 ⑦	下顎骨 R1									
ネズミ科															
ネズミ科?				遊離歯 下顎M ₁ R1成 下顎P ₁ f1											
キタキツネ															
イヌ			尺骨 Rm1 成?	遊離歯 上顎M ¹ R1成										頭蓋骨(後頭部)のLR1 下顎骨L1関節突起周辺1 軸椎1	
エゾシカ	上腕骨 Rm f1 脛骨 Rm-d1 成 ♀ 脛骨 Rm-d1 成 ♀ 傷 距骨 Rm-d1 踵骨 Rm-d1	角? f1 上腕骨 Lm f1	尺骨 L1関節部1 指骨 I p f1 中足骨 II Lp-m1 ⑥ 中足骨 III Lp-m1 ⑥ 中足骨 IV Lp-m1 ⑥	肩甲骨 R1 橈骨 m f1			遊離歯 上顎MR1 下顎MR3 距骨 L1 ⑦? 踵骨 Lm-d1 ⑦?	遊離歯 上顎M ¹ L1 上顎M ¹ L1 上顎M ¹ L1	脛骨 Lm1 上腕骨 Lm1	遊離歯 上顎M ¹ L1 上顎M ¹ L1 上顎M ¹ L1	角? f1	遊離歯 上顎M ¹ L1 上顎M ¹ L1 脛骨 Rm-d1 成 ♀			
種不明陸獣類	f 8	f 21	f 17	f 17	f 2	f 2	f 1	f 1	f 20	f 20	f 7	f 7	f 1		f 15
アザラシ科															
クジラ目															
種不明海獣類	f 106 (94)	f 120 (88)	f 388 (324)	f 286*	f 106 (82)	f 73 (40)	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1
種不明哺乳類	f 106 (94)	f 120 (88)	f 388 (324)	f 286*	f 106 (82)	f 73 (40)	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1	f 1

凡例 L:左 R:右
p:近位部 m:中間部 d:遠位部
I:切歯 C:犬歯 P:前臼歯 M:後臼歯
i:乳切歯 c:乳犬歯 m:乳臼歯
成:成獣 垂成:垂成獣 幼:幼獣
*:被熱
()内:内数

6 カモイベツ遺跡出土炭化木片の樹種

(株) 加速器分析研究所

はじめに

北海道斜里郡斜里町峰浜311、312に所在するカモイベツ遺跡から出土した炭化木片について、用材選択や古植生に関する情報を得ることを目的とした樹種同定を実施した。試料が属する層の年代は、II層が近世アイヌ文化期、VII a層がオホーツク文化刻文期、VII b層が縄文時代後半である。

1 試料

試料は、炭化木片5点(KMO-1、4、5、7、13)である。なお、同一試料を含む計15点の炭化木片について放射性炭素年代測定が実施されており、推定年代とおおむね一致する結果となった(VIII章9 年代測定報告参照)。

2 分析方法

試料を自然乾燥させた後、各試料の木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面について割断面を作製し、双眼実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡(低真空)を用いて木材組織の種類や配列を観察する。各試料で観察された特徴を現生標本および森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類(分類群)を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995, 1996, 1997, 1998, 1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を表1に示す。5点の炭化木片は針葉樹1分類群(モミ属)と広葉樹3分類群(イヌエンジュ属、ハンノキ属ハンノキ亜属、トネリコ属シオジ節)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・モミ属 *Abies* マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。柔細胞壁は粗く、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。

・イヌエンジュ属 *Maackia* マメ科

環孔材。孔圏部は1~3列、孔圏外への移行は緩やか、孔圏外では小径の道管が多数集まって接線・斜方向に帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。孔圏外の小道管は層階状になり、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~5列、1~30細胞高。

・ハンノキ属ハンノキ亜属 *Alnus subgen. Alnus* カバノキ科

散孔材。道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在する。道管の穿孔板は階段穿孔板、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと集合放射組織とがある。

・トネリコ属シオジ節 *Fraxinus sect. Fraxinaster* モクセイ科

環孔材。孔圏部は1~2列、孔圏外で急激に径を減じ、孔圏外では小径で厚壁の道管が単独または2個が放射方向に複合して配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管の穿孔板は単穿孔板、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、1~2細胞幅、1~20細胞高。

表1 カモイベツ遺跡の樹種同定結果

試料番号	採取場所	遺物番号	層位	種類	備考
KMO-1	H-19HF-1 焼土		VIIa	ハンノキ属ハンノキ亜属	石組炉内
KMO-4	H-21HF-1 焼土上面	16	VIIa	イヌエンジュ属	石組炉内
KMO-5	H-22HF-1 焼土		VIIb	モミ属	地床炉内
KMO-7	PS-31 覆土下層		VIIa	トネリコ属シオジ節	集石土坑
KMO-13	SB-5 魚骨集中②		II	トネリコ属シオジ節	貝・魚骨ブロック

4 考察

各種類の材質等についてみると、針葉樹のモミ属は、北海道には常緑高木のトドマツが分布する。木材は、木理が通直で割裂性が高く、強度と保存性は低い。広葉樹のイヌエンジュ属は、北海道に落葉高木のイヌエンジュが分布する。木材はやや重硬な部類に入り、強度と耐朽性が比較的高い。ハンノキ亜属は、北海道に落葉高木のハンノキとケヤマハンノキが分布する。木材はやや重硬・緻密で比較的高い。シオジ節は、北海道に落葉高木のヤチダモが分布する。木材は重硬で強度が高い。

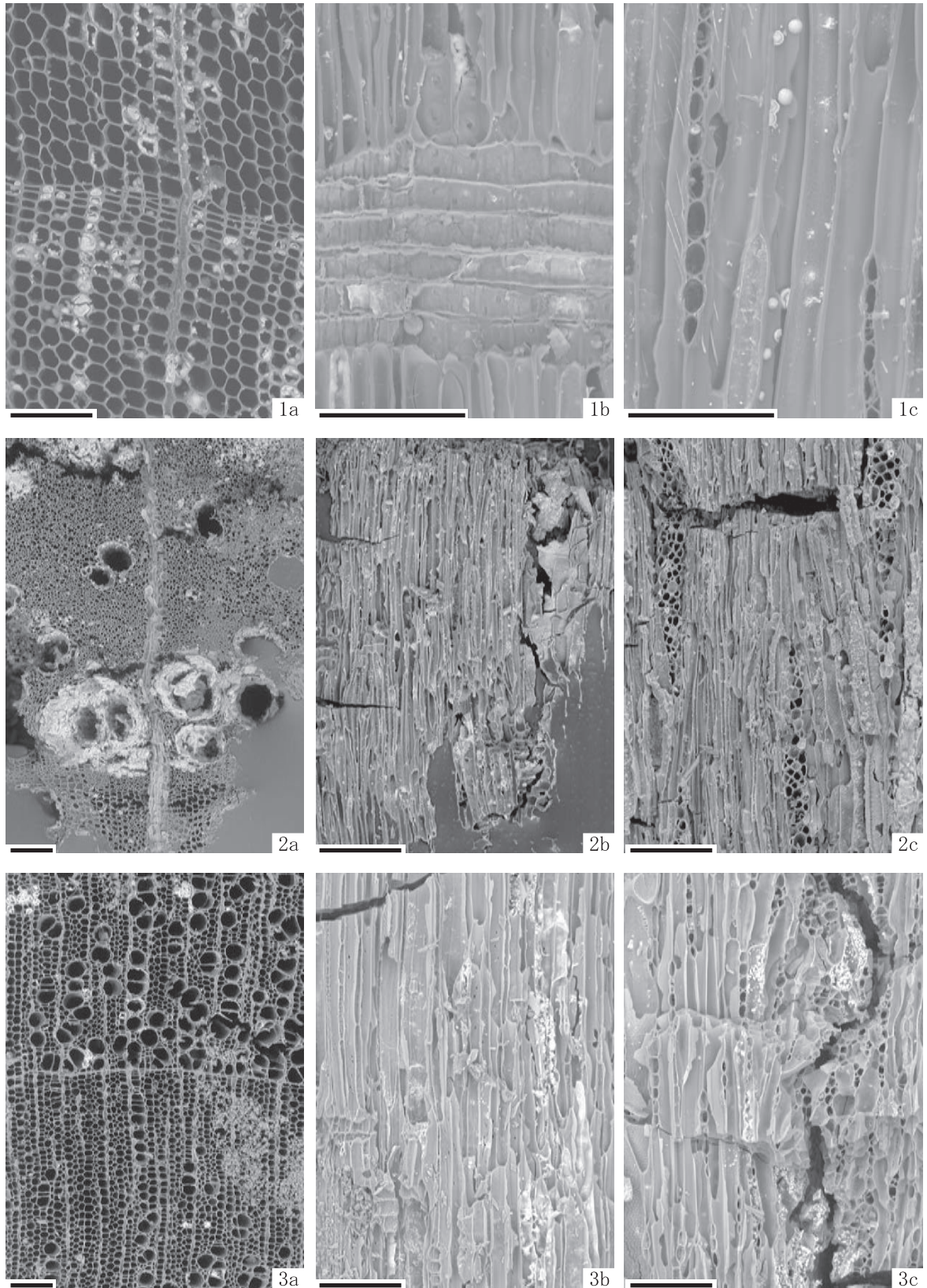
時期別にみると、近世アイヌ文化期（Ⅱ層）の貝・魚骨ブロックSB-5の魚骨集中②から出土した試料KMO-13は、炭化している状況から、火を受けたことは明らかであるが、その背景については不明である。シオジ節に同定され、近世においても遺跡周辺の河畔等にシオジ節が生育していたことが推定される。

オホーツク文化刻文期（Ⅶa層）の竪穴の石組炉内から出土した試料KMO-1がハンノキ亜属、試料KMO-4がイヌエンジュ属、集石土坑から出土した試料KMO-7はシオジ節に同定された。樹種は異なるが、いずれも広葉樹で構成される。当時は、遺跡周辺の河畔を中心にハンノキ亜属、シオジ節、イヌエンジュ属が生育し、その木材を燃料などに利用したことが推定される。

続縄文時代後半（Ⅶb層）の（平地式）住居の地床炉内から出土した試料KMO-5は燃料材の可能性はある。樹種はモミ属に同定されたことから、当時の遺跡周辺にはモミ属が生育しており、その木材を燃料に利用したことが推定される。

文献

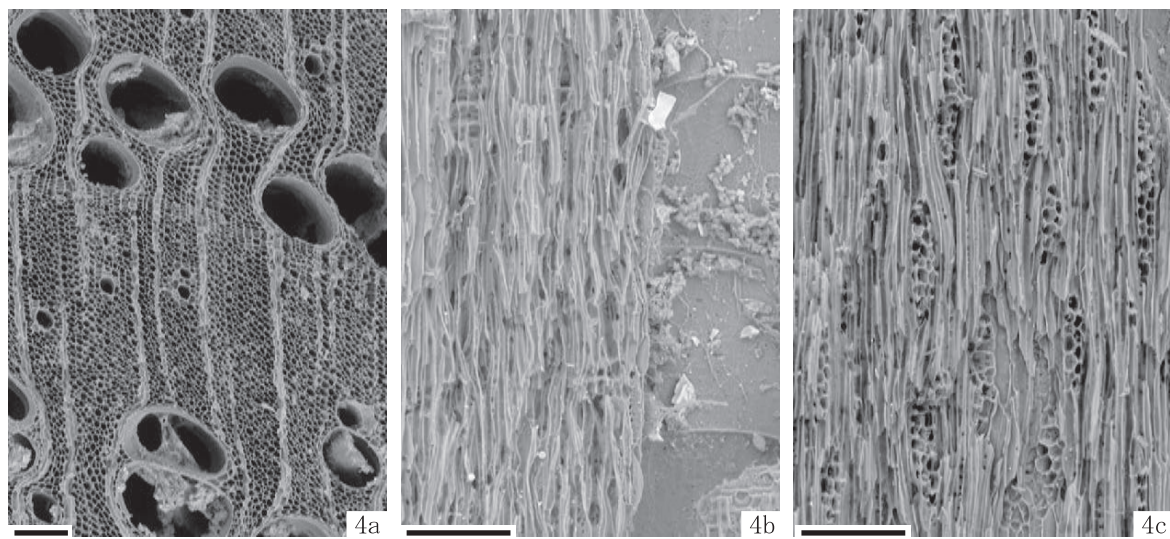
- 林 昭三, 1991, 日本産木材 顕微鏡写真集. 京都大学木質科学研究所.
- 伊東隆夫, 1995, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ. 木材研究・資料, 31, 京都大学木質科学研究所, 81-181.
- 伊東隆夫, 1996, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ. 木材研究・資料, 32, 京都大学木質科学研究所, 66-176.
- 伊東隆夫, 1997, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ. 木材研究・資料, 33, 京都大学木質科学研究所, 83-201.
- 伊東隆夫, 1998, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ. 木材研究・資料, 34, 京都大学木質科学研究所, 30-166.
- 伊東隆夫, 1999, 日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ. 木材研究・資料, 35, 京都大学木質科学研究所, 47-216.
- Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (編), 2006, 針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘 (日本語版監修), 海青社, 70p. [Richter H.G., Grosser D., Heinz I. and Gasson P.E. (2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*].
- 島地 謙・伊東隆夫, 1982, 図説木材組織. 地球社, 176p.
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (編), 1998, 広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト. 伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩 (日本語版監修), 海青社, 122p. [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E. (1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*].



各写真のスケールは0.1mm

図版1 カモイベツ遺跡の炭化木片(1)

- 1 モミ属 (KMO-5)
 - 2 イヌエンジュ属 (KMO-2)
 - 3 ハンノキ属ハンノキ亜属 (KMO-1)
- a : 木口 b : 柁目 c : 板目



各写真のスケールは0.1mm

図版2 カモイベツ遺跡の炭化木片(2)

- 4 トネリコ属シオジ節 (KMO-13)
a : 木口 b : 柁目 c : 板目

7 カモイベツ遺跡の炭化種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

カモイベツ遺跡は、斜里郡斜里町字峰浜国道敷地内に所在し、オホーツク海に面する海岸砂丘列と、その南側の低湿地の一部に立地し、オホーツク文化期、続縄文文化期、アイヌ文化期に帰属する遺構・遺物が確認されている。

本分析調査では、続縄文時代とオホーツク文化期、アイヌ文化期の各遺構より出土した炭化種実の同定を実施し、植物利用および周辺植生に関する情報を得る。

1 試料

試料は、各遺構覆土および包含層から検出された炭化種実39点288個（試料番号1～39）である。主に遺構覆土の土壤水洗（フローテーション）等により検出され、全て乾燥した状態で容器に収納されている。

2 分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を拾い出す。炭化種実の同定は、現生標本や石川（1994）、中山ほか（2010）、鈴木ほか（2012）等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて結果を一覧表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで表示する。同定された分類群は、写真を添付する他、主な炭化種実の大きさをデジタルノギスで計測し、結果を一覧表に併記して同定根拠とする。炭化種実以外は、確認される種類の個数を一覧表に併記する。

分析後は、抽出物を容器に入れて返却する。

3 結果

炭化種実同定結果を表1に、写真を図版1に示す。

全39試料を通じて、被子植物10分類群（落葉広葉樹のオニグルミ、カシワ、カシワ-ミズナラ、コブシ、キハダ、ヤマブドウ、ブドウ属、ブドウ科、草本のササ属、ミクリ属）203個の炭化種実が同定された。試料番号23の破片1個は同定ができなかった。炭化種実は、ヤマブドウを含むブドウ属（疑問符含む）、ブドウ科が計93個と最も多く、ササ属が80個、キハダ（疑問符含む）が14個と次いで多い。

炭化種実以外は、被子植物4分類群（スゲ属、イシミカワ近似種、ポントクタデ近似種、アカザ属）の種実8個、不明種実？1個、不明A種実？2個、単子葉類の炭化鱗茎38個、炭化材2個、不明5個、木の芽1個、スギナ類の地下茎4個、菌核5個、菌核？6個、昆虫1個、ミミズ類の卵胞16個、岩片6個、土粒？1個、膠結物質？7個の、計103個が確認された。炭化種実と炭化種実以外の合計は、307個である。

炭化種実以外のうち、スゲ属、イシミカワ近似種、ポントクタデ近似種、アカザ属などの草本種実や、木の芽、スギナ類の地下茎、昆虫、ミミズ類の卵胞は、保存状態が良好で炭化していない。遺跡の立地を考慮すると、低湿地に由来する可能性も含まれるため、試料の履歴を検討する必要がある。ただし、供伴する炭化種実や炭化鱗茎の保存状態と考え合わせると、後代の混入の可能性が高いことから、念のため考察より除外している。

一方、炭化鱗茎については、当時の植物利用および周辺植生に関する情報を有するため、保存状態が良好な一部の写真を図版2に、デジタルノギスで長さや径を計測した結果を表2に示す。

以下、炭化種実・炭化鱗茎の形態的特徴等を記す。なお、学名は佐竹ほか編（1989a, b, 1982）、クマイザサのみ堀田編（1989）に依拠した。

表2 炭化鱗茎の計測値

試料番号	遺構/(発掘区)	層位	遺物番号	時期	備考	番号	長さ(mm)	径(mm)	図版番号	備考
14	PIT15/E129	覆土	347	続縄文	(PS-24)	1	9.04	7.19	2	
14	PIT15/E129	覆土	347	続縄文	(PS-24)	2	4.82	4.34	-	
15	PIT16/E129	覆土	355	続縄文	(SF-6)	1	8.75 +	12.43	-	頂部欠損
15	PIT16/E129	覆土	355	続縄文	(SF-6)	2	5.94 +	8.75	-	頂部欠損
15	PIT16/E129	覆土	355	続縄文	(SF-6)	3	4.54 +	6.55	-	頂部欠損
15	PIT16/E129	覆土	355	続縄文	(SF-6)	4	5.70 +	6.28	-	両端欠損
15	PIT16/E129	覆土	355	続縄文	(SF-6)	5	3.02 +	4.37	-	頂部欠損
15	PIT16/E129	覆土	355	続縄文	(SF-6)	6	6.49	7.22	3	破片
15	PIT16/E129	覆土	355	続縄文	(SF-6)	7	5.71 +	5.91	-	破片、頂部欠損
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	1	8.98 +	10.74	4	基部着点欠損
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	2	10.73	11.20	-	
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	3	11.29	10.71	5	
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	4	7.07 +	9.14	-	頂部欠損
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	5	7.93	8.21	6	
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	6	5.87 +	7.61	-	頂部欠損
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	7	8.00	7.05	9	
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	8	7.20 +	6.66	-	基部欠損
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	9	7.61	6.75	-	
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	10	7.37 +	6.41	-	頂部欠損
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	11	7.21	6.33	7	
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	12	7.02 +	4.84	-	頂部欠損
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	13	6.38	3.87	8	
16	PIT20/E131	覆土	126	続縄文	(S-4)	14	5.04	3.85	-	
27	E123	VIIa	538	続縄文	骨・木炭範囲	-	5.04	4.69	12	
38	E122	IX	914	続縄文	礫・木炭層	1	5.43	3.63	13	
38	E122	IX	914	続縄文	礫・木炭層	2	4.29 +	4.34	-	
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	1	8.84	8.02	-	
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	2	8.65	5.94	-	
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	3	6.50	6.22	-	基部着点欠損
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	4	7.28	4.85	-	
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	5	6.04	6.38	10	
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	6	6.46	4.67	-	
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	7	5.34	5.35	-	
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	8	6.07	5.43	-	
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	9	4.65	4.25	-	
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	10	5.42 +	5.54	-	破片、頂部欠損
39	E122	IX	919	続縄文	木炭・ベンガラ層	11	5.96	5.10	11	破片

注) 計測はデジタルノギスを使用し、欠損は残存値に「+」で示す。

<炭化種実>

・オニグルミ (*Juglans mandshurica* Maxim. var. *sachalinensis* (Miyabe et Kudo) Kitamura)

クルミ科クルミ属 図版1-4~6

核は全て半分未満の破片である。完形ならば、高さ3~4cm、径2.5~3cm程度の広卵形で頂部が尖り、1本の明瞭な縦の縫合線がある。核は硬く緻密で、表面には縦方向の浅い彫紋が走り、ごつごつしている。内部には子葉が入る2つの大きな窪みと隔壁がある。

最大片は、試料番号7で残存幅2.2cmを測り、内部等一部非炭化で灰褐色を呈す。また、縫合線周囲にリス類による食痕と考えられる欠損がみられる。その他、試料番号20(図版1-4)は縫合線に沿わずに割れており、完形の状態で火を受けて炭化した可能性と、人による打撃痕の可能性がある。

・カシワ (*Quercus dentata* Thunb. ex Murray) ブナ科コナラ属 図版1-7、8

子葉は卵状球体、頂部は僅かに尖り、基部は切形。試料番号26は長さ11.54mm、幅9.75mm、厚さ9.93mmを測る。試料番号10は、子葉の合わせ目に沿って割れた半分で、長さ16.31mm、幅12.54mm、半分厚6.88mmを測り、表面に虫類による食痕と考えられる欠損がみられる。

子葉は硬く緻密で、表面には縦方向に走る維管束の圧痕がみられる。合わせ目の表面は平滑で、正中線上はやや窪み、頂部に長径3mmの小さな孔（主根）がある。なお、試料番号10の破片2個は接合し、計半分未満である（図版1-9）。カシワと考えられるが、ミズナラ（*Q. crispula* Blume）の子葉の可能性もあるため、両種をハイフォンで結んでいる。

・コブシ（*Magnolia kobus* DC.） モクレン科モクレン属 図版1-10

種子は完形ならば径1~1.2cm、厚さ3mm程度の頂部がやや尖る腎状広卵体で、腹面正中線上は幅広い縦溝と基部に臍がある。種皮は硬く、表面は粗面。出土種子は基部が残る破片で、残存径5mm程度。

・キハダ（*Phellodendron amurense* Rupr.） ミカン科キハダ属 図版1-11~15

果実は径7~9mmの球体。果皮表面は粗面で一部発泡し、中果皮（果肉）は発泡している。果実内は、5室程度に各1個の種子が入る（図版1-11~14）。なお、試料番号24は果実内を確認していないため、疑問符を付したが、キハダの果実と考えられ、果柄が残る（図版1-16）。種子は長さ2.5mm、幅2mm程度の扁平な半倒卵体。種皮は薄く、表面には浅く微細な縦長の網目模様が配列する（図版1-15）。

・ヤマブドウ（*Vitis coignetiae* Pulliat ex Planch.） ブドウ科ブドウ属 図版1-17

種子は黒色。長さ4.29mm、幅3.03mm、厚さ2.81mm（試料番号27；図版1-17）の広倒卵体で側面観は半広倒卵形。基部は鋭尖形で、細く嘴状に尖る核嘴がある。腹面正中線は（鈍）稜をなし、細い筋が走る。正中線の左右には、長さ1.7mm、幅0.5mm程度の倒針形で深く窪む核窪がある。背面正中線は、頂部から1mm程度に、長さ1.5mm、幅1.0mm程度の卵形の合点があり、細く浅い溝に囲まれて合点中央は窪む。種皮は硬く、表面は粗面、断面は柵状を呈す。なお、合点の窪みが明瞭ではない種子をブドウ属（図版1-18）、合点を欠損する破片をブドウ科（Vitaceae）までの同定にとどめているが、ヤマブドウに由来する可能性が高い。その他、合点表面に別個体の破片が付着する状態も確認される（図版1-18）。

・ササ属（*Sasa*） イネ科 図版1-1~3

果実（穎果）は長さ5~6mm、径3~3.5mmの楕円体。背面正中線上に細く浅い縦溝がある。腹面はやや丸みを帯び、基部正中線上に斜切形で長径0.5mm程度の浅い楕円形の胚がある。果皮は薄く平滑で、表面には微細な縦長の網目模様が配列する。

北海道に分布するササ属は、チマキササ（*S. palmata* (Bean) Nakai）、チシマザサ（*S. kurilensis* (Rupr.) Makino et Shibata）クマイザサ（*S. senanensis* (Fr. et Sav.) Rehd.）の3種とされる（関, 2011）。出土果実は、3種のいずれかに由来すると考えられる。

・ミクリ属（*Sparganium*） ミクリ科 図版1-19

果実は長さ4mm、径2mmの紡錘状楕円体で頂部が伸び、基部を欠損する。果皮は海綿状で表面に数本の縦隆条が配列する。

佐竹ほか編（1982）によれば、本地域には、ミクリ（*S. erectum* L.）、タマミクリ（*S. nium glomeratum* Laest.）、ヒメミクリ（*S. stenophyllum* Maxim.）が分布する。出土果実は、これらのいずれかに由来する可能性がある。なお、チシマミクリ（*S. hyperboreum* Laest.）、ホソバウキミクリ（*S. unguistifolium* Michaux）は、高山に分布するため、遺跡の立地を考慮し、候補から外している。

<炭化鱗茎>

・単子葉類（Monocotyledoneae） 表2、図版2-1~13

鱗茎は長さ3.0~11.3mm、径3.6~12.4mmの狭卵体~球体で頂部が尖り、かぶら状を呈す。基部は切形

で、径2 mm程度の円形を呈す根がついた跡が確認される（図版2-10c）。鱗茎を構成する多数の薄い葉が中軸から層状に巻いて重なる構造が確認される。鱗茎葉の表面には、微細な横長多角形状網目模様が縦列する他、約1 mm間隔の細縦隆条が配列し、上下面観は中軸から隆条が放射状に伸びる。

Werner (2009) によれば、「鱗茎植物は、ほとんど全部といってもよいほど単子葉植物、ことにユリ科に集中しており、ユリ型とネギ型とがある」とされる。今回確認された炭化鱗茎は、ユリ属 (*Lilium*) やウバユリ属 (*Cardiocrinum*) などにみられる、鱗茎を構成する葉は鱗片状に成長し、細い葉柄で茎に接着して屋根瓦のように重なりある「ユリ型」とは区別され、ネギ属 (*Allium*) やヒガンバナ科スイセン属 (*Narcissus*)、ヒガンバナ属 (*Lycoris*) などにみられる、葉柄が鞘状に閉じた筒になり、横断面では重なり合った葉が同心円を描く「ネギ型」の単生する鱗茎と考えられる。

佐竹ほか編 (1982) によれば、本地域には、ネギ属ギョウジャニンニク (*A. victorialis* L. subsp. *platyphyllum* Hulten)、ヒメニラ (*A. monanthum* Maxim.)、ミヤマラッキョウ (*A. splendens* Willden.)、ノビル (*A. grayi* Regel)、アサツキ (*A. schoenoprasum* L. var. *foliosum* Regel)、ヒガンバナ属ヒガンバナ (*L. radiata* Herb.) が分布し、ノビルとヒガンバナは古い時代に中国より渡来した説がある。これらの鱗茎の形状は、ギョウジャニンニクとミヤマラッキョウは披針形、アサツキは狭卵形で、ヒメニラは卵形、ヒガンバナとキツネノカミソリは広卵形、ノビルは球形と記載されている。

出土炭化鱗茎は、いずれの形状にも似ており、実態顕微鏡観察による同定は困難である。近年、鱗茎葉の細胞形態観察により、ネギ属ノビルーツルボ属型、ヒガンバナ属型、ネギ属アサツキ型等にタイプ分けが可能であることが指摘されている (佐々木・米田, 2014)。

4 考察

炭化種実同定の結果、木本8分類群 (オニグルミ、カシワ、カシワ-ミズナラ、コブシ、キハダ、ヤマブドウ、ブドウ属、ブドウ科)、草本2分類群 (ササ属、ミクリ属) から成る炭化種実群が得られ、ヤマブドウを含むブドウ属 (科) とササ属を主体とする組成を示した。また、炭化種実以外に、ネギ型と考えられる単子葉類の炭化鱗茎が確認された。

木本は全て落葉広葉樹で、高木になるオニグルミやキハダは、川沿いなどの湿り気の多いところに生育する。カシワは沿海地や丘陵の日当たりの良いやせ地や礫地などに、ミズナラやコブシは丘陵や山地に生育する。籐本のヤマブドウを含むブドウ属 (科) は、河畔や林縁などの明るく開けた場所に生育する。

草本のうち、ササ属は広葉樹林の林床や沢地などに広く群生し、チマキザサ、チシマザサ、クマイザサのいずれかに由来する可能性がある。ミクリ属は湖沼や河川、水路などに生育する多年生抽水植物で、ミクリ、タマミクリ、ヒメミクリのいずれかに由来する可能性がある。これらの分類群は、本遺跡周辺および斜里川流域の落葉樹林や水湿地に生育していたと考えられる。

植物利用について、続縄文時代とされるPIT 8/F124覆土、D135VII b層、アイヌ文化期とされるSB-3より出土したオニグルミは子葉が食用可能で、続縄文時代とされるF120VII a層、オホーツク文化期とされる9号址/75e炉より出土したカシワは、灰汁抜きを施すことで子葉が食用可能となる。これらの炭化堅果類は、遺跡周辺の落葉樹林から採取された植物質食料と考えられ、被熱し炭化する。オニグルミは、食用にならない核の破片の状態であることから、可食部の子葉を取り出した後に廃棄された食料残滓と推測される。一方、カシワは可食部である子葉が完形の状態で出土したことから、保存されたものが食用前の段階で火を受けたと推測される。

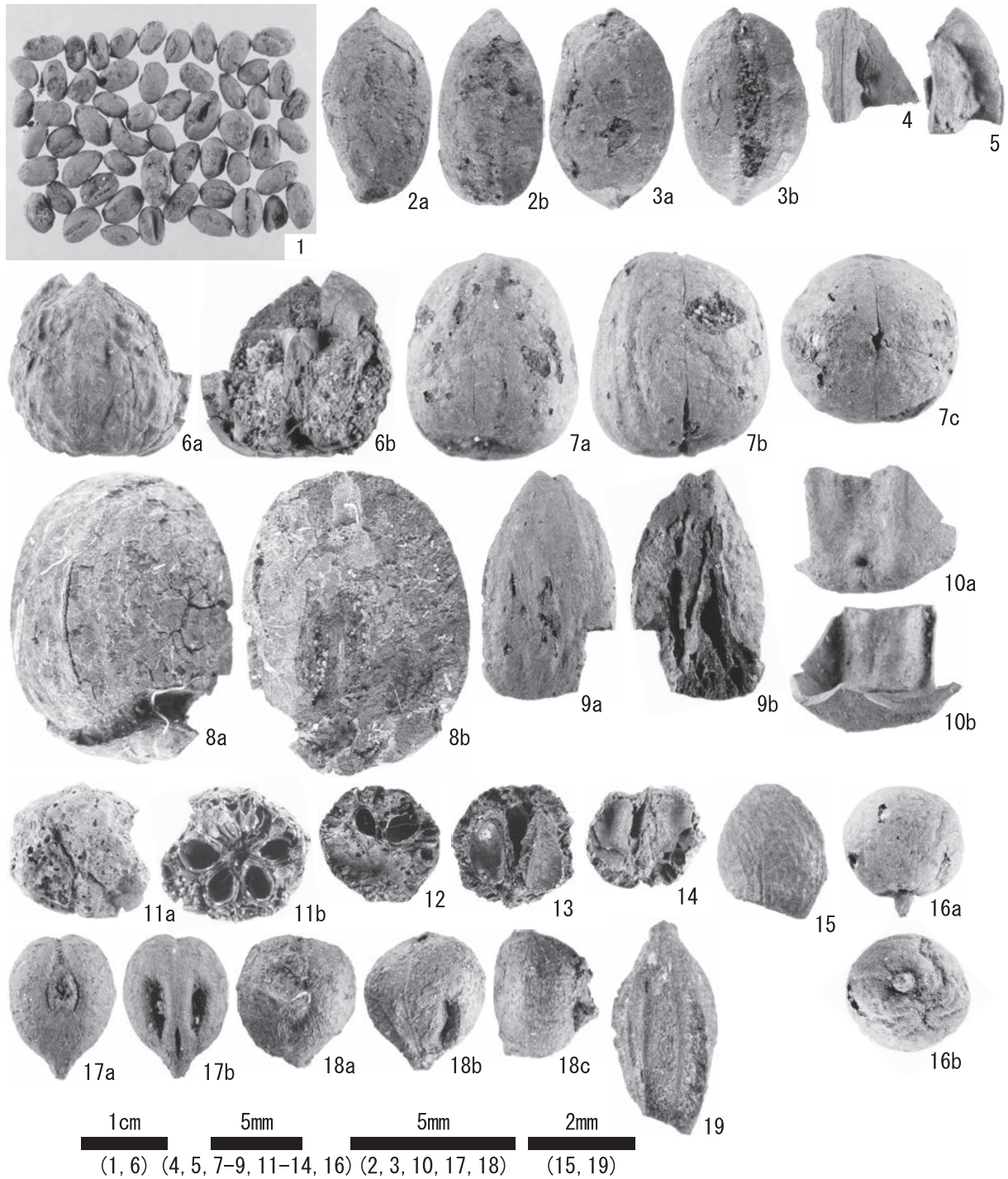
本分析調査において、最も多く確認されたヤマブドウを含むブドウ属（科）は、続縄文時代とされる各遺構・層位、オホーツク文化期とされるH-19HF-1焼土、アイヌ文化期とされるSB-5魚骨集中③II層より出土し、果実が食料として利用可能である。次いで多いササ属は、続縄文時代とされるF120VIIb斜面、F120VIIa斜面、F94VIII下部より出土し、古くより果実が食用とされる。続縄文時代とされるPIT12/F125炉面、D136VII層、E120VIIa層などから果実と種子が出土したキハダは、果実が食用や薬用、儀式等に利用されたアイヌ文化が伝承されている。

この他、続縄文時代とされるPIT15/E129覆土、PIT16/E129覆土、PIT20/E131覆土、E123VIIa層、E122IX層より出土したネギ型と考えられる炭化鱗莖は、デンプン質に富むため、古くから食用に利用されてきた有用植物である（山本, 2002など）。

引用文献

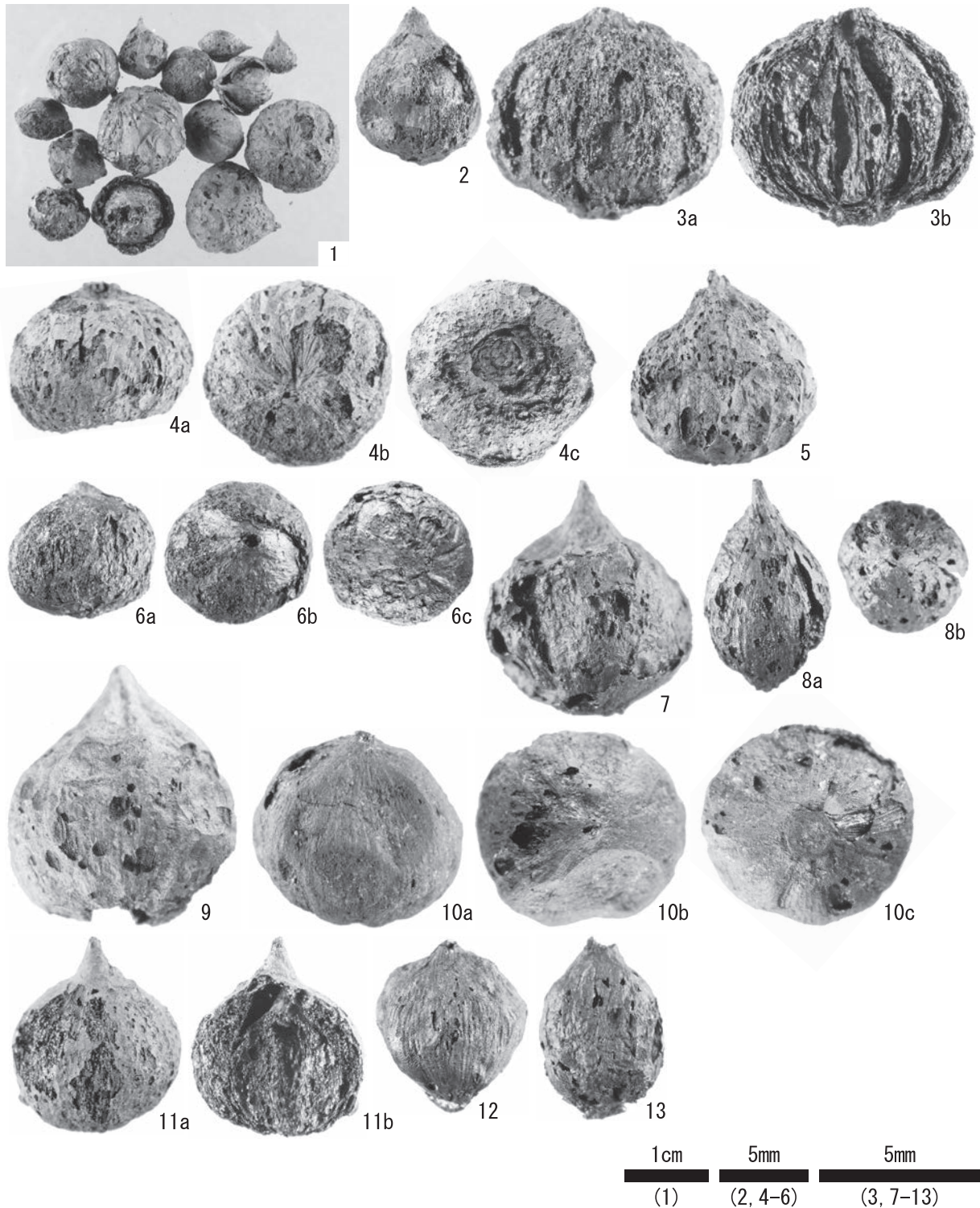
- 堀田 満（代表）編, 1989, 世界有用植物事典, 平凡社, 1499p.
- 石川茂雄, 1994, 原色日本植物種子写真図鑑. 石川茂雄図鑑刊行委員会, 328p.
- 中山至大・井之口希秀・南谷忠志, 2010, 日本植物種子図鑑（2010年改訂版）. 東北大学出版会, 678p.
- Rauh, Werner, 2009, 植物形態の事典（新装版）, 中村信一・戸部 博（訳）, 朝倉書店, 340p. [Rauh, Werner（1994）Morphologie der Nutzpflanzen].
- 佐々木由香・米田恭子・小林和貴, 2014, 遺跡出土炭化鱗莖同定のための識別方法. 第29回日本植生史学会大会講演要旨集, 43.
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫編, 1989a, 日本の野生植物 木本I. 平凡社, 321p.
- 佐竹義輔・原 寛・亘野俊次・富成忠夫編, 1989b, 日本の野生植物 木本II, 平凡社, 305p.
- 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・亘理俊次・富成忠夫, 1982, 日本の野生植物 草本I 単子葉類, 平凡社, 305p.
- 関 一人, 2011, 北海道におけるササ資源とその化学的利用. 林産試だより2011年10月号, 1-3. (<http://www.hro.or.jp/list/forest/research/fpri/dayori/1110/1110-1.pdf>)
- 鈴木庸夫・高橋 冬・安延尚文, 2012, ネイチャーウォッチングガイドブック 草木の種子と果実-形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種-. 誠文堂新光社, 272p.
- 山本直人, 2002, 縄文時代の植物採集活動-野生根莖類食料化の民俗考古学的研究-. 溪水社, 250p.

図版1 炭化種実



- (1, 6) (4, 5, 7-9, 11-14, 16) (2, 3, 10, 17, 18) (15, 19)
- | | |
|---------------------------------|---------------------------------|
| 1.ササ属 果実(試料番号32;F120 Ⅶb斜面) | 2.ササ属 果実(試料番号32;F120 Ⅶb斜面) |
| 3.ササ属 果実(試料番号32;F120 Ⅶb斜面) | 4.オニグルミ 核(試料番号20;D135 Ⅶb) |
| 5.オニグルミ 核(試料番号20;D135 Ⅶb) | 6.オニグルミ 核(試料番号7;SB-3 下位灰) |
| 7.カシワ 子葉(試料番号26;F120 Ⅶa) | 8.カシワ 子葉(試料番号10;9号址/75e 炉) |
| 9.カシワ-ミズナラ 子葉(試料番号32;F120 Ⅶb斜面) | 10.コブシ 種子(試料番号20;D135 Ⅶb) |
| 11.キハダ 果実(試料番号13;PIT12/F125 炉面) | 12.キハダ 果実(試料番号19;D136 Ⅶ) |
| 13.キハダ 果実(試料番号19;D136 Ⅶ) | 14.キハダ 果実(試料番号13;PIT12/F125 炉面) |
| 15.キハダ 種子(試料番号13;PIT12/F125 炉面) | 16.キハダ? 果実(試料番号24;焼土1/F120 焼土) |
| 17.ヤマブドウ 種子(試料番号27;E123 Ⅶa) | 18.ブドウ属 種子(試料番号36;F94 Ⅶ下部) |
| 19.ミクリ属 果実(試料番号36;F94 Ⅶ下部) | |

図版 2 炭化鱗茎



- 1. 単子葉類 鱗茎 (試料番号16;PIT20/E131 覆土)
- 3. 単子葉類 鱗茎 (試料番号15;PIT16/E129 覆土)
- 4. 単子葉類 鱗茎 (試料番号16;PIT20/E131 覆土)
- 5. 単子葉類 鱗茎 (試料番号16;PIT20/E131 覆土)
- 7. 単子葉類 鱗茎 (試料番号16;PIT20/E131 覆土)
- 9. 単子葉類 鱗茎 (試料番号16;PIT20/E131 覆土)
- 11. 単子葉類 鱗茎 (試料番号39;E122 IX)
- 13. 単子葉類 鱗茎 (試料番号38;E122 IX)

- 2. 単子葉類 鱗茎 (試料番号14;PIT15/E129 覆土)
- 6. 単子葉類 鱗茎 (試料番号16;PIT20/E131 覆土)
- 8. 単子葉類 鱗茎 (試料番号16;PIT20/E131 覆土)
- 10. 単子葉類 鱗茎 (試料番号39;E122 IX)
- 12. 単子葉類 鱗茎 (試料番号27;E123 VIIa)

8 放射性炭素年代測定（1）2008～2012年

株式会社 パレオ・ラボ

1 はじめに

北海道斜里郡斜里町に位置するカモイベツ遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。全てAAA処理済みである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3 結果

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値、慣用に従って年代値、誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代範囲を、図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は年代値、誤差を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示すものである。

暦年較正

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、及び半減期の違い（¹⁴Cの半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正にはOxCal4.0（較正曲線データ：〔2008年〕INTCAL04、〔2009年～2012年〕INTCAL09）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。〔2008年〕それぞれの暦年代範囲のうち、その確率が最も高い年代範囲については、表中に下線で示してある。

4 考察

〔2008年〕

試料について、同位体分別効果の補正及び暦年較正を行った。得られた暦年代範囲のうち、その確率の最も高い年代範囲に着目すると、それぞれより確かな年代値の範囲が示された。

〔2009年〕

以下、結果を整理する。土器編年と¹⁴C年代および暦年較正結果との対応関係については、小林謙一（2008）と小林達雄編（2008）を参照した。

カモイベツ遺跡出土の炭化材（PLD-14950）は、¹⁴C年代が 3300 ± 25 、 1σ 暦年代範囲が1611-1531calBC（68.2%）、 2σ 暦年代範囲が1635-1504calBC（95.4%）を示した。これは縄文時代後期中

葉に相当する。同じく炭化材 (PLD-14951) は、 ^{14}C 年代が 4095 ± 30 、 1σ 暦年代範囲が2837-2815calBC (13.2%)、2673-2579calBC (55.0%)、 2σ 暦年代範囲が2861-2808calBC (20.9%)、2756-2719calBC (8.4%)、2705-2570calBC (64.3%)、2515-2501calBC (1.9%) を示した。これは縄文時代中期末～後期初頭に相当する。

[2011年]

S F-7 (PIT12) 火床面から出土した炭化材は、 ^{14}C 年代が 2070 ± 20 ^{14}C BP、 1σ 暦年代範囲 (確率68.2%) が144-141 cal BC (1.7%) および111-46 cal BC (66.5%)、 2σ 暦年代範囲 (確率95.4%) が167-41 cal BC (95.4%) の範囲を示した。この範囲は、熊木 (2005) を参照すると、続縄文前半期末に相当する。

[2012年]

以下、 2σ 暦年代範囲 (確率95.4%) に着目し、結果を整理する。

VII b 層から出土した炭化材 (PLD-23121) の 2σ 暦年代範囲は、131-254 cal AD (95.4%) で、2世紀前半～3世紀中頃であった。

VIII層 (IX b 層、種子集中) から出土した炭化種実 (PLD-23122) は、42 cal BC-57 cal AD (95.4%) で、紀元前1世紀中頃～後1世紀中頃であった。

VII層から出土した炭化材 (PLD-23123) は、428-546 cal AD (95.4%) で、5世紀前半～6世紀中頃であった。

F-31 (焼土1) から出土した炭化材 (PLD-23124) は、130-245 cal AD (95.4%) で、2世紀前半～3世紀中頃であった。

VII層 (斜面骨・木炭範囲) から出土した炭化材 (PLD-23125) は、262-280 cal AD (6.2%)、326-421 cal AD (89.2%) で、3世紀後半～5世紀前半であった。

(AMS年代測定グループ：伊藤茂・丹生越子・尾寄大真・廣田正史・瀬谷薫・小林紘一・Zaur Lomtadidze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎)

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (1995) Radiocarbon Calibration and Analysis of Stratigraphy: The OxCal Program. Radiocarbon, 37, 425-430.
- Bronk Ramsey, C. (2001) Development of the Radiocarbon Program OxCal. Radiocarbon, 43, 355-363.
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.
- 白杵勲・出穂雅実編 (2005) 科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代 平成16年度研究成果報告書, 50p, 札幌学院大学人文学部.
- 熊木俊朗 (2005) 道東北部の炭素14年代集成 (続縄文・オホーツク・擦文期). 白杵勲・出穂雅実編「科学研究費補助金基盤研究 (B) (2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代 平成16年度研究成果報告書」: 12-16, 札幌学院大学人文学部.
- 小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 縄文時代の考古学 2 - 歴史のものさし, 257-269, 同成社.
- 小林達雄編 (2008) 総覧縄文土器. 1322p, アム・プロモーション.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代. 3-20.
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmele, S., Southon, J.R., Stuiver, M.,

Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. *Radiocarbon*, 46, 1029-1058.

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111-1150.

表 1 測定試料及び処理

採取年	測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
2008年	PLD-12368	遺構：H-14(9号址) 試料No.：KM0801	試料の種類：炭化種実(炉種子) ガス化重量：4.10mg 炭素含有量：2.26mg	AAA処理済試料 サルフィックス
	PLD-12369	遺構：H-14(9号址)内集石 試料No.：KM0802	試料の種類：炭化材(木炭) 試料の性状：不明 ガス化重量：7.82mg 炭素含有量：4.37mg	AAA処理済試料 サルフィックス
	PLD-12370	遺構：H-12(8号址) 試料No.：KM0803	試料の種類：炭化材(炉) 試料の性状：不明 ガス化重量：7.02mg 炭素含有量：3.83mg	AAA処理済試料 サルフィックス
	PLD-12371	遺構：H-6(19号址) 試料No.：KM0804	試料の種類：炭化材(炉C) 試料の性状：不明 ガス化重量：9.00mg 炭素含有量：4.80mg	AAA処理済試料 サルフィックス
	PLD-12372	遺構：H-5(20号址) 試料No.：KM0805	試料の種類：炭化材(炉A) 試料の性状：不明 ガス化重量：9.90mg 炭素含有量：5.32mg	AAA処理済試料 サルフィックス
	PLD-12373	遺構：H-5(20号址) 試料No.：KM0806	試料の種類：炭化材(炉B) 試料の性状：不明 ガス化重量：7.05mg 炭素含有量：3.74mg	AAA処理済試料 サルフィックス
2009年	PLD-14950	遺跡名：カモイベツ遺跡 試料No. KMB0901 調査区：Y-143 No.5 層位：VIIe層	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	AAA処理済試料
	PLD-14951	遺跡名：カモイベツ遺跡 試料No. KMB0902 遺構：トレンチ内焼土1 その他：117	試料の種類：炭化材 試料の性状：不明 状態：dry	AAA処理済試料
2011年	PLD-20383	試料No. SRKM2 位置：F-125 遺構：SF-7(PIT12) 層位：火床面	試料の種類：炭化材 状態：dry	AAA処理済試料
2012年	PLD-23121	グリッド：F-120 層位：VIIb層 試料No. 1201 遺物No. 190	種類：炭化材 状態：wet	AAA処理済試料
	PLD-23122	グリッド：E-122 層位：VIII (IXb) 層 (種子集中) 試料No. 1203 遺物No. 409	種類：炭化種実 状態：wet	AAA処理済試料
	PLD-23123	グリッド：E-88 層位：VII層 試料No. 1205 遺物No. 5	種類：炭化材 状態：wet	AAA処理済試料
	PLD-23124	グリッド：F-109 遺構：F-31(焼土1) 試料No. 1206 遺物No. 46	種類：炭化材 状態：wet	AAA処理済試料
	PLD-23125	グリッド：F-120 層位：VII層 (斜面骨木炭範囲) 試料No. 1207 遺物No. 914	種類：炭化材 状態：wet	AAA処理済試料

表2 放射性炭素年代測定及び暦年較正の結果

採取年	測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
					1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
2008年	PLD-12368 試料No. : KM0801	-31.37 \pm 0.17	1448 \pm 19	1450 \pm 20	601AD (68.2%) 640AD	576AD (95.4%) 647AD
	PLD-12369 試料No. : KM0802	-26.86 \pm 0.18	1451 \pm 19	1450 \pm 20	599AD (68.2%) 639AD	575AD (95.4%) 646AD
	PLD-12370 試料No. : KM0803	-28.25 \pm 0.20	1314 \pm 19	1315 \pm 20	662AD (54.8%) 690AD 751AD (13.4%) 762AD	657AD (73.8%) 715AD 744AD (21.6%) 769AD
	PLD-12371 試料No. : KM0804	-28.44 \pm 0.17	1264 \pm 18	1265 \pm 20	692AD (59.5%) 750AD 763AD (8.7%) 772AD	681AD (95.4%) 778AD
	PLD-12372 試料No. : KM0805	-27.20 \pm 0.18	1471 \pm 18	1470 \pm 20	570AD (68.2%) 615AD	558AD (95.4%) 639AD
	PLD-12373 試料No. : KM0806	-28.07 \pm 0.17	1267 \pm 18	1265 \pm 20	690AD (42.9%) 726AD 738AD (15.3%) 751AD 762AD (10.0%) 771AD	681AD (95.4%) 776AD
2009年	PLD-14950	-29.52 \pm 0.27	3299 \pm 25	3300 \pm 25	1611BC (68.2%) 1531BC	1635BC (95.4%) 1504BC
	PLD-14951	-30.68 \pm 0.18	4096 \pm 29	4095 \pm 30	2837BC (13.2%) 2815BC 2673BC (55.0%) 2579BC	2861BC (20.9%) 2808BC 2756BC (8.4%) 2719BC 2705BC (64.3%) 2570BC 2515BC (1.9%) 2501BC
2011年	PLD-20383 (試料No. SRKM2)	-28.12 \pm 0.11	2070 \pm 20	2070 \pm 20	144BC (1.7%) 141BC 111BC (66.5%) 46BC	167BC (95.4%) 41BC
2012年	PLD-23121 試料No. 1201 遺物No. 190	-24.47 \pm 0.24	1810 \pm 21	1810 \pm 20	140AD (11.5%) 154AD 168AD (23.4%) 195AD 209AD (33.3%) 241AD	131AD (95.4%) 254AD
	PLD-23122 試料No. 1203 遺物No. 409	-26.88 \pm 0.20	1992 \pm 21	1990 \pm 20	37BC (7.9%) 30BC 21BC (11.2%) 11BC 2BC (38.5%) 28AD 40AD (10.7%) 49AD	42BC (95.4%) 57AD
	PLD-23123 試料No. 1205 遺物No. 5	-26.43 \pm 0.22	1565 \pm 21	1565 \pm 20	436AD (51.0%) 491AD 509AD (8.1%) 518AD 529AD (9.1%) 539AD	428AD (95.4%) 546AD
	PLD-23124 試料No. 1206 遺物No. 46	-27.04 \pm 0.24	1818 \pm 21	1820 \pm 20	140AD (14.6%) 155AD 169AD (25.9%) 195AD 209AD (27.6%) 235AD	130AD (95.4%) 245AD
	PLD-23125 試料No. 1207 遺物No. 914	-25.79 \pm 0.27	1678 \pm 21	1680 \pm 20	345AD (68.2%) 406AD	262AD (6.2%) 280AD 326AD (89.2%) 421AD

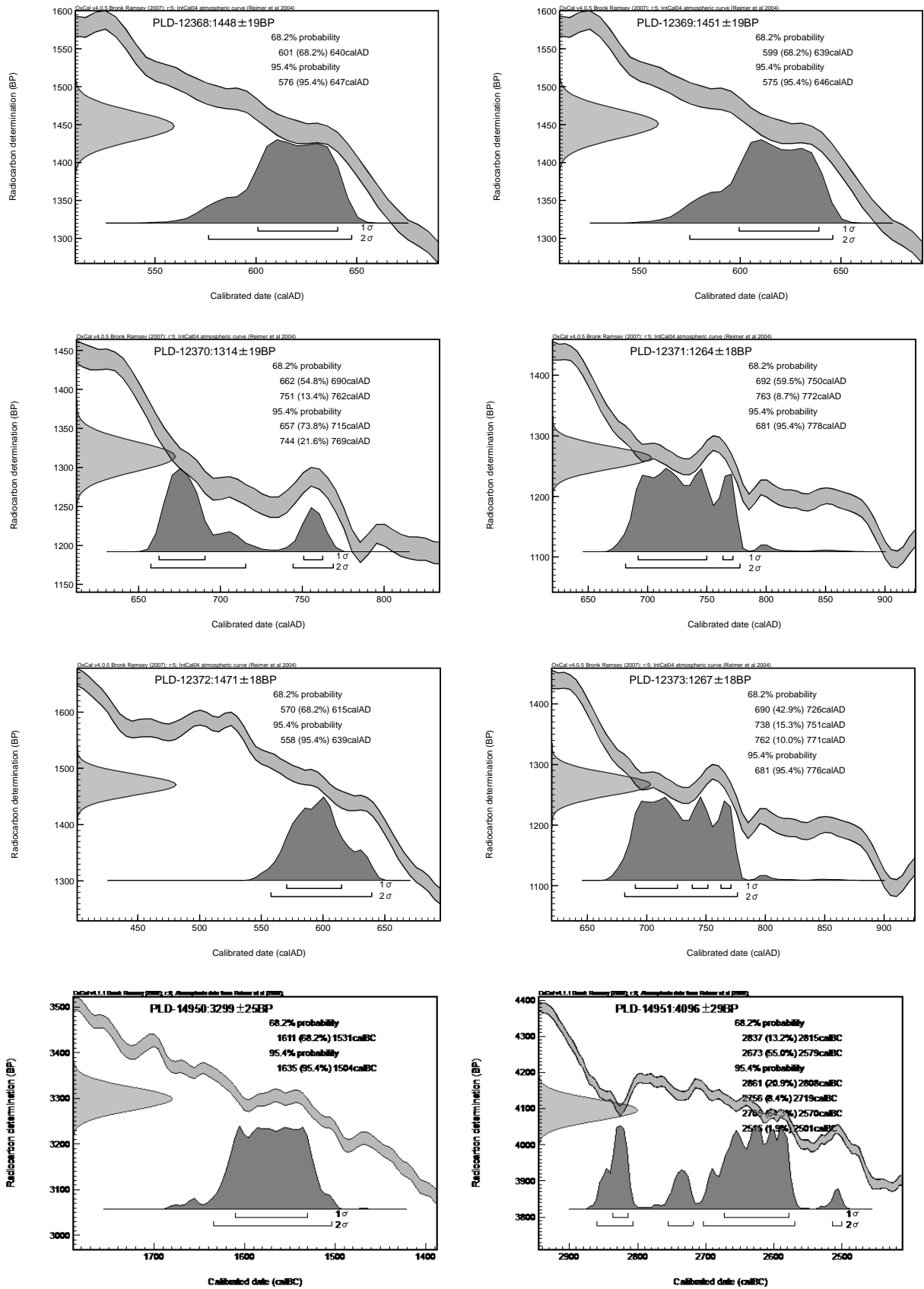


図 1 - 1 暦年較正結果

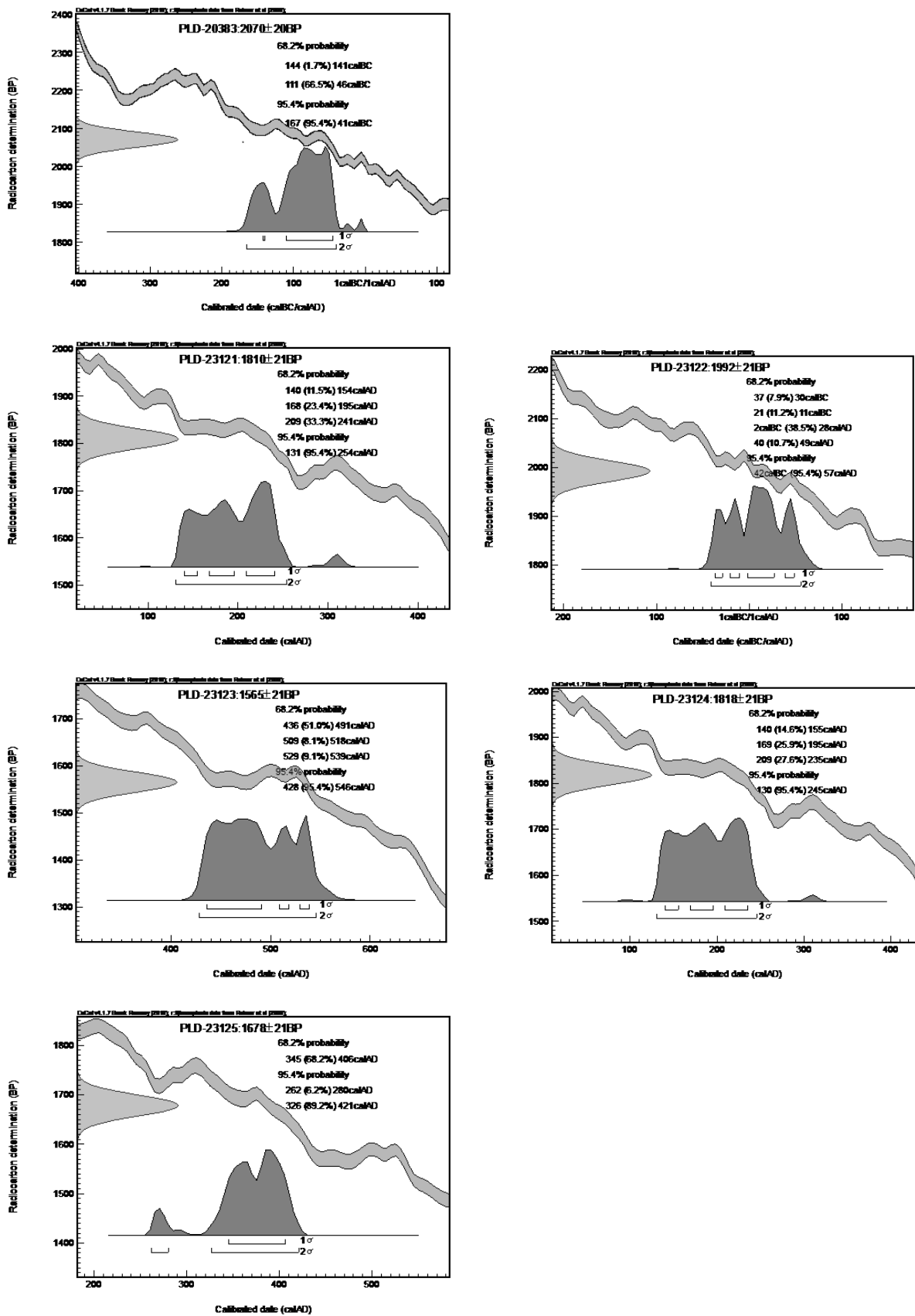


圖 1-2 曆年較正結果

9 カモイベツ遺跡における放射性炭素年代（2）2018年

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

カモイベツ遺跡は、北海道斜里郡斜里町峰浜311、312（北緯43°55′41.5″、東経144°47′13.6″）に所在する。測定対象試料は、炉等から出土した炭化木片15点である（表1）。なお、これらの試料のうち、KMO-1、4、5、7、13の5点について同一試料を対象に樹種同定も実施されている（別稿樹種同定報告参照）。

遺跡の基本層序はⅠ層～Ⅷ層である。今回測定された試料は、Ⅱ層からKMO-12、13の2点、Ⅶa層からKMO-1～4、7、10、11、14、15の9点、Ⅶb層からKMO-5、6、8、9の4点が出土している。Ⅱ層は上部に1793年噴火の樽前aテフラ、1694年噴火の駒ヶ岳cテフラを含み、火山灰の上位に遺物包含層がある。層の年代は、Ⅱ層が近世アイヌ文化期、Ⅶa層がオホーツク文化刻文期、Ⅶb層が縄文時代後半期とされる。

2 測定の意義

遺構または遺物包含層の年代値を推定するため。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1 mol/ℓ（1 M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001Mから1 Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1 Mに達した時には「AAA」、1 M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1 mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹³C濃度（¹³C/¹²C）、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（0 yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必

要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。 ^{14}C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

- (3) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMCが小さい (^{14}C が少ない) ほど古い年代を示し、pMCが100以上 (^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上) の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。
- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度をもとに描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース (Reimer et al. 2013) を用い、OxCalv4.3較正プログラム (Bronk Ramsey 2009) を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2、図1に示した。なお、暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に基づいて較正 (calibrate) された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表され、ここでは前者を表*・図* (*受領したが紙面の関係で割愛：編者)、後者を表2、図1に示した。

6 測定結果

測定結果を表1・2、図1に示す。較正年代は、cal BPとcal BC/ADの2通りで算出したが、以下の説明ではcal BC/ADの値で記載し (表2、図1)、cal BPの値は図表のみ提示した (受領したが紙面の関係で割愛：編者)。また、複数の試料の年代値を比較できるようにマルチプロット図を図2に示している。時期によって2つに分けて図示し、いずれもcal BP (受領したが紙面の関係で割愛：編者) とcal BC/AD (図2) の2通りで表示している。以下、試料が属する層 (試料が出土した層、および試料が出土した遺構が検出された層) ごとに分けて記述する。

II層に属する試料2点 (KMO-12、13) の ^{14}C 年代は、試料KMO-12が $190 \pm 20\text{yrBP}$ 、試料KMO-13が $170 \pm 20\text{yrBP}$ である。暦年較正年代 (1σ) は、試料KMO-12が1666~1803cal ADの間に4つの範囲と1938cal AD以降、試料KMO-13が1670~1944cal ADの間に4つの範囲でそれぞれ示され、推定年代と一致する。なお、2点の試料の較正年代については、記載された値よりも新しい可能性がある点に注意を要する (表2下の警告参照)。

VII a層に属する試料9点 (KMO-1~4、7、10、11、14、15) の ^{14}C 年代は $1650 \pm 20\text{yrBP}$ (KMO-11) から $1230 \pm 20\text{yrBP}$ (KMO-10) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い試料KMO-11が383~424cal ADの範囲、最も新しい試料KMO-10が714~865cal ADの間に4つの範囲でそれぞれ示される。いずれも推定年代におおむね一致、もしくは近い年代値となっている。

VII b層に属する試料4点 (KMO-5、6、8、9) の ^{14}C 年代は、 $1950 \pm 20\text{yrBP}$ (KMO-9) から $1790 \pm 20\text{yrBP}$ (KMO-5) の間にある。暦年較正年代 (1σ) は、最も古い試料KMO-9が

25～78cal ADの範囲、最も新しい試料KMO-5が214～324cal ADの間に2つの範囲でそれぞれ示される。いずれも推定年代におおむね一致、もしくは近い年代値となっている。

今回測定された試料は、炭化木片であることから、以下に記述する古木効果を考慮する必要がある。樹木の年輪の放射性炭素年代は、その年輪が成長した年の年代を示す。したがって樹皮直下の最外年輪の年代が、樹木が伐採され死んだ年代を示し、内側の年輪は、最外年輪からの年輪数の分、古い年代値を示すことになる（古木効果）。今回測定された試料はいずれも炭化木片の小片で、樹皮が確認されていないことから、試料となった木が死んだ年代は測定された年代値よりも新しい可能性がある。

また、試料KMO-5、6、8、9が含まれる1～3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある（尾寄2009、坂本2010など）。その日本産樹木のデータを用いてこれらの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新しくなる可能性がある。

試料の炭素含有率はすべて54%を超える適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360

尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素14年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編 弥生時代の考古学1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90

Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

臼杵勲編 2007 科学研究費補助金基盤研究(B)(2) 北海道における古代から近世の遺跡の暦年代 研究成果報告書, 札幌学院大学人文学部

表1 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-182324	KMO-1	H-19HF-1 焼土	炭化木片	AAA	-23.55 ± 0.25	1,340 ± 20	84.67 ± 0.26
IAAA-182325	KMO-2	H-19HF-2 焼土	炭化木片	AaA	-21.95 ± 0.23	1,350 ± 20	84.56 ± 0.26
IAAA-182326	KMO-3	H-21 床面 遺物番号: 14	炭化木片	AAA	-19.73 ± 0.24	1,510 ± 20	82.91 ± 0.25
IAAA-182327	KMO-4	H-21HF-1 焼土上面 遺物番号: 16	炭化木片	AaA	-22.97 ± 0.24	1,510 ± 20	82.84 ± 0.25
IAAA-182328	KMO-5	H-22HF-1 焼土	炭化木片	AAA	-23.35 ± 0.22	1,790 ± 20	80.07 ± 0.24
IAAA-182329	KMO-6	P-29 覆土	炭化木片	AAA	-22.00 ± 0.25	1,910 ± 20	78.89 ± 0.24
IAAA-182330	KMO-7	PS-31 覆土下層	炭化木片	AAA	-22.58 ± 0.24	1,540 ± 20	82.60 ± 0.24
IAAA-182331	KMO-8	F-61 焼土上面 遺物番号: 1	炭化木片	AaA	-24.52 ± 0.24	1,850 ± 20	79.43 ± 0.24
IAAA-182332	KMO-9	F-64焼土	炭化木片	AAA	-23.75 ± 0.27	1,950 ± 20	78.47 ± 0.24
IAAA-182333	KMO-10	J70区 VIIa1層	炭化木片	AAA	-23.88 ± 0.25	1,230 ± 20	85.79 ± 0.26
IAAA-182334	KMO-11	K66区 VIIa2層	炭化木片	AAA	-23.64 ± 0.26	1,650 ± 20	81.47 ± 0.25
IAAA-182335	KMO-12	SB-4 灰層	炭化木片	AAA	-24.23 ± 0.25	190 ± 20	97.68 ± 0.28
IAAA-182336	KMO-13	SB-5 魚骨集中②	炭化木片	AAA	-23.37 ± 0.24	170 ± 20	97.91 ± 0.27
IAAA-182337	KMO-14	H-8HF	炭化木片	AAA	-25.53 ± 0.23	1,450 ± 20	83.44 ± 0.25
IAAA-182338	KMO-15	H-12HF	炭化木片	AAA	-25.87 ± 0.24	1,460 ± 20	83.43 ± 0.24

[IAA登録番号: #9435]

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BC/AD) (1)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-182324	1,310 ± 20	84.92 ± 0.26	1,337 ± 24	655calAD - 683calAD (68.2%)	648calAD - 710calAD (87.5%) 746calAD - 764calAD (7.9%)
IAAA-182325	1,300 ± 20	85.09 ± 0.26	1,346 ± 24	653calAD - 676calAD (68.2%)	644calAD - 694calAD (91.4%) 748calAD - 763calAD (4.0%)
IAAA-182326	1,420 ± 20	83.81 ± 0.25	1,505 ± 24	545calAD - 591calAD (68.2%)	434calAD - 456calAD (3.6%) 469calAD - 488calAD (4.0%) 533calAD - 618calAD (87.8%)
IAAA-182327	1,480 ± 20	83.19 ± 0.25	1,511 ± 24	540calAD - 595calAD (68.2%)	432calAD - 490calAD (14.1%) 532calAD - 612calAD (81.3%)
IAAA-182328	1,760 ± 20	80.34 ± 0.24	1,785 ± 24	214calAD - 259calAD (39.2%) 281calAD - 324calAD (29.0%)	138calAD - 264calAD (62.7%) 275calAD - 330calAD (32.7%)
IAAA-182329	1,860 ± 20	79.37 ± 0.24	1,905 ± 24	75calAD - 125calAD (68.2%)	27calAD - 40calAD (1.8%) 48calAD - 140calAD (92.4%) 160calAD - 165calAD (0.4%) 197calAD - 207calAD (0.8%)

表2 放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年較正用 ^{14}C 年代、較正年代cal BC/AD) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-182330	1,500 ± 20	83.01 ± 0.24	1,535 ± 23	434calAD - 455calAD (16.4%) 470calAD - 488calAD (16.0%) 534calAD - 566calAD (35.8%)	428calAD - 498calAD (45.4%) 505calAD - 590calAD (50.0%)
IAAA-182331	1,840 ± 20	79.51 ± 0.24	1,849 ± 24	129calAD - 214calAD (68.2%)	86calAD - 110calAD (7.2%) 117calAD - 235calAD (88.2%)
IAAA-182332	1,930 ± 20	78.67 ± 0.23	1,947 ± 24	25calAD - 78calAD (68.2%)	1calAD - 125calAD (95.4%)
IAAA-182333	1,210 ± 20	85.98 ± 0.25	1,231 ± 24	714calAD - 744calAD (24.0%) 765calAD - 779calAD (10.7%) 791calAD - 828calAD (19.7%) 839calAD - 865calAD (13.9%)	689calAD - 750calAD (34.9%) 761calAD - 881calAD (60.5%)
IAAA-182334	1,620 ± 20	81.69 ± 0.25	1,646 ± 24	383calAD - 424calAD (68.2%)	338calAD - 430calAD (90.2%) 493calAD - 511calAD (3.4%) 518calAD - 529calAD (1.7%)
IAAA-182335	180 ± 20	97.84 ± 0.27	188 ± 22	1666calAD - 1681calAD (14.9%)* 1739calAD - 1750calAD (8.1%)* 1763calAD - 1785calAD (20.9%)* 1794calAD - 1803calAD (6.6%)* 1938calAD - ... (17.8%)*	1660calAD - 1685calAD (19.1%)* 1732calAD - 1809calAD (54.1%)* 1927calAD - ... (22.2%)*
IAAA-182336	140 ± 20	98.24 ± 0.27	169 ± 22	1670calAD - 1682calAD (11.5%)* 1736calAD - 1780calAD (41.4%)* 1799calAD - 1805calAD (5.8%)* 1933calAD - 1944calAD (9.5%)*	1665calAD - 1694calAD (17.5%)* 1726calAD - 1814calAD (57.2%)* 1918calAD - ... (20.7%)*
IAAA-182337	1,460 ± 20	83.35 ± 0.24	1,454 ± 23	593calAD - 640calAD (68.2%)	568calAD - 647calAD (95.4%)
IAAA-182338	1,470 ± 20	83.27 ± 0.24	1,455 ± 23	591calAD - 639calAD (68.2%)	567calAD - 647calAD (95.4%)

[参考値]

* Warning! Date may extend out of range

Warning! Date probably out of range

(この警告は較正プログラムOxCalが発するもので、試料の ^{14}C 年代に対応する較正年代が、当該暦年較正曲線で較正可能な範囲を超える新しい年代となる可能性があることを表す。)

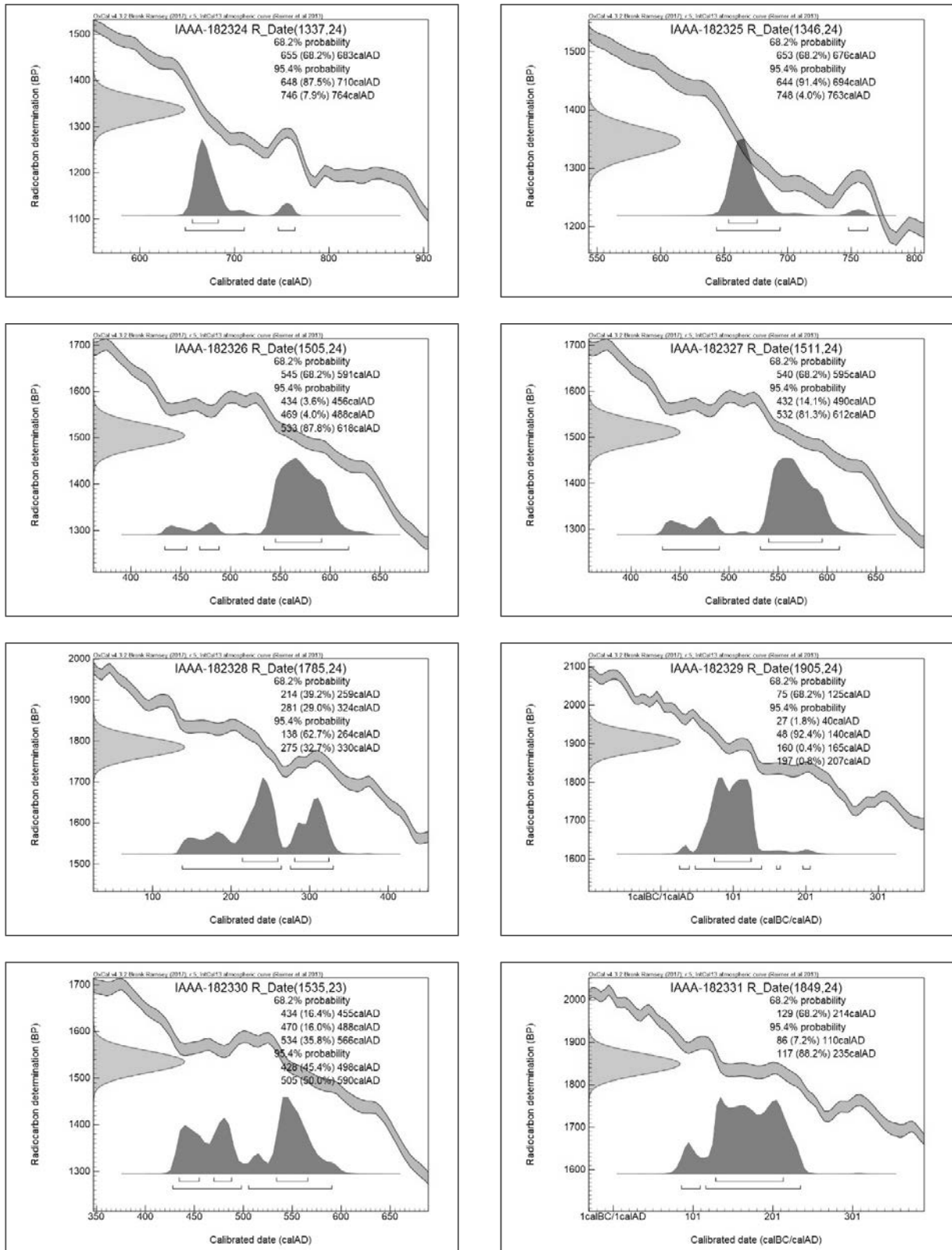


圖 1 - 1 曆年較正結果

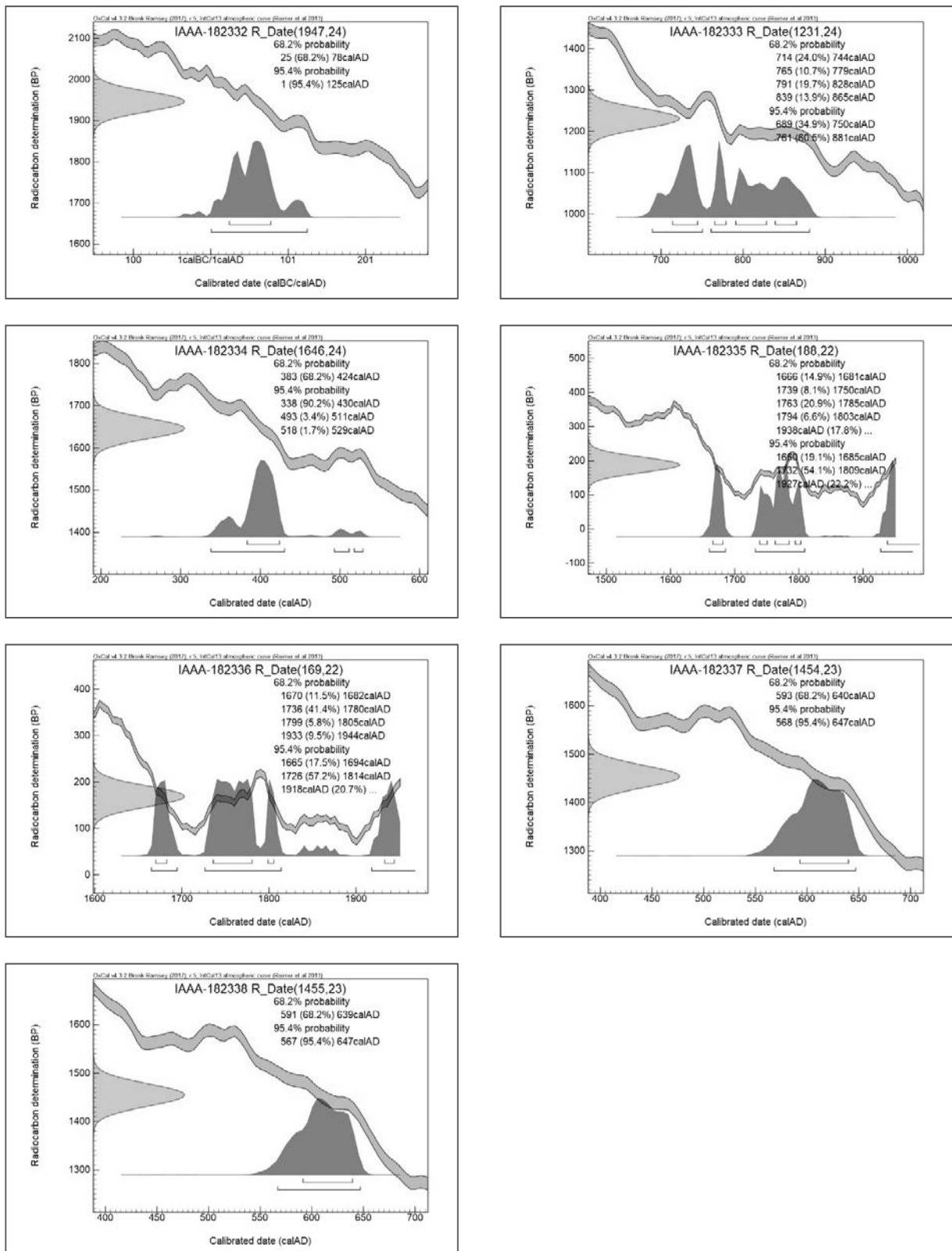


図 1 - 2 暦年較正結果

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r:5IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)

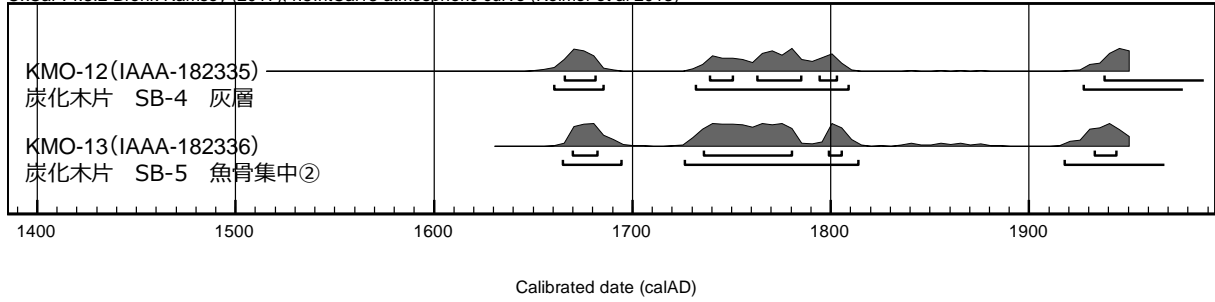


図 2-1 暦年較正年代グラフ (マルチプロット図、cal BC/AD、参考)
Ⅱ層、近世アイヌ文化期の試料 (KMO-12、13) を示した。

OxCal v4.3.2 Bronk Ramsey (2017); r:5 IntCal13 atmospheric curve (Reimer et al 2013)

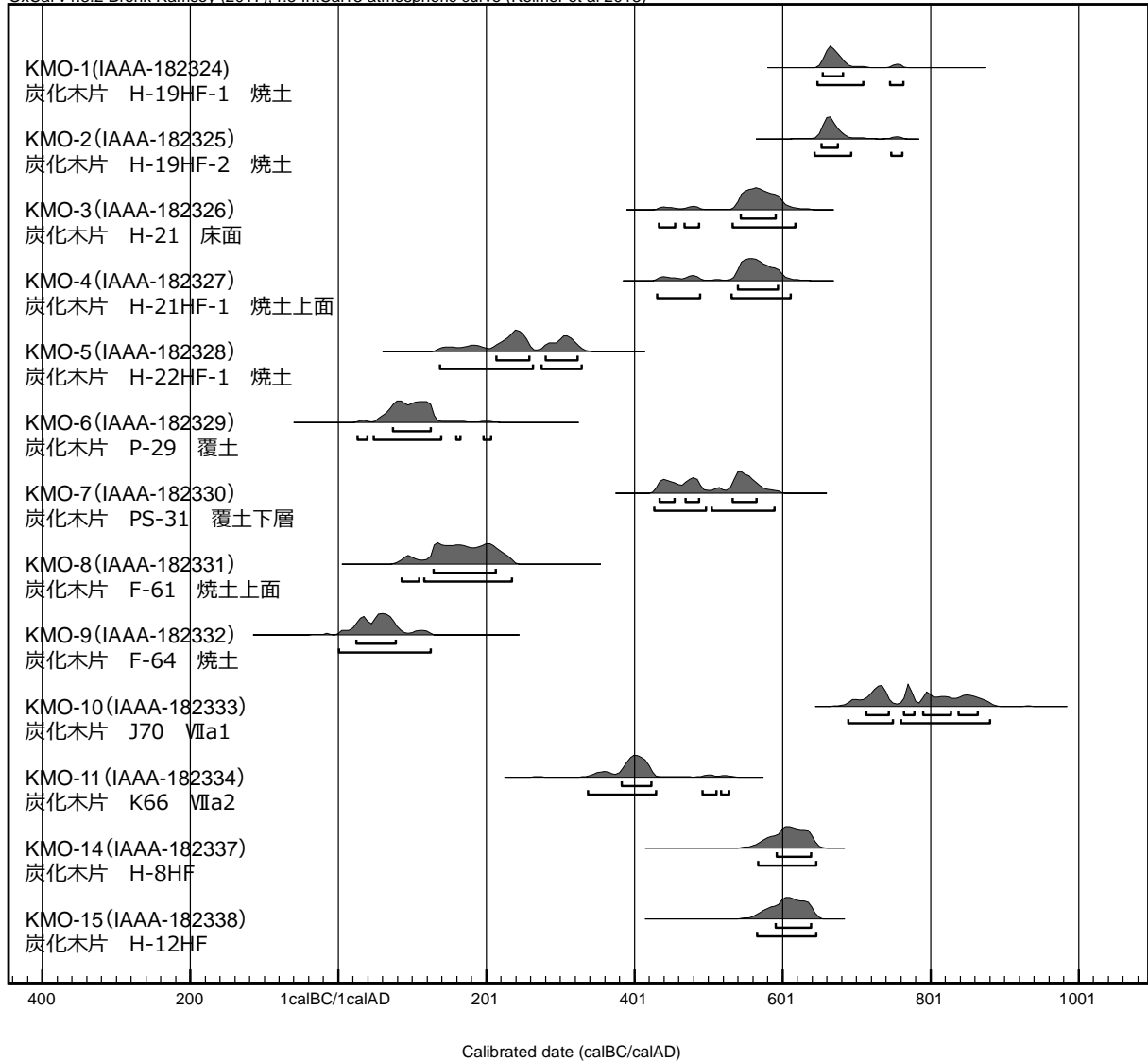


図 2-2 暦年較正年代グラフ (マルチプロット図、cal BC/AD、参考)
Ⅶ a 層、オホーツク文化刻文期、およびⅦ b 層、続縄文時代後半の試料 (KMO-1~11、14~15) を示した。

10 火山灰同定

アースサイエンス株式会社

火山灰同定試料一覧

番号	種別	出土地点 (遺構/発掘区)	層位	取上日	重量(g)	備考
No.1	テフラ	J15	II	2018.10.15	36.3	
No.2	テフラ	J15	II	2018.10.15	24.4	
No.3	テフラ	I105	IV	2018.10.17	11.9	
No.4	テフラ	I105	VI	2018.10.17	35.3	

1 分析方法

前処理

分析に使用する試料は古澤（2003）の方法を基本に前処理を行った。洗浄は、はじめにナイロン製使い捨て#255メッシュシート（糸径 $43\mu\text{m}$ 、オープニングワイド $57\mu\text{m}$ ）を用い、流水中で洗浄した。残砂を#125メッシュシート（糸径 $70\mu\text{m}$ 、オープニングワイド $133\mu\text{m}$ ）を用い水中で篩い分けした。これにより、 $1/8\sim 1/16\text{mm}$ に粒度調整した試料を超音波洗浄機を用いて洗浄し、表面に付着した粘土分などを洗い流した。

検鏡（粒子組成分析）方法

前処理・プレパラートされた粒子は偏光顕微鏡（100倍）を用いて観察し、300粒子（1000粒子の平均値）を古澤（2003）の区分手法にしたがって、火山ガラス、長石類・石英、斜方輝石、単斜輝石、普通角閃石、カミングトン閃石、その他の重鉱物（カンラン石、ジルコンなど）、不透明鉱物および岩片・風化粒に区分した。火山ガラスは発泡跡の大きさにより、発泡跡が 0.1mm 四方に2 - 3個以内しか見られない大きな発泡跡を有するバブルウォールタイプ（Bw）、発泡跡が 0.1mm 四方に4個以上見られるパミスタイプ（Pm）、発泡跡どうしが密着せずガラス中に細かい泡となって含まれるか全く含まれない急冷タイプ（O）の3タイプにまとめて区分した。また、重鉱物組成については、100粒子を目処に、斜方輝石、単斜輝石、普通角閃石、黒雲母、その他（不透明鉱物、ジルコン、アパタイト etc.）に区分し、粒子組成とは別に記載した。

屈折率測定方法

測定には、浸液の温度を直接測定しつつ屈折率を測定する温度変化型測定装置^{マイオット}"MAIOT"を使用した。測定精度は火山ガラスで ± 0.0001 程度である（古澤、1995）。

顕微鏡は、ニコン顕微鏡ECLIPSE600シリーズ（偏光・位相差装置付）、位相差用対物レンズ（10倍および長作動20倍）、光源は12V100Wハロゲンランプ、全誘電体干渉フィルター（ 589.3nm ）を使用した。温度変化装置として全面等温度透明加温板（ 0.1°C の精度で制御可能）、プログラム温度コントローラー（ 0.1°C の精度で制御可能）、高感度熱電対（ 0.1°C の精度で測定可能）、パーソナルコンピュータを使用した。

以下に測定の手順を示す。

顕微鏡ステージ上に設置した加温板に、浸液と試料および熱電対とを密封したごく薄いカプセルを載せる。カプセルは、大きさ $18\times 24\text{mm}$ 、厚さ $0.12\sim 0.17\text{mm}$ のガラス板（下板）と、直径 18mm で同じ厚さのガラス板（上板）との間に、熱伝導性の高いシーリング材を使用して浸液と試料および熱電対を密封したもので、総厚が $0.5\sim 0.6\text{mm}$ 程度である。浸液は単一化学式を有する有機化学合成液である。

つぎに、加温板の温度を制御して、ほぼ一定の温度変化速度で、浸液および試料の温度を室温～60℃の範囲で変化させる。この様子を、位相差状態の顕微鏡で観察する。観察時の波長はナトリウムD線(589.3nm)である。この画像を観察しながら、ガラスの輪郭が消失する温度を記録する。実際には温度上昇あるいは下降時に1回パーソナルコンピューターに接続されたマウスを左クリックする。屈折率は、あらかじめ作成した各浸液の温度と屈折率との一次式から変換され、パーソナルコンピューターに記録される。測定個数の目処はガラスが30片、斜方輝石が10片である。ただし、値にバラツキがある試料では、モードを把握できるまで測定した。記録された屈折率、熱伝対の温度データはリアルタイムにパーソナルコンピューターに入力され、温度、測定個数などとともに屈折率ヒストグラムとしてモニターに表示される。

2 分析結果

分析結果

粒子組成分析結果を表1に、屈折率測定結果を図1(火山ガラス)および図2(斜方輝石)に示す。

表1 カモイベツ遺跡テフラの粒子組成分析結果

試料番号	Volcanic Glass			Light Mineral	Heavy Mineral					Rock	V.Rock	生物遺骸	Total	備考
	Bw	Pm	O	Fl・Qu	Opx	Cpx	Gho	Oth	Opq					
No.1	11	101	8	100	22	8	0	0	32	0	18	0	300	
No.2	2	174	7	82	12	3	0	0	20	0	0	0	300	燐灰石含む
No.3	3	8	8	103	39	57	0	0	33	12	0	37	300	テフラ混在?
No.4	0	38	0	80	23	8	0	151	0	0	0	0	300	Othは褐色不明鉱物。アモルファス

試料番号	火山ガラスの屈折率	斜方輝石の屈折率
No.1	1.500-1.509	1.712-1.717
No.2	1.503-1.509	1.706-1.718
No.3	1.496-1.505,1.507-1.518	1.700-1.714
No.4	1.510-1.524	1.707-1.714

粒子組成の特徴

No. 1

本試料は軽石タイプ火山ガラスを主体とし、斜長石を多く含む。有色鉱物としては斜方輝石>単斜輝石が含まれる。火山ガラスの屈折率は1.500～1.509、斜方輝石の屈折率(γ)は1.712～1.717である。

No. 2

本試料は軽石タイプ火山ガラスを主体とし、斜長石を多く含む。有色鉱物としては斜方輝石>単斜輝石が含まれる。リン灰石も含む。火山ガラスの屈折率は1.503～1.509、斜方輝石の屈折率(γ)は1.706～1.718である。

No. 3

本試料は斜長石、単斜輝石、斜方輝石、不透明鉱物および生物遺骸を主体とし、火山ガラスを少量含む。火山ガラスの屈折率は1.496～1.505、1.507～1.518 (Bi-modal?)、斜方輝石の屈折率(γ)は1.700～1.714である。

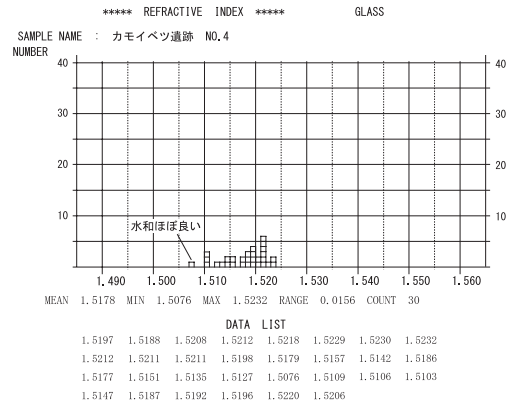
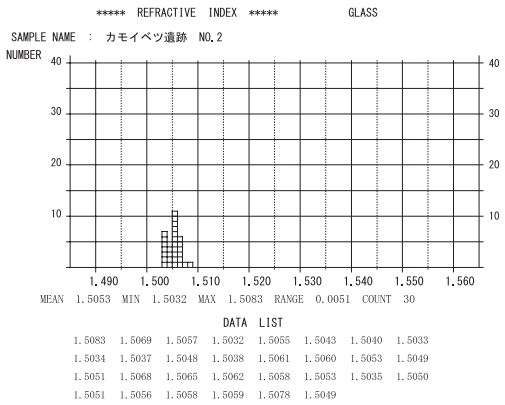
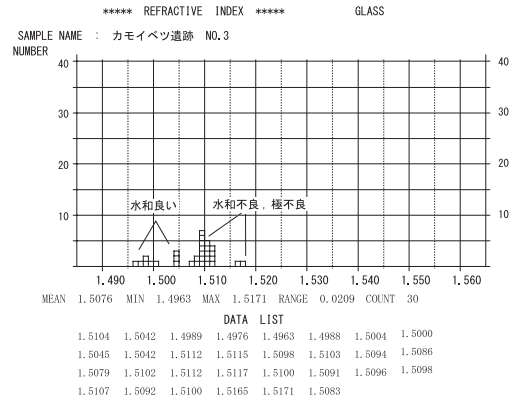
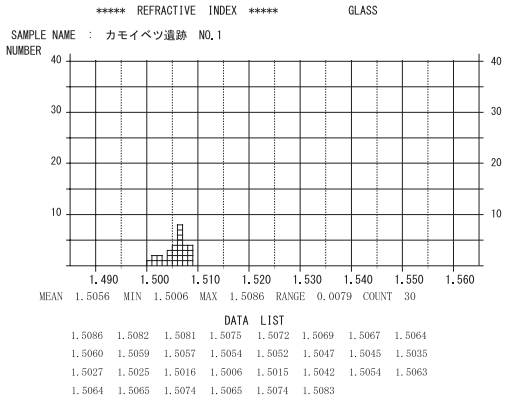


図1 カモイベツ遺跡No.1・2・3・4の火山ガラス屈折率
(No.1・2・4はPm主体、水和不良、極不良)

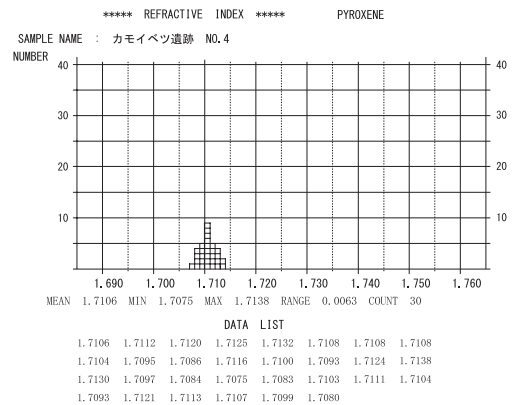
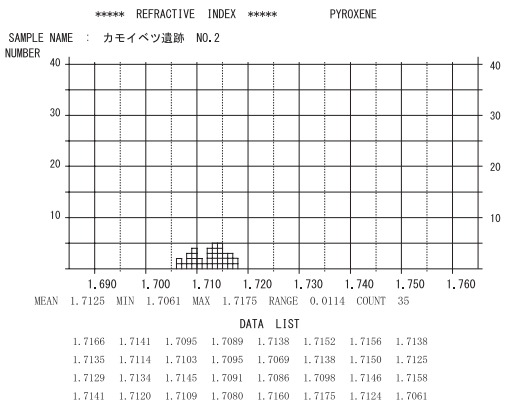
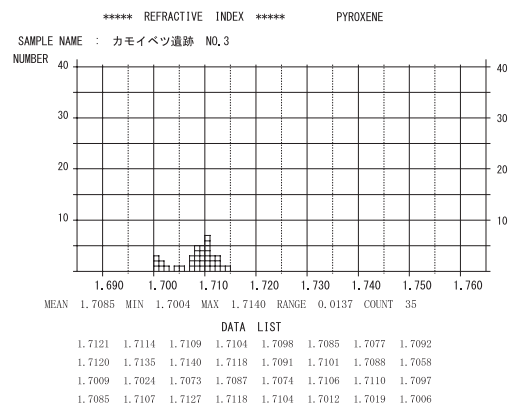
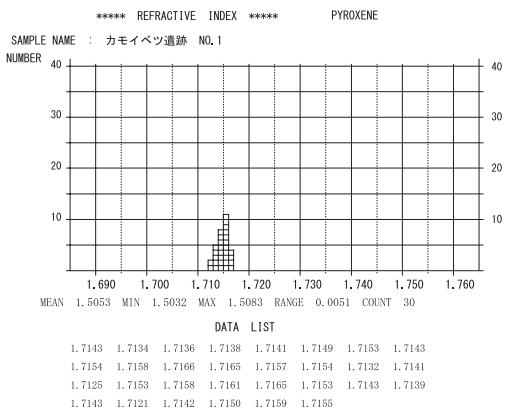


図2 カモイベツ遺跡No.1・2・3・4の斜方輝石屈折率

No. 4

本試料は褐色でアモルファスな粒子（テフラ起源ではない）を主体とし、斜長石および斜方輝石を多く含む。軽石タイプ火山ガラスもやや多く含む。火山ガラスの屈折率は1.510～1.524、斜方輝石の屈折率（ γ ）は1.707～1.714である。

3 考察

3.1 No. 1

No. 1は表土の下「Ⅱ層」黒褐色土中に斑状に含まれるテフラで、これより上位に近世アイヌ文化期とみられる貝・骨ブロックがある。

No. 1は苦鉄質鉱物が斜方輝石>単斜輝石で、軽石は主として軽石タイプであるテフラである。

No. 1の火山ガラス屈折率は1.500～1.509であり、Ta-aが1.498～1.508、Ta-bが1.500～1.509である（町田・新井、1992）ので、これらと重なる。

No. 1の斜方輝石の屈折率は1.712～1.717であり、Ta-aが1.713～1.717、Ta-bが1.712～1.716である（町田・新井、1992）ので、やはりこれらと重なる。

Ta-aもTa-bも苦鉄質鉱物は斜方輝石と単斜輝石で火山ガラスは軽石タイプということで共通している。

したがって、分析値自体からNo. 1がTa-aかTa-bかを判断することはできない。道東ではTa-aの分布が確認されている（例えば、別海町茨散：遠藤・隅田、1996）。一方、Ta-bは分布軸が東南東方向のため、調査地周辺に飛来していないと考えられる。

すなわち、No. 1はTa-a（AD1739）であると判断できる。

3.2 No. 2

No. 2は表土の下「Ⅱ層」黒褐色土中に斑状に含まれるテフラで、No. 1の直下に分布する。

No. 2は苦鉄質鉱物が斜方輝石>単斜輝石で、火山ガラスは主として軽石タイプである。

No. 2の火山ガラスの屈折率は1.503～1.509であり、発掘時に考えられたKo-c₂のそれは1.501～1.505である（町田・新井、1992）ので、No. 2はKo-c₂と一部が重複し、一部は屈折率が高い。むしろ、No. 1と同じ火山ガラス屈折率を示すことからTa-aの可能性が考えられる。Ta-aの斜方輝石の屈折率は上記のように1.713～1.717であるが、No. 2のそれは1.706～1.718でTa-aと一部が重なる（図2（2）に示すように、バイモーダルな分布を示すが、Ta-aはその高屈折率側のピークと重なる）。一方、Ko-c₂の斜方輝石屈折率は1.709～1.713（町田・新井、1992）で、No. 2の低屈折率側のピークと重なる。

すなわち、No. 2はKo-c₂（AD1694）とTa-a（AD1739）が混合したような組成のテフラである。

このような混合はNo. 1とNo. 2が近接して分布しているため、小規模な浸食による再堆積があれば混合が可能である。

3.3 No. 3

No. 3はⅣ層で、低地側泥炭質の土壌（Ⅲ層）下に層状に堆積し、Ⅶa（オホーツク文化期）の上位に分布する。分析の結果、純粋な火山灰ではなく、火山灰混り土であった。

No. 3は苦鉄質鉱物が単斜輝石・斜方輝石で、火山ガラスは軽石タイプ>バブルウォールタイプである。

火山ガラスは水和の良いものと不良のものが混り、また屈折率は1.496～1.505と1.507～1.518に分けることができ、あるいはさらに分けることもできる（図1（3））。

同じく、斜方輝石の屈折率は1.700~1.714の範囲にあるが、やはり複数のピークに分れる(図2(3))。

したがって、複数のテフラが土壌中に混じっている可能性が高い。

1つは摩周系のテフラが混入している可能性が考えられる。Ma-b(7.7~9.8 cal BP:中村ほか、2008)は苦鉄質鉱物が斜方輝石・単斜輝石(少量)で、火山ガラスは軽石タイプである。火山ガラスの屈折率は1.501~1.504(町田・新井、1992)で、斜方輝石のそれは1.707~1.711である(中村ほか、2008)。火山ガラスの屈折率はNo. 3の屈折率の低い部分と一致する。また、斜方輝石の屈折率からみても、Ma-bはNo. 3の範囲に含まれる。したがって、No. 3にMa-bが混入していても矛盾はない。

白頭山苦小牧(B-Tm:10世紀)は苦鉄質鉱物を含まず、火山ガラスは軽石タイプとバブルウォールタイプで、火山ガラスの屈折率は1.508~1.519である。これはNo. 3の火山ガラスの屈折率の高い部分と一致する。

したがって、No. 3はMa-bとB-Tmが混入した土壌である可能性が考えられる。

3.4 No. 4

No. 4はVI層でNo. 3の下位、VII a(オホーツク文化期)の上位に分布する。No. 3と同様純粋な火山灰でなく、火山混り土である。

No. 4の苦鉄質鉱物は斜方輝石>単斜輝石で、火山ガラスは軽石タイプである。

No. 4の火山ガラスの屈折率は1.510(1.508)~1.524、斜方輝石屈折率は1.707~1.714である。

オホーツク文化期にかかって、かつMa-bより下位のテフラとしては羅臼2(Ra-2:1.4Ka)が知られている(町田・新井、1992)。Ra-2はスポンジ状火山ガラス(軽石タイプ)に富み、苦鉄質鉱物は斜方輝石・単斜輝石を含む。脱水ガラスの屈折率として1.490~1.525と広い組成幅が、斜方輝石の屈折率として1.706~1.712が報告されている(中村ほか、2008)。したがって、No. 4はRa-2である可能性が高い。

引用文献

- 遠藤邦彦・隅田まり(1996):北海道東部, 茨散における最終氷期泥炭層。日本第四紀学会 編「第四紀露頭集-日本のテフラ」, p108.
- 古澤 明(1995):火山ガラスの屈折率測定・形態分類とその統計的な解析。地質雑, 101, 123-133.
- 古澤 明(2003):洞爺火山灰降下以降の岩手火山のテフラの識別。地質雑, 109, 1-1.
- 町田 洋・新井房夫(2003):「新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺」。東京大学出版会, 336.
- 中村有吾・丸茂美香・平川一臣・澤柿教伸(2008):北海道東部, 知床半島の完新世テフラ層序。第四紀研究, 47, 39-49.

11 赤色顔料について

1 斜里町における赤色顔料原材産出地とベンガラ製作関連遺物

知床半島には、膨大な量の褐鉄鉱床が埋蔵されている。褐鉄鉱床には、海別^{うなべつ}鉱山や宇登呂^{うとろ}鉱山、イワウベツ川上流^{らうす}鉱床、イダシュベツ^{らうす}鉱床、知床^{らうす}鉱山、羅臼^{らうす}鉱山などがある。大部分の鉱床は、知床半島脊梁の西側宇登呂^{うとろ}方向に分布し、羅臼^{らうす}側には少ない。このうち、褐鉄鉱に鉄明^{てつみょう}礬石^{ばんせき}が付随する鉱床には、海別^{うなべつ}鉱山と宇登呂^{うとろ}鉱山が挙げられる。(斎藤、五十嵐1965)。半島基部に位置する海別^{うなべつ}岳の北山麓^{ぬかまっぶ}には、糠真布^{ぬかまっぶ}川が西流し、河口域は遺跡の所在する峰浜^{ほうへい}地域に通じている。海別^{うなべつ}岳山麓^{てつみょうばんせき}に見られる褐鉄鉱床は、この糠真布^{ぬかまっぶ}川の流域に沿って発達している。峰浜^{ほうへい}地域から、海別^{うなべつ}鉱山までは約5km、上流域^{ほうらいさわ}の宝萊沢^{ほうらいさわ}鉱床は約9km、5号の沢^{うんべつかわ}鉱床は約12km、植別^{うんべつかわ}川上流^{らうす}鉱床までは約16kmの距離にある。このうち、海別^{うなべつ}鉱山では褐鉄鉱と鉄明^{てつみょう}礬石^{ばんせき}が互層を構成して縞状を呈している所もあるが、上流域^{ほうらいさわ}の宝萊沢^{ほうらいさわ}鉱床や5号の沢^{うんべつかわ}鉱床では鉄明^{てつみょう}礬石^{ばんせき}はほとんど伴っていない(土居、松井1960)。

斜里町内の遺跡では、峰浜^{ほうへい}海岸1遺跡や尾河台地遺跡ほかから赤色顔料(以下ベンガラ)関連遺構や遺物の出土が報告されている。縄文時代前期の峰浜^{ほうへい}海岸1遺跡では、大量の焼けた鉄明^{てつみょう}礬石^{ばんせき}が出土し、ベンガラが付着したすり石や礫等もあり、ベンガラ製作址であった事が指摘されている。原材料である鉄明^{てつみょう}礬石^{ばんせき}やベンガラが付着する石器等があるにもかかわらず、「生成されたはずのベンガラの所在が判明しない」とされ、ベンガラが他の場所に交易品として運び出された事が推察されている。また、出土した鉄明^{てつみょう}礬石^{ばんせき}を示差熱分析計と粉末X線回折法を用いて、ベンガラが形成されるまでの加熱実験も行っている(斜里町教委1999、合地・松田2004)。続縄文時代の尾河台地遺跡では、褐鉄^{ちつてつ}鉱^{こう}石^{せき}やベンガラの付着する石器等とともに各所からカワシンジュガイが出土した。出土したすり石の中には、炭酸カルシウムが付着しているものがあり、「すり石で粉にしたカワシンジュガイを溶剤として使用した」と、ベンガラ製作過程についても検討している(斜里町教委1983)。

2 カモイベツ遺跡出土の赤色顔料関連遺物の分析

2-1 はじめに(表1)

本遺跡で確認したベンガラ関連遺構や遺物は、続縄文時代宇津内Ⅱ式期が主体である(表1)。このうち、遺構から出土した褐鉄^{ちつてつ}鉱^{こう}石^{せき}(針鉄^{しんてつ}鉱^{こう}石^{せき}や鉄明^{てつみょう}礬石^{ばんせき})または赤鉄^{せつてつ}鉱^{こう}石^{せき}等と分類されたものの中から4点について、X線回折装置(XRD)を用いた分析を行った。試料は4点ともに非破壊で行い、表面等が欠落したものを使用した。分析結果中に石英(quartz)がみられるものがあるが、これは包含層中の石英が試料に付着し水洗時に取り切れず残っていたものと考えられる。

2-2 分析試料(表2・図版1)

試料1：宇津内Ⅱa式期の土坑墓G P-3(旧44号址、図IV-15・16)から採取した粉末および径1cm程度の塊状のベンガラで、赤褐色を呈する。

試料2：オホーツク刻文期の竪穴住居跡H-9(旧15a号址、図IV-44)の床面で採取した拳大の亜角礫で、赤鉄^{せつてつ}鉱^{こう}石^{せき}として分類されていた。

試料3：宇津内Ⅱa式期の集石S-3(D136区、Ⅸ層)の北側に分布するベンガラ範囲R-5で採取した褐鉄^{ちつてつ}鉱^{こう}石^{せき}としたもので、最大5cm程度の角礫状を呈する。

試料4：宇津内Ⅱa式期の焼土F-7(旧PIT22、図VI-23)で採取した半拳大の亜角礫で褐鉄^{ちつてつ}鉱^{こう}石^{せき}として分類していた。暗赤褐色を呈し他の試料とは色調が異なる。

表 1 カモイベツ遺跡赤色顔料（ベンガラ）出土遺構

調査年	時期	層位	遺構名 ()は旧遺構名	遺構種別	発掘区 ()は旧発掘区	褐鉄鉱 重量(g)	ベンガラ 重量(g)	備考
2008	宇津内Ⅱa	Ⅶ層	GP-3(44号址)	土坑墓	M134(98d)		1088.5	最上面に集石、ベンガラ全面覆う、ベンガラ付着礫
2008	宇津内Ⅱa	Ⅶ層	R-1(29号址)	ベンガラ制作址	L144(106c)		※	※すり石にベンガラ厚く付着
2008	オホーツク刻文	Ⅶ層	H-9・10(15a・b号址)	竪穴住居跡	N99・100(70・71)	288.3		15b号址・14号址(集石)に切られる、床面赤鉄鉱
2008	宇津内Ⅱa	Ⅶ層	P-5(28号址)	土坑	L142・143(105c)		※	※長さ25cmのベンガラ付着礫、黒曜石細片も多量に出土
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅶ層	P-13(PIT8)	土坑	G・H157・158(F124)		※	※ベンガラ付着台石
2011B	宇津内Ⅱb	Ⅶ層	SF-7(PIT12)	石組炉	G・H158(F125)	1.0		方形の石組炉、焼骨片、褐鉄鉱
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸd層	PS-24(PIT15)	集石土坑	F163・164(F129)	1.2		木炭、褐鉄鉱
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸ層	SF-6(PIT16)	石組炉	G164(E129)	102.9	52.1	焼砂、魚骨、褐鉄鉱
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸ層	PS-23(PIT17)	集石土坑	F・G164(E129・130)	0.3	60.3	褐鉄鉱、ベンガラ付着磨石
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸ層	F-7(PIT22)	焼土	F164(E129)	149.4	223.3	土坑、焼砂、魚骨、褐鉄鉱、ベンガラ付着磨石
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸd層	F-8(PIT21)	焼土	F163(D128)		48.9	土坑、焼砂、ベンガラ
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸ層	R-5(S-3)	ベンガラ範囲	(D136・137)		772.2	D136区の周囲に褐鉄鉱分布
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸ層	S-4(PIT20)	集石	F166・167(E131)		781.4	木炭、焼砂、ベンガラ 遺物なし
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸ層	S-5(PIT14)	集石	G163・164(E129)		238.3	ベンガラ、浅い土坑?
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅶ層	S-6(集石1)	集石	F164(D129)		※	※ベンガラ付着台石
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸb層	R-2(PIT11)	ベンガラ範囲	E172(D136)		35.5	ベンガラ
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸd層	R-3(PIT24)	ベンガラ範囲	G164(E129)			ベンガラ
2011B	宇津内Ⅱa	Ⅸ層	R-4(PIT18)	ベンガラ範囲	F162・163(D・E128)	124.8	168.3	ベンガラ
2012	宇津内Ⅱb	Ⅷ層	P-17(PIT47)	土坑	G153(E119・120)	0.0	0.0	焼土? 褐鉄鉱 ベンガラ
2012	宇津内Ⅱa?	Ⅸ層	P-21(PIT63)	土坑	H152(F119)		1.3	ベンガラ付着台石 土壌水洗から
2012	宇津内Ⅱa	Ⅸ層	P-22(PIT61)	土坑	H151(F119)		19.0	ベンガラ 土壌水洗から

* 褐鉄鉱は酸性度が低く、加水分解が完全な場合の沈殿であり、鉄明礬石はかなり酸性を保つ条件下で加水分解の途中で定着されたもの(斎藤1965)。

2-3 分析結果 (表2・図1)

試料1: 赤鉄鉱(Hm)に同定される回折パターン(ピークの位置と強度比)が強く反応している。また石英(Q)や長石グループ(Ab)といった透明・白色鉱物も反応している。この結果から、赤鉄鉱と判断される。

試料2: 赤鉄鉱(Hm)に同定される回折パターンが、試料1ほどではないがやや強く反応している。また石英(Q)もやや強く反応している。結果から、赤鉄鉱である。

試料3: 赤鉄鉱(Hm)に同定される回折パターンが強く反応している。また鉄明礬石(J)に同定される回折パターンも強く反応している。結果から、鉄明礬石が加熱され赤鉄鉱が生成されたものとみることができる。当試料が出土したR-5やS-3の周囲からは、多量の褐鉄鉱石(針鉄鉱や鉄明礬石)等が分布し、ベンガラが付着するすり石や台石、礫等(図IV-36-16、IV-37-25、IV-37-25~28)が出土していることとも関連すると思われる。

試料4: 赤鉄鉱(Hm)に同定される回折パターンのうち一部がわずかに反応している。また石英(Q)に同定される回折パターンが強く反応している。結果から、赤鉄鉱であるとみられる。当試料が出土したF-7では、褐鉄鉱石(針鉄鉱や鉄明礬石)やベンガラが付着したすり石(図IV-23-1)も出土しており、関連があると思われる。

分析試料1・2・4には、石英(Quartz)がみられるが、これは包含層中の石英が試料に付着し、水洗の際洗い切れずに残っていたものに反応したものと考えられる。

2-4 まとめ

以上の事から、ベンガラ^{みょうばん}の生成には、近郊の鉱床や糠真布川流域等から採取した褐鉄鉱石（針鉄鉱や鉄明礬石または天然の赤鉄鉱を原材料に用い、焼成して赤色の増した赤鉄鉱を使用していた事が考えられる。ベンガラが確認された周囲には、焼土や顔料付着石器が伴っている場合があり、加工状況の一端を垣間見ることができる。（笠原）

※分析データ提供：地方独立行政法人北海道立総合研究機構 環境・地質研究本部地質研究所

表2 赤色顔料X線回折法分析試料

試料番号	出土地点					分類名	重量 (g)	分析結果(同定鉱物)				
	調査年	遺構名	旧遺構名 / 発掘区	層位	遺物番号			Hm (赤鉄鉱)	G (針鉄鉱)	J (鉄明礬石)	Q (石英)	Ab (長石グループ)
試料1	2008	GP-3	44号址	覆土		ベンガラ	12.3	◎			○	○
試料2	2008	H-9	15号址/70e	床面	1977	赤鉄鉱	281.0	◎			○	
試料3	2011	R-5	D136	IX		褐鉄鉱	126.0	◎		○		
試料4	2011	F-7	PIT22	IX	272	褐鉄鉱	137.0	○			○	

* Hm (hematite)、G (goethite)、J (jarosite)、Q (quartz)、Ab (albite)

図版1 赤色顔料X線回折法分析試料



試料1：GP-3（44号址）出土



試料2：H-9（15a号址）出土

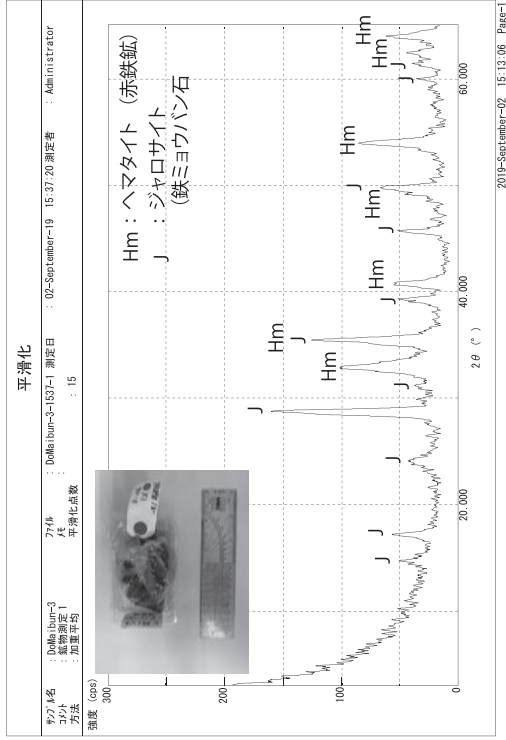


試料3：R-5（D136区IX層）出土

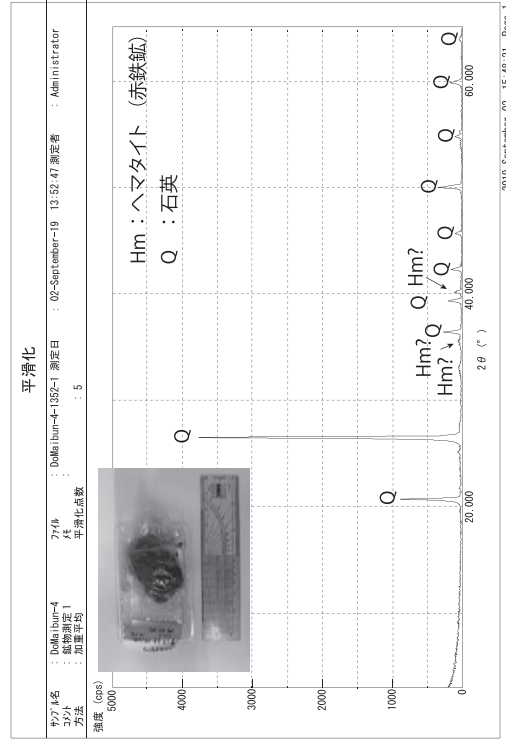


試料4：F-7（PIT22）出土

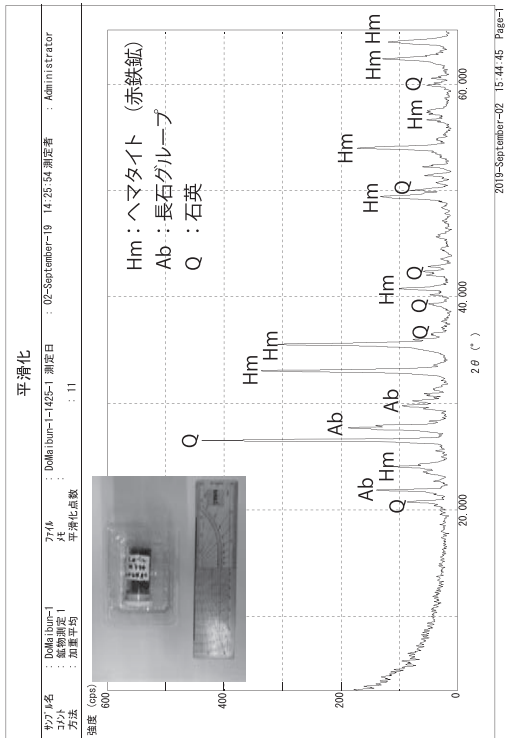
試料 3 : 2011 年 R-5 (D136 区区層)



試料 4 : 2011 年 F-7 (P122/E129 区) No. 272



試料 1 : 2008 年 GP-3 (44 号址)



試料 2 : 2008 年 H-9 (15 号址 /70e 区) 床 No. 1977

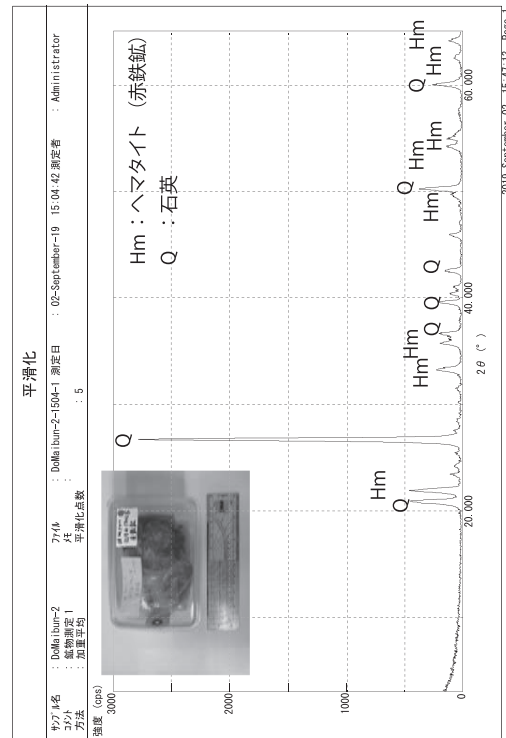


図 1 赤色顔料 X線粉末回折法分析結果

IX章 まとめ

カモイベツ遺跡は、知床半島の基部、斜里平野の東端に形成された海岸砂丘上に立地する。6次にわたる調査により、縄文時代後期～晩期の少数の遺構、続縄文時代の土坑墓・土坑・焼土群、オホーツク文化期の竪穴住居跡群、アイヌ文化期の貝・骨ブロックなどを検出し、縄文時代中期～アイヌ文化期の遺物が出土した。遺構・遺物の内容と土層の堆積状況から、新たな砂丘の形成や周辺環境の変化とともに遺跡における生活舞台の変遷過程を知ることができた（II章2）。

各時期の特徴的な遺構・遺物のいくつかを挙げ、まとめとする。

1 主な遺構群の特徴

(1) 続縄文時代の特徴的な遺構

宇津内Ⅱ a 式期を主体としたベンガラ製作関連遺構・遺物

赤色顔料に関連する遺物が各層から出土したが、特にIX層宇津内Ⅱ a 式期はその主体をなす。原料となる「褐鉄鉱」、被熱して生成された赤鉄鉱、赤色顔料が付着したすり石・石皿、精製されたベンガラなど一連の工程に関わる遺物が出土している。ベンガラが分布する周辺には、製作に関連するとみられる焼土や土坑が検出されている。

「褐鉄鉱」と分類されたものでは、分析（VIII章11）で「試料3」とした角礫状または破碎した礫片が多い。分析の結果、鉄明礬石を由来とし赤鉄鉱が生成されたものとみることができ、ウナベツ鉱床など周辺の産地から鉄明礬石を含む「褐鉄鉱」が遺跡内に多量に持ち込まれたとみられる。精製されたベンガラは該期の土坑墓2基に撒布されているが、ほかに分布範囲が多数みられることから、複数箇所で作られたベンガラを他の地域に搬出したことも考えられる。

宇津内Ⅱ b 式期の遺構群

調査区中央西寄り（2012年主体、2008・2011年調査区の一部）に主に分布する。土坑、石組炉、焼土、土器埋設遺構などがある。特に石組炉が目立ち、単独で検出されたものが多い。亜円礫で囲み、内側を窪ませて火床面を形成している。火床面からは魚骨・海獣骨がまとまって出土した。恒常的な屋外炉として機能していたと考えられる。

後北C₂・D期の遺物出土状況と遺構

国道北側の砂丘を主体に、当時の礫浜の端部まで遺物が広分布し、砂丘上を広域に利用したことがうかがえる。遺物出土状況の特徴として、焼土を中心として炭化木片や小骨片、大小の礫や黒曜石の微細な剥片、土器片などが広範囲に分布する点が挙げられる。散点的に一個体や半個体のまとまった土器が出土する。それぞれ活動の痕跡や廃棄単位が重複したものと考えられる。

このような分布状況の中で、掘り込みがないが焼土と柱穴状小土坑のまとまりから住居跡としたものが1軒ある（H-22）。砂地の特性から柱穴の確認が困難な状況ではあるが、「移動性の高い生活」（斜里町2008ほか）とされる該期の「住居跡」として、こうした遺構も積極的に評価したい。

また2011年調査区で土坑墓1基を検出した。上面に「蓋石」となる礫、「上層遺構」に頭蓋骨と四肢骨が集約された人骨、「下層遺構」に脆弱な人骨の一部と副葬品のガラス玉（カリガラス・VIII章2）が5点出土した。一度埋めた土坑の上位を再度掘り込み、改葬を行ったと解釈されている（再葬墓・VI章5）が、追葬の可能性も考えられる。

(2) オホーツク文化刻文期における竪穴群 (図Ⅸ-1)

竪穴住居跡・竪穴遺構を16軒(建て替え等による重複を含む)検出した。刻文期として確認・調査された遺跡での竪穴軒数としては大規模に位置づけられる(表Ⅸ-1)。

時期

出土土器から、刻文期～擬縄貼付文期であり、特に刻文期の新しい段階のものが主体とみられる。重複による新旧関係が確認できたのは、以下のとおりである。

H-3→4、6→5・7、11→9→10(建て替えか)、19→20

なお参考までに¹⁴C年代測定では、6世紀後半～8世紀前半、特に7世紀に相当する値を示す試料が多かった(Ⅷ章9)。ただし新旧関係の異なるデータもあり、検討が必要である。

立地の特徴

刻文期の竪穴が確認・調査された遺跡は、礼文島からオホーツク海沿岸を経て根室まで、および奥尻島に点在する(図Ⅸ-1上段)。これらの立地は、海上交通のメルクマールとなる岬の麓などが多い。このうち網走市モヨロ貝塚は代表的な拠点集落であり、斜里町ではウトロ遺跡(斜里町教委2011)が規模が大きい。カモイベツ遺跡はこの間に位置する集落として、中継地の役割も果たしていた可能性がある。ただその立地は、背後に知床連山のウナベツ岳があるものの目印としての岬ではなく、潟湖および小河川に隣接する砂丘端部にあたり、上記の拠点集落とは様相が異なる。サロマ湖畔の海岸砂丘上に立地する北見市(常呂町)栄浦第二遺跡などに類似する。

また細長い砂丘上ながら周辺に広がる場所があったにもかかわらず、東西約80mの間に竪穴住居が集中している。この点は他のオホーツク文化期の集落にもみられる特徴である。

竪穴の規模・構造の特徴 「小型竪穴」

調査区の幅が狭いため全形を検出したものはほとんどないが、推定される竪穴の規模と形状・構造から、以下のように分けられる。

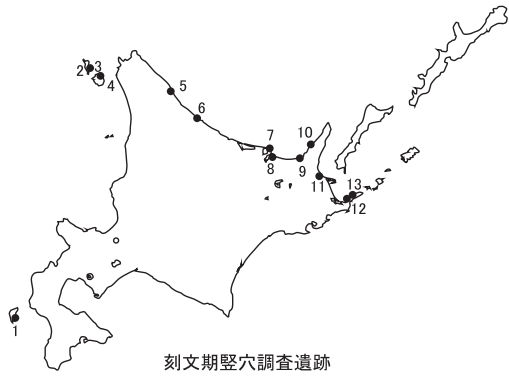
- ① 推定長軸3m前後、方形または五角形の小型竪穴 H-5・19・20・21
- ② 推定長軸4～5m、(隅丸)多角形の竪穴 H-1・3・12・13
- ③ 推定長軸5～6m、多角形の竪穴 H-6・7・14
- ④ 推定長軸7～8m、多角形の竪穴 H-8・9

構造上では、上記②・③のうち、H-12・13・14は集石土坑上に薄い砂層を挟んで炉が構築されている。③・④のほとんどに溝があり、④には貼床が構築されている。規模が大きいほど構造が付加され、小さいものはそれらが欠落することが多いが、石組炉は規模に関わらず設置される。

オホーツク文化期の竪穴は、10mを超える多角形を呈し、貼床・溝・柱穴・石組炉・骨塚などの構造があるものが典型的であるが、当遺跡では貼床・溝などがある最大の竪穴(H-8)でも推定8mに及ばず、全体的に小型で付属施設を欠くものが多い。特に①の中には、約2.5m四方で石組炉のみを有する竪穴(H-21)がある。このような刻文期の小型竪穴の類例は少ないものの、近郊ではウトロ遺跡町道地点(豊原ほか2008)3号址例がある。約4mの隅丸方形で、小型ながら床面全面に貼床が施され周溝が巡る点は当遺跡と異なる。

オホーツク文化期における「小竪穴」の存在は山浦清が言及し(山浦1979)、冬季の狩猟小屋ないし作業小屋を想定している。また天野哲也は、礼文町香深井5遺跡例の分析を通して、「仮小屋」から「仮設竪穴住居」へ移行し、地域開発の前進基地として機能したとする(天野2003)。これらはオホーツク文化前期に多く、中期の刻文期の検出例はまれである。

当遺跡の「小竪穴」は、「仮小屋」の規模・構造であり、作業小屋として機能したと考えられる。



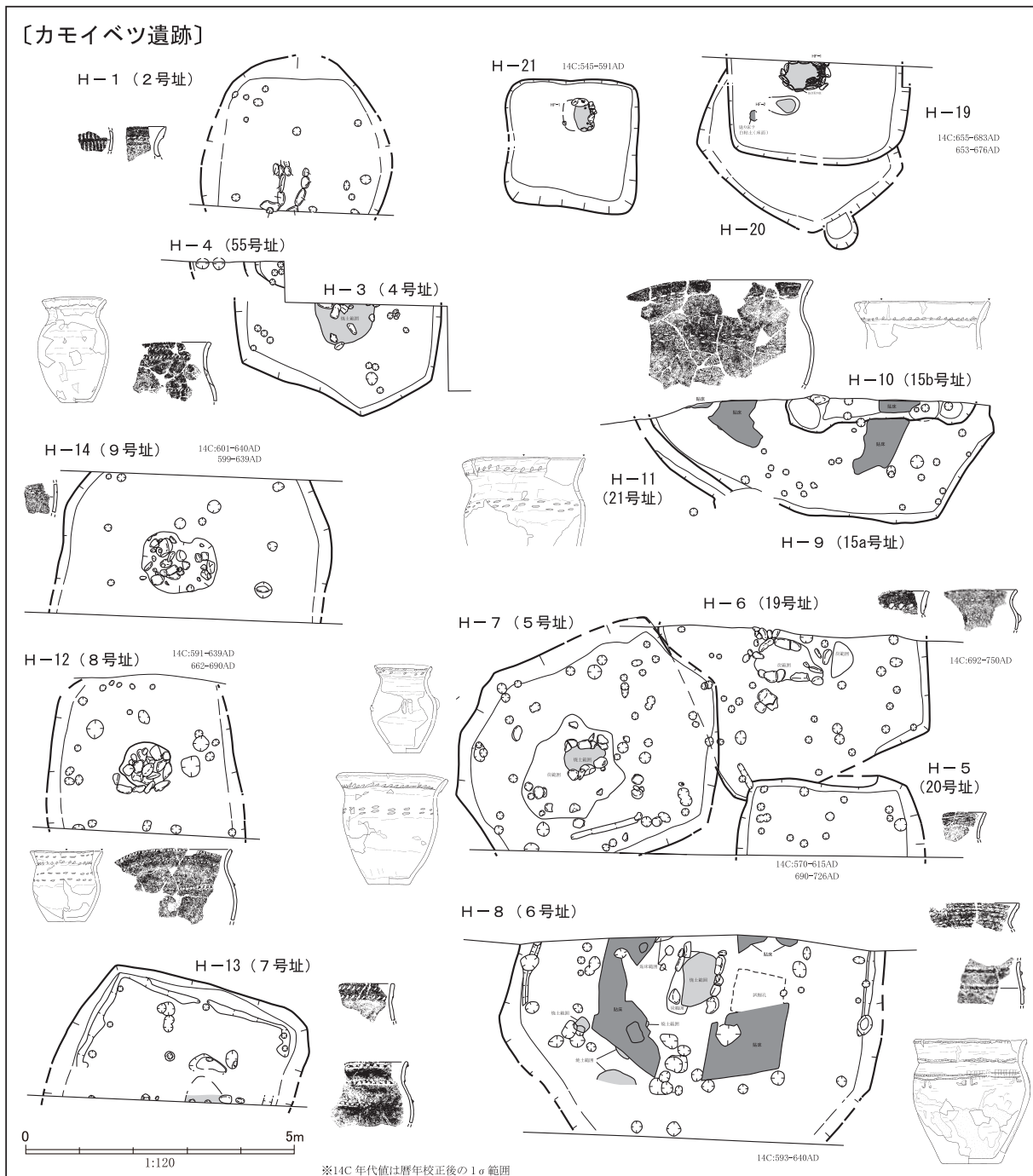
刻文期竪穴調査遺跡

表 1 刻文期竪穴調査遺跡

番号	市町村	遺跡	刻文期竪穴調査軒数	最大竪穴長軸(m)	備考
1	奥尻町	青苗砂丘遺跡	2	-	トレンチ調査主体
2	礼文町	香深井1遺跡	1 (2)	-	旧香深井A遺跡
3		香深井5遺跡	1	(5.7)	
4	利尻富士町	利尻富士町役場遺跡	2	9.6	
5	枝幸町	ホロボツ砂丘遺跡	2	9.3	
6	雄武町	雄武竪穴群	1	7.6	
7	網走市	能取岬西岸遺跡	2	約8	
8		モヨロ貝塚	3 (7) <	12.6	3軒重複×2
9	斜里町	カモイベツ	13 (16)	7.2	
10		ウトロ遺跡	11 (12)	11.2	ウトロ海岸砂丘遺跡含む
11	標津町	三本木遺跡	2	-	トレンチ調査のみ
12	根室市	弁天島	1	12.5	
13		コタンケン遺跡	1	5以上	

※発掘調査が行われ、刻文期と確認・報告されたものに限定している。各地に多数存在する未調査の竪穴は上記の表に含まれていない。

※竪穴軒数の () は重複を含めた軒数



図区-1 オホーツク文化期(刻文期)の竪穴

(3) アイヌ文化期のカモイベツと松浦武四郎 (図Ⅸ-2)

当遺跡の東端部では、幅の狭い調査区ながらアイヌ文化期の貝・骨ブロックを10か所検出した。「貝塚」と称するには厚さとまとまりにやや欠けた状態で、連綿と続いていた。ただし灰層を伴い魚骨が集中する部分もある(SB-3下位・4・5・8・10内の一部など)。儀礼的行為に関わる遺構・遺物は明瞭には確認できなかったが、送り場・捨て場として機能していた可能性がある。

貝・骨ブロックの形成時期について、同遺構は樽前a降下火山灰より上位で薄い黒色土を挟んで検出しており、その後に形成された近年の砂層に覆われている。また出土遺物の内容は、近代以前のものと思われる。以上の点から、形成時期は1739年より新しく18世紀後半～19世紀半ばにあたる。なお参考までにSB-4・5の灰層・魚骨層の炭化木片を試料とした¹⁴C年代測定では、ばらつきがあるものの18世紀後半をピークとする値が得られている(Ⅷ章9)。

19世紀半ばといえば、幕末の探検家・松浦武四郎がこのころ蝦夷地を訪れ、山川地理・地名解・植生・動物相そしてアイヌの人々やその暮らしぶりについて詳細な記録を残している。斜里付近では、弘化3年(1846年、往復)と安政3年(1856年)・同5年(1858年)の3度訪れており、それぞれ紀行文・日誌を著している。中でも安政5年『戊午志礼登古日誌』には、当地付近が詳述されている。ウトロ方面からシャリ運上屋への行程中、「シユマトカリヘツ」(=島戸狩川、峰浜)の項で、「川端より五六丁(600m前後)も行くと一面の茅野になり、その中に人家二軒がある。」とあり、当遺跡中央部付近にあたる。住人に尋ねると、「ここは昔から我々の村で、先祖の墓もあるゆえ住まいす」との返答であり、当遺跡付近に「昔から」住居や墓があったことがうかがえる。そして調査区東部の貝・骨ブロックはこれに関連する可能性があり、そうであれば松浦武四郎が訪れた際の住人家族もしくはそれ以前の「先祖」が残したものと考えられる。

日誌にはさらに「これより砂浜を行くと『カモイベツ』形計りの小川で、上は平野である」と当遺跡西部のカモイベツ川が存在が記され、続けて近隣の「ウナベツコタン」について詳述されている。なお普及版の『戊午知床日誌』には、このウナベツコタンにおいて、アイヌの人々のシャリ場所での苛酷な扱ひの話が記録されており、近隣コタンのアイヌの人口減少が実数で表記されている。上記の茅野の1軒(カモイベツ付近)も「残らず雇に引き上げられ」て空き家になっているとのことである。

図Ⅸ-2には、斜里～ウトロ間におけるアイヌ文化期の遺跡の位置と、松浦武四郎ほか古文獻に記録された周辺コタンを記した。斜里町教育委員会の調査により、これらの遺跡が記録されたコタンに比定できるものがある(タンネウシ貝塚、遠音別川西側台地遺跡ほか)。「カモイベツ」もまた、松浦武四郎の記録と遺跡の内容が関連する好資料となろう。(阿部)



(知床博物館1992ほか参照)

図Ⅸ-2 カモイベツ遺跡周辺のアイヌ文化期の遺跡とコタン

2 遺物の特徴

(1) 土器 (図IX-3)

縄文時代・続縄文時代・オホーツク文化期の土器が約14,000点出土している。主な特徴を記す。

縄文時代

中期末(トコロ6類)以降の土器が出土している。後期になると、口縁部に太い隆帯がめぐると特徴のある「ウトロ型」と、口縁部が肥厚せず全面に縄文が施文されることを特徴とする「シャリ型」(斜里町1980)という北筒Ⅳ～Ⅴ式に相当する地域色の強い土器がある。一方、道内広域にわたる手稲式・鯨潤式が当遺跡にも及んでいる。後期後半では、突瘤と刻み列が並存するエリモB式(または堂林式の古段階)がある。後に周堤墓が築かれる、近郊のオクシベツ川流域の遺跡群の土器にもみられ、活動領域の一端を示している。晩期中葉～後葉では、遺跡南部の2008年・2009年調査区でややまとまった資料がある。縄線を主体とする文様が施されている。

続縄文時代

初頭では、口縁部が無文地で横走・波状、あるいは変形工字文などの沈線がえがかれる「緑ヶ岡式併行」とするものが2008年調査区の遺構覆土ほかで散見された。北見市(常呂町)「栄浦第二・第一遺跡の土器群」(熊木1997)に相当する。

宇津内Ⅱa式は、土坑墓や竪穴住居跡から完形に近いものが出土している。大2+小2の単位突起で、口縁部に縄刻文・突瘤文・縄線文・縄端刺突列が施される典型的なものが多く、先行する元町2式に類するものは見られない。同型式の新しい段階(「ⅡaⅡ」熊木1997)のものが主体である。

宇津内Ⅱb式は、2012年調査区での出土数が多い。大2+小4単位の突起が多くみられ、楕円文やV字状・H字状といった直線的な文様が擬縄貼付文により配される。擬縄貼付文が「微隆起線化」したのもみられ、後北式の影響も考えられる。

後北C₁式は、2018年調査区で唯一出土した。縦8単位横3段の規則的な配列を特徴とするが、微隆起線の結節点に円形刺突を施す点は独特である。斜里町オシャマップ川遺跡(斜里町教委1995)出土の下田ノ沢Ⅱ式土器にも微隆起線の結節点に円形刺突を施すものがあり、関連があると思われる。

後北C₂・D式は、当遺跡出土土器の主体をなす。同型式の中段階の「道東3式」(熊木2001)あるいはその前後の一部に相当するものがほとんどである。微隆起線がないものの方が、あるものよりもやや多い。帯状文は円文や弧線を基調とするものが多いが、直線区画を主体とするものがみられるようになる。また当遺跡の器種の特徴として、片口や注口付き土器が目立つ点が挙げられ、小型の鉢だけでなく深鉢もある。そのほとんどが土坑墓などの遺構からではなく、「廃棄場」・遺物包含層から出土している。またこれらの中に鈴谷式が少数含まれており、ウトロ遺跡(斜里町教委2011)とともに道北方面の影響もみられる。さらに2009年調査区で、調整がていねいな北大Ⅰ式が少数出土した。

オホーツク文化期

刻文期を主体に、一部擬縄貼付文期のものが出土している。刻文土器は、肥厚する口縁下端部に刻文が連続する典型的なものが多い。古いとみられる方から、櫛歯文(型押文)、刻文(舟窩状・舟形刻文)、ハの字形刻文、爪形文(指圧式浮文)、波状の貼付文、刻みのある擬縄貼付文に近いものなど各種の文様があるが、それらが組み合わせられたものもあり、必ずしも新旧の順を示していない。また刻文・沈線土器、沈線土器が少数含まれている。酷似する資料があるウトロ遺跡(斜里町教委2011)とともに、道北方面からの影響がうかがえる。擬縄貼付文は、口縁部・胴部に横位に巡り^{かすがい}、鏝文をなすものやボタン状の貼付を伴うものがある。刻文期から連続する段階のものともみられる。

(阿部)

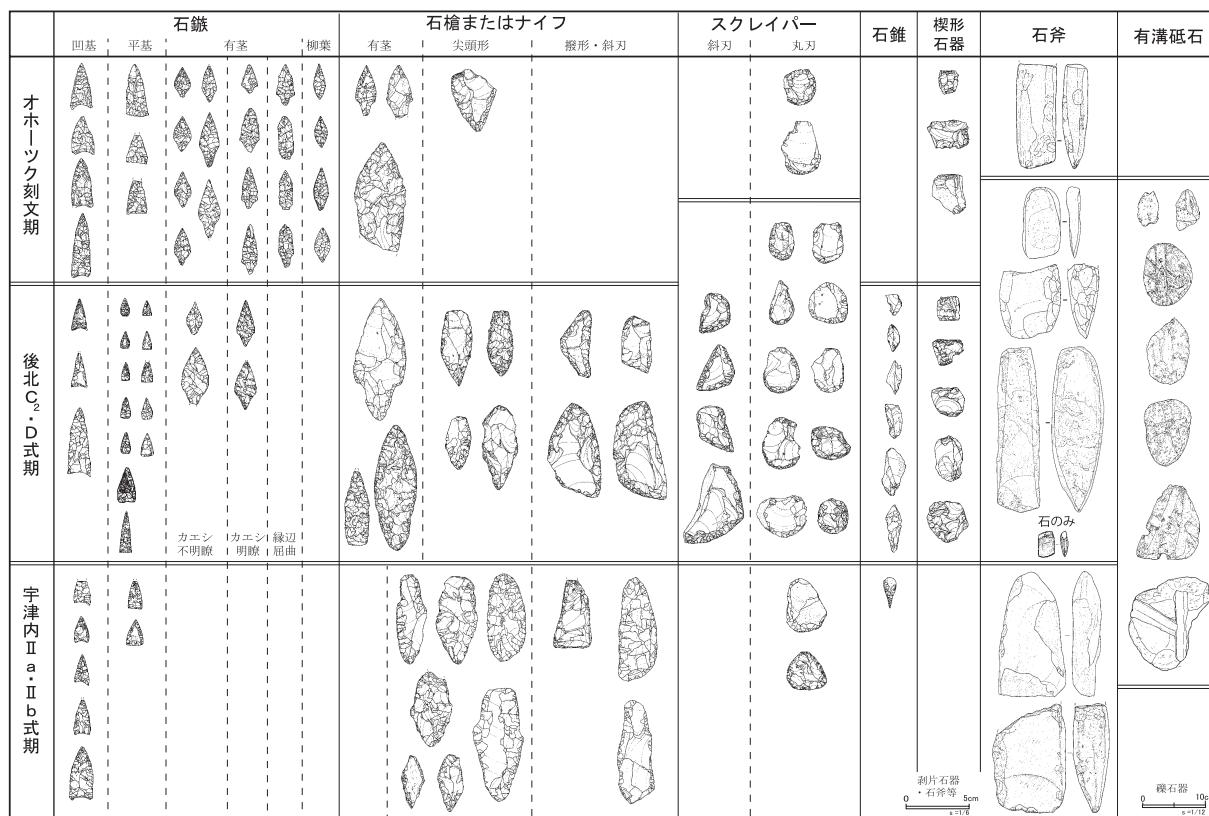
(2) 石器 (図IX-4)

カモイベツ遺跡では、縄文時代中期後半～アイヌ文化期の石器が約40,000点出土している。特に続縄文時代前半(宇津内Ⅱ式期)、同後半(後北C₂・D式期)、オホーツク文化期(刻文期)の包含層は、場所によって無遺物層との互層となっており、包含層の堆積期間が限定的で、他時期に帰属する遺物の混入等の可能性が低い状況である。石器組成や形態を比較検討する上で、非常に良好な資料体といえる。以下に上述の3つの時期ごとの石器組成及びその特徴を記す。

宇津内Ⅱ式期の石器組成は石鏃、ナイフ、スクレイパー、石錐、Rフレイク、石核、石斧、たたき石、すり石、くぼみ石、砥石、台石である。特徴的な形態の石器として、凹基、平基の石鏃、矩形の柄部・尖頭形のナイフ、撥形の石斧、ベンガラ付着すり石・台石・礫が挙げられる。

後北C₂・D式期の石器組成は石鏃、石槍、ナイフ、スクレイパー、石錐、楔形石器、Rフレイク、石核、石斧、石のみ、たたき石、くぼみ石、すり石、砥石、台石である。特徴的な形態の石器として、小型で平基の石鏃、尖頭形のナイフ、撥形で片方の角部分が尖る斜刃のナイフ・スクレイパー、下端部に円形形状の刃部のあるスクレイパー、メノウ製で棒状の石錐、蛤刃の石斧、溝状の擦り痕が複数見られる有溝砥石等が挙げられる。特に撥形のナイフは、使用していく中で刃部再生が行われ、相似形的に小型化・刃部の急角度化し、スクレイパーとして器種が変化した様子がうかがえる。また、有溝砥石は素材と形状から浮子として利用された可能性がある。

刻文期の石器組成は石鏃、石槍、ナイフ、スクレイパー、楔形石器、Rフレイク、石核、石斧(遺構埋土)、たたき石、すり石、砥石、台石である。特徴として、石鏃の形態が多様化する点が挙げられる。凹基、平基、有茎、柳葉形があり、有茎の中でもカエシが明瞭なものや丸みのあるもの、身部の上部縁辺に屈曲のあるものなどバラエティーに富む。中でも縁辺屈曲の石鏃はオホーツク文化独特の形態として注目すべきである。当遺跡では刻文期の中でも比較的新しい遺構(H-7・8)のみから出



図IX-4 時期別石器一覧

土している。さらにこれらの石鏃形態の多様性はトビニタイ文化まで引き継がれる（羅臼町教委1991）。

また、黒曜石製石器の一部を対象として、産地分析を行った（Ⅷ章1）。大型で形態の整った資料や小型でリダクションの進行した資料を選定した。後北C₂・D式期では、最も近い産地である置戸を中心に白滝、上土幌産が利用されている。前述の撥形のナイフは大型の黒曜石から得られた剥片を素材としていたとみられ、白滝産と置戸産が同程度であった。刻文期では分析点数が少ないものの、白滝産が優位となり、生田原産が加わる結果となった。後北C₂・D式期に比べ、オホーツク海側に流下する河川流域の原産地に偏って利用された傾向が指摘できる。（直江）

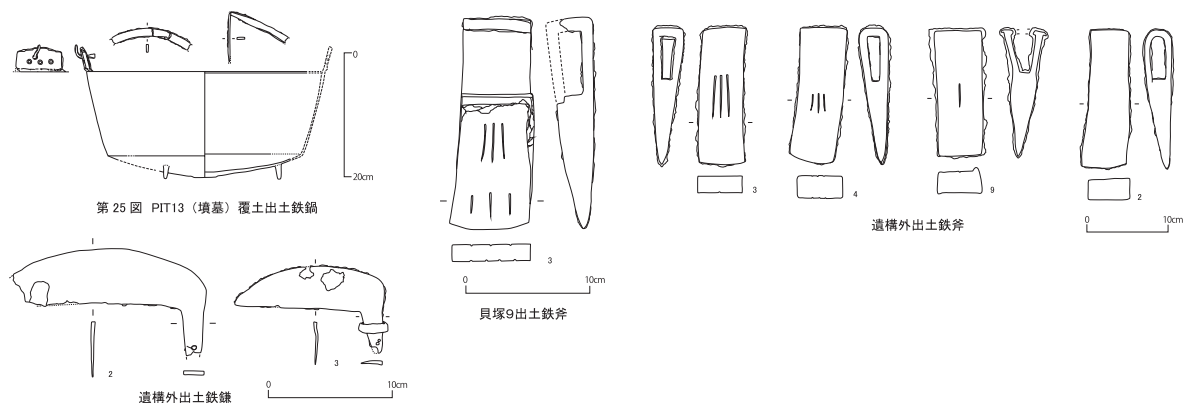
（3）金属製品

当遺跡では、2011年・2018年調査において、アイヌ文化期の金属製品が約150点出土した。斜里町内ではアイヌ文化期を含む遺跡として、オショコマナイ河口東遺跡（17世紀中頃～18世紀）やタンネウシ貝塚（17～18世紀前半）、オンネベツ川西側台地遺跡（18～19世紀）、クシュンコタン遺跡（18～19世紀）等がある。オンネベツ川西側台地遺跡を除く他の遺跡では、金属製品や陶磁器等の出土は少なく、動物遺存体が多い（松田1993）。ここでは、当遺跡の2018年調査で出土した鉄鍋、鉄斧、鉄鎌について、オンネベツ川西側台地遺跡の出土例と比較検討する。

オンネベツ川西側台地遺跡（斜里町教委1993）からは、吊耳鉄鍋や鉄斧、鉄鎌、小刀、鉄釘などの金属製品のほか、陶磁器も多く出土している。このうち、Pit13（墳墓）とそこから7m以上離れた包含層から鉄鍋片が出土し、接合した（図Ⅸ-5）。丸型湯口の吊耳鉄鍋で、吊耳部分には孔が4つあり脚は3本である。口径は約37cm底径が約30cmで、当遺跡出土の鉄鍋（図Ⅲ-49）と口径や底径（推定値）、吊耳部の形状や孔の数、孔の位置が類似している。オンネベツ川西側台地遺跡で出土した鉄斧（縦斧・鋌）には、当遺跡で出土した鉄斧（図Ⅲ-48-3）と同様に鑿で筋目が刻まれているものがある（図Ⅸ-5）。貝塚9出土の斧身の片面には、3本の筋目が2か所に刻まれ、断面図を見るともう一方には4本の筋目が確認できる。また、遺構外出土の鉄斧にも、3本や1本の筋目が認められるものがある。斧身に刻まれた筋目には様々な意味がある。このうち、三本の筋目は「ミキ＝御神酒」を意味し、四本の場合は「ヨキ＝地・水・火（陽）・風」または「五穀」四方山の山海の幸を表し、お供え物の代わりに斧に彫って代わりとした。伐採前には斧を木に立てかけて、押んでから伐った。（西岡1991）。また、3本と4本の筋目を合わせて7本になることから、斧のことを「ナナツメ」と呼ぶ場合もあり、「魔よけ」や「幸運を招く」などの説もある（朝岡1984）。立木を伐り倒す伐採斧（縦斧）には筋目が刻まれている例が多く見受けられるが、斬などの伐採後の加工具にはないようである。北海道では16世紀頃に袋状鉄斧から柄の装着部が方形または台形の孔式鉄斧（縦斧）に代わる（笹田2013）。この時期から出土する縦斧（鋌）の斧身の一方または両側には、鑿で筋目が刻まれたものが多く出土している。オンネベツ川西側台地遺跡で出土している鉄斧の中には筋目が一本のものや、認められないものもあるが、錆瘤で筋目が確認できない場合がある事が考えられる。

カモイベツ遺跡出土の鉄鎌（図Ⅲ-48-1）と、オンネベツ川西側台地遺跡で出土した鉄鎌（図Ⅸ-5）は、有茎で目釘穴があり、腰から刃先にかけて90度に近い形態は共通である。しかしカモイベツ遺跡出土のものは刃部が曲刃であり、オンネベツ川西側台地遺跡で出土した広刃で直刃タイプの鉄鎌とは刃部の形状に違いが見られる。広刃・直刃の鉄鎌は信州・播州型と呼ばれて東日本に多く、刃部幅が狭く湾曲する形態は伊賀・越前型に代表されて西日本に多い形態である（笹田2013）。

このほかに和釘も出土しているが、カモイベツ遺跡の立地を考慮すると、釘類は再利用または再加工するために持ち込まれた可能性が考えられる。（笠原）



図区-5 オンネベツ川西側台地遺跡出土の鉄製品 (鉄鍋・鉄斧・鉄鎌)

(4) 動物遺存体・骨角器

オホーツク文化期

動物遺存体は、主に竪穴住居跡から出土した。骨塚は検出されず、炉から確認されたものがほとんどである。同定・分析結果によると (VIII章3・4)、サケ科を主体とした魚骨を主体とし、キツネなどの中型陸獣、アザラシなどの海獣類、ウミスズメなどの鳥類が確認されている。一方、オホーツク文化に典型的なヒグマ、エゾシカ、オットセイのほか、アホウドリがみられない。出土内容からは、狩猟・漁撈の時期や場所が限定的で、沖合ではなく沿岸域や河口域を中心とした生業活動が行われていたことを示唆しており、典型的なオホーツク文化の主体となる海棲動物に依拠した生業とは異なる様相である、と考察された。ただし限定された調査範囲での資料であることに注意が必要である。前記の竪穴住居跡床面の集石土坑や小型竪穴は、これらの加工の場として機能していた可能性がある。

なおオホーツク文化期に属する骨角器は出土しなかった。

アイヌ文化期

貝・骨ブロックおよび周辺包含層から動物遺存体が多数出土した。同定・分析結果によると (VIII章5)、貝類はピノスガイが主体でウバガイが続き、現在の峰浜～以久科の海岸に打ちあがっている貝類に近似する。また魚類は、カジカ科をはじめ沿岸域や河口域に生息する各種があり、「カムイ・チェプ (神・魚)」であるサケを含め全体的に大型の個体が多いようである。なかでも出土量がわずかなオオカミウオは、岩礁域に生息する体長1m以上の大型魚種で、豊漁を呼び込む「チェプ・カムイ (魚・神)」として特別視されていたとみられる。陸獣はエゾシカが主体で、各部位が広域に散在していた。猟犬などとして身近な存在であったと考えられるイヌは埋葬された出土状況を示しておらず、食用にするために解体された可能性がある、とのことである (VIII章5)。

全体として貝類の採集と漁撈が生業の主体であり、周辺に生息する動物を利用しているものの、陸獣類や海獣類はエゾシカを除いて利用された種が少ないようである。ただし限定された調査範囲から得られた資料であることに注意が必要である。

これらのうち、エゾシカなどの陸獣やアザラシなどの海獣の骨片を利用した骨角器等が少数出土した。ヒグマの尺骨を含め、多くは加工残片や原材であり、骨角器製作の際の残渣が各ブロックに遺棄されていた。製品は少数で、銚頭・中柄などの漁具、刺突具、装飾品がある。銚頭は作り出しによるものと、金属製鎌との組み合わせによるものがあり、後者は目釘穴があり銅鎌の基部が残存するものがある。いずれも幅2cm以下の小型のもので、沖合の大型海棲動物を対象とした狩猟ではなく、沿岸域や河口域における漁撈に用いられたと考えられる。

(阿部)

引用・参考文献

論文・書籍・資料等

- 秋葉 實 1994 『松浦武四郎知床紀行集』
- 朝岡康二 1984 『鍛冶の民俗技術』考古民俗叢書20 慶友社
- 朝岡康二・工藤員功・田邊 悟・田村 善次郎 1997 『日本民具辞典』日本民具学会 ぎょうせい
- 天野哲也 2003 「オホーツク文化前期の地域開発について」『北海道大学総合博物館研究報告』第1号
- 荒田治他 1979 「斜里平野の地形」『知床博物館研究報告』第1集
- 石川 朗 2004 「石器・石製品－道東・道北」『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館
- 大井晴男 1984 「斜里町のオホーツク文化遺跡について」『知床博物館研究報告』第6集
- 小野哲也・赤沼英男・近藤宏樹・中村俊夫・日時和哉 2015 「前近代の北方社会における鉄器流通実態の解明(1)」『岩手県立博物館研究報告』第32号
- 金盛典夫 1982 「北見地方の土器」『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』雄山閣
- 萱野 茂 1978 『アイヌの民具』『アイヌの民具』刊行委員会
- 岸本博志・長谷川 健他 2009 「最近約1万4千年間の摩周火山のテフラ層序と噴火様式」『火山』第54巻第1号
- 工藤研治 2004 「続縄文文化の土器」『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・擦文文化』小学館
- 隅田まり 1988 「斜里地域におけるテフラ層序」『知床博物館研究報告』第9集
- 熊木俊明 1997 「宇津内式土器の編年－続縄文土器における文様割りつけ原理と文様単位(1)」『東京大学考古学研究室研究紀要』第15号 東京大学考古学研究室
- 熊木俊朗 2001 「第四章 考察 第三節 後北C₂・D式土器の展開と地域差」『トコロチャシ跡遺跡』東京大学大学院人文社会系研究科
- 熊木俊朗 2003 「道東北部の続縄文文化」『新 北海道の古代 2 続縄文・オホーツク文化』北海道新聞社
- 熊木俊朗 2009 「続縄文文化」『知床の考古』北海道新聞社
- 河野広道・宇田川 洋編 1981 『河野広道ノート 考古篇 1 ー北海道東部の考古学的調査ー』
- 古泉 弘 1993 「考古学からみた日本のきせる」－考古資料にみるきせるとパイプー たばこと塩の博物館
- 合地信生 2007 「知床平野」『知床の地質』しれとこライブラリー 8
- 合地信生・松田 功 2004 「峰浜海岸1遺跡出土のベニガラ形成温度」『知床博物館研究報告』第25集
- 越田賢一郎 1984 「北海道の鉄鍋について」『物質文化』第42号
- 越田賢一郎 1988 「北海道における中・近世考古学の現状と課題」『物質文化』第50号
- 児平英司 1996 「完新世における斜里地域の古環境復元」『知床博物館研究報告』第17集
- 児玉大成 2002 「縄文時代におけるベンガラ生産の一樣相 ー宇鉄遺跡出土赤鉄鉱の考古学的分析ー」『青森県考古学会30周年記念論集』青森県考古学会
- 斎藤正雄・五十嵐昭明 1965 「知床半島の褐鉄鉱鉱床の特異性」講演要旨 月報Vol.16 No.5 工業技術院地質調査所
- 斎藤正雄 1967 「知床半島の褐鉄鉱鉱床」『北海道金属非金属鉱床総覧』工業技術院地質調査所
- 笹田朋孝 2013 『北海道における鉄文化の考古学的研究 ー鉄ならびに鉄器の生産と普及を中心としてー』北海道出版企画センター
- 佐野絵里・松田 功 1998 「斜里町の風と防風林の関係」『知床博物館研究報告』第19集
- 澤 四郎 1982 「釧路地方の土器」『縄文文化の研究 6 続縄文・南島文化』雄山閣
- 斜里町史第三巻編纂委員会 2004 『斜里町史 第三巻』斜里町
- 斜里町・斜里町教育委員会 2005 『知床の植物I』しれとこライブラリー 6
- 斜里町・斜里町教育委員会 2006 『知床の植物II』しれとこライブラリー 7
- 斜里町・斜里町教育委員会 2008 『知床の考古』しれとこライブラリー 9
- 館脇 操 1954 『知床半島の植生』北見営林局
- 土居繁雄・松井公平 1960 『斜里町海別岳山麓地域の褐鉄鉱鉱床調査概報』知床半島地下資源開発調査 北海道開発局官房開発調査課 北海道立地下資源調査所
- 土居繁雄・松井公平 1961 『斜里郡斜里町海別岳および遠音別岳の周辺地域褐鉄鉱鉱床調査報告』知床半島地下資源開発調査報告 北海道開発局官房開発調査課 北海道立地下資源調査所

- 中田裕香 2004 「オホーツク・捺文文化の土器」『考古資料大観 第11巻 続縄文・オホーツク・捺文文化』小学館
- 中村 誠 1980 「斜里平野の地形」『知床博物館研究報告－追加報告－』第2集
- 長沼 孝 1998 「旧石器時代の赤色顔料」『考古学ジャーナル』No. 438 11月号 ニュー・サイエンス社
- 西岡常一 1991 『木に学べ 法隆寺・薬師寺の美』小学館
- 平河内 毅 2018 『丘に眠るオホーツク文化』斜里町立知床博物館
- 福井淳一 2001 「旧石器時代の顔料とその生産－北海道柏台1遺跡出土顔料関連遺物の分析を中心に－」『北海道考古学』第37輯
- 松井 章 編 2006 『動物考古学の手引き』独立行政法人文化財研究所 奈良文化財研究所埋蔵文化財センター
- 松田 功 2004 「【文化編】第一章 先史」『斜里町史 第三巻』
- 村松貞次郎 1973 『大工道具の歴史』岩波新書
- 村本周三 2013 「斜里平野における縄文時代前期の石器群」『北海道考古学』第49輯 北海道考古学会
- 村本周三 2014 「オホーツク海沿岸南部における縄文時代後期前葉の土器」『美幌博物館研究報告』第21号
- 村本周三 2016 「北海道斜里平野における縄文時代中期～後期前半の石器群」『北海道考古学』第52輯 北海道考古学会
- 森 秀行 1993 「北海道の遺跡から出土した金属製煙管の実年代」『北海道考古学』第29輯
- 山元孝広・伊藤順一他 2010 「北海道東部、屈斜路・摩周カルデラ噴出物の放射性炭素年代値」『地質調査研究報告』第61巻第5/6号
- 吉川金次 1984 『ものと人間の文化史 斧・鑿・鉋』法政大学出版局
- 柳沢清一 2008 『北方考古学の新天地－北海道島・環オホーツク海域における編年体系の見直し－』六一書房

図録・図鑑類

- 伊藤 務 2001 『民具図録』網走市立郷土博物館友の会
- 梅沢 俊 2007 『新北海道の花』北海道大学出版会
- 河井大輔・川崎康弘・島田明英 2003 『北海道野鳥図鑑』^{ありす}亜璃西社
- 木野田君公 2006 『札幌の昆虫』北海道大学出版会
- クリス・ペラント 1997 『岩石と鉱物の写真図鑑』日本ヴォーグ社
- 鮫島惇一郎・辻井達一・梅沢 俊 1993 『新版 北海道の花<増補版>』北海道大学図書刊行会
- 斜里町立知床博物館 1979 『知床の蝶』郷土学習シリーズ 第1集
- 斜里町立知床博物館 1980 『斜里海岸の植物』郷土学習シリーズ 第2集
- 斜里町立知床博物館 1986 『第8回特別展 斜里平野の生いたち』
- 斜里町立知床博物館 1992 『第13回特別展 近世の斜里』
- 斜里町立知床博物館 1994 『第15回特別展 峰浜のむかし』
- 斜里町立知床博物館 2012 『野外図鑑 オホーツク海岸の石』
- 辻井達一・梅沢 俊・佐藤孝夫 1992 『新版 北海道の樹』北海道大学図書刊行会
- 堀 繁久 2006 『探そう! ほっかいどうの虫』北海道新聞社
- 牧野富太郎 1996 『改訂版 原色牧野植物大図鑑 合弁花・離弁花編』北隆館
- 上田吉幸・前田圭司・嶋田 宏・鷹見達也編 2003 『漁業生物図鑑 新 北のさかなたち』水島敏博・鳥澤 雅
監修 北海道新聞社
- 米田正義・小村建夫ほか 1989 『竹中大工道具館 展示解説』

発掘調査報告書

- 網走市教育委員会 2009 『史跡最寄貝塚』
- 枝幸町教育委員会 1985 『ホロベツ砂丘遺跡』
- 小清水町教育委員会・札幌大学埋蔵文化財展示室 2003 『アオシマナイ遺跡』
- 豊原熙司・坂井通子・岡 奈穂美 2012 「平成20(2008)年度ウトロ遺跡町道地点発掘調査報告」『知床博物館研究報告』第34集 斜里町立知床博物館
- 東京大学文学部 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』上巻
- 東京大学文学部 1963 『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡』下巻

- 根室市教育委員会 1994 『根室市コタンケシ遺跡発掘調査報告書』
北海道開拓記念館 1995 『雄武堅穴群遺跡』北海道開拓記念館研究報告第14号
北海道立北方民族博物館 2010 『能取岬西岸遺跡』北方民族博物館研究報告 3
松下 亘・米村哲英・畠山三郎太・安部三郎 1964 『知床岬—知床半島の古代文化をさぐる—』網走市郷土博物館報告
村田良介・松田 功・萩野幸男 1995 「ウナベツチャシ」『知床博物館研究報告』第16集
羅臼町教育委員会 1980 『船見町高台遺跡』羅臼町文化財報告 4
羅臼町教育委員会 1991 『オタフク岩遺跡』羅臼町文化財報告14
羅臼町教育委員会 1996 『相泊遺跡(2)』羅臼町文化財報告16
利尻富士町教育委員会 2011 『利尻富士町役場遺跡発掘調査報告書Ⅱ』

【斜里町教育委員会】

- 1973 『宇津内遺跡』
1980 『知床国立公園・幌別川口遺跡発掘調査報告書』
1983 『尾河台地遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告Ⅱ
1993 『オシヨコマナイ河口東遺跡 オタモイ 1 遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告Ⅴ
1993 『オンネベツ川西側台地遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告Ⅵ
1994 『シュマトカリベツ 9 遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告Ⅶ
1995 『オシャマップ川遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告Ⅷ
1998 『朱円24遺跡・ウナベツ 3 遺跡・ウナベツ11遺跡発掘調査概要報告書』
1999 『ボンシュマトカリベツ13遺跡・ボンシュマトカリベツ11遺跡・峰浜海岸 1 遺跡・ボンシュマトカリベツ 9 遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告Ⅹ
2007 『峰浜海岸 1 遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告書ⅩⅩⅩ
2008 『シュマトカリベツ12遺跡・シュマトカリベツ13遺跡・峰浜 8 線遺跡発掘調査概要報告書』
2009 『カモイベツ遺跡 発掘調査概要報告書』
2010 『カモイベツ遺跡 発掘調査概要報告書』
2011 『ウトロ遺跡』斜里町文化財調査報告書ⅩⅩⅩⅡ
2011 『朱円25遺跡・峰浜海岸 1 遺跡・ボンシュマトカリベツ 1 遺跡・峰浜 8 線遺跡発掘調査概要報告書』
2012 『カモイベツ遺跡 発掘調査概要報告書』
2012 『道営畑総緊急発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告書ⅩⅩⅩⅣ
2013 『峰浜 8 線遺跡発掘調査報告書』斜里町文化財調査報告書ⅩⅩⅩⅤ
2013 『カモイベツ遺跡 発掘調査概要報告書』
2018 『チャシコツ岬上遺跡 総括報告書』斜里町文化財報告ⅩⅣ

【財団法人北海道埋蔵文化財センター】

- 2000 『千歳市 ユカンボシC15遺跡(3)』北埋調報146
2002 『白老町 虎杖浜 2 遺跡(2)』北埋調報172
2005 『根室市 穂香川右岸遺跡』北埋調報212
2008 『釧路市 ^{てんねる}天寧 1 遺跡』北埋調報254
2012 『鶴居村 ^{しもほろろ}下幌呂 1 遺跡』北埋調報287

【公益財団法人北海道埋蔵文化財センター】

- 2015 『根室市 トーサムポロ湖周辺堅穴群(1)』北埋調報317
2016 『根室市 トーサムポロ湖周辺堅穴群(2)』北埋調報324
2018 『調査年報 30 平成29年度』
2019 『調査年報 31 平成30年度』
2019 『根室市 温根沼 2 遺跡』北埋調報354
2019 『根室市 ^{べっとうが}別当賀一番沢川遺跡』北埋調報355

【北海道立埋蔵文化財センター】

- 2012 『斜里町 斜里朱円周堤墓』重要遺跡確認調査報告書第 8 集

写真図版



ウナベツ岳

図版 1～8	カラー写真	現地調査状況
図版 8	カラー写真	出土遺物
図版 9～40	モノクロ写真	現地調査状況
図版 41～80	モノクロ写真	出土遺物



1 調査状況 (2018年・調査区中央部)



2 基本土層 (2018年・I105区)



3 調査区北壁土層 (2018年・J82区)



4 礫浜と土層 (2018年・J53区付近)



5 調査区北壁土層 (2018年・J35区)



6 アイヌ文化期調査状況 (2018年・調査区東部)



1 調査状況(2008年・調査区中央部 西から)



2 調査区土層(2008年・中央東部)



3 調査状況(2009年・調査区中央部 東から)



4 調査区土層(2009年・a147区)



5 調査状況と土層(2011年A・K152区 北西から)



6 礫層検出(2011年・南部)



1 基本土層 (2011年B・D140区 西から)



2 調査状況 (2011年B・IX層 北西から)



3 調査状況 (2012年・VIII層下 東から)



4 低地部土層 (2012年・E108区 西から)



5 砂丘部土層 (2012年・E91区 南から)



1 H-1(2号址)石組炉 (南から)



2 H-8(6号址)炉・貼床 (南から)



3 H-12(8号址)集石 (北から)



4 H-17(51号址)石組炉 (南から)



5 H-19 HF-1 土層断面 (南から)



6 H-19 HF-2 土層断面 (南から)



7 H-21 HF-1 土層断面 (西から)



8 H-22 HF-1 土層断面 (西から)



1 SF-1 (13号址)検出 (南から)



2 SF-2 (10号址)検出 (南東から)



3 SF-4 (31a号址)検出 (東から)



4 SF-5 (石組炉)検出 (東から)



5 SF-6 (PIT16)検出 (北から)



6 SF-7 (PIT12)火床面検出 (南から)



7 SF-8 (PIT30B)検出 (南西から)



8 SF-9 (PIT35)検出 (北から)



1 F-1(22号址)検出 (南から)



2 F-4(PIT 1)検出 (北から)



3 F-7(PIT22)焼砂検出 (北から)



4 F-21(PIT66)検出 (東から)



5 F-26(PIT34)検出 (東から)



6 F-29(PIT39)検出 (東から)



7 F-33(焼土 1)検出 (北東から)



8 F-39(焼土 6)土層断面 (南西から)



1 F-42(PIT45)検出 (西から)



2 F-45(焼砂)検出 (北から)



3 F-55(PIT73)土層断面 (西から)



4 F-60土層断面 (北西から)



5 F-61土層断面 (西から)



6 F-62-63土層断面 (北西から)



7 F-64~66検出・土層断面 (西から)



8 F-67~70検出・土層断面 (北から)



1 R-1 (29号址) 検出 (南から)



2 R-2 (PIT11) ベンガラ土層断面 (南から)



3 ベンガラ層検出 (E122区 東から)



4 R-10(ベンガラ範囲)ほか検出 (北から)



5 ベンガラ関連遺物 (2008・2011・2012年)



1 遺跡遠景（上空西から）



2 H-19付近調査状況（東から）



3 続縄文時代遺物出土状況（西から）



1 H-22 検出・遺物出土状況 (北から)



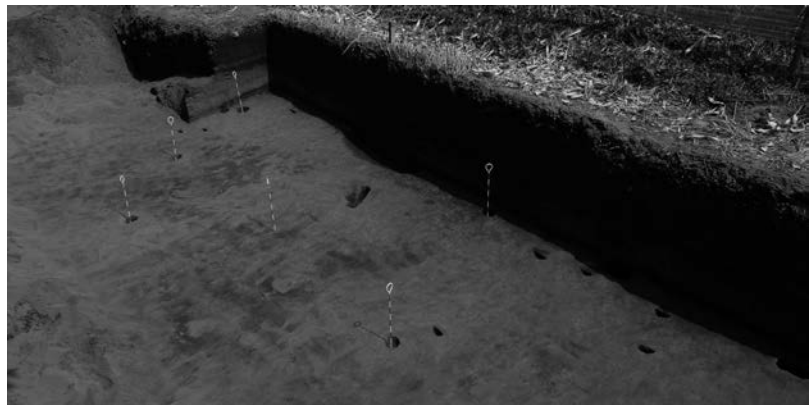
2 H-22 土器出土状況 (南から)



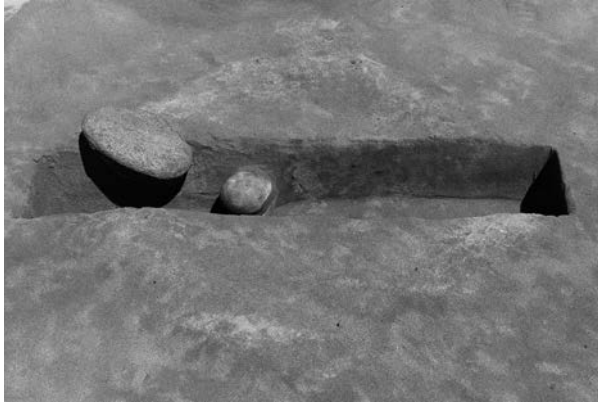
3 H-22 HF-1 検出 (北から)



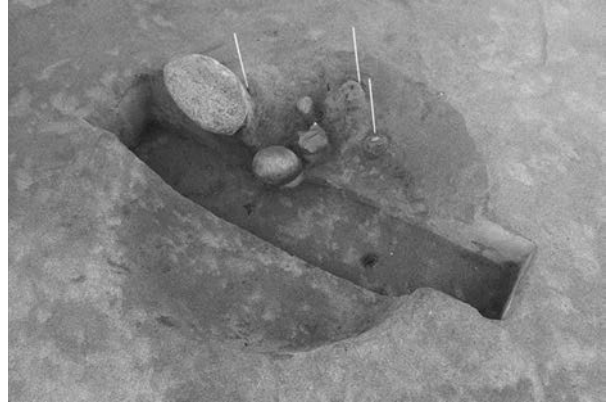
4 H-22 HP-6 メノウ埋設



5 H-22 完掘 (北西から)



1 P-29 土層断面 (南西から)



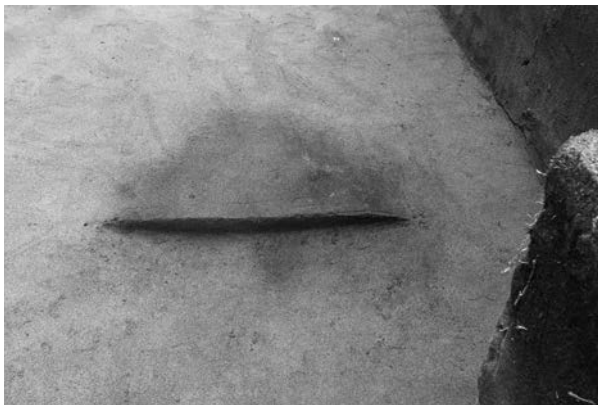
2 P-29 遺物出土状況 (南から)



3 SP-22~25 完掘 (北西から)



4 SP-28 礫出土状況



5 F-56 検出・土層断面 (西から)



6 F-57 検出・土層断面 (北から)



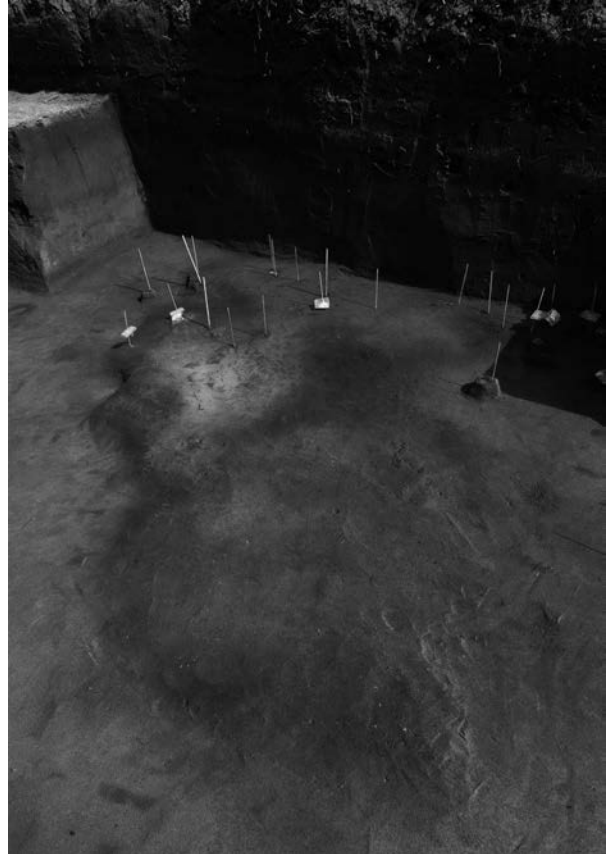
7 F-58 検出・土層断面 (北から)



8 F-59 検出・土層断面 (北から)



1 F-62・63 検出 (西から)



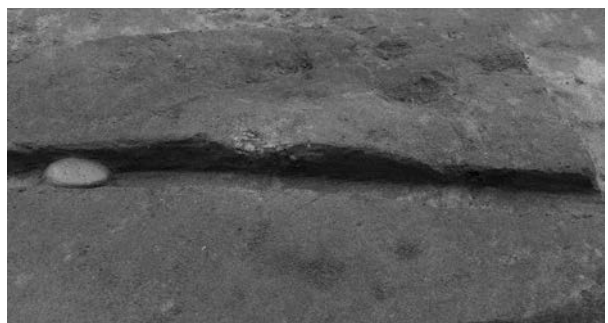
2 F-64～66 検出 (北西から)



3 F-67～70 検出 (北東から)



4 F-67 土層断面 (北から)



5 F-71 土層断面 (北から)



1 FC-12検出 (北西から)



2 FC-14検出 (北西から)



3 FC-15検出 (南から)



4 FC-16検出 (北西から)



5 石核出土状況 (北東から)



6 土器出土状況(後北C₁式) (北西から)



7 土器出土状況(後北C₂・D式) (北東から)



8 小型注口土器出土状況 (東から)



1 H-19 覆土遺物出土状況



2 H-19 東西土層断面 (南西から)



3 H-19 南北土層断面 (東から)



4 H-19 HF-1 完掘 (南東から)



5 H-19・20 完掘 (南東から)



1 H-20 南北土層断面 (東から)



2 H-20 床面検出 (南東から)



3 H-21 検出 (北東から)



4 H-21 土層断面 (北東から)



5 H-21 完掘 (北から)



1 PS-31 検出 1 (南西から)



2 PS-31 検出 2 (南東から)



3 PS-31 検出 3 (南東から)



4 PS-31 土層断面 (南東から)



5 PS-31 炭化材出土状況 (南東から)



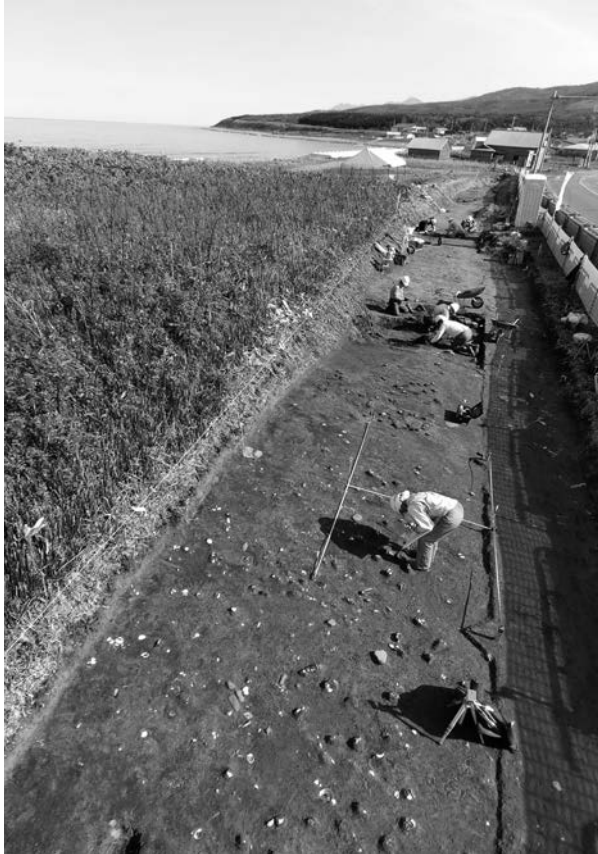
6 S-11 検出 (南東から)



7 S-12 検出 (南から)



8 FC-11 検出 (北東から)



1 貝・骨ブロック調査状況 (西から)



2 SB-1検出 (南東から)



3 SB-2検出 (南西から)



4 SB-3検出 (南東から)



5 SB-3骨角器出土状況



6 SB-3下位灰層検出 (南東から)



7 SB-3下位灰層断面 (東から)



1 SB-4 検出 (西から)



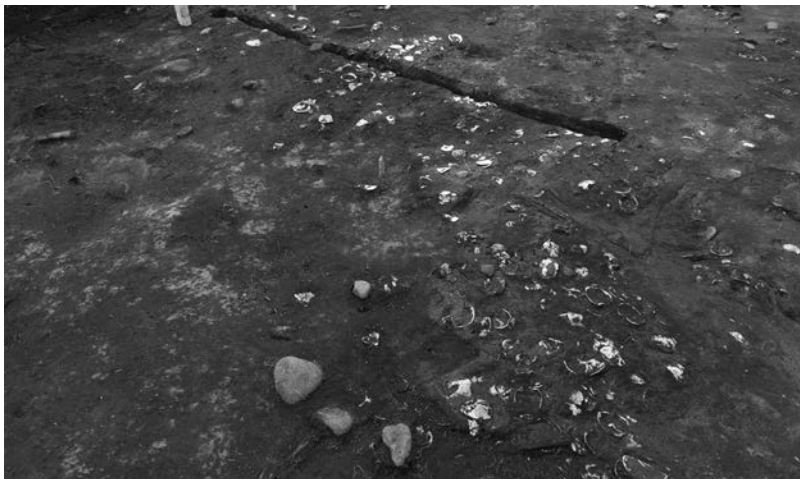
3 SB-4 海獣頭蓋骨出土状況



2 SB-4 灰層断面 (西から)



4 SB-4 シカ顎骨出土状況



5 SB-5 検出 (北東から)



7 SB-5 樹皮出土状況



6 SB-5 土層断面 (南西から)



8 SB-5 鹿角加工品出土状況



1 SB-6検出 (南東から)



3 SB-8検出 (南東から)



2 SB-6灰層断面 (北から)



4 SB-8灰層断面 (南から)



5 SB-9検出 (北東から)



6 SB-9灰層獣骨出土状況 (南西から)



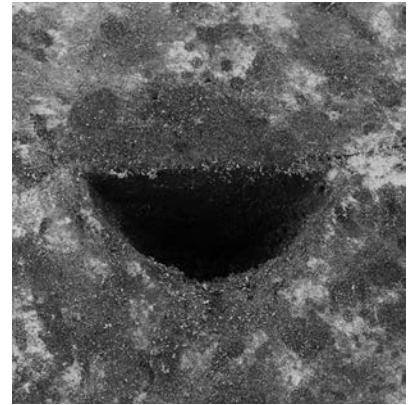
7 SB-10検出 (北から)



8 SB-10土層断面 (北から)



1 SP-32 ~ 34 検出 (南西から)



2 SP-32 断面 (南から)



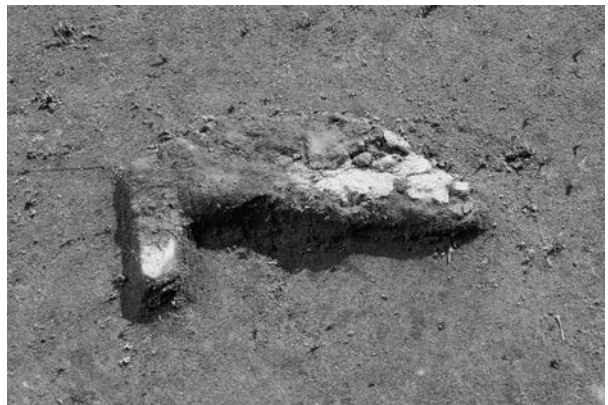
3 S-13 検出 (北西から)



4 S-14 検出 (南西から)



5 II層鉄斧出土状況 (西から)



6 II層鎌出土状況 (北から)



7 貝・骨等水洗乾操作業



8 水洗後の魚骨等



1 調査状況 (東から)



2 H-17(51号址) 検出 (北から)



3 H-16(25号址) 検出 (北から)



4 同 倒立土器出土状況



5 H-18(24号址) 完掘 (北から)



6 柱穴列H-2(3号址) 検出



1 GP-2 (38号址) 検出 (北から)



2 GP-3 (44号址) 検出 (南から)



3 GP-3 (44号址) 遺体層 (南から)



4 GP-3 (44号址) 坑底 (北から)



5 P-4 (26号址) 完掘 (北から)



6 P-5 (28号址) 検出 (北から)



7 P-6 (47号址) 検出 (東から)



8 P-7 (43号址) 検出 (北から)



1 PS-5上位(37a号址)検出 (北から)



2 PS-5下位(37b号址)検出 (北から)



3 PS-7(23号址)検出 (南東から)



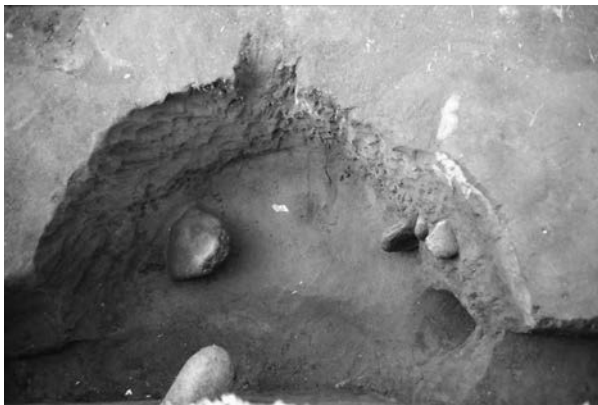
4 PS-8(40号址)検出 (南東から)



5 PS-9(48号址)検出 (南東から)



6 PS-10(49号址)検出 (南東から)



7 PS-11(46号址)検出 (南から)



8 PS-12(50号址)検出 (北から)



1 PS-13(45号址)断面 (南から)



2 PS-14(31b号址)検出 (北から)



3 PS-15(35号址)検出 (北から)



4 PS-17(53号址)断面 (南から)



5 PS-18(54号址)断面 (南から)



6 PS-20(33号址)検出 (北から)



7 PS-21(42号址)検出 (南から)



8 S-1(52号址)検出 (南から)



1 H-1(2号址)検出 (北から)



2 H-3(4号址)検出 (南から)



3 H-5(20号址)検出 (北東から) 4 H-6(19号址)検出 (南から)



1 H-7(5号址)検出 (西から)



2 H-8(6号址)検出 (南から)



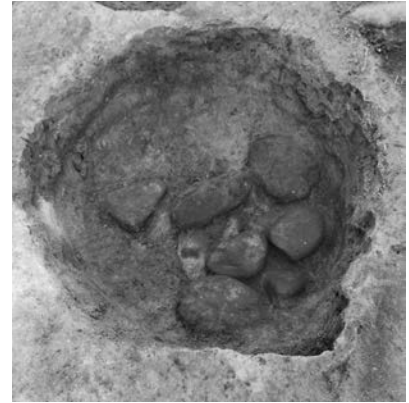
3 H-9・10(15a・b号址)検出 (南から)



4 同 遺物出土状況 (東から)



1 H-12(8号址)検出 (北西から)



2 同 集石下位 (西から)



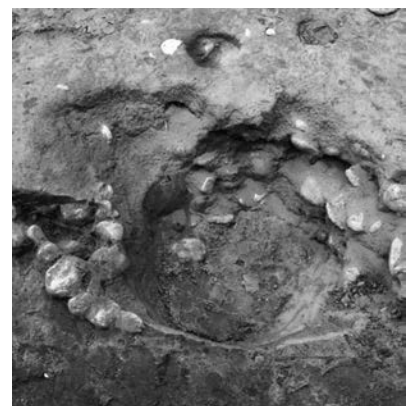
3 H-13(7号址)検出 (西から)



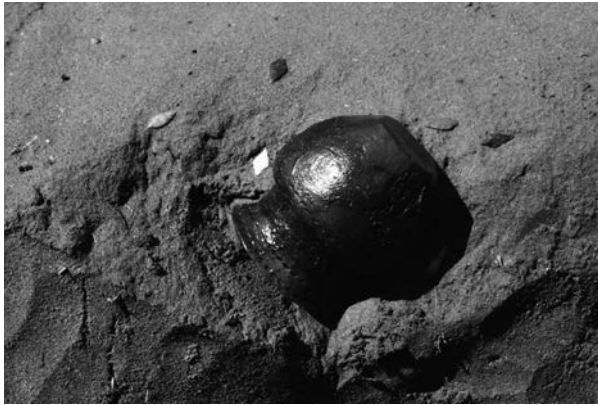
4 同 土坑下位 (北から)



5 H-14(9号址)検出 (北から)



6 同 土坑 (南から)



1 GP-1 (1号址) 土器出土状況 (南から)



2 GP-1 (1号址) 完掘 (北から)



3 PS-1 (32号址) 検出 (南から)



4 PS-2 (17号址) 検出 (南西から)



5 PS-3 (14号址) 検出 (南東から)



6 PS-4 (18号址) 検出 (西から)



7 調査区西部手稲式土器出土状況



8 調査区西部礫層検出 (西から)



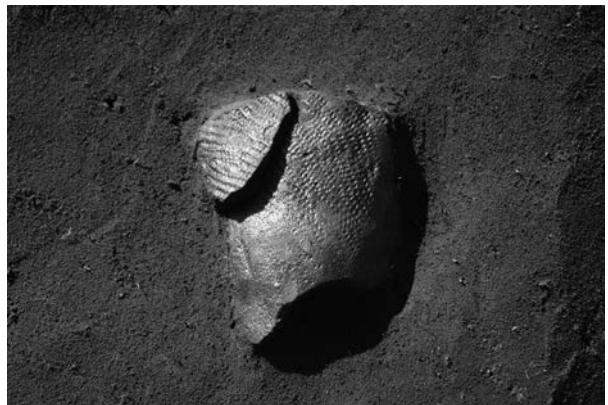
1 調査状況 (北から)



2 SF-5(石組炉)検出 (東から)



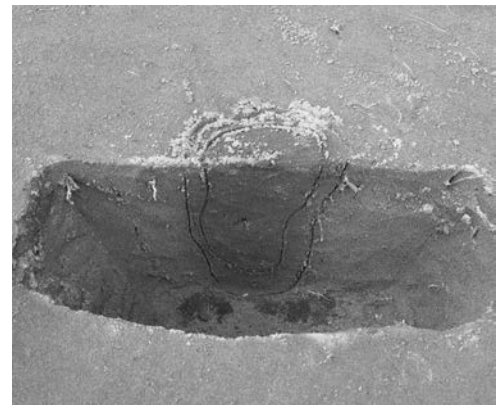
3 F-5 (PIT 2) 検出 (北から)



4 北筒式土器出土状況 (南から)



5 南端部調査状況 (北西から)



6 SP-1 (PIT11) 土層断面



7 P-8 (PIT14) 検出 (南から)



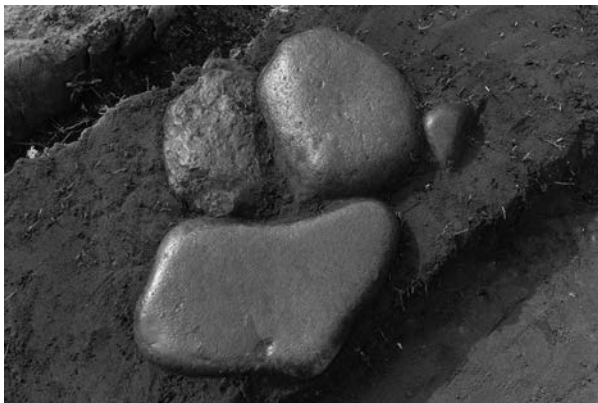
8 FC-1 泥岩片集中 (西から)



1 調査状況(「廃棄場」PIT 1 付近) (西から)



2 「廃棄場」土層断面(PIT 1 付近)



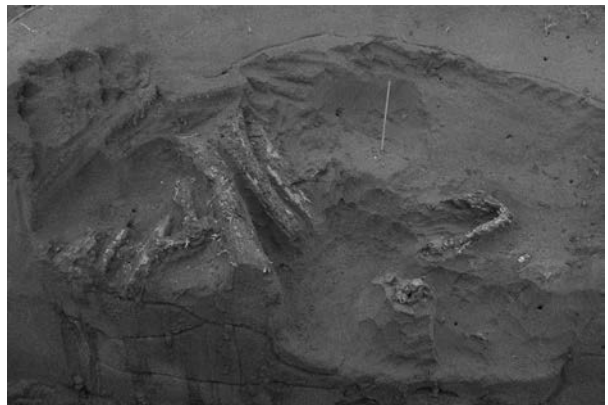
3 GP-4 (1号墓坑) 蓋石出土状況



4 同 上層人骨出土状況 (北から)



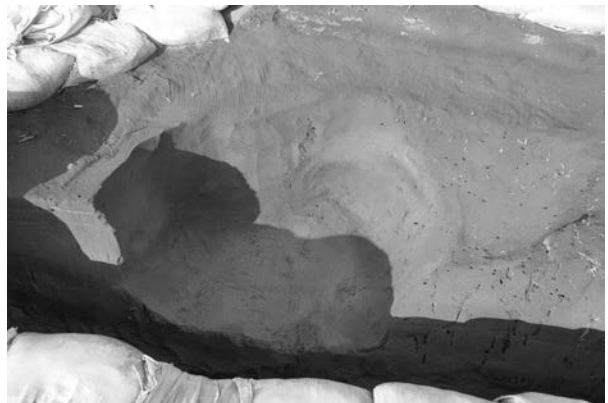
5 同 土層断面 (南から)



6 同 下層人骨出土状況 (南東から)



7 同 下層人骨顎骨出土状況 (南から)



8 同 完掘 (南東から)



1 P-9 (PIT13) 完掘 (北から)



2 P-10 (PIT 2) 完掘 (西から)



3 P-11 (PIT 5) 完掘 (南から)



4 P-12 (PIT25) 完掘 (南から)



5 P-13 (PIT 8) 完掘 (北から)



6 P S-22 (PIT 7) 検出 (南東から)



7 P S-23 (PIT17) 検出 (西から)



8 P S-24 (PIT15) 検出 (東から)



1 P-30(PIT21) 焼砂検出 (南から)



2 S-5 (PIT14) 検出 (北から)



3 S-6 (集石1) 検出 (西から)



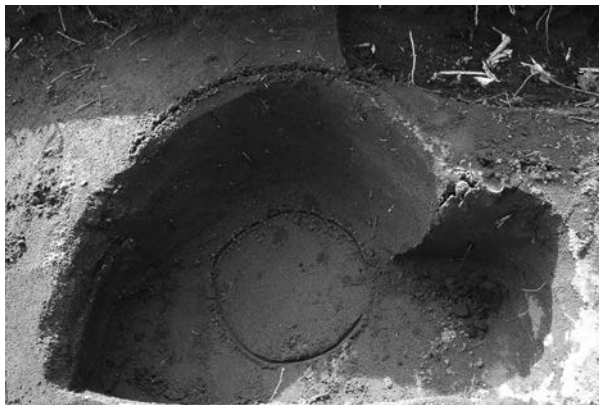
4 S-7 (PIT 6) 検出 (北東から)



5 「廃棄場」(PIT 1) 石製品出土状況



6 樹皮出土状況 (F 124区 西から)



7 SP-11(PIT 3) 完掘 (東から)



8 SP-12(PIT 4) 土層断面 (東から)



1 調査状況 (東から)



2 調査状況 (西から)



3 P-14(PIT53) 完掘 (北から)



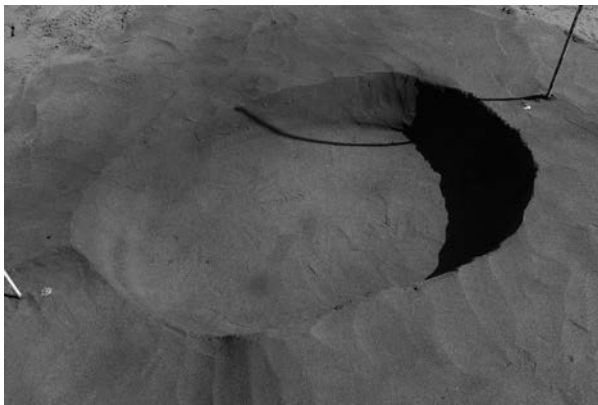
4 P-15(PIT27) 完掘 (東から)



5 P-16(PIT28) 検出 (北から)



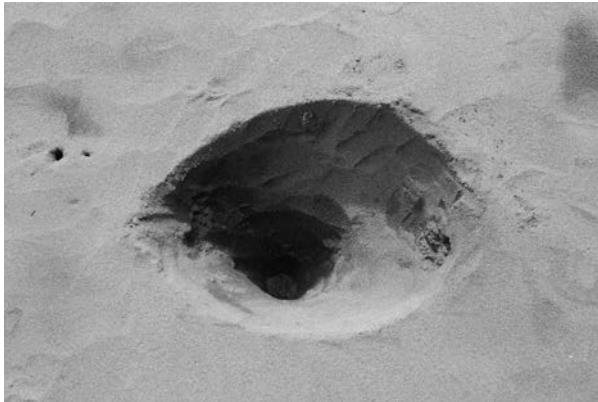
6 同 土器出土状況 (北から)



7 P-17(PIT47) 完掘 (北から)



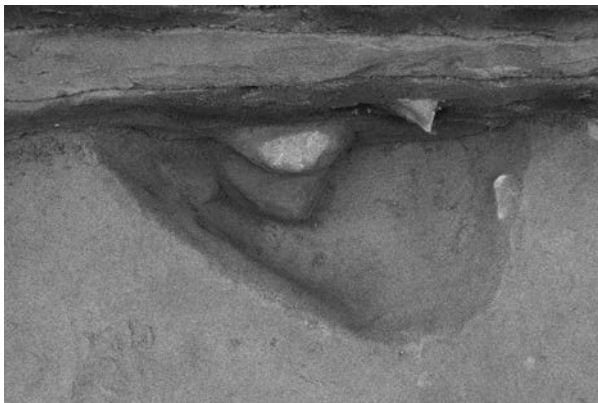
8 P-18(PIT29) 遺物出土状況 (西から)



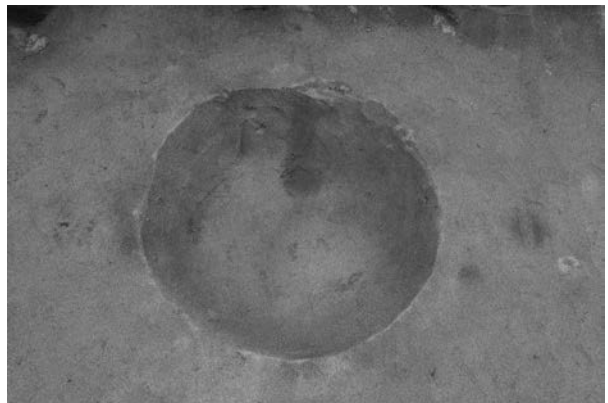
1 P-19(PIT45) 完掘 (東から)



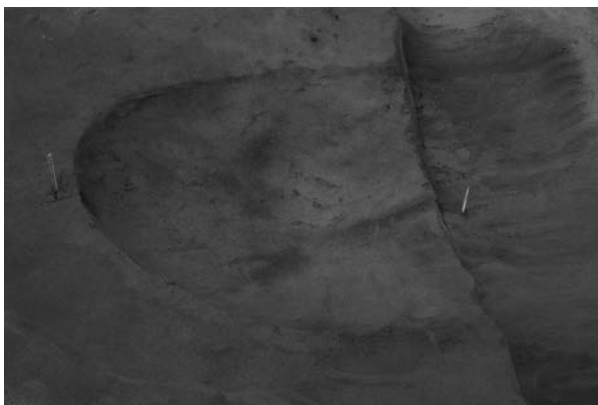
2 P-20(PIT65) 土層断面 (北から)



3 P-21(PIT63) 完掘 (北から)



4 P-22(PIT61) 完掘 (北から)



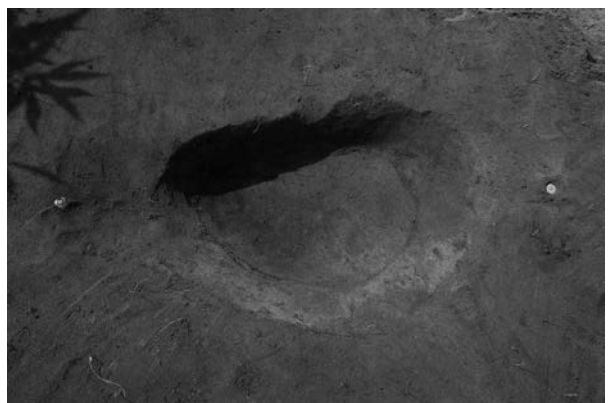
5 P-23(PIT30A) 完掘 (南から)



6 P-24(PIT31) 完掘 (南から)



7 P-27(PIT50) 遺物出土状況 (南東から)



8 P-28(PIT69) 完掘 (東から)



1 PS-25(配石1)検出 (北から)



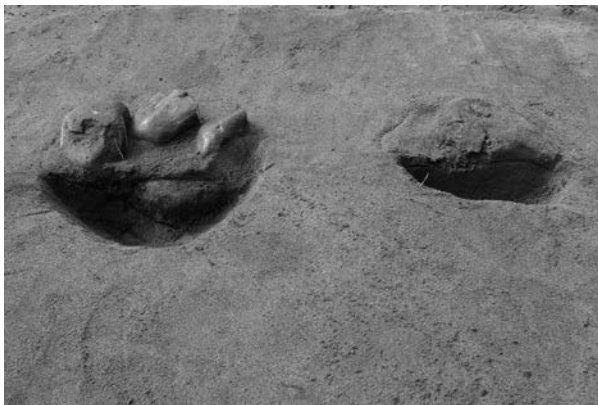
2 PS-26(配石3)検出 (南から)



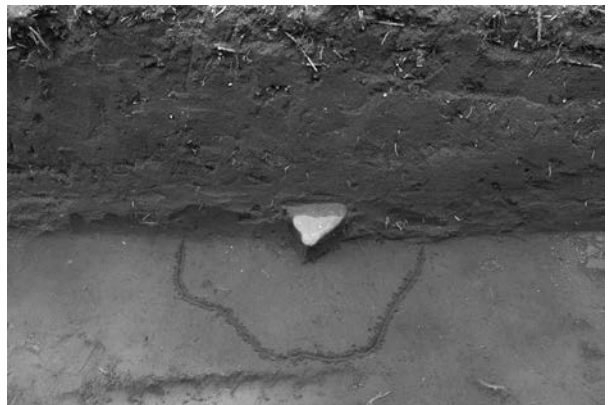
3 PS-27(PIT64)土層断面 (北から)



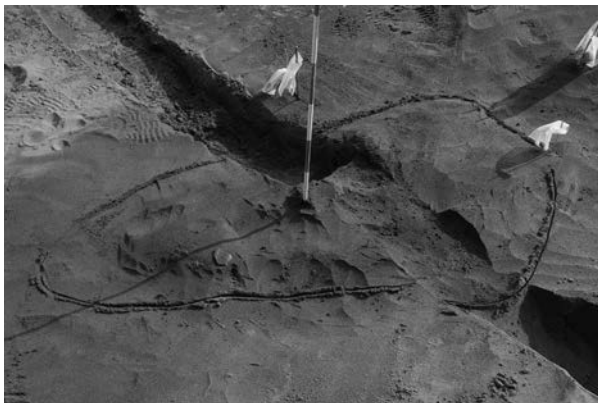
4 PS-28(PIT70)検出 (南から)



5 PS-29・30(PIT68・67)土層断面 (北から)



6 F-14(焼土2)検出 (北から)



7 F-16(焼土1)検出 (北から)



8 F-17(焼土2)検出 (北から)



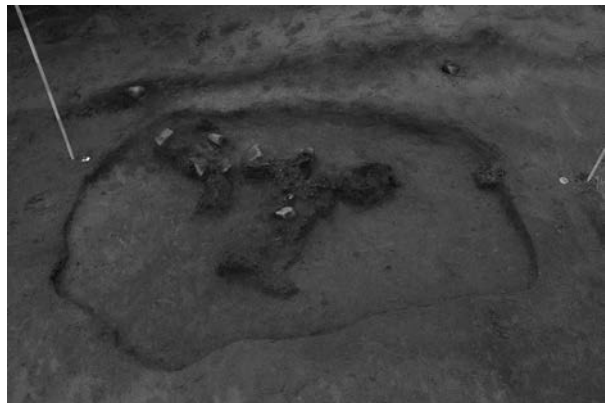
1 F-20(焼土3)検出 (東から)



2 F-22(焼土木炭範囲2)検出 (北から)



3 F-23(焼土木炭範囲1)検出 (西から)



4 F-24(骨・木炭範囲2)検出 (北から)



5 F-35(焼土4)断面 (南東から)



6 F-40(PIT54)検出 (南から)



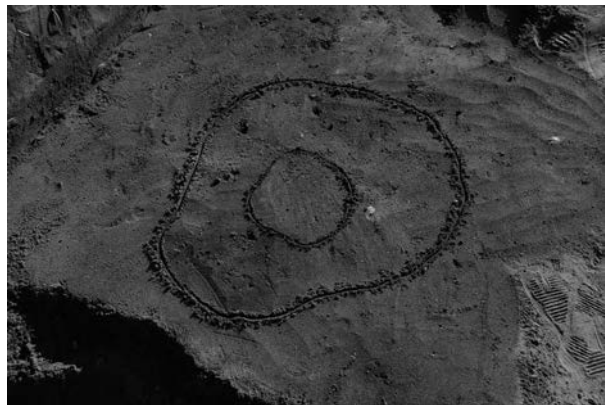
7 F-41(PIT55)検出 (南から)



8 F-43(PIT56)検出 (東から)



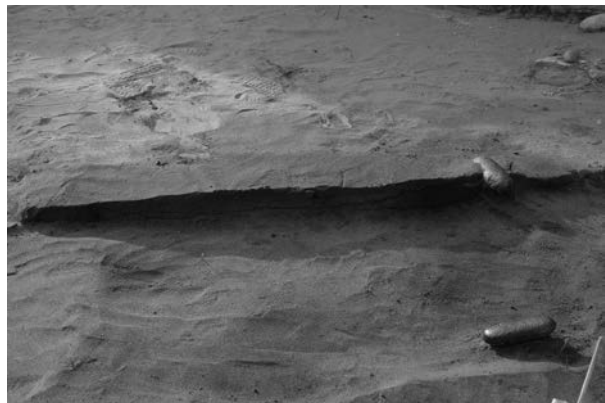
1 F-44(PIT52) 検出 (南東から)



2 F-46(PIT60) 検出 (東から)



3 F-47(PIT59) 検出 (北から)



4 F-50(PIT75) 土層断面 (南から)



5 S-8(集石) 検出 (北東から)



7 S-10(鯨骨・集石) 検出 (西から)



6 S-9(配石2) 検出 (北から)



1 FC-5 (石器集中) 検出 (南から)



2 FC-6 (石器集中) 検出 (南から)



3 FC-8 (石器集中) 検出 (東から)



4 FC-9 (石器集中) 検出 (西から)



5 埋設土器 2 (埋設土器) 検出 (西から)



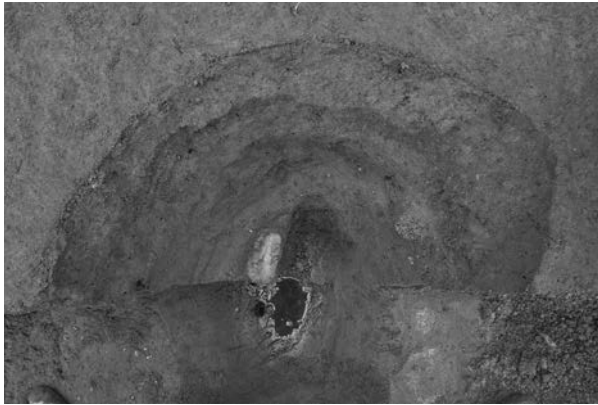
6 土器出土状況 (宇津内 II b 式 南から)



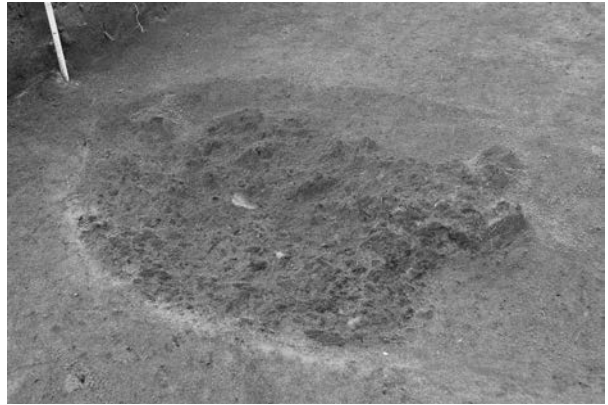
7 シカ歯列出土状況 (F 111 区 南東から)



8 鯨骨・樹皮出土状況 (F 91 区 北から)



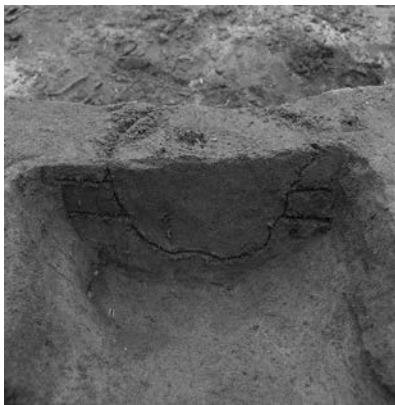
1 P-25(PIT42) 礫出土状況 (北から)



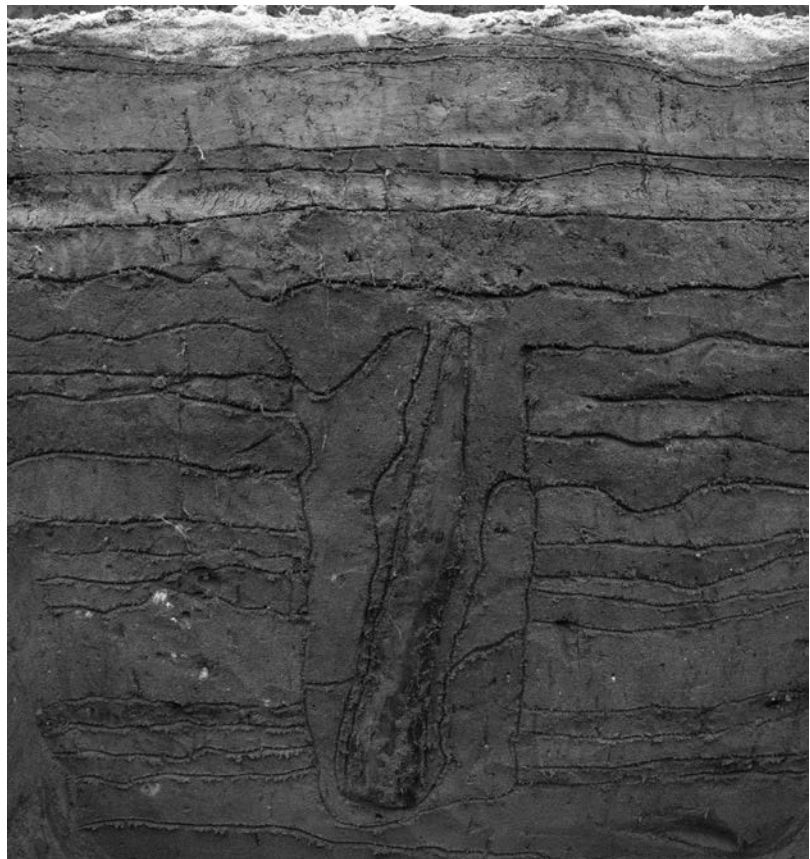
2 P-26(PIT43) 木炭検出 (東から)



3 SP-14(PIT41) 土層断面



4 SP-16(PIT62) 土層断面



5 SP-15(PIT44) 柱材・土層断面 (北から)



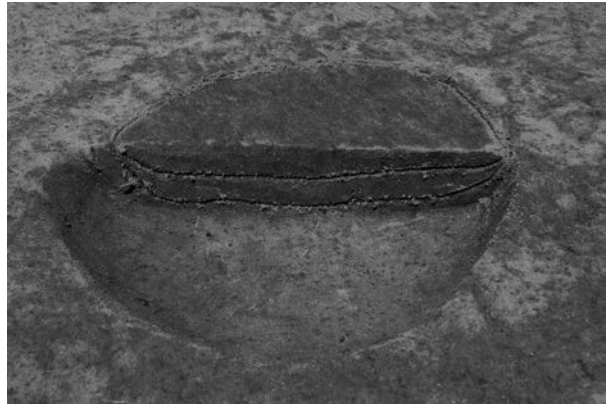
6 SP-17(柱穴) 検出 (北から)



7 SP-18(PIT57) 土層断面 (東から)



1 SP-19 (PIT49) 完掘 (北から)



2 F-34 (PIT40) 土層断面 (南から)



3 低地部調査状況 (南から)



4 低地部材出土状況 (南から)



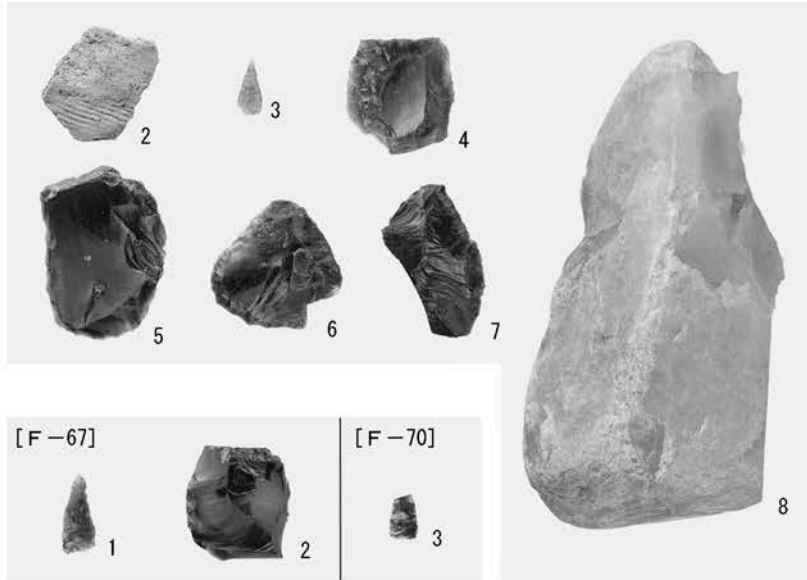
5 殖民軌道のレール (2018年)



6 完掘 (2011年 西から)



1 H-22出土の遺物



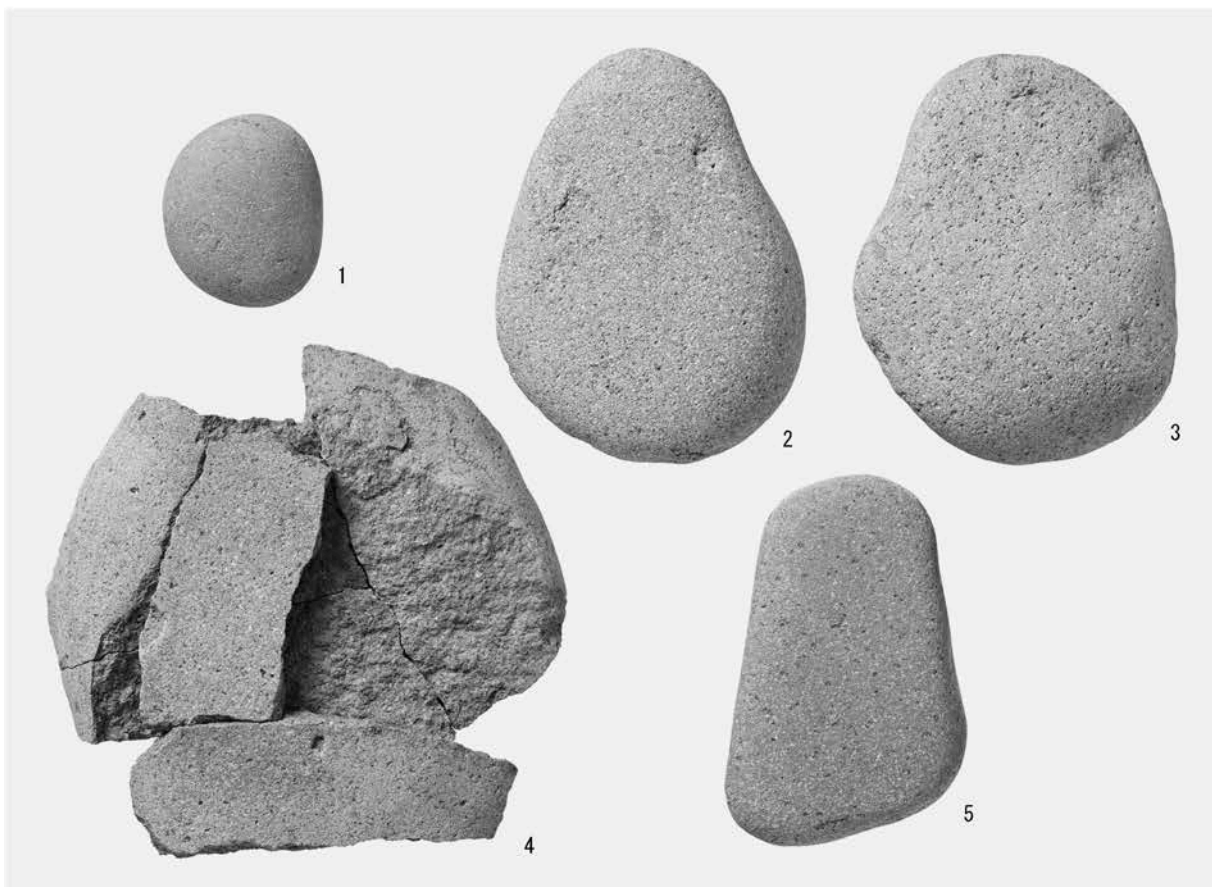
2 F-60出土の遺物



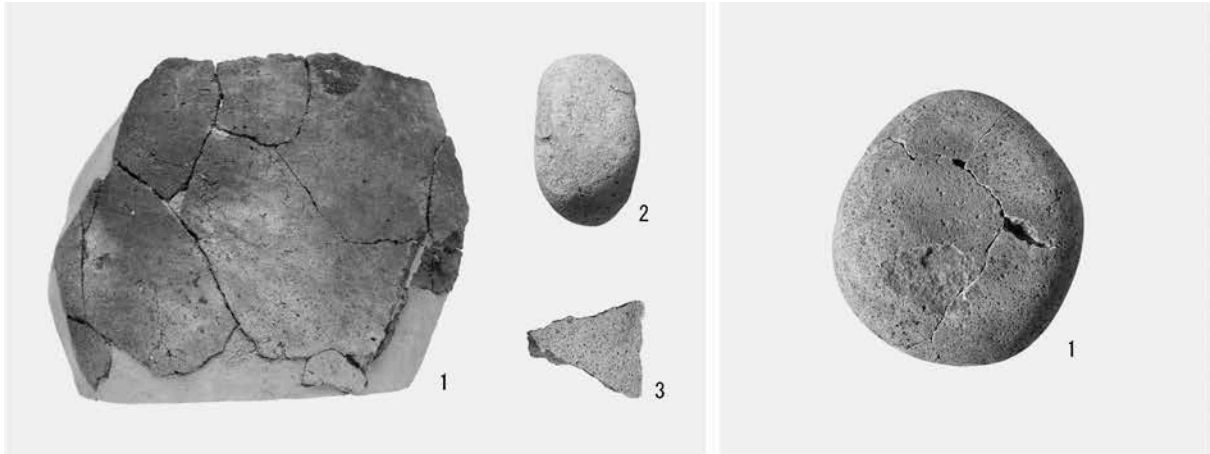
3 F-67・70出土の遺物



4 FC-14・15出土の遺物

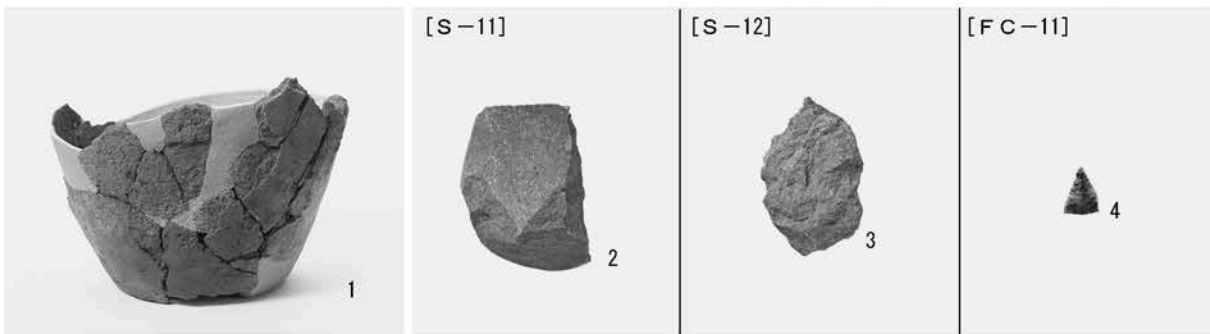


5 H-19・20出土の遺物



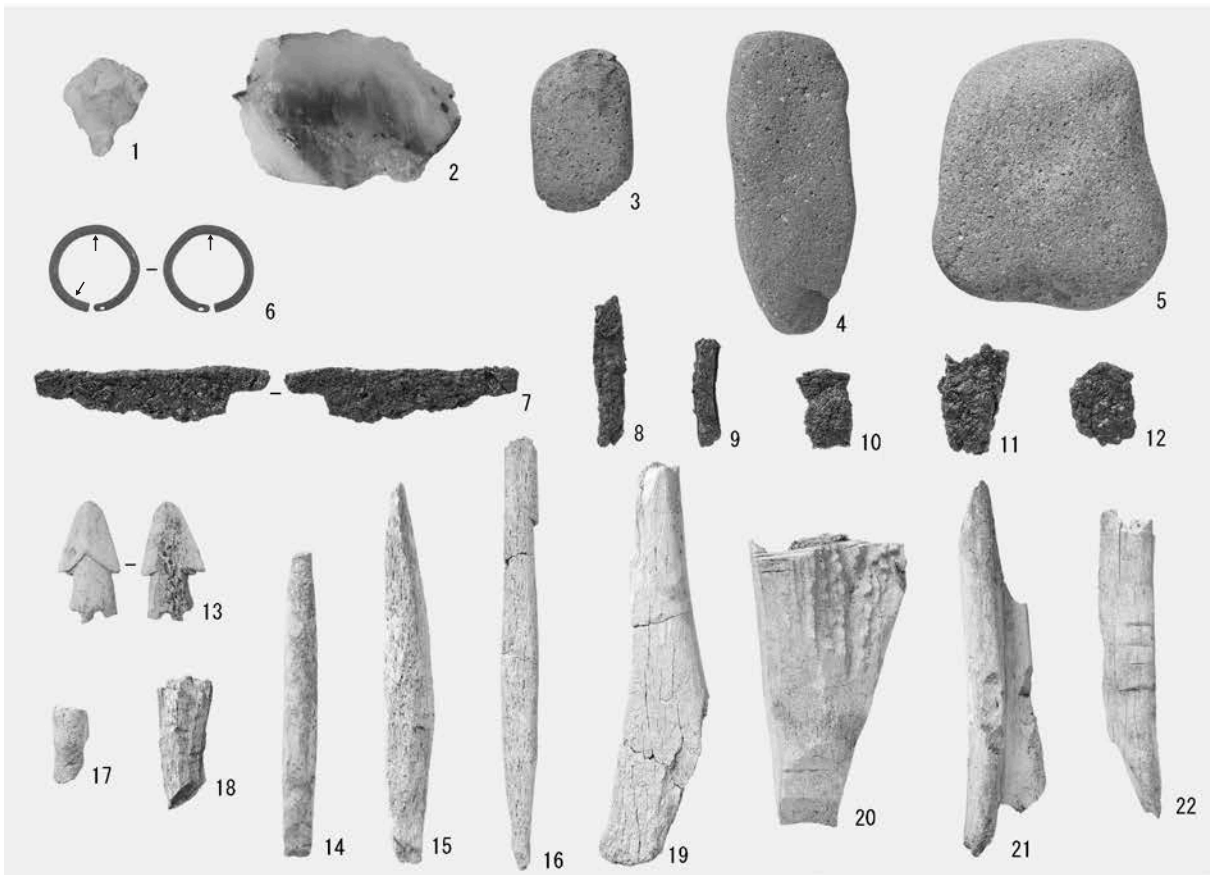
1 H-21出土の遺物

2 PS-31出土の遺物

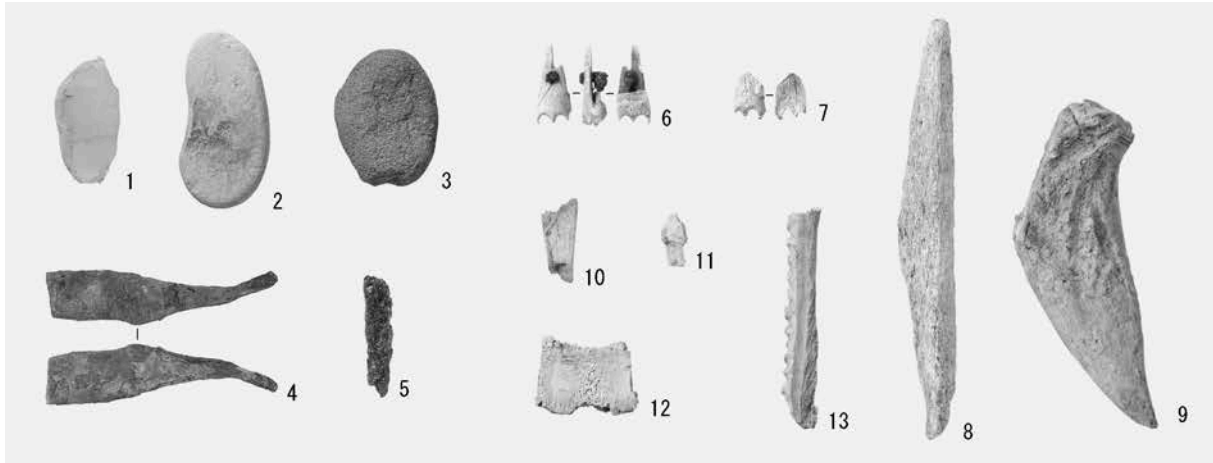


3 S-11出土の土器

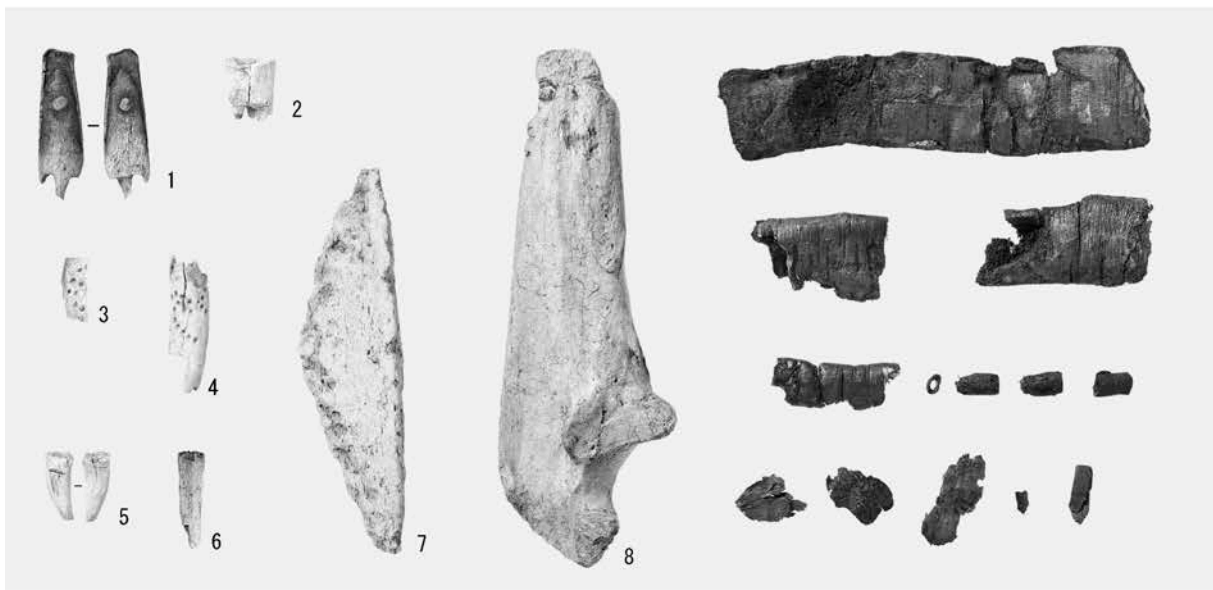
4 S-11・12、FC-11出土の遺物



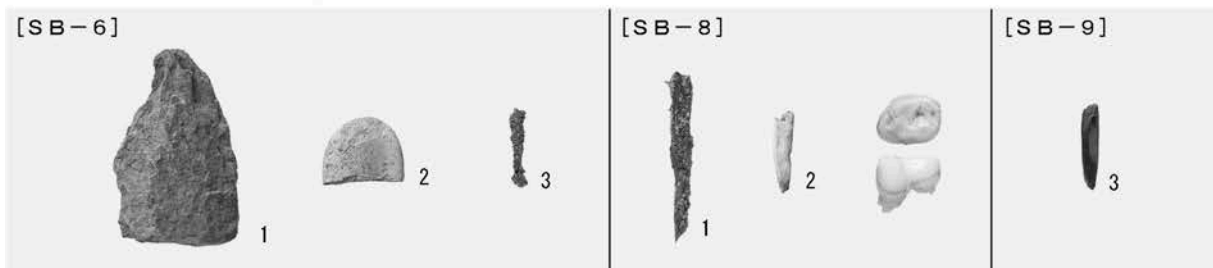
5 SB-3出土の遺物



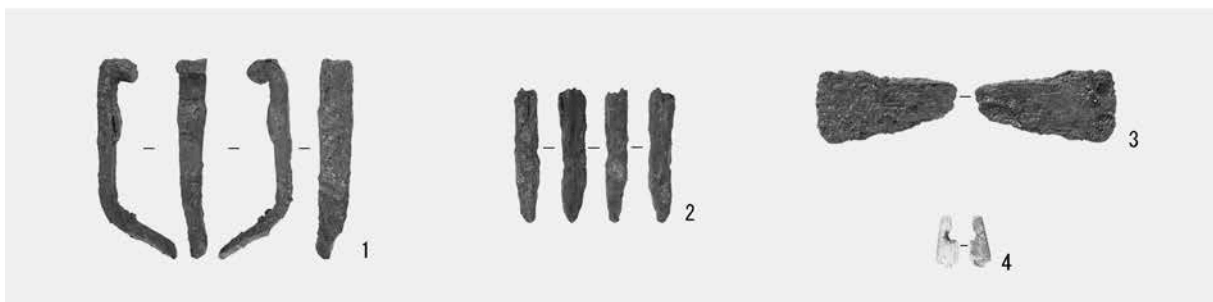
1 SB-4出土の遺物



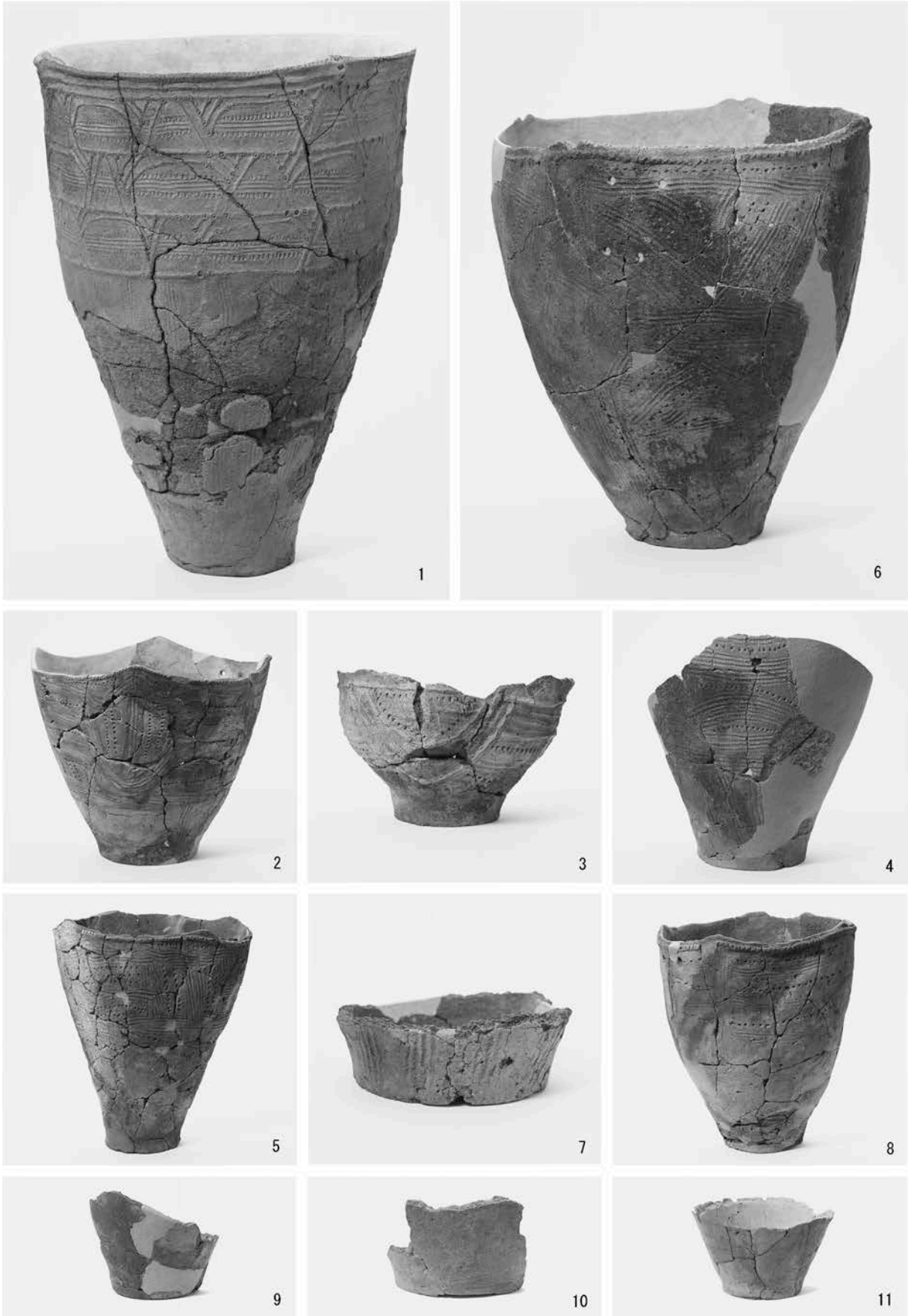
2 SB-5出土の遺物



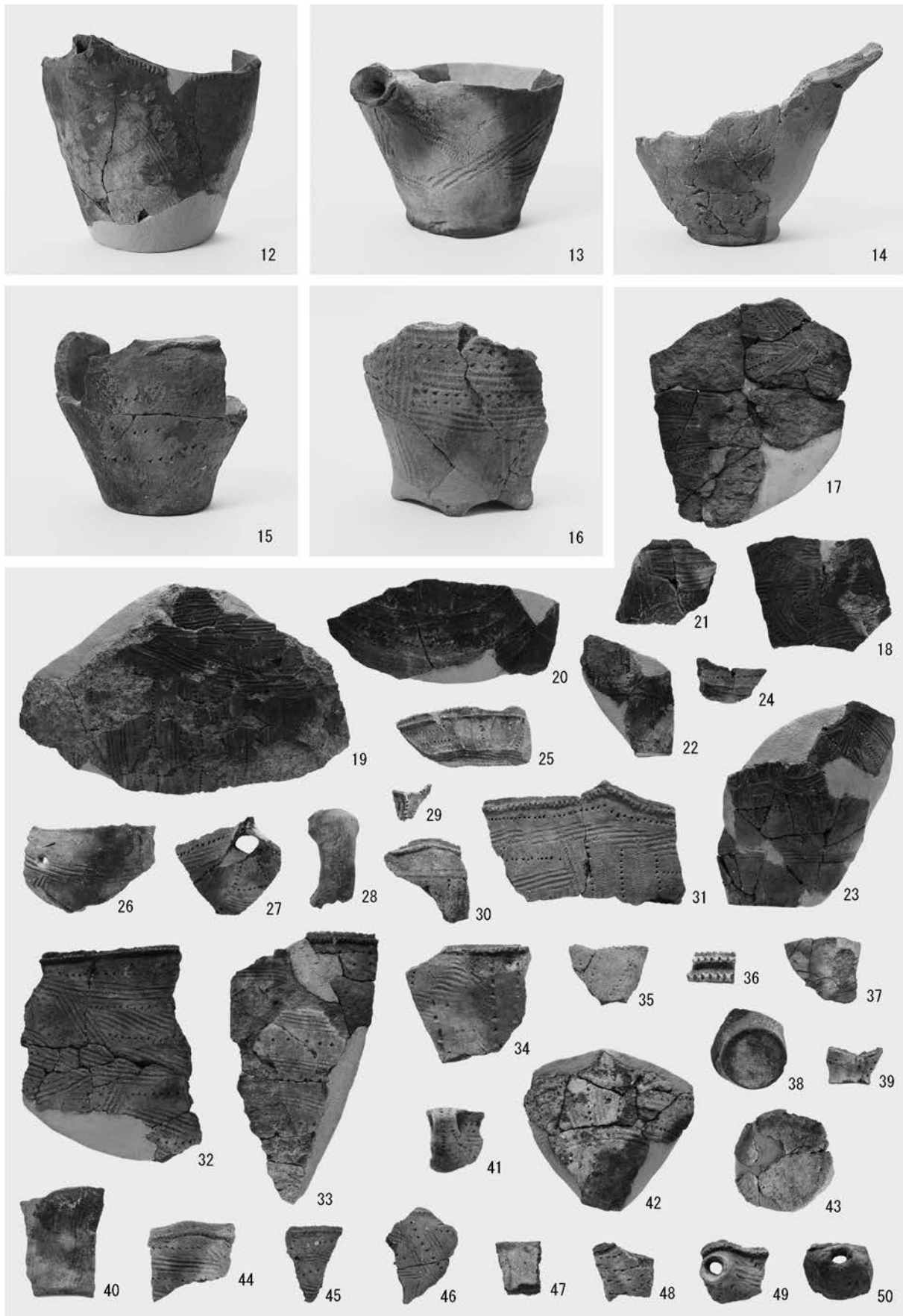
3 SB-6・8・9出土の遺物



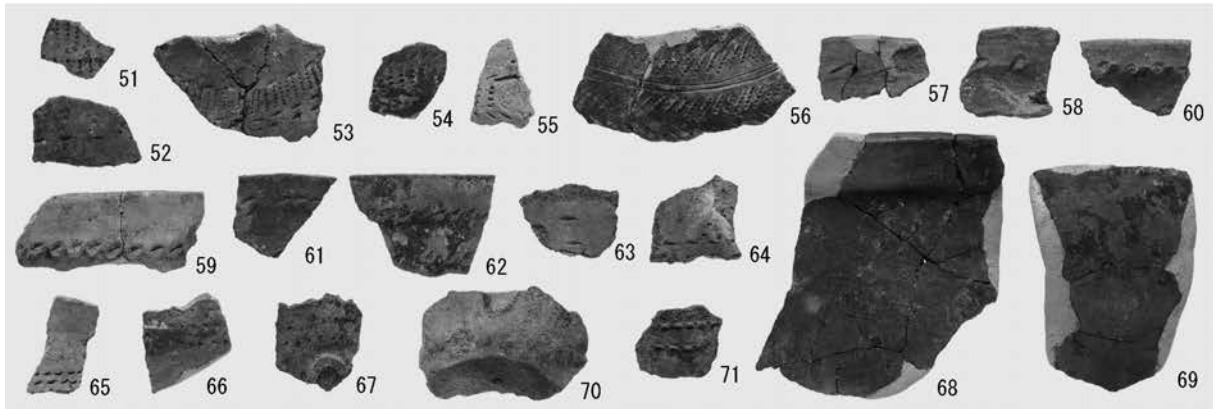
4 SB-10出土の遺物



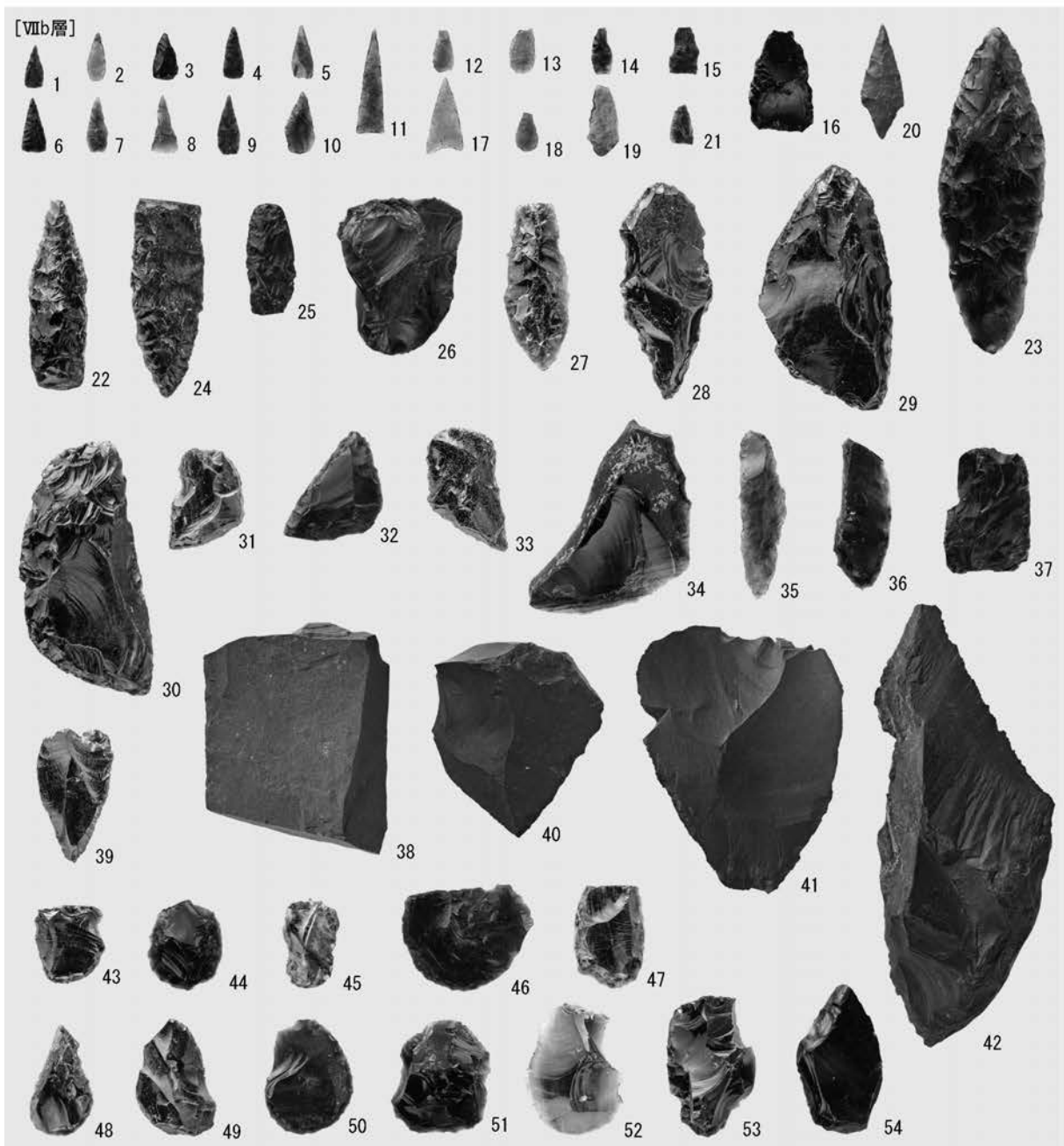
1 包含層出土の土器（1）



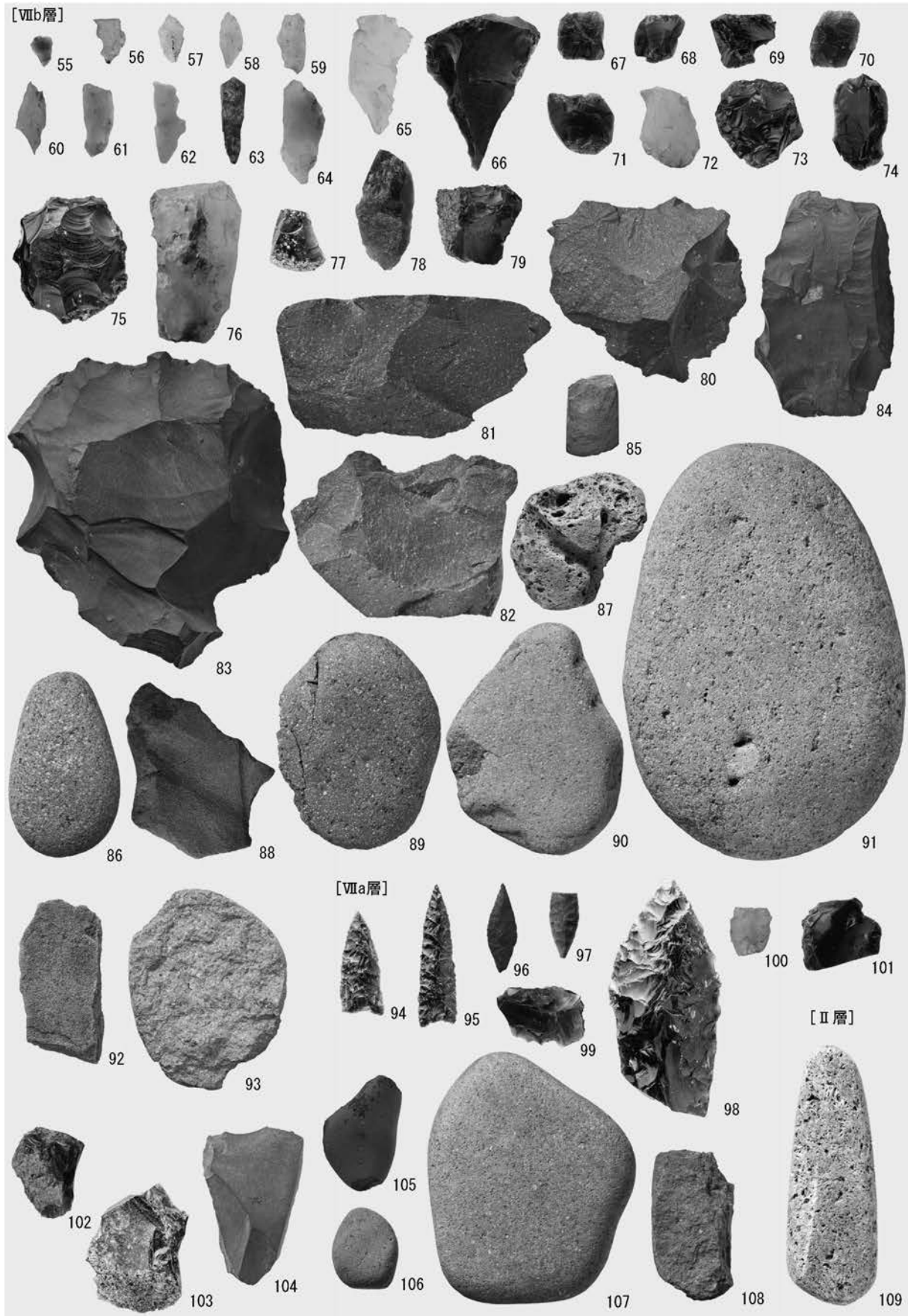
1 包含層出土の土器 (2)



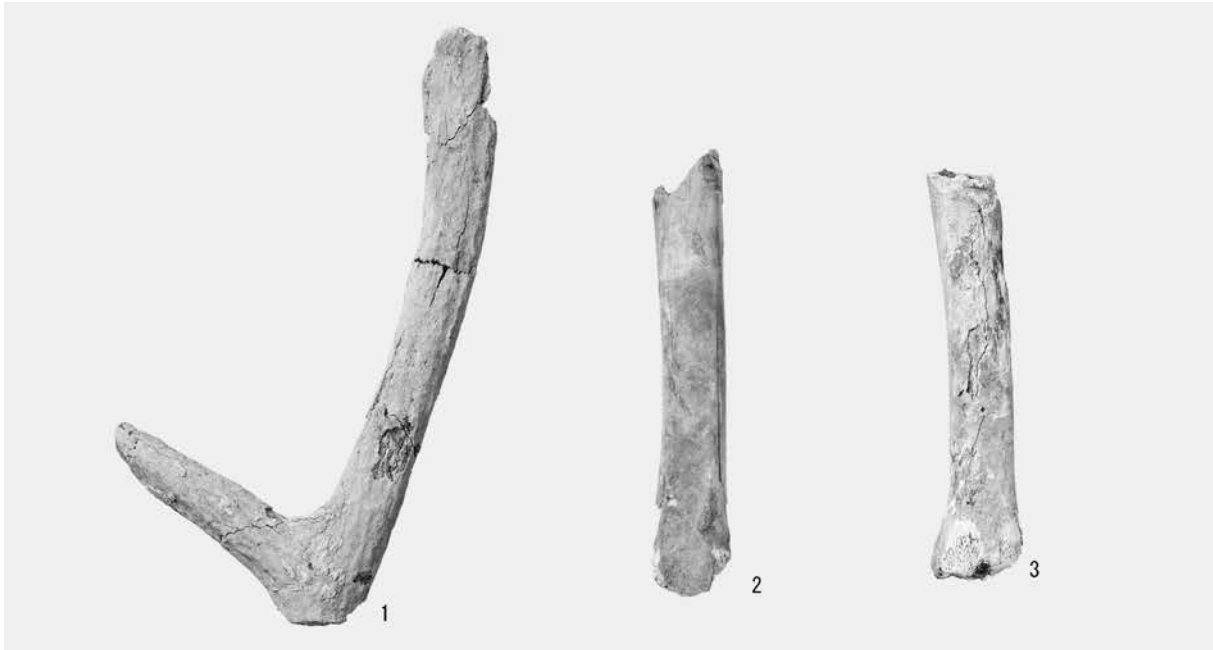
1 包含層出土の土器 (3)



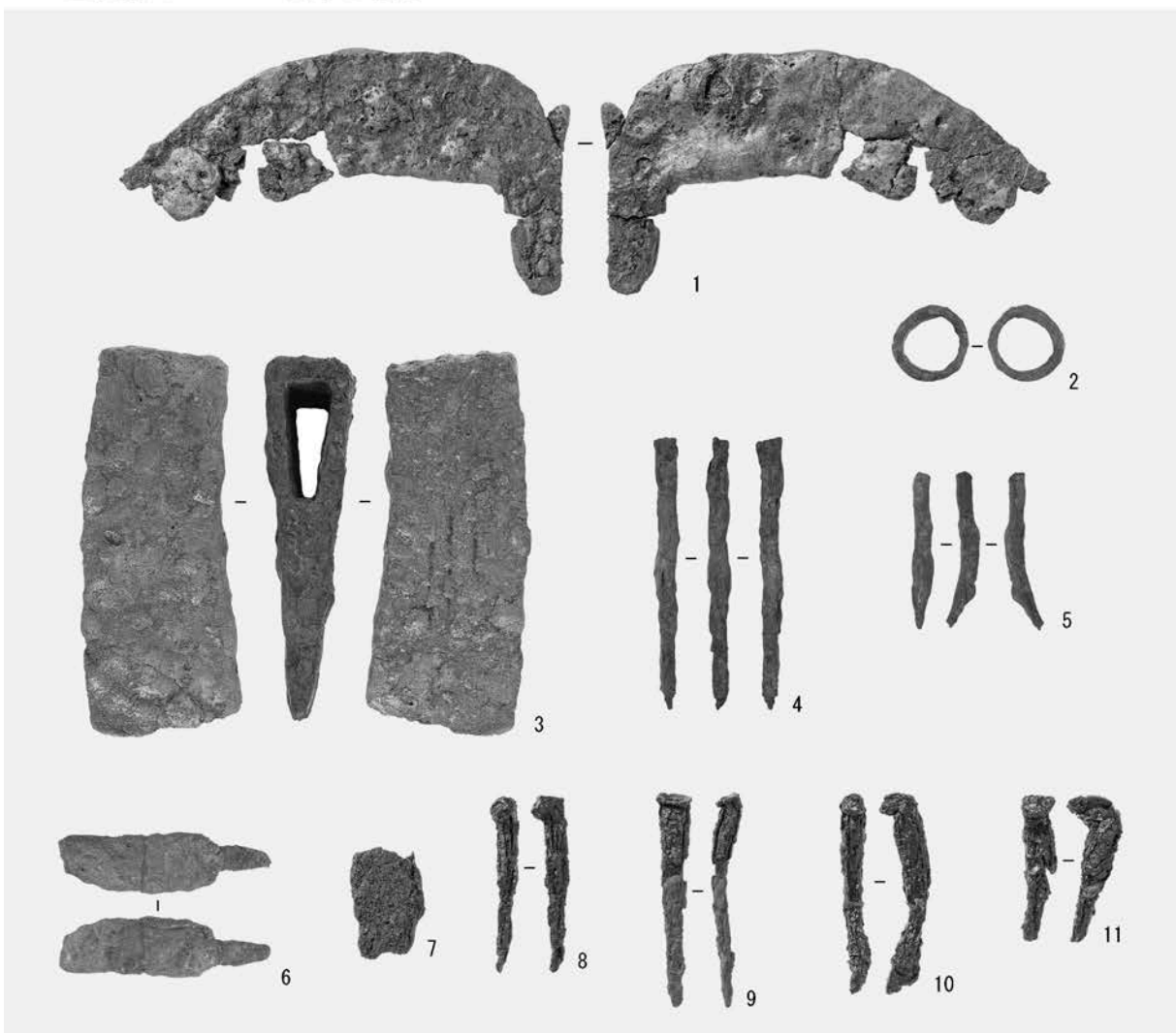
2 包含層出土の石器 (1)



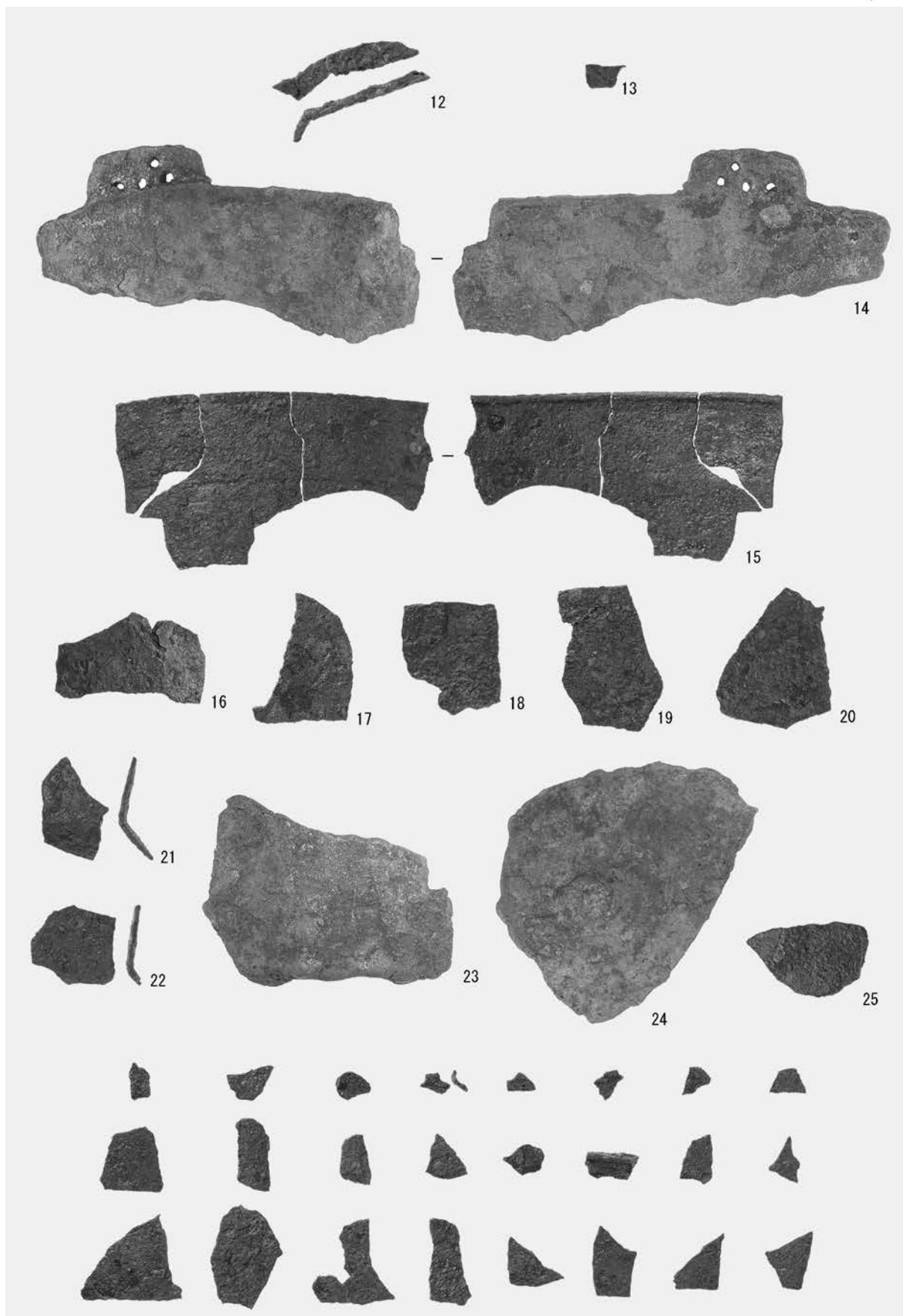
1 包含層出土の石器 (2)



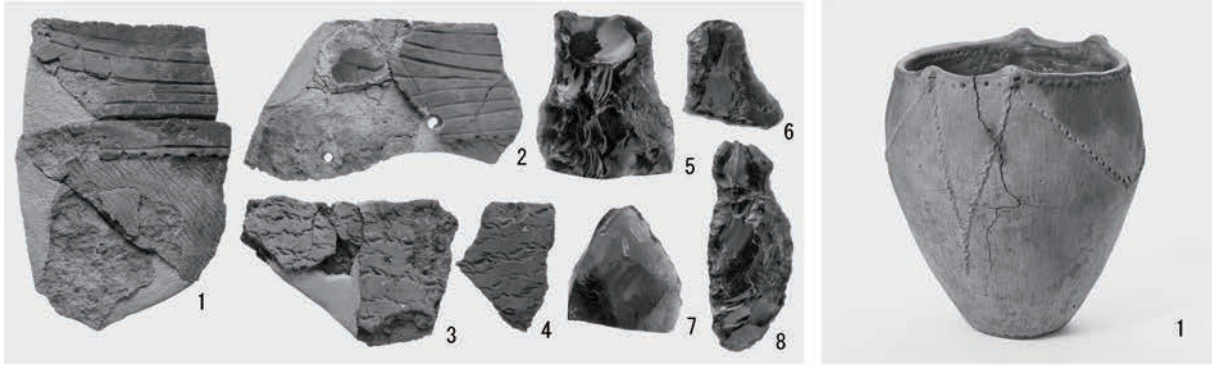
1 包含層出土の加工痕ある骨片



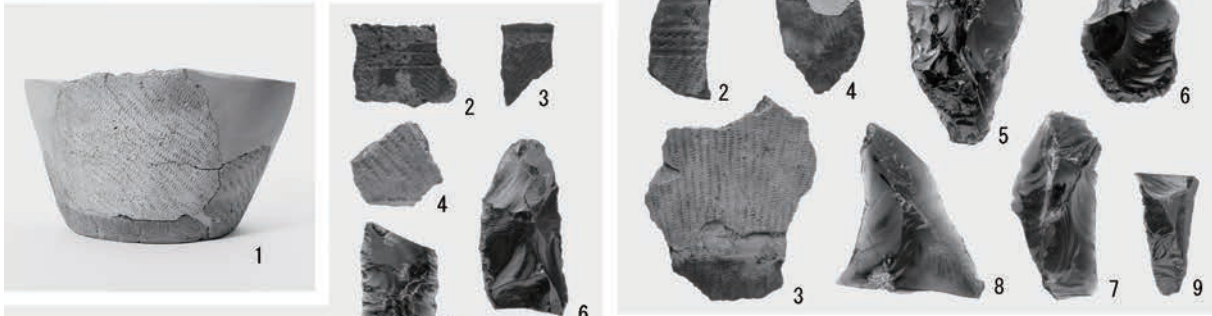
2 包含層出土の鉄製品（1）



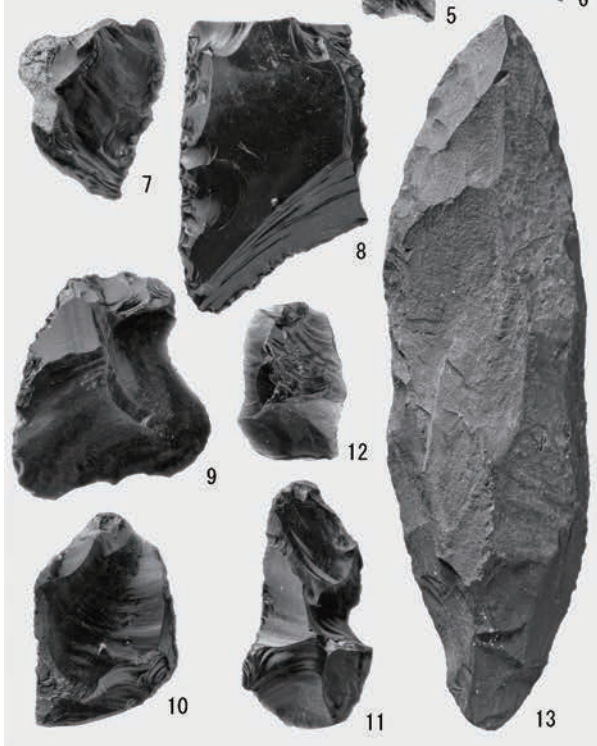
1 包含層出土の鉄製品（2）



1 H-15(37c号址) 出土の遺物



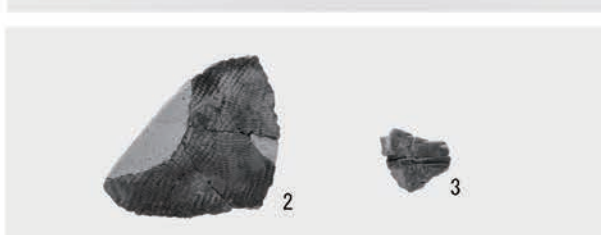
3 H-16(25号址) 出土の遺物



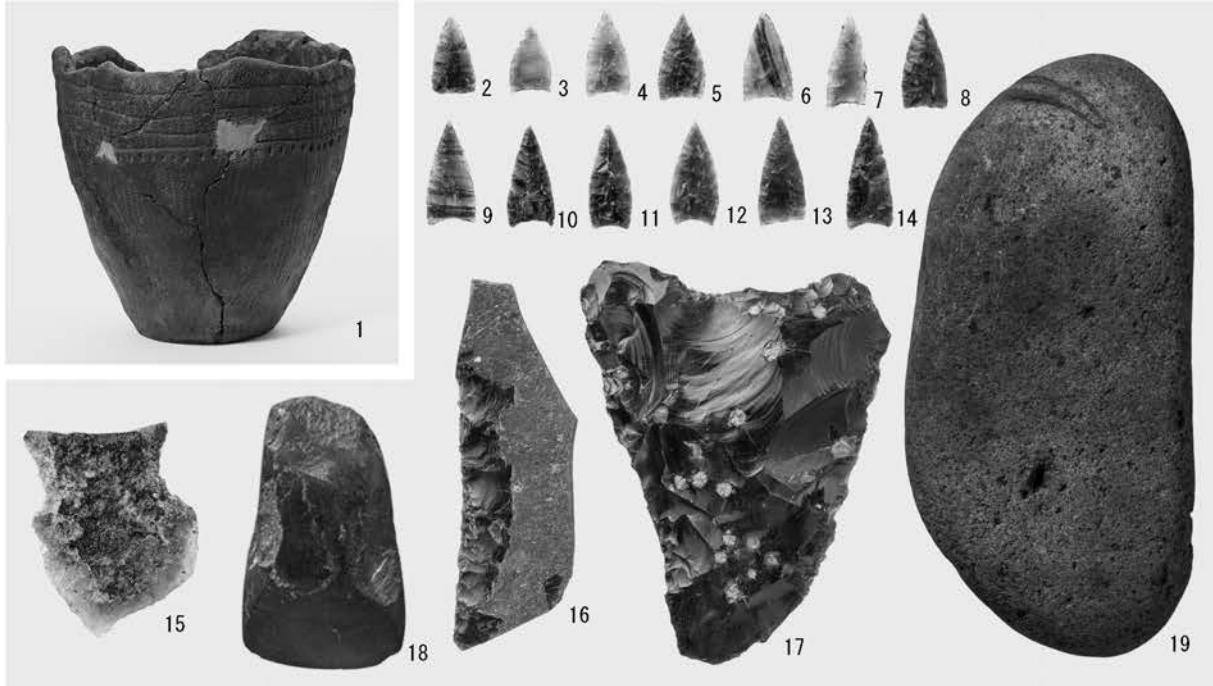
2 H-17(51c号址) 出土の遺物



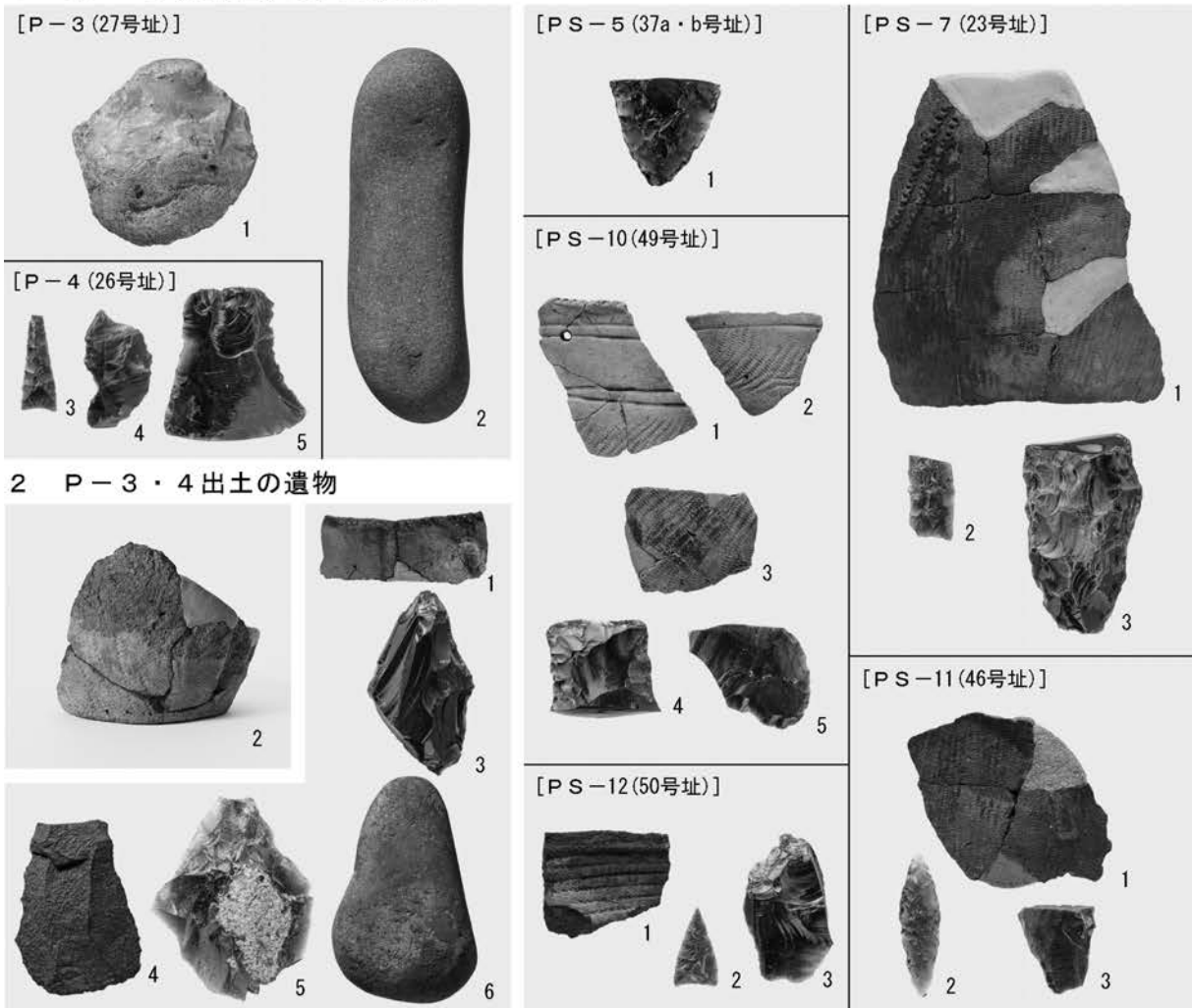
4 H-18(24号址) 出土の遺物



5 GP-2(38号址) 出土の遺物



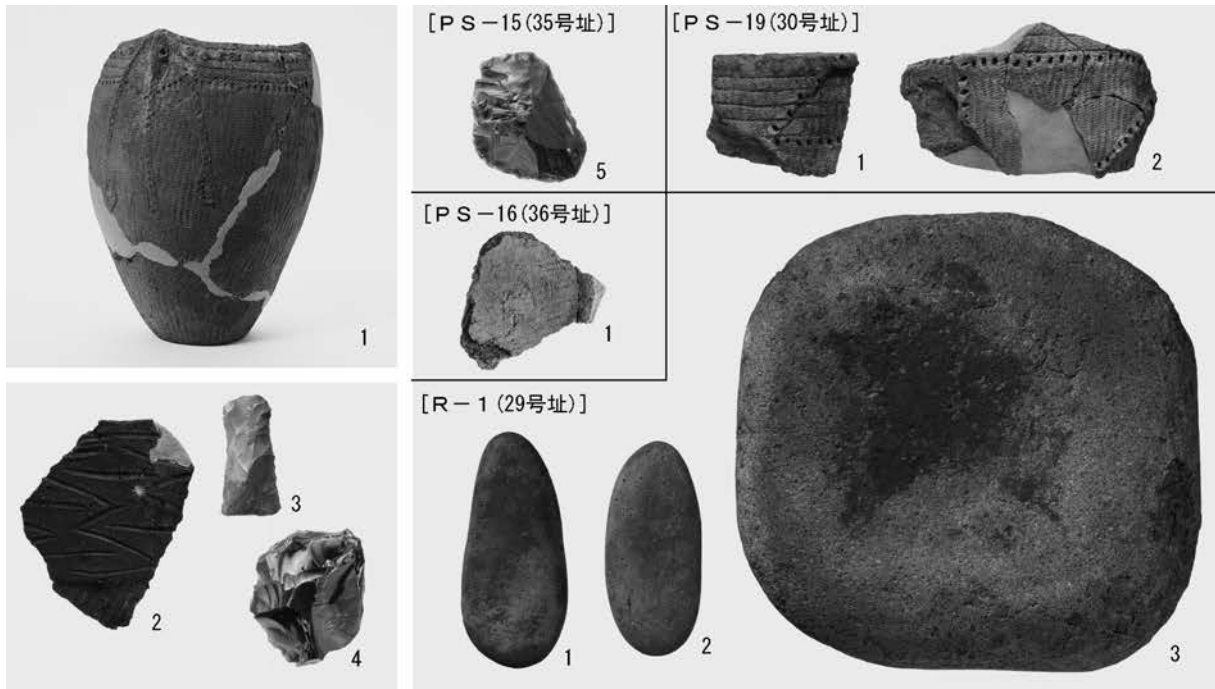
1 GP-3 (44号址) 出土の遺物



2 P-3・4 出土の遺物

3 P-5 (28号址) 出土の遺物

4 PS-5・7・10・11・12 出土の遺物

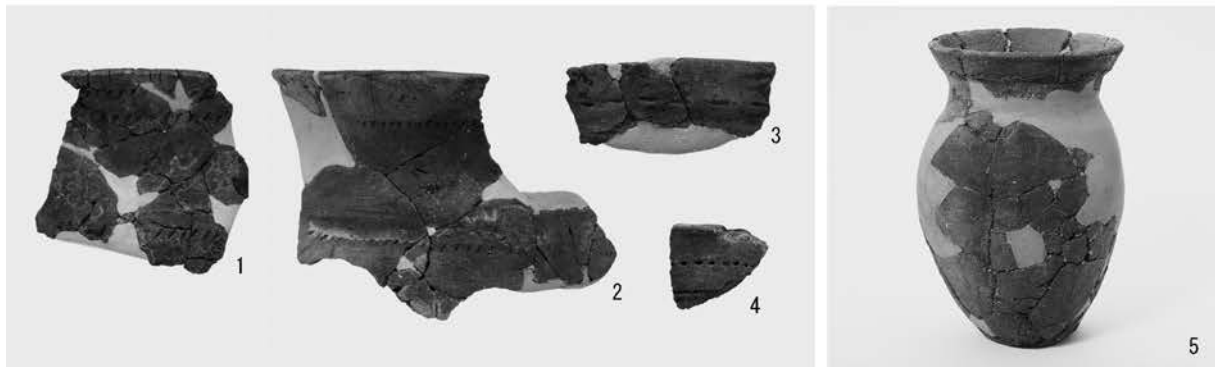


1 PS-14(31b号址) 出土の遺物 2 PS-15・16・19、R-1 出土の遺物

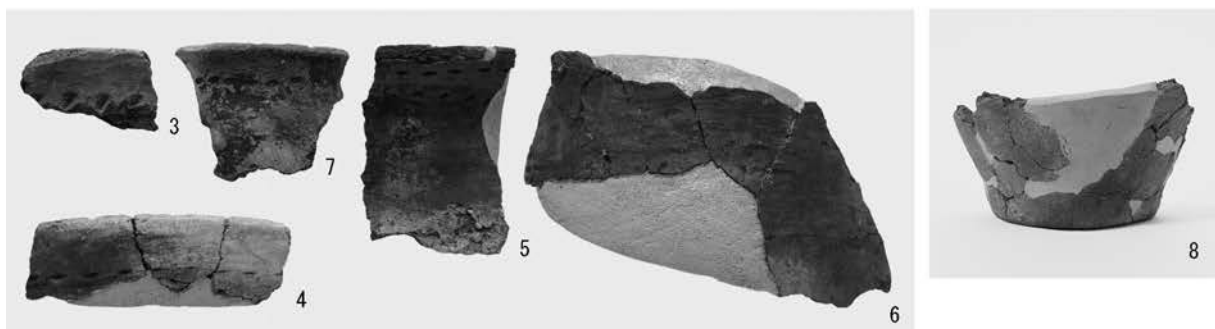


3 H-1(2号址) 出土の遺物

4 H-5(19号址) 出土の遺物



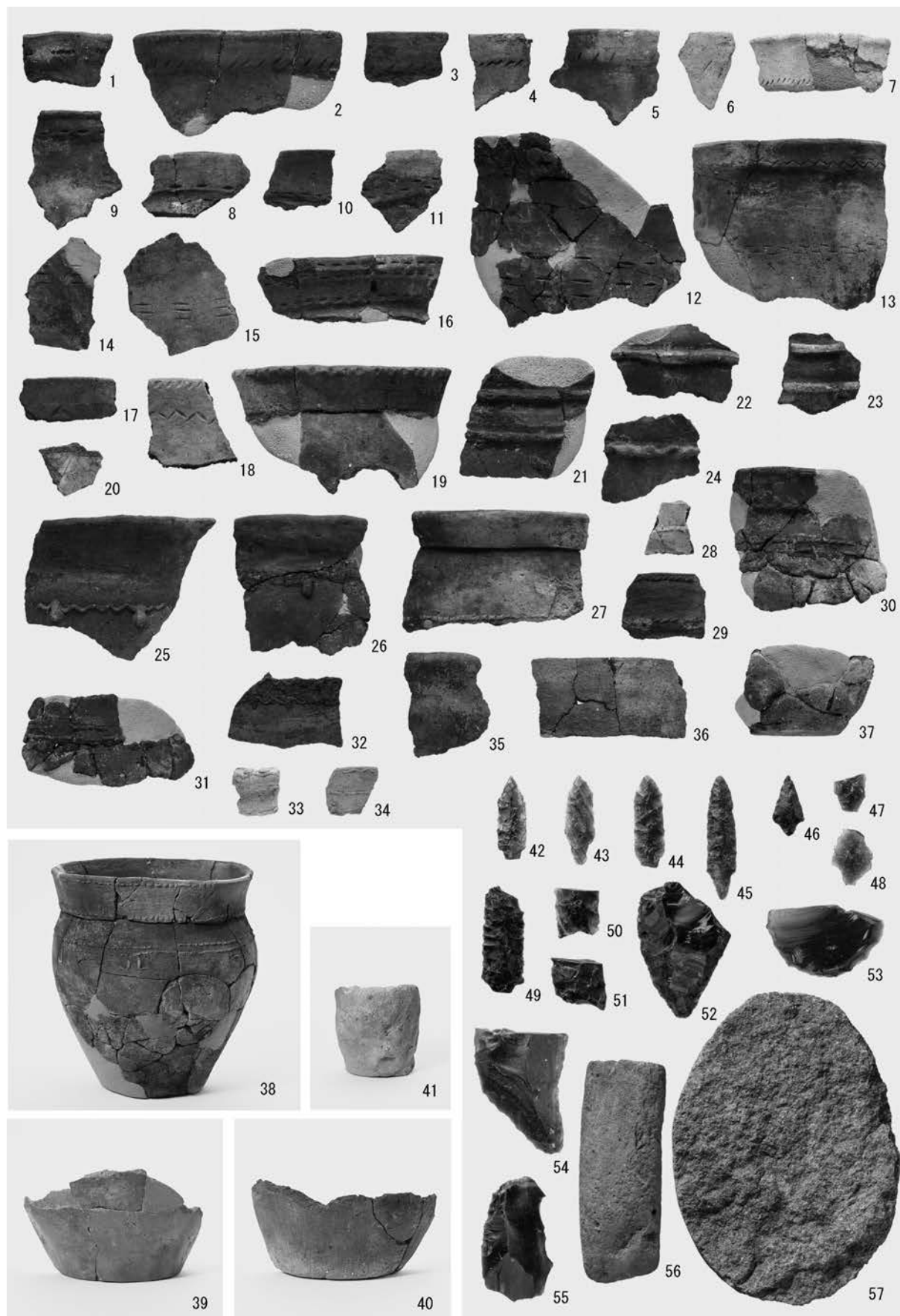
5 H-3(4号址) 出土の遺物



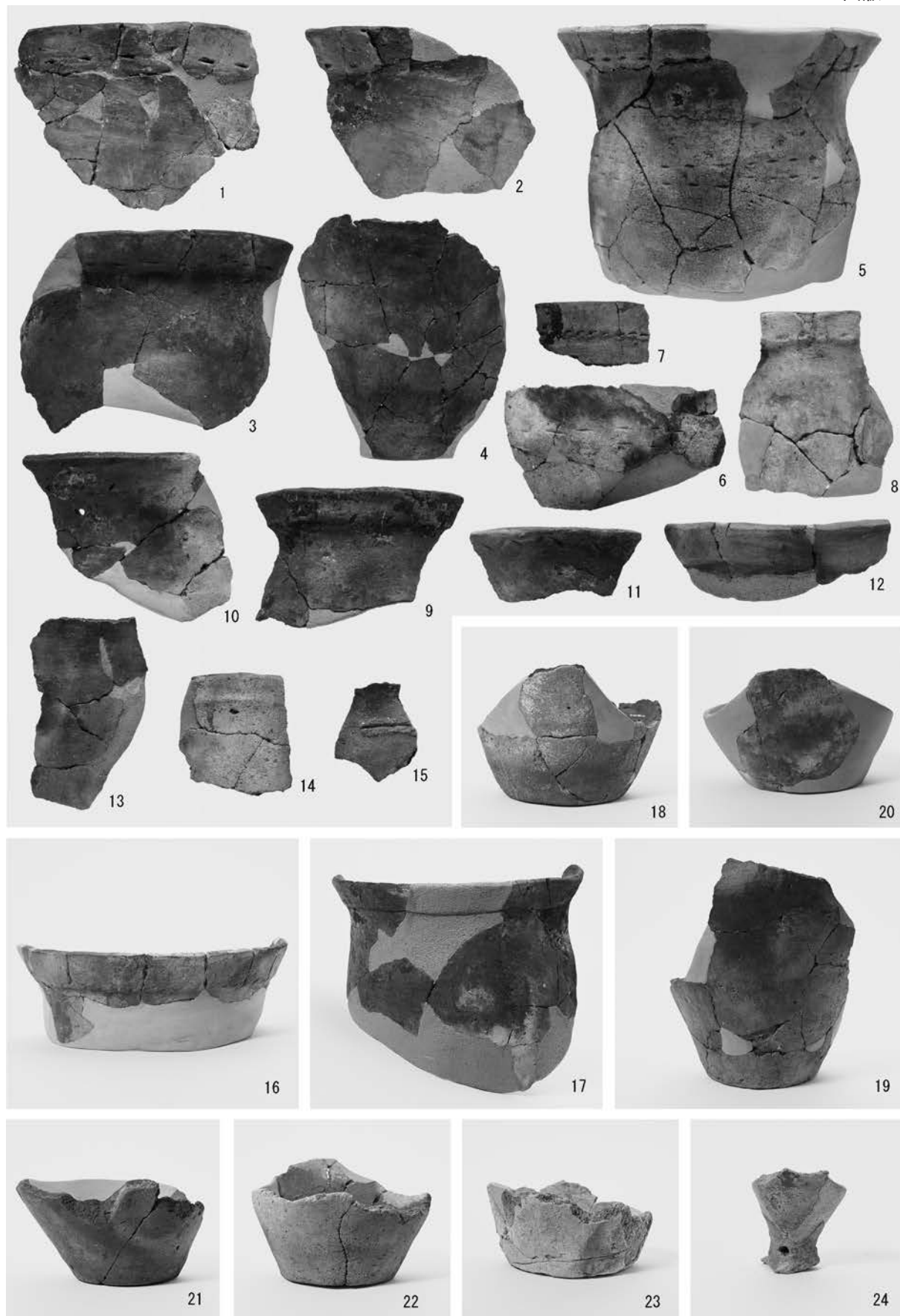
6 H-6(20号址) 出土の遺物



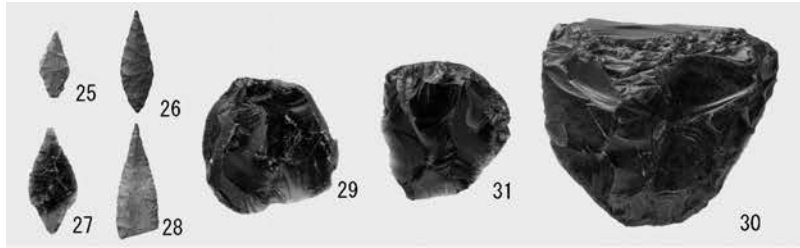
1 H-7(5号址)出土の遺物



1 H-8 (6号址) 出土の遺物



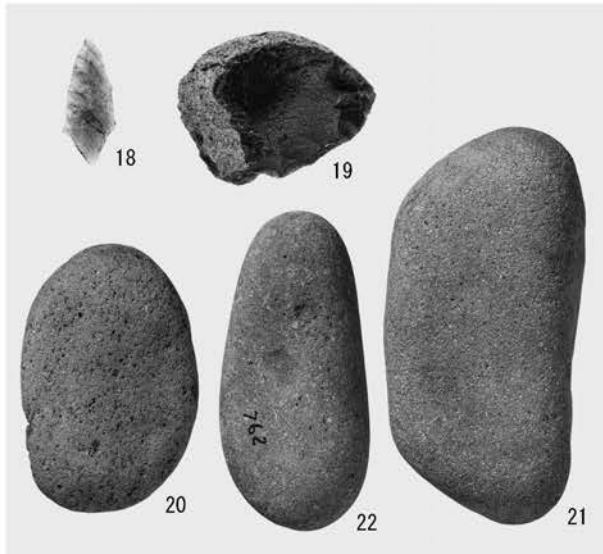
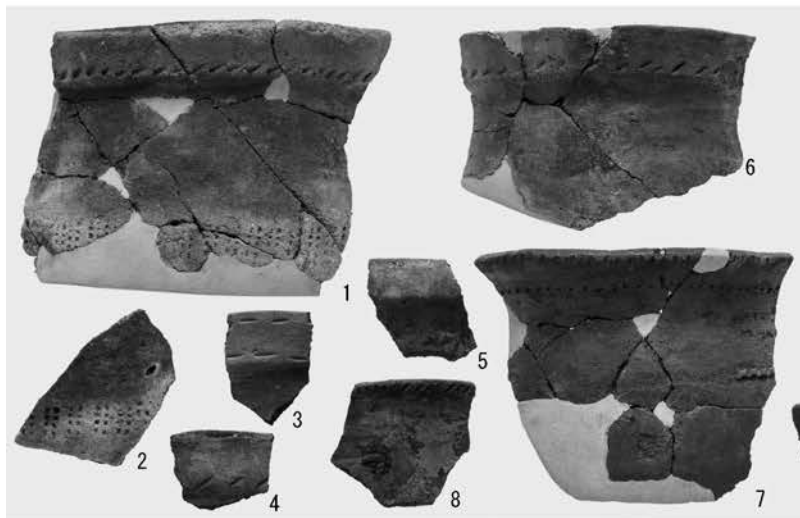
1 H-9・10(15a・b号址) 出土の遺物 (1)



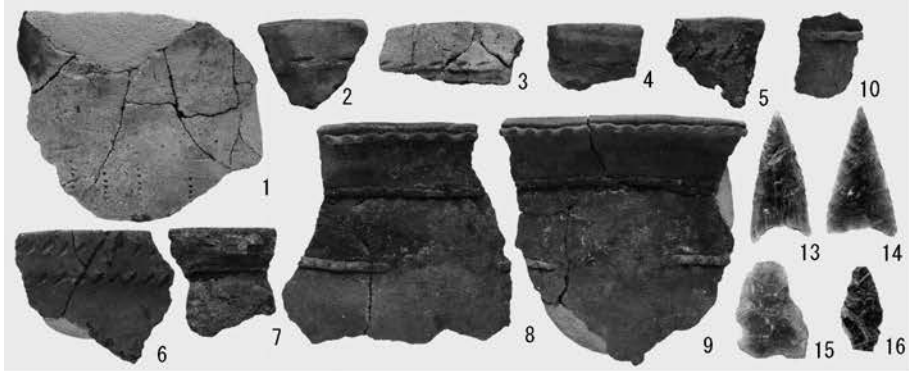
1 H-9・10(15a・b号址) 出土の遺物 (2)



2 H-11(21号址) 出土の遺物



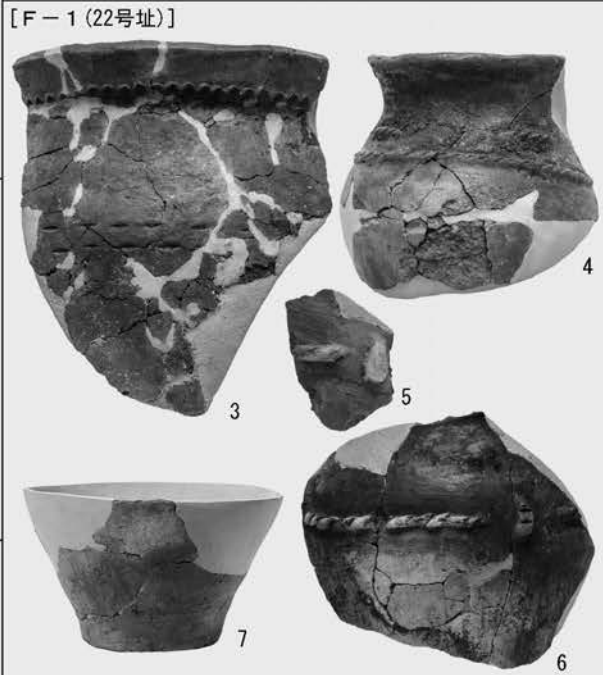
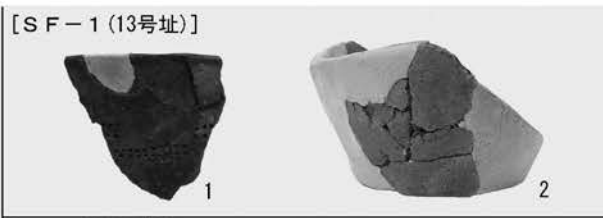
3 H-12(8号址) 出土の遺物



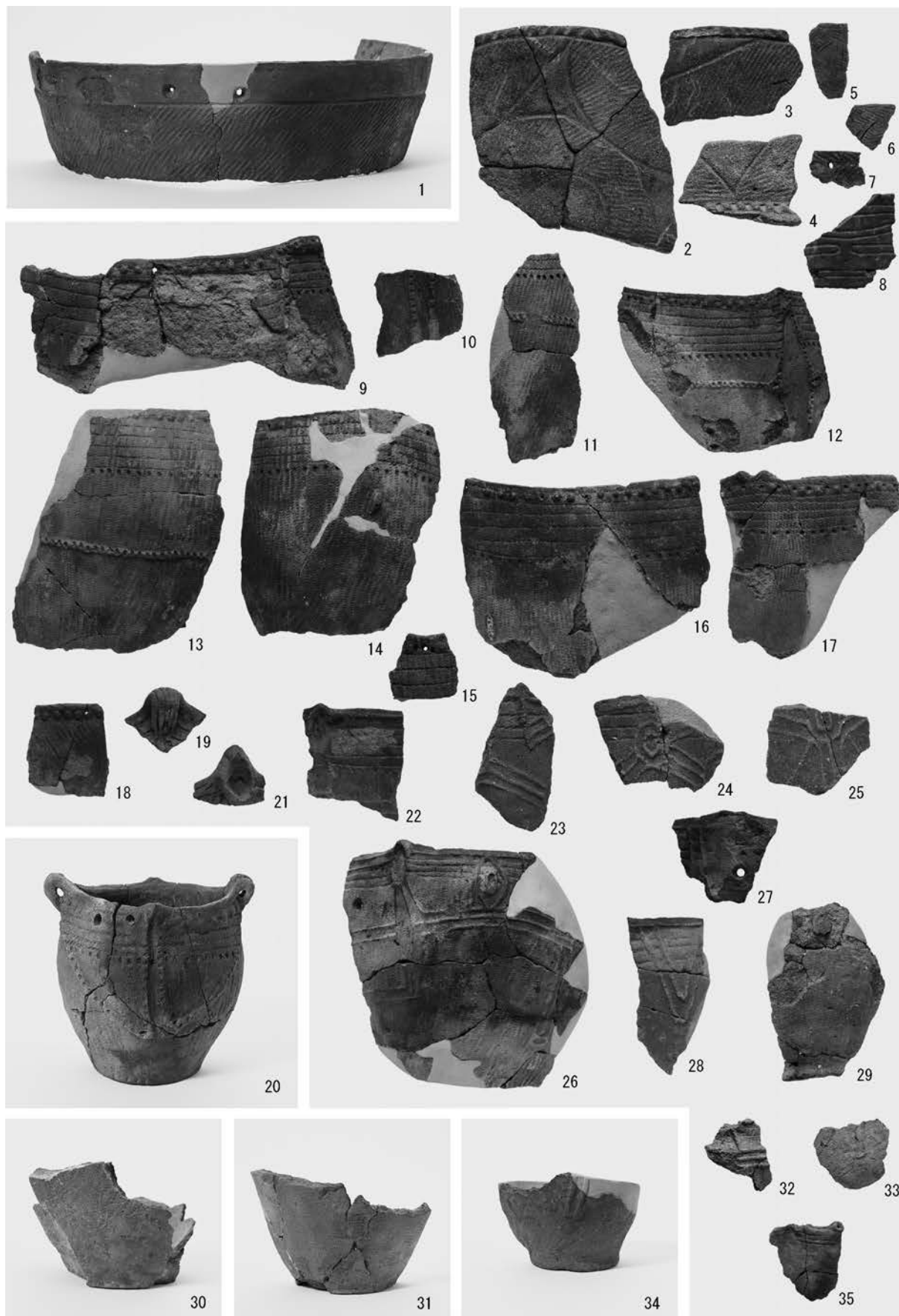
1 H-13(7号址) 出土の遺物



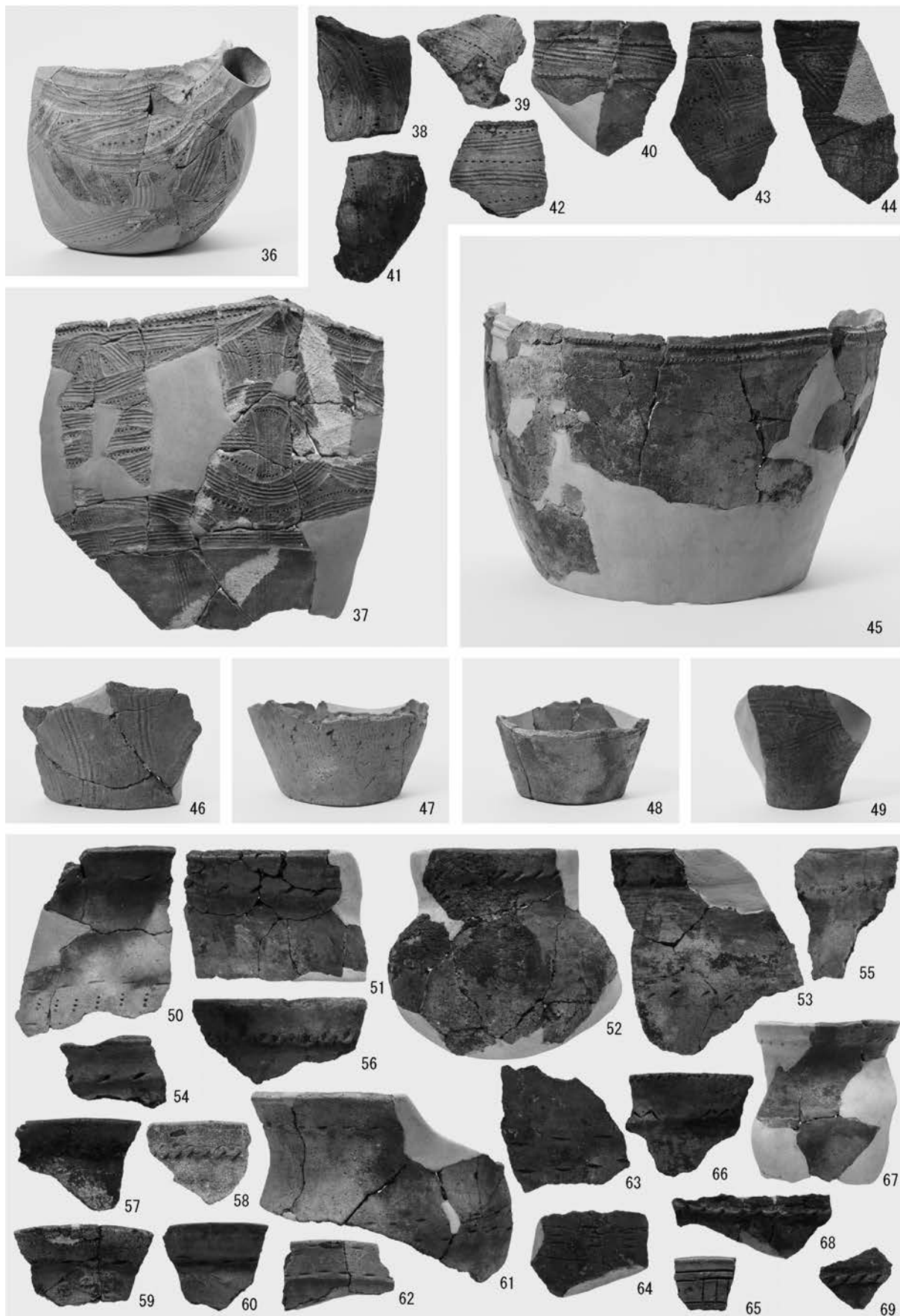
2 H-14(9号址) 出土の遺物



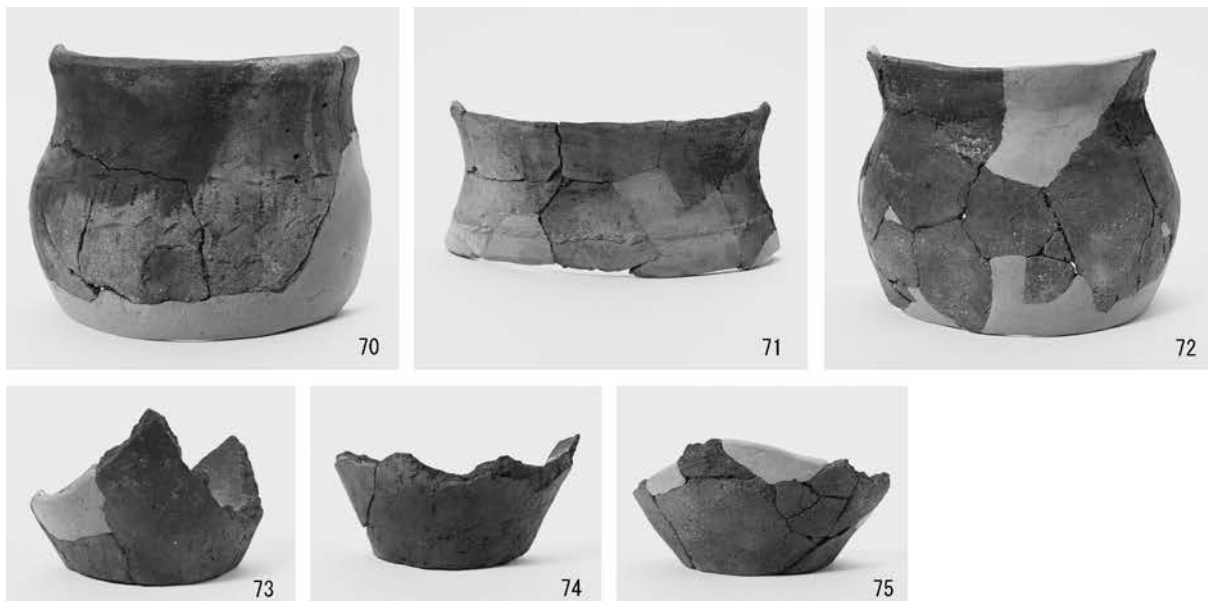
3 GP-1、PS-2、SF-1、F-1~3出土の遺物



1 包含層出土の土器（1）

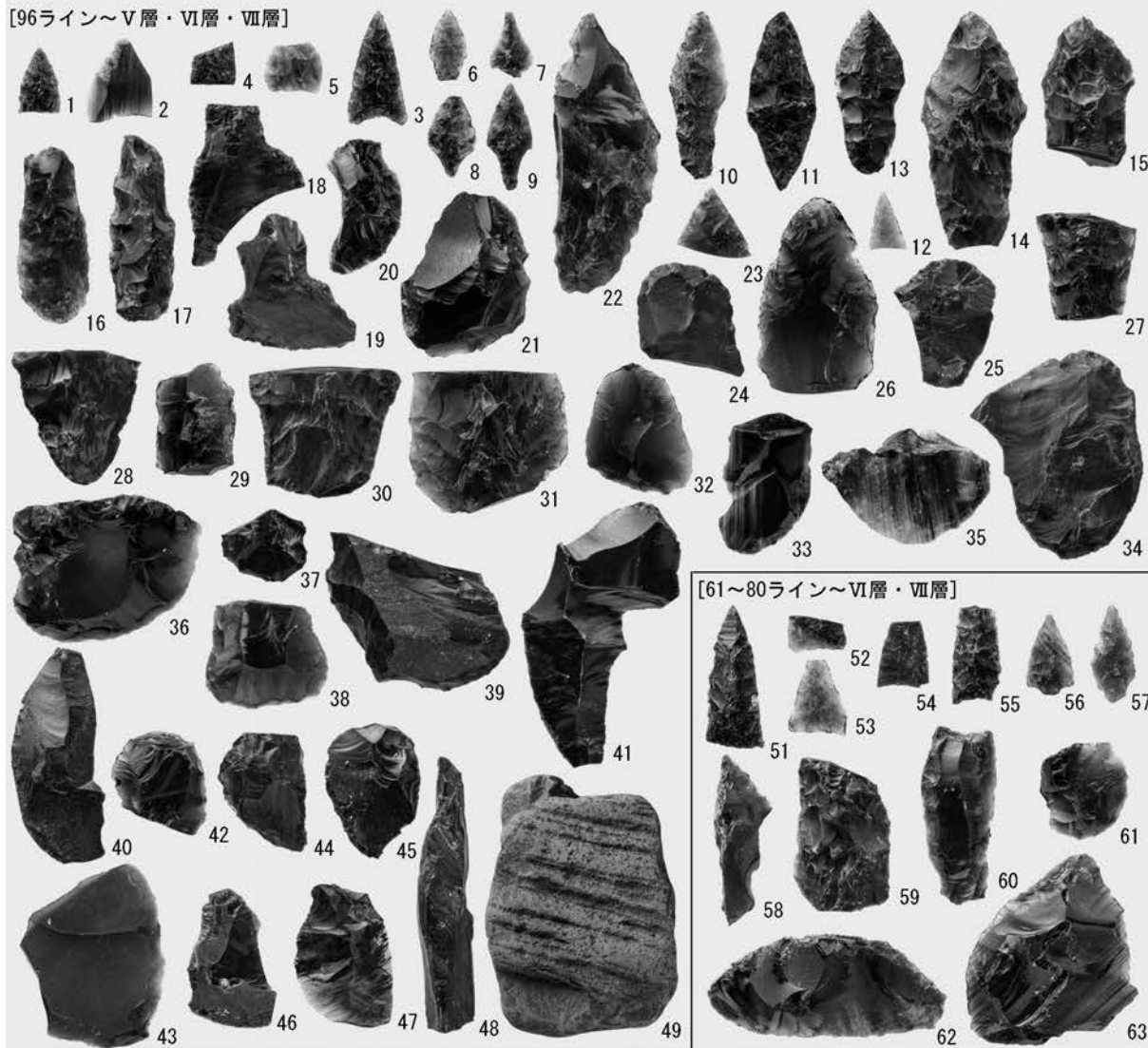


1 包含層出土の土器 (2)

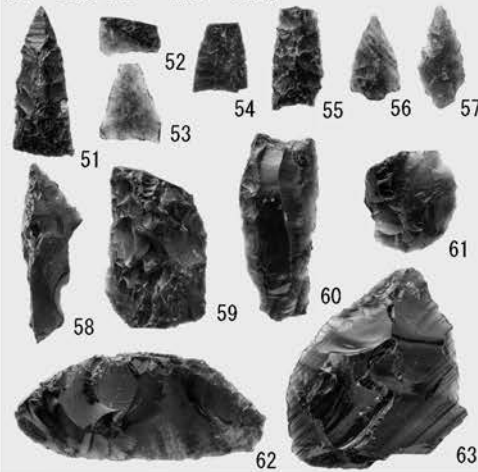


1 包含層出土の土器 (3)

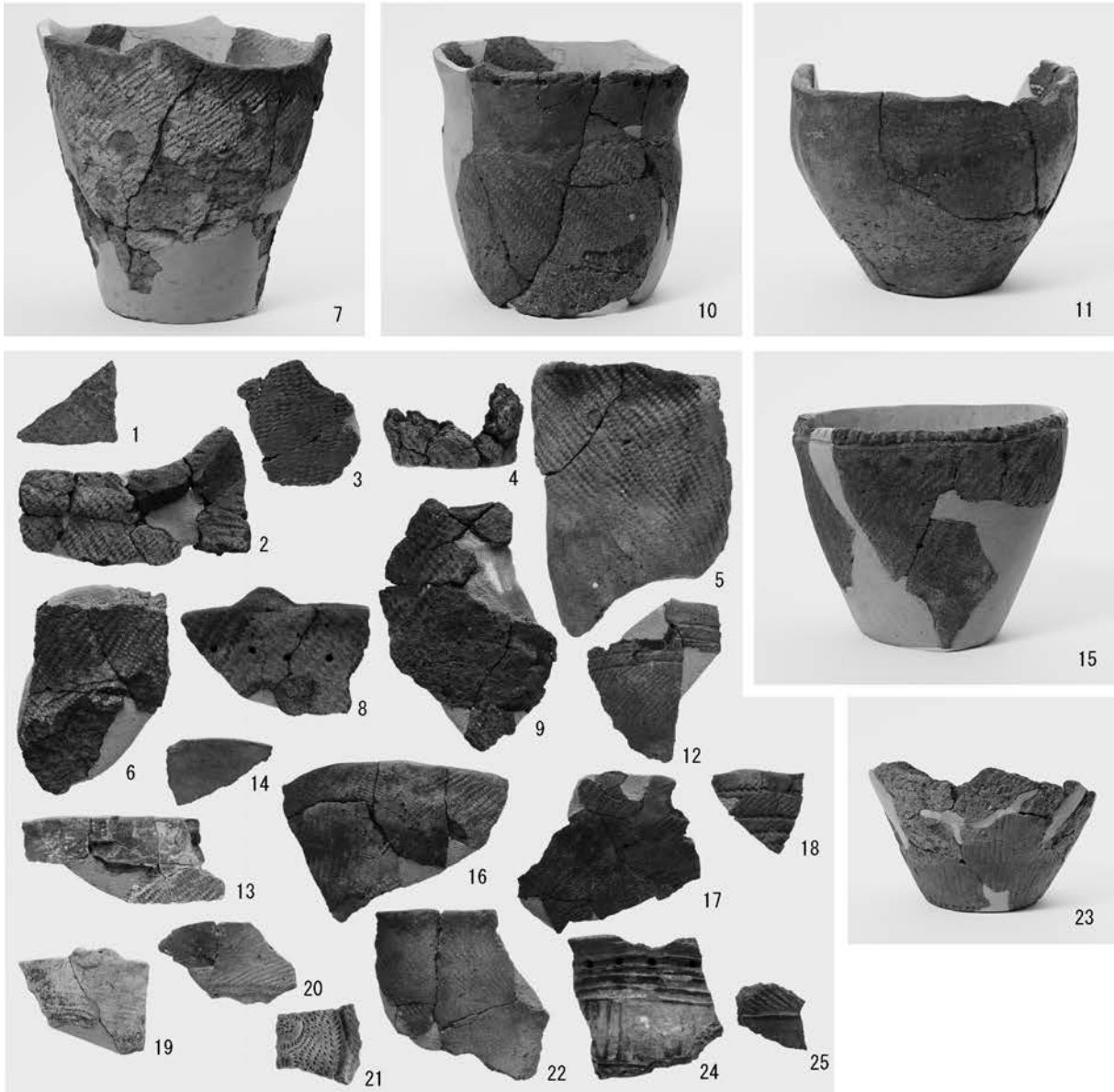
[96ライン～V層・VI層・VII層]



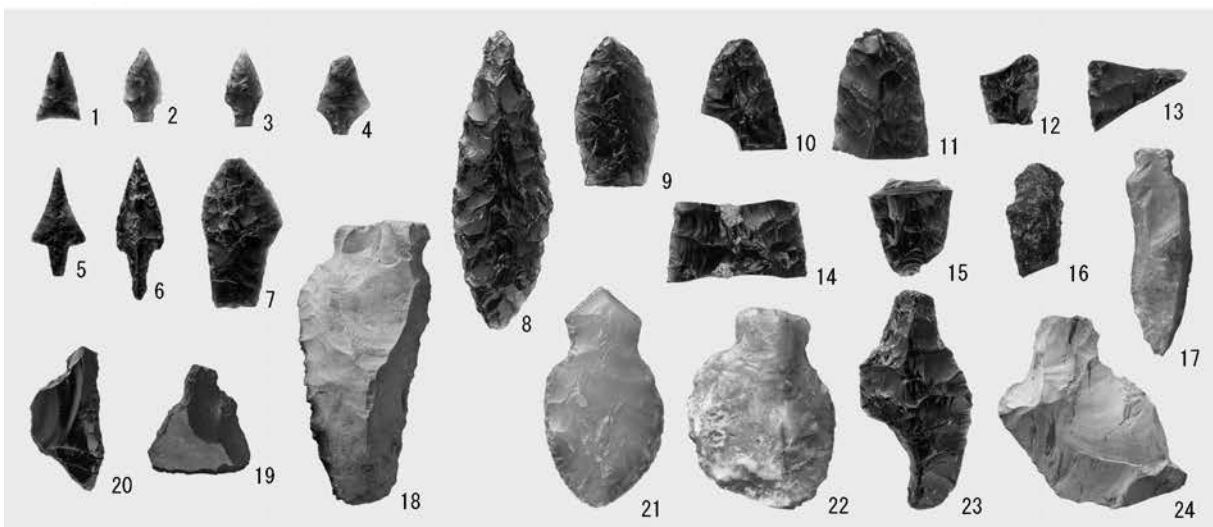
[61～80ライン～VI層・VII層]



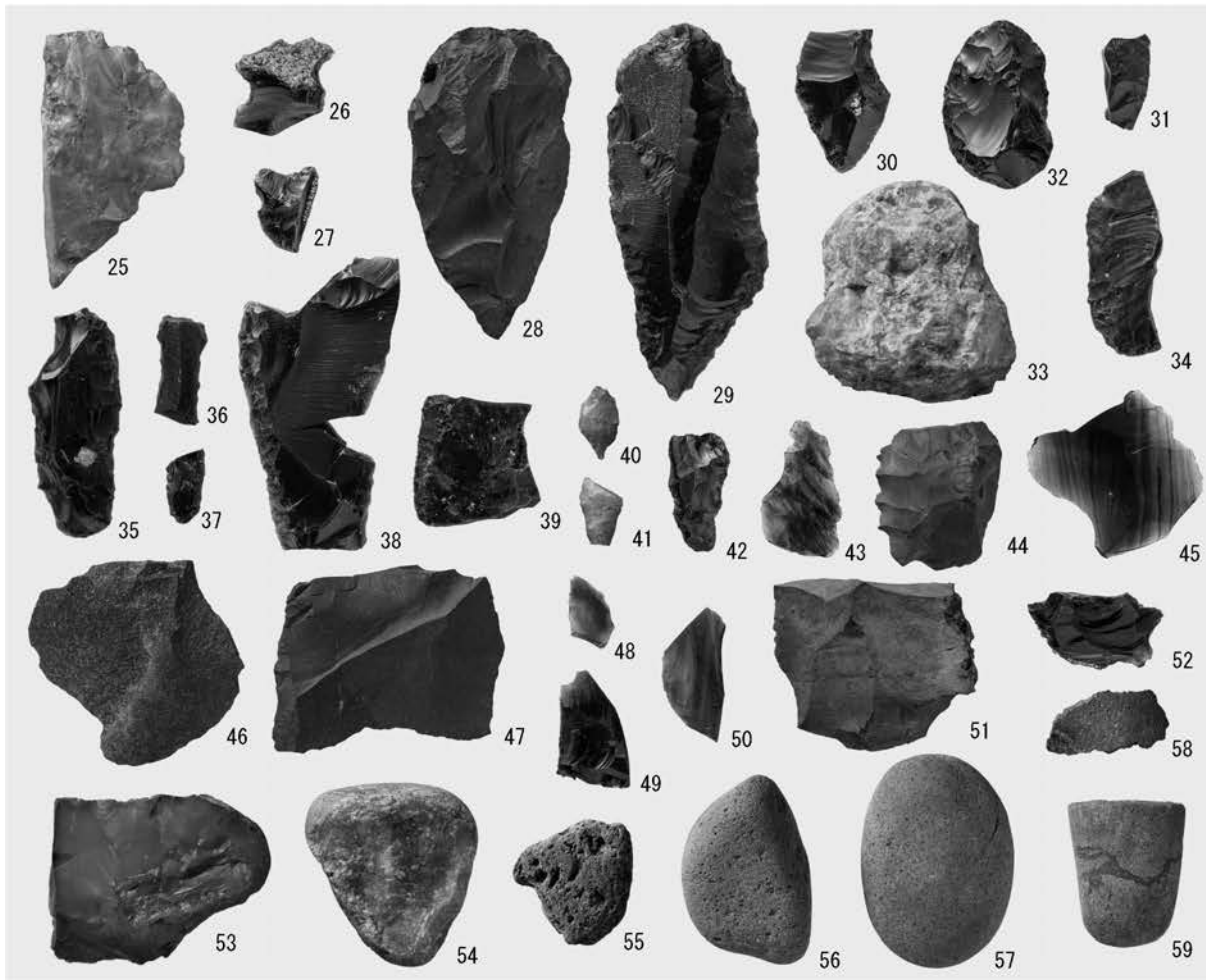
2 包含層出土の石器



1 包含層出土の土器



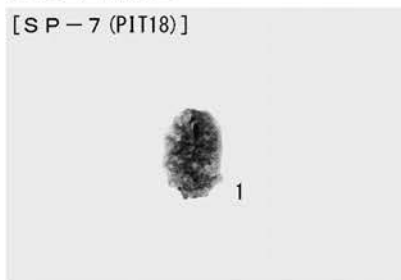
2 包含層出土の石器 (1)



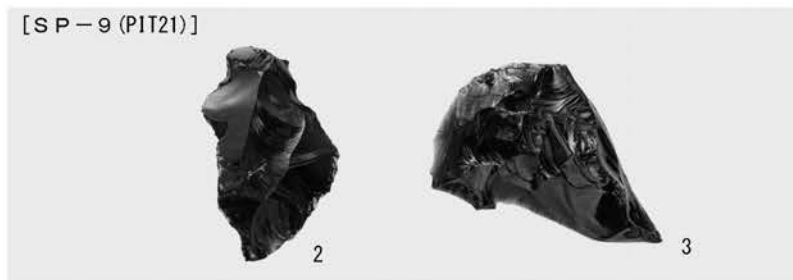
1 包含層出土の石器 (2)

2011年A地区

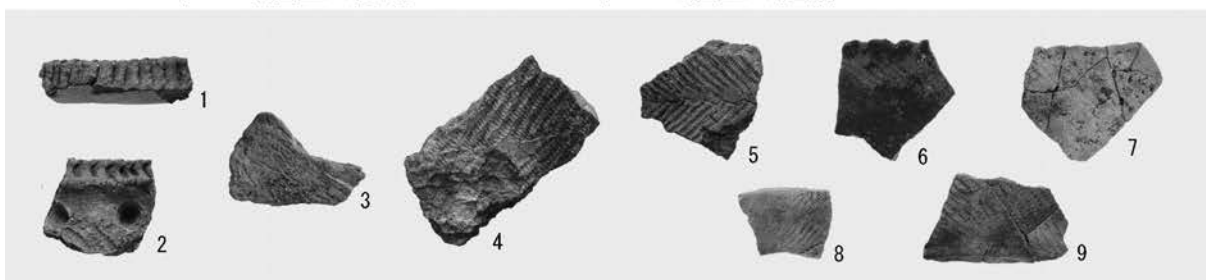
[SP-7 (PIT18)]



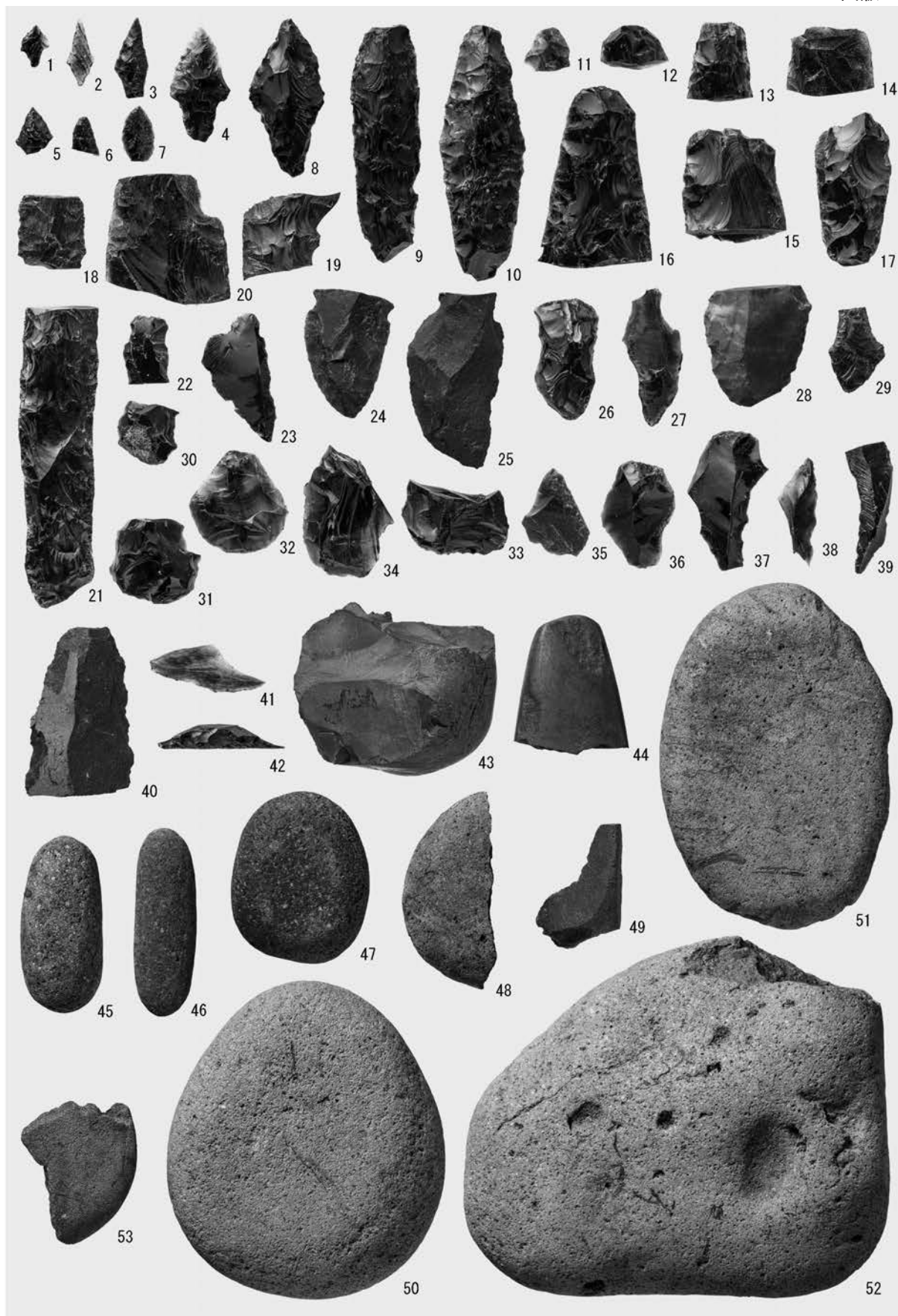
[SP-9 (PIT21)]



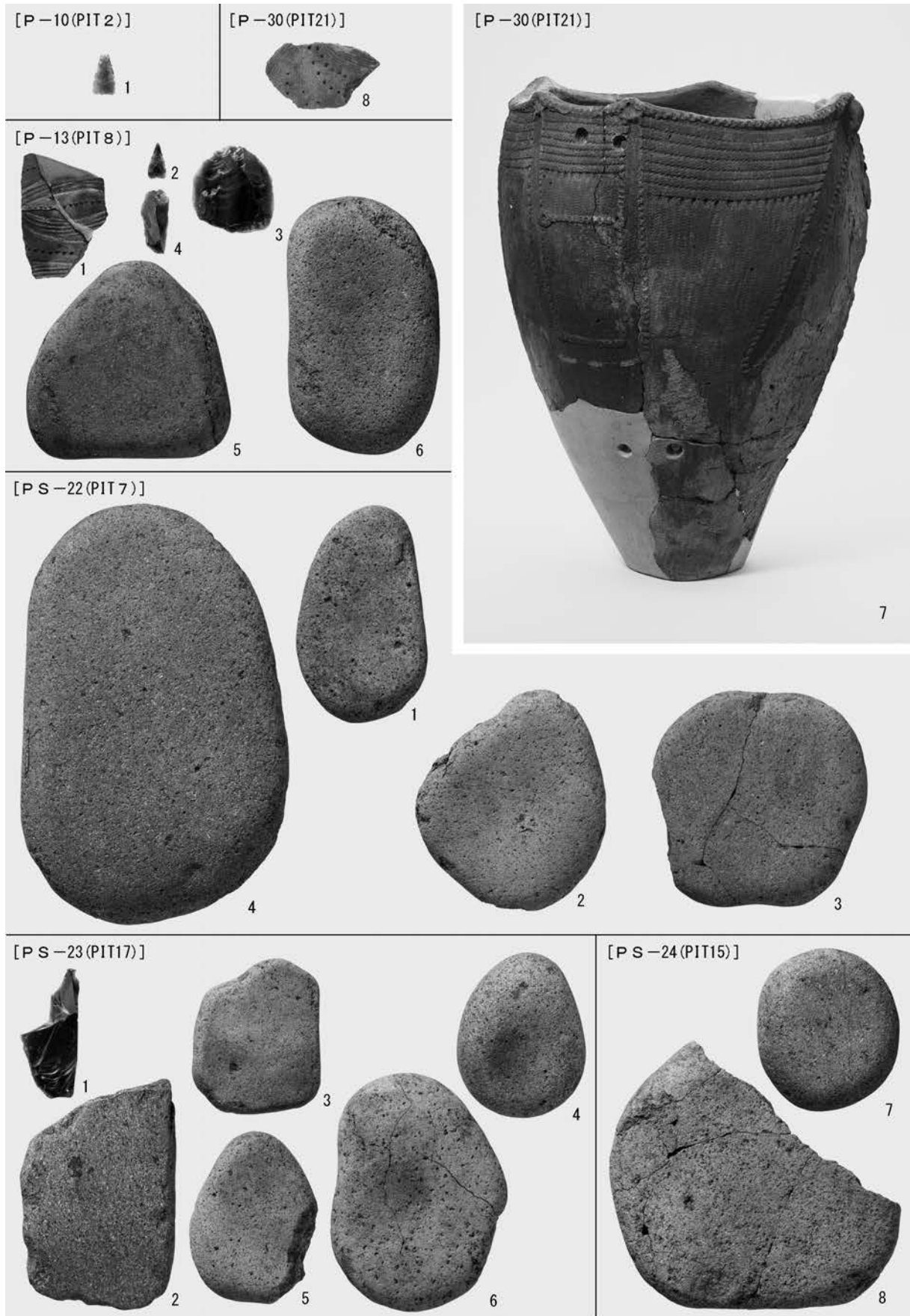
2 SP-7 (PIT18)出土の遺物 3 SP-9 (PIT21)出土の遺物



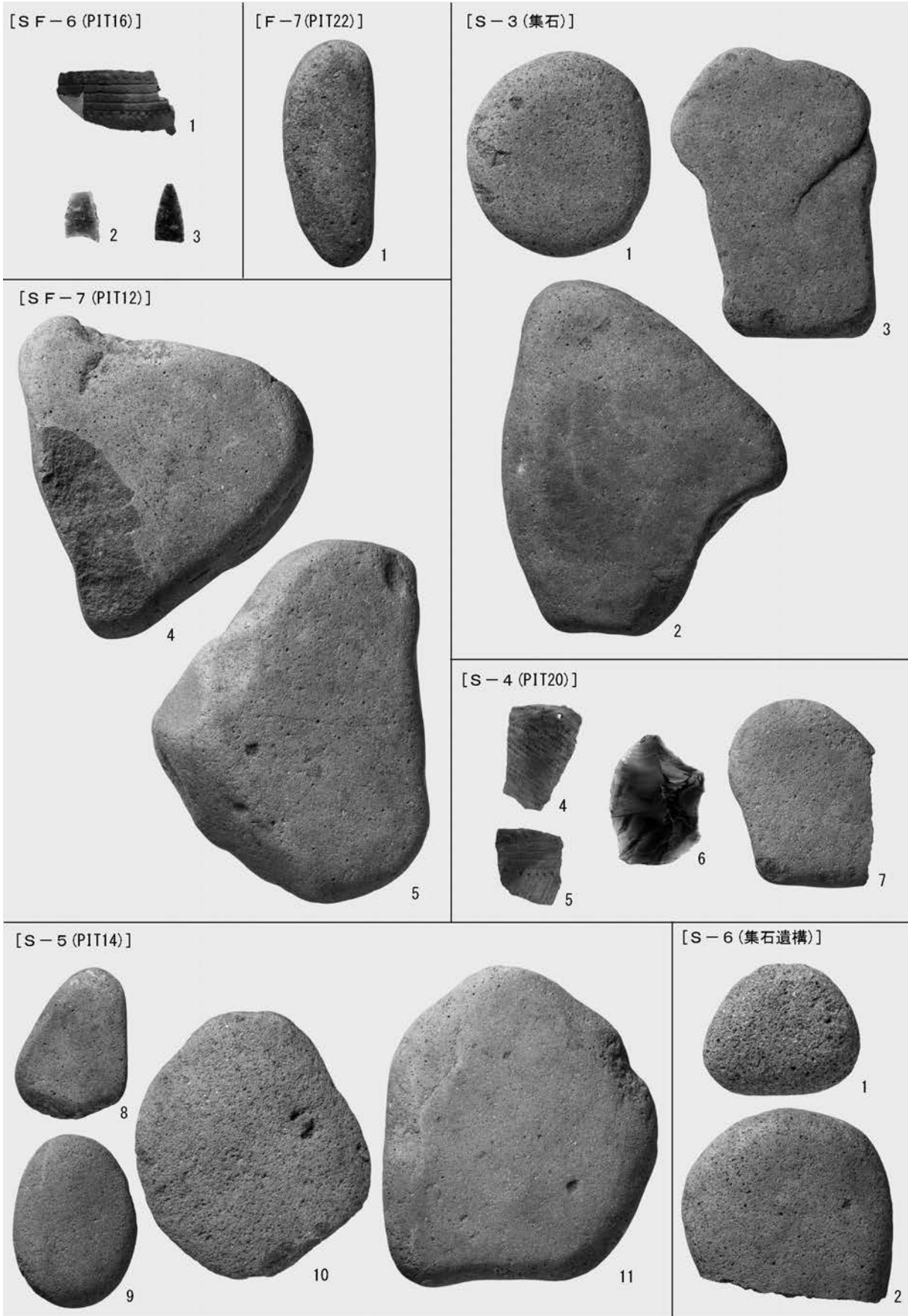
4 A地区包含層出土の土器



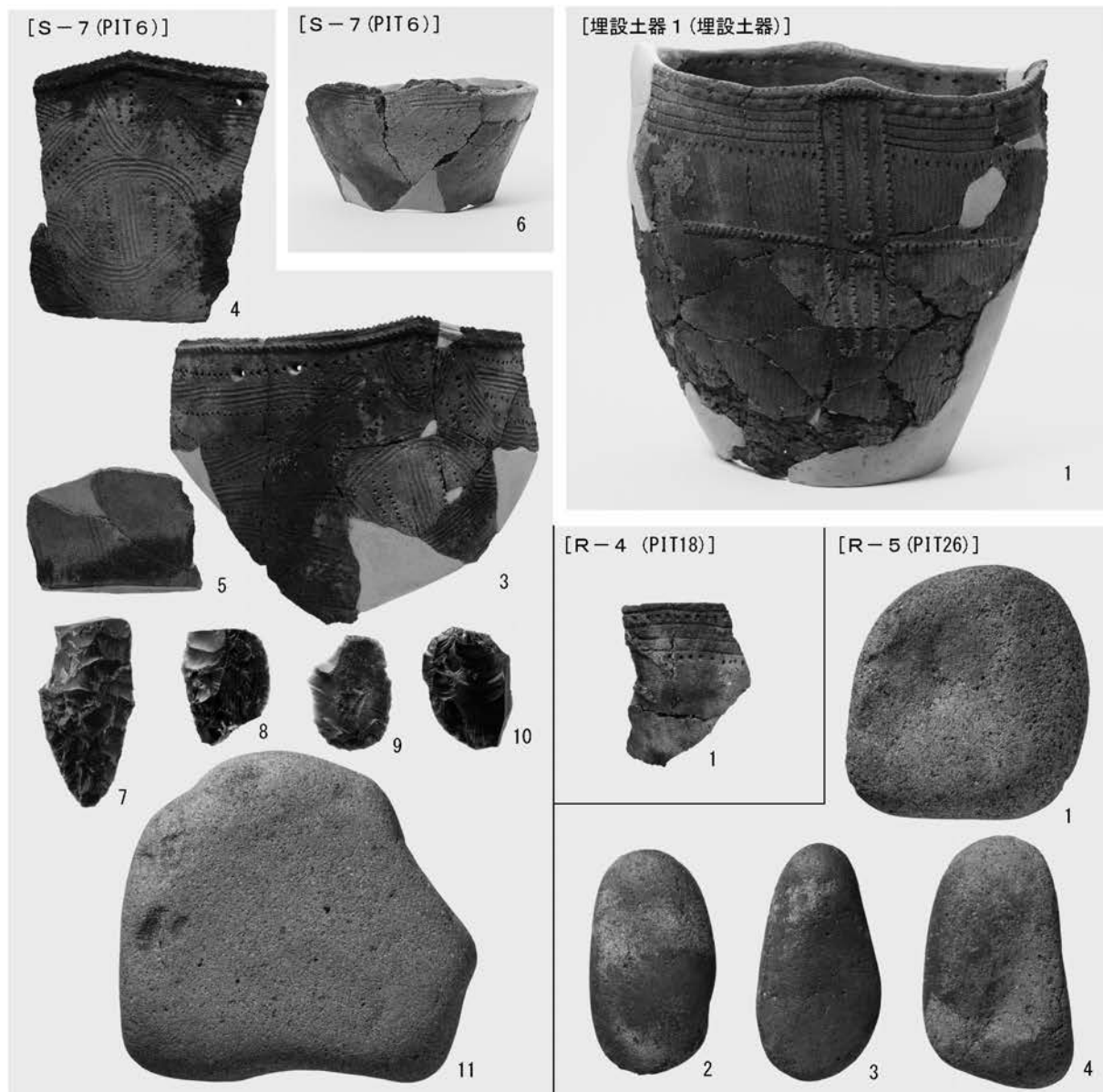
1 A地区包含層出土の石器(2)



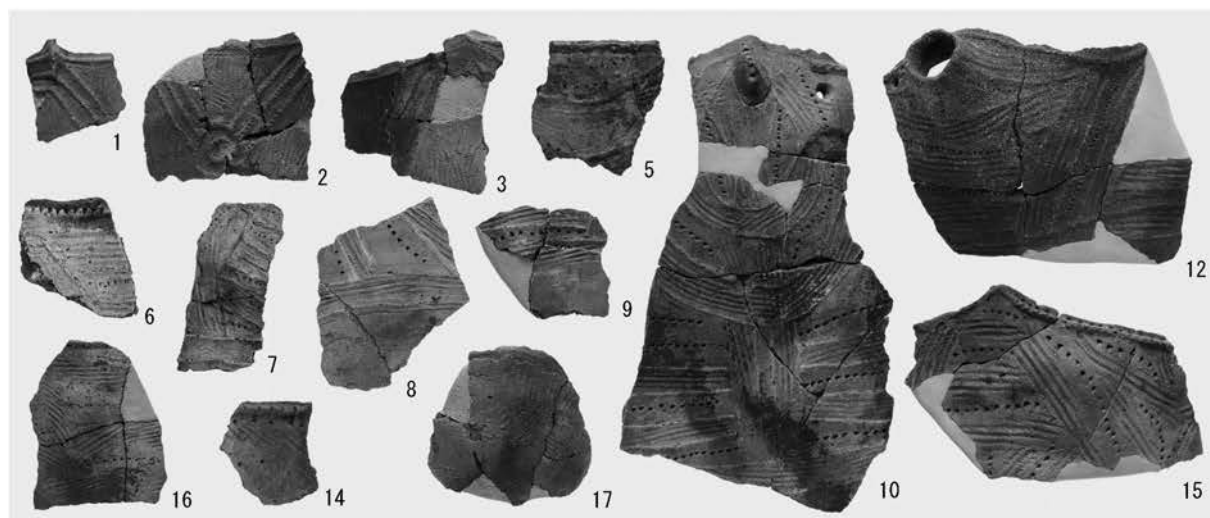
1 P-10・13・30、PS-22~24出土の遺物



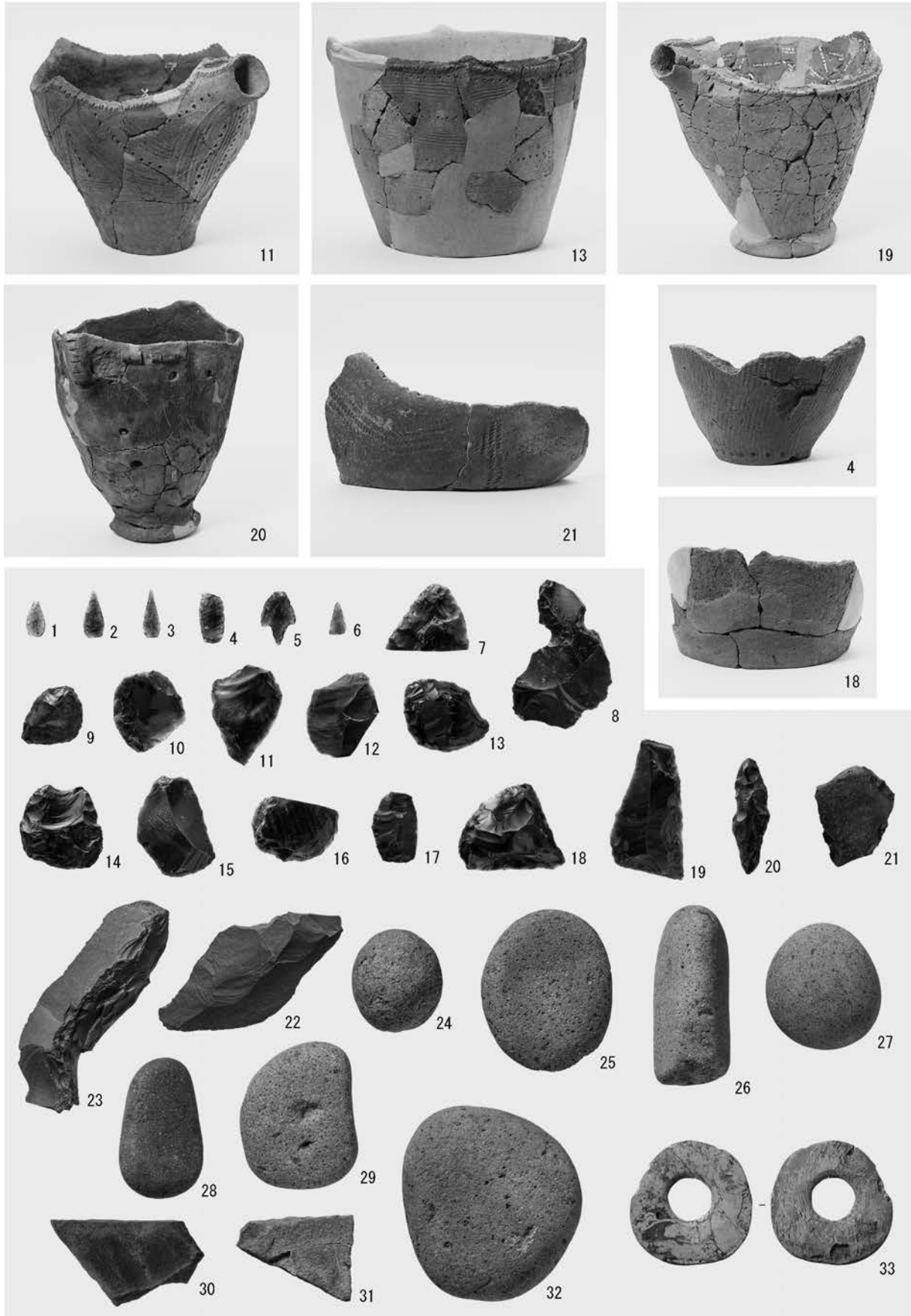
1 SF-6・7、F-8、S-3~6出土の遺物



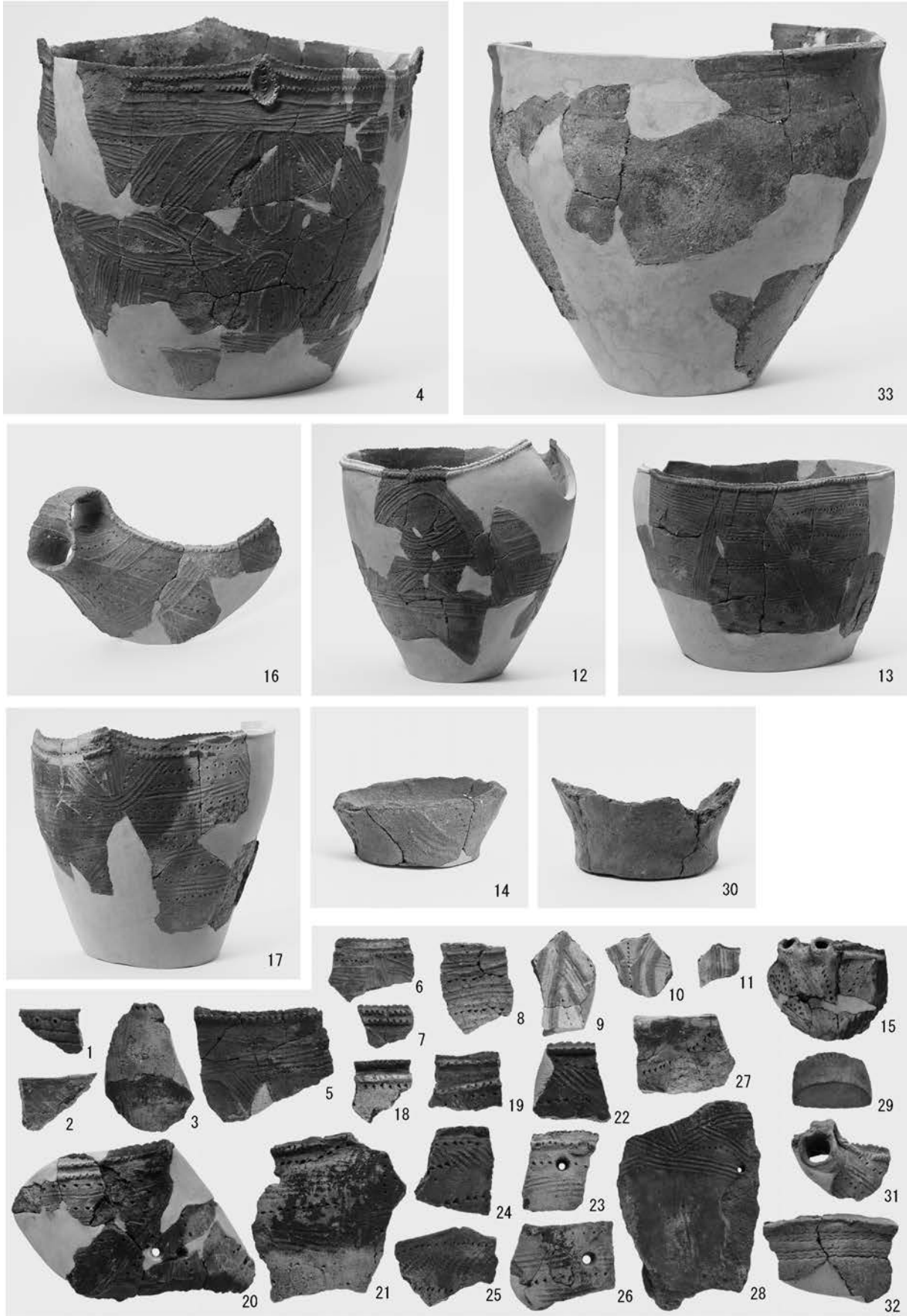
1 S-7、埋設土器、R-4・5出土の遺物



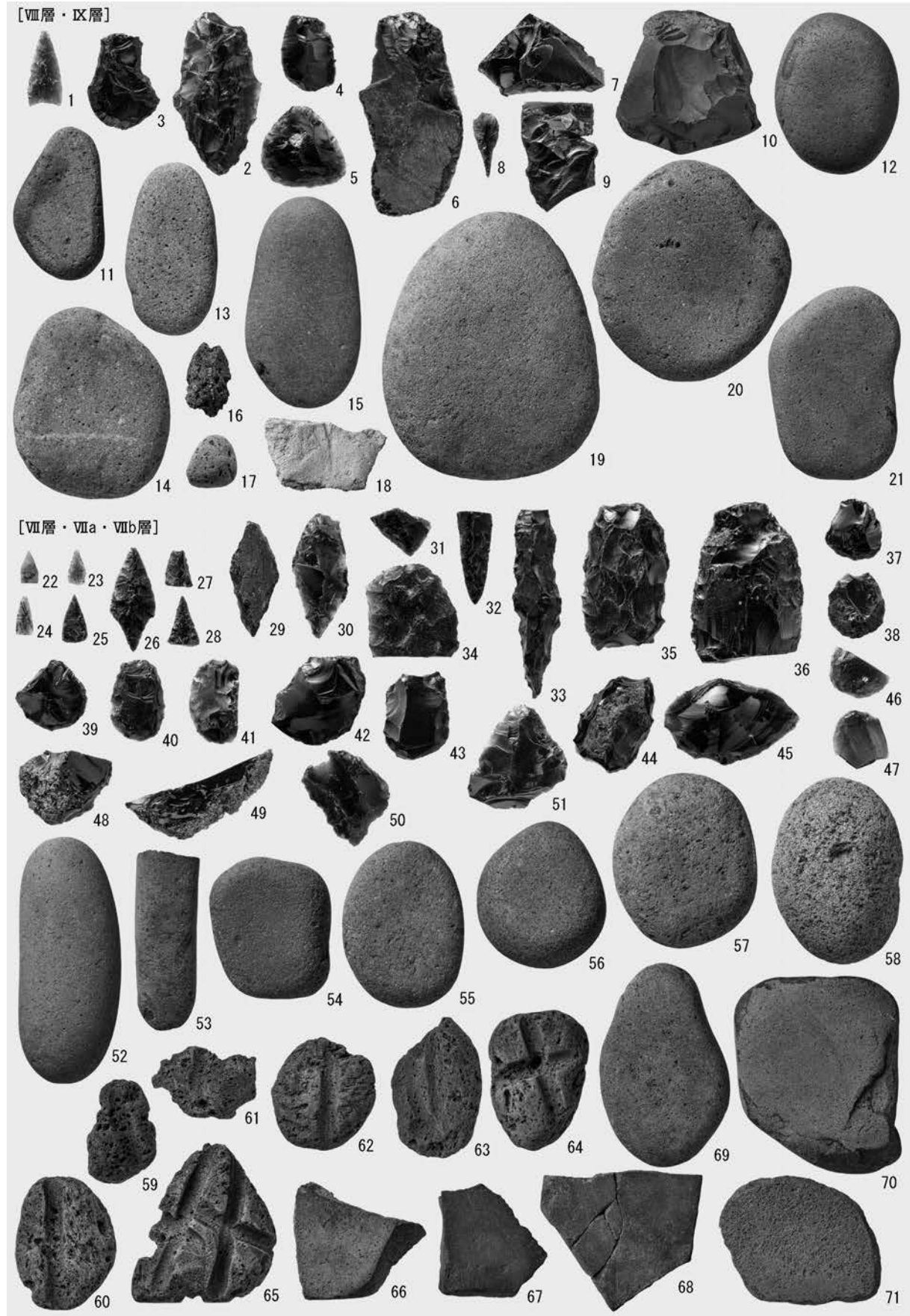
2 「廃棄場」出土の遺物 (1)



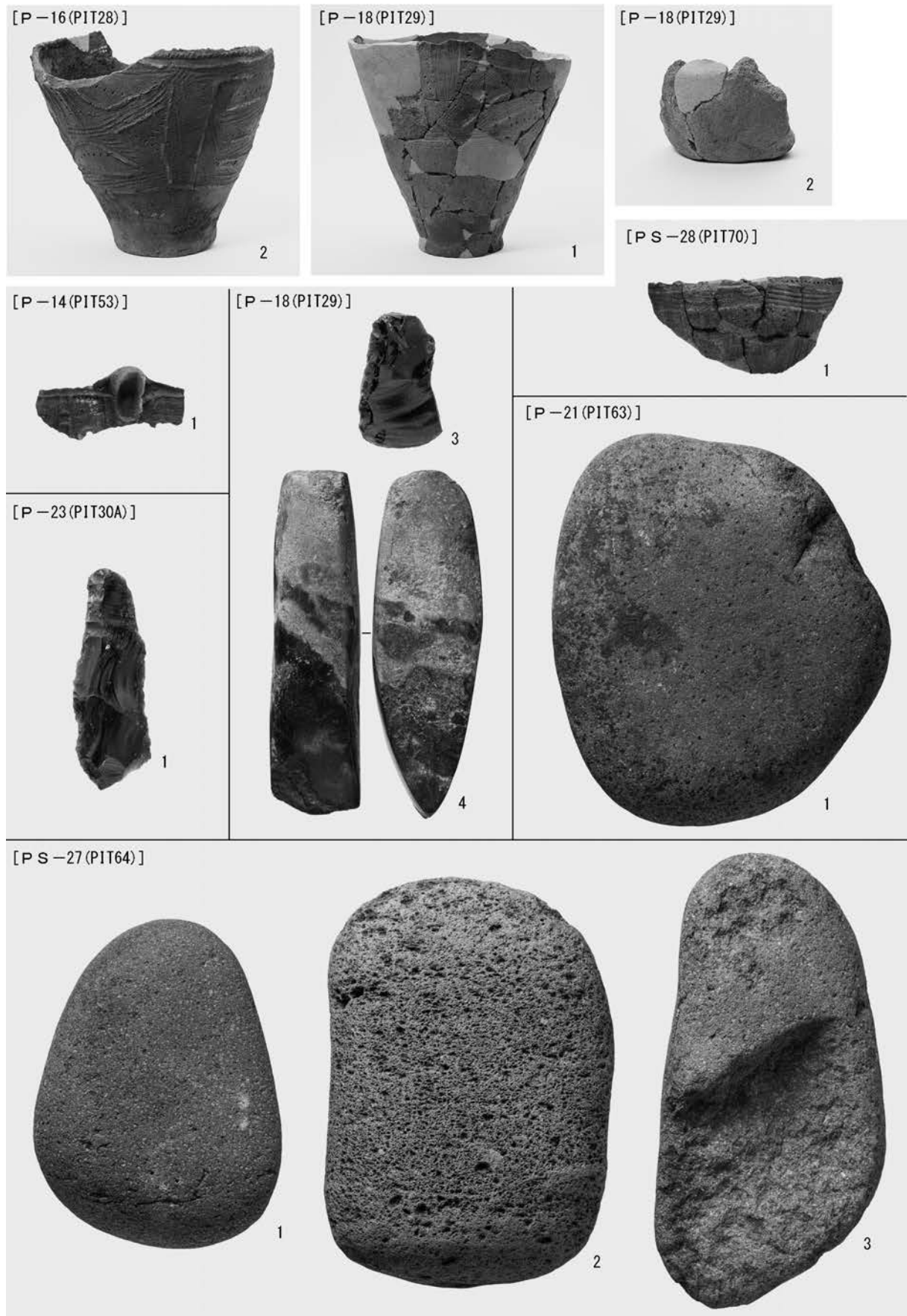
1 「廃棄場」出土の遺物(2)



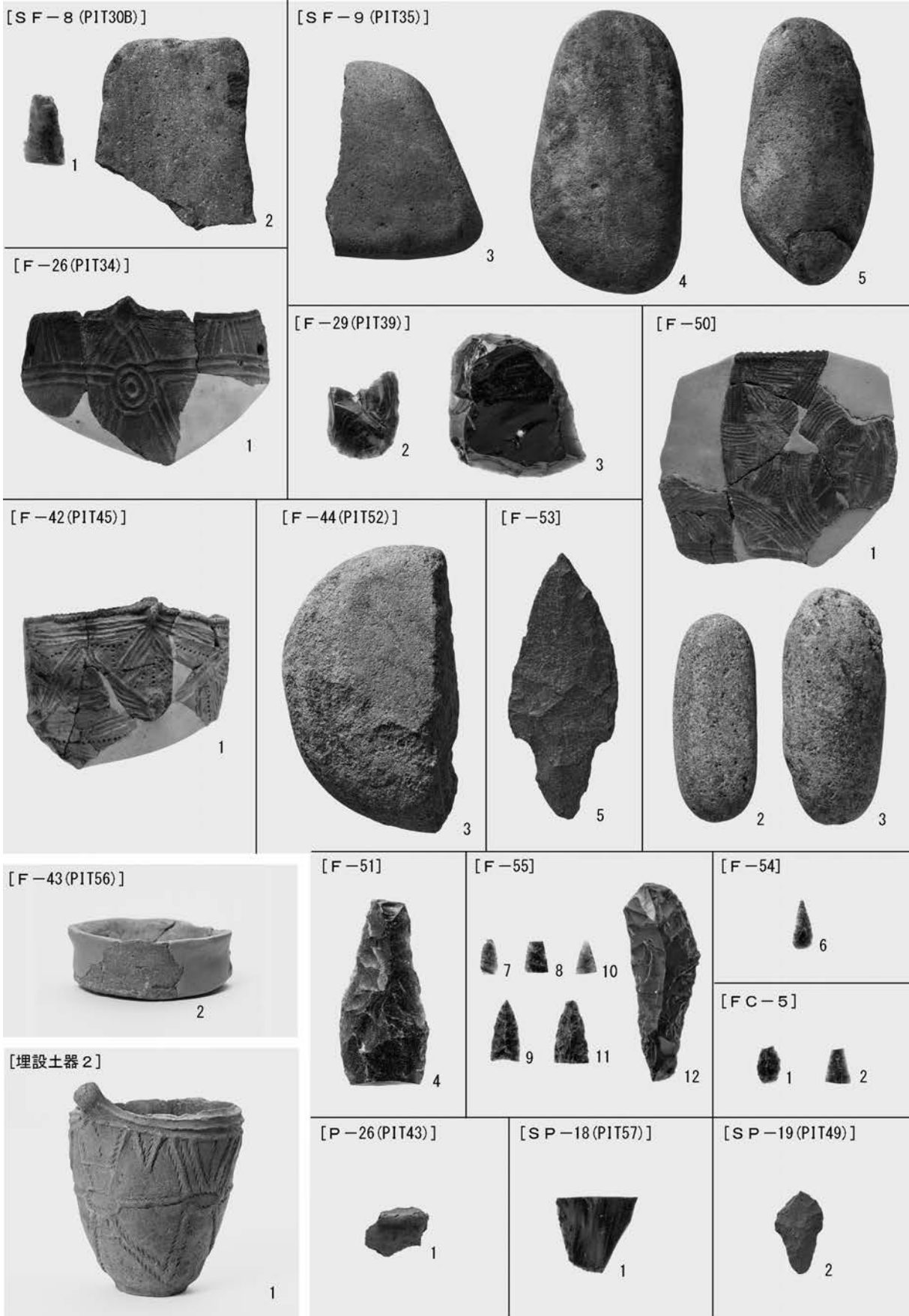
1 B地区包含層出土の土器



1 B地区包含層出土の石器



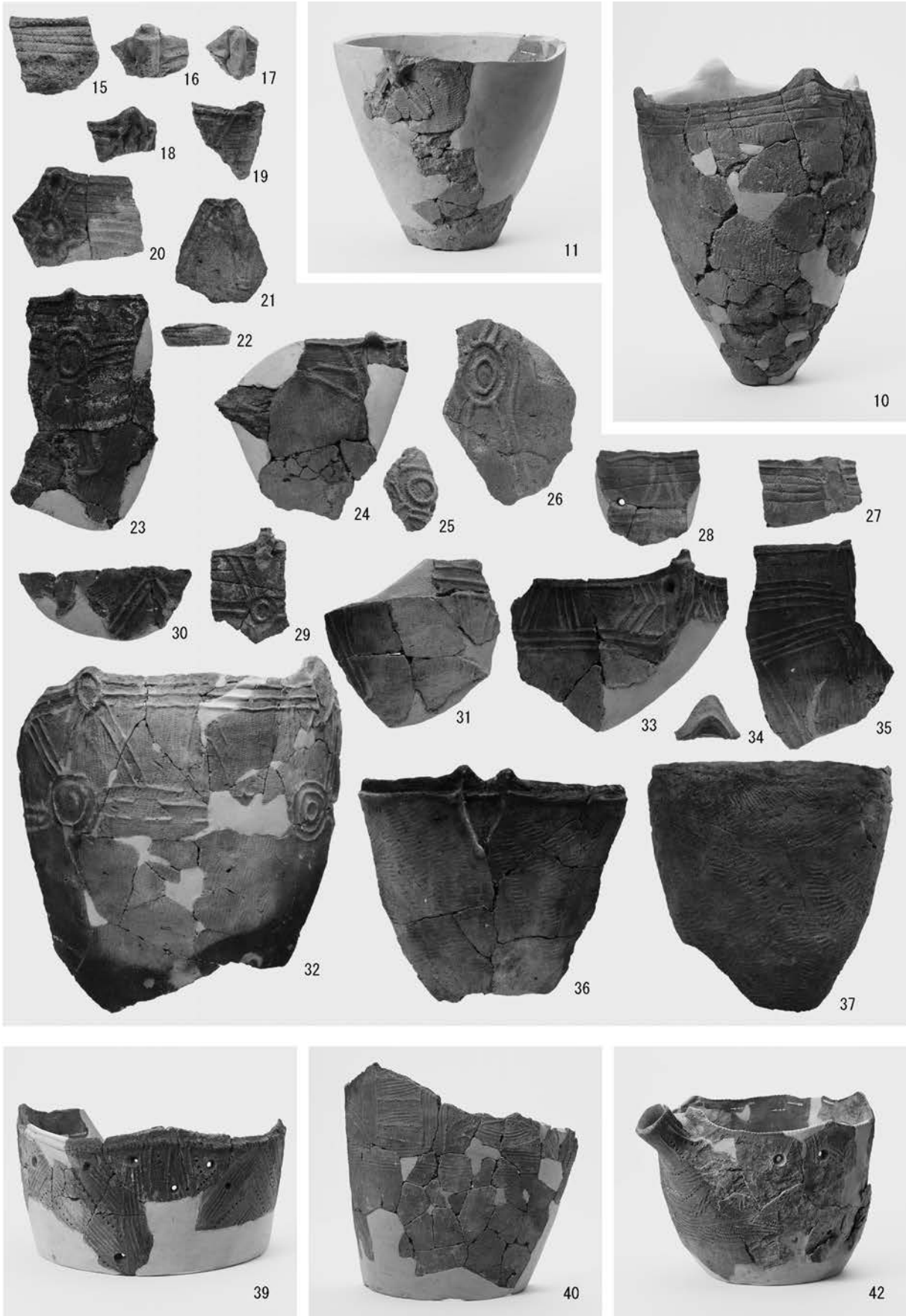
1 P-14・16・18・21・23、PS-27・28出土の遺物



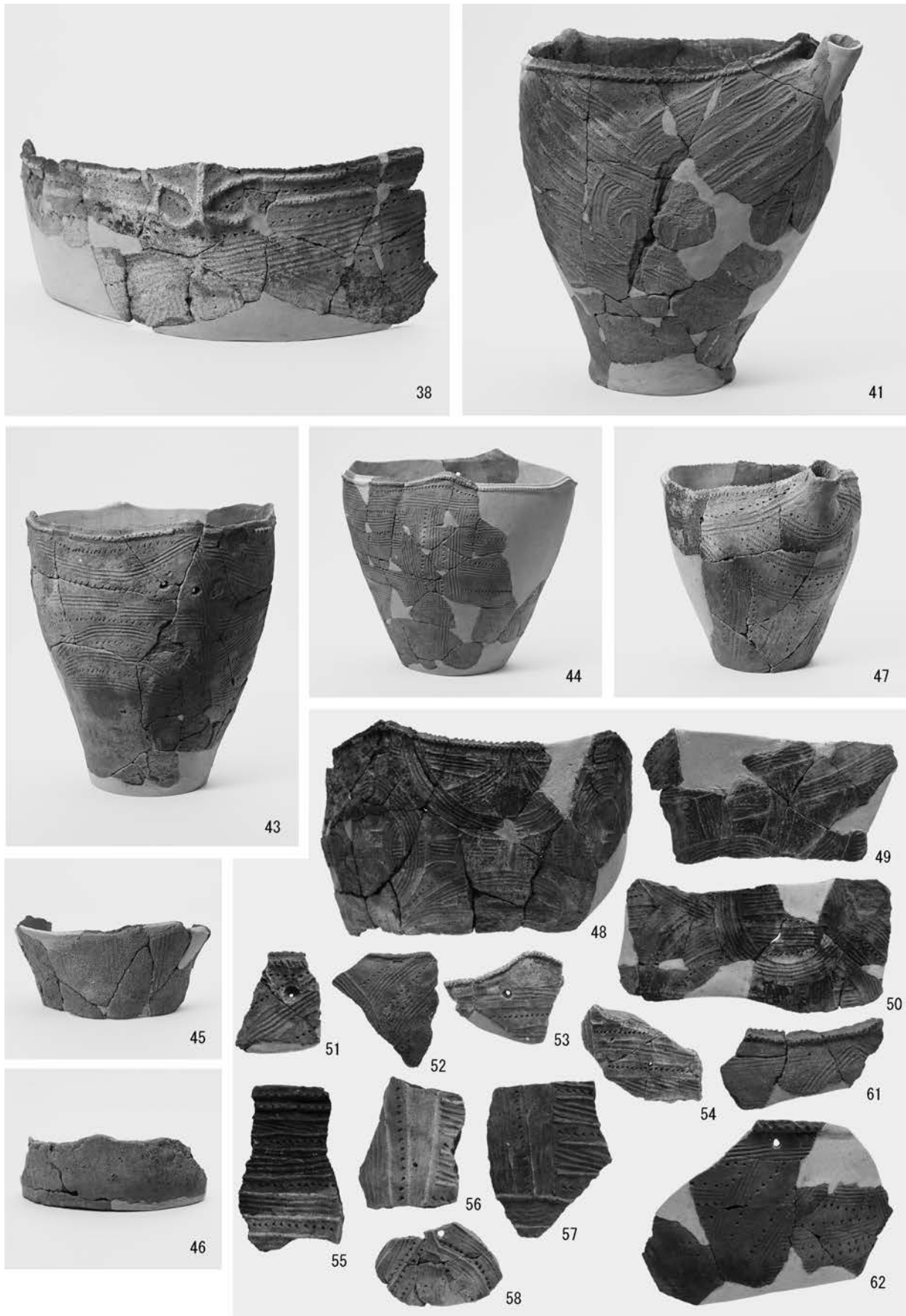
1 SF-8・9、F-26・29・41・43・44・50・51・53・54・55、FC-5、
P-26、埋設土器、SP-18・19出土の遺物



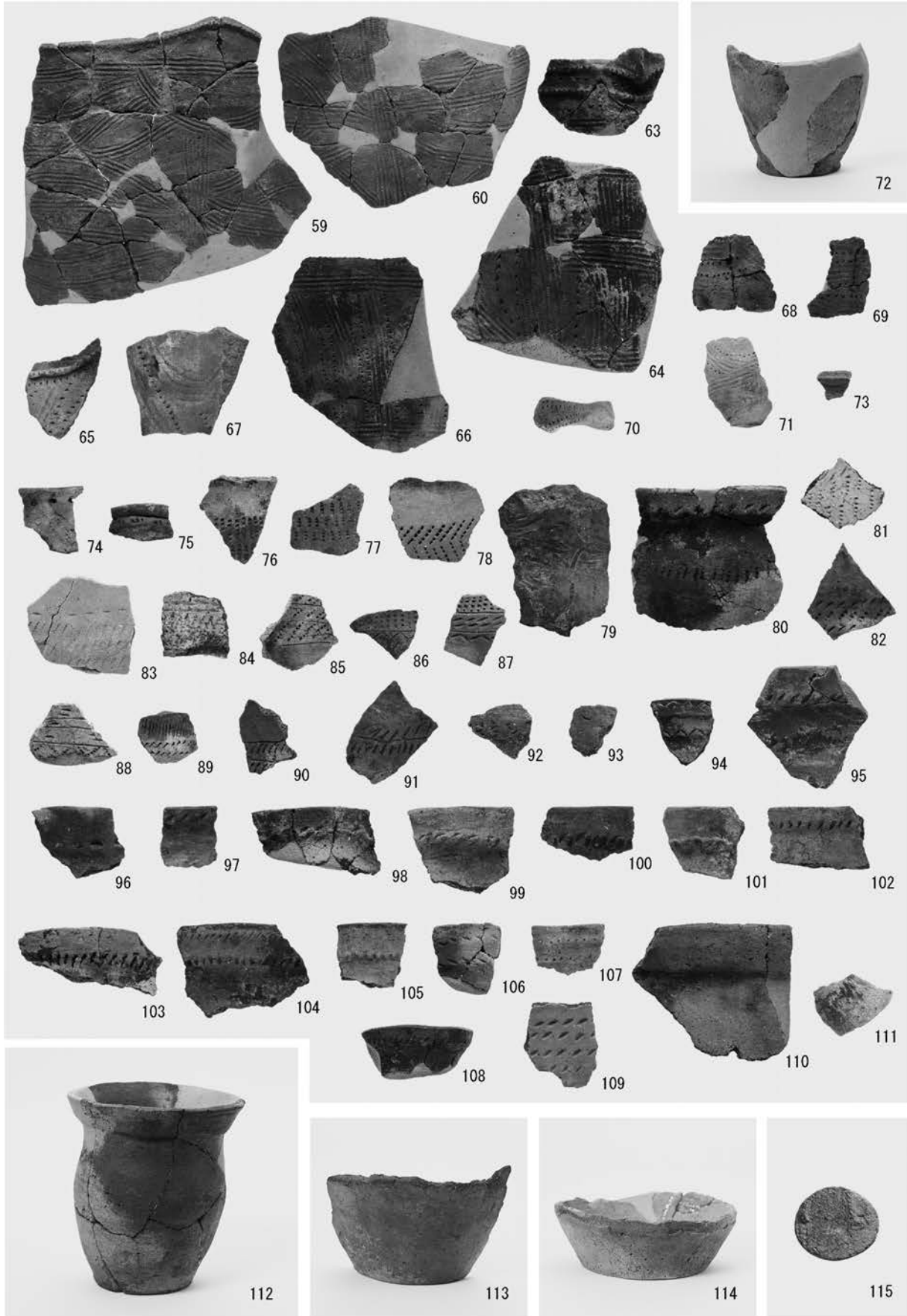
1 包含層出土の土器（1）



1 包含層出土の土器（2）

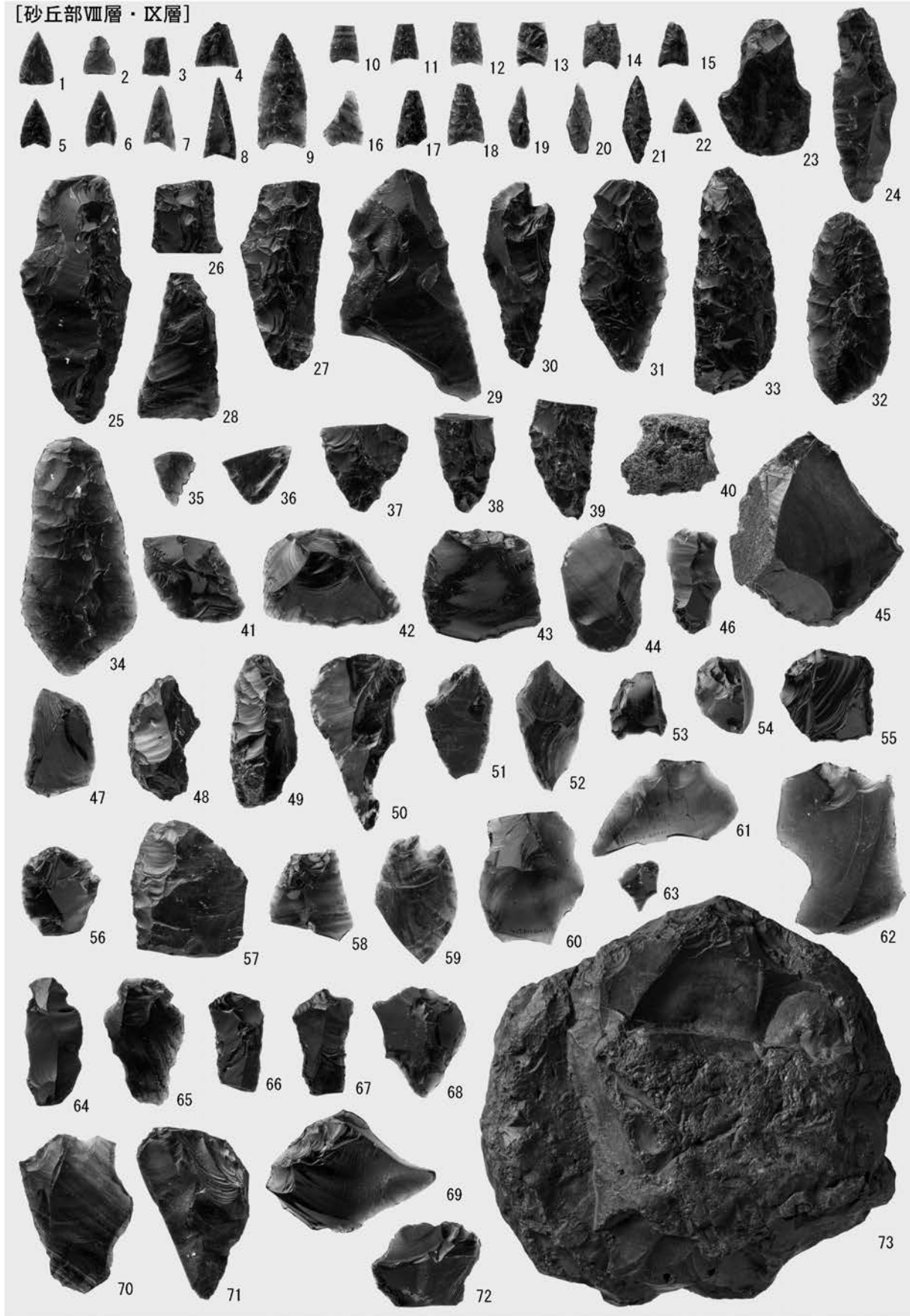


1 包含層出土の土器 (3)

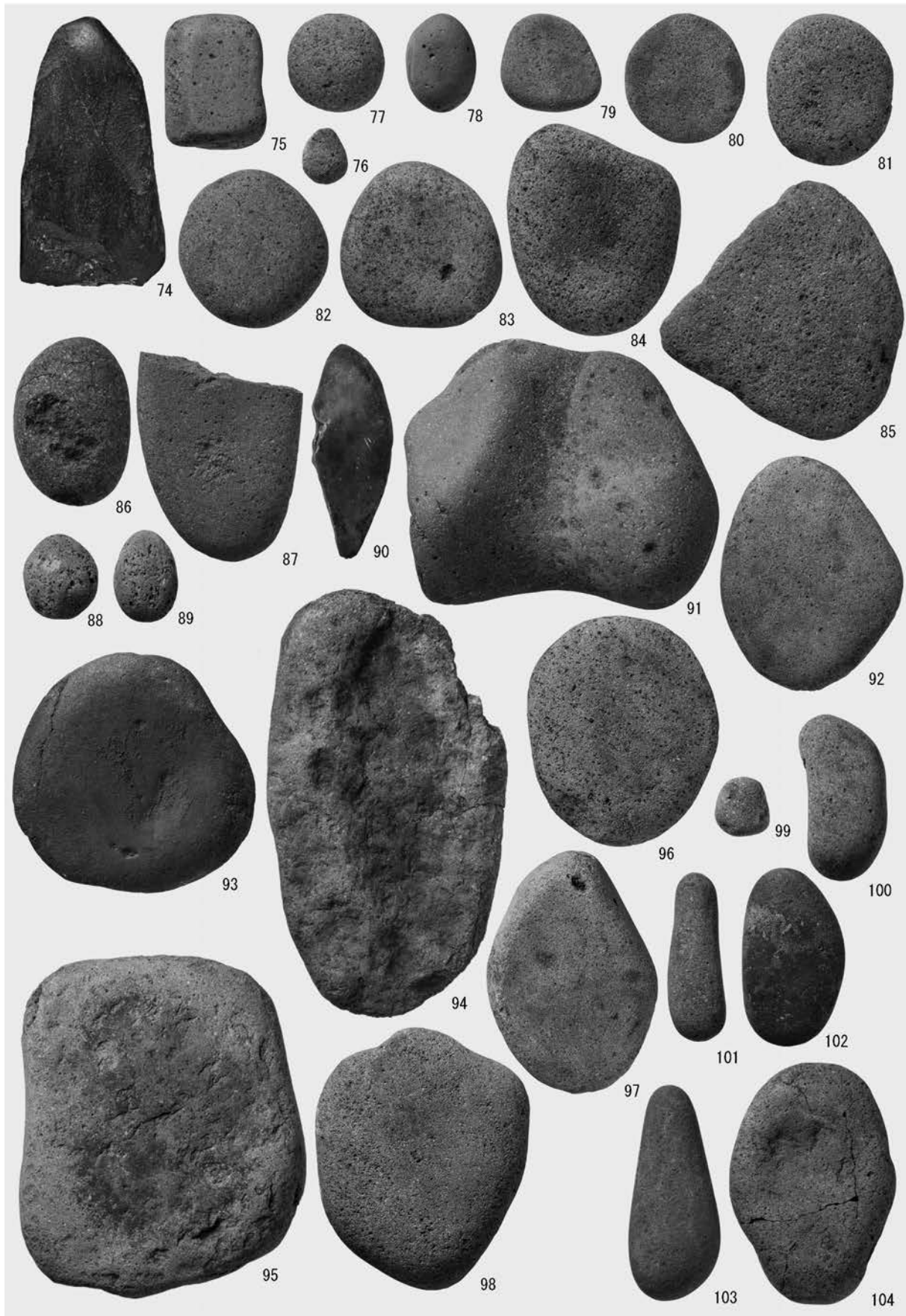


1 包含層出土の土器（4）

[砂丘部Ⅷ層・Ⅸ層]

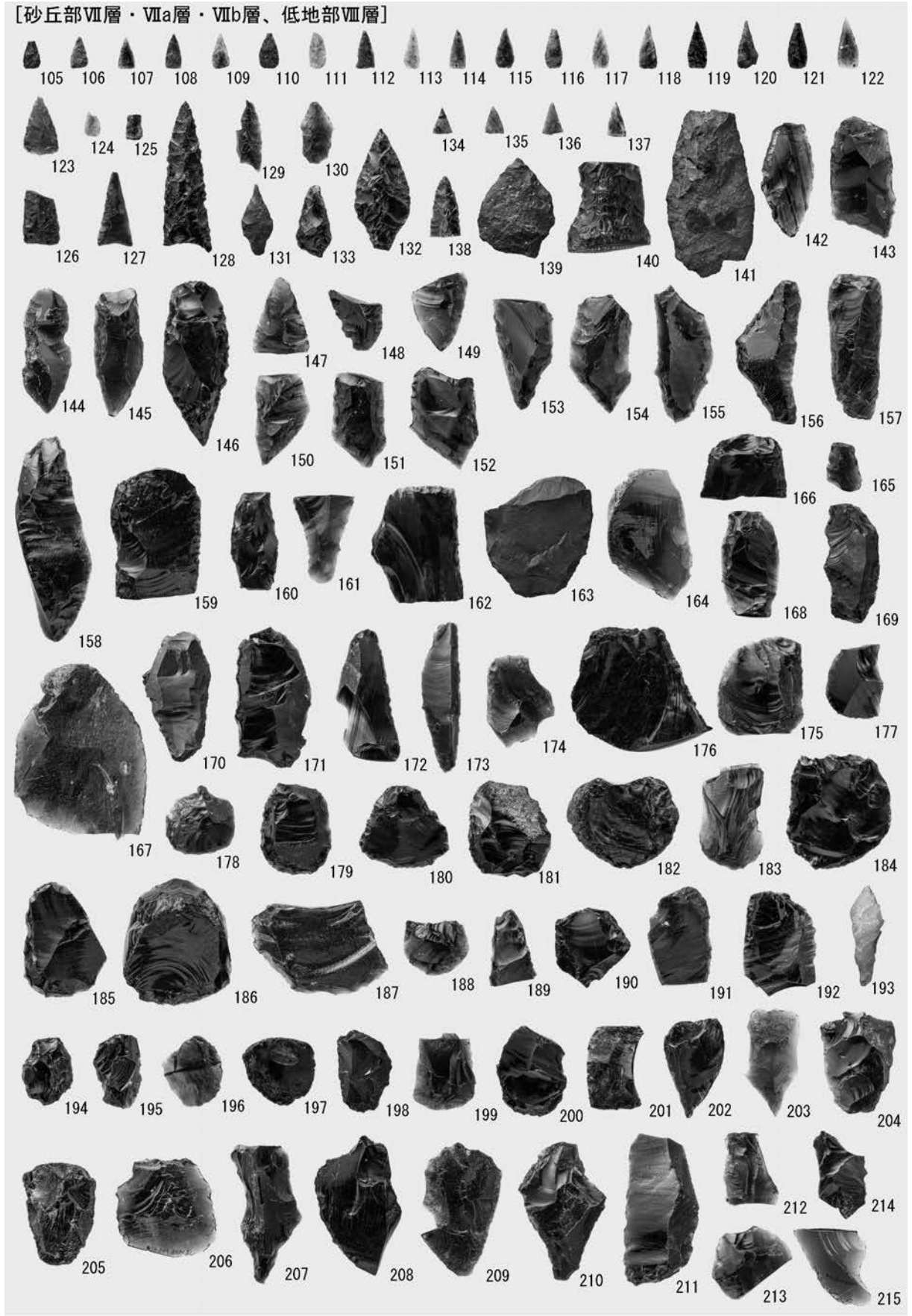


1 包含層出土の石器 (1)

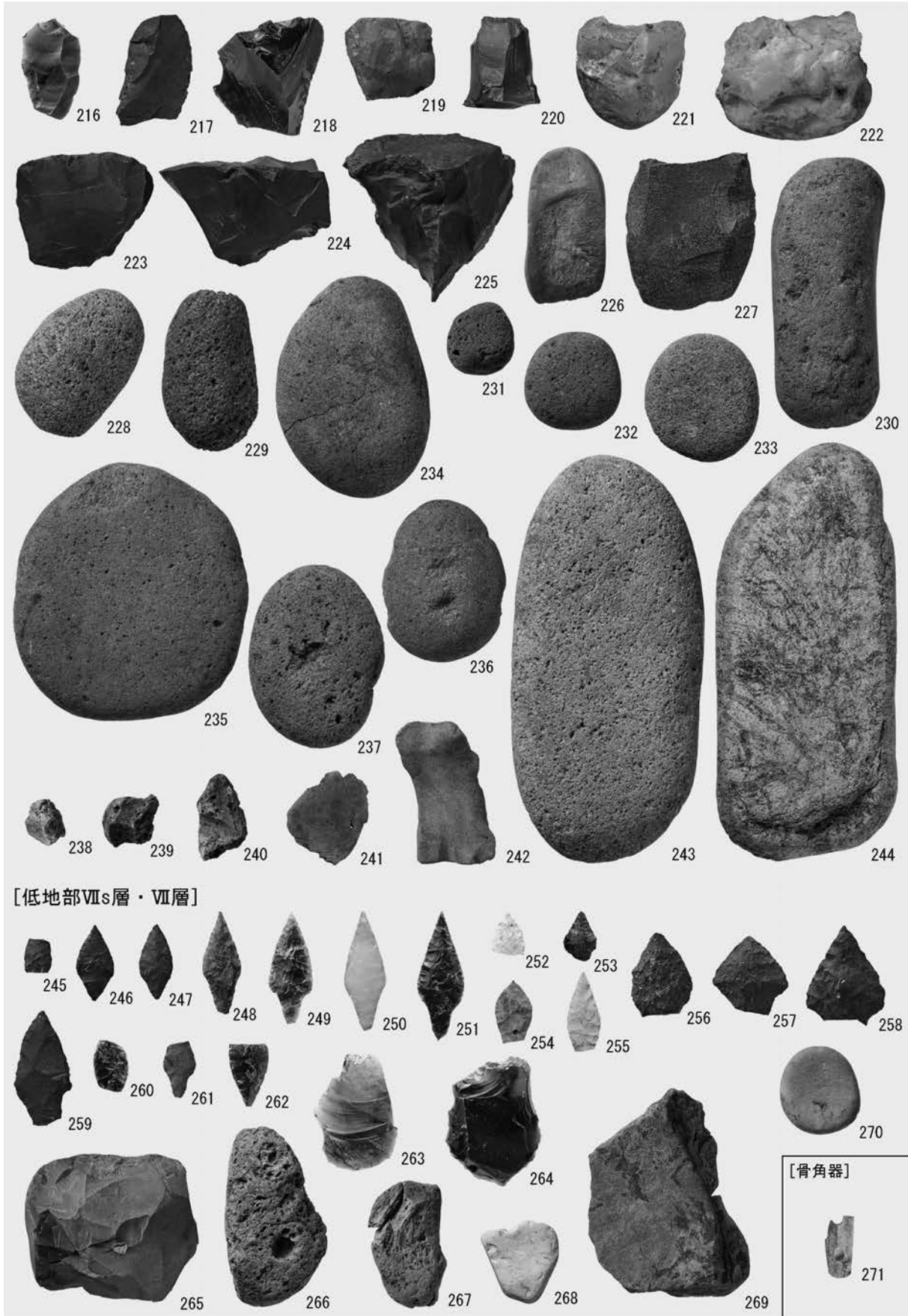


1 包含層出土の石器 (2)

[砂丘部Ⅶ層・Ⅶa層・Ⅶb層、低地部Ⅷ層]



1 包含層出土の石器 (3)



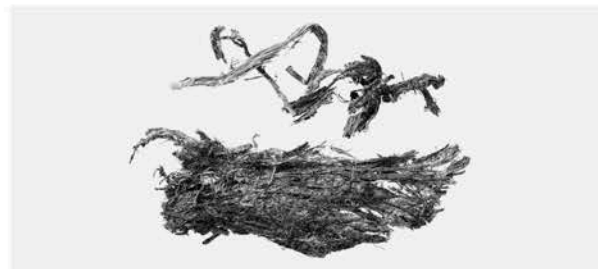
1 包含層出土の石器（4）・骨角器



1 SP-15 (PIT44) 出土の木柱



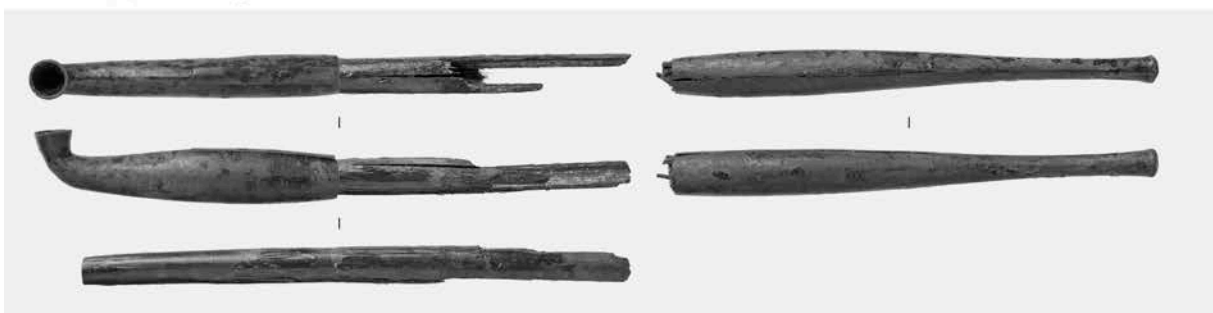
2 旧河道出土の加工痕のある材



3 2008年H-12(8号址) 出土の繊維



4 各年度出土の樹皮



5 2011年A地区出土のキセル

報告書抄録

ふりがな	しゃりちょう かもいべついせき							
書名	斜里町 カモイベツ遺跡							
副書名	一般国道334号斜里町日の出事故対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 (北埋調報)							
シリーズ番号	第364集							
編著者名	阿部明義、笠原 興、直江康雄							
編集機関	公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター							
所在地	〒069-0832 北海道江別市西野幌685番地 1 Tel. (011) 386-3231							
発行年月日	令和2年(西暦2020年)3月19日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 (J100杭)	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
カモイベツ遺跡	ほっかいどう 北海道 しゃりぐん 斜里町 しゃりちょう 斜里町 みねはま 峰浜311ほか	01545	30	43° 55' 42"	144° 47' 15"	(2008・ 2009・2011・ 2012年、) 20171104～ 20171113・ 20180515～ 20181018、	1,695㎡、 (総計 8,977㎡)	国道334号改 良工事に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
カモイベツ遺跡	集落跡	※2008～2012年、2018年調査の内容を含む						
		縄文時代中期 ～晩期	竪穴住居跡	土器(縄文中期・後期・晩期)、 石器等				
		続縄文時代 宇津内Ⅱa式期 ～ 後北C ₂ ・D式期	住居跡 土坑墓 集石土坑 石組炉 焼土群 ベンガラ製作址	土器(宇津内Ⅱa・Ⅱb式、後 北C ₂ ・D式、鈴谷式、北大式)、 石器等、石製品、ガラス玉、 褐鉄鉞・ベンガラ、魚骨、獣骨		ガラス玉が副 葬された墓、 ベンガラ製作 関連の遺構・ 遺物		
		オホーツク文化 刻文期	竪穴住居跡 竪穴 集石土坑	土器(刻文・擬縄貼付文)、石 器等、魚骨・獣骨、杭(柱根)		竪穴住居跡群		
	アイヌ文化期	貝・骨ブロック	貝、魚骨・獣骨、骨角器等(銚 頭ほか)、鉄製品(斧・鎌・鍋・ 釘ほか)、樹皮		近世の貝・骨 ブロック			
要 約								
<p>カモイベツ遺跡は、知床半島基部、斜里町市街地から東に約10kmに位置し、オホーツク海沿岸の標高3～6mの海岸砂丘上に立地する。これまでに2008・2009・2011・2012年の4次にわたり、斜里町教育委員会が発掘調査を実施し、続縄文時代宇津内Ⅱa式期～後北C₂・D式期とオホーツク文化刻文期を主体とする集落跡・遺物包含層が確認された。続縄文時代では、宇津内Ⅱa式期のベンガラ製作にかかわる遺構・遺物、後北C₂・D式期の追葬(または再葬)された墓が特徴的である。オホーツク文化期では、竪穴住居群の炉からサケ科の魚骨や中小型陸獣を主体とする骨片が顕著にみられるなど、該期の周辺遺跡とは異なる生業活動の痕跡を示している。(なお当報告書はこれらの内容も合わせて報告している。)</p> <p>2017年の測量調査を経て、2018年に当センターが残りの範囲の調査を行った。その結果、後北C₂・D式期(平地)住居跡および焼土群、オホーツク文化刻文期の小型の竪穴や集石土坑、アイヌ文化期の捨て場・送り場である貝・骨ブロック群を検出し、各期の遺物が出土した。</p> <p>縄文海進以降の砂丘の形成・発達に伴い、遺跡形成範囲が移行する様相がうかがえる。</p>								

(公財) 北海道埋蔵文化財センター調査報告書 第364集

斜里町 カモイベツ遺跡

—一般国道334号斜里町日の出事故対策事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

発 行 令和2年3月19日
編 集 公益財団法人 北海道埋蔵文化財センター
〒069-0832 江別市西野幌685番地1
TEL (011) 386-3231
E-mail mail@domaibun.or.jp
URL <http://www.domaibun.or.jp>

印 刷 北海道印刷企画株式会社
〒064-0811 札幌市中央区南11条西9丁目3番35号
TEL (011) 562-0075 FAX (011) 562-0355

